秘する恋　秘するが花

L side

Author：tomogon

花蕾　前編

■01

暦の上では春であったが、まだ冷え込みが厳しかった。
パリで暮らすようになって長いのに、ヒカル・クロスは日本の暦で季節を感じる生活を続けている。
時差もあるというのに。そして、ここは日本と違う気候であったのに。
それでも・・・・彼女に忘れて欲しくはないのだという無言の訴えが、肌に差し込むように彼女に伝わってくる。
それは春を迎えようとして、それでも春そのものになれない冬の冷気そのものであった。
彼女を養い育てているシャルル・ドゥ・アルディという人物は、今でも彼のファム・ファタルを忘れていない。
彼女は日本人で・・・そして、ヒカルの母であった。

ヒカル・クロスは、薄い水色の空を見上げた。
まだ、空は鮮やかな青を見せないで高い位置でヒカルを見下ろしている。頬に降り注ぐ陽光もどこか淡くて弱々しく、ヒカルは首を竦めて冷気が入り込むのを防ごうとしたが、それはあまり効果がなかった。
まだ陽影は寒いという感覚を通り越して凍るような温度であった。今年の冬は暖冬だと聞いてはいたが、それでも冬は寒い。

薄桃色のボアがヒカルの顎をくすぐった。
光の加減で、それは甚三紅にも見えるし、もっと薄い珊瑚色にも見えた。
防寒を第一に、ということであったのに、それは余りにも美しいコートであったので、最初・・ヒカルは袖を通すことをかなりの間躊躇っていた。
観桃会というものがある。
観桜会よりも前に行われるものであった。
桜は余りにも有名であったが、ヒカルがアルディ家にやって来てから、そういった会合にシャルルは名を連ねることにしたようだ。それを知ったのは随分と後のことであったけれども。
親日家であるアルディ家の当主の意向によってアルディ家や関与する会社が観桜会の共催者として名を連ねることは多かった。
が、ヒカルがパリのアルディ家に住まうようになってからは、シャルルは桃の節句を気にするようになった。
これまで自分にはそういったものは無縁だと思っていたけれど、と彼は苦笑いし、それから忘れたことはなかった。
ヒカルがパリにやって来て、最初の桃の節句から以降、形式や規模を変化させながらそれはずっ

と続けられてきた。
彼女は養女でもなかったし、シャルルの実子でもない。
だから、今でもずっとヒカル・クロスのままであった。
彼女は、シャルルにとって「親友であった夫妻の忘れ形見」であるというだけであった。

アルディ家には、女児の健康と繁栄を祈る行事は存在しなかった。
彼の実子はルイ・ドゥ・アルディただ一人であったからだ。
しかし、社交界やフランスの各方面で有名人であり、フランスの華と呼ばれる人物は、息子を後継者として発表することはなかった。
表向きには、ランスの教会で正式な手続き及び儀式を経ていない過程で生まれた息子であるからという理由であったが、それ以上に・・・シャルルとルイの、確執と言うには大きすぎる隔たりを己で作っていることを彼は知っている。
でも、ヒカルは何も言う事が出来ない。
意見すれば、彼は聞き入れてくれるだろう。
けれども、納得して受け入れるのではない。
ヒカルが言うから・・・従うのだ。
だからこそ、言えなかった。
だからこそ、ルイとシャルルの間に入ることができなかった。
彼らの間で、疎通しようと思っている瞬間に、ヒカルは何も口を挟んではいけないのだと誰かに囁かされているような気がする。彼の親族達は、ヒカルのことを存在していないかのように扱うが、それを当主が眉を顰めて「不快だ」と言ったので、慌てて彼女の祝い事には儀礼的に厚遇しているだけなのだということも、わかっていた。

けれども。
ヒカルは、ただ、困惑する。
この国には、望んでやって来た場所であった。
ここでしか自分は生きられないと思ったし、あの国で生きていたのなら・・・きっと彼女は今のように生きられないと思った。幼かったけれども、それは幼いながらの本能でわかっていた。誰もが自分を持て余していた。深い情愛で接してくれてはいたけれども、困惑が混じった愛に、ヒカル自身も深く傷付き、そしてもうこれ以上誰も傷つけたくないと思った
けれども、ここにやって来て、別の誰かを傷つけることになるとは、考えてもいなかった。ただ、逃れたかっただけなのかもしれない。

人目を気にしない生活というものの、重さと厚さを知っているものは数少ない。
その時は、幼すぎて・・・周囲にどれほどの影響と困惑を与えるのか、わからなかった。
重さと厚さについて、考えが及ばなかった。
誰が傷つき、誰が哀しみ・・・誰を踏むのか、わからなかった。

邪なものを祓うと言われている腿の祝い事であるのに、彼女は密やかな昏い闇を持ってやって来ている。何とも後ろめたく、遣る瀬無い気持ちになってしまう。

■02
にルイ・ドゥ・アルディと同伴しなければならないと聞いた時。
ヒカルは緊張のあまり、前日からそわそわしてしまい、あまりよく眠ることが出来なかった。
彼女をアルディ家の公式行事に出したがらない当主の意向により、ヒカルは本邸の奥深くで密やかに成長していた。
しかし、アルディ家の庭に咲く桃の花を愛でる会合ではなく、このように人の居るところにヒカルを派遣することについて、シャルルはどのように思っているのだろうか。

「どこに出しても、恥ずかしくない貴婦人だから」
そう言うけれども、最近のシャルルはヒカルを避けているように思われた。
遠ざけるというより避けるのだ。近くに居ることを望んでいるのに、彼は近くに寄ることは望まない。
わかっている。
それは、ヒカルが・・・だんだん、あの人に似てきているからなのだ。
自分でもそう思う。
不意に映り込んだ姿が・・・誰に似ているのか、誰の形に近付いて居るのか。
わからないヒカルではない。
日本に戻ると、母方の親族は彼女を見て涙ぐみ、父方の親族は彼女を眺めて困惑する。癖の強い髪や発達した運動神経は父親譲りだと、カズヤ・クロスの面影を懸命に探す。

ヒカルは、溜息をついた。
本当は、最も良いのは・・・自分が日本に戻るということであることは、承知していた。
けれども。
日本にはもう、彼女の定位置は存在しない。
夏のある一時期だけ戻ってくる親族、という立場でしか彼女は存在しない。
最初のうちは、ヒカルのことを忘れないと言うかのような、様々な折に彼女の成長を祝う儀式に対する贈り物が届けられた。
けれども、それはいつしか忘れない行為ではなく、儀式そのものになった。
継続するということは難しいのだと思う。
まだ、両親は戻ってくるのだと固く信じているのはシャルルとヒカルだけなのかもしれないとさえ思う。どれほど血が濃くても。どれほど愛していても。
待つという行為がどこまで継続できるのかというのは、誰もが同じではないのだ。
皆、生きているし己の生活がある。それを優先させなくてはいけないときに生じる葛藤と思い出が・・・時折、人を残酷な選択を迫ることがあった。

それでも、シャルルは自分の能力や権力が及ぶ範囲で、ヒカルの両親を探し続けてくれていた。
時折耳に入る遺留物の発見についての報告は、ヒカルとシャルルを失望させるものばかりであった。
けれども、ヒカルは笑顔を絶やさない。
家族のもとに、それらが戻って良かったのだ、と言う。
クロス夫妻は、皆を送り届けてからではないとやって来ないような人達なのかもしれない、と言う。
誰も、そこで彼らの生存について触れない。勿論、ヒカルは両親の生存を信じている。
だから、可能な限り流れ着く場所に照会しているところであったけれども。
捗捗しい経過報告は届けられることはなかった。
けれども。
事実確認できるまでは、生きていると信じて活動するシャルル・ドゥ・アルディと、日本の親族は違っていた。
帰ってくると信じている間に、魂が彷徨うことを怖れて彼らは法要を行う。
どちらがいけないというものでもないし、優劣も善悪も存在しない。
でも、ヒカルはその間に立っていて、時々、どちらにも・・・向き合うことに辛くなり眼を逸らしてしまいそうになってしまう。

彼女が公の場所に出て行かない理由はひとつだけだ。
両親のことを聞かれるのが、最も困惑するから。
事前に、どんな質問にはどのように回答するべきなのか示教されているし、幾度もそのような場面には遭遇していたけれども。
彼女には、取り繕うことができない。
余裕を持って、相手の反応を見ながらも自分の訴えたいことを的確に伝えることができない。
シャルル・ドゥ・アルディが親友夫妻について、執着を越した恋着を持っていることを、アルディ家は快く思っていない。
彼がいつしか、国家の中枢にある要職に就くことを、親族は諦めていない。

こんなに綺麗な、桃の樹の下なのに。
ヒカルは、自分の中にある物思いを空に吐き出すこともできずに、ただ眉根を寄せて黙って居るだけしかできない。そんなことを望んでシャルルはヒカルをここに遣わしたわけではないとわかっているのに。

春が来るとされる季節なのに、冬の冷たさや静けさが残る日差しの下で・・・ヒカル・クロスは、ただ、この場に自分が居ることに戸惑う。
日本の親族の家に飾られている、雛の人形のように・・・彼女の器だけしか、誰も必要としてい

ないのかもしれない。けれども、彼女は誰かに必要とされたいのか、という疑問にまた深く沈むのだ。

■03

桜が咲くにはまだ遠かったが、彼女の頭上では桃の花が大きく華開き、今を盛りと歌っているようであった。
花は、歌う。
そう思った。
鳥のように囀るわけではないが、空気に乗って、自分の香りを震わせることができるのだと思う。

今朝は、ヒカルの部屋に桃の花が届けられていた。
毎朝、最高の状態の薔薇を届けるのが彼女の日課になっていた。
生活時間の合わない日々であったが、当主の気遣いに、ただ、ヒカルは自分の境遇はとても恵まれているのだと胸を熱くする。

その一方で。
彼女の住まう家の、本当のこども・・・星辰の子と呼ばれている者にも、同じ様に桃の花は手配されているのだろうかと気を揉む。
ルイがヒカルと顔を合わせないようにしているのか、それとも、ヒカルが意識しないうちにそのように行動しているのか、わからなかった。

立ち寄り先があるので出発の直前にアルディ家のエントランスでヒカルと合流するといった趣旨の短いメッセージが届けられていた。
彼はいつも、アルディ邸には居ない。
彼の為だけに用意された別棟に、滞在していることはほとんどなかった。
教育係のミシェルと行動を伴にすることが多かったようだが、ヒカルにはルイの全てを知ることは出来なかった。
その逆は、成立しているようであったが。

身支度を調えて、指示された通りに部屋を出る前に、入り口に置いた可動式の姿見で自分の姿を確認する。
普段はそのようなことはしないが、今日はあの星辰の子と言われる完璧なまでの麗人に同伴するのだ。
ヒカルは自分の姿を見つめ、やはり何をしても自分の顔立ちは、アルディ家の縁者にはとうてい見えないことを再認識するためだけの行為であったのと思うと、また眉を寄せて目を伏せるばか

りであった。
確かに、若い頃の母に、似てきた。自分でもそう思うのだから、シャルルはもっと強くそう思うのだろう。
その当主を失望させないためにも、彼女は今日一日、完璧な貴婦人でなければならない。
何かしなければならない、というわけではない。
けれども、ただ桃の木を愛でるだけであったが、そこに集う人々に応じなければならないし、遊びに行くという目的だけであったのならこれほどまでには緊張しないだろう。

観桃会という特殊な催しに、それまで名を連ねていなかったアルディ家が突然共催するようになったのは、ヒカルがやって来てからのことだった。
本当なら、生まれた国と同じ形態で祝事を執り行うように進めたいのだろうという希望が見え隠れしていたが、アルディ家には、娘は居ない。
それに、大々的に執り行うことによって彼の婚外子ではないのだろうかとさえ噂されるようになり、当主はヒカルと出掛ける場所を選ぶようになった。
もちろん、本邸の中では彼はいつも細部にまで気を配り、ヒカルがもうそれ以上は気にしないでくれと言っても受け入れないほどの溺愛ぶりを見せていたが、それは彼の息子との埋められない溝をヒカルを愛することによって埋めているに過ぎないことは、ヒカルにはよくわかっていた。

ルイはいたって冷然としており、早々に自立してしまった。遊学という名目でいつも不在にしていることが多いが、様々な分野で彼の才能が認められているのを人伝でも聞くと、ヒカルはそれだけで嬉しくなる。

アルディ家の者としての役割は果たすと決めているらしく、彼は指定された行事に出席することは守っていた。律儀で真面目なルイらしい、と思った。だから、これも家の命令だと思っているルイはどれほどヒカルを厭わしいと思っていても、きっと放棄したりせずにやって来るのだろう。

輝くような金の髪に、青灰色の瞳。顔立ちは、若い頃のシャルルに酷似していた。フェンシングと乗馬で鍛えた体はどんなときでも優雅な物腰であったし、彼が微笑めばどれほど気難しい者も苦笑いをしてウイと言ってしまう。

それほどの人物であるのに、ヒカルの心は操作しない。ただ、いつも、冷たく彼女を見るだけだった。
人から疎ましいと思われることに気がつかないほど鈍感ではなかったが、鈍感に振る舞わなければ生きていけなかった。
ルイが心中どれほどヒカルに消えていなくなって欲しいと思っているのか、ヒカルは感じているのに・・・実行しない。

生きる場所がないから、ということではなくて・・・いつかはここを離れて暮らすときがやって来たとしても、このような状態のままにしておきたくなかった。

父と母がこの場に居たら、心を痛めたことだろう。どうしてわからない素振りをして生きるのかとヒカルを諭したのだろうと思う。

■04

ルイを待たせるようなことがあってはいけないと思い、ヒカルは少し早めに部屋を出て、彼の車が到着するのを待とうと思っていたのに。
ルイ・ドゥ・アルディは既に到着しているという伝言を受けて、ヒカルは慌てて先を急ぐ。シャルルに用意してもらったドレスがヒカルの身体の上で跳ねた。
暖房の行き渡った室内では羽織る必要も無いので上着は片腕にかけているが、完全防寒であるのに軽量過ぎて、これも薔薇色の漣を彼女の体に打ち付けていた。
伝言を持ってきた者や、廊下ですれ違う者たちは、ヒカルの茶の髪の毛とよく合った色合いだと誉めそやした。
ヒカルはぎこちなく会釈しながら通り過ぎて行く。
この家で長く暮らすヒカルは、今でも滞在人でしかない。
どんなに親しくなっても。家族同然だと慕わしく思っても。
それ以上踏み越えてはいけないのだと自分に言い聞かせている。
・・・なぜなら、ここは彼女の家ではなく、ルイが往来するべき場所だからだ。
だからといってよそよそしくすることはないのだが、自分の中で、何か制御されてしまっているように感じる。
それを、シャルルは承知しているから、ヒカルが外に出るようにしているのかもしれない、と思っている。
彼は、医師だ。最近では医療現場の最前線に立つこともなくなってしまったが。
それでも、最新情報の取得を怠ることはない、彼は・・・本当は、当主としての業務よりも、もっと別のことをしてみたいと思っているのかもしれない。

同じ様に。
ルイは全てを手に入れる事が出来るのに、彼はいつも渇望している。
いつも、彼の姿を見る度に、そう思う。
彼は人を動かすために微笑むが、心から笑ったことは一度も無い。
・・・だから、自分は邪魔をしてはいけないと思う。
本当の家族が本当にわかり合うときまで、それは望んではいけないことだと思っていた。

そんなことを考えながら、歩みを進めると、ヒカルはルイの姿を見つけて更に慌てて小走りにな

った。
彼の予定はいつも絶対で、彼の都合で変更を加えることはない。
だから、自分が考え事に耽って時間を忘れてしまったのだと思った。

見間違えることはない。金の髪をした長身の青年。
少年と青年の狭間にあった彼は、その割合を変えて、青年により近くなっていた。
彼とは滅多に逢うことはなかった。けれども会えば前回会った時の彼といかに違うのか、思い知る。

会う度に、彼はヒカルを無視する。けれども今日はそうはいかない。しかし、彼の中には、ヒカルは存在していないのだと思える程に、彼は何もかもを拒絶していた。

・・・彼は外を見つめていた。長い睫がこちらにまで瞬きの音を伝えてきそうであった。
滅多に本邸にやって来ることはなかった。ヒカルが居る時はいつも彼はここには姿を現さない。
だから、彼が立ち寄り先がある、というのは方便なのだと思う。
既に彼は目的に沿った服装であった。
旧家の子女達を集める観桃会では、女子が主役であったので、男性はジャケットにノータイという軽装が励行されていた。
年々、女性の服装が豪奢なものになり、観桃会の目的から逸脱してしまう傾向があるということで、最近になって服装については暗黙の約束事が行き渡るようになっていた。
それが、誰の発信によるものなのかは、何となく想像できたが。
ヒカルが参加するのは、彼女が来賓なのではなく、あくまでもアルディ家の男性の同伴でしかない。つまり、ルイ・ドゥ・アルディが観桃会に出席するためにヒカルが出席するだけだ。
シャルルの計らいで、女児の祝い事としての催事に参加させたいという意向が働いていたとしても、名目はヒカルのため、ということにはならない。
それが旧家の理であったし、ヒカルもそのことについて異論があるわけではない。

「ルイ」
ヒカルが彼に声をかけると同時に、ルイはヒカルの方に体を向ける。
決して堅苦しくは無いものの、場所を弁えた井然さを失っていない彼の出で立ちは、まさしく星辰・・・すべての星々を遵える者という美称が相応しい、と思えた。
彼はよく磨かれた靴を鳴らして、ヒカルに向き合うと、彼女の全身を無遠慮に一瞥した。
「お待たせしました」
ヒカルがそう口にすると、彼は青と灰の瞳を僅かに細めるが、それは満足の視線ではなくて、その逆であった。
久しぶり、という再会の言葉の代わりに。
ルイは彼女に向かって刺々しく言った。

「今日の催しの趣旨が少しも理解出来ていない」
彼女の身を包むドレスが、ルイには毳毳しいと指摘されて・・・ヒカルは立ち止まって困った顔を彼に向ける。
褒めてくれるとは思っていなかったが、それでも、会った途端にそう言われるとは思わなかった彼女は、ただ、困惑の色を浮かべるばかりであった。

■05

彼と一緒に行動するときは、いつも緊張する。
同じ貌をしたシャルルには感じないことであった。
・・・自分が何故そう思うのかも、理由はわかっている。
彼は用意させていた車に乗り込んだ後、会場に到着するまでにヒカルを見ようともしなかったし、会話も当然に存在しなかった。
ルイにとっては、自分は・・・あってはならない存在なのだと思う。
彼は、遺伝子操作されて生まれて来た。
今では遺伝子診断や、着床前診断などはそれほど珍しいことでもなくなった。
この国の多くの者が持っている信仰と生命倫理との折り合いが付いたからだ。
それでも。
アルディ家の優れた部分が凝り固まって生まれた命が、シャルル・ドゥ・アルディと同じ容姿や特質を持っていたことに、誰もが驚き、そして納得した。
フランスの華は、やはり最高の種であるのだとルイを見て誰もが首を縦に振るのだ。
操作しなくても神に愛されていることを証明した当主を凌ほどの能力を示さなければ、ルイは次の当主候補として筆頭指名されることはない。
それが彼を苛立たせているが、教育係である叔父のミシェル・ドゥ・アルディが様々に彼を援護しており、アルディ家は緊迫した状態を続けている。

耳元で囁かれた低いバリトンが彼女に告げた言葉を思い出す。
・・・争うことでしか、生きていることを証明できない者たちがいるのだ、と。
ミシェルに言われた事を思い出す。
ルイの教育係はヒカルに告げた。
彼に執着してはいけない。
星辰の子は皆を所有するが、彼は誰のものにもならない。

しかし、ヒカルはそうは思わない。
憎しみあうことでしか生きていることを表すことができないと言う彼らは、もっと深いところで繋がっているのではないのかと思うのだ。

・・・・どこがいけなかったのだろうか。
往路の終わりまで、彼女はそれを考え続けた。
同乗するルイと距離が近くて、ただ、身を縮ませるだけであった。
無言のままで時間を過ごす。
なぜ、彼が黙ったままであるのか、ヒカルには、わからない。
運転手が気を遣ってしまうような、そんな道程であった。
それほど長い時間ではなかった。でも、彼が今までどうやって過ごしていたのか、今日はどこに滞在する予定なのか・・・多くを尋ねることはなかったが、彼女が確かめたかったのはルイが元気で彼の望むとおりに過ごすことができているかどうかということだけであった。

そんな緊張した空気の中で。
わかっているのは、ひとつだけだった。
ヒカルの服装は、ルイには好ましくなかったということだけだ。
皆が言うほどには、本当は似合っていなかったのかもしれない。
しかし、彼女を慈しんでくれるフランスの華が選んで揃えてくれた品であった。
それがいけなかったのだとは思わない。
だから・・・自分の存在そのものが、ルイの気に触ったのだろうと思えて仕方が無かった。
惨めな孤児が意味のわからない奮闘を繰り広げてはしゃいでいると思ったのだろうか。

この催しにヒカルがそぐわないと言った彼の言葉は、正しかった。
到着して・・・わかった。

降車し、会場を抜けて目当ての桃の木並を歩くまでの短い距離であったのに。
ヒカルはそれを察して、沈降した。
どうして、ルイがそう言ったのか・・・わかったからだ。
乗車中、始終緊張した傍らの麗人は、降車の時にはヒカルのエスコートを忘れていなかった。
本来なら、彼こそ皆に傅かれる身であるというのに。
彼は、完璧だった。
それまでの不機嫌さをまったく表に出すこともなく、ただ、いつもの慣れた仕草であると言うかのように淡々とヒカルを送り出す。
ただ、彼女がルイの同伴であるということを自ら主張しないだけだ。
場違いな野草は誰でも良いから摘取って欲しい。
そんな様子でヒカルを会場に置き去りにしてしまった。

この催しで、ヒカル・クロスは異質の存在で・・・とても目立つ容姿をしていることを承知の上で、ルイは何も言わずにヒカルを桃の苑に置き去りにした。
このような催事には、東洋人は訪れない。

本来は、どう執り行うべきなのか、ということは関係しないからだ。

■06

観桃会には幾度も参加していたが、今回初めて理解できたことがあった。
東洋文化に触れる機会であったが東洋人を招きたいという会合ではないのだ。
そう思った時にはもう遅かった。
ルイの言葉によって、ヒカルにはそれまで見えなかったものが見えてきてしまう。

ヒカルはこの国では異質だ。
幾度も確認したことであったのに、ルイと一緒に居ると、それを再認識する。
自分は、心の底では・・アルディ家の者になれないと、昔からわかっているのに、まだ・・・そのことについて哀しんでいることを。自分の父と母はここには居なくて、自分をアルディ家の子にすることはできない、彼女の父にはなれないのだと言ったシャルル・ドゥ・アルディの苦悶に満ちた、けれどもとても美しく儚い表情を今でも忘れることができない。

星辰の子が催事に登場すると、予定していなかったことに対する出来事に戸惑いながらも喜ぶ者がほとんど大半を占めている。今回の出席は、
彼は、そこに居るだけで特別だ。

ヒカルは、アルディ家でヒカルを待っていた、物憂げな美貌を思い返す。
そこからは何も読み取ることは出来なかった。
彼が身に纏わせているのは誰にも着こなすことのできない上質の着衣ではなく、虚無という名前の拒絶であった。
久しぶりの生家であるのに。
彼は、何の感慨も思い浮かばないようであった。

それなのに。
・・・彼が居るだけで、周囲は際だって華やぐ。

ヒカルには、決して持ち得ないルイの持つ資質であった。
以前から、わかっていたことなのに。
ヒカルには、アルディ家の派遣者という役割を遂行することは出来ない。

彼女は軽く首を振った。自分が、ここでは場違いの者であるのだ、というのはルイが先ほど指摘したとおりであった。

確かにそうであった。彼の言っていることに間違いはなかった。
ヒカルを否定したわけでもなかった。
ルイは、わかっていたのだ。
こうなることを。最初から、彼は知っていた。
彼女は、それまで感じなかった拒絶と区別を感じた。
これまで、アルディ家の代理だと言えば、誰もがヒカルの事を重んじた。
人嫌いで有名な、シャルル・ドゥ・アルディが、行方の知れない親友の娘を養っていることは周知の事実であった。
親日家として知れ渡っているアルディ家から、東洋人が出席するとなれば、それは通常の代理人であるとは言い難い。
アルディ家の恩恵を得たいと思うのであれば、その使者に取り次ぎを求めるのは至極当然のことであった。
けれども、ヒカルは今まで一度も、そのような政治的なやり取りに巻き込まれたことがない。
それは、彼女がそのように感じていなかっただけなのかもしれないが、それでも、ヒカルは道具や手段として扱われたという記憶も経験も、皆無だった。
それは、アルディ家の配慮が大きく影響していたのだということを・・・ルイに伴うことによって知るとは、思っていなかった。

これまで、ルイと幾度かこうした席に同席することはあったが、今回ほど、自分が・・・本当は、まったく意味の無い存在であったのだと思い知る瞬間は、これまでになかったと言い切っても良かった。
ただ、居るだけだと思っていた自分の方が愚かで浅慮であった。
本当は、ヒカルはこの国の、こうした催しには必要ではない存在だった。
ルイは、それがわかっていたから・・・・あのように言ったのだ。

誰も話しかけてこない状況に、ヒカルは黙ったまま対応する。
皆に話しかけられることが少ないから戸惑っているのではない。
この会合が・・・女子の健康と幸福を願った行事であるのに、その実・・・その先に隠れた目的を今さらながらようやく理解した自分自身に辟易していたのだ。

■07

観桃会、というのは観賞用の桃の花を愛でることを目的とする。
観桜会のように並木を逡り歩くような距離は存在しない。
が、満開の桃の花々の色濃さと可憐な佇まいが何とも好ましい。

パリから近い場所にあるが、今日の宴のために象牙色の正方形の薄板を張り巡らせた庭には、人が疎らにいるだけであった。
外は快晴であったが、まだ春の兆し程度の温かさしか持たない寒風が時々吹き抜けるために、閑散としていた。
・・・桃を愛でる会であったのに、人々は室内で歓談することに熱心であった。
だから、駆け引きや弾む会話の取捨選択というものに慣れ親しむことのなかったヒカルは、雰囲気に気圧されて外に出てひとり外の空気を味わうことにした。
シャルルの用意してくれた上着が役に立った、と思った。
彼はきっと・・・こういう状況になるのだろうなと予想していたのかもしれない。
確かに、ヒカルは自分の置かれた立場について、認識が甘いところがあると思った。
彼女はアルディ家に滞在している者であったが、所詮は客人だという考えを持ち続けているし、それはきっと、これからもずっとつきまとう事実であり、かつ真実なのだと思っていた。
ルイと会場に入ると、彼はあっという間に大勢の者たちに囲まれてしまった。
ずっと無言で、ヒカルと隣同士に並ぶことさえ不服そうであったルイは、やがて会場に到着すると大きな溜息をひとつ、吐き出して言った。
「ヒカル。オレの邪魔をするなよ」
・・・・そして。
車から降りた後の彼のエスコートは完璧であった。
時間配分さえ、教則本の通りに違いないと思わせるほどに一分の隙も無い。
その場所は古い別荘を改築したものであった。
所有者は・・・ヒカルもよく知っている、高名な人物であったが、ここの桃の花があまりにも美しいので、改築した時にそれらを眺めることのできるバルコニー付きの部屋の仕切りを取り払い、できた空間を、わざわざ迎賓の広間に設定したというくらい、この邸宅の桃の木並は素晴らしいものであった。
以降、ここ何年かはこの館での桃の宴を観桃会と呼び、良家の子女達を招いて、小さな催しにしているということであった。

そしてほんの僅かな時期だけしか楽しむことのできない風景のためだけに、毎年開催している。
この間、ヒカルの母方の親族に、そういった催しものに参加することになっているという話をしたところ。彼女達は困惑していることに気がついた。同じ様な生活は、日本では体験できないから大事にする思い出になるように、と言われたが、そこにヒカルは僅かな違和感を覚えた。
・・・自分が、もう、住む世界が違っているのだ、と感じさせるような瞬間であったからだ。
それ以来、ヒカルはパリでのことを日本にいる親族達に詳細に語る事は無くなってしまった。自分は、いつかこの暮らしを変えると決断する瞬間を迎えるのだろうと、思う。
漫然とした予定であったのに、それはいつの間にかやがて確実に訪れる未来になっていた。
でも、どこに行っても、どこで桃の花を愛でていても・・・彼女の節句だと言って祝ってくれる両親はどこにも居ない。

彼女の肩を抱いて入り口に入っていった彼は、静かな場所が好きなヒカルに自由に過ごすようにと言って彼女を解放した様を見て、誰もが彼の行き届いた配慮に感心する。若い者は独占したがる傾向が強いのに、彼はそうではないと言う。
けれども。
口に出すことはなかったが、ヒカルにはルイが邪魔なのでどこかに行け、と言っているように聞こえた。

僻んでいるわけではない。
猜んでいるわけでもない。

しかし、桃の見事な色合いを、彼が青灰色の目を細めて観覧するというのなら。
常に穏やかならぬ冷たい情熱を持って何かに向かっている彼の気が、桃の花々によって休まれば良いのに、と思うのだ。
彼はいつもひとりでアルディ家の薔薇園や温室で時間を過ごすことがあるのを、ヒカルは知っていた。たった一人きりで眺める花々との時間も必要であろうが、彼には・・・こうして違う場所で、誰かと話をしながら空を見上げる時間を持って欲しいと思った。

ヒカルは、癖の強い茶の髪の毛の先が上着に乗って揺らめいている様子を眺めた。まるで、海の中の水母のようだと思った。自分は、どこに行くにも浪まかせで・・・汐に乗って彷徨っている様に思った。ルイに向かって、一緒に桃の華を愛でようと言い出すことができず、ひとりで逃げるように静かな場所を選んで・・・そして、その先は時間を潰すのだ。今日の主役はルイ・ドゥ・アルディに決まりだ。
彼は会場を後にするまで、皆の注目を浴び続けるのだろう。
ルイには、そろそろしかるべき家の者との婚約が囁かれているのもヒカルの耳に入ってきていた。
彼はあのシャルル・ドゥ・アルディの息子であり、もう少しすればルイが後継であるという公式の宣言があるのだろう。
当主に就くためには、結婚していなければならない。
これはアルディ家の家訓であったが、シャルルはこの家訓を遵守することも、その家訓を無視することも同時に行っている人物であった。
彼は当主でありながら再婚することもなく、政界に表立って出ることもない。
彼の先代並びに先々代など、アルディ家の当主は恋愛に奔放な部分があるとされていた。それが一族の繁栄をもたらしてきたということもあったのだが。
だから、この宴も一連の・・・目的がある出席なのだ。

■08

・・・空気は冷たくても、陽光が降り注いでいた。
この日差しを受けて、桃の木は鮮やかな色も淡い色も交えて咲き乱れている。観賞用のものだとわかっていても。遠くで眺めるより、こうして木の間近で見上げる方が好きであった。
シャルルも人嫌いで有名であったが、ヒカルにはそういう態度は見せることはなかった。
それは、ヒカルがあの人の娘であるからだということも承知している。
誇り高い人だとは思うが、それは彼の家の宿命とでも言うべきものであって、ルイもミシェルも持ち合わせているものである。
ただ。ヒカルは、ルイのことをわかりたいと思った。
彼はいつも冷然としていて、何か特定のものに執着することはない。
・・・でも。
本当にそうなのだろうか。
時々、思うのだ。
ルイの心が冷たいままであるとは思えなかった。

彼女は、淡紅に光る花を見た。
桜とは違う花瓣の輪郭が、光を受けて輝いている。尖った先端を持つ桃の花瓣は可憐でありながら梅とも桜とも違う華やかさと同時に、儚さも備えている。

美しい、と思った。

・・・彼女の心に深く染み入るほどに。
同じ様に、彼も・・・近くで花を愛でるということについて、ヒカルと同じ意見を持ってくれれば良いのにと願っていた。
勝手な、都合の良い願いであったけれども。

もし、両親が今、傍に居たのなら。彼女はここには居なかっただろう。ヒカル・クロスではなく、黒須昶として生きることになった時。こうしてパリで生活するようになるとは、人生の選択肢に入らなかっただろう。
だからこそ思うのだ。思ってしまうのだ。
両親が・・・生きているとか死んでいるとか、考えていない。
ただ、戻って来られないだけだ。
そう思っている。
親族の元に夏しか戻らないのは、ヒカルなりの抵抗であった。
反抗しているのではない。
自分自身に対して抵抗している、という意味だ。

・・・日本に戻れば、両親の死を受け入れなければならない。
名前しか刻まれていない墓標に向かわなければならない。

ヒカルは、桃の花を眺める。邪気を祓うと言われている行事であったが、今、彼女の心の中はとても人に見せられる状態のものではなかった。
だから、ひとりで良かったのだと思う。
今の自分は・・・きっと、泣きそうな顔をしているだろうから。

アルディ家の庭園ではないのに、こうしてひとり物思いに耽る自分はやはり、ルイの言った通りこの場には相応しくないと思う。
どんなに豪奢な衣装を身に纏っても、彼女が東洋人の血を引く顔立ちをしているのは明白であったし、そのヒカルが流暢にフランス語を操ることも奇異の眼差しの対象になった。だから、皆から浮き立ってしまう。何をしても。何もしなくても。

ルイは、きっとあの屋敷の中で、立派に・・・アルディ家の者としての役割以上の成果を上げていることだろう。
自分は無力だ、と思い知るのはこれが初回ではない。
でも。桃の花があまりにも・・・あまりにも優しくて、あまりにも切ない美しさを放って
いて・・・ただ、それが苦しかった。

ここは自然のままであるというわけではない。
ところどころ、暖を取るための縦型暖房が設置されていて、控えめな色で目立たないように配置されたケーブルコードが伸びていた。
夜になれば、ここは微光でライトアップされて・・・そして俄に艶美さを纏った花並木になるのであろう。
温室以外の庭園は、このように観賞用の暖房器具などは極力遣わない方針で、自然のままにしているアルディ家とは少し違っていた。
夜までの会合ではなかった。子女達の中には、まだ幼い子も居る。
社交界の延長であるかもしれないが、この観桃会は昼の宴という設定であった。
ここでは、皆の顔合わせという目的が附随していたが。
間もなく、この会合も終わる。
これほど短い時間であるのに、逃げ出すようにひとり観桃を装う自分は・・・なんだかとても矮小だと思えた。落ちてきそうなほどにぎっしりと花をつけた桃の木の下敷きになって・・・このまま、自分も海の底に沈んでしまいたいと思ってしまう。
花の海はとても静かで、そしてこれほど明るい陽光の下でありながら、どこか海の潯を思い起こさせる静けさを持っている。

■09

それほど長い時間は経過していなかったように思う。
けれども。
自分の名前を呼ばれたとは気がつかなかった。
・・・どのくらい、考え事をしていたのだろう。
それすら、わからなかった。
でも、空はまだ明るかったし、風も冷え切ったものではなかった。
彼女の上着が寒さを防いでいたのかもしれない。
アルディ家から貸与された着衣、という気持ちはなかったが、この宴にやって来る者の誰の着ているものよりも高価で、そしてヒカルの肌や髪の色に合っている品であることは瞭然であった。
だから、ルイに伴われてやってくるヒカルのことを、称賛ではなく訝しげな視線でもって囲む皆の好意と正反対の意識に戸惑って、ヒカルはこうして人の居ない場所に逃げてくるのだ。
いつも、そうであった。
ルイに言われたのは、的外れであると言い切ることができなかった。
自分は、アルディ家の養い子であるのに、その役割を全うできない。
それを、ルイと一緒に居ると思い知るから・・・こんなにも苦しくて、身を切られるように痛くて、切なくなって・・・そして逃れることを選んでしまうのだろうか。

どうにも、重苦しい空気を感じてしまう。
花木は何も言わないから、彼女はそこに安らぎを感じてしまう。
言葉を持たない生き物にだけ安らぎを感じる自分は・・・どこか歪んでいるのだと、そう思う。

・・・ただ、花瓣を眺めているだけなのに。

ゆらゆらと波底で揺蕩っているような感覚が・・・ただ、ヒカルの時間をゆっくりとしたものに変化させる。
彼女の思考速度をこの世のそれから隔絶させる。

ヒカルの物思いはシャルルやルイのように長く続くものではない。
彼女の沈降はいつも短いものであった。
息苦しさに、水面にすぐに顔を出してしまう。
華の海に溺れそうになって・・・彼女は我に返る。
生きることに執着しきれないのに、生きることを忘れることが出来ない。
いつか、父と母に会える。そう思っている。生きたままで会えるのか、魂となって再開するのか

はわからない。でも、きっと・・・会えると信じて、それを拠り所にしている。それは、シャルルも同じだから。同志が、一緒に居るから。ヒカルはこうして呼吸していられるのだろうと思った。

桃の花は、櫻とは違う花瓣の縁取りでヒカルの上で華開いている。
彼女はこれを家族と祝うことはなかった。
これほど素晴らしい花々を見れば、絵を描く人であった母は、どれほど喜び、それを見て父はどれほど嬉しく思い・・・ヒカルはどう思うのだろうか。
そんなことを考えてしまうほど、ヒカルはこどもの思考を維持し続けることが出来なくなってしまった。
周囲の視線が気になり、なぜ自分がここに遣わされたのかを考えてしまうような年齢にまで成長した。
大人にはまだ遠いかもしれないけれども、こどもから遠く離れてしまったところに・・・・自分は居るのだと思った。

何も考えず、ただ、アルディ家の温もりの中で生きていたいと望んだ自分が・・どうにも許しがたい罪を作り続けているように思うが、それを止めることができなかった。
確かに、自分は贖罪の子だ。
罪を罰することも出来ず、罪を作らないということも怠り・・・そして生きることに拘り続けている。償いということではなく、和解という意味でもなく・・・自分は、どこに行けば満足するのだろうかと思う。その渇望を卑しい願いだとルイが指摘することに対して、何も反論することはできなかった。彼の言葉の通りだったから。

まだ肌寒いという温度を通り越して、刺すように寒い空気の中でも、春の訪れを告げるためにやってくる使者を、ヒカルは無言で眺め続けた。
涙が出そうになる。余りにも孤独と寂寥が大きすぎて。しかし、ここで涙を浮かべて自分を憐れんではいけないと思った。大きな慈愛の心があってこそ感じる気持ちであったが、それをアルディ家の者は必要としていない。
自分も・・・あの家で生きているのであれば、容姿はあの家のこどもになることはできないけれども、せめて・・・心持ちだけでも、近い場所にいたいと思う。
そのものになれない模倣品だと嗤われても、微笑み返すだけの強さを持っていたかった。

ただ、ひとり・・佇む時間が彼女を少しずつ大人にさせていく。
あどけない子供であった時代に別れを告げなければいけないのに、しがみついている自分の弱さを、こんな時に強く思い知る。
ルイは、強い。様々なことに決別する覚悟があり、欲しいと思うものだけに情熱を注いでいるのだと思う。彼こそ、アルディ家の希望の星であり、星辰の子と呼ばれる彼こそが・・・シャルル

を引き継ぐに相応しい。
心からそう思うのに、どこか、寂しかった。

■10

声をかけられたわけではないが、視線に気がつき顔を上げる。
眼を向けた先には、無表情のルイ・ドゥ・アルディが立っていた。
「ルイ」
ヒカルは体が軋むのを感じる。どのくらい長く、同じ姿勢でこうしていたのかさえ忘れてしまうほど、桃の花の可憐な花が広がる天を見上げていたのだろうか。
寒さは余り感じていないが、指先は冷えていたし、頬も強ばっていた。
ルイは上着を着ていた。
会場から庭に向かってこちらに幾人かが歩き始めていて、人の声が聞こえて来る。
ヒカルは首を竦めた。
先ほどからまったく人と話をしていない。
逃れるように、ここで花に見入っていた。
そしてルイの背中越しには、彼に視線を寄せている者たちが複数人いることを示す人の影が見え隠れする。
彼の声を間近で聞きたいと願う者はこの場所に集っている者だけでも相当数存在することだろう。

彼はヒカルのことをじっと見つめている。
青灰色の瞳がヒカルの心を覗き込んでいるようで、彼女は茶色の瞳を見開いた。
目を逸らすことはできなかった。ルイはそれを赦さない。
この家の者たちは、自分から目を逸らすような者には容赦がない。
しかしそれは見つめるに値しない者への侮蔑とは少し違っていた。
何も感じない。何も感じていない。
そういう冷ややかさを通り越した冷淡さで彼はヒカルを見つめるので、彼女は安易にそこから逃れてはいけないのだと思った。
人を避けて花の下に隠れるようにして逃れることはできても、ルイの非難の眼差しからは逃れることができない。

・・・自分はアルディ家の代理としてやって来たのに、少しも役立つことができない。
シャルルはいつも自分のことを大事に考えているというのに、ヒカルはいつもそれに応えることができずにいる。
それを、仕方の無いことだと諦めているのではないのだろうか。
自分は・・・アルディ家のこどもではないのだから、仕方が無いのだろうか。

ルイはシャルルと静かに激しく闘い続けている。他の者たちと違う方法で、彼らは見えない方法でもってやり取りを繰り返している。そう思うのだ。
見事な金の髪の下から覗く伶俐な美貌が僅かに動いた。
彼は何も言わない。その代わりに、ヒカルは彼に語りかけた。
「・・・ルイが言ったことは本当だった。私は、ここでは役に立たない」
「ここでも役に立たない、だろう？言葉は正しく使え」
彼の素っ気ない訂正に、ヒカルは苦笑いした。
ここで心を砕かれたという表情をルイに見せれば、彼はまた失笑するだけであった。苦しいけれども、彼女は泣かない。
顔を歪ませていれば、他の者が不審に思う。
それだけは避けたかった。
この世界は、心の内をあからさまにすることは避けるべきとされる。
どれほど気が進まなくても心から喜んでいると述べなければならないし、それほど親しくない者を招き、最上の礼でもって遇さなければならないという時もあった。
そういうことを気にしなくても良いのだと言われても、そういうことが気にならないほどシャルルが愛を注いでくれても、ヒカルはいつもどこかで、考えを巡らせてしまう。心を曇らせてしまう。

そして彼は黙っているままのヒカルの前で、先ほど彼女がしたように、桃の花房を見つめた。さらり、と金の髪が揺れる音がするようであった。
ヒカルも彼の視線の先を追う。清楚で可憐な色が空一杯に広がっていた。

・・・これほどまでに同時に花を咲かせるのは、そうなるように調整を重ねて一本一本について行き届いた管理がなされているからだ。

それを見て、ルイが何を感じているのか、ヒカルには全部はわかることができない。彼が桃の花を見て、彼に対して厄災除けを祈願する者のことを思い浮かべることはない。ヒカルがヒカルの両親のことに思いを馳せるようにはルイは思いを飛ばさない。

けれども・・・彼は遺伝子操作されて生まれてきたことについて自分で述べることはあっても、人に指摘されることは赦さない。
だからこそ、彼はいつも走り続けているのだろうな、と思えてならなかった。
彼が観桃会についてあまり良い顔をしなかったことに対して察することができなかったのは、自分が狡いからなのだと思った。
ヒカルの生まれた国では、桃の節句と呼ばれて女子の幸福を願う行事とされている。
けれども。ヒカルの育った国は、あの国の他に、この国でもあるのだと思っている。もう、長い

時間をこの空の下で過ごしていた。だからこそ思うのだ。この国にもあの国にも中途半端な存在であるヒカルだからこそ思うことがある。

「・・・・桃の花は魔除けの効果もあるのだけれども・・・桜とは少し違う風情があるのね・・」
ルイに言ったつもりではなかったが、ヒカルはそのように呟いた。女子であるか男子であるのかは関係が無い。こどもには健やかに幸せに育って欲しいというのが親の願いであるのだ、と言いたかったのだが、ルイに対してそれを言ってしまえるほど自分に勇気があるわけではなかった。ヒカルは改めて自分は狡い、と思った。

■11

頬に冷気が降り注ぐが、それでも凍えを凌ぐほどの見事な花の色がそこにはあって、空気すら染められていくような気がした。

色が降る。
風が染まる。
香りが静かに滾る。

母がこの風景を見たら、どんな風に表現するのだろうか。
父は、この風景を見たら、やはり母と共有したいと強く想うのだろうか。
ヒカルはそんなことを考える。いつもそういう風に考えることにしている。
詮無きことだと嗤われるかもしれないが、そうやって思い返さないと、彼らがいない日々が通常になってしまうからだ。どちらが夢で、どちらが現実なのかわからないような生を送りたいわけではないが、それでも・・・もう取り戻せないと諦めるには、まだ早いように思うのだ。
だから。
シャルルは、本当は・・・ヒカルに見せたいのではなくて、ヒカルを通して父母に見せてやりたいのかもしれないと思われた。
父母のいる場所には・・・そこには、シャルルは居ないから。彼はそう思っている。
だからヒカルをひとりにする。彼は、彼女に観桃に行けと言うのに、それでもひとりきりで見せるのが心痛んで不憫だと思い、ルイを同行させたのだろう。
桃は退魔の花だ。魔を祓うのであれば、誰のどこに漂うものなのだろうか。
シャルルは時々、ヒカルを遠ざける。こうやって、ヒカルと関わらないようにする。

健康と幸福を願う。自分自身にではなく、誰か別の者の幸せを願って。子を案じ、こども達を案じ、未来を案じる。憂えるのではなく、幸あれ、不幸も転じて幸になれ、と祈る。

その思いを、どれほど子が受け止めているのだろうかと思う。

「ごめんね、ルイ」
目の前に立つ、星辰の子にヒカルは謝罪する。彼はすぐに冷笑した。
「何を謝罪するのか、整理しておけよ」
確かに、彼がヒカルのことを快く思っていないのは承知していることだった。それなのに、顔を見なければ案じるし、顔を見れば様々なことを聞きたくなってしまう。ルイはなぜ、シャルルと歩み寄ることを拒むのか、なぜシャルルは遠くで見守っていることに徹しようとしている
のか・・・ヒカルは関係ないのだと言われても、それでもやはり同じ敷地に暮らし、長い年月を共有している者として、何も感じないでいるということはできなかった。

「シャルルにそういう対応を教わったのか？」
ルイは続けてそのように言い、そしてふっと溜息を漏らす。
彼のそのような様は、見ている者が溜息を漏らしてしまうほどに美しい。
若い時のフランスの華に酷似していると言われている。けれども、フランスの華は淡い色の白金髪であり、彼は輝くばかりの黄金の絹髪であった。

「・・・シャルルから教わることができるのは、ルイだけよ」
ヒカルは哀しみを込めて、そう言った。
偽らざる本心であった。
「オレの教育係はミシェルだよ、ヒカル・クロス」
彼はまったく話にならないと言いたそうに吐き捨てるように言った。
ヒカルは淡い桃の羽根の中で顎を引き、自分の顔の輪郭に触れるほどに毛足の長い上着の中で声を落として言った。
ルイの前では、声を直線として吐き出すことができなかった。彼はいつも正しくそして反論の隙を与えない。そして彼がヒカルのことを「可哀想なヒカル」「愚かなヒカル」「贖罪の娘」と呼ぶ以外に、彼がヒカルのことをヒカル・クロス、と名前を呼ぶときにはその話はそれ以上するつもりはないのだと言い切っているのだということを、彼女は幾度も経験した出来事の中から学んでいた。

「ヒカルは、誰から何を教わるのか。
こうして自分の位置を確認して、憐れんで、それで気が済むのなら永遠にここで過ごせば良い。
観桃は観桜とは違う。
この国の余興でしかないこの行事に退魔の願いを込めているのであればすぐに日本に戻れ」
彼なりの忠告であると受け止めた。

ヒカルはますます体を縮める。

ルイが言うことはいつも辛辣であるが、彼は他者に感心がないことを考えると、このように述べる言葉には何かしら意味が込められていると思う。
けれども、まだ、ヒカルにはそれがわからない。
ようやく最近になって、ルイがヒカルに対して冷たいという言葉だけでは足りないが、言葉というには彼にしては多すぎるものをヒカルに投げているのだということだけ理解できるようになった。
ミシェルやシャルルであるのなら・・・彼の話がわかるのだろう。
しかし、ヒカルには断片しかわからない。
それがもどかしい。

■12

結局、何も役に立たなかったと打ち拉がれているヒカルに向かって、ルイは冷たく言い放った。
「帰る」
彼はヒカルを振り返ることもなく、そう言った。
「残るのであれば自分で手段を確保するんだな」
「待って、ルイ」
慌てて彼女はルイの背中を追う。まだ散会ではなかったはずだが。
けれども、桃の花が散り始めてきたことにより、気温や日照角度が変化して自分が茫洋としている間にだいぶ時間が経過していたのだと改めて思ったヒカルは、ルイに向かって質問した。

「あの・・・もう帰ってしまうの？」
ヒカルはルイを追いかけて、そして隣に並ぶ。彼が許可無しに近接することは好まないと知っていても、それでも彼は足を止めることをしないのであれば並んで話をするしかない。慣れない沓に気を取られながらも、彼女はルイに付き従う。
誰でも仲良くできた父と違い、彼女はかなり人見知りする方であった。
相手に不快感を与える程の内気さではなかったが、顔と名前が一致する者があまりいない者ばかりの中で、ひとり取り残される事に平然としていられるほどには世慣れていなかった。

「余興が終わったから。もう必要は無いだろう」
「余興？」
ヒカルがルイの言葉に首を傾げる。
確かに、年若い者たちの集いに相応しいように何か企画しているとは聞いていたが、ヒカルはその説明すら聞かないうちに庭園に出てきてしまったので、状況を理解できていなかった。
どうやら、ルイは最後まで滞在するつもりは最初からなかったらしい。

ヒカルは歩みを進めるルイに付き従う。
これほど見事な桃の花のほとりを離れ難かったが、それでも彼が帰るという言葉を無視することはできない。
ここで別々に行動するようなことがあれば、困るのはヒカルではなくアルディ家当主であり、ルイなのだということくらいはわかっている。
今日は日本では、桃の節句と呼ばれる儀式であった。
ルイはヒカルの予定に合わせて行動するわけではなかったが、今日の会合の趣旨を把握していないわけではない。
彼はすれ違う者たちに笑顔で応じていた。
星辰の子の微笑みを受ける者は、特別に感じ入るものがあるようであった。
見惚れたまま立ち尽くす者もいれば、もっと話をしたいとルイに追いすがろうとしてヒカルの姿を発見し、何も声をかけずに凋んでいく者もいた。
人間嫌いで非常に冷笑的である当主に比べ、ルイはかなり自分を律しているようであった。それもすべて、彼が生きるための術であり元から人好きであるということではない。
声を発せずに生活しろと言われれば、ルイは本当にいつまでもその通りにすると思われるくらい無口であった。

ルイと同じ敷地に住まうことを羨ましいと言う者もいる。
あからさまに軽蔑した眼差しを向ける者もいる。

それらのひとつひとつに生真面目に対応していれば、やがて心が砕けてしまうと思うからヒカルは気がつかないふりをしている。
いつの間にか、自分はそういう風に逃げることを覚えてしまった。諦めることがいかに楽であるのか、学んでしまった。

・・・上手く泳いで渡ることが出来ないから、底に深く沈んで急な流れを遣り過ごしているヒカルをルイが心底呆れているのも知っている。

もう帰ってしまうのかという惜しむ声を後にして、ルイは出口に向かう。
数少ない男性の招待客は、ルイに今度こそフェンシングか乗馬で勝ってみせると宣言したが、不敗とするチェスの試合について触れる者はいなかった。
応じなければいけない相手には丁寧に、この場を辞する非礼を詫びるがそれはルイの心からの謝罪ではないことは、相手もよく承知していることであった。
長居をする無粋者であると思われたくないですから、とルイはいうが本当はそうではない。
より高位の者から退出しなければ他の者が去ることができないことを知っているからだ。彼は自分の立場を弁えている。過不足なく。
そういう作法さえ、ルイは学んで久しいし当然のことのように応対しているがヒカルには同じ事

はできなかった。
アルディ家に住まって、どれほど長い期間を経過していたとしても、それよりもっと短い時間しか滞在していないルイの方が継嗣として相応しい対応を学んで実践している。彼がヒカルのことを常々、愛翫動物だと言う所以はここにあった。ヒカルはアルディ家の者にはなれない。そして、自分自身の処遇を決めることができないのに、そこから抜け出そうとする気概さえないのだ。

そして、会場を横切り、ルイはヒカルにはまったく話かけずに歩き続ける。
出口で上着を差し出されたが、それを受け取らずにいた。上着を着て車に乗り込むことはしない。そういう必要はないからだ。

■13

彼女は上着を着たままであったが、そのまま会場内を横切り、そしてエントランスに向かっていくルイを追いかける。

せめて退出の挨拶でもしておかなければ、という考えが頭を過ぎる。
何事にも完璧なルイがそれを省略していることはないと思っていても、自分も賓客として遇されたのだから、礼を述べなければいけないと思い、ヒカルは周囲を見回す。

・・・自分が、今日の主催者の姿さえすぐさま見つけることができないことに気がつき、ヒカルは唇を噛んだ。

確かに、準備不足であった。ルイがヒカルにそう言ったのも、見当外れのことではないのだ。
しかも、観桃会であるという趣旨から子女達は皆、桃の花に似せて衣装を選んでいた。
薄赤色から紅色まで様々であったし、一部分だけ小物を身につけている者もいたが、それでも同じ様な装いが多く、混雑も影響しヒカルは困惑する。
自分が、他の子女達とほとんど繋がりがなく、知った顔に行き会わないことがこれほど恨めしいと思ったことはなかった。
先ほどまで、誰にも声をかけられないように、庭でひっそりと時間を過ごしていたと言うのに。
他の者と連れ立って桃花の様子を見上げることを放棄し、隠れるようにして木々の中で佇んで居た彼女に対する当然の報いだと思った。

足を止めるとルイを見失ってしまうので、足を止めることはしない。こうしてずっと追いかけて行く存在の彼を見つめながら、金の髪を目印にしてただひたすら彼の後をついて行く。
皆が彼を見つめる。誰もが彼の姿に振り返る。星辰の子と呼ばれるルイは、いつもまっすぐに前を向き、振り返ることはしない。これほど多くの人を振り向かせるのに。
あらゆる星々を遵えるアルディ家の薔薇のひとりはいつも孤独に前を見つめる。けれども彼のこ

とを寂しい人なのだとは思えなかった。
それは彼が誰かと常に一緒であることを欲していないからなのだと思う。
ヒカルは茶色の瞳を瞬かせた。そういう表情が、彼女の母親に似ていると言われるけれども、どこがどう似ているのか、彼女にはわからない。
でも。
ルイの背中は、シャルルに似ていた。彼もあまり振り返ることはしない。ヒカルが見送っていることを知っていても、軽く手を挙げるだけであった。

どうしても、どうやっても、彼に追いつくことが出来ない。
一緒に並んで話をして、一緒にアルディ家に戻るという意識を持つことが出来ない。
それは、互いにきょうだいがいない者同士として労り合うことはないのだと言い聞かされているような気がした。
ヒカルとルイは大きく隔たっている。
同じ家に帰るのに。同じ敷地の中にいるのに、彼は誰よりも遠かった。

皆の注目の中で、彼に話しかけることは憚られた。こういう場面には、幾度も遭遇しているのに、それでもまだ慣れなかった。
自分は、ルイに最も遠いのだと思った。彼の最も近い場所にいたいと思うのに。
アルディ家の中には踏み込むことが出来ないのだと思うと、寂しい気持ちになってしまい、涙が溢れそうになってしまう。
こうして、ルイの金の髪を近くでみることができるのは、あとどれくらいのことなのだろうか。
いつか、自分は・・・パリではないところで、桃の花を見つめるのだろうと思う。
それは、確実にやって来る。
その時、その場所というのは、きっと・・・ルイも、シャルルもいないところだ。
そのような予感と覚悟があった。
でも。
同時に、ヒカルを臆病にさせる。
彼はいつも皆に注目されて、星辰の子として讃辞され続ける。何もかもを持っているのに、何もかもを欲する人の行き着き先が気になるのに。

アルディ家の者としてここにやって来る覚悟も準備もできていないと言った彼の言葉が今になって身に染みた。

「ルイ、待って」
追いすがることもできず、ヒカルはそう言った。
彼の活動範囲から弾き飛ばされてしまう。彼は周囲に軽く会釈し、必要な相手にはまた別途連絡するという旨を短く伝えて足速にここを去ろうとしている。

アルディ家の子としての記憶や経験が欠如していることをルイは承知している。
彼が与えられるべきものが、彼には足りていない。満ちていない。
けれども、ルイだけではない。ヒカルにも、退出の挨拶が注がれる。彼女はその都度立ち止まって挨拶を交わす。おざなりに扱うことはできなかった。
招かれた礼、退出する非礼への謝罪、この会合の感じ入ったところ・・・それらすべてをひとりひとりに同じ様にかつ丁寧に説明しなければならなかった。
ヒカルに話しかける者はそれほど多くはないが、それでも彼女はアルディ家の養い子であり、それを知らない者はこの会場ではほとんど存在しないのだろうと思う。
ヒカルは飾りでしかなかったのに、これだけ遇される。でも、ルイはそんなヒカルのことを苦々しい思いで見ていたに違いない。
・・・それなら、一体、どうすれば良かったのだろう。
■14
彼はヒカルに振り返ることもせず、用意された車に乗り込もうとした。
絶妙なタイミングでもってやって来たアルディ家の車は、ヒカルやルイの送迎のためだけに用意された車であった。
防寒のために用意されたヒカルの上着は、室内を通り抜ける時には酷く暑かった。
けれども、ほとんど重さを感じさせないので、どれほど注意していても裾が翻る。
自分の足元や衣類の裾に注意している余裕はなかった。そんなことに気を取られているうちに、ルイは遠く離れてしまう。

彼が自分と距離を置いていることは承知の上だった。図々しい居候と思っていることも、そのことによってルイが彼女のことを苦々しく「贖罪の娘」と言って揶揄することに反論できないくらい、彼が彼女を厭わしいと思う理由を承知していた。
けれども、行き場がないから縋るのではなく、ルイの役に立ちたかった。
どんなことがあっても、彼が望むのであればヒカルはどんなことでもしたいと思う。ただ、ルイはそれを彼女に求めることはないし、これからもないのだろうと思われた。

シャルルがヒカルに対し、日本の催事について忘れないように配慮するのは、いつかヒカルが日本に戻ることを予想しているからだ。そして、今もヒカルは定期的に戻る日本に馴染めないでいた。シャルルに何も言っていないのに、彼はそれを知っているようだった。だからなのだろう。
桃の節句に行われる会合に行ってこいと指示するのは、ヒカルが健やかに育って欲しいという願いからそうしたのではなく、彼女が中途半端な存在であると悩んでいることを見越したからだ。
シャルルがアルディ家の者としてヒカルを送り出すことはほとんどないことだった。
ヒカルの父の実家であるクロス家がそれを快く思っていないことも知っている。
滞在するときには、いつもアルディ家では困ったことになっていないのかと聞かれる。

先般の帰国の折に、あれほどの旧家で人付き合いを絶っているフランスの華のもとで育てられると偏った人間になると言われて、ヒカルはただ困惑するだけであった。
人と人の間には、友好という感情だけしか存在しないというわけではない。
諍いも誤解も、そして哀しいことに決別や憎しみも存在する。
見ないことにしたいと思っているけれども、ないことにしたいと思っているわけではない。
そういう姿勢でのぞむヒカルが、ルイにはとても愚かな存在に見えるのだろう。

でも、ルイと同じ方向を見ていたら、見えないことがあるから。
だからシャルルはルイとヒカルを同一の場所に行けと指示するのかもしれない。
はっきりと聞いたことはないけれども。でも、シャルルはルイがこの世からいなくなってしまえば良いとは思っていない。そう思いたい。

ヒカルは額の際に汗を浮かべながら、ルイを追いかける。
彼はいつも追いかける人物だ。彼はいつも誰かに背中を向ける存在だ。
けれども、その彼が正面を向いて目指しているのは、一体誰なのか、一体何なのか、追いかけている限りそれは決して見えてこない。

上を向いて居てばかりでは駄目だった。
桃の花の下から見上げる昊は、緋色の昊であったけれども、ルイの見ているものはもっと違う景色なのだろうと思う。
彼は、緋の敷物のような空を掲げながら・・・ヒカルの前に現れたのはどうしてなのだろうと考える。
彼がヒカルを迎えに来てくれたのか、それとも・・・彼も、ヒカルと同じ様に何かに耽るために桃の空の下にやってきたのだろうか。
アルディ家には久しく訪れていない緋色の節句に彼が何を思い、この観桃会にやって来たのか、わからなかった。
命令されたからというだけではないだろう。
ヒカルと同行することは極力避けるルイ・ドゥ・アルディが、辞退する言い訳を考えつかないとは思えなかった。実際、幾度も、ルイとヒカルは同行しなければならないような事態がやって来たのに、ともにアルディ家からの使者という組み合わせを同時に演じることはなかった。演じる。彼は、まさにそうなのだろうと思った。
寡黙で、家の事情に対して彼は決して不平不満を漏らさない。完璧な当主候補であった。ルイ・ドゥ・アルディは皆に望まれ、期待通りの結果を出している。
けれども、彼が望むことを多く聞いた者はいない。教育係のミシェルなら、もっとたくさんの話をしていることだろうが、ヒカルはルイと年齢も近いのに、彼に最も遠い人物が自分なのだと思う。

ルイ・ドゥ・アルディは車が寄せられても、最初に乗り込もうとしなかった。
しばらく佇み、じっと足元を見つめている。決して振り返らない。
ヒカルを待っているのだ。
ここで彼女を置いて行くのなら、理由が必要だろう。だから、後ろからヒカルがやって来るのを待っている。でも、穏やかに、彼女を待ち侘びたという仕草は見せない。それは、彼が星辰の子であるから。ヒカルに対してはルイは彼女のことを妹と思うこともなく、家族と思う事もないから。だから、彼は振り返らない。
でも、一緒に帰らなければ咎められるから。だから、背中でヒカルを待つ。
・・・ごめんなさい、と心の中で呟く。
ヒカルは、どこに行ってしまうのだろう。
どこに埋もれれば良いのだろう。
それはルイに尋ねることではなかった。自分が導き出さなければならないこたえであった。しかし、わからない。・・・わからないのだ。

■15

ルイ・ドゥ・アルディは寄せられた車に乗り込む前に、そこではじめてヒカル・クロスに振り返る。真っ直ぐにヒカルの居る方向を見ていたので、彼が彼女を探しているのではなく目線で命令しているのだと思った。車に乗るのか乗らないのかはっきりしろ、と言いたいのだろう。

もっと違う意味であったのかもしれない。
彼女が同乗するかどうかを確かめるというよりかはむしろ、誰もついて来ていないことを確かめるような仕草にも見えた。

この国には、日本と違うしきたりや決め事がある。
例えば、こんな時だ。
同じ方向に向かう者同士であれば、女性に進行方向を譲る決まり事になっている。
それがヒカルを尊重しているのではなく、この国の決まり事だからルイ・ドゥ・アルディは彼女がもし追随してきたのであるのなら。
それを無視した態度を周囲に見せることはできないと判断しただけなのだ。
つまり、ルイ・ドゥ・アルディはヒカルを気遣っているのではなく、周囲を気遣っているのだ。
ヒカルはそれを知ってもなお、彼のことを恨みがましく思うことができなかった。
彼は冷淡な対応しか表さないけれども。
アルディ家の継嗣としてどのように振る舞わなければならないのか、ルイは十分すぎるほどに承知している。
彼は何事にも冷静で、端然としており、いつもその時の最善の判断を下すことができる。容姿が優れているだけではなく、彼はその気質そのものがアルディ家の新しい薔薇でありながら、同時に旧い薔薇でもあるのだ、と誰もが認めるほどに完璧であった。

ヒカルは火照った頬に冷気を感じた。
春であったが、まだ寒かった。
だから、誰も桃の花を見にやって来ることはなかった。
まだ、寒いから。まだ、春ではないから。
自分が意固地になって、春を愛でると言い張って・・・それでルイを困らせてしまったのではないのだろかと思い至った。あのあと、皆が館から出てきた時に、一緒に行動すれば良かったのに。彼女はまた、配慮を怠ってしまった。
周囲を見れば誰もが彼に視線を注いでいるが、それなりに場を弁えた距離でもって彼を眺めている。着飾った年若い者たちは、みな彼に尊崇の念を込めて見送っていた。しかし、彼らには必ず差し添えがあって、ひとりきりで立っているのはルイとヒカルぐらいであった。

「ルイ。私も・・・帰ります」
ヒカルは彼に駆け寄ると、小声で早口にそう言った。
ルイは金色の髪を頬に散らし、不機嫌そうに薄い唇を僅かに歪めた。遠目で見れば、彼の家の客人である少女に向かって極上の微笑みを浮かべているように見えるのだろう。周囲から溜息とも称賛ともつかないような空気が揺れてヒカルに到達するまでにそれほど時間はかからなかった。

主催者がわざわざ、ルイを見送りにやって来る。
これで、彼がどれだけ厚遇されているかということがわかる。
すべての次第を終えたのに、特別な彼への礼を尽くす周囲の様子に、ヒカルは後退った。
期せずしてルイに寄り添うようになってしまう。しかし彼はそんな彼女の肩を抱くことも退けることもしなかった。傍に人が居るから。
誰も見ていなければ彼はヒカルの体を振り払うのだろう。
そう思ってしまう己に嫌気が差した。

アルディ家の者としてしなければならないことの半分も、彼女は達成できていなかった。ただ、豪奢な衣装を与えられて、自分はそれに臆して逃げ出した。だから、彼が憤っているのに、それを哀しんでいるだけで何もできなかった。そう､何もできない。自分は、何かをしたいと積極的に思うことすらしなかった。
ルイはその間、これだけの人を魅了するために、周囲を出歩き、皆に声をかけてこの会合の目的を果たしたのだろう。
ここに集う者たちは良家の子女だけではなく、各国の大使館の子息なども集まっている。アルディ家が各地方に与えている影響力をさらに強くするつもりであった。当主が畢生の事業としている、あの国への援助のためでもあった。

ヒカルは桃の香りの残る自分の衣服に目を細める。
先ほどまで桃の花たちの中に埋もれていたのに。もう次にやって来る時には、ヒカルは今のヒカルと少し違っているのかもしれない。同じではいられない。それはわかっている。けれども、桃の花だけはいつも変わらずに、彼女に纏わり付く邪気を祓うようにいつも同じ匂いと色と風の冷たさでもって彼女を迎え入れてくれるような気がした。
・・・もし、シャルルが来年もここを訪れても良いと言ってくれるのであるのならば。今度こそ、上ばかりを見上げていることのないように過ごしたいと思った。
大人になるというのはこういうことなのだろうか。ある一方方向だけ見つめていることができなくなるということなのだろうか。

ヒカルは近くに感じるルイの気配に困惑した。彼の一連の行動は不連続で不可解であるように思えたが。・・・ルイは自分の見える風景だけではなく、見えない風景まで見ようとしているので

はないのか、とふと思い至る。

■16

主催者は、ヒカルとルイに送りの挨拶を述べる。ヒカルがほとんど館内におらず、姿を消していたことも承知していたようであったが、それには触れなかった。
困惑しながらも、ヒカルはそれに応じた。ルイは既に話を終えていたようで、また後日、当主から礼を含めた連絡をする、とだけ言っていた。
局外者でまったく内情に関与していないことを認めることになり、ヒカルはただ曖昧に微笑むだけしかできなかった。
ルイが今日、この場所に何をしにやって来たのか、目的は明白であった。
桃を愛でるためではない。ヒカルとは違う明確な目的があり、それは達成されたのだと改めて思った。

「ヒカル・クロス嬢を送り届けなければいけませんので」
この後、ごく限られた者で夜会を開催するという話に、ルイは丁重に断りを入れた。
「彼女には門限が厳しく設定されていますし、彼女への付き添いが本日の役割です」
彼はそう言い切った。
彼は更に引き止めようとする主催者への言葉に、さらに重ねて固辞の意を表した。
聞く者によってはわかることだろう。
建前としては彼女の送迎を自分が請け負っているのでこれ以上は居たくても居られないのだという表現に聞こえるし、またある者が聞けばヒカルを理由にしてここから退出したいのだという宣言にも聞こえる。惜しまれる声が方々から漏れる。彼はそれも計算の上で、極上の笑みで彼らに返した。
「次の機会には必ず」
それでどれだけの者が期待に胸を膨らませるのか、彼は知っている。けれどもそれを人の心を操る術として使うのではなく、彼が、彼の家の当主のように隔絶した世界を生きるということではないのだという断りであった。

そして、彼は微笑んだ。
決してあたたかくはない微笑みであったが、溜息が出るほどに美しかった。
「彼女は、アルディ家の意富加牟豆美命（おおかむづみのみこと）の華ですから」
それは日本の神のことであった。
この国も者とは文化が違うので、知らない者がほとんどである。
だから、それはヒカルに告げたのだろうと思った。
意富加牟豆美命とは桃のことだ。
あらゆる生が、苦しみに落ちて悲しみ悩む時に助けを施す者のことである。その神の娘という

のは、あらゆる魔を祓うだけではなく、彼女が常に贖罪の娘と呼ばれることにも繋がるのだろうと思われた。
その実は、邪気を祓うのではなく、その仙果に叢がるためであるという節もある。
すべての邪な感情がそこに集う。ヒカルもそうなのだと彼が揶揄しているのだ。
事情を知らない者が聞けばそれは称賛に聞こえるかもしれないが。当の本人であるヒカル・クロスには、それが贖罪の娘なのだと皆の前で言われているに等しかった。
そして彼は桃の果実ではなく、ヒカルのことを華と呼んだ。散るだけの存在。退魔の役割を十分に満たさない存在。ヒカルのことを、そのように呼ぶ。
ヒカルはただ、黙っていた。こうして面と向かって皆の前で罵倒されるほどの彼の憤りを感じ、自分はそれに反論するほどの努力を何もしていなかったことに気付かされる。

アルディ家は親日で有名であった。だからなのだろう。
非常な親日家として知られている当主の息子であるルイもまた然りなのだと、よく意味もわからないようであったが、主催者は感慨深げに頷いた。
「本日の勝者は貴方ですから」
ヒカルはその言葉に、顔を上げた。勝者・・・どういう意味なのだろう。彼女はほとんど館の中にいなかったので、何かの催しのことを言っているのだろうかと思ったが、彼女の不思議そうな様子に誰も答えることはなかった。
その代わり、ヒカル・クロスには手土産として、枝に咲いたままの桃の花が贈呈された。それはルイに捧げられるものなのだろうが、同伴の女性に対するものとして順が送られたのだ。
「星辰の子から、桃の花の精への贈り物です」

そう言われて受け取らないわけにはいかなかった。
腕に乗せられた桃の華の可憐な様子に、ヒカルは思いもかけない手土産に驚いてしまう。
ルイからの贈り物と聞いて、更に動揺した。
ヒカルとルイの間で、贈答のやり取りは交わされない。
ヒカルは毎朝の薔薇を彼に届けさせているけれども、ルイからはヒカルに寄越したものはなかった。
それで良いのだと思っていた。
贈り物に対する返礼を期待してはいけないのだと思っていたし、一方通行でも構わないのでも気持ちを捧げることができればそれで良いのだと言い聞かせていた。
シャルルとヒカルとの間に流れる家族に近いのに家族ではない感情と、ルイとヒカルに流れるそれは明らかに違っていた。

ルイはつまらなさそうにそれを見ていたが、すぐにヒカルの肩を抱き、周囲に挨拶をしながらも車に彼女を押し込んだ。傍から見ればそれは優雅な誘いであったが。彼女の肩に乗せるルイの手の平の力は強く、ヒカルは何も言えずにただ会釈だけして車に放り込まれてしまった。

蒸発を防止するために巻かれた包装紙の音だけが大きく響く。
彼はすぐにヒカルの反対側の扉から乗り込んで来たので、ヒカルは身を固くして彼を迎えた。傾いた姿勢を正し、背筋を伸ばす。こういう時には、慌てた様子を見せてはいけない。それは彼女が長年のあの家での生活で学んだことであった。

■17

「予定の時間を10分も遅れた」
彼は腕時計を見て、小さく舌打ちした。
ルイ・モネのMagistralisであった。
それほど目立たないのに、彼の出で立ちのすべてが、シャルルではなくミシェルが用意したものだとすぐにわかるほどであった。いや、ひょっとすると、ルイが自分で指定したものなのかもしれない。
彼らは叔父と甥の関係であったが、非常によく似ていた。
シャルルとルイとの間の時間より、ミシェルとルイとの間の時間の方がずっと長かった。だからなのかもしれない。
ルイは時間に几帳面で、予定された計画が変更されることは好まない。
僅かな時間の、僅かな人数の会合であるのに、この周到さはヒカルには及ばないことであった。
帰りの際になってそんなことを考えるヒカルの視線に気がついたのだろうか。
車が出発すると、ルイはまた抑揚もなく、前を向いたまま言った。

「オレの予定を乱すくらいなら、最初から来なければ良かったのに」
彼は他人に対して、そのような発言はしない。それなのに、ヒカルにはそう言う。それだけ、憤慨が遣る瀬無い極限までに到達しているのだと思った。
彼女は鳩尾の部分で揺れる桃の花を抱きしめた。
乾いた音がする。
ヒカルの心の中の様子そのものであった。

ヒカルとルイの間には、長い時間は存在するが、彼はヒカルを家族と認めることはなかった。

そして。
彼は、かなり怒っている。

彼女はシャルルもルイにも認められることはない。優しく接してくれているかどうかの違いだ。
その優しさも、ヒカルにとって心地好いかどうかの違いだけで・・・彼女はアルディ家の者ではなく、単なる客人で何もできないのだと思い知らされるだけであった。
彼の手首に光る時計ひとつとっても、ヒカルは感想を述べることができる程の余裕を持ち合わせ

ていない。それだけはわかった。
だからヒカルは素直に言った。それ以外には言えなかった。
「ごめんなさい。桃の華に酔った」
車は静かに走り始め、訪れていた館を背にしてどんどん小さくなる様を感じながらも、ヒカルは桃の匂いに目を瞬かせる。

噎せ返るような強い芳香ではなかったが、狭い車内では十分に存在感を強く表すと思った。
魔を寄せ付けないとされる桃の花の効力に、ヒカルは目を閉じる。
魔とされる邪な存在は自分自身なのだろうと思った。少なくとも、ルイにはそうなのだ。シャルルとの不仲も、アルディ家で継嗣と認められない勢力が存在するのも・・・ヒカル・クロスが存在するからなのだという、整合性すら成立しない主張にルイが立ち向かっているのも、ヒカルがあの家で暮らしているからなのだ。
しかし、それは彼はヒカルに責め立てることはなかった。
会話そのものが成立しないからだ。
ルイは彼女に話しかけることはない。
ヒカルは常に、彼に話しかけているが、それは彼には黙殺され続けている。
それでも、諦めたくなかった。
諦めたら、そこで終わりだ。
そう思っているから。

「すまないと思うのであれば、謬るな」
彼は仏頂面でそう言った。彼の横顔は、シャルルにとてもよく似ている。
彼の息子だからという理由だけではなく・・・アルディ家の者は誇り高く、そして予定外の出来事に対処できても容赦はしない点が、似ているのだ。
それを目の当たりにして、ヒカルはただ臆するだけである。

「あの・・・」
ヒカルは恐る恐る尋ねた。
送り出された時の言葉に疑問を残したままであったからだ。
手元にある桃の花は、ルイが用意してくれたものなのだろうか。
そして勝利者と言っていた理由と経緯がまるでわからなかった。
何か、余興があったのだろうか。
「ルイの言う通りだった。何かの役に立てるかと思っていた。私でも」
シャルルには娘がいない。数多の血族の中で女性は大勢いるが、彼はヒカルを指名したのだ。だから、自分がそれだけで有頂天になっていたことを改めて認めざるを得ない。
彼は索然と言った。
「根拠のない自信は身を滅ぼす以上に周囲も灼くぞ」

その意味がわからないヒカルではなかった。自分がかけた迷惑が、ルイにまで及び、ひいてはアルディ家の評判を落とすことになるのだから、と彼は言うのだ。忠告ではなく、淡々と事実を述べていた。
彼は、最初に彼女に忠告していたと言うのに。ヒカルは、それに耳を傾けたのに、その先に進まなかった。何をどうすれば良いのかわからず、ただ、あの場所から逃げ出したのだ。責められて当然であった。彼女は俯いた。
■18

ヒカル・クロスは、ルイにひとつだけ質問した。
「何か、催しものがあったの？」
「根拠は？」
冷たい口調でルイが言った。ヒカルは彼がまったく無視を決めているわけではないのだと知り、少し安堵で表情を和らげた。ルイと一緒に居るといつも緊張する。ミシェルが隣でも同じであった。シャルルととても似ているのに、ルイはいつも張り詰めているように思えて、こちらが畏縮してしまう。
他の人の前ではそうではないのだろうと思うと、余計に哀しくなる。
自分に優しくして欲しいと思う権利はないのだと思うし、ルイがヒカル秘優しくする義務もない。けれども、同じ時間を過ごす者同士、少し話ができれば良いのにとつい期待してしまう。それが驕りという名前であることも、ルイに指摘されたばかりであるのにまた考えてしまうのだ。
「これを渡された時に、そうなのかなと思うような声掛けがあったから」
勝者はルイだ、と言っていた。そして可憐であるのに鮮やかな桃の花束を見つめる。
ヒカルは邸内にほとんど居なかったので、顛末がわからなかった。
幼い子女も多く訪れていたので、何か余興があったのだろうという程度にしか思っていなかった。
でも、会話の糸口が見つからない。
卑屈になるくらいなら、死を選ぶというくらいに高慢な気質の者が多いアルディ家である。
ルイに何かを聞く時には、特に慎重にならざるを得なかった。

ルイが何も言わずに窓の外を眺めている。聞こえなかったわけはない。根拠を述べたつもりであったが、間違っていたのだろうか。ヒカルは眉を寄せて、また桃の花を見つめた。
「勝者は貴方です、と言っていた。何に勝ったの？」
「役割を放棄した者に言う必要はないよ」
ルイが素っ気なく言った。
ヒカルはそう言われてしまうと、それ以上尋ねることができなくなり、また黙り込んでしまう。
彼が望んでいるのは沈黙だ。
わかっていることであったが、それでも心の洞に寒風が吹きぬけるようであった。

わかっている。ヒカルは、ルイ・ドゥ・アルディにはなれない。
アルディ家のこどもにはなれない。
何をしてもうまくいかない。
けれども、それはルイのせいではないことも承知している。

ヒカルは絞り出すように、けれども努めて朗らかに言った。
「ルイ、おめでとう」
彼が勝利したのであれば、真っ先に祝辞を述べるのは、ヒカルがやるべきことであった。それすら怠ってしまったのなら、自分は本当にあの家にいてはいけない存在になってしまう。
打算からの言葉であると認めていたものの、それでも、彼におめでとうと言いたかった。
理由をつけて、彼に褒めて貰いたいのは自分のほうなのだ、と思った。
彼は返事をしない。
ヒカルはそれでも、もう少しだけ、と思いながら話を続けた。
「この桃の花はとても素晴らしいわね。明日の朝は、薔薇ではなく桃の花にしても良いのかもしれない」
これから戻ってすぐに処置してやれば、これらの花は明日の朝まで良好な状態を保持できる。
自分の中に溜まり込む良からぬ静寂を振り払おうとして、彼女は声を出す。
「・・・とても素敵ね」
勝者への手土産にしては、とても女性的な包みであった。
最初から用意されていたようだ。
つまり、この催しは、突然誰かが提案したり、その場の雰囲気で行き着いた余興ではないのだということがわかる。
ルイは彼女に逐一状況を報告するようなことはしない。
しかし、ルイが何かを賭けたことは間違いなさそうであった。
彼の手土産は何もなかった。
これが、勝利の証なのだろう。
ルイは平然としているけれども、ヒカルは気になり始めた。

■19

すると、しばらくして、ルイがぽつりと言った。
外を眺めたままであった。
長い脚を組み、背凭れに寄りかかりながら、彼はヒカルの方を見ないで言った。
「・・・桃の精霊を捕まえた者は勝者と言われる」
「え？」
彼はヒカルの話をまったく聞いていないようであったが、彼女の質問に回答したのでヒカルは茶色の瞳を大きく見開いた。

「桃の精霊を見つけると、祝福を受けることになっている」
彼は普段繰り返すことはしない。
それなのに、敢えて繰り返す彼の言葉の意味を読み取ろうと、ヒカルは茶色の瞳を大きく見開いた。
眉を大きく持ち上げたので、くせの強い髪がぎゅっと彼女の顳顬を引き締める。

桃の精霊、と聞いて、ヒカルは少し考え込んだ。
具体的には、どのような余興だったのだろうか。
まったく気がつかなかった。
しかし、会場の中ではそのような催しの説明はなかったし、事前に通知もなかった。あの場所にはフランスで屈指の家柄の子女が多く出入りするので、外から誰かを招くというのも考えがたい。それに、そんな痕跡はなかった。
「鬼ごっこのようなもの？」
確かに、幼女も多くいたので、飽きさせないための余興であるのだとしたら。ルイは、それさえ手加減しなかったということなのか。
すると、彼はヒカルの思考を読んだように、一瞬、嫌そうな顔をしてみせた。
「遠からずだが、競うものではない」
彼の謎かけに近いような返答に、ヒカルはますます困惑してしまう。
ルイは少し苛立たしげに溜息を漏らした。
そして、シャルルによく似た顔をヒカルに向けると、ルイは強い口調で言った。
彼は青灰色の双眸を苛立たしげに彼女に向けている。
「同伴者を見つけて探すのが、あの場所での余興。桃の精霊というのは、観桃の行事に衣装を合わせた者のことだ」
ヒカルがまだ把握できずに首を傾けているので、ルイはとうとう憤懣を隠そうともしないで軽く舌打ちをし、説明を始めた。
「魔を祓うという桃の化身に見立てて、相手を探す。
桃の実が、姿が見えずとも芳香で人を呼び寄せたという故事からきている。
春遊踏青とあるように、漫ろ歩くこともあるが、それは省略されている。
だから室内で見つからないように、参加者は他の者と着衣を交換し、顔を見られないように俯いて階上の探索者を誤魔化す。
勝者は各々１名。最初に見つけた者、最後まで隠れ続けた者だ。
・・・魔から逃れるために、衣を被って難を遣り過ごしたという伝説を元に、女性は容易に返事をしてはいけないという決まり事がある、
これに選ばれるとその年は健康で過ごせるという言い習わしがある」
いつも言葉の少ない彼が、細かく説明をするので、ヒカルは彼の美貌を見つめながら言った。
「それで、ルイが勝者なの？最初に・・・その・・私を、見つけたの？」

ヒカルはその話から納得していた。
なぜ、自分が桃の花と同色の服を用意されたのか。そして、全身を覆うような着衣をあてがわれたのか。
・・・桃の節句のために、特別に用意されたという理由だけではない。
シャルルは、このことを知っていたのだろう。
彼女は唇を震わせた。
フードのついた大判の、寒さを凌ぐ衣類。確かに、他の者が羽織れば体型も髪の色もわからない。
ルイが「分不相応だ」と言った理由が、ようやくわかった。
ルイに追われる身分にヒカルは釣り合わないということなのだろう。

「相手の潜んでいそうな場所を指定できる。複数箇所指定すれば配点は下がる。外したら減点される。総合得点制というわけだ」
彼は薄い上品な口元を歪ませて、ヒカルに説明してやる。
説明は、ルイ・ドゥ・アルディが最も行わない行為のひとつであった。
彼を理解できないのであれば、それまでであった。最も、理解できるものは数少なかったが。彼を理解してもらうために彼が説明をするというのは愚の骨頂であるとルイ・ドゥ・アルディは考えているから。
ヒカルはそれで納得した。
彼が勝者とされたのは、最初にヒカルを見つけたからではなく、彼女がどの場所にいるのか、
わかっていたからだ。
見られていた、と思うとヒカルの頬が熱くなってくる。
自分のあの心の動きを、ルイは遠目であったとしても、察知していたことだろう。
何を思い、何を憂え、何を歎いていたのか・・・全部わかっていたというのか。
「私、少しも気がつかなかった・・」
「当然だろう。すぐに外に出てしまったのだから」
面白くなさそうに、金髪の星辰の子は呟き、腕を組み直す。

彼は、彼女がどこにいるのか、どう行動しているのか、すべて承知していたということなのか。
これが逆であれば、ヒカルには到底つとまらない。
彼女なら、どのように行動するのか。ヒカルなら・・・どこに逃げるのか。
ルイなら、わかっているのだ。ヒカルの思考も、ヒカルの物思いも、すべて知っている。

■20

よく知る路に入ってきた。

全身が緊張していたが、見える景色ひとつで、解きほぐされてくるような気がする。
ヒカルは嬰がれたままであった。
涙を流すのは、ルイ・ドゥ・アルディの前ではしてはいけないことだと思った。少なくとも、自分のことを憐れんで涙することは、彼の前ではやってはいけないことなのだと認識している。

彼女は、望んでここにいるのだ。
ルイが何を希望して、何を拒絶して生きてきたのか、ヒカルは全部を知ることがない。
皆に、情報を制限されているのだと思う一方で、自分は囲われた情報という檻の中で安穏としているのだと感じる。
それを打破しようと思うのではなく、なぜ、自分はこの場所であってはならない存在なのだということを感じる。

彼はずっと外を見つめて、こちらに顔を向けようとしていない。
ヒカルはルイの表情が見えなくて、不安になる。自分のことについてはまったく興味を示さないルイが、いくら遊興だとはいえども、ヒカルのことを探し出すとは思えなかったのだ。
彼はどこまでも冷淡で、どこまでもヒカルと交わらない存在であるのだといつも思っていた。
しかし、ヒカルのことを目の端に入れておいてくれたと知るだけで、ヒカルはそれだけで胸が詰まって言葉が出てこない。
彼女と彼には、きょうだいがいない。
シャルルはルイにヒカルを紹介したときに「妹として遇するように」と言ったが、ルイは少しも彼女のことを家族と認めていない。冷たい拒絶を続けているルイをヒカルのことを、彼はいつも愚かしい娘だと言う。その通りだ。鈍くて愚かにならなければ、彼女は生きていけない。

「それなら、これはルイの勝利の花ね」
優しい輪郭の花片を詰め込んだ束を眺めながらヒカルは言う。
「オレがヒカルを追いかけるのは、これが最初で最後だ」
彼は低い声で言った。

間もなく、アルディ家に到着する。そうすれば彼はまた別棟に籠もるかミシェルの用意する場所に身を隠してしまうだろう。彼はどこからでもアクセスできる通信網を確保しており、功績が認められて様々な研究機関から招かれていると聞く。その若さで、既に自分の存在を示し続けているルイ・ドゥ・アルディのことを、皆が星辰の子と呼んで尊崇の眼差しを向ける。しかし、ルイがそれを聞いて満足することはないのだ、と思った。
彼は常に完璧で、完璧であることに慢心していない。更に次の完璧に向かっている。
ヒカルとは正反対だ、と思った。今を生きることに精一杯で、少しも周囲が見えていなかった彼女のことを、彼はもっと蔑んでも仕方の無い状況だと言える。でも、ルイは何も言わない。

「最初で最後」
その宣言が覆されることはないのだろうな、と思った。
「そうだ」
彼は平坦な口調で言った。もう、そのことには興味がないという風情だ。
「それなら」
ヒカルは俯きながら、言う。
「それなら・・・私がルイを追いかけるね」
それを聞くとルイの青灰色の瞳がこちらを向いた。先ほどまでずっと外を向いていた彼が、こちらに視線を向けたので、ヒカルはどきり、と胸を音鳴らせて茶の目を見開いた。
彼の目元は少し朱いような気がするが、それは桃の花の反射なのか、車内の光の加減なのか判別できなかった。
しかし、彼は明らかに、ヒカルの今の言葉に何かを思ってこちらに興味を向けたのだ。彼女の何が、彼を動かしたのかわからない。ヒカルは慌てる。こういうやり取り・・・特に、ルイとの会話が往復することはほとんどなかったので、次に何を話して良いのか、頭の中が白くなって声にならなかった。
どうやって言葉を出していたのだろうかと考えてしまう。自分の些細な言葉が彼の誇りを傷つけてしまったのだろうか、と思うと、ヒカルは狼狽えて視線を彷徨わせた。
「もう一度」
彼は確かに聞こえていたはずなのに、彼女に向かって繰り返すことを命じた。
「え？」
「もう一度、言え」
命令しているのに、懇願に聞こえる。自分は、それほど大それたことを言ってしまったのかと思うとヒカルの額には汗が浮かぶ。まだ肌寒い季節だというのに。
「あの、私・・・」
「言えよ」
ルイが彼女の方に向かって体を傾ける。息を呑むほど美しい彼の顔が近付いて来て、ヒカルは背を反らした。これほど近くに寄ることはなく、ただ、気圧されてしまう。
「・・・私が・・・ルイを追いかける・・・」
同じ様に繰り返すことはできなかった。常に冷涼としている物静かな貴公子が、瞳の縁を赤くして、ヒカルににじり寄っているのだ。ルイは本当はとても激しい人間だ。アルディ家の者は、同じだ。けれども、ルイは遺伝子操作されて生まれて来たこととは別に、彼の魂はアルディ家そのものだと思う程に純粋培養されて育っている。誇り高く、孤独であったとしても欲しいものは必ず手に入れる。そういう気性の激しさが見え隠れする。それを隠し通すことが、成長することなのだとシャルルや教育係のミシェルから言われているようであったが、ルイは時々・・・こうしてヒカルに怒りをぶつける。怒りというより、溜め込んでいた激しい感情の吹き出し口がヒカルに向かっているのだと思われた。

■21

彼はそれを聞くと、ヒカルに手を伸ばそうとした。細く長い、神経質そうな指先が彼女に伸びてくる。
その時に見せたルイの表情に、ヒカルは驚いて身を固くした。
なぜ、怖がっていたのだろうかと思ってしまう程に、そこには恐ろしさや冷たさは全く存在しなかった。
彼の整った顔の眉は寄せられ、唇は何かを堪えるように強く結ばれているが、それすら堪えられないように薄い唇を震わせながら少し開き、浅い呼吸を繰り返している。
初めて見る顔だった。
伶俐で、何事にも動じないルイの顔が苦悶に満ちている。

・・・頼りなく儚げで、そして何かを強く求めているルイの様子に、ヒカルは声を失う。

ルイの物憂げな綺麗な両眼が、ヒカルに向かっている。見事な黄金の髪の下にある美貌は、シャルルの若いころにとてもよく似ている。金の髪でなければ、そのものと言っても差し支えないほどに。

「ヒカル」

触れるか、触れないか。
彼の温度がヒカルと混じりそうになった瞬間。
彼女は呼吸を止めた。
目を閉じて構える事もできない。
彼の整った美しさの中に潜む、ヒカルが言葉にすることができない焔のようなものがヒカルの纏っている空気を焼く。
彼はすべてを遵える者であるのに、手をのばす。いいや、彼が手をのばせば・・・ヒカルは抗うことができないのではないのかと思ってしまう。

そんな瞬間に、車が止まったので、彼は我に返ったようですぐに腕を引いた。
アルディ家の用意する自家用車の停車にはそれほど震動を感じることはなかったが、今回ばかりは・・・慣れた車であるのに、それが大きく傾いだように感じる。
ヒカルは持っていた花束を取り落としそうになり、慌てて体制を整えた。
桃の花は、彼女の膝の上で傾斜に堪えていた。ヒカルは安堵の吐息を洩らし、そしてルイに視線を戻すが、その時には既に彼はいつものルイ・ドゥ・アルディであった。

正面を見て、何かをにらみ返すようにじっと何かを考えている。長い睫が頬の上に影を作り、彼が神から愛されて地上に降りてきた天使のように感じた。
少年から青年になろうとしている彼の横顔には、固い決心が甦っている。
彼は、この家の当主になるために、日々研鑽を積んでいる。シャルルを越えて、この家を奪うために。彼が奪われてきたものを全部、取り戻すために。

ヒカルにはそれが良いことなのかどうなのか、わからない。
ルイが生きる目標を持っていることを喜ぶべきなのに、彼の行く方向が取り返しのつかない路ではないのかと思ってしまう。
しかし、それはヒカルの思うところであり、彼の選択はまったく違っている。
それを咎めることができない。咎めることは、できないのだ。

「・・・オレが、怖いか」
彼は小さな声でそう言った。シャルルとよく似た顔立ちの少年は俯いたままで言った。
ヒカルは慌てて首を横に振った。
「怖くない。怖くなんか、ない」
なぜ、彼がそんなことを言い出すのか、ヒカルには全く理解できなかった。
彼が恐ろしいと思ったことはない。ただ、彼に触れてはいけない気がするから、彼に近寄れないのだ。でも、彼はこの屋敷の中で、年齢も近い。
彼女には家に招くような友達はいない。
アルディ家が借宿であることをヒカルは忘れたことはなかった。
学友を呼べと言われたけれども、必要ないと言い続けた。
東洋人の彼女が、フランスでも屈指の名門の家に住み、そして贅沢を浴びるように暮らしていると言われて困るのはヒカルではなくシャルルやルイなのだから。
だから、年頃の少女が好むことをヒカルはいつも放棄している。
その彼女が、催し事に招かれてひとり心細い思いをしていたのに、ルイが付き添ってくれた。それは彼にとっては本意ではないことかもしれないけれども、ヒカルはルイがいてくれるだけで安心できた。
ヒカルは茶色の瞳で、彼を見上げた。車内に座って居るのに、彼の視線はヒカルとそれほど変わらない。足が長く、骨格がヒカルと異なっているからだ。顔が小さく、そして整っている。この国の誇るべき人物のひとりであることは間違いのない事実であった。
そして、彼はそれを自覚している。それでいながら慢心せずにひたすら努力している。それを人に見せていないだけだ。彼は、常に心を配っている。
どう在るべきなのかいつも考えている。
その彼に恐ろしいかと言われて、ヒカルは締め付けられるような全身の痛みを感じる。
異質な存在なのは、ヒカルの方だ。彼女の方こそ、忌み嫌われても仕方が無い存在なのに、ルイはヒカルに自分が怖いのかと訊く。いつまでも変わらないでいられるとは思わない。

彼女もいつかは・・・ここを出て行くことになるだろう。でも、いましばし、この家に居たい。
桃の花がそう思わせるのだろうか。魔を祓う役割なのに、邪な願いは祓ってくれないのか。
退魔の効果があるといわれている桃の花を前に、ヒカルは胸が詰まった。彼にそう言わせているのは自分なのだ、とわかっていたから。
■22

普段は決して停車の揺れなどは気にすることはなかったのに。
ヒカル・クロスは、話の途中で到着してしまったことを残念に思ってしまう。
シャルルに用意してもらった桃華の衣装は彼女の肌を淡く美しく見せているのに、彼女の顔は浮き立つ表情で満ちることはなかった。
ルイと一緒にいると、なぜか、苦しくなる。
惨めになるのではなく、ただ、もの悲しくなるのはなぜなのだろう。
彼に感じるのは確信ではなく、いつも「そうなのかもしれない」という疑問ばかりであった。しかし、ルイはいつもヒカルに対して確信しか持っていないようである。
この違いは何なのか。何なのであろうか。
それを考える余裕をルイは与えてくれない。
彼はいつも拒絶しているが、今日は少し、何かが違う。
そう思ったのに・・・もう、この空間は終わってしまう。
ドアが開き、それがヒカル・クロスの側から開かれたので、ルイはこのまま降車せずに別の場所に行ってしまうことを知った。彼女を送り届ける義務は果たすが、車から降りて彼女の手を取りアルディ家の屋敷の中まで出て行くつもりはないということのようだ。決して彼女を尊崇しているわけでもなく、誰かが見ていなければ・・・彼は彼女を出先のように紳士然として取り扱うことはないのだと知って、ヒカルはまた言葉を失ってしまう。
ヒカルはわかっていた。彼に、優しくされたいのだ。
だから、自分は惑っている。
そんなヒカルに対して、ルイは同調することはない。
憐れむこともない。
彼は、ヒカルのような生き方をしない。
だから。
ルイはいつもヒカルに冷然としている。

扉を開くと車内の暖房が風になっていく。ヒカルの頬に冷気が入り込んで、そして風と一緒に手元の華の匂いや生気が奪われていくような気がした。
「行け」
彼は言った。
華の精霊が、ヒカルにそう告げているのかもしれないと思ってしまう。
「あの・・・」

ヒカルはやはり声にならない。このまま、彼をどこかに行かせてしまうのが、いけないことのように思えた。いいや、違う。
ルイを行かせたくないのだ。
自分が引き留めようとするのなら、彼は逃げてしまう。
ヒカルは自分の中にある問答に目を向ける余裕はなかった。
ルイが顎を上げてヒカルに消えろと無言で指示している。
彼女は遵うしかなかった。
彼は、星辰の子だ。誰も彼に逆らえない。

ヒカルは、自分の非力さを悔やんだ。ルイといつか距離を近くすることができると思っていた。
だから、今日の出来事はとても嬉しかった。
それが正直な気持ちであった。
彼は、いくらそれが周囲への目があってのことだという理由からでもヒカルを丁寧に扱った。
それから・・彼は、ヒカルを真っ先に見つけた。
会場から逃げ出して、自分の世界に閉じこもっていたのに、彼はそれを責めることもせずにいてくれた。

ヒカルはアルディ家の者ではない。
それを寂しく思うのに、そうではない振る舞いをした時に、それを理由にしてしまっていた。だから、ルイは何も言わない。
・・・忠告するのは、相手がそれを聞き入れるからであり、そのことによって忠告した本人に応えることが聞き入れた証拠になる。
けれども、ヒカルにはそれは求められなかった。

・・・ルイに期待されていないと感じると、途端に萎れてしまう自分自身が何とも脆弱すぎて、心が砕け散ってしまいそうになってしまう。

自分がそれほどまでに失望するのは、彼に期待しているからだ。
彼女を理解してくれていると思いたかった。自分では、何も努力していないのに。
だから、彼女は降車を促されて酷く狼狽しているのだ。ひとりで行けと言われているから。
「あの、ルイは・・・？降りないの？」
わかりきっていることなのに、言ってしまう。
「立ち寄り先がある」
彼は既に前を向いていた。
ヒカルが体を捻り脚を外に向けた時にかえられた言葉は既に冷たく素っ気ない。
いつもの彼の声であった。
「戻ってくる・・・？」

「ここはオレの戻ってくるところではない」
彼の言葉に、彼のすべてが含まれていると思われた。
まだ年若い彼が、そう言い切ってしまえるだけの絶望を、彼女が与えているのだと思うと戻って来て欲しいとそれ以上言えなくなってしまった。
彼女は途切れがちに言う。
「待っているから。ルイを、待っているから」
■23

降車するのではなかった、と思った。
ルイ・ドゥ・アルディがどれほどいやな顔をしても、彼が外に出てヒカルの手を取り、降車を促すまで動かないでいれば良かった、と思った。
そうしなければ、彼は行ってしまう。
彼が唯一逆らえないのが、アルディ家の命令だけだ。
しかも、当主からの直々の命令のみが、彼を支配する。彼はすべてを遵える子という名前を持っているのに、たったひとりだけ、彼が従属させることができない人物がいる。それがシャルル・ドゥ・アルディだ。
父として越えられないということではなく、彼がアルディ家の頂点に君臨するからルイは敢えて抗おうとしているのだ、と主張し続けているのだろうと思われた。もっと深いところで、彼らはヒカルの目に見えない速度で闘い続けているが、それを決してやめることはしないし、諦めることなどはまったく考えていないようだった。

ヒカルは哀しい顔をした。本当に哀しかった。
・・・彼が外出をして気を紛らわせる姿をヒカルは見ることはないのだと思った。
なぜなら、ヒカルがルイといればルイは決して安らぐことはないのだとわかっているから。
何度も、何度も、それを実感するような場面に遭遇した。
だからヒカルは声を限りに言った。それが正しいことなのかどうなのかはわからない。
でも、言った。

「ルイ。ルイの場所は、ここだから・・・。
ないと言うのであれば、ここに作ろう。ルイの場所を、作ろう」
ヒカルの声は聞こえていたのかどうなのか、わからなかった。
ルイはただ前を向いて、彼女の降車を確認すると、どこか別の場所を運転手に指示しだした。
どこを指定しているのか、彼女には聞こえなかった。けれども、運転手が聞き返すこともなかったところを見ると、来訪履歴が残っている場所なのだろう。
・・・どこが、彼の帰る場所なのだろう。
ヒカルの見送りをしないままに発車させようとしているルイに、
ヒカルは反射的に腕を動かした。

彼が急にこちらを向いて、ヒカルに投げて寄越したものがあるからだ。
「ヒカル」
彼が、ヒカルに向かって桃の花束を投げて寄越したので、彼女は腕を開き、自分と上着と同じ色をした塊を受け取るために下を向いた僅かな瞬間。
・・・ルイは既に扉を閉めろと命じ終わっていた。
彼女の目の前で、申し訳なさそうに目礼をした運転手が扉を閉めた。
この家では、ヒカル・クロスとルイの命令権には優劣があり、順序が存在する。
ヒカルはこの家ではあくまでも滞在者でしかないし、ルイはシャルル・ドゥ・アルディの唯一の息子なのだ。
シャルルとミシェルの父、つまりルイの祖父は多くの弟と妹を持っており、更に彼らの子がアルディ家の頂上を狙っていたり、影響が強い者も多く存在することはヒカルも知るところであった。
その中で最もアルディ家の当主に相応しいとされておりながら、まだ後継者として認められていないものの、ルイは間違いなくアルディ家の御曹司であり、星辰の子と言われて社交界で熱烈な信奉者の多い存在であった。
その彼が帰るところはここではないのだ、と言う。将来、ここが彼の拠点となることはかなりの確率で実現すると言うのに。
彼は、それでもこの場所は違うと言う。
それなら・・・彼はここを帰る場所にすれば良いのに、と思った。それはまったく自分の独りよがりな願いそのものであったけれども。
いつまでも、このままで居られないことはわかっていた。
しかし、どうしても彼には戻って来て欲しかった。
・・・きっと、自分がここを去ったら彼はもう少し長い時間、この館に居ることを選んだかもしれない。
しかし、シャルルとの溝が埋まっていない。ある日突然、和解するというのは考えられないことであった。
それに、教育係のミシェルとの方が、彼は過ごす時間が長かった。本当の父子であるシャルルとルイの時間は、数えるほどの瞬間しか存在しない。
「ルイ！」
ヒカルは車に近寄った。よく磨き込まれた車体の中で、ルイが腕を組んで、綺麗な指先をこちらに見せていた。
彼は、完璧だ。
改めてそう思った。こういう仕草ひとつとっても、芸術品のように滑らかで厳かだ。
けれども、どこか虚無を抱えている彼の横顔を見て、ヒカルは腕の中の桃の花束とともに、彼に駆け寄る。
危ない、と運転手がウインドウを開けて、離れるように声をかけたが、ヒカルはそれでも彼に向かって顔を屈めた。

「このお花、飾っておくわね。萎れたら、かわいそうだから。ルイに見て欲しくて咲いている花だから、きっと帰ってきて」
しかし、彼からの返事はなかった。
彼女が車から離れると、すぐに去って行ってしまった。
見えなくなるまで彼女が佇んでいると、寒風がルイを追いかけるかのように、急にヒカルの足元を駆け抜けて行ったので、彼女は体を竦めた。
その時に、手持ちの花束から僅かに桃の甘い芳香が漂ってきて、ヒカルはようやく自分の胸元に視線を向ける。

■24

そこにあるのはルイの為に贈られた桃の花であった。退魔の効果があると言われている。それをヒカルに投げつけたルイは、ヒカルに去れと言っているのかもしれない、と思った。ヒカルは胸にそれを埋めるように押し当てた。そうすれば、彼の心が少しはわかるようになるのかもしれないという呪いめいた仕草出会ったが、ヒカルは意識していない。
祈りながら何かをするというのは、そのものに自分の願望が表れるものなのだと聞いたことがあった。言葉もそうだ。自分の発した言葉には責任を持たなければならない。そうシャルルに教えられて、ヒカルは言葉を選ぶようになった。計算するのではない。人に告げる言葉というものがいかに重たいものであるのかを、常日頃忘れないようにして生きる、という意味だ。
それでも、ルイに捧げる言葉というものは、いつも突発的で、うまく説明できないことが多かった。なぜなのだろうか、と思う。かけがえのない大事な存在であることには変わらないのに、彼の前では、言葉を出すことに躊躇いを感じている。
それは、自分が彼の心がわからないからなのだ、と改めて思った。
彼がここまで一緒に来てくれたこと感謝することを後回しにして、彼女はルイが素気なく彼女を取り扱ったと歎いている。自分はいつから、そんな風にして贅沢に慣れてしまったのだろうか、と思った。

せっかく、シャルルが用意してくれた豪奢な衣装もヒカルの心を慰めることはなかった。防寒を考慮してあるとはいえ、寒空の下で立ち尽くしていれば足元から冷え上がるものを意識しないではいられなかった。
このままでは、花が本当に萎れてしまう、と思った。寒さに強い種であることは知っていたが、暖かい室内でどれほどの処置をすれば長く咲いていられるのだろうかと思った。切り束ねられたままで放置していれば、どちらにしてもすぐに花は命を終えてしまう。
いつ戻るかわからないルイのためには、できるだけ長持ちさせてやりたいと思った。
この花は、ルイに捧げられたものだ。ヒカルは、ただ預かっただけ。
気を取り直して、ヒカルは迎えに出迎えた者たちには自分で持ち運ぶから、と言ってそのまま花束を持って歩く。上着は部屋で脱げば良いからそのままにしておいて欲しいと頼む。

今、誰かに何かを預けたり託したりする気持ちになれなかった。
彼女はどこまで行っても、ルイとはわかり合えないのだろうか。
そう思った時。彼女は、自分の胸元にある桃の花束に視線を向ける。
焦げ茶色の枝に可憐な花を付けているそれらは、この時のために用意されたものであることを知らせていた。密集して花を咲かせているそれらは観賞用であり、こうして近くで眺めるように整えられた花だと思った。
それなら尚更、ルイが足を止めて見るに足りるほどの美しい花束を自分が持っていてはいけないと思ってしまう。
この家の者は薔薇を所縁の花として愛でる傾向が強いが、桃の花はそれにも劣らないほどに美しく透明感があり、そしてどこか希望を思わせる花であるのだ、と思う。
淡く愛々しい花であったが、その葉は落とされている。乾燥していない葉は青酸化合物を含むからだ。
ルイが片手で簡単に投げつけて寄越したが、ヒカルには両手で抱えなければ形を崩してしまうほどに重みがあった。それは、ルイとヒカルの違いなのだと思った。
彼は何事にも完璧であまり苦闘している様子を見せることはない。しかし、それは何事にも彼にとっては容易いことであるからではなく、苦悶している様を人に見せることを避けているからなのだとヒカルは知っている。
だから。
「余興だ」と彼は言ったけれども。

彼がヒカルを探すのは、簡単であったはずはない。彼に何も告げずに、彼女は外に出てしまったのだから。
彼女はあの場所にあって、自分の振る舞いについて承知していたのに、それでも逃げ出してしまった。
・・・自分が、異端者であることを思い知らされるばかりであったからだ。
どれほどシャルルがヒカルを大事に扱ってくれていても、彼が傍に居なくて、そして彼の行き届かない場所ではヒカルを見る眼差しはとても冷たいものしか存在しない。
彼がヒカルを探すのは、簡単であったはずはない。彼に何も告げずに、彼女は外に出てしまったのだから。
彼女はあの場所にあって、自分の振る舞いについて承知していたのに、それでも逃げ出してしまった。
・・・自分が、異端者であることを思い知らされるばかりであったからだ。
どれほどシャルルがヒカルを大事に扱ってくれていても。
彼が傍に居なくて、そして彼の行き届かない場所ではヒカルを見る眼差しはとても冷たいものしか存在しない。
他国籍の少女が、シャルル・ドゥ・アルディの威厳を利用して敬われているとすれば、周囲は気に入らないどころではないだろう。

口さがない者の言葉に耳を傾ける必要は無いのだ、とシャルルは言う。
けれども、ルイはそうではないと考えている。彼にはまったく意味の無いものであるかもしれないが、ルイの立場で出席しなければならない会合については、彼は時間を取るようにしているし、ヒカルの知らないところでは・・・彼が何かに出席するたびに彼の信奉者が増えるような状況であった。
ルイの目的はひとつしかない。アルディ家の当主になることだ。彼はそのために生まれて来た。

■25

胸の中で、乾燥した木肌で包まれた枝が桃の花を振り落とそうとする。もともとはひとつの木から生まれたものなのに、枝と花は各々にだけ与えられた役割を果たそうとしていた。
その様が、とても・・この家の者たちに重なるものが多かったので、ヒカルはますます、腕に力を入れる。
この花を、ルイが決して道端に捨てるようなことをしなかったことに感謝した。
そして、切なさで胸が押し潰されそうな重さと痛みを感じながらも、それでも桃の花に囁く。その声が、きっとルイに届くと信じながら。
そして。
彼女はもうひとつ、気がついていた。
その花束から、ひと枝、抜き取られていたことに。
ヒカルの目の前で車の扉が閉められる時に、ルイに少し間があったことを思い出した。

枝の数を知っていたわけではない。しかし、散乱しないように縛められた束が、僅かに緩いのだ。
彼女はしばし立ち止まり、そして無言になった。
それが、何を意味しているのか、理解しようとして桃の花を見続ける。
日本では、桃の節句として愛おしまれている花であった。
そして、もし、両親が生きているのであれば、きっとそうしたであろうというようなことをアルディ家の中で繰り返されて、そしてヒカルは自分の厄災を祓う者がもう存在しないのだと歎いてばかりいた。
けれども。
ルイは持ち帰らないで、それをヒカルに投げ寄越した。
でも、無視しているわけではない。疎んじているわけではない。
その代わりに・・・彼はひと枝だけ持ち帰った。
そして、彼の傍に置くことを許したのだろうか。それとも、許さないから、持ち帰ったのだろうか。
・・・どちらにしても、彼は帰ってくる。
そう思った。

帰る場所はここではない、と言い切った彼であったけれども。
もともと一束であった花を持ち帰ることについて、彼は意味の無いことだとしていないように感じる。なぜなら、アルディ家の花たちは、外に持ち出されることもなかったし、彼の行為のように、分配されることもなかったから。
この家の花は皆、分けることを許可されていない。それはアルディ家の者も同じであった。
一輪だけ持ち去ることを許されているのはヒカルだけであった。
最初の、最高の状態の薔薇をシャルルの元に摘んでいくことを許されているのは、アルディ家の中だけで、ヒカルだけだ。ルイにはそれは許可されていない。
同じ様に、この敷地に持ち込まれたものは、どんな花でも分配してはいけないとされていた。それなのに、彼は・・・花を分けてヒカルに投げた。それが知られれば、ルイは咎められることも、わかっていながら。

だから、これは彼からのメッセージなのだと思った。
決して、独りよがりではないと思う。いいや、そう思いたい。

「ルイ」
ヒカルは呟いた。魔を祓う花が、彼の心に張っている愁いという名前の膜を振り払ってくれるように、と祈った。

祈りは誰かのためにするものだよ、という声が聞こえる。

それは、シャルルでもなく、ミシェルでもなく・・・深く愛おしむような低い男性の声に聞こえた。ヒカルの願望かもしれないけれども。
それは、確かに・・・・彼女の節句を喜ぶ父の声であるように思えた。

ヒカルは顔を上げると、足速に温室に向かった。まずは、この花たちに栄養と水を遣り、刺激を取り除いてやらなければならない。
シャルルに教わった花の保存方法が、ここで役に立った。

・・・捨てろと言うのであれば彼はヒカルに命令しないで他のものに言う。そうした方が確実に実行できるからだ。

彼女は胸に抱いた花を更に抱きしめた。
観桃会に、彼が来てくれて・・・そして、彼女を見つけ出し、その褒賞を彼女に寄越してくれた。彼は「ヒカルの都合の良い考え方だな」と言って冷笑するだろう。それでも良い、と思った。
それでも良いから、彼がヒカルに与えてくれた大事な花を枯らしてはいけないと思った。
枝ごと持ち帰ったので、きっと繊細な薔薇よりもずっと日持ちするだろう。ルイの住む別邸の居

間はガラス張りで、長い時間日照を確保できる。そこなら、温室と同じ効果があり、きっと桃花たちも長く生きられるだろう。
切り落とさなければ、もっと長く生きられたかもしれない。でも、ここに来て・・・アルディ家の中でもう少しだけ命を永らえて欲しいと思った。
それはまさしく、自分自身そのものであると思ったからだ。
薔薇にはなれない。でも、薔薇の家の中で生きることを許された。
だから、それを感謝し、精一杯生きて・・・そして、この家の者たちに降りかかる哀しいことを少しでも和らげることのできる存在になるのであれば。ヒカルは、また笑顔でルイを出迎えることができると思った。彼が望んで居なくても、彼女だけは「この家はルイの場所なのだ」と言い続けたかった。

■26

・・・・今頃、泣いているのだろうか、と思った。
しかし、それは考えても確認することもないと決めていたので、彼女の泣き出しそうな顔を思い浮かんだが、すぐに消去することにした。
ヒカル・クロスはどれほど傷ついても決して涙を見せない。
それがルイを苛立たせる。何にでもすぐに従う従順な人形のようであると思っていると彼女はかなり強かであり自我が強すぎる部分がある。
しかし、またすぐに彼女の姿が浮かぶ。
彼は薄い形の良い唇を僅かに歪めた。
先ほど、出発しろと命じた運転手からは、ヒカルが追いかけてきそうな気配がして危険だと言われ、それでも従えと言うと今度はヒカルが泣きそうだった、と報告する。
この家の誰もが、ヒカルを主人か同等と看做していることが苛立たしい。
次の主人が誰であるか承知しているのに、それでもヒカルを気遣う周囲は、ルイの不興が自分の不利益になることも理解している。その上で、ルイに苦言を呈すのだ。
主従関係を簡単に破ってしまうヒカルのことを慕っている者も多いが、ルイをはじめとする親族の中には良い顔をしない者も多い。彼女が簡単に踏み越えてしまうもののうちの大半は、長い年月をかけて人々が築き上げてきたものであるからだ。
アルディ家の後継者について疑義があると言われて以来、それが解決しないままになっているのはヒカル・クロスの存在もあるのだと思わざるを得ないと口にするものが増えてきた。
つまり、この家の滞在者でしかないひとりの少女が、この家の行く末に影響しかねない存在なのだと認める者が出てきたということである。
自分と同じ、誰かの意思が働いて生まれて来たというだけで、何故これほどまでに違う扱いを受けなければならないのかまったく賛同しかねる事態である。

・・・これから教育係のミシェルに報告を兼ねた打ち合わせをすると伝えてあった。
ミシェルのことだから、この状況に居合わせていたのであれば、冷笑を浮かべてルイがまたヒカルという小石程度の存在に気を取られているのだと言うのだろう。
ヒカルの問題ではなく、意識しているルイの問題なのだとミシェルは言う。しかし、彼がどれほど無視したり、冷淡に扱ったりしてもヒカルは次に会うときにはまったく忘れてしまったかのように振る舞う。それが苛立たしい。近寄らなければそれだけで良い話で、互いに距離がある状態のほうが彼女も毎回消沈するような顔をして別れることもないのだろうに、と思う。
車内に残った、花の香りがルイの何かを奪っていく。そうだ。ヒカルはいつもルイから何掠め取るばかりだ。惨めな感情しか持ち合わせておらず、それでいて決して屈しない。どれほど萎れても、結局は自分の思い通りにしてしまい、自分の納得のいくような考え方をして事実を歪曲さ

せてしまう。彼女はまったく矮小でルイはそれにつき合う理由も義理もなかった。
彼は長い脚を組んで、そして静かに走り出した車の中で、背凭れに体を預けた。彼女の降車を助けなかったのは、そのまま館に残ろうと言い出すに違いないと思ったからだ。それは的中して、ヒカルはまた自分の話を通そうとしている。
彼の帰る場所はあそこではない、と言ったことに動揺していた。ルイがそう決めたのだから、そうなのだ。
彼は見事な金髪の下で、青灰色の上品な双眸をゆっくりと瞬かせた。シャルル・ドゥ・アルディの若い頃によく似ていると言われるが、彼とシャルルは髪の色が違うし、遺伝子操作されてきたルイにはシャルルが持っていないものも内含している。
同時に、シャルルが持っているものでルイが持っていないものがある。それがヒカル・クロスだ。いつか、あの娘がルイの配偶者候補になることはわかりきっていることだった。たまに優しくしてやれと言われるが、ルイにはそんなつもりはなかった。他の子女にはできることであっても、ヒカルにこれ以上ルイの尊厳を奪われるつもりなはない。
彼女がどう思ったとしても、ルイにはただ邪魔な存在である。これほどあからさまに彼女のことを避けているというのに、ヒカルはまったく気にしていない。いや、幾度も変わらずに接近しては自ら沈んで引き下がる。それを幾年も繰り返しているのに、少しも学習しない。
彼女の無頓着というか、無感覚の部分についてはルイは呆れるばかりであったが、彼女の状況からすると、そうしなければうまく生きていけないという本能というか、生存欲求がそうさせるのだろうかと思った。
しかし、彼女の母親もなかなかに強かな人物であったのだから、その娘のヒカルは気質を受け継いでいたとしても不思議はない。
・・・ルイはそういう感情を抑制することができるのに、ヒカルはこれほど技術の粋を集められた中で生まれた命であるというのに、自然のままに生まれて来たのかと思うと・・・彼との違いについて、彼女の方がより優れていると無言でシャルルが主張しているようで、更に彼女には苛立ちが剝き出しになってしまう。

他の者には演じることができる優しさというものを、ヒカルには見せることはできなかった。あの家で、円滑に過ごすためにはヒカルの心を捉えておくことが肝心であることはわかっていることだ。ミシェルにも何度も忠告され、最後には「命令でないと傾聴しないのか」とまで言われた。しかし、ルイはヒカルのことになると容赦がなくなってしまう。思わずしてそうなってしまうというより、必要が無いと感じるのだ。

なぜ、あの娘だけが特別扱いなのか。理解に苦しむ。
そして、己の感情ににも。
離れて暮らしていれば少しは許容できるかと思った。しかし、こうして都合で顔を合わせると、その年月も距離もまったく無視してヒカルはいつもの通り、少し昂揚しすぎだと眉を顰めたくなるほど頬を赤くしてルイにしきりに近付こうとする。他の者よりも、考えていることが更にはっ

きりとわかる部分が、こういうところなのだ。ルイと家族になりたいと言い放つ彼女は、その意味がわかっていない。彼と彼女が家族になることは永遠にないのだ。ルイはヒカルを対等な人間と思えなかったし、ヒカルも別の意味でルイを対等と見ていないのだから。そもそも、家族という定義が彼と彼女では違っている。

■27

ルイは溜め息をついた。彼女のことを考えることはやめると自分で宣言したのに、その通りにプログラムが走らない。計画通りにいかないことに対しては容赦が無いルイであったが、何より自分の中の感覚が厄介なのだと思わざるを得なかった。彼には感情がないようにヒカルは言うが、そうではない。ただ自分の中で抑制しているだけで、ヒカルが放棄している努力研鑽のひとつであった。他者に簡単に感情を曝け出してはアルディ家の当主などは務まらない。

来た路を戻り、そして分岐する場所から違う路に入る。そのまま少し走らせればアルディの館は見えなくなるくらい、距離が空いた時に。
ようやく、ルイは手元に置いたひと枝に目を遣った。桃の枝は桜と違っていて、より寒さに耐えられるようになっている。光をふんだんに浴びて花をたくさん付けた枝であった。ヒカルはこれらの様に感歎していたが、ルイは心の中で嘲笑していた。
この枝に密集するように咲いた桃の花は、観賞用に整えられたものだ。実を付けることもなく、枯れてしまえば捨てられ、接ぎ木もされない。そしてこれほどまでに花が密接していれば次の開花の季節まで持ちこたえたとしても、花を間引きしなければ生きられない。
まるで、ルイやヒカルの命のようではないか。誰かの意図がそこで作用しているのだから。それらを見て感激の声を上げるヒカルは実に滑稽だった。しかし、淡い紅色の衣装に身を包んで、桃の木の下で物思いに耽る彼女を見て、興味を注ぐ者たちが少なからず存在したことをルイは見逃さなかった。
あの館で早々に退出しなければ、ヒカルは好奇の眼差しの中でまた困り果てて余計な行動を起こしてしまうのだろうと容易に想像できる。
彼女の姿を最初に見つけたのがルイであったのではない。最初から・・・彼女がどこにいるのか知っていたに過ぎない。
ひとり同伴の者から離れて歩き回る者といえばヒカルしかいないのだから。あの場所に集う者たちは、ひとりで行動するように教育されていなかった。ルイと同じ様に。この国で将来は要職に就く者たちである。能力が劣っているかどうかということを見極める場所ではなく、顔を合わせて見知りおくことが必要とされていた。それなのに、ヒカルはその場所を放棄してひとり庭に出てしまうという暴挙に出た。
最初は放置しておこうと思っていたが、冷え込んできたことと、館の中でだけ自由に過ごすことを許された者たちが、相手を一番に探し出せた者を勝者として・・・桃の花を捧げる名誉を与え

ると言ったものだから、周囲が沸き立ちはじめたのを知り、ルイは面倒なことになったと思ったのだ。
桃の花言葉は様々に存在するが、そこで紹介されたものはたったひとつだけであった。
「私はあなたのとりこです」
つまり、皆の面前で自分の意中の相手に想いを告げ、告げられた相手はそれを受け取らなければならないという一方的かつ非合理的な罰を受けなければならないのだ。誰もが、ルイに目を遣った。確かに、彼はその中の幾人かに自分を恋人にして欲しいと懇願されてまったく相手にしなかったという経緯があった。
必要があって恋愛の真似事をするのであれば、それなりに収穫がなければならない。しかし、そのような場所での余興の上で誰かの思いを受け止め、微笑み、そして手を取るということに意味がないと感じたルイは、やむなく、そういった関係を気にしないでいられる相手としてヒカルを選んだ、というわけだ。彼女はこれらの経緯を知らない。ずっと外に居たからだ。
そして、皆が帰りがけにヒカルに対して羨望の眼差しを向けていたことも、彼女は気がつかないでいたことだろう。桃の花束を受け取った理由も、その意味も、鈍感な彼女は察知することはできないままであった。
その花を、ルイが受け取るべきだと主張したものだから、彼の憤慨は極限に達した。

冷たい扱いだと周囲に言われても、彼はヒカルに徹底して同じ態度しか取らない。
彼女は愛翫動物だ。愛でられていると本人は感じても、それは蔑まれて平等ではないことを受け入れているだけにすぎない。だから、彼女の我が侭は彼女の願う通りに叶うことが多いが、それはヒカルが誰とも対等ではないからだ。
それなのに。甘やかされて拒絶されたことのない無知な贖罪の娘は、それが自分の生き様であり、真理であると勘違いしたまま生きている。少しも疑問に思わないで。

彼女は、あの花の言葉を知ったのなら。
自分がルイ・ドゥ・アルディに対して求愛しているのと同義の行為をしていたことに気がつくだろう。
その時になって、ようやく知るのだ。なぜ、ルイが嫌悪した顔でいたのかを。
心を絡め取られているのはルイの方だとヒカルは傲然と言ったのだ。
そして、帰ってこいと命令する。彼は星辰の子と呼ばれて、すべてを遵える立場にある人間であるというのに、自分に遵えと光の娘は言う。永遠の光という名前の少女は、何も知らないのに、彼に重さを感じさせ、苦しみを与える。
ヒカルに桃の花を捧げられて、それはルイのための花だからと言われた時。
彼女をそのまま車に引き込んで、そのままミシェルの待っていることも無視して・・・彼女が驚き涙を流してやめてくれと懇願したとしても、彼の激情を浴びせてしまおうか、とさえ思った。
ミシェルが面白おかしくいうところの・・・かっとなって我を忘れそうになった、ということなのだろう。ルイには経験がないことであったが、他の人間にはそういった瞬間が訪れるらしい。

しかし・・・次からは、「らしい」という曖昧な言い方はもう使えないと思った。彼は確かに、ヒカルによって経験させられたからだ。彼女は掠め取るのと同じくらい、他者に不快なものを残していく。

■28

何もかもが気に入らなかった。
そして、彼女に自分が花束を突き返したことも、ルイは苛立っていた。自分自身に。これも彼の誇りを酷く傷つけていた。

・・・彼女は自分の中のものを揺らしていく。
だから、彼は彼女と同じ場所で時間を過ごさない。ヒカルによって乱されるのは迷惑この上ないことで、それ以上の意図はない。しかし、自分が何を感じ、何を見聞きしてきたのかをミシェルに報告することになっているルイは今回のことをどのように報告するのか、事項を選別し始めていた。全部を語るつもりはない。そうすれば、ミシェルはまた嘲ら笑って、だからルイは後継者になれないのだと諫めるのだろうから。彼は確かにアルディ家の頂点に君臨するために生まれたが、誰かの思い通りになるために行動しているわけではない。
いつか、必要があれば・・・ミシェルでさえも彼の敵になるのであれば、攻撃も躊躇わないで行うことができる。そして、それに備えなければいけない。

彼は深く息を吸い込んだ。
無言のままで思考に耽る。

誰にも話しかけられず、なんのストレスも感じない時間は最近では貴重になってきた。彼はひとりきりになりたいと何度も願うが、考えることは無数に存在し、彼はそれを許諾してきた。何も考えず、ヒカルのようにぼんやりとしながら桃の花を見上げる時間はルイには存在しない。

彼は理知的な青灰色の瞳で、自分の手にあったひと枝の花を改めて見つめた。今回の催しの手土産にしては何とも無骨であったが、こういうものを喜ぶ者が多いのだと学習した。ただ、それだけだ。
ひと枝だけ取り除いたのは、ミシェルへの報告であった。ルイはそう説明をすることに決めていた。自分がいつの間にか、それを抜き取って残りをヒカルに投げ渡したという描写は削除することにする。そのことについて何か言及することもない。
それで、思考を止めれば良いのに。次に考えることはたくさん存在する。そして彼は同時に様々なことを考えることができるし、ひとつのことに対する思考の処理時間も非情に短い。それなのに、繰り返しヒカルのことを考える。考えるのをやめようと思っているのに、その思考が彼に

遵わない。彼の中の、唯一の武器であるものが、彼の操作を拒む。
なぜ、これほど自分の中にあるものが自分を阻害するのか。
ルイは無表情のままで桃の花を見つめる。退魔の効果があると言われている花だ。
・・・しかしそれは実のことを指し示し、これは実を結ぶことはない。こうしているだけでもあと数時間で萎れてしまうだろう。
不老不死の象徴でもあり蟠桃と呼ばれ、花は神々の食糧となる桃の神樹は、実を結ぶまでに三千年かかると言われている。ヒカルの母国である日本では、黄泉比良坂で悪鬼を退けたとされていた。
しかし、ルイはそれほどの年月をかけてアルディ家に上りつめるつもりはなかったし、彼の命が長く続くという保証はなかった。優性の遺伝子を多く持っている彼は遺伝子操作されており、その寿命が長いという予測は立てられていない。だから、彼は早く結婚して、子を作れと言われている。すべてにおいて急かされているルイの路を阻むようなことばかりをするヒカルを滅することは得策ではないと思うからこそ放置しているだけで・・・近いうちに、彼女が決してルイに近寄らないように吶喊することも予定に入れなければならないのだろう。
しかし、彼は考えていた。
遠ざけることができないのであれば。懐に入れて、シャルルの弱点を握ってしまう方が・・・更に道程が短くなるのではないのか、と仮説を立てた。
どれほど手を振り払っても寄ってくる娘をシャルルはこよなく愛している。そのような感情は必要ではなく、次の世代に引き渡す準備をするべき立場のものが、彼の孤独を癒すためにひとりの少女を愛でている。しかし、ルイと同じようにヒカルもいつまでも幼いままではいられない。今日のように、同伴したふたりは一体どういう関係なのかと詰められる場面も増えるだろう。
どれだけひた隠しにしていても、ああして公式の場所に派遣しているからには彼女の存在を利用しようとする他家の者も増えて行く一方だ。
それに、彼女は預かり人であるからという理由も、間もなく使えなくなる。
遺伝子開示制限年齢が近付いているからだ。彼女はこのままこの国で成人すれば、自分の身体に眠る秘密を知ることになる。日本ではまだ法制の整備中であるから成人するころには一度彼女を日本に戻して時間を稼ぐ手筈をシャルルは整えるはずだ。
そして、ヒカルはやがて、シャルル・ドゥ・アルディの側面を幾つも知ることになる。その時に、アルディ家を離れて彼女の実家のクロス家に戻られては分が悪いのだ。彼女の肉体は一部でも構わないからここに保存されなければならない。
そのために・・・彼女の心をこの場所に留めておく手段は幾つか考えていた。
彼は思考に耽る。ヒカル・クロスのことを考えると苛立つと認めているのに、それでも様々な未来を考えて・・・そしてそれが終わらないうちに、ミシェルの元に到着するのだろう。

しかし。
・・・彼の頭の中で幾通りも考えている未来の中には、ヒカルとルイが各々別の路を行く場面は入っていなかった。

彼はもう一度、桃の花を見つめる。
実にならない花。操作された花の造り。そして、その花は「私はあなたのとりこ」という意味がある。

■29

ヒカルは、ルイが捧げたと考えるのだろうか。
結果的に、彼がそれをヒカルに渡して、愛を求めたことに対して、彼女は返事をするのだろうか。

自分が愛を乞う・・・ルイはひとり微笑んだ。
それは甘い痛みに痺れる喜びからくるものではなく、ただ底のない、深い昏さしかない微笑みであった。
なぜ、彼が求めなければならないのだ。求めるのは、ヒカルの方だ。ルイに愛して欲しいと懇願し、彼無しでは生きられないと言わせる。
その時に、シャルルは打ちのめされるだろう。彼が注いできたものは独りよがりで生産性のかけらもなく、その一方で彼女がもたらす利益を享受するために手元に置いていたわけなのだから。

・・・だから、今日のところは譲ってやっただけだ。

ルイは考え直した。
おそらく、ヒカルは今頃は館に入って手にした桃の花を保存するためにあれこれと調べ物をしているころだろう。
そして、それをルイからなのだと言ってシャルルにも分配するのだろうと思われた。彼女のことだ。そうやって気を回しているつもりだろうが、ルイはそんなことはしない。父であるシャルルも、ルイにそのようなことを求めてはいない。

彼女は、すべてのものを分かつものなのだろう。
花を別ち、この家の者を別つ。
それなのに、去ろうとしない。
まったく、苛立たしい娘である。
しかし。
ルイは、手の中の枝を見つめる。強く振れば花は枝から離れて落ちてしまうだろう。それくらい、脆くて儚い命が彼の手の中にあった。

けれども。
・・・彼は、そっと反対側の手で花を覆った。

ヒカルの声を思い出す。
これは、ルイのために咲いた花なのだから、と言った。
それなら。

ルイは思う。
それなら、ヒカルは誰のために咲くのか・・・

もう考えるのをやめると決めてから随分と時間が経過していたのに、彼はそのままじっと枝を見つめたままで物思いに耽っていた。
ミシェルに対する言い訳を考える一方で。
この花を永らえさせるのも悪くはない、と思い始めていた。
それから、これは気紛れなのだ、と自分の中で確認する。
ルイ・ドゥ・アルディには気紛れなどは決して存在しないと言うのに。

その花に重なったヒカルの笑顔と笑い声が、彼の思考を阻む。
彼が手にした枝は、半分以上がまだ蕾のままであった。
彼女なら、それはいのちが蕾んでいるのだ、と言うのだろう。

今日は特別だぞ、と彼は呟く。
健やかに、魔が寄ってくる隙も無いほどに愛されるようにと願う日は、ヒカルにくれてやることにした。

それから、彼は少し顔をあげる。
打ち合わせの後はアルディ家に戻るので待機しておくように、と運転手に声をかけて、それきり目を瞑り、黙り込んでしまった。
しかし、眠っているわけではない。また、思考の海に潜ることにしたからだ。
それでも。
彼の中で、ヒカルの声が響く。彼女がそう言ったわけではないから、それはルイ・ドゥ・アルディの想像だ。
それなのに、はっきりと聞こえるのは彼の何が作用しているのか。
認めたくないから、それは考えないことにする。
脚を組み直し、手に乗せた桃の枝をそっと彼の隣に並べる。そこは、先ほどまでヒカル・クロスが座っていた場所であった。

仙桃の色彩を纏った、茶色の髪の茶色の瞳の少女の声と姿で、ルイに囁く声に沈み、思考に溺れることに没頭した。
けれども。星辰の子の中で、それはずっと繰り返し再生され続けた。

・・・私はあなたのとりこ・・・

彼の掌の中で、花蕾はヒカル・クロスの声で彼にそう囁いていた。

（FIN）

君影草～muguet～2012　前編

■01

ヒカル・クロスが最初に知らせてあった戻りの予定から大幅に時間が経過していると言うのに、彼女は戻ってこなかった。
予定というのは遂行するから予定なのだ。それが守れない時には、理由がつきものである。そして、ルイ・ドゥ・アルディの予定はいつも狂うことはなかった。変更が生じたとしても、それは想定内のことで、修正というには至らない程度のことばかりであったから。
けれども、ヒカル・クロスの予定は彼とは同じにならない。
部屋を別々に取ると言い出し、ひとりでクロス邸に向かうと言い張る彼の婚約者の浅慮に溜息を漏らすことをやめようと思っていたが、彼は溜息をひとつ、漏らした。
部屋に戻り体を休めたらルイの部屋に来るように、というメッセージを彼女の部屋に置いたのだが、フロントで言付けることにした方が確実だったようだ、と内心舌打ちをしていた。
どうも、戻って来ては居るようなのだが、部屋に入らずにどこかを歩き回っているらしい。想像はついたが。

彼が遅れてこのホテルに到着したのは、予定時間より遅れていた。パリを発つときに天候不良が影響したからだ。その旨、連絡を入れようと思ったが、彼女は外出中であるという。戻ってくる時間までには到着したものの、今度はヒカルが部屋に戻っていないと聞き、彼はその間、仕事を済ませることにした。
けれども、プライベートであるので、メールチェックだけしかしない。業務上どうしても必要な場合には、各々の分野でルイが指名したものに判断を任せることにしていた。何でも把握しないと納得しない時代を経て、彼はある程度裁量権を他人に委ねることを学んだ。

・・・あの大惨事に巻き込まれてから。
彼の運命は変化した。
予定していた方向と違うベクトルになった。
けれども、求めるものはひとつであった。ヒカル・クロスとの結婚は・・・予定通りだった。

時差の影響もあるが、夜がやって来ても彼はひとり静かに耽り事に時間を費やしていた。幾時間も黙ったままでも平然としていられる彼は、それでも、時折・・・ラップトップに乗った細く長い指先の動きを止めて、外の景色に目を遣った。ここはインペリアルスイートであるから、このホテルの最高の視界なのだ、と言われていた。見下ろす苑は豊かな緑が広がり、草の匂いがここまで届きそうなほど鮮やかであった。

・・・昏くなって来たので、自動調光による間接照明が淡く灯り始めた。外の夕暮れは、ヒカルの両親が消えた海のある空を思い出させるが、それが今日の大気状態が似ているからなのだと考

えて・・・ルイはまた煙草を口に銜える。

口煩く、ヒカルが断煙を推奨するので、彼は彼女の前ではあまり煙草を吸わない。あの事故で肺を一部損壊し、器官にも炎症を負ってしまったので、昔ほどではなくなったが、彼の肉体はあの時よりもっと若々しい。それはヒカルのもたらした再生治療によるものであったが、それ以上に、彼の努力の証が現れていた。完璧な健康管理に、節制、適度な運動に筋力・骨力・視力や体温など細部に渡る調査・・・自分の身体さえ、実験観察のような扱いしかしないルイであったが、ヒカル・クロスはそれを見て、いつも哀しそうな顔をする。自分の方こそ、穿刺痕が消えない体をルイに見られるのが恥ずかしいと言って、明るい場所では彼に裸体どころか露出の多い服などを着て肌を晒すことのなくなってしまった彼女の顔を思い起こす。

一足先にヒカルが日本に到着していた。そして、今日はクロス家との会合があったはずで、終了予定時間はとうに過ぎており、話が弾んで長引くような心躍る時間ではなかったのだろうということをあわせて考えると、彼女はこの敷地のどこかで、ひとり物憂い顔で過ごしているのだろうな、と思った。
部屋に戻ることもしないで、何をしているのだろうかと思うが、それはルイも同じであった。

完全なるプライベートの時間として、彼はあらゆる仕事を処理した後、来日した。それでも急を要する案件はあったし、セキュリティ上の問題から連絡先や行動予定を逐次教えるようにというアルディ家の督促のメールに辟易して、受信拒否を行ったところであった。

忘れたわけではないのだろうが、彼女からの連絡が途絶えて、二十時間以上経過している。ヒカルの知らせてあった予定は大まかなものであったのでルイは呆れて溜息をつき、もっと詳細なものを知らせるようにと言ったところ、彼女は肩を竦めて笑い、「頻繁に連絡する」と約束したと言うのに、早速このような有様になっていたので、ルイは苦笑いも浮かばなかった。会合の最中には連絡を取ることが出来ないであろう、と配慮してこちらから連絡することもしなかったが、それにしても彼女のルイに対する扱いには溜息も漏れるというものであった。

彼は星辰の子と呼ばれているのに、誰もを遵えることができる者であるのに、ヒカルだけは彼の言うことを聞かないのだ。そして、彼女を彼はただひとりの妻とすると決めて久しかった。間もなく、それが実現する。だから、待つし待てるのだ。彼女が来日し、その話題になれば決して穏やかな話し合いにならないとわかっていながらもクロス家に赴く理由は、ルイとの結婚について報告と相談をしているのだから。

ヒカルは成人しているし、なんら問題がないが、彼女の中では大問題のようだ。やはり、納得のいく婚姻でなければ、アルディ家が監護権を取得したことによる利益搾取により、ヒカルを籠絡したのだと言い張るに違いない。法的根拠も何もなかったが、今後、彼女の細胞から遺伝子操作

したワクチン作成や、再生医療への阻みになるような不穏な話は極力避けたかった。こういう業界の噂というものは侮れない。どれだけ実績を積み検証論文を発表してもその出所が正しいものではないと知ると、すぐに倫理観や宗教的価値観を持ち出す輩が大勢存在するのは事実であった。

彼は煙草を口に銜える。そして、薄ぼんやりと発光する室内を遠い眼差しで見つめた。
彼の私邸やパリでの生活からするととても広いとは言えない空間であったが、何より、ここは杜のような苑が見える。完全な静寂の中でしか落ち着くことのできない彼のことを配慮し、ヒカルがここにしようと言ったので、それに応じたまでのことだ。
たったひとりで使用しようとするので、肩書きのたくさん付いた者たちが入れ替わりに彼に挨拶しにやって来たが、彼はプライベートであることを理由にあれこれ詮索したがる文化の国の住人達に無表情に接した。
人との会話は彼には必要ではない。ただ疲労しかもたらさない会話に意味は存在しない。

エントランスの正面は来客の応接用の居間になっており、各部屋が続きの間になっているが、採光と設計の関係で、窓は並列であっても部屋に対して斜めであった。左側がマスタースペースと呼ばれている場所で、ビジネススペースがあり、簡易キッチンもある。そしてその奥がバスルームと主寝室であった。対極にゲストルームやゲスト用のバスルームなどがあり、複数人で使用できるものの、そこを使う予定はなかった。
ヒカルが別の部屋を取ったからだ。結婚前だからという理由で部屋を別にするというのは、アルディ家の者には通用しない。なぜなら、結婚一ヶ月前には新婦の家で過ごすことが義務づけられており、結婚式当日には神の前で永遠を誓う花嫁の腹には別の命が入っていることは多々あったからだ。けれども、ヒカルはそれを良しとしない。どうもそういったところでは拘りがあるようであった。
けれども、彼女は「苑が見えるから」という理由でひとり別の部屋を予約してしまう。彼女に彼女の日本滞在の手配を任せるのではなく、こちらでやってしまえば良かったと思ったが、彼は後悔に時間を使わず、次の思考に入ることにしていた。後悔は学べば教訓になり経験になるが、これでヒカルへの対応やヒカル自身が変わることはあり得なかったからだ。

彼は煙草を吸い終わると、灰皿に投げ入れて、首元に手を遣り、タイを緩めた。
同じ姿勢でいたので、シャワーを浴びて血液循環や筋肉の緊張をほぐす必要があった。彼の体は以前より更に引き締まったが体脂肪が少ないための弊害も理解していた。フェンシングと乗馬で鍛え上げた肉体は、緊張の緩和を必要としていた。

■02

「あっ」
彼女がルイの姿を見つけて、小さく声を漏らしたので、タオルで水気を拭き取っていた手を止

めた。バスルームを出る時に、エントランスから人の気配と、ルイ、と彼を呼ぶ声が聞こえたので、ヒカルが戻って来たのだと知り、彼はバスルームから出てきたところにヒカルと遭遇したのだ。彼が計算していたよりも、一秒にも満たない僅かな差があった。ヒカルが彼より先に相手の姿を見つける結果になった。
この場所に入って良いと許可されている者はヒカルしか居ない。別のスイートに部屋を取っている彼女と彼は名前が違うのに居住地が同じであったので、きょうだいでもなく、夫婦でもない彼らは、一体どんな関係なのか不思議な顔をしている者も居たが、それでは接客業として不合格としか言いようがなかった。

昨日は結局、イケダ家に宿泊したらしいので、ヒカルはこのホテルの部屋には足を踏み入れていないようだった。そして、どうやら、彼女は自分の部屋に立ち寄らずにルイの部屋にやってきた様子であった。・・・外出着のままであることと、夜風に当てられて、彼女の髪が少し乱れていたことから推測できた。隠しピンで留めた両脇の髪にほつれが見える。彼女の髪は癖が強くうねりがあるので、風に長時間あたっていればそんな風に乱れてしまう。
アルディ家の籍に入ろうという者の所作ではない、と言おうとして、彼はそれをやめる。それなら、事実婚で良いとまた、彼女が言い出すからだ。それでは意味が無かった。
そして一瞬見ただけで、彼女がなぜ遅い時間にやってきたのか判った。
彼女の顔は、腫れていた。そして目元は赤かった。泣いていたようであったが、それをルイに見咎められるのを避けるために、彼女は長時間、この庭園を漫ろ歩いていたらしい。

彼女がクロス邸を出た時刻はそれほど遅くなかったはずであった。その位は、調べようと思えばいつでもできることであった。けれども、彼女が指定した時間を守れなかったからと言って、ヒカルを詰ったりすることはしない。彼女自身が承知していることであり、ルイには彼女が陽気な状態で戻ることはないだろうという予測を立てていたから。
だから、煮えくり返った憤慨を内に秘めて、彼は無表情になる。彼の表情が乏しいからと言って、ルイが何も感じていないということではない。ただ、感情を露わにして良い時ではないと判断しただけのことである。諍いをするつもりはないが、それでも彼女の鈍感さに辟易することがあった。
「戻ったか」
彼がそう言うと、ヒカルは顔を赤らめて、横を向いて視線を反らす。彼の皮膚は彼女の細胞から再生されたものであるし、今更ルイの裸体を見て恥じらう彼女に付き合ってはいられない。本当は居間、彼女をこの場に立たせたままで事の次第の報告を聞きたいと思ったし、彼女が彼に連絡を取らなかった言い訳をするための時間を確保するかどうか思案していると、ヒカルは前者の報告を始めた。ルイがあまりにも無言でいるので、ヒカルはそれを、クロス家とアルディ家の話し合いの結果報告を待っているだと思ったようだ。

「・・・明日、もう一度行く」

「門前払いではなかったようだが」
彼が知りたいのは結果だけである。もう一度行く、ということは今日の話し合いは失敗に終わったということだ。彼女の苦悶に満ちた顔つきから、明日は改めて親族の団欒を楽しもうという時間にはならないのだろう。そしてそれはかなり高い確率で発生する直近の未来であった。
「・・・ちょっと行き違いがあって」
ヒカルが苦し紛れにそう言ったので、ルイは美しい金色の眉を持ち上げた。濡れているので前髪が下がってきているので、彼のきつい視線はヒカルに届かなかったようだが、彼女は身を固くして、唇を明けたり閉じたりしていた。何をどう言っても、クロス家のことを良く言えない結果しか持ち帰れなかったこと哀しんでいるようであった。だから、ルイを同席させるか、代理人を連れて行けと言ったのに。彼女はひとりで行くと言って、そしてひとりで傷ついて帰ってきた。
・・・まだ、帰って来るだけマシなのだろうか。
そのまま拘束されて、ヒカルが戻らないで日付を越えるようであれば、彼はすぐさま法的手段に訴えるための準備をしていた。ラップトップを起動状態にしてあるのは、そのためだ。彼がヒカルと連絡を取らないで待てるのは、24時間きっかりであった。

彼の視線の前では、彼女は隠し立てすることはできないのだと諦めたようで、手に提げていた小さな鞄をビジネスチェアの上に置いた。こつり、と底鋲の音がする。
そして、彼から逃れるようにカウンターの上に置かれているミネラルウォーターの入ったペットボトルに手を伸ばした。きっと、飲まず食わずであっただろうから、水分補給を必要としているのはヒカル・クロスの方であったのに、彼女は一番端のそれを手に取ると、今度はルイに近寄って来て、はい、と小さな声で水を差し出したので、無言で受け取るが、この沈黙を破るのはルイではなく、ヒカルからでなければならない。彼女の浮かない顔を見たくてオフを取ったのではない。実利を重んずるわけではないが、彼女の成果が皆無であることについては承服しかねた。
なぜ、彼女はルイを頼らないのか。ルイの前で歎かないのか。明らかに疲弊しているというのに、彼女は何も語らない。それが美徳と思っているのかもしれないが、ルイにはそれが単なるやせ我慢にしか思えない。

・・・だから。
ほんの一瞬前までは、彼女から報告を始めなければ口を開くつもりはなかったのだが、ヒカルがカウンターの向こうに回り込み、薄暗いキッチンの中で、水を勢い良く出し手を浄め始めたので、彼はやむなく、次の手に移ることにした。

「ヒカル」
返事がない。彼はむっとした。無口であることと無感情であることは別である。
彼女が俯いていたのは幸いであった。冷凍されそうなほど冷たく鋭い眼光で、彼は恋人を睥睨していたから。彼の恋人であっても、彼のファム・ファタルであったとしても、意思の疎通を放棄する者にルイ自ら歩み寄るつもりはない。
彼女は、黙ったままで暫く念入りに手を擦っていたが、それが時間稼ぎであるのは明白であった

。これでルイが彼女に結果を尋ねることを忘れると思ったのだろうか。まったく浅はかな人だ、と思った。
やむなく彼から切り出すことにする。少し挑戦的に。そうでもしなければ、彼の憤慨は鎮まらない。ヒカルを泣かせたいわけではないが、彼女は傷つくことがわかっていながら手を翳してしまう傾向にあるようであった。
「ヒカルの口から聞くのと、オレが今から電話して確認するのと、どちらを希望する？」
ヒカルが水を止める。同時に、ルイは渡されたペットボトルの蓋を開けて飲み下した。乾きを感じている体は・・・水分だけが欲しいわけではない。

彼は、ヒカル・クロスを改めて見つめる。彼女の選んだ上質のワンピースは暗がりの中でくすんで見えた。髪を緩く編み込んで清楚な令嬢風であるが、彼女は言い出したら諦めないという精神の持ち主だった。人に迎合しているようでいて、実はそうではない。彼女もわかっていることであったが、彼は彼女より彼女のことがわかっていた。

大きな茶色の瞳が、幾度も瞬く音が聞こえるような、そんな間が暫く続いたが、ようやくヒカルは渋々言った。
「絶縁を角度で、クロス家の権利を全部放棄しろと言われた。それは構わないのだけれども・・・」
顔を曇らせながら言う彼女に、それでアルディ家はそうですかと言うわけはないだろう、と言いそうになり、彼は薄い唇を横に引いた。彼女のことになると、どうも自制が利かなくなる。普段、人のことを悪く言わないヒカルがこういう言い方しかできないのであれば、相当のことを言われたのだろうと感じる。やはり、自分が同行した方が、と思ったがそれでは火に油を注ぐ結果になるだけであった。アルディ家とクロス家の確執は、もはや修復不能な状況に発展している。彼と彼女の結婚は打開策にはならなかった。
「ヒカルの細胞の使用権を主張してきたのだろう？・・考えそうなことだ」
ルイは鼻先で軽く笑う。アルディ家に刃向かう者は誰でも容赦しない。それがヒカルの父の実家であったとしても、だ。そしてヒカルを思い悩ませる者も許さない。彼女を独占して良いのは彼だけだ。

強かなクロス家の者を嗤っても、彼らは自分達の理論が正しく正義だと思っている。正義とは何なのだろうか。自分の都合の良いことが正義というのであれば、ルイはいくらでも正義をでっち上げるつもりだった。ヒカルが彼の妻になるのであれば。クロス家の男子であったカズヤ・クロスが風来坊であったことを恥じ、若くして結婚したことにより、彼らの家族は断絶状態であったのに。それでも、唯一の女の孫であり、カズヤ・クロスの忘れ形見であるヒカルのことを、ヒカルの祖父はこよなく愛していた。だからこそ、あのフランスの華は表立って反論することもしなかったのだが、ルイは違う。・・・やられたら、やり返す。そして倍返しだ。これは家訓であり、誇り高いアルディ家の象徴のような教えであった。誇り高く、好戦的で、欲しいものは手

段を選ばず手に入れる。それでどんなに孤独であると歎いても、それでも手に入れる。特に、彼はそれが顕著であった。

これで彼女が諦観気味になり、事実婚で良いとまた話を蒸し返す方が面倒であった。このことについてはルイにしては長い時間をかけてヒカルにウイと言わせたのだから、今更、引き下がるつもりはない。彼の予定は、必ず訪れる未来なのだから。式はランスで行い、その後に当主として就任する。親族会ではもう誰も彼に口答えする者は居ない。フランスの華の実子でなかったとしても、より相応しい者を当主に据えると言った者たちが、それを覆すことを赦さない。それに、ヒカルがクロス家と決別してしまえば、予定通りの結果になるのだ。クロス家との別離が結婚許可の交換条件であったのだから。ヒカルの情に訴えるような者はもう、必要ではない。けれども、ルイのように諦めることができないヒカルは今でも何とか和解できないかと足掻いている。彼女がそれで諦めるのであれば、と思って黙ってやりたいようにさせてきたが、そろそろ・・・限界であった。彼女は彼だけを見ていれば良いのに、何もかもを捨てて・・・身体一つで嫁いでくれば良いだけの話なのに。なぜ、彼女は些事に拘るのだろうか。

「イケダ家は、何も言わなかったのだけれどもね」
彼女は淡く微笑んでそう言った。何事にも大らかというか大雑把な母方の実家は、ヒカル・クロスの結婚を祝福した。彼女をパリに送り出した時、クロス家はヒカルの引き取りを拒否したのだ。それを知っているからこそ、彼女の好きなように行動しろという方針を貫くらしい。彼女は、母方の実家に赴く時には朗らかになる。それなら、両方手に入れるのはやめて、片方だけで満足しろと言いたかったが、それも言うのをやめた。
ヒカルが家族に拘りを持っているのは今、始まったことではないからだ。

■03

彼は溜息混じりに言った。それで彼女の心が軽くなるとは思わなかったが。
「これで筋は通した。日本式のやり方には辟易するが。・・・ヒカルは成人しているし、問題はない」
彼は繰り返さないのに、繰り返し言う。彼女はできることは全部試した。それで納得できないのであれば・・・一体、何がしたいのか理解出来なかった。
彼のファム・ファタルのすべてを理解しているとは思わない。彼の理解を求めてヒカルが生きているわけではないからだ。それが、時折、たまらなく苛つく。ようやく手に入れた運命の人であるのに、ヒカルが自分と違うことを見せつけられるからだ。彼は優遺伝子操作されて生まれて来た。様々な能力が備わっており、何れも平均を大きく上回る。彼が星辰の子と呼ばれるのはそれ故だ。誰も手が届かない星々でさえ、彼に跪く。だからだ。彼に手を伸ばすことが出来るのは、永遠の晄という名前のヒカルだけである。・・・いつになったら、わかるのだろうか。
ルイがそう言うとヒカルはまた俯いた。彼女は思い切りが悪い。逆に、瞬時に判断する潔さとい

うか無鉄砲さも持っている。わかり合えない者とは、どこまでも交わらない。捻れた絲を解きほぐすより、切断してしまった方が解決できることもあると考えられないのだ。さらに追い打ちをかける。彼女を追いつめない程度に。
「血が繋がっていてもそれを根拠にして理解することはできない。それはヒカルが一番よくわかっていることだろう」
彼女は大きく溜息をついた。肩で何度も深呼吸している。これで怒り出さない彼女は神経が通っていないとしか思えない。彼女を泣かせたり怒らせたりすることを目的としているわけではないが、鬱屈したものをため込んで、ある日突然膨張しきって弾けてしまう方が厄介だった。
面倒だな、とは思ったが、彼女を無視しきれない。それは、彼の中の血が、彼女を呼ぶからなのか・・・自分の持ち得ないものを彼女が損なわずに持ち続けていることにたいする嫉妬なのか、判別の難しい混濁に、ルイは口調を険しくすることで誤魔化しているのだ。それは自分でも良くわかっている。

「そうだね」
ヒカルは、小さく返答した。その通りだ、と言わないところがまた憎らしい。ルイの意見は尊重しているけれども、全部を受け入れるわけではないという拒絶に聞こえる。

彼はペットボトルを握りつぶしそうになり、カウンターに乱暴に置くと、キャップを放り投げた。からん、と乾いた軽い音がして、キャップが転がる音がして、ヒカルは我に返ったようだ。
「ヒカル」
彼は大股で彼女に近寄ると・・・肩にかけていたバスタオルを取り上げた。そして、彼女の両手の上にそっと置いた。このまま、夜の苑を彷徨ったように、何時間も立ち尽くして考え事に溺れるのはヒカルの勝手であったが、彼はそれに付き合うつもりはない。軽く包むと、ヒカルの両手はあっという間に見えなくなってしまう。それほど彼女の手の平は華奢であった。濡れたその指には、間もなく彼と同じ指輪が輝くことになる。それより前の段階で、この世でひとつしかないエンゲージリングによって、彼女は彼の唯一なのだと皆に周知することになるのだ。
軽く包んだ上からでも、彼女が指の先にまで注意を払って赴いたことがわかった。
若い娘らしく宝飾品で飾り立てることもしていない。爪は綺麗に整えられていたが、華美な装飾はひとつもなかった。
その彼女の指先は、タオルの上からでもわかるほど、細かく震えていた。それが寒さからではないことは承知している。

ルイは腕を伸ばし身を屈めて、彼女の背に回ってただ・・・小さなこどもの世話をするように彼女の手の平を拭いてやる。先ほど、必要以上にヒカルが手を擦りあわせていたように、彼も彼女の手の甲や指先、手首に至るまですべてを包んで、撫で続けると・・・やがて彼女の震えは遠のいていく。

ようやく、会えたのだ。彼女を待ち、煙草を幾本も吸い、待つ自分を倦んで仕事をしようかと思ったものの、プライベートであるからというヒカルの声が聞こえてきてその手を止めて、また煙草を吸っていたとは、口が裂けても言うつもりはなかった。

彼女の背の温度を胸に感じる。シャワーを浴びた後の湿気なのか、それとも彼女に触れているからなのかわからなかったが、彼は確実に、彼女の肌や香りに安堵を覚えているのだ。口惜しいが、それは認めている。彼女の肌は彼を慈しみ、癒し、そして眠りに誘う。誰とも眠ることができないのに、彼女とは眠れる。それが今回のオフを取る為に、幾日も触れておらず、連絡も途絶えがちであった果てに、こんな風にしてでしか彼女を抱くこともないのだと思うと、また・・・苦しくなる。なぜ、彼女は彼の胸に飛び込んでこないのか。恋人との逢瀬より、もっと大事なものがあると言い切るヒカル・クロスの神経が理解できない。

彼は彼女の髪や白い項に視線を落としながら、そっと言った。ヒカルは背中を向けていたが、彼の視線を感じているらしい。少しも、こちらを向かない。
「濡れたままにするな」
ルイは彼女の耳に、形の良い唇を近付けて囁く。すると、ヒカルは全神経を背後のルイに向けていたのに、耳元で囁かれるとは思っていなかったようで、ぴくりと肩を揺らした。ルイはそれを無視して、無言でタオルの上から彼女の両手を包み込んだ。

無理矢理に彼女をこちらに向かせることはしない。ヒカルから、ルイの胸に飛び込んで来るべきだ。何が「そうあるべき」なのかという定義は曖昧であるのに、ルイはそう固く決めていた。ヒカルの耳や項が薄暗い居間からの明かりでもわかるほどに、ほんのりと桜色に染まっていく様子を鑑賞しながら、彼は彼女の次の行動を待つ。

「誠意を込めて、説明すればわかり合える。諦めるのは・・・はやいと思うの」
彼女の口調は少し掠れていて、どこか慌てていた。何に気を削がれているのか彼はすぐにわかって、薄い唇の端を持ち上げる。

彼の青灰色の視線の下には、彼女の着ているワンピースの留め釦が見える。背面にひとつだけ、薔薇の飾り釦のついている清楚というより飾り気のない服であった。濃いチャコールグレーの色や布の風合いはヒカルの茶色の髪や瞳が映えた。彼女のためだけの、世界で一枚しかないオーダーメイドである。ルイが出入りしていたパリの店で注文したものであるが、そこの店主は彼女のイメージだと言って持ち込んだ布から買い取り、作らせたものであった。膝が隠れる程度の長さの、七分丈のそれは豪奢ではなかったが彼女の柔らかい印象を表現するに足りるツールであった。靴も飾り気のないもので、幅広の踵もそれほど高さがないが底面が深い光沢のある褐色が張られており、日中日が射し込むと真赭色に見える凝った品である。鞄も最高級のものであったし、どれ一つをとっても、遜色のない品を用意させたつもりであった。それでも、クロス家ではヒカルに及第点を与えない。これが一番気に入っているので、着ていこうと思う、と言った時

には何も言わなかった。似合うとも綺麗だよとも言わなかった。しかしそれで十分だったようだ。いつも何かしら注文をつけるルイが何も言わなかったので、ヒカルは上機嫌でルイと別れて一足先に来日した。そして、見事に、予想通り、萎びて帰って来た。

しかし、それでも・・・ヒカルがどんなに傷ついても、ルイは満足であった。
チェスやフェンシングで勝った時は昂揚感など感じない。当然の結果だと思うだけであったし、無敗の彼の前では誰も彼に勝とうとは思わない。ルイに挑戦できるだけで幸せだと思っている輩を叩きのめしても全く満足できない。
それなのに、ヒカルが・・・傷ついてやって来る場所が、自分の部屋でもなくイケダ家の親族の元でもなく・・・ルイの部屋であったことに彼は勝利を味わった時以上の何かを、感じている。

彼は彼女の背を自分の胸で包みながら、頬を寄せた。身を屈め・・・彼女の頬に自分の顔を押し当てる。馴染んだ彼女の肌の質感を感じ、彼は双眸を細めた。
彼女の頬が朱に染まっているというのに、それでも冷えた温度を感じ、彼は静かに言った。

なぜ、夜の苑などを徘徊するのか。
真っ先に、ここに来なかったことを彼女が後悔すれば良いのにとさえ思った。
「・・・夜風は良くない」
彼はそう言って、彼女の頬に自分の唇を押し当てる。まだ、再会のキスどころか、抱擁もない非情な彼の恋人に向かって、ルイは自分の本心をぶつけることはしないと、改めて己を縛めていた。
本当は、今すぐ・・・彼女を詰り、憤りを露わにし、そしてなぜ彼女は自分だけを見ないのか問い詰めたい衝動が大きくなっていくというのに。

■04

完全に乾燥している状態とはほど遠い前髪が、軽く重みを主張しながらヒカルに触れると、彼女は身を縮ませた。しかし、ルイは更に、広い胸を彼女の背に押し付ける。湿った体に、布の感触があった。それから、ヒカルの体が僅かに揺れる震動も感じる。彼女が朗らかに、この服にしようと思うけれどもルイはどうかしら、と答えを求めているわけでもないのに、嬉しそうに尋ねた時のことを思い出す。彼女はいつも万華鏡のように、くるくると表情を変える。でも、ある面だけは決して見せない。そこに近付くだけで、ぴたりと動きも思考も止めてしまう。

・・・身を縮ませているのは、彼女だけではない。ルイもだ。それに気がつかないヒカルに、自分も同じだとは決して言わない。先ほどまで冷熱のシャワーで全身を和らげてきたばかりなのに、また・・・彼の体が強ばる。
彼の無言の圧迫に、ヒカルが戸惑いながら彼の名前を呼んだ。

「ルイ・・・」
少し身動ぎする。二の腕を動かして、彼と重ねた手の平から逃れようと試みるヒカルの手首を自分の長い指先で縛める。けれども、彼はそれを無視して、ヒカルの首筋や顳顬に自分の頬を滑らせた。頬摺りではない。彼の愛撫が始まったのだとヒカルが感じたので、彼女は身を固くしたのだ。しかし彼は止めるつもりはない。連絡をいつまでも寄越さなかったヒカルへの罰であった。
ヒカルが溜息混じりに顎を僅かに上げるが、すぐに我に返って俯く。彼は彼女の耳の淵を軽く啄んだ。すると、彼女は敏感に反応し、真っ赤になって、ただ、困ったように眼を瞑ってしまう。

自分の胸を彼女に傾けるが、彼女は呼吸を忘れてしまったかのように乱れては深呼吸を繰り返す。初めて陸に上がった魚の姫のように、彼女は彼の僅かな仕草で乱れ始める。髪に唇を押し当てるだけで、彼女は震える。次に、何がどうなるのかわからないからだ。背後からの彼の懲罰が次にどこに与えられるのか彼女には見えないから。だから余計に皮膚の感覚に敏感になる。
こめかみに、髪の上に・・・そして耳に、頬に、項に・・首筋や肩にまで、彼は唇を乗せていく。
それでも、彼女はただじっと、それを受け止めて耐えているだけである。
やがてルイが飽きて、ヒカルに部屋に戻れと言うのだろうと思っている。

・・・苛つく。

彼は彼女がルイに向き直り、自分から抱いて欲しいと懇願するまで続けるつもりであった。彼女は彼のことを理解していない。いや、男というものを理解していない。彼と彼女は同じ過程で生まれてきたが、それでもまったく違っていた。彼女は生まれてくる過程で怒りや歎きを削ぎ落とされてきたのではなく単に表現方法を知らないだけである。感情の激しい者は疎まれる。起伏の激しい者は浮き沈みに溺れる傾向が強い。自分を憐れみ、自分だけの世界に籠もることで己を守ろうとするが、それでは本当に己を救う事は出来ない。
それは、ルイが一番よく知っていることだった。経験したことがあるから。後悔はしない。学習したのだ。もう二度と、同じ路には行かない。

ルイは彼女の手首を縛めたまま、体を傾けて届く範囲のすべての肌にキスをした。
二の腕の内側を、ヒカルの腕に重ねる。腰を押し付け、彼女が逃げ出さないようにする。彼の片手で充分なほどの細さしかないヒカルの両手首は、少し力を入れただけで音を立てて折れてしまいそうであった。この手が、彼の背に回された最後の夜は一体いつだったのか。ルイの辛抱も極限まで来ていた。ヒカルを優先させることにしたプライベートの時間であったが、ルイがヒカルの言い成りになるということではない。

彼は空いた方の手で、ヒカルの項の上にある留め具に指を伸ばした。飾り釦であったが着脱が楽なように少し角度をつけて摘み上げると簡単に釦が外れる設計になっていた。ルイの考案したも

のであった。だからよく知っている。どうすれば、彼女に触れられるのかということを。それまでひとつの薔薇の形であった釦が真ん中から割れて、ぷつんという音がした。そして、更に釦を引き上げると一気に・・・背のファスナーが開いて彼女の白い背が現れた。

ルイ、と彼女は彼を窘める声を出そうとしたが、それは掠れていてまったく声になっていなかった。首を竦めて背を丸めるが、それは逆効果で彼女は強制的に殻を脱がされる蛹のような格好になった。
悶えれば悶えるほど、彼女は露わになっていく。彼女の感情もこんな風にしてはぎ取ることができれば、余程扱いが楽になるだろうか。いや・・・捥いでも彼女は内に深く隠してしまって決して見せないのだろう。

クロス家の名前も利益も権利も必要ではない。そう言ったが、彼女はウイと言わなかった。独占に近い状況の医療器具や医療施設など、医療業界に多数の功績を残しているクロス・グループを蔑ろにすることはできない。より安価で安全で、即効性のある薬や利用方法を確立しようとするのであれば、避けて通れないのだ。アルディ家がこれから開発しても、それはすぐに実用化されるわけではない。クロス・グループが権利侵害を逐一訴えるからだ。

だから憤って、もう縁を切ると言い放ったとしても、それは永遠の話ではないのだと互いがわかっているのだ。だからこそ、歩み寄ろうとしているものの、それが難航している。苛立っても、仕方の無い状況なのに、彼女は、あの家の者たちに気に入ってもらえる格好になっただろうかと浮かれて出掛けていく。
たったひとりで。そして、ひとりで悲しみを埋めて戻ってくる。

象牙色の肌理の細かい肌が見えた。昏い色の服を着ていたので、その白さが際立っていた。彼女を包む肌着は細い肩紐でつり下がっているだけであった。暗い場所であったので、今の照明によって彼女の躰の曲線が透けて見える。
・・・手を伸ばし、広げて、彼女の肩胛骨に触れると、彼女はまた鳴動する。これが初めてではないのに、緊張しているヒカルに、ルイは苦い笑いを浮かべていた。彼女の服をすべて引き破いてしまっても構わなかった。この服はもう二度と、着せない。今日のことを思い出して暗澹な表情を浮かべるくらいであるならば、値段は関係ない。世界で一枚しかない服であれば、それさえ廃棄してしまえばもう思い出すためのきっかけは消滅するのだから。
彼は更に指を伸ばし、彼女の肩から腕に移り、そしてルイだけの蛹のために殻を剥いでやる。勢いよく力任せに引いては駄目だ。そっと、押すように・・・服と肌の中に手を差し入れて、脱がせていく。もう二度と着せはしない。だから、最後の感触を覚えておけとヒカルに心の中で命じていた。

彼女の肌着はワンピースと対照的であった。縁取りが華やかであったが、面にレースや刺繍が乗

るとその上に着る服に形が出てしまうので、内側に細かい刺繍が施されている。裾が翻ることはないが、動きが楽なように少しふわりと広がる設計になっているキャミソールドレスはヒカルの浮き立つ期待そのものを表しているようであった。限りなく透明で透けているのに、それは彼女の肌ではない。

彼女の心の中そのものであった。
ルイは、目に見えないものや根拠のないもの、証明できないものは信用していない。ましてや、人の心というものも信じていない。だから、ヒカルを娶るのだ。彼女を結婚という枷で拘束しなければ、こうして殻を脱ぎ捨てるかのように、いともあっさりと彼女は何もかもを放棄して逃げていくのだから。
だから、こうして捕まえておかなければ彼女は自分の部屋に行くと言い張る。・・・彼を蔑ろにする者は赦さない。たとえ、それが彼のファム・ファタルであったとしても、だ。

彼女に振り回されるつもりはない。今まで付き合ったのだ。今度は・・・ヒカルがルイに付き合う番だ。
彼は静かに、ヒカルの服を矧ぎ落とした。細心の注意を払って。

■05

ヒカルを自由にしてやるつもりはない。ルイはヒカルの手首を掴んだまま、もう片方の手に神経を集中させて、彼女の肌着の釦を外す。彼女の肌を晒す。彼の青灰色の瞳の前で、全てを曝け出して、涙すれば良いのだ。彼女がかなり動揺しているのもルイにはすべて予定の範疇であった。
「ルイ、あの・・・」
ヒカルの声は震えていた。部屋に響くがすぐに拡散してしまう彼女のか細い声を無視して、彼は俯き、彼女の肌に自分の肌を合せる。額を擦りつけて、獣が自分の存在を主張するかのように・・・彼女にルイの痕跡を残していく。彼女がルイの存在を忘れて連絡を寄越さないのであれば、忘れられないようにするだけだ。自分の肌を見る度に、ルイを思い出せば良いだけの話であった。
「・・・今夜、ここに来た理由は？」
それでも抗おうとする彼女に、囁いた声は沈着な彼でも少し驚くほど掠れていた。顎を引き、背を軽く屈めて彼からの攻撃に少しでも備えておこうとする姿勢が彼の恪気を誘う。誰に嫉妬するわけでもないが、彼女の強情を越えた頑なさがルイの焔を煽るのだ。それさえ気がついてないヒカルは、身を竦ませるのにそこから逃れようとしない。ルイが諦めて離れるのをじっと待っているだけである。
その様子に苛立ったルイは、今度は彼女の腰を腕に抱いて、力を入れ、彼女が彼から離れようとした距離を一気に縮めた。
返事をしろという意味だ。ヒカルは踵を浮かせながら、彼の腕に手をあてて白状した。
「ルイの顔を見たかったから」

最後の語尾は消え入りがちであった。そんな一言すら彼女は羞恥で身を染める。幾時間も庭園を放浪して、彼を待たせた罪を贖うどころか、彼女はルイの言葉や行動に困惑し、その意味を考えようとしない。
酷く腹立たしい扱いを受けた、とか。
心地好い会話はなかった、とか。
他人を否定するような言葉は、彼女は紡がない。それなのに、傷ついたと主張する。言葉もなく無言で彼に救いを求めるが、彼はそれほど気優しくない。なぜ、やり返さないのだと呆れるばかりである。

・・・しかし、彼女が落胆しているのは、過大な期待を持っていたからだとヒカル自身は知っているのだ。だから、失望しているのだとわかっているのに・・・彼女は誰にも見せない表情をルイにだけは見せにやってくる。これを苛立たしい傲慢だと突き放すこともできたし、彼は大体においてそのように対応している。けれども。彼女だけは、彼はいつもの通りに振る舞うことはしない。できないのではなく、そうしない。
部屋の明かりが灯っていることも、彼がこちらに入っていることも知っているのに、それでもなお連絡を寄越さず一人考えに耽る彼の恋人は、彼のことを少しも理解しようとしない。

彼女が痛ければ、彼も痛いのだ。
彼女が苦しければ、彼も苦しいのだ。

だから、これは懲らしめなのだ。彼女のことを困らせ、彼は問い続ける。なぜ、彼の部屋に来たのか彼女の口から言わせた。次は・・・これからどうするか、だ。
恥ずかしそうに顔を俯かせて、それでも神経をこちらに向けているヒカルの肩に軽く唇をあてていく。その時に、彼女の手首にあったルイの手が動き、ヒカルの指先を求めた。・・・水気を含んで重くなったタオルは冷え始めており、彼女の手の上には不要の物体となったので、ルイが軽く払いのけたからだ。そして・・ゆっくりと、自分の指を・・・一本一本、彼女の指に絡めていく。細く長い指先が、彼女の指に入り込み、そしてぎゅっと彼女の手を握ると、ヒカルの指先は屈み、そして僅かに震えながらも、彼の懐抱に応えて自分も指に力を入れる。
そして、彼は次に、ヒカルの服を完全に奪い取ることに専念した。
彼女が部屋に戻れないように。

・・・歎きに酔う時間は終わりだ。
これからはルイのために時間を使う。彼が決めたから。

彼女の腕に残る布の撓みが煩わしかったので、払った。ただ、それだけだ。緩やかに、慣れた手つきで彼が彼女の服を乖離させようとするので、ヒカルは軽く腕を体に引き寄せて、抗おうとしたがそれは逆効果であった。彼女とルイの足元にそれが落ちる音が、合図であった。

大きな手の平でヒカルの肌を静かに撫でながら、彼はヒカルの腕から肘、そして再び手首を廻り、指先に到着してまた指を絡める。親指の腹で、彼女の手の甲を擦ると、彼女はそれだけで呼吸を乱し始めた。

そこで一番、効果的に囁いてやる。
「・・・オレの顔を見るだけ？」
それから、彼は剝き出しの上半身を彼女の背に押し当てた。腕も同じ様に、彼女の腕に乗せる。以前より更に締まった体の筋が彼女の柔らかい肌の質感と対照的であった。筋肉の重みによって、彼女はまったく身動きが取れない。

ルイはしばし無言であった。そしてそのまま、待つ。彼女からの返事を待った。それがなければ、次を始めはしない。
彼に返事をするまでは、彼女を解放するつもりはないのだと知ると、ヒカルは本当に消えてしまいそうな声で、言った。

「そう。ただ、顔を見るだけで良かったの・・・」
軽く結ばれた髪の狭間から見える項が赤かった。耳まで赤い。自分が何を望んで、何を願っているのかを口に出すことは廉恥の極みなのだと思っているらしい。
しかし、彼は他の誰とも違う。ルイ・ドゥ・アルディを目の前に、彼女は何も隠すことができないはずなのに、彼に逆らう。だから、許せない。

その言葉を聞いて、彼は冷笑した。そして、次に自分の微笑みを更に嗤う。
誰かを自分の思いのままに動かすことは簡単で、すでに飽き飽きした手順であったはずなのに、彼は自分が微笑んでいることに気がついた。
それから、満足していることにも。
・・・ヒカルのたったひとりが、己であることを確認したから。

■06

ルイは腰を彼女に押し付ける。すると、ヒカルは背を反らせて深く溜息をついた。それなのに、彼女は身を捩らせても決してルイに向かって体を預けることはしないヒカルの躰に、更に彼は自分を傾けた。そして、彼女の頬に唇を押し当てる。・・塩辛い味だった。涙を零したな、とすぐにわかるほどに。だから彼女は明るい場所を避けて俯いてばかりいるのだと指摘すれば、彼女はきっと「そうではない」と言うに違いない。
「顔を上げろ。・・・俯くのは、やめろ」
彼は静かに言う。彼女は隠そうとする。涙も、怒りも、歎きも。けれども、それは彼女ひとりのものではない。そして隠しても、癒えないし消えないし満たされないことは承知しているのに、繰り返す。だから、彼は顔を上げろと言う。

ヒカルは溜息を漏らした。ルイの言葉の意味をわかっていると言うのに。それなのに、従おうとしない。彼は終わらない彼女の歎きを倦んで、心の中で舌打ちすると、端整な顔を寄せて彼女の唇に自分の唇を重ねた。
最後にキスを交わしたのは、いつであったのだろうか。
彼女は彼に会ってもキスを捧げない。恥じらいからなのだろうが、ここには誰も居ないというのに。
ルイとヒカルだけなのに。
・・・彼の愛を求めて彼に飛び込んで来るべき永遠の晄は、彼に近付くことを躊躇っている。いつもそうだった。
右手で彼女の顎を捉えて彼の方を向かせると、彼女が抗うので、ルイは更に力を入れて躰を伸ばし、彼女の唇に自分の唇を重ねていく。けれども、浅く軽く啄むだけのキスを繰り返す。彼女の呼吸が乱れ、躰が更に硬くなる。軽いキスであるから、拒むこともできたはずであった。
まだ・・逃げられる。まだ、拒める。彼女は自分で切り上げることができると高をくくっているのであれば、それは誤りだ。始めるのは彼だ。彼女ではない。そして終わらせるつもりもない。順番も優劣も存在しない。けれども、ルイの方が何倍も何十倍もの長い時間、彼女を見てきたのだから。彼女が彼の視線に気がつかなかった間も、彼は彼女を見つめていたのだから。だから、今更、見ないで欲しいと彼を拒み抗うことは赦されない。

彼女は一度は躰を固くするが、彼の口吻によってやがて力が抜けていく。なぜ、そんな風にしてでしか彼女は始めることができないのだろうか。青灰色の瞳を伏せて彼女の睫を感じるほどに彼の顔を近く寄せて唇を重ねる。彼女の温度を感じる。彼女の湿りを感じる。彼の脳が痺れる。
・・・ヒカルを感じて、彼はこの軽い口吻だけで自分に痺れが走っていることを感じる。

ヒカルが眉を寄せてそれでも唇が震えているが、それすらルイは奪って彼女に自分を重ねていた。両手の自由を奪われ、肩に力を入れて緊縛されたままになっているヒカルがやがて力を失っていくその瞬間を・・・待つ。

そしてすぐにそれはやって来た。苦しくなった彼女の強ばりが解けて、僅かに唇を開いた時が来たので、彼はそこに入り込む。ヒカルが驚いて逃げる。逃げ場がないのに逃れようとするので、彼はそんな愚かしいヒカルの逃走の試みを挫いてやる。
徐々に抑えていた激しさを放出させていく。もう、この段階で彼女は逃げられない。抗っても逆らっても・・・彼女は彼から離れられない。貪るだけの、情欲だけが先行する激しさでは彼女は怖じ気づくだけだ。
耐えて待つだけで終わるつもりはない。
桜色をしたヒカルの唇から自分の薄い唇を離すと・・・やがて、彼はゆっくりと言った。彼女の茶色の瞳を覗き込みながら。溜息の出るほど・・・魅惑的な声でヒカルに囁く。小さく。ヒカル

だけに聞こえるように。
彼がそれを言ってしまえば、もう、彼女はここで話を切り上げることは不能となる。既に彼女は戻れない。彼女の部屋に戻り、ひとり眠ることは赦さない。

「・・・オレはヒカルの顔を見るだけで、終わらせるつもりはないけれど」
それだけ言うと、彼はヒカルを抱き上げる。返事は待たない。彼女の悲鳴を待つ前に、彼は動き出した。身を竦ませたヒカルの足が宙に浮き、驚いた拍子に全身の力が抜けてしまったようだ。抗うこともなく彼女はあっさりと彼の胸と腕の中に捉えられてしまう。
「ルイ・・・私・・・・」
ヒカルが彼を見上げた。けれども、彼は返事をしなかった。彼女が驚愕から抜け出し、次に困惑で小さくなる。透けた肌着だけしか着ていないことも、彼女がルイの胸の中にいることも、彼女の声をルイが聞き入れようとしないことも、彼女は承知しているのに・・・ルイに向かって、彼を求めはしない。

今はプライベートだ。仕事ではない。いつもの彼ならば、部屋に帰るかどうか彼女に決めさせる。選ぶのは自由で、去る者は追わない。無理強いはしないが彼女の肯定を聞くまでは動かない。それがルイだから。
けれども、今宵は彼女に選択権はない。
彼女の赤らんだ顔が、ルイの胸に触れる。
・・・それが、彼女の無言の返答であったと見なし、彼はゆっくりと歩き始めた。

主寝室に連れて行くまで、長い道のりではなかったが、そこに至るまでに規則正しく歩く。彼女が怯えないように、彼女が逃げ出さないように。縛り付けて彼女を蹂躙するつもりはないが、彼はこのまま彼女を帰すほど粋狂ではない。彼女は彼に永遠の愛を誓った。今度は、皆の前で・・・神の前で誓わせる。そのために、ここに来たのだから。成果が何もなく戻って来た彼女を労るほど、彼は優しくはない。

暗がりには慣れていた。主寝室に入ると、彼は部屋の明かりを点けることなく、彼女をベッドの上に横たえる。膝をつき、眼を瞑る彼女を近くで眺める。遮音や遮光が徹底された静寂を用意させた。彼女の呼吸だけが聞こえるように。彼が眠るための完全な闇と無音の他に、もうひとつ、必要になった。それが、ヒカルだ。それを容易く言うつもりはない。

彼女は闇の中で、自分の視界が暗くなったので、少し安堵したようだ。その先を知っているのに、彼女はルイに躰を晒すことを恥じている。
ヒカルから提供されたルイの肉が、彼女を呼ぶのかもしれないが、彼女は彼を呼んだりしない。強く惹かれるのは、ヒカルなのだろうか。彼女を求めるのは彼の中の彼女の細胞がそうさせるのだろうか。

一夜限りの享楽だけ、と割り切る相手に不自由したことはなかった。けれども、どれほど遅くなろうとも、朝を迎えようとも、彼は相手の前で眠ったことはない。誰かの温度を感じると、それだけで彼の神経が休まらない。だが、ヒカルとこうして眠るようになって・・・彼は、それ以来、誰とも重なることはなかった。
それが、今は・・・彼女が傍らにいないと、眠れない。声を聞かないと、眠れない。
幾年も離れていたことがあった。しかし・・・今、同じ事を繰り返せと言われても同じ事はしない。

それまでは。
単なる行為でしかないと考えていた。
・・・・それまでは。

ヒカル承知しているのに、ルイへの連絡を自分の都合で断つ。
約束を反故にする。期限を守れない。それがどれほど彼の日々を乱しているのか、わかっているはずである。彼女は最大限に活用することを知らない。ルイが短い時間しか滞在できないものの、日本にやって来たのは、クロス家との問題を解決するためである。それなのに、彼女は自分ひとりで達成できると楽観視していた。そして、傷ついて帰ってくる。
彼の忠告は、一度きりだけであった。
彼女が何に期待しているのか、知っていたから。

だから彼女を慰めるためという理由で彼女を抱くのではない。眠りたいから。
それだけであった。そう思うとした。

愛しているから抱きたいとは言わない。寂しかったから肌を感じたいと言わない。
ルイは卑怯になることを楽しんだ。
歎いている彼女につけ込んで、彼女の予定を乱す。彼女が彼にそうしたように。

そうでなければ、憤りを彼女に降らせて蹂躙し没我の瞬間を味わい、彼女が受け入れるかどうかは関係なく、彼女を彼の証で一杯にし、ヒカルをまた怯えさせることになっても構わないと決めてしまいそうであったから。

■07

ルイが彼女の脇に膝を突き、体重をかけると、ベッドが軋んだ。ひとりでは広すぎるベッドであった。彼女を横たえてなお広すぎる寝台に彼女を置いてルイはじっと彼女を見つめる。
昏い闇の中で、彼女は白く淡く浮かび上がっていたが、彼女はすぐに身を起こそうとするので、彼はヒカルの肩を軽く押し、シーツの波に押し戻した。僅かな力で良かった。
「ルイ、私、外から戻ったばかりで・・・」
「だから？}
彼は顔を寄せて躰を屈めた。ヒカルはルイとの距離が近いことを感じ、両肘を曲げて自分の胸にあててルイの接近を阻む。猥らな格好をしているという自覚があるらしい。泣きはらした瞳に、久しぶりの彼女の香りに・・・薄衣のような肌着し身に纏っていない彼女の剝き出しの腕や鎖骨が隆起しているのが見える。

幾度彼女を抱いても、彼女はこうして初めて抱き合った時のような仕草を見せる。彼の躰を知り、彼女は全てを見せたというのにヒカルはそれでも身を竦ませるのだ。
彼を求め、彼に願うのであれば、ルイはもう少し優しくしてやるつもりであった。けれども、彼女は彼を見ようとしない。ここから逃れられないと知ると、ただ嵐が通り過ぎるのを待っているだけの彼女が、どうあっても彼の思い通りにいかないことを知ると、彼女の肩に手を掛けた。
手を伸ばし彼女の髪に指を絡める。夜風に乱れた髪が更に乱れていく。指先にいくつか留めピンの感触があったが、彼はそれらを潜り、彼女の額やこめかみや耳の付け根などをなぞって弄ぶ。
茶色の髪が広がり、自分の額を彼女に額に重ねる。
まだ髪が濡れていたので、彼女の額にも湿りが移る。
自分を重ねても、彼の薫りを彼女の刷り込んでも、ヒカルは彼に染まらない。いつも同じように・・・昔と同じ様にいつもはにかんで微笑むばかりである。それが気に食わない。

ルイは彼女の上に乗る。もう、いい加減に諦めれば良いのに、彼女はそれでもルイを頼らない。求めない。彼が居ないと眠れないと言わない。
彼は静かにヒカルと距離を詰めていく。
彼女の肩紐を外し、脱がせていく。性急にはしない。彼女が怯えるからだ。餓えているのは自分の方だ、とルイは認めていない。
ヒカルが羞恥で身動ぎした瞬間を狙い、彼女の腰から足先まで一気に滑らせて引き剥がした時、衣擦れの音がして広い寝室に広がった。捥いだ衣はそのまま床に捨てる。もう二度と、彼女に身につけさせることもない。それを身につける度にまた気を落とし、自分の疎かにしているものが他にあることに気がつこうとしない愚かな行為を繰り返すから。

彼女が部屋に戻れないということを知り、戸惑ったように顔を横に向けたので、ルイは薄く嗤う

[illegible]
。
床に落ちた服を身につけることはしない。彼女の着替えがここにない以上は、ヒカルは部屋にそのままで戻ることは出来ない。

手数がかけたが、その後は間を置かずにルイは指先を動かしていく。
「服は明朝届けさせる」
・・・彼女から部屋に戻りたくないと言わせるための様々な策も、彼の一言で、すべて・・・無に帰す。
それから次の手順に移る。
・・・彼女の全てを取り去る。何もかも。
ルイが他人の服を脱がせてやることは皆無だった。それを過程として愉しむこともない。慈しみ労りながら誰かを温度を交えることは彼にはあり得ないことであった。労りや慈しみは必要ではなかったし、誰かにそれを与えることも必要でなかったから。
それを無頓着に受け止めるヒカル・クロスが本当にわかっているのか、と感じる瞬間である。
もし、享楽に溺れるような娘であれば、彼はこうして彼女の衣を剥きながら肌の合わせまでに時間をかけることはしなかった。躰を開き、心で受け入れ、文字通り身も心も彼に捧げてもよいという瞬間そのものも、過程も彼は愉しむ。

だから、最初は軽く触れる。柔らかく素っ気なく。
啄むように軽い口吻を繰り返し、彼女の耳垂や首の筋に舌を這わせる。彼だけしか知らない肌の白い部分も含めて、彼はそっと彼女の冷えた躰を擦り続けた。
ヒカルが、ルイのことしか考えられなくなるまで。余計な雑念で煌散らすヒカルを抱くつもりはなかった。
貪り抉るだけの合歓は簡単だ。しかし、それではヒカルの心はこちらを向かない。
彼女のたったひとりであるのは確かにルイであるのかもしれないが、彼女がルイと一緒に居るときに、彼だけを見つめているわけではないのだ。彼と違って。ヒカルは彼だけではない、様々なことに惑い愁い、そして哀しんで、ルイの知らないところで勝手に傷ついている。

彼の特別であることを有り難がれ、と言っているのではなかった。彼に特別は存在しない。唯一しか存在しない。
ヒカルは、彼の唯一なのだ。生涯、たったひとりしか娶らない。誰にも誓わない。誰かの人生を背負うつもりもなかったし、彼の生すべてが誰かに理解できるとも思わないし、肩代わりできるものでもない。

徐々に熱を帯びていくヒカルの肌の感触や、溜息の数を加算しながら、彼は自分の焔を感じる。
何も感じないわけではない。彼も人の血肉で包まれているから。
こうして恋人を裸体にしていく行為が、彼の炎を燻らせる。

しばらくすると、彼女の怯えによる震えは引いていき、彼女が瞳を明けたので、ルイと目が合った。闇でもわかる。彼女の茶の瞳が彼を見つめた。
「ルイ・・・・」
そこで、ヒカルは強ばらせていた腕を伸ばし、静かに、彼の背中に腕を滑らせたので、彼は手を止める。
彼女が何度か唇が空気を求めて苦しそうに息をしたので、ルイは彼女の瞳を更に近いところで覗き込んだ。

ぴくり、と躰が動く。
ヒカルが、身を起こして彼の肩にキスをしたからだ。背中に回された手の平に力が入る。

背中を擦り、彼の背中にある彼女の息吹を感じ取るかのように、懐かしそうに肌を愛おしんだ。
彼の背中は彼女によって再生されたものである。だからなのだろうか。
それは彼の目的が達成された瞬間であった。

ひとりで歎き、ひとりで愁い、ひとりで悩むヒカル・クロスは、今・・・彼を見つめている。そして、彼女はただ愛撫を受けるだけではなく、肌を重ねることに同意した。
彼女が自分からこうして彼の肌なに触れることはない。ただ激しい恋風を受け止めるだけで彼女はいつも、ルイに対し稚拙な往返しかしない。
「ありがとう、ルイ」
彼女は彼の背に腕を回しながら、掠れた声で言った。そして、彼女は彼の肩に貌を擦りつけたが、その睫は湿っていた。

ようやく、か。

ルイは眉を僅かに動かした。表情を動かさない彼が、何も感じていないのではないことを毎回、こうして時間をかけて伝えないと伝わらないのであるならば、諦めて放置しておくこともできるのに。
なぜ、彼は繰り返すのか・・・。

彼が必要だと言い、彼を求めればそれだけで済むのに。
彼女はいつも、ひとりで片付けようとしている。
もう、これは個人の問題ではないのだ。両家の問題であり、ひいては世の理を揺るがすことになる。これから・・・激動の時代がやって来る。それに備えなければならない。彼女ひとりではどうにもならないことがあり、家族の情愛だけでは解決できない問題が絡んでくる。
それでも、ルイに迷惑をかけたくないというヒカルの気持ちが空回りし、解決できる問題も解決できなくなって拗れてしまうこともあるのに、彼は結局・・・彼女をひとりで行かせた。

そうしなければならなかったあの時と違っている。

彼女の気持ちを尊重した結果がこれだ。

ルイは確かに苛立っていた。彼女がいつまでも彼ひとりを見つめないからだ。彼がいなければ生きていけないと渇望するはずであったのに、彼女はひとり哀しみに沈んだから。
それなのに・・・餓えているのは、彼の方であると知らしめるような行為を彼女の前で広げてしまったから。

「・・・muguetの香りがしたから」
彼は理由にならない言葉だとわかっているのに、それだけ呟いた。
彼女の髪からは、すずらんの高雅な香りが漂っていた。庭を漫ろ歩いていた時間の長さを知る。

すずらんは、幸福の象徴だとも言われている。けれども、それだけではない意味も、ある。場合によっては死に至るほどの毒を持っているからだ。
彼を蝕む毒がゆっくりと循環していくのを感じる。
そうだ。
彼女は、晄の速度でもって彼を激しく悶えさせもするし、こうして一瞬で憤りを霧散させてしまう。

■08

彼女が憂えていた項目は複数であったことは瞭然であった。おそらく、彼は彼女と居ると幸せになれないと考えているのだろうと推測された。幸福の定義は人によって違うし、幸福そのものについて考える必要のない場合もある。
ルイの場合には・・・それしかないからだ。ヒカルと歩むこれからが、それしか残っていない路だからやむを得ずそうしているのではなく、全てを捨てて、その道だけを選び取った。

「ヒカルは散漫すぎる。オレだけ見ていれば良い」
ルイはそう囁く。ルイのことだけを考えて生きていけばヒカルはもっと楽になるだろう。けれども、それではヒカル・クロスではなくなってしまう。人形を愛でることはしない。言うとおりにしないことに苛立っているのに、彼に黙従することは望んでいない。まったく、矛盾するものについてルイは考えを及ばせるが、未だ回答は出ていない。ひとつ事実を追えば、ひとつ変化していくからだ。

またひとつ、彼女の頬に唇を押し当てて、小さな声で言う。その声量だけで十分であった。
「ヒカル・・・勝手に傷つくな。オレの知らないところで・・・傷つくな」

抗えないように、命令する。見えないところで、知らないことで傷つくのであれば、包み隠さず癒えることのない傷をさらけ出せ、と彼は命じる。ルイは星辰の子だ。だから、何もかもを遵える。数多の星々を引き寄せることが出来るのに、ヒカルは時折彼から隠れる。それが苛立たしい。
これがつまらない独占欲であることも承知していた。
これまで。
誰かを独り占めしたいと強く欲することはしなかった。誰も、彼にとってはそれほど必要ではなかったから。
傷つけても傷ついても、それは本人の問題であった。ルイを執着する者には冷淡に扱った。
拒絶するほど強い感情を感じた者も居ない。しかし、ヒカルは相反する同時の感情を彼に与え続ける。ひとつの命題だけではなく、ひとつ片付けたと思ったら、すぐさまもうひとつ発生させる。この掛け合いをいつまで続けるのだろうかとさえ思う時間すらないほどに、頻繁に。

彼の言葉に、うん、と小さく幼子のような返事をしたヒカルの声も小さかった。瞼が大きく震え、彼女は涙を堪えているのがすぐにわかった。先ほど、震えを除去したというのに、彼女はまた新しい震えに酔いしれる。
「ありがとう・・・ルイが居てくれて、良かった」
涙を堪えながらの返事は、震えていた。声が詰まり、唇を噛みしめている。
もう、だいじょうぶだから、と彼女は繰り返したが、繰り返す度に語尾は小さくなっていく。呆れてしまうほど強情なヒカルの強がりに、それでも、躊躇はなかった。

たまたま、居たのではない。

彼女が求めるのはルイ・ドゥ・アルディだけであることを確認知るために、やって来たのだから。とても捻出できそうもない時間を創り上げて、彼はここに居る。バカンスや浮かれるために日本に来たのではない。彼女を妻にするために、ここに居るのだ。完璧な生にする。彼の望んだものはすべて、手に入れる。それがどれほど、誰かを何かを傷つけることもあるかもしれないが。

「・・・怖がるな」
彼は震える彼女の返事を待たずに、そのまま彼女の躰に自分を重ねる。
細い肩を押さえ、彼女を捕まえる。それは陵辱に近い。彼女に赦しは求めない。それでも、彼女は全てが終わると満ちた眠りを貪る。ルイを置いて。彼女は背を丸めて眠る。ルイを拒絶するかのように。ルイの思い通りにはならないと訴えるかのように。

だから、肩を押さえ、彼女を固定する。彼女が誰にも見せない内腿の深くを開かせるために、片脚を割り入れて羞恥で脚を閉じようとする彼女の狭間に入り込み、彼は自分を主張する。彼女が拒んでも・・・中断しない。それに幾度もその機会は与えた。ひとり部屋に戻り、自分の眠りだけを貪ることもできたはずである。それなのに、ヒカルはルイの部屋に来た。それがどういうこ

とか、思い知り学ぶ必要がある。
そう思った。

今度は、深い口付けをする。幾度も、幾度も。その都度、彼女の呼吸が乱れると彼に痺れが走る。ひとつの神経を共有しているかのように、彼女が何を思い、何を感じ、これから起こる長い夜に震えているのか・・・彼はわかっていた。
「あの・・・それなら・・・シャワーを使わせて」
「後にしろ」
彼は即答した。躰を浄めたいというのであれば彼女を解放しただろう。けれども彼女はそうではなく、時間を置けばルイはヒカルから興味をなくすだろうと浅はかな計画を立てている。そのつもりは・・・ない。
彼女の鎖骨をひと撫ですると、今度はそれが先ほどの慰撫と違うことを知らしめるために、彼女の白い柔らかな丘に手の平を伸ばし、そして指を軽く曲げて揉み込む。
唇を重ね、彼女の平穏を奪う。乱れるヒカルは普段のヒカルと違っていた。扇情的で挑戦的で・・・無防備な姿が、彼の淫欲を誘う。誰かに見せることのない、彼女の暗の部分であり、そしてルイはそれを知っている。
猥らで、貪婪で・・そして自分の中には決して誰も入れない人が、彼の妻になる。
アルディ家の花嫁に相応しいではないか、と彼は嘲笑する。

精神が脆いものか、意志の弱い者しか迎え入れないアルディ家の歪んだ欲望は、いつも成就しない。新しい血を入れても、強靭な魂を持つ者は誕生しない。そして、いつも心弱い者だけしか生き残らない。生命力と精神力は反比例するのかと思う程に、うまくいかないから・・・ルイを誕生させたのだ。

彼は口吻を繰り返す。いつが始まりで、いつが終わりなのかわからない程に、それは始まったから。彼女の裸身を愛おしむ。愛でるだけの存在ではなく、彼を苛立たせ歎かせ呆れさせる人物は、彼の中に眠る、征服者としての種を目醒めさせるのだ。
ルイを刻み、彼だけだと何度も思わせる。そのために・・・抱く。
理由はいくらでもあった。彼女を妻にするための理由はいくつも挙げられる。
しかし、一時の享楽ではない。これからは、彼女だけがルイの熱情を受け止めるのだ。それ以外には誰とも肌を重ねない。そうする必要もなかったし、そうする理由もなかった。
滾りを感じる。

・・・ただ、一言、彼女だけに愛慾の情を感じるのだと言えば良いのだろうか。

何でもひとりで抱え込んでしまう。何でもひとりで解決しようとする。
それができる人であれば、彼は愛したりしない。彼自身がそうであるから、同じ者は隣に置か

ない。妻にするのは、ひとりだけだ。ルイ・ドゥ・アルディという男の妻として刻まれる名前は、ひとつだけだ。
それに拘っているつもりはないが、ここ何代もの当主が、妻を複数娶る傾向にある。事実上、同時であったこともあったし、絶え間なく妻という称号を持つ者を据え置くことにしていた者も居る。
神に敬虔であることは求められない。神に誓うという行為に対する権利があるかどうか、だけだ。

一夜、ヒカルを抱くのにこれだけの労力が必要となる。彼の時間、彼の忍耐。すべてが、彼女だけが自由に使うことが出来る。その逆は、あり得ないのに。

■09

生真面目すぎる、とミシェルに言われる事があるが、それはヒカルも同じであった。彼女はいつもルイの愛弄を交わすことも焦らすこともせずに、そのまま受け止めるが、次にどうすれば良いのかわからないという状態であった。
・・・もっと男というものを知って来いと言ったが、それは彼女が決してそうしないと確信していたからだ。そうしないとわかっているのに、そう言ってしまうのはなぜなのか、その時には理由を知らなかった。でも、今は違う。
余所見せずに、ルイだけを偏に受け止める彼女は、いつもルイにだけ自分を開く。
そういうヒカルだからこそ、彼もこうしてパリから日本にやって来てまで、彼女を待とうと思ったのだ。

彼は彼女に愛の言葉を余り多くは囁かない。自国ではそれは珍しい事だと窘められるが、彼は余り多くを語らない。愛している、とか。好きだ、とか。そういう陳腐な言葉で片付けられないほど重いからだ。
しかし、ルイはヒカルがひとりで先に日本に行くと決まった時に、彼女にはっきりと言った。
ヒカル以外の誰かは必要ではない、と。
彼女は少し驚いていた。そして次に、満面の笑みを浮かべて、ありがとう、と言った。ルイはそこで胸の痛みを感じる。彼女は、私も同じよ、とは言わなかったからだ。
人は、誰かと想いが通じ合うとそこで終結してしまうと考えがちで、その先にも煩悶があるのだというところまで考えに及ばずに恋愛に没頭する傾向がある。

彼女の躰が温かくなり、次に熱を帯びて、湿りが始まる。ルイはいつもと違う、彼女の芳香に眼を細める。首筋に、肩に、腕の内側に、彼は唇を近付けて軽く吸うと都度、ヒカルは跳ね上がる。時折小さく声を漏らすのに、それを押し殺すように唇を噛む仕草を鑑賞する。
「ルイ・・ルイ」

彼女が彼の名前を呼び、締まったルイの腕に自分の手の平を添える。止めて欲しいという合図ではなく、それは肯定なのだ。
磁器を思わせる白い膨らみに顔を埋め、彼女を貪る。時折、彼女の躰が躍り上がるが、ルイの腕の下では逃れることはできない。腿の内側を撫で上げ、腰を引き寄せ、彼女をきつく抱きしめる。そして、彼は彼女の上に重なり、また抱きしめた。
「ヒカル」
囁きは、いつしか掠れた声になっていた。呼吸を乱して喘ぐヒカルからの返事はない。いつも、彼女は受け止めるだけで彼に何かを返すことはない。ただ、ルイの重さに耐えかねて彼女は眉を寄せて顔を横に向けるが、彼は彼女の唇を追い掛けて、甘美で扇情的で濃厚なキスを繰り返すので、結果的にヒカルは息苦しさが増すばかりであった。躰の強ばりは消えたが、ヒカルは忘我を懼れている。
ルイは軽く、彼女の髪に自分の指を泳がせる。ただこうしているだけなのに、満たされるのはなぜなのだろう。先ほどまでの苛立ちが、引き汐のように引いていく。首筋に唇を這わせるだけで、彼の躰が熱くなる。徐々に、ヒカルが身を捩りながら彼を求める自分の願いに戸惑いながらもそれを受け入れる様を愉しむ。
誰も知らない、ヒカルの乱れをひとりで、味わう。

だから、彼は続けて彼女に囁く。感謝の言葉はいらない、と。彼女から奪うだけしかできないと昔、言った。それは今でも同じだ。ヒカル・クロスという人物の家族も、国も、過去も、何もかもを奪って、彼は彼女を手に入れる。そして、身体も。すべてを奪い、自分の中に閉じ込めてなお、満たされない。彼女の心が手に入らないからだ。

「何手も先を読もうとするからだ。だから、傷つく」
ヒカルが何か言おうとしたので、彼はそれを唇で塞ぐ。彼女のことだ。煩憂する自分の気を紛らわせるために、彼女をルイが慰めていると思っているのだろう。
彼女の考えていることが手に取るようにわかるのに、ルイの考えていることをヒカルは理解していない。何かを感じることがあるようだが、それから先には進まない。
苛立ちが出てしまったのか、かなり激しい求めであったが、ヒカルはそれにおずおずと応じる。彼女を抱き寄せながら、ルイはこのまま、もう少し力を込めたら彼女は砕け散ってしまうのではないのだろうかと思った。
「・・・先を読むのは、誰にでもできることだ」
彼は彼女にそう諭した。愛を交わすことは怖いことではない。曝け出すのは恐ろしいことではない。実際、彼と彼女はすでに何も纏っていない状態で抱き合っている。ルイがこれほど餓えていることを、ヒカルは、まだ、わかっていない。淫欲の捌け口ではない。彼と彼女はこれから幾夜もこうして過ごすのだから。そのために理由は必要ではない。誰かの同意も賛成も祝福も必要ではない。それなのに、欲深なヒカルは自分達の婚姻に正当な承認を求めて、迷走しているのだ。

・・・わかっている。ヒカルが躍起になっているのは、ヒカルの実家の同意がなければ、ルイの当主就任への欠格条項にあたるかもしれないと思っているからだ。
後々まで禍根を残すことはわかっている。けれども、自分のことよりルイの悲願を達成することの方が大事だと考えているヒカルが・・・そうしたいのだと口にしないから、彼はそれは必要ではない、と伝える機会がない。彼女の考えていることは大体わかっているし、かなりの確率で当たっているのだが、それでもヒカルから口にしないことを先回りして言うつもりはなかった。それでは、自分自身と会話していることと同じである。人形を妻にするつもりはない。

だから、幾手も先を読めたとしても、それが一通りではないことを承知していなければ、軌道修正はできないのだ。問題は、そこに行き着くためにどうするのかという結果をもたらす過程を考えることと、過程から導き出される結論が的確かつ適切であったかどうかということだ。前者は未来を､後者は過去を考察する。幾手も先、というのは未来のことばかりではない。今まで歩んできた過去から推し量れる現在と未来を推測することなのだから。

その先はどうしようと考えながら睦む夜は、いらない。
未来を憂え、手元にある事実だけで紡ぎ出す未来は暗澹たるものであるのだと歎くだけならそれはまったくの無駄である。ルイが居ながら、それはあり得ない。彼は星辰の子だ。これくらいの課題を解決できないようであれば、この先の未来は更に荒んだものになるのは目に見えて明らかだ。
未来を歎くだけ、も。
未来を根拠のない希望で満たすことも、も。
それは人によって違う。けれども、ルイは更に自分で望んだ未来にすることができる。できる、でのはない。そうするのだ。
互いに傷ついて可哀想だと言いながら嘗め合うだけの夜は、いらない。
そこで、ヒカルが茶色の瞳を見開いた。こぼれ落ちんばかりの大きな瞳で、彼の顔を覗き込んでいたので、ルイは唇を閉じた。彼女は乱れた掠れた声で、ルイに尋ねる。
「・・・ルイなら、どうするの・・・」
彼の腕の中で彼女がそう言ったので、ルイは嗤う。幾手も先を見るのは皆ができることで、だからこそ、彼女だけしかできないことを為し遂げろと言っているのに。
彼女の無垢な身体が桜色に染まり、彼の愛を受け入れている最中でさえ彼の考えを聞きたがる。既に彼を幾度も受け入れて、何もかもを知っているはずであるのに、いつもこんな風に初めてルイを知るかのように振る舞う彼女を、どう蹂躙しようか考えているというのに。彼女は、それでも尋ねるのだ。
愚かしい娘だと思うが、それでも手放すつもりはない。彼は、彼女によって再生された。そして、もう幾年も思ってきた未来を実現させる。今更、止めるつもりはない。彼女は、彼が諦めろと言っても、決して諦めない。どんなに満身創痍になっても、他人の為に行動することを厭わない。これほど不愉快な想いをしながらも足繁く通うのは、すべてルイとヒカルの未来のためだ。どんなにルイがもう止めろと言っても、彼女は自分のできることはすべて行ったと感じるまで

は繰り返す。何度も、傷ついても繰り返す。ルイは決して繰り返さないのに、ヒカルは繰り返すのだ。
「オレは」
そこまで言ってから、彼女に深く口付けする。溜息を彼女に流し込む。彼女の指先が震え、身体が揺れて、脊が反れる。口吻ひとつでこれほど乱れる彼女の躰を抱きながら、彼はそっと唇を離す。何も考えずにただ、ルイに委ねれば良いのに。
彼はヒカルに回答した。
目の前の、彼の一手に向かって。
「・・目の前にある手を最高の一手にする。・・・最初で最後にするために」
そう言って、彼は彼女に身体を乗せた。重みでベッドが軋んだが、まったく気にしなかった。
問答の時間は終わりだ。彼は、始める。長い夜を始める。
この言葉の意味がわからなくても良い。彼女を手に入れるために、いつも彼が幾手も先という考えではないことを伝えたから。それだけで良かった。彼女の未来には場合分けは必要ないのだ。ひとつしかないから。だから、目の前の「手」が最高の・・・・そして揺れることのない礎となって、それを積み上げて行く。それが、ルイのやり方だ。常に最高の一手を用意する。そして、その次がないように最後にする。・・・未来永劫。これは、彼が死ぬまで続く。ヒカルが逝っても、彼が生きている限り続くのだ。彼女の心は永遠に手に入らない。それでも良い。こうして、彼をたったひとりだと定めたことをヒカルが後悔しないように、生きる。
すずらんの匂いが立ち上る。ヒカルの体温が上がっているからだ。彼は自分の腕を絡め、彼女の躰に自分を埋めていく。深く、激しく。普段の彼から考えられないような程の強い熱情を滾らせて、ヒカルを抱きしめた。

ヒカル。オレに、溺れてみろ。そしてそれでも・・・懼れるのであれば、もっと激しく抱き、何もかもを吹き飛ばしてやろう。

彼はそう決めて、ぎゅっと眼を閉じたヒカルにそう囁いた。
彼女が彼を蔑ろにした罰を、今、贖ってもらう。
そう思ったのに。彼は、彼女の口から愛しているという言葉を聞くために、幾度も彼女を啼かせる。猥啾で涙させる。陳腐で無価値だと思えた言葉であったのに、ヒカルの唇からそれが漏れて、赦しを乞うまで・・・彼は彼女の躰に自分を沈めていく。
海に潜る。晄の渦に浸る。そして、彼で満たす。
彼にとっての永遠の晄は、星の煌めきを霞ませるほどに強く発光する。けれども、それはルイという彼女の唯一の人だけに見せる秘密なのだ。

彼はヒカルの尖る果実を含みながら、彼女の脚から腰に手を伸ばし、彼女を開かせた。ヒカルが腕を伸ばし、彼の身体にしがみつく。堪えきれない震えが熱を呼び込む。そして、彼はそれが思い描いた通りの最高の一手であることを確認し、薄く嗤った。ヒカル、これからだ。覚悟しろよ

、と呟きながら。

■10　Louis

彼女が寝返りを打ち、身体を丸くしたので、それを合図にルイは身体を起こした。
それまでは彼の腕枕で胸に顔を埋め、静かに眼を閉じていたが、やがてヒカルが規則的な呼吸を始め、身体を動かしたので彼は腕を持ち上げ、彼女の様子を眺めていた。
ルイが眠っていることを確認して、安心したのだろうか。
彼は眼を瞑っていただけだ。ヒカルが眠るより前に、彼が意識を失うことはない。
ヒカルは迂闊だな、と彼は嘲笑した。

深い眠りに入ると彼女はこうして眠る。幼い頃に両親が突然消息不明になった時の心的外傷ゆえである。どんなに満たされた眠りでも、これは昔から変わらなかった。そうでなければ自分を護れなかったのだろう。大人達の思惑に翻弄されながらも、パリに行くと決めた時の彼女はまだ本当に幼かった。

・・・・ルイは細く長い指先を彼女の髪に絡める。
彼女はルイがこうすると落ち着くと言う。指先で眠っているヒカルの頬や目尻に残る涙の軌跡を思い出しながら、軽くなぞる。彼の恋人は強情である割に、涙をよく零す。本人は、泣かないと決めているが、涙を零すばかりが泣くという行為ではない。彼女はいつも泣きそうな顔をして何かを堪えてばかりいる。それを溜め込んで、ひとり深く憂える。
そうして生きてきたが。
・・・彼に頼ることはしないが、最近は、ぽつりぽつりと自分がどう思っているのか話すようになって来た。幼い時から人の顔色ばかり窺って生きているヒカルには劃期的進歩とでも言っても良いような変化であった。

彼女はまったく眼を醒ます様子はなかった。汗ばんだ身体を横たえて、身体を丸くし、ぐったりとしたまま泥眠に墜ちていた。

・・・少し激しくしすぎたか、と思ったが、後悔はしていない。

一度、顔を洗いにバスルームに行き、化粧は拭い落としたようであったが、その後、シャワーを使うと言った彼女を引き摺り、もう一度ベッドに沈めた後は・・・彼女は今に至るまで、寐台から立ち上がることはできなかった。

彼は締まった腹筋に力を入れて、静かに身を完全に起こした。
間もなく夜明けの時間であった。今日は仮眠することもないだろう。ヒカルは今日もクロス家に

行くと言っていたが、彼も同行するつもりであった。プライベートとはいえども時間は限られている。このことだけのために、時間を割く予定にはしていない。世間一般の恋人達の余暇にすることもないが、ヒカルには少し気晴らしが必要であった。どこか、人気の少ない場所に連れて行き、落ち着いたら・・・何もしなくてもどこにも行かなくても、部屋に籠もりきりで一日中抱き合っていたい。必要なのは恋人としての甘い時間ではなく、十分に話し合うだけの時間であった。
そこで彼が嗤う。
・・・一日中、ヒカルを抱いていたいと思うのは恋人同士の世間一般的な時間の過ごし方そのものではないか、と気がついたからだ。

どんなに親密になっても、そんな風に時間を過ごしたいと言われても、彼は首を縦に振ったことはなかった。プライベートを一緒に過ごそう、とねだられてもウイと言わなかった。
それなのに。自分の変化を嘲笑う。ヒカルの来日に同行してまで、自分は彼女とそれほどにしてまで居たいのか・・・と思うと自らの誇り高さを切り売りしているようで屈辱だと思っただろう。・・・これまでの彼であれば。
しかし、見えないところで苛立つより、近いところに置いて苛立つ方がまだ精神衛生上、好適であると思われた。適しているかどうかは問題ではない。彼女の傍で、彼女を労るのはルイだけなのだとヒカルに思い知らせるためには必要な処置であった。

・・・そこで、彼はまた気づく。

自分が、ヒカルと過ごしたいと思っているのだ。
自分が、ヒカルを慰めたいと思っているのだ。

微睡む彼女の白い背中に毛布をかけてやった。
こどものように無防備な状態である彼女の背中は小さかった。
彼の情炎に灼かれたヒカルは、疲弊しきって少しも目醒める気配がない。身体中に鬱血した痕が残り、彼女の上で華開いていた。茶の髪は乱れ、留めピンは散らばっている。シーツは湿り、ルイとヒカルの零した雫が点在していた。

それは極めて淫猥な眺めであるのに、どこか・・・清らかで淫靡とは無縁で・・・愛おしかった。
床にはふたりが身につけていたものすべてが散在しており、彼女が目醒めたら、着る物がないと慌てるだろうと思った。
彼女が眼を醒ますまでに用意しておけば良かった。このホテルを予約することに同意したのはこの苑に多種のすずらんが植わっており、時期的に満開の時期を迎え、毎年の催し物となるほどの規模であるからだ。

・・・彼は身体を屈めてヒカルにキスをする。眠っている彼女の顔は幼かった。
そして、その時のルイの表情が、余りにも和らいだものであるので、それを見た者はいつものルイ・ドゥ・アルディとの違いに驚愕することだろう。幸せに満ちて、そして彼は優しい笑みを浮かべているのだから。いつも孤独で寂寥感に溢れた彼の横顔とは違っている。けれども、それはヒカルにしか見せない顔だ。いや、ヒカルさえ知らない、彼の貌である。

彼は立ち上がると、クローゼットにあった予備のバスローブを取り出した。予備とはいっても、彼女に最初から使わせる予定であったので、それをそのままヒカルの眠っている場所から一番遠く離れた場所に置く。ぱさり、と乾燥した音がしたが、ヒカルはまったく気がつく様子はなかった。

彼女の声が嗄れるほど彼はヒカルを貪った。しばらくは目醒めないだろう。日中緊張した上に、夜中までひとり歩きをし、今に至るわけだから疲弊の度合いは相当なものであると思われた。それでも、彼女はかなり早起きで、これは長年の習慣から来るものであった。今でも、朝早く、その朝の最高の状態の薔薇を用意する習慣は変更されていない。彼女の中に染み付いたものは、消えて無くなることはない。
ただ、今は日本に居るのでそうしないだけだが、ある一定時間を経過すると規則正しく目が覚めるのは変わらないらしい。時差の影響が出ているので、日本時間の早朝に目醒めるとは限らないが、彼女はそこも調整できるようであった。

涙を流し、ルイにもう赦して欲しいと懇願し泣く様は官能的で彼を煽った。
そして彼女が息も絶え絶えになって、ルイにしがみつく力さえ失って、これ以上は無理だろうという極限まで彼女を離さなかった。
・・・慈しみ大事に扱うことも考えるが、そうはしない。彼女の「永遠」が誰なのか、何なのかを刻み込み続ける。もう、どこにも行かないように。・・・どこにも、行けないように。彼以外の誰かにヒカルを抱かせるつもりはない。未来永劫、彼女は彼の伴侶としてあり続けるのだ。
・・・どういう風に行動すれば、優しいと言われるのかは理解している。けれども、彼女にはそうしない。優しいと思われなくても良いと思っているからだ。ヒカルがルイにとって、媚びたり自分を偽ったりすることを必要とする相手であれば、選ばなかった。彼の激しい憤りを受け止め、時には受け流し、そして自分の主張を覆すことのない頑固な人を、彼はこよなく愛しているのだ。誰よりも。何よりも。・・・自分よりも。口惜しいがそれは事実であった。

他者から見れば、良縁であると言われるが、ルイが日本国籍の妻を持つことは最良であるというわけではない。旧家同士の縁組みが一般的であるのに、またもや、東洋人を妻に据え置くことに難色を示す者が皆無であるとは言わない。でも、それを言わせない自信があった。彼女が時期アルディ家当主となるルイの配偶者として必要であるというのは、明らかなのだから。親族会のどんな条件も大抵は呑んできたが、これだけは譲らない。もしこれで難航するのであれば、すべて

を捨てて、分家を作って新しい系図原簿を作る。そう言い切ったルイに逆らう者は居なかった。

・・・結局、彼女を部屋に戻すことはなかった。
彼女が戻った時に、驚かせようと思い、ルイの部屋に来るようにと残したメッセージと伴に、すずらんのアレンジメントを小さなバスケットに入れたものを部屋に用意させたのだが、彼女はそれを見ることもなかった。
すずらんは幸福の象徴であるが、昨晩はそんな気分にもなれないのだろうと思ったからだ。
そして、朝には早起きをしたヒカルが庭園ですずらんを摘み取れるように手配をしておいたが、この様子では目醒める時間にはすべての蕾が開花してしまうだろう、と思った。

彼はひとり、苦笑する。
ベッドから滑り降り、完璧な比率の身体の上にローブを羽織り、彼は彼女を見下ろしていた。
彼女の為に行動し、彼女の為に次の手を考える。それなのに、彼女を抱くためには幾手も先を考えない。
・・・これはもう、ヒカルに溺れているとしか言いようのない事態であった。

そしてルイは彼女の髪から浮き出している留めピンを、取り除き始めた。
髪を引いて彼女を起こさないように。手遊びのつもりであった。
シーツの上に散らばっているそれらを静かに集めるが、そこで、ふと、手を止めた。青灰色の双眸で彼女を見つめ、そして金の髪を掻き上げると溜息をついた。
彼女のことばかりを考えている自分を愚かしいと思ったが、それでも・・・彼女には必要なことであると思うと、仕方が無いなと思う。

しばらく、ヒカルをひとりにする。
けれども、彼女が目醒める前に、戻る。深い眠りに入ったことを彼女の呼吸音で確認すると、ルイはローブを軽く羽織ったままでそのまま別室のバスルームに向かった。目醒めた時に、彼女がひとり残された時に感じる寂しさを、彼女が味わえば良いのにと思う一方で、彼女はまだ目醒めないという確信もあった。
そして、彼は彼女を一人残して、どこかに行くようなことがないとヒカルが信じていることも、知っている。
だから。

彼女の眠りを妨げないように。
彼は、次の行動に移った。
その足取りに迷いはなかった。

まだ、起きるなよ、ヒカル。

そう命じながら。彼は、使うつもりのなかった、別室のバスルームに足を運んだ。

■11

ヒカル・クロスが難しい貌をして主寝室から出てきた時、彼は既に外出用に着替えを済ませていた。煙草に手を伸ばし、銜えたそれに火を付けるところに、ヒカルが出てきた。
正確に言えば、ヒカルの目醒めた気配を感じたので、煙草を吸う気になったというのが正しい。彼女が何を切り出すのか、わかっていたから。
癖の強い彼女の髪は、幾度か撫で付けたようであったがかなり乱れていた。寝乱れた様子を見せるのは恥ずかしいが、やむを得ないというような表情で主寝室から出てきたヒカルに、彼は煙草の煙を吐き出しながら、素っ気なく言った。
「シャワーぐらい、浴びたらどうだ」
彼女は大きめのローブの中で、身を縮ませて戸惑っていた。サイズが合わないのは仕方がない。けれども、その貌が余りにも幼くて、無防備であった。恋人の寝起きの顔を愉しむ者も居るが、彼はそうではなかった。いつ、何時何があるかわからないので、身なりには配慮すべきだと考えている。けれども。ヒカルの顔は晴れやかで困惑と疲労が残っているものの、愁いは残っていなかった。
その代償に、彼女の躰には濃淡様々に彼の残した刻印が残っているはずであった。
朝の白い陽光が射し込んできている部屋の眩しさに、ヒカルは眼を細めて何度も瞳を瞬かせていた。

ビジネスデスクと椅子が置かれているそこで、しばらくメールチェックをしていた。けれども、その他に今日の予定を書き込んでおくことにする。それから昨日の報告も。
彼の行動予定は系図原簿とリンクしており、体調管理を今でも必要とする彼に課せられた日課であった。それが厭わしいとは思わないが、昨晩の出来事を、どう表現を変えて書いても「ヒカル・クロスと共寝」という事実しか書き込めないことに苦笑いする。
彼はラップトップ上のプログラムを一時、スリープ状態にさせる。
「おはよう、ルイ」
彼女は小さくそう言った。気恥ずかしさが先行しているようだ。プライベートの時間、ルイの方が早起きしたことはなかった。だから、今回の寝坊に罪悪感を感じているようであった。もっと早く起きていれば、ルイと過ごす時間も増えたわけだから。
・・・そう思うのであれば、深夜に帰ってくるという行為を反省しろ・・・彼は心の中でそう思うが、口に出さなかった。彼女と過ごす時間が惜しくて、眠らなかったのだとは言わない。
「間もなく朝食の時間だ。その格好でいるのか？」
彼は冷たくそう言った。彼女がシャワーも浴びずにこちらに顔を出した理由も知っているというのに、敢えて嬲るようにそう言ってのける。

目醒めた時に、ルイが居ないので、ヒカルは慌てて起き出したのだろう。
そして、一度はバスルームを開く音がしたので、そこで・・・自分の有様に気がついて、そしてこちらに赴いたわけだ。
わかりやすい行動しかしない彼の恋人をルイは鼻先で遇った。素っ気なく抑揚なく返事をするが、それはヒカルが羞恥で畏縮しているからだ。だから、いつも通りにする。
「ルイは、眠らなかったの？」
おずおずと尋ねるヒカルに彼は即答した。
「正確に言えば、眠れなかった」
そのいらえに、ヒカルが今度は笑った。ヒカルの用意した部屋では眠れないと彼が抗議したからだ。どれだけ素晴らしい部屋であったとしても、彼は眠れない理由があって、それがヒカルのせいだとルイが責めているから。だからヒカルは苦笑いを浮かべるのだ。

彼女は素直に謝罪する。
「・・・留めピン、散らばったままだった。・・・ごめんなさい」
彼女は自分の髪留めがルイの気に触って眠れなかったのだ、と信じて、そこで謝罪した。ルイは否定しない。確かに、彼女の癖の強い髪を留めるためのピンは点在し、彼の眠りを妨げた。それは事実だが、それだけではない理由があったことをヒカルに教えてやる必要は無かった。
気にするな、とは言わなかった。今後、彼と共臥をするのであれば、それは配慮して欲しいことであったからだ。けれども、彼女をバスルームに入れることをせずに、引き摺るようにしてベッドに戻したのは、他ならぬルイであったので、そのことについて責められると話が長くなると思い、黙って居ただけであった。

そして、そこで、ヒカルは遠慮しがちに、言いたいことがなかなか言えない様子であったが、やがてぽつりと言った。自分の髪をつまんで、彼に差し出しながら。
「ルイ、これ・・・」
もっと近くに寄って来いよ、と思いながら・・・彼はヒカルに応じる。

彼女の髪には、すずらんが散っていた。今朝、最高の状態のすずらんである。
まだ朝露を受けて湿っており、先ほど括り付けられたことが明白であったそれらに、ヒカルが驚いて顔を出したのだ。
・・・彼女を驚かせる、というのは至極簡単だが、思った手順で驚かないこともある。彼女が一度自分でチャージした部屋に戻れば、こんな手間が増えることもなかったのに。しかし、どこにも立ち寄らずにルイの部屋に来たのだから、これは必要不可欠な変更であると言える。
「オレを寝不足にした仕返し」
彼がそう言ったので、ヒカルの顔は一瞬で真っ赤になった。昨晩の媾合のことを言っているのかと思ったらしい。その場に立ち尽くしたままなので、彼は追い打ちをかけた。
「アルディ家の家訓では、やられたら・・・倍返しだ。ヒカル」

彼が自ら選んだすずらんの華を、彼女の髪にそっと括り付けたのは先ほどのことだ。それでも彼女は目醒めなかったが、高雅で甘美な香りが、彼女の目覚めを促した。いくつか留めピンに絡めるだけで良かった。彼女の茶の髪によく映えて陽光の下ではかなり・・・花嫁の髪飾りに近くなるだろう。
そしてそれは思った通りであった。彼女は化粧もせず、目醒めたばかりで、目元が朱に染まっているがそれでも美しかった。
広がった茶の髪に点在するすずらんの華が、合歓で与えられた艶香を含むヒカルに清らかさを付加していた。

彼女は感涙に耐え、少し俯いていた。

ルイは黙って、その様子を観察していた。彼女はいつも無垢で純真で涜したくなるほど透明だ。いくら、彼で満たしてもそれが変化しない。

あの薔薇の苑で最高の状態の薔薇を探す彼女と同じであった。場所がどこでも同じだ。ヒカルは・・・いつもの通り、彼女の微笑みを届ける。最高の状態の薔薇が欲しいのではない。それを届けるヒカルが・・・欲しい。

ヒカルは次にビジネスデスクから少し離れた、部屋の中央に設置してある応接用のローテーブルの上にあるものを発見したようであった。
素っ気ない挿花であった。昨晩、彼が飲み干したペットボトルに水を入れて、そこにすずらんを活けてある。それだけであった。けれども、茎が細く束にするには相当量が必要なそれが、ぎっちりとボトルの口を塞いでいたのでヒカルは絶句していた。
薔薇を摘む習慣のある彼女は、茎の細い華奢なすずらんをこれだけの束にすることが、どれだけ大変な作業であることを知っているからだ。
彼女がそれを凝視していることを知り、彼はヒカルに話しかけた。
「花瓶はあとで持って来させるが、それまで保たないだろうな」
「うん・・」
彼女の、感極まった声が響く。朝摘みの花を、ルイから捧げられたヒカルは感激のあまりに声が詰まり、そしてルイにありがとう、と言った。
そうだ。彼が、誰かの為に眠らないで花を摘む。そして、戻って来てまだ眠っている恋人の髪にそれを絡め、目醒めの時にどんな反応をするのか、待つ。それは、誰にも行わないことである。誰にも・・・そう、ヒカル・クロス以外には。
彼女は誰かに祝福されたいと願っている。自分の両親がそうであったように。けれども、皆に祝ってもらえる環境ではない。それでも・・・それでも、ルイの元から離れることはできないのだ。それを知って、彼女はそれでも・・・ルイの傍に居るということの覚悟をして欲しかった。
エロイーズのように・・・彼の祖母のように、壊れてしまうような者は必要ではない。ヒカルは

、そうならないように遺伝子操作されて生まれて来た。ルイと同じだ。だからこそ、彼女の未来も見渡せるのだ。安心したいから安全な者を選ぶのではない。同じ時間を多く共有した者だからこそ、彼の何もかもを今、曝け出せる。彼は誰かのために・・・眠らずに花を摘み取る。
誰かと時間を過ごすことなどは考えていなかったのに。彼は、ヒカルのために・・・・こうして彼らしくないことをする。

「ルイ、私、頑張るね。今日が駄目なら、明日がある。昨日が駄目だったのなら、今日が何か変わるかもしれない」
ヒカルの言葉に、彼は嗤う。まったく意味の無い根拠のない決意表明であった。けれども、それが彼女の精一杯であるのだと思う。
「楽観的過ぎるのも、良くない傾向だな」
彼はそっと言った。横を向いたので、前髪が揺れる。どういうわけか、居心地が悪かった。ヒカルに見られていることで・・・どうにも、平静を失いそうになる。
彼の素っ気ない態度に、ヒカルは動じることもなく、そうだね、と彼女は笑っただけであった。
「ルイ。・・・今日、昼頃には戻る予定だから、その後、庭を散歩して・・すずらんを一緒に観ない？それから・・・」
髪にすずらんを散らしたままで、彼女はそう言ったので彼は冷笑する。ひとりで行かせるつもりはなかった。何のために、彼が朝から外出用の服装をしているのか、彼女はまったくわかっていない。
「まずは、することがあるだろう」
それで、ヒカルはようやく気がついたようであった。彼女がまだ、昨晩の名残を残したままであることに。彼女が、まだ・・・・何も用意できていないことに。
いつもの彼女であれば、顔を赤らめて何が起こったのかを反芻し、そして薄暗がりに飛び込むことであろう。けれども、今日の彼女は違っていた。
ヒカルは自分のこれからの予定をそこで初めて考え始めたようだ。
溜息を漏らし、途方に暮れる様は、彼の予想通りであった。
「服は間もなく届く。荷物ごと。行き来するのは時間の無駄だ」
ルイがそう補足してやると、彼女は安堵した表情を見せていた。彼に抜かりはない。手配済みのことを告げるのはやや退屈であったが、彼女が次に何を着るのか・・・それは尋ねてみても良い事項だと思った。
眠れないのか、眠らないのか・・・彼は少なくとも、このプライベートと言っている期間、いつもと違う自分を見つめることになった。それが良いことなのかそうではないのかは判別をつける必要もないが・・ただ、彼女の笑顔と寝起きの顔を最初に見るという風景を、日本で見ることが出来た。それだけでも収穫だと思うことにする。

■12　君影草～muguet～

ルイが彼女から視線を外し、メールとニュースのチェックのためにラップトップのスリープ状態を解除し、報告書のウインドウを非表示にしたところで、ヒカル・クロスは言った。
「バスルームを使わせてね」
間もなく、朝食や彼女の部屋の荷物が届くはずであった。その時に寝乱れた姿で応対させはしない。彼女も心得ているようで、すぐに準備するために気持ちを切り替えているようであった。アルディ家のしきたりを熟知しているヒカルには、ひとつひとつ彼の習慣について教え込む必要が無い。だから楽だというのではなく、返ってそれが無言の了解を強制していることになっている。気難しいルイの、不機嫌な朝に付き合うことができる者は居ない。だから、彼は誰とも夜を越さないことにしていた。気まぐれに見えるようで、各々に意味がある行動について説明をしなければならない時ほど億劫な時間はないからだ。
ヒカルは、髪に残っているすずらんの花のついたピンを丁寧に取り外しながらバスルームに向かおうとして、そして何かを思いついたように足を止めた。
ルイは気がつかないふりをしていた。彼女の姿が見えなくなるまで、自分の神経が彼女に向いていることなど、彼女は気がつかない。そしてそうしている自分を悟られるくらいなら、最初から見ないことにするという程には彼の誇りは存在し続けているのだから。
灰皿に入れた煙草から煙が僅かに上っていく。朝日の中で、それは靄のようであったが、すぐに霧消した。まるで、彼の憂いのように。跡形もなく、消えて行った。

今日の行動予定を立て直し始める。彼女に同行するだけではなく成果を出して戻ってくるつもりだ。たとえ、どんなに詰られたとしても彼女は彼と居る事で、自分の考えを貫くことを改めて決意するだろう。もう、彼女ひとりの問題ではないのだ。

考えに耽るルイの耳に、軽い走音が聞こえた時には、それは突然降り注いできたので、顔を上げた時には、もう・・・彼は彼女に捕らえられていた。
「ルイ」
ヒカルの声が聞こえて・・すずらんの微香を感じる、と思った時には彼女の唇が彼の薄い唇に重なっていた。
朝日を背にして、彼の掛けている椅子が軋む。目の前が、彼女の茶色の髪で広がり、すずらんが目の端で揺れていた。
軽い口付けであったが、ヒカルからキスをすることはなかったので、ルイは少しばかり驚き、今度は彼が身を固くする。
彼女には理屈は通らない。思いついた時に、思いついた行動を実行する。

・・・昨晩、あれほど彼女を蹂躙したというのに、彼女はそれでも変わりなく、いつものように彼に微笑む。
思考の途中で強制的に呼び戻されたので、彼の頭はまだ痺れていた。ヒカルのキスひとつで・・・彼は思考の浮沈を中断させられる。
ヒカルは自分の都合で彼を振り回す。

けれども・・・抗えない。
彼女の唇は甘く、柔らかく、そして慎ましかった。歓楽で戯れるような、そんな口吻ではない。
ただ、あたたかく、優しい。
彼女の閉じた睫が僅かに震え、頬が羞恥で染まっている。彼はそれを見るとそっと青灰の双眸を閉じて彼女の温度だけを感じる世界に入り込む。

ヒカルが顔を上げると、そこには既に眼を開いて、気恥ずかしそうにルイの顔を覗き込んで微笑んでいた。
彼女の笑顔が見たくて、自分が何をしたのかを知る。
夜明けの苑に彷徨い出て、彼女が夜にひとり歩いた路を辿り、許可を得てすずらんを摘み取る。
普段の彼では絶対にしないことであった。
涙が見たいのではない。ただ・・・微笑んで、こうしてルイにだけはにかんだ顔を見せるヒカルを、彼のファム・ファタルに定めてしまったのだから。

すずらんは、別名「君影草」と言う。・・・古くは「君懸草」と言い、項垂れる花瓣が誰かを恋い焦がれる様に似ているとか、懸想する自分自身の胸を押さえる姿に似ているとか・・・様々に言われている。けれども。
今、まさしく彼女は自分の頭を垂れて、彼に向かって唇を落とした。
その様は、まさしく・・・彼女の髪に散り、デスクの上で華開くmuguetそのものであった。

彼の永遠の晄は、淡く笑う。まるで、すずらんの花のように。
「まずは、したいことをしてみた」
彼女はルイに囁く。けれども、自分でそう言ったのに、自分の言葉に羞恥を感じ、彼女は落ち着かなさそうに唇を噛んだ。ルイの顔を覗き込んだかと思うと、彼女は急に視線を反らす。まったく理解できない人だ、と思ったが、それは嫌悪ではなかった。萎れていたかと思えば急に希望に満ちる。彼女の感情は目紛しく変化するが、決してルイに感情を剝き出しにすることはなく、いつも一歩引いている。
それなのに、今朝に限っては・・・彼女は自ら彼に唇を寄せてきた。

ルイが何も言わないでいると、気まずくなったのか、少し早口で彼女は当初の目標を口にする。
「次のやることは・・・シャワーよね」
彼女は頬を朱くして、肩を竦め、顔を横に向ける。
・・・けれども、それより先に、ルイがヒカルの手首を掴んで引き、ヒカルが驚いて自分の方に手を引こうとしたものの彼の力に負けてルイの膝の上に乗った。
ルイ、と困惑したヒカルの声が耳元で聞こえるが、彼は彼女の手首を掴んだままでそれを無視する。
彼女から仕掛けてきたのだ。

彼女が、ルイを訪ねて来たから。彼は彼女を帰さなかった。それに彼女が反撃したのだと思った。・・・ヒカルからのキスで、少なからず彼は驚いた。心を揺らされた。それは今までにないことで、彼はそれに対して報復する権利がある。
予期せぬことには対応できる余裕を持っているつもりであった。
けれども、彼女は乱暴に彼に入り込んできて､掻き回していく。彼の予定も、予測も、何もかも。だから、彼は彼女の襲来に受けて立つ。それが、家訓だからだ。

彼は彼女に囁いた。綻びながら。その表情に、今度はヒカルが驚く番であった。
彼はいつも無表情に近いが、こうして笑むこともできる。いつも、必要が無いからそうしないだけだ。

「ヒカル、倍返しには全然、足りない」
彼女の腰を抱き、腕を伸ばして彼女の顎を捕らえ、引き寄せる。こんな軽いキスで終わるつもりなのかと思うと、ヒカルの稚拙さに呆れるばかりであった。そして・・・ルイの端整な貌に、彼女は眼を伏せながら顔を寄せる。ルイに促されるままに身体を屈めて、彼に唇を重ねる様は・・・花嫁との誓いのキスをする時のように厳粛で静かで清らかであった。
彼は顔を上げて、膝上の彼女と重なる。
煙草の味と混じり、彼女の唇を味わいながらも彼は彼女の腰と背中を強く抱きしめた。次に彼女の唇に浸る。幾度も、幾度も。
そして彼女が彼の首に腕を回し、熱を帯びてくる様を感じながら、彼は・・・微笑んだ。
彼女が、愛している、と彼に囁いたからだ。

彼に首を傾けるすずらんのような恋人の仕草に、ルイはただ・・・昂揚する。どんなに難解な数式を解いても、どんなに強敵と言われる相手を打ち倒しても、味わうことのできない満足感がそこにあった。

来訪者を知らせるチャイムが鳴ったが、ルイもヒカルもそれにすぐさま応じることはなかった。激しく抱擁していたからだ。ヒカルが身体を離そうとしても、彼は赦さなかっただろう。そして、彼はヒカルを抱きしめながら、彼は心の中で言った。ああ、オレもだ。ヒカル。穢してしまいたいと思う程に。誰にも関心の無かった彼が、唯一執着する相手として認めざるを得ない。しかし、それが口惜しい。苛立つ。けれども、突き放すことは出来ない。

彼女の手には、先ほど自分の髪から解したすずらんの花が握られていた。
花嫁のブーケには華奢すぎるが、彼女は既にルイの妻である。誰にも誓わなくても、彼と彼女の中では、ふたりはすずらんの花に誓いを立てた者同士であった。

彼女に、ずっと言わせ続ける。思わせ振りな行動も、彼女を不安にさせるような言葉も・・・必要があればその都度、生み出す。けれどもそれだけにはしない。彼女を繋いでおくために、彼は

こうして自分の時間を割いて彼女のために行動する。
来日することも、クロス家に同行することも・・・彼女のためにすずらんを摘み取ることも、彼には苦ではなかった。

憎らしいが愛おしい。乱してみたいが清らかなままで居させたい。相反する愛のパラドクスに、彼はただ、艶笑する。
解けそうで解けない難解なこの問題を解けたのなら・・・彼はどこに行くのだろうか。どこに、行き着くのだろうか。

滾る情火に灼かれながらも、ヒカルのキスを受けながら・・・彼は青灰色の瞳を閉じた。

これからの困難は、彼にとってはさほど難しいことではなかった。乗り越えられない問題ではない。しかし、それはヒカル・クロスという永遠の晄が存在するから乗り越えられるのだ。

これを愛と言うのであれば。
確かに・・・・
彼は愛し愛され、そしてその歓びで今、微笑んでいる。

君影草の花言葉は、「幸福」・・・・

彼女がこうして彼にキスを落とす限り。
彼は、すずらんの花を捧げ続ける。
薔薇だけではなく、世界中の彼の知るすべての花を捧げる。

最愛の人と、これからを歩むために必要なものは用意する。
最愛の人が彼に微笑むのであれば、彼は何でもする。
束縛と言われても良い。干渉と言われても良い。ただ、必要だからだ。

・・・ああ、参ったな。

彼は嗤う。
彼はもう、彼女に倍以上の仕返しをしなければならないほど・・・彼女に夢中なのだ。

今日の行動予定の書き出しをどのように書くか、彼は考え始める。
どの項目にも、ヒカル・クロスの名前を記載することになりそうであった。

(FIN)

■01

ルイ・ドゥ・アルディの様子がいつもと少し違うな、と感じた。
彼はいつも鉄面皮でありすぎると教育係のミシェルに揶揄されるほど表情を変えることはない。たとえどんなに腹立たしいことがあったとしても感情を露わにして我を忘れるような行動は愚の骨頂だと思っているからだ。

それはヒカル・クロスがルイの部屋に立ち寄った時のことである。
ここは慣れ親しんだアルディ邸ではない。ここは日本のホテルであった。
インペリアルスイートは、ひとりで使うには広すぎるが、ルイ・ドゥ・アルディの来日となればこの程度は要求して当然だということなのだろう。ただ、入るだけでも相当の手続きを必要とされる。
ヒカルが来日するときには、ホテルを取ることもあったが、母方の実家に滞在することもある。今回は長居できない事情もあるため、結局、ホテルに泊まることになった。
ヒカルはもっと小さい別のスイートに部屋を取ってあった。・・・自分には分不相応である豪奢な場所を専有しても、ただ気詰まりするだけだ。それなら、庭の見える部屋で過ごしたいと思っていた。

一足先にヒカルが日本に到着し、先ほど会食を兼ねた用事を済ませてきたところである。
そのままチェックインの手続きを行うと、ルイがすでにこちらに入っているのだと伝言を受けて、自分の部屋に入らずにまずはルイに会いに来たのである。
時差の影響もあったが、今日は多忙であったので、彼にメールも電話でできなかった。忘れたわけではないが、ヒカルの集中が欠けている様子を快く思わない者にいらぬ感情を与えることはなかった。

大きなエントランスを抜けると、入ってすぐの場所には大きなソファがあり、右手にはミーティングスペースやビジネススペースが各々独立して設置されていた。ゲストルームもあり、左最奥の主寝室と対極にあった。人気の無い各部屋には最小限に抑えられた照明が灯り、幻想的な空間になっていた。
・・・これだけの部屋を何に使うのかという問いはしない。
完全な静寂の中でしか眠れない彼には必要な空間で、そしてここは・・窓から見下ろす庭園の風景が素晴らしいのだ、とヒカル・クロスが昔に何気なく言った事を、ルイが覚えていたからなのだと思うと、はやく彼に会いたいと思った。

中央の居間を抜けると、主寝室に入る前にウォークインクローゼットとビジネスデスクにチェアがあり、その上には投げ捨てられたかのように無造作に置かれたスーツにシャツ、タイが放置されたままであった。
すぐに吊り下げなければ皺になってしまう。彼のオーダーメイドの服は手入れが難しく、そうなってしまえばこのホテルのクリーニング技術だけでは間に合わないほど大変な状態になってしまう。しかし、ルイはもしそんな状態になってしまったのであれば、迷いもなく捨ててしまうのだろうと思った。
彼にはあまり執着がない。元々、そういう風に育てられたからということもあるが、最近になって更に拍車がかかったような気がするのはヒカルの気のせいではないはずだ。
ビジネスデスクの上には、薄型のラップトップがあって、灰皿には幾つもの吸い殻があった。ルイがいつも使っているライターが転がっている。

日本に来てまでも、仕事をし続けるルイにプライベートはあってないようなものだ。
けれども、今回は完全にプライベートだからと言い置いて出発してきたはずであるのに、メールのチェックだけは欠かさないようであった。律儀で真面目な彼らしい行動であるが、何もかもを忘れてしまえる環境が彼には存在しないし、これからもそうなのだと思うと胸が痛んだ。

ヒカルが入ってくるのと、同時であったようだ。
左手からシャワーブースから音がして、ブースから出てきたルイに行き会った。
「・・・戻ったか」
彼はルームパンツを履いただけで、上半身は剝き出しであった。バスタオルを肩に置いて、金の髪はまだ濡れており、乾いた時の色より少し濃かった。
青灰色の双眸は切れ込みが深くなり、ますます上品で憂えた感じを醸し出している。
冷たいと言われる表情の乏しい顔であるが、それが彼の美貌を際立たせている。
尖った顎に、精悍な頬、長い睫、首から下の曲線は、完全に管理された均整の取れた、としか言いようがない黄金律さえ持っているしなやかさがあった。
締まった腰の筋肉さえ美しかったが、濡れた体から立ち上るのは湯気ではなく、大人の男性の艶香であった。
・・彼は決して笑わないわけではない。ただ、極端に無口なのだ。

ヒカルは顔を赤らめて、横を向いた。彼にとっては、こういう姿を見せるのは苦にならないかも知れないが、ヒカルはまだ、慣れなかった。
「明日もう一度行く」
「門前払いではなかったようだが」
「ちょっと行き違いがあって」
ヒカルはぎこちなく笑った。自分の言葉だけではなく、ルイが金の髪の下からじっと・・・ヒカ

ルの様子を観察しているのがわかって身を固くした。
彼の前では、隠し事はできない。
ヒカルは手持ちの小さな手提げ鞄をビジネスチェアに置いた。
彼が湯上がりの時には、必ずミネラル・ウォーターを飲むことを知っていたので、常温にしてあるペットボトルを取りに、ミニキッチンに向かう。カウンターの上には、ペットボトルが半ダース、きっちりこちらにラベルを向けて並べられていた。

■02

並べてあった一番端のものを取り、ルイに持っていく。はい、と差し出したが、彼は無言で腕を伸ばし、それを受け取るだけであった。
ヒカルはそこで自分がきちんと説明をしていないので、彼が話を始めるつもりがないのだと知り、困って眉を寄せた。
結わえた癖の強い茶の髪の毛が重く感じる。
前髪が少し伸びて、額を露出させていた。首を竦めて、彼女はそのままルイと同じ様に無言でキッチンに入り手を洗った。
「ヒカル」
よく磨かれた水気のないシンクに水が零れ、ヒカルは手を洗いながら、ルイの様子を窺った。

彼の言いたいことはわかる。隠し事はしないようにしよう、と話し合って、そしてヒカルは承諾したのにもかかわらず、ルイに報告することを躊躇っているからだ。それを無言で咎めている。

静かな部屋に、水音が広がる。
ヒカルは下を向いて、キッチンの照明も点けずにただ、両手を念入りに擦りあわせた。
好ましい報告であれば、真っ先にルイに喋りだしている。けれども、ヒカルが満面の笑みで彼に報告を始めない、ということは、好ましくない結果であるからだ。

「ヒカルの口から聞くのと、オレが今から電話して確認するのと、どちらを希望する？」
かちり、とペットボトルの蓋を開ける音がして、彼が水を一気に飲み干す音がした。
同時に、ヒカルが水を止める。カウンターの縁に両手を添えて、彼女は下を向いたまま、唇を強く噛んだが、一度だけ深呼吸すると、表情を明るくさせる。
目の前に立っている、星辰の子と呼ばれる人に、努めて明るく報告を始めた。

「絶縁を覚悟で、クロス家の権利を全部放棄しろと言われた。それは構わないのだけれ
ども・・・」
彼女の顔が曇る。こういう話は、早々に話をするべきではない。明日の朝にでも、ゆっくりと話をしようと思っていたのに。ルイの前ではどうにも堪えがきかなくなってしまう。それまで我慢

していたものが、一気に放出されてしまいそうになった。
自分の中に、こういう感情が生息していたことすら彼女は戸惑っていた。
言葉遣いは丁寧であったが、理不尽で無情な言葉の数々に晒されてきたばかりであった。
会食といっても、まったく喉を通らなかった。ただ、一方的に責められるだけ。しかも、そこには口答えしてはいけない雰囲気があり、彼女は一切主張をすることなく今日という日を終えてしまったのだった。
あまり愉快な話ではない。だからこそ、ルイには聞かせたくなかったのだが。
「ヒカルの細胞の使用権を主張してきたのだろう？・・・考えそうなことだ」
ルイは嘲ら笑った。

シャルル・ドゥ・アルディとカズヤ・クロスが無二の親友であったのは遠い昔のことである。そのカズヤ・クロスが不幸な墜落事故によって消息を絶ち、この国では死亡されたという扱いになっている。そうでなければヒカル・クロスの監護権もシャルルは入手できなかったし、彼女が成人するまでの間の様々な手続きに、法定代理人であるクロス夫妻が「不在」という扱いでは煩雑になるという理由からだ。
ヒカルではなく、クロス家が死亡の扱いにしてしまったことを、シャルル・ドゥ・アルディは今でも憤慨している。正確に言えば、クロス家の長女夫妻に、だ。
ヒカルの祖父は失調しており、会長という名誉職に就いたとたん、クロス家の者はそれまでの方針を一変させてしまった。
先見の明があり、事業を拡大させることに成功したのかもしれないが、家族は完全に破綻した。ヒカル・クロスを物品のように扱い出したからだ。
今、全世界で再生医療の常識が覆されようとしている。それこそ、毎日のように新しい技術が開発されようとしている。そこに必要不可欠なのは、ヒカル・クロスという母床である。
・・これは、彼女が生きている限り続くことだろう。そして、死んでもなお、冷凍保存された細胞が存在するのであれば、彼女は永遠に・・・個としては扱われない。
それを防ぐために、アルディ家が全面的に開発を制限してしまっている。いつかは、その制限が解除されることもあるだろうが、まだ、それは先の話だ。それを独占しているとして不当な訴えを起こし、侵害していると言い張る彼らには、ヒカルと同じ遺伝子を持つ者はひとりもいない。

彼女が今、日本に来て顔を曇らせているのは、フランスに永住するために手続きを進めているからだ。ルイとの結婚のためには、必要な手続きであった。事実婚でも良いと言ったのだが、それは許さないとルイに拒否された。
アルディ家の当主はランスの教会で式を挙げる。そして、ルイは挙式後に当主に就任する。日本の一子女を妻にすることに、アルディ家の親族の反発は皆無だったということはあり得ない。自分達の都合のよいように飼うだけと思っていた東洋人の娘を妻にするというルイには、たくさんの婚約者候補がいる。
けれども、ヒカルはルイと幼い時から過ごしてきた娘であり、彼女の持つ莫大な資産価値を天秤

にかけた親族会は、ヒカルが日本の家族と完全に決別することを条件に、結婚を許可したのだ。

「イケダ家は、何も言わなかったのだけれどもね」
彼女はうっすらと微笑んだ。母方の実家とは、どこに居てもヒカルはヒカルだからと言ってくれた。自分が望むのならそうしなさい、という放任に見えるがヒカルを尊重した配慮に、ただ、項垂れるばかりであった。それだけが救いだった。

■03

「これで筋は通した。日本式のやり方には辟易するが。・・・ヒカルは成人しているし、問題はない」
ルイはそう言うが、ヒカルはやはり、そんな状態ではこれから先も何かにつけ衝突することは目に見えているので、できれば、ここで解決しておきたかった。
ヒカルの心中を察したのか、ルイは不機嫌そうに言う。
「血が繋がっていてもそれを根拠にして理解することはできない。それはヒカルが一番よくわかっていることだろう」

ひとつひとつ、彼に報告するまでもなかったけれども、それでもヒカルを沈鬱な気持ちにさせるには充分な会合であった。親族の再会という喜ばしい儀式ではなかった。
あまり多くを語りたくなかった。思い出すだけでも、気鬱になる。
彼女は怒りを露わにすることはないが、ただ、あからさまな憎悪に近い強い感情を目の当たりにしてただ、ひどく驚いた。

強い感情にあてられて、ヒカルがルイの顔を見て落ち着きたいと思っていることも、彼に心配をかけたくないと思っていることもみんなお見通しなのだ。

「そうだね・・」
彼女は濡れた手をそのままに、俯いて深く考えに沈んだ。
どうしても彼に笑顔を向けることが出来ない。やはり、立ち寄らずに・・自分のへ部屋に入った方が良かったのだ。しかし、今更、後悔しても彼に対してなかったことにはできなかった。
・・・すると、ルイはペットボトルをカウンターに置いてキャップを放り投げた。
からん、と小さな音がする。
「ヒカル」
ルイは彼女の背後に回り込むと・・・持っていたバスタオルを彼女の両手の上に置き、軽く包んで自分の手を上に乗せた。

・・・彼の胸を背中に感じ、ヒカルは唇を横に引き結ぶ。

彼はヒカルの事をとてもよく観察している。こんな風に表情を曇らせているのは、それまでの愉快ではない待遇に気落ちしているのではなく、ルイにそんな表情を見せるくらいならルイの部屋を訪れなければ良かったと思っていることまで、見抜いているのだろうと思った。

でも、抗えないのだ。

彼なら、どんなに遅い時間になっても彼女を出迎えただろう。
「濡れたままにするな」
彼が耳元で囁く。長身を屈めて、彼女の手を優しく包んで湿り気を拭う。
彼女の腕がルイの引き締まった腕に触れて、気恥ずかしかった。彼は何もかもが完璧で、動作が美しい。細く長い指先が布を隔てて彼女の手の平に重なり、ゆっくりと擦る仕草が・・・息が詰まるほど妖婉であった。
親指の腹で彼女の手の甲を押さえ、指先で圧迫しすぎないように彼女の指の上を踊る。

・・・静かな部屋で、ヒカルの破裂しそうな心臓の音が響かなければ良いのに、と思った。

「誠意を込めて、説明すればわかり合える。諦めるのは・・・はやいと思うの」
彼女は慌てて、声を詰まらせながら、とても滑らかとは言えない口調で早口で言った。
・・・彼が触れている背中が灼けそうなほど、熱くなっていたから。

彼女は濃いチャコールグレーのワンピースを着ていた。背面にひとつだけ、薔薇の飾り釦がついているだけのごく質素な服装であったが、それは贅を尽くしたものであり、彼女の体型に合わせて採寸されたものである。・・・始終穿刺痕を残している彼女のために、腕を露出しないでも不自然にならない程度に季節感を出すものとして、用意されたものだ。
華美ではなくそれでいて貧相にならないように配慮されていた。靴も踵の幅の大きいものの高すぎることもなく、彼女の姿勢の良さを強調していた。茶色の癖の強い髪は束ねられて隠しピンで留められており、化粧をしなくても彼女の滑らかな肌は十分に白かった。
彼女がクロス家に向かうときはいつも緊張する。少しの粗相がアルディ家の粗相になるからだ。
どんなに見かけは厚遇されたとしても、視線は冷たかった。
クロス家には、何の苦労もなく恵まれた娘が勝手なことを言い出した、と思ったのだろう。自分には言い分があるが、同じ様に相手にもヒカルに対して思うところがあるのだ。
ルイはその礼装を良いとも悪いとも言わなかったが、いつも皮肉を言う彼が何も言わなかったところを見ると、及第点ではあったようで、ヒカルは褒められているわけでもないのに嬉しくなり、少しばかり浮かれた気持ちでクロス家に向かった。
そして、今に至る。
・・・本当は、もっと早く戻って来ていたのだが、どうにも気持ちが沈みがちであったので、ホ

テルの庭園を散策していた。だから、これほど遅い時間になってしまった。

ルイは彼女の背を抱きながら、後ろから頬を寄せる。そして彼女の頬に、自分の頬をそっと押し当てた。
「夜風は良くない」
彼女がいままでどこに居たのか、わかっているような口振りであった。

■04

彼の金の髪の湿りと重さを感じ、ヒカルは身を竦めた。けれども、彼は広い胸を彼女に押し付けて、彼女を覆う布の質感以上の・・・彼女の肌の熱を確かめるように背を屈めた。
「ルイ・・・」
逃れようとして、彼女が体を動かそうとしたが、彼は重ねていたタオルの上から力を込めると、彼女の手首を自分の手の平で包み、縛めた。
首筋や顳顬に、ルイの温度を感じる。彼が頬を押し当てて・・・ヒカルに肌を重ねようとしていた。
肘がぎゅっと締まり、体が強ばる。怖いのではない。ただ・・・戸惑っていた。
彼が、とても優しいから。
彼が優しいことは知っている。いつも、彼女に優しい。
冷たいけれども、他人に無関心だけれども、ルイはこうしてヒカルにはきちんと向き合ってくれる。自分自身にでさえ無関心であるのに・・・ヒカルにはいつも、彼は彼の声を届けようとする。とても遠い、小さな声で囁く。でも、その声が聞こえてしまった。その溜息を感じてしまった。自分が自分である以上に、大切な存在がルイ・ドゥ・アルディである。今、一番憂えていることは、彼が哀しむことであった。
彼は傷つかないのではない。
傷ついても、誰にもそれを教えないだけだ。

それを理解した時は、もう、恋に堕ちていた。
恋をするという段階を越えていた。彼に向かって、彼女はただ・・・向かって音もなく、覚悟もなく、予感もなく、ただ・・・堕ちた。

でも。
それが、嬉しい。
それが、はずかしい。
それが・・・切ない。

彼の特別を享受して良いのだろうかという戸惑いが彼女の中には常に存在する。

彼の鼓動を独占して良いのだろうかという自分の心の声に躊躇う。

彼は頬を傾けて、彼女の髪に顔を埋めた。癖の強い茶の髪は、アルディ家では濃い色素としてでしか受け入れられないが、この国では彼女の持つ色はとても薄いものであった。
ヒカルの耳朶に軽く口付けし、そして自分の胸を彼女の背に押し付けるものの・・・竦んだヒカルの体を解すように、彼は淡く彼女に唇を落とし続ける。
それは烙印ではなく、苦しみや悲しみを和らげるものであった。
こめかみに、髪の上に・・・そして耳に、頬に、項に・・・首筋や肩にまで。
誰かを労る愛撫は、彼には必要としていない動作であった。
それなのに、今は・・・必要であった。彼女を慰撫するために、彼は彼女の肌にも髪にも彼の顔を埋めてキスをする。
いたわりの籠もった愛の温度に、ヒカルはただ身を竦ませて浴びるばかりになっていた。

嬉しいのに、体が縮む。
狂おしいほど待っていた温度なのに・・・その温度がなくなってしまうことが怖い。
大切なものは、すぐ傍にあるのに、傍にあるからこそ、聞こえない鼓動がある。
それを知ったから・・・拾い集めることを知った。分け合う悦びを知った。

言葉では、片付けられない年月と思いと・・・溢れる晄と影があるのだ。

彼はヒカルの両手の自由を奪ったまま、ただ・・・触れられる限りの彼女の肌に、触れた。
秀でた額で。通った鼻梁で。締まった厳しい頬で。彼は、彼女のこめかみ、髪、頬、項に至る全ての曲線をなぞった。

彼の唇が、彼女の躰の曲線をなぞらえる。無垢で純真で誰にも涜されない白い肌の上を、ルイが滑る。
同時に・・・彼のあいたもう片方の手は肘を曲げて彼女の背の留め具に伸びる。その場所の先を求める指先が、彼女の薔薇の釦に伸びて封印を解く。
人差し指と親指で、薔薇を象った釦を弄るとすぐに・・・ぷつんという音がして、彼女の背中は解放される。

糸が切れたかのような音だった。
けれどもそれは・・・彼と彼女の理性の絲が切れる音であった。

釦を剥がされて、ファスナーを勢いよくおろされて・・・ヒカルは首を竦め、背を丸める。誰にも見せたことのない象牙色の滑らかな肌が、キッチンの淡い晄の下で真珠色に輝く。
昏い色を纏っていた分だけ、彼女の肌のきめ細かさが目立った。

そしてそれは・・・彼の目の前に広がっている。
ルイは右手で彼女の両手首を押さえたまま、左手で、そっと・・・静かに、中に入り込む。彼女の肌の曲線にあわせて、手を広げて・・・衣と肌の間に空気を入れていく。
服をはぎ取るというにはとても厳粛すぎる行為であった。ヒカルの背中から肩、そして腕に回された手の平はとても繊細に・・・彼女の上を滑った。
背中から、まるで蝶の脱皮のように背中から脱ぎ落とされた衣の温度を惜しむように。そして、その先に待っている理性の放たれた世界に憂えて居るかのように。
彼は、そっと・・・ヒカルの服を上から下へ・・・合力しながらも矧ぎ落とした。

■05

彼はヒカルの手首の自由を奪ったままで、もう片方の手の平をヒカルの肩に添えた。彼女の躰を覆う無機質な金具が、彼女の肌の温度から吸い上げた熱を持っていることを確認するかのように。彼は静かに彼女の肩紐や釦や・・・すべての縛めから彼女を解放していく。
「ルイ、あの・・・」
戸惑うヒカルの声が、部屋に響くがルイは長い睫を彼女の肌に乗せる。秀でた額を彼女の首筋、茶色の髪の毛の生え際・・・彼女が誰の唇も許さない場所に、彼は次々と自分の顔を滑らせていく。
困惑している。ヒカルは、彼の仕草に困惑している。
冷酷なのに、優しい。冷静であるのに・・彼はヒカルの冷静を奪っていく。
「今夜ここに来た理由は？」
彼は掠れた声で彼女に囁く。シャワーで得た熱ではない温度を感じ、ヒカルは顎を引いて両肩を持ち上げ、背を丸めるがそれがルイに近付く結果になってしまう、と気がついた時にはもう遅かった。
彼は彼女の腰を腕に巻き、ぐっと力を入れて、ルイはヒカルを抱き寄せる。
「・・・ルイの顔を見たかったから」
ヒカルは素直に言った。幾時間も庭園を彷徨い、自分の愁いを消し去ろうとしたがそれでは決して癒えない歎きがあった。だから、これほど遅い時間になったとしてもルイに会いに来たかった。
・・彼の顔を見ても、彼にこの歎きを移行させることは望んでいない。
一緒に歎いて欲しいのではない。だから、気を落ち着けようとしてしばらく夜の庭を彷徨っていたのだ。
戻るなり、彼の部屋に行こうとした自分の足が止まってしまった。
ヒカルの中だけで処理しなければならない感情であるのに、彼女はルイに縋ろうとしてそれを恥じた。

だから、彼はそれを知っているから・・・

彼は正面からではなく背後から・・・彼女を覆った。
彼女を包んだ。支配したいからではない。彼女が曇った顔を彼に見せたくないと知っているからだ。
・・・ただ、彼女を労りたいのだという気持ちがヒカルに伝わる。
彼はこんな風にして誰かと関わることはしない。
それなのに・・・それなのに・・・・・。

彼の無言の慰めは続く。
彼女の髪に、彼女の肌に、彼女の声に。彼は交わろうとして関わろうとする。
誰かの存在は認めないのに。
誰もの存在も無視するのに。
彼はヒカルの温度を確かめようとする。

ヒカルは・・・彼の温度なしには、身動きが取れない。
そんな自分が彼の傍に居て良いのだろうかと思う時がある。
いつから、自分はそんな風にして彼に縋らないと立っていられなくなったのだろうか。

服がヒカルから離れて自由を奪われていた腕の上で所在を求めて撓んでいた。
それを待って、ルイは彼女の肩に今一度唇を乗せながら、軽く滑らせる。彼が手を離すと濡れたタオルはヒカルの体を僅かに擦って床に落ち、ルイはヒカルの指先に自分の細く長い指先を絡めた。
ルイは彼女から離れるのではなく、両手でヒカルの肩から順に、戯んでいる布を優雅に取り除いていく。
ヒカルは苦しくなって、俯いてしまう。

彼女は声のない静かなルイの動きに抗うことができず、ただ、息を詰めて両の頬が熱くなるのを感じ、身を固くしていた。
乾いた音がして、今度は・・・服が床に落ちた。彼女は羞恥で眼をきつく瞑る。すると、視界が見えない分だけ彼の髪や肌の香りが・・・・
彼女の肩から肘、肘から手首を伝い、彼は大きな手の平でヒカルの肌を撫でながら手首そして指先に到着する。

「オレの顔を見るだけ？」

逞しい彼の体が彼女に寄り添い、彼の剝き出しの腕が彼女に重なる。
あの不幸な事故から生還した彼は、時間をかけて元通りの体を手に入れた。
いや、あれから更に調整管理が徹底されており、体脂肪が削ぎ落とされて強靭になった。筋力はあれから更に増したというのに、比例するように滑らかさを増した彼の腕の筋が動くのを見て、

ヒカルは深呼吸する。

「そう。・・・ただ、顔を見るだけで良かったの・・・」
彼女は下着姿で彼の体に触れているという恥ずかしさで耳朶まで顔を赤くしながら、消え入りそうな声で言った。
本当は違っていたのかもしれない。
この鬱屈した気持ちを、彼に見せて自分だけ安堵したかったのかもしれない。
治療をするにあたって、どんなに苦しくても辛くても、彼は愚痴めいたことを一切言わない。
それなのに、ヒカルは彼に救いを求めるように、会いに来てしまう。それが心弱いことだとわかっている。もっと気丈に振る舞わなければ、この先、彼を支えていくことは出来ない。いつも縋ってばかりの自分を変えたくて、ルイの同行を断ったのは他ならぬ自分自身であるというのに、それすら後悔しながら、戻って来た。

■06

ルイの引き締まった腰が彼女の脊髄に触れて、ヒカルは背を反らせた。けれども、ルイはそれを許さなかった。そのまま彼女の背に自分の体を添えて、ルイは彼女の茶色の髪を越えて・・彼女の頬に唇を押し当てた。
「顔を上げろ。・・・・俯くのは、やめろ」
他者には厳しい言葉に聞こえるかもしれなかったが、ヒカルにはその言葉は彼なりの励ましの呪文に聞こえる。

彼の吐息がヒカルの溜息を呼び起こす。
金の前髪が、ヒカルの鼻梁と瞼を擦り、次にぐっと体を伸ばしたルイは、彼女の唇に自分の唇を合せる。左手は彼女の指に絡めたままであったが、回した腕を持ち上げ、右手がヒカルの顎を掴んで上を向かせた。そして、彼は・・・何度も、何度も彼は彼女を啄む。
彼女の呼吸が乱れ、戸惑ったように体を強ばらせ、それでも決して拒絶しない彼女の唇に自分の熱を注ぐ。
ヒカルの指先が、静かに、けれども徐々に力を失っていく。それは甘い痺れが彼女の体を弛緩させているからだ。
ひどく恥ずかしい格好をしているのに、彼女はルイの口吻に抗えない。

眉をぎゅっと寄せる。
逃げる舌がルイに追いつかれて呆気なく絡められてしまう。
貪り尽くすようなキスではなかったが、徐々に激しさを増していく。
それでも彼がヒカルに気遣っているのが・・・泣きたくなるほど切なくなって、彼の腕を払いのけることは出来なかった。できないことはない。

そうしたのであれば、彼は黙って彼女を部屋に帰しただろう。
それで気まずくなるようなふたりではなかった。もう、長い時間を一緒に過ごした仲である。何もかもというわけにはいかないが、それでもヒカルの機微については、ヒカル自身よりもルイは詳細を把握していた。

やがて顔を上げたルイ・ドゥ・アルディは、ヒカルの茶色の大きな瞳に、自分の青灰色の瞳を重なるほど近くに寄せて、ささめいた。囁きよりもっと小さな声であった。

「オレはヒカルの顔を見るだけで・・・終わらせるつもりはないけれど」
それだけ言うと、彼はいきなりヒカルを抱き上げた。彼女が小さな悲鳴を上げて、身を竦ませた。
「ルイ・・・・私・・・」
彼の喉元が見えたが、ヒカルは自分の脚がいきなり宙に浮かんだので、体を更に縮ませて、彼の腕の中で小さくなった。自分の背や膝下に廻った腕の力強さや、自分の腰を押さえつける彼の指の圧迫にただ、戸惑うばかりである。
そして先ほどの貪るようなキスでまだ動悸が鎮まらなかった。
彼の裸の上半身に、自分が密着していることがただ・・・困る、としか言い様のない稚拙な自分の感情表現について欠落した能力が恨めしかった。

彼女は怒りをうまく表すことが出来ない。
怒りだけではなく、自分で抑制も制御もできないことが、怖かった。

だから。
ルイに抱かれている時は、ただ我を忘れて彼にしがみついているだけであるが、その後が怖くなってしまう。
様々な考えが彼女を沈ませる。
彼を失ったら、と思うだけで胸が張り裂けそうになる。
・・・つまらない独占欲であることはわかっている。彼が他の者に心を移さないという信頼の気持ちもある。
彼の不実の可能性を歎いているのではなく、自分が・・・怖いのだ。
強い感情に揺さぶられた果てに、何があるのかわからないから。

だから、彼への愛が強くなる程、彼女は怯える。
それを見透かしたかのように、ルイはいつも彼女を忘我の境地に連れて行くが、それは彼女のそんな臆した気持ちを払いのけるためでもあるのだ、と思う時がある。

すぐに、彼女は主寝室のベッドに背中から墜ちる。けれどもそれは乱暴な落下ではなかった。彼

は細心の注意を払って彼女を横たえた。
ひとりでは広すぎるベッドであるが、彼にはこういった完全なる睡眠を約束する空間が必要であるのは、ヒカルも知っている。遮音や遮光というよりかは断音に断光と言った方が良いほど徹底された静寂だけがそこにあると言った部屋に連れて来られて、彼女は平穏に微笑むことができなかった。
でも、少しほっとした。
暗闇だからという気安さがあった。闇に目が慣れるまで、彼には彼女の苦悶する表情を見られなくてすむ、と思ったので安堵したのだ。

・・・自分は浮かれていたのだ。
どうにかなると思っていた。
ルイがプライベートで日本に来るというのはほとんど、ない。
多忙を極める彼がヒカルと日本で過ごそうとして時間を捻出してくれた。
そして、ある程度何を話そうと考えてあったことを淀みなく言えるようになるほど繰り返し反芻して今日、クロス家に行って来た。そして、それは成功しないままになってしまった。自分の言葉で言いたいから、と代理人を誰も置かず、完全に親族への訪問ということで彼女は赴いて・・・そして失敗した。

■07

彼がすぐに彼女の脇に片膝をつき僅かにスプリングが軋む音がする。彼女の躰はまた少し沈んだ。けれども、彼女はすぐに身を起こそうとした。
「ルイ、私、外から戻ったばかりで・・・」
「だから？」
彼の返事が近い場所からあがったので、ヒカルは拳をつくり、両肘を曲げて自分の胸の上にあてた。
シャワーも浴びていないし、彼の愛を受けるには、今の自分は分不相応に感じていた。
嫌なことがあったから、彼に救いを求めるというのは、何か違うような気がしてならなかった。
ルイは彼女の上で長い脚を広げヒカルの顔の両脇に両の手を固定して、彼女の顔に近付く。闇の中でも、緊張して顔を強ばらせているヒカルを感じ、彼は濡れた髪の下から青灰色の瞳を覗かせて額を彼女の額に押し当てる。
・・・自分の心拍音が乱れていることを彼に知られるのが恥ずかしかった。これほど一緒に居るのに、これほど近い場所に居るのに、まだ、慣れていない。
無邪気に無遠慮に彼に抱きついていた頃の自分が恨めしい。

ルイが肘をつき、彼女の上に重なった。浪の上にいて、揺れているような感覚を覚える。・・・

・心地好い重みであった。
ルイは彼女の髪に指を入れ絡めた髪を弄んだ。親指の腹で、顳顬と生え際を撫でる。
その一方では、彼女の肩紐を外し、胸の前で曲げているヒカルの腕を通して紐を取り払い、ヒカルが身動ぎして腰を浮かせた瞬間を見はからい、腰から脚にかけて完全に彼女のキャミソールドレスを脱がせてしまう。ルイがそれを床に投げる音がしてヒカルは顔を横に向けた。
彼がわざわざ、床に肌着を落とすというのは計算してのことである。どれほど磨き上げられた場所であっても、床に触れたものは彼女が拾い上げてもう一度着ることがない習慣を知っているのだ。それはアルディ家の習慣であり、ルイも同じであるからこそ知るヒカル・クロスの情報であった。ワンピースであるならば、部屋に帰るまでの僅かな距離だと我慢して再着するのだろうが、こうなってしまえばもう、彼女はこの後にどう行動すれば良ことすらしないいのかさえわからなくなってしまう。

・・・部屋に戻れない。どうしよう。

「服は明朝届けさせる」
彼はそう言うと、彼女の温度と同じ熱さを持つ釦や靴下留めや・・・・ヒカルに乗っていたものすべてを持ち去ってしまう。いつしか・・・ヒカルは彼の胸に額を埋めて彼がヒカルの大腿を撫でる手の平の躍りにただ、顔を赤らめて細かく震えていた。

ヒカルは、この先に何があるのか知っている。ルイが彼女を部屋に戻さないことを宣言されて、観念している一方で、ただ惑乱していた。

彼に愛されることが嫌なのではない。
でも、彼女が彼の胸に抱かれるいつもの闇と違っていた。
・・・微かな違和感があった。
彼はヒカルに啄むような軽いキスを繰り返し、耳朶や首筋に舌を這わせ両手は彼女の背中や爪先に至るまですべての輪郭をなぞらないと気が済まないというかのように幾度も往復を繰り返していた。
貪るような愛撫ではなく、激しさを求める囁きではなく、ただ、彼は無言で彼女の肌に触れていた。それはいつもの自信に満ちた彼の言動からは考えられないほど、穏やかで静かで・・・
でも、ヒカルの中にあった心の騒めきが徐々に引いていくのを感じる。

・・・そこで、気がついた。

ヒカルは茶色の眼を見開いた。闇の中で固く眼を瞑っていたので、まだ目の前には闇海しか見えないが、彼の金の髪や肌がヒカルの近い場所にあることはわかった。
「ルイ・・・」
彼女はそれまで強ばらせていた腕を伸ばして、彼の背中に腕を回した。すると、ルイは動きを止

めて彼女の顔を覗き込む。ヒカルは彼の肩にキスをした。眦が痺れて涙が出そうになる。唇からうまく言葉が出ない。でも、どうしても言いたかった。

この違和感の正体を知ったからだ。
彼は・・・歎いている。彼は、怒っている。自分の代わりに、静かに・・・言葉を失うほどに憤慨しているのだ。それをヒカルに気取られないために、彼は自分の中のすべての理性を使って、彼女に優しくしているのだ。奪うような荒れた抱擁ではなく、我を忘れるような激しい陶酔をもたらす合歓ではなく・・・ただ、ヒカルの中にある悲しみや愁いや戸惑い・・・そういったものを感じ、彼は深く傷付いていた。

「ありがとう、ルイ」
掠れた声で、ヒカルは囁いた。それだけで伝わった。
「・・・muguetの香りがしたから」
そして、彼の言葉で彼女にも伝わった。
庭園を歩き回り、すずらんを眺めてきた。フランスでは花嫁に贈られる花としてあまりにも有名であったが、この庭の花は香りが強く、夜風に混じって高潔な香りを運んでいた。
・・・自分は、幸せになれるのだろうかという不安はない。ルイと居れば幸せになれる。今でも幸せだ。でも、こんな風に挫けてばかりいる自分と一緒に居て、ルイは幸せになれるのだろうかと思ったのだ。
■08

ヒカルはそんなことを長い時間、すずらんを見つめながら考えていたので、香りが移ったらしい。自分では気がつかなかったが。
それで、最初・・・彼が微妙な表情で彼女を出迎えたのだと知った。
夜気と花香を纏わせた彼女が、どれだけ長い時間憂えて居たのか、彼は彼女の肌で確認したのだ。
「ヒカルは散漫すぎる。オレだけ見ていれば良い」
彼のことだけを信じて、彼のことだけを見ていることができたのであれば、どれほど楽であっただろうか。そうできないことも承知の上で・・・ルイは囁く。
彼女の頬に唇を押し当てて、彼は耳元で囁いた。
「ヒカル。勝手に傷つくな。オレの知らないところで・・・傷つくな」
うん、と子どものように拙い返事をして、ヒカルも同じように小さな声で言った。瞼が震え痺れが走る。もう少しで泣いてしまいそうだった。
「ありがとう・・・ルイが居てくれて、良かった」
ヒカルは微笑む。
もう、だいじょうぶだから、と言ったが、彼は吐息を漏らして呆れたように言った。これも小さな声であった。

「・・・怖がるな」
そして、返事を待たずに裸身の彼女を組み敷いた。
細い両肩を押さえ、彼女が身動ぎしても逃れられないようにする。滑らかなヒカルの内脚を開かせるために、彼は自分の片足を割り入れた。腰に熱を感じ、ヒカルが言葉もなく目の縁や首筋まで赤くしているのに、ルイは無視することにしたらしい。
今度は、彼女の唇を激しく求め始めたルイの熱情への備えがなかったヒカルは、呼吸を乱し、喘ぎながら切れ切れの声で懇願する。
「あの・・・それなら・・・シャワーを使わせて」
「後にしろ」
彼はそう言うと、またヒカルの言葉を吸い込んだ。何度も角度を変え、ヒカルの声すら奪い、そして彼女の中を蹂躙していく。添えられていた肩の上の手の平は鎖骨をひと撫ですると、今度は彼女の柔らかな丘に触れて軽く指を曲げ、撮む。
見えない分だけ恥ずかしさが半減するかと思ったら、そうではなかった。
・・・ヒカルが天を仰いで溜息を漏らし始めた。体が熱くなり、ルイが触れた場所から熱の波が紋を作ってヒカルの全身に広がっていった。

今、この瞬間まで別のことに気を取られていたのに、慰みがあまりにも優しくて静かで・・・それでいて悲しみを忘れそうになってしまうほどに陶然としているので、ヒカルはただ、そこに溺れてしまいそうになる。でも、それが怖かった。我を忘れる自分が恐ろしかった。悦楽に身を投げるのではなく、怒りや悲しみに自分を忘れてしまうのが怖かった。

これから先に待っている未来は、決して楽しいばかりではない。ルイとの結婚についてはもともと・・・もっと若い時から彼が宣言していたとおりになったが、あの時と事情が変わっていた。
彼が唯一の人とヒカルを定めていることは彼女の最上の悦びであった。けれども、彼女は彼に何も捧げることができない。自分の親族のことすら説得できないのだ。
離れて過ごした年月が、これほど溝を作ってしまうのだと思うと、ただ遣りきれなかった。母方の親族との違いに、ただ、戸惑っていた。
なぜ、父が・・・若い頃からバイクを乗り回して、単身でパリに行きヒカルの祖母にあたる人物を探そうとしていたのか、わかったような気がした。他人を気遣い、自分のことはその次にしてしまう優しさと強さの影に、悲しみがあったことも今なら・・・わかる気がする。今、そのことについて父と話したかったのに、その人はヒカルの前に現れない。帰ってこない。
恵まれた環境が、人を幸せにするのではない。わかっていたことであったけれども、それを痛感して、ただ、寂しくなってしまった。
父が、どうして・・・すぐにでも母と家庭を持ちたいと思ったのか、わかったような気がしたから。
それで何もかもがリセットされるわけではなかったけれども、何か・・新しく始まると思った

のだ。
ルイの言うところの、根拠のない期待であった。
期待に期待することは良くないと言われていたのに、それでも・・・彼女は願ってしまったから。
それを咎めるわけでもなく、ルイは彼女を癒そうとしている。
それがわかる。・・・わかるのだ。

今なら・・・母や父の若すぎる結婚が理解できた。ルイとヒカルも十分に若い。けれども、
ただ・・・ただ、もう、そうするしかないと思う程、他の人生は考えられない。
結婚という制度に従いたいのではない。ルイと一緒に生きていたいと思うだけだ。そして、彼女の亡骸を彼はきっと・・・きっと、彼女の願うとおりに処置してくれるだろうと思った。
土に還すのではなく、海に還して欲しいと彼女は願っている。両親の居る、あの海に。一部でも良い。でも、ヒカルは自分の願いを確実に実行してくれる人の傍でようやく眠れるのだ。

・・・おそらく、ヒカルの方が、先に逝く。
ルイはアルディ家の科学の粋を集めて生まれて、生まれて直後から体調の変化を管理されている。ヒカルは・・・アルディ家に引き取られるまで、ごく普通のこどもとして育った。だから、ルイは彼女を見送ってくれる。
だから彼を選らんだの言うのは違うけれども。彼しかいないのだけれども。
だからこそ、苦しいのだ。こうして肌を合わせる時にそれを感じる。

■09

ルイの顔が、彼女の白い狭間に埋まり、そして汗ばんで湿った彼女の肌の窮みに近付く。
このままではいけない、と思った。
彼が彼女の憂いを忘れさせるためにヒカルを抱くのであれば、それはあってはならないと思った。
片方だけの恋情で過ごしてはいけない時間が、ある。
ルイの吐息や手の平の温度に、真摯でありたい。
・・・・何かを忘れるための時間にしたくなかった。
彼女の隠していた部分全てを曝け出し、同じ様にルイの全てを受ける時間を、そんな風に・・自分の愁いを忘れるためだけに消費することはできなかった。
「ルイ・・・ルイ」
彼女は彼の腕の上に手の平を添える。押しとどめるのではなく、ただ・・・ひたすら、求める自分の気持ちが一時の激情ではないことを、伝えたかった。
彼は自分ではない白金の髪の人にヒカルが心を寄せていると思っている。
それでも、彼はひとりだけだと決めてしまった。ヒカル以外の誰かは必要でないと、彼は言い

放ち、そしてそれ以外の可能性をまったく考えようとしない。
だから。
好きだという感情を、うまく伝えられなくて・・・・ヒカルはいつも彼に顔を隠すようにして彼に寄り添う。

ルイが彼女の肩や腕にキスを落とす。白い双丘の狭間に顔を埋め、彼はヒカルの腰を抱き寄せた。彼女がルイの肩に手を置き、傷ついた心を解きほぐすような悶えに身を捩る。魂まで盪けるような愛撫に、体が浮沈する。全身を狂おしく波立たせる喜悦を感じる。爪先から膝まで彼の手が滑り、それだけでヒカルに震えが走る。
ルイが腕を伸ばして彼女の肩に手をあててヒカルを捕まえると、彼はそこで体を持ち上げて彼女に重なった。
「ヒカル」
彼の掠れた声が聞こえてくる。ルイの体の下で乱れた呼吸に耐えられずに喘ぐヒカルは何も言う事が出来なかった。その代わりに、彼の体を強く抱きしめた。互いに何も纏っていない羞恥もなかった。彼女の淵に、彼の簇が寄り・・・彼は彼女を、彼女は彼を求めていることを確かめ合う。
彼は彼女の髪を指で梳いた。
ただ、肌を重ねて彼に触れられているだけなのに、彼女は、彼女でなくなってしまいそうになる。
汗ばみ始めた彼女の首筋に彼は唇を合せて、そして耳元でそっと囁いた。
彼の肌も、湿っていた。

闇の中で、ルイはヒカルに言った。感謝の言葉はいらない、と言った。
次に、ルイが激しく唇を吸ったので、ヒカルはそれだけで遠くなってしまいそうな理性を呼び止めようとするが、ルイはあっさりとそれを奪っていく。
そして強く彼女を抱き寄せながら、ルイは再び囁いた。
「何手も先を読もうとするからだ。だから、傷つく」
でも、とヒカルは言おうとしたが、彼が阻んだ。・・・そうしなくても、彼女の声は声にならなかった。愛する人から愛されるということは、怖くないのだと・・・彼が、無言でヒカルに教えるから。
「・・・先を読むのは誰にでもできることだ」
ルイはいつも何手も先を読む。そういう訓練をしてきて久しい。そして彼の高い知能は誰に教えられなくても、備え持っているものであった。それなのに、彼はそれが特別ではないと言う。

特別ではなく、誰もができることだから。
・・・ヒカルに、根拠のない期待を持ってはいけないと言い、現状から予測できる未来が昏いものでしかないのであるならば、先々を考えて自分から暗澹たる思いに浸ることはないと彼が言っ

ているのだとわかった。
彼なりの優しさと気遣いであった。
安穏な未来ばかりではない。けれどもそうではないことを歎いてばかりいる未来でもない。だから、彼は幾手も先を考えて、それが失敗した時のことで杞憂に耽るなとヒカルに伝えていた。
「・・・ルイなら・・どう・・・するの」
切れ切れの呼吸で、ルイの腕の中で乱れた声でヒカルは尋ねた。
彼が喉元で僅かに笑った。ヒカルの問いが気に入ったらしい。
「オレは」
ルイはそこで言葉を句切ると、彼女に深い口付けをひとつ、落とした。
痺れるほどに甘く、目眩がするほどに激しいキスだった。
貪り足りていないものの唇を離したルイは、彼女の唇に触れながら、魅惑的な声でヒカルに教えた。
何手も先を読むことが出来る彼は、本当はそうではなかった。
「・・・目の前にある手を最高の一手にする。最初で最後にするために」
彼はそう言って、ヒカルの体に覆い被さった。彼女と彼の声はそれっきり聞こえなくなった。
残ったのは、深い闇と、静けさと・・・絡み合った二つの裸身がひとつに融合していき、やがてすずらんの香りを僅かに残して完全に溶け合うために強く激しい懐抱だけであった。

ルイは目の前の波に溺れてみろ、と彼女に囁いた。悲しみと怒りと切なさで我を忘れてしまう自分が怖いと思っているヒカルに、愉楽と癒しと愛される歓びで忘我に達してみろと彼が挑んできた。それはとても優しくて、とても密やかで・・・ヒカルは眼をぎゅっと閉じて、彼の心地好い重さを両手で・・・全身で受け止めた。

■10

目が覚めると、ベッドが余りにも広いのでしばらくの間どこに居るのかわからず、ぼんやりとしながら、瞳を開く。両手を丸めて眠る癖があるのは、昔からであったが、それでも十分に四方が広いのだとわかるほどの撓みを感じた。

夢なのか現実なのかわからない。けれども、この体の軋みは紛れもない現実で・・・・そこで彼女はベッドから跳び起き、自分が裸体のままであることに気がついて、慌てて掛布を引き寄せて体に巻いた。
彼女の朝は早い。長い習慣によってどんなに睡眠時間が短くても定刻になると目が覚める。
ここは日本で、時差が影響するというのに、それでも彼女は日本時間によるところの「朝の早い時間」に目が醒めてしまう。

ルイは居なかった。ヒカルはゆっくりと両手と両足を広げるが、それでも余るシーツの冷涼感に

眉を動かした。
シーツが冷たくなっているところを見ると、かなり前から起き出しているか、それとも眠らなかったのかもしれない。いや・・彼女が疲れてうとうととし始めた時には、彼も瞼を閉じて彼女を抱きながら規則正しい呼吸をしていたので、確かに一緒に眠ったはずであった。彼が唯一、一緒に睡ることを許した人物は、弾みを付けて両の手の平を開いたり握ったりして鈍い感覚を確かめる。

体は怠かったが、気分はすっきりしていた。

思い悩んで眠れない夜というものは訪れなかった。・・・ルイが、ヒカルをここに泊めたからだ。恋人同士の自然な恋慾ではなく、彼が・・・ヒカルが安らかに眠れるように配慮したのだろうと思うと・・・昨晩のことが断片的に頭に思い浮かび、ヒカルは頬を赤くして跳び起きる。体には、彼の香りが残っていた。
完全に遮光されている部屋の時間経過がよくわからなかったが、自分の目醒めというものだけは信じていたので、朝が来たのだろうと思った。
・・・人の出入りがまばらなうちに、自分の部屋に戻って服を着替えなければならない。
昨晩のワンピースはまだあの場所で湿ったタオルと一緒に床に埋められていただろうし、肌につけていたものも目を凝らすと、ルイの脱ぎ捨てた衣類と一緒になって床の上に散っている。しかも、自分は裸体のままで彼の愛を受けた気怠さで、俊敏な動作ができないままでいた。

・・・今日もクロス家に足を運ぶと先方に告げて戻って来た。気が重いが、それを理由にして行かなくて良いというわけではない。行かなければ行かないで、相手を更に違う失望に誘ってしまう。
・・・辺りを見回して、遠くで微かに人の気配がしたので、ヒカルはほっと息を吐き出した。一人で睡るのと、ひとり残されて目醒めるのは・・・違う。
目が慣れてくると、まだ使われていないローブがベッドの上に用意されていた。
・・・これほどまでに乱れた漣のようなシーツの上にローブがあるということは、彼が用意してくれたのだろう、と思った。他人のことには興味がないと言い切るルイ・ドゥ・アルディであったのに、プライベートの彼は酷く優しかった。泣きたくなるほど、彼は優しい。

シャワーを浴びる前に彼に朝の挨拶をするかどうか悩んだが、結局先にバスルームに向かうことにした。抱き合った後の朝というのは何とも気恥ずかしい。名残の見え隠れする格好で顔を出せば、彼は無粋だと顔を顰めると思う。そう感じた。
こうしてプライベートを過ごすというのはごく稀なことで、しかも日本で過ごすことになる日が来るとは考えられなかった。
それほど、彼は多忙であった。多忙を越えて、どうやって睡っているのだろうかと思うほどであった。それでも時間ができると彼女のところにやって来る。彼女も、彼のところに尋ねていく。逢瀬を重ね、もうこの人だけしかあり得ないと確かめ合うものの、彼女はそれが怖いと怯えるの

にルイ・ドゥ・アルディは不敵に笑う。
「ひとつしかないと思うより、ひとつにできないと思う方が傲慢だと思わないか、ヒカル」
彼はいつもそんな風にして、彼女に問いかける。以前にはわからなかった彼の声の裏に秘められた想いを、今頃になって・・・ようやく今になって少しだけかも知れないが理解できるようになった。彼女は、それがただ、嬉しかった。
恋人と浮かれた気分で来日するのではないと言われた時の胸の疼きすら、忘れてしまえるほどに。

ローブを手に取り、彼女はバスルームに向かう。主寝室のすぐ近くに設置されており、彼がヒカルを出迎えた時に出てきた場所に向かう。バスローブの肌触りは最高のものであった。僅かな時間しか使用しないのは惜しいと思えるほどに。その時に、いつも感じるルイ・ドゥ・アルディの煙草の香りとは別の香りに気がついて、ヒカルは袖を通す動作を止める。ルイ・ドゥ・アルディとヒカルの香りとは別の、甘い高雅な匂いに気がつき、ヒカルは深く息を吸う。
・・・甘い、切なくなるような・・・まるで夢のような香りだ。
それは、彼女が昨日彷徨った苑の匂いと同じものだった。
ルイが、彼女の髪や体からすずらんの香りがすると言ったことを思いだしていた。花嫁の象徴とでも言えるようなその花を眺めながら、物憂い夜を漫ろ歩いたのはつい、数時間前だ。バスルームに設置されたLED時計が淡い白藍の色で時間を告げていた。彼女が目醒める時間であったが、ルイがとうてい起きている時間ではなかった。彼は朝が遅い。しかも、時差があり、彼は相当に疲弊しているはずなのに、起き出しているようだった。

■11

ヒカル・クロスがどうしていいものやら、わからないという顔つきで主寝室を出てくると、居間にはルイがいて、煙草に火を点けるところであった。
彼が煙草を吸う時は、いつも決まっている。何か複雑なことがあるときか、思考に耽る時の前後に吸う。プライベートであるから、そんな風に喫煙することもないかと思っていたが、そうではなかったらしい。
深く吸い込むと、彼はそれだけが目的であったかのように、物憂げな青灰色の瞳を宙に走らせて、退屈そうに軽く紫煙を吐き出した。
それからヒカルの方をちらりと見ると、冷たく言い放った。
「シャワーぐらい、浴びたらどうだ」
彼はすでに着替えを済ませていた。ヒカルが目醒めなかったところを見ると、別の部屋のシャワールームを使ったようだ。
彼女は少し大きめのローブを着て、前身頃に手をあてて戸惑いながら出てきた。
そして、カーテンが開け放たれて白い光が射し込んでいる居間の眩しさに、眼を細めながら、彼に言った。

「おはよう、ルイ」
「間もなく朝食の時間だ。その格好でいるのか？」
昨晩何があったのか瞭然のヒカルに、ルイは素っ気なく言った。昨夜は、あれほど優しかったのに。もう、いつものルイであった。
「ルイは、眠らなかったの？」
「正確に言えば、眠れなかった」
ヒカルは苦笑する。彼女が傍に居たから眠れなかったのではないことも、彼が寝不足で少し不機嫌なのも、なぜ別のベッドルームに行かなかったのかも、わかっていたからだ。他の部屋では遮光も遮音も主寝室ほど完璧ではない。ベッドも狭い。完璧を求めるルイには不服だったのだろう。

「留めピン、散らばったままだった。ごめんなさい」
ルイは無言だった。彼女がシャワーも浴びずにルイのベッドで眠ってしまったので、
外出の際に留めておいた髪の隠しピンがベッドに散乱し、それが気になってルイは眠れなかったらしい。
上半身を起こしたルイの胸の中で微睡んでいるヒカルの髪の毛を、しきりにルイが解いていたのを思い出し、ヒカルは顔を赤くした。
癖の強いヒカルの髪は、シャワーを浴びて来なければ扱いが難しい。
彼女はそれらを拾い上げるために、トップライトを灯し・・・そして気がついた。
次に、見間違いではないかどうか確かめるために、バスルームで確認したが、やはり結果は同じで・・・そのままルイの前に姿を現したのだ。

彼女は、自分の髪から漂う甘い薫りに気がついた。それは、昨晩の残り香ではなかった。
「ルイ、これ・・・・」
「オレを寝不足にした仕返し」
彼がそう口にしたので、ヒカルが驚いて立ち尽くしていた。
「アルディ家の家訓では、やられたら、倍返しだ。ヒカル」

彼女は、自分の髪に乗ったままになっているピンの幾本かに・・・すずらんの花が付いていることに気がついたのだ。だから、シャワーを浴びることなく、主寝室から出てきた。彼女の髪に巻き付いたそれは、朝摘みのものだとわかる。

・・・今日、最高の状態の薔薇を届けることはできない。ここは日本だから。
でも、その代わりに、ルイ・ドゥ・アルディが手ずから・・・自分でヒカルの髪にすずらんの花を付ける。フランスでは、恋人や永遠を誓った相手に贈られるものである。

瞼が痺れ、じわりと浮かぶものを抑えるので精一杯だった。

見ると、彼の座っているデスクから少し離れた応接用のローテーブルの上に、昨晩はなかったものがあった。
彼が手を取っていたペットボトルの蓋が取り除かれて、そこには昨夜見たものと同じすずらんの花が、束になって甘い芳香を放っていた。
「花瓶はあとで持って来させるが、それまで保たないだろうな」
「うん・・・・」
最高の状態の、朝摘みの花を見て、ヒカルは涙声になって、ありがとう、と言った。

日本では、誰にも祝福してくれないと思った。母方の親族は喜んでくれたが、父方に恨まれて憎まれたままで嫁ぐことを考えると、鬱屈した気持ちを呼び込むだけであった。それなのに。ルイ・ドゥ・アルディは、彼女を・・・祝福してくれた。

「ルイ、私、頑張るね。今日が駄目なら、明日がある。昨日が駄目だったのなら、今日が何か変わるかもしれない」

ルイがどうしてヒカルが主寝室から出てきた時に、同時に煙草を吸ったのか、わかったような気がする。
彼は気恥ずかしかったのだ。
ヒカルのために、夜明け直後から庭を歩き、彼が選んだすずらんを、入手するために手配をする。
彼は普段はそんなことはしない。
誰かに持ち込ませることはあっても・・・そんなことはしない。

「楽観的過ぎるのも、良くない傾向だな」
彼はぼそりとそう言った。彼は横を向いていたので、金の前髪の下にある表情は見えなかった。
ヒカルはそうだね、と言って笑った。
「ルイ。・・・今日、昼頃には戻る予定だから、その後、庭を散歩して・・すずらんを一緒に観ない？それから・・・」
「まずは、することがあるだろう」
指摘されて、彼女は気がついた。
服も床に放置されたままで、もう一度着られる状態ではなかった。
シャワーも浴びていない。
「服は間もなく届く。荷物ごと。行き来するのは時間の無駄だ」
そうだね、と言って彼女は笑う。
彼は静寂の中でないと、眠れないのに。それなのに。
彼女に、同じ部屋に居ろと言う。

■12

「・・・バスルームを使わせてね」
彼はもう、ラップトップの上に細く長い指先を乗せて、メールとニュースのチェックに入っているようだった。
やはり、煙草は一度吸っただけですぐに灰皿に入れられた。

ヒカルは髪に散ったすずらんの花のついたピンを丁寧に取り外しながらバスルームに向かおうとして・・・そして足を止める。
くるりと向きを変えて、もう一度、すでに集中して考え事をしているルイの傍に走って行った。
すずらんの香りを乗せて。
そういえば、プライベートなのだから・・・どこかに出かけたいと思った。
どこでも良い。外出しなくても良い。ルイと一緒なら、何をしても楽しいはずだから。

「ルイ」
ヒカルの気配に気がついて、物憂げな上品な青灰の瞳を持ち上げたルイに、彼女は屈み込んで・・・・そしてキスをした。彼女の髪が落ちてきて、ふたりをすずらんの花で覆った。その中で・・・甘い口吻を交わし、ヒカルはそっと、唇をはずすと、恥ずかしそうに笑った。
彼の金の髪が、朝日の中で輝いている。
・・・ヒカルは美しいルイの貌を覗き込んだ。
彼女だけが、彼に目覚のキスを落とすことができる。
思考の途中であるのに、彼を呼び戻すことが出来る。

ヒカルは言った。
「・・・まずは、したいことをしてみた」
自分でそう言った後に、はにかんで、彼女は茶色の瞳を忙しなく泳がせた。
恥ずかしくて、彼の顔を直視できなかった。たった今、覗き込んだばかりなのに。

「次のやることは・・・シャワーよね」
そう言って、彼女がバスルームに向かおうとした時、ルイはヒカルの手首を掴んで引き寄せ、そして弾みで体制を崩したヒカルを自分の膝の上に乗せる。
深い飴色をしたチェアが軋んだが、彼は平然として、ヒカルに言った。
ルイ、と困惑したヒカルの声に、彼は一嚔する。
しかし、どことなく優しい瞳だった。
彼女のからのキスに驚いた様子であった。
彼はあまり表情を動かさないが、笑うと・・・とても美しい。

ルイはヒカルに囁いた。
「ヒカル・・・・倍返しには全然、足りない」
そうして彼女の腰を抱き、ヒカルの顎を軽く掴んで引き寄せる。
ルイの双眸が近付いて来るので、ヒカルは眼を伏せた。そして・・・彼に促されるままに、体を屈める。
彼がキスを求めていると知ると、ヒカルは彼の首にそっと腕を回し、戸惑った様子でもう一度、唇を重ねた。
煙草の香りのするキスであったが、それはとても甘かった。
そして、何度も・・・また互いを求めて唇を重ねる。

ヒカルは、荷物も朝食のことも、どこか遠くに行ってしまうほどルイの抱擁に陶然としていた。
プライベートの彼がこれほど・・・ヒカルのことを求めるとは想像していなかった。彼が、また、愛おしくなった。
この人と、永遠に・・・永遠に、一緒に光を浴び続けたいと思った。

永遠の晄という名前の娘は、星辰の子の傍に降り、そして・・・幾度も祝福のキスを交わし続けた。永遠を誓いながら。muguetの花に囲まれながら。
ルイに、愛している、と何度も囁いた。
彼が微笑むまで、ずっと言い続ける。
彼が満たされないと思わなくなる時まで、彼女は彼の傍に居たい、と思った。

来訪者を知らせるチャイムが鳴り響いたが、しばらくの間、ルイ・ドゥ・アルディは応対しなかった。
彼女の背に散る髪の上で開くすずらんの花ごと、彼は彼女を強く抱きしめたままであったから。
そしてルイのキスを受ける彼女の手には、すずらんの花が握られていた。

すずらんの花言葉は、「幸福」・・・・

これから困難なことが待ち受けているというのに。
それでも、彼女は幸福であった。
愛する人と一緒に居るから。その人に、愛されているから。

（FIN）

AMANKAY　前編

■AMANKAY01

季節は変化していた。
柔らかな日差しというより、紫外線が強すぎると感じる昼下がりのことであった。
・・・久々に、この場所を訪れる。

ルイ・ドゥ・アルディは薔薇の苑と温室の間に設置された真鍮のベンチに腰を下ろした。
周囲は緑濃い時期を迎えて、噎せ返るような草の熱気が夏の訪れが近いことを示していた。
それでもここが、ほかでもない薔薇の一族の住処なのだとわかるのは、草木の強い息吹に薔薇の芳香が混じっているからだ。

かつて、温室の爆発事故により、この周辺はすべて破損した。
けれども、それは復元され・・・それからまた年月が経過して、薔薇の苑は昔とほとんど変わらない様相をルイに見せていた。しかし、今は彼はここにほとんど足を踏み入れない。
自分の育った場所であったが、彼はそこから逃げるように・・・違う場所で暮らしている。
それでも、完全に絶ちきることが出来ずに、やむを得ない事情によりアルディ邸を訪れる。

それが「今」であった。

彼は金の髪を掻き上げて、銜えていた煙草から吸い込まれる煙を味わった。
青灰色の瞳は、年月を越えて・・ますます深く窪み、当主の顔立ちとよく似てきた。
通った鼻梁は、本人が申告しなければ昔、折れるほど殴られたということすらわからないほどである。流れるような深い二重の瞳に叢がる睫は長く、彼の頬に影を落としていた。
頬は精悍であったけれども、どこか愁いを帯びており・・・引き締まった顎は、彼が決して屈託無く微笑むことはないのだと知らせる。
細く長い指先に挟まれた煙草を吸う仕草は慣れていたが、最近ではここに訪れた時に吸うこともなくなった。其の昔は・・・この薔薇の苑の中で思考の迷宮に溺れることだけが、彼の唯一の慰みであったのに、それすら遠い記憶になりそうであったが、そうはならなかった。
経年によって脳細胞は老化するのが常であるのに、彼の頭脳はそのままに・・・何もかもを忘れないで居続けたからだ。ある一時期を除いては。彼はいつもルイ・ドゥ・アルディであった。
相変わらず乗馬とフェンシングを嗜んでいるが、それでも筋力が衰えないように維持するためだけのものになってしまっていた。彼の皮膚は最新の医療技術によって再生されたものであり、幾度も移植を繰り返して今の状態に至るのだから。無痛であるわけではなかった。どんなに素晴らしい技術が施されても、苦を伴わない療は存在しない。特に、彼のような先進医療を受けた者には、後遺症や感染症をはじめとして思わぬ事態というものが常につきまとっている。彼はそれに無言で耐え続けた。彼のために自らの細胞組織を提供した、永遠の晄という名前の人のためだ

、とは口にすることはなかったけれども。

彼は、澄んだ青灰色の瞳で、伏し目がちに周囲を見渡した。それを待っていたかのように、周囲の風が彼に向かって流れ込む。
・・・金の髪の端が昊に向かって踊り、さらりと髪の擂れる音すら天上の奏のように壮麗であった。

その横顔は、フランスの華と呼ばれた人にとてもよく似ていた。
しかし、ルイはシャルル・ドゥ・アルディの実子ではない。
彼の甥にあたるのだという証明が成されて、彼の系図原簿が書き換えられ、そして完全にこの邸を離れた。
それから幾歳も過ごしていると言うのに、それでも、もうここは自分の場所ではなくなったと感じる。
自分の居場所ではないと感じるのは、自分の居場所だと思っていたからだ。・・・感じるのは、そうではないと割り切れていないから。
彼は星辰の子と呼ばれて、何もかもを掌中にすることができる人物だと言われてきたのに・・・自分の中の記憶さえ、自由にならない。

煙草の灰が、ぎりぎりのところまで彼に近付こうとする。
短く灰を落とすことをしないで、彫像のようにゆっくりと・・・薔薇園の空気と静寂を一緒に吸い込んでいく。
彼が今見ている風景は、あの時のものではない。どんなに似通った作りにしていたとしても・・・もう、彼の知っているあの屋敷ではないのだ。

ルイ・ドゥ・アルディの為だけに建造された別棟も、今では足を踏み入れることはない。もう、そこはルイの別棟ではなくなったから。執着はしない。ただの・・・容れ物だ。
そこに溢れるほどに詰まった想い出という名前の記録とも記憶とも言いがたい彼の履歴は、彼ひとりではなく・・・いつも茶色の髪の茶色の娘と伴にあった。
どれほど振り払っても、どれほど傷つけても・・・どれほど泣かせても、彼女は彼を憎んだり恨んだりせず、ただ大きな瞳に涙を堪えて微笑むばかりであった。

殺風景であった庭には、子供用の遊具が置かれているし、垣根の向こうから見える大きく張り出したガラス張りの居間では、小さな影が動き、甲高い声が聞こえてくる。
ここに在るのは・・・ルイにまつわる記録だけである。それが更新されることは、もう、ない。

友人夫婦の忘れ形見として育て続けた娘を、当主が妻にしてから・・・彼はますますここに寄りつかなくなった。
彼女の背中を見送った時から、永遠の別れになってしまったのであれば、どれほど楽であったの

だろうか。
それでも、彼女の幸せそうな微笑みや、静かな時間を彼は遠くからでも、感じ続けた。見ることはしなかった。ただ、生きて幸せであるのなら、それで良かった。
時折話をすることもあったし、彼女は季節毎のメッセージカードを欠かすことはなかったけれども、彼は一度も返信しなかった。

■AMANKAY02

生涯会わないでいられたのであれば、どれほど楽であっただろう。
しかし、彼女は・・・・シャルル・ドゥ・アルディの妻になり、そしてルイはこの家から離れることはない。居所を変更しないという意味ではない。
・・・彼女が、彼に自分の身体の一部を捧げ続ける限り、彼女と彼はいつもひとつであると感じるからだ。
だからこそ離れていられるのではなく、だからこそ離れられない。
重篤な状態にまで陥った肉体の破損は、この薔薇園と同じであった。
彼の容姿は昔のままだ。
だが、昔と変わりないと見えるが、その実は、これまでとまったく違うものになった。若い細胞は彼の年齢を隠した。まったく経年を感じさせないのは、彼のたゆまぬ努力であるが、それだけが理由ではない。新しい皮膚、新しい髄液、新しい軟骨、新しい筋組織、新しい膠原繊維・・彼女のもたらした細胞は、彼の全ての時間を逆流させた。
彼女に触れることはもうないが、それでも・・・彼は贖罪の娘の安寧を影ながら支え続けている。
彼女の実家とアルディ家の不和の調停もしたし、時には手段を選ばなければ解決しないという結論しか導くことが出来なければ、そうした。
肉体も魂も今生では結びつくことはなかったが、ルイにとって、彼女はそういった存在ではない。・・・彼女の息吹が自分の中に存在する限り、彼は生き抜くことを選択したのだ。
遺伝子操作によって優性因子を多く持つルイであったが、同時にテロメアの異常も内含している。遺伝子配列の似通った、同系交配と述べるに値する過程で生まれて来た。この場合の同系交配とは濃い血族婚を意味する。彼の父と母は従兄妹であり、そしてそれ以上に近い存在であった。
それでも、彼が生き存えているのは、そこに新しい種が植えられたからだ。
贖罪の娘と呼ばれた者の血肉が、彼の中で生きている限り、彼は命を捨てることができなかった。
尽きるまで生きろと、内なる命が彼を支配するからだ。
彼は星々を遵える存在であるのに、彼の中の・・・彼女には逆らえない。

生きていることが嫌というわけではなかった。
彼には今、役割が与えられている。
アルディ家当主の愛嬢の教育係という職だ。教師ではないが、アルディ家の歴史や所作、家訓や

独特のしきたりに秘匿され続けた歴史の数々の口伝・・・そういったものを伝えていく役割であるが、庇護者と言った方が正しいのかもしれない。
実の両親が不在しがちであるので、彼が親代わりであった。
しかし、彼は父にはなれない。
愛する・・・ただひとりだけだと決めた人の娘を自分の手の中で慈しむことに抵抗があった。
しかも、その人物は系統的に言えば、ルイの従妹にあたる。
自分の同族を愛することはできない。ただ、憫れみしか持たない。自分の実母が幾年も狂ったままで居た時にも、大きな虚無が彼を包んだが、それ以上にもそれ以下にもならなかった。

柔らかい風が、彼の足元を過ぎていった。よく手入れされて葉ひとつ巻き上がらないアルディ邸の庭を、幾度も歩いた記憶が残っている。
意味も無いのに、何周もした。
そうすれば・・・最高の状態の薔薇を探しに来た娘と出会すかもしれないと思ったからだ。それは面倒だと考えていたのに、いつの間にか・・・それが習慣になっていた。

このまま、ここで消えて薔薇の養分になってしまいたいと思うことがある。土に還ればこの記憶は・・・この想いは、誰にも知られることもなくここで生き続け、あの人の声や笑顔を誰憚ることなく見つめることができるから。
そして・・・彼の血肉を吸って養とし、それを糧にして花咲く薔薇を、彼女が摘み取るのであるならば。彼女が、丹念に蕾になる前から眺め、触れ、そして開花を楽しみに過ごしながらも、ルイではない人のために最高の状態に咲く直前で・・・その命を絶つという残酷で甘美な行為を、彼にもたらすのであれば。

・・・それで彼は煙草の灰を落とした。
ここでは禁煙となっている。あの事故の後は、火気厳禁になってしまった庭園では、彼のために、昔、設置されていた灰皿までもが撤去されてしまっていた。

ここに居たくない理由はいくつもあった。
ここに居れば・・・・走り出して、彼女の背を抱き、連れ去りそうになるからだ。
他の男の妻になり、他の男との間にもうけたこどもを彼に託すという、残酷極まりない贖罪の娘が・・・彼にはたったひとりの存在なのだ。

家族になろう、ルイ・・・・

今でも、あの温室で交わした口吻を思い出し、唇が震える。

彼女の夫となった男に、殴られながらも、それでも彼女の涙と温度を奪った勝利感が彼を微笑ませた。

そして彼女の言葉は、呪詛のように彼に纏わりつき、そして今・・・彼に家族を与えると言って、自分の肉から生まれた命をルイに押しつけていった。

それがいけないのではない。彼はアルディ家当主の愛娘の教育係という最高の栄誉職を手に入れ、名実共にアルディ家の頂点に一番近い存在になった。
そして様々な権利をルイに与え、彼は今では、アルディ家にとって欠けては成り立たない存在となった。

求めた場所に、近付きつつある。彼が生まれて来た意味を噛みしめる瞬間は・・・間もなく訪れるだろう。
シャルル・ドゥ・アルディはルイのことを甥と呼ばずに「この家の後継者のひとりでありながら、唯一の星辰」と指名した。
これが何を意味するのか・・わからない親族会ではなかった。当主の命は絶対であり、それに背くほどの失点がルイには存在しない。彼は永らく親族会に加わることができなかった。
それは、出生年月日とアルディ家の直系であるという認定年月日に隔たりがあるからだ。遺伝学的に証明されたとしても、当主が認めなかったことにより、彼は権利取得まで時間を要してしまったのだ。

彼は目の前に広がる緑の苑を見つめる。

今は、背の低い植物たちが、薔薇の他にも地植えされていた。品種改良された薔薇の全ては、ファム・ファタルという名前であった。それは今でも変わらない。
けれども・・・一種類だけ、違う名前のものがあったけれども。
しかし、この苑を駆け回る者たちの身長を考え、背丈の短い品種が選られていた。
また幾種類か・・・彼の記憶との差分から、増えていることがわかった。
あの当主は、永遠の晄を手に入れても、それでもファム・ファタルを創り続ける。
何とも、狂った当主だと思った。
しかし、それがアルディ家の男の性なのだろうとも思った。
たったひとりを忘れられない。
どれほど多くの者と多くの子を成しても、魂の妻をひとりだけとする気質は、いったいどの時代かのものなのだろう。そしてそれを優因子とした愚かな実父のことを・・・彼は恨むことは放棄していた。
系図原簿にはそれらは書かれていない。その者の生涯を記録した原簿であることには変わらないが、その者の内面や狂気は記録されない。

風に髪が揺れる。
・・・彼はベンチの端に腰掛けていた。
昔は中央に座って居た。

でも、今は・・・端に腰掛けている。
誰かが座るのを待っている。あの人がやって来て、いつものように・・・後ろから彼の背を抱きしめ、空いた場所におずおずと座るのを待っている己の愚かさを嗤いながら、それでも・・・ここに来る度に待ってしまう。
満たされない想いを・・・生涯、抱え続けながら彼は生きることにした。
長寿として記録されることはない。あと少しの命だろう。だから・・・焦らずにその時を待つ。
■AMANKAY03

「ルイ」
彼を呼ぶ声が聞こえたが、彼は振り返らなかった。
それが誰の声か・・・わかっていたから。振り返らなくても、わかっていたからだ。
歩幅の狭い走る音が聞こえて、土や芝生を自由に飛び回りやって来る人物が居た。

あの人の足音に似ているが、もっと自由で躊躇いがない足音だった。
あの人の・・・音も匂いも温度も髪の柔らかさも忘れていない。
忘れられるのなら、と思った事はない。
忘れたら・・・彼は彼の命を迷わず止める。そうしなくても、停止するだろう。
彼の細胞のほとんどは、あの人のものだから。

「みつけた」
彼が居住していた別棟の、現在の主はそう言って笑った。薔薇の紋の入ったベンチの手摺りから、顔を覗かせて、肘当てに手をかけて伸びをしていた。
こども特有の手の膨らみが見えた。柔らかい匂いがする。こども特有の匂いだった。
そして、彼を手摺り越しに除く瞳は薄い茶であった。
髪の毛のうねりが強いので、髪留めで結んでいても大きく広がってしまう。
薄い茶の髪にあわせて、赤い髪飾りをしていたが、それは彼女のあどけなさを強調する役割しか果たしていなかった。

「隠れているの？」
暁の娘という名前のこどもは、そう言って、自分の言葉がおかしかったのか、声を上げて笑ったが、ルイは無表情のままで煙草を吸い続けた。
こどもの遊戯に付き合うつもりはない。
けれども、こどもは次に、ふと、平坦な口調で言った。

「それとも・・・隠しているの？」

ルイは金の髪の下から、鋭い視線を向けて、ベンチの手摺りにぶら下がっているこどもの顔を見た。青灰色の瞳が彼女の全身を捉える。

薄い金茶の髪に、薄い瞳。けれども造作は母親譲りであり、抜群の聴覚を持っている。
ルイの足音を聞き分けることができる獣並みの聴力に、父であるフランスの華が、彼女の能力について興味を示している程であった。隔世遺伝だな、と当主は笑い、そして嬉しそうであった。
・・・どのこどもよりも彼女を溺愛している理由は明白であった。そして時折、こうして彼女の口から出る言葉に、目を見張ることがある。
言い得ているがそれが無意識であるからだ。

「監視したいのなら、他をあたれ。アウロラ」
ルイは低い声でそう言った。

「だって」
暁という名前のこどもは、頬を膨らませて、薄茶の視線をルイに注いだ。
「見張っていないと、ルイが消えそうだから」
「物理学的に、それは無理だな。質量消失エネルギーの分散にかかる計算がなってない」
彼は嘲ら笑った。いくら教育係でも、彼は容赦しない。彼の頭脳に追随することのできる人物は彼の父と伯父、母、そして彼の年の離れた実妹くらいだ。それは多い方であった。昔は、誰とも会話できずに虚無を過ごした者たちが、ようやく・・・・集って会話らしい会話をすることができると思える関係を構築した、というのが実情であった。

アウロラはこどもに似付かわしくない溜息をついた。しかし、彼女はそれをすべて理解して見せている行為なのかどうかは疑わしかった。
彼女に見せる、ルイの仕草の真似をしているだけであったからだ。

「ルイはいつも難しい話をする」
「君はいつも難しい話ができない」

そこで彼女は眉を上げて、彼女の母とは比べものにならないほど、奔放に行動した。
手摺りを越えて、ベンチの正面に回り込み、ルイの隣に座ろうとしてよじ登り始めたのだ。
エナメルの沓が土で汚れ、足首を包んでいる豪奢なレースの靴下が白と土色の斑に染まっていた。
だが、彼女自身の体重を支えるほど筋力が備わっているわけでもないので、足を高く上げて、ルイの隣に広がる空間に足を伸ばすだけで精一杯であった。

長身かつ足の長さが尋常ではないルイやアルディ家の成人にあわせて作られたベンチに、アウロラが自力で上ることはできない。
いや、こども達が勝手に遊び場にしないように、危険回避のためにあえてそのように配慮されているものであった。
どんなに経年を装っていても、ここの設備は・・・ルイがここを出てからのものばかりである。

それを実感する瞬間であった。

その様子を無視したように手を貸さないでいたルイの傍らで、彼女は懸命に、ルイの視線に近付こうとして越えられない昇りを克服しようとしていた。
しかしそれは長く続かない努力であった。

「あっ」
彼女が小さな声を上げる。
筋力の維持が叶わず、手を痺れさせてベンチの縁にかけていた掌を滑らせてしまったからだ。
落ちる、と思ったようで、彼女は大きな瞳を閉じて、唇を引き結んだ。
こういう衝撃の時には、歯で腔内を切ってしまわないように食いしばれと彼女の教育係に教えられたからだ。
背を丸めて土に着地するまでの衝撃に備えるようにする仕草は、褒めてやるべきだったのかもしれない。

けれども。
その瞬間に・・・ルイの腕が伸びていた。
彼女の紺色の上着の衿を彼の指が捉えて、落ちる、と思った瞬間にはアウロラの小さな体は、彼女が目指していたベンチの上に投げ出されていた。
・・・視線が急に高くなり、急速に浮遊する感覚を味わったと思った次には、目の前にルイの締まった腿が見え、そして彼は平然と煙草を吸いながらも彼女の襟首を掴んで一気に引き揚げてくれた名残が、彼女の背中に残っていたので・・・アウロラは自分の唇を、自分の両手を広げて押さえた。
淑女は口を開けたままにしてはいけないとルイに教え込まれているからだ。
でも、彼女は守れないことがほとんどだったので、そんな時、ルイは口を掌で隠せ、と教えた。

見えなければなかったことと同じだから。

彼はそう言ったので、その時にアウロラはただ笑い、ルイに睨まれて口を噤むということを数回繰り返してやっと習得した所作であった。
・・・彼は他の人の前では決して繰り返さない。それなのに、彼女には根気よく繰り返す。それがどうしてなのか・・・・幼い心であったが、承知していた。

だから、彼女は尋ねたのだ。
彼が、何かを隠すように、隠しきれずに、ここに居るのではないのかと思ったから。

探しても見つからなかった。そして、アウロラの別棟は、昔はルイの居た場所であったと教えられた。でも、ルイは何も言わない。近付こうともしない。

アウロラは、共有したいのに。ルイの見てきた過去の続きを、アウロラが見ているから。この家での、ルイの記憶は途中で終わりはしないのに。
それを伝えたいのに・・・うまく言えない。それが、こどもであるからなのか、もっと違う何かが阻んで居るのか・・・わからない。
ただ・・・ただ、ルイがごくたまにこうして邸にやって来る時には、彼は何もかもから逃げるように薔薇園で過ごすことが多かった。だから、アウロラはそれが哀しい。わからないけれ
ども・・・ただ、哀しいのだ。

■AMANKAY04

アウロラは自力で身を起こすと、ふうと一息大きく呼吸し、次に背もたれに寄りかかると、浮かんだ足をぶらぶら揺らして遊ばせながら、乱れたスカートをぽんぽんと叩いた。整えているわけではない。幾重の層に包まれた自分の身体の上で弾むその感触を楽しんでいるだけであった。

・・・確かに、あの人の幼い頃によく似ていた。酷似しているというより、そのものであった。髪が強い巻き毛であることと、髪と瞳の色が薄いことなどを差し引いても、まさしく・・・あの人のこどもであることがすぐにわかるほどに、似ている。
どちらかと言えば、あの人の母・・・アウロラの祖母に最も近いと思われたが。
落ち着きがなく、直感的である。容易く人の突く言葉を探し当てることができる。もう少し狡猾であれば、人を籠絡することを最上とする希代の詐欺師になったであろうと思うほどに。

普段は自分の好きなような服装しかしない彼女が、今日は盛装していた。
「おかあさま、だいじょうぶだよ」
教育係であるルイが知らない情報ではない。彼には誰よりも先にあの人の安否が耳に入るようになっていた。

わかっていることだが・・・アウロラは彼女の娘で、最初に謁見できる権利を持つがルイにはそれがない。
ただ、こうして庭で待つだけである。
情報と様子は違うのだと思い知る。
そしてそこで一本目の煙草を、足元に捨てた。灰皿が撤去されてしまったからであるが、彼は二度と引火の惨事が起こらないように、念入りに足先で火種を絶った。そして、ルイが黙って、二本目の煙草を口に銜えると、それを見上げていたこどもは、ああ・・・と声を出してルイの喫煙を非難した。
「ルイ、アウロラはけむりが好きではない」
彼は黙っていた。副流煙の問題があるので、彼女の前ではほとんど吸わない。
けれども、今日ばかりは・・・このアルディ邸の中にあっては、彼は何もしないで薔薇の香りだけを嗅ぐことができない。

そこで、こどもは自分の話より、彼女の母親の話をしたほうが、ルイには効果的なのだということを思いだしたようであった。
そして眉をぎゅっと寄せる。
・・・これほど幼いこどもなのに、自分のことより誰かのことを気にする。こんな風に育ったのはルイの教育ではなく、親の愛と呼ばれる熱情に触れているせいであった。
どれほど近接する時間が短かったとしても、アウロラの両親は彼女に愛を注ぐのだ。ありったけの愛を注ぐのだ。・・・・それを理解しないルイが教育係になっても、アウロラにそれを教えることはないと承知しているから、彼女の父と母は、愛を注ぐのだ。

「おかあさまは・・・だいじょうぶだよ。だから、ルイはだいじょうぶだよ」
彼女はそう言ったので、そこではじめてルイはぴくり、と青灰色の瞳を動かした。
自分の娘と言ってもおかしくないほどの年齢差のある彼と彼女の間には、いとこ同士であるという関係以上のものはない、と先般彼女に告げたばかりであった。
けれども、彼女はそうではないと言って泣きわめいた。
ルイは、アウロラの星辰なのだ、と彼女は言った。その言葉の意味を理解していないのに、彼女は涙を流しながら言ったのだ。
「おとうさまのファム・ファタルとおなじだ」と。
彼女の父のファム・ファタルはふたり存在する。
ひとりは、マリナ・イケダという人物で、アウロラの祖母にあたる。
そして・・・ヒカル・クロスはもうひとりのファム・ファタルだ。運命の人という意味であるが、人生を左右させるほど大きな引力を持つ者という意味であり、別の意味としては、人生を狂わせるほどの者という意味でもある。
ルイには、ちいさなこどもの人生を狂わせる存在になるつもりはない。

涙が涸れて眠るアウロラの顔を見ながら、彼はもっと閉ざさなければならないと決めてしまっていた。
だから・・・だからこそ、この苑に足を踏み入れるのが苦痛であった。

彼の愛した永遠の晄が、生死を彷徨う出産を迎えたのはつい先日であった。その後も低心拍状態や心室細動を越えて意識を取り戻した時。ルイは、面会することができなかった。面会順位が低いからだ。
最初は、夫であるシャルル・ドゥ・アルディ。
次に、アウロラとその下のこどもたち。次は・・・クロス家とイケダ家の血族達。ルイはあくまでも、当主の甥で、彼らのこどもであるアウロラの教育係という立場でしかない。

当主は、ルイがそんな仄暗い愛を持ち続けることを許した。自分がそうであったからだ。親友の恋人を好きになってしまったという罪を、今でも抱えている。
だがルイが彼女を傷つけることは許可しない。

だから、ルイは遠くで彼女を見守り、出産の度に抗力が弱っている彼女の不健康の源が自分にあるのだと知る度に・・・ルイの治療の中断を求めるのだが、それは彼女が認めなかった。
ある期間を設けて観察することが重要であり、それが医療業界の未来を変えるのだとヒカルは主張する。
この世の理を大きく覆す聖母は、人並みの妊娠出産を幾度も経験しながらも、病の源であるあの国での研究を怠らなかった。
そんなことを続けていれば・・・いずれは破綻することはわかっているのに、それでも全てを両立しようとしている彼女の心はいつも・・・贖罪という言葉であったことを彼女が幼い時から一緒に居たルイが一番理解しているのだ。
それが彼と彼女を結ぶ絆であり、彼女の夫であるシャルル・ドゥ・アルディさえ入り込めない理解であるのなら・・・それを彼の生涯の糧としようと思った。
それが・・・傲慢であり邪であることは承知の上であった。

アウロラが盛装しているのは、シャルル・ドゥ・アルディの夫人であり彼女の母に会うからだ。
そして、アルディ邸の奥深くに移送された彼女を、彼女の家族が見舞った帰りであった。
・・・ルイは、結局、彼女の家族になれなかった。
こんな時にでさえ、面会できない。遠くで様子をうかがうこともできない。
こうして・・・震えながら、薔薇の苑で空を眺めるしかできない。

■AMANKAY05

永遠の晄から、暁が生まれた。そしてその暁の娘は、ルイの傍らで健やかに育っている。彼がどんなに冷淡であったとしても、気難しい人であったとしても、幼い娘はいつも無邪気に彼に微笑みを向けている。どれほど邪険に扱われようとも無視されようとも、こどもはルイの帰りを待ち、彼の帰邸を指折り数え、そして海をともに見ることを最上の歓びとしていた。
彼女に対して無表情に応対するルイに臆することなく、彼女だけが怖がらずに慕い続ける様
子は・・・当主とその妻のかつての姿によく似ている、と言われて苦い笑いしか浮かばなかった。

「時間だ。・・・オレは行く」
今後の予定では、アウロラはこのまま家族でしばらく過ごすことになる。本来はそれがあるべき様態であった。
元々寡黙な人物であったが、年を経る毎に彼の口数は少なくなっていき、ますます無言でいる時間の割合を増していた。
いつかは・・・彼は誰とも話をしないで自分の中だけで完結してしまうのではないのだろうかと思うほどに黙然として誰にも応じない状態を続けていた。

「ルイ。おかあさまとおとうさまには・・・」

会わないのか、という彼女の問いに、ルイは嘲笑を向ける。
「面会する必要はない」
「だって」
彼女の言葉を、彼は遮った。
「オレは君を送り届けただけだ」
その言葉に滑り込んで反論する術をまだ知らないアウロラは、薄い茶色の瞳を何度も激しく瞬いた。拒絶された、と思ったのだろう。
そう思うのなら、それで良いとルイは考えていた。誰かの教育係になることは彼の望んだことではなかった。本来、何事にも執着しないようにと教えられて育ち、帝王たる器になるべくして成長したものの、誰かを育てるという任を考慮した教育課程は経ていないからだ。
ただ、永遠の晄という名前の人が、彼に託したから預かっているだけであり、然るべき時期が来たら放免されるであろうと考えていた。
「でも、会いたがっている」
「関係ない」
彼は素っ気なく言った。ここで会ってしまえば・・・彼の心の内を見透かされる可能性があったからだ。表情を崩し、彼女に寄り・・・そして微笑む茶色の髪の茶色の瞳の人の手を取れば、それだけで済まされない。
もう、彼女に触れてはいけないのだ。彼は・・・彼女の配偶者の甥であり、彼女の愛娘の教育係でしかない。「せ
その割り当てに徹しなければ、彼女の傍に居られない。

-
・・・生涯会うことにしないと決めてしまうことができないのであるならば、こうするしかなかった。

-
しかし、それは叶わない。
彼女から離れて生きることはしない。たとえ・・・どんなに辛くても苦しくても、彼は彼女が生きていく姿を見て、時には無言で支え、そして彼女が彼のために捧げた命のかけらを抱いて生きる。

-
遠い昔に・・・・

-
眼を瞑れば、薔薇の香りがする場所にいるというのに・・・それは潮の香りに変化する。

-
あの海の端で、あの潮の音を聴きながら、彼女の背中を押した日のことは・・・・
彼は今でも忘れていないし、色褪せる記憶になしていなかった。

-
彼女に、生きろと言われた。
そして。
彼は、行け、と言った。

-
それで終わった。

-
いや、始まってさえいなかったのだから、終わりさえない終わりであった。

-
そのはずであったのに。
それなのに、今でもこうして燻り続ける想いを抱えて、彼は生きている。
報われたいと思わない。
思いを遂げたいとは思わない。
完全に否定すればそれは虚実になるが、彼は彼の仄暗い愛が成就するためにはどうしたら良いのかということを考えるのをやめたのだから。

-
おさないこどもは、ルイの拒否を肌で感じ、滑らかな頬をそっと窄ませた。不満に思っているわけではない。不安に感じているだけだ。それは、ルイからは簡単にわかる感情の遷移である。アウロラはまだ幼くて、彼女の心の内を隠しておくことができるほどには成長していない。

-
・・・しかし、彼女は、突然、思い出したように叫んだ。

-
ぱっと目を開き、大きな薄い茶の瞳を輝かせて、ルイに向かって叫ぶ。

-
「ルイ・・・おかあさまが、アウロラに、お庭に行きなさいと言ったの。ルイがそこにいるから、行きなさいって」
記憶が持続しないのに、こうして誰かから言われた音声を瞬時に思い出す彼女の行動を奇行だと言う者もいるが、これは記憶力と聴力が優れている者の特徴であった。
別棟はすでに彼の居住場所ではなかったし、本邸にも彼だけの空間は最初から存在しない。・・・アウロラの面会の時間、待機する場所はこの薔薇の苑しかなかったのでで、そのようにヒカルが娘に、娘の教育係の居場所を言い当てるのは造作もないことであった。
時間軸が一律ではないのはアウロラがとても幼いこどもであることを証する。

そして次に、ルイを見上げて、必死に早口で話しかける。こどもの声量は大きくて、自身の小さな体のどこにそんな力を秘めているのかと疑うほどであった。
加減を知らないアウロラの、拙い言葉があふれ出すことすら待てないかのように、次々とこぼれ落ちてきた。
「ルイ・・・ルイはきっと、薔薇のお庭にいるから、アウロラが迎えにいかないといけないって言われて、アウロラはお迎えに来ました」
「どこに？煉獄にでも行くのか？」
彼の辛辣な問いの意味は、まだ、彼女にはわからない。しかし、彼女が迎えに来たという言葉に反発していることは察したらしい。

彼女は、泥だらけの手を軽く擦りあわせながら、それを掌の中で広げ、上等なレースの縫い込まれたスカートに押し当てた。それが汚れても、まったく意に介していない風であった。

順番を考えるでもなく、思いついたままに喋り出す稚拙な知能に、彼は自分の歩調を合わせることはしなかった。
でも、それがルイなのだと、アウロラは知っていた。

「あの・・・おかあさまは・・・もし・・・ここにルイが居たら、アウロラは、『せいしん』をルイと見てきなさいって仰ったの・・・」
星辰の子というのは、ルイの美称であり尊称であった。
あらゆる星々という意味であり、今は・・・星は見えない陽の光の下に居る。
彼女の言葉に、ようやくそれまで無表情であったルイ・ドゥ・アルディの興味が移った。
彼女は、もっと多くのことをヒカルから聞いてきたようだ。これほど幼いのに、それを聞き覚えてルイ・ドゥ・アルディに伝えようとしている。彼女の耳の良さと記憶力についてだけは、少しばかり認めて遣っても良いかもしれないが、彼女の言葉はすべてを聞いたままに正確に復唱するわけではなかったから。彼は彼女に向き直った。

■AMANKAY06

「星辰」という和名をつけた品種改良の薔薇は今でも絶えていないが、目の前の風景にそれは見当たらなかった。それは・・・主に、ロアールの館かルイの私邸にのみ多く咲く種であった。もちろん、この邸にも存在するが、ここではない場所に咲いているはずであった。

-
ルイの疑問に、アウロラは反応した。落ち着きなく視線を左右に動かし、自分の中に蓄積した記録なのか記憶なのかわからないような情報を、どうやって処理しようかと惑っている。

-
彼女は、ベンチの上に腰掛けて、膨らんだ服をぎゅっと握った。小さな丸い手がさらに小さくなり、ひどく緊張している様が窺える。

-
「あのね。薔薇ではないの。薔薇ではないの・・・『せいしん』は、アウロラとおかあさまだけのヒミツなの・・・」
自分の異称が彼女達の秘匿事項になっていると聞いて、彼はそこで大きく・・・煙草を吸い、すぐに唇を話して地面に灰を落とした。そうしなければ、その灰は長く伸びすぎて、彼の膝に乗りそうであったからだ。
そんな無様な様子は誰にも見せるつもりはなかった。たとえ、幼子のアウロラの前であっても。

-
行動を躊躇い、落ち着かない様子を見せている暁の娘の隣で、ルイはただ、黙って居るだけであった。先を促しても、そうしなくても、結果は一緒だから。

彼女が説明を始めるまで、待った。

-
ヒカルが、ルイのことを口にすると聞いて、心が乱れているとは誰にも悟られてはいけない。
特に、目の前のヒカルの娘には。
彼女も、彼女の母であるヒカルも・・・知ってはいけないから。
ルイの仄暗い想いを知ってはいけない。
重篤な状態を逸したことを祝う歓びと、この家の当主が年若い妻を迎えてようやく安らぎを得たのだという安堵に包まれているこの家に、ルイは入り込むことはしない。
たとえ、この家で育った者であったとしても。ヒカルをファム・ファタルであると定めているとしても。愛した者が愛し返すという僥倖を得るのは、ごく一部の人間だけであった。そしてルイは、自分がルイ・ドゥ・アルディであることを引き替えに、ヒカルという永遠の晄を傍に置くことを放棄した。
・・・・彼女の走って行く先には、彼ではない人が待っていたから。だから、送り出した。

-
そんな想いを返しているルイの前で、アウロラは丸くて白い柔らかい掌をゆっくり持ち上げた。
人差し指を伸ばし、薔薇の苑の先に・・・アウロラは彼の視線を誘った。

-
「ルイ。アウロラは、ルイには教えたいな、と思ったの」
彼女の拙い言葉に・・・彼は口に銜えていた煙草を指に戻し、そして薄い唇を引き結んだ。

-
彼女の指の先には。
彼女の指の延長線上には。

-
そこには、薔薇ではない華が、咲いていたから。

-
こどもたちの情操教育のためか、背の低い華も植えるようになった。

-
この季節だけしか咲かないというわけではなく、かえって、この季節に咲くのはまったくの異形と言っても良いのかもしれない。
けれども。
この家の当主は・・・品種改良を趣味としていた。
薔薇ではない他の種にも、手を出したということか。
彼は、少しばかり・・・そう、ほんの少しだけ、息をのんだ。

-
薔薇ではない。
薔薇に似付かわしくない華が、そこにあった。アウロラに指さされるまで、それは普通の・・・野草であった。
単なる、野の花であった。

-
言われて、その不自然さにはじめて考え始める。
そこには・・・薔薇の苑の地面に、一面に咲いている黄色の花は水仙の花であった。
黄水仙だ。
その場所だけに密集している花々は・・・陽の光を受けて、黄金に輝いていた。
「太陽のお花だけれども、せいしんの子のお花だって。おかあさまが言った」
ルイはただ無言でその花を見つめていた。言われるまでは、まったく注意を払うに値する花だとは思わなかった。
原種より小振りで、太陽に向かって咲いている。日射を避けるようにやや俯き加減に咲く花であるのに、それは太陽の華である向日葵のように、昊に向かって花片を広げていた。・・・きっと、向日葵との交配も行っているのだろう。
このアルディ邸の中の植物たちには何があっても不思議ではない可能性が秘められていた。外には漏れないように、一代限りの品種達。しかし、枯れてしまったと見えないように、毎年新しい種苗が植えられている、実のならない継続できない種を見ながら、ルイは育った。
彼のようだと・・後世には残らない種を燃やし尽くすしか、できないのだと想いながら薔薇の苑を廻った過去の記憶が甦った。

-
しかし、そんなルイの過去を知らないアウロラは、嬉しそうに、そしてその言葉が助走となって自分の中に記録していた言葉を次々に放出しはじめた。

-
「おかあさまは、アウロラに内緒のお話をするの。昔・・・アウロラが生まれるよりずっと前に、おかあさまは、あの場所におかさまの髪の毛を切って、埋めたのですって。そこに、水仙の花が咲いて、太陽のようにきらきらしたお花が咲くから・・・おかあさまがひとりで内緒にしていたヒミツを思い出すのですって」
ルイは黙ったままであった。相づちすら、打てない。
彼女の言葉の続きを聞きたくて焦れているとは、決して言うまいと思ったが、無言であることがアウロラの次の言葉を誘う。
彼女は紅潮した頬をルイに向けながら、嬉しそうに語り出した。

-
「あのお花は、太陽の花というのだけれども、ここでは『せいしんのはな』なのですって。
あそこはね、おかあさまが御髪を埋めた場所で、お祈りなのですって。
・・・ルイがはやく治りますように、って。海ではなくて、ここに埋めたのですって。
おじいさまとおばあさまは海にいるから、お願いしたいときには海に行くのよっておかあさまは言うのに。でも、ルイはここに来るから、ここにお願いしたのって言うの。
それが『しょくざい』なのだからっておかあさまは仰るけれども・・・アウロラにはその意味がわからないって言うと、おかあさまはいいのよって言うの」
確かに。
黄色の水仙は、ケチュア語でAMANKAYと言い、「野の花」「太陽の花」「神の光」などたくさ

んの意味を持つ。
アウロラは黙ったままのルイに向かって、止められない溢れを放出した。
薄茶の眼はただ・・・あの黄色の花に注がれている。
「たいようの花が咲いていて、それをルイが見つけたら、それをルイに言っても良いよっておかあさまが言った。
おかあさまのお祈り事は叶ったから、今度はルイのお願いを叶える番だからって。
でも、自分だけのヒミツにしておくのはとっても苦しくて哀しいから、かわりにお鼻が咲いたのでしょうねって言うの。
ここを薔薇以外のおはなも植えましょうっておかあさまも言うけれど。
アウロラは知っているから。だから、おかあさま、それはとっても難しいわ、アウロラには難しいって言うと、おかあさまは、あなたとルイならできるって笑う。
・・・おかあさまのヒミツが、金のお花になって、アウロラに場所を教えてくれる」
ルイは黙ったままだった。彼女が・・・ルイの完治を祈願していたことをはじめて知った。

■AMANKAY07

-
彼女は続ける。
「おかあさまの髪の毛は茶色で、ずっと・・・ずっと、お母さまは太陽や月の色の髪になりたかったから、だから、そんなお願いが叶ったのかな、って言うのだけれども。
アウロラは、しっているの。
ここを薔薇ではないお花でもいっぱいにしましょうと言ったのはおかあさまだけれど、金色のお花を作ったのはお父さまで・・・やっぱり、アウロラに、おとうさまはヒミツを教えてくれるの。いつか、ここをたいようのお花と同じ色の髪の毛を持つ人が来てくれるように、ここをたいようでいっぱいにしようと思うけれども、アウロラはどう思う？って聞かれて、アウロラは素敵だわって答えた。
だって、ルイの髪の毛と同じおひさまが・・・ここでいっぱいなると聞いたら、とても・・・とっても嬉しくなってしまってそれ以外に嬉しいことなんてないと思えてしまったから」

-
ルイはそれを無言で聞いた。
ヒカルの秘めたる願いを知って、当主はなお・・・ヒカルの願いを成就させようとする。それは、愛し愛された者の持つ傲慢さであると攻撃することもできたが、それにしてはまったくと言って良いほど、余裕のない余裕という名前の強がりでしかなかった。けれども、誇張するためにそうしているのではなく・・・互いのためにそうせざるを得なかったのかと思うと・・・
ルイはただ、何も切り返すことができなかった。アウロラの言葉が理路整然としていたわけではない。けれども、彼女の語るアルディ夫妻の思いを知って・・・何も言ってはいけないのだと判断したのだ。

彼女は足を宙空で遊ばせながら、ルイに長い話をした。

「ひめたるおもいって、とっても苦しくて哀しくて、でもひとりだけで受け止めなければいけないのだけれども、そうできない時には、お花を添えたって、お母さまが言っていた。
御髪を入れた土に、髪の毛が土に還りますように、って。
でも、還らないでお願いが叶わないで、ルイが元気ではないのに元気になる振りをみんなに見せるくらいなら、おかあさまがいなくなった方が良いと、言うの」

「それはオレの意志を無視しているな」
彼は嘲笑った。

しかし暁の娘は怯まなかった。
「大事なお願いが隠れている場所だから、アウロラは面白いからとか不思議だからとかいう理由で、そこをルイに突然尋ねてはいけないって・・・」
「願いは隠れたりしない」
星辰の子は酷薄な笑みを浮かべる。
「たいようの花が、たいようの色がたくさんになったのなら、ルイはここに来てくれると思ったの」
彼女の言葉なのか、彼女の母であるヒカルの言葉なのか・・・どうでも良くなってしまう。居場所を不定にさせる言葉は・・・罠だ、と思った。

彼女は、薄い、とても薄い金と茶の混じった瞳を、ルイに向ける。
こたえは求めていなかった。
「・・・・アウロラは誰にも同じ様に御喋りしてしまうから。だから、ヒミツって意味わからなくて・・・おかあさまは、それ良いのよって言うのだけれども・・・」
そこで俯いた幼い暁の娘を、ルイはただ見つめるだけであった。
緊張で身を縮ませる娘は、誰にも、告げてはならないと戒められたことを守り、そして苦しんでいるから・・・アウロラの母であるヒカルはそれを解放するために、彼女にヒミツの苑を教えたのだ。
教育係のルイにも漏らしてはいけない。

・・・違う。
・・・そうではない。

彼にこそ、知られてはいけない想いを母子で共有したのだ。

そして、傍らの幼子は、続ける。
最初に、ルイが出会った時のヒカルより少し成長した姿であった。
桜の園を彷徨ったヒカルと同じくらいであろうか。
拙さを演じていたけれども、決して稚拙ではなかったヒカル・クロスの血族であると示すかのよ

うに、アウロラはルイの傍らで微笑む。

「オレに明かす理由は？」
利害得失の総点は、答えを一つしか残していないはずであった。
ルイの明晰な頭脳でなくても簡単に導けた帰結である。

彼の問いに、暁の娘は答える。
それほど長い時間を共有しているわけではない。
アウロラがルイのことを脅威に感じるのであればいつもで解消できる関係であった。
でも、アウロラはルイでなければ駄目だと言い張る。
それが何故なのか・・・彼女は明らかにしていない部分が多すぎると思っていた。

頬を染めて、アウロラはとうとう話しを始めた。

「ひみつは誰にも言わないから秘めたる想いなのよっておかあさまが言うから・・・だから、たいようの花のことを話したくなったら、その人になら話しても良いと思うような人ができたら、アウロラもお話してみて良いってお許しを頂いたので・・・しばらく、とっても怖かった」
「なぜ」
彼は誰かの理由を問うことはしないのに。
それなのに、彼女には・・幼い彼女には、尋ねてしまう。
アウロラを通して、もっと違う人物を知りたいと思っている自分を否定しない。
けれども、アウロラという媒体を通してあの人を見ることはしない。
常に・・・彼はルイ・ドゥ・アルディであることによって、彼女が望んでいる「
真の姿」というものに近くなっていくからだ。

■AMANKAY08

「・・・お天気や薔薇のお話をするみたいに、『きがる』にお話しちゃダメだって言われて、びっくりしてしまったの。アウロラは・・・その・・・とってもうっかりさんだから、ルイにいわれているけれども、アウロラはとても「考えが浅い」から。
だから、ちゃんとお話しないといけないお話なら、いつかではなくて、今、ルイに言ってもいい？って聞いたら、アウロラが考えなさいって言う。
・・・いつも、おかあさまはそんな風にアウロラには言わないのに。
だから、これはとってもとってもだいじなことなんだって思ったら・・・・だれにも言わないけれども、眠ってしまっている間におしゃべりしてしまったらどうしようって・・・・毎晩、こわくなって泣いていたら、おかあさまがそう言ってくれたの。
ごめんねって言ったのに、アウロラに『たくす』って言うの。
ばらもよいけれど、おひさまでいっぱいにしようって・・・
たいようでいっぱいにすれば、お星さまが、それを見つけてくれるからって。でも、おかあさまは、かくしているのよって言ったの。ひみつにできないくらい大事だから、かくすのよ」

そこで、彼女の髪が揺れ動いた。大きな瞳をルイ・ドゥ・アルディに向けている角度も、瞬きの速度も、あの頃のあの人そのものであった。
・・・彼女のことを当主がこよなく愛するのも、こういった仕草がアウロラの祖母を思い出させるからなのだろう。

「・・・くだらないな」
ルイ・ドゥ・アルディはアウロラの言葉に感想を述べた。
彼にとっては感想というものではなく、単なる評価であった。
彼女は、ベンチの上で足を浮かせながら、頬を膨らませた。ちらりと、ルイの横顔を横目で見上げる。
丸い手の平を自分の頬にあてて、難しい言語をはじめて聞いた時のように、僅かに眉を寄せた。

「うん。アウロラは・・・ただ・・・ルイにお話を聞いて欲しかったの」
彼女はただ、頷くばかりであった。ルイの反応は予想していたのだろう。彼のこれまでを知っているからこその、彼女の反応であった。
依存しているようでそうではない暁の娘の行動は、やはり気質が根柢になるかもしれないが、彼女の育った環境であり、彼女の父と母に教示されたものが大きく影響していた。

「ひみつを、ルイに預けたの。アウロラは、ルイと違う。おかあさまやおとうさまとも違う。だ

から、知らないひとに御喋りする前に、ルイにアウロラのひみつをお願いしただけなの」
「一方的に押し付けるのが、託すということなのか。ある意味・・・真理だな」
彼の嘲笑は乾いて掠れていた。
あの人の娘はまだ幼ない。それなのに、本当は伝えてはいけないことなのかもしれないと臆しながらも、彼女がもうずっと前から持っていた苦悶を、ルイに吐き出したことにより、安堵するどころかもうひとつ沈鬱な枷を持ってしまった。

この家では、薔薇以外の華を愛でるものは少ない。アルディ家の者は薔薇と縁深い存在だと言われているし、薔薇はこの家の象徴でもあった。
しかし・・・黄水仙を植えることを黙認した当主は、ヒカルという人物が敢えてそうした理由を知っている。
そこに何が眠っているのか、そこにどんな意味が込められているのか・・・わかっているはずだと思われた。

他の男のことを考えながら、祈念するために自らの髪を梳り、削ぎ落として土に祈る人のことを・・・それでも、当主はもうひとりのファム・ファタルとして愛すると決めて久しかった。

愛は回帰しない。

同じ愛は存在しない。けれども、愛が愛を呼び、惹き合い、そして違う愛になることもある。ヒカル・クロスという人物は、いつもそういったことを考える大人になった。
それまでは、眼を逸らし耳を塞ぎ、真実から自分自身を遠ざけていたというのに。

・・・彼女は、おとなになったのだ。そして、妻になり、母になった。

そして・・・ルイと家族になろうと言った彼女が約束を果たすために、夫や娘に詰られるかもしれないという可能性を受け入れつつも、ルイのために薔薇ではない金の華を植えたのだ。

黄の水仙の花言葉はいくつかある。その異称の多さと同じほどに、意味深いものがあった。

「私のもとに帰って」
「気高さ」
「愛をふたたび」

・・・それから、もうひとつある。

「愛にこたえて欲しい」

それは。

堪えるのか、応えるのか・・・

どちらを彼女が望んでいるのか、彼女がどちらの意味の愛をルイに捧げているのか・・・彼はとうの昔から、わかっていた。

二本目の煙草は煙と苦みを味わう前に、彼は唇から離し、指から解放してしまう。

今、あの邸の中で横たわるだけで精一杯のあの人は・・・アウロラに何を託したのだろうか。

まだ幼いというには幼すぎる娘は、口元を両手で隠した。
浅慮に言ってはならない、と諭した母の言いつけを守れたのか、守れなかったのか、自分では判断できないらしい。

■AMANKAY09

太陽の華、というのは言い得て妙であった。
少し離れた場所で眺めると、密集して咲く花に陽の光があたり、金色に輝いている。
アウロラは感歎の声を漏らす。
「ルイ、綺麗だねぇ、たいようの花は、きれいだねぇ。おひさまがルイに見惚れているから、こんなに光っているのかしら」
甲高い少女特有の声が、ルイの耳に入るが彼は無表情に、何にも動じずにただ・・・遠くに見える金色の・・・ルイと同じ色の花を見つめているばかりであった。

「アウロラ」
ルイは、そこで彼女の名前を呼んだ。はい、と彼女はこたえる。何もできなくても、幼くても、彼女はアルディ家の娘であった。
己の名前に誇りを持ち、そして自分以外にはその名前が居ないという傲慢さえ持っている。
ルイと苑を交互に眺めていた小さな娘は、頬を染めて薄い茶色の瞳を細めて笑った。
「ルイは・・・ルイの前では、お星さまとたいようが仲良くできるのね」
アウロラが溜息混じりにそう言う。
星と太陽は共存しないという概念は、暁の娘には存在しなかった。
ただ、煌めきと美しさに歎息し、目を細め、顔を綻ばせる。美に対する価値観が格別である、アウロラの目に映るのは・・・ルイと同じ色なのだろうか。

踵を浮かせながら、明るい茶色の髪を煌めかせる娘は、何もかもに・・恵まれていた。
その出自も。その身分も。アルディ家で彼女の言い分が通らない場合は存在しない。
そして、彼女が生まれた時には、母であるヒカル・クロスと父であるシャルル・ドゥ・アルディは内縁関係であったのに・・・ルイとは違い、生まれた時から、彼女にはシャルル・ドゥ・アルディの実子であり正当なる権利を保有していることが認められている。それは妻と認めた人物から出生したこともあり、何もかもが、彼と違っていた。

今となっては、ルイを実子と認めなかったのは、彼の本当の父母への配慮があったことであり、彼の出生時に必要であったとする人物への臍帯が必要であったのだと知ると・・・ルイはただ冷たく笑うだけだった。

この家の中で、世間一般の求めるものが通用することはない。それを持ち込んだのは、ヒカル・クロスであったが、それはとてもささやかなものであった。
なぜなら、ヒカルという人物も・・・アルディ家のしきたりに馴染んだ人物であったから。何が普通で、何が普通ではないのか・・・わからなかったから。
それに比べて、ルイの知識と経験は無駄ではなかった。各国各地を滞在し、それでいて不毛であると感じたあの日々は無駄ではなかったのだと今になって思うようになった。
・・・「社会通念上一般的」とされる事例を数多く見てきた。
普通の親子関係、普通の親族関係、普通の・・・恋人同士というものは、「普通」という定義が曖昧であるということしか結論づけることは出来なかったから。
どれほど懐かしくても、どれほど・・・愛おしくても。
それでも、過去に拘れない。

「アウロラね、壊れてしまっているの」
そっと、彼女は告白した。ルイに、気恥ずかしいけれども軽やかに言った。それがずっと前から沈鬱な悶えであったはずなのに、彼女は軽く言った。
「自分のきょうだいより、ルイが心配で・・・おかあさまがルイが心配だっていうけれども、ルイだけを思うことが出来ない時がこわいっておっしゃるので・・・それで、アウロラが、いいよって言ったの。まだ、おかあさまのお腹の水で泳いで居た時に、そうやってお話したの。誰の声も聞こえなかったけれども、おかあさまと、ルイの声が聞こえた」
そこで、ルイは暁の娘に視線を移した。
・・・あの人がアウロラを身籠もった時。確かに、彼は彼女と話をしたから・・・
最初に気がついたのは、ルイであった。
あの人は、気がつかなかった。
・・・あの人は・・・己が妊娠していることを意識していなかった。
けれども、ルイは気がついていた。
・・・もう、彼女は・・・ルイのファム・ファタルは、手の届かない場所に居るのだと、知った

。
一緒に逃げよう、と言いそうになったけれども、それを留めた。

このまま逃げよう、消えよう、と言ったのに。
それでも彼女はウイと言わなかった。首を振ることすらしなかった。
ただ・・それはルイ・ドゥ・アルディではないと言っただけだった。それが、彼を今でも生かしている。

「オレは、後悔していないよ」
彼はそっと・・・静かに、言った。彼の身分では「オレ」という表現はしない。けれども、アウロラの前では・・・彼はいつも、この薔薇園の中で彷徨っていた時代に戻ってしまう。

■AMANKAY10

「もう、行け」
ルイが掠れた声でアウロラに命じた。小さな暁の娘は、不満の声を漏らしたが、それでもルイの言葉は絶対であった。
彼女は、ひとりにして欲しいというルイの言外の願いに敏感であった。彼はいつも言葉が少なかったが、彼の口数が少なくなるに比例してアウロラはまったく無意味かつ無作為に話をする。それでも、彼の拒絶を目の当たりにすると、彼女は少し哀しそうな顔をした。
「ルイは？ルイも一緒だよね？」
「それはない」
彼は断言したので、それ以上アウロラは口を挟む事が出来なくなってしまう。
こどもの特徴を多く備えたごく普通の娘であるが、彼女には幾つか特徴があった。
それは、決して彼に我が侭を通すために意地を張らないということである。どんなに泣いても、どんなに暴れても、彼は決して動じたり屈したりすることはないのだと学んだ後は、彼女はルイの予定に変更は加えられることはほとんどないのだという前提で話をやめることがあった。
彼は長い脚を組み直すと、蔓を象った肘当てに軽く体を傾けて、空虚な視線で目の前の黄金の苑を見つめているばかりであった。

・・・この家には、自然の摂理を無視したものが多すぎる。
品種改良された植物たちは、季節を告げる使者という役割を持たなくなっていた。
何より、その最たる生命が、ルイ・ドゥ・アルディであるのだから。
目の前に広がる景色も、本来なら在ってはならないもののひとつである。

「彼女に逢うことが出来るのは、彼女の家族だけだ」

彼は静かに、事実を告げる。
あの人に面会できる者は多くはない。
家族という定義は曖昧だ。この家はなおさらそうであった。
曾祖父の残した遺産は負も孕んでいる。多くの子をこのように誕生させたが、そのことによって諍いも絶えなかった。だからこそ、頻繁に当主が変わるのではなく、シャルルが長い期間、君臨しているのだ。
だから尚更、ルイ・ドゥ・アルディがこの家に関与することは差し控えなければならない部分があった。なぜなら・・・彼は現当主のようには、長く居続けることができない不確定要素を持っているからである。それに、ルイは当主の長男であるということでもない。あくまでも、甥である。しかも、当主には年若い妻が居り、今回はかなり無理があったが、それでもあと幾人かは子を望めるだろう。彼女の躰は奇蹟をもたらす。培養しなくてもある程度は修復できるほど、今でも細胞分裂を繰り返す若々しい奇蹟の種を、彼女は持っているのだ。不老不死も夢ではなくなる。

そしてその子らが成人し、子を作り、そして当主が代替わりするまで、彼は見届けることができないかもしれない。
アルディ家のこども達がまだ小さいので、このまま当主代行を続けてくれないかと打診があったときに、彼は頑なに拒絶した。もちろん、アルディ家の事業には彼は携わることには異論は無い。実質そうであったとしても、彼はそういう地位称号を得ることによって不便になるから、と言っただけだった。

彼は、最近になってますます執着がなくなってきていた。
元々そのように育てられたということもあるが、彼の気難しい気質が人を遠ざけた。
ヒカルという人物も、家族を求めることにはだいぶ囚われていたが・・・それでも、本当の血肉を分けたこども達に囲まれて、彼女はようやく安らぐことが出来たのだろう。

「ルイも家族だよ」
彼女はきょとんとした顔をルイに向けて、そう言った。
どうして？とは尋ねなかった。彼がこの家に関することで知らないことはないというのに、彼の感想であったり見解であったりするような発言は一切しないということを彼女は知っていたからだ。
「アウロラの教育係で・・・アウロラのいとこで・・・ミシェル叔父様もジル叔母様もルイも・・・みんなアウロラの家族だよ」
「君がひとりでそう思うことは勝手だが、それが他者と合致しているとは限らない」
そうなの？とアウロラは唇を尖らせた。
「だって、なみだが出る時に、傍に居てくれる人は、自分にとってだいじな人で・・・それを『だいじ』って言うんだって、おかあさまは言う」
それから、アウロラは薄い茶色の瞳で、ルイを見上げて、しばらく黙っていたが、やがてぽつり

と大人びた口調で言った。
「アウロラは、ルイがだいじだよ。だって、泣いている時にはいつも傍に居てくれる。でも、ルイはアウロラのこと・・・だいじじゃないの？」
「今、理由は言った。君がそう思うのは勝手だが、オレに強要するな」
手厳しい言葉に、アウロラは項垂れて凋んだ花のようであったが、すぐに顔をあげて負けずに言い返した。

「でも、ルイは、今、泣いている。アウロラにあっちに行けって言うけれども、いつもなら自分から居なくなっちゃうのに・・・」
そこでルイはまた押し黙った。こどもであることは容赦の理由にならない。青灰色の冷たい視線を、暁の娘に向けた彼の眦は、鋭利な刃物のようにきつく尖っていた。

■AMANKAY11

「ルイの泣いている音が聞こえるの」
「幻聴だな。一度、医者に診せておけ」
ルイは素っ気なくそう言ったが、彼女の言葉に少しばかり・・・揺れた自分にいらだたしさを感じていたので、ふいと眼を逸らしたのはルイの方からであった。
時折、彼女ではないのかとさえ思うほどに、よく似ていた。
母のヒカルは、もっと周囲のことばかり気を取られていて自分の感情をなかなか出さない娘であったが、アウロラは天真爛漫というか考えが浅く、思っていることをつい口にしてしまったり、こうだと思ったことは行動に移さないと気が済まなかったりするところがあった。

「でも、ルイ。おかあさまは言うの。『涙を流すばかりが泣いているわけではない』とか、『本当に哀しい時には涙の出ない涙もあるのよ』とか・・・。その時には、おかあさま、きっと、ルイのことを思っているのかなって思ってしまうの。なんだか、そんな気がするの」
「まったく、根拠のないことだ」
彼は周囲を軽く一瞥した。誰もいないことを確かめる。
そして目の前の少女に、教え諭した。
「アウロラ。君もアルディ家の人間だ。不用意な発言が、重大な過ちを呼ぶということを忘れてはいけない」
それから、軽く吐息をつく。
彼女が自分の母のことを話す度に、ルイはこうして背中に僅かに力が入り緊張する自分を知っている。そして、そこに・・・本当ならば感じないはずの甘い痺れや、彼女の手の平の温度や髪の質感が再現されていく過程にのまれそうになる。

「ルイが泣いていると、アウロラもかなしい。でも、アウロラが泣いていてもルイにはかなしくなって欲しいとは思わない。
たいようのお花は、枯れそうな直前が、一番大きく咲くのですって。・・・苦しいときこそ笑っているものなのですって」
彼女が何を言い表したいのかは予想できた。しかし、代弁してやるつもりはなかった。
・・・ルイの傍らにいるために、彼の僅かな表情や様子の違いから、彼女は無表情を保ち続けるルイの感情を読み取ることができるようになったらしい。
彼女は耳が聡い。僅かな仕草の変化や足音、溜息の深さなどから様子を察知することができた。

彼は微笑みこそはしないが、苦しい時にこそ、いつも苦悶せずに、無の状態であり続けようとしていることを、アウロラは知っているのだ。でも、まだそれを思い通りに言い表すことが出来ないもどかしさで、彼女は饒舌になってしまっているのであった。

「それに君は、いつもヒカルの・・・彼女の言葉を借りるだけだ。オレはヒカルと話をしているのではない。アウロラと会話していると思っていたのだが、違ったのか」
彼は決して間違えないのに、そのように言うので、アウロラは困った、と言って首を傾げた。彼女は臆しても窮しても涙を流して訴えることはなかった。ルイにはそういう手法は伝達手段として採用されたためしがなかったからだ。
だから、小さい体と手を使って、彼に話をしようとする。どれほど会話にならなくても、ルイは話を切り上げたりしない。しかし、沈黙することは話が終わってしまうことを意味する。そうなれば、今度こそ・・・彼は自ら腰を上げて去ってしまうだろう。

「アウロラのきもちを言ったら、ルイはアウロラのこと、嫌いになるもの」
「そもそも、嫌いという感情をオレが持つという前提はどこから来るのか理解できない」
彼は呆れてそう言った。

ルイには嫌いという感情がない。相容れない相手は無視するだけだ。
確かに、一時期はシャルルもヒカルも死んでしまいたいと思うくらいの状態に陥れば良いのにと思ったこともあったが、それは嫌悪ではなく憎悪だ。ミシェルに言わせれば思慕でもあるというが、ルイは認めていなかった。
新たに誰かのことを深く思うことは・・・あの時限りでやめてしまった。
彼が生涯執着する相手は、ただひとりだけである。
そして、彼女は一生・・・手に入らない。自分で彼女の肩と背を押したから、そこに腕を伸ばすことはしない。なぜなら、そうなってしまえば、もう彼はルイ・ドゥ・アルディでなくなるからだ。

それで彼女は少しだけむっとしたような顔をした。煽られたとは思っていないようであったが、自分が悩んで口にできなかったことを、知られたくないと思っているルイに目がけて投げつける

。
「アウロラは、アウロラがおかあさまのひみつをルイに言ったら、ルイは困るのかなって思ったの」
なぜ、と言葉に出さなかったが、彼の問い質すような目付きが彼女の言葉の先を促す。
「そんなにだいじなたいようのお花だって知らなくって、薔薇のかわりに、朝いちばんでお届けするいつものお花をたいようのお花にしたの。小さいから、いっぱい摘んで両手一杯にしてお渡ししたらかわいいなって思って・・・たくさんお花がないといけないなって思って、たいようのお花を・・・ほとんどぜんぶ取ったの。そうしたら、おかあさまは喜ばなかった。でも、アウロラがびっくりしてはいけないからって、おありがとうって、とってもかなしそうな顔をして、うけとってくださったの。でもそのあと、いつものスタンドにお花は飾られなかった。
おひとりで、アウロラよりおとななのに、ひとりでアウロラよりいっぱい泣きながら、それを土にお戻しになった。
・・・アウロラは、なぜ、おかあさまが喜ばなかったのか、わからなくて・・・やっぱりかなしくなってしまって、いっぱいいっぱい泣きながら、おとうさまに尋ねたの。おかあさまがかなしいとアウロラもかなしい、と言ったら、おとうさまも同じだよっておっしゃったから」
彼女は一気にそこまで言うと、遠くの金の苑を見つめた。こどもは美に対しては敏感であると同時に残酷であり、加減を知らない。
「おかあさまの大事な人が、とっても苦しいときに、おかあさまができることは少なくて、でも、何かしたくて、それをあの花をみると、思い出すから、あの花は決して摘み取ってはいけないし、大事にしなくてはいけないよってお父様はアウロラを抱き上げて、ほっぺたにキスしてくださった」

ルイは黙ったままであった。
ヒカルが他の男への祈りを捧げた場所を神聖視するあの男の愚かさにも呆れるが、何より・・・目の前のアウロラには間違いなく、あの永遠の晄という名前の人の因子が受け継がれていると思った。
アウロラが、なぜ、その花が咲いている場所に近付かないのか・・・理由がわかった。
彼女は禁じられればそれを破ってみようという好奇心も旺盛であるが、自分でやってはいけないのだと強く思ったことは決してしない。
だから、それがアウロラのいうところの「アウロラの秘密」であり決め事であるのだろうと思った。決して、そこには足を踏み入れない。そこは・・・ヒカルの思いが埋められた場所だからだ。そしてその上に咲く花を、当主は生涯守り続けなさい、と自分の娘に託した。

「それからおかあさまのひみつを伺って、アウロラは・・・おかあさまの大事な人って誰なのって聞いたら、おかあさまは笑って『おかあさまだけの大事な人ではないのよ。おかあさまやおとうさまやアウロラや、みんなが大事に思っているおほしさまっていう名前の人よ』って教えてくださったのよ」

■AMANKAY12

彼女はそこまで言うと、体を揺すって宙に浮く小さな足を交互に持ち上げた。
「ルイは、ひみつや約束を守れない人になってはいけない、って言う。アウロラはひみつもやくそくも、守れないから、ルイに嫌われてもかなしいけれども・・・ルイはアウロラには『たいよう』だから。いつか、たいようの花を、ルイとみたいなと思ったの。
ルイ。・・・・アウロラは、ルイのおひさまになりたい」

彼女の言葉にルイは薄い唇を横に引いた。彼女は暁という名前を持っているが、太陽そのものではない。太陽のようであった、と比喩される当主のファム・ファタルの血を濃く受け継いでいる彼女は、屈託無く笑う。
「ああ、またアウロラはひみつを言ってしまった」と無邪気に笑った。

「だからね、ルイ。アウロラだけが、かぞくになりたいって思っているのではなくて、あそこにお花が咲いていて、あそこのお花が枯れなくて、ルイがお花を見ることができたから。アウロラは、やっぱり・・・ルイがちがうっていっても、ルイはまちがえないけれども、それでも、『かぞく』だと思うのよ」

そこで彼女は口を噤んだ。アウロラを呼ぶ声と足音が聞こえたからだ。

ルイは、ただ、静かにその花を見つめていた。アウロラは、彼の綺麗な横顔を見上げているばかりであったが、もう、それ以上は話をしなかった。
・・・彼が煙草を取り出し、唇に銜える。
もう行け、という合図であった。そして無造作に煙草に火をつけ、そして彼は大きく呼吸した。

「・・・アウロラ。いつか、あの場所に・・・オレの髪を埋めてくれ」
え？とアウロラは顔を上げたが、ルイは空いた方の手を伸ばし、彼女の背中をそっと押して体重を支え、ベンチから降りる彼女を補助してやった。
不思議そうに見上げるアウロラの脇で、彼がゆらりと動いた。

ルイは長身であるが、よく鍛えられていることもあり、彼の筋肉の動きは非常に優雅で滑らかであった。土を踏む音が彼女の耳に入ってくる。そして、彼が・・・煙草を口に銜えたまま・・・黄水仙の小丘に歩み寄っていく。
それほど遠い距離ではなかった。そしてゆっくりと体を屈め、また体を起こす。
暁の娘を本邸に連れ戻すためにやって来る者たちよりはやく、アウロラの傍に戻って来たルイの

手の平には、黄金色の水仙の花があった。

そちらに行ってはいけない、と言うこともなく、アウロラはただ黙って、ベンチの前で佇み、そしてルイが戻ってくるのを待っていた。幼い少女であるのに・・・彼が厳粛な儀式を執り行っていることを承知していた。

服が汚れるほど邸内や庭をかけずり回っていただろうに、それでもその場所には決して立ち入らなかったアウロラの眼に、久しぶりに間近で見る黄の花がどんどん近付いてくるので、彼女は唇を開いたまま、それを眺めているばかりであった。

「ルイ・・・・」
摘取ってはいけない、触れてはいけない、近寄ってはいけないという禁忌の場所から、彼は花を手折って、アウロラの顔の前に差し出した。
「持っていけ」
細く長い指と指の狭間には・・・アウロラが遠くからでしか見つめることのできなかった水仙の花が微風に揺れていた。
彼が歩くと、煙草の煙が彼の体に纏わりついて、何とも言えない厳然とした靄になり、やがてそれは淡くなって消えて行く。それと対照的な鮮やかな黄色が、アウロラの目の前にあった。彼女は両手を持ち上げると、その小さな手の平の上に彼は太陽の花を落とした。
「でも・・・」
「誰も咎めはしない。ルイ・ドゥ・アルディからだ、と言え。それだけで、わかる」
それがどんなに豪奢な花束よりも勝る、最高の状態の花であることは、幼いアウロラにもわかっていた。
「最初で、最後だ」
彼の言葉に、彼女はどういうわけか、瞼が痺れて胸が苦しくなった。どうしてなのだろうか。苦しいというより、痛かった。とても、胸が痛んだ。

・・・永遠の晄という名前の人のために、皆が薔薇を捧げる。アウロラも捧げた。そして彼女はシャルルのために、薔薇を捧げる。

でも、ルイ・ドゥ・アルディは？
ルイは、どうしていたのだろうか。皆が、互いに大事に思う者に薔薇を掲げている間。彼は、たったひとりで・・・
それを思うと・・・
最初で最後だ、と言い切った彼の言葉がとても柔らかくて・・・思わず、アウロラは手をぎゅっと握りしめてその華を潰してしまいそうになり、あわてて自分の手の平の華に集中した。

それは。
両手一杯の薔薇の見舞いより、重かった。小さな命であった。そして、ヒカルの祈りが命になってルイに還っていった。それをまた・・・アウロラにルイは託したのだ。
そして彼は、自分の髪をここに埋めて欲しい、と彼女に頼んだ。他の誰にも託せない彼の秘密を・・・アウロラは受け止めたのだ。

■AMANKAY13

「アウロラがもらって良いひみつ？」
彼女は黄の華を見つめながら、ぽつりと言った。
彼がいつか・・・いつか朽ちる時にここにヒカルと一緒にして欲しいとアウロラに頼んだことを指し示した。

そして彼女が顔を上げると、ずっと高い場所でルイが目を細めて、薔薇園を越えた空を眺めているところであった。
「・・・ルイのひみつ？」
「・・・アウロラに任せる」
抱えきれないで苦しいと思ったのなら、誰かに言っても良い、とルイは言ったので、彼女は首を横に振った。
「・・・たくすっていう意味を、アウロラがもう少し・・・わかるようになったら考える」
「先送りは解決にならないと教えただろう？」
「忘れるのではなく、しまっておくことにする」
彼女の記憶が大人になってからでも維持されているのであれば、何かのきっかけで思い出すだろう。その程度で良かった。

ルイ・ドゥ・アルディに関する母の物思いと、父の愁いを、彼らの娘である暁の娘が背負うことはないし、その必要はなかった。
傍に永遠に居ることはできない。今生でそれは実現しない。
だから・・・。
「それを持って、行け」
彼女を呼ぶ声が大きくなった。泥だらけの彼女は、一度着替えなければならないだろう。ヒカルに渡らなくても良かった。・・・着替えに気を取られて、アウロラがその間に忘れてしまっても、構わなかった。

彼はまた煙草を口に銜え、アウロラの薄い茶色の巻き毛が遠のくのを見送った。両手で黄水仙を支えているので、ぎこちない歩き方であった。

・・・彼は、そして、空に向かって煙を吐き出す。

・・・かくれているの？それとも、かくしているの？

アウロラの声が甦る。
彼の恋情は消えることはない。決して。

なぜなら、彼は忘れないからだ。
忘れられないからだ。
・・・忘れたくないから。

その昔、己の定めたファム・ファタルのことを諦めた当主と異なり、彼は・・・ルイは、この思いを抱えることにしたのだ。
愛することをやめることができないのなら、それは彼の中の秘めたる想いとしてずっと・・・持っていきていく。
しかし、それを態度や口に出したりしない。

報われたいとは思わない。
だから、生涯隠し通す。何でもないことのようにして過ごす。
それが、彼の愛だからだ。彼の愛し方であるからだ。
彼女の献身により、彼の皮膚は彼女と融合し、彼の体は彼女によって甦った。毎朝薔薇を捧げる立場になくても。こんな風に、見舞うことすらできなくても。

彼女が欲しくてたまらなかった家族と彼女がここで生きていくのであれば、それ以上はなかった。

彼女がルイのために・・・髪を削り、涙を流して神の花を植えた。ほかでもない、ここに。ヒカルは・・・彼と彼女が過ごしたアルディ邸の一部になった。

太陽の花だ、とアウロラは教えられたようだ。彼の髪のような、黄金の色を持った花。
そこには大事な人への祈りが捧げられていると言う。
・・・ヒカルの運命の人は、白金の髪の持ち主だ。金の花と同じ色は持っていない。だから、当主はそれが誰のことであるのか承知の上なのだろうと思った。
そして、アウロラは、母と自分の従兄の間柄を訝しむことはないと思っていたが、その実はそうではなかったらしい。
彼は苦笑する。

母の言い付けを守らずに、ルイに事実を告げることによって彼が動揺するとでも思ったのだろうか。
・・・随分と過小評価されているなと嗤うだけである。

この家の、持ち出してはいけない花を手折ったと聞けば、彼らの家族の概念とルイの考えが違うことを察するだろう。
どれほど愛しくても。どれほど激しく求めていても。
彼は彼女に触れられない。

・・・彼はヒカルが閉じ込めた想いが彼の思いと混じり合う日が来ることを期待して・・・彼は生きていく。命の続く限り。
彼の命を祝福する、永遠の晄に「生きろ」と言われたから。
彼の生命を祝福すると言ったから。
そして、その声で自分は戻ってきたから。
・・・彼女への愛にこたえが出ていないから。

■AMANKAY14

彼が華苑に近寄って行ったのに、アウロラが引き止めなかったのは、彼の小さな呟きが聞こえていたからだろう。

たった二言だけ。

はじめは、永遠の晄の名前を呼んだ。
愛おしそうに・・・彼女の名前を呼んだ。

そして次に・・・掠れた小さな声で、囁いた。
振り返ってベンチに戻るまでの短い時間だけが、彼に許された自由であった。

愛している・・・君だけを、愛している・・・

気高い彼が、もう気の遠くなるほど長い間、堪えていた想いがその時に、迸った。
それを誰にも聞かせたくなかった。
ただ、ここに咲くあの花だけが知っていれば良いことだと思った。
しかし、それをアウロラが聞いていたとしたら。
・・・彼女は何も言わなかったし、ルイも確認しなかった。

尋ねられても認めるつもりはなかったからだ。

・・・ここを太陽でいっぱいにしよう・・・
・・・太陽の髪を持っている星辰の子の目印になるように・・・

彼女の声が聞こえてくるようであった。
茶色の髪の茶の瞳の人は誰よりも愛に餓え、家族を求めた人は、今・・・安らぎと静寂を手に入れた。

ルイがなぜ必要以上にこの邸を訪れないようにしていることも、当主夫妻と顔を合わせないように過ごしていることも、彼が今何を思っているのかも・・・白金の髪のフランスの華はわかっているはずだ。

煙草を揉み消そうと唇から離した時、見送ったはずのアウロラが大きな声をあげて、こちらに向かってきた。両手にあった華は、迎えの者に預けてきたらしい。左右に広がるスカートの裾を持ち上げながら、頬を紅くして全速力でこちらに向かって走り寄って来る。
何か、言伝を受け取ったらしい。それをルイに伝えるように言われたアウロラは、依頼されたということにすっかり舞い上がってしまい、ルイが根気よく教え込んだレディの作法をまったく無視して彼の目の前に飛び込んで来たので、ルイは少し嫌な顔をした。

彼女の巻き毛に陽の光があたり・・・彼女の薄い茶色の髪は金色に見えた。
アルディ邸の薔薇園を突き抜けて、ルイにまっしぐらに走って来るこどもが、あの時のヒカル・クロスの様子と重なって見えた。
脇目も振らずに、ただ、走る。
ルイに向かって。彼は突進してくる暁の娘の顔が喜びで溢れている様を見て、やれやれ、と肩を竦めた。感情の制御ができていない。ルイ・ドゥ・アルディが教育係であるのに、まったく不出来な生徒だ。そう思ったが、苛立たしいとは思っても、彼女が居なくなれば良いとか無視すれば良いのだという想いはなかった。
何といっても、当主の愛嬢であり、ヒカルの娘である。
そして、ヒカルが自ら出向いてルイに託した娘であった。
彼の娘ではないが、ヒカルの家族が・・・ルイを家族だと言う。

その娘が、叫びながら駆け寄ってきた。
「ルイ！
おかあさまが、ルイも連れて来てって・・！
ルイも『かぞく』なのだから連れてきてって言うの！」
息を切らせながら、彼女は薄い茶の瞳を煌めかせながら、全身で嬉しさを表しながら、昂揚を抑

制出来ないように早口でまくしたてた。
「今、お花を保存ケースに入れてもらっているから・・・その間に、アウロラはお着替えしてくるので、ルイはアウロラを『えすこーと』しないといけないの」
「断る」
仏頂面のルイに、アウロラは唇を尖らせた。しかし次にすぐに笑い出す。何をしても今の彼女は楽しいらしい。

「ルイはぜったい、そう言うはずだから、そう言う時にはこういいいなさいって教えてもらいました！」
彼女は得意げにえへんと咳払いして、乱れた呼吸もそのままにルイに告げる。
生命の塊のような娘は、ルイに向かって陽気に微笑んだ。

「『とうしゅのめいれいだ』って。おとうさまがそう言いなさいって。アルディ家では、『かぞく』に捧げるお花はじぶんでおわたしする『かくん』にしたのだから、ルイがみまいなさいって・・・！」

・・・当主はお見通しであったようだ。ルイとアウロラがこの苑に入った時点で、言伝をしたらしい。彼女が何を話すのか、何を見せるのか・・・そしてルイがどうするのかまで承知していた。

ルイは軽く舌打ちをする。どんなに簡単に予想されることでも、自分の意に染まない結論が導き出されたのであれば、それを変更するために模索するのが当然であると考えているはずのフランスの華が・・・今回はルイに歩み寄ったと知ると、ただ呆れるばかりであった。
これまでは決してそうしなかったのに。アウロラが介在すると、これほどまでに変化するのだろうか。
それとも・・・当主も彼と同じ様に、仄暗い想いを抱えたままなのだろうか。

そして、家訓がまたひとつ、いつの間にか増えたらしい。

彼は溜息をついた。家訓簿に記載する手続きを経ていないのだろうな、と思ったが、その彼に触れるアウロラに視線を遣る。
彼女はヒカルではない。

決してルイが触れられないあの人の娘は・・・こうしてルイに触れる。
彼の手を引くアウロラの手は小さく柔らかくそしてあたたかかった。
「行こう、ルイ！」

静かなアルディ邸であったはずなのに。
いつの間にか・・・太陽の色に染まり、新しい命の声が混じって空に上っていく場所に変化していた。

ルイ・ドゥ・アルディは青灰色の瞳を今一度、あの丘に向けた。物憂げで孤独でそして激しさを秘めた彼の瞳は・・・金の苑に注がれていた。そして僅かに頬を緩め、眼を細めて・・・微笑んだ。清艶な美しさを華苑に向ける。

いつか・・・いつか・・・君と混じり合って、本当に太陽になろう。
星と光が混じって、太陽を呼び込む太陽の華の溢れる苑の苗床になろう。

けれども、次の瞬間にはもう・・・いつものルイ・ドゥ・アルディであった。
彼は厳しい声音で言った。
「オレが付き添いならば、もっと静かに歩いてくれ。それから、着替えるだけではなくシャワーも浴びてこい。髪が泥だらけだ」
浮かれてしまって聞き流しているアウロラはそれでもルイの傍から離れなかった。
いつもは距離が近すぎると言うルイも、今日は何も言わなかった。
アウロラはそれが嬉しいようで、またはしゃぎ、とっておきのリボンを用意すると居てまた御喋りを始めたので、彼は口を噤んだ。
・・・いつものとおりのいつものやり取りである。
しかし、今日は・・・アウロラとルイの間の距離は、いつもと少し、違っていた。

■AMANKAY15　金の追憶

「・・・それで、私は結局、ルイの髪の毛を、彼の希望通り、ここに埋めることにしたの」
そう言って目を細めると、口元を肩にかけていたショールで覆って、アウロラは微笑んだ。
経年により、あの時の薔薇のベンチは錆びつき、撤去しようという話が何度も持ち上がったがアウロラはそのままにしておいて欲しいと懇願し、その後誰も近付かなくなってしまうほどに変色してしまっているその場所に、久々に座った。

・・・あの時と同じ様な陽気であった。
少し風が吹いていて・・・障るような風ではなかった。心地好かった。

あの頃は、足が届かないほど幼かったが、今は違う。足が地に着き、彼女は背筋をぴんと伸ばして・・・AMANKAYの花々を眺めていた。
金の絨毯のように広がっているように見える。
鮮やかな黄が風に揺れていた。

・・・薔薇の苑として高名なアルディ家としては珍しい、薔薇以外の花が広がる一画であった。

とても遠い場所にあると思ったのに、アウロラが成長するにつれてその距離は縮まって、とても近い場所になった。
それは彼女の躰が成長したからでもあったが、植物が年々裾を広げて、苑全体が広がっていったからだ。パリの気候にあわせて品種改良されたものであるが、特段の脅威が何もない状態であったので、株も根も伸び放題になってしまった。細かい根が張るので、一度大がかりに土を掘り起こさないといけないという話になったときに、それを中止させたの、アウロラであった。

だが、ある時期に、その増殖はぴたりと止んだ。

・・・当時のアルディ家夫人が逝去した頃からだろうか。

不思議なこともあるものだ、と庭師達は囁き合ったが、アウロラは・・・母が逝くときにその秘密を持ち去ってしまったのだろうと思った。
関連はない。因果関係はない。
このくらいの年月で朽ちてしまうような遺伝配列であっただけなのかもしれない。
しかし、この季節になるとアルディ家の者たちは、皆が開花を愛でた。黄金の苑が陽の光や木漏れ日が照りあたって乱反射する様は本当に見事で・・・薔薇以外の花でさえこれほど見事に咲くことに賞嘆し、アルディ家の宝のひとつであるのだと皆が認める様になった頃のことであった。
「忘れていないわよ・・・ええ、忘れることなどできないわ。ルイが最初に私にお願いしたことですからね」
彼女はそう言って微笑んだ。

ルイ・ドゥ・アルディがヒカルという人物をこよなく愛していたことは、承知していたことだった。
彼は生涯・・・彼女だけを深く愛し続けた。
それでも良かった。
それでも傍に居た。
彼が愛している人は彼女の母であり、アウロラは彼も彼の愛するヒカルも深く愛していたからだ。
報われないと歎いた時もあったし、彼以外の人を愛せたのなら、と思ったこともあった。けれども、彼の言葉が耳から離れなかった。

切なそうに、苦しそうに、永遠の晄という名前の人を呼んだ彼の声。
掠れた、ぎりぎりまで絞り込んだ、本当に微かな・・・愛しているよという囁き。
アウロラはそんな風に名前を呼ばれたこともなかったし、そんな風に愛を落とされたことはなか

った。
何事にも冷静で、星辰の子と呼ばれたルイ・ドゥ・アルディは、取り乱すことはない。けれども、あの時は確かに動揺し、そして行き場のない想いを花に向かって告げていた。

昔のような一面の叢ではなくなっていた。今度は逆に、範囲が狭くなってきているので、この種が絶えるのも時間の問題であった。
当時の当主は品種改良を趣味としていたが、世代を限定するものであった。自分が絶えてもなお改良した命を残したいという気持ちはなかったようで、幾世代がするとどの種も皆、枯れてしまい、どんなに株分けしても培養しても育つことはなかった。必然的に、原種と古くからある他家の薔薇を植えることになり、アウロラが慣れ親しんだ薔薇たちは、とても数の少ないものになったのですべて温室に移してしまった。

彼女はここで生まれ育った。だから、庭の隅々まで知り尽くしている。

それでも、彼女の聖域というか禁域であったのはこの場所であった。ルイもあの日以降、決して近付かなかった。遠くから眺めることはあったが、立ち入ることはしなかった。だから、彼女も自然に・・遠くで眺めるだけになってしまっていた。
ただ、ルイが寄りつかない理由とアウロラの理由は違っていた。
そこに近付くと、ルイ・ドゥ・アルディの声が甦るからだ。
あの時の、苦しい彼の恋の苦悶が鮮やかな音になって戻ってくるから。

普段は饒舌すぎるとルイに窘められるアウロラも、このベンチで佇む時だけは無言であった。

・・・幾度か、ルイにも遭遇したことがあったが、彼はいつも断煙したはずの煙草を吸っていた。無表情で、黄金の花の苑をじっと見つめているだけであった。

彼の物思いを中断させたり阻害したりするつもりはなかったので、アウロラはベンチの席を譲ることにしていた。
けれども、彼が先に来ている時には・・・彼はいつも、ベンチの空いたスペースを、細く長い指先でとんとん、と軽く叩いた。それはアウロラに座っても良いという許可であったが、今になって思えば・・・彼はそこに座って欲しかったのだろうと思った。
彼女はルイと同じ景色が見えることが嬉しくて、そして娘になるにつれて、どんどん苦しくなって、あまりにも彼が美しいので恥ずかしくなって、彼の傍に居るのが辛かった時もあった。
でも、彼はいつも変わらなかった。
アウロラにはいつも冷たくて、でも、優しかった。

暁の娘という称号は、星辰の子に相応しくないと言って拗ねたこともあった。
でも、誰にも渡したくなくて、独り占めしたくて・・・周囲を唖然とさせたけれども、彼とでな

ければ結婚しないと言い張った。
アウロラは、自分がフランスの華と呼ばれる当時の当主に溺愛されていることを承知していたから、それを利用した。ルイは拒否できなかった。
狡い人だと言われたけれどもそれでも良かった。彼が、無理矢理にでも家族になれるのであれば、アウロラは誰にどう思われても良かったのだ。

彼は家族というものを知らない人であった。
複雑な家庭環境であったので、それも影響していたのかもしれない。

・・・あの時のヒカルとルイは間違いなく愛という絆があった。男女の情愛という意味ではなく、もっと深い・・・根源的なところで、彼と彼女は結ばれていたように思う。

自分の身を引くことで、彼女に家族を与えたルイ。
彼にアウロラを託すことで、彼を家族に迎えたヒカル。

ルイもヒカルもあまり多くを語らなかったし、互いに顔を合わせて二人きりで話をするというのは本当に数えるほどしかなかったので、何があったのかは、アウロラにはわからないこともあった。
ただ・・・ふたりが昔、婚約していたということを聞いた。でもヒカルが選んだのは、ルイではなかった。

アウロラは母が大好きであった。ルイがヒカルを好きになるのは、当たり前のことだと思った。
・・・そしてヒカルを好きなルイを好きになった。
深く愛した。理由も時間も必要ないと思えるほどに。ルイにはヒカルがたったひとりであったかもしれないが、アウロラもルイがたったひとりであった。

・・・黄金の花を見る度に、母の涙顔を思い出す。想い出に固執していたのではなく、ルイは孤独なままで、彼女だけが幸せであって良いのだろうかという愁いがあったように思った。だから、密かに・・・自分の髪を埋めた場所を秘密にすることで、彼女は彼がまだ幸せになれていないことを忘れないようにしていたのかもしれない。彼の快癒への祈願は成就されたのに、それでもそこに拘るということは・・・そういうことなのだ。

「・・・忘れたふりをしても良かったし、意地悪して埋めないままにしておこうと何度も考えたのよ。・・・大人げないわね」
そこで小さく声を漏らして笑った。彼はそれでもきっと許してくれただろう。でも、それでは己を許せなかった。

「懐かしいわ。綺麗な風景を見ると、懐かしいと思うのはどうしてかしらね・・・」
彼女はそう呟いた。
少しも近付けなかったあの苑に、ルイの髪を埋めるために近付いた時。
涙が・・・溢れてとまらなかった。近付くにつれて、金の景色が視界に広がっていく様子が彼女の胸を締め付けた。ヒカルもルイも同じようにしてそこに向かったのだろうか。
何かに贖罪するような・・厳粛な気持ちが彼女に降り注がれ浸透していく。そして、お日様で一杯にしようと言った母の声と・・・最初で最後だと言い切ったルイの指が摘取った想いの詰まった金の花の重みと・・・自分がたくさんのことを覚えていることに気がつき、彼女はまた微笑んだ。

ヒカルのように愛されたいと願った時もあったが、アウロラはヒカルではない。だから、それで良いのだと思った。少なくとも、アウロラは彼の家族になった。大事な人であることに変わりはない。

幼いながらもルイの愛が少しでも欲しくて、でも逆効果だとわかっていたのにアウロラは母の話をし続けた。そして母の秘密を打ち明けた。それをルイに言って、彼がどうにもならないことを思い知って、ヒカルから解き放たれてくれればよいのにと仄暗い気持ちを持った。

お日様で一杯にすれば、お星様が見つけてくれるから・・・
本当だった。鮮やかな黄の色は空からでも・・・よく見えることだろう。

そして彼女は少し潤んだ薄い茶色の瞳で、苑を見つめる。

命がそこにあった。
祈りがそこにあった。
歎きも願いも希望も絶望も・・・何もかもがこの苑には植わっている。

誰も居ない時を見はからって、ルイの髪を泣きながら埋めた。
雨で流されないように、深く・・・深く。
ヒカルの髪がどこにあるのかさえわからないほどに経年した土の奥深くに・・・埋めた。
母と同じ様に、涙が溢れて堪えきれなくて、声を出して泣いた。

彼女がどんな気持ちで埋めたのだろうかと思うと、息もできないほど苦しかった。
彼がどんな気持ちでこの花を摘み取ったのかと想像すると、身が震え、痛んだ。
掘ったところが元通りになり、また花を咲かせたと知った時。

アウロラは、これで良かったのだと思った。

そして、これは・・・彼女だけの秘密にしようと心に決めた。決して声に出してはいけない。彼女の中で眠り続ける、秘めたる大事な想い出にするのだと決めた。
その一方で、嬉しかったのだ。
彼の秘密を、アウロラだけが知っている。
ルイがそのようなことをアウロラに託したことも、ヒカルの秘密をルイに漏らしたことも、ヒカルは知らない・・・知らないまま逝ってしまった。

アウロラは、自分が座っているベンチの隣の空いた場所をそっと手で撫でさすった。
彼が座った場所だった。そして、アウロラに合図をする場所でもあった。

耳の良い彼女にだけ聞こえるような、小さな音で。爪の先でとんとん、と軽く叩く。
それは彼が煙草を吸っており、煙草の煙が彼女にあたらない風向きの時に限られた合図であったが、そんな風がいつも吹き付けて、彼の隣に座ることを許されれば良いのにと思い続けた娘時代を通り越して、彼女は、今、ここに居る。

・・・静かなアルディ邸であった。老朽化に伴い、彼女が育った別棟も取り壊されてしまった。

アウロラは、深呼吸した。薔薇の香りが漂ってくる。そして・・・眼に入る金色の広がりが、眩しかった。

「・・・私は結局、誰にも秘密を打ち明けずに終わることになりそうよ。お喋りなアウロラも、ひとつくらいは秘密を守れるのだねって褒めてくれるからしらね、ルイ」
もう、声に出すこともないだろう。
この花を眺めるのは、これが最後になるだろうから。

彼に倖せになって欲しいという気持ちを隠せないから、花に託した母と・・・彼女に倖せになって欲しくて秘密を胸に抱えたままにすると決めたルイは・・・言葉にして、互いに大事に思っているのだ、と言い交わすことができただろうか。

「いいえ。お父様は・・・シャルルはあれで嫉妬深いから、それは無理かもしれないわね」
彼女はそう言うと、またくすりと笑った。
星の向こう側で、ヒカルとルイとシャルルは静かな時間を過ごしているだろうか。
時には、海に飛び、陽を浴び、薔薇に戻り、そして空を旋回して・・・幾度も巡りを繰り返し、そして薔薇の香りに乗って地上の子らに祈りを届けるのだろうか。

彼女は長居してしまったと感じた。
ショールを掛け直し、そして膝掛けを持ち上げて、ゆっくりと立ち上がった。ベンチの縁に体重

を預けて、少しずつ体を伸ばす。

・・・自力でここに座るのは、もう、最後だろう。

そういう予感がした。それは外れることはないだろう。
あちらに居るみんなは、若々しい姿のままで居るのだろうか。
もし・・・逝く前に一度だけ夢を見ることが出来て、自分の望んだ姿で留めることができるのであれば、彼女はあの時のおさないこどもの姿に戻りたかった。

愛も哀しみも苦しみも知ったおとなの自分が嫌いなわけではない。けれども・・・ルイが本当に望んだ、家族の「はじまり」を彼に与えたのはアウロラであるが、彼の苦悩を受け止めることが出来たのはおとなになった彼女ではなく・・・無邪気でしかなかったあの頃の自分なのだろうと思った。
だから。母の胎内でルイのことを案じる気持ちをアウロラがそのまま継いだことに意味があるとしたら。・・・今なら、ルイに豁達に告げられるから。

「これが最初で最後よ。ルイ。声に出して、あなたとヒカルの秘密を、たいようの花に返してあげる。・・・ずっと、独り占めしていて・・・ごめんね。でも、嬉しかったの。ルイが、私に秘密をくれたから、私は私でいられたから。好きで好きで・・・意地悪したの。誰かに話して、誰かと共有することなんてできないくらい、大事な・・・私の大事な家族の思い出だったから」

彼の苦笑が聞こえてくるようだった。
この花が絶えても・・・秘密が消えても、土は残り、その上に新しい命が芽生え、そしてまた廻ってくるのだ。

彼女は目頭を一度だけ強く押さえた。
最後の場面には、泣き顔は相応しくない。

また、会えるから。
また、会いたいから。
だから。
笑って立ち去る。

『・・・泣いたら、天国にいけないのよ』

永遠の晄という名前の人の言葉が聞こえて来る。
復唱する。

ここのところ、独り言が増えた。
だから、自分が知らない間に誰かに秘密を告げてしまう前に・・・ここに来た。
これが最後のチャンスだった。もう、来年のAMANKAYには会えないだろうから。
母の言葉をそのまま・・・聞いたとおりに、声に出した。
母の声が重なって聞こえてくる。
それから、軽く・・・とんとん、とベンチを叩く爪の音と煙草の香りを感じたが、彼女は振り返らなかった。

・・・太陽のような思い出を、アウロラは苑に返して、背中を向けて歩き始めた。

さよなら。
さよなら、私のお星様。
私の・・・運命の人。
永遠の晄のことを好きだったあなたが、好きだった。
私がずっと独り占めしていた秘密を、今、返すから。
静かに・・・静かにヒカルと家族について問答していてね。
答えが出たら、私にも聞かせてね。
独り占めできないくらい、好きだから。

だから、さよなら。
少しの間だけ、さよなら。

・・・ありがとう

微笑む彼女が去った後には、黄色の花瓣が・・・静かに風に揺れているだけであった。

（FIN）

UNDA　前編

■01

微風が彼女を眠りから呼び起こした。
風の流れが肌を滑り、それで目が醒めた。

彼女は茶の瞳に指を乗せて軽く擦った。
空調によるものではない。
くせの強い髪は薄い茶色で、長く伸ばしているので体に纏わり付いている。
強いうねりが彼女を覆う。
髪の先が僅かに揺れていた。
ヒカル・クロスは自分の髪が好きではない。
父親譲りの癖の強い髪と、母譲りの茶色の髪であるが、それを見る度に、永らく暮らしたアルディ家の本当のこどもでないと思い知るからだ。
彼女が憧れたのは、金や白金の輝く癖のない直毛であった。

目が覚めると、現実に戻る。
彼女の髪は伸びるが、色味は薄くなっても彼と同じ色にはならない。
それは彼女だけの秘密だった。
自分の容姿について、好き嫌いを言ってはいけないのだと思っていたからだ。
それを聞いて哀しむ人が居て、それを聞いて傷つく人がいたからだ。

窓を開け放したまま眠ってしまったらしい。
風の香りが彼女のよく知る薔薇の芳香ではなかったので、彼女はそこで目が醒めた。

・・・違う

彼女は飛び起きた。
ここは、彼女の寝所ではなかった。
彼女の部屋は、アルディ邸の中庭に面しており、窓を開放すれば、庭に植えられた一面のファム・ファタルから立ち上る薔薇の風が部屋に吹き込む。
アルディ家に植えられた薔薇は、すべてがファム・ファタルという名前であった。
ひとつ、品種が増える度に、想像主のファム・ファタルへの愛の深さを知る。

けれども、そこで地植えできていない薔薇が一種類だけあった。
その薔薇の香りがするのだ。
今はまだ、アルディ邸の温室の中だけにしかない、稀少な薔薇の豊かな香り。

それが風に乗って来たので、ヒカルは慌てて身を起こしたが、気怠さが彼女の跳び起きる動作を阻んだ。

ヒカルは顔を顰めた。体が軋む。

そこが、永らく慣れ親しんだスプリングを貼ってある自分の寝台ではないことにも驚愕する。
これは自分の居室ではない。
殺風景な何も置かない主義を貫き通している寡欲の人の寝室だった。
そこで、意識が徐々に戻りつつあった。

遠くで波の音がする。
潮の香りもする。

・・・アルディ家のような杜と薔薇の香りではなく、潮の風が漂う場所で目が醒めた。

天井まで高く聳える特殊ガラスが埋められた窓が少し開いているのだ。
その窓は遮光扉が自動で開閉できるようになっているが、今は完全に開いていた。
この部屋の主が不在であることを示している。

彼は完全な闇でないと眠ることが出来ない。
闇と静寂だけが彼を癒すことが出来る。
それだけが、彼を夢寐に連れて行くことが出来る。

風や光や潮は彼を癒さない。
それなのに、彼はここに居る。

この寝台の持ち主は、星辰の子と呼ばれている。
けれども、星を随える美称を持つ彼は、今はここに居ない。

だからここに日が差す。
だからここに風が入り込む。

ヒカル・クロスは、そこに彼が居ないことを確認する。
気怠さから脱却できない自身の体が

ここは、違うから。
彼は陽光の下では眠れないから。

だから、ここに彼は居ない。
それを知るのはとても侘しかった。

風によって細かい編目の入った白いレースのカーテンが揺れた。
僅かなそよぎであるのに、それは彼女の目にとまる。
湿気を調整することのできる素材のそれは、白い帆のように棚引いていた。
そのまま・・・ここを離れて、海の向こうに消えて行くことを誘っているかのような、そんな真白の穂が棚引いた。
ヒカルは目を細める。

ここは、自分の場所ではない。ルイ・ドゥ・アルディの寝所であるけれども・・・自分が選んでここに入ったのではない。
気がつけば、ここにいた。
高い天井と白い・・・真白と蒼の混じった海を思わせる漣のようなそよぎを持った寝室が、ヒカルの寝所と違うことを知らせる。
シーツは目の醒めるようなコバルトブルーだった。
夏の終わりに相応しい色で、彼が周囲に何も設置しない代わりに、こういった僅かな色合いを変更させることだけを許容していることを知る。

■02

寝台と僅かな背の低い家具しかなかった。
白を基調としているが、季節折々に彼が配る差し色の見事な風合いに、彼の繊細な美的感覚を垣間見ることができた。
ヒカルは思う。
彼は本当はこんな人なのだろうと思う。
美術蒐集にも携わっているルイ・ドゥ・アルディが終局的な美として選んだのは、すべてを持たないことだった。

彼は何かに執着してはいけないと言われて育った。
だから、あまり物事に固執しない。
彼は永遠は存在しないと思っているところがある。
古くから存在する美術品を見ても、彼はその荘厳さに心入ることはなかった。
けれども、そうではなく、表出させなかっただけではなかろうかと思う。

ヒカルは頭を軽く振った。
永遠の晄という名前のヒカルは乱れた髪を後ろに流し、そして軽く息を吸う。

・・・ここはルイ・ドゥ・アルディのセーフハウスだ。

ヒカルの居室より更に高い天井が見えた。
完全なる闇と無音を求める彼が設計した特別な部屋だった。
しかし、このバルコニーからは海が見える。
陽や月に照らされて、輝く水面が揺れる様が見えるのだ。
アルディ邸の別棟で過ごしたルイは、広く見渡せる場所を好んでいるように思えた。
手元に何も置かないから故のことのように思える。

また風がカーテンを持ち上げた。
ヒカルはそこで、自分が寝入ってしまった場所と違うところで目が醒めたことに気がついた。
体を起こしながらゆっくりと部屋を仰ぎ見る。
・・・自分の記憶を蘇らせる。
記憶は遡ると言われているが、逆転していくのではなく、ある一定の時点から再現されるものだ。
ヒカルの記憶は数時間前まで戻った。

ルイにポプリの入った枕を届けた。
これは変わらない彼女の習慣だった。
アルディ邸の薔薇で作ったもので、毎日内容物を変更する。
すぐに香りが飛んでしまうのでまとめて作っておくことは出来ない。
けれども日参することもできなかった。
彼は普段一つの場所に留まることはないからだ。
いつも多忙で、不在が多かった。
そして次の移動先に一番近い自分の私邸を渡り歩く。
時にはホテルに滞在していることもあり、彼は家というものについてヒカルと違う価値観を持っていた。
しかしそんな中でも、彼が一番長く滞在しているうちのひとつがここであった。
そのルイから、戻りの知らせを受けたヒカルは、その枕を持って、彼の私邸にやって来た。

ヒカルの来訪を予定していたらしく、中には簡単に入ることが出来た。
勝手は知っていた。
ここは潮風の街なのに、薔薇の香りがする。この辺りでは有名な場所になってしまった。
だからルイは静寂を求めて密かに訪れていた場所のひとつであったのに、足繁く通う邸のリストからここを外してしまったようだ。
それでも、今回はこの場所に戻るとだけ連絡が入った。
素っ気ない連絡だった。
ルイらしい。

その彼を待って、彼女はひとりきりで、広い居間の中で座っているうちに、いつの間にか眠り込んでしまったようだった。
その居間からも海が見えた。
だから彼女は海を見つめながら眠りに落ちた。

少し疲れていたのかもしれない。

ヒカルは日頃の疲れを癒す術を知らなかった。
アルディ家に関わるというのは、本当はこういう解消されない疲労を抱えていくことなのだろうと知った。
でも、それでも良かった。
知らないで居るより良いと思った。
ルイはもっと慌ただしい日々を過ごしているのだろうから。

深い色味のソファに沈み込みながら、そんなことを考えたことまでは憶えていた。
間接照明もついていない。
周囲は少し、薄暗かった。
しかし夜更けには遠かった。
それほど長い時間眠っていたわけではなさそうだ。
潮を含む風は柔らかいが、日が落ちた後は体を冷やす。
だからヒカルは目が醒めた。

扉を開けて風を入れたのは誰なのか、もう、承知していた。
この部屋に入ることが出来るのは、この部屋の主だけだ。
そして誰がここにヒカルを運び入れたのかも。
彼女は、自分が持ち込んだ枕を下にして眠っていたからだ。
香りがある枕であるのに、潮と薔薇の風で目が醒めた。

ヒカルはルームシューズを履き直した。
一度脱がされて、床の沓台にきっちりと揃えられている。
こういう几帳面なことをする人物の心当たりがあった。

ガラス扉の向こう側から、僅かに人の気配がする。

ベッドから起き出したヒカルは、その場所に吸い込まれるように歩み寄った。
塵一つ無いタイル張りの床がヒカルの足を受けて、こつんこつんと鳴った。

「ルイ・・・そこに居るの？」
彼女は僅かに開いた扉の隙間に体を滑り込ませた。

■03

外に出るときだけ、一瞬強い風に煽られたので、ヒカル・クロスは茶色の瞳を閉じた。
カーテンが彼女の躯に纏わり付いて、そこに行き着くのを阻んでいるかのようだった。
それでも、彼女は早く姿を見たいという欲求に駆られて、もどかしそうに柔らかな白い罠から抜け出す。
自分の身体が誰かに包まれたのだと知ると、羞恥で頬が熱くなった。
そしてそれにまったく気がつかなかったことに対しても。

拙いやり方でしか彼女は愛を表現できない。
けれども、ルイ・ドゥ・アルディは彼女に何かを求めることはしない。何もいらないと言う。
すべてを奪うと言ったのに。何も作り出せないから、何もかもを奪うことでしか得られないと言ったのに。
彼は彼女に与え続ける。
どうして生きているのだろうという意味を問い続けろと彼女に言い続ける。
彼は繰り返さないのに、気の遠くなるような年月を割いて、何度もヒカルに声にならない声を発し続けた。
それらを越えて、今、ここに居るのはルイとヒカルだった。

ヒカルは目を細めた。
目醒めたばかりの鈍い動きの中で可能限り・・・最速でもって彼を探す。
寝乱れた髪が風に揺れた。
遠くに海が見える。
潮の香りが先ほどより強く感じる気がした。
遠い場所に海があるのに。
景色しか見えないのに。
それなのに・・・懐かしい匂いがした。
薔薇の香りが混じっているからそう思うのだろうか。

・・・居た。

・・・そこに彼は居た。

彼は煙草を吸っていた。

ヒカルの目が覚めると遠慮してのことなのか、遠くを眺めながら煙草を吸う習慣にしているのかはわからなかったが、彼の近くに、備え付けの小さな灰皿が置いてあった。
彼はいつもここで煙草を吸う。
ちょうど、腰のポケットから銀製のライターを取り出して、火をつけている横顔に遭遇した。
整った顔は、アルディ家の当主や彼の教育係によく似ている。

高い鼻梁に精悍な頬。
その頬から顎、首筋にかけて流れるような、滞りのない線。
筆を払ったような左右対称の眉。
長い睫の下の瞳は青灰色で、切れ長であった。
乗馬とフェンシングで鍛えられた背中の筋は伸びていて美しい。
けれども彼は白金の髪ではなく、見事な黄金の髪をしていた。

細身の服装が良く似合っていた。
彼は外出着から着替えたらしい。
・・・いつも堅苦しいまでにきちんと着る彼が、僅かであったけれども緊張のほぐれた服装であった。
利休色の格子模様に白蝶貝の釦のついたシャツを着ていた。
上着には同系色の灰色がかった目の細かい衿のないニットを合わせている。
彼の身嗜みはいつも完璧である。
立っているだけでも溜息が出るほどに綺麗な男の人に、ヒカルはしばし近寄れなかった。

「・・・前後不覚になるまで眠り込んでしまうというのは、配慮が足りないと思うが」
顔をヒカルの方に向けることなく、彼はそう言った。
良く通る若い青年の声だった。
けれども老成した落ち着きがあり、彼が何事にも先回りして結論を出してから発言することにしていることが明瞭な話し方であった。
彼はバルコニーの手摺りに凭れ掛り、肘をそこに軽く乗せて煙草を一気に吸った。
紫煙が細い筋となって宙に浮かぶ。
彼の細く長い指先がゆっくりと孤を描いた。
ふっと軽く烟を吐く。
消えゆく儚い空への路を見ながら、ヒカルは彼にそっと近付いた。

「ルイ。おかりなさい」
ヒカルが微笑む。彼は何も答えなかった。
ここは彼の帰る場所ではないから、彼女の言葉は不適切だと遠回しに言っているのだろうと思った。
彼の金髪が風に揺れて、前髪や首の周りが動きを見せる。

「ルイを待っていて、眠ってしまった」
彼女ははにかんだ。こどものようなことをするな、とルイに窘められるかと思ったが、彼はそれでも無言で煙草を吸っていた。
「運んでくれたのはルイ？」
「他に誰か候補がいるなら、そう言え」
彼の冷たい答えにヒカルは口を噤んだ。
彼女に触れて良い者はルイだけだと彼は言い、それに対してヒカルは頷いたのだから、誰かが彼女に触れることは出来ない。

そしてそれが肯定の言葉であることも確認した。
口籠もりながら、彼に言う。
「ありがとう」
「感想は？」
「緊張した」
彼の部屋にはヒカルは滅多に足を踏み入れない。
静寂を求める誇り高い星辰の子は、その空間にひとりきりで過ごしていたと切実に思っているはずだと考えているからだ。
「頻繁にアルディ邸の別棟に忍び込んだ常習者が、矛盾したことを言っている」
彼がそう揶揄したので、ヒカルは本当に彼が戻ってきたのだと感じ、目をゆっくり瞬かせた。
「招かれて来る場合と違う」
ルイは冷笑した。煙草を唇に触れさせると、ふっとまた大きく息を吸う。
彼の喫煙癖は今に始まったことではないが、一時それをやめていたのにまた始まった。
それなのに、彼の部屋は煙草の香りがほとんどしなかった。
「オレは招いていないよ。戻ったらヒカルが来ていた。声をかけても目醒めないから、寝室に移動させた。それだけだ」
「そう。私は勝手にやって来て、勝手に・・・ルイの予定を乱していく」
彼女は少し哀しそうにそう言った。それが事実だから。
彼女が何かを立案すると、決まってルイの考えている予定と齟齬が生じる。だったら何もしなければ良いのにと思うが、そうしていられないほど・・・自分の中で彼のことを考えている時間と頻度が予想を上回るのだと伝えても、きっと彼は動じないで薄く笑うだけだろうと思った。

■04

「誰もオレを乱すことは出来ない」
彼は嗤う。
ルイ・ドゥ・アルディは星辰の子だ。
すべてを遵えるという意味を持つその称号の通りに生きている。
その代わり、彼は何も手に入れられないのだと考えている。

ほとんど・・・自分の家に戻るという帰巣の必要性を持ち合わせていない貴公子は、一体、どこまで彷徨ったのなら彼の望む、行き着く先に行けるのだろうかと思った。

彼の唇から煙が漏れた。そして物憂げな青灰色の瞳で、遠くを眺め続ける。
久しぶりに会ったヒカルに何も言わなかった。
まるで興味がない様子であったが、それでも、彼女の次の会話を待っているかのように無言だった。

もう、迷わないと誓ったのに。
ルイの姿を見ると、胸が締め付けられそうなほど傷み、疼く。

「居間でヒカルが寝入っていた。だから運んだ」
そのままにすることもできたのに、ルイはそう言った。
そして、彼の居室に運ぶ必要もないのに。
客室も余っているのに。彼は、そこにヒカルを連れた。
「ルイを知る度に緊張する」
「矛盾している。オレを知ることが出来る者はいない」
彼はそう言った。
その瞬間だけ、彼女を見たが、すぐに彼の正面に戻ってしまう。
ヒカルは茶色の瞳を瞬かせた。そして眉を潜めて、彼の横顔を見る。
まったく感情の読めない魁偉の人を見つめながら、ヒカルはどうして良いのか次の行動について迷っていた。
彼の領域に入ることは出来ない。
彼が何を憂えて何を受け入れているのか、ヒカルは窺い知ることが出来ない。
それが哀しいのではなく、彼がそのことについてひとりで抱えているから苦しいのだ。
彼は放出の術を知らない。
孤独なままに生きてきたから。
孤独故に未来があると思っているから。
だから、誰の温度も彼を温めない。

彼女はそこで、自分の身体を覆った。・・・潮を含む風が思ったより冷たかったからだ。
起きたばかりの体には冷たすぎる風だった。
小さく体を震わせる。室内は快適な温度であったので、彼女は忘れていた。
外気温の対策には寒気を感じる枚数しか、身に纏っていないことに。

「ヒカル」
そこで彼は彼女の名前を呼んだ。

いつまでも彼から離れた場所で立ち尽くす、贖罪の娘に星辰の子は言った。

象牙色の手摺りに凭れていた彼は、そこで軽く肘を持ち上げた。

彼女の両親は、幼い時にいなくなってしまった。
だから、彼が彼女に教えたものは幾つもあった。

妹と思って遇するように。

そう言われた時の、彼の表情を今でも憶えている。

彼は孤独だと思っていたのに。
彼の孤独を分けた者は存在しないと思ったのに。
彼の孤独を知り、彼の孤独を癒す者がたったひとりだけ存在する。

永遠の晄という名前を持つヒカル・クロスだけだった。
それでも、彼は冷たい潮風を選ぶ。

妹などではない。
彼女は、妹ではない。
ルイの叫びを、ヒカルは復唱しない。それが、彼を悶えさせると知らないから。

ヒカル、と彼女の名前を呼んだ後。
彼は、細く長い指先で、煙草を支え、その燻る烟の中に居た。
白く煙る靄さえ、彼の忠実な皁（しもべ）のようだった。

・・・・とんとん、と指先を手摺りの上で鳴らした。

彼女をもう一度呼ぶ代わりに。
彼女をもう一度見る代わりに。

彼は指先を鳴らした。
整った爪が手摺りの上で規則的に躍った。

近付け、と。
彼は声ではなく指先の音で彼女を呼んだ。
誰も寄せないルイ・ドゥ・アルディは、彼女に近寄ることを許した。

ヒカル・クロスの踵が浮いた。
・・彼女の体が、彼に近寄ったからだ。
風のように。
今、靡く風のように。
軽くはないが、思い付きで彼に寄るのではない。
体が傾き、彼の傍へ向かって動く。

「そこに行っても良いの？」
静かに、ヒカルが尋ねる。しかし彼はそれに答えなかった。
彼の答えを待たなかった。
彼の応えを待つまで待てなかった。
吸い込まれるように、引き込まれていく。
彼の温度を近い場所で感じたいと思う。

海風の中に、彼は居た。
体に触るのに。
それでも、彼は海を眺め続ける。

許可を得られないのに、ヒカルは彼の隣に行った。抗えなかった。彼を待っていたから。

■05

彼は黙って煙草を吸っていた。静かな・・・薔薇の潮の香りのする風に包まれる。
ヒカル・クロスは彼の隣に並んだ。
そして、並んだ後に、一歩脇に退いて、彼と距離を置いた。
唇が震える。同じ手摺りに手を伸ばそうとして、手の平を乗せようとしたが、彼女はそれを躊躇った。彼と同じものに触れることがとても罪深いように思えたのだ。
何か罪悪感が存在するわけではないが、彼の傍に居ることそのものに、躊躇いを感じているのかもしれない。
ルイはいつも多忙で・・・こうして逢うこともままならないほどであった。
幼い頃からそうだった。
いつも黙々と業務を遂行している。
淡々と遣り過ごす彼はいつも静かであった。
元々無口な方であったが、最近はますます、口数が少なくなった。

「この薔薇は・・・今が満開なのね」
切り出したのはヒカルからだった。
これまで何をしていたのかという質問にはルイは答えない。

調べればわかることだろう？と言って何も返答しない。
予め、ヒカルには予定が伝えられているからだ。
素っ気ない、スケジュールの概要だけが送られてくる。
彼らの予定は極秘であるので、漏洩防止のためといえばそれまでであったが、そういった連絡が届く度、彼女はルイの助けにならないことを思い知るだけだった。

しかし、薔薇の芳香が彼女の心を鎮めた。
・・・ルイは、それに合わせてやって来たかのようにさえ思えた。
行き届いた薔薇の手入れの指示は、常時居るというわけではないこの家の主によって成されている。
決して他では咲くことがない、ファム・ファタルという名前の品種改良された薔薇は、更にルイが手を加えて潮風にも強い種として見事に開花した。
「時期を変更することもできる」
「必要ない。・・・咲きたいと薔薇が言っている時期に咲くのが、良いと思う」
彼と彼女は調整されて生まれて来た命だった。
だからこそ、感じ入るものがあるのかもしれない。
ヒカルの言葉に、ルイは満足したようだった。
彼の命も、ヒカルの命も、限りがある。
だからこそ、ファム・ファタルという名前の薔薇について開花の時期を調整することの重大さを知る。

ヒカルがルイに寄せる抗えない力が存在するように。
万物の生命は、生まれた経緯は問わない。その先の求める力によって左右される。
けれども、その生命の終わりはいったい、誰が決めるのだろうか。

「ヒカルの生死感はわかっている。しかし、すべての者が同じとは限らない」
「そうだね」
ヒカルは頷いた。自分と同じでなければならないという理由はない。
なぜなら、彼女の細胞を使って、再生医療を受けたいと願い出る者が跡を絶たないからだ。
いや、それどころではない。
世界中の・・・世の中の、自分の生命の終わりについて納得できない者達からのひっきりなしの申し出を彼女は極力受け入れているから。
母床となっている人物については明らかにされていない。
だから、それがヒカルとは誰も知らない。
けれども。
マザー・セル（母床となるべき最初の細胞のこと）が誰なのか、誰も知らない。
しかし。

それでも。
命を永らえて、愛する人と少しでも長い時間を共有したいという誰かの願いを、ヒカルは拒むことが出来ない。
自分もそうだったからだ。
そして彼女は愛する者達を救った。

いつか，彼女はこのことで命を落とすことがあるだろうと懸念されていた。
だから、彼女は・・・アルディ家の者ではないのに、卵子の提供を求められた。
それは彼女しかできないことをするためだ。・・・生命の倫理について考えたが、結局、求めに応じることにした。
彼女は血液、髄液、ひいてはすべてを定期的に提供することに同意した。

誰かのために生きる。
誰かのために生き抜く。

この世の、理から外れてしまうかもしれないけれど。
そでも、ルイの治療をするのには必要だった。
彼を救うには、彼女が隠れていては救えなかった。
だから、生きるということと、生きていくということと、それから・・・生命について考え続ける。それが、彼女の贖罪のひとつだと思っている。

だから、今、ここに居る。
ヒカルは、ルイと一緒に出歩くことが出来ない。
彼は彼女を連れて行かないだろうと思った。
だから、一緒に行きたいとも言わなかったし、ついて来いとも言われなかった。
各々、やるべき事があり、それを終えるまでは・・・と考えているのは同じだった。

煙草の煙が、彼女に降り注いだ。
風下に居るからだ。
彼の薫りであった。
紫煙が髪にかかる。

彼の溜息は、煙草を吸っている時だけ目に見える。
けれども。
どんなに困難なことがあっても、彼は黙ってそれを遂行する。
その彼が、煙草を吸うときだけは、彼の中にある蹟きを外に出す。

ヒカルは目を閉じる。

それを見つめていたいと思う気持ちに反して、彼のそんな姿は見てはいけないのかもしれないという考えが過ぎったからだ。

すぐ隣に、金の髪の青灰色の瞳の人が居るのに。
待っていたのに。
ずっと待っていたのに。

・・・・言葉が出ない。

ルイはそのまま遠くを見ていたが、やがて、唇から煙草を離した。
そして・・・今一度、細く長い指先が動く。
彼は繰り返さないのに。
そこで彼女は閉じていた瞳を開いた。

彼は繰り返した。
とんとん、とまた指先を手摺りの上で鳴らした。

音が鳴ったので、ヒカルの茶色の髪が揺れて、茶色の瞳は彼の意図を知ろうとして大きく見開いた。
彼は無言で、煙草を持っていない方の指で、彼を起点として彼女の居る場所の反対側を指し示した。

・・・風上に来い、という合図だった。

金の髪が少し、風に揺れていた。
そして、ルイは遠くではなく・・・ヒカルの方を見ていたので、青灰色の視線を感じ、彼女は一瞬で頬を紅潮させた。
綺麗な男の人だな、というだけではない。
彼は、完璧だ。
星辰の子と呼ばれて、彼はすべてを遵えて生きることができるのに。
・・・彼は、ここに居る。ヒカルの隣に居る。

その視線から逃れるように、彼女はルイの風上に移動した。
ルイはその間、終始無言であった。
かわりに、ヒカルは言った。
「ルイ・・・・ありがとう」

■06

「礼を言われるいわれはない」
彼は不機嫌そうにそう言った。
ヒカルは笑った。
確かに彼の云う通りだ。
「・・・ポプリ入りの枕を届けておいた。
ひとつ、私が使ってしまったけれど・・・ここに滞在するのであれば、使って」
彼は何も言わなかった。
礼を述べることはしない。
でも、それでも良かった。
ヒカルが勝手にやっていることで、彼が望んでいるわけではない。
彼女がアルディ家の習慣に精通していることは誰もが承知しているところであったが、これは最近になって始まった新しい習慣であった。
かのシャルル・ドゥ・アルディは昔、彼の従妹にそのように枕を作成してもらったという記録があるが。
ルイにはそのような記録はなかった。

今度はヒカルが遠くを見る。
「海が見える。・・・潮の香りがする。・・・なんだか、懐かしい」
彼女は目を細めた。海の傍で育ったわけではない。逆に、海には哀しい想い出しか残っていない。
けれども、ルイと見つめる海はどこか・・・懐かしかった。
胸が締め付けられそうな程苦しくなり、悶え涙しそうになる輝きが、遠くに見えた。
それでも、また・・・なぜか、あの海を眺めてしまう。
懐かしい、とはそういうことなのだと思った。

彼の吐息さえ欲しいと願ったヒカルの勝手な想いを、ルイが苦笑いしているように思えて、ヒカルはそっと言った。
「あの・・・私、これで帰るね。ルイの顔を見られたし、ルイは疲れているみたいだし・・・」
無遠慮であったのかもしれない。
彼は長期の不在で、疲れているはずだった。
そして、その疲労を少しでも軽減するために、彼女は彼のためにだけに作ったポプリを詰めた枕を用意したのだということを失念していた。
彼から戻りの連絡を受けて、有頂天になってしまっていたのかもしれない。
いつから、自分はこんな風に我が侭になってしまったのだろう。
愛と信仰は押しつけてはいけない。

それは相手の意思を無視した時点で、もうそのものでなくなるからだ。

傷もないのに、胸が痛むのはなぜなのだろう。
わかっている。
ルイの声と姿が染みるからだ。
ずっとずっと・・・逢いたかったからだ。

少し瞳が潤んで、喉元から迫りあげるものを感じ、ヒカルは何度も目を瞬かせてそれを阻んだ。
彼女は人前では泣かない。決して、泣かない。
泣いても解決しないことを知っている。
泣いても自分の思い通りにならないことを知っている。

「・・・オレのせいにするなよ」
彼が、そこで声を発した。
ヒカルは頷いた。
「ルイの邪魔をしたくないから、私がそう思うから帰る」
困った様子で、ヒカルがあわてて言い直した。
「お喋りをしたかったわけではないの。ただ・・・」
そこで彼女は黙った。声が潤んでいた。
どうしてこんな風に、矛盾した気持ちを抱えてしまうのだろう。
逢いたいのに、逢えば苦しい。
彼に触れたいのに、触れれば痺れそうになる。

「ただ、ルイに逢いたかったの」
その言葉を聞いて、ルイが動いた。
煙草を口元に持って行きかけたが、それをやめた彼は次に彼女の名前を呼んだ。
「ヒカル」
俯きかけた彼女が顔を上げたのと、ルイが伸ばしていた背中を傾けて顔を寄せたのは同時だった。

軽く・・・軽くルイ・ドゥ・アルディの唇が彼女の震える唇に触れた。

僅かに、煙草の味がした。

ルイの薄い唇が、彼女の櫻色の唇に乗ったと思った瞬間には、もう、離れていた。
心なしか、彼の唇も震えていたように感じたが、それは自分の顫動であったのかもしれない。

ヒカルが呆然として彼を見上げる。

彼は奪うことしかできないと言った。
でも、こんな風に、ヒカルに付与のキスをする。
苦しみや悶えや疼きを与える。

「・・・オレのせいにするなよ」
彼はもう一度そう言った。
そして、手摺りに乗っていた彼女の手の甲に、ルイは自分の手を伸ばした。
帰るな、と言われているようだった。
振り払えば解けてしまうほど、ルイの手の平の重さはほとんど感じなかった。
実際、彼女がそうするだろうと考えたから彼は彼女の手を握らないのだ。
・・・・彼女はまた目尻を赤く染めた。

どうしよう、と彼女は呟いた。

心臓が早鐘を打ち、鳩尾にぎゅっと熱いものが堕ちて来る。
また風が吹いて、彼女の背の上で茶色の髪が躍った。
どうして良いのか、わからない。

彼は金の前髪の下から、高潔な印象を与える青灰の瞳でヒカルの顔を覗き込んだ。
「オレが望んだのは、潮の音でも、褥でもない。
・・・茶色のうねりを届けに来たのかと思っていたのだが」
そこでヒカルがその意味を知って、手摺りの上に乗っていた手を引こうとしたが、ルイはそれを阻んだ。
彼の手の平が彼女の手を強く掴んだのだ。
彼女の背中で、茶色のうねりが揺れた。

■07

「枕をひとつ使った罰だ」
彼はそう言った。
ルイ・ドゥ・アルディが何を言いたいのか、理解できたようなそうでないような曖昧さがヒカルの頭の中で旋回していた。
「あの・・・・私・・・」
「オレの言っていることがわからないという台詞は認めない」
彼はそう言ってもう片方の手で煙草を吸った。
ヒカルが耳まで顔を朱くしているのを見て、彼は冷笑する。
「嫌ならそう言え」
ヒカルが口籠もっていると、彼は明らかに不愉快そうに顔を顰めた。

彼女の手の平に載せた手をおもむろに持ち上げた。
そして灰が落ちそうになった煙草を少し離れた場所から投げ入れて灰受けに沈める。
彼が纏っていた紫煙はそこで消えてなくなった。
あっと思った時には、彼の手の平はもうヒカルの上になかった。
軽く乗せていただけなのに。
その重みが消えて、ヒカルは眉根を寄せた。

自分がその温度を待っていたのに。
彼を失望させてしまった。

「嫌じゃない。嫌じゃないの」
彼女はそれだけ言うのが、やっとであった。

・・・ルイがヒカルの持つ漣をあの寝台に沈めてしまいたいと思っている。

彼は何事にも執着しないのに。
ヒカルの漣が欲しいと言う。
彼が自分の寝室に誰かを入れるということはあり得なかった。
彼はひとりでないと深く眠れないからだ。
僅かな音でも起きてしまう。
それなのに、眠り込んでしまったヒカルを連れてきた。
茶色のうねりが波打つのを見て、彼は何を思ったのだろうか。
無遠慮に邸を訪れるヒカルを見て、苦笑していたに違いない。

ルイは金の髪を掻き上げた。
絹糸のような髪がこぼれ落ちてほんの一瞬だけ、彼の秀でた額を覗かせ、苦悶に満ちた眦が見えた。
「・・・ヒカルが眠っている時しか、触れられないから」
彼は苦しそうにそれを吐き出した。
先ほどの煙草の煙のように、それは彼の裡から漏れ出た真理であった。

彼はしばしば彼女を笑罵した。
でも本当は、それは彼に向かって走って来いという合図であったのに、ヒカルはいつもそれを見逃してしまっていた。
以来、彼はこんな風に遠回しにしか言わない。
彼女と眠りたいと言わなくなってしまった。

「惑っているうちは、それは『嫌だ』と同義だ」
彼はそれだけ言うと、今度は海を背にしてヒカルを見つめた。
少し髪が伸びていた。
金の髪の、青灰色の瞳の青年は、それでも誇り高いから・・・彼女に冀うことはしない。
決して、そうしない。

「ルイ」
「車を用意する」
彼が帰れと言ったので、ヒカルはますます困り果ててしまった。
「私は、ルイに休んで欲しいの。まだ、ルイには休息が必要だ」
ヒカルは横を向いてしまったルイにそう言った。
「他人の体調を心配するくらいなら、自分のことを考えたらどうだ」
彼は嗤った。
ヒカルが今でも、長袖の下の穿刺痕を隠していることと、彼女を抱き上げた時に体重が軽くなっていることから、ヒカルの体調が優れないことを知ったのだろうと思った。
「あの家にそれほどの義理はない。
・・・それとも、自分でそうしたいと破滅的であることを選ぶのであれば、それは選択の自由というものだから、オレは何もコメントしないが」
「・・・だからルイにはそれを見せたくないの」
ヒカルはそう言って下を向いた。

いつか・・・
彼と混ざり合いたいと思う。
彼の漣を見たいと思う。
けれども、それは今、この時ではなかった。
すべてに決着がついて、すべてが良い方向に落ち着いて・・・すべてが完了したら。
彼女は、彼の傍を離れたくないと言うつもりだった。

「ヒカルが破滅的であることはもう昔から知っている」
彼の鮸膠無い物言いに、ヒカルは僅かに嗤った。
「そうだね。私はいつもルイに叱られてばかりだ」
そこで彼の顔を見上げた。
「心配してくれてありがとう。嬉しい・・・嬉しいけれども、ルイが心配なの」
「ヒカルの気遣いはまったく役に立たないから」
彼はそれだけ言って、その話を切り上げるつもりのようだった。
「オレはまったく君の意思を無視することもできる」
「ルイはそうしないよ。・・・だって、ルイ・ドゥ・アルディだから」

彼女はそう言って笑った。
そして、ヒカルはそっと・・・ルイの手の平を追った。
自分から手を差し伸べることはしなかったが、なぜか、体が動いた。
両手で、彼の手の平を包む。先ほどのルイと同じように、軽く合わせる程度であった。
なぜ、彼が力を込めなかったのか、その時に理解できた。
・・・痺れが彼女の躯を駆け抜けたからだ。

ルイに触れると、苦しくなる。
ルイに触れると痺れが走る。
ルイに触れると・・・・溜息が出るほど、涙が出そうになるほど、嬉しくなる。

彼が、なぜ、『眠っている時しか触れられない』と言ったのか、彼女は察した。

■08

「もう戻れ」
彼はそれだけ言うと、彼女に背中を向けて、ひとり歩き始めた。
バルコニーを大股で横切り、ヒカルを振り返ることはなかった。
彼の上着の裾が翻るほどの勢いだったので、ヒカルは慌てて彼の後ろを追った。
ヒカルの前で風が起こる。ルイがもたらした隙風だった。
「ルイ・・・待って」
ヒカルは声を漏らす。
潮と薔薇の香りに包まれた風ではなく、彼の嘆きの吐息が微風となってヒカルに流れる。
彼女は茶色の髪を揺曳しながら彼に手を伸ばした。でも届かなかった。

なぜ、自分の考えた通りに動けないのだろう。
なぜ、ルイの願う通りに・・・彼とうねりを見ることが出来ないのだろう。

彼はバルコニーから寝室に入るところだった。
彼女は急いでその跡をたどる。
彼はひとりで歩くことに慣れすぎている。
ヒカルはそれを追いかけていくだけで精一杯だった。

扉が閉まる直前に、体を滑り込ませる。
考える前に体が動いていた。
彼女の運動神経は父親譲りだった。
しばらくぶりに会うルイと話をしたくて、彼のことを配慮する事の欠如について考えていなかった。
ルイは疲れているのだから、もっと時間を置いて来邸するべきであったのに。
ヒカルは、何もかもが自分中心に動いているような行動しか取れなかった。
彼に届け物をして、それで良いのだと思って帰路に就けば良かったのに。・・・欲深な自分は、ルイの帰りを待ってしまった。

長い時間、ルイとヒカルはアルディ邸で過ごした。
ほとんど戻らなかったルイを待っていた時には、こんなに抑えきれない気持ちになって、先を読まずに行動するということはなかった。
密かに会いに行ったこともあったし、どんなに叱られても彼の帰邸を待ちきれずに彼の居住棟である別棟に足を運んだことも幾度もあった。
でも、ルイに話しかけて不機嫌にさせたかったわけではない。

姿が見えればそれで良かった。
それなのに、今はどうだろう。
ルイが無言で彼女の来訪を受け入れてくれることを前提とした自分の行動が・・・とても矮小なものに思える。
彼はポプリ入りの枕など望んでいないのかもしれない。
でも、ヒカルが届けるから、黙ってそれを受け入れるだけだった。

同じ様に、彼女が来訪するから、受け入れているだけはないのだろうか。
そんな考えが頭を過ぎる。
これから先も・・・幾年も先も・・・こんな風にして彼の傍に居たいと思うのに。
それを、伝えることばかりに夢中になって、肝心のルイの気持ちを推し量ろうとしなかった。

誠めが足りていない。
自分は・・・また、独りよがりな想いに衝き動かされている。

待って、と言ったが彼女は部屋に入ると、彼の姿を探すことはせず、そのまま部屋の扉に向かって顔を向けた。
もう、自分の用事は終わったので、今度はここから気配を消すことが自分の為すべきことだと判断したからだ。

締め付けられそうな胸の疼痛に耐えながら、彼女は広い彼の寝室の中を大急ぎで横切ろうとした。

その時。

彼女の腕が、行こうと思っていた方向と逆に向かって引かれた。
・・・ルイが彼女の入室を待って、腕を引いたのだ。
彼女は小さな悲鳴を上げた。
・・・痛みが伴う引力であった。
ルイの指先から伝わる点圧が彼女の腕に散った。
同時に、僅かに煙草の香りがする。彼は口に煙草を咥えたままで、火を点す前であった。
煙草を新しく調達しに、部屋に入ったルイを追いかけたヒカルが、出口に目を向けたので彼が腕を引いたのだと知った。
が、そうだとわかる前に・・・・彼女の体は勢いよく部屋の中央に位置する広すぎるベッドの上で跳躍した。
ルイが腕を引いてヒカルの退室を阻み、そのままベッドの上に、荒々しくヒカルの体を投げ落としたのだ。

自分の茶色の髪が散って、目の前に広がった。
体の下で、スプリングが弾み、音を立てた。
ルイが怒っている。そう思った。

彼は彼女に荒々しく触れない。
・・・彼女が細胞提供をするようになってからはそれは顕著だった。
検査という名前の彼女への対処について、ルイは一度だけ異論を唱えたことがある。
彼は彼女によって再生している途中であるのに。
あと何年も時間をかけないと彼は元通りにならないのに。
それは必要ないから、と前置きしてヒカル・クロスの自由を約束するように働きかけたのは、他でもないルイ・ドゥ・アルディであった。

それほどまでにして新鮮な組織が必要であれば、培養方式（幹細胞を培養して増やす方法。しかし同じ形態であるので、一度全体が死滅すると壊滅的になるという劣弱さがある）があるのではないのかと提案したことがあったが、それは却下された。
彼女の細胞は、採取後36時間以内に処置を加えないと、本来の機能を発揮しない。
培養はまだこの段階ではうまくいかなかった。
複製細胞は寿命が短く、適用できないことも判明した。
いずれは解消される問題であろうが、ヒカルの複製は作ってはいけないというアルディ家とクロス家の取り交わしがあり、これを破ると世界の医療業界の均衡が崩れるおそれがあった。
アルディ家がクローンを作らないのはここに理由がある。
同じ性質の同一のものは、此の世に誕生しても命が短いのだ。
倫理的な問題だからだと神の手を信じる者もいたが、ルイはそうではなかった。
ヒカルと同一遺伝子が存在しない限り、彼女はこの世で唯一の聖母となるのだ。
彼女の扱いについて、慎重にしろと言われているが、ヒカルはそのことを知ったのは、つい最近のことである。

・・・だからルイはヒカルと距離を置くのだろうかと思い悩んでいた頃に、彼から帰国の連絡が入ったのだ。

「ルイ・・」
彼女はこの世にひとりしかいない星辰の子という称号を持つ人物の名前を呼んだ。
彼はどんなに誰かに似ているとしても、それでもたったひとりなのだ。遺伝子を操作された、望まれた因子を多く持つ星辰の子は、ようやく、彼が望むものを手に入れたというのにそれでも苦しそうにする。
ベッドの上に体が墜ちた、と思った瞬間に、彼女の上に何かが降り立った。

・・・・ルイだった。

両手をついて、体を起こそうとしたヒカルの両手首を、ルイが掴んでシーツの上に戻した。
煙草を口に銜えたまま、無表情にヒカルを見下ろすルイ・ドゥ・アルディの青灰色の瞳が、ヒカルの顔のすぐ近くにあった。

■09

「ルイ」
外気を受けて少し冷たくなった彼女の髪の上に、ルイ・ドゥ・アルディの手が乗っていたので、彼女は起き上がることすらできず、ただ困った顔をしてルイの貌を見つめていた。
彼の整った顔は無表情であったが、何かに憤っているらしいということだけ・・・ヒカルは理解できた。僅かな瞼の動きや、睫の揺れが彼の心中を評していた。これほど近くに寄って、それでも注意深く「憤っているのかもしれない」という推測を持って見なければわからないほどに静かな漣だった。

彼はいつも冷淡だ。
だからこんな風にしてヒカルを留め置こうとすることはなかった。
ヒカルが帰ると言えば「そうか」と言うだけであったし、不在の折に、彼はどこでどんな風に過ごしているのかは、ルイはほとんど語らない。
知りたいと思っても、それを素直に言っても彼は答えない。

困惑した声で、ヒカルは彼に話しかけたが、彼からの返事はなかった。
少し伸びた金の髪が揺れて、彼の頬に降りかかって影を落とす。
そして、金の影はヒカルとルイの両方に陰った。
・・・茶のうねりが、彼の手の中にあった。
漣のようでそれでいて、晄のように眩しい。
永遠の光という名前を持つ食材の娘の瞳も同じ茶色で・・・・その中に戸惑いと躊躇いがあった。

彼は煙草を咥えたまま、じっとしばらくの間、ヒカルの顔を覗き込んでいたが、やがて急に顔を背けると、ベッドに膝をつき、そのまま体を起こした。
「ヒカルは無防備すぎる」
それだけ言うと、彼は彼女の髪の上に置いていた手の平を持ち上げる。
次に、銜えていた煙草に火がついていないことを理由にしてか、そのままそれをシーツの上に抛り投げた。
広いベッドの、ヒカルの占領していない波の上に、それが乗った。
僅かに波打ち、そして僅かに落下音がした。

「待って」
戸惑って、彼の名前を呼ぶことを除いて声を出すことすらできなかったヒカルが、彼の袖を掴んだ。
ルイの動きが止まる。
その時に、彼が唇を噛んだのが見えた。
しかし金の髪が彼の双眸を隠したので、彼のすべてを見ることは出来なかった。
彼女の茶の瞳に映るルイの姿が遠くなっていくことを、彼女は待てと言った。
だから、ルイは大きな溜息を漏らした。
整った顔は生気のない彫刻のようで、それでいてこの世のものとは思えない程に美しい。
それは彼が常に煩悶と哀愍を内包しているからだ。

「オレはお前に従わない」
彼は星辰の子と呼ばれている。
誰かを遵えることはあっても、誰かに遵うことはしない。
彼は低い声で彼女に言った。
ヒカルは、体を起こさずに、天上を見上げたまま、彼の袖を紡いだままでいた。
胸が激しく隆起沈降する。

少し伸びた金の髪のせいなのだろうか。
しばらく逢わなかったから・・・だからこれほどまでにヒカルは緊張しているのだろうか。
ヒカルが身構えていることは、ルイはとうに承知しているようだ。
彼はそんなヒカルの様子に、ただ、深く失望している。

どうしたら彼を満たすことが出来るのだろうか。
どうしたら彼を喜ばすことが出来るのだろうか。

どうして・・・・他に聞く恋人達の逢瀬のように、彼に寄り添えないのだろうか。

「このままヒカルを名実ともに妻にすることを望むのであれば、それは実現しない」
ルイはそう言って、彼女に背を向けようとするが、強く掴まれたヒカルの指先に、彼は抗うことができない。
誰にも従属しないと言っていながら、彼女に逆らえない。
それが、彼を苛立たせる。
「親族会での了承は得ている。けれども、ヒカルを娶ることに難色を示す者がいる」
ヒカルは黙った。それは、彼の一族のことではなく、ヒカルの血族の問題だからだ。
稀なる体質を持つ彼女の秘密に気がついたクロス・グループは、アルディ家が出資して開発して

いる研究の差し止めを求めて働きかけているからだった。
・・・互いの感情だけで物事が進まないということは、幼いころから知っていた。
けれども、それでもなお、待たねばならない懊悩があるから。
だから、彼は彼女の傍に居ない。
居れば、いつか・・越えるからだ。

決めるのは、彼らではない。
決めるのは、ルイとヒカルだ。

それなのに、ルイとヒカルは最初に決めたから。
その約束を、ルイは守り続けている。
その時が訪れるまで、彼らは波間に沈まない、と決めたのだから。

「・・・抗えないの」
彼女彼の横顔に向かって言った。
ルイは冷笑した。

「不規則な漣は決して途絶えることはない。
永遠に。
・・・海が続く限り、波はうねりに抗わない」

・・・・彼は、袖に伸ばしたヒカルの指に、反対側の手の平を添えた。
大きなルイの手の平が、ヒカルの肌理の細かい手の平を包む。
「ここで流されて事実を故意に作れば、ヒカルは満足するのであれば、オレの言葉に従え。
しかし、泡立つ惑いだけなら、オレはヒカルを抱かないし、これからも触れない。
オレは・・・復唱は好まない。
これが最後通牒だ」
彼が何を言っているのか、理解できた。
このまま、流されてはいけない。けれども、彼は彼女と夜の波に沈むことを希望している。
そう言われて・・・ヒカルはただ、戸惑っていた。
それを見て、彼は己の言葉に憤っているのだ。
何もかもを見据えて会話する、大変に闌ける人物は、彼の唯一の晄に向かって冷たく言った。
彼が、一緒に居ようと言ったのに。
戸惑う彼女の可惜を断ち切るかのように。彼は何も装飾せずにただ、冷然として言った。

■10

彼が何かに憤慨しているのではなく、哀しんでいるのだと気がつくまで、それほど長い時間は必

要としなかった。

ルイが忠告する。
流される感情なら、いらないと。
ヒカルは口籠もってしまった。
彼は星辰の子だ。
皆を遵える。あらゆる星々を遵える。
それなのに、ヒカルには・・・そっと触れる。
理由は知っていた。
ヒカルは、怖いのだ。

彼が一緒に過ごしたいと言ったのに。
彼が一緒に狂いたいと言ったのに。

・・・それでも。

ルイはこうしてヒカルを常軌に戻す。
ヒカルは横に引かれるうねりの力を感じた。

ヒカルは、棚引く紫煙に惹かれてやって来た。
彼の腕の中で目を閉じ、そして彼の金の髪に目を細める瞬間を期待してやって来た。

・・・そうだ。
自分は物欲しそうに、彼の愛を軽んじたのだ。

波は、うねりに抗わない。

彼がどんな思いを込めて、そんなことを言ったのか、ヒカルは悟った。
自分は、どれだけ・・・罪深い思慮浅い言葉と態度で、彼を瑕つけてばかりいるのだろう。
でも、離れることができないのだ。
そうやって、操作されて生まれて来たのかも知れないと思う程に。
理由のない、強烈な引力を感じる。
・・・ヒカルもルイも、自然の理に背を向けて、生を受けた命だった。
「ルイ。私・・・私はルイの漣になりたいの」
不規則で不均一でそれでいて抗えない。
海が続く限り。
生命の源である海が有る限り。

ルイは冷笑した。
「家族になりたいと言ったり、星になりたいと言ったり・・・果ては、うねりになりたいのか」
「そう。私はいつも、ルイを困らせている」
ヒカルはそう言って、軽く頷いた。
傲慢になっているわけではない。
彼の言葉に肯定したけれども・・・彼の真意がわからない。
気まぐれに彼女の唇に触れるほど、彼は不真面目ではなかった。
彼は、几帳面すぎるほど何もかもを覚えており、人が狼狽するほど理路整然と物事を進める。
ようやく会えたのに。
とても・・・・とても苦しかった。
何を言ったら、どうしたら、彼が望む言葉を紡げるのだろうか。
彼の妻になることは簡単だった。
温度と夜と漣を重ねて・・・・そして、彼らはようやく、引いて重なるのではなく、もっと
近く・・融合するのだ。

彼女の背の上で、茶色の波濤が浮かんでは消えた。
大きく呼吸したので、それが影響した波であった。
自分の髪が嫌いだった。
どんなに経年とともに色素が薄くなっても。
・・・普通は、濃くなるのに、彼女の瞳と髪は、どんどん薄くなっていった。

けれども、その茶は榛になっても、金にはならない。
白金にはならない。

アルディ家のこどもになりたかった。
本当の、こどもに。

そうしたら、ルイは自分に笑いかけてくれると思った。
冷たい冷ら笑いではなく、その先の哀しみも苦しみも越えた笑みを見せてくれると思ったのだ。
同時に。
自分もそうできると思った。
望まれた命ではあったけれども。
生命の順番を無視して生まれた命について、誰かに肯定して欲しかった。
自分は、生きていて良いのだと自分以外の誰かにそう言って欲しかったのだ。
だから。
ルイが、ヒカルを欲しいと言ったら。
彼女は応じるつもりであった。

彼女の持つ稀なる体質が欲しいのかもしれない。
彼女の持つ巨大な医療器具界のネットワークが欲しいのかもしれない。

それでも、良かったのだ。
それでも・・・・誰かの望まれていると感じたかった。

ヒカルの生命を望んだ両親は、もう、ヒカルとの想い出を更新しない存在になっていた。
過去の想い出を繰り返し思い出しても、自分に都合の良い言葉を紡いでくれると期待するほどの想い出が・・・記憶が、残っていなかった。
それほど、幼い時に別れたきりになってしまっていた両親が、自分を望んでいたのだと聞いたとしても。ヒカルはそれだけで生涯を誇り高く生きていけはしないと思った。

ルイにも、過去に回帰したいという想い出がない。それは人為的で、理由があったことだからなのだが、それでも・・・。
いつも考えている。
ヒカル・クロスは考えている。

過去は創り出すことは出来るが、過去は覆せない。

こうであったら良いのにと思う妄想で過去を埋めることはできる。
過去に戻ることで、過去を満たすことはできるのだ。
でも。

彼には戻りたい過去がない。
だから戻らない。
ヒカルには、戻りたいという両親の記憶がない。
だから、戻れない。

ヒカル・クロスはきゅっと唇を横に引いた。

■11

そして・・・背を向けて、顔を背ける彼に、ヒカル・クロスは言った。
「ルイがいる。目の前に居る。・・・それで良い。たとえ、傍に居なくても・・・ルイが居れば、私は良い」
「矛盾している」
彼の言葉に、そうだね、という肯定の言葉すら発することができなかった。

久方ぶりの会話であった。
胸が締め付けられて、喉の奥が熱くなる。
狂おしいほど求めているものが何なのか・・・互いにわかっているはずであるのに、距離を置く。
・・・そう。
あの漣のように。
寄せては返す波は、寄せるから返す。
返すから寄せる。
どちらか一方が消えてしまえば成立しない。
それが、あの海だ。

ルイとヒカルは同じ様な過程を経て生まれて来た。
でも、これほどに違う。ルイは星辰の子と呼ばれ、ヒカルは贖罪の娘と言われる。
けれども・・・あどけない顔立ちの頃から一緒に過ごしてきた。気の遠くなるような年月を過ごし、様々な景色を共有し、多くの感情を学んだ。
大人になっても・・・彼に会うことがこれほど彼女を昂揚させるということは、どう言えば伝わるのだろうか。

「手配はした。・・・帰れ」
彼の声に、ヒカルは身を固くした。少し離れた場所で彼女の存在を無視したように、自分のシャツのカフスを無造作に放り投げているルイの背中が見える。
「ルイ。矛盾しているけれども・・・私は、私は・・・・ルイが居るだけで良いの。傍に居なくても良いの。だれか他の人を選んでも・・・良い。ルイが生きていることを喜んでくれるのなら。私・・・」
「ヒカル」
最後まで言い終わらないうちに・・・ルイが彼女の言葉を遮った。
振り返った金の髪の下から覗く青灰色の瞳に、憤りと哀しみの色が宿っていた。
「オレを怒らせたいなら、そう言え」
彼はそう言って、残った片方のカフスをことさら乱暴にむしり取った。
白蝶貝のカフスは、投げ捨てた床の上で大きく跳ねて、次には輪転した後に動きを止める。
彼は感情を荒立てることはない。何かに執着してはいけない、と教えられてきたからだ。
アルディ家の当主であるためには、何事にも動じずに冷徹なまでに目的を遂行することを求められているから。
彼はそんな風にして育った。だから、声を荒げたり、怒ったりしない。
「・・・アルディ家の者は、何かに執着してはいけないと育てられる。けれども、ヒカルの台詞はそれを否定しているように解釈される」
「ああ、そうではないの」
どう言っても彼が満足する言葉を言うことが出来ない。ヒカルはますます・・・困惑して口籠も

った。
「どんな手段を講じても、手に入れる。それがアルディ家の者の証だ。・・・・ヒカルは、何もいらないと主張する。しかし、オレはヒカルを娶ると名にかけて誓ったのに。・・・ヒカルはオレの傍に居なくても良いと言う」
寡黙な彼にしては大変に長い・・・悲歎であった。
「ルイ・・・・」
「獣のように交わるつもりはない」
彼は素っ気なく言った。
「オレとヒカルには手順が必要だ。それを理解しているのなら、もうここには来るな」
彼は左手で金の髪を撫で付けた。大きい手の平だった。
それでも、彼の指はとても綺麗で神経質そうであっ

「ルイ」
ヒカルは、彼の背中に向かって走り寄った。床を蹴った次の瞬間には、彼に駆け寄っていた。

心も体も自分の支配できない場所にあった。
ルイの目の前に居ると、いつもそうだった。
彼の背中に縋り付く。縋るという言葉は正しくない。
しかし、勢いに任せて彼の広い背中に吸い込まれるよう彼女は引かれていく。
まるで、潮のように。

彼の背中の皮膚の大半は、彼女が提供した細胞により再生された皮膚を移植している。
そこに惹かれるのは、彼そのものではなく、ヒカルの持っている未知なる能力ゆえの懐かしさから生じているものなのかもしれない。
しかし、そういった研究の実例報告も検証報告もなかった。
彼は憂えて居るのだ。

ヒカルがルイに向かっていくのは・・・彼に憐れみと同情を感じているからかもしれない、と。
まだ・・・まだ、疑問に思っている。
だから、ヒカルを求めても決して肌を合わせるに至らない。
愛しているから、愛せないのだと彼は苦悩しているのだ。

ヒカルは懐かしい彼の背中に頬を寄せた。彼は・・・無言であったが、ヒカルが触れた瞬間に、ぴくりと一度だけ痙攣した。
彼女は彼の広い背中に・・・駆け寄る自分を抑えることができなかった。

漣と同じだ。

寄せることを妨げることが出来ない。
自分は・・・あの海と同じだ。
ヒカルはそう呟いた。

彼の背中が懐かしい。それは細胞レベルの懐旧かもしれない。それでも・・・・ルイに会いたかったという気持ちに嘘はない、と彼女は言って・・・そして顔を埋めて頬を擦りつけた。
ルイは溜め息を漏らした。深く・・・深く。
失望の吐息にも聞こえたが、それは隠忍の吐息であった。
彼女の髪の香りや頬の感触が伝わる度に・・・彼の胸や横隔膜から込み上げる脈動を抑えることができなくなりそうになる。
彼女はそれを知ってか知らずか・・いいや、きっと知らないのだろう。
こんな風に・・・情動的に衝き動かされる感情について、彼女は知らないから・・・広い空の下で晄輝く永遠の晄となるのだろう。

「オレはヒカルを抱かない。今日は駄目だ」
「なぜ」
彼女がくぐもった声でそう言ったので、彼は苦笑いを浮かべた。ヒカルの両腕を取り、自分の身体の向きを変えて、彼の胸の中に彼女の頬を沈めることにする。掴んだ腕は・・・最後に取った手首のそれよりずっと細くなってしまっていた。
「もう少し体調管理をした状態で来ることだな。・・・オレは病的なまでに筋張った女を生涯抱き続けるのはごめんだ」
彼は辛辣にそう言って、彼女の両手首をぱっと離した。
そのことによって、ヒカル・クロスは僅かに後ろにのけぞり、かろうじて両足を広げて転倒を防いだ。
彼はその様子を見て、嗤った。
「ヒカル。・・・オレは命令されるのは好まない。その時の感情で左右されるヒカルの意志を尊重する理由も必要もないから。・・・だから、ヒカルももっと思考を巡らせて、オレに挑戦してみるくらいの気概を見せろ」
その言葉を聞いて、ヒカルは湿った瞳を持ち上げた。ルイの青灰色の瞳と、視線が合った。
「どういうこと？」
「自分で考えろ」
彼はそう言うと、横を向いた。
彼女のあどけない瞳が彼を見上げたままになっているのに。
ルイは・・・ふっと視線を逸らしたのだ。

■12

ヒカル・クロスが、ルイの再生治療のためにその身を研究に捧げていることは承知していた。

ルイ・ドゥ・アルディが憂えて居るのが・・・ヒカルがルイの傍に居るのは義務感からなのではないのかという疑念が払拭できていないからだ。
彼の為に皮膚組織も体細胞も髄液も血液も提供し続けるヒカル・クロスに、もうやめろと言わない。
ルイはただ、黙って・・・彼女の望むことを承諾しているだけであった。

ヒカルは、間を置かずに彼にそっと告げる。

「私の全ては・・・この世の誰かのために使ってくれれば良いと思っている。
でも・・・私は・・・ルイ・ドゥ・アルディにだけ渡したいと思っているものがある」
少しでも躊躇ったり、惑ったり・・・何か間を置くような空気があれば、ルイはそれを理由にして彼女を遠ざけるつもりであったのに。
彼女はそれすら赦さない。
残酷な人だ、とルイは呟いたがそれは声にしなかった。
彼女が聞けばまた沈むからだ。

ルイは意識的に溜息をついた。彼女を抱くと言っても抱かないと言っても、ヒカルは表情を曇らせる。何を言っても、ルイの言葉の意味を掘り下げすぎて・・・ヒカル・クロスの望むものを口にすることはしない。彼女は昔からそうだった。望むものが大きすぎて自分の手に余り、壊滅してしまうのだ。そしてその願望を実現させるまえに凋んでしまう。

その一方で、ヒカルはルイに何を言ったら、彼を安らがせることが出来るのだろうかと困惑していた。彼は何を言っても彼女の言葉を聞き入れない。けれども・・・時折酷く優しい。
眠っているヒカルをベッドまで運んでくれたし、煙の棚引く風を避けて移動しろと言う。
そんな彼が、帰れと言うのだから、ここは素直に帰った方が良いのかもしれないと思ったが、どうにも諦めきれなかった。
ルイの帰邸を待っていたからだろうか。
それを押し付けるつもりはなかった。
彼は多忙を極めている。何もない時間というのは彼には存在しない。
少しでもスケジュールが空けば、体調管理を考慮に入れるものの、体を休める代わりに脳を酷使する。
だから、すぐに思考に耽ってしまっていた。

そこで彼女は思いを決めて、唇を震わせながら言った。
ルイの貌を見上げて・・・端整な彼の顔を見つめながら、茶色の瞳で青灰色の瞳を覗き込んだ。
彼は星辰の子と呼ばれている。
全てを遵えるという意味だ。
それなのに、彼は彼女を自由に思いの侭にすることができなかった。

「ルイ・・・・私ができることはとても少ない。万人を救うことができるかもしれないけれども、ルイのためだけにできることはひとつしかない」
ヒカルの思い詰めた口調に、ルイは彼女の顔をじっと見つめて無言でその次の言葉を待った。
茶色の瞳が、忙しなく動いた。動揺しているからだ。内面では、激しい漣が、彼女の心を乱していた。
そして、彼女は胸の中の秘密を吐き出した。もっと早く言えば、彼は安らいだはずであるのに。
金の髪の、青灰色の瞳の・・・彼女が帰りを待ち侘びた青年に、ヒカルはそっと・・・解放の呪文を唱える。

「ルイ。・・・婚約を解消しよう」

その瞬間、強い力が彼女に加わり、ヒカルは小さく悲鳴を上げた。
掠れた声で囁いた声より、理性を伴わない驚愕の声の方が大きかった。
それは、彼が・・・ルイが、ヒカルの腕を強く掴み、もう片方の手で彼女の顎を掴んだからだ。
先ほどまでの力強さの比ではなかった。
骨格の差を思い知らされるほどの、加減のないルイの力に、ヒカルは呻いた。
「ルイ・・・痛い・・」
「オレをそんなに怒らせたいのか。ヒカル・クロス」
彼は彼女の頬に自分の頬を近付け、耳元で甘い愛の囁きの代わりに、冷たい怒気を含んだ声を吹き込んだ。
「だって・・・・だって」
ヒカルはこどものように、口籠もりながら言った。理路整然と話をすることができない。
ルイの前では、彼女は稚拙な話をすることしかできない。
あれほど、彼が帰ってきたらどんな順序で何を話そうか、考えていたのに。
彼に会ってしまうと、何も・・・・そう・・・波に押し流されてしまった砂浜のように、何も残らなくなってしまう。
「婚約破棄？本気で言っているのなら、今一度繰り返せ」
彼はそう言った。あまりにも顔が近すぎたので・・・彼の表情がわからなかった。
きっと・・・ヒカルがこれまでに見たことのない顔をしているのだろうと思った。だから彼は、顔を寄せて彼女に表情を見られることを避けているのだろう。
彼は何事にも深く計算し、そして結果を出してから行動する。

ヒカルとの婚約も同じだった。
アルディ家とクロス家の繁栄と妥協をもたらすのは、両家の婚姻による融合しか手立てはなかった。
由緒正しい、古の家柄の同国の者と婚姻するのが通例とされる家の後継が、ルイ・ドゥ・アルデ

ィであったのだから。

彼が、ヒカルの腕を掴んでいた手を離したかと思うと次に、彼女の背中に靡く茶色の髪を引いた。
彼女はルイ・ドゥ・アルディが指を絡めて、彼女の髪を強く引いたことによって漏れそうになる呻き声を抑えながら・・・顔を上向きにしたままで言った。
顎を上げたと同時に、ヒカルの白い首筋が見えて、そこにルイの薄い唇が這った。
顎に乗せていた指は、いつの間にか・・・彼女の背に廻っていた。
今ひとたび、彼の胸の中に囚われて、ヒカルは苦悶の表情を浮かべる。

普通の恋人同士なら。
相手の家を訪れて、暫く振りに静かな時間を過ごす喜びを分かちあうことが出来るのに。
彼に何を言っても、ヒカルはルイを苦しめるだけであった。
床を同じにしたいと言っても、今は無理だと断っても・・・どうあっても、ヒカルの存在がルイの煩悶を呼ぶのだ。

・・・・あの海のように。あの波のように。

引いたかと思うと、また満ちる。
願いが満ちたと思うのに、それは静かに引いていく。

「それしか・・・それしか私にできることはない。ルイを解放することしかできない。・・・私が家族になろうと言ったから。それで、ルイが苦しむのなら、もう、それは望まない。
それが・・・それが、私ができる唯一のことなの」
「認めない」
ルイは即座にそう言った。しかし、彼女は瞼を強く瞑り、彼の憤りの言葉を肌に浴びるだけであった。
「・・・・勝手な人だ」
ルイがそう言った。溜息混じりに。そして、落胆の声で言った。
ヒカルの目尻に浮かぶ漣を見て、彼は彼女の頬に自分の頬を押し当てる。
これほど近い場所に寄ることを許しているのに。
ヒカルは、ルイに、漣であれ、と言うのだ。
また・・・引いていけ、と強制するのだ。
それを酷い人だと言う以外に、どんな言葉があるのだろうか。

ヒカルはルイの背中にしがみついた。

わかってはいる。
これ以上、一緒に居てはいけない。

彼の傍にいると、彼女は彼の望んでいるような言葉や態度を生み出すことができない。
彼の傍にいないと、彼を失いそうになったあの時を思い出し、身を裂かれるように痛い。

どんなに辛い治療も穿刺も彼女は惨いとは思わなかった。
すべて、ルイに繋がるからだ。
そして、彼の望む新しい未来が・・・皆に等しく訪れるきっかけになるからだ。

でも、彼の傍に居ると、時々苦しくなった。
・・・この世のすべての者に福音をもたらすと言われた自分の身体を、ルイを優先させて彼のためだけに使うことは出来ないのだろうかと思ってしまう。
そんな愚かな願いを持ってしまう。

漣のように・・・波のように、一度は引くが、また寄せて満ちる。
満ちては欠けるのに、それは決して・・・消滅しない。
何もかもを洗い流す清浄な満ち引きではなく、彼女の漣は自分の願いだけを蓄積させる歪んだ白浪なのだ。

彼は時折、彼女を突き放すようにして遠ざけることがあった。
それは昔から変わらない。どうしてそんな風に冷たくするのか、彼女は理解出来ていなかった。
あの・・・不幸な事故によりルイ・ドゥ・アルディが意識不明の重篤な状況に陥るまでは。
彼が、ルイ・ドゥ・アルディという自己を失ったのは、後にも先にもあれきりだ。そしてその時に傍に居たのは、ヒカル・クロスであった。
彼女は、彼を支え、見つめ、そして今も傍に居る。これだけのことしかできないと笑う彼女の為し遂げたことは、ただひとつ。・・・ルイを呼び戻した。
それが、パリの空に輝く天体を動かすことになったとは、彼女自身は意識していない。

彼は・・・今になって思う。

同じ笑顔を知っている。
伝わらなくても良いから、ということを承知している笑顔を知っている。
報われないということに歎くことをしない、微笑むことそのものに価値があるのだという笑顔であった。
それは・・・

ルイのことを、ガラス張りの温室の向こう側から眺めていた、ヒカルの母親であった。
マリナ・イケダという名前を持っていた人物が・・・どうして、ルイの絵を最後に残したのか。
理由があるから、残したのだ。
そして、他者に託したのだ。
彼が微笑む姿を夢見たから。それを描いた人物は、自分の娘を置いて逝った。

境界を越えようとしている瞬間の、緊迫した空気を・・・感じていたのは一方だけでは無い。

そこから先に行くのは簡単だった。ルイがいつもの手順で、彼の目の前に居る彼に触れたいと思う人物の肌を攫うだけで良かった。
けれども。彼は、ヒカルにだけはそうできない。他の女性にそうできることが・・・彼女にできない。

ぎりぎりの、境界に自分達は立っている。

そう思った。

「オレは君を自由になどしない。・・・解消は認めない」
「私はルイを・・・・ルイを・・・」
「それ以上言っても、無駄だ」
彼はそこまで言うと・・・ヒカルのために、ひとつ、溜息をついた。
彼が漏らす吐息は、歎きと貶みの他にも別の種類があるのだと知ったのは・・・随分後になってのことであった。
ヒカルが贖罪の娘と言われており、彼も時折彼女のことをそう呼んだ事があった。でも、今はそれを意識してルイはそう言う事はなくなってしまった。
彼に購うために傍にいるのではないのだ、とヒカルが繰り返し囁くからだ。
呆れられても良いから。
蔑まれても良いから。
でも、それでも、ルイの傍に居る自分に偽りもまやかしもごまかしも存在しないのだと言い続けた。

・・・やがて、彼は小さく言った。ヒカルの言葉に答える代わりに。彼女の体温に告げるように。

「・・・海を、見に行くのだろう？」
ヒカルの見上げた逞しい背の上で輝く金の髪が、きらきらと輝いていた。彼自身が太陽のような髪を持っているのに、ルイは星辰の子と呼ばれている。その理由について、彼は永らく苦悶して

きた。
星になれても太陽になれない、と感じており、永遠の晄と呼ばれるヒカルの輝きを奪うと宣言したあの激しさは今は・・・もう、ない。けれども、彼女に向けられる熱情の激しさを・・・浪のように寄せて返してはさらに大きくなっていくうねりを、ルイだけではなくヒカルも感じている。

ここで肌を、体を重ねれば、彼に少し近付くことができるかもしれない。けれども、そのことで彼は生涯憂えることになるのだ。
ヒカルの体の免疫力が落ちており、失調することが多くなった。
元々、母親譲りの健康体であって、ほとんど病気をすることもなく健康に過ごしてきたのに、ここしばらくは寝付くこともあった。それはやはり研究のためにサンプル提供を頻繁に行っており、ルイのために自らの肉体を捧げているからであった。
献身的であろうとするヒカルの心が、ルイにあるのかどうか・・・彼は彼女に直接聞くことはしない。聴けば、ウイとしか彼女は言わない。強制的に言わせているのと同じであるからだ。
それでも良い、と思った日々もあったと彼は言う。
義務でルイの傍に居るのであれば、それも理由なのだ、と言う。
でも本当はそれを望んでいないのだとヒカルは知っている。彼を心から愛し、ルイ・ドゥ・アルディという人物を求め、そして彼の深く沈んだ心を抱きしめる人物を求めて・・・彼はずっと彷徨ってきたのだから。それを救うのが自分であるとは限らない。でも、今は、そうありたいと思っている。だから、ここに居る。

「ルイと、海を見に行きたいの。・・・浪を見に行きたいの。何だかとても懐かしく感じるから」
彼女は彼の背に、自分の頬を擦りつけた。それは、愛の標識のようであった。彼女を、彼の背に残すことにより・・・彼女はルイを縛っているのだと感じながらも、彼がどこにも行ってしまわないようにしているのだと・・・そう思った。
そして次に、間を置かずに言った。
「ルイの漣になりたいの。私の漣が・・・ルイであるように、私はルイの何かになりたい」
「何か・・・」
彼の掠れた声にヒカルは頷いた。彼が背で感じ取れるように、頬を大きく上下して動かした。

彼のために体を開くという瞬間はいずれやって来る。
けれども、彼のために自分の組織を提供しているヒカルのことを思い、彼が彼女に触れないでいることも承知していた。
彼の運命の人と言われているから、そうしているわけではないし、彼女の運命の人がルイであるから彼に愛されたくてそうしているわけでもない。
でも、彼を救いたいと思っていることは間違いの無い事実であった。

わかっている。
彼が、自分に触れない理由はわかっている。

彼女が・・・ヒカル・クロスが、愛と憫れみを混同しているのではないのか、と思っているのだ。

漣のようであると思った。
奪ってしまいたいと思うのに、その次には気持ちを引いていく。
鎮めてしまったと思うのに、その次には溢れてしまう気持ちを堪えられなくなりそうになる。
ルイがヒカルが本当に後悔しないように・・・奪うと言ったのに・・・それでも、彼女の選択が間違いの無いものであるのかどうか、待っているのだと知っているから・・・だから、ヒカルは苦しくなるのだ。

次の漣が来ても、この気持ちは変わらない。
次の漣が来れば、この気持ちは更に大きくなるばかりだ。

そして彼女も・・・吐息ともに、彼の背中に自分の想いを浴びせた。
ゆっくりと。静かに。それでいて・・・彼女の強い意志を含んだ声で淀みなく言った。
後悔しない。決して、これは憫れみなどではない。
そう強く思いながら。

「私・・・あなたをどこにも行かせたくないの・・・」

■14

「誘うのなら、もっと熟考してくれ」
彼はそう言ってヒカルから離れる。・・・・遠くの波音を聞きながら。
彼女は彼の恋情を煽るようなことを意識的にできるような人物ではないことを承知しているのに。

「ルイ・・・ルイ」
ヒカル・クロスが彼の名前を呼ぶ度に、彼が僅かに身震いすることを彼女は知らない。

体温を重ねることは簡単だった。肌の湿りや吐息を混ぜることへの躊躇いは感じていない。
しかし、ルイはそうしない。

ヒカルは拒まないから。

ルイが、そうしようと言ったのなら、彼女はそれに遵う。
ルイは彼女が拒まないことを知っているし、ヒカルは自分が拒めないだろうということを知っている。
しかし、それでは彼女は永遠に手に入らない。
皆が認めた光の下で・・・彼女と彼が永遠を誓うときに、それは真実になる。

・・・権利としてのヒカルを抱くのは簡単であった。
彼女と寝るのは簡単だった。
でもできない。そうしない。
彼女の体温さえ愛おしく、彼女の体温さえ・・・彼は自分のすべてにしてしまいたいと感じる程に疼くのに・・・。

けれども、転げ落ちていくように勢いに任せてしまえば、それは彼の望んだ結末に行き着く近道にならなかった。
ヒカルは彼にすべてを捧げると誓うだろうし、予定している婚姻の時期を繰り上げることになるだろう。
かつて。
もっと若かった時に、ルイが彼女との婚約発表を独断で行った。
そしてそれは消滅した事実となったが・・・今、ひとたびその事実を繰り返そうとするには手配準備の過程と時間を必要とすることくらい、彼女はわかっている。

一方で、ヒカルはただ、ルイが彼女を突き放す言動を見せる時、どうして良いのかわからなかった。
身を寄せ合う相手は、彼しか居ない。
ヒカル・クロスはわかっているのに・・・それでも彼の完全なる拒絶が怖くて、その先に進めないでいる。
溶けて重なり合うには、まだ、互いの満ち引きが合致していなかった。

彼女が、そっと、ルイの腕に触れようとした時。
彼が厳しく彼女を戒めた。
「ヒカル。オレは、ひとりしか愛さない」
その語気の強さに、ヒカル・クロスははっとして手を引いた。彼は、有無を言わさない強い眼差しで、彼女を見据えていたからだ。
彼は潔癖そうな口元を歪めて、静かに言った。
「愛せないのではなくて、愛さないと決めた。・・・ひとりだけだ。・・・オレが愛などという不確かな言葉を口にするのは、そのたったひとりの前でだけだ」
ヒカルの眦がぎゅっと大きく動いた。茶色の瞳が大きく左右に振れ、彼女が同じだけ内面を揺さ

ぶられていることが手に取るようにわかった。

ヒカル・クロスは、ルイのそんな様子に・・・ただ、食い入るように、彼の姿を見つめるばかりであった。星辰の子と呼ばれて、彼が手に入らないものはなにひとつないはずであった。けれども、彼は、これまで決して誰にも言わなかったことを、口にする。ヒカルの前でだけ。

それから、彼はふっと冷笑した。自分の言葉を嗤う。
「・・・オレはそれが不確実であることを認めないし、確実にするために、今、瑣末なことに関わっていられない」
彼が「瑣末なこと」と敢えて言ったのは、ヒカルの負担を軽くするためなのだと思うと、彼女はそれ以上彼に向かって浅慮であると思われるような行動はできなくなってしまった。

成り行きで、こうなってしまったのではない。
彼らは考え抜き、準備を進め、そして誰も異議を唱えることが出来ないように・・・ルイは考え続けて、行動し続けるのだ。
アルディ家が日本国籍の者を妻に迎えるのは、これが最初ではない。ロベールという人物が当主であった時にも後妻に年若い日本人を迎えているが、これにも正規の手続きではないと主張されて、その人物の処遇については秘匿されたままになっている。
しかし、それはすでにシャルル・ドゥ・アルディという継嗣が居たからこそできたことであった。
アルディ家の家訓が絶対とされているが、逆に言ってしまえば、家訓に記載されていないことは行っても問題ないということだ。ルイは度々親族会に出席して、それを指摘し、過去の系図原簿から得られる実例と突合させながらノンと言えない状況を作り出している。
・・・親族会では発言権がなく、これまで一切の発言をしてこなかったにも関わらず、彼はこの件に関してはまったく引かなかった。
冷淡な薔薇と星の子、と言われてきただけに、彼の静かであるが強い信念については、誰もが驚き、彼に反論できる余地を差し挟ませなかった。

「謝るなよ」
ルイが先手を打って、彼女の言葉を遮ったので、ヒカルは小さく微笑んだ。いつも、彼はヒカルの幾手も先を読むことが出来るが、それはいつも・・・ヒカルが納得するまで結論付けることを待ってくれる。一方的な結論は、出さない。だから、彼は・・・こんな風に言うのだろうと思った彼女は、軽く頷いた。
わざと、明るく言った。こんなことで壊れる間柄ではなかったけれども、自分とルイが考えていることの隔たりを感じ・・・とても苦しかった。
「私は・・・もう少し思慮深い人間にならないとね」
「今頃、気がついたのか？」
彼がそう言ったので、ヒカルは笑った。ルイより思慮深くなることは・・・できないだろう。け

れども、彼はそうは言わなかったから。謝るな、と言ったから。
彼の言葉は短くて棘のように尖っているけれども、決して彼女を傷つけたりするためのものではないのだと感じる瞬間であった。

「海・・・見に行きたいな」
彼女はぽつりとそう言った。ここからも、海がよく見える。けれども、ルイとは・・もっと近い場所で、海を眺めたかった。
彼女が言い終わらないうちに、ルイの体が動き、彼は部屋の入り口に向かって歩き始める。
「今、用意できるのは、オレの車だけだが」
彼はむっつりとそう言いながら、窓に向かって眼を細めた。その横顔が余りにも美しくて・・・ヒカルは、彼のことを漣のような人だと思った。星辰の子と呼ばれているけれども。彼は、海に近い場所にいる人だと思った。
先ほど、彼が海に行くのか、と尋ねた時にウイと言って頷けば良かったのに、そうできなかった自分がもどかしかった。こうして、幾度も彼と海に行きたいと思うのだろう。ひとりで眺めたいと思うのではなく、誰かと・・・ルイとなら、漣は違う表情を見せながら、それでも海という根源は同じであることを確かめ続けることができる気がした。

■15

先ほどは、ルイは車を用意すると言った。彼はこうなることを予想していたのだろうか。
自分も、無理しないで欲しいと言った。彼の車は、彼だけしか運転しない。でも、彼女はありがとう、と言う代わりに、慎重に言った。
「ルイに任せる。だから、ルイの車で・・・ふたりで行きたい」
その言葉に、彼はふっと淡く微笑んだ。金の髪の下から、玲瓏な美貌がヒカルを見つめている。
ああ、彼は完璧だ。
そう思う。

彼は部屋を出る前に隅に置かれた、クリスタルに青味がかった意匠のシガレット・ケースの蓋を開き、煙草を取りだそうとしたが、そこで何か思い直したように蓋を閉じた。
どこでも手が届く範囲に煙草が備えられていることや、喫煙をヒカルが推奨するべき行動だと思っていないことについて考えるところがあったらしかった。
・・・彼には珍しい行動であった。
彼はいつでも断煙することが可能である強靭な意志の持ち主であったが、時折・・・こうしてヒカルの注意が入ることを承知の上で、彼女の目の前で煙草を吸う。
部屋を出るとき・・・
彼は近寄って来たヒカルにだけ聞こえるように、言い添える。
「今度は・・・海を見に行くだけでは済まないと思え」

ヒカルは返答に窮し、ただ、俯いて彼の腕に額をそっと擦りつけた。さらりと茶色の髪が彼の腕に触れて、僅かな音を立てる。それは漣のような音であった。遠くで鳴っている音とは違っているが、確実に・・・ふたりの間に波音が刻まれている。
彼が予定していることを変更することを好まない人物であるということは承知している。でも、それでもルイはヒカルが海を見たいと言うから・・・だから、彼の中の行動を曲げてヒカルの冀望を優先させるのだ。
「短い時間しか確保しないが」
「それで十分。・・・十分過ぎる」
彼は、一緒に過ごそうと言ったのに、それでも引き汐のように感情を鎮めてしまった。それが哀しいのではない。彼が・・・もうずっと長い間、そうして自分の想いを静かに潮の底に沈めてしまっていることを知ったから。彼の望みより、いつもいつも・・・自分ではない誰かのことばかりを優先しているように思った。自分のために生きるのではなく、アルディ家の頂点に立つことを優先させた。それが自分の生きる目的であると言い切った彼は、違う路を考えた事がないと言えば、そうではないと思った。
彼の中で、漣が渦になって・・・そして違う流れになる過程を、ヒカルは知っていたのに、知って欲しいという叫びが聞こえていたのに、彼女はそれに気がつかないふりをしていた。自分のことだけしか目を向けていなかったから。

しかし、これは償いでも贖いでもなかった。
どうしたら、彼にそれを伝えることができるのだろうか・・・

先に答えたのは、ヒカル自身ではなく、ルイであった。

「ヒカル」
額を押し付けたまま、無言で深呼吸を繰り返す彼女の名前を呼んだあと・・・

彼は・・・自分の指先で、反対側の腕をとんとん、と叩いた。軽く。細く長い指先と、整った爪で。
彼女が寄った側の腕を、軽く叩いた。

ヒカルが、顔を上げた。
彼の合図に、彼女の顔が持ち上がる。たったそれだけの仕草なのに・・・たった、それだけのことなのに。

ヒカルの瞳から、涙が零れそうになる。
彼と、彼女しか知らない合図に・・・それだけで、壊れそうになるほど自分が脆くなっていくのがわかる。
誰の前でも泣かないと決めていた。

海の傍でしか泣けないと思っていた。
でも・・・ここに、彼女の海であり漣であり・・・星辰が在った。

無言の、合図。
それは彼と彼女だけの・・・波音にも似た無音の波であった。

額を上げた彼女は、ルイの引き締まった腕に自分の腕を回した。

きつく抱きしめるわけでもない。
肌を合せるわけでもない。
けれども・・・彼は、こうして指先に漣音を乗せて、ヒカルに知らせるのだ。

彼は、ここにいる、と。

そしてヒカルは指し示された場所に向かう。そこの脇にはルイ・ドゥ・アルディがいるからだ。

「ルイ・・・私のUNDA・・・」
彼女は囁く。海と星の境界を眺めるために、彼と彼女は海に行く。
星辰こそが、永遠に近い晄を放ち続けて居る。それは永遠ではないかもしれないけれども・・・今、一緒に眺める星の煌めきや海のさざめきは、永遠と同じである。永遠を誓ったふたりの前では。

「オレは漣などで終わらない。オレを・・・誰だと思っているんだ？」
ヒカルの言葉に、彼はそう返答すると、不敵に微笑んだ。
その様子はいつもの、ルイ・ドゥ・アルディであった。
優しくて、冷たい。けれども、冷たいのに、優しい。
寄せては返す波と同じように、彼はいつも・・・ヒカルに打ち寄せるのだ。

愛している、と無言で囁く。

不確実なことは口にしないのに、それでも・・・彼女のために彼は囁くのだ。

「・・・もう・・・逃がさない」
ルイ・ドゥ・アルディはそう言って、ヒカルがしがみついている腕の反対側で、彼女の髪を撫でた。

「ランスの式で、こんな風に無様に歩くのは御免だな。・・・練習しておけよ、ヒカル」

彼の言葉に、ヒカルはただ無言で頷くばかりであった。

ふたりは、海に行く。ふたりだけで、行く。
そして静かに波音を聞き・・・海の漣を見つめて、そして目を細めて微笑むのだ。
互いの隣が、誰であるのかを・・・確認しながら。

ヒカル・クロスは、これから、海を見に行き・・・今日は浪に足を浸してみようと思った。
彼は少し嫌な顔をするかもしれないけれども、きっと波際まで来てくれるだろう、と思った。

そしてまた、煙草を吸いながら・・・砂際でとんとん、と彼女が居るべき場所を、指先で指し示すのだろう。

それはいつも、星辰の子のすぐ隣であった。

（FIN）

覬覦

眠りから醒めた時はいつも独りであることを確認する。
そして眠った時と同じ位置に居ないことを確かめる。

周期的に訪れる浅い眠りと深い眠りの切替時に行われる動作を自分が行っているかどうか。

・・・それで自分が輾転として身体が生きていることを知る。

自分が・・戻れない路に入り込んでいないかどうか。
自分が・・戻りたいと思うあの人とのあの季節の巡りがもう一度再現されることを覬覦していないかどうか。

それらがすべて叶わないことであることを確かめる。

彼は夢を見ないから。
現実だと認識していたことが夢幻の出来事であるかもしれないという可能性を捨てきれない。

浮遊感を感じながら、彼は暗闇で・・・目を醒ます。
体温が覚醒によって変化する。
聴覚が戻り、自分の身体が蠢く音を感じる。
眠った時と同じ暗澹たる留紺（黒に近い紺色）が広がり、彼の薄い瞳の色を染め変えていく。

無に近い世界から戻って来たと感じる。

けれども。

完全な静けさと闇の中でひとりで横たわらなければ眠ることが出来ないルイ・ドゥ・アルディは、そこではっとして開きかけた唇を閉じた。
・・・自分ではない誰かの体温を感じて。

彼の腰元で真珠色に光る背中が見えたので、彼は息を吸う。
・・・そこで自分の状況を知った。
睡る前の真楽を共有した彼女はまだ安らかに規則的な呼吸を繰り返していた。白く細い肩がわずかに上下に動いている。

・・・彼は指先を伸ばした。
僅かに震える。
鍛えられた鋼のような身体を静かに起こすと、締まった腹筋に力が入り、僅かにベッドのスプリングが軋んで音を出した。
が、彼女の深い眠りを妨げる程度ではなかったようだった。

彼女はルイに背中を向けて、胎児のように身体を縮めて丸くなって睡っていた。
獣の仔のように。
何かから身を守るように。
美しい滑らかな肌が曲線を描き、脊椎を露わにしている。
細い首の周りには癖の強い茶褐色の髪が散り、彼女の肌の色を際立たせていた。
年端もいかない娘であるわけではないのに、こういう彼女のひとつひとつの仕草がルイを少しずつ・・狂わせていく。
眠りの際には当人の秘めたる想いが発現する。・・彼女は幼い時に両親を亡くしており、本来与えられるべき温もりが欠落していた。
最初からそういったものがなかった彼と違い、突然に喪失したものは、ずっと後になって別の形で飢餓感を訴えることが多かった。
彼女もそうだった。

ルイは見事な黄金の色をした前髪の下から・・・青灰色の双眸を向けた。
起き臥しの気怠さが徐々に抜け出ていく。
そして彼女の傍に静かに寄った。
シーツの波の向こうに渡る。

・・・引き寄せることしか知らない彼が、唯一傍に寄りそう人物がそこに居た。

これが夢であったら良かったのか。
・・・夢でなかったので安堵したのか。
どちらがより長く続くのか考えようとしたが、それはやめた。
目の前にある温度を確かめるために、彼はそっと・・壊れ物を扱うかのように彼女の背中に触れた。
触れる前に彼女の体温を感じて、更に触れたら彼の肌は溶けてしまうのかもしれないと思った。

腕の中で安らかに睡る姿を見届けて目を瞑った。それなのに、彼の胸からすり抜けて・・彼女はひとり小さくなって眠っていた。
そしてルイはそれに気がつかずに深く闇海を彷徨っていた。

誰かと眠ることは決してないだろうと思っていたのに。
彼女となら、眠れた。

「・・・ヒカル」
彼は掠れた声で彼のファム・ファタルの名前を呼んだ。
広いベッドの隅で、彼女は存在を消して眠っていた。

しかし彼女の肌が光り輝くので、ルイはそれを目指して引き寄せられていく。
永遠の晄という名前の彼女はその名のとおり、ルイに晄をもたらし続けた。これまでも・・・これからも。

片肘をついて、彼は彼女の首の下に腕を回した。そしてもう片方の腕で彼女の躰を覆う。・・・絡め取るように。
逃げないとわかっているのに、こうして拘束しなければ気が済まされない。
胸の前で両の腕を屈めている彼女の腕の上に自分の腕を合わせる。

・・・髪に唇を寄せた。そして、こめかみにも。彼女の肩にも。項にも。背中にも。
回した腕の側の指先は彼女のなだらかな隆起の上に添えられて、彼女の指を覆う。

彼女には昨宵の名残が残っていた。
彼女は何度も彼の名前を呼んだ。
声にならない声を闇の中に蕩かしていきながら。
そしてルイも深く沈んだ。永遠の晄の中に入った。
そちらには決して行けないと思っていたのに。
彼女が良いよ、と言ってルイを招いた。

幾度も彼女と驩を交わすことを考えた、と囁きながら。
ルイの落とした花瓣が乱れてまだ・・・咲いていた。
彼女はいつも朝に最高の状態の薔薇を摘み取る習慣があった。
彼のために早起きをしようと言っていたが、彼の方が早い目覚めを得ていた。

しかし彼は、それは必要ないよ、と笑った。
・・・この世のどの薔薇よりも素晴らしい華がここに咲いているから。

どうしたら彼女を独り占めできるのだろう。
誰も知らない場所に行き着いて、そしてふたりだけで暮らすことを何度考えただろう。
彼は何手も先を考えることが出来た。
だから、彼女が泣いても叫んでも逃げ出さないようにするためにはどうしたら良いのか、と残酷な未来を幾通りも考えた。

涙顔が見たいのではない。
彼女の・・・はにかんだ淡い微笑みや太陽のような無邪気な笑みが見たかった。初めて会った時に見せた、あの微笑みを得られるのであれば・・・彼は何を失っても良いと思った。何かに執着してはいけない、と教えられたのに。
彼は・・・いつもたったひとつのものだけに拘り続けた。

そして。
ルイ、と小さく呟いては彼に手を伸ばそうとして躊躇ったあの幼女がこうして大人になった。
そしてルイはすべてを・・・ルイはヒカルにすべてを与え、ヒカルはルイのすべてを受け入れた。

彼女との蘭契に身を委ねた。

それなのに。
想いを遂げたのに・・・苦しい。
こうして息を止めていないと彼女に口吻することさえできない。
誰とそうしても決して得られなかった満たされた何かが、はっきりと形をもたないのに・・波のように彼を包み、それは淡く晄り、そして彼の運命の人に向かって行く道しるべになる。

彼女はルイの言葉を奪った。
ただただ・・・彼の渇愛を受け止め、そして彼の名前を呼ぶだけだったのに。
ヒカルの肌に自分の肌を重ねることが・・・これほどまでに飢えた魂をあっという間に満たしていくことにルイは少なからず驚愕していた。

獣交のような時間ではなかった。
満たされるために求めるだけのそれではなく・・・
一方だけが昇っていく行為ではなく・・・

互いが・・・相手を感じながら漣に身を浸した。

徐々に蘇ってくる記憶の中で、ルイはひとつ思い出していく毎に彼女に唇を這わせた。
肌の湿りを感じ、温度を確認しそして髪の香りに酔う。
彼と彼女が乱したシーツの白い波は、彼らを包んだまま僅かに衣擦れの音をたてた。
彼は、甘い溜息を漏らした。

誰かと眠ることはできないと思っていた。実際、そうだった。
それなのに。
ヒカルとの潜まる闇がこれほどまでに甘美であることを知ってしまった今は。
・・・彼女と共に居ないと眠れないと思った。

最初からなければわからない。
けれども。
知ってしまったらそれはもうかけがえのないものになるのだ。

やがて・・・
彼の寵を受けてヒカルが身動ぎした。
彼女の覚醒も近かった。
急速に意識が戻ってくる様子がわかる。

「・・・ルイ」
彼女はぼんやりと茶色の瞳を彷徨わせていた。
彼の過程と違う目覚めの様子を、ルイは青灰色の瞳で見守っている。
「・・どこ」
ヒカルが小さく心細いというような声で呟いた。
目の前に誰もいなかったので、彼の所在を確かめたかったらしい。
温もりを感じていたのに。
彼女は・・・ルイを求めて彼の名前を呼んだ。
ルイは少し力を込めて、彼の胸の中に彼女の背中を引き寄せた。
髪にキスをする。
「ここだ」
それでヒカルは安堵の吐息を漏らした。
そしてまだ怠そうにしながら、彼の方に向き直り、そして胸に顔を埋めた。
今度は、自らの胸に腕を納めるのではなく、ルイの胸に細くしなやかな両腕を預けた。
彼女は屈めていた脚をゆっくりと伸ばしていく。
・・・赤子から人に急速に成長していく過程を経て、ヒカルはルイに寄り添った。
豊かな茶色のうねりのために、彼女の表情は見えない。
彼は両腕を移動させて、彼女の躯を包んだ。
彼の腕にも胸にも茶の華が広がっていく。
ヒカルの背中に腕を回して、そして軽く結んだ。

・・・決してその環からヒカルが逃れられないように。

彼女は、ルイの激しい恋風に吹き散らされた。
しかしそれは彼女が望んだことだった。

彼が腕に力を込めて、彼女に存在を知らしめる。
彼女が安息の声を漏らした。
ヒカルの頬が彼の鎖骨に押し当てられた。
ふたりは白い漣に躰を沈める。

この瞬間に死にたい、と思った。
失った時を考えると対処できなくなりそうだった。
今、彼は頂に居ると思った。あとは転がり落ちていくだけだ。
先が見えない傾斜を上り詰めて行けば、やがて目指す場所に辿り着くと思った。
頂上から降りるつもりはなかった。
上りつめた先はないと考えていた。
それなのに。
こうして・・・ルイは滑降していく。ヒカルに向かって。
耽るとか溺れるとかいう言葉では表現しきれない。

だから・・だから。
彼は眉を寄せて、彼女の額に唇を落とす。
金の髪が乱れて彼女の顔にかかった。
また苦しくなる。
躰が潰れそうなほどの想いがルイ・ドゥ・アルディの肉体の殻を破って外に溢れていきそうになる。

身魂の合歓というものを知った。

肉体の悦楽よりもっと違う何かが彼を満たして浸していく。
魂だけの繋がりよりもっと強い何かが彼を穏やかにさせる。

彼はこれから先も・・・これまでと同じように、全身全霊をかけて彼女を愛するという誓いを果たし続ける。

もう・・・彼女の居ない夜は過ごすことが出来ない。

彼は溜息混じりに言った。
囁くように。
けれどもヒカルにだけ聞こえるように耳元で呟く。

彼は・・・万感の想いを込めて、彼女に言った。
彼の所在を尋ねた彼女に言った。

「・・・もうどこにも行くな」
「行かないよ」
ヒカルは即答した。
額を彼の胸に擦りつける。
その仕種があまりにも幼くて、ルイは苦笑いを浮かべた。
長い時間を一緒に過ごした。
それなのに・・・彼女のすべてを知ることが出来ない。

このままふたりで永遠に・・・
そう、あの孤島で誰にも会わずに生きていくことが出来たのなら。
番（つがい）となって、ひと組の男女となって、海を眺めながら空を見つめながら生きていくことが出来たのなら。

しかしそれは叶わない。

「どうかな・・・ヒカルはいつも定まらない」
「それならルイが付いてくれば良い」
ヒカルはそう言ってくすりと声を漏らして笑った。

「私を探して。私を・・私を見つけて。どこにいても」
「厄介な注文だな」
「ルイならできるから」
「・・・そうだね」

そして彼は深く呼吸する。
彼女の傍にいると息をすることも忘れてしまう。
彼は忘れることはないのに。
このまま・・命の灯火が消えても良いと思うくらいに・・・・ヒカルを欲している自分を感じる。
なぜなのだろう。
なぜ彼女なのだろう。
なぜ・・・ひとりの人と定めてしまったのだろう。
このまま息絶えてしまえば彼はその先にあるかもしれない別離について憂慮しなくても良いのだと思うと・・・そのままふたりで息絶えてしまえば良いのにと考えを巡らし始める。

けれども・・・今は死ねない。

この人を遺して逝けない。
一緒に命を絶やすことはできない。
彼女は生きているから。生きるために、生まれて来たから。

彼はひとつ、吐息を漏らした。

「ヒカル・・・・オレのために死ね」
「・・・物騒な話ね」
ヒカルは目が醒めたと言って躰を起こしたが、ルイはそれを許可しなかった。
横たわる彼の躰にヒカルの躰を押しつけた。
強い力に遮られて、ヒカルは小さな悲鳴を伴って、ルイの胸の中に戻ってくる。
しかし抗議の声はなかった。
何も纏っていないヒカルの背中を大きな手の平で支えながら。
彼は笑った。
閨の床から早く誰もが出て行って欲しいと思っていたのに。
・・・ヒカルだけは違った。
彼女がすり抜けてルイの脇を駆け抜けていくことは赦さない。

初めて会った時から・・彼は大人になった。彼女も大人になった。

どうしてわからなかったのだろう。

一目見たときから・・・彼女の茶色の瞳に吸い込まれてしまったというのに。
運命の人のことをファム・ファタルと言う。
ルイの運命の人は、生涯ただひとりだった。

いずれこうなる可能性はあった。
けれどもそれは彼は否定した。
・・ヒカルはそれを望まないと思ったから。

彼はヒカルの唇を奪った。
優しくそれでいて猛々しく。
両の頬を手の平で包み、彼は彼女の吐息を奪う。
・・・奪うことしかできない生だった。
だから・・彼女の生命を奪って生きていく。
求めたら応じろ、と彼は言った。

ヒカルの唇は柔らかくそして甘く・・・ルイがかつて得ることの出来なかった忘我の境地に誘う。
深い・・・慈愛に満ちた口付けだった。
長く深くそして切ないキスを繰り返す。
肌を合わせた者同士の接吻ではなく、それは何かに捧げるような祈りに近かった。

官能の極みを味わうための口接ではなかった。
ただ・・・彼女に惹かれて彼はそれを落とす。
彼女は抗わなかった。
僅かに震えながら、ヒカルはルイに返答する。
彼の胸に添えられたヒカルの指先が屈められて拳を作った。
その上にルイは手の平を重ねる。

静かな・・そしてこの上なく安らかな時間を味わう。
これまでは。
怒りにまかせた接吻しか彼女に落とすことが出来なかった。
傷つけることを目的としたその行為は・・ヒカルを傷つけた。
そしてルイも傷ついた。
それなのに。

今はこうして互いの温度を感じながらただただ貪るという行為を自分自身に赦している。

・・・ヒカルも目を閉じて彼の愛を受け止めていた。

やがて彼は唇を離して・・・身体を起こして、ヒカルの茶色の瞳を覗き込んだ。

「・・・オレを残して死ね。ヒカルを遺せない」
「この世の男女の平均寿命を考えたことはあるの？」
「だからこう言っている」
彼は薄く笑った。
遺されたくないから、先に死ぬなと言う愛の囁きは数多ある。
けれども・・・彼はヒカルを遺して逝けない。

「遺されて狂う方がましだ。遺していく方が・・・逝けない」
「それなら私はルイより長生きしない。
それは私の理由があるからよ・・・ルイに生きて欲しいから」
「いや、オレはヒカルに生きて欲しい」
「それなら、一緒に逝こう」

彼女は知っていた。
創られた命が・・・本当の寿命よりもっと短い命しか永らえないことを。
平均寿命とされている年齢を大幅に越えて生きるか、もっと短いかのどちらかだった。

大半のリッチ・ジーンは後者が多かった。
テロメアに異常を来していることが多かった。

「・・・あり得ないことを口にするとは、贖罪の娘らしからぬ発言だ」
彼がそう言ったので、ヒカルが唇を横に引いた。
「ルイと一緒に生きていきたいと思うことはそれほど浅はかなことかしら」
・・・・彼はしばし絶句する。
彼が決して軽く言うことの出来ない言葉を、ヒカルが言ってのけるから。

こうして肌を重ねても。
彼女の身体に自分を乗せても。

・・・決して得られないものがある。

それなのに、いとも簡単なことのように、彼女は彼の欲しいと思う言葉を予め用意しているわけでもないのに、その瞬間に取り出して彼に投げる。

同じ過程で生まれたのに。
なぜ、彼女はこうも違うのだろうか。

「・・・ルイ。どこまでも行こう。どこまでも・・・私を連れて行き、私についてきて」
そこで彼女は言葉を句切った。
彼が言葉を返さなかったから。
茶色の眉が動いたのを感じる。
でも顔は見えなかった。

ヒカルが胸の中に居る。
これは夢なのだろうか。それとも・・・狂気の果てが見せる幻なのだろうか。
そんなことを考えながら、本当にヒカルを失った時を考えると・・・彼は戻れない路に行き着いてしまいそうになる。
しかし、この想いをヒカルに経験させるわけにはいかなかった。

彼女はすでに体験している。愛する者を失う嘆きを知っている。
だから・・・・・だからもう哀しませたくなかった。

あいしているから

その言葉を、彼は言葉に出さなかったのに、彼女は彼の胸の中で音声にした。

「・・・愛しているの、と言っても。ルイは満たされないのでしょう？」
「・・わかっているなら、尋ねることはするな」
彼女は大きく息を吸った。

夜前の婚を忘れるほどの時間は経過していない。

彼の想いが身を通して伝わってくる。
ルイは・・・・ルイも唯一を定めてしまった。フランスの華のように、誰かを愛することが出来るかも知れないと思うことが出来ないほどに。

・・・ひとりを深く愛してしまった。

死ぬほど愛している、ではない。
自分は先に死んではいけないと思うほどに愛してしまった。

ヒカル・クロスという人物を絶対と定めてしまった。
時の流れも彼に影響しない。
これほど・・身を切られるほどに激しく互いを求めているのに。
触れると皮膚を薄く裂かれるような刺激を感じる。

それでも・・・触れずには居られない。

傷つくことが分かっているのに。

それでも・・手を伸ばしてしまう。

それでも彼の誇り高い魂は、ヒカルの足元に平伏すような行為を拒否し続けた。

愛や慾の賤民には成り下がりたくなかった。
ヒカルは感じていた。
全身でルイがそう叫んでいるように思える。

これほどまでに若いふたりが、どちらが先に逝くかで討論している様はどれほど滑稽だろうか、とルイは嗤った。

要するに、互いが・・互いを失いたくないと思っているのだ。
それでは毛片方が成立しないと思うほどに。

・・・幾度の季節を一緒に過ごした。

これからも、この季節を一緒に過ごしたいと思う。
この目覚めを・・・これを夢にしたくないと思う。

彼は夢を見ない。
だからこれは夢ではない。

そういう論拠しか成立しない・・・そんな情報の海で発声を上げた生命体のように。
彼は彼の生命の息吹をヒカルにだけ伝える。

もう誰と肌を重ねることもない。
彼女としか一緒に闇を見つめたくない。
・・・獣欲を満たすために、誰かを犠牲にしても。
誰も、彼と一緒に眠ることは許可されない。

彼は、星辰の子と呼ばれた。
けれども永遠の晄を意識しない生はあり得なかった。

「ルイ・・・ルイ」
彼女は彼の名前を呼ぶ。
身体を絡めているのに。
それなのに・・・
このまま彼女をこの世の果てに連れて行きたいという衝動を抑えることができない。

・・・艶福（男性が女性を愛する幸福のこと）というものは充つるものではなく、流れゆくものなのか、と思った。
零れていく。
静かに、少しずつ。
彼はヒカル・クロスを手に入れたのに、その途端に・・新たな苦悩が彼を待っていた。

「私は生きる。それが長いか短いかはわからない。でも、ルイと生きる」
彼女は静かに言う。
そしてゆっくりと身体を起こした。
先ほどヒカルを気遣ってルイがそうしたように。

一糸纏わぬ姿でありながら、彼女はルイに視線を注ぐことを優先した。
そして次に、彼女はあらぬ姿であることを恥じて、少し顔を赤らめて、彼の胸に顔を身体ごと消える。

「・・・最後にひとつだけ・・・」
ルイは言った。
彼女に、なぜ、ルイを選んだのかという理由を聞くのはこれが最初で最後だと思った。
あのフランスの華ではなく。彼を選んだヒカルの理由を、一度だけ。
確認したかった。
それは、彼が生きていることを確認するために、自身の呼吸を確認する時と同じだった。
彼が最後だと言えば、それは最後の質問だった。
変更することはないだろう。彼は繰り返すことはしない。
長い時間を一緒に過ごしてきた。
彼の習慣や習性は、他者よりも少しだけ知っていた。

こうしてふたりで・・・アルディ家の若き薔薇たちがひとつ閨で過ごすことがどれほどの意味を持つことなのか、彼にはわからないということはなかった。
これから・・激動が訪れる。
それでもなお、彼女を手放すことを考えることは出来なかった。
・・・すでに彼の一部だったから。
だから、先に死ね、と言った。
先に死ぬなと言えなかった。
この家のもたらす重さを彼女に遺すことが出来ない。

彼女を遺せない。できることなら一緒に滅したい。
誰かと・・ルイではない他者と愛を育むヒカルを想像するだけで身を焦がすような痛みを覚える。

世の中の男女の愛というものと同質にすることができればどれほど楽になっただろうか。
身体を合わせるだけの愛もある。
心だけが結ばれる愛もある。
けれども、ルイはそれでは生きていけない。
ヒカル・クロスに関して言えば、両方が欲しかった。
身体も、心も。
そして過去も未来も現在も彼に捧げるように囁いた。

なぜ・・愛はこうも彼を試し続けるのだろうか。

ルイはヒカルの身体を更に強く抱き締める。
「オレの烙印は一生消えない。・・・だからヒカルはオレの傍らでしか生きられない」
「そうかもしれない。でも、そうして欲しいと言う言葉でそれは完全になる」
ヒカルが言った。
「私はルイと言葉の遊びに興じるつもりはない。・・・ルイ。私はルイを唯一と定めるために、ルイの言葉を必要としている。
・・・愛しているという言葉でなくても良い。
必要だと言われなくても良い。でも、ルイの言葉が欲しい。ルイだけの言葉が私を生涯穏やかにさせる。・・・生きて生き抜いて良かったと思う糧になる言葉が欲しい・・・・・」

ヒカルはそう言って彼の胸に顔を埋める。
茶色の首がルイの胸の中で左右に振れる。

「夢にならない夢になる前に。
・・・・どうか私に授けて欲しい
・・・・これから生きていくために」

ルイはその瞬間、彼女を抱き締めた。
そして強く、低くささめく。

「赦さない・・・オレを傷つける者は・・・」
彼は掠れた声で言った。
「ヒカルはオレが送る。
・・・何があっても。
だからヒカルは誰かを憂えて逝ってはいけない」
「最高の・・・贈り物の言葉ね」
ヒカルはそう言って、微笑んだ。

すでに覚醒の儀式は終えて、彼女は恥じらって胸元を隠していた。
ルイと重ねた時間を否定するのではなく、彼と過ごした時間を淡い気まぐれにしないために・・・彼女は胸元を隠し、彼の接吻に躊躇う・・・いつものヒカル・クロスに戻ろうとしている。

「ね・・ルイ。どちらが先でも・・それでも良いと思えることはとても素晴らしいことなのね」
ヒカルは少し笑って言った。

若者の閨屋でこのような生死感を語ることは滅多にないだろう。
目覚めれば、互いの温度を求めて、今一度焔を燃やすのが常なのかも知れない。・・・先ほどのルイも同様であったように。
しかし、彼女との会話は・・・永遠に続くかも知れないと思うくらいに、彼の中に何かを落とし込む言葉ばかりだった。

・・身体を寄せる。

若い情炎だけだったとは思えない。

・・ルイ・ドゥ・アルディと彼の永遠の人との時間は、彼にとっては永遠以上のものなのだ。

昨夜の激しい交合も今は去って・・・闃然とした空気が彼と彼女を包んでいる。
煙る燻りを散らすために彼女を抱いたのではない。
・・・これから先。
夜明けは彼女としか過ごすことはないだろうと思った。
別離が訪れても。死別や離別によるひとりの明け方を迎えたとしても。
・・・彼は決してこの時間を忘れない。朝（とき）を刻んで・・・・そして目覚めの傍らにヒカルが居ないことを歎く日々を送るだろう。
それが長く続くことは彼の中で予定していない。
・・・でも、その寂しさを彼女に味わわせたくなかった。

どちらが先でも。遺された者は憂えることは間違いない。
そして死者は死してなお・・・愛を刻む。相手に愛を囁く。
どちらが残酷なのだろう。

遺していく愛と、遺される愛と。

それらを比べることが出来ないほどに愛をしてしまった者は・・・どちらを選べば良いのだろう。

彼を傷つけることは赦さない、と言ったルイ・ドゥ・アルディは、ヒカルに囁いた。
彼の内面を吐露するのは、彼女が最初で最後の人だ。
それ以外はいらいない。
彼の生涯には彼女が居ればそれで良い。
彼女だけ居れば良い。・・・しかし彼女はそうではない。

「・・・オレを傷つける者は赦さない」ルイは繰り返した。
彼は、繰り返さないのに。
そしてヒカルの背中を手の平で擦った。彼女の滑らかな肌に自分の手の平を重ねていくことだけで・・・彼は甘い陶酔を味わう。
「ヒカルはオレを傷つける。・・・誇りを失いそうになる」
彼はそこで言葉を句切った。
・・・なぜ、彼がそう言ったのか・・・ヒカルは短い彼の言葉から彼の悲壮な想いを全身に浴びてそして、切ない、と言った。
「・・・それなら、私を罰すれば良い」
彼女は哀しそうな顔をした。ルイを傷つけたくないと考えているのに、彼はヒカルが彼の最も奥深い場所にある崇高な誇りを傷つけるのだと言われて、彼女は言葉を失った。
贖罪の娘だと言われて。ルイに贖いをしなければならないと言われて。
でもこれほどまでに深く彼を求めてしまったことさえ罪だと言われたら、ヒカルはもう彼の傍で微笑むことは出来そうにもないと思ったから。それなのに、彼はヒカルを求めたから。
ルイの心意を推し量ることができかねて、彼女は顔を起こしてルイの青灰色の瞳をじっと見つめた。
茶色の澄んだ瞳が彼の美しい瞳を見つめる。
互いの姿が映るほどに近い場所で。

「・・・・そうするよ」
彼は薄く笑った。綺麗な・・・若者に相応しい微笑みだった。
これは罰なのか罪なのか・・・どちらも言葉が違うだけだ、と彼は言った。
そしてそこで押し黙ってしばらく時間が経過するのを待った。
彼女が今にも涙をこぼしそうな顔をしたからだ。
しかし滴が彼の胸を濡らす前に、彼はヒカルに告げる。本当に言いたかったことを。

「だからもうヒカルがどんなに拒んでも離しはしない」

この場合には、彼女の顔を見つめた方が良いのだろうか。
それとも・・今ひとたび忘我の波に彼女を沈めた方が良いのだろうか。

そして彼は今一度ヒカル・クロスに向かって唇を寄せる。
離れない、と繰り返すヒカルにルイは何度も繰り返すな、と言った。
あたたかい波間で彼と彼女は身体を寄せ合い、ひとつに溶け合う。
・・・相手の体温が、これほど心地好いと感じたことはなかった。
彼女の呼吸音が聞こえて彼を鎮める。
彼女の睫が肌に触れて彼にひとりではないと告げる。

「もう離れるな。片時も」
「・・・ルイが望むのなら」
ヒカルの言葉に満足したルイは、彼女の髪に顔を埋めた。
あたりは完全な闇であったのに・・どこか眩しかった。
瞳を閉じているのに、どういうわけか、明るかった。
彼の抱擁に応えて、ヒカルは腕を伸ばし彼の首にしがみついた。
しばしふたりは無言で・・静かにけれども誰ももう引き離すことが出来ないほどに強く擁した。

「オレの妻は生涯ひとりだけだ」
彼はそう言った。
いつか何かがふたりを引き離してしまうことがあったとしても。
ヒカルが彼から去ったとしても。
・・・彼女が願いのとおりに、ルイより先に逝ったとしても。

彼は生涯・・・ただひとりだけを愛し抜くと誓った。

「誰も愛さない。命が尽きても続く。ヒカル。・・・誓いを果たさずに、オレより後に逝ったら、オレだけを考えて生きろ」
誰かを愛することは許可しない。
死してなお、彼女を拘束する。解放することなんてできない。
・・・だから先に逝け、と彼は言う。
ヒカルが生涯、愛を注ぐのは、ルイ・ドゥ・アルディひとりだけだと誓え、と彼は望む。
それがどれほど酷いことなのかを良く知っているのに。

「ルイ・・・・ルイ」
ヒカルは困ったように、彼女の恋人に向かって名前を呼び続けた。
どう伝えて良いのかわからないと言った。

彼は身体を動かし、彼女を組み敷いて華奢なヒカルの身体の上に浮く。

・・・・・・彼女の熱がまた欲しくなった。
両手首を掴み、彼女が逃げることはないと知りながら、それでも大きな手の平で自由を奪い押さえつけながらルイはヒカルに接吻する。
唇に、首筋に、耳に、肩に・・・そしてまだ朝には早い、と言った。

完全に遮光された空間であったので、夜明けの晄を感じなかったが、ヒカルは長い間の習慣で、すでに夜が明けていることを悟っていた。
だからルイの言葉に誤りがあると言った。
「オレは間違わないよ、ヒカル」
ルイは徐々に熱くなる彼女の肌の上に頬を乗せてそう言った。
「・・オレの朝はまだだ。夜明けが来ればヒカルはここから抜け出して起き出してしまうから。ヒカル。・・・共寐をしろ。伽はまだ終わっていない」
彼は黄金の髪を乱して、彼女の胸にそれを交ぜた。

「だめ・・・」
ヒカルが切れ切れにそう言ったが、ルイはそれを聞き入れなかった。
彼が彼女に烙印を押し込める度に、彼女は小さく短く声を荒げた。
それはヒカルの唇から発せられるルイへの誘惑だった。
咎めにならない。彼女から佳音が漏れる度に・・・彼は次第に指先に力を込めて愛念を増していく。

朝が来ているのに。彼の夜は明けていないと言う。

ヒカルは目を閉じて、愛の天風をじっと受け止めた。
明けない夜はない。
けれども彼は星辰の子だった。
夜は彼の足元に平伏す。
ルイは夜を随えて、そして星々を遵えて・・・永遠の晄を迎えにやって来た。

長い時間を要した。
彼と彼女が出会ってから。
そして互いに愛を受け入れるまで・・・様々なことがあった。
それでも、惹かれる。
それでも・・・彼が欲しい。

ヒカルは目を瞬かせた。

・・・涙が溢れてきたからだ。
決して泣かないと誓ったのに。
愛おしくて人は泣くのだ、と思った。

苦痛はない。哀切でもない。

・・・・・・ただ、彼との契りが彼女を遣る瀬無くさせる。

決して泣かないというその誓いすら・・・彼の愛の前では、脆く崩れ落ちて内に眠っていた本当の晄を放つ。

再びルイとヒカルは陶然とし、迸る熱情の風波の中で愛の熱を交わした。

「ヒカル・・・オレのファム・ファタル」
彼はそれだけを彼女の耳に囁き続けた。
運命の人のことをそのように呼ぶ。
運命が定めた自分でもどうにもならない恋情を持つ相手のことではない。ルイが定めたのだ。ただひとりだけを愛し抜く、と。
神が彼のためにしつらえたのではない。
彼が・・・彼がそうだと決めたのだから。
他の誰にもこの情を持たない。
持ったことがない。
これからも・・・彼の命が尽きてなお、この想いは続く。

だからヒカルは先に逝くべきだ。
狂うほどに愛する想いを受け止めて彼女が生き抜くには・・・彼の愛は激しすぎた。
しかし、そこからヒカルが逃れることは赦さない。

・・・彼を傷つけることが出来るのはヒカルだけだから。

彼を疵付ける者は赦さない。でも誰も彼を貶めたり傷付けたりすることはできない。ヒカル以外は。

それは・・・倖せなことなのだろうか。

こんな苦しい想いは二度と感じない。
誰かにこれほど激しく愛執の念を抱くことはしない。
・・・そうなったときには彼はいつでも己の命を捨てようと思うほどに・・・彼を彼で居られなくさせるこの想いは、生涯一度だけで良い、と持った。

彼女の白い身体から伸びる彼女の両腕はルイの手の平の中にあった。
身を捩る彼女の躯をもう片方の腕で彼は手繰り寄せる。

両翅を手折るように、自由を奪う。
こういう愛し方しかできない。
こういう生き方しか知らない。

でも、彼女だけだ。
ルイ・ドゥ・アルディと朝を迎えるのは、ヒカルだけだ。

彼は永遠の晄の名前を呼んだ。
息が乱れ、顔が火照り、銀水を満たしてヒカルはルイの腕の下で・・・彼女の香でもって彼を誘う。
そして何度も彼の名前を呼ぶ。

愛しているよ、と囁くことはしなかった。

整った顔に淡い微笑みが浮かぶ。
彼は星辰の子で・・・自在に夜の星を操ることすら実現することができそうだった。彼女がそう望むのであれば。

「・・・連れて行くよ。そしてどこにいてもきっと見つけ出す」
彼はそう言って彼女の身体に深く沈んだ。

彼と彼女の朝はまだ訪れそうもなかった。
まだ・・・二人の潜む海波には暁更が続いていた。
薄明の時間は一瞬であるはずなのに。
・・・それが明けても彼女を解放するつもりはなかったが。

彼女の生国では、神事として夜明け前に祈りを捧げるという。
・・・これほど厳かな睦みを彼は知らない。
彼は神に縋らない。
それでも、これは祈りに似ていると思う。
・・・何を祈れば良いのだろうか。

・・・それなら。

彼の覬覦はひとつだけだ。

・・・ヒカルと生きることだけだった。

永遠は存在しない。
だから、ヒカルと生きたい。

それだけで、良い。

ルイ・ドゥ・アルディはすでに朝が訪れていることを知っていたのに。このままずっと・・・・朝が来なければ良いのにと思った。

目の前の、茶色の髪の茶色の瞳の彼の永遠の恋人は・・・彼を招きながら小さく倖せそうに微笑んだ。

彼も彼女も・・・激しい波の中にいるのに。

星辰の子は、星々を随えて、永遠の晄とひとつになった。
そして、彼女の晄の海の中で淡く微笑んだ。

・・・・遠くで恋鳥（恋人達の朝の別れを告げる明け方の鳥のこと）が啼いていた。

彼は夢を見ない。
だから、これは現実で・・・彼の覬覦は必ず叶えると彼女に誓いの言葉を囁きながら。

ルイ・ドゥ・アルディは生涯ただひとりだけを愛した。
彼の生命の長さのほとんどを使って彼女だけを見続けた。
これからも。これまでも。何があっても。彼女が逝っても。彼がこの世からいなくなっても。
ルイは彼女だけを愛し続ける。

星辰の子と呼ばれたルイ・ドゥ・アルディは・・・・・・

生涯でただ一度だけ。

たった一度だけ。

・・・・愛をした。

永遠の晄という名前の彼の運命の人だけを愛した。

(FIN)

虹霓

伊香保呂能 夜左可能為提尓 多都努自能 安良波路萬代母 佐祢乎佐祢弖婆

伊香保ろの　やさかのゐでに立つ虹の　現はろまでもさ寝をさ寝てば（万葉集より）

伊香保の夜左可の堰に現れる虹霓のように・・・人目につくほど明るくなるまで、貴女と幾夜もずっと過ごせたら、どれほど素晴らしいかと思うのに。

雨上がりに虹が出た。
まだ、辺りは雨の匂いが充満していた。

ミシェル・ドゥ・アルディは、新しい煙草を唇に銜えて空を眺めた。
空の色よりずっと薄い青灰色の瞳で、空をひとり、眺める。
深い知性をたたえた双眸が紫外線カットガラスの向こう側で煌めく入道雲が勢いよく流れていく様をじっと・・・静かに見つめていた。

研究所の1階は総硝子張りである。
床から天井まで、3重に巡らされたガラスの窓は、重厚さを感じさせない。
音や陽光や、必要なものが透過することができるようにということで、彼が考案した遮音と防弾と防湿を兼ね備えた設計であり、これは先ごろ欧州で特許を取得した構造だった。
彼はいつも何手も先を行く。
この先に到来する未来を見据えていつも行動する。
所内は禁煙だと言われたので、彼はやむなく内庭に出て煙草を口にした。
白衣を渡されたが、それを身につける気はない。
先頃、身分証明はIDカードからIDチップシールへの識別方法に切り替えられた。
彼よりずっと年上の大人達がたくさん行き交うガラスの向こう側のフロアをぼんやりと目的もなく眺める。
彼の物憂げな青灰色の瞳は何も興味が湧かないと告げるかのように遠く空を見上げていた。
彼が過ごしたキューバの空の色はもっと違っていた。

パリに戻ってくるとは思わなかった。
もう二度と足を踏み入れる国ではないと思っていた。
彼の半身と熾烈な当主争いを続けた末に、彼は敗れた。
敗れたことについては事実だから受け入れるつもりだ。
そして闘いを続けるつもりも、もうなかった。
アルディ家の所有する島に軟禁されて、そのまま一生を終えるのかと思った。そうなればいつでも・・いつでもこの命を捨てるつもりだった。
生き抜け、と彼の母は言った。
彼の叔父もそう言った。
けれども・・・生きる理由がない。
生きる理由がないから死ぬのと、死ぬ理由がないから生きるのと、どちらが怠惰であるのだろう。

◆02

こうしてここに居る理由を作った、彼の半身はミシェルを呼び寄せた。
当主に就任して間もなくの頃だった。
彼の持つ知識と才能を惜しむと言ったが、それは建前で・・・彼が密かに呼び寄せられたことには理由があった。
ある個体の調査をして欲しいと言ったが、あれはまさしく・・・
誰の症例かわかった。
ミシェルはアルディ邸にあまり遠くない場所に移されて、外出するにも監視の目がある生活をしばらく送っていた。
もうアルディ邸に住まうことは許可されなかった。
それなのに、近くに居を構えろと言われる。

それなのに、当主に就任したものの、鑑定医などという職業を肩書きに増やし、ほとんどアルディ邸にはいない。

矛盾している。

逃げ出すわけではないのに。
もうそこまでしたいという熱情が湧かない。

自由を束縛されているとは思わなかった。
自由を求めたいと思わないから。

シャルルにどういう含みがあって・・・当主の権利を失ったミシェルを呼び寄せることの承諾を親族会から取り付けたのかは、詳細を聞かされていない。

「成果を出せ」と彼は言ったが、ミシェルが淡々と・・・言われたことだけを遂行する様を見て、業を煮やしたらしい。
研究所を丸ごと一つ、明け渡した。
彼に何か実績を与えたいと思っているらしい。
なぜだろう。
ミシェルの存在を長い間秘匿していたのに、それに反する要求をミシェルに突きつける。
彼がそれを難なく・・・冷ややかにやり遂げる様を見て・・シャルルは何を考えているのだろうか。
考えあってのことは理解できる。

先毎から本腰を入れて着手したバイオテクノロジーに特化した研究所に、適当な役職をあてがわれて、ミシェルはここに就任することになった。
研究所のロビーに入ったとき。
すれ違いざまに、彼の顔をちらりちらりと何人かが見た。
まるで見世物のようなだ、とミシェルは苦笑する。
彼の顔は・・・この研究所の頂点に立つ男に酷似している。いや、そのものだ。
当たり前だ・・・遺伝子情報が同じなのだから。
彼はシャルルと区別するためにほんの少し髪を切った。
そうでなければ見分けがつかないと言われて。
外観を変えなければミシェルという個は存在しないのだろうか。
彼が彼であるためには・・・何が必要なのだろうか。
それを模索するために、長い苦しい闘いに挑戦することにした。でも結果は得られなかった。
ミシェルはシャルルになれないということを確認しただけだった。
彼らの当主に足る資格というのは、フランス国籍であることと、アルディ家の者から生まれ出たと言う出生証明を入手してから、成年に達するまでの期間を、どこにも転籍することなく継続していることが前提だった。
ミシェルにはフランスでの出生記録がない。
叔父の戸籍に入れられたが・・・・彼がもし、前当主の籍に入りなおすのであれば、「継続して」という部分に抵触する。
だから、当主の権利を得るまでに長い時間を必要とする。
多情で有名なシャルルとミシェルの祖父を代表として、アルディ家の者は、あちらこちらで出生の明瞭でない者を産み落としている。
彼らが遺伝情報でもってその権利を主張しても、対抗するための方便をかざす必要があったのだ。
嫡男であることを主張すれば権利を失う。
嫡男でないと主張しても権利を持つことができない。

つまらない一族だ。
そう思った瞬間に、彼の興味は一気に失せてしまった。
一族の長には、強い者が必要だと言われたのに。
結局は、資格がないからと言われた。
それなら・・・親族会は、なぜ、ミシェルを呼び寄せたのだろうか。彼と利害が一致したから、という理由だけではなさそうだった。
そしてまた再び、彼らはここにミシェルを置いた。
どこで暮らしてももう、同じだった。
両親の墓標に出向くことも赦されていない。

彼らは・・・ミシェルという人物からすべてを搾取しないと気が済まないというかのように、彼から何もかもを奪っていった。
もう、奪うものはないだろう。

「退屈だな」
ミシェルは呟いた。

◆03

「・・・・ミシェル？」
呼ばれて、振り返った。

おや、と彼の眉が顰められた。
青灰色の瞳を少し細めて・・・目の前の人物の名前を検索する。

「ジル・・・ジル・ド・ラ・ロシェル？」
「はい」
彼女は白衣を着ていた。

白衣の下には、若い娘らしい夏のワンピースを身につけている。
見事な金の髪の・・彼に良く似た娘が近づいてきた。
そして低めの踵の靴が目に入った。
雨でぬかるんだ芝生の上を歩いてきたのだろう。
少し泥で汚れていたが、彼女は一向に気にした様子はなかった。
非常に清楚ではあったが、年頃の若い娘にしてはいささか主張に欠ける服装だった。
白い頬は僅かに日に焼けていた。

彼女がシャルルの代行としてモザンビークとパリを行き来しているのは、把握していた。
アルディ家の運営に関しては、彼にはほとんど開示されている。
・・・これから先を見据えてのことなのか、それとも取るに足りない情報だと認識しているのか。

目の前に現れた人物に、彼は警戒の色を隠して微笑んだ。
「お迎えに来ました」
「ジル・・オレたちはいとこ同士だ。その仰々しい話し方は何とかならないのか」
彼女の白衣の下には、入館の制限がかからないMasterと書かれた名札がつけられていた。
彼女はこの研究所のどこでも入館できる権限を持つ、人物であると判断した。

この研究所では他者が入り込めないという絶対の防御を自負していて、人の名前を記載しない。

すべてIDによる認証だった。
知らないチームの者同士は、言葉を交わさなければどこに所属しているのかもわからない。
上手い漏洩防止方法だった。
誰かが侵入しなければ、の話だが。

「ようこそ、ミシェル。シャルルから説明を受けています。貴方も説明を受けましたか？ミシェルは私と同じチームに入っています。館内を案内するように言われて・・・・」
ジルはそこで言葉を句切った。
「・・・ミシェルはもう、この館内の配置図は、頭に入っているようですね」

「どうしてわかる？」
「ここの中庭は、エントランスから直接入れない場所ですし・・・1階のフロアーから一度上に上がってからでないと降りられない場所ですから」

なるほど。
彼女は頭は悪くないらしい。

彼にはたくさんのいとこが存在する。
けれども、シャルルの側近でもあり、彼が最も心を許しているこの人が、この研究所の一チームに加わると言うのは何ともおかしな話だった。
フランスの華は唯一の薔薇であると称されるのに。
同じような顔立ちの者が多数存在する。
そして、血族結婚や近親婚を繰り返した結果なのだろう。
ミシェルにはそれが、薔薇の一族の傲慢さを表しているようで、どことなく滑稽に見えた。
同じ血の者でないとわかり合えないと言っているようだった。
同じ血の者でもわかり合うことはないのに。
それなら、父はなぜ彼を捨てたのだろう。
嫡男として復権することもできない、と生まれた刻に剥奪したのに、なぜ、彼を生かしておいたのだろう。
政情も生活の何もかもが違う遠い異国に彼を遣って・・・
都合が良いときに呼び寄せ、都合が悪くなると彼の存在を隠す。
シャルルとミシェルの違いとはそれほど多くはない。
知能指数や声域に若干の違いがあるが、身体的特徴はほとんど変わらない。
ミシェルの得意とする分野が偏向しているからか。
これか後日の再教育でなんとでもなるはずだった。

生きているのではない、生かされている

そう考えるとますます・・・何もかもへの執着が薄れていく。
◆04

彼は目の前の人に微笑みながら言った。
「オレとシャルルが区別できるの？」
「もちろんですよ」
彼女は少し誇らしげだった。

ミシェルは煙草を口許に寄せて、故意に彼女の前で吸った。
ジルとミシェルの間に、紫煙が立ち上って空に消えていく。
湿気を含んだ空気がむっとするくらい蒸し暑かったが、どちらも不快な顔はしなかった。これは教育のたまものだろう。そこは共通していた。
彼らは不平を漏らすことをよしとしていないし、ミシェルは自分がこの程度の温度に音を上げるほど脆弱な神経をしているとは思っていなかった。

禁煙だと注意するかと思ったが、ジルはそれについては触れなかった。
「・・・・喫煙ルームを作りましょう」
彼女はぽつりと言った。
所内では完全に禁煙のようだった。
ここの研究所では生体の再生治療を含めた万能細胞を扱っている。
非常に繊細なテクノロジーであるから職員たちも研究者たちも皆・・・喫煙に関しては否定的なのだろうなと思った。

随分と傲慢な女だな、と思った。

才在る者の生活年齢についてミシェルは特段の感想がない。
目上の者を敬えという考えも持っていない。
敬虔な信徒であった彼らの一族からしてみれば、罪深いことだと言って非難される材料になるので、黙っているが。
そういう考えを持っているのであればそもそも・・・ああいう闘いを挑まない。
優れた者が上に立つ、ということは優れた者であると認める実績と周囲の納得がなければならない。それは思い知った。もう二度と・・それについて検証するつもりはない。

「このチームにオレをわざわざ入れるというのはどういうこと？」
「あなたは論文を出してはいませんが、その考察は素晴らしいと当主が・・・いえ、研究所長が言うので。それに各国の情勢にも詳しい。・・・これからバイオ関係の所有権を取得するにあたって、研究者でありながら技術者であるという人物を探すのは困難なので・・・」
「それほど急ぐのかな」
「そうですね・・・かなり。いえ、とても」
そこで彼女が曖昧に言葉を濁したので、ミシェルは改めてジルを観察し直すことにした。

見事な黄金の髪が背中で流れている。
滑らかな頬は少し日に焼けていたが、染みこむような肌質ではなく・・やがて薄くなってまた白い肌に戻るのだろう。

しかし紫外線の強い国を何度も来訪している彼女に沈着した日焼けは不均一だった。
こういう風に白衣を着ることもないだろうし、そもそもワンピースなどという実に非機能的な服装で居られる国ではないはずだった。
青灰色の瞳はシャルルやミシェルと良く似た色合いだったが、少し違っていた。
姿勢は美しく伸びていて、顎を心もちあげて・・・ジルはミシェルをじっと見つめていた。
シャルルと良く似ている。
確かに・・・少し前のシャルルであるなら、彼女が代行していても、遜色はない。
しかし、シャルルと性別が違うから・・・相当に努力を重ねてシャルルの疑似人格として振る舞ったのでなければ、彼女はどこからどう見ても男性的という外観ではない。
いや、周囲がシャルルについて、誤認しているのだとわかった。
彼は非常に中性的で、少年時代は少女と見紛う美貌の持ち主だ。
自分もよく少女と間違われた。
しかし、ミシェルの真似を彼女ができるとはとうてい思えなかった。
ーーー彼の傲慢な青灰色の瞳を思い出した。

「なるほどね。オレのマシンからテキストデータを抜いて勝手に論文を読んだわけだ」
彼は苦笑した。
彼が当主の資格を剥奪されて前後のことだった。
彼が使用したマシンを回収された後、どこに行ったのかは定かでなかったが、ミシェル・ドゥ･アルディの思考を探るために回収後に分析に廻されたのだろう。
遠いあの国に設置してあったサーバーは、他者が侵入するとメインスイッチが落ちて、あらかじめ用意してあった削除用ソフトに置き換わり、ダウンするようにプログラムを書き込んであった。あれも回収したのだろう。
大したものは入っていない。
形に残すな。それが原則だ。
彼の重要な情報は、すべて彼の頭の中に刻まれている。
ネットでの彼の活動を誰も追うことはできない。

「先ほどの質問に回答していない」
ミシェル・ドゥ･アルディは煙草を吸った。

「シャルルとなぜ区別できるのかということですか？」
髪型が違うからと言う回答をしたら、研究所から出て行くつもりだった。
彼女は僅かに顔を斜めに傾けた。
流れるように、滑らかな金髪がこぼれ落ちて、彼女の肩から胸にかけて落ちていく。

ジルは何てこともないでしょうというように言った。

「あなたはミシェルだから」

彼は息を吐き出そうとして、吸い込んでしまい、少し呼吸を止めた。
むせそうだった。

あなたはシャルルではないから、と言うのかと思っていた。

「それほどまでにシャルルは酷いのか」
彼は煙草を持ったまま言った。

シャルルではないから。
ミシェルだから。
ジルの言葉を反芻した。

アルディ家の者は、容姿に関しては非常にうるさい。
唯美主義のシャルルの言動も影響しているのだろう。
それなのに、日焼けのあとが残る少女に、その痕跡を見て取れるような薄手の夏の服を着せて、無造作に髪を束ねもしない者に研究所のチームを任せている。
シャルルの気が知れなかった。
なぜ、ジルをここまで重用するのだろうか。
特定の者にだけ責を負わせればしわ寄せが来る。
不満を持たせないためにも、分散しつつ僅かな功労であっても栄誉も分散する。
これは帝王学の基礎中の基礎だ。

確か、ジル・ド・ラ・ロシェルの実家のロシェル家は研究者の家系ではないはずだ。
彼女に何を任せようとしているのか。
それとも・・・ミシェルが信用ならないので、見張りにつけるわけか。
彼の腹心の部下をミシェルに付ける。
これが何を意味しているのかわかっているのかな、シャルル。
彼は薄く笑った。

「いいえ、彼はいつも完璧です」
「あれほど不完全な男なのに？」
「不完全だから完璧なのですよ、ミシェル」
ジルが微笑んだ。

「人は慣れてしまうのに。彼はいつも自分が不完全であり、何かが欠けていることを承知しています。完璧に満たされてしまえば、そこで終わってしまう。・・・今はそれを補おうとすることを少し休んでしまっていますが」

彼女は続けた。
最後の言葉だけ少し声が小さかった。
「でも。彼の精神力は一族に必要です。彼の持つ不屈の精神が、親族会を動かしている」

「オレにはそうは思えないが」
彼はぴしゃりとそう言った。
何が正しくて何がそうでないのか、彼女はわかっている気がした。
自分に言い聞かせているだけなのではないのか。
少し苛立ってきた。
◆05

「彼が本当に不屈の精神を持つ、完璧なフランスの華であれば、ああして・・・たくさんの肩書きを持ちながらも、医師であることにこだわり、つまらない些細な人間観察のために時間を割いて動いている理由がはっきりしない」
その一方で、彼はこのような充実しすぎているほどの施設を運営し、開発チームを新たに立ち上げて極秘に調査しようとしている。
自らの秘密なのだろうか。
それとも・・・

「このチームの設立を言い出したのは、私です。ミシェル」
彼女は静かにそう言った。微笑んでいた。

彼の白金の髪が僅かに揺れたが、ジルはそれを懐かしそうに愛おしそうに見た。
いずれわかることだから、と彼女は言った。

「時期的に良い機会だった。・・・貴方のお母様と同じ病を治す画期的な治療方法や・・・・不妊治療や遺伝子治療・・再生医療・・・すべてを根本から覆してしまうほどの万能細胞を開発するのが今回の目的です」
「開発・・・ね」
ミシェルは挑戦的に言った。

「ジル。貴女の具体的すぎる話から、かなりその話は進んでいると思われるが。
チームのリーダー程度のポジションなら、Masterの権限は付与されない。
この研究棟には地下に広大な実験施設があるのは知っているよ・・・・そこにさえ立ち入ることのできるほどの権限を・・・副所長でもない貴女が持っているとなると、それを与えるのは彼しかいない。そして、彼もその功労に期待している。いや、一族が、かな」
いつになく彼は饒舌になった。

彼女がシャルルだけを信奉していることに対して、軽い苛立ちがいつの間にか不快な憤慨に変わりつつある。
ミシェルの叔父でもあり、親族会筆頭の大佐は、そうではなかった。
客観的に物事を判断しようと努めていた。
彼も一族によって支配される人生を歩んでいるが。それでもそのことに納得しているようだった。
しかし、ミシェルに荷担するときには少しばかり考えることもあったらしい。
彼女はそれを聞いて、少し困ったように俯いた。どこまで話して良いのか判断がつきかねるといった様子だった。
シャルルに口止めされているのか。
すぐにわかることなのに。
ジルの口から漏れたとわかるのが恐ろしいのか・・・それともシャルルに抗えないのか。

シャルルとジルの特別な絆について考察を始めるには、材料が少なかった。
彼らは男女の仲を越えて・・主従関係だけではない、何かがある。
それはミシェルが経験していない知らない世界だった。

「・・・・最優先事項は、いくつかあります。それでもそれに加えて、私は不妊のための治療を施したいと思っている」
それが罪深いことだとはわかっていますが、と彼女は付け加えた。
宗教的観点から言っているのだろうか。
それとも、シャルルの指定する優先事項の順位を変更する事への罪悪感から言っているのだろうか。
これも情報が少ない。
「ある人を救いたい。そしてその人は稀なる・・・そう、稀なる可能性を秘めた人だから」
彼女はそれ以上の情報は言わなかった。

ミシェルは鼻先で嗤った。
「特定の人物の治療をするために、この研究所をまるごと一つ動かすのか？アルディ家も相当酔狂だな。それでもシャルルがウィと言うのであれば・・・その稀なる人とやらは、相当な利益をこの研究にもたらすらしい」

「アルディ家には確かに相当な財産となるでしょう」
彼女は静かに答えた。
「・・・ここに来る前に症例のカルテを見た。個体数が少なくて症例と言えるかどうかわからないものばかりだ。疾病かどうかを判断するところから始めなくてはならないのであるならば、随分と気の長い『いそぎ』の仕事になりそうだね、ジル」
彼は皮肉を込めて彼女に言った。
「あの症例は、オレと貴女がよく知っている人物のもの？」
ぴくり、とジルの唇が動いたのを、ミシェルは見逃さなかった。
◆06

彼が「あの症例」と言っているものに心当たりがあるらしい。
ジルの美しい眉が少し動いた。
青灰色の瞳を・・・視点を定めずに彷徨わせた。
彼は同系の瞳で彼女を無表情に観察した。

彼女が固執する治療分野にまったく興味がなかった。
彼はアルディ姓を名乗ることを条件に、婚姻をしないという誓約を結んだ。
シャルルが未だに結婚をしないからである。
既婚の者でなければ当主に就任できないという因習は廃棄されたが、後継者問題には暗い影を落とした。
今後のために、直系嫡子ができるまでは、ミシェルは誰とも婚姻したり分籍したりすることはできないと制限をかけたことに、ミシェルは意味がないと思った。

家族を持つという執着をまたひとつ捨てた。
アルディ家に戻るためには執着を捨てなければならない。
何かに固執すれば、滅せられるは己だった。
それでも良いと思ったが、滅せられるほど固執するものが彼にはもう残っていなかった。

「・・・いずれわかることですが」
彼女は繰り返し言った。
「あの症例は非常に稀で・・・そうですね、私と貴方のよく知っている人も・・・そうでない人も・・・」
おや、とミシェルは目を見開いた。
シャルルのことになるとはっきりと誇りを持って断言をするのに、彼女はこの件については『いずれわかる』と繰り返して言って、即答を避ける。
間違いなく、シャルルの症例であると確信している。
でも、彼女の最後の言葉は実に興味深かった。
それでは、もうひとり発症者がいるのだろうか・・・

「なるほどね」
彼は嗤笑した。
「その‥・オレのよく知らない誰かの方が・・・症状が重篤なのだね」
誰のことを指しているのか、察しがついた。
シャルルの系図原簿を閲覧して、彼の行動履歴を検索してみればわかることだった。
この研究所からでもアクセスできるだろう。後ほど確認することにする。
「・・・ミシェル。虹が出ていますよ」
ジルはそう言って、空を見上げた。
湿った空気が徐々に乾燥した風に吹かれて、この内庭にも涼やかな空気が入り込んできた。
でも陽射しは暑いし、空も眩しい。
しかし。
間もなく消えそうな霓が空に橋のように浮かんでいた。ぽっかりと。そこだけ異質だった。
「虹は凶兆だそうです、ミシェル」
彼女は言った。
「でも、私は虹が好きです。・・・・儚くて、いつも見られるとは限らない。でも一度かかると・・・どこからでも見ることが出来る。離れていても。どんなに違った空からでも」
モザンビークの空もこんな虹がかかった、と呟いた。
彼女がシャルルに託された仕事はこの研究所での研究だけではない。

その時に、ミシェルはジルという女性がひどく・・幼く見えた。
頼りなさそうな少しだけ悲しそうに瞳を持ち上げて空を眺める。
でも、誰もが不吉とみなした虹が好きだと告げる。
どんなに儚くても。
どんなに離れていても。

オレのよく知らない誰かはオレのよく知る誰かになるのかな

ちらりとそう思った。
次に、ミシェル・ドゥ･アルディらしくもない曖昧な予測を立てたことに気がついて、その言葉を取り消すことにしたが、記憶に留めておくべき言葉にすることにした。
何か・・・これは消去してはいけないと思ったからだ。

「確かによく知らない相手の症例判断はできないな」
彼はそう呟いた。
煙草は近くの灰皿に投げ捨てるように入れて消火した。

彼が灰皿から視線を起こして、空を見上げるともう虹は消えかかっていた。
それを食い入るように見つめるジルの横顔を見た。

虹は龍と考えられている。
古代人は、牡を虹、牝を蜺と呼んだ。
本当は、彼女は・・・シャルルという牡の虹を焦がれている牝の龍なのだろか。
内なる激しさを隠しているだけなのか。
いや、彼女はきっと・・・アルディ家の者であるから、冷静で静寂を好む一方で、激しく何かに固執し誰かひとりを定めて盲愛する性分も持ち合わせているに違いない。
良くわかるよ。
オレ達は・・同じ血が流れている。
彼はくすりと笑った。
酷薄そうな唇の端を曲げて微笑む。
この研究所に足を向けてまだわずかな時間であるのに、彼は今日はジルに向かって、一体何度微笑んだことだろう。

「虹をともに見る男女に子が宿るって古事を知っているか？」
えっと言って、ジルが振り向いた顔が非常に幼かったので、ミシェル・ドゥ･アルディは冷笑した。
ジル、君はまだ訓練が足りないよ。

「虹は凶兆だから、なかなか文献がないのだが・・・その明るさになぞらえて、唯一万葉の歌が残っている・・・調べておけ」
彼は傲慢にそう言った。
はい、とジルは少し嬉しそうに笑った。
「虹の話をしたのは初めてです」
彼女がはにかんでそう言ったので、ミシェル・ドゥ･アルディはそうか、と言った。

彼女からシャルルに語りかけたりすることがないのだろう。
ジルの話を聞くと言うよりは、ジルが彼の話を聞いて受け止めるだけの関係なのだ。
そう思った。

彼の幼少期を思い出していた。
母は夢の住人だった。
どんなに語りかけても答えてくれなかったことに対して、虚しさを思い返した。
代わりに、母の夢想を聞いた。
彼の名前をいつも間違えた。
そして最後には誰なのかわからなくなったまま、亡くなった。
あの血の病がなければ、もっと長く生きて・・・そして最後は彼の名前を呼んでくれたのだろうか。

「ミシェル。私には余るプロジェクトです。だから・・・だからミシェルの力を貸してください」
「高くつくぞ」
ミシェルは短く言ったが、それは承諾の言葉だった。
研究について興味が湧いた。それが理由だ。
でも、何かの行動を起こす理由というものはひとつでなければならないということではない。
理由は複数ある。こたえがひとつでないように。
このメカニズムは、症例判定では必要だろう。
そういう・・・多角的思考に長けている者がチームに居ないのかも知れない。
編成についてから考慮しなければならない。
彼は身の内から・・・虚無という文字が追い出されて興趣という新しい退屈しのぎが湧き上がるのを感じた。

何かに興味を持つ。
誰かに興味を持つ。

・・・面白いね。

よく知らない者からよく知る者へ

先ほど記憶したばかりの言葉を思い出した。
ジルをよく知る者に、ミシェルがなるとは思えなかった。今の時点では。
彼らは薔薇の一族であり、互いに惹かれあう因子を持ち合わせていない。
これほど顔の造作が似ているのに、相手のことをよく知らない。
とても興味深いね。

青霄を見上げた。
彼らの薄い色素の瞳には、この陽射しは強すぎる。
目を細めるがそれでも直射日光は障る。

「あ」
彼女は声を上げた。
「ミシェル。先に行きます。・・・・来客のようです」
見れば、1階の内庭が面している、ガラス張りの総合受付の向こう側にジルは目を遣っていた。
ビジターの待機ブースに、誰かが居る。白衣を着ていないので、明らかにビジターだ。
遠目でよくわからないが・・・
酷く小柄な女性で茶色の髪をしていた。

案内をすると言ったのに、申し訳ないと恐縮しながら、ジルはその場を離れて行った。
もう視線はミシェルではなく、その待ち合わせの人物に注がれていた。

茶色の髪の人物にまっすぐに小走りで走り寄る様は、シャルルを彷彿とさせる。
誰かに向かって行く。ミシェルには経験のないことだ。
そう・・・シャルルとミシェルの決定的に違うもの。
それが何であるのか、ミシェルは理解していたが認めたくないと思っている。
だから否定する。

オレの同じものを経験したら・・・どうなるのかな

また1本煙草を吸いたくなった。
所内に入れば当分休憩には出てこられないだろう。
問題は山積みのはずだった。
それを処理してこいと当主が言う。
そしてあの女性が、シャルルの命を破ってまで何をしでかそうとしているのか、興味が湧いた。

いいね、ジル。

彼はまた煙草を口にくわえた。

空を見上げたが、もう虹はなかった。
・・・虹はもう消えていた。

フランスの華と同じ貌を持つ男は、空を眩しそうに見上げていた。
考え事が始まった。無表情になり青灰色の瞳の焦点が徐々に遠くなっていく。
この感覚をしばらく忘れていた。

・・・彼の脳内ではめまぐるしく様々な計算が始まっていた。

虹霓を見て。
何か予兆めいたものを感じた。
彼は根拠の無いものは採用しない。
それでも・・・

ともに虹を見上げた者がいる。
夏の服に身を包み、それでも虹が好きだと囁くように躊躇うように告白した者に降りかかる凶兆を・・・ミシェルが解明してやろうと思った。
いや、解明までには時間がかかる。
症例の個体数が少なすぎるので経過を見なければ判断できない。
・・・・ひょっとすると次世代の者が解析結果を打ち出すかも知れない。

古代から続く虹を見ながら、次の世代のことに思いを伸ばす。
自分のできなかったことがシャルルにはできる。
シャルルのできないことを自分はできる。
それなら。
それなら・・・・次の世には、シャルルとミシェルの両方ができなかったことをできる者が現れるのだろうか。

それを待ってみるのも面白いな。
実験だよ、ジル。

彼は微笑んだ。
煙草を口にくわえたが、吸うのは止めた。
夏の陽射しは眩しい。
彼はようやく研究棟に足を運ぶ気になった。

（FIN）

端倪

端倪（たんげい）：
物事のはじめと終わり、事の始終のこと。
端は、はじめのこと。倪は、終わりのこと。

どこまでも白く続く長い廊下と螺旋階段を抜けたその先に部屋はあった。
ルイ・ドゥ・アルディはその部屋のノブ下に指を差し入れて、指紋認証を行った。
指紋は不均一だ。
指紋の流線を捕らえるのではなく、点で認識するために、時折読み取りエラーを生じ、接触部分が腐食するので長期間の使用には適していない。
静脈認証か虹彩認証に切り替えるかどうか少し考えていたところだった。

籠の鳥を興奮させたり萎縮させたりすることのないように務めなければならない。
それが彼に課せられた仕事である。

かちり、と開錠を知らせる音がして、ノブが軽くなった。
彼は手にした荷物を肩からおろしながら部屋に入った。

ルイの金の前髪が揺れた。
圧が変化したからだ。
空気が流れて、彼を越えて渡っていたこちらとあちらを往来する。
彼はその狭間に立ち尽くすかのように暫くの間入り口近くで耳を澄ませていた。
かたん、という音が奥から聞こえる。僅かな人の気配。
ルイは乗馬とフェンシングで鍛え上げられた鋼のような腕を下げて荷物を床に置いた。

螺旋階段や渡り廊下から見た限りでは、彼女はバルコニーに出ていないらしい。
扉は固く閉ざされていたが、ルイがこうしてここにやって来ることを知らせる、エントランスの薔薇には大ぶりの香り高い薔薇が活けられていた。
ルイの来邸を知らせる色の薔薇ではなかった。彼は軽く舌打ちをした。

・・・・それを無視して、彼は入邸した。

いや、相手が彼の来邸を無視したのだ。
ルイの予定などは、把握していないことなどほとんどないはずであるのに。

彼はリッチ・ジーン（遺伝子操作による優遺伝子保持者）と呼ばれて、遺伝子制御されて生まれてきた。
シャルル・ドゥ・アルディの後継者として。
そして・・・創られた。
クローンであったのなら、もっと心穏やかに居られたのかも知れない。
テロメア異常で、短い命を謳歌する覚悟ができたのかも知れない。
（クローン技術は、テロメアという生存年限を操作する部位の異常が報告されている。
個体数が少ないために現在も研究中。2010年現在。）
でも、彼は白金の髪の彼と違い、金の髪を持って生まれた。

彼は気配のする方に顔を向けた。
ここは階上であるが、広く間取りを確保しており、彼女が生活するになんら不便を感じないように設計されている。
居住するにつれて、敷地面積や使い勝手について何かしら要望を持つのが人間の常であるようなのだが、彼女に関してはそれはなかった。
彼女はいつも・・・・同じ時代の同じ季節を生きているから。

◆02

ルイは室内に入ると、注意深く辺りを観察した。
ぐるりと巡回すれば、彼女がどこに居るのかがわかるようになっている。
この館を改築することを、アルディ家の当主がルイに命じたとき、いろいろと条件を加えることはなかった。
ただ、一つだけ。
館の景観を損なわないように、と言っただけだった。それが最も難しい要求であると、ルイもシャルルもわかっていたが、ルイは黙って承諾し、その要求通りに・・・この部屋を改築した。
それで認められるとは想定していなかったが、失敗すれば彼は後継者として減点される。
シャルルはいつも加点方式を採用しない。
成功してもそれはプラスにならない。
できて当然という考え方は、アルディ家特有の思考と文化であるが、ルイはそれでも良いと思っている。
彼が・・・どうにもならないほど追い詰められて行く様を、ルイは見届けるために生きているのだから、この程度のシャルルの課題については、あまり長い時間記憶しておくことをやめた。
それから随分と年月が経過している。

「・・・・ジル」
彼は注意深くこの居室の住人の名前を呼んだ。
人の気配は感じている。
返事がない。

ルイは居室に設置されているローチェアに近寄った。
いつの間にか、この部屋は日本式の家具が増えていった。
ジルは何も要求しないので、誰かが・・・そう、ジルでもルイでもない誰かの命令で、これらの家具が備え付けられていく。
彼が携わったのは部屋の改装の設計のみだったので、インテリアや壁紙や・・・その他生活に必要なものとされる細々したものは、シャルルが揃えることになった。
やがて・・・彼はある夏の一定期間だけ、ここを訪れることがなくなったので、その間、当主代行として、ルイはここに頻繁にやって来る。

ルイは設置されたチェアのひとつに近寄ると、腰を落として屈んだ。
移動できないように、床に固定されている。
椅子を使って、彼女が首を吊ったり、外に出て飛び降りようとしたりする発作を警戒していた。
実際、そういうことがあり、以来、こういった家具は背が低いものを多く採用するようになった。
彼は床に軽く跪くと、チェアの下にある空隙に指を伸ばした。
電子ロックでは、ジルに気取られてしまうので・・・この部屋で、何かを隠すために仕掛ける工夫に関しては、日本の仕掛け細工を採用した。
いくつか小さな板を組み合わせて・・そして解除をしないと開かない。
そしてその組み合わせは解除をするときにまた変更され、変更したものにしかわからない。
組み合わせは無限にあるので・・・ジルには開くことはできない。
もっとも、そのチェアには彼女は座らないから・・・気がつくことはないだろう。
この椅子は、ジルが「シャルル」と呼ぶ相手にだけ勧める椅子だった。
だから、彼はそこにいつも彼女が興奮したときのための鎮痛剤や鎮静剤を置くことにしていた。

静脈注射が手っ取り早いのだが、彼女にそういう治療は極力施さないように厳命されている。
ゆっくりと・・朽ちていくアルディ家の薔薇について、ここでひっそりと腐らせていくことを、一族が決定して久しい。
彼ら一族と、ルイは同じ血が流れている。
死を選ばせるという誇りさえ奪った。
そして死ぬこともできないまま、生きながら死にたいと強く願い続け、彼女は今日まで生きている。
・・・もう、死にたいという欲求さえなくしてしまったのだろうか。
ジルはどんどん・・・退行して行っている。
彼女は今は、青春の輝きの時代の中で生きている。
そこで時が止まっている。

今は・・・今は、ちょうどモザンビークにシャルルの命によって派遣されるかどうかくらいの頃合いだった。
いつも「モザンビークに行ってくれないか」とルイが言うと、彼女は瞳を潤ませて、「シャルルのためなら」と頷く。
それを繰り返す。
もう、何度目の同じ会話なのかさえ数えるのをやめた。
自分はよくよく、アルディ家の男子なのだと思い知る。
彼はあの薔薇の家でしか生きられない。
外に飛び出していくことは選ばなかった。

ルイは立ち上がって小さい処置セットを取り出すと、腰元のポケットに入れた。
使うことはないとは思うが、念のためだ。
彼は用心深く、背中の向きを変えて、部屋の奥に進んだ。
この部屋は広く一瞥することができるのだが、唯一・・・ここからでは見えない空間がある。
ジルの寝室だ。バスルームも一部非表示ではあるが、そこで使用中であることを確認でき、長い時間使用すると、監視塔に通報が入る。
彼女の身の回りの世話は、同性の使用人が必ず付き添うことになっている。
そういう生活を彼女が受け入れるようになるまで、長い時間を要した。

寝室の扉は施錠されていない。
「ジル、入るぞ」
彼は軽くノックをして、寝室の扉を開けた。
いつでも蹴破れるように、この扉は居室の入り口のそれと違って、薄い華奢な材で創られている。
もう日は高い。
それなのに寝室に居る。
入邸する前に、彼女の健康チェックに目を通しておくべきだった、と思った。

「ジル。・・・入るぞ」
彼はもう一度だけ警告をして、それでも返事がないことを確認すると、扉を開けた。
◆03

―――突然。

彼の腰に、何かがぶつかった。
一瞬身構えたが、それが何なのか、すぐにわかって、蹴り上げそうになった脚を引いた。
そこに柔らかい温度を持ったものが押し当てられた。
彼はとめた息を吐き出した。
彼の大腿にしがみついていたのは、ジルだった。
部屋が薄暗くて、中の様子は目が慣れないと把握できないが、大体の察しがついた。
彼は声をかけずに・・・そのまま彼の腰に腕を回し、懇願するかのように何かを呟き続けるジルの華奢な肩に手を遣った。

上着を脱ぐ。
そして、彼は薄い肌着だけしか身につけていない彼女の乱れた肩紐をなおしてやり、上からそっと上着をかけた。
その間、彼女は・・・一度もルイと目線をあわせることがなかった。
何度も何度も、小さく呟くのは「シャルル」という言葉だけだ。
震えている肩を抱いても抵抗しない。
そして視線を合わせようとしない。
・・・髪は乱れ、頬には何度も涙を流した跡があった。

「・・・・おはよう、『シャルル』」

かちり、と音がして、ライターの火が暗い闇に灯った。
闇に徐々に慣れ始めて来たルイに、同じ造作の貌を持つ男は、低く艶やかなバリトンで朝の挨拶をした。

「陽はもう高いがね」
「ミシェル」
彼は溜息をついた。

彼女がミシェル、と聞いて肩を震わせたので・・・ルイは彼女を上着の上から手を添えて、立ち上がらせた。

ルイの叔父は半裸の状態で、ジルの寝室に居た。
ベッドから上半身を起こし・・・つまらなさそうに煙草を吸っていた。
白い煙が闇に舞ってそして不均一にゆっくりとした速度で拡散しながら天井に消えていく。
ふっと煙草を吐く音がした。

「鎮静剤を打っておいてくれ。間もなく・・・正気にかえるから。いや、狂気にかえるのかな」
自分の言い回しが言い得て妙だと皮肉げにミシェルは笑った。

ルイは細かく震えが止まらないジルの背中を抱いて・・・そして無言で扉の外に出した。
明るいところから暗いところへ。
そしてまた仄暗い場所から陽光の差し込む晄の部屋に戻る。
彼はまた青灰色の瞳を細めた。

彼女を座らせる。場所は何処でも良いのだが・・・最も近い場所に座らせた。
いつもジルが座ることのない場所に座らせようとしたが、少し考えて・・その次に設置されているジルの定位置と決めている場所に彼女を座らせた。

同じ習慣に執着するのは、この病の特徴でもある。
同時に、執着してはいけないと言われている一族の教育から逸脱した行為を繰り返す彼女を見て居ると・・・本当はあの一族は執着するあまりにそう言って自らを縛めないと生きていけないのだと思い知る。

明るい陽射しが彼女を照らし出したので、ルイは彼女がその場から動き出さないように気配に注意を向けながら、窓辺の壁に備え付けられている、電動カーテンのスイッチを押した。
電子音が一度だけ僅かに鳴って、一瞬で遮光される。

そこからルイは手早く行動した。
ポケットに入れてあった携帯用の注射器を取り出し、アンプルを切って、携帯用の消毒ガーゼの封を切った。
慣れた手つきで彼女に投薬する。
時間にしてほんの数十秒程度のことだった。
◆04

ジルは酷く消耗していた。
バスルームから大判のタオルを持って来たルイは、彼女の背後に回って上着の上に更に布をあてがってやった。
その際に、待機中の使用人にコールを鳴らす。
入り口近くにそれはあり、一見壁紙の模様かと思う程に小さいコール用センサーだった。
緊急コールで、ルイの指紋さえ当てればそれだけで警報が鳴る。

なぜ、こうなる前に誰も止めない。

愚問を反芻する。
ミシェルを責めても無駄だ。効果がない。
彼はルイの教育係であるが、もっと違う面も役職も持っている。
そしてジルを責めてももっと無駄だった。
彼女は彼を・・ずっと「シャルル」と呼ぶのだから。
彼女自身も、非常に彼に酷似した容貌を持っているのに。
それでも、自分とシャルルと間違えることがないのに、なぜ・・・シャルルとミシェルとルイは皆一様に「シャルル」でなければならないのだろうか。
特に、若いルイには、ジルは反応が顕著だった。
あのころ・・・ルイが誕生するずっと前のことについて、加速をつけて戻ろうとする。
ルイが命じられて、頻繁にこの館にやって来ると言うことは、そういうことなのだ。
ジルにあのころに戻って欲しいと願う者が居る。
少なくとも二人。

ひとりは、戻る事で命を絶つことを諦めさせようとするシャルル・ドゥ・アルディ。
もうひとりは・・・・
戻る事で彼女を永劫の苦しみに陥れようとするかのように彼女の床に現れるミシェル・ドゥ･アルディ。

確かに、彼女には償うべき罪がある。ひとつではない。いくつもある。
それをジルが受け入れたことも経緯として知っている。
だが。
それでも・・・それでも、なお、彼女に罪を犯させた者達は、免責されるのだろうか。
ルイを誕生させた祖となる女性は、ぼんやりと遠くを見つめていた。
鎮静剤の効果が出て来たらしい。震えが止まっていた。
程なくして、待機中のスタッフがやって来た。
ジルと直接接触するのは女性のみと限られている。
彼女が興奮するからだ。
特にこんな緊急時には注意を払って行動できなければならない。
彼女のあられもない姿に驚いたり他言したり何か苦言を呈す者はこの館には存在しない。

「彼女を隣の棟のバスルームに・・それから少し休ませて。当分、こちらには連れてくるな」
短く指示を出す。
そして「またか」と一人呟いた。
どうして未然に防ぐことができないのか。しかし誰も責めることができない。

使用人が彼の来訪を拒否できるわけがないし、こういう・・・こういう状況に陥ったとしても、ジルが拒否すれば良いだけの話である。

ジルは華奢な体を介抱されて・・・
ゆっくりと部屋を出て行った。
彼女がこの棟を出るときは、大抵がこういった朝を迎えるときだ。

これから数日間は昏々と眠り続けるのだろう。
起きているのに眠っている。
眠っているのに起きているような鮮やかな夢を見る。
そして目が醒めればまた・・・またひとつ、時を遡って退行する。

次は・・・きっと、シャルルの想いをあの人に・・・シャルルに代わって吐露するところから始まるのかな。
シャルルと・・・あの人と過ごしたあの時代を夢見ながら。
ルイは冷笑した。

誰も居なくなったことを確認すると、唯一残っている奥の部屋の人物に声をかけた。
彼は幾本目かの煙草を吸っているところだった。

「ミシェル。・・・叔父上。いい加減、起きてきたらどう？」
「話があるなら、こちらに来たらどうかな？甥御殿」

互いの尊称はまったく事実に反したものだとわかっているのに、それでも彼らはそう言って呼び習わす。
ルイは大袈裟に溜め息をついて、大股で寝室に近寄った。
扉は半開きになっており、晄が漏れて、最初は暗くて視認できなかった中の様子はだいぶ判別できた。
◆05

「ジルと寝るのは構わないが」
ルイから話を切り出した。
「その都度・・･オレが介抱するのはそろそろ厭きた」
「それなら、代わりにお前が彼女を慰めてやったらどう？」
ミシェルがおかしそうに言った。
枕元に自分で持って来たのだろう。
灰皿が置かれていた。

涙を流して嫌だという彼女を組み敷きながら、勝利の煙草を味わう凶行を楽しむ男は。
フランスの華と同じ貌をしていた。
同じ貌をしていながら、ジルにいくつものなかなか消えない花弁を落とし、何度も・・・そう、おそらく何度も彼女を蹂躙して狂気の渦の中に引き込み・・・彼女に死よりも苦しい業火を与え続ける男は嗤った。
何もかもが凍り付くような笑みだった。

「生憎と、オレは・・・ミシェルの執着する相手を横取りするほど酔狂じゃないので」
「どうして？ジルを抱けば、ヒカルが悲しむから？」
「ヒカルは関係ないだろう」
ルイは少し早口でそう言った。
ルイにミシェルが教育係として充てられているのと同様に、ジルもヒカルの教育係だった。
ジルがこの病を隠しきれなくなり、退任した後は、シャルルがジルの代わりを兼ねているが。

「ジルを抱いても何が楽しいのか、わからないな」
「理由はひとつだけだというのは・・・こたえが一つだけだと言い切るのと同じくらい愚問だな、ルイ」
彼はそう言った。

「楽しい？そう・・確かに、愉快ではあるね。あの女は・・・何度抱いても妊娠しない。オレに抗議しているようで、時々執恋に似た感情を持ってしまうよ。
そしてその都度、オレに懇願する。
やめろと言うのに受け入れる。
そしてその後は決まって夢の世界に逃げ込む。
・・・・弱くて脆いのに手強くて生意気な女だ」
だから狩ってやるのさ、と彼は言った。
「我が従妹殿は・・・研究者としては一流だ。彼女の論文は素晴らしいし、彼女が発見したいくつかの研究結果の進歩性については、何年も経った今でも覆されたり凌駕されたりすることがない」

彼女に暴挙を繰り返す彼はその美しい唇で、彼女を賛辞する。
うっとりするような・・・美術品のような完璧な唇から、紫煙が漏れて彼が相当な愛煙者であることを示していた。
肺に大きく吸ってから、彼は灰を灰皿に落としながら、面白そうに自分と同じ貌をした若い男の様子を伺っていた。
彼は微笑んでいても決して・・・目は笑って居ない。
切れ込んだような双眸は・・・ルイと同じ青灰色をしていたが、そこには何も映り込んでいなかった。

わかっている。

ミシェルがここにこうして来る時は・・・いつも、外で「シャルル」の代わりをするときだった。
先般・・・シャルルの代行で彼はシャルル・ドゥ・アルディとしてちょっとした会合に出た。

その際に、何かあったらしい。
シャルルの旧来の仲間が、彼を見て・・・本当にシャルルかと言って尋ねたようだった。
彼の青春の輝きの時代に知り合った者のうちの幾人かはシャルルとミシェルの当主争いを目の当たりにしている。
そしてかなり親しい時間を過ごし、彼の内情の吐露を受け止めた者も居るはずだった。
それを、ミシェルは情報共有していなかったのだ。
事実は把握していたとしても、ジルがかつてシャルルの代行を務めたようには・・ミシェルはシャルルと共有しようとしなかったのだ。
シャルルとミシェルが決定的に違う「何か」について、はっきりと見せつけられるから。
よそよそしく接するミシェルを見て、シャルルではないと誰かが見破ったのだ。
異例の若さで、フランスの警察の組織中枢にまで登りつめた日米ハーフのフランス国籍の男は、彼を見て。
シャルルではないね、と言ったらしい。
何となく事情を察した相手は、次に、ジル・ド・ラ・ロシェルは元気か、と尋ねた。

「それで悋気を起こしてジルを？・・・短絡的と言われても仕方がない」
ルイはミシェルに無表情に言ったが、彼は白金の髪をかき上げて首を振った。
貌の造作は酷似しているが、彼らが違うのは、その髪の色だった。
ジルと同じ。耀くような金髪を持つルイを、目を細めてミシェルは見つめた。

「あの苛つく女と同じ髪だね・・・眩しくて頭痛がするよ」
◆06

「すべてお見通しという貌をして・・・そしてその奥に眠る情炎については隠したまま薔薇に還ろうとする。
生きているのに死んでいる。
生きる事と死ぬ事とどちらが楽であるか考えもしない。
・・・・ルイ、誇りがあるなら生き延びろ。
汚辱にまみれてなお生き抜くことがどれほど・・・どれほど苦しいのか知ってから、死ね」

「そして貴方に攻撃されて、ジルはその都度、死へ逃げ込もうとする」
ルイが辛辣に言った。
彼が彼女を死に追いやっているのではないと確信したが、追い詰めているのは確かだ。
でもそれを越えると、どういうわけか・・彼女は倖せの苑に入り込んでしまう。
まるで、ミシェルの行為がジルを安らぎに導いているようだ。

彼と夜を過ごした後、ジルは決まって狂乱する。
何が彼女をそうさせているのか。
命を絶つことはもうなかった。
それでも念を入れて、自殺防止の方策を講じることにした。
彼女の狂気については、ルイには理解できた。
彼女は・・・もう、こちらの世界に戻ってくることを諦めたのだ。
生きて、シャルルの代行を務め、愛する人に微笑むシャルルを見つめるあの日々の方が真実だと思い定めてしまっているようだった。
だから、こちらの方が悪夢なのだ。
現実から逃れたいと言う自傷行為は行わなくなっていった。
それは彼女が・・・もう戻れない路を戻れないところまで行き詰めてしまったことを表していた。
最近では夢幻状態が続くので、少し長い時間眠らせてやり、朦朧としているときに体を清め、何事もなかったかのように部屋を整えてやれば、その時の恐怖を忘れてしまう。
そしてまた、ミシェルを部屋に入れて・・・シャルルの名前を呼びながら、同じ事を繰り返す。

「あの女はね」
ミシェルは微笑んだ。

「最後の瞬間になって・・・ようやく、気がつく。
組み敷かれてねじ伏せられてなお、シャルル正気に戻って、と言う。
シャルルが本当に愛している人を悲しませないで、と言う。
・・・・どちらが正気でないのかわかっていない。

そして、最後に・・・彼女はオレを迎え入れながら、ミシェルかと尋ねる。
そしてほっとしたような顔をするんだ。
シャルルはそんなことをしないと固く信じて疑わない。

シャルルでない男に抱かれて安堵する。
・・・愚かな女だ。本当に、愚かだ。

その時になって、ようやく気がつく。
だからオレは優しく・・この上なく大事に思いながら言う。
オレはシャルルだ、と」

ミシェルはくすり、と笑い声を漏らした。
彼はシャルルでないことを誰かに認めてもらいたくてこの館にやって来るのに。
狂乱の極みを味わう一瞬しか、彼の本当の名前を呼ばない人と肌を合わせてなお、彼は自らを激しく傷つける。
そして同じように彼女を傷つけて・・・夢の世界に追いやる。
しかし彼女はそうされることで安堵の楽園に行くことができる。
心が穏やかな世界に再び脚を踏み入れる。

煙草を吸い終わって、彼はベッドから身を起こした。
伸ばした腕の美しい筋肉の収縮が見えた。
経年してなお、彼の体は整えられて均整が取れていた。

床には、乱れた衣類が躍っていた

[illegible]。
彼が、順序も、彼女の許可もなく・・・身を捩る彼女とともに、シーツの海に沈んだことを表していた。
◆07

ミシェルが何に怒っているのか、ルイは口に出すことはしなかった。
誇り高いミシェル・ドゥ･アルディは、ルイにそれを許可しない。

「いつまでこんなことを続けるつもり？」
ルイはそう言った。
部屋の入り口で立ったままだったので、彼は逆光を浴びて金の髪が耀いていた。
遮光された居室からは晄が漏れてこないはずなのに・・・彼は耀いていたので、眩しいよ、ルイ、とミシェルは呟いた。

「さぁね。オレが飽きるまで」
彼の行為を誰も咎めることができない。
彼はこれを診察及び治療のためのカウンセリングだと言い張っているらしい。
あのシャルルでさえ・・・・・ミシェルが、ジルの健康管理を事細かに記載したレポートと、無幻症への観察記録を出す度に、柳眉を顰めて「彼女を大事にしてやってくれ」と小さく言うだけだった。

弱い男だ。
彼は強い当主であるはずなのに、特別な者に対してはとても・・・そう、とても弱い。

「ジルはヒカルの拠り所だ。いつか使える駒だ」
ルイは言葉を選んで言った。
「ヒカルを籠絡するための駒・・ね。確かにそれも可能だが、使えるのは一度きりだぞ、ルイ」
ミシェルが忠告した。ルイは黙ったままだった。

ミシェルが裸体のまま、彼の前に立った。
「シャワーを浴びてくる」
ミシェルからは煙草の香りがした。

彼の様子に、ミシェルが苦笑する。
「ルイ、お前が怒ることではないだろう」
ミシェルは乱れた髪を両手でかき上げた。
「ミシェルが怒ることでもないね」
そう言うと、ぴくりと彼は動きを止めた。
青灰色の酷薄そうな瞳が、同じ色を持ったルイに向けられた。

「ジルが思い通りにならないことを憤っても仕方がない」
ジルには家族が居るが、もう誰も彼女に会いに来なかった。
制限されていることもあったが、アルディ家の縁の者はみな・・・アルディ家を畏れている。
彼らがどんな手段を使っても、言ったとおりに実行することを長い歴史で、遺伝子に組み込まれて刻まれて教え込まれているから。
その中で、同じような容姿を持つ彼らだけが・・その流れに逆らうことのできる因子を身につけて生まれてきたように思える。
だから、シャルルは自らと同じ容姿を持つ者を排除しない。
いつかに利用できると思っているのだろうが、同じようにその因子を持つ者によって利用されることもあるということを、シャルルは理解しながらも飼っているのだと思った。

自分たちは同じ品種だ。
創られた薔薇だ。
あの温室の品種改良された苗と同じように、観察されて改良されて、駄目なら廃棄処分されるだけだった。

ヒカルは知らない。ここで行われていることも。ここにジルが居ることも。
彼女が毎朝、最高の状態の薔薇を摘み取る都度。
彼の命が摘まれていくような気がした。
薔薇の一族の息の根を、ヒカルが摘んでいるような気がした。
それを受け止めるシャルルは・・自らも含めたこの一族を、根絶やしにしたいのかとさえ思う。

あの男は弱いが手強い。
この一族を滅亡させるときには、徹底的にやるだろう。
何もかもを消滅させてそれを見届けて、あの男は去るに違いない。確信できた。
それを・・・時期が到来するのを待っているかのように静かに時を過ごしているシャルルと、助勢しないがジルに渇望を投げ続けるミシェルとどちらが・・・どちらが斃れるのだろう。
彼にすべてを教えたミシェルは、巨大で偉大だった。
しかし愛はやらないと公言した。彼は実験材料だったから。
ジルと同じように、彼が事細かに・・・ルイを観察した記録をつけていることは知っていた。
彼の生育状況、知能指数、適応能力、基礎代謝・・・・すべてにおいて細かくデータ値を計測している。

彼にとってはジルもルイも同じなのだ。
単なるデータ収集の対象なのだ。
それについて何かを思ったり感じたりすることはなかった。
そういうものだと思っているから。
◆08

「彼女に服を届けに来ただけだから」
ルイはそう言った。
夏の服を彼女に届ける役目はルイが担うことになった。
彼女は決してそれを身につけることはないのに。
大事そうにクローゼットに積み上げる箱は・・もう相当数になっている。
後始末はごめんだよ、と付け加えようと思ったが、やめた。

心をすべて失い、泣いて、それでも涙が涸れることもなく悲しい夢を見続ける・・・ひとり孤独な夢の世界を望んでいるジルのことを思った。
共感はしない。
肯定はしない。
この場所に逃げ込む・・・ミシェルやジルの本当の目的などは彼に影響しない。

「ヒカルに言うつもりはないが、どこかで漏れる畏れがある。
芽は摘み取っておけ」
ミシェルが短く指示をした。

シャルルでさえこのことを秘匿しているのだから、その可能性は低い。
しかしゼロではない。
ヒカルはどんどんあの人に酷似していく。
彼女の面立ちを見て、誰かが接触してくるところまでは監視できない。
彼女は彼らの管理が届かない日本人学校に通っている。
シャルルの思惑がはっきりしない。
手元に置いておくと言う一方で、彼女をアルディの監視から逃すような行動に出る。

シャルルはかつての友人達との接触に消極的だった。
思い出すことを畏れているようだ。

ジルとは逆だった。
シャルルは、一定期間しか発症しない。
そうでない間は・・・非常に理性的で冷酷だ。
それでいてなお、ヒカルが関与すると我を忘れる。

シャルルが彼を激しく殴打したときには、ここにはしばらく来ることができないほど負傷してしまった。その間、ミシェルの来訪があり・・・ジルが飛び降りて死のうとした。
それが最後の自殺未遂だった。

ミシェルがジルをどうしようと、ルイには憐愍の情は湧かない。
しかし・・・ヒカルにこの凶行にルイが荷担しているということを知らせようとするのなら、話は別だ。
ヒカル。
茶色の瞳の茶色の髪の少女を思い浮かべた。
彼が欲しいのはヒカルの心だ。
彼女を捕らえて・・・そして離しはしない。
そして苦痛に歪むシャルルの顔を見て勝利の美酒を味わいたい。

いや・・心はなくても良い。
体が在れば良い。

彼女が逃げられないようにして・・・彼女がもたらす巨万の富への可能姓を開こうと言えば、一族は喜んでルイに手を貸すだろう。
彼にも同じ血が流れている。
あの薔薇の一族は・・定めたことは必ず実行する。
それなのに、なぜそうできないのか。
彼には継承者としての執行権はあるが、発言権がない。
親族会での投票権がない。
彼は成人に達してなお、成人したら得る権利を有することができない。
まだあと数年はそれを保有することができない。
アルディ家の籍に入るまでに時間がかかったから。
数年の空白期間がある。
それをシャルルが突いて出た。
彼らの権利発生は、その籍に入ってから何年・・・・と細かく決められている。
婚姻関係によって、他家がすぐさま方針方策に口出しをしないようにするためだ。
だから、長いことアルディ家の正当なる直系男子だと扱われなかったミシェルもつい最近になってようやくすべての権利を得ることになった。
いくつかは放棄させられたが。

「ルイ。・・・お前は端倪者だから」
ミシェルはふと、彼に向かってそう言った。
思考の波が彼を押し寄せ始めて、考え事に耽りそうになったルイにミシェルは冷笑を浮かべた。
彼はルイを端倪者・・・・物事の成り行きを推し量る者だと言う。
「オレは傍観しているだけでは足りないよ、ミシェル」
ルイはそう言って笑った。
同じように冷たい微笑みだった。
「・・・・どこでもそういう状態になるのは、良くないな、ルイ」
ミシェルは忠告した。
◆09

シャワーを浴びてくる、とミシェルは言った。
「目が醒めなくてね」
日が高くならないと彼らは目覚めない。
脳が充分な睡眠を欲しているからだ。
彼らの脳細胞は他の者のそれよりも何倍も活動的だ。

この状況で・・・彼は眠りについたのだろうか。

彼女を抱きながら・・僅かな睡眠を求めるためにミシェルはこの館を訪れるのか。

この館は、幼いごく一時期に、本当に短い期間だけ、ミシェルが過ごした場所でもある。
ミシェルとミシェルの母と。
決して穏やかな日々だけではない時間を過ごした。
シャルルが来訪したときには彼は隠れていなければならなかった。
なぜなら、彼女の母親は狂乱の果てに亡くなったから。
最後はミシェルがわからなかった。
困惑してそのまま・・・夢の世界に行ってしまった。

今、その母と同じように夢幻の世界に陥った彼の従妹をここで保護しながら・・彼は何を思って館の中を歩くのだろうか。
ジルに肌を重ねて、それでも彼ではない男の名前を呼び、そうでなく、最後の極みの時にだけミシェルと呼ぶ彼女にこうして・・・こうして、今も彼は会いに来る。

ルイは寝室に残された。
乱れた寝室には、ミシェルの煙草の煙だけが香り強く残っていた。彼らの温度も立ち上って消えていく。
彼らの・・・悲しい交合も消えていく。
ジルがそれを幻だと思って忘れてしまうから。
彼をミシェルと呼ぶ者は・・・幻になって消えていく。
夢幻の世界に逃げ込んでしまう。
それをミシェルは呼び止めることもなく・・・また、繰り返す。
奪い、攫い、そして手中にするのにまた腕を解いて彼女を解放してしまう。
すべてを奪うことでしか与えることができない。
苦しみを奪い去ることで彼女に残されたのは安らぎなどではない。
でも・・・苦しみから解放される。
彼がその罪を背負っている限り。これは繰り返される。
ミシェルは贖罪を続ける。彼が犯した罪も、そうでない罪も一緒にして・・・あえて背負っている。

彼の母に名前を呼ばれなくても。
彼が胸に抱く女に名前を呼ばれなくても。
ほんの一瞬、彼を彼だと認識するその言葉を聞くために。
彼は鬼人となって、彼女との淫に耽る。

灰皿から煙が上っている。
浄化の煙のように、白く棚引いていた。
ミシェル・・・貴方は、どこに行き着こうとしているのか。
それを見極めろと言う。彼はルイにすべてを教える者であるのに。
肝心なことは彼に教えない。
彼の胸の内などは聞いても仕方がない。
それでも・・・それでも、知ったら。何かが変わるのだろうか。

ヒカルを求めるこの胸の燻りは、ミシェルがジルに・・・願いにも祈りにも似た気持ちでミシェルと名前を最初から呼ぶことを願っている気持ちと、同じ性質のものなのだろうか。

ルイは青灰色の瞳を少し見開いた。
灰皿の脇に光るそれを見つけて・・・少しだけ声を漏らす。
ミシェル。
彼は叔父の名前を呼んだ。
「出したままは良くない・・・ミシェル」
「ああ、使用済みだから。廃棄してくれ」
彼は何でもないことのように言った。

ルイの脇を擦り抜けて・・彼はそのまま優雅にバスルームに入って行った。
一糸纏わぬ美神の裸体が空気に乗りながら軽やかに音を立てずに移動していく。
薄暗くても間取りを良く承知していたので、彼はあまり苦もなく様々な家具を泳ぎ擦り抜けて行った。
居間を横切り・・・そして広く湯を張ることのできるバスルームに入る。
慣れた仕草だった。
寝室の脇に設置されているシャワールームでは狭いと言っていた。
◆10

ルイはそれをつまんで・・・同じように研究所のラベルが貼られた使用済みのアンプルを持ち上げた。
薄暗いので、少し目を細めて焦点を合わせる。
ラベルの名前は書かれていなかった。
しかし、ミシェルが持ち込んだものであることは確かだった。

ルイは・・・ルイは、なぜ、ミシェルが今日に限って、来邸するルイに先んじてやって来たのかを知った。
彼は、ルイの来邸の予定を知っていた。
そして・・・彼女に治療を施した。
その効果は出ているはずだった。
なぜなら、彼女はミシェルとルイを同時に見ても、狂乱して暴れなかった。

彼が密かに・・・彼女の病を治療するかもしくは進行を遅らせるために、ミシェルが考案した試験薬を試そうとしていることを知った。
なぜ、シャルルがミシェルの来訪を禁じないのかも知った。
彼らは試しているのだ。
ジルが戻れる路を模索していてそれはかなり具体的な治療結果を出しているらしい。
そしてそれはきっと・・ヒカル・クロスの生体細胞を使ったものなのだろう。
彼女は細胞提供をしない。

事情を知らないから。
だからこっそり・・・健康診断だと言って、年に一度だけ採取して精製された幹細胞を使って、ジルに遺伝子治療をしているのだと確信した。
投薬回数が極端に少ないから・・・だからああして効果の持続期間をミシェルが計測し、記録しているのだ。
ヒカルの監護権はシャルルにあるが、彼女の肉体を使用する権限はなく、それはさすがにクロス家に申し入れするには時期尚早だと思っているのだろう。
シャルルなら考えそうなことだった。

乱れたベッドの脇に・・・灰皿の脇に腰椎注射用のキットがおいてあった。
先ほどのチェアの下に隠されていたキットは、2つあった。
そのうちの一つだった。
ミシェルは、合歓を楽しむだけが理由ではないと言った。
もうひとつの理由。

・・・何も情炎の行為の後に、することではないように思うが。

ルイは少しばかり呆れたようにアンプルを灰皿に投げ込んだ。
僅かに残った治療薬の液体が、煙草の最後の焔を消した。
消炎の音がした。

それでも、彼は一縷の望みをかけて彼女に投薬するのかもしれない。
数少ない投薬回数だから、失敗はできない。
通常の治療ではないから、彼女はウィと言わないし・・・一切の治療を公式に否定している。
だからこそ。
こうして非公式に親族に知られないように投薬している。

遠くで水音が聞こえる。
ミシェルは睡眠中は決して人を寄せ付けない。
深く眠るからという理由もあるが、誰かの視線があると眠れないという。僅かな晄も眩しいと言う。
完全なる暗闇の中で・・・こうして遮音された空間でなければ、眠る事ができない。
それなのに。
彼はここにこうしてやって来る。
ジルの息吹と体温を頼りに、暗い闇からやって来る。

彼の晄は・・・・一体、どこにあるのだろう。

端倪者。

物事の成り行きを見守る者、か。
ルイは微笑んだ。
そして、テーブルの脇に置かれたシガレットケースを取り出して、ミシェルの煙草を一本抜いて口にくわえた。
ここは禁煙であるが・・・今日は良いだろう。
ジルは当分この部屋には戻ってこられない。

良いね、叔父上。

彼は煙草に火をつけながら、微笑んだ。
ミシェルと良く似た動作で顎をあげて、天井に向かって・・・煙を吐き出した。
肺に急激に吸い込んだので、少し眩暈にも似た感覚に襲われる。

彼がどうやってあの仕掛けからそれを取り出したのかは問わない。
しかし・・・ミシェルはルイを常に観察している。
ルイの施したチェアの仕掛けなどは、ミシェルには意味がない。
同じ血が流れているから、特段に感慨深く思うこともない。

先頃、彼がロシェル家に、彼女の身柄を保護監督する権利を主張する文書を発行した。
それが何を意味するのか、わからないはずはない。
非公式ではあるが、ジルを・・・彼女をミシェルは妻に迎え入れたいと申し出たのだ。
彼は婚姻権を放棄しているので他家に養子に出るか・・分籍をシャルルが認めなければこの家から出ることが赦されないし婚姻もできない。
それが交換条件で、彼はアルディ姓を名乗っているのだから。
そしてその文書が効力を発揮すれば・・・ミシェルは本格的に無幻症の治療薬開発に身を乗り出すだろう。
この謎を解明できれば・・・彼は巨万の富を得る。
いや、アルディ家が、だ。
ヒカルの獲得に誰もが躍起になる。
彼女は稀なる宝玉を生まれながらに持って生まれた・・・・彼と同じリッチ・ジーンでありながら・・・彼女はいつも晄耀く。
灼けつくほどの強さでもって彼らを照りつける。

シャルルは彼らを滅する純化の晄を手にしている。それが奪われることになるかもしれないという可能性を考えない。
良いだろう・・・獣王の象徴でもあるすべてを焼き尽くす三籟の焔が灯る錫杖を、オレが奪って見せよう。

ーーーー果たして。
ミシェルがどう出るのか。
今、彼が赦されている業界進出だけでは飽き足りないといって、野心を見せようものなら、途端に制裁がと圧力が加わるだろう。

彼は生き抜くと言った。
それなら・・・それを端倪しよう。
物事の初めと終わりを推し量る者として。その称号を己の称号としてひとつ増やすことにしよう。

星辰の子は微笑んだ。
冷たいけれど、この上なく美しい笑みを残したまま、煙草をくわえた。

しばらくここを訪れることはないと思った。
次に訪れるときは・・・ヒカル・クロスを連れてきたときだ。
ジルの前で、シャルルとマリナと呼ばれて、ヒカルが酷く動揺する場面を想像すると・・・激しく胸が高鳴った。
昂揚なのだろうか。
それとも危懼なのだろうか。

端倪するだけでは済まされない、とルイはもう一度低く呟いた。
ヒカルの争奪に、遠くで見つめるだけでは彼の狂気はおさまらない。
シャルルが生きながら死んでいる状態に陥り続けることが彼の願いだった。
ジル・ド・ラ・ロシェルとミシェル・ドゥ･アルディの関係については、これ以上詮索することはやめることにした。

彼ら・・・薔薇の祖種達の慨世について、彼は興味がなかった。
例え、彼を生み出した者だと知っても。

ルイには愛が与えられない。この薔薇の一族は、誰かひとりだけを定めて愛を注ぐことしかできない。
ジルも。ミシェルも。シャルルもそうだ。
・・・・そしてルイ・ドゥ・アルディも。
その愛を知らないから。
ルイは常に彼らの一歩先を行くことができる。
新しい種として、薔薇の家に君臨するために創られた。
だから、そうするまでだ。

彼は部屋を出た。
ミシェルがバスルームから戻る前に消えるつもりだ。
ーーー用事は済ませた。

完全防音の部屋から、来た時と同じように空気が流れて風が生じ・・・・
彼の見事な金髪をふわりと揺らした。

どういうわけか・・・ヒカル・クロスの顔を思い出した。
なぜだろう。

わからなかった。
でも、彼が意図していないのに・・・微笑みが零れた。
・・・この世の果てからやって来た星辰の子は、天使のような綺麗な微笑みを浮かべた。

（FIN）

夢寐にて春夢

夢寐：むび。夢を見ている間。もしくは儚い瞬間の例え。
春夢：極めて儚く消える事の例え。短い春の夜に見る夢の意から。

ヒカル・クロスが、アルディ邸から姿を消した。
ルイ・ドゥ・アルディが外出から戻って、別棟に戻ろうとしていたときのことだった。
館の使用人達が、表情を厳しくして歩き回っている姿を見て、ルイは柳眉を僅かに顰めた。
この家の使用人達は皆、静かに行動することを義務づけられている。
この館の主が、騒がしいことを好まないからだ。
元々が気むずかしい性質であったのに加えて、最近迎えた「騒がしい存在」の気配が消えてしまうので、その存在以外は静かに気配を圧殺して過ごせと言われている。
ヒカルよりずっと近い存在であるはずのルイでさえも例外ではなかった。

だから彼はますます別邸に籠もるようになり、今日も、外出先からそのまま本邸に顔も出さずに戻ろうとしている矢先に、この場面に遭遇したのだ。

今日は、教育係のジルも、当主のシャルルも不在にしている日だった。
ルイはまだ許可されていないので出席できないのだが、彼らは親族会に出席している。
彼の教育係であるミシェルからは逐一報告を受けてはいたが、それでも・・・自分はまだ、シャルルの後継として遠く及ばないと宣言されているようで、気鬱になった。
出席して発言をするに経験が足りないとされているが、彼の生活年齢は影響していない。

ルイは彼の父と同じように、年齢を越えてこの国の教育システムを凌駕した。
方々に短期で留学することはあったが、在学期間中にすべてやるべき論文は提出してしまい、さっさと帰国してしまう。
出席日数や単位取得といった、平々凡々な学生が頭を悩ませる問題は、彼には影響しなかった。
どこか・・・生き急ぐというか時間を進めたがる様子を、彼の教育係であり叔父であるミシェルが冷笑したことがあった。
「時間に急ぐ者は時間に取り残される」
その笑みは美しく、ルイに非常に良く似ていたが、どこか、ミシェル自身への嘲りにも似ていた。

いつもなら優雅に・・決して複数人が廊下をすれ違わないように使用人のシフトが細かく組まれたアルディ邸が、騒がしかった。
別棟への渡り廊下を歩く年配の使用人に、彼は声をかけた。
そして、ヒカル・クロスが寝室から姿を消したという事態を知った。

どこまでも苛つく存在だ。

彼は舌打ちをした。

ルイに監督責任があるわけではないが、彼と彼女だけしかこの館にいなければ、必然的にルイの指導不足を疑われるのは必至だった。
シャルルはそういったところは厳しい。
ルイがこの家のことで把握している事実に対して、何も対処しなかったと聞いたら、また・・・親族会への出席許可が延期されてしまう。

おそらく、今日の親族会は深夜にまで及ぶことだろう。
ヒカル・クロスの処遇と・・・これからのアルディ家の運営指針について議事が挙がっていたのは知っていた。
その間、ルイが知らぬ存ぜぬで、シャルルが唯一愛でる永遠の晄を、誘拐や事故などで損なうことをしたら、彼は・・・ルイの存在を一瞬で滅するだろう。

まだ、その時期ではなかった。
ルイが反撃をする時期ではなかった。

やれやれ。

彼は大袈裟に溜め息をついた。

「わかった。僕も探そう」
彼がそう言ったので、年配の使用人はあからさまに安堵の表情を浮かべた。

行け、と言って、彼はひとりになった。

そうは言っても、この家には監視カメラや赤外線スコープが網羅されているから、監視棟にでも行って、過去1時間以内の記録ビデオを眺めれば、彼女の居所はたちどころにわかってしまうだろう。

青灰色の瞳を、物憂げに薔薇園の向こう側の庭園に遣った。
外は春の陽気で・・・風に乗って、桜の花弁が渡り廊下にいくつか落ちていた。

彼は桜があまり好きではない。

桜を国花とする国の人を、運命の人と定めて、未だに愛し続ける彼の父を理解したくないから。
桜の国からやってきた、愛玩人形としか言い様のない、無邪気で無垢な存在であることだけしか取り柄のない・・・永遠の晄という名前の幼女の存在を認めたくないから。

親日家で有名なこの一族の一員であるから、日本文化への知識は習得したが・・・しかしその知識はそれ以上でもそれ以下でもなかった。
単なる事実確認だった。

彼にとっては。

第二のふるさとだと言って桜の国を懐かしむシャルルは単に・・・廃れゆく薔薇の種が、同じばら科の植物を恋しがっているだけだとしか思えなかった。

桜になれるわけでもないのに。

彼はひとり、冷笑した。

ルイは夜になり、とうにヒカルが就寝する時間であるのに戻ってこないという事実を把握すると、行き先を変更した。
渡り廊下からはずれて、薔薇園に通じる中庭に出た。
外に出るときに硝子扉を通ったが、その時に夜風が彼にあたり、見事な金髪が後ろに凪いだ。

彼は星辰の子と呼ばれている。
今、アルディ邸から見える夜空のように、彼の周りに星々が集うという称賛が込められている。
誰も集わないのに。
彼を中心としては昊（そら）は回らないのに。

・・・まだ、その時ではない。

彼は自分に言い聞かせた。

募る孤独はいつか快美な慨嘆になるだろう。

それで、良い。

自分は新たな種になるのだから。

ヒカル・クロスの居る場所は想像がついた。
今は桜の季節で、昨日の晩餐の際に、桜の満開時期はまだか、としきりにシャルルに言っていたのを記憶していたから。
それにルイが面倒くさそうに、明日には満開になり、そして夜には風が強く吹く気圧配置だから、散ってしまうだろう、と無情に告げたことを思い返した。

これほどまでに使用人が探索しているのに、誰も気がつかない場所といったら限られていた。
「それ」は、彼の住まう別棟からほど近い、小さな小高い丘に植わっている桜の傍に居ると推測した。

アルディ邸で咲き乱れる、桜の古木に彼は辿り着いた。
彼女がそこに居るのはすぐにわかった。
小高い丘を登り切る前から・・・僅かではあるけれど、風に乗って、こどもがすすり泣く声が聞こえたのである。
木の幹の、ちょうどくぼんだ場所に彼女は居た。
監視カメラが届かない死角だったので、誰も気がつかなかったらしい。
今度からは集音マイクも設置しなければならない、とルイは内心考えていた。

幼女がすすり泣くというのは非常に興味深い、とルイは思った。
ヒカルは幼いが、なかなか涙を流さないこどもだと聞いていた。
彼もヒカルを幼いこどもと言うには憚られる年齢であり、彼女と年齢が近いのに。
ルイは、ヒカルの涙声が、とても・・・とても異質なものに思えた。
まるで実験動物の仔猫のような、そんな啼き声だった。

「ヒカル・クロス」
彼は無表情に静かに声をかけた。
啼き声が止んだ。

外出後に着替えも湯浴みもしていない。
非常に・・ルイ・ドゥ・アルディは不機嫌だった。

どうしてこんなに大きな啼き声が、彼らには届かないのだろう。
ここに居ると、ルイはすぐさまわかったのに。
ヒカルを彼より長い時間見つめ続けて居る、ルイよりヒカルをよく知っているはずの、使用人達に少しだけ苛ついた。

「・・・・シャルルが居ないときに、こうしてオレを困らせる貴女を、ここで蹴り殺しても良いのであれば、そのままそこで泣いていると良いよ」
彼はそう言った。
ゆっくり、丁寧に言ったから、彼女には理解できただろう。
息を大きく吸って、しゃくり上げる呼吸音が聞こえてくる。

「シャルルには言っちゃだめ」
幼い、舌足らずな声が戻って来た。

ルイは彼の細い腰に手を当てた。
桜の木の幹の下で、密かに泣き濡れるこどもに言ってやった。

「オレは暇じゃない。この丘まで昇ってきたヒカルの気力は褒めて遣っても良いが、このまま、ここで親を焦がれて泣くヒカルが、凍死しても、オレは責められる。
ヒカルが何をしても、その失態はオレに責がかかるのだから・・・大人しく本邸に戻れ」
彼は強い口調でそう言った。

彼女の姿はこちら側からは見えない。でも、きっと、ひどく・・涙で頬を濡らしていることだろう。
桜の花弁が狂ったように落ちては積もるそんな櫻の陵で。
ひとり、ヒカルは涙を流していた。

彼女の両親が航空機事故で行方がわからなくなったのは、春が終わって夏の時期だった。
彼女が思い起こすことができる、両親との最後の記憶は、春の桜の季節だったのかもしれない。
夏の記憶はまだ辛すぎるのかもしれない。
「天使さんが迎えに来た」
彼女は言った。

ルイは苦笑した。
彼は天使などではない。
ヒカルと・・ヒカルを愛でるシャルルがどこまでも堕ちて地獄の業火に灼かれれば良いと思う、死の天使であるのに。

桜の花弁が、彼の肩にも落ちた。
半透明の・・・薄い色あいの花が散っては落ちる。
落ちては・・・命を捧げるかのように風に舞ってまた落ちる。

ざわめきが・・・葉のざわめきが、彼とヒカルを包んだ。
見上げれば、辺りは紅色の天井だった。

「おとうさん・・おかあさん・・・はやく・・・はやくあいたい」
彼女は言った。
彼女は繰り返しそう言った。
声だけの存在は、酷く頼りなさそうだった。

彼を天使と言ったのに。
彼の姿をまだ見ていないのに。

声音だけで、ヒカルはルイを天使だと言った。

彼は少し息を顰めて、意識して気配を殺した。
ルイの所作は普段非常に静かであるので、気配がほとんど感じられないはずなのに。
彼は、あえて、自分の気配を押さえて、ヒカルを探し当てた。

そうしないと、小さな生きものの息吹が感じられないほど・・・桜が狂い落ちしているから。

そこで、ルイはようやく木の幹を回り込んで、シャルルがこよなく愛でる小さな晄に行き会った。
彼女は・・・小さく蹲って、震えていた。

夜露にあたって、小さな躰を鳴動させていた。
薔薇色の頬は青白くなって冷え切っていた。
そして・・・涙が浮かんでは消えて、彼女の頬から顎を伝って・・・座り込んでいる地面に墜ちて、土の色を濃くさせていた。
そんなヒカルの上に・・・浄化の花弁が次から次へと落ちて、彼女の躰は桜の花弁に包まれていた。

動きたくても、寒さで動けなくなったらしい。
そして、薄暗くなって・・・彼女は小さいので、桜の発光だけしか見えないから。
誰に教えられたのだろうか。
「わからなくなったら動くな」という教え通りに、彼女はその場に立ち竦んでいたのだと知った。

「こんな場所で隠れていて、誰かが見つけてくれると思い上がっていたのかな」
ルイは意地悪く言った。
彼女にわかるように、一句一句短くゆっくり言ってやった。

ヒカルが、また、涙を落とした。

「天使さん。ヒカルを・・・連れていってください」
「どこへ？」
天使と呼ばれた星辰の子は、彼女の前に立って、青灰色の瞳で冷たく見下ろし、意地悪く言った。
木の幹で小さく蹲っていたヒカルは、彼を見上げた。天使さんだ、ともう一度言った。

「しゃ・・・シャルルや、みんなの困らないところ」
「そこはどこ？」
ルイは見下ろしたまま、小さな生きものに尋ね返した。

柔らかな茶色のくせの強い髪に、茶色の瞳をした小さな人は、彼を見上げて、一生懸命という言葉に相応しい願い事を言った。
「ピンクの花が咲くと。おかあさんは願いごとが　かなうって言ったから。・・・ヒカルはぴんくの花が咲いたら。おねがいしようとおもっていた」
「だから、なにを？」
彼女は青ざめた顔で言った。
「黄色の髪の天使さんが、笑ってくれますように」
ヒカルはそこで、黄色の髪の天使に微笑んだ。
「いつも泣いているから。だからおかあさんとおとうさんに御願いしたの」
「泣いていたのに、都合の良いことを言うね」
彼は嘲笑した。
でも、腰を下ろして・・・今度は、見下ろさずに、彼女に顔を近くして言った。

なぜなのだろう。
彼女を見下ろすことには問題がなかったはずだ。
それなのに・・・膝を落として、ヒカルと距離を詰めてしまった。
ルイは自分の意図しない行動に驚愕していた。

ヒカル・クロスがそうさせたとは思って居ない。
ルイの行動を支配するのはルイ・ドゥ・アルディだけである。
それなのに。

自分が・・・そう動いてしまったことに驚愕していた。
ヒカルの言葉や態度の何に・・・彼が反応したのか、分析仕切れていなかった。

「黄色の天使さんは・・・いつも泣いているから。れもん色の天使さんより泣いているから。だから・・・だから、お祈りしていたの」
そうしたら、きいろの天使が来た、と彼女は言った。

自分のことを言われているとわかった。

白金の髪のシャルルをレモン色の天使と呼び、ヒカルは・・・・
黄色の天使と言って、黄金髪のルイ・ドゥ・アルディを天使と呼んだ。

彼はぎゅっと唇を結んだ。
拳を握って・・・・目の前の小さな天使に囁いた。

「ヒカルの天使が怒るから。帰ろう」
帰る・・・

ヒカルに帰るところはない。
彼女はシャルルが引き取ることにより、祖国を捨てる結果になり・・・・そしてシャルルは彼女を望んで・・・自分は今、こうしてヒカル・クロスの存在を疎んじている。

ルイにも帰る場所がない。
ルイには帰る路がない。

それなのに。
彼は、ヒカルに手を伸ばした。

そうしなければ、このままここで泣き崩れるヒカルが失調するのは、明らかだった。
それを知っていながら、ルイが放置したことをシャルルは赦さない。
ルイは虚偽の申告はできなかった。

偽りの空間で生まれたからこそ。
自分は偽ることはできないと思っていた。

だからこそ。

この・・・目の前の小さな異邦人が、彼のこれからを左右する重要な人物であることも理解していたし、そして彼自身が・・・冷淡に扱うことができないことも、わかっていた。
シャルル・ドゥ・アルディが、どうして、愛でる存在をひとりと定めるのかも、理由は知っていた。
彼の愛は、狂っているから。

ひとりの人と定めて、それを定めてしまったら、どんな理由でも、そのひとりだけを見つめ続けるから。
ルイの「たったひとり」は、まだ存在しない。

彼の教育係である叔父も、彼の遺伝学上の父である一族の当主も・・彼を滅ぼすことができない。

彼は。

彼を滅することができる、たったひとりを求めている。

「ヒカル。花見は終わりだ。帰る」
帰ろう、とは言わなかった。
帰ると言って・・・・ルイは、まだ少年の華奢な腕を伸ばして、ヒカルを抱え上げた。
フェンシングと乗馬で鍛えているはずなのに、ヒカルの重みを感じて、青灰色の瞳を少しだけ細めた。

「ヒカル。・・・貴女はもう少し思慮深くあってくれよ」
「てんしさんがむかえにきた」
ヒカルはそう言って微笑んだ。
ルイの言葉は理解できていなかった。
彼女は・・まだ幼すぎた。

この、桜の夜の記憶は忘れてしまうのだろう。
シャルルと一緒に過ごす記憶の波に埋もれてしまうのだろう。

それでも。

ルイは、彼女を抱き上げながら、言った。

「記憶に刻め、ヒカル。僕は・・・オレは貴女を・・・・・貴女を業火に灼くであろうから。オレは天使ではない。ヒカルを楽園から連れ出すから、そのつもりで」

天使さん、と言って、ヒカルは微笑んだ。
この幼い来訪者は、ルイとシャルルを判別出来ているのだろうか。

そして・・・シャルルが決して、ヒカルを愛さないであろうと苦悶することも・・
ルイが彼女に拘ることも、小さな晄はわかっているようだった。

春の夜桜の・・・・散り落ちるアルディ邸の中で。
ヒカルは、体温を求めるかのように、ルイに抱きついた。
「あったかい・・・てんしさんはあたたかい」
そう言った。
ルイは唇の端を持ち上げて、笑った。
彼女の小さな躰を抱き上げた。
「シャルル・・・オレはシャルルからすべてを奪う。
この晄も貰い受けよう」

ルイはそう言って・・・桜の花の降りしきる古木の下で、永遠の晄を抱き受けながら、そう誓った。
上を見上げて、落ちる花弁に抗いながら、そう言った。

「シャルルの苦悶が欲しい。この・・・桜の様な命の煌めきを持つ人の魂が欲しい。
その時こそ・・・薔薇の一族であるのに桜に惑う貴方を打ち倒すことができる」

ルイはそう言って、冷たく微笑んだ。

何か・・彼の中で、大きく蠢く気配を感じた。

（ＦＩＮ）

白雨　Louis

■01

彼が部屋に入ると、突然の俄雨が、大きく張り出したルイ・ドゥ・アルディのセーフハウスの上の屋根を激しく打つ音が彼の鼓膜を刺激した。
ルイ・ドゥ・アルディは部屋に入るなり、開け放されたバルコニーの窓から漏れる湿った風に、妖麗な顔を僅かに曇らせた。
彼は以前に、不幸な事故に遭遇し、鼓膜損傷や肋骨骨折や・・・多くの損傷箇所について数え上げればきりがないほどの箇所に致命的とも言えるような損傷を受け、そして完治したとされる今でも・・・気圧や気温の僅かな変化に対して敏感に反応するほどに創痍を十二分に身に受けた過去がある。
それらについて解決したのは、彼のファム・ファタルとでも言うべき、ある希なる人からの細胞提供によるものだったのだが、彼はそれに関してはコメントすることは差し控えていた。
もともと寡黙な人物であったが、あの事故以来、ますます無口になった。
それは彼が話す必要がなくなったからだ。

・・・彼の高い知能では、同じ速度で思考する人物は限られている。

しかしそれを凌駕してなお、誰かと言葉を越えて・・・彼ではない誰かと共に過ごすことについて意味と理由を見いだした彼は、その時から・・・これまでの籬（まがき）から解放された。

あの墜落事故があった場所からそれほど遠くない、あの海の見える高台の上に、彼のセーフハウスはそびえ立つ。
広大な敷地を持つ。
彼の生家でもあるパリ１６区のアルディ邸に匹敵する広さだ。
それでいて、どこか・・・日本の邸宅を思わせるような瀟灑な造りであった。
親日家で有名なアルディ家当主の息子として長らく生きてきたルイが自ら設計した。
大変にあの国の影響を受けている設計だった。
それでいて、幾重にも張り巡らされたセキュリティを越えていかなければ、中央には到達できない。
そして彼の永遠の恋人を彼が招き入れるために、恋人の生国の雰囲気に近いものにした、というのがもっぱらの噂だった。

ルイは部屋に入ると、オートロックであり完全に遮音される扉がかちりと小さな音を立てて施錠されることを知ると、腕に嵌めていた時計を無造作に外して近くのテーブルに放り投げた。

今はもう、アルディ邸にはほとんど戻っていない。

暗く陰惨たつあの家で、唯一光り輝く・・・たいまつにも似た人を連れ出してしまったのは、他ならないルイ・ドゥ・アルディだった。

彼は見事な金髪を持つので、星辰の子と呼ばれている。
そして、彼のファム・ファタルは永遠の晄という名前を持つ。

星と光が邂逅するとき・・・そこには一体、何が生まれて何が滅するのだろうか。

彼はざわめく音を伴って、激しく降り落ちる滴雨に眉を顰めた。
湿気を伴う風が、彼の居室に吹き込んでくる。
居室、と言っても、ほとんど使用しなかった。
彼はいつもめまぐるしく様々な場所を移動している。
だから、この広い敷地で過ごす人物は限られている。
ルイ・ドゥ・アルディと・・・彼が連れ添う彼の恋人だけであった。
しかし彼らは長い時間を共に過ごしていた。
生活様式も、ルイの気難しい習慣も何もかも心得た異国情緒溢れる人は、いつも自然にそこがこれまで過ごした住居のように振る舞う。

ルイは開け放たれたバルコニーの先を見つめた。
僅かに、人の気配がしたからだ。
雨の匂いや音に混じって、そこにはひとりの人物が立っていた。
大きくせり出したバルコニーの屋根の下で。
激しい雨雫から逃れることのできる、その屋根の恩恵を得るぎりぎりの端のところで。

彼女は、居た。
一足先に、彼女は居た。
驟雨の隔てに、彼女は居た。

うねりの強い茶色い髪は、湿気を吸っていつもより更に強い巻き渦を纏っていた。
勢いのある風に拭かれて、その茶色の髪の裾が棚引いている。
バルコニーの先は、ただひたすらに続く海景色だった。
俄に降る雨のせいで、汐の匂いが消えてしまっている。
彼は今の入り口に設置されているメインコントロールパネルで外気を遮断することもできたのに、敢えてそうしなかった。

・・・彼女がそれを望んでいないと思ったからだ。
■02

ルイ・ドゥ・アルディは彼女の背中を眩しそうに見つめた。
外は俄雨が降っている。
空は明るいが、白い閃光にも似た激しさで空から雨矢が降り注いでいた。
遠くに見える海も、さざめいている様子がはっきりと視認できた。

あの海はまだ本来の姿に戻っていない。

あの海の先では大きな墜落事故があり、それ以来生物が住まわない時期が長く続いていた。
それを雨越しに見つめるヒカル・クロスに声をかけずに、しばらくの間、黙ってその姿を眺めていた。
彼女は見つめる先の雨の激しさや、考え事に夢中になっているようで、ルイ・ドゥ・アルディの入室の気配にも、腕時計を投げ落とした時の音にすら気が付いていないようだった。
彼は、敢えて声をかけずに気配で彼女に到来を告げたというのに、彼女は振り向かなかった。
茶色の癖の強い髪は豊かで、肘までの裾から見える白い腕は、持ち上がって雨を受け止めていた。
雨に打たれるぎりぎりの縁で、彼女は雨に見入っていた。
跳ね上がる雨飛沫で彼女の沓も服の裾も濡れているというのに、それでもヒカルは臆することなくただただ白雨を見つめているばかりだった。

ルイは溜め息を漏らす。
こうして見つめるだけの日々を、あとどれくらい過ごしたら彼女は同じようにルイを見つめるようになるのだろうか。しかし彼はルイ・ドゥ・アルディだった。
彼は彼女の視線に気が付かずに過ごすことはあり得なかった。
その一方で、彼女に彼と同じように苦しみや疼きを知れば良いのにと思うのだが、それは、彼が彼女に気が付かないで居ると同じくらいに、あり得ないことだった。

時々、こうして彼女は遠い海に意識を飛ばすことがある。

いつか、こういった時に何を考えて居るのか話すだろうと考えて居たが、それは生涯叶わないことなのかもしれないと思った。

雨足がひときわ強くなった。これを過ぎれば、ほどなくして雨は止むだろう。
そして、今日は夕陽が一段を映えるのだろうと思った。

彼は車のキーを近くのテーブルに置いた。
ヒカルは彼よりずっとはやくこちらに到着していたようだったが、どこにも行かずにただここでぼんやりと時間を過ごしていたらしい。
テーブルの上には、給仕が終わって、とうに冷めてしまったティーカップが一客だけ置いてあった。彼女はそれには口をつけなかったらしい。

室内に腕時計を放り投げた時よりも大きな音が響いて、そこでようやくヒカルは彼に気が付いて振り向いた。
そして茶色の瞳を少し見開いて、ゆっくりと微笑む。
「ルイ」
太陽のような男性と、太陽のような女性から生まれた晄の子は、ルイに輝くような微笑みを向けた。
「人の気配に気が付かないなんて、迂闊もいいところだ」
彼は顔を顰めた。
ここは使用人も最小限に留めており、静寂を何よりも優先させている場所だった。
張り出したバルコニーに近付くと、良く磨かれたタイルとルイの沓の踵から規則的な音がした。
「雨に濡れなかった？」
「車だから」
彼は放り投げた車のキーにちらりと視線を向けた。
青灰色の物憂げな瞳が一瞬ヒカルから反れて、端整な横顔が見えた。

彼女は腕を下ろして滴る水を軽く両手で振り払った。
細い華奢な指先から水滴が流れて、彼女の躰から離れていく。
雨を受けて雨がもたらす神託に耳を傾ける神女のように、彼女は厳かにそれを執り行った。
「雨に敢えて濡れようとしている人が心配することではないと思うが」
彼は辛辣に言った。ヒカルの行動を咎めているのだ。ここからの景色はこの邸の中で最も見晴らしが良いが、それでも、彼女のために用意した部屋もあるし、ここに彼が来るとは限らないのだ。
真っ先に彼女が居るべき部屋をいくつか渡り歩いたことがどうにも苛立った。
なぜ、この邸の主であるルイが、ヒカルの姿を求めて彷徨い歩かなければならないのだろうか。
それでも、彼は彼女の姿を見つけるまで、あらゆる部屋と空間と場所を歩いただろう。
人を使って呼びに遣れば良かったのに。彼はそうしなかった。
だから少しばかり彼女に逢うのが遅れた。
これはヒカルの責なのだから、彼女はもっと・・・ルイの到来についてもっと嬉しそうに微笑んで近寄り、彼女からキスを乞わなければならない。
彼女はいつもルイの満足の範囲を満たすことはない。

もっと、彼を見れば良いのに。
もっと、彼を求めれば良いのに。

そう思うのに。
彼女はいつも嫋やかに微笑むだけで、激しさを見せることはほとんどない。
本当は・・彼女の内に眠る、彼女の母親から譲られた気性の激しさを滾らせることができるはずなのに。

だからその一端が、こうして水と戯れたり、海を遠くから眺めて考えに耽ったりする行為なのだろうとルイは考えている。
■03

ヒカル・クロスは少し微笑んだ。
ここは彼の邸であり、車のキーを持ち歩く理由がなかったのに、彼がそれを持ち込んで、彼女の意識をそちらに向けようとしたことに対しての綻びだった。
邸の入り口では専門の者が待機しており、彼の帰邸に合わせて彼から車を引き継いで車庫に運び込む役割が与えられていることを、彼女はよく承知していた。
だから、彼女はルイが故意にキーを持ち歩いていたことを知った。
彼女を伴って、彼が再び出庫させることを予定していたからだ。

だから綻びた。

「ありがとう、ルイ」
彼女はルイと同じ知能指数ということではないのに、彼女は時々彼の思考を読み取った。
「でも雨が上がってからにしよう」
彼女がそう言ったので、ルイは金の髪をかき上げて、肩を竦めた。
「特に急いでは居ない」
彼女はありがとう、ともう一度言った。

ヒカルはまだ、あの海にひとりで行くことができなかった。
だからそんなときは、ルイは黙って彼女を車に乗せ、誰も供をつけずにヒカルとふたりだけで海に行き、そしてただぼんやりと海を眺める時間を過ごす。
その間、ルイは何も語ることはなかった。ヒカルもその間はただ黙っていた。
ふたりは、ただただ海を見つめ続けているだけであった。
ルイ・ドゥ・アルディは多忙を極めているのに、それでもその時間だけはいつも確保し続け、最優先事項とした。
それは不定期で不規則な時間であるのに。

ルイ・ドゥ・アルディはヒカル・クロスのために・・・いつも彼の何かを捧げ続ける。
それは時間であることもあったが、彼が捧げるものはもっと別のものもあった。
常日頃、彼女には奪うことしかできないと公言していたのに、本当はルイは絶え間なく何かを与え続けていたことに、彼女がようやく気がついた時。

そこから、ルイとヒカルは何かを始めることにしたのだ。

彼女は贖罪の娘と呼ばれていた。けれども、それはルイが得るべきものを彼女が当然のように享受していたことに対する咎めではなく、彼が奪うのではなくヒカルに与え続けることに気が付かなかったことに対しての・・・ルイの嘆きを伴った無音の叫びであることに、ヒカル・クロスはようやく気が付いた。
以来、彼と彼女の間の会話はとても短く少なく、それでいてこれまで交わしていたどんな言葉よりもずっと充実していた。

彼は相変わらず素っ気なく冷たいが、ヒカルはそれに哀しんだり傷ついたりすることはもうなくなっていた。

パリ市内に住居を構えれば良いのに、彼がこうして海の近くに居を設けるのは、誰のためなのかヒカルは良く知っていた。
海の見えるこの邸からいつでも・・・彼女はあの海に想いを馳せることができる。

環境や時間が許す限り、彼はいつも彼女と一緒に居た。これまでの時間を埋めるかのように。
そして、彼女がかつて、彼にそうして常に微笑み続けたことに対しての返礼のように。

彼女はまたもう一度顔を上げて、激しく降り注ぐ雨空を見上げた。
「・・・雨が止むまで、どれくらいかかるのかしら」
「程なく止む。・・・しばらく待て」
「それではルイの時間が無駄になってしまう」
彼が多忙を極め、休まる時間がほとんどなにことについてヒカルが憂慮していることを察して、彼は薄い唇を歪めた。
そしてゆっくりと窓際の彼女に近付いた。
外気の雨を乗せた風に、僅かではあるが汐の香りが漂ってくる。
間もなく、雨があがる前兆だった。風向きが変わりつつあった。
彼女のために、ルイがこの場所にやってくるまでの過程を、彼女は知らない。
しかし、彼はそれをヒカルに伝えることはしなかった。

「何か飲む？」
当たり障りのない会話であった。しかしありきたりの会話でもなかった。
「いや・・・必要ない」
よく通る声で、彼はそう言った。そして彼女の濡れた手を、青灰色の瞳でじっと見つめる。
すぐさま彼女に触れたいのに。
それなのに、ルイはヒカルと少し距離を置いた。
茶色の髪に、茶色の瞳の人は、同じように、ルイを見上げた。

雨が激しくバルコニーの床を打ち付けて、大きな音を立てていた。
水しぶきが彼と彼女の脇をすり抜けて行き、階下に堕ちていく。

彼はただ黙ったまま・・・彼女を見つめていた。
動いたのは、彼女の方からだった。静寂を破ったのは、ヒカルだった。
一歩前に出ると、彼女はそのまま勢いをつけて、ルイの広い胸に飛び込む。
まるで、何かに引き寄せられるようだった。
彼女の細胞から再生された皮膚組織を使い、彼は再生治療の施術を受けている。
それに引き寄せされるように、彼女は彼の背中に腕を回した。
濡れた腕を彼の背中に重ねたが、彼はそれを厭う仕草は見せなかった。
ただ、肩を一度だけ僅かに動かした。
彼女が触れた場所から、彼の中に電流が走るかのように。

彼には長い治療期間が必要だった。
あと幾度かそれを受けなければ完治しないほどに、酷い状態であったが、それも間もなく癒える予定であった。
彼女の尽力によって。
だから、彼女がいなければ彼は癒えることがない。しかし、彼の精神は彼女の魂でしか癒えることはない。
しかしまだその中途である段階のルイには、この湿度と温度変化に敏感に反応しているはずだった。

彼がヒカルから寄ることを待っていたことを知っていたのに、彼女はそれに不満を漏らすでもなく、ごく自然に彼の胸に頬を寄せた。
■04

彼は長い時間をかけて、ひたすらに待った。
彼女から彼に寄り添う瞬間をずっと、待っていた。
だから、時折、この瞬間に時が止まり、そのまま滅してしまいたいという欲求を抑えることができなくなる。

「ルイ。雨は障る。だから、ルイはここにいてはいけない」
「ヒカルが命じることではない」

彼は素っ気ない返事をした。
そして身体を屈めて、彼女の髪の香りを確かめる。
いつまでも・・・この時間が断続することなく続けば良いのに、と思う。

ヒカルは知らない。
彼は彼女が居る場所であれば、治療痕が癒着しなくても海に飛び込む激しさがあることを。
彼は彼女が居る場所であれば・・・・どこにでも彼女を探してこうして邸内を歩き回ることを厭わないことを。

彼女だけに向いている意嚮というものを、彼女は軽視しすぎていた。
しかしルイはそれを責めるつもりはない。

こうして彼女と抱き合うことによって感じる温度を彼が求めていたことを、彼女に悟られるくらい彼は己を律することができないのであれば、いつでも・・悟られた瞬間に彼女ごと消えてしまう覚悟が彼にはあった。

彼は呼気の度に感じる。
彼女の命は輝いていることを感じる。
僅かに、雨の香りがした。

物憂げな青灰色の瞳を閉じて、彼は眉を寄せた。
気が付けばいつでも彼女の姿を探している。
彼はルイ・ドゥ・アルディなのに。

・・・雨がこのまま止まなければよいのに、と思った。
彼の鼓動や溜め息が、彼女に聞こえないように。

「・・・どうして自分の部屋で待てない」
彼が彼女にそう言った。
いるべき場所に居ない彼女を求めるのは、あの頃を彷彿とさせる。
長い時間、彼女を求めて彷徨ったから。

そして両手は拳をつくり、彼女の背中を、ルイの両腕は縛めた。
大きな掌で彼女の後頭部を押さえ、そしてもう片方の腕で彼女の腰を絡め取った。
「ルイ、苦しい」
傍らでは、雨が激しく降り、それでいて空は明るく彼らを照らしていた。
にわか雨のような愛をするつもりはなかった。
ヒカル・クロスは彼の唯一の人だ。
誰もが彼を通り過ぎて行くようなそんな存在ではない。

僅かに身動ぎする彼女を決して離さなかった。
苦しい、と言った彼女はそれでも彼の胸に額を押しつけている。
「答えろ、ヒカル」
彼は金の前髪を下ろして、彼女に囁いた。
彼の用意した室が気に入らないのであればそう言えば良いのに。
何が気に入らなくて、この居間に滞在しているのか、彼女の理由が明白ではなかった。
ルイはまた腕に力を込めた。

彼女は困ったように言い淀んだ。
ルイの強い視線を感じた。彼の精悍な頬が、彼女の髪に埋められて、そして彼はこたえを待っている。
静かな時間であるのに、外の雨のように・・・篠突く雨（激しく降る雨のこと）が彼と彼女の鼓動を乱していく。

「・・・ルイを待つのが怖かったから」
「なぜ怖い？」
彼は尋ねた。
ここで落ち合うことにしたのはいつものことだった。
よく知った場所でもあるのに、それでもヒカルは怖いと言う。
海が怖いと言うのではない。ルイが怖いと言うのでもない。
・・・彼を待つのが怖い、と彼女は言った。

「戻って来ないかと考えると怖くなって苦しくなるから」
彼女はそう答えた。
そして彼の胸の中で大きく吐息をひとつ、吐き出した。
彼の腕の力が更に強くなった。

彼女は両親を事故で失っている。
そして戻ってくるからという気持ちで待ち続けた日々をまだ、記憶していた。

雨を抱く海を見ながら、彼女は愁いに満ちて手を伸ばしたのだろう。
まだ、あの海の波に手を差し伸べることができないから。まだ、あの海の水に身体を浸すことができないから。

それならせめて、同じ雨に濡れていたいと思う彼女の願いが彼の背中を濡らしていた。

しかし彼に彼女は触れる。
濡れた腕で彼女は触れる。

濡れると彼の瑕に障るという心遣いより、彼に触れていたいという彼女の想いの方が勝った瞬間だった。
■05

「オレを待っていたのか」
ルイは言った。
先ほどから彼はヒカルに尋ねてばかりいた。
彼の質問は質問ではない。
こたえを知っているから。
しかしそれを彼女がルイに告げることに意味があるのだと考えていた。
わかっているのに・・・彼女からその言葉を聞きたいのだという祈ぎ事（ねぎごと）を唱え続ける。
けれども、それを彼女の口から聞きたいとねだることはしない。

ヒカルは彼の言葉に応じた。
雨の中で・・・彼の腕に抱かれながらヒカルは大きく溜め息をついた。
「そう。・・・ひとりで待つのは苦しい」
「だが誰かと待つことは許さない」
彼はそう言って、彼女の形の良い額に唇を押しつけた。
次に、滑らかな頬に唇を落とす。
くぐもった声で答えるヒカルに、彼は囁く。
「ヒカルは・・・もう誰かを待ってはいけない。オレだけを待てばそれでいい」
彼はゆっくりと熱っぽく彼女の耳元に唇を寄せて、ささめいた。
恋の折衝ではなかった。試し図る会話ではなかった。
ただ、それしか言うべき科白がなかったのだ。

彼女は海を見ながら、彼女の両親を待っている。
いつか、戻ってくるという期待が彼女を失望させる。
だから。
だから、ルイは待ってはいけないと言う。
ヒカルの両親を待つことをやめて、ルイを待て、と言う。それは彼が必ず彼女の元に現れると約束していることに等しかった。
それは誓いにも似ていた。
激しい雨の降りしきる中で、彼と彼女は抱き合いながら、直接的な会話を交わすことなく、それでいて相手の意図を理解しながら話を進めていく。
とても短い会話なのに。それまでは彼女にとっては彼女を傷つける言葉でしかなかった彼の声が「恋え」になって響く。
恋しいよと、囁かれるようだった。
その度に彼女は溜め息を漏らす。

苦しくなるから。
切なくなるから。

なぜ、彼のこの囁きに気が付くことができなかったのだろうか。
それについて贖罪しなければならないと言うのであれば、彼女は生涯かけて彼の言葉に耳を傾けようと思っていた。

でも・・・ルイの言葉は彼女だけのものであれば良いのにと願うことを、彼は許してくれるのだろうか。
これほどまでに何もかもを気が付くことなしに長い時間を過ごしたヒカルの罪を、ルイは
不問にしたのに。

ヒカルは自分自身を許すことができないでいた。

抱擁と共に発する音声というものは、単語数や音色だけではない何かを含んで相手に共鳴するのだということを、互いに知っていた。

「雨が上がるまで、こうしていても良い？」
ヒカルがそう言ったので、彼は薄い唇を歪めて嗤った。
これは白雨だ。通り雨であるのに、彼女はその短い降雨に願いをかける。
・・・彼はもっと長い時間これが続けば良いのにと思うのに。
彼女はどうして、永遠を望まないのだろうか。
■06
ルイはヒカルの申し出に黙ったままだった。
雨が上がってしまえばこの人は彼から離れてしまうのだろうか。
それなら、いっそのこと、止まない雨を降らせるためにはどうしたら可能になるのか考え始めなければならないと思った。
「待つのが嫌なら・・・待たなければ良いのに」
ルイが溜め息混じりにそう言うと、ヒカルはまた首を振った。
ひときわ激しい雨になった。
空は明るく今にも晴れ間が出そうなほどに眩しいのに、こうして彼らに雨が降り注ぐ。
誰にも渡すつもりもなかった。彼女が愛して良いのはルイ・ドゥ・アルディだけだ。
それ以外は許さないし、決してそうさせない。

もし、他の誰かを見つめるようなことがあれば、彼女と滅してしまっても良いとさえ思っていた。
薔薇に還らなくても良い。海に還らなくても良い。
一緒に生きたいと思うのではなく、一緒に滅したいと思う願いは邪なのだろうか。

生きていればそれで良いと思わない。
誰を愛しても幸せなら良いと思わない。

彼女は彼の傍でしか生きられないと思えば良いと願う。
彼女は彼の傍でしか涙を流さないから。
そんな激しい感情を抱くがそれをヒカルに広げて見せるつもりはない。彼は誇り高い星辰の子だから。

彼女を感じていると、潮が満ちていくようなそれでいて引いていくような汐が自分の中に流れて蠢く感覚を覚える。
強い勢いで路面に水が打音を響かせている。・・・勢いの盛りは過ぎた。これからどんどん寂雨になり、そしてまた何もなかったかのように鎮まるのだろう。空も、海も。
「・・・雨が上がるまではこうしていさせて」
ヒカルがそう言ったが、ルイはくすりと声を漏らして嗤った。
「断る」
あといくつ季節を数えられるだろうか。あと幾度海を共に見に行くことが出来るだろうか。
あとどれくらい・・・こうしていられるのだろうか。
彼の命は創られた。けれどもどんなに優れていても、それは永遠ではない。
彼は永遠を約束しない。生涯かけて愛し抜くと誓ったが、彼の肉体はやがて朽ちる。
そしてそれは彼女の命も同じだ。
だからこそ美しくだからこそ儚く、だからこそ哀しい。
けれども・・・・だからこそ命は輝くのだ、とヒカルは笑う。
止まない雨はないとわかっているからこそ、ヒカルはこうして居たいと言う。
彼は彼女の肩を抱いた。そしてゆっくりと自分の掌の中に彼女の肩を納めて、親指の腹で静かに彼女の鎖骨の縁を撫でた。
左右対称に、同じ速度で両の指を持ち上げてまた戻していく。
彼女が少し驚いたように眼を上げてそしてすぐに伏せた。
そこに青灰色の瞳があったからだ。
眼を逸らすことはしないヒカルであったのに、彼の仕草に僅かに身動いだ。
「・・・・いつまでと刻限を定めるな」
彼はそう言って彼女の肩を捉えると、そのまま・・・・勢いよくバルコニーの中央に足を踏み出した。
「ルイ」
ヒカルが小さな悲鳴を上げた。
激しい仄白く光る銀の矢に打たれて、彼はそのまま命を絶とうと決めたかのように、躊躇いもなく庇から抜け出して雨の下に出た。
勢いよく想定していなかった場所に出て、ヒカルは足を止めて逆らうことすらできずにルイに肩を掴まれたまま、俄雨に身を晒した。
あっという間にふたりの衣服も髪も顔も雨を受けて色濃く変化していく。
髪が濡れて、彼の見事な金髪がやや鈍い光を放つ。
彼女の頬に激しく打ち付ける雨矢にヒカルは眼を閉じた。
「ルイ・・・濡れる・・」
「構わない」
彼女は呆然としていたが、それでも次々に彼女に注がれる彼の激情のような雨が流れて彼女の薄い衣と彼女の白い肌が番っていく様をルイの目の前で露わにしていくので、彼女は頬を赤くして胸元を隠そうとしたが、ルイはそれを許さなかった。彼女の肩から腕を下ろし今度は彼女の両手首を強い力で縛めた。
どうして彼女は思い通りにいかないのだろう。
■07

彼女が「雨が上がるまで」と言ったことに、彼が少なからず憤慨していることに気が付いた時には、ヒカルもルイもかなり濡れて水が髪や顎から滴り落ちてきた程に濡れてしまった時だった。
しかし彼は無言で無表情で彼女を見つめていた。
前髪から滴が堕ちて、彼の美しい美貌をさらに儚げにしていた。
彼女はここで暮らしていないので、着替えもない。
部屋は用意されているがそれはルイを待つヒカルが倦怠しないようにということで備えられた居室でしかない。

・・・だからこのままの状態は彼女には困惑する事態であった。

困れば良いのに、とルイが余憤を漏らしている様を見て、彼女はますます困って喉を詰まらせた。

「・・・オレはヒカルの・・・俄雨のような・・・通り過ぎるだけの存在にならない。決して」
「わかっている」
「いや、君はオレを理解していない」
彼が強く否定したので、ヒカルは慌てて彼に言った。
うまく伝えようと考える余裕さえなかった。彼の前ではいつも余裕がなくなる。
「それを理由にしなければ触れられないから。苦しいから。・・・・ルイが濡れないようにはやく止みますようにと願う雨に、もっと降り続ければこのままでいられるのにと、都合の良いことばかりを祈るのよ」
「傲慢だな」
「わかっている」
彼女は顔を曇らせた。
ルイは、激務と治療の合間を見つけてこうして彼女と一緒にいる時間を作りそして静かな海を見たいというヒカルのために邸を用意する。自分を犠牲にしてでもヒカルを優先させる。それを理解できていないと言われて彼女はこのまま雨に打たれて潰れてしまいそうだと感じた。・・・肌に刺す強い雨と、彼女と彼の身体を冷やしていく雨声がヒカルに訴えていた。ひとりよがりの愛なのだろうか、と彼に愛を乞うことはしたくなかった。
それはなかったから。
これほど激しい人であると知らなかった時代が長かった。
彼が長い時間・・・何を見つめていたのか知ってから、この痛みを感じるようになった。
彼女は彼を見つめることにしたというのに。
彼はまだすべてを見ていないと全身で叫んでいる。

「短い時間でも一緒に居たい。永遠でなくて良い。触れたら苦しいのに触れないともっと苦しい。・・・苦しいを通り越して・・何も考えられなくなる」
恋人の拙い言葉に、彼は美しい顔を僅かに曇らせた。

「少しの間で良いと思うのに、次にはもっと長く居たいと思う。どんどん欲張りになって傲慢になる。一緒に居たいと思うのに、傍に居ると苦しくて辛い・・・・」
両腕を上げて彼に手首を掴まれたままヒカルは哀しそうに彼の胸に両手を当てた。

決して逃げはしないのに、こうして捉えておかないと彼女は雨に溶けて晄の粒子になってしまいそうだった。
彼女の頬は雨で濡れていたが、雨ではない何かが流れ落ちているのがわかった。
戸惑いに満ちた瞳が少し赤らんでいたからだ。
肩が細かく震えていた。
「ルイと居るのに、苦しいって、贅沢だよね・・・」
ヒカルが自嘲気味にそう言ったので、ルイは彼女の躰を静かに抱いた。
大きく息を吸って、彼女に彼の心音を聞かせてやる。
彼女は海を見るときはいつも不安定だ。
目の前にある幸せが突然消えてなくなることを経験しているからだ。
手放しで喜べない愁いがあった。
彼と彼女は若かったが同じように悲しみを共有していた。

顔を胸に埋めてヒカルは何度も小さく溜め息を漏らした。
しかしルイはこの思いを外に出したくなかったので、息を吸ってそれを身体の内に落とした。
彼は薄く嗤った。
「では、そんなことを考えられないようにしてやろう」
ルイはそう言って身を屈めると、彼女の顔に自分の頬を傾けた。
・・・・雨の中のキスは静かに始まった。
湿りを含む彼女の唇を彼は軽く咬み、そして深く沈み込むと彼女の中に滑り堕ちていく。
何もかもを奪うような・・・彼女の悲しみさえも奪うような接吻だった。

唇を合わせる。
何度も、何度も。
茶と金の髪が吻合しては削剥し、そしてまた睦ぶ。
その間、ヒカルは眉を寄せて唇に自由が戻る度に彼の名前を呼び、そしてまた奪われて声を失っていく。
■08

雨に濡れているとか、服が汚れてしまったとか・・・そんなことも考えられないくらい激しく燃え立つ心焔に押し流されそうになり、踏みとどまるだけで精一杯だったヒカルは、やがて雨が降り止んだことにも気が付かなかった。
瞳を閉じて、彼の嵐を受け止めることだけに懸命になっていたからだ。

身体が火照り、浴びた雨雫が彼女の体温を奪っていくというのに、それが心地好かった。

ルイがヒカルの頬や耳朶や首筋に唇を這わせると、身を竦めたヒカルが本能的に逃れようとしたことに眉を顰めた。

「ルイ。・・・雨があがった」
「またそれを理由にするのか？」
彼が彼女を咎め立てしたので、ヒカルは首を横に振った。
「服を乾かさないと・・・」
彼女は顔を赤くした。

バルコニーの下の庭に雨上がりを待っていた者たちが外に出る気配がしたからだ。
下から見上げれば、ルイとヒカルが全身濡れそぼって激しく抱擁する姿は丸見えだろうと思ったのだ。
「余裕だな」
ルイが冷ややかにそう言ったので、彼女は唇を噛んだ。彼が面白がっていることがわかったからだ。
それは悔しくはない。
が、彼女だけが・・・稚拙な愛の表現しかできないことには悔しいと思っていた。

「余裕で居られない。ルイのことだけしか考えられない」
「それなら、望んだとおりの結果になっただろう」
ヒカルは口を噤んだ。
余計なことは考えられないようにしてやる、と言ったルイの言葉通りになったから。

「・・・とにかく服を着替えないと。ルイもよ。身体を冷やしてはいけないと言われているはずなのに」
彼女がそう言って、彼から離れようとしたとき、ルイは待てよ、と言って彼女の腰を掴んだ。
再び彼女はルイの縛めに捕らえられてしまう。

「ルイ・・・」
困るからと言って、彼女はルイの名前を呼んだ。
「何が困るの？」
「・・・・恥ずかしい格好をしているから」
くすり、と声を漏らして彼が苦笑した。

彼は雨で張り付いて扇情的になったヒカルの姿を見て、妖艶に笑った。
強い晄が雨が上がったことにより更に強い晄を放ち、彼女の肢体を浮き上がらせていた。
何も纏っていない時より彼をよりいっそう誘惑する姿に、ヒカルは気が付いているのか居ないのか、ただ恥じらいだけを浮かべてこの場から立ち去ろうとしていた。
彼を誘うわけでもなく、ただ一緒に居るだけで苦しいが傍に居たいとだけ言い続けるぎこちない愛の仕種が彼を煽ることを知らない。

彼はルイ・ドゥ・アルディであるのに。
ヒカルと同じように全身が濡れており、すぐさま熱いシャワーに入らなければ決して人前には出ないほど傲慢で誇り高い人物なのに。

「・・・身体を冷やしてしまった。ヒカル、温めろ。今すぐに」
それが何を意味しているのか、彼女は次の瞬間に理解した。
彼がヒカルの濡れた胸元に唇を寄せて、頬を強く押しつけたのだ。
彼女の腰を強く抱き締めた。

快美の波に攫われたヒカルが少し身体を反らせたので、彼女の踵が僅かに浮いた。

「海に行くのではなかったの？」
「それは明朝にする」
ルイは滅多なことでは予定を変更しない。
ヒカルはますます当惑した声を漏らした。
朝に海に行こう、ということは彼女に泊まっていけと彼は言っているのだ。
彼は朝が弱く、決して日の出の時刻には起き出してこない。
「今日は泊まれない。・・・・服がない」
「服が濡れたから泊まらない？・・・それは間違いだな。着替えがないから泊まる、という結論にしかならない」
彼はぬかりなく周到に彼女の身の回りのものも揃えてあるというのに、彼女はそれでもやはりそれはできないと言って、いつもこの邸には宿泊することはなかった。

水を含んで少し色が濃くなった茶色の髪の下から、ヒカルが茶色の瞳を見開いた。
彼が何を計算して、激しい白雨の中に彼女を押し出したのか、理由を知った。

そしてふと、腕の力を緩めると、ルイは整った顔をヒカルに向けて、彼女の顔をじっと見つめた。

・・・苦しいとか痛いとか辛いとか、そんな言葉では表現しきれない。

いつも一緒に居たいと思うのは彼女だけだとヒカルは信じて疑わないが、ルイはどうしたら彼女がルイしか考えられなくなるのか、それを考えて居るというのに。
・・・それだけを考えて生きているというのに。
目眩がするほど愛していると言えば伝わるのか。
どうにかなりそうなほど余裕がないと言えば彼女は心穏やかになれるのか。

「何も考えられなくしてやる。・・・・だから」
彼はそこまで言うと言葉を句切った。

今日は泊まっていけ、とありふれた言葉を言うつもりはない。
短い時間の間だけで良いからというヒカルに、これから未来永劫を望めと言うつもりはない。
自分が、たったひとりだけを追い求める気質であることは承知していた。

陳腐な言葉は好まなかった。あらゆる称号を受けてなお彼は輝く星辰の子だ。
けれども、ルイがヒカルに・・・絞り出すような掠れた声を伴って言った。

彼の嫌う拙劣な言葉を、彼は口にした。

「オレと暮らそう」

ヒカルの涼やかな瞳が大きく見開かれた。
唇が震えており、身の恥じらいを一瞬忘れているようだった。

白雨の合間に抱き合うだけでは足りない。
雨に濡れていやしないかと待つ時間の満たされない思いは無駄だ。

彼女は震える声で、ルイに尋ねた。
彼が何を言っているのか理解できていないわけではない。
けれども、今の言葉の重みに驚愕していた。

「今日も明日も明後日も・・・・？」
「そう」

彼女の顔が強ばった。
彼が何を言っているのか・・・本当にわかったようだった。

「その次の日も、次の月も、次の季節も、次の年も、だ」
彼は不確実なことは決して言わないのに。
そして曖昧な未来は口にしないのに。
それなのに・・・・薄く笑って彼はそう言った。

返事は必要でなかった。
これは決定だったから。

彼は一度言ったことは覆さない。
何があっても。どんなことがあっても。
苦しくても疼いても血が噴き出しそうなほどの痛みを感じても、永遠の眺を遠ざけることはしない。
そう決めたから。
彼女は泣きそうな顔をしていた。
しかし微笑んでいた。
彼も微笑んだ。
美しい微笑みだった。
二人はしばらく見つめ合い黙っていた。

言葉は必要なかった。

「ヒカル。来い。身体が濡れて不快極まりない」
彼はそう言うと彼女の腰を引いて自分の身体に押し当てた。
これから彼女は彼が用意した居室で眠ることはない。
彼の腕の中で眠ることしか許されることはない。
この家の主は傲慢であり、そして長らく孤独であった。
満たせ、と言われてヒカルは小さく頷いた。
ほんの一瞬だけで良いから傍に居たいと願った彼女に、彼が応えた。
これからずっと傍にいて良いのだと彼が言った。
壊れそうなほど強く引き寄せるのに、彼は壊れ物を扱うように彼女を触れる。
ルイは奪うと言いながら彼女に与え続ける。愛の苦しみも喜びも悲しみも。

「・・・ルイを愛しているの」

彼女はそう言った。
けれども最後まで言うことができなかった。
ルイが彼女を抱き締めて、息が止まるほど強く彼女の躰を力強く包んだからだ。

・・・・彼は彼女から体温を奪い始めていたが、彼の恋慾に反応して熱を帯び始めた彼女の躰から、すべての熱を奪い去るのは時間がかかりそうだった。

雨は上がっていた。
白雨の中で静かな口吻を経て、彼と彼女は今度は、白雨の後に、激しい吻合を始めた。

バルコニーの庇の下から、茶色の髪と金の髪が乱反射して、すぐに消えた。

彼らはこれからもふたりで・・・雨が通り過ぎてなお静かに凪ぎている海を観に行く。
しかしその前に、彼は彼女を連れて行く。
ヒカルが何も考えられなくなるほど激しく彼女を求めることにする。
彼女の望み通りに。

先ほどのルイの申し出にノンという言葉は用意されていない。
深閨の海波に乗り、彼女は常にウイと言わなければならない。

彼の耳元で彼の名前だけを呼び、彼を永遠に愛すると囁く彼女の声だけが、白雨のように激しい彼を鎮めることができる。

彼は美しい青灰色の瞳を細めた。

儀式のように肌を合わせ、そして深い眠りに落ちたかった。
彼女と共に。

次の白雨で彼女が願うことはただ一つだ。

ルイに魂を奪われて言葉にできないほど身が焦がれそうだと歎く彼女の姿を想像し、彼は恋情の焔を滾らせていく。

空は明るく、白雨は過ぎ去ったという気配だけを残して・・・そしてやがて消えた。

その時にはもう、ルイ・ドゥ・アルディとヒカル・クロスはそこに居なかった。

開け放たれた窓だけが、大きく外気を取り込んで対流していただけだった。

彼と彼女と白雨の香りだけが残っていた。

（FIN）

星原　2011七夕

星霧、という表現が相応しかった。

乳白色の帯が、紺闇の空に大きく伸びている。
その両端は地平線や建物に隠れて・・・どこまで続いているのかさえ判別できなかった。
時折ちかりちかりと輝く星の輝きが、星河に装飾を施す。
遠くで虫の音が響き、そして僅かな風の音以外には何も聞こえない。
自然音しか聞こえない。
パリのアルディ邸に居る時よりずっと静かであった。

ヒカルは背を逸らし、茶色の瞳を大きく見開いたまま、ただひたすらに感嘆している。
いつものことだ。
彼女と星の林を見た年のことを思い出した。
あれから・・・どれだけ時間が経過したのだろうか。

あの時にもこんな風にして、彼女は初めて見たかのような驚きを演出する。
ルイ・ドゥ・アルディは軽い溜息を漏らした。
彼女の前で見せる彼の仕種と言えば、無表情で居るか、溜息を漏らすかのどちらかであった。
ヒカルの様子をじっと見つめていた。
彼女は彼の目の前で、背中を見せて空を見上げている。
癖の強い茶色の髪が彼女の背中を覆い、扇形に広がって、宙の河と違う流れを作る。

彼女は何度も声にならない声を漏らす。櫻色の滑らかな唇から。
彼女は踵を上げて、宙に手を伸ばした。
「星が堕ちてきそう」
そう言っている間に、いくつも流れ星が星の原から勢いをつけて河を横切っては消えていく。
流れ星は不吉と言われることもあったが、彼女の価値観はそうではなかった。
「凄い・・・・星がこちらにやって来る」
「そういう詩的表現を褒めて欲しいのなら、オレに言うのは間違いだ」
彼は素っ気なくそう言った。

今夜彼女をここに連れてきたのはまったくの気まぐれだった。
ルイ・ドゥ・アルディには気まぐれなどは存在しないが。
ヒカルは腕を後ろに回して、今度は大きく息を吸った。近くの杜から凪がれてくる芳醇な香りが彼女を癒すと言うかのように。

彼女は星を見て涙を流す。帰ってこない者たちが戻ってくるようにと言って願いをかける。流れ星に。天の原に。何度も、何度も。しかしそれが結願となる日は訪れなかった。だからこそ彼女は日々愚かな願いを星に捧げるのであるが。

決して人前では涙を流さない贖罪の娘は、他者の為になら涙を流す。

それなら。
彼女が微笑む時は、いつなのだろうか。
彼女がルイに背中を向けなくなる日は、いつなのだろうか。

彼はそこまで考えて、そして思考を中断した。
執着してはいけないと教えられているから。
彼女を手に入れるのは簡単なことであるはずなのに、彼の思い通りにいかない。

ヒカルは金の髪の青灰色の青年に見向きもせずに、ただ、星に感嘆している。
彼は星辰の子と呼ばれており、数多の天体を従えるという美称を持っている。
けれども、彼女はそんな彼と会話しながらも、別のことに注意を向けている。
星の原に連れてくることは、彼女が・・・・ルイではない誰かを気にかけていると確認するためだ。
だから、彼女は彼の誇りを傷つける。決して彼を見ない。
あのフランスの華の言葉だけを聞き、フランスの華の愛が注がれていることを当然としている愚かな娘を目の前にして、ルイは相反する欲求が混じり合うのを感じていた。

遠ざけて、無視すれば良いのに。
遠ざけずに、彼女を自分一人だけのものにすることもできるのに。
そのどちらもできなかった。

距離を保つしかない。

「ルイはこんなにたくさんの星と仲好しなのね」
「それはどうかな」
彼は苦い笑いを浮かべた。彼に星辰の子という尊称があるように、彼女にも贖罪の娘という蔑称があった。そのことについてヒカルは決して喜んでいるわけではないということも知っていた。その証拠に、彼女はルイの星辰の子という名前について多くを語らないし、彼の前でそのような話をすることもなかった。

アルディ家のこどもになりたいと願うのに。
彼女は・・・・
この家から離れる結果になるのに、両親が戻ってくれば良いのにと願う。
相反する願いを持ちながら、彼女はそれでも今夜も星合いの空を見詰め続ける。

強く強く・・・・そして星辰の子であるルイに願いを捧げることはしない。

そう。今夜も、本当に気まぐれだった。
遅くに戻り、車庫に車を入れて出てくるところにヒカルと出くわさなければ・・・そのまま別棟に入って、いつもどおりのほとんど眠らない夜を明かすだけであった。
彼女は車庫からそれほど遠くない場所で・・・・立ち止まって放心していた。
明るいアルディ邸の照明に目を細めながら夜空を眺めている彼女の脇を無言で通り過ぎれば良かっただけの話であるのに。

彼は再び、車のエンジンを作動させることになった。
ヒカルが、地表が明るくない場所で星河を見たいと言ったからだ。彼女の願いを叶えてやることは義務の中には入っていない。
それに、彼女はアルディ家の当主と頻繁に夜景を眺めに外出している。
だから、今夜、ルイと外出する必要はなかったのだ。
シャルルが居ないからだろうか。
彼女は最初ルイに断られたのに、それでも諦めなかった。
逆らってシャルルに責め立てられるのと、ヒカルを乗せてもう一度気乗りしないが車を走らせるのと、どちらが得策か考えてルイは後者を選択しただけだった。

「ルイは星に連れて行ってくれると言った。
だからね、どの星に連れて行ってくれるのか、どの星に行きたいのか、私はいつも愉しみにして宙を見るの」

少し浮かれているなと思えるほどに、彼女の声音は明るいもので弾んでいた。
「・・・・シャルルにでも連れて行ってくれと頼んだ方が、実現可能ではないのか？」
彼はヒカルの母親に、かつてプロポーズしたことがあった。世界を回って月まで行こうと行ったらしい。それを聞いて、ルイは嘲笑した。それは叶わぬ願いとなって星屑となったからだ。

彼女がそう話しているうちにも、いくつも・・・いくつも銀とも白ともいえるような筋が明るく輝き、闇夜に曲線を描く。星月夜はこれほどにも、明るいのだ。

彼女は昊を見上げる。
・・・視線は、星の原の果てを探して・・・どこまでも追いかけていく。

「ヒカル。・・・足元を確認しろ」
彼女は上を向いたまま、留意が散漫になりながら、小さく歩み出したので、彼は忠告をしたが・・・・それは彼女の耳に届かなかった。
「オレの指示に従えないのなら、ここに放りだしていくぞ」
何度か彼女にそのような事を言ったが、結局彼はそれを実行することはなかった。
「ヒカル。あと一歩出せば転倒するぞ・・・」
そう言いながら、彼は躰を動かしていた。
彼女が蹌踉めいたからだ。怪我をすれば面倒だ。彼女の躰には秘密があり・・・なによりヒカルの存在を、ファム・ファタルの再来であるかのように盲愛しているシャルルに知られれば・・・彼女が怪我などをすればシャルルが激高するのはわかっていた。

そして、彼の忠告どおりになった。
彼女は躓いて・・・・また、繰り返した。彼女はいつも、ルイの中に飛び込んで来る。いつも突然だ。そして彼女は自分で望んで彼に向かってこない。
あっと小さな声をあげたヒカルが後ろに倒れて・・・そのままルイの胸に背中を押し当てる。
とん、と軽い音がして彼の広い胸にヒカルの茶色の髪が飛び込んできた。
彼はその瞬間、彼女の両肩を掌で押さえた。
一緒に倒れ込むほどの筋力しかないわけではない。
彼は乗馬とフェンシングで鍛えた体を持っており、着やせして見えるが無駄な肉は一切持っていない。

・・・・そこでひとつ、星が流れた。

どちらの願いであったのだろうか。
こんな風に相手が自分に寄り添うように、と願いをかけたのは、どちらの方であったのだろうか。

・・・・しばし、無言になる。

一瞬の静寂が・・・・先ほどの静寂とは比べものにならないほどに静かな風が流れて・・・そして星も河を泳いで消えていく。

どんなことにも傷つかない。
彼女は傷つかない。だから、彼女を縛る。
彼女に約束をひとつするたびに・・・彼は、それがいつ実現可能であるか期限を決めていなかった。他人と交わすのは約束ではなく契約でしかない。けれども、ヒカルをここに縛り付けるために、彼は彼女と約束を交わす。
剝き出しの言葉で縛りつければ良いのだろうか。

年に一度、会おうと約束をするあの星昊の乙女と青年のように。
星の原で永遠に彷徨い続けることになっても、また会おうと約束するのだ。

このまま彼女を占有することは簡単だ。星乙女を星に還さない方法はいくつもある。
けれども・・・そこには彼女の笑顔はない。
おそらく、そうしたところで・・・彼が強引に自分のものにしたとしても、彼女はそれでも自分自身を哀れんで泣くことはしない。おそらく、ルイを思って泣くのだろうと思った。それは彼の誇りが許さないのだ。だから実行しない。

・・・彼は彼女を抱きながら、昊を見上げた。顎を上に向けて、そしてヒカルの顔を見ないようにする。いや、違った。彼の青灰色の瞳が、彼女にいつも向ける視線と違うことを、ヒカルに知られるのが屈辱だったのだ。

彼は何にも屈しない。

ルイは星辰の子と呼ばれている。
それなのに、ヒカルという永遠の晄は彼に遵うどころか、彼を引き寄せて遵わせようとする。これほどの汚辱はない。そう感じていた。

せめて、彼女の中にルイの痛みを植え込んだとしたら。
彼は彼女の唯一の人になり得るのだろうか。
彼女はルイを運命の人と呼ぶのだろうか。

「・・・ルイ。上を見ているとね・・・星の昊があまりにも綺麗で・・・昊が・・・。星が・・・・どちらが天かわからなくなりそう」
「それは平衡感覚が狂ったせいだ。上に視線を乗せ続けるとやがてそうなる。器官の現象だ」

「いいえ・・・・」
彼女が僅かに首を振ったので彼の掌の上に茶色の髪が乗った。
彼女の肩が僅かに震えているのを感じる。
「ルイ。こちらを向いて」
彼女はそう言うと、ルイは細く長い指先に僅かに力を込めて吐息を漏らす。
ゆっくりと・・・見事な金の髪を下ろし、彼は青灰色の瞳を彼女に向けた。
静かな夜景だった。彼らの他には誰も居ない。

フランスの要人の子息であるルイが、単身でこんな場所に来ていると知れば、問題視する者も現れるだろう。親族会で彼をシャルルの後継者と認めさせる道のりと手数に修正を加えなくてはならなくなる。
それは避けるべき事項であった。

・・・そろそろ、戻らなければならないと判断する。

だから。

彼女に、戻る旨と余興の終わりを告げるために、彼は彼の胸に背中を合わせている贖罪の娘に顔を向けた。

目が合う。

彼女の茶色の瞳がすぐ近くにあって、彼は次の台詞に少し間を置かせた。

これほど近くに居るのに、彼女は近くに居ない。
これほど近くに居るのに、彼女は近くに来ない。

だがしかし、ヒカルはそんなルイの貌を見つめて・・・笑った。
「ああ、ここにお星様が・・・私の行き着きたい星はここにある」
彼女はそう言って、ルイの瞳を覗き込んだ。
「いつまでも堕ちないから。いつまでも輝き続けるから。だから・・・だからルイの星に行きたい」
そして微笑んだ。
淡い柔らかな微笑みで・・・彼を照らす。ルイはその言葉を聞き終わると、僅かに・・・本当に僅かに目を細めた。

「・・・ルイは太陽も星も持っている。お日様とお星様でできている」
「そこに月は無い」
「それなら、今度は月を呼び寄せよう」
彼女がそう言ったので、彼は大きく溜息を漏らし、次に、勢いに任せて彼女の額に自分の額を押し当てた。
彼女の睫が彼の秀でた額にあたる。
ヒカルの瞼は激しく瞬いている。
驚愕するヒカルの動きを塞き止めるように、彼は、強く・・・彼の額を押しつけた。
無言で彼の温度を乗せるルイの真意が読み取れず、ヒカルは続けようとした言葉をそのまま発するしかなかった。
「ルイならできる。だって、星辰の子だもの」
白金の髪の男達は、月の色のようだと例えられている。つまり・・・月を従えるということは、あのフランスの華を従えるということを・・・彼女は理解しているのだろうか。

もし・・・シャルルがヒカルの言葉を聞けば、少なからず平穏ではいられないだろう。
彼女は当主の寵愛だけではない何かを求めて、自我を芽生えさせようとしている。
・・・それは、シャルルの定めた運命の人とは違う人生になるかもしれないという予兆であった。
それは至極当然のことだ。
間違いなく、ヒカルはあの人の娘でありながら、あの人ではないのだから。

やがて、彼は額を離した。そろそろ刻限がやって来たからだ。
年端もいかないヒカルを外に連れ出したことが、アルディ家当主の耳に入る頃だった。
本当は彼女が願い出たとしても、結局は、ルイの責になる。あの男の盲愛はいつもそうだった。
愛した者を否定しない。
一見否定して拒絶することもあるが、一度内に入れてしまうと、彼はなかなか・・・覆さなかった。
思考を切り替えて、論点を変更し、そして違った視点で物事を幾通りも考えることができるはずなのに。シャルルはそうしない。
けれども、ルイはそうすることにしていた。

不安そうな声が聞こえてくる。ヒカルの声は少女期特有の声で、ルイの耳に障った。特に、こんな静かな星闇の中では。
「ルイ？」
「今日はこれで満足することにする」
彼はそれだけ言うと、ヒカルから躰を引き離した。僅かに微笑んでいるので、ヒカルが不思議そうな顔をしていた。・・・彼女には理解できないだろう。
おそらく、いつもの彼と少し違うようだということには気がついたかもしれない。
けれども、その先にまで考えが及ばない。それは、彼が星辰の子であって、彼女がそうではないということに起因する。

何を満足したのかわからないものの、それ以上、ヒカルは質問しなかった。ルイは決して応えないだろうと思ったようだ。それは正解だった。
「戻るぞ。・・・・オレは忙しい。これからやることがある」
「こんなに遅い時間なのに？」
彼から突き放されたように躰を押されたヒカルはルイから少し離れて彼に向き直った。
怪訝な顔をして、首を傾け、彼女がそう言ったので、ルイは冷笑した。
「オレの星に連れて行けと言ったのはヒカルだ。その言葉、忘れるなよ。撤回は認めない」
彼はそこまで言うと、いつもの高慢な物言いに戻っていた。
軽く彼女を見下ろして、そして金の髪を掻き上げる。
シャルルとよく似た顔であったが、それでも、彼はこんなふうにヒカルを冷たく見返ることはなかった。

そして彼は自信たっぷりに宣言した。
薄い唇の端が持ち上がった。
周囲は街灯もない薄暗い場所であるのに・・・彼の眩い金の髪と青灰色の物憂げな瞳は、日の光の下に居るよりも明るく鮮明に輝いていた。

星がひとつ、また流れていく。

彼はヒカルの頭上でそれを見ながら、ゆっくりと言った。

・・・彼は彼女に約束した。
誰とも約束を交わさないのに。いつとは知れない期限のない未来は確約しないのに。
それでも・・・ルイ・ドゥ・アルディはヒカルに向かって、はっきりと言った。

彼はやがて少し掠れた声で言った。
普段から大きな声は出さない彼であったが、ますます密やかな声で、彼女に囁くように言う。
しかしその声量だけでも十分に伝わるほどに、周囲は静かであった。
抑揚のある声を彼女に届けるのは、周囲にはルイしかいない。
その他の音は・・・みな、星空に吸い込まれて行く。
そしてその音や温度や風を吸い込んで乾（※そら）は一層・・・輝くようであった。

「ヒカルを・・・星の原の果てに連れて行く。嫌だと言っても認めない」

ヒカルはルイ・ドゥ・アルディの顔をしばらく見つめていた。
彼の言っている意味を理解していたら、そんな風にルイを見つめることなどできはしないはずなのに。
まだ彼女にはこの言葉は届かない。
彼は黙ったままでヒカルを見つめた。
二人の視線はいつもよりずっと近い場所にあった。

そして・・・しばしの沈黙が訪れる。

見上げたら、星の雨が降っていた。
すべての音を吸い込んで、それらは音もなく静かに堕ちる。
それは涙のようであった。ヒカルが流さない涙の代わりに、多くの星が堕涙する。彼に向かって。正確には、彼と彼女に向かって。

乳白色の天の戸河が、彼らの頭上を覆う。
しかし彼女と彼は空を見上げなかった。
各々の瞳に映っているのは、空の晄ではなかった。
ヒカルが眺めているのは青灰色の星だった。
星辰の子と呼ばれるその人は、星を随えている。
それを実感したと言うような、神妙な面持ちでヒカルはルイをしばらく観ていた。
彼女の目の前には、星の河を見たいという、彼女の願いを叶える・・・星原の中でひときわ強く輝くアルディ家の星辰が佇んでいた。

やがて・・・その言葉を以前に聞いた時には涙を浮かべていた彼女は、今度は微笑んだ。
明るく、輝くように。それでいて僅かに哀しそうに。
彼女は無邪気に微笑むように見えてその根底にはいつも罪悪感がある。
残された自分だけ倖せで良いのか、とか。
残された自分だけ先の路を進んで良いのだろうか、とか。
いつも、そんな風にして彼女の記憶の中で永遠に劣化することのない若い夫婦のままの両親を思い出すからだ。
彼女の顔を自分で見る度に。
シャルルが彼女を通して、彼の唯一のファム・ファタルを思い出す度に。
・・・しかし、彼女は微笑んだ。笑った。
彼に泣き顔ではなく、泣きそうな顔でもなく、微笑んだ。
そこに悲哀が混じっていても。
彼だけに向けた笑顔であった。
彼だけが知っているヒカルの笑顔だった。

「嬉しい。・・・願い事が叶う」
ルイ・ドゥ・アルディは整った顔をそのままにして横を向いた。
彼女のこの返答に、彼は行動を伴うことができなかったのだ。
そうしないと決めたわけではない。
そうできなかったのだ。
・・・・彼はルイ・ドゥ・アルディであるのに。
彼は・・・数多の天体を従える人物であるのに。ヒカルのこの反応に予測できなかった自分を認識し、そしてそれを否定する材料がないことに辟易した。だから、素っ気なく彼女に回答する。

「だがヒカルの希望は聞いてやるだけにする。
オレがそれを採用するかどうかは保留にしよう」
「どういうこと？」
彼は嗤った。彼女の思考過程と速度は彼のそれは違う。教育された環境も。
だから、質問は受け付けないというルイの思考に今でも彼女は・・・・ついて行けない。
それが苛立たしいのではない。
だから微笑んだ。ルイは滅多にそんな微笑みを浮かべることはない。特に、ヒカルに対しては。
星のあかりだけでは彼の微妙な美綻はヒカルに届かなかった。
それでも良い。
いつか・・・彼女は・・・闇の下であっても晄の中であっても、彼のことだけを考えるようになるのだから。

「ヒカルとは期限付きの約束をしないということ」

彼はそれだけ言うと、帰る、とだけ言った。
そして彼女に声をかけた後は、今度は彼が彼女に背中を向けた。
少し先に停車してある車に乗り込むためだ。
しかし、彼のいつもの態度や表情を保持できる率が格段に低下していた為であるという理由についてはヒカルに明かすつもりはなかった。
彼は誇り高いアルディ家の者であったから。

彼女は天を観ながら、肉親が消えた海の暗さを思い出す。
そして、そこに希望と願いを込める。

いつも、いつも。
ヒカルは自分のためには願わない。
それなのに、彼女はルイの星に行き着きたいと願った。
これが彼を震撼とさせたことに、彼女は気がつかない。
なぜ・・・・ヒカルの言葉はいつも無防備で無邪気で、それでいて残酷でありながらも彼を満たすのだろうか。
ルイは彼女の唯一になれないのに。彼女はルイにそれを望まないのに。
その彼に願いを吐露するヒカルは・・・実現が難しいことばかりを強いる試練の使徒のようだった。

・・・・ひときわ、星の輝きが明るさを増したように見えて、ヒカルはルイ・ドゥ・アルディの背中を見つめた。

彼は星辰の子だ。
あらゆる天体を従える。
まさに、その名の通りだった。
太陽のような見事な金の髪と、星のような青灰色の双眸に・・・どこからどこまでもが美しい容姿を持つ。
彼に見惚れて星さえ彼に向かって堕ちてくるようだった。

「置いて行くぞ」
彼はそれだけ言うと、立ち止まったままの彼女を待たずに歩き出した。
ヒカルは慌てて、彼の背中に向かって小走りになって近寄ったが、彼はもう、彼女を見なかった。
そっと・・・額に自分の指先をあてた。

・・・先ほどルイに押し当てられた額が熱かった。
同じくらい、自分の頬は熱かった。

なぜなのだろう。

けれども・・・彼女の日々感じている願いが今夜、叶った。
この短い時間で、何ヶ月分もの話をしたように感じる。
自分自身のために願う彼女の希望はいつも小さいものだった。
だから、いつも・・・静かなアルディ邸の別棟に晄が入るときに、そこに願っていた。
ルイがそこに居るからだ。今夜は星空が美しいと教えられて、よく見える場所で流れ星を見つめようと思っていたら、星辰の子がやって来た。たとえ気まぐれでも・・・・ヒカルは驚喜した。
彼は彼女を星の原に連れてきた。
そして、彼女の小さな願いを叶えた。

もっとルイと話していたい。
もっとルイを知りたい。

彼は寡黙だから、いつも多くを口にしない。
また、確約もしない。
それなのに、約束した。
ヒカルを星に・・・彼の星に連れて行く、と。
彼は実現しないことを述べることはしない。

「ルイ・ドゥ・アルディの星というのはどれほど素敵なのかしら」
ヒカルは、ルイの歩幅に合わせるために、更に歩調を速めて彼に話しかけたが、彼は斜め上の昊を見上げて彼女を見下ろすことはしなかった。
「教えてやらない」
「知りたい」
「不必要だから言わない」
いつもならヒカルは、彼にこんな風にして繰り返し言葉を求めることはしないのに。
今日はどういうわけか、・・・彼を知りたくなった。
素っ気ない彼の言葉は、いつになく単語数が多いように思えて、ヒカルは微笑んだ。
「それなら・・・必要が生じたら、言ってくれる？私にも教えてくれる？」
「考慮する」
彼の言葉に、ヒカルは飛び上がりたいほどの喜色を隠すことができずに、微笑んだ。
彼は自分の内をさらけ出すことはしない。
けれども・・・彼は、彼女を連れて行ってくれるのだろう。彼女が望んだ世界に。もう、ひとりにならない世界に。
それはどんな場所なのだろうか。

「ヒカルを喜ばせることはしない。期待は勝手にすれば良いが、失望を擦りつけるなよ」
彼がそう冷たく言ったので、ヒカルは言葉に詰まる。
少し、上を見上げると、斜め前上に彼の整った横顔があった。溜息が出るほど美しい横顔だった。

「私の考えていることがわかるの？」
「顔に書いてある」
ルイはそれだけ言うと、ふい、とまた正面を向いた。

「帰るぞ」
その時。ヒカルの唇が横にきゅっと強く引かれた。
・・・彼の一言が、彼女を揺さぶったから。

帰る。

ヒカルとルイの帰る場所は同じなのだ。
先ほどは「行く」としか言わなかった。いつもそうだった。
アルディ邸に戻る。彼はそこを自分の住処とは思っていない。単なる滞在場所でしかない、といつもそう言っている。けれども。
けれども・・・

「ひとりで笑うのは構わないが。・・・品性がさらに欠けて見えるから、並んで歩くなよ」
ルイがそう言ったので、ヒカルは目を見開き、慌てて綻びを落とした。
「はい・・・・」
それでも笑みがこぼれる。嬉しくて・・・涙が出そうになる。
ルイ・ドゥ・アルディはそれを見て、肩を竦めただけだった。今度は何も言わなかった。そして、ヒカルに気がつかれないように、彼女の歩調に合わせてゆっくりと歩く。ヒカルはその隣を歩いた。先ほどは彼の迷惑そうな顔を見るのが哀しくて、星の原に夢

中になっているふりをした。けれども・・・
彼と並んで歩き、その目の前に広がる星の帯は、先ほど眺めた星景より、更に美しいと思った。

家路に帰る。ふたりで、帰る。

ふたりの間は、先ほどと比べてずっと距離が近かった。

星辰の子という称号を持つルイ・ドゥ・アルディと、永遠の晄という名前を持つヒカルは並んで歩いた。

星がまたひとつ流れた。
ふたりに向かって墜ちていった。

（FIN）

星の林　2010七夕

■01

たくさんの流星群が煌めき晄の穂を棚引かせながら落ち行く様に、ヒカル・クロスは歓声を上げた。
星空を見上げて密集し白濁する星の林に、ヒカルが感歎の声を漏らす都度、ルイ・ドゥ・アルディの物憂い青灰色の瞳はつまらなさそうにため息を落とす。
彼の興味の対象は、目の前の・・・女性と言うにはまだ成熟しきっていない、幼い仕草の目立つヒカルではなく、彼の最近購入した車にあった。
McLarenのMP4-12Cのボディをさらに軽量化させるのに苦心した。
マットブラックではなく、敢えて手入れを入念にする必要のあるパールブラックのボディが、塵一つ落とすことなく、艶やかに煌めいている。
ヒカルにはこの理想的な流線型の角度や、空気抵抗を考慮してなお美しいフォルムを保ち続ける素晴らしい文明の力学の応用について、まったく理解できていないようだった。
茶色の瞳を輝かせて、彼女が意識を集中しているのは・・・
この暗闇の中に浮かぶ大空の星辰だった。
目の前の、星辰の子には・・彼女はこれほどまでに目を輝かせないのに。
夜風に晒されて、彼女の茶色の髪が少しだけ揺れた。
気持ちの良い風だね、とヒカルは言う。
ルイがこの風を煩わしいと思っていたとしても、彼女はいつも・・気持ちがよいね、と言う。まるで、共有できることそのものが心地良いと言うかのようだった。

「・・・ルイ！今日は天の河が・・・ああ、なんて素晴らしいの！」
「ヒカル、単語の羅列ではなく、もう少し文章にして話をしてくれないか」
見事な金髪の下で、彼の切れ込んだ双眸が少し動いた。
星辰の子、と呼ばれて久しいルイ・ドゥ・アルディは、彼が従えるべき星の原には、興味がないと言いたげだった。
上を見上げてしきりに歓声を上げるヒカルに呆れて言葉が出ない。
恐ろしく整った顔は、無表情で、時折、ぴくりと眉を僅かに動かして、ヒカルの叫声にも似た声音に不快感を表す。

パリの16区にあるアルディ邸では、どんなに照明を落としても、周囲の光源によって、星空を観測するというまでに見ることができない。
昨今の、セキュリティ保守に関する16区内での申し送り協定によって、完全消灯することは控えるように言われているからだ。
彼ら要人が多く住む地区であるからこそ・・・不審人物の排除に関しては、共通の駆除方法を適用することがあっけなく承認されたばかりだった。
これとは別に、アルディ家では、更に強固な警護防犯システムが導入されたのであったが。

彼女が敢えて歓呼の声を上げるのは、自分自身を偽っているからだということに、ヒカル自身、気がついているのだとルイは推し量っていた。
ヒカル・クロスは良く言えば素直であり、悪く言えば自己がない人間だ。
それでもなお、彼の一族の頂点に立つシャルル・ドゥ・アルディは、ヒカルを妄愛する。
それが彼女をさらに固い自己の殻に押し入れてしまうということを承知していながら、シャルルは、愛して欲することをやめることのできないファム・ファタルの忘れ形見として、ヒカルをこよなく愛する。
それが、疑似家族を作り、ヒカルの未来への選択を狭め・・そして様々に影響する要素となり得ることを知ってなお、ルイの父は娘ほどに年齢の違うヒカルに愛を注ぐ。
娘でもない。恋愛対象でもない。
それなら・・・彼女への愛は、一体何を示しているのだろうか。
ルイに対しては冷淡を通り越して残酷と言っても過言ではないほどに、感情の波を寄せるとのないシャルルに対して・・ルイは何かを期待することをやめて久しい。
その代わりに、彼が愛してやまないヒカル・クロスを手に入れて・・・いつかシャルル・ドゥ・アルディに成り代わり、アルディ家の頂点に君臨する日を、静かに見えるが水面下では激しく躍動して待ち侘びている。
■02

ヒカルの無邪気な声が障ると言いたげに、ルイは軽く首を振った。
彼と彼女は・・車両の運転手席側と、助手席側の対岸に居た。
今日は大空の湿度の具合が良く、少し走らせて、パリの郊外からほんの僅かに離れた場所でさえ、空模様が星の宿りを明るく位置示していた。
GPS機能が搭載されたこの車の追跡調査で、後ほど、アルディ家の護衛の車が追いついて到着するだろう。
そうなれば、ここは複数のエンジン音で・・・静寂が破られるだろう。
誰も追いかけてはいけないと言ったものの昨今のセキュリティ対策や・・・シャルルが過保護と言っても過言でないほど、ヒカルの行動について細かく監督している以上は、これから先は、このまま、少し広がった空閑地で留まる他には、行き先はなさそうだった。

行き先がない。

それはルイ・ドゥ・アルディの未来を示唆しているようだった。
行きつく先がない。行き着く先が見えない。
彼が目指す岐路のように見える四つ辻というのは、実際にはひとつの辻しか進むことが出来ない。
たくさんの選択肢があるようでない。
■03

このまま、ヒカルをシャルルから遠く引き離したら、あの男はどう出るだろうか。
失って初めて知る喪失感というものを、あの男にもう一度与えたら、今度こそ・・死にたいと思うだろうか。
あの時のように。
ヒカルの母を亡くした時のように、夢現を彷徨うのか。
・・・・生きていたくないと思うほどの打撃を与えられるだろうか。

エンジンが空気を焦がすちりっという音が僅かに聞こえるばかりの静かな空間だった。
これほどまでに星空が澄んで、見渡せる空間というのは珍しい。
落ちてくるような星の渦の中で、ルイは上を見上げているばかりのヒカルの様子をじっと観察しているばかりだった。

ルイはシャルル・ドゥ・アルディと良く似た青灰色の瞳で静かに・・・彼女の様子をひとつひとつ映像にして記憶に留めていた。
シャルルの知らないヒカルを服膺する。
いつか彼の恪気をかき立てる材料になるかも知れないと思いながら。
彼女は大変に、彼女の母に似ていると言う。それでいて、彼女の父にも似ていると言う。
シャルルの愛でた人と、彼の唯一無二の親友の特質を受け継ぐ晄の娘を・・・
それなら、自分は・・・自分は一体、誰に「似て」いるのだろうか。

シャルルは彼らと同じように、娘のようにヒカルを愛するのだろうか。
そんな風に穏やかに誰かを愛することが出来ることをあの男は証明することができるのだろうか。
この薔薇の一族は・・・業が深い。果てのない欲念が彼らを支配している。
・・・自分も含めて。

「ルイ？」
彼は声をかけられて、我に返った。
薄暗がりの中で・・・ヒカルが車体の反対側からこちら側に移動して来ていたことに気がつかなかった。一体、どれくらいの時間が経過したのだろうか。
視線を近くまで戻すと、意外なほどヒカルが接近して、ルイの顔を心配そうにのぞき込んでいた。
茶色の瞳が・・・濡れたように光り、ルイを見つめている。
彼は吐息を漏らした。
ヒカルの頭上に広がる空で輝く数多の星が落ちてきそうなほどに近く感じる。
あまりにも大量の星が煌めくので、空は・・少し白っぽくなっていた。
天の河と言われている星々の群の下で、ルイとヒカルは少し無言で互いを見つめ合っていた。
やがて、沈黙を破ったのは、ヒカルの方だった。
視線を激しく動かして、落ち着かないと言いたそうだった。

「空が・・星が・・綺麗だよ」
大気の状態でこのように鮮明に星明かりを観測することができるのだが・・・
ルイは黙ったまま、空を見上げることもなく、無表情にヒカルを見つめていた。

それでも、ヒカル・クロスの考えのなさに、少しばかり、ルイは苛立っていた。
彼に空を眺めようと言うヒカルの申し出に従う気はなかった。
彼女をここに連れてきたのは失敗だった。

「ヒカルは愚鈍だ」
ルイは突然呟いた。
ルイの思考の速度は、ヒカルのそれとは違う。
彼女には遠く及ばない、彼の様々な物憂い参勘に、ヒカルは時折口をつぐんでしまう。
この家の者たちは皆、ヒカルと違う速度で生きている。だから時折・・・ヒカルは話について行けない。
シャルルだけが彼女のために歩みを止めるが、それ以外の者たちは皆、ヒカルと違う速さの波に乗り、そして彼女を追い越して行ってしまう。

「うん、そうだね」
ヒカルはそれをいとも簡単に認めた。
「そう思うのなら、オレがなぜ、ここに貴女を連れ出したのか・・理由や意味を考えようとは思わないのか」
ルイが呆れて言ったが、ヒカルはそれほど時間を置くこともなく、返答した。
少しはにかんだように笑った。
彼女は嬉しいときにはこのように少し恥ずかしそうに笑う。
「私はルイやシャルルのように、深く物事を考えることが出来ないから・・・。
だから、ルイが・・・自分のお気に入りの場所に、私を連れてきてくれたことを、単純に歓んでいる」
■04

「『連れてきてくれた』？」
ルイは普段、滅多に言葉を繰り返さないのに、今回は彼女の言葉の最後を繰り返した。
彼は一生の間に使う時間も、言語や単語の数も、そして自分の鼓動数さえも決めてしまっているようだった。
もちろん、ヒカルとの会話の数さえも。
この星々は無数に見えるが、実は有数である。
ルイ・ドゥ・アルディは星辰の子、と言われている。
彼が従えている星は・・・彼が背負っている星々は、彼を煌めかせるだけではなく、彼の足下の陰を更に濃くしていく。

「随分と傲慢な発言だね、ヒカル。今の言葉は記録から削除しておいてやろう」
ルイはそう言うと、酷薄そうな薄い唇を歪めて嗤笑した。
夜目でも彼の金の髪の輝きがよく見える。
ヒカルはそんな彼の姿が神々しくて美しくて、目を少し目を細めた。
ルイは完璧だ。
フェンシングと乗馬で鍛えられたその体躯は細い鋼を思わせる。
長身で筋肉質であるのに、服を着ると華奢に見えるのは、彼の父から譲られた特質だった。
それだけではない。
上品な、物憂げな青灰色の瞳も・・・恐ろしい程までに整った顔立ちも、細く長い指も、知性溢れる会話の運びを選ぶことなく披露して、誰も彼も魅了するアルディ家の唯一の当主の実子。
彼は何もかもを兼ね備えている。
しかし、彼が彼だけの称号として星辰の子と言われるのは・・・彼を中心として、星々が巡るからだ。
ルイの称号だけがそう言わせているのではない。
生まれながらにして、アルディ家の当主となるべく、シャルルの庇護とミシェルの教育と己の才幹によって彼はここまでやってきた。
その彼が、自分にどうして冷たいのかも・・・ヒカルはよく承知していた。

冷たいのに、こうして時々、彼は意図の不明な行動に出る。
星を観測したいと呟いたヒカルの言葉を実行するために、予告もなく彼女をアルディ家から連れ出した。

「愚鈍で、高慢で・・・そしてどこまでも恬澹としているようで欲深なヒカル。
どうしてそんな矮小な人間を、シャルルは愛でるのかな」
誰に問うわけでもなく、ルイは歌うように囀るようにそう言った。
こうして彼女を貶める言葉も・・彼の中では理由と順序と過程がある。
この問いに、彼女はいつも答えられない。
いや、彼女は知っているのだ。
アルディ家の娘ではない彼女がこれほど殊遇を受けているのは、彼女の母がシャルルの運命の人であり、彼女の父がシャルルの親友だったからだ。
シャルルは命にかえても、ヒカルを護ると公言している。
彼女を単なる客人としてもてなしているわけではないことも、それでいて公の場に彼女を引き出して、静かな生活を壊すつもりもないことも、昔から変更していない。
当主の予定は絶対であり、それは確実な未来になる。
ヒカルだからシャルルは愛でるのではなく、シャルルの大事な人達の娘だから、ヒカルは大事にされているのだと彼女はよく承知しているのだ。

それを知っているからこそ、ルイはこの質問を繰り返す。

彼は繰り返すことはしないのに。
この問いだけは・・・繰り返すのだ。
夜の星空の下で、泣きそうな顔をして困った表情をするヒカルを冷たく見つめる。
沈黙が訪れて・・・彼は唇を閉ざした。
ヒカルが涙ぐんでいることを知ったからだ。

星が落ちてきそうなほど近くに感じる。この圧迫感が、彼女を不安にさせていることもよく知っていた。
彼女の両親が墜ちた場所は・・・こんな風に、星が墜ちそうなほど澄んだ空の下の海だった。
彼女は幼いときからパリの16区に住んでいるから、こういう星々を見ることは滅多にない。
あえてシャルルは様々な場所にこっそりお忍びでヒカルを連れ歩いたが、結局は、あの悲惨な墜落現場に似た景色だけは見せることはなかった。
最初に、沈黙を破ったのはルイだった。

「どうしてつまらない者ほど、都合が悪くなるほど黙るのか、一度、論文を書いてみたいくらいだよ」
彼はそう呟いた。

シャルルは見せない景色を、ルイはヒカルに見せる。
彼女が不安に思っていても、シャルルが心を痛めて見せまいとしていることも・・・それでもルイは目をそらすな、と言って見せる。
彼とシャルルは違うのだ、と主張するかのように。

「気に入りの場所なんかではない、ヒカル。こんな場所はいくらでもある。探せばね」
「・・・探したのね」
彼が低い車高のボディに目を遣った。
今度は、彼の言葉をヒカルが繰り返したからだ。
ここは気に入りの場所などではなく・・単に「星が見える場所」として設定されただけにすぎない。彼がつまらなさそうに言ったが、ルイの執着する場所、ということを否定する代わりに、その言葉は、彼がヒカルのために場所を探して、連れてきたのだということを証明してしまった。
彼は完璧なのに。

どういうわけか、ヒカル・クロスの前では完璧になることができない。
■05

「その質問に答える義理はないよ、ヒカル」
「質問じゃないわ、私の・・・そう、私の独り言」
「随分と大きな独り言だね」
そうね、と彼女は笑った。
少し気をつけないといけないわね、と言った。
声が少し鼻声でくぐもっていた。
もっと明るいところで見れば、彼女の茶色の瞳は、涙で潤んでいるのがはっきりと見て取れるだろう。
しかし、彼女は人前では決して泣かない。
それが彼女の唯一の誇りであるかのようだった。
「でも、ここなら誰にも聞こえないから」
ヒカルはそう言って、空を見上げた。どこまでも深く吸い込まれていきそうな程高い空に、光沢のある玉水が煌めいて、ヒカルの落とし損ねた涙のように見えた。
泣かせたいわけではないのに。
いや、泣かせたいのだ。
誰もが彼女に涙させることはできない。
誰もが彼女を変えることができない。
そうしないことが、彼女の唯一の抵抗であるかのように思った。
パリにやってきて・・・彼女は生国での記憶を失いつつある。
幼い時に得た残像記憶が薄れないように、シャルルはいつも・・・ヒカルに鮮やかな景色を見せ続けるが、それは彼女が本当に望んだことなのかどうか・・・

「せっかく、黒い車体の車を選んでくれたのに、ね」
ヒカルがそう言ったので、ルイは苦笑した。
「ヒカルの為ではない」
「そう？」
彼女はくすりと笑った。泣いたかと思えば、笑い出す。
ヒカル・クロスという生命体は、本当に、よくわからない生き物だった。

「こんな夜空に、・・・星見の夜に似つかわしいように・・ルイがまだ手入れの行き届かない新しい車を用意した。これって、私は感謝しないといけないのだと思うわ」
「勝手に感謝でも感激でもしてくれ。オレには関係がないし。この車がヒカルのために用意されたものでもない。・・・傲慢な女だな。まったく、呆れる」
ヒカルがこの夜空を肉眼で見るには、この空は・・・明るすぎた。
星が堕ちてきそうな、星の林の中で、確かに明るいボディの車では、観測が難しい。
東洋人の体質が出ているヒカルの肉眼では・・この星空の煌めきは、反射するものがあまりない状態でなければ、最良の状況で視認することが出来なかった。
■06

「流れ星が・・・数え切れないくらいだわ」
ヒカルがそう言って、空を見上げた。
茶色の髪が、背中を覆っていたが、真上を見上げていたので、白い横顔が見えた。
今日は新月で、月明かりによって遮られていた星々が最もよく見えた。
「ルイがお天気にしてくれたのかな」
彼が星辰の子と呼ばれていることに対する、ヒカルの讃辞だった。
ルイはまだ黙ったままだった。
彼がなぜ、そう言われていて、未だにシャルルの後継として認められないのかについて触れなかったヒカルを狡猾な女だと思った。

彼は、もう、とっくに「星辰の子」と尊称される時期ではなかった。
彼はそう強く願えば、妻を娶ることもできるし・・・「子」と呼ばれることはもうなくても良い時期にさしかかっていた。
実際に、ルイの年齢とあまり変わらない時期に、シャルルを父としてルイは誕生していた。
親族会が望めば、同じ歴史が繰り返されるだろう。
しかし、そうはならない。
確率は低かった。
とても、とても。

彼はいまだに、シャルルの息子と言われ続ける。
彼を「ルイの父」と呼ばせることができない。
ひとえに、彼が継承を拒否しているからだ。
ヒカル・クロスの身を保護するために、彼は長い時間、当主の席に君臨し続ける。
生きながらに地獄の業火に灼かれるのは・・・誰なのだろうか。

「星を見るとね・・・お父さんとお母さんを思い出すの」
ヒカルがぽつりと低くそう言った。
「小さいとき・・まだパリに来る前には、お父さんとお母さんは星になったと聞いた。
フランスでも・・こんな星空の綺麗な夜だったそうよ。日本でもそうだった。
視界が良くて、それなのにどうして墜ちたのか、わからないくらい・・・見渡しの良い空で、そこで空港まで見送ると言って
私は・・・流感だったのに、愚図ったことだけ覚えている。お母さんとお父さんが私を置いて出掛けてしまうことがいやだったのではなく・・星空が見えないと聞いてとても残念だったことを覚えている」
他のことはあまりよく覚えていないのに、不思議だよね、と言ってヒカルは自嘲した。
彼女は上を見上げて、黙って聞いていたルイに言い聞かせるでもなく、ゆっくりと語り始めた。
星の晄に魅せられて、これまで沈めていた胸の記憶を言葉にすることで蘇らせているようだった。

「次に、海に還ったと聞いた。ある人は、天使が迎えに来たんだ、と言った。
シャルルは彼らが見つかるまでは希望を捨てるな、と言ってくれた。
でも、どれが本当かわからなくなっていた。
どこに行ったんだろう。星でも海でも良い。
どこを見れば、私のお父さんとお母さんに逢えるのだろう。
どこに話しかければ声が伝わるのだろう。
そんなことばかり考えてた。

・・・だから星空を見る度に、何を信じて何を考えれば良いのか、それを考えることに一生懸命になりすぎて・・・」
そこで彼女は言葉を切った。
ルイは少しばかり興味深そうに青灰色の双眸をヒカルに向けていた。
彼女はあまり口数が多い方ではない。
自分のこともあまり話をしない。ましてや、アルディ邸に居る時には、彼女から実の両親の話をすることは決してなかった。

「ルイ、今日はありがとう。・・・星を見て、思い出した。
本当はこんなに満天の星空と天の川を見るのは怖かったの」
ヒカルは素直に礼を述べたが、ルイは黙ったままだった。

「吸い込まれていきそうだけれど、私だけ取り残されている・・・輝いていない星の紛れ（おぼろげな晄しか発しない星のこと大気の状態に影響する）だと思っていた。
誰もが言うことが違うのは、各々に住まうお父さんとお母さんが居るから。
星を見て思い出す人も居れば海を見て帰りを祈願する人も居る
それは私のお父さんとお母さんだけれど、それは私から見ただけで、他の人から見たカズヤ・クロスとマリナ・クロスはちゃんと・・みんなの中に生きている。帰りを待っている。
だから。
・・・・私のお父さんとお母さんは、私が見ているところに居る。
星でも海でも風でも・・・あの人達は、自由だから。
ただ、それだけなのだと」
彼女は空を見上げた。両手を伸ばして・・・・無邪気にルイに囁く。嬌声ではなかった。歓声でもなかった。涙を含んだ祈声だった。

「ルイ・・・星の林が広がっている。
ルイは、こんなに・・・こんなに零れそうなほどの星を従えているのね」
■07

「流れ星が・・・数え切れないね」
流星群が近接しているというわけでもないのに、流れ星が多々墜ちていく様がよく見えた。
ヒカルは声を上げる。
「何か、こういう時には祈り事をしないといけないのかしら」
ヒカルはそういって嬉しそうに流れ星が次に堕ちて来るタイミングを伺って瞬きの速度を遅くした。瞼を閉じている間に、彼女の願いが消えてしまわないように。
しかしルイはその様子を窃笑しながら見つめていた。

願い事は叶えてもらう者ではない。
・・・実現させるものなのだ。

どんなに多くの星々を従えていても。
星の林を支配したとしても。

それは、ルイの欲しいものではない。
それは、ルイが必要としているものではない。

・・・ヒカルは・・・まだ、わからないのだろうか。

「お喋りはそろそろ聞き飽きた」
彼は素っ気なく言ったが、ヒカルがひとしきり嗚咽を堪えて落ち着くのを待ってから・・・時間のないルイには珍しく相当の空白を置いていた後の言葉だった。
「言いたいことは終わったか」
「うん」
ヒカルの返答は幼かった。
まるで・・・初めてアルディ邸を訪れたときの頃に戻ったような返事だった。

「今日は来て良かった。ルイのことが少しわかったから」
「オレの何がわかったと言うんだ」
ルイが少し苛立たしげに言った。
それまで寡黙だったルイがいつもの口調より少し速めで彼女に糺問した。

「自分のことばかり話したかと思えば、オレのことがわかった？
ヒカル、君は随分と・・・空想の住人と話をするようなことを夢見たりするくらい、妄想するのが得意なようだけれども、人に聞かれると精神状況を疑われるから、そのつもりで言動には配慮してくれ」
闇夜で何も見えないのに、彼の苛立った妍麗な顔立ちが浮かんでくるようだった。

「星見を希望する脳天気なヒカルのために、こうしてやってきたことから、オレが慈善事業をしているっていうことを理解してくれたのかな？」
「ルイ、そういう風に自分のことを言わないで」
「言わせているヒカルに責任があるだろうね」
ルイは他人事のようにそう言ったので、ヒカルは黙り込んでしまった。
彼女は都合が悪くなるとすぐに黙り込む。本当に厭な女だ。
■08

彼はとんとん、と寄りかかっていた車体を指先で叩いた。
肘を車体に軽く当てていたが、彼の整った顔がヒカルをにらみ据えていた。
パールブラックのボディに・・・ぼんやりと星明かりが照らし出されている。
「オレがここに来るのは、このボディが気に入っているからだ。
どれだけ塗装されても、ボンネットの曲線に湾曲が混じっていれば存在価値がない。
周囲が無点灯の悪路を、どれだけ走行できるのか、足回りの状態を知りたかったから。
ただ、それだけだ」
ルイは、ヒカルを乗せるために用意したものでもなく、ヒカルをここに連れてくるために場所を探したとは言わなかった。

気が向いたから・・・・
そう、ただそれだけだった。
シャルルが不在で、彼女は夜のフライトに搭乗すると言ったシャルルのことを酷く案じていた。
また・・また、いつかの惨劇が繰り返されるのだろうかという杞憂だった。
アルディ家のプライベートジェットを使用するから問題ないとあれほどシャルルが説明を加えたのに。
そして、そんな外出はいつものことであるのに。
彼女は・・・ここ最近、シャルルのフライトには酷く神経質だった。今頃になって。

ふさぎがちになり、一度部屋に入れば、出て来ない。
ルイの別棟からは、本邸の電灯がよく観察できるのだが、彼女の部屋だけは、明け方になっても明るいままだった。
・・・いつだったか、バルコニーに出て空を眺めている姿を見かけたことがある。
アルディ邸は常夜灯が設置されているので、空を見上げても郊外の別館のように鮮明に天体を観測することは出来ない。
そんなことはわかっているはずなのに。

星が見えないと言ったような、がっかりした表情を創っていることは、遠目にもわかった。

・・・いや。違う。
シャルルのことを考えて、彼女は・・・空を見上げているのだ。

幼い時には、感じていなかった情動がヒカルを突き動かしている。
そんな変化が彼女に訪れている、と彼女は気がついているのだろうか。
少女から・・・もっと違うものに変化し始めていることを認識しているのだろうか。
きっかけや理由はないのだ。
ただ・・・・シャルルが丹精込めて育てたアルディ邸の最上の華が・・・今。

莟をつけて咲こうとしているのだ。
それが苦しくてシャルルはああして業務を理由に彼女の傍を頻繁に離れている。
それなのに、すぐに戻ってくる。だから、夜間の移動を好むのだ。
極力不在日数を減らすために。
彼女が目覚めて彼の為に最高の薔薇を部屋に飾る前に。彼は戻って来る。
夜の帷の中を、晄る娘のために彼は夜空を駆け抜けてくるのだ。
・・・夏の時期はまだ先なのに。どうしようもないほどに。シャルルがヒカルに対して何かを感じていることを、彼女は感じ取って・・そして彼に向かって花片を開かせようとしている。
彼は、当主は・・・彼の愛でているファム・ファタルの花の香りが強くて・・・狂いそうになるほどの熱情をひた隠しにしている。

彼女は、ルイの遠い記憶の中にあるあの人に、ますます似てきた。
もっと・・もっと若い頃から知っているシャルルから見れば、ヒカルの成長を見守ることは、彼にとって喜びをもたらすのではなく、ただ久遠の苦悶を運んでくるだけだ。

何をしても、あの運命の人に結びつけてしまう愚かしい男のために・・・ルイはこうして生きている。
そんなことは許されなかった。
自分の子として認知しているルイより年若い彼女を、シャルルが迎え入れるには相当な障害と問題が山積することになる。
・・・しかし、あの男なら、遣りかねない。
苦難があればそれに屈しない誇り高さは、アルディ家には必須の素養だった。
不屈の精神と才覚とチャンスのすべてに恵まれた男は、一度、一族から追われている。
そのときのことを彼は忘れていない。
自分の後継になるものは自分の卑属でなくても才覚があればよしと公言している。
つまり、ルイは息子だからという理由で一切を相続できるということはない。
アルディ家の家訓の解釈について、アルディ家の条解を改めてしまったのだ。
家訓を書き換えることなく、彼は非合理的な部分について、現代の状況に即したものと言い通して改変してしまった。
だからこそもう一度上り詰めて、彼はああして長い間あの地位に君臨する。

■09

「帰る」
彼は言った。
「星に願いをかけようとしている愚かしい姫君のために・・オレはここに来たわけではないから」
苛立ちが収まらない。いつもの時よりも、ずっと。
ヒカルがいつものヒカルでないから、いけないのだ。
ヒカルが滅多に明かさない自分のことを話し、ルイに微笑むから。
・・・それなのに、シャルルのことを案じて、流星にはシャルルの無事を願って祈りを捧げるのだろう。
観測できる奔星はすべて・・・シャルルのために祈りを捧げるのだろう。
アルディ邸で彼女がひとり・・バルコニーで佇む姿を見て。
ルイは、蠢く何かを内に感じた。
別棟に戻るときには、決して本邸には近づかない。
ヒカルが居るから。シャルルが眉を顰めるから。
それなのに・・・別棟から彼女の白い姿を見ると・・・心が軋むのだ。

自分はこうして、闇夜に吸い込まれていくのだろうか。・・・狂気の男を父に持ち、狂人となった人を祖母に持った。それだけではない。
科学の粋を集めて彼は創られた。
より、アルディ家の特質を受け継ぐように。
それには・・・悩乱の輻輳をも混じっているかもしれない。
ルイは時々・・そう、時々。
ヒカルとシャルルのことを考えると、こうして苛立ちを鎮めることができなくなる。
ヒカルに必要以上に言葉をかけるのに、必要以上に・・・彼女に冷たくあたる。
この欲求が何であるかを解明するつもりはない。
しかし自分はシャルルと同じ路を歩むつもりはなかった。

シャルルは長い間・・・
気の遠くなるような年月を、あの人だけを求めている。
未だにその人だけを定めてしまっている。
「運命の女」というものをルイは求めない。決して。
ああして自己を失うほどの感情は必要ない。

ボンネットの脇で、心配そうにルイを見つめているヒカルに、彼は素っ気なく言った。
「エンジンをかける。帰るから早く乗れ」
彼は顎をあげて、反対側の運転席に座るようにヒカルに指示をしたが、彼女は動かなかった。運転席のドアを開けなければ、移動しないということか。
・・・まったく、作法だけは高慢なくらいにシャルルの教えをよく記憶している女だ。
ルイは軽く舌打ちした。
そして運転席のドアを乱暴に開けて、そのままシートに座らずにエンジンキーをかけた。
キーレスシステムを採用しないのは、このシリンダの微細な振動が気に入っているからである。特別に仕様に関して、そのまま旧式のシステムで、と念押しをした部分だった。

一度だけ、大きな音が鳴って・・・・星の林の静寂は一瞬で消えた。
この路は一方通行だから、入り口ではGPSの追跡機能によってアルディ家の警備担当者が到着する頃だろう。見つからなければ・・・ヘリが飛んで、夜間に行方不明になったアルディ邸の若者2名を保護する名目で、大捜索が開始されるに違いない。
そしてすぐさま、シャルルの耳に入り・・その後のことは容易に想像できた。

これが恪気とか修羅の念であるとかいう言葉を使って表現できるものであることは、そのときのルイには気がつかなかった。
ただただ・・・ヒカル・クロスという自分を乱す人間が、はやくどこかに消えてしまえば良いのに、と思っていた。
しかし、それはできないから。
彼女がもたらす福音は・・・ルイの一存でどうこう定められるものではなかった。

彼は教育係のミシェルに指示されたように・・・淡々と、ヒカルの記録をつけていくだけだ。いつか・・彼女の行動記録が必要になる時がある。彼女の希なる福音を求めて・・世界中の者たちが群がる。そのときのために。

彼女の願いはわかっていた。
しかし・・・しかし、ルイはこれほどの星々が墜ちていく天を頭上に頂き、一体何を・・・希えば良いと言うのだろうか。

「ヒカル。早くしてくれないか。・・・それとも、別の迎えの車に乗って帰りたいのなら、そう言え」
ヒカルが運転席側のボンネットの脇で、俯いて立ったままでいるので、ルイはそのまま運転席に乗り込もうとしたが、言葉を切って、大袈裟に溜息をついた。

■10

「それとも・・月を越して星まで行きたいか。それなら・・・いつでも還してやるよ。いつでも・・連れて行ってやろう。オレは・・星々を遵える星辰の子だからね」
少し自嘲的に言った。
彼女が天空に固執するのは、事故死したとされているヒカルの両親が出立したのがこんな星の夜だったからだ。
間もなく・・・その時期がやって来る。
ヒカルが魂を弔うために帰国し、その間シャルルが姿を消し、そして残ったルイがひとり・・・考えに耽る季節が近かった。もうすぐそこだった。
だからだろうか。彼女の固執がルイの癇に障った。

「ヒカル。オレは・・・繰り返さない。あと1分だけ待つ。乗り込むには十分な時間だ。
・・・それ以上は待たない」
彼はそう言うと、もう一度運転席を開いた。エンジンがかかり、静音設計のヒーターが作動したらしい。
僅かだが温度差のある空気が外に流れ出ていく。動かずに居るヒカルに向かって、急かすように彼はヘッドライトの点灯パネルに手をかざした。スイッチボタン式ではなく、フラットな温感式のそれに彼が細く長い神経質そうな指先をあてると、ライトが点灯された。

「ヒカル」
ルイは目の前の少女に苛立っていた。

自分の父を案じる、誰よりも絆の深いシャルルとヒカルを見ていると・・・不確かなものに縋り合っている惨めなものだとしか思えない。そんな者から、彼は生まれてきたのだろうか。そんな者の気質を色濃く受け継ぐように定められていたのだろうか。
そして・・・シャルルがヒカルを依り代にして、彼が思い切れないでいる運命の人について、違う感情を持ち始めていたとしたら・・・
ルイの予定はすべて変更を加えなければならなくなる。
目の前の少女は気がついていない。自分がどれだけの価値を持っているのか。
そして・・アルディ家が、どうしてシャルルが彼女を監護することを黙認しているのかについて深く考えていない。教育係で彼女にフランスで生きる術を教えたジルが彼女の目の前から姿を消した理由を彼女は知ろうとしない。
そんな・・・そんなちっぽけな存在に、どうしてこうもこの家の者たちは振り回されるのだろう。

ルイはまた、溜息を漏らした。
そして斜めにして運転席から視線を外した彼は、ヒカルに目を向けた。
冷たい・・・青灰色の瞳で、刺すように蔑むように彼女を見た。
「加減が大事だぞ。オレは遣ると言ったら本当に置いていくから・・・」
そう言ったとき。
ルイの言葉が途中で止まった。
エンジン音のせいで・・・聞こえなかっただけだった。
彼女は、泣いていた。嗚咽を抑えて、大きな両方の瞳から、紅の涙（※痛切な思いで流す涙のこと）を落としている。

「ヒカル」
滅多に彼女は人前では泣かない。
涙ぐむことがあっても、決して涙を流して訴えることはしない。
ルイは金の髪を掻き上げた。ライトに乱反射したその髪が眩しく更にヒカルの瞳を刺激したようだった。また・・・ぱたぱたと涙を落とす。

ヒカルは強い光線を発する光源の傍に立っていたので、彼女は逆光に立っている状態と同じだった。
ルイの金の髪が良く・・見えていなかった。
彼女のよく知る、彼女だけの天使が迎えに来たのかと錯覚するくらいに彼は・・・ルイはシャルルに良く似ている。
初めて会った時から、ルイはどんどん変化していく。
少女のような中性的な顔立ちだったのに、今では・・初めてヒカルとシャルルが出会った頃の若い頃のシャルルに良く似ていた。
画像データでしか残されていない、僅かな資料でしか残っていないシャルルの・・・少年時代を彷彿とさせる。
虚無と・・混沌と・・そして強く何かを思い秘めた顔だった。

行ってくるよ・・・

そう言った彼女の父の声が響いた。
確か・・ヒカルは「またね」と言って彼らを送り出した。
星が綺麗だから・・・星に近づいていくね、と嬉しそうに懐かしそうにそう言った母の言葉を突如として思い出した。
懐かしそうに・・・そう。
懐かしそうに『かつて私を月に連れて行ってくれると言った人がいた』と言っていた。
なぜ・・・なぜ、今、思い出すのだろう。
彼女の母を月に連れて行ってくれると言った人の傍で・・・今は暮らしている。

そして、良く似てはいるが、まったく違った魂を持つルイが、同じように。
同じように、ヒカルに言った。「星に連れて行こう」と。
まったくそのときとは違う意味であるけれども。

今夜はどうして、これほどたくさんの人の事を思い出すのであろう。
閉じられた記憶がどうしてこれほどまでに蘇るのだろう。

それは・・・星の林がヒカルに見せる幻惑なのだろうか。

ルイの頭上を越えた向こうの空で・・・星がひとつ墜ちた。
まるでルイに向かって惹き寄せられるかのように。

あの家には天使がいる・・・・

口が悪いが、星が見たいと言うヒカルの願いを叶えてくれた、星辰の天使が、今夜は・・・
今夜は誰よりも・・・違った人に見えた。いつもと違う・・男の人に見える。
ヒカルは少し顔を赤らめた。
懐かしいと思うのに。
これほど懐かしいと思うのに。

知らない男の人が居る。
少年から青年に変化しつつある、ルイ・ドゥ・アルディがヒカルだけを見つめている。
空から彼を慕ってこれほど星が堕ちてきているのに。彼はそれには興味がなさそうだった。
■11

「泣くのは勝手だが、シートを汚さないように」
ルイが近づきながら、そう言ったので、ヒカルはちょっと笑った。
彼なりの表現であることを知っていたから。
本当にシートが汚損することを憂えているのでれば、彼はヒカルを置いてでもさっさとひとりで戻ってしまうだろうし・・そもそもここにはヒカルを連れてこない。

彼は泣くな、とは言わない。
ルイなりの言葉に、微笑みが浮かぶ。最近・・・話をしていなかった。
同じ邸に住んでいるのに、彼の在不在が判別できないでいる。
朝、ルイにも薔薇を持って行くが、彼が在邸していて自らそれを受け取ったためしがない。

そんな不思議な関係なのに。
ルイは、ヒカルが一番欲しい言葉を言った。
早く・・早く両親に逢いたい。
星を見ると思い出して切なくなった。
美しい景色をシャルルはヒカルに見せ続けるが、その時にはいつも胸が痛い。
涙が出るほど美しくて・・・懐かしく感じる。
初めて見るのに。
そして・・両親は幸せだったのだろうか、と思うかわりに、だんだん・・シャルルはこんな景色をたったひとりで見続けて孤独ではなかったのだろうか、と思うようになった。

ヒカルは微笑んだ。
ルイに泣かされているわけではないから。自分の涙の意味がわからないから。
説明できないから、これは反射だと思うことにした。
ライトの光が突然煌めいて、眩しいから。
漆黒の車体から突然・・・目の前に星が堕ちてきたかのように閃光が放たれたから。
彼が星明かりしか出ない夜を見計らって、観測に影響しないように目立たない低い車高のボディを持つこの車を選んでヒカルを乗せてきたことを知っていた。
まだ、調整が終わっていないと担当の使用人が言っていた言葉を聞いていたからだった。
自分で確認するから必要ない、とルイは言っていたが、彼がそのような作業を行うことは滅多にない。

ルイは遠回しすぎる。もっと・・もっと直接的に言わなければ、伝わらない。
そう・・・シャルルにもルイの声が伝わらない。ルイが求めない限り、シャルルは振り向かないと決めてしまっている。その理由がわからないから、ヒカルは未だにふたりの間を取りなすことができない。

ルイを心配させないように、笑った。
しかし、笑いながらも、ヒカルの瞳から次々と涙が溢れてくる。
悲しい涙なのか・・もっと違うものなのかがわからない。
シャルルがヒカルに美しい風色を記憶させていく度に感じる感情ととても良く似ていた。
涙が・・そのときだけは、涙が出そうになると、シャルルはふっと席を外す。
ひとりで居ないとヒカルが涙を見せないと知っているからだ。

自分の涙は誰にも見せないと決めていたのに。
どうして・・ルイの前ではこうして簡単に涙を流すのだろうか。
だからこそ、ルイは・・・ヒカルをとても遠回しに慰めているのだと思った。
彼はシャルルのようにヒカルの涙から目を反らすことをしない。
青灰色の双眸で彼女を見つめる。無表情で観察している。

星に連れて行こう。

ルイが、そう言った。
月でも星でも同じことだ。もう少し待てば、簡単に実現するだろう。
いや、アルディ家の唸るほどの財力と権力があれば今すぐ実現可能かもしれない。

しかし・・ルイは紛れもなく、アルディ家の子息なのだと思い知る。
彼の言動や立ち振る舞いや・・・思考の過程など、どれをとっても、何もかもが・・・シャルルに良く似ていた。

流れ星に願いをかけるとしたら。
星の林でひとつだけ、祈ることができるとしたら。

それは・・・・

「ヒカル。早くその生理作用を調節してくれ。時間が来た」
一分なんてとうに過ぎていたのに。
彼は・・・ようやく唇を開いた。気が付けば、彼はヒカルの近くに居た。
そしてヒカルの肩を軽く押した。
ヒカルは、涙を拭って、両の手の平で顔を撫でた。
瞼を閉じて、強く目頭を押さえた。
「はい・・・・・・それにしても惜しいわ。記憶に留めておくだけでは・・・とても綺麗過ぎる」
涙を落としながら、ヒカルは言った。
「本当に美しいものには・・・涙が出るのね。心が動かされるときに、人は泣くのね・・」
ヒカルが感想を漏らした。

こんな場所を見つけてくるルイは・・・やはり完璧だ。

ルイは黙ったままだった。
「ルイ、ありがとう」
彼女の背中に添えられた手がぴくりと動いたが、大きなエンジン音の振動で彼の鼓動や指の震えはヒカルに伝わらなかった。

■12

「涙を止めろ」
ルイは囁いた。
暗い場所から明るい場所に移ったので、ヒカルの顔がよく見えなかった。
しかし彼女の涙声や、時折顎を伝って滴り落ちる水分が、どういう状態であるのかを明らかにしているので、ルイは低く呻いた。

この星の晄が彼女に遠い記憶を呼び戻させている。
この車の晄が彼女に遠い記憶を呼び戻させている。

「いきなり暗闇から明るい晄を見つめたので、目が眩み、寝不足が続いていたせいもあって何か・・・朦朧状態に陥っているのだろう」
ルイは、彼女の茫洋とした視線からそう判断した。些細なことで動揺する。
・・・アルディ家の者にはあってはならない。それなのに、シャルルは彼女には。
ヒカルには、そうであれ、と言って慈しみ育てている。
至情溢れる大人に・・あの人のように育て、とシャルルはヒカルに愛を注ぐ。
温室の品種改良の薔薇にどんなに与えても決して言葉は返ってこない。
けれども・・ヒカルの中で、何かが芽生え始めているのは確かなのに。
それに戸惑い、ルイの父は・・シャルルはこうして実娘ではないヒカルの処遇に思い惑っている。

「ヒカル・・・ヒカル」
彼は、彼女の名前を呼んで、軽く両手を添えて肩を掴み、自分の方に向き直らせた。

遠い記憶と、自分の中の願いが何であるかという疑念と・・・星の囁きや蠢きが、彼女を激しく動かしている。

「だいじょうぶよ、ルイ。私は・・・私は泣かないって決めているから」
「それなら・・・それは泣き顔と言わないで、どういう種類で分類すれば良いのかな」
ルイがヒカルの顎を軽くつかんで上に向けた。
青灰色の瞳が・・・ヒカルの顔をのぞき込んでいる。

青灰色の瞳にヒカルが映っている。

・・・・彼の言葉に、ヒカルが笑った。
「わからない」
「泣くか・・笑うかどちらかにしろ」
ルイが呆れてそう言った。若いヒカルの激しい心の移ろいに、戸惑っているような困惑しているような声だった。
「泣いたら、車に乗せてくれないでしょう？」
ヒカルがくぐもった声でそう言った。
いつになく言葉の多いルイに嬉しくなって破顔した。

本当は・・・・ルイは冷たいのではない。愛し方を知らないだけなのだ。
ヒカルはそう思った。

・・・この世には、誰も教えることのできないものが幾つかある。

シャルルの言葉を思い出した。

・・・愛を覚えることと、愛を忘れることだ。

彼らは決して忘れることはないのに。
彼らは決して繰り返さないのに。

それなのに・・・シャルルはいつも美しい風景を見せる度にそう繰り返す。

繰り返す季節を、繰り返しヒカルに見せて教える。

「・・・愚かな娘だ」
ルイがそう言ってシャルルと良く似た面持ちで、ヒカルの額に・・・自分の額を押し当てた。
ヒカルが驚いて、目を見開くが、彼の双眸が近すぎて・・・慌てて目を閉じた。
男性なのに・・ルイからは甘い薔薇の香りがする。

エンジン音が回転数を一定にして音を高鳴らせている脇で・・・・彼は彼の青灰色の星をヒカルに近づけた。
星が・・堕ちてきた。
ヒカルは目を瞑る瞬間、そう思った。

ルイは囁いた。消え入りそうなほどの小さな声で。
「星に還りたいのなら・・・いつでも連れて行ってやる。お前の魂は、あの星々と同じだ・・名前もない定められない星達に紛れていつの間にか消えてしまう。
ただのつまらない小娘でしかない。
自分ひとりだけが不幸だと自分を憐れんで消えて儚くなりたいのであれば、いつでも来い。
オレは星の子だ・・・・薔薇の子ではない」
彼はそう言って、言葉を句切った。
額から彼の温度と、声振が伝わってくる。
ヒカルは呼吸を顰めた。
大きなエンジン音さえ聞こえなくなってくる。ただ・・・ルイの静かな声だけが響く。

「だから・・・星辰とはそういう意味だ。
星を遵えるのではない。星図を記録していくだけで・・・そのひとつひとつがオレに近づいては通り過ぎて墜ちて消えゆく様を、ただ何をするでもなく眺めるだけに甘んじていなければならないという意味を込めた名前をオレに与えた者たちと・・・・同じ事をヒカルがしたいのであれば、いつでも星に連れて行ってやろう」

ルイはそこまで言うと、押し黙った。
ヒカルは目を瞑って・・ルイを拒否している。
これほど近い距離に顔を寄せることはなかった。
これが・・・何を意味しているのか、わからないヒカルではない。
予定を少し早めて・・・彼女を娶るための策を講じる準備に入っても悪くはない。

シャルルには渡さない。
ルイは定めていた。
ヒカル・クロスはシャルルの唯一の安らぎだ。その彼女との間に微妙な波風が立ち始めている事に対して、あのシャルル・ドゥ・アルディは、躊躇している。
フランスの華と呼ばれた傑物なのに。
娘ほどの年齢の遺児に心を奪われている。そしてすべてを変更しようしている。
彼はルイの遵える、決して変更することのできない星図さえ書き換えようとしているのだ。
星の玉座をルイに与えないために。

彼の高い鼻梁がヒカルの濡れた頬を擦った。
金色の柔らかい髪が、ヒカルの頬に吸い込まれてそしてまた離れていく。
髪が触れるくらいに・・・彼の星が光に近づいてきた。
天の星は彼に近づきたくて、彼に向かって堕ちて来るのに。
ルイは・・それを拒んでいる。誰もが近づいてきても彼は決して心を許さない。

彼が、愛を知ろうとしていないから・・・彼は愛を求めることすら知らない。
ヒカルは切なくなり、遣る瀬無い気持ちで溢れて、ルイに慌てて言った。
彼女は目を瞑っており、爆籟が耳を振動に共鳴していたので、気配を察知することができなかったが・・・彼の整った唇が彼女の唇に触れるか触れないかのそんな近い距離にあった。
■13

ヒカルは見ていなかった。
ルイが眉を潜めて・・・
どんな表情をしているのか。
どんな顔をして、彼女を見つめていたのか。
普段あまり表情を豊かに変えることのないルイが切なく悲しそうに・・だがしかし、とても大切な何かが突如としてこぼれ落ちる瞬間を黙って見つめるしかない子どものように頼りなげな顔をしていたことを彼女は知らなかった。

ルイには手に入らないものが多すぎる。
星々が墜ちる都度、願い事をしていてもきりがないくらいに。
・・・でも欲しいものはたったひとつしかない。

願い事は流星を視認する都度、違うものにしなければならないのか。
同じ願い事を繰り返し願ってはいけないのか。

繰り返したり、何かに執着してはいけないよ・・・・

彼の教育係の低いバリトンが聞こえてきた。
何かに強く恋着すれば、ルイの目的は達成できない。
ルイの生まれた意味が消失してしまう。

「ルイ・・・私。私、今、願い事をしたの」
ヒカルが、そう言った。
ふっと・・・目の前の気配が軽くなったので、ヒカルは目を開いた。
彼女がルイに話しかけたのはそのときだった。

ルイの青灰色の瞳があったが、もうそれはいつもの距離にあった。
彼は誰かを・・体温近くまで傍に寄せることはしない。彼の心はいつももっと遠いところにある。それが、今、一瞬だけ・・・近くに来た。

それは、直前の流れ星にヒカルが「ルイともっと近くになれますように」と祈ったからだろうか。

今日、出掛けるからと言われた時に、天の状態が良く、大気が澄んでいるので、流星をたくさん眺めることができるかもしれない、と思ったとき。
ヒカルは、決めていたことがあった。

祈ってみようと。
・・・神を信奉しているわけではなかった。
アルディ家にはそのような習慣があったが、シャルルはヒカルに強要しなかった。
そのかわりに・・彼女は２つの国の考え方のどちらかだけを選択することができずにいた。
神に祈るのではなく、月でもなく太陽でもなく・・・星に祈ってみようと思ったのだ。
流星が墜ちるときは、人の命が消える時だと教えられた。
厳かな瞬間に・・・・自分の満願成就の祈願を捧げるのは滑稽だと思うが、だからこそ。
彼女の両親の星は、まだ落ちていないと思いたかった。
たとえ・・墜ちていたとしても、ヒカルに向かってまっすぐに墜ちてきてくれると思っていたのに。

それなのに・・・彼女に星の迎えは来なかった。
その代わりに・・・その星々を遵える人が、迎えに来た。
ヒカルを星に連れて行ってやろうと言った。

だから・・・彼女は直前で祈る内容を変更した。
いや、思いもかけず・・・自分の願いが違うものであることに気がついたのだ。

流れ星に祈りを捧げる内容を、ヒカルはあらかじめ決めていた。
２つ、流星が観測できれば良いのにと思っていた。優劣がつけられなかったから。
ひとつは・・・いつか両親に逢えますように、と願うこと。
もうひとつは、シャルルが無事に帰邸するように、と祈ること。

それなのに・・ヒカルはその瞬間に、祈ったのだ。いざというそのときに。
彼女は願いを口にすれば叶わないと言い伝えられる日本の風習を破ることにした。

「私・・・こうして時々、ルイと星を眺めたい。ルイとずっとこうして・・・星の林で空を眺めたい。ルイと・・・家族になりたい」
「願い事が多すぎる」

ルイは即答した。
「願望とは多いほど・・・叶う確率も低くなる。統計学の論文でも読んでおけ」
彼はそう言ってから、彼女の頬を大きな手の平で・・乱暴にひと撫でした。
ヒカルの濡れた頬が、ほんの一瞬だけ・・・彼の手の平の中に包まれた。
彼の手の平は温かかった。それは、ヒカルの頬が濡れていたからであったが。
冷たいと思っていた人の手が・・温かかった。
手が冷たい人は心が温かいと言った人が居た。でも、ヒカルは・・ルイはあたたかい、と思った。アルディ家の親族は、ほとんどが彼女に必要以上に声をかけない。
礼儀正しいが、ヒカルはあくまでも異邦人であり、人種も国籍も違い、シャルルの養育を受ける理由に相当するものを兼ね備えていなかった。
日本贔屓のアルディ家であるのに・・・あの国を信用しているのかそうでないのか、わからなかった。
それくらい、考えを理解しようとして近づこうとしても拒絶され続けた。
これが文化の違いなのだろうか。環境の違いなのだろうか。
シャルルがそうだと気付かせないように配慮しても・・所詮、彼女はヒカル・アルディにはなれないのだ。ドゥという称号が欲しいのではない。
彼女は家族が欲しかった。
数多の星を眺め上げる安らぎの星の林が欲しかった。
シャルルが現実を感じさせないように・・ヒカルに最大の配慮を捧げるけれども、それは完璧ではない。どうしてもヒカルの憂いをすべて払拭するほどまでに隠し通せるものではない。彼の当主の権利をもってしても、ヒカルへの冷遇はおさまるところがなかった。
あの国の者と関わり合いになって被った様々な被害だけが禍根として残った。
だから・・・ヒカルは凶つ神の使徒であるとさえ囁く者が居る。

しかしルイは違った。
冷たいけれども・・・とても酷薄だけれども・・・けれども、あたたかかった。
彼は、ヒカルの言葉に耳を傾けた。
彼女に星に行こうと言った。
星の林に彼女を引き出した。
決してシャルルが見せなかった景色を・・・彼はヒカルに見せる。
白金の髪の人と違う景色を、金の髪の人はヒカルに突きつける。
これが・・これから先に訪れるルイとヒカルの関係を暗示するものだとは、互いに、気がつかなかった。

彼らは・・若かった。
彼らは未来を知らなかった。
■14

「ヒカル。・・・その言葉を撤回する日が来ても、オレはその言葉を忘れない」
ルイが静かに・・・彼女に宣言した。
唇の端を少し持ち上げて、青灰色の瞳でヒカルを射貫いた。
いつものルイの表情だった。

「ルイ。私はアルディ家のように、名前に誓えない。けれども・・・星に願いをかけたら・・それを覆さない」
彼の忠告とも宣言とも言えない言葉に、ヒカルは苦笑して言った。
血の繋がりを厭うルイと、血の繋がりがあれば良いのにと希うヒカルが、星空の下で向き合った。

本当の・・本当の絆とは何だろう。
ヒカルは思った。
愛を忘れることも・・・覚えることも誰かに教えてもらうわけではない。
でも、愛されることがどんなことなのかということは誰かに伝えることができる。
ヒカルはシャルルから慈愛を受けている。
哀れみでも蔑みでも良い。
それでも・・・
誰かを思うことについて、ヒカルは学んだ。

「取り消すこともできないし、なかったことにもできない」
「良いよ。・・・私の願いは変わらない」
「いつか・・その願い事がヒカルを滅ぼすことになるだろうから、そのつもりで」
ルイは静かに言った。
怒りも苛立ちも感じさせない、静かな口調だった。
ヒカルはまだ濡れていた頬を拭いながら微笑んで、目の前の星辰の子に僅かに微笑んだ。

そして、言った。
「私はルイ・ドゥ・アルディという星に願いをかけた。だから・・・・ルイがそうしたいと思うのなら、それでも良いよ。私の願いが叶えてくれるのなら」

ルイは無言だった。しばらくの間、焦点が合わなくなって、いつものように薔薇園のベンチに腰掛けて、深く物思いに沈んでいる時と同じ状態になった。瞳が虚ろになり、薄い唇が少し持ち上がった。
しかし、それはほんの一瞬の間のことで、やがてルイは首を振った。
「馬鹿馬鹿しい話だね、ヒカル」

けれども、そのときにヒカルを見つめなかった。
視線を反らして整った横顔を見せたルイは、下唇を噛んだ。
ぎゅっと・・・拳を握ると、何かを思い切るように一度だけ大きく息を吸った。
彼が何かを諦めるときは、溜息を漏らすのではなく、息を吸うのだと、ヒカルはそのときになって初めて知った。
そしてそんな彼の佇まいは、溜息が出るほど・・・ヒカルは溜息を漏らしてしまったほどに美しい。
星辰の美神がこの世に降り立った時に、この世が決して廉潔なことばかりではないことを知って歎く絵画のようだった。
一番・・・星に還りたいと思っているのは、本当はルイなのではないのだろうか。
ルイの一族は、薔薇の一族と呼ばれて、彼は薔薇の香りの中で育った。
しかし・・・彼は星の晄を浴びて最も美しく輝く薔薇なのだと思った。
・・・・大地に根を張ることを躊躇っているかのように思える。
本当は星に還りたくて仕方がないから・・・星を見上げることを諦めてしまった薔薇に見えた。恋しいから星を見ない。還りたいから・・・星を見ない。
■15

「私の願いを聞いたから、ルイは決して忘れないと言ったから、ルイはきっと願いを叶えてくれる。・・・・ルイ・ドゥ・アルディというお星様は、約束を破ったり嘘をついたり、間違えたりしない」
ルイはその言葉を聞き終えることなく、彼女の肩を掴むと、車の助手席に向けて力を込めた。
彼女から顔を反らし、ヒカルが大人しく従うように彼の躰にヒカルの躰を押しつけて強い力で、彼女を助手席に押し込むために、扉を開けた。
着やせするので、普段はわからないが、彼は乗馬とフェンシングで鍛えており、完全に調整されたルイの躰が押し当てられてしまえば、ヒカルは身動きどころか、彼の顔を覗くことすらできなかった。片手でヒカルの肩を抱き、反対側の腕を伸ばして助手席のドアを開けた。
「姫君。エスコートが必要だというから、付き添ってやった。だからさっさと乗れ」
ヒカルが軽い悲鳴を上げたが、無視して助手席に放り込んで、乱暴にドアを閉めた。
大股で、反対側の運転席に乗り込むが、その所作も酷く荒々しかった。
優雅で静かで流れるような物腰のルイが、音を立てて、荒く、粗雑だった。
押し黙ったまま、ルイがヒカルを完全に無視していたにも関わらず、車を出発させなかったので、ヒカルは躰の向きを変えて、助手席からルイに顔を近づけた。
自分に対して憤っているのはわかった。
しかし、自分のこれまでの何が・・・何が彼を怒らせてしまったのか、ヒカルにはまったく理解できなかった。
どこで静かなルイからこのような激昂した彼に変わったのか、その起点が知りたかったので、ヒカルはおずおずと、小さな声で彼の名前を呼んだ。

「・・・ルイ？」
「ああ、くそっ！」
ルイが突然、声を荒げて、どん、と革巻きのハンドルに手の平を叩きつけたので、クラクションが大きな音を立てる。
「ルイ！」
ヒカルが驚いて声を出し、それが余りにも大きな反応であったことに自身が驚いて、慌ててヒカルは自分の両手を口元にあてた。
彼が怒鳴るところを初めて見たからである。

・・・このまま触れて居れば、ルイは予定を早めることに計算を始めてしまう。
ヒカルをこのままアルディ家に帰さずに、
それは時期尚早に他ならないので避けることにした。
思い通りにならない女。計算通りに導けないヒカルの言動。

ヒカル・クロスはいつもそうだ。
ルイが幾通りも場合を考えているのに、そのどれにも当てはまらない。
類似しているようで派生しているようでまったく異なる結果を彼女はもたらす。
だから落ち着かなくなる。だから苛立つ。

「オレがヒカルの日月星辰だと言うのか？・・・精神錯乱を起こしているとしか思えない」「だって・・ルイは私のお星様で・・私はルイが星からやってきた天使だと思うくらいに・・・綺麗で完璧で何でも出来て・・・」
「それでオレに願いを叶えてもらおうと思っているのか。図々しいな。・・・おこぼれを期待しているのか」
ルイがそう言ったので、ヒカルは困り果てて口をつぐんだ。
彼がこれほど怒り出すとは思っていなかった。
ヒカルが・・家族になろうと言ったことがそれほど気に障ったのだろうか。
ヒカルが・・ルイはヒカルの星だと言ったことが、それほど迷惑だったのだろうか。

「ごめんなさい」
ヒカルは俯いた。
彼が先ほどから激怒しているのにも関わらず、ヒカルの方を見ないことが悲しかった。
白い頬が紅潮しているのが見て取れるくらい、彼は憤っている。

・・・シャルルとの不仲はますます酷くなるばかりだった。
ヒカルへの妄愛が原因だと言う者も居たが、そうではなく・・シャルルは意図的にルイを無視し続けている。
自分は高慢だったのだろう。
施しを受けるくらいなら、その相手を滅する、と常々言い切るほどに誇り高いルイ・ドゥ・アルディであることを忘れていた。

この星の林で、少しだけ・・・ヒカルはルイと近くなったと思った。だから・・・慢心したのだ。ルイが自分に寄ってくれると思った。ルイに近付けると思った。

「詫びるくらいなら、最初からそんなことを言うな」
ルイが言っている「そんなこと」とは、ヒカルが「家族になろう」と言ったことだろうか。
しかし彼女は撤回しなかった。
「それなら、謝らない。・・・ありがとう、と言うことにする」
ヒカルがぽつりと言った。
正面を向いたままのルイが、大きく瞬きをした。
彼女の言葉に耳を傾けている証拠だった。
・・・エンジンの音と、効き始めた空調の微風が車内を包んでいる。
彼はヘッドライトを消灯して・・・そして無表情に、シートに寄りかかった。
新しい革のシートが軋む。

「なかったことにもできない。覆すこともできない。・・・だから願い事は慎重に言えとルイが言ってくれたから。私は私の願いをようやく・・今まで言えなかった言葉を口に出すことが出来た」
■16

「自分にだけ都合の良い考え方をするのだね」
ルイはそう言って片頬笑んだ。
「言えなかったのではない。ヒカルは言わなかった。自分で自分を憐れんでいる者は、常に、誰かが自分を変えてくれると思っている。何かを享受することばかりに熱心だ」
ルイはそこまで言って押し黙った。
声を出せば出すほど、ヒカルを追い詰めていく。
彼女が返答できないような言葉で責める。
しかし・・・彼女が決して怒ったり歎いたりしないで、ただただ・・・ほんの僅かに泣きそうな顔をして、唇を噛み、そして黙ってルイを見つめる茶色の瞳が・・・ルイを余憤冷めやらぬ状態にさせている。
わかっている。
自分で自分の震怒を呼び起こしているのだと言うことは、ルイはよく理解していた。
ヒカルを泣かせたくて言っている言葉なのに・・・思い通りに彼女を傷つけていることに落ち着かないのだ。

「星に願いをかけるというのは、非科学的極まりない発言で、とてもアルディ家のゆかりの者とは思えない」
ヒカルがぐっと息を止めた。・・・・彼女は、アルディ家のゆかりの者ではない。
そうありたいとヒカル自身は切望しているが、決してそうはなれない。
「惨めな玩具だな。・・・愛翫物として素直に生きていれば良いのに。・・・オレと家族になりたいなどと、叶わぬ思いを口にする、可哀想な生き物だ」
「・・・・それでも、ルイは私の願いを叶えてくれる」
ヒカルがはっきりとそう言ったので、ルイは物憂げな青灰色の瞳を、その時になって、ようやくヒカルの方に向けた。

「私を星に還してくれる。・・・私が・・お父さんとお母さんに逢いに行ったら。
私は・・・・晄になりたい。
風でもなく、水にも土にもならないで良いから・・・晄になりたい。
星の晄だったら、シャルルもルイも見上げてくれる。
空を見て・・・シャルルはあの日の事を思い出して悲しくなるかもしれないけれど、でもきっと見てくれる。
ルイは、たくさんの星々を遵えているから・・・。
私はその中に埋もれてしまうかもしれないけれど・・・私は星辰の子に向かって、晄を出し続けるから」

昔々、風に還りたいと言った人が居た。母の親友だ。
肉体がなくなったら、風になりたいと言った人が居た。風のような愛が好きだと。
その人も、別の人からそう教えられた。
その話を聞いていたのに。

ヒカルは晄になりたいと言った。
そしてそれを叶えてくれるルイと家族になりたいと言った。
「・・・家族の定義が曖昧だよ、ヒカル」
ルイが小さく言うと、ヒカルは茶色の髪を揺らして、首を少し傾けた。
その仕種は誰にも教えられていないのに、彼女の母の仕草に良く似ていた。

・・・・数多ある星々から、ヒカルを見つけられないということはあり得ない。
彼女の希なる晄は・・これからアルディ家に大きな恵みを授けることになる。
まだ、彼女が知らないだけだ。

ヒカルはルイの言葉を聞いて微笑んだ。簡単なことだ、と言わんばかりに即答した。
「・・・星を一緒に見上げる人のことよ」

だから、早くシャルルやルイと・・星空を眺めるようになりたい。

ぽつり、とヒカルが言い加えた。
シャルルはあの日のことを思い出すから、星空を見上げることができない。
星を見上げて、流れ星よりゆっくり進む晄が近づいてこないかと・・・待ち焦がれた彼らを乗せた機体の点電ではないかと何度も遠くまで見つめたことを思い出すから。
ルイは、星々には興味がないから、星空を見上げない。
彼はそれらを統べる者、という美称を与えられているのに、その星の晄ひとつひとつに込められた意味に関心がない。

しばらくの間・・・
ヒカルとルイは、互いの瞳を注視していた。ただ・・・無言で。
パールブラックのボディに、星明かりが移り込んで、仄かに白く輝いていた。
彼らが座っている車内からでもよくわかるほどの、星の林からこぼれ落ちるほどの眩い星晄だった。
室内灯を点けていないので、彼らの双眸だけが・・光って動かずにそこにあった。

まるで、このまま、この車体ごと星の籠となって・・・・本当に星に行けるかのような、そんな幻想的な仄淡の晄に包まれていた。

「星だけではない。家族とは・・・夕焼けも・・朝焼けも・・・海も空も月も・・・何もかもを一緒に見上げる人のこと」
「ヒカルの家族とは、随分と手軽だな」
ルイがそう言いながら、不意に身を起こし、タッチパネルに指を伸ばして、ヘッドライトを全灯にした。
ハンドルを握った。

・・・一瞬、エンジンの音が聞こえなくなり、震動を感じなくなった。
ヒカルの茶色の瞳は闇間では判別しにくい。
それなのに・・それなのに、彼女の双眸から漏れる晄が・・・数多あるどんな星よりも、眩しくなってルイは視線を反らしたのだ。
彼は星辰の子なのに。・・・それなのに、これほど小さな晄に・・・身動きが取れなくなったのだ。
星々を遵える者なのに、彼は・・抗えない何かを感じて、急速に現実に引き戻さざるを得なくなったのだ。そのまま茶色の瞳に吸い込まれそうになったから。
その時には・・・彼女が泣いて叫ぼうがこのまま、彼女を・・・・

そこで彼は冷静を保つために、故意に車を走らせることにしたのだ。
ルイは短く言った。
もう、いつもの彼の口調だった。
今度こそ彼の様子は変化することはなかった。

「車を出すぞ・・・注意は促したから。悪路で舌を噛んでもオレの責任ではない」
「前を向けってことね」
ヒカルが慌てて正面に向き直り、シートベルトを装着する。
そして、改めて、ヘッドライトで晄の路ができた進路を遠く見つめた。

オレは忠告したよ、ヒカル。

彼女は家族になりたいと言った。その言葉が、彼女を滅することになるかもしれないとルイは宣言した。それなのに、その願いは撤回しないとヒカルは言った。
・・・だから。

本当は、その願いそのものが・・・ルイを滅する言霊になったのかもしれない。

しかし・・彼はヒカルの言葉を聞いて、胸が締め付けられるほどに苦しくなったので、それを面に出さないように、運転に専念することにしたのだ。

なぜ苦しくなるのか理由を考えるのはやめた。
なぜ疼くような痛みを感じるのか原因を探るのは後回しにした。

ルイは、革巻きのハンドルを握り締めた。
いつもは軽く指を添える程度にしか触れないというのに。

「・・・このまま星まで行けるかな」
「さあね」
彼が暗闇の中で加速したので、ヒカルは大きな震動に悲鳴を上げた。
「・・・ルイ！運転が乱暴だよ」
ルイは冷たく言い返した。
金の髪の下の表情は、横を向くことができないほど荒い運転だったので、ヒカルは眺めることが出来なかった。
「車の調整だから。・・・ヒカルの乗り心地を優先しているわけではない」

今まで、星々は・・自分を通り過ぎてそしてその星図や運星を書き換えることは赦されなかった。
だがしかし・・・・シャルルの座っているあの地位でなら、それも可能だった。
アルディ家の行方を大きく動かすこともできる。
シャルルを・・・生きながらに死にたいと思わせる状態にすることもできる。
シャルルが彼女を保護するために。運命の人との繋がりを断ち切れないために。
ヒカルの実家との関係を深めていくのであれば。

・・・・それを使わせてもらおう。
ルイは心の中で呟いた。

ヒカルは星になりたいと言った。
そうではない。星に還してやるつもりはない。
彼の手中の珠晄としていつまでも・・・彼の傍にあり続ける永遠の晄であることが、ルイには必要不可欠な材料だ。

初めて。
ルイ・ドゥ・アルディは、初めて・・・・
星を動かしてみようか、という気になった。

今までは興味が無かった。
単なる天体の動きでしかなかった蠢きを、自分がどうにかすることができるのであれば。
ヒカル・クロスという名前の永遠の晄を・・・墜ちる前に、彼の手元に惹き寄せることが出来るのかもしれない。
あのフランスの華ができないことをルイ・ドゥ・アルディがやり遂げるとしたら。

「ヒカルがもう一度、その言葉を言う時が来る。・・・すぐに。そう、それほど遠くない未来に」
ルイは言った。予言めいた言葉を口に出したので、ヒカルは一瞬耳を疑って、隣のルイを見たが、彼はヒカルを見ることはなかった。
ただじっと・・遠くに輝く、アルディ家の迎えの車が対向車線から近づいて来るのを見つめているだけだった。

・・・晄が近づいて来る。

ルイが呼んだから。ルイは・・・初めてそのときに知った。
「星辰の子、というのも悪くはないね」
彼はそう言って微笑んだ。

ヒカル。
ヒカルが、もう一度そう言ってオレに願いを乞う時。
その時にはもう・・戻れないから、そのつもりで。
彼は忠告したが音声にはしなかった。

「またこんな星空が見られると良いね。ルイ・・今度はシャルルも連れて来よう」
ヒカルがそう言うと、ルイは冷笑した。
あり得ない希望を述べているヒカルのその願いは、叶えてやるつもりはまったくなかった。

ルイは言った。この上なく・・・甘く魅惑的に青灰色の瞳を煌めかせた。
そして、金の髪の下の、シャルルに良く似てはいるがまったく違う微笑みで、彼は憫笑した。
それでいて、ルイ・ドゥ・アルディは少し楽しそうだった。

「ヒカル。・・・永遠の晄という名前のとおり・・・オレに遵え。星をやろう。星に還してやろう。・・・星に連れて行ってやろう」

そこでいきなり速度を上げたので、ヒカルは彼の言葉を聞くことが出来なかった。

後には、白濁するほどに光り輝く星の林とだけが残り・・・黒い車体は、星々の晄を受けながら淡く発光して・・・その場を走り去った。
どこまでも。
どこまでもそのまま進んでいきそうな程に躊躇いのない運転だった。

星辰の子の気の向くままに。
・・・永遠の晄を伴って。

（FIN）

櫻夢櫻栞　前編

櫻夢櫻栞01：ルイ・ドゥ・アルディが見事な金髪を、櫻風に揺らして靡かせている姿は、フランスの華と呼ばれているアルディ家の当主の横顔ととても良く似ていた。しかし、彼と違うところはその髪の色であり、櫻の花びらの咲き乱れる様に無感動であるように表情を変えない徹底された冷たさにあった。

櫻夢櫻栞02：彼は整った顔立ちに虚無しか浮かべていなかった。青灰色の瞳に沈む孤独と誇り以外には、彼はまったく何も感じていないような冷たい冴えた視線しか持たなかった。なぜなら、彼はそうやって生きるようにと予定された命だったから。誰も彼に何も教えなかった。それ以外の生き方は知らない。

櫻夢櫻栞03：アルディ家の当主は、極めて熱心な親日家だった。それは、彼の若い頃の・・「青春の輝きの時代」と言われている頃よりずっと前の代の当主からの習性であった。なぜ、あの東の国のことをこれほどまでに愛でるのかということについて、決して誰も理由を明かさない。

櫻夢櫻栞04：暖かい風は、彼にとってはただ障るだけだった。ルイ・ドゥ・アルディはアルディ邸の広大な敷地の中に設置された櫻木の下で、大きな吐息をついた。憂いの溜息と言うには複雑に、様々な物思いが詰まった嘆きの無音であった。櫻の木の下で。彼は、彼だけしか知らない呼吸を繰り返す。

櫻夢櫻栞05：親日家として知られるアルディ家の現当主より以前の主から植えられた櫻の木は、今では巨木になり、使者として毎年この家に春を告げにやって来る。しかし、それは彼の気鬱を呼び起こす春光でしかない。あの国を思い出す度に、この家の主は深く憂え、アルディ家は闇に包まれるから。春なのに。

櫻夢櫻栞06：この櫻の木の下で、かつて、幼いヒカル・クロスを探し当てたことがあった。それほど苦もなく。しかし、彼が今、どこかの古典のように、櫻の木の下に埋まっていたとしても、誰も気が付かないのだろうと思った。それは僻みなどではなく、真実であった。彼の思考を読み取る者は居ない。

櫻夢櫻栞07：家族がいない彼女と、家族がいないに等しい彼と、どちらがより強く生き残ることができるのだろうか。澱みにより彼は自由を奪われている。この家の頂点に立つべくして生まれて来た。が、彼の生命の意味を剥奪しようとするこの家の主のことを憎むことができれば幸せであったのだろうか。

櫻夢櫻栞08：彼は、独りになりたいときにはいつもこうして薔薇園をそぞろ歩く。一つの場所に固執することはない。それは禁じられて生きてきたので、彼はそれ以外の術を知らない。知っても採用しないのだろうが。何かに拘ることによって本当に手に入れたいものを逃すようなルイではない。

櫻夢櫻栞09:けれども、この季節のこの場所にひとりでやって来る。もう何度こうしたことだろう。何年・・・こうして過ごしているのだろうか。誰も知らない、彼だけの秘めたる物思いを櫻の花瓣と一緒に散らしているだけだった。そう。ルイは彼の最も近しい教育係にでさえ言わないことが多々在った。

櫻夢櫻栞10:櫻の色は濃い色ではないのに鮮やかに彼の網膜に記録を残していく。記憶ではない。記録になって、彼の脳に蓄積されていく。そのどれもが彼を満たすことはない。それなのに。固執してはいけないのだと言われているのに、彼はこうして密やかに魂の秘密を誰とも共有しないという秘密を持つ。櫻夢櫻栞10:櫻の色は濃い色ではないのに鮮やかに彼の網膜に記録を残していく。記憶ではない。記録になって、彼の脳に蓄積されていく。そのどれもが彼を満たすことはない。それなのに。固執してはいけないのだと言われているのに、彼はこうして密やかに魂の秘密を誰とも共有しないという秘密を持つ。

櫻夢櫻栞11:彼を包む香りは薔薇のそれではない。慣れた大気と異なる異質の花瓣からの花気がルイの美しい顔を顰めさせていた。この邸には薔薇が溢れている。それは彼らの象徴だから。しかしルイはフランスの華と呼ばれている彼と違い、星辰の子という称号を持っている。それは薔薇ではない。

櫻夢櫻栞12:ルイは散り降る櫻の花瓣の雨に打たれながら、沈む想いに耽った。彼が彼だけの時間に溺れることができるのは、僅かな瞬間だけであった。思考の漣が彼の意識を遠く連れ去る。ルイは物憂げな青灰色の瞳を移動させて、庭の向こう側に広がる主の住まう本邸を見つめた。

櫻夢櫻栞13:彼がその場所で頂点に立った勝利感を味わう日は来るのだろうか。ルイは元々・・達成感や勝利を味わって声高に言う類の人間ではなかった。そこに上りつめた先を幾通りも考える。しかし、そこにはいつも・・・彼ではない者が寄り添う彼の姿しか想定できない。彼女がいつも傍に居る未来・・

櫻夢櫻栞14:彼は櫻の大木の下で、淡い吐息を漏らす。親日家として名高いアルディ家には、あの国を象徴するべき・・・主が欲して止まない・・ファム・ファタルへの想い出がそこかしこに溢れている。だからこの邸はルイの趣に障る。彼が当主になったのなら、即座に抹消するべき対象の一つであった。

櫻夢櫻栞15:簒奪するつもりはない。しかるべき手順を踏んで荊座に座らなければ、当主は今ひとたび、ルイをあの時と同じように・・・追いつめて追い落とすために全身全霊をかけるのであろうということは明白であった。だから、彼が自らの意思でルイに座を明け渡さなければならない。

櫻夢櫻栞16：彼は大きく息を吸って、空を見上げた。
空を見たはずなのに、彼の切れ長の青灰色の双眸の前には、桜色の絨毯のような色が広がる。
均一でありそれでいて不均一な空間が広がるばかりだった。ルイはベンチの背もたれに両腕を伸ばし、長い脚を組んで、軽く目を瞑った。

櫻夢櫻栞17:自分はここでひとり静寂に包まれて、このまま・・・消えてなくなりたいという欲求に疼くことはない。花瓣に囲まれて孤独な時間を過ごすことで自分自身を癒していたシャルル・ドゥ・アルディと同じ行為に耽って自らを慰めることはしない。彼らの誇り高さは同じであった。

櫻夢櫻栞18:しかし時折・・・こうして独りになりたいときがある。孤独を嫌って孤独を癒すシャルルとは逆に、孤独であることを確認するためだ。そんなときに決まって彼の邪魔をする者がおり、彼は現実に引き戻される。
そう。決まって、必ず。今もまた、彼に静かに忍び寄ろうとしている人物がいる。

櫻夢櫻栞19:「オレの邪魔をしたいのであれば、もっと創意工夫を披露してくれないか」ルイが冷たくそう言ったので、足音は止んだ。静かに近寄ったつもりでも、彼には通用しない。僅かな風の流れや呼吸音や気配から、ルイは彼の背後にヒカル・クロスが回り込んできたことを知っていた。最初から。

櫻夢櫻栞20:彼の冷たい拒否を受けながらも、ヒカルはいつも彼と話をしようとする。こちらには、彼女と共有したいという話題は全くないというのに。「ルイが戻って来ていると聞いたから」彼女は唐突に話し出した。「それがオレの思考を止める理由になるとは思えないがね」「考え事をしていたの？」

櫻夢櫻栞21:「どうかな」彼は曖昧な返事をした。ルイが不明瞭な答えを出すことはない。それはヒカルの言葉の続きを拒絶するための言葉であったことに彼女は気が付いたらしい。すぐに顔を曇らせた。東洋人の父母から生まれた娘であるが、祖母は仏人である。何とも言いがたい雰囲気を持った娘だった。

櫻夢櫻栞22:首を傾け、大きな茶の瞳を彼に注ぐ。振り返ると、思い描いたとおりの姿があったから・・・彼は黙ったままだった。青灰色の瞳は透き通るように冴えた物憂い感じを兆していた。櫻の樹の蔭で、彼は日の当たる場所に立ち尽くすヒカルを軽く睨み据えた。贖罪の娘は、どこに行き着きたいのか。

櫻夢櫻栞23:「邪魔はしないけれど・・・もう少しここにいても良い？」彼女はそう言って、感嘆の吐息と一緒に、顎をあげて、空を見た。空を見たのではない。櫻色の薦（こも）を見たのだ。彼を覆い尽くすような巨木が撓わせる櫻色の花瓣に、彼女は驚嘆していた。毎年見る光景なのに。理解できない。

櫻夢櫻栞24:「貴女が居るだけで邪魔なのだとはっきり言わないとわからないのかな」ルイ・ドゥ・アルディは素っ気ない口調でそう言った。貴婦人への礼として、彼女に席を譲り、花を愛でる彼女に対して、美の讃辞を述べなければならない責務を放棄した。苛立たしい娘だ。そんな感想しか持てなかった。

櫻夢櫻栞25:彼には感情は非合理的で非生産的なものであるという認識しかない。長い時間を過ごしても、ヒカルという人物については不可解だという結論しか持てない。だから感情を持たないことにした。執着してはいけないと言われている。が、彼はそう言われているのに。・・桜の季節にひとりで過ごす。

櫻夢櫻栞26:それと同じように、ヒカルに対しては彼は無感情であり続けようとする。他のすべてのことには、無感動で居られるのに、彼女に対してだけは、無感情であろうと努める。これが一体何を意味しているのか。彼は適切な解答と対処法を知っているのにそれを実行しない。そうする必要がないから。

櫻夢櫻栞27:「それでも、ここに居たいと言ったら、それはルイにとって迷惑そのものなのかな」ヒカルが囁いた。囁くような小さな呟きであったが、ルイの耳には届いていた。彼は、まったく無関心を装っていながら、全神経を彼女に注いでいるのに。それを彼女は気が付かない。崩壊の鐘の音が聞こえる。

櫻夢櫻栞28:彼女が足を進めて彼に一歩近付く度に、彼は何かが崩れていくように感じる。ルイはベンチの背もたれに重みを預けて、そして櫻色の空を見上げた。彼の脳裏に焼き付くどんな色よりも淡く儚くそれでいて鮮やかだった。桜の国からやって来た、贖罪の娘は言った。「ルイ、御願い」と。

櫻夢櫻栞29:「桜の樹が恋しいのなら、あの国に帰れ。それでなければオレに遵いたいと言えまったく、面倒な娘だ」それほど年齢に開きがあるわけでもないのに、気怠げに、彼はそう言ってヒカルをまた誹った。彼女はいつも自分を低く位置し決して高慢な態度は取らない。が、それは卑屈な高慢だと思う。

櫻夢櫻栞30:「それならオレは遠慮しよう」彼女の思惑どおりに済ませるわけにはいかない。だから、ルイは意地悪く、彼女にそう言って腰を浮かせた。ヒカルが躊躇する溜息が聞こえた。なぜ、彼女は誇りを捨てたのか。誇り高い彼の一族から見ると理解できない行為であり、理解できない感情であった。

櫻夢櫻栞31：彼女は強情にルイに懇願した。媚びを一切含まない願いというものは、時に、淫する願いよりも傲慢になるものなのだと知る。「もうしばらくだけ、ここに居させて」「強情な人なのだね・・・知らなかったよ。我を通すだけではなく、このオレに去ねと言う。君はどういうつもりでいるのか？」

櫻夢櫻栞32：「貴女の願いは叶えてやる義理はないけれどもね」彼がそう言って、腰を浮かせた。この場所を譲ってやるつもりはなかったが、彼女はそれでも立ち去らないのであれば、彼が去るしかなかった。言い合いは好まない。そして、それほどまでに執着するような景色でもなかった。彼女は微笑んだ。

櫻夢櫻栞33：「ありがとう」彼女がそう言った次に、彼は彼女が座るための空間を作って遣ったのではなく、立ち去ろうとしていることを知って、慌てて手を振って彼の動作を止めた。「違う。ルイと一緒に花が見たかったの」「それはこの場を譲る以上に、無理な願い事だな」辛辣な答えだった。

櫻夢櫻栞34：櫻の花瓣が舞い落ちた。そして彼と彼女に降り注いだ。もし、ランスの教会でこれほどの花片を浴びることがあるとしたら、櫻の花ではなく、この家を象徴する薔薇のみで作られることだろう。その時、彼女は少しばかり哀しそうな顔をするのだろうか。祖国を焦がれるのなら、帰ればよいのに。

櫻夢櫻栞35:彼が無表情のままで、腰を浮かせて立ち上がり、そのまま丘を下りて別棟に渡ろうとすると、ヒカルは声音を緊張させて、彼に提案した。「ルイ。少し・・・花を見ていかない？」「十分すぎるほど記憶したから。必要ない」彼は冷笑した。花を愛でて遊び愉しむために、彼は居るわけではない。

櫻夢櫻栞36:ヒカルの申し出ているのは、彼が腰掛けている場所を空けろということではなく、彼女と櫻花を見上げろということであった。嘲笑した。同じ記憶を共有することで、何か、連帯感でも生まれると思っているのだろうか。烏滸がましいにも程がある、と。どの段階でそれを言えば効果的だろう。
櫻夢櫻栞37:櫻の風、という表現がある。櫻を散らすものの、心地好いさわやかな穏やかな光風のことである。しかしそれは彼を縛る宣告の風のように感じた。風が目に見えないのに。櫻の花瓣が乗った風は、動きを捉えることができる。それはルイのようであり、ヒカルのようでもあった。彼女は狡い。

櫻夢櫻栞38:彼女が一言発すれば、この家の主であり絶対的な権力を持つあの男は、ルイを服従させるに足りる命を下ろすことができる。しかし彼女はそれを発動させない。ルイの誇り高さを推し量っているかのような狡猾な行為に、彼は試されているのだろうかとさえ思う時がある。何に試されるのだろう。

櫻夢櫻栞39:「できるだけ、貴女と共有した時間を持ちたくないと思っているオレの心情も察してくれないかな」辛辣な表現であった。彼女は哀しそうな顔をしたが、涙はこぼさなかった。誰の前でも涙を流さないヒカルは、彼の理解に苦しむ程に何かを思い決めていた。泣かないことが、彼女の誇りなのだ。

櫻夢櫻栞40:櫻風がまた、吹いた。月は人を狂わせると言うが、櫻も人を狂わせる。・・・儚いから。夢のような願いを叶えるだろうかと錯覚するほどに、伸びた櫻の枝花がルイとヒカルの見上げる空を覆い尽くしていた。これほどまでに巨木になった櫻の樹は、パリでは珍しかった。幼い頃の記憶が蘇る。

櫻夢櫻栞41:夢の欠片のような花瓣が降り注ぐ。もう、この花たちの季節は終わる。絢爛を愛でるより、命の終わりについて彼が考える瞬間、青灰色の瞳は遠くを見つめる。この木は品種改良されているが、元々は・・・同じ源を持つ樹である。この家の主という巨木に結実するものだけしか受容されない。

櫻夢櫻栞42:己という存在は、シャルルというフランスの華の再現でしかないと思い知らされる瞬間だ。だから、この花樹の下にやってくる。彼の心が穏やかになり安らかになるからではない。櫻の夢に浸りたいがためにこの場所に固執しているということでなかった。自分の決意を確認するためだ。

櫻夢櫻栞43:この華を見る度に確信する。自分は彼の踏襲でしかなく、それでいてシャルルを越えていかなければ認められない存在なのだということを。櫻の樹は、日本ではすべて同じ種であるとされていた。亜種は「異」とされた。まるで、ルイのようでもあると思った。同じ形態であるのに認められない。

櫻夢櫻栞44:天秤を動かそうとしている。均衡を破ろうとしている自分は・・・挑戦しているのだろうか。それとも、そのように仕組まれているのだろうか。時々、どちらが目的なのか誤認しそうになるが、ルイには誤らない。撃滅する。必要であれば。この家が亡んでも、彼は無道であるのかもしれない。

櫻夢櫻栞45:破裂する瞬間を待って嵩むことだけに邁進する風船のように。彼はこの櫻の空を見ながら、櫻の夢幻に沈む。耽ることはしない。彼を厄種と蔑む主を覆すために、ルイはここに居る。そして生きる。何があっても。何を失っても。その彼に、彼女は言った。一緒に櫻を見上げよう、と。

櫻夢櫻栞46:「・・・この櫻の樹は散ると、枝を落とすことになっている」彼女は困惑を浮かべながら、そう言った。哀しい声波だった。大風になりすぎた花枝は、長い年月を経て、切り離される。そうしなければ、この木は生きていけないから。花を咲かせることはできないから。古い種を残す為の方策だ。

櫻夢櫻栞47:「だから？」彼は言った。だから、最後の華を見ようとして彼女はここにやって来た。そしてそこにルイがいた。だから、彼女はここから出て行けとルイに言った。それだけのことなのに、ヒカルは彼に理解できない表情を浮かべる。理解したら終わりだ。彼女を理解したら・・・崩壊する。

櫻夢櫻栞48:「ルイ。この華を見るのは、最後だから。だから。ここに。最後の景色に、ルイが居れば良いな・・・と思った」「貴女の思惑通りに従うつもりはないよ。少しもね」ルイは辛辣に否定の表現をした。それなのに・・・彼は再びベンチに腰を下ろし、そして大きく溜息をついた。彼女は絶対だ。

櫻夢櫻栞49:ひっそりと鎮まる邸の片隅で生きているつもりであるのだろうが、彼女はこの邸の「最高の状態の薔薇」であった。いつでも。いつも。どんな時でも彼女の言葉は絶対であり、誰も拒否できない。この邸の主でさえも。清かな声は神の言葉と同義とされ、服従を伴う。それを彼女は知らない。

櫻夢櫻栞50:「この樹を永らえさせるための伐採であれば、それも必要だろう。・・・長い時間が経過しているから、必要不可欠だ。倦んだ部分は捨てなければいけないという自然の理を遵守していることに、何を異議申し立てするのかな」ルイは冷ややかにそう言った。ヒカルの息を呑む音が聞こえる。

櫻夢櫻栞51:彼はまた完全に彼の視界から彼女を消した。それでも滅去したことにはならない。彼女の溜息は、桜の散り音より大きかった。彼女の僅声は小さかったが、どんな音より・・・彼の耳に大きく響く。唇の震えさえわかる。「それでも、この樹は昔からあった。私やルイが生まれる前から、ずっと」

櫻夢櫻栞52:「完全に伐採するわけではないのだろう」櫻の空の下で、彼は少し顎をあげた。見上げる表情もまた、あのフランスの華に良く似ていた。厭世的で非常な知性を湛えた瞳が、少しだけ細くなる。「・・・それほど多くは切らない。そして、落枝するということは、まだこれを残すということだ」

櫻夢櫻栞53:「説明は受けた。でも、あの枝から咲く櫻は、これが最後だから」彼女が哀しそうにそう言うと、ルイは嘲笑した。根拠のない感情の流れによって発する言葉には、興味がなかった。それなのに、会話を続ける。「見ろよ。ここから見上げた花片を。指摘される枝たちが弱っているのがわかる」

櫻夢櫻栞54:ヒカルがぱっと顔を輝かせる気配がした。腰を浮かせたルイが再びそこに座り直すのではなく、僅かに位置をずらして、彼女の空間を作って遣ったことを少しばかり後悔した。彼は悔やんだりしない。すべて計算された行動だからだ。しかし、この時ばかりは失敗した、と思った。顔を顰める。

櫻夢櫻栞55:空天色ではなく、櫻の敷布が広がったような空を見上げながら、木漏れ日がヒカルに降りかかった。彼女はいつもこの家の子供でないことを憂えていた。しかし、彼女は気が付いていない。こうして、太陽光を浴びるときの彼女の髪は、金色に近い透き通った茶になることを。眩しいなと思った。

櫻夢櫻栞56:ふわりと風が動いた。桜の色がついているかのようだった。これまで彼が纏っていた空気のそれとは明らかに違っていた。そしてその小さな風が止むと、ルイのすぐ隣には、ヒカル・クロスが座っていた。彼が瞬きをした次には、もう、先ほどの彼と同じ様に顎をあげて昊を見上げていた。

櫻夢櫻栞57:「それでも、まだ花が咲いている」彼女は少し寂しそうに言った。弱って病を患っている枝を落とすことに抵抗があると言いたそうだった。薬剤を塗布すれば、また勢力を戻すかもしれない。そういう自分に都合の良い幻想を抱いているものの、シャルルに言い含められて、渋々納得したようだ。

櫻夢櫻栞58:「そんなに名残を愉しみたいのであれば、シャルルに頼め」ルイは素っ気なく言った。ヒカルは、下から見上げる桜の昊に感嘆するのに夢中で、彼の冷たい言葉の裏側に気が付かなかった。降り注ぐような、覆い被さってくるかのような、そんな桜の帳の下で、彼と彼女はしばし無言でいた。

櫻夢櫻栞59:だからだろうか。いつもより、ヒカルは配慮に欠けていた。思った通りのことを口の端に乗せた。「シャルルとはもう、見た」なるほど、とルイが事情を察する。彼女は昊に耽っており、彼は彼女の横顔に溺れている。この違いについて、思い知っただけだった。それだけだ。ただ、それだけだ。

櫻夢櫻栞60:博愛なる贖罪の娘は、この家の住人全員と哀しみを味わいたいらしい。ルイの整った唇が歪んだ。誰も共有できないことを、あの男は知っている。けれども、それでもなおヒカルに付き合って共有しているふりをしている。ルイとは何一つ共有しないのに。それでも、彼女となら桜を悼むらしい。

櫻夢櫻栞61:彼の実父は彼に愛を注がない。しかし、晄の娘には永遠の愛を注ぐ。彼女を「自分の天使」と呼んで、ただひたすらに無償の愛を注ぐ。待っていたかのように。そしてその愛の雨を、ヒカルは受け止め、目の前の桜のように大樹の枝葉を伸ばす。が、それはルイとヒカルの間には成立しない。

櫻夢櫻栞62:「ルイはこの桜をどう見るのか知りたかった」彼女は傾注した様子で言った。淡い色合いを好んでいるというより・・・もう、来春には見ることの出来ないとい

う憐愍に満たされていた。失うとわかっているから、美しいのか。それとも、失われるとわかっているから、美しいと思うのか。

櫻夢櫻栞63:まったく無価値なはずの、彼女との会話を、それでもルイは続けた。「オレが何かを感じると思っているのか？」「何も感じないとは思ってはいない」彼女は返答した。「随分とオレを理解しているようだね」彼は嘲笑した。息苦しくなるような桜の嵩の下で、彼は金の髪を光らせて言った。

櫻夢櫻栞64:「やむを得ないと聞いている。だから伐枝は仕方がない。・・・でも、仕方がないという言葉では言い表せないほど、私はこの桜が好きだ」かつて、彼女はこの桜の木の下で迷っていた。それをルイが助けたことがあった。それ以来彼女が特別にこの桜の樹を気に掛けていたことは知っていた。

櫻夢櫻栞65:「だからオレと一緒に見たいと言う帰結にならないと思うが」ルイが抑揚なく言った。「どうして？」ヒカルが茶色の髪を傾けた。・・・そこに、桜の花弁が降り注ぐ。まるで、花の雨のように。彼女には、祝福の花雨が降る。けれども、彼にはそれはない。その違いは何なのだろうか。

櫻夢櫻栞66:彼女の香りが彼の鼻腔を擽る。隣に居るだけで、桜の香りに噎せ返る。この家の薔薇の香りのそれを上回るものではないと知っているのに。何度もこの風景を見ているのに。それなのに。色と晄と香が彼を苛んだ。なぜヒカルが傍にいるだけで苦しいのだろう。しかし、それ以上の思考を放棄した。

櫻夢櫻栞67:「二度と同じ桜に逢うことはない」ヒカルがささめいた。同じ椅子に座った彼と彼女は、同じ過程から生まれて生きている。けれども、それでも、何もかもが違う。生まれた国籍や環境や性別に左右されるだけではない決定的な何かが、二人の間に静かにけれども深い溝となって流れて居る。

櫻夢櫻栞68:「いつも同じ鼻はない。けれども、ルイと観る今年の桜はいつも特別で・・・そして同じにはならない」ヒカルがそう言ったので、ルイ・ドゥ・アルディは冷笑した。「同一であることに価値があるとは思えないけれどもね」彼は常にフランスの華と同一であることを求められていたから。

櫻夢櫻栞69:冷たい感想だった。彼は何か感じた事を言葉しない。いつも。故に、機械的に儀礼的に発したような、低い流れるような言葉にヒカルは少しばかり哀しそうに頬を緩めた。泣き笑いのような表情だった。彼は彼女に沈黙させたいのか否か、目的を見失いそうになった。が、黙ったままにしておいた。

櫻夢櫻栞70:「この桜を残したいと思うの」白く儚い淡雪のような色に包まれながら、彼女はそう言った。いつの間にか隣に座り込んでしまった彼女の狡猾さを責める前に。彼女はそう言って、空を仰いだ。仰いでは、ルイの横顔を見つめる。凰花を愛でるためにやってきたと彼女は言うのに。理解できない。

櫻夢櫻栞71:「ヒカルはこの桜を留めて置きたいと思っているが、何か方策は？」ルイ・ドゥ・アルディが尋ねる。ヒカルは即答した。困ったように。けれども彼の問いに隠れる真意を逃さないとするかのように。「塩漬けやドライフラワーを考えている。もちろん、今後のこの種が残されるための保存も」

櫻夢櫻栞72:彼は冷笑した。「種を保存・・・何度再生しても、結果は同じだと理解しているのに、保存することに何か、意味か意義があるのか？」彼女は押し黙ったままだった。ルイが彼自身のことを言っているとわかったからだ。彼はフランスの華の代替であるが、それでも彼は金の髪を持っている。

櫻夢櫻栞73:白金の髪でないかぎり、彼はフランスの華の完全なる模型でも模倣でもなかった。それがルイの誇りを継続させている。わかっているのに。それなのに、ヒカル・クロスは彼を貶める。ルイが、あの男の模倣そのものであると宣言するかのような発言に、正直、辟易していた。心の底から。

櫻夢櫻栞74:ヒカルは空を見上げた。昊なのか桜の枝先なのか、判別できなくても良い、という風情だった。彼女は、この家で・・・この桜の下で、ルイを求めているのか、それともこの家の主を求めているのか時折判別できない行動を遂行することに夢中になる。それは決してルイは心酔しない。

櫻夢櫻栞75:「保存することに夢中になる愚かな人と過ごす時間は、虚無であると言う以外に、何か言葉があるのか、教えてくれよ」彼はそう言って冷笑した。ルイは確信しているのに。彼女が彼に教えることはないと考えているのに。彼が教えを受けるのは、彼の父と同じ遺伝子を持つあの人だけだった。

櫻夢櫻栞76:「消えて行くのが怖いの」ヒカルは低い声で言った。かなりの躊躇いが含まれていた。怖い、と彼女は言った。何に畏れるのだろうか。闇を知らない晄の子が、言った。「記憶が薄れていくの。懐かしいと思う記憶が、どんどん消えていく。両親のことは・・・もうほとんど覚えていない」

櫻夢櫻栞77:ヒカルはそこで溜息をついた。どうして、そんな風に・・・ルイには怖れを吐露してしまうのだろうか。シャルルにでさえ言えないことを、彼の前では述べるのだろうか。彼女には理由がわかっていないようだった。ヒカルはルイの隣で、顔を上げた。そこまで言ってしまったら、勢いがついた。

櫻夢櫻栞78:「なるほど」ルイは嘲りを含めて言った。「君は、記憶を共有することより、共有したという事実を得たいだけということか」ヒカルは眼を瞑った。昊の晄は、蒼くはない。櫻色の光を浴びながら、ヒカルは眼を細めて、光芒が彼女に浴びせる祝福の晄を、一身に浴びる。眼を瞑ったまま言った。

櫻夢櫻栞79:侮蔑の言葉に無感動でいたわけではなかった。彼女は、眼を瞑ったまま、眉を少しだけ動かした。彼の視線には気が付いているはずなのに。「贅沢で傲慢で愚かな願いだとわかっていて、それでもルイに御願いするの。だから叱られても仕方がない」「叱るほど貴女に価値があるとは思えない」

櫻夢櫻栞80:「そうだね」ヒカルが少し哀しそうに言った。ルイは正しいよ、と言った。「それでもね、この桜をルイと見たかったの」次に静かに補足した。「桜の昊を、見たかった。ルイと」彼女は苦しそうだった。「私の仄暗い希望なの。どんどん、忘れていく。両親のことも。あの国のことも。怖い」

櫻夢櫻栞81:「それであれこれ保存することにしたっていうのか」呆れた、と彼は言った。彼女の記憶処理能力は、ルイには及ばない。それは彼女がアルディ家の血筋のものでないからだ。一般よりかは知能はあるようであったが、彼女の幼い時の桜の記憶は、そのまま両親の記憶に繋がっているらしい。

櫻夢櫻栞82:すべて忘れてしまえるのなら、それは問題でなかっただろう。覚えていないことさえ意識しないのだから。しかし「思い出そうとしているのに思い出せない」という状況が、彼女を苦しめている。「夢から醒めると覚えていない時と同じように、覚えていなければいけないと思うのに、忘れるの」

櫻夢櫻栞83:「私のかわりに、ルイに覚えていて欲しいの」彼女は眼を開き、ルイに茶色の視線を注ぐ。花晄の下で座り込む彼女は、少女と娘の狭間を行きつ戻りつしている時期だった。幼い顔立ちであるが、それは彼女が東洋人で、ルイと骨格が異なるからであった。彼も、彼女も変化している。

櫻夢櫻栞84:桜を見る年を経ていくうちに、彼と彼女はもうすぐ、フランスの華と彼のファム・ファタルが出会った年齢に到達する。そしてそこから・・・何が始まるというのだろうか。何かが、終わる可能性もある。この花枝のように。倦んで忌むべきものとして、切り捨てられるのかもしれない。

櫻夢櫻栞85:過去を懐かしがるばかりの愚かな娘に、ルイは溜め息を漏らした。「オレはヒカルの外部記憶装置になるつもりはないけれどもね」辛辣に言った。けれども、ヒカルはちょっと笑っただけだった。「それなら、私は未来を空想し続ける。ルイが記憶してくれているのなら。私の記憶はルイに託す」

櫻夢櫻栞86:「この桜で栞を作ろうと思うの。・・・シャルルと、私とルイの揃いで」「受け取りは拒否する」彼女は笑った。「良いの。私が勝手に作りたいだけなの」この桜を残そうとするのであれば、もっと違った方策があったはずなのに。彼女が思いつくのはこれくらいだから、と言ってヒカルは笑った。

櫻夢櫻栞87:「随分な保険だな」彼はそう言って声を漏らして笑った。彼にこの景色を記憶しろと言い、そして自分では桜を保存すると言う。彼女が何かを残したいという欲求に駆られている理由は何だろうか。思索に耽る題材ではなかった。しかし彼はじっと彼女の横顔を見つめた。物憂げな青灰色の瞳で。

櫻夢櫻栞88:「それほど固執する理由がわからない」ルイがそう言ったので、ヒカルは微笑んだ。恥ずかしそうに笑った。「忘れたくないから」俯く彼女は、膝の上で手の平をぎゅっと握った。緊張している証拠だった。「良い状態で摘み取りたいと思っているのだけれどこれが最後だと思うとそうできない」

櫻夢櫻栞89:馬鹿馬鹿しい幻想に付き合っている暇はない、と彼は辛辣に言った。ヒカルはいつもそうだった。感傷に溺れて、物事の本質を見失っている。切除しなければ生き存えない古木を存続させるためのやむを得ない処置であるのに、彼女はそれを惜しむ。そしてあろうことか、病んだ花瓣を残すという。

櫻夢櫻栞90:いつになったら、この愚かな娘は彼の前から去るのだろうか。早くどこかに行ってしまえば良いのに。桜の雨滴が彼の頬を撫でては落ちていく。風が出てきたのだ。「・・・さっさと好きなだけ花を摘んで邸に戻れ。花が散るまで待っているつもりか？」一度地面に落ちたものは彼は触れない。

櫻夢櫻栞91:「待って。もう少しだけ待って。・・・桜の・・・烟景（春の景色のこと）をもう少しだけ、見ておきたい」大きく息を吸って、彼女は大きな瞳を昊に向けた。春の景と言った彼女の茶色の髪が目立つほどに、淡く白く、褪紅（あらぞめ）の桜は、確かに、彼女に相応しいのかもしれない。

櫻夢櫻栞92:身分の低い者が身につける色を彼女は夢中になって眺めている。どうにも滑稽だと思った。記録する方法は他にいくらでもあるのに。彼女はあろうことか、自分の心の内に収めると言う。何より曖昧な方法でもって。ルイだけはそれを映像として記録しておくことができるが、彼女には不可能だ。

櫻夢櫻栞93:「人間の記憶媒体は極めて曖昧で主観的でそれでいて呼び起こすのは難しい回路であると学ばなかったか」彼はそう言いそうになって、口を噤んだ。言葉を多く

出す者は、言葉に酔って失敗する傾向にある。だから言葉は少なくて良い。多くを尽くして伝えたいと思う相手が居れば別の話であるが.

櫻夢櫻栞94:「どれかひとつを選ぶことができない」ヒカルはそう言った。「どれも素晴らしい命を持っているから」「それならここに居る必要はないだろう」ルイの言葉に彼女は首を横に振った。「ルイ。どれにも命があり、どれにも選ばれる質がある。私は、それを選んではいけない」彼女はそう言った。

櫻夢櫻栞95:彼女は花瓣を採取しに来たと言っていた。それなら、最高の状態の薔薇を摘むのと同じように、最高の状態の桜の花弁を摘み取れば良いだけだ。背が届かなければ、誰か人を遣らせて目的を遂行することも可能なはずだった。彼女は長らくこの家の住人であったから。だからそれも当然にできた。

櫻夢櫻栞96:しかしこほれほどまでに開花が進んでいる花片はすでに最高の状態を越えてしまっている。元々、彼女が朝、薔薇を摘むのは正確には「最高の状態になる直前の薔薇」なのだ。シャルルの目覚めの時間にあわせて開花するものを選んでいるだけに過ぎない。散ると言うことは盛りを越えることなのだ。

櫻夢櫻栞97:「どれも選べないということは、どれも選ばないとういことだ。それなら諦めて戻るのが賢明だな。いや、当然の帰趨（行き着くところのこと）だ」冷淡なルイに、彼女は彼に首を傾げた。「ルイ。選べない野ではなく選ばないという考え方をしてみる可能性について、考えたことはある？」

櫻夢櫻栞98:「どれもが素晴らしい。だから、どれもに命があるから。命があるから、それだけで素晴らしいと思う」「それなら、オレは一体何だろうね」彼は自嘲気味に嗤った。彼はもともと代理母による出産であるが、遺伝子操作されたリッチ・ジーンである。より素晴らしい種になるように改良された。

櫻夢櫻栞99:だからそういう生死感については、ヒカルは極力彼の前では口にしないようにしていた。望まれた命とそうでない命があってはならないと考えている彼女とは、もう、共通した価値観を持つことはできないのだとルイはとうに気が付いていた。だからこそ、苛立つのだ。彼女が何も知らないから。

櫻夢櫻栞100:「ルイは素晴らしいわ。生まれて来た意味ではなく、生きている意味というか・・・自分の願いを叶えてみようと思わない？」「思わない」即答だった。冷たく彼女を切り捨てた。「オレの願いは最初からひとつだけだ」桜の花びらが落ちてきた。淡い華達が、彼女に賛同するように降る。

櫻夢櫻101:まるで彼女を待ってから落花することを始めたようだった。それまで枝が撓るほどに撓わに果実のように花を咲かせていた櫻の花片が、彼と彼女の天から舞い降りてきた。それまでは、ちらちらと時折僅かに降り落ちていただけであったのに。彼女がやって来たら、それを合図にしたかのように。

櫻夢櫻栞102：「ああ、どれも素晴らしいわ」彼女は感嘆してそう言った。心動かされることが素晴らしいと信じて居る彼女は、決してルイのように執着を捨てることができない。だから、どれか特定の花を摘み取ることに躊躇いを感じているようだった。それなら、最初からここに来なければ良いのに。

櫻夢櫻栞103:「根本的に」彼は低い声で静かに言った。「選べないものを最初から選ぼうとするから問題なのではないのか」「どれをとっても素晴らしいから、選択することはできない。どれも生きているから、どんな形状であっても素晴らしい。例え、枯れていても。・・・どんなに萎れていても」

櫻夢櫻栞104:ルイは、ヒカルの言葉に反論しなかった。人の命は・・・特に、ルイの命は、選別されて生まれて来たというのに。なぜ、それを知りながら、彼女は無神経なことを言い出すのか、観察しようとした。決して理解しあうことのできない人物との会話ほど苦痛なものはない。彼は肩を竦めた。

櫻夢櫻栞105:それでもヒカルは続ける。大きく息を吸って・・・そして自分の両親の鎮魂にあてているかのように祈りを捧げるような神妙な面持ちでもって、ヒカルは目を閉じて少しの間無言でいた。しかし隣に居るルイに今一度眼を向けると、彼女は言った。「命は素晴らしい」区切るように言った。

櫻夢櫻栞106:「くだらないな」彼はそう言うと、背もたれに凭れた。桜が堕ちる。彼は整った顔を少しだけ歪めた。しかし金の前髪によって、視線が何処を向いているのか、ヒカルからはよく見えなかった。「命が素晴らしい？それなら、オレの命は・・・ヒカルの命は、何にも代えがたいなら」

櫻夢櫻栞107:彼はそこでゆっくりとヒカルに向き直った。「どうして、シャルルは生きているのだろうね」彼が何を言おうとしているのか、彼女にはわかった。静かな、桜の堕ちる音だけしかしない空気の中で、喘ぐように呼吸する。苦しかった。彼はシャルルが堕ちていくことを望んでいるから。

櫻夢櫻栞108:「どの命も得がたいものだとしたら、それこそ、オレの生まれて来た意味がないってことになるな。・・・それにヒカルも」ヒカルは黙っていた。「どれも平等で・・・そしてどれも失われないのであればこの世の生態系は・・・そう、かなり現実と違っていなければならないはずだが」

櫻夢櫻栞109:彼は続けた。「死さえも平等ではないこの世で、そんな理想論を振り回す傲慢な贖罪の娘に、命を摘み取られるとは気の毒だな」彼は桜を見上げてそう言った。まったく気の毒そうではなかった。「・・・だからこそ、どれも美しいし、どれも大事だしどれも・・・」「どれも救ってやれない」

櫻夢櫻栞110:ルイがヒカルの言葉を繋いだ。「ヒカル。君がどんなに正論を振りかざそうとしても、それは君にとっての正論でしかない」そして空を見上げた。桜の昊が彼の視界に入る。ああ、本当に煩わしいな、と彼は呟いた。「ルイ」ヒカルがそっと彼の名前を呼ぶ。混沌とした思考に入りそうになる。

櫻夢櫻栞111:彼女にわからない彼の路があることが、ヒカルはとても哀しいと言うかのように、彼を見つめる。見事な黄金の髪を持つ、華の精と見紛うような、瑰麗に覆われた人の横顔をそっと見上げた。溜息が出る。どうして彼はこれほどまでに哀しむのだろうか。どうして酷く傷ついているのだろうか。

櫻夢櫻栞112:「櫻だけではない。命はみな、美しい。限りがあるから美しいのかもしれない。そして時折苦しくなる」彼女の両親は戻ってこない。彼女がいくら待っても戻って来ない。そのことを言っているようだ。有限の生を肯定しているのに、彼女は両親の死や不在については受け入れていない。

櫻夢櫻栞113:「ヒカル。オレとヒカルの景色は違う」彼はそれだけ言った。「ルイ、それでも、その景色を一緒に見たいと思うから、私は貴方に・・・櫻を捧げたいのよ」「この枝はやがて落とされる。それを眺めて、貴女は何を共有したいの？喪失感？」彼はそう言って微笑んだ。冷笑より冷たい微笑だ。

櫻夢櫻栞114:ヒカルは黙った。もうそれ以上、彼には近付けなかった。強烈な拒絶を感じて、ヒカルは唇を噛んだ。彼女はどうしてこれほどまでに鈍感なのだろう。・・・ルイは幾度目かの溜息を漏らす。なぜ、彼女はこれほどまでに・・・彼を饒舌にさせるのだろう。普段の彼は至って無口であるのに。

櫻夢櫻栞115:「譲ってやるよ」彼はそれだけ言うと立ち上がった。ふわり、と風が生まれた。「結論の出ない議論ほど、無駄なものはないからね」彼はそれだけを言った。ヒカルと彼は違う。同じ過程で生まれて来たのに。それなのに、彼女は凡庸で、彼の信念を覆すような理論を打ち立てることはない。

櫻夢櫻栞116:「ルイ。それなら・・・ここからひとつ、花を選んでくれる？」ヒカルが慌てて、一緒になって立ち上がった。「ルイのために、何かを作ろうと思う」「貴女の創作意欲は評価するけれどもね」彼は冷笑した。「それに協力する義務も義理もない」彼女は更にルイに御願いだ、と言った。

櫻夢櫻栞117:ルイは手を翳せば本当に届きそうなほどに近い櫻の昊を見上げた。ここに長居しては面倒なことになりそうだとわかっていたのに、それでも退去する時間を僅かに延長したばかりに、彼女がつまらない負荷をかけてきたことに、憤慨していた。彼は誰かの願いを叶えるために居るわけではない。

櫻夢櫻栞118:「選ぶという行為は・・・・大変に傲慢だと、ヒカルが言ったばかりだと記憶しているが」彼は揶揄した。「オレの幻か、夢なのかな」彼は決して夢を見ないのに、そう言ったので、ヒカルは慌ててごめんなさいと謝罪した。「謝る理由がない。それは少しも美徳ではないし、とても愚かだ」

櫻夢櫻栞119:「再生するための処置であることは理解しているけれど、それでも、やはり、この素晴らしい枝が落とされるのは、とても哀しいことだから」「なぜ哀しい？記録だけで十分充足されている。余計な感情は捨てろ。それでも残そうとするヒカルの方が、愚かしいことをしているとは思うが」
櫻夢櫻栞120：「それもわかっているけれども、何かしたいの。この家の人達のために」「それなら消えてくれ」彼は素っ気なく言った。そうすることはできないと分かっているのに、それでも言った。手放すわけはない。彼女はこの家の当主が今でも愛している女性の娘であり、忘れ形見でもあるのだから。

櫻夢櫻栞121:ヒカルはほっと息を吐いた。同時に、風が吹いて、櫻の花弁がまたひと波、散った。彼女の茶の髪が揺れる。癖の強い、うねりのある髪だった。その茶色の波に乗って、櫻の花弁が彼の前で不均一にそれでも乱れて、重力に従って堕ちていく。けれどもそれらは僅かに風に吹かれて舞い上がる。

櫻夢櫻栞122:自然の理である法則に逆らって、風に舞い上がった櫻の花びらは、静かに地面に落ちていく。彼はそれをただ眺めているだけだった。ヒカルのように、命を惜しんで感傷に浸ることはない。生命は死の前でも生の前でも平等であると考えている彼女を嘲笑いながら。ただ、そこに居た。

櫻夢櫻栞123:「ヒカル。自分の命と花弁の命との比較は傲慢だと思わないか」ルイの言葉にヒカルは黙ったままだった。彼と彼女の距離はいつまで経っても縮まらなかった。生命だけではない。全てにおいて価値観が違う。それでいながら、同じ時間を過ごさなければならないルイの苦痛がそこにあった。

櫻夢櫻栞124:彼は一度だけ櫻の空を見上げた。本来ならそこには蒼い空が広がるはずであった。しかし、彼らが立っている場所には、大きな枝を伸ばし、絶対的存在として君臨するこの家の当主のような櫻の樹があるばかりだった。ヒカルにとっては憩いであるがルイにとってはそれは魂の試練でしかない。

櫻夢櫻栞125:木々が犇めく。華が落ち着かない。二人に共鳴するかのように。何かを語りかけるかのように。「命は選べない。だから素晴らしい。生きているから素晴らしい」「オレは選ばれて生まれた。それはどう説明する？」彼は自嘲気味にそう言った。彼は生まれる前から、彼であることを望まれた。

櫻夢櫻栞126:「だからもっとルイは自分のことを大事にするべきだ」「大事だよ」彼は即答する。「この躰も命もすべて・・・あの男から受け継がれたものなのだから」「姿形は同じかもしれないけれど、ルイはルイ・ドゥ・アルディであり、何者でもない」「・・・オレは唯一が絶対だとは考えない」

櫻夢櫻栞127:彼は冷笑した。櫻の空を見上げる。もう・・・幾度会話を交わしても無駄だ。彼女は唯一と絶対を同義だと思っている。彼がただひとりのルイとしての価値があることが絶対だと言う。それなら、これほどまでに似通った者たちが誕生するこの家の呪わしい血脈をどう説明するのだろうか。

櫻夢櫻栞128:どこか懐かしい、とヒカルは言った。「いつか、また、ルイとこうして櫻を見上げたいから。だから、想い出を残すために、私は櫻栞を作ろうと思う」彼女は言った。永遠は存在しない。永遠にあの人だけを愛すると言ったシャルルは、短い期間であるが結婚し、ルイに彼の遺伝子を残した。

櫻夢櫻栞129:愛がなければできないものとされているものの大半は、それがなくても完遂できる。永遠はない。ヒカルの両親は海に消えた。死んだのか生きているのか、それすらわかない。希望はほとんど残されていなかった。生を受けてから死を受けるまでの年月は、誰にでも均等に訪れるわけではない。

櫻夢櫻栞130:ヒカルがとうとう涙声になった。彼女はいつも人前では泣かない。それが彼女の唯一の自尊心だからだ。たったひとつのものにしがみついて生きる者を哀れんでやるつもりはなかった。ルイは櫻の樹の下に寄る。花に酔いそうなほど、花瓣が開いて彼らの上から地に向かって降り注がれている。

櫻夢櫻栞131:遠近感を喪失しそうなほどに、近すぎる花々の色の合間に栗皮色の幹や枝が見える。しかし、彼女のもう、この櫻の花々を、両親と眺めることはないのだろうということも、薄々承知していたのだ。シャルルと同じように。彼らはまだ生きていると信じている。根拠のない考思はとても脆弱だ。

櫻夢櫻栞132：ルイは溜め息をついて、斜め後ろで立ち竦み、声を抑えて哀しみに溺れそうになっているヒカルを振り返らなかった。・・・数歩前を更に行くと、彼はしばらく上を向いていた。茶色の眸に溢れんばかりに浮かばせている彼女が・・・誰の前でも見せない姿であることを知っているから。

櫻夢櫻栞133:誇りに対して、彼は敬意を払っていた。それは彼が誇り高い人物であるから故の事なのかもしれない。ヒカルの自尊心はささやかでとてもつまらないものだ。けれども、彼は・・・それが彼女を支える唯一であり甘美な魂の殻であるということを知り抜いていた。けれども、彼は無表情であった。

櫻夢櫻栞134:彼女の声にならない声が漏れてくるのを感じながら、ルイはやがて腕を伸ばした。長い腕が宙に・・・伸びていく。細く長い神経質そうな指が櫻の大気を掻き分けて、やがて櫻の枝に到達した。彼の細い指に絡め捉えられたそれは・・・次の瞬間には、音を立てる。・・・彼が枝を折ったのだ。

櫻夢櫻栞135:「・・・ルイ！」彼女が驚いた声を上げた。蒼灰色の瞳が少しだけ歪んだ。予想範囲内の反応だった。彼は左手に力を込めると、枝を勢い良く手折った。勢いで、花弁が・・・理から外れた作用によって散らされた。それらが淡い光を放ちながら、彼の髪や肩に降りかかる。彼が命を摘んだ。

櫻夢櫻栞136:ヒカルは声を失って、呆然としていたようだった。背中を向けているが、はっきりと気配がわかる。櫻に酔いそうになる空気の中で、彼女が空気と擦れる音さえ、彼には聞き取れた。彼女はそうではないけれども。彼がそういう風に・・・何かを無造作に摘み取る場面を見るのは初めてだから。

櫻夢櫻栞137:散る命なら、彼女は喜んで手にするのに、なぜ、最高の状態の枝葉に腕を伸ばすと、彼女は哀しそうにするのだろうか。彼女の理屈と申し出は、承引できなかった。彼女は、薔薇なら摘み取るのに。それなのに、櫻や・・・その他の命は同格でないと自分自身が証明しているのに。理解できない。

櫻夢櫻栞138:「後悔したり批判したりするのであれば、最初から、気を引くために何かを創ってやろうなどと尊大な態度は取らないことだ」ルイはそう言って冷笑した。片手には、もぎ取った枝が握られていた。枝が裂けて、茶褐色と練色が縞を作っている。生木の匂いが風に乗って立ち上ってきた。

櫻夢櫻栞140：反力の作用で、彼女は進んで方向と逆に躰を逸らして均衡を失った。彼は腕を掴んだまま・・・彼の傍にヒカルを寄せる。「ルイ」困った声調で彼女がシャルル・ドゥ・アルディの名前を呼んだが、彼は無視した。謝罪もしなかった。ただ・・・そこに行こうとする彼女を押し止めた。無言で。

櫻夢櫻栞141:ヒカルが見上げると、斜め右上の方向に、ルイの端正な顔があった。彼の顔はこういう明るい陽光の下でも、月の光の下にいるようだった。眩い生命の煌めきである櫻色の輝きの下にいるのに。それは彼の金の髪がそう見せるのだろうか。それとも・・星辰の子と呼ばれているから故なのか。

櫻夢櫻栞142:この世のすべての穢れから切り離された、桜の華そのもののようなヒカルが戸惑った顔をした。ルイは刺すようなそれでいて冷たい表情のまま、彼女の腕を放さずにいた。彼の躰はヒカルの重みをうけてなお、まったく影響されなかった。彼女はいつも・・無防備に彼の脇をすり抜けていく。

櫻夢櫻栞143:彼の顔からはまった感情が窺えなかった。そして真摯というには危険で厳粛すぎる表情で、彼は遠くを見つめていた。ヒカルの方には、その青灰色の瞳は向けなかった。切れの長い眸が僅かに細くなった。「私はルイの深い考えを読み取ることができない」彼女は腕を離せとは言わなかった。

櫻夢櫻栞144:「誰かと自分を共有するつもりもないし、歩み寄るつもりもないが」ルイは抑揚なくそう言ったので、ヒカルは腕を掴まれたまま、困り果てて肩を落とした。彼女の二の腕は強く掴まれたままで・・・薄い袖の下から彼女の体温が伝わってくる。反対に、彼女にはルイの手の平の体温が伝わる。

櫻夢櫻栞145:太陽のぬくもりだった。太陽のようなぬくもりだった。彼女の温度は、あたたかいというよりもむしろ、熱かった。けれども、彼女が打ち捨てられた枝に茶色の眸を向け続ける限り、彼には決して届かないのだろうと思った。何もかもが。「・・・生きているということは素晴らしいのよ」

櫻夢櫻栞146:ヒカルの言葉は掠れていた。生きていることが素晴らしいと声高に言うことで、彼女は自分自身を肯定しているようであった。そうでなければ、ここで生きている意味がないのだから。「ヒカルがそのように言う限り、誰もヒカルを理解できない」ルイは素っ気ない声でそう言い放った。

櫻夢櫻栞147:濡れたように輝く黒眼がちの大きな瞳は、彼女の母親に良く似ていた。同時に彼女の父にも似ていた。彼を理解できない、ではない。彼女を理解できないだろうという予言にも似た言葉をヒカルに伝えると、彼は彼女の腕に巻いていた細く長い指に込められた力を解放し、ヒカルの温度を捨てた。

櫻夢櫻栞148:とうとう、彼女の激情が吹き出しそうになった。茶色の瞳に大きな淡水を浮かべて、ぎゅっと唇を横に引いた。「ルイ。私には・・・わからない」首を横に振って、彼女は遂に彼に屈した。きめ細かく白い頬が朱に染まった。彼に言葉は届かない。彼にヒカルの物思いは理解しないと宣言される。

櫻夢櫻栞149:「ゆるやかに死んでいく命を愛でるのは、素晴らしい趣味だと褒めてやった方が良いのかな」彼がそう言ったので、どうにもならない苦悩を溢れさせた貌をルイに向けたヒカルに、再び彼が冷笑した。「浅ましいな。憐れを希うとは・・この家の者が最も厭うことだ」彼女は息を止めた。

櫻夢櫻栞150:ヒカルはこの家の子供になりたがっている。そうすれば、彼女が欲している家族が手に入ると思っている。だから、それが厭わしい。同化して得られるものであるならば・・・とっくに・・・そう、とっくに、ルイはこの家に君臨しているのだというのに。それなのに、彼女はそれを否定する。

櫻夢櫻栞　後編

櫻夢櫻栞151:知らず知らずのうちに、彼を否定していることに彼女は気がついていただろうか。捨て堕ちた葉枝に彼女が意識を飛ばしている限り。それは、届かない。虚しい問答を繰り返しているのに、繰り返さずにはいられない。それは、ルイの事なのか。それとも。ヒカルのことなのか。どちらなのか。

櫻夢櫻栞152:「どんな命も素晴らしい。・・・けれども、誰かとそれを分かち合って記憶していくことも、素晴らしい」「感銘を受けるかどうかは、主観的問題だ」「それでも良い」彼女は溜息を漏らした。「それでも・・・良い」彼女は繰り返す。「それでも良い。ルイだけ覚えていても良い」「傲慢だ」

櫻夢櫻栞153:「ヒカルは自分の考えに溺れるばかりで建設的な・・・見知した物事について評定しない。それが何を意味しているのか、考えもせず。ただ、自分に縋って生きていることに満足するのであれば、ひとりで浸っていろ」辛辣な彼の口調に、ヒカルは抗議することなく、肯定した。「私は怖い」

櫻夢櫻栞154:彼女は続ける。「私は・・・怖い。記憶がなくなり、哀しいことを忘れて、そうではない記憶だけが残ることを。すべてを覚えていなければ、私の中で残っているものがどんどん消えていく」「記憶の種類数を誇っても意味のないことだ」
「いいえ」彼女は首を横に振る。「私には有意なの」」

櫻夢櫻栞155:彼女は続ける。「私にとっては、とても重要なことなの。この桜の華の色も空も木々の様子も忘れたくない。でも、私は次々と訪れる様々な思い出に埋もれてしまう。ルイと共有していることで私は忘れない。・・・哀しい想い出にならないから、忘れない」彼の指先がぴくりと僅かに動いた。

櫻夢櫻栞156:「ルイと共有する想い出は、決して・・・想い出にならない。また、次の華を見ようと思いたくなるから」「言っている意味がわからない」彼は星辰の子と呼ばれて、理解できないことはないはずなのに。ただ、それを繰り返した。彼女を理解したら終わりだ。肯定したら終わりだ。

櫻夢櫻栞157:それは彼を否定することになるからだ。彼の目的のある生を彼自身が拒むことになる。その時がもし、訪れるのであれば・・・彼に「もし」という仮定は存在しないが・・・ルイはルイ・ドゥ・アルディでなくなる瞬間なのだろうと結論づけていた。ヒカルは少し哀しそうに囁くように呟いた。

櫻夢櫻栞158:「私の中のルイとの想い出は消えはしない。決して。この家で過ごした記憶がすべて、桜の花のように散ってしまったとしても、また時期が来れば思い出す。忘れたくないと思ったり忘れたいと思ったりしないで、そのまま・・・受け入れたいとも思っているのよ。でも忘却も畏れている」

櫻夢櫻栞159:彼女は溜息混じりに囁くが、その時は眉を寄せて、とても苦しそうだった。ヒカルは自分の想いを吐露したりすることはなかったから。誰かに何かを押しつけることは罪悪だと感じている少女は、自分の価値観について肯定を促すような会話をすることを避けることに徹底していた。

櫻夢櫻栞160:「それが本音？」ルイは静かに尋ねた。彼女は頷いた。「そう。とても浅ましいね、とルイに言われても当然なの」ヒカルがルイとの想い出を共有したがる理由を明かしたが、ルイはそれに対して再び冷酷な感想を述べることをしなかった。ただ・・・黙って、自分で折り落とした枝を見つめる。

櫻夢櫻栞161:彼は枝に残る華を見つめていた。彼の広い背中に、桜が・・・幾度も空から堕ちては、彼に絡み付くが、それはルイに留まらずに静かに地に落ちていく。彼には声が届かないから、と諦めたように、とても静かに。孤独と虚無しか感じない表情が動くことのなに彼に彼女はかける言葉を失った。

櫻夢櫻栞162:彼は金の髪を風に靡かせる儘にしていた。ただ・・・遠くを見ているようで、自分の洞のような内側を覗き込んでいるようでもあった。無残に折られた櫻の枝の白さだけが目立っていた。今、ほんの少し前までそこにあったものなのに。もう、そこにはない。命はそういうものだと彼は言う。

櫻夢櫻栞163:「この櫻の樹は姿を変える。ただ、それだけで本質は変わらない」ルイは静かに言った。ヒカルとの距離の隔たりを感じながら彼は言葉少なく語る。彼女に言っているのか、自分自身に諭しているのか、それすらわからないほどに抑揚のない声だった。「枝が堕ちても。枯れなければ存続する」

櫻夢櫻栞164:やがて、ヒカルは彼が打ち捨てた枝の異変に気がついた。彼の行動を非難するつもりはなかったが、最初は、なぜ、そのようなことを突然遂行するのか、彼女には理解できなかったからだった。彼の思考の速度はヒカルのそれとまったく違っていたからだ。・・・ヒカルは茶色の瞳を開いた。

櫻夢櫻栞165:「ルイ、これは・・・」彼女が腕を伸ばそうとした。再び繰り返そうとしたので、彼は顔を顰めて、彼女の躰の前に、腕を伸ばして制止した。とても不機嫌そうだった。ヒカルが彼と櫻の樹を交互に見上げていた。そしてその合間に、地に落ちた枝に視線を遣る。何度も往復するうちに悟った。

櫻夢櫻栞166:「どうして・・・」詰まった声でヒカルはルイに尋ねる。けれども、それにはルイ・ドゥ・アルディは明瞭なこたえは出さなかった。ただ・・・
彼より前に進んではいけない、と言うかのように、彼の腕が彼女の前進を阻む。それだけで、それが理由になった。彼女は呻いた。低く、掠れて。

櫻夢櫻栞167:彼が落とした枝は、ヒカルが最初に告げていた病んだ枝葉だった。彼は薔薇以外に造形が深いとは知らなかった。櫻の樹の病気については、専門家でないとわからない。だから、ヒカルにはどれを落とすのかわからなかった。それだから、全体像を眺めようとしてここに来た。それなのに。

櫻夢櫻栞168:ルイ・ドゥ・アルディは、最も萎れている枝を選んでそれを手折った。ヒカルの目の前で。どの命を搾取するのかわからないと言って惑った彼女の前で、
彼は・・・命を摘み取り、それが別の命を救うのだと無言で告げたのだから。だから、それに気がつかなかったヒカルに憤っていたのだ。

櫻夢櫻栞169:ルイ・ドゥ・アルディの名前を呼んだ。けれども彼は返事をしなかった。愛翫動物に、愛翫されることを希うような態度はできない、といつか彼はヒカルに言ったことがあった。彼女は、この家の者たちから愛で荒れて慰みの対象となるだけの人物であったのに。彼女は何かを慈しみ慰む。

櫻夢櫻栞170:「触れても良いの？」「ヒカルの行動にオレは干渉しない」
彼女が悟ってから、ようやく彼は彼女に下を向くことを許可した。櫻の枝はこれからも生きる。その命を失って、それまで居た場所の命を守る。それをヒカルが知ったから。落ち行く命を哀しむだけではなく、その先を知ったから。

櫻夢櫻栞171:彼女はしばし黙ったままだった。命というものと、生き抜くということの意味について、少しばかり感慨に耽っていたようだった。また、次の櫻に出会うために彼は命を見送ろうと言った。それを惜しんで形に残そうとするヒカルを傲慢だと言った。ひとつひとつの命は尊く清いが永遠はない。

櫻夢櫻栞172:「・・・ルイもこの櫻を伐採することは賛同したのね」「伐採ではない。剪定するだけだ。それを大袈裟に捉えて勝手に意気消沈しているのは、ヒカルだけだ」ルイは素っ気なくそう言ったので、ヒカルは視線を逸らし、狼狽えたような声を漏らした。彼の普段からは予測できなかった。

櫻夢櫻栞173:彼は普段から親日に過ぎるアルディ家当主の決定に不満を感じていることは明らかであった。特に世に出そうとしない品種改良の薔薇と、この櫻の保持に関しては、彼はいつも非生産的で建設的に遠い愚行だとあからさまにシャルルに抗議しており、その件でシャルルに叱責されたばかりだ。

櫻夢櫻栞174:だから、彼女は、この樹のことをルイは厭わしく感じているのだと信じて疑わなかった。それでも、花瓣の美しさについて、せめて、それだけでも認めてもらおうとして、彼女は彼のために栞を作ろうと思い立ったのだ。彼は大変な読書家であった。いつも難しい書物に眼を走らせている。

櫻夢櫻栞175:せめて彼の目の端にとまるブックマーク程度のもので良いから、彼女はそこに命をしたためたかった。だから彼が手折ったので、ルイは心の底から、自分を遠ざけたいのだと思ったヒカルに、彼は・・・また来年も咲く、と言った。彼は未来を約束しない。必ず実現することしか言わない。
櫻夢櫻栞176:ヒカル・クロスがしげしげとルイを無遠慮に眺め回すので彼はこの上なく機嫌を損ねた様子であった。整った顔を厳しくし、彼女につまらなさそうに言う。「根を掘り起こすと、景観を損ねる。掘り起こされた土の跡ほど見苦しいものはない」彼は彼女の視線から逃れるように一歩前に出た。

櫻夢櫻栞177:それから、少しばかり間を置いて、彼は、誰に言うでもなく、そっと呟いた。彼は何もかもを計算しているというのに、それはまったく前置きのない問いかけであった。彼女に告知は必要ではなかったが、彼にもなかった。「生命の痕跡を残すというのは、そのものを残すことばかりなのか」

櫻夢櫻栞178:彼がそう言ったので、ヒカルはその言葉の本当の意味について思考を巡らせ始めた。「つまり、記憶は、そのものではなく、次へ巡るということなのかしら」彼女のこたえにルイは冷笑した。「哲学や価値観の違いについて論議する必要はないと思うが」「ああ、ルイ。少し頭を整理しないと」

櫻夢櫻栞179:「オレは最初から何も変わらない」彼女に向かって、ルイはそう言い切った。白に近い櫻の色が、空からまた降り注いだ。彼の金の髪はその中でも際だって輝いて見える。彼は星辰の子と呼ばれている。星だけではない。すべての天体を引き寄せる。そしてそれだけではなく・・・花瓣さえも。

櫻夢櫻栞180:絶え間なく静かに堕ちる、雪のような花瓣の雨の中で、ルイは静かに彼女を見つめたままだった。ヒカルは・・・いつも見慣れた彼の端麗な顔を、改めて見つめ直す。彼はこんな顔をすることがあったのだろうか。いつも不機嫌そうなのに。どうして今は、見られていることが苦しいのだろう。

櫻夢櫻栞181:誰にも見せない表情というものがある。ヒカル・クロスにしてみれば、彼女の涙顔だった。人前では泣かないと決めて久しい。それが彼女の唯一の誇りだった。泣き顔を見せることが泣いていることではないと、シャルルに言ったから。自分が率先して破り捨てることのできない約定だから。

櫻夢櫻栞182:おなじように、彼にも・・・ルイにも人に見せたくない面があると知った。それが、この櫻の下で過ごすほんとうに短い瞬間に考える表情を含むのかもしれない。繰り返す櫻の色の重ねをひとつひとつ彼は毎年記憶していく。その作業を、彼女は阻害してしまったのに。彼は責めない。決して。

櫻夢櫻栞183:ヒカルがルイに影響することが障るのかもしれない。けれども彼はいつも何も言わない。彼女を傷つける言葉を発し、彼女を縛め、そしていつも彼は誰も傍に寄せ付けない。ひたすらに美しい金の髪の精神の子と、茶色の髪の茶色の瞳の少女は向き合った。それが運命であるかのように。

櫻夢櫻栞184:それは偶然でも必然でもなく、運命ですらなかった。無言の空間の中に長い時間を共有した者同士の特有の間合いが生まれる。これ以上無言で見つめ合えばそれだけで、何かを無駄に崩壊してしまいそうだ。この櫻の空と風と・・この景色は二度と巡らないということが、彼らを煽るのだ。

櫻夢櫻栞185:「・・ルイ、ファム・ファタルって知っている？」「それが何か？」おもむろに尋ねるのは、少女期特有の症状なのだろうか。ルイは顔を顰めて、彼女の言葉に反論した。「オレにはまったく意味のない言葉。定義が曖昧で、そしてまったく主観的で感傷的で、何もかもに説明のできないもの」

櫻夢櫻栞186:「説明できないから・・・人はそれを運命と呼ぶのかもしれないわね」ヒカルがそう言ったので、ルイは鼻白んだ。「ヒカルの定義にすべてを当て嵌めるな。それなら、ヒカルの言うところの運命の人というは誰のことなのか」「ルイ」即答だった。そして彼は押し黙った。きゅっと唇を結ぶ。

櫻夢櫻栞187:「言っている意味がわかっているのか？」彼はそう言って、首を横に振った。「わかっている。私の運命の人は、ルイと・・・それからシャルル」彼女の言葉に、彼は僅かではあるが、強い口調で反論した。「ヒカル」彼女の名前を一度だけ、強く呼んだ。ここには彼と彼女しかいないのに。

櫻夢櫻栞188:「運命の人がふたり居ても、おかしくないでしょう。私には、私であるために様々な事が必要で・・・・でも、そのたくさんあるものの中で・・・そう、私の大事な・・・・私を育ててくれたシャルルと・・・ルイと、また次の櫻を見たいと思うのよ」それから彼女は微笑んだ。空を見上げる。

櫻夢櫻栞189:「私はこの櫻が生きてきた年月よりもっと短い生しかしらない」彼女はそう言った。「でも、私の中でルイはいつも変わらない存在よ」ヒカルは黙ったままのルイに返事を要求しなかった。「運命って言葉の意味もよく分からない。運命の人を定めたと言うシャルルの気持ちもわからない」

櫻夢櫻栞190:彼女は続ける。「それでも、私はこのルイと一緒に櫻を見たいと思うし、この櫻が切られると聞いてとても哀しかった。それはルイと眺めることのできる景色がひとつ、少なくなってしまうから」そこまで言うと、彼女は気恥ずかしそうに、彼から顔を隠すようにして、俯いた。静かに。

櫻夢櫻栞191:これほど多くの会話を交わすことは滅多にないことだった。それで少し嬉しくなったのかもしれない、と彼女は言い訳をした。「身勝手でひとりよがりな妄想を漏らすことに恥じるべきだ」ルイの言葉が掠れていることにヒカルは気がつかなかった。彼は自分を律することに関して完璧だから。

櫻夢櫻栞192:そこで話を打ち切ることもできたのに。ルイは大きく息を吸うと・・・物憂い感じの濃い青灰色の瞳をヒカルに向けてから、言った。感情の抑揚のない、普段のとおりの彼であった。しかしヒカルとこれほど長い時間を過ごしながら、彼はいつのものように、無駄で非生産的だと言わなかった。

櫻夢櫻栞193:「栞には本来・・・道しるべとなるもの、という意味がある」「そうなの？」ヒカルは彼の博識に唸った。彼はヒカルと年齢が大きく離れているわけでもないのに、知識量がとにかく多い。「路に迷わないように印を施して山野に入ったことが由来だ」彼はそう言って、手折った枝を見つめる。

櫻夢櫻栞194:「路を迷わないための印・・・」彼女は彼の言葉を繰り返した。シャルル・ドゥ・アルディを哀しみの路から呼び戻したのは、彼女であった。シャルルにとって、ヒカルは彼の栞だ。櫻の国からやって来た櫻栞だ。自分が迷わないために、彼女を傍に置いて居る。そして彼女が居ないとまた迷う。

櫻夢櫻栞195:ルイはそれだけ言うと、横を向いた。今、目の前に居るのは、シャルルと良く似た顔立ちのルイであり、シャルルではないのに。彼女の思考はシャルルに向かっている。ルイは星辰の子と呼ばれて、星々を遵えるという称号を持つが、彼はヒカルを引き留めることができない。彼の声は届かない。

櫻夢櫻栞196:ヒカルの考え事はすぐに終わった。彼女は顔を上げると「でもやはり、ああいうことはいけない」と彼を窘めた。ヒカルに伝えるために講じた手段も、彼女にとってはひとつの手段や道具で済ませることはできないらしい。彼は溜息をついた。深く、そっと。瞳を閉じる。美しい嘆きだった。

櫻夢櫻栞197:彼に道しるべとなるものは必要ない。惑わないからだ。けれども・・・惑う者は最初から自分が彷徨っていることに気がつかないものだ。来た道を戻ろうとするから、惑うのに。ルイには櫻栞は必要ではない。彼はすべてを記憶することができるし、彼はそもそも来た道を戻ることはしない。

櫻夢櫻栞198:ルイに栞は必要ではないと言われたことに対して、彼女は誤認識を詫びた。「ルイは目印は必要ないわよね・・・読んだ頁すら記憶してしまうのだから」「中断していることを誰かに知らせるためには、必要かもしれないが」むっつりと彼がそう言ったので、ヒカルは少し茶色の瞳を大きくした。

櫻夢櫻栞199:「いいの？」「却下しても、ヒカルは無視するだろ」彼はそう言って肩を竦める。彼は元来、人から何かを贈られることを好まない。それなのに、ヒカルにそれを許可したものだから、彼女は大きな喜びが彼女の躰を震わせるままにした。「ルイ。ありがとう」彼はもう行くよ、と言った。

櫻夢櫻栞200:ヒカルに背中を向けたルイ・ドゥ・アルディは、金の髪を靡かせて、静かにこの場を離れようとしている。「待って」ヒカルはそう言った。彼が別棟に戻るのではなくそのまま・・・櫻の樹に吸い込まれていきそうな錯覚が襲ったからだ。「それから、もうひとつだけ忠告しておく」彼は言う。

櫻夢櫻栞201:「この邸内では、軽々しくファム・ファタルの話をしてはいけない」彼はその瞬間だけは厳しい顔をしていた。先ほどの険しい貌とは比べものにならない。「シャルルが哀しむから？」「それは関係ない。どうでもいい話だ。・・・しかし面倒なことを増やすこともないだろ」彼女は言葉を継ぐ。

櫻夢櫻栞202:彼女とシャルルとの絆についてルイは関与する隙間を持たない。彼の愛でる永遠の晄という名前の娘を取り上げたら・・・さぞかしシャルルは歎くだろうと思った。彼女を傍に置いて居る限り、シャルルは惑わない。惑わないのに、惑ってしまいたいと歎く当主を見るために、彼は生きている。

櫻夢櫻栞203:腕を伸ばせばすぐそこに、彼女の肢体があった。時折、無邪気な彼女を先ほどの櫻の枝のように折り捨ててしまいたくなる。童女の如くいつまでも純粋無垢でありたいと思いながら彼女は仄暗い願望に罪悪を感じている。この家の父子が折り合わないことの要因は己だと認識している。

櫻夢櫻栞204:「軽々しく口に出してはいけない言葉だと思う」彼女はそう言って、ルイに同意した。そうではない。どんどんあの人に似てくる彼女と時間を共有することが、シャルルの現在の喜びであり哀しみであることは事実であるのだから。その彼女を依り代にして、彼は救われようとしているだけだ。

櫻夢櫻栞205:決して交わらない、捻れの関係である彼らに、ヒカルという存在が閃光を発して各々の影を地面に照らし、一瞬だけ交わらせるのだ。彼には道標などは不要だ。いつも晄輝く強いしるべが輝いているから。しかしそれは認めない。彼は決して認めはしない。ヒカルを必要としているなんて。

櫻夢櫻栞206:問題は、彼女がそろそろ早婚の家系のアルディ家の者と釣り合う年齢に達する時期であることだった。このまま放置しておけば彼女を娶ると、シャルルは言い出すか、彼女を日本に返すことにするのだろうと容易に想像がついた。愛しているというまったく主観的感情で、彼は物事を動かす。

櫻夢櫻栞207:後者であることの可能性は否定できなかった。彼は自己崩壊を防ぐためにヒカルを傍に置くが、彼女が希望するのであれば、日本に返すことにノンとは言わない。強引とも言える方法で彼女の監護権を勝ち得ていたが、それが一度きりしか赦されない行為であることも承知しているはずだった。

櫻夢櫻栞208:彼女が成長して、ファム・ファタルと口にするたびに、シャルルはきっとどちらかの路を選ぶ瞬間を繰り上げるのだろう。永遠に傍に置くか、永遠に遠ざけるか。彼の言うところの永遠は本当に永遠だ。が、どちらもルイの用意した結末にはならない。深く考え込んでいた彼に、彼女の声が届く。

櫻夢櫻栞209:「大事な言葉はむやみに音にしてはいけない」彼女は厳かにそう言った。ルイ・ドゥ・アルディの意図と違う解釈をした事に対して、説明は加えなかったし、考えを改めさせることもしなかった。結果が同じで在ればそれで良い。過程を気にする必要はなかった。ルイは黙ったままだった。

櫻夢櫻栞210:こうして肩を並べて景色を記憶していく彼女は日増しにあの人に似てきていた。あの時の顔を忘れない。彼を見つめていた彼女の顔を、今も忘れていない。すぐに自分の正体に気がついて、そして涙ぐんでいたあの凡良な女と同じ遺伝子が、彼女の中で息づいている。彼女は優笑みを浮かべた。

櫻夢櫻栞211:「でもやっぱり、ルイの為にこの櫻を残そうと思う」ヒカルはそう言った。勝手にしろとルイが小さく言ったので、ヒカルはありがとうと礼を述べた。ルイはいつも彼女に冷たいが、それでも彼女はありがとうと言った。「戻る」ルイは素っ気なくそれだけ残した。「ああ、待って」

櫻夢櫻栞212:ヒカルが彼を呼び止めた。「・・・髪に、櫻の花弁が」彼女はそう言って、長身の彼に背を伸ばした。ヒカルの顔が近付き、ルイは表情を硬くした。無防備な彼女の柔らかい躰がルイの締まった身体に触れる。彼女の香りが彼の顔を掠めていった。彼の襟足に残る櫻の花弁がヒカルの指先に映る。

櫻夢櫻栞213:「これにする」彼女はそう言った。彼の襟足に乗った重さは僅かであった。ヒカルの指の重みを感じたのは一瞬で・・・そしてすぐに消えた。彼女は彼に触れることはない。彼が厭うからだ。誰も寄せ付けない彼の温度を感じ、それを咎められなかったことに安堵したヒカルの声は上擦っていた。

櫻夢櫻栞214:櫻と同じ色をした彼女の爪の先に、一枚の花瓣があった。今、これほど降り注ぐ櫻の雨の中で、唯一ルイの身体の上に残ることを赦された花弁を掬い上げた。「これが欲しい」彼女は無邪気に言った。「ルイ。これは私の栞にする。櫻の栞を見る度に、ルイと眺めたこの景色を思い出すのね」

櫻夢櫻栞215:彼は黙っていた。いつか、彼女がここを離れる日が来るだろう。その時に・・・この記憶も連れて行くのだろうか。それとも、もっと違うものを抱えて倖せと言いながらも彼に背中を向けて去って行くのだろうか。「ルイが厭でなければ揃いのものを作りたい」彼女はそっと提案した。

櫻夢櫻栞216:彼の躰から離れた櫻の花弁を大事そうに、手の平に包んだ彼女は、その上に自分のもう片方の手の平を乗せて蓋をした。儚く空気だけで蠢く花瓣を逃さないように、そっと彼女の掌で覆った。「ルイの櫻だね」無邪気に囁く彼女の声に、彼は眉を寄せる。彼は彼女に何かを与えることはしない。

櫻夢櫻栞217:それなのに、彼女は彼に絡み付いた櫻を取り上げて、それがルイからの贈り物であるかのように喜びはしゃぐ。こどものように。何も知らない童女のように。・・・それが彼を苛立たせるというのに、それでも彼女はルイの傍に寄る。躊躇いながらも傷つきながらも彼女はやめはしない。

櫻夢櫻栞218:「ね。・・・駄目かしら」彼女は上目遣いでルイを見た。彼女の憂悶した上場に、ルイはふと、眼を細めた。「それほどまでに焦る理由は？」彼女は普段、何かをねだることはしない。特にルイに対しては皆無であった。彼女はこの家の滞在者でしかないと自分を諌めているようだった。

櫻夢櫻栞219:彼女の顔が曇った。あどけない貌が一瞬・・・懊悩で満たされる。なるほど、とルイは事情を察した。彼女が今年の櫻に拘る理由や、想い出の品を作ろうとする理由が、彼女の表情で察知できた。「日本に戻れと要請があったのか」彼女はきゅっと唇を噛んだので、それが明朗な回答になった。

櫻夢櫻栞220:彼女の処遇や帰国の時期については、いつもクロス・グループとの諍の種であった。かつてはこれほどとない絆で結ばれていた両家の関係は、ヒカルの存在によって微妙な影を落とし始めている。それでもシャルルは彼女を手放そうとしなかった。正当な親族が存在するのに。彼が必要だから。

櫻夢櫻栞221:命はすべて素晴らしい煌めきを持つと言っている者そのものが、その命の価値を他者に決められていた。それを惨めと思うどころか、彼女は受け入れて、生きている。どこに誇りがあるのか、少しも理解できなかった。なぜ、彼女はいつも・・貶めた立場でなければ己を確立できないのか。

櫻夢櫻栞222:彼女は泣きそうな顔をして、笑った。「どうなるかわからないから」「ヒカルの意志はないということか。どちらに転んでも良いという意思表示ということか」「そうじゃない」彼女はその時だけ、少し怒ったような口調で言った。「私にも感情はある」彼は冷笑した。意志のない彼女を笑った。

櫻夢櫻栞223:「それなのに、さっさと旅立つ準備か。・・・用意周到だな」彼の言い方に、ヒカルは頬を赤らめた。彼女にも感情はあった。彼の嘲笑に彼女は反応したのだ。だから、まったくの無感情な虚無の聖女ということではないのに。彼女はいつも装っている。何も感じない穏やかな波に沈み続ける。

櫻夢櫻栞224:「どうしたいの、と良く聞かれる」彼女は両手で櫻を覆いながら・・・そう言った。静かに、自分の指先を見つめていた。「でも、私が何かを言えば、傷つく人もいる。安堵する人もいる。哀しくさせてしまう人も居る」「それは傲慢の極みだね」「そう。私はとても卑怯なので・・・だから」

櫻夢櫻栞225:ヒカルはそこで言葉を切った。「だから、私が決める事は出来ない」「自分の考えはないのか？」彼女は涙を浮かべながらそれでも零すことをしなかった。そのかわりに笑った。涙を封じるために、微笑む。それが彼女の誇りなのだ。どんな運命でも決定でも受け入れて決して歎かない。

櫻夢櫻栞226:その代わりに、それは無責任であるとルイは考えた。自分で決定することなしに決められた事柄に、誇りと責任を持って受け入れるということは可能であるのだろうか。彼の生命がそうであったように。だから、彼は自分の生命に誇りと責任を持つために、目的を持った。見失わないために。

櫻夢櫻栞227:彼女は下を向いた。なぜなら、涙を零しそうになったからだ。ヒカルがなぜ、そのようにして自分の強い感情を面に出さないのかという理由を知っているのに、ルイはいつも彼女の涙顔を誘うような発言を繰り返す。彼女はいつも微笑むだけだが、時折、彼らの価値観の違いが彼女に雫を呼ぶ。

櫻夢櫻栞228:両手の中に閉ざされた櫻の花びらが、指の間から漏れる風によって逃げ出すことを畏れるかのように、彼女はぎゅっと拳に力を入れた。しかし集中力をその白い掌に集わせたために、彼女のいつもの我慢が作用しなかった。茶色の瞳に、大きな涙が浮かんだが、彼女は下を向いてそれを隠した。

櫻夢櫻栞229:ぽたり、と。櫻の降りしきる雨の中に、別の雨が降った。透明で、限りなく透明で、そしてあたたかい雨垂れだった。大粒のそれは、彼女の手の甲に落ちて、そしてそこから地面に吸い込まれて行く。幾つも、幾つも。指先が震えていた。堪えることによって、手の中の宝玉を守っていた。

櫻夢櫻栞230:櫻の雨が降った。彼女を守るかのように。一度だけ・・・大きな風が吹いて、彼女のうねりの強い茶色の髪を巻き上げる。ぎゅっと・・・彼女は指先に力を入れた。驚愕を呼び起こすことによって、涙を止めることを狙い澄ましたかのような突如の風に彼女は狼狽し、躰を一瞬強ばらせた。

櫻夢櫻栞231:それが何を意味していたのかは知るところではなかった。彼女の涙を止めるために何かが作用して風を起こしたのか。櫻の花弁が重みに耐えきれずに落とした櫻風なのか。ヒカルの涙は、煽られた櫻の風によって視認できなくなった。ルイはそれを目にして、青灰色の瞳を少し細める。

櫻夢櫻栞232:同時に、彼の金色の髪も揺れた。櫻の風に揺られた茶色の髪と金の髪の下で、二組の瞳が交錯した。乱れた髪に気を配ることもせずに、彼女はただひたすらに、掌の櫻を守ろうとした。涙も・・・花瓣も・・・そして彼女の髪も櫻の中に攪拌されて・・何もかもが一瞬だけ、停止した。

櫻夢櫻栞233:アルディ邸は常に薔薇の香気で満たされているのに、この時期だけは、それが止み、櫻の気配に包まれる。櫻には強い芳香は存在しない。それなのに、その気配が香りとなって充満し、それがこの家の住人たちを常ならぬ状態に貶める。それを切り落とすと聞いて、彼は少なからず安堵した。

櫻夢櫻栞234:それを哀しむ者が大きな哀しみを持つほど、もっと狂えば良いのにとさえ思う。それなのに・・・今、目の前で涙を落とすヒカルと、その姿を誰にも見せまいと阻むような風に煽られて、ルイ・ドゥ・アルディは・・・彼にあってはあり得ない行動を取った。
彼女の蹌踉めいた手首を掴んだ。

櫻夢櫻栞235:強く掴んだので、彼女が小さな悲鳴を上げた。櫻の花瓣が、また激しく降り注いだ。金の髪と茶色の髪の色だけが、お互いの場所について存在を訴えるが、それでも・・彼にはわかっていた。彼女の気配をわかっていた。だから、彼女の位置を正確に把握したのに。力の加減が彼女を困惑させる。

櫻夢櫻栞236:差し伸ばす必要はなかったのに。それなのに、どうして彼は手を伸ばしてしまったのか、理由がなかったことについて考えた。しかも、彼は強くヒカルの白い手首を掴んだまま・・・離さなかったのだ。彼女がうめき声を漏らした。ルイの大きな掌に収まり、なお余裕のあるほどの細さだった。

櫻夢櫻栞237:このまま力を加えれば、骨が軋みそうなほどの苦痛を彼女に与えることができるのに。彼は僅かに力を緩めるが、それでも彼女を切り離そうとしなかった。温もりを感じる。彼女の息遣いや、肌の感触が・・・彼に記憶されていく。櫻の記憶は、これから・・・彼女にまつわる記録となる。

櫻夢櫻栞238:「ルイ。痛いよ」彼女はそう囁いた。見れば、ヒカルの手の先は白くなり始め、彼が掴んだ手首からは熱を持ち朱くなり始めていた。・・・加減ができない。深い失望と嗟嘆の混じった声で、彼は・・・・彼女の名前を呼んだ。戸惑いが伝わってくる。ヒカルは彼の行動を理解できていない。

櫻夢櫻栞239:「櫻」「え？」ヒカルがルイの視線の先を追った。彼の物憂げな青灰色の瞳は、繋がれた彼女の手首の上・・そしてルイの掌の下に注がれている。彼に腕を掴まれたので、捉えていた櫻の花瓣は風に舞い上がって彼女から去り、その他多くと判別ができなくなり、彼女はそれを追っていたのだ。

櫻夢櫻栞240:去りゆく花弁に特別な意味を持たせた彼女に、追うなと言って彼が止めたのだ。あのまま両手を屈めて転倒すれば彼女は間違いなく地に倒れ込んでしまっていただろう。それを阻止しながらも、彼は彼女にその櫻はいらないと言ったに等しかったので、ヒカルは戸惑った視線を向けた。が・・・

櫻夢櫻栞241:彼はそれ以上何も言わなかった。しかし、ヒカルが・・・茶色の瞳を見開いて、うねりの強い髪の下で溜息を漏らした。俯き加減に視線を自分の手首に向ける。「ああ、ルイ」彼女が思わず声を出した。それだけで吹き飛びそうなほどに華奢な花瓣が、彼女の手の甲に乗っていたから。

櫻夢櫻栞242:彼が徐々に力を緩めなければ、肌の温度だけで吹き飛んでしまいそうな華奢な花瓣を見つけて、彼女は声を漏らした。そして視線を旋回させる。音もなく、ただ、花瓣が降り注いでいた。先ほど吹いた強風のためだ。堕ちる際で花を咲かせていた枝が揺れて、彼らに向かって一斉に堕ちたのだ。

櫻夢櫻栞243:彼女の掌にのった花瓣を、彼は細く長い神経質そうな指先で掬い上げてそっと彼女の掌に置いた。ヒカルが指を曲げると、そこには既にルイの指先は気配を消してしまっていた。彼の掌の温度を感じたばかりだというのに。指先は、櫻風のように櫻の中で見る夢のように、儚く残存を残さない。

櫻夢櫻栞244:「櫻夢・・・」儚いものをそういう事があった。まさに、今、この瞬間は櫻夢そのものであった。ヒカルは大事そうにそれを掌にしまい込んだ。「これにする。

・・・これにしたい」彼女がそう言うと、彼はすでに背中を向けて、後ろ姿を見せていた。「ルイ！」「暇つぶしは終わりだ」

櫻夢櫻栞245:彼女の呼び掛けに、ルイはそう言って去って行ってしまった。もう、振り返らないと思ったので、それ以上声を掛けたり追いかけたりすることを諦めた。ルイはいつも完璧だ。彼女の考えていることを理解し、そしていつも何かを問いかける。彼女は彼の問いにうまく答えられたのだろうか。

櫻夢櫻栞246:彼女は昊を見上げた。櫻色の穹だった。蒼穹という言葉があるが、それならこれは櫻穹であった。一面の・・・吸い込まれそうな程の淡い櫻の花瓣の色に、彼女は魅せられてそしてここにやって来た。そうしたら・・・・金の髪の青灰色の瞳の人がそこに居て、彼女は櫻の精霊のようだと思った。

櫻夢櫻栞247:儚い夢の精霊のように、彼はそこに佇んでいた。そして、彼女に命とは何かと問い掛けた。すべてが持っているもので、ひとつにつきひとつしか存在しないものであり・・・そして命はだからこそ素晴らしいのだと答えた。彼の答えと違っていたのかもしれない。でも。彼の命もそこにあるから。

櫻夢櫻栞248:そして彼に注がれた櫻ではなく、彼と彼女の間に落ちた櫻の花瓣を使えとルイが言ったことの意味を考えた。ひとつの命の輝きは希有なるものだ。でも。その命と命が重なる時・・・そこにも意味はないのだろうか、と彼は質問したように思う。各々の意味と違う意味がそこにあるのだと・・・

櫻夢櫻栞249:彼女は掌の花弁を見て軽く悲鳴を上げた。彼女の温度ですでに萎れ始めていたからだった。慌てて・・・その場を立ち去ることにする。ルイから与えられた大切な・・・大切な、たったひとつしかない命だった。多くの命をこれから自分は見送るのだろうと思った。自分も誰かに見送られる。
櫻夢櫻栞250:まだ両親の死というものを受け入れられなかった。だから、命を永遠に形に残そうとした。でも・・ルイはそうではなく、進まない永遠より、命を見送り新しい記憶を作りそこに根付かせろと言ったように思う。違っているのかもしれない。けれどもそう言った気がした。彼の言葉は多くはない。

櫻夢櫻栞251:けれども、短いからこそそこに秘められた伝えたい事について、ヒカルはゆっくり考えろと言ってくれたように思った。自分の都合のよい解釈かもしれない。それを彼に言えばきっと冷笑するだろう。だから・・・櫻の季節のたびに、彼女が思い出すために長い時間を与えられたのだ。

櫻夢櫻栞252:両親の死の可能性を考えられないヒカルが、命はみな素晴らしいと声高に言うことで、彼はそれなら、彼の命はどうなのだと言った。彼に、答えられただろうか。彼は作為的に生まれて来たデザイナーズベビーであるが、彼の持つ資質であったり誇りであったり意志の強さは、彼だけのものだ。

櫻夢櫻栞253:生まれて来たことではなく、生きていく道標を持ち得ているかどうかが問題なのだと彼は言った。彼の櫻夢櫻栞は・・・儚いけれどもしっかりとした道標は、どこにあるのだろう。自己を見失わず強い信念で生きている彼は・・・何をしるべにして生きているのだろうか。あの櫻の枝を思い出す。

櫻夢櫻栞254:打ち捨てたあの枝はまた再生する。命はひとつではなく繋がるのだと思った。あれを見て、彼は永遠はあり得ないから・・・だからこそ命の意味を考える権利が命あるものには備わっていると言ったように思った。考えすぎだろうか。しかし、ルイは意味のないことはしない。彼は完璧だから。

櫻夢櫻栞255:ヒカルは唇を結んで、ゆっくりと櫻の丘を降り始めた。ひとりであったが、ひとりではない気がした。背中に誰かの気配を感じる。もう、そこには誰もいないはずなのに。今は・・・掌に眠る彼から贈られた櫻の花瓣を持ち帰らなければならないという思いで満たされて、前だけを見つめていた。

櫻夢櫻栞256:彼女の去りゆく様子を物憂げな瞳で見つめながら、ルイは美事な姿態を櫻の樹の下に吹き抜ける風に晒していた。金の髪が風に乗って揺れたが、それよりも多くの櫻の花瓣が儚くも美しく散っていく色にかき消されていた。彼の髪にも肩にも・・・掌にも降り注ぐ無数の花瓣がそこにあった。

櫻夢櫻栞257:彼女の手から伝わる温もりが・・・まだルイに残っていた。屋敷に彼女は戻っていく。彼と違う場所に戻っていく。オレはここだ、と言ったら彼女は戻ってくるだろう。だから、彼女を見送ることにする。彼女はいつも誰かを見送ってばかりだから。彼女の背中をしばらく見ることにした。

櫻夢櫻栞258:もし、あそこで、彼女が立ち止まったり振り返ったりしたであるならば、アルディ家の滞在者として不的確だと進言するつもりだった。あの不幸な墜落事故への各々の区切りの付け方は千差万別だ。シャルルは今でも苦悶の波に沈むし、ヒカルはまだ彼らが戻ってくると思っている。

櫻夢櫻栞259:しかし、ルイは・・・彼らはもう戻らないと判断していた。長い年月が経過して、遺留品すら判別できないくらいの大惨事の中で、生き延びていたとしても、もう、それは昔の彼らではない。別れた時のままの姿で永遠とするのは、生者の傲慢の極みであると皆が口を揃えて言うのに。

櫻夢櫻栞260:彼らを書類上だけでも死なせてやることもできないのは、アルディ家の当主が、かつて死者を蘇らせた事への贖罪なのだろうかとさえ考える。彼には理解できない行為であり、彼の当主としての資質も疑う箇所だ。そしてヒカルも同じ路をたどろうとしたから。ルイは彼女に櫻栞を施した。

櫻夢櫻栞261:再生するための決別もあるのだと伝えたが、彼女は理解できただろうか。思考の過程はルイと異なるから。愛でるだけの存在なのに、彼女のことをこよなく愛する当主の気が知れなかった。愛翫動物と等しい存在の彼女が、シャルルに共鳴して過去に生きようとする。それが我慢ならない。

櫻夢櫻栞262:ルイはそこで薄く笑った。もう、彼女の姿はとうに見えなくなったというのに、まだここで佇んでいる自分の存在が滑稽に思えたからだ。彼はようやく別棟に行くことにした。帰るのではない。彼に帰るところはない。どこにも、ない。それなのに、彼女と・・・また来年の約束をした。

櫻夢櫻栞263:彼は喘ぐように深呼吸した。ここは息苦しい。降り注ぐ櫻が、彼女に似ているから。永遠の晄という名前を持つ少女は、命の煌めきについて語る。輝いて、ルイから晄を奪っていく。彼は星辰の子と呼ばれているが天体そのものではない。それらを遵える存在であっても、晄そのものではない。

櫻夢櫻栞264:ルイから凪いだ櫻の花瓣は彼女から去って、そして、彼と彼女の間に這い込んできた花瓣を彼女は選んだ。すべての命が素晴らしいと彼女は言うが・・・そこで命の選択が行われたことに対して、彼女は何を思うのだろうか。あの時のヒカルの表情が蘇り、彼は苦い笑いを漏らした。

櫻夢櫻栞265:生命についての価値や優劣について、彼女と話をするのはこれが最後ではないのだろう。彼はそう思った。なぜなら・・・彼女の持っている秘密は、それらの価値観をすべて、覆してしまうものだから。近い将来、彼女は考え方を改めることになる。それは予言でもなく事実でしかない。

櫻夢櫻栞266:彼女が戻る場所は、日本ではない。ここだ。このアルディ邸にやって来た時に、彼女はもう決して、出ることの出来ない入り口を通過してしまったのだ。薔薇の館でありながら、この家には櫻が存在する。矛盾する空間に彼女は長い間身を浸しすぎた。もう戻れないのは知るところであるのに。

櫻夢櫻栞267:彼女に道標は施した。惑うこともなく、遠回りをしたとしても、彼は待つ用意があった。長い時間を待ったのだから、ヒカルを手に入れるために費やす時間は永遠のようであり、一瞬のようでもあった。彼はそんな体感的なことについての必要性を感じていなかった。

櫻夢櫻栞268:結果は同じだから。どれだけ待とうが・・・彼の結論は同じだった。妻となるべき条件を兼ね備えた者は、ヒカルだけしかいない。この家の当主を苦しませるに十分な存在は、今のところ、彼女だけしか居なかったから。

櫻夢櫻栞269:妻とか配偶者とかいう称号は、彼には必要ではなかった。次の季節も、その次の季節も、彼女はここに居る。この花の存在意義を探して彼女は彷徨うのだ。数多ある花瓣のひとつを選んだことを・・・彼女は問い続けることになるのだろう。問うたびに、彼女はルイを思い出すのだろう。

櫻夢櫻栞270:彼女が選んだことによって、その花が特別になるとヒカルが錯覚するだけであり、生命そのものに付加価値は生じない。どれを選ぶのか。選んだ側に優劣が生じるだけだ。彼の命も、彼女の命も。それは同質であり同列であるが、それ故に生じる細別について、彼女自身はまだ気がついていない。

櫻夢櫻栞271:ヒカルが入って行くアルディ邸を櫻の樹の下で眺めながら・・・彼はゆっくりと昊を仰いだ。蒼い空ではなく、櫻色の天上を見る。来年にはかなりの部分が切り落とされることになるから、これらは最後の落花になるはずであった。静かに・・・彼女が去った後の樹の下に立つ。

櫻夢櫻栞272:彼は視線を旋回させて、これらを記憶した。ヒカルの居る景色ではなく、彼女の居ない、最後の楽園のような淡い桜色の世界を。運命の人のことについては話をした。彼女は、命を運ぶ者をそのように言う、と言った。巡る命は素晴らしいと言った。生まれ変わるという転生の意味の他に・・

櫻夢櫻栞273:次の違う生命に繋がっていき、そして命はひとつしかないことには変わりがないから素晴らしいのだと彼女は言う。この家の古い宗旨から逸脱した考え方を持つ自由な発想に対して､ルイは苦笑した。けれどもそれを完全に否定することはしなかった。彼女は彼の予期しない答えを述べたから。

櫻夢櫻栞274:彼女の居ない景色を記録する。満たされないということが次に繋がるのだ。結実することを望んで、焦がれて、花は咲き乱れる。埋め尽くされる単色の空と、時折垣間見える枝や葉の色合いを溶け込ませながら、櫻の夢のような・・・ヒカルの居ない櫻の景色を彼は記録する。それが必要だから。

櫻夢櫻栞275:彼女との記憶は、彼の思い通りにならない。彼女は、彼の記憶の中でさえ、指示に従わず計算通りに笑わない。いつも泣きそうな顔をして、ルイを見つめて、彼の言葉の真意について考えに及ばないで・・・ただ哀しむ。櫻の夢のような儚い笑顔が彼を導く櫻の栞となって、しるべとなる。

櫻夢櫻栞276:埋め尽くされた。何もかも忘れて良いという・・・自分の生命の目的を一瞬だけ、忘れても良いかと思った。それは櫻が見せた儚い夢だ。彼女の笑顔のように。ルイにはいつも笑顔を向けない。彼女はいつもルイの前では心から笑わない。彼女と共有する記憶がなければ楽になるのだろうか。

櫻夢櫻栞277:それはあり得ない。彼の脳は結論を出した。何度も同じ結論に至ったのに。ヒカル・クロスに関することは、何度計算しても答えが出ないか、どういう計算方法をしても答えが同じかのどちらかであった。いつもそうだった。・・・風が横に凪がれて、彼の髪を煽っていく。ヒカルのようだ。櫻夢櫻栞278:ルイは軽く首を振った。降り落ちる櫻の粒は儚く脆い。明日にはもっと違う景色になるだろう。ヒカルはそれを知り、また哀しそうに顔を曇らせて、明日を生きる。また、次の櫻に出会うために。命は巡ると言う彼女は、変わらずに彼を見つめて笑うのだろう。命は素晴らしい、と。

櫻夢櫻栞279:彼の中で、彼の視界いっぱいにひろがる昊に対し、何か心を動かされたかということ実際のところはそれほど大きな感慨は湧き起こらなかった。古木に華が咲いた。ただ、それだけだ。が、ヒカルと眺める樹の散華にも似た生命の逝きゆく様は、彼の記憶に残った。そう、彼の記憶になった。

櫻夢櫻栞280:これは終わりではなく始まりなのだと感じる。感じる。彼は決して曖昧な解釈や表現を使わないのに。彼女と過ごす一瞬の時間には、どういうわけか途切れることのない淡い輪郭の朧ろな間隔を受け入れる。・・彼は櫻の丘に背中を向けると、散りゆく櫻夢のような櫻栞に背中を向けた。

櫻夢櫻栞281:後日、ヒカル・クロスからルイ・ドゥ・アルディにあてて櫻の栞が贈られた。しかしそれは半分に分けられていた。もう半分を彼女が持っていることは明らかであった。そして彼女は・・・夏の短い間、ここを離れて櫻の国に行く。あの国で華が咲き乱れる季節には、ヒカルはそこに居ない。

櫻夢櫻栞282:けれども、彼女はそれを櫻が散りゆく季節に彼に贈った。しかし彼は彼女にそのことについて何かを述べることもなかった。彼が長い時間それを大切に保管していることも彼女に告げなかった。彼女がルイのセーフハウスに滞在をする頃になって・・・ようやく明らかになった事実であった。

櫻夢櫻栞283:彼は生家に何も置かなかった。実に素っ気ない部屋であったのはそこに置けば彼は忘れてしまうと判断したからだ。僅かな想い出を彼が忘れないようにするために、彼だけの秘密の空間に置いておいた。彼が少年だった折に彼女と撮った写真と、その櫻の栞の他に数点しか存在しなかった。

櫻夢櫻栞284:ヒカルによって半分に割られた揃いの栞は、彼のしるべとなって・・・彼もやがて狂うかもしれないという脅威をただひとりで耐え抜くことができたのは、彼には櫻栞が存在したからだ。過去に戻らないように愛を剥奪するという愛の中で生きたルイは、ひとり・・・愛の記憶を記録し続けた。

櫻夢櫻栞285:彼女が半分に櫻華を割ったのは、気まぐれなのか思い付きなのか、それともルイとの想い出を共有したいという強烈な欲求のうえのことなのかはわからなかった。彼女にそれを尋ねなかったから。一方的にしなければ、彼の中に残存してしまうから。記憶にすれば、そこに戻ってしまうから。

櫻夢櫻栞286:記憶にすればそこに戻ってしまいたくなるから。記録は、主観的感情を伴って記憶になり、ただの映像は附随する何かによって無色から有色になる。だから、彼は記録し、自分で想い出の品を残すことはしなかった。しかし、ヒカルから贈られたそれらは、捨てることが出来なかった。

櫻夢櫻栞287:そこにあったのは、全て、ヒカル・クロスから贈られた品ばかりであった。彼は・・・自分で望めば、そこに還ってしまいたくなるから。だから、彼は何も残さなかった。彼女から贈られた品はあっても、彼は何かを贈ることもなかった。愛の証を残すこともしなかった。それが彼の愛だから。

櫻夢櫻栞288:しかし彼は何も残さなかったわけではなかった。・・・たった数度だけ。彼女に用意してやったものは幾つかあった。けれども、それすら・・・彼は世間一般的と言われているような贈呈方法は選ばなかった。「忘れても良いから魂に刻め」とヒカルに告げたシャルルの言葉を踏襲した。

櫻夢櫻栞289:忘れても良いから。けれども、それでも良いから魂に刻んでおけと言ったフランスの華の言葉と少しばかり違う解釈と価値観で彼は、フランスの華と違う方法で彼女の記憶へと彼を刻んだ。彼は星辰の子だ。あらゆる天体を・・・星や太陽光さえ引き寄せるのに決して彼自身は天体にならない。

櫻夢櫻栞290:櫻の夢のような一瞬を留めて置くためにヒカルが拙い技術で創ったその栞は・・一度も使われることはなかった。彼はその記憶によって現世に留まっているわけではなかったから。彼の道標は、永遠の晄という名前の贖罪の娘で・・・それだけが、彼の櫻の栞であったから。

櫻夢櫻栞291:半分に割られた櫻栞は、ひとつになることはなかった。長い、長い間。彼女が再びアルディ家に迎えられた時でさえ。彼が彼女を迎えに行った時でさえ、ひとつにはならなかった。それは対になるべき欠けた姿ではなく、在るべき本来の姿であることをルイもヒカルも容認していたからだ。

櫻夢櫻栞292:彼も彼女も、誰かの何かの代わりにはならない。彼も彼女の望まれて、生まれて来たから。
彼はシャルルの代わりではないし、彼女もシャルルの運命の人の代わりではない。

生命は素晴らしい。
ひとつしかないから。
命は巡る。
ひとつしかないから。

櫻夢櫻栞293:生まれ落ちた過程よりも、花を咲かせ何を残すのかという櫻の樹の下で見た・・・あの時の散花のように。生命は素晴らしいと・・・生きることは素晴らしいことだと。自身が納得することができるのだろうかと思いを馳せたあの景色を思い出す限り。彼は考え続ける。孤独に耐え抜きながら。

櫻夢櫻栞294:
命は巡るから。
形状を変えても、また巡るから。
生きている限り、また巡るから。
枝を折り、それをヒカルに教えた。

命は素晴らしい。
瞬間の煌めきはひとつしかないから。
だから、生きることは素晴らしい。
散りゆく櫻を手に取り、それをルイに教えた。

櫻夢櫻栞295:ルイとヒカルの交わした会話の問答について、掬い上げた櫻の花瓣がこたえを導き出す栞となった。栞とは、道標のことだ。彼はそう言った。
そして自分の生まれて来た意味を考えるのではなく、その先の・・・生きていくことへの意味を考え始めることになった。
彼も。彼女も。

櫻夢櫻栞296:儚い一瞬の櫻の色は、彼らに巡りと煌めきを記憶に残した。だから。彼らはこの色を見る度にあの日の出来事と会話を思い出す。たとえどんなに離れていても、どんなに長い年月が経過しても。記憶を共有するだけではない。彼らは同時に互いを思い出す。あの時の、あの櫻の色と同時に。

櫻夢櫻栞297:金の髪と青灰色の瞳の星辰の子と、茶色の髪と茶色の瞳の永遠の晄は、同じ櫻色の昊を見て、同じ花を分かちあい、そして生きることにした。
あの花のように、また巡ると信じて。
あの栞のように。
運命の人という言葉があり、彼らはその言葉に翻弄されることになる。

櫻夢櫻栞298:しかし・・・その言葉は、避けられない、拒めないという意味ではなく、命を運ぶ人のことなのだ。あの日のあの季節にふたりで見た、薄櫻の昊と花雨を浴びたからこそ、悟った事だから。
彼は生涯何度も反芻する。繰り返さないのに。
彼女の何気ないひとことに込められた意味を。

櫻夢櫻栞299:そして手元に残る櫻の栞を見つめて、失いそうになる自己を律する。
滓と混沌の中で、一条の光が彼を導く。
生きている意味を探すために。
己を見失わないように。

彼の永遠の晄の言葉を繰り返す。
彼女の声を思い返す。笑顔を思う。ひとつしかない晄の煌めきを、彼の胸に注ぐ。

櫻夢櫻栞300:

彼のことを運命の人だと言い切った永遠の晄の言葉を胸に、彼は生きる。生き抜くことにする。
どんなに孤独でも。どんなに苦しくても。彼は、生きる。

命は素晴らしい。
命は巡る。
同じ命はない。
ひとつしかないから。

だから、命は素晴らしい。

（FIN）

Stelle e Fiori

■01

ルイ・ドゥ・アルディという人物は実に不思議な人だった。
高い知能指数に、「ドゥ」を持つ家柄に、素晴らしい容姿。フランスの華と呼ばれているあの人に酷似しており、見事な金髪以外は彼そのものだと思えるほどの姿を持っていた。
このところ表舞台に姿を現さない彼の代わりに・・いや、再来とさえ言われたルイはいつも表情の変化に乏しかった。
何もかもに恵まれているのに、虚無の底にいるかのように、いつも無表情でつまらなさそうな顔をしていた。

生きていることが退屈なのだ、と言いたげだった。
そして誰とも口を利かない。
必要があれば話をするが、その言葉はいつも短くて、勝手に話を切り上げてしまう。
結論が見えた時点で話をやめてしまうのだ。
それが、彼が何手も先を読めるチェスの達人であるから故のことにも起因しているのだと知るまで、随分周りを誤解させていた。
それでも涼しい顔で、自分の信念を貫き通す。
誰も必要としないと全身から発する気迫のようなものがそう語っていた。実際、彼は友人も学友も師も必要としていなかった。
強い精神力がある人だと思った。そしてなお、そんな不遜な態度でいるのに、誰も彼のことを憎んだり妬んだりしない。
「理解できないステージの人間だから」と思うことにしているらしかった。
彼の父はフランスの華と呼ばれている大変にこの国に恩恵をもたらしている有名人で、国内外を問わず、絶大な人気がある人物だった。
それなりに重要人物の子弟が集うこの学舎でも、彼の出自は誰と比べようもないほど、輝かしいものだった。スキップ制度を利用して、年齢が離れた者たちと肩を並べてなお、彼はいつも主席で、そしてその座を明け渡したことはなかった。
肉体的にも優れていて、こうしたスキップ制度を取っている者は他者より肉体的に成長途中であることが多かったので、そういった者に対して行われる特別プロジェクトに彼は驚くべき結果をもたらしてばかりいた。
特に、乗馬やフェンシングに優れていた。他も優れていたが、特に彼が能力を発揮したのはそれらだった。

・・・いつだったか理由を聞いたことがある。

彼の見事な金髪が揺れて、青灰色の物憂げな瞳が僕を見上げた。
そんな質問は必要ない、と言われるのかと思ったら。
彼は滑らかな頬をぴくりと少しだけ動かして答えた。
「・・・・団体戦は好まない」
好まない。彼らの階級では嫌い、という言葉は用いてはいけないことになっている。
僕は苦笑した。彼らしい理由だったからだ。確かに､己の才覚だけを頼りにするものに彼は長けていた。
そして彼は極端に特定の誰かを親しくなることを拒んでいた。
この世にはよくあることだが、煌めく者には追随する者が現れる。
同じ光を持たないのに、光波に影響されて同じ波を持っていると錯覚する。
彼に傾倒し、彼の類似模倣をすることで彼に成りかわりたいと思っている輩がひとりやふたりではなかった。
そして、ルイを理解できる唯一の人物は自分であると・・・心酔したが故に強引に導かれる結論に対して、彼は完全に無視を決め込んでいた。

僕は年齢がずっと下の・・・冷たいと評されているルイが「星辰の子」と呼ばれていることを知って、なるほどと思った。
数多の星々や天体そのものを遵えるのに・・・彼はそれらになりきれない。
そして煌めく太陽のような髪と、星光のような瞳を持っているのに。
彼が満たされた微笑みや、普通の者が感じている倖せや日常について放棄しているのは、彼の環境がそうさせているのか・・・そう自身で決めてしまっているのか・・・それはよくわからなかった。

でもそこより先に彼に踏み込んではいけないのだと思った。
彼が必要としていないのに、土足で入り込んではいけないのだと思った。
もっと・・世界の宝として教育する必要のある場所に在校すれば良いのに、彼はフランスで学業成績をおさめることに意味があるのだと、考えている節があった。
彼の父であるフランスの華が、若干13歳で偉業を為し遂げたということに対して固執しているようだった。だから彼は13歳ちょうどで同じ場所まで辿り着いたことに憤慨しているようだった。
・・・優れた者には整えられた環境を、と考えているこの国でさえ、若い彼のように知能指数が高い者は、800万人にひとりだ。
知能指数175で3百万人にひとりだから。
統計学的にそうなるだろう。彼はもっと高い知能指数を持っているだろうから、さらに希有なる人物なのだ。
彼を星辰の子、と呼び称したものは素晴らしいセンスを持ち合わせていると思った。
数多ある星の数は計測できない。そして彼の存在は・・この国の宝玉でありながら世界の財産となるのだろうと思った。だからそんなルイ・ドゥ・アルディに煩わしさをもたらす星屑は消えてなくなればよいのにとさえ思った瞬間があった。
僕も彼に傾倒しているのだろうか。
いや・・・僕は彼に近づきたいと思わない。彼になりたいと思わない。
彼が倖せになれば良いのにとは思う。
それには理由がある。
■02

ルイ・ドゥ・アルディはいつも独りで行動していた。
誰にも心を開かない。
こういう・・・恵まれた才能を持つ者に対しての処置を僕たちは学んでいたのに。
それでも、まだこどもと言うしか表現のしようがない彼をみて、同等に扱わなければならないという意識は蠢くけれども、彼と同じだからという気易さは生まれなかった。
国の宝を大事にしなさいと言われても。僕たちはまだそれがどんなことであるのかわからなかった。だから、彼を特別な色の檻に閉じ込めてしまうことにした。
珍しい獣のように扱うことにした。そうすれば誰も傷つかないと思ったからだ。
僕らは最高学府で肩を並べた、少しばかり高等教育を受けてきたものばかりであったのに、どうしても、ルイが持っている才能について理解することはできても応援してやることはできなかった。

彼がすべてを拒絶する理由は理解できた。
すべてから拒否されているからだ。

だから自分からは近寄らない。
傷つくから。
そして傷ついたことがあるから。

彼の父もそうであったという。
一度だけ、誕生日の宴に自宅に同級生を招いたことがあったと聞く。
でも誰も行かなかった、という結末を聞いた。
そしてただひとりだけ、その宴に行った人物が、今も・・フランスの華の永遠の友であると聞いた。今はその人物は故人であるようなのだが。
生者か死者かであることは彼らには影響しないのだと思った。
僕らとの軸が違う。

それほど優れた一族であるのに、それでもこの国の頂点に辿り着くことが出来ないのは、なにかそうできない理由があるのか、それとも何か言いようのない力が作用しているのか・・・
どちらにしても、ルイは一族の頂点に立つことを目的として生きているのだなと思った。
もっと外に目を向けて、家から逃れて生きれば・・・楽になるのではないのかなと思うほどに、彼はほかのことに対しては夢も希望もまったく持っていなかった。

だからルイが前代未聞の速度で、学舎を離れて、様々な分野において、世界の最先端技術を持っている国への短期留学を繰り返していると聞いた時。彼は未だにひとつところに留まることが出来ないで居るのだと思い、少し切なくなった。そして年齢が達していないことを理由として、当主の継承者候補で諍いがあり、当主である実父のシャルル・ドゥ・アルディ氏との間がうまくいっていないと聞くと・・・ますます、ルイは何でも持っている者ではなく、手に入れたくても手に入らないものについて冀求し続ける者なのだと思った。

彼はいつも大人に囲まれて生きており、彼のこどもらしい部分はどこに閉じ込められてしまったのだろうかと思った。
誰よりも先に大人になってしまったルイが本当に心安らぐ時があるのだろうかと思った。
他人のことであり、ほんの少ししか時間を共有していないのに、どういうわけか、あの冷たい青灰色の瞳の持ち主のことが忘れられなかった。

僕たちは卒業しても同じような世界で生きているから、時折名前を聞くこともあったし、学会誌に彼が論文を発表しているのを見ると、彼が片手間に書いた論文が誰よりも優れているのに栄誉ある賞を受けても彼は一切の表彰式に参加しないという徹底ぶりを知って、彼らしいと思いながらも、彼の若さは、この国ではまだまだ・・・阻害される壁なのだと思い知って少し哀しくなった。
優れた者には生活年齢は関係ないと思う。彼はその知性に伴って精神も発達している。
だから、知能と精神がアンバランスな昨今の天才達と違うのだということを、彼をよく知らない者たちは理解してやることが出来ないのだ。
だから彼は人との交わりある場所には姿を現さない。
出てくるのはアルディ家の名代としてだけだった。

ルイ、こんなに空は明るくて、そんなに星は眩しくて、こんなに・・・外の世界は美しいのに。どうしてルイは何からも背中を向けてひたすらに走り続けるのかな。
少し立ち止まって上を見て周りを見てそして大きく息を吸ってみれば、それだけで何かがほんのちょっとだけ違って見えるのだけれども。

それを彼に教える者が誰も居ないのだと思うと・・寂しかった。

ルイには誰の声も届かないし、届けたいと思う者も居ないのだろうと思った。
もちろん、彼の声を聞くことが出来る者もいない。
僕にはそれがわかるだけだ。
こうして教わる立場から離れて世に出たとき。彼がいかに生きて行くには難しい立場にあるのかということを知る都度、僕はあの金の髪の少年のことを思い出した。そして誰にも伝わないことはどれだけ不幸なのかということを忘れないようにしようと思った。
凡庸な僕にはただそれだけしかわからないけれども。彼の心の中は知ることが出来ないけれども。

守りたいものが、彼の中にあるのだと思った。

それは人それぞれ違う。でも。彼にも・・・守りたい誰かが現れれば良いのにと思った。彼を守ってやる人が身近に居れば良いのに、と思った。
■03

そんなルイ・ドゥ・アルディの姿をパリの街中で見かけた時。
僕は一瞬、幻かと思った。彼がこうして人中に姿を現すのは滅多にないことだと信じていたからだ。

彼は・・・・パリのショコラブティックに居た。グリーンの鮮やかな色が目立つが、ここのショコラは絶品であるということで、大変に人気の高い店ではあるが、得意客用に小さな喫茶室を設けており、そこは一般客と隔離された場所にあったので僕はそこでぼんやりと座りながら時間を潰していた。
ここのショコラが最新作を出したというので、それを家人に買ってくるように頼まれていたからだ。僕の家はそういったところは非常に前衛的とでもいうのか、意識が発達しており、取り寄せるとか誰かに頼むとかいったことはしないでいつも僕に用事を言い付ける。
・・・僕がそういった華やかな場所を好まず、いつも論文ばかり書いているから、それを気にしてのことなのだろうと思った。僕は黙って微笑み、いつもウイと返事をすることにしていた。

僕がそうするのは、ルイ・ドゥ・アルディの顔を思い出すからだ。
彼のように見えるのだろうか。僕は彼ほどに・・・悲壮な決意を持って生きていないというのに。
僕にはこうして話しかけてくる者がいるけれども、彼には存在しなかった。

店舗内の壁はマジックミラー形式になっており、こちらからは見えるがあちらはまったく存在や気配を察知することのできない仕掛けになっていた。
グリーンの鮮やかな緑色で覆われた店は、四季折々の木々を投影させていた。まったく見事な装置だった。それほど広大ではない広さの店舗内に奥行きが出て、とても広く見える。そしてスタッフルームや特殊なゲストのもてなしに使うスペース、それから商談用の小部屋も見事に見えていない。
差別しているのではなく区別しているのだな、と思った。それもごく自然に。
スタッフも皆教育が行き届いており、ショコラティエの才覚に加えて、トータルコーディネートされた気品ある店に仕上がっていた。

寒い日のことだった。
僕は振る舞われたホットショコラの湯気をぼんやりと眺めながら、早く用事が済まないのかなと思っていた。
書きかけの論文があり、締め切りが近い。
だから本当はこんな場所に居るのも時間が惜しいのだが、優先させるべきことは論文ではないと思っているから、持ってきた論文データをプリントアウトした帳票をショコラのカップの隣に並べて、考え事を始めた。僕はこうなってしまうと、なかなか
薄緑の硝子テーブルは、綺麗に磨かれていて、その上に無粋なデータ帳票を並べることに抵抗があったが、ただショコラを楽しむだけの時間を過ごすというのは、僕には洗練されたことなのだと思えなかった。・・・だから変わり者と呼ばれるのかもしれないが。
ショコラの名前を聞いてもわからないので、新製品だというその品と、いくつか見繕って欲しいとだけ言った。予め頼んでおけば良かったと思った。
誰かへの贈り物なのか、送り先の主の年齢や性別によってリボンを変更できるが、と細々したことを聞かれたので、僕は家人への頼まれものであり、いつもここで買い物をしているはずだから、適当にいつも通りにしてやってくれとだけ頼んだ。
理由を話すのも億劫だった。

・・・そこで僕はふと、ルイ・ドゥ・アルディのことを思い出したのだ。
彼がいつも短い言葉で人とあまり話をしないのは、知能指数が高すぎて会話のスピードに誰もついていけないからだと思っていた。
けれども、こういうふうに・・・彼も、煩わしいと思っていたのだろうか。
すべてを説明しても、過程を説明しても、きっと結果だけ説明するだけで足りると思っていたのかもしれない。
今の僕は、彼と同じ事をしていると思った。

小さく溜息をついた。
そして眼鏡を外す。湯気で眼鏡が曇るからだ。
目を上げて、眼鏡を外したために輪郭が淡くなった、湯気の浮かんだショコラを眺める。
小さくホイップが浮かんでおり、それらは角を立てて湯気より更に白く光っていた。
身体を冷やさないように配慮されたホットショコラに指を伸ばして飲んでみる気になった。
実際はそれほど長い時間、外気に触れていたわけではなかった。
それなのに、こうしたささやかな配意を当然だと感じ、自分はそれほどあまいものは好きではないのに、と思った自分を恥じた。
ここはショコラを扱う店なのだから、甘いものが出てきて当然なのに。
・・・・僕は一口、カップに唇をつけて、そして眉を動かした。
カカオ含有量を高めてある、ビター味だった。少し苦い。・・・僕が甘味を好まないと、この店は知っていたから。
そういえば、家人はいつも・・・僕のためにそれほど甘くないショコラなのだと言っていたように思った。それは僕の好みを知っていたからだ。
少し・・・胸が熱くなった。そして次に飲み干した喉元も熱くなる。

ゆっくりと楽しんで飲まなければ失礼になるな。
僕は外した眼鏡をもう一度取り出してかけ直した。
器の美しさや、インテリアとの調和や・・そのほかすべてのことが計算されている店のことを煩わしいなと思った考えを改めないといけないなと思ったからだ。

・・・そんなときに、考えていた人物が目の前に現れた。
扉が開いて・・・そこに僕の最後の記憶にあったルイ・ドゥ・アルディより成長した姿で、彼はここに入ってきたのだ。
■04

僕は喉を干上がらせた。
今飲んだショコラの味を忘れてしまうほどに驚愕した。

彼の姿を間違えるはずもない。
見事な金の髪に、青灰色の瞳。
高い鼻梁に酷薄そうな唇。
長い脚に小さな腰は、彼がフェンシングと乗馬の名手だからだ。
背中の筋肉まで計算されて整えられた鍛えられた鋼のような体躯は相変わらずだ。
恐ろしいまでに整った完璧な顔立ちを忘れられるわけがない。

僕は低く唸った。
このルームはひと組の客しか招き入れないというわけではないのだということは知っていた。
同じようなテーブルが数個、他にも点在していたからだ。
本当に聞かれたくない話をする時には、隣の商談室に入るのだろう。
ここはいわゆる上流階級の者が待機する場所で、ショーウインドウに顔を寄せて物色することをしない者達のための部屋だった。
だから、もし、ルイ・ドゥ・アルディがこの店にやって来たのであれば、間違いなくひと組しか入室できない商談室に入るであろうと思った。
それなのに・・・彼はこの部屋に入った。
なぜなのだろう。

僕がかちん、と無粋な音を鳴らしてカップを置いたので、その音に気がついたルイはこちらを向いた。
そして彼は・・・僕の顔を見て、少し反応を示した。
しかし彼からは挨拶をしなかった。
隣のブースのテーブルに座る。
そこは部屋の中央で、壁の向こうの店舗内の様子が一番見えるところだった。
この部屋の扉は壁と一体になっているが、開くと一瞬だけ中が見える。

そしてルイの佳麗な後ろ姿に見惚れるスタッフや客達の姿がちらりと見えた。
ショコラが陳列されているウインドウに見入っていた者たちでさえ、顔をあげて彼の姿に絶句している。それは扉が閉まってから、こちらが見えなくなり、そしてこちらからは呆然としている姿が丸見えであるにもかかわらず、彼らは呆然として惚けていた。
星辰の子と呼ばれているルイ・ドゥ・アルディの美しさは、成長してなお際立っていた。
同性でも彼が異質の美しさを備えていることに溜息が出る。

僕のことを覚えているようだった。
そして何を言いたいのかわかっていると言った風に、彼は冷酷そうな唇を歪めて・・そして低い声で言った。あの時よりずっと低い声になっており、彼は少年から青年に移り変わる途中であることがわかった。

「・・・・連れを待っている」
彼はそう言って、顎を少し持ち上げた。
ショコラに顔を近付けて一生懸命夢中になって品を選んでいる少女が彼の連れなのだろうか。
・・茶色の髪に茶色の瞳の、実に愛くるしい雰囲気の少女だった。
瞳を煌めかせて、店員が苦笑しているのにも関わらず、ウインドウに顔を近付けて、宝石のようなショコラの形状に感激している様子が、少し離れたこちらからも見えた。

彼は僕の座っている場所の脇をすり抜けて、彼はゆっくりと座った。
風が通り抜けて、僅かに薔薇の香りがした。彼の一族は薔薇に還ると言われている。
邸内にも様々な薔薇が咲き乱れているということであったので、そんな香りがするのだろう。

位置の高いカフェテーブルであったが、彼は長い脚を組んで静かに座った。
論文のこともショコラのことも一気に忘れ去ってしまう程、僕は驚愕していた。
滅多に姿を現さない彼が、なぜ、このような店に現れるのか。

僕が無遠慮に彼を眺め回していたのに、彼は僕を無視して、視線を店内の少女に向けていた。彼女が店内を往来する都度、彼の視線が動くのですぐにわかった。
大変に愛くるしい少女であるが、ルイが気にする人間というのは知らなかったので、そちらの方が以外だった。
彼の恋人だろうか。
・・・それとも婚約者だろうか。
早婚の家系のアルディ家では珍しいことではなかった。
しかしそれなら公式なり非公式で発表があっても良さそうだ。
僕はその程度の知識と情報しか持ち合わせていなかった。
ある程度の年頃の令嬢については、顔と名前くらいは一致する程度に知っていたが、それでも僕は疎い方であったので、どこの令嬢なのか尋ねた方が良いのかどうか思案していた。
東洋人らしい。しかし店員と会話しているところをみるとフランス語は堪能であるようだった。それらから、彼女はこの国の者ではなく、彼と釣り合いが取れる家の者ではなさそうだった。
となると、一体誰なのだろうか。・・・彼の秘密の恋人なのだろうか。
それにしては幼すぎた。
東洋人は若く見えると言われているから、僕が想像している年齢より上かも知れないが、それでも仕草から見て、とても若い人なのだということはわかった。

そして僕が黙っているのに、彼はまた呟いた。
「アルディ家での預かりものだ」
また彼は先回りして回答した。
金の前髪の奥にある視線は、まっすぐに彼女に注がれている。
僕はおや、と思った。彼の家は頻繁に人が出入りしている。
しかし、長期滞在している者が居るとは知らなかった。口さがない社交界ではこういった話は格好の噂の種だから、余程厳しい箝口令が敷かれているのだと思った。
■05

やがて彼はゆっくりとこちらを向いたので、僕は余りにも美しい彼の瞳に驚いて、そして持っていた論文資料を取り落としてしまった。それほど厚みがないが、大事な統計資料だった。コピーはない。だからこうして持ち歩いているのだけれども。
彼の足元にそれらが勢いよく散らばり、僕はあわてて詫びながら立ち上がって書類をかき集めた。そしてまた詫びる。彼はその間、無言だった。ただゆっくり脚を組み直した。

・・・僕が書類を拾い上げることが出来るように、脚を入れ替えたのだと知った。

ありがとう、と言ったが彼は礼を言われる筋合いはない、と言った。
そんな声が僕の頭越しに聞こえて来て、僕はちょっと笑った。
大人になってわかることがある。
ルイ・ドゥ・アルディは、僕が知っていたあの時から変わらずに大人なのだ。
彼の精神はすでに、あの時に成熟していた。
それなのに、未熟な僕たちが気がつかなかっただけだった。
静かな気配りができる。全体を見渡すことが出来る。何手も先を考えることが出来る。
それなのに、そうすることができない僕らは・・・彼の周りから距離を置いた。
誰も彼を理解できない、と固く信じ込んで。でもそうではない。
彼はとても繊細で、そしてとても・・・とても心が豊かな人物なのだと思った。
そう知ることができた僕は少しばかり大人になったということなのかもしれない。

彼は青灰色の瞳で、視線を僕に注いでいたので、近い場所に彼の双眸を見つけて僕はまたあわてて立ち上がった。
忙しい奴だと思われたのかもしれない。
けれどもそうではなかった。
彼は僕には無関心で・・・そして僕の手の中にあった天地も裏表も逆になった、乱雑に重ね合わされた書類を見つめていた。

彼は僕の名前を呟いた。フルネームで言ったので、僕はちょっと笑ってしまった。
古い家柄を示すその名前に僕は興味がなかったが、彼の唇から漏れる僕の名前は、僕のものであってそうではないような蠱惑的な響きを持っていた。
「研究職に就いて、家を継承しないと有名な変物が、ここで何をしている」
「ショコラを買いに」

ルイの質問に僕は短く答えた。
確かに、僕が家を継承しないと宣言した。二足のわらじは履けない。生涯を研究に捧げ、日々論文執筆で頭を悩ませて、生きている間に答えや成果が出るかどうか判らない学問に没頭することができる倖せを噛みしめなければならない。
だからこそ、こんな小さな遣い事でさえ僕は快諾することにしている。引け目ではない。ただこういう些細な繋がりが僕と家を繋げているのだと思った。
家が嫌いなわけではない。
そして、ルイが継承したいのにそうできない状況に居ることも知っている。シャルル・ドゥ・アルディ氏の偉業や影響が大きすぎて、実績が数多あるルイ・ドゥ・アルディでさえ及ばないほど、アルディ氏は各界に実りをもたらしているのだから。
だから僕のことを快く思わないのだろうなと思った。
けれども、僕は彼が嫌いではなかった。

「君こそどうしてここに？」
僕がごくつまらない質問をしたので、無視されるか冷笑されるかと思ったが彼は案外あっさり回答を出した。
「この透過硝子を考案したのはオレだから。・・・・様子を見に来た」
そのついでにあの少女を連れてきたのか、あの少女の供のついでに様子を見に来たのか。
どちらなのかは明らかにしなかったが、彼が確認したかったことはすぐに終わり、今は特殊硝子越しに見える少女に気が向いていることだけは明らかだった。

なるほど。これを考案したのはルイ・ドゥ・アルディだったのか。
彼は多くの特許を取得している。
そして様々な斬新な研究論文を出している。
特にバイオ、建築、システムプログラムやハードウェアの設計に深く関与しているらしい。
潰えることのない溢れるばかりの才能を持って居る彼を妬んだり羨んだりする者は多かった。

でも、彼が欲しいのはそんなものではないのだろうと思う。
・・・あの温和そうな少女のように。
彼は彼が見つめるものが欲しかったのだろう。
彼は何手も先を読める。
だからひとつのものに固執しない。
それなのに、今はどういうことだろう。
普通の少年のように、ただひたすらに彼女を見つめていた。

「・・・その統計データは過去3年分を見直せ。・・・計測値に誤差がありすぎる」

彼が突然そう言ったので、僕はよくわからない声を発した。
そして、ルイの瞳が僕の胸に抱えられた資料にあることを知って、これのことか、と唸った。
確かに、僕が締め切り前に頭を痛めていたのはその過去分のデータ統計が理論値と合致しないからだった。
これに対して原因を探らねばならないが時間がないと考えに耽っていたところに、彼が現れたのだ。

■06

「ありがとう」
僕は素直にそう言った。
「礼なら、論文が仕上がって掲載が終わってからにしろ」
彼は冷たくそう言った。

しかし彼の能力には感嘆するばかりだった。
僅かな時間で、それを判断するとは、ルイの脳内では、一体何をどういう思考過程で論理の組み立てが行われているのか、まったく想像すらできなかった。
これから・・まだ若い彼がどんなことをしていくのか、僕は嬉しくなってしまった。
「今の話に可笑しいところはない」
僕の緩んだ微笑みを見て、彼がむっつりとそう言った。気分を害しているらしい。
「この部分について疑問は持っていたが、確信が持てなかった。・・・誰かに背中を押してもらってちょっとほっとした」
「それが理由なら根拠と結果が結びついていない」
「必ず結論を出すよ」
「そうしてくれ」
僕がそう言ったので、彼はそれっきり黙ってしまい、僕の持っていた資料について興味を失ってしまったようだった。彼も同じ分野で論文を書いていたので、まったく未知のものではなかったが、それでも彼と少し違う研究対象とテーマだったのに・・・一瞥しただけで判断するルイ・ドゥ・アルディの才能と判断力は、知性だけではないものがあった。
彼は案外、大胆なのかもしれないな、と思った瞬間だった。
思わず、口をついて言ってしまった。
「ルイ、君のその即決力は凄いね」
「当主の座を放棄した者に決断力を賞賛されても少しも栄誉だと思えない」
彼が素っ気なくそう言ったので、僕は苦笑してしまった。
ああ、やはり、彼はその点を気にしているらしかった。
「望はひとつに絞ること。・・・これが我が家の家訓でね」
「そうか」
ルイは低い声でそう言っただけだった。
「もっと大事なものがあったから。
僕を失っても家は滅びないけれど、僕は僕を失ったら自分自身でなくなるから」
その言葉に、彼が溜息を漏らした。
見惚れるほどに美しい嘆きの仕草だった。
彼が・・・僕の決断について、少しも嫌悪感を持っていないということがわかった。
誰にでも事情や理由がある。
そして選ぶものが皆同じだという論拠はない。
「・・・そう言い切れる断を持つのであれば、疑念に思ったことはすぐ調査しろ」
「次からはそうするよ」
そこで話が終わった。
僕は彼にホットショコラを勧めたのだが彼は断りを入れた。

そして無言の時間はそれほど長くはなかった。
扉が開いて・・・先ほどの茶色の髪の茶色の瞳の少女が入室してきたからだ。
このような場所に出入りすることには慣れているようだった。
アルディ家での教育や生活ぶりが窺い知れた。
彼と同じ教育を受けているのに、存在を明らかにされていない不思議な少女は、両手に大きな包みを抱えていた。

「ルイ・・・お待たせしました」
少女期特有の声だった。そして彼をルイと気さくに呼ぶ彼女は、ルイの無言にも慣れているといった様子だった。
質の良い外套を着ていたが、店内は調温されていたので、彼女の頬は赤く染まっていた。
そして僕に気がつくと、白い滑らかな頬を緩めて、満面の笑顔で僕に挨拶をした。
「こんにちは。・・・ルイのお友達ですか」
「同じ校舎に居た。それだけだ」
彼が素っ気なく答えたが、僕は彼の方を向いて話をしていたので、知人であることは推測できたようだ。そして彼が僕の名前を言うと、彼女はああ、と声を漏らした。
そして僕の正式な長い名前を流暢なフランス語で喋った。
外国人でありながら、僕の家の名前を知っており、ルイは僕の名前をフルネームで言わなかったのに彼女はそれを言うことが出来る。
・・・家族以上の間柄なのだと思った。
そしてこの少女の正体について大変興味深いと思った。

「初めまして。ヒカル・クロスです」
彼女はそう言って、大きな荷物を持ったまま膝を折って対貴への略式の挨拶をした。
鮮やかな緑色の箱に、瀟灑なリボンが括り付けられており、この店最大の化粧箱にショコラがたくさん詰まっているのだろうな、と僕はちらりと思った。
そして彼女の躯で支えるには重い荷物を、同じ部屋の中にいるのに持ってやらないわけにはいかないだろうと考えて、僕が腰を浮かした時。

すっと隣の金の髪の青年が動いたのだ。音もなく静かに。
そして彼女の荷物を持ち上げた。
「車にそのまま積ませれば良いのに。・・・それくらい判断できるだろう」
彼はこんな少女にまで冷たい言葉を投げる。しかし彼女は微笑んで言った。
「他の人のぶんはそうした。・・・これはルイに直接渡したかったの」
そして彼女はありがとう、と言った。
ルイを見上げる茶色の瞳は澄んでいて・・とても美しかった。
ヒカルという名前であったが、確か、日本語で晄を表す意味の言葉だったように記憶している。彼女は確かに、晄のような少女だった。
ルイの金の髪は太陽のようだと言われているが、それとは少し違っていた。
彼女の晄は全身から発しており、一緒に居る者を安堵させるような穏やかさがあった。
■07

ヒカル・クロスは彼が持っている大きな化粧箱を見つめながら、言った。
「ルイには手渡しにしたかったの。ここのショコラはとっても美味しいのよ、と勧められていたから」
「それならアルディ家のグラン・シェフかショコラティエに頼めば良いだけだ」
「・・・本当はね、ルイと一緒に来たかったの」
彼女がはにかんでそう言ったので、ルイは押し黙っていた。
この初々しい会話だけを聞いていたら、彼がルイ・ドゥ・アルディとはとても信じることが出来なかっただろう。彼はこういった会話は好まないはずだったのに。
それなのにヒカルという少女の前では若干口数が多いように思った。

僕の視線に気がついたヒカルは、少し笑って説明した。
「ルイはもうすぐチェスの大会があるから・・・」
それで彼女がここに足を運んだ理由を察することが出来た。
彼は乗馬とフェンシングの選手でもあるが、同時にチェスの選手でもある。
・・・激しい闘いを脳内で繰り広げるので、糖分が必要なのだ。
そしてここのショコラコーティングは有名で、手指の温度では反応せず、腔内で溶ける製法を用いている。
それは企業秘密というやつで、アルディ家のパティシエでは再現できなかったらしい。かつ、先ほど僕に振る舞われたビター味のものも取りそろえてあり、その品数は豊富だった。
チェスや将棋のように、脳を酷使する競技では途中でつまめる程度の糖分の持ち込みなら許可されていた。それくらい、激しい競技なのだということを僕は失念していた。
それこそ取り寄せれば良かったのだろうが、彼女は自分で選んだ品を彼に渡したかったのだ。

彼女は無邪気に言った。
「もうね、私の方がどきどきしてしまって・・・」
彼は決勝まで進んでいることと、おそらく今回も敗退はしないだろうということで無敗をまもり続けているのだと、ヒカルは嬉しそうに言った。
「その日は一日・・・ルイのことだけを考えてしまうの」
こんな言葉を愛くるしい少女に投げられて、僕は自分のことでもないのに、頬が赤くなるのを感じた。邪気はないとはいえ、それでも・・・彼女の言葉にはなにかまじないめいた魅力があった。心からそう言っているのだろう。
その時、ルイ・ドゥ・アルディは大きな包みを抱えていたので・・・まだ身長が伸び盛りで足りていないヒカルは彼の顔が見えていなかったが・・・。
ふたりの遣り取りを少し離れたルイの背後で聞いていた僕は、はっきりと見てしまった。
ルイ・ドゥ・アルディが・・・あの星辰の子と言われて何にも動じないルイが、ほんの少し頬を染めて・・・切ない晄を放ちながら、その箱をじっと見つめていた様子を見てしまった。

瞬きの回数が先ほどより増えていた。
そして彼は黄金の前髪が揺れるほどに下を向いて大きな溜息をついた。
「ヒカル。オレは試合ではこれほど多くを口にしない。こんなにたくさん用意しても持ち込むのはさほど多くない」
「でも」
ヒカルがあわてて言った。
「ルイの好みに合ったものがなかなか見つからなくて・・・」
これには驚いた。彼には好き嫌いという感情がまったくないと思っていたし、嗜好に偏りがあるとは思えなかった。

それなのに、ヒカル・クロスという少女は、彼の微妙な嗜好がわかるという。
「摂取するものに好みはない。ただ摂るだけだ」
彼が素っ気なくそう言った。

僕が彼女の介助をしようとしたらすぐさま席を立ったのに。
彼女の言葉に一喜一憂しているのに。

それなのに・・・ルイは正直に感情を表すヒカル・クロスに冷たい言葉しか投げかけない。
見る間にヒカルが萎れていくのがわかった。
時間をかけて、何にしようかと胸を弾ませて、ルイが喜ぶかもしれないという期待が大きすぎたせいだった。
「ごめんなさい」
彼女は素直に謝った。
彼が分刻みのスケジュールで動いており、人を待たせることはあっても誰かを待つ身分の者ではないことを思い知ったようだった。
ルイを待たせることができるのは、おそらくヒカルという少女だけなのかもしれない。
それなのに、彼はこうも冷たく彼女をあしらう。
なぜなのだろうか。

「・・・無駄な時間だ。帰るぞ」
彼はそう言って、箱を小脇に抱えた。彼女が両手に大事そうに抱えた箱を、いとも軽く持った。そして空いている方の手で・・・そっと彼女の背に手をあてた。
沈んでいることが明らかである彼女が、眉を寄せて落胆している。
その言い方はないのではないのか。
久しぶりに逢って、言葉を幾度も交わしていなかったが、僕はそう言いそうになってしまって口を開きかけた。どうも僕は堪え性がないのか・・・思ったことは言葉にして音声で伝えなければ伝わらないと信じ込んでいる性分であった。だから彼がもっといろんなことを喋れば良いのに、と思ったことがあったことを徐々に思い返していく。

しかしルイは静かに彼女に言葉を落とした。
「・・・残ったら、ヒカルが処理しろ」
彼がそう囁いたので、ヒカルはぱっと顔を上げて、ルイの整った顔に満面の笑顔を向けた。
「自分のものは買わなかったのだろう？」
「それならルイと半分ずつだね」
「オレは半分もいらない」
彼がそこで微笑んだ。
・・・余りにも美しい微笑みだったので、僕はひどく驚愕した。
ルイ・ドゥ・アルディが微笑んでいる。まったく珍しいことだった。
彼が誰かに微笑みを向けて、誰かの背に手をあてて荷物を持ってやっている。
■08

余りにも意外だったので、しばし口を開けたまま、僕はその場に立ち尽くしてしまった。
その時に、僕の用意させていたショコラが届いたと言うことで、係員が大きな・・・彼が小脇に抱えている箱と同じものを持ち込んだので、そこでようやくその場の空気が動き始めた。

「次の学会誌は目を通すことにする」
それが彼の別れの言葉だった。
僕はまだ口を開けて呆然としていたので、彼に言葉をかけることすらできなかった。
そして僕の荷物を運んできたスタッフは、彼の美貌に驚いて、彼の顔を食い入るように見つめていた。
それでも手に持っていた品を取り落とさなかったのは偉いと褒めてやるべきなのかもしれない。
ヒカルがまた膝を折って、ごきげんようと貴婦人の礼を取った。そしてルイ・ドゥ・アルディは彼女の茶色の髪の上から添えた手を離すことなく、部屋を出て行った。

あと数年もしたら、素晴らしい恋人同士になることだろう。
僕はそう思った。

出て行った時に、気が抜けて、ほっと息を吐き出した。
カフェテーブルの上に乗っている資料を整えることで気持ちを落ち着けようとしていた。
滅多に遭遇することのないルイに逢い、僕の気持ちは高揚していた。
彼に傾倒する者はみんな、こんな気持ちで居続けているのだろうか。

何もかも恵まれているのに。欲しいものは手に入らない。
だから、彼は自分でもぎ取りに行くのだろうと思った。
そんなルイ・ドゥ・アルディが・・・
僕の決断を肯定した。
彼は僕が家を捨てることを否定しなかった。本当は彼もそうしたいのではないのだろうか、とふと思ったが、それは尋ねても答えないだろうと確信していたので、自分の胸に秘めることにした。

そして・・・彼の意外な一面を見て、僕は論文のデータを指摘されたことより、ここで出会った偶然の意味を考えるよりも・・・酷く驚いた。
彼は彼女に恋をしている。そんな言葉では片付けられないだろう。
愛を・・彼はすでに愛を知っていると思った。
ルイが家を出たくてもそうしないで、当主就任に固執している理由は、ひょっとしたらあの少女なのかもしれないと思った。まだ恋を知るには幼い彼女が成長するのを待っているようにも思えた。そして・・・彼女とルイはとても深い絆があるとも思った。

彼は笑うととても幼く見えた。いや、年相応の笑顔なのだろう。

僕は化粧箱を受け取ると、ショコラが詰まった箱のずっしりとした重みを腕に感じながら、溜息をついた。

僕とルイの選んだ道は違うし、そもそも違えるほどに交わっていたことはない。
けれども。この特殊硝子の壁のように、こちらからは見えるのに、あちらからは見えないという状況に、彼はいつも居るのだろ

うな、と思った。
皆の考えがわかり、思考過程が判る。だから言葉が少なく、結論だけを求める。
誰もが考えつかないことだと誰もがルイを理解していないのに、彼はすべてが見渡せる。
・・・たったひとりだけで・・・すべてが見えるというのは、一体どれほどの孤独を味わうことなのだろう。
その彼が、唯一目線を向ける少女があのヒカル・クロスという少女であったのなら。
彼の見えない硝子のような心に、先ほどのように入り込むことが出来るのかな、と思った。これは僕の期待なのかもしれない。
けれども。
両手に抱えきれないほど、僕が持っても重いと感じる荷物を、直接彼に手渡したいと思うほど。
彼女はショコラをルイのために選び、自分の好きなものは買おうとしなかった。
両手一杯のショコラを受け取った時のルイの表情をヒカルが見ていたのなら。
・・・・彼らの路は交わるかもしれない。そうだと良いな、と願った。

化粧箱を車に運ぶように頼もうと思ったが、直接自分で運ぶ、とスタッフに言った。
言葉にしなくても伝わるものがあり、ヒカルは言葉だけでなく様々な方策を講じて彼に伝えようとしている。
そのいじましい気持ちに、ルイが気がついていないわけはなかった。
彼女のその心音に共鳴した僕は、今日は家人に手渡しでこれを渡してやろうと思った。
そして古い友人に会ったこと。それから少しばかり倖せな気持ちになったこと。
・・・僕が家を継承しないことについて理解を示してくれた感謝を伝えようと思っていた。

彼にも、何かを分かち合う人物が居た。それがとても嬉しかった。

論文原稿についても進みそうだった。
実際、彼が指摘した部分に誤差があり、これを修正したことによって僕の打ち立てた理論は検証されて学会誌への投稿も無事に締め切りに間に合った。
・・同じ学会誌に、ルイ・ドゥ・アルディが掲載していた内容は更にそれを上回るレベルの違うものであったが。
同じ学舎だったと言うのが恥ずかしいくらいだった。けれども、彼はその内容についてつまらないとかくだらないとか無駄だとかいうコメントはしなかった。
だからそれで良いのだと思うことにする。
・・・それにしても彼の打ち立てた理論というか、仮説が実証されて実用化されれば・・・この世の医療機関は大変に大きな激震を受けることになるだろう。
製薬会社からの問い合わせが多く、ルイは一切の問い合わせに応じていない、と学会関係者から聞いた時。
僕は彼が・・・何かもっと大きな仮説を持っているのではないのかと推測した。
公開しなければ、彼の理論を検証する者も出てこないし、これが実用化されるに至るまでのプロセスを経ることが出来ない。第三者による実証検分が必要な内容だった。彼の所属している研究所では実証できているようであったが。
だからこの論文には続きがあるのだと思う。そんなことを思わせる内容だった。
・・・結局、それを見ることはついになかったのだけれども。

それからずっと後になって知った。
ヒカル・クロスがシャルル・ドゥ・アルディ氏と婚姻したのだと言う。

僕はあの時の論文が認められて、別の国の大学教授となっていた。
論文は相変わらず書いていて、いつも締め切りに追われている。
研究者でありながら後進を指導発掘するという、不器用な僕にしてはなかなかに器用なことをしている。慣れた、と言うべきだろうか。

それでも。
迷うときがあった。
しかし、迷った時にはルイ・ドゥ・アルディの言葉を思い出すことにした。
「・・・そう言い切れる断を持つのであれば」
望はひとつに絞ることにしている。けれども、絞りきれない時には、彼の言葉を思い返す。あの時の僕の決断が間違っていなかったと信じているから。だから僕は今でも家督を継がなかったことを後悔していないし、これからも後悔しないだろう。
決して何にも固執しないルイ・ドゥ・アルディが、唯一固執していたヒカルという名前の少女と・・・彼は結局結ばれなかった。

しかしもっと驚いたことに、それから・・・もっと長い月日が経った時に、僕の元にどうやって調べたのか、一通の招待状が届いたのだ。同窓生として、結婚式に出席して欲しいという内容のものだった。僕は最優先事項として出席すると返事を出した。少しばかり驚愕していて、驚くと口を少し開けたままそのまま考えに耽ってしまうという悪い癖が久しぶりに勃発した。彼に嘲笑されそうだな、と思いながらそれを微笑みに変えた。

・・・ルイ・ドゥ・アルディが生涯の妻と定めた相手は、あのクロス・ヒカルとシャルル・ドゥ・アルディの娘であり、彼の従妹であると言うではないか。
これは驚愕を通り越して言葉に出来ない喫驚と言った方が正しい。
ルイはシャルルの実子ではなく、本当は甥であるのに実子として育てられたという話を聞いて、なるほど、と頷いた。彼が父親のことを滅多に話さなかったのはそういう事情があったからなのかと妙に納得していた。
そして当主の就任と婚姻式を兼ねた盛大なものになるのだと言う。
ランスの教会で式を挙げるのは、アルディ家の当主の代々の決まり事だった。

・・・ルイ・ドゥ・アルディは相変わらず美しいのだろう。
おそらく、アルディ氏に良く似た面立ちはそのままなのかも知れない。
しかし、お互いに長い年月を経て、最初に交わす言葉は、どうしようか。
僕は考えた。ホットショコラを飲みながら。
「あの時の試合はもちろん優勝したのだろう？」
そう尋ねてみようか。
それをあれこれ想像するだけで微笑みが漏れる。

でも同時に少し胸が苦しかった。
彼なら愛を貫くことを為し遂げると思っていたから。
諦めるということを知らない星辰の子は・・・諦めなければならない愛を・・・どうやって星に還したのだろう。
彼の家は薔薇に還ると言う。
けれども、彼は星に還るのかなと何となく感じた。理由はない。
研究者なのに、根拠のない話はするなとルイに咎められるだろうか。

フランス語でなかったから良く覚えていた。彼と彼女はそれを口にして・・・各々何を思っていたのだろうか。
少しだけ苦くて、そして甘い花の芳香が漂うショコラを唇に乗せて・・・彼は何を想ったのだろう。

今でも、ホットショコラを口にすると思い出す。
身体が冷えた時にはそれを飲むことにしていた。甘いものは今でもあまり好きではない。でも、そういう決め事を楽しめる年齢になった。
それなのに。大人になって、さらにもっと大人になったのに。
胸がちくりと刺されたように痛む。そしてじわりと疼く。

思い出すからだ。
金の髪の、青灰色の瞳をした青年が、茶色の髪の茶色の瞳の少女に微笑んでいる、あの美しい場面を。
そして外部からは見通すことは出来ない、彼の心そのものであるような部屋から、彼が手を添えて、同じ薔薇の香りのする彼女と出て行った時のことを。

・・・・祝いの手土産には、Stelle e Fiori　を贈ってやろうと思った。

そして、ルイ・ドゥ・アルディに最初に言う言葉を決めた。
「君の微笑みをもう一度見ることができて、嬉しい」
彼はその言葉のとおりの笑みを向けてくれるだろうか。
楽しい想像だった。

（FIN）

春ざれ

「それで、荷物は？」
ルイ・ドゥ・アルディは、細く長い指で、一番上のボタンをきっちり留めた。
そして一見投げ出されたようで、計算された場所に置かれたサングラスと車のキーを取り上げた。
彼は最新のエンジンを好んで、乗るには服装を思案しなければならないような低車高の車を乗り回している。
彼の車に乗ったことはないのだが、さぞかし乗り心地が悪いのだろうと思わざるを得ないタイプのものばかり、乗り付けてやって来る。
運転手付きの車には乗らず、自分で運転をしてここまでやって来る。
しかも、キーがシリンダを回転する音さえ好んでいるらしく、キーレスエントリーシステムを採用しようとしない。

彼女は、苦笑しながら、彼と同じように立ち上がって、乱れた服装を直した。
いや、彼に寄って乱された服を、という言い方の方が正しい。
時計をちらりと見る。
あまり長い時間、こうして二人きりで部屋に籠もっているわけにもいかない。
彼は大事な顧客であるのだから。

「サイズはいつもの通りで良いのよね」
ああ、そうだ、と答えが返ってきた。
いつものとおり、面倒だと言わんばかりの、無表情な声だった。
少し離れたソファに座って、彼はもう煙草を口にくわえて喫煙しようとしていた。
ここは禁煙だと言っても、彼には逆らえない。
幾度か注意したが、結局彼は従おうとしなかった。
その代わりに、その紫煙を抹消したいと思うかのように、彼はいつも帰った後に、香りの強い薔薇の花束を届けて寄越す。
彼は彼女の方を見ようともしなかった。
見事な金髪の下の端正な顔は、俯いて煙草の火を灯そうとするために傾いているので、彼女の位置からは見えなかった。

「そこに置いてある」
「貴女は頭のいい人だ」

彼は一度大きく煙草の煙を吸い込んだ後、静かに呟いた。
彼女は微笑んだ。
彼が彼女の店にやって来るようになって、どれくらいだろう。
かなり、長い付き合いになった。

元々は、彼の叔父であるミシェル・ドゥ･アルディがこの店を見つけた。
どうも、この店に置いてある衣類が、彼の希望する品であり、通年オールシーズンのものを置いてあることが、アルディ家の男性陣によって出入りを許されるようになった理由のひとつであるらしい。

ルイはいつも・・夏の服を持ち出していく。
請求書はみな、アルディ家の当主の名前で宛先が記載され、作成され、そして届けられる。
ひとり息子であるルイが時々こうして衣類を運び出すようになり、そしてそれ以上のオーダーも・・・時折彼女に申しつけることを、彼の実父や叔父は知っているのだろうか。
どちらが誘ったということではない。
ただ、ごく、当然の成り行きでそうなっただけだ。

時折のランデブーを愉しむということで言えば、ルイ・ドゥ・アルディは最適任だった。
どこかに出かけると言うわけではない。
そして、何かを買い求めて欲しいと言うことではない。
上得意の家の子息。
それだけ。
ルイはアルディ家の名代として足を運んでいるが、かなり自由裁量を許可されているようだった。
彼女の店の品を、彼女の自由に選ばせて用意させ、値段を気にせずより高価なものを用意するように、と時折希望を述べていく。
ルイ・ドゥ・アルディは、一度も「これを交換しろ」と言って、彼女の用意した化粧箱を突き返すことはしなかった。

最近では、もう、中身もあまり確認しない。

定期的にここにやって来て、いくつか希望があるときはそれを申し出て、商品を梱包するまでこのVIPルームで時間を過ごし・・・そして荷物を受け取っていく。
いつも同じ大きさの化粧箱に、同じ包装紙に包んで用意する。
その時々の流行のアクセサリーは許可されるが、それ以外は、同じ傾向のものばかりだった。

最初にミシェル・ドゥ･アルディが言った、該当するサイズと年代層を聞いて、彼女が用意した服を気にいったと言って持ち出したのが、ルイの叔父だった。
そしてそれから随分経過しているのに、同じ人に贈り続けているのであれば、年齢は上がっているはずだし、好みも変化しているのだろうが、それを口に出してはいけないという暗黙知があった。

それが誰に贈られるものなのかも聞かされていなかったし、知ろうとすればその瞬間に、この店は彼らが出入りすることはなくなってしまう店、と定められてしまうだろう。
流行というものは時に残酷で、少し時間が経過するとたちどころに色あせてしまう。

「桜の花にはならないように」
ルイはそう言った。
風靡は酷くうつろいやすいもので、そして一瞬のものであり・・・一度雨が降れば流れ散ってしまう桜の花にたとえて彼女を諌めた。
店の経営は順調であったけれど、一度だけ・・彼に、店のテーマカラーを変更して、包装紙に工夫を凝らし、季節を思い起こさせる柄にしようとした時のことだった。

日本文化が見直されている何度目かの時好だった。

彼は完璧だ。
面と向かってそう言えば、彼女が決して思い直すことはないまま、憤慨して忠告と反対の路を行くと、彼は知っているのだ。
あの若さで。
フェンシングと乗馬で鍛えた体に、整った顔立ちに何カ国も渡り歩いて論文を次々と出す、次世代のフランスの華とでも言うべき星辰の子を、彼女はほんの束の間独り占めしている。
ルイがいつもつまらなさそうにしている理由も、煙草をひっきりなしに吸い始めるようになったきっかけも、彼女にはわからない。

でも・・・彼女は知っている。
彼は、桜が嫌いであることを。
彼は、桜を愛していることを。

彼女は、その春に。

何の気なしに、ふたつ。
化粧箱を用意した。

ひとつは、今まで通りの包装紙のものを。
もう一つは、春の桜柄をちりばめた、日本人客が喜びそうな包装紙のものを。

先般、日本企業のオリジナルグッズを包む包装紙として、実験的にこの柄を使ったところ、大変に好評だった。
この包みを見たら、あの店へ、という代名詞になれば良いと思い、快く提供したが、それが案外人気があったので、彼女はそれを商品化しようと考えていた。

でも、彼に用意するものは、いつもの通りでなくてはいけない。
「いつもの通り」
ルイはいつも、こうして・・・変化を嫌うのかと想像した。
まだ若く、冒険や新しい試みについて常に積極的に享受したがる年齢で在るはずなのに、彼はそれをとうに越えてしまって老成していた。
いや、老人のような眼差しをするときがある。
冴えた月の晄のような、青灰色の瞳が、時おり、この世の果てを眺めているような遠い視線を、虚ろな様子で注いでいるときがある。

彼は「違う」と指摘されることを厭っているのに、いつも進化し続けて居る。
逢うたびに、彼は違う称号を新たに追加している。

それでも、ひとつだけ変わらないのは。

彼が星辰の子と呼ばれていることだ。
もうすぐ・・彼は「子」と呼ぶには相応しくない年齢に到達している。
しかし非常に若く見える彼の家の血筋は、その名前をそのまま名乗りなさいと主張しているかのようだ。
彼は時折、とても幼く見える。
それなのに。
今も若いが、それより若い頃から彼は浮き名を流す気紛れな蝶だった。
アルディ家と言えば、パリでも屈指の名家であり、彼がなぜいろいろな花を渡り歩いて、かつての彼の父と同じ所業を繰り返すのか・・何か理由があるのだと思った。

アルディ家の男性は、多情な人物ということで有名だった。
もちろん、彼女の耳にも届いている。
彼らはひとりの人を定めはしない。
いや・・・確か、ルイ・ドゥ・アルディの父であるアルディ氏が、日本人女性をひとりの人と定めたとかそうでなかったとか。
今となっては伝説だ。

彼らが共通して持つ、たったひとりを愛するか、誰も愛さないかという両極端な性質は、たとえ結婚してもそれは変わらないのであろう。
ルイ・ドゥ・アルディの母と、彼の父であるシャルル・ドゥ・アルディは婚姻後すぐに離婚してしまった。
彼はその前から存在し、認知をしてようやく結ばれるという・・・・華麗でかつ感動的なランスでの挙式のニュースを眺めることができるのだろうか、と国民が固唾を呑んで見守っていたのに。
だからそんな過程を経て成長したルイ・ドゥ・アルディが、家庭や家族に期待を持っているとは思えなかったし、華やかな彼の生活の中で、そう言った肉親のことに触れる話題は出ることはなかった。
◆中編

「その春柄は今春のイベントに使う、サンプルよ」
彼女はそう言った。

彼は同じ事を繰り返しては言わない。
以前に窘めたことを彼女が繰り返そうとすれば、彼は二度とそのことについて口にしないであろうという確信があった。
だから決して、ルイ・ドゥ・アルディの前では新商品の売り込みはしなかった。
顧客別に対応方法を変えるというのも、一種の商法である。
だから、彼には、店内のうち、流行によって品を変えるブースは案内しない。
建物の構造上、そこを通らないとこの部屋にはやって来ることできないのだか、ルイはいつもつまらなさそうに、何かを眺めるということもしないで通過していく。

アルディ家の者がこうして、ここに公式に出入りをすること自体が非常に有益なことであるのに。
しかし、それをわざわざ損失に変えるつもりはなかった。

彼らが従える美姫達が競ってここのドレスを買っていく。
彼らが気にいっているのは、それらの最新の衣ではないのに。
それを告げて、アルディ家の星辰の子が、いつも特定の誰かの為に衣を買い上げているとは、決して漏らすつもりはない。

「気に入ったのなら、持ち帰っても良いのよ」
彼は首を振った。
金の髪が揺れると同時に、わずかに、その空気の流れで紫煙が左右に霧散した。
「いや、興味がない」
そうだろうか。
彼は確かに、豪奢なソファに置かれた、いつもと違う包みに、彼は視線を注いでいるようだった。

それは鮮やかな櫻色の包装紙だった。
中身が僅かに透けるタイプで、化粧箱の中身が一目でわかるものになっている。
セロファンの質感を感じさせない、和紙の雰囲気を出したものだった。
軽く加工しやすく、発色が美しいそれは、廉価で生産できる。
その製法については、ルイが特許を持っている。
彼はそういった知的財産権の専門家であり、彼女はその恩恵を受けている者のひとりである。
だからこそ、彼には詮索することはない。
いや、そういう彼女だから、彼は恩寵を与えるのかと思う。

「ルイの言ったとおり、前回のものより格段に違う評判よ。貴方は研究者としての素質もあるけれど、商才もあるのね」
彼の才幹を褒め称えると、彼はますます機嫌が悪そうに、無表情に勢いよく煙草を吸った。

「その中身は、何？」
彼女はそこで、彼がいつもと違うことに気がついた。
中身に何が入っているか、どういう梱包なのか、まったく気にする風でもなかったのに。
彼女が立ち上がって、電動ブラインドを僅かに調節し、内庭の光を取り入れるために調光した角度が、彼の気に触ったらしい。
ルイは、非常に、気むずかしい。
どのタイミングで何をするべきなのか、彼はいつも何手も先を考えている。
彼の思考と同じ速度でものを考えるのはとうてい追いつかない。
そして彼は、誰もついて行けない迅疾をまったく意識していないようだった。

窓から差し込む春光が、その筐に差し込んで、ちかりと光ったのが発端だった。
一瞬だけ彼は、その深い瞼を瞬かせた。
そしてその光の源に意識を向ける。
彼の青灰色の視線の先は・・・光る小物を気にしているようだった。
「ああ、チャームよ。お得意様用に、限定生産で作ったの。・・・毎年違うものにしようと思って」
彼女はそう言って、箱に近づき、凝ったデザインの不織布鞄から半透明の箱を取り出した。
彼が気にしているのは、彼が考案した包装紙でもなく、彼に渡す用意ができている内容物と同じ衣が入った内容物でもなく・・・その僅かに光るチャームであるらしい。
彼女は少し微笑んで、その筐を振った。
僅かに、鈴の音がする。
「この季節にちなんで・・・桜もモチーフにしてみたの。でも、それではありきたりだから・・・毎年、しかけを施すことにしてみた」

ここまで彼は思考の波を泳ぎ切ってしまったらしい。
鋼のような鍛えられた長身を起こすと、煙草を机の灰皿に押しつけて揉み消した。

「時間だ・・行く」
彼はどうも、誰か他人と一緒に過ごすときには時間を決めて過ごしているようだった。
◆後編

会話を繋げるために言葉を選んだのに、それにはルイはまったく興味がなさそうだった。
彼はいつも・・・違うことを同時に考えている。
「試作品だと言っていたが」
彼がその小物について、気がかりなことがあるらしい。
彼はシガレットケースを胸ポケットに入れながら、その箱を無造作に取りあげた。

ルイ、矛盾しているわ。

彼女は苦笑した。
時間だからもう出立すると言っているのに、その一方で、確認しないと気が済まないらしい。
それなら、最初から「それは何だ」と言ってみれば簡単なことなのに。

どうしてこの人は、こうも回りくどい言い方や動作で、誰も寄せ付けない・・・隙を見せない素振りしかできないのだろうか。
彼女は長い爪先を傷めないように気を遣いながら、その箱の包装を取り除いた。
紙の乾燥した独特の音はしない。
これもルイの助言によって改良考案されたものだった。
丁寧に包装された箱であったが、これをルイが興味を持ち、何かしかの助言を与えてくれるのであれば、この場で破っても惜しくはなかった。
彼の才はそれほど・・・・誰もが喉から出るほど欲しいものである。
星辰の子と呼ばれている彼は、まったくそんなことを気にせず、ただ興味が湧けばまるで神託を受ける巫女のように、隻句を述べる。
それはいつも過ぎるほど的確であった。

「ご覧になって。心ゆくまで」

いつも夏の服しか持っていかない彼が、春の装いを気にするなんて。
ちらりと、おかしいなという疑惑が持ち上がったが、ルイには必要最小限の言葉しかかけないことにしている。彼は過ぎたお喋りは好まなかった。
恋の囁きも甘い未来も、何もない。
彼の瞳を近くで覗けば誰もがわかることなのに。
虚のような、深憂を帯びた彼の青灰色の瞳には、愛も希望も何も感じない静寂だけが漂うばかりだ。

彼は見事な金髪を揺らして、少し屈んで、彼女が差し出したそれを受け取った。
彼は腕を伸ばして、その箱の中身から、彼がこの瞬間、最も興味を引いている物体を確認する作業に入った。
最新の流行の柄も、彼が尽力した包装紙も、何もかもが彼の興味の対象外だった。
ただ、中央で小さな音を立てるそれだけが、彼の青灰色の視線を受け止めている。
ルイが、桜の花弁をあしらったチャームを、細く長い指でつまみ上げる。
そして次に彼は目線までそれを釣り上げた。

刻印があった。
今年の春の者であることを示す年号と、その文字に目を細めた。
「これは・・・」
彼が言葉を漏らした。
「ああ、それは、お得意様の名前を刻むサービスよ。・・・唯一の贈り物というコンセプトだから」
彼女が補足説明をする。
彼は銀製のそれを裏返して眺めた。
じっと・・何かを注視する様は、整ったよくできた彫刻のようだった。
彼は美しい。そして完璧だ。
何もかもに恵まれているのに、こうして怠惰で虚無な時間に身を浸す。

やがて言葉を発するまで、彼には話しかけないことにした。
こういう表情をする彼を知らないから。
よく知っていても、きっとそうしているだろう。
彼女は自分の理解できないことには触れない主義だった。
もちろん、ルイ・ドゥ・アルディのことも完全に理解しているとは思っていない。
気紛れにやってくるようで、定期的に足を運び、こうして夏の服だけを選別していくルイの思惑について、彼女は想像することを最初から放棄していた。
けれども、彼がもたらす彼女への褒美は、何にも代え難いものだった。
そうでなければ彼女はこの若さで、パリの中央にそびえ立つ自社ビルを建てることなんてできなかった。

その桜柄の形状をじっと見つめながら・・・ルイは唇を開いた。
「誰のデザイン？」
「良くわかったわね」彼女が驚いて言った。
「ここに小さく刻まれているサインが、デザインした者の名前？」
「そう。」
彼女は微笑んだ。
ルイの慧眼は恐ろしいまでに細部にまで注意を払っている。

このチャームは銀製品であるが、桜の色合いを出すために、着色された塗料が塗られている。
時間が経過して、酸素に触れないようにコーティングされている銀製品でも、相当日数を経過すれば腐食する。
薄紅色のその着色が剥げ落ちないように特殊な加工が施されていて、桜の花弁の脇には小さな鈴がつけられていた。それが先ほど音を立てていたのだ。
しかし・・・その着色方法について、ルイは何かに気がついたようだった。

「このデザイナーを紹介したのは、父？それとも叔父？」
「両方よ」
彼の脳細胞が高速で回転するのを目の当たりにした。
彼女は、彼がその小さな飾りから、彼が一体、どこまで情報収集したのかを知りたくなった。
彼はそれを察したかのように、薄い唇の端を歪めて微笑んだ。
視線はその飾りに注がれたままだったが、目の上まで持ち上げていたそれを、大きな白い手の平で握った。
とても愛おしそうに。
先ほどの、無遠慮な摘み方ではなかった。

「急遽、桜の柄のデザインをすることになって。
・・・ルイが不在のことだったから。
貴方、学会でインドに渡っていたでしょ？
塗料の特許権使用について、ミシェル氏に相談したときに、日本人の好む桜色を指摘できる人を捜していると言った。
それから、日本人向けのものにしたかったので、日系人のデザイナーで、細やかな花弁の質感について意見を述べることができる人を捜していると言ったら。
アルディ氏とミシェル氏が・・・・・貴方のお父様と叔父様が彼女を紹介してくれたのよ」
彼女は苦笑した。
ここまで長い会話を彼と交わすことは、商談の席でしかあり得ないから。

だから、敬意を込めて、その人の名前を小さく彫ってあるのよ、と彼女は追補した。

ルイが小さく舌打ちをした。

よほどアルディ家のおかかえのデザイナーなのかと思った。
彼らが別々に同一人を推薦したことで、彼女は他のデザイナーを捜すことなく、その人物の実績を尋ねることもなく、決定してしまった。
こういう意見を通すことができるのは自分が経営に加わっているからであり、アルディ家のもたらす福音が絶大だからこそできるのであるということを、彼女はよく心得ていた。
彼女は冒険をするつもりはない。
軌道に乗った経営を傾けるようなことはしたくなかったし、春の一イベントではあるが、これが精巧であればあるほど、彼女が得

るものは大きいはずだった。
たかが飾りであるが、それほど重要なコネクションを駆使してできた苦心の作だ。

結局は一度も逢うこともなく、仲介にミシェルが立ってあれこれと細かく指示を出してきた。それはアルディ氏も承知のことだったようだ。

「そのデザイナーの方に差し上げる御礼の服を見繕って・・・梱包していたところなのよ」
彼女は妖艶に微笑んで、若い青年に言った。

ルイ、貴方もよく知っている方のようね

彼女は小さく呟いた。

その人物のラフスケッチや、色指定の入った色チャート盤を何度か目にするうちに。
彼女が非常に若い日本人であり、アルディ家に常勤しているか滞在しているらしいことがわかった。
美しい文字ではあるが、どうやら・・・まだ相当に若い。
だが、彼女には天賦の才があるらしかった。
色彩感覚というものは、幼い頃に何をどう見て感じたかという後天的要素と、遺伝的要素がある。
彼女はどちらも兼ね備えているようだった。
色合いはこちらが想定していたものと違って柔らかい印象を与えるものに仕上がったし、彼女から「ちょっとしたしかけ」について提案があり、それについてアルディ氏が自ら考案した「しかけ」を使用する許諾を得たことも大きかった。

その刻印を彼は詠み上げた。
「・・・・ヒカル」
「良い名前よね」
彼女はそう言った。
一般人であり、デザイナーを本業としていないから、という理由で、彼女のフルネームを教えてもらうことはできなかった。
報酬もいらないと言う。
ただ、その代わりに今後もルイが取りに来る荷物のことをくれぐれもよろしくと頼まれた。
それではビジネスとして成立しないので、彼女はこうしてその若いデザイナーに捧げるために、いくつか・・・年齢を想定して、衣類を贈ることにしたのだ。
これから春が終わってすぐに夏がやってくる。
その時のために、ルイに渡す荷物と同じ・・・夏の柄の服を梱包した。
ルイに内緒で話を進めていたので、彼女は咄嗟に「ルイに渡す品と同じものを用意したサンプルだ」と述べてしまった。

それをルイが見つけたわけである。

「貴方も知っている方なのね。それなら、その箱も・・・ついでにお遣いという格好で申し訳ないけれど、頼まれてくれないかしら。・・・彼女に渡して欲しいのよ」
彼女はそう言うと、今、包装を破り捨ててしまったものと同じものを用意するから、少し待って欲しいと言った。そして、机の上の内線電話のボタンを押して、別のフロアーに居る従業員に、新しく服を見繕って大至急梱包するように、と指示を出そうとしたときのことだった。

「・・・・いや、必要ない」
彼はそう言った。
「彼女は報酬は必要としない。そういうことを見越して引き受けたのではないから」
彼が断定的にそう言ったので、彼女は内線電話の受話器を元に戻した。
彼は・・・彼女の目の前で、手の平に包んだ桜の花弁を眺めていた。
少し、驚いているようだった。

「それ・・・良いでしょう？体温で、桜の花弁の色が変わるのよ」
少し誇らしげに彼女は言った。
ルイが驚愕する姿は滅多に見られるものではない。
青灰色の瞳が少し大きく見開かれた。
そして金色の前髪が形の良い秀でた額にこぼれ落ちる。

先ほどまで薄紅色だった桜の飾りは、彼の掌の中で・・・彼の温度によって、濃紅色に変化していた。
ちりん、と鈴が鳴った。

「荷物になる。これだけ渡すことにしよう」
彼がそう言って、胸ポケットに大事そうにそれをしまい込んだ。

「ルイはどうしてそれが、貴方のよく知っている『ヒカル』だとわかったの？」
彼女は疑問を投げてみることにした。
滅多に質問しないのだが、彼の様子が気になった。
ルイは髪をかき上げて、それからもうすでにすっかり興味をなくしてしまった包装紙の中身をちらりと見遣った。

「この色合いは、日本人独特の色だ。外国人が真似することはできない。
そしてこの色を使って・・・先般拙い桜の絵を我が家で披露した者が居てね。
それは桜が散るまでの間、居間に飾られている。
おまけに。誰かから頼まれたからと言って、桜が咲く何日も前から、庭の桜の木の下でスケッチに耽り、熱を出して寝込んでいる愚か者が・・・確かそういう形状の花弁のデザインをしていたな」

用意するには春になる前から準備しなければならない。
それなのに、冬の寒空の下で、彼女は一心不乱にスケッチをし・・・その姿をシャルル・ドゥ・アルディは運命の人と重ねて奨励していた。
そして結果、彼女は失調した。
医師でもあるシャルルが、ヒカルに無理をさせて・・・あの人と同じ姿を愛でようとした。

まだ、夏でもないのに。

ルイがその時だけ、口調を尖らせて言った。
家内のことは、彼は口にしない。
それなのに、彼の家の内情について、吐露したことに、彼女は驚歎していた。
そしてその人物に・・・シャルルやミシェルだけではなく、ルイもこよなく心惹かれていることに気がついた。

どんな娘だろう。
年若く、日本の桜を愛でる心を持ち、そして冷たい星辰の子を魅了する人物。
そして、彼が手の平の中で愛おしそうに愛でる桜の花弁は、彼の温度で紅く・・・まるで彼の血潮のように色づいていた。
その手の平の中で愛でられているのは花弁などではない。飾りなどではない。
ヒカルという名前の文字を彼は愛でているのだ。

「凝った作りは褒めるに値するが」
彼はそう言って、彼女の脇を擦り抜けて言った。
「たかだか限定の品にこれほど細工を凝らすと、肝心の商品が損なわれるぞ。・・・鈴にもコーティングを施さないと、腐食して衣類に錆がうつる。ここは改良するべきだな」
彼は辛辣に強烈に批判をした。
整った眉を顰めて、彼は酷薄そうな笑みを浮かべた。
だから自分に尋ねれば良かったのに、とさえ言いたげだった。

彼女は苦笑して、彼に次からはそうするわ、と言ったが、次はもうないだろうと思った。
「ヒカル」という娘を、表舞台に引っ張り出そうとしたことは謝罪しなければならない。
日本人独特の色彩感覚を求めて、適任者が傍に居れば誰でも推挙するだろう。
でも。
この話が出るまでは興味がまったくなかった。
アルディ家に縁のある日本人女性のことを、ルイ・ドゥ・アルディが気にかけていることに、大変に驚いた。

けれども・・・彼がそこまでひた隠しにする理由はただ一つであるように思える。
それを彼は気がついているのだろうか。
それとも・・・気がついていながら気がついていないフリをしているのだろうか。
彼はルイ・ドゥ・アルディなのに。

彼の胸の中で鈴の音が鳴った。
春を告げるかのような、遠い・・・僅かな音色であった。

「時間を過ぎた。・・・・ここを出る」
彼は別れの挨拶もそこそこに、部屋を出て行ってしまった。もう心はここになく、次の考えに思考を巡らせているようだった。
ルイは、そのまま振り向きもせずに部屋を出た。

きっと、もうしばらくすれば、この部屋一杯に香るかぐわしい薔薇が届けられることだろう。
それとも・・・今日は薔薇ではなく、桜かもしれない。予想は当たっていると思う。

彼女は彼が無言で部屋を出て行った後。
しばらく扉を見つめていたが、やがて苦笑して、そのままソファに座り込んだ。

平静を装っては居たが、あれは確かにかなり激昂しているようだった。
ヒカルという人物を、商品のように扱った彼の父と叔父に対して、怒っているようだ。
その証拠に・・・彼は、彼が持っていくべき荷物を忘れてしまっていた。

彼は誇り高いから、忘れ物をしたと言って戻ってくることはしないだろう。
彼は決して忘れないのに。
我を忘れる唯一の人が、あの「ヒカル」という人物なのだろう。

彼女は嗤いながら、彼の忘れ物に目を遣った。
夏の服を持って捧げる人物はきっと違う女性だ。
それなのに・・・忘れずに定期的にこれを運ぶ彼なのに。
春ざれに花を愛でる若い娘に心を奪われている。
桜を愛する人をこよなく愛しているのだろう。

そして彼女は手が届かない。

・・・いったい、どんな娘なのだろう。

それから、いくつかの季節を巡り巡って、彼女は「ヒカル」に逢うことになった。
彼がふらりと・・・朝早く、開店前の店にやって来て。
「彼女の為に服を見繕って欲しい」と言って来たからだ。
律儀な彼は事前に電話を寄越していたが、それは「誰にも接触しないで店に入りたい」という希望を述べただけだった。
それは、いつも夏の服を選んで持ち出す彼の様子と違っていた。

彼女は「ヒカル」を観察した。

ようやく逢えたが、この店のチャームのデザインを自分自身が施していることを彼女はまったく気がついていないようだった。そ

こまで詳しくアルディ氏は話をしていなかったようだ。春ではない季節だったせいもある。これが春の季節なら、彼女にまだ残してある店の唯一のオリジナルのチャームをつけてやったのに。だから彼女は梱包した品にこっそりチャームを差し入れてやった。もちろん、腐食するという鈴ははずして置いた。
ルイがそれに気がつくのであれば・・・「ヒカル」が服を脱ぎ着する傍に居ることを許されており、その梱包物の中身を一緒に見遣ることのできる間柄であるということだ。

あれっきり、限定の飾りはやめてしまっていた。
評判は良かったのだが、ルイが指摘するとおり、鈴の接合部分が腐食して、同梱の衣類に着色してしまうことが発覚したからだ。

夏の陽射しの中で、彼女は耀いていた。
まだ・・・・年若い。非常に若い。
茶色の髪と茶色の瞳。
良く動く大きな瞳が印象的だった。
日本人と言われてもすぐにはわからなかった。
それくらいフランス語が流暢であったのに、ルイと話をするときは日本語だった。
アルディ家は大変な親日家で有名であったので、彼の家では日本語が通常の使用言語として指定されているということだった。
生命の象徴でもあるかのような、若く健康的でそして闊達な精神を持った彼女は、おずおずと店に入ってきた。若い者が好むような格好であったが、ルイはもっと違った雰囲気を望んでいるのだと思った。
彼は・・ヒカルの姿を追いかけていた。
彼女の一挙手一投足に全神経を注いでいた。
彼女の温もりや彼女の視線や彼女の言葉をすべて・・・漏らすまいとしているかのように。

ああ
貴方は・・・・秘めたる想いを持っているのね。
彼女は微笑んだ。
どんなに彼に彼女の整えられた躰を押しつけても彼は動じなかった。
優雅に微笑んで、機知に富んだ会話で彼女との遣り取りを交わしてはいるが、彼の視線は・・・あの娘に注がれていた。

この人が貴方の晄なのね。
ヒカルとは、晄を示しているのだという。

ヒカルが・・彼の永遠の晄になってくれれば良いのに。

彼女が美しく着飾られて戸惑っている様子を静かに見続けるルイを、彼女は見つめながらそう思った。

これだけ・・・これだけ熱く切ない想いを迸らせて、彼女の姿を食い入るように見つめるルイを、知らなかった。
これまで一度も見せたことのない皮肉気だけれども穏やかな微笑みを、彼女は知らない。

ヒカル。
貴女は春ざれを彼に見せ続ける晄なのだわ。
春夏秋冬。
いつでも。
どこでも。
貴女がいるだけで、ルイの景色は鮮やかなものになる。
無機で単色しかない彼の色が、桜色になり、彼の温度でそれは紅く・・・血のような彼の熱情で色が変わるあの飾りのように変化し続ける。

用事が済むと店を早々に退店する彼らの後ろ姿を見送りながら、彼女は想った。
彼はもう二度と、あの部屋に薔薇を運ばないだろう、と思った。
それでも良い。
ルイが、あの晄を失わないようにしっかりと見続けるのであれば、それで良いと思った。

春をすぎて夏の陽射しであったのに。

彼女はルイとヒカルを見送った後。空を見上げた。
もう、長いこと・・・建物の中に居る事が普通になってしまったので、こうして夏の空を見上げることもやめてしまっていた。
白い雲が浮かんでいた。
これからひと雨来るかもしれない。
そんな重厚な白く眩しい雲が、晄を反射して彼女の瞳を射貫いた。

冷房の利いた店内と違い、差すような日射と暑い空気が立ち込めていたのに。彼女はなぜか、春の風を思い出していた。

春ざれの・・・あの桜の陽気を思い出しながら。
彼と彼女を乗せた車体が遠ざかっていくのを見送った。

（FIN）

GRAPHO

■01

「なぜ、オレも立ち会わないといけないんだ」
最近になって、彼は自分のことを「オレ」と表現するようになった。
公式の場所では「私」と言っているのに、彼の変化の理由についていろいろ考えたけれども、結局、ヒカル・クロスには理解できなかった。
彼女は久方ぶりに逢うルイ・ドゥ・アルディの顔を見つめる。
あどけない笑顔だった。
しかし、彼は彼女の顔にしかめ面をして出迎えただけだった。
逢うたびに、彼は変化している。
呼称が変化しただけではなく、身長も伸びたし、声の感じも少し低くゆっくりと喋るようになったような気がする。
間の取り方、と言うか、彼の空気が、ヒカルのそれと異なっているのを感じて、彼女は少し哀しくなった。
同じが良いとは思わないが、彼女は、やはり、どんなに懸命になっても、どんなにシャルルに褒められても、決してアルディ家のこどもにはなれないと、思う瞬間があるからだ。
それはいつも決まって、ルイ・ドゥ・アルディに逢うときだった。

「今日はね、日本で『こどもの日』と言われていて・・・写真を撮ろうということになったの」
「それは誰が決めた習慣なの？」
「シャルル」
彼はその瞬間、大袈裟に溜息をついた。
すでにその年齢で受けるべき教育はすべて終えて、彼は各地を留学とか遊学とかいう名目で渡り歩いていた。
アルディ家の子息であり、フランスの華と呼ばれる人物の実息でもある彼は、世界中から注目される次世代の若きプリンスとして、世を賑わせている。
だからこそ、この国を離れて諸国を渡り歩いているのだが。
彼の出生はとても謎めいており、そして彼の両親の僅か一ヶ月の結婚生活の後の破綻やその後の噂話まで、彼は逐一記憶していたが、それがルイを形成している何かになることは決してなかった。
彼はミシェル・ドゥ・アルディという、彼の叔父であり、シャルル・ドゥ・アルディの双子の弟を教育係として、最高の教育を受けてきたからである。その叔父も、まったく外部には露出しない摩訶不思議な人物であったが、時折報道される映像では、アルディ家の当主と同じ容貌をしていることで有名だった。
その昔、兄弟で当主争いをしたスキャンダルを今ひとたび呼び起こすに相応しい美貌の持ち主だった。
その理由や本当の意味について、ヒカル・クロスは知らない。
幼すぎることもあるが彼女はあまりにも平凡で凡庸過ぎた。
そうなるように育てたシャルル・ドゥ・アルディの責は大きい、とルイは思った。
器というものは大きく影響するのだと思った。
大きな容積を受け入れることが出来るのか否かということは、その器の価値に影響する。
ヒカル・クロスは、この家に相応しくない狭量な人物出あることを知らしめるような行為をシャルルが続けていることに対して、諦観と憤慨を交えた視線でもって、ヒカルを侮蔑の対象として見るしか・・・ルイにはそうすることしかできなかった。
「なぜ、それにオレが遵わないといけないんだ」
「記録は大事だと言うから」彼女は拙い言葉でそう言った。
この家では、学んだ言語はすべて使えるようになっている。それなのに、ヒカル・クロスの使用する言語はフランス語か英語か日本語に集中しており、特に日本語で物事を進めないとこの邸では何もかもが滞るシステムになっていた。
ルイは軽く舌打ちをした。彼がつい最近まで滞在していたのはもっと別の言語の世界であり、彼は習得したばかりのそれらを駆使するために、フランスの大使館にしばらく出入りする予定を立ててていたからだ。居住を主にすることとしているこの邸が、こんな様であればせっかくの記憶も反復学習することができなくなる。
しかし、ルイには反復して展開させる必要はなかった。彼はいつも、数回聞いただけの物事についてすべて記憶することができたのだから。それを応用させる場所がないことが、彼の唯一の悩みであった。
それも教育がかりのミシェルが聞けば透く様解決しただろうが、彼は冷笑して、きっと、「自分で解決できる問題だろう？」と言ってルイの動向を観察するに決まっていた。

ルイは溜め息をついた。
ヒカルの前で出す落胆の溜息は、大小含め、これで272回目だ。
疑似完全数のこの数は、どこまで更新したら良いのだろうか。
大広間の一画に呼び出されて、ルイは不機嫌極まりない声を出した。
写真を撮ろう、と言ったヒカルに背を向けて、別棟に籠もってしまうことは感嘆であったが、その後の、アルディ家当主の叱責と懲罰の方に憂えて居た。なぜ、彼は、ヒカルのことになると夢中になって我を忘れて理知的であることを放棄してしまうのだろうか。
自分のこどもより年下の幼女の言葉に、どうして彼が耳を傾けるのか、その理由について、知りたいとも思わなかった。知りたくなくても耳に入ってきたから。
彼は、ヒカルの母であるマリナ・クロスを、運命の人と定めて、彼女が結婚した後も、己のファム・ファタルと言って憚らなかった。自分のものにならなくても、存在そのものが彼の魂の一部なのだと言い切ったシャルルは、あの不幸な飛行機事故の後・・・戻って来ない彼の運命の女と、彼の親友の遺した娘を引き取って育てている。ある意味強引なやり方でもって。
そして、洗脳とまでは言わないが、シャルルだけを見つめるように育てた、永遠の晄という名前の娘は、傲慢にも愚かにも、ルイに自分の常識を押しつける。
それが厭で、彼はこの邸にほとんど滞在しないのだということに、今でも気が付かない。

将来のアルディ家当主となるために、世界各地を歩いていると信じて疑わないヒカルの前で、どんな表情を浮かべれば良いと言うのだろうか。ルイは苦笑した。
■02

彼女の敬愛するアルディ家当主を、最悪の方法で追い出したとしたら、彼女は一体どういう行動を取るのだろう。ルイ・ドゥ・アルディは見事な金の髪を掻き上げた。
彼の容貌は実父に酷似しているが、青灰色の瞳は同じ色をしているのに、髪の色だけは黄金色であった。
そこだけが彼と違うと言われるとルイ・ドゥ・アルディは静かに憤慨する。
ルイは選ばれて生まれて来たデザイナーズベビーであるから、シャルルよりもはるかに何もかもが勝っているはずなのだ。それを証明し続ける。彼の記録を次々に塗り替える。
代々のアルディ家当主の中で、系図原簿への書き込みが最も多いのは、ルイ・ドゥ・アルディなのだということを、シャルルの目の前に突き出してやるのだ。

「こどもの定義が曖昧だよ、ヒカル」
彼はそう言って彼女の笑顔を消去しようとした。
愛想を振りまくつもりでいるのかもしれないが、彼女の屈託のない笑顔をみると、無性に苛立った。
どう考えても、自分を安売りしているとしか思えない。
廉価であることにすべての価値が存在するとは思えないが。
「オレはもうこどもじゃない」
「こどもだよ」
ヒカルがそう言ってルイを見上げた。
茶色のくせの強い髪が揺れる。彼女の顔立ちは、シャルルの定めたファム・ファタルによく似ていた。大きな瞳も、茶色の髪も。
そしてくるくると表情を変える目元も頬も、唇も。
あと少ししたら、シャルルは彼女を傍に置くことによってもっと狂っていくのかもしれない。
それも一興だ。
どんどん、自分の愛した女に近付いて行く娘を手放すことが出来ずに、自分を崩壊させていくシャルルは、どの段階で崩壊するのだろうか。どうして彼はそういう者しか愛せないのだろうか。
これをシャルルの眼のまで言った時、彼は激しく殴打された。それほどまでに激昂するのであれば、ルイとヒカルを同じアルディ邸に住まわせてはいけないのだ。
・・・・愚かな男だな。
彼は自分の父のことを心の中でそう言って嘲笑した。
「シャルルのこども。ルイはシャルルのこどもだもの。だから、一緒に記念撮影しよう」
「オレは写真は嫌いなんだよ」
彼がそう言って横を向いた。
成長の記録などは、専任の者が居るのだから。
自分で好んで被写体になることは滅多なことが内限りなかった。
彼の姿を捉えたいのであれば、それこそ、シャルルの幼少期の画像を使用すれば良いことなのだから。
もっと優雅に彼女の誘いを断る術もあったが、そんな気遣いをしても、将来役立ちそうにもなかったので、利益にならないことはしないようにした。
既に幾つもの国を訪れた。
彼はアルディ家当主の唯一の息子として認知されている。布石は打った。

「チェスの試合が近いから」
彼はそう言ってその場を離れようとした。
彼はフェンシングと乗馬でも非常に優れた才を発揮していたが、チェスの名手でもあった。
これもシャルルの再来だと言われている才能であるが、彼は一度もシャルルと対戦したことがない。
それが実現するのであれば負けない自信があった。
滅多に訪れない本邸の居間に近い、サンルームで、彼を探していたヒカルに遭遇してしまったことから始まった。
彼は今日は最悪の日だと何度も思った。
取り寄せていたチェスピースが届いたと知らせを受けて、それを受け取りに来たのだ。
発注から到着までだいぶ時間を要したので、彼はこの時、自ら受け取りに行くといって、本邸に足を向けたことを悔いた。彼は決して後悔しないのに。
「ルイ！」
ヒカルが彼の腕に触れようとしたので、彼は腕を反射的に持ち上げた。拒絶されて、はじめて、ヒカルはルイが相当に憤慨していることを知り、その激昂を目の当たりにする。
青灰色の冴えた瞳が一瞬だけ険しくなった。彼女は本当に愚鈍で、自分がいつも愛翫される対象であると思っている。無条件で愛する者のことを愛翫動物というのだ、と何度か教えてやったのに、彼女のその都度、恥ずかしそうに照れたように笑う。
そこは綻ぶところではないだろう、とルイは指摘してやりたくなるが、そんな会話を往復させることすら鬱屈する行為であった。

「居間で、撮影の準備をしてあるの。あとはルイが来るだけだから、大広間に来て欲しい」
彼女がルイを見上げた。大きな瞳が懸命にルイに訴えていたが、それでも彼は冷笑するだけだった。
「この家の当主は親日家だけれども、オレはあいにくと同じ悪趣味を持つ予定はない」
そう言って、また続ける。彼女が反論できないように徹底的に攻撃しなければ彼女は口を噤まない。
「この家には、幼体の生命体が２体あるということだけだ。
オレとヒカル。
それが、何？
だから、それを祝って何をしたいのか目的をはっきりさせてほしいものだ。
ただ祝うだけというのは、最も愚かしい人間の無駄な行為であり儀式であると思うけれどもね」

そこまで言って彼はヒカルを見つめる。
もう、言うべきことはすべて言った。
彼女は唇を震わせて、眉を僅かに顰め、表情を曇らせた。計算通りだった。
これで彼女はもう、ルイに近付かなければ良いのにと思った。

ルイは、この家にはほとんど寄りつかなかった。
彼には、本邸の敷地の中に別棟があてがわれており、本邸の施設を使用したり特別な行事があったりするとき以外にはここで時間を過ごすことはない。
時折、薔薇園で彼女の姿を見かけることもあるが、その時にはルイに決して話しかけてはいけないのだと、ヒカル・クロスはそれだけは理解しているらしく、彼に話しかけたりすることはなかった。
彼女は自分を愛さない者に敏感であった。
同時に自分を無条件に愛でるシャルルだけにしか耳を貸さない。いつか、それで身を滅ぼすことになった時に悔いれば良いのだと思った。
■03

「せっかくルイが戻ってきたのだから。だから」
「ヒカル。話は終わりだ」
彼はそう言って会話を切断した。
ヒカルが、また、困ったように顔を曇らせた。
そこで察しがついた。
彼女はルイを必ず連れてくると安請け合いしたのだ。
約束は違ってはいけないと教えられている彼女はそれを遂行しようとしているらしかった。
頻繁にその誓いを放棄するアルディ家の当主は、ヒカルを自分の思い通りに育てようとしている。
彼女は愛翫動物だから仕方のないことなのかもしれないが、度を過ぎると、クロス・グループとまた一波乱ありそうな要因になりかねなかった。

ヒカル・クロスは会長の孫娘あり、亡き息子の忘れ形見でもある。
彼女の父のカズヤ・クロスは、シャルルの親友であった男であり、ファム・ファタルの配偶者であり、そして、あの墜落事故で戻って来ない亡者であった。
できるだけ日本に居たころの環境と同じようにして、それらの風習を忘れないようにという配慮をしたつもりなのだろうが、それはヒカルに両親の不在を思い知らせる残酷な儀式でしかないと、シャルルは気が付かないのだろうか。
彼は溜息を漏らす。またひとつ累積回数が増えた。
「ヒカル。オレがいない日の方が、ここに滞在している日より多いことは知っているだろう。
だから、配慮したいのであれば、オレに纏わり付くな」
「ルイ」
彼の名前を呼びながら、彼女は躊躇いがちに言った。これほどまでに強情な娘に育てたシャルルの意図が不明だった。彼女をとことん甘やかすと宣言したらしいが、それは確実に実行されているようだと思った。
ヒカルがルイの青灰色の瞳を見つめる。彼女は彼の天使のような美しさに少し息を呑んだが、すぐに真剣な口調で言った。
「あのね、単に・・・思い付きじゃないの。写真を撮ろうというのは、前から考えていたの」
「オレの帰邸を待って、疑似家族写真を撮ろうとでも？」
酷評する。
この家には、家族写真はなかった。
一度も、皆で揃って写真を撮ることはしなかった。
意味のない映像は一枚もなかった。
シャルルとヒカルの間にはたくさんの記憶がある。
当主は様々な場所にヒカルを連れ歩き、彼女の感性を育て、そして憧憬にも似た感情を受け付けている。

しかしルイにはそれはなかった。
彼は一度も・・・シャルルと並んで意味のない写真を撮らない。
必要があれば撮影に応じた。
それは意味があってのことであった。
彼が留学中に、アルディ家当主との不仲を払拭するために、必要があって諸外国で「愛されている息子」を演じるために提示する小道具のひとつでしかない。
シャルルもそれはよくわかっているようだった。
彼は必要以上にルイに近付かない。

「ルイの家族はルイだけのものだよ」
彼女はぽつりと言った。
「シャルルは今日は急用ができて、出掛けていった。
夜まで戻らない。だから、ルイと二人の写真が撮りたいの」
「必要がない」
彼がそう言ったが、ヒカルは諦めなかった。
瞳を大きく見開いて、躊躇いもなく茶色の輝きをルイに注ぐ。
星辰の子と呼ばれるルイの瞳を戸惑いもせず覗き込む不遜な行為をするのは、彼女だけだった。

彼は星辰の子と呼ばれるようになり、あらゆる者を惹きつける人物だという意味を持つその称号についていささか不満を持っていた。
フランスの華と呼ばれている父の偉大なる称号を覆す程度に至らないと考えていた。
彼はフランスに咲く唯一の薔薇であるが、星辰はどこにでも存在する。
そしてフランスの上だけに存在するわけではなかった。

「家族になって欲しい人の写真を持っていたいの」
彼は彼女がルイの気が変わるまで、諦めるつもりはなかったらしい。
彼の気が変わるというのはあり得ないことなのに。
「夏になると・・・日本行く。その時に、ルイとシャルルの写真を持っていきたいの」
彼女がそう言って微笑んだ。はにかんで微笑む。
ルイはそのしばらくじっと見つめていた。
が、やがて小さく舌打ちをして、横を向いてヒカルの視線殻はずれた。
そして、むっつりとした声で不機嫌そうに言う。
彼が自分の言葉を覆すことはほとんどない。
それなのに、ルイは、尖った顎を引いて、ヒカルの求めに応じた。
「良かろう」
「ルイ！」
彼女が飛び上がって手を叩いた。嬉しい、と言った。
「はやく！はやく居間に行こう！もう準備ができているの」
ヒカルが甲高い声でそう言ったので、ルイは顔をあからさまに厭そうに顰めた。
袖を引くヒカルの小さな手が煩わしかった。

しかし、今度は振り払わなかった。
どうしてだろう。
彼女の笑顔は見慣れていた。
でもそれはいつも泣き出しそうな顔を隠すための綻びでしかなかった。
こんな風に・・・満面の笑みを、ルイに向けることがなかったから。
それはシャルルだけに向けられた笑顔であった。彼は知っている。ふたりを遠くでいつも見つめていたから。そして薔薇園に独り座り、思考に耽る時には、それを思い出すこともあった。
ただ、そうなりたいとは思わなかったが、理由もなく、ふと、映像が蘇った。
恥ずかしそうに照れたように・・・決して涙を浮かべないかわりに微笑むヒカルを疎ましいと思っていた。
ヒカルはシャルルの愛を欲しいままに受け止めている。
全身に浴びて、フランスの華を独り占めしている。
ルイが愛されている息子という役割を、方々で演じている時に、彼女は演じたりねだったりしなくても、シャルルから愛でられている。
きっと、彼女に請われればシャルルはこの屋敷中に、肖像写真を飾り付けることだろう。
■04

彼女の懸命な視線が痛かったわけではないし、心が動かされたわけではない。

・・・これは使えると思ったからだ。

彼女は、夏の休暇には日本で滞在する。
短い時間ではあるが、その間、親族とは言え、慣れない者たちに囲まれて過ごす不安を写真でもって払拭させるつもりなのだ。愚かしい稚拙なヒカルの考えそうなことだった。
特に、最近はクロス・グループの会長が病気により進退について考え始めているという情報を得ていた。
異国で暮らす孫娘を手元に置くべきだったのに、と言い出すはずだった。
そしてシャルルの行為を詰る様を、ヒカルが弁護するのだろう。

倖せに暮らしていると。
そう言うのだろう。

アルディ家とクロス家は大変に懇意にしていることもあったので、本人が強く希望していることもあり、これまではヒカルの処遇について曖昧にされてきていたが、祖父が逝去した後のヒカルの待遇については、いずれ問題になるのだろうと予想された。
これはやがて訪れる近い未来だ。

そんなとき。
彼女は・・・ヒカルは、ルイと二人で映っている写真を、クロス・グループの、ヒカルの親族に見せるのだろう。
日本と同じ環境で過ごしているし、アルディ家にはシャルルの息子が居る。
だから、心配はない、と言うのだろう。

それなら。いつか、使える。
彼はそう計算したのだ。

いつか・・・シャルルが死にたいと慟哭するほどの事態を発生させるために、ルイは準備を始めることにした。無償の愛などは存在しないのに、彼女は幻想を抱いている。
家族という名前の幻想だ。
シャルルでさえ自分の理由があるからヒカルを愛でる。
そしてヒカルも自分の理由があってここに集って居るだけでしかないと、思い知らせる。

クロス家との亀裂が、シャルルにとって命取りになるだろう。
また、そうでなくても、使える手駒であった。
彼は、チェスピースの筐を丸テーブルの上に置いた。
わざわざ本邸にまで脚を運んでまで取りに来た特注品であった。
形を覚え手に馴染ませて脳内で何度もシミュレーションするための時間を確保してあったのに。
彼はそれを後回しにした。

ヒカルをこの家に迎える時が来るのかもしれない。ルイ・ドゥ・アルディか、シャルルがヒカルを娶れば、アルディ家を中心として、この世を変える大きな流れがひとつできあがる。
シャルルはそれも予想しているのだろうか。
幼い時から自分の環境に合わせて、薔薇を温室で育てるようにヒカルを育てるシャルルは、その先については何かを予測しているのだろうと思ったが、彼が幾通りの未来を想定しているのか推し量るには情報が足りなかった。
その時には、ルイとヒカルは幼い時から一緒に育ち、互いに家族以上の存在だという台詞が用意される。
暗唱しながら演じ、そして・・・ヒカルでさえシャルルを選ばなかったとシャルルを打ちのめす瞬間のために、彼はほんの少しばかり今日の予定を変更することにしたのだ。

「ルイ！はやく、はやく」
何度も繰り返すヒカルの声に押し黙ったまま、ルイは彼女に引かれるままに居間に移動させられる。
辟易しながらも、子犬のように全身で喜びを表現しているヒカルが彼の袖を引く手を、振り解くことができなかった。
なぜなのだろう。
これも彼の意識しない計算なのだろうか。
チェスの手のように、何手も先を読むようにと教えられているのに。
彼女はまったく行動が読めない。だから苛つく。

ルイは気が進まない顔を隠そうともせず、居間の扉を潜った。
そこにはヒカルが毎朝選定する最高の状態の薔薇はなかった。当たり前か、と彼は嗤った。
彼女が主以外にはルイも入ることを禁じられている薔薇の温室の最奥から、最高の状態の薔薇を持ち運ぶのは、シャルル・ドゥ・アルディとルイ・ドゥ・アルディにだけなのだから。彼はそれを受け取ることはなかったが。それでも彼女は毎日彼の別棟にも薔薇を届け続ける。
それがなかったので、安堵にも似た感触を胸に味わった。彼女が捧げるべき場所がそれほど多くないことを確認したからだろうか。それでは説明にならない。

ああ、今日は本当に最悪の日だ、と思った。

居間には、端午の節句の準備が整えられていたからだ。
日本の儀式に則って、緑色をした菓子がテーブルの上に乗り、粽の香りが広い居間に充満していた。
小さな兜まで用意されていた。
それは先般、アルディ家がオークションで競り落とした人間国宝の作品であった。
彼は美術品蒐集にも携わっているから、直近の入手リストはすべて頭に入っていた。
・・・・たったこれだけの事のために。
彼は絶句した。
ヒカルを軽く睨む。彼女は蔑視に気が付かず、ひたすらにこにこと爛漫に微笑んで居た。
これはどうやって食べるのだろう、と卓上の食べ物を珍しそうに眺めては感嘆の声を上げている。
だが、彼女は、ひとつひとつについて、彼女は本来の意味と用途を知らないらしい。
シャルルらしいな、と苦笑した。
彼女に品物だけ与えて、手ずからひとつひとつ教え込もうとしたところに、急用で中途にしてしまったのだ。
アルディ邸をこどもの趣の漂う場所にするとは何て愚かなのだろう、とルイは内心呆れていた。

「これ、タペストリー？」

彼女は椅子の背に掛けられたままの魚の形をした流線の起伏の乏しい布に走り寄り、それをつまみ上げた。
怪訝な顔をしてしきりに首を傾げている。
そしてルイ・ドゥ・アルディの方に顔を向けると、両手に持った布をルイの目の前に差し出した。
豪奢で鮮やかな色合いに染められた鯉幟であった。
吹き流しのために、筒状になっている。
「調べておけよ、そんな事くらい」
「ルイなら何でも知っているから」
彼女は浮かれていた。
ルイが居間に入り、彼女の準備した趣向に従ってくれると思ったらしい。
まったく暢気な娘だなとルイは唇の端を歪めた。
彼女ひとりのために、この邸のすべてが動く。
まるで小さな当主然としたヒカルの様子を青灰色の瞳の少年はじっと見つめていた。

「それは中国の正史からの故事から立身出世の象徴だ。龍門という滝を昇る鯉が竜に変じたことから・・・・」
そこで彼は口を噤んだ。ヒカルが嬉しそうに微笑んだからである。
ぎゅっと唇を噛んだ。

彼女は知らなかったのではない。
知らないふりをして、ルイにそれを言わせようとしたのだ。

自分が決してアルディ家のこどもになれないことを知っているヒカルは、常々家族に対して強烈な上を感じている。
この幟は家族の人数分だけ飾る習慣もあるくらいで、家族の象徴であり願いを表したものであるとされていた。・・・ここには、3枚の布があった。
鯉が変じて竜になる。彼女は、この家のこどもになりたいという願いを込めているらしかった。
そして、家族の象徴であるこれらを、ルイのために用意したと言った。

ヒカルは笑った。得意気ではなかった。
ただ、ただ嬉しそうに微笑んだ。
茶色の瞳の茶色の髪の少女は、ルイの人形のように整った顔を見て、言った。
青灰色の瞳に憶することなく覗き込む者の名前は・・・・永遠の晄という名を持つ。

「こどもの日はね、端午の節句と言って、男の子の成長を願うのよ！」

・・・・これが言いたかったらしい。
この家に、男児はたったひとりしかいない。
■05

不仲であると噂されるシャルルとルイの間を何とか取り持とうとして、ヒカルが懸命に考えた策であるらしかった。

「余計なことを」
彼はそう言って横を向いた。
しかし、写真を撮ろうというヒカルの申し出に承諾してしまった以上はそれを覆せなかった。
・・・先ほど、彼は自分の予定を変更したというのに。
二度の変更はあり得ない。
彼はルイ・ドゥ・アルディなのだから。
だから、このまま不愉快だということを宣言して、背を向けて別棟に籠もるか、ミシェルを呼んで彼のセーフハウスでしばし過ごすなどという考えを切除しなければならなかった。
彼は何手も先を読めるが、彼の優れているところは、変更した現状に即してさらにその先を読めることであった。

「ね、ルイ。これを持って、写真を撮ろう。記念撮影だよ」
はしゃぐヒカルがルイに二番目に大きな鯉幟を持ってきた。ルイを表すものだという認識らしい。家族の中で二番である。
一番ではない。
それがルイなのだと思わせる残酷な行為を、ヒカルは無邪気にルイに向ける。
それでも彼女の躰はまだ幼いので、すべてを抱えきれずにそのほとんどが床に垂れ落ちてしまっている。
彼は顔を顰めた。
「汚れたものを持つつもりはない」
彼女は足元に溜まりになった布を見て悲鳴をあげた。大急ぎで腕を動かしたくし上げるが、今度はルイに「皺になったものを持つつもりもない」と言われてしまい、また頬を朱くしてごめんなさいと言った。
「小さなものを持てば良いだろう。それなら、ヒカルが持てる大きさだ」
彼はまた幾度眼かの溜息をついて、ヒカルの脇に立ち、それらを手で掴むと、無造作に引き揚げた。
ヒカルは手を離さなかったので、そのまま腕ごとルイの方に引き寄せられたので、小さな彼女は慌てて床上に力を込めて身体を踏み支えた。ぐっとルイとヒカルは近くなった。
目の前に・・・茶色の瞳がすぐ近くにあって、ルイは沈黙した。
彼女は眼を輝かせて、憶することなくルイの金髪の下から覗く青灰色の瞳を見つめる。
「ルイはね、一番大きい鯉にも、一番小さい鯉にも・・・どちらにも近い場所なんだよ！」
彼女はそう言って、両手一杯に溢れた布をルイに向かって差し出した。
「だからこれが良いの」

彼女は微笑んだ。
「これを持って、写真を撮ろう。それで、飾るの。大きくなっても、一緒に見るの。寂しくなった時に、見ると元気になる写真を撮るの！」
それから彼女はそこで初めて微笑みを消して、小さくぽつりと言った。
「おとうさんとおかあさんは・・・・もう、写真の中だけでしか逢えないから」
彼女が写真を欲しがる理由がわかった。

「ヒカル」
ルイは静かに言った。素っ気なく、抑揚もなく。
彼女の茶色の瞳を覗き込む。
「画像は本来の人物を写さない。

それは転写だからそのものではない。
だから、記録しろ。忘れても良いから、記憶に刻め。媒体は劣化する」
「記憶は劣化しないの？」
「しない。少なくともオレは」
「・・・シャルルと同じようなことを言う。やっぱり、親子だね」
ヒカルはそう言って笑った。泣きそうな笑顔だった。
「忘れられないのはアルディ家の者の特徴だ」
ルイはそう言って横を向いた。

「それじゃ、写真。撮ろう」
ヒカルがルイの持っている鯉幟の反対側の裾を持った。
「これ、向きはあるの？」
彼女はそんなことを言ったものだから、彼は彼女を笑ったが、それは苦笑ではなかった。
声を出して笑ってしまったので、またヒカルを喜ばせる結果になってしまった。
シャルルが戻って来なくてこの場に居なくて良かった、と思った。
どういうわけか、そう思ったのに、いつになったら帰ってくるのだろうかと思った。
それにも理由がなかったが、ヒカルが彼を呼ぶ声に消されて、彼はその件については思考することを放棄した。今度も、彼女の手を振り払うことができなかった。

それが彼女と撮った、最初の写真になった。
次に撮るときは、婚約式でのマスコミ向けの写真であるはずだったのに。
また、ルイ・ドゥ・アルディは予定を変更せざるを得なくなった。
■06

【Louis】
「こんなに色褪せるなんて、褪色加工ぐらいしておけよ」
ルイ・ドゥ・アルディは誰も居ない部屋でひとりそう呟いた。彼は独り言を言わない。
必要がないからだ。
それなのに、まだ戻って来ないこの部屋の住人に向かって、そう囁いた。
煙草を口に銜える。しかし、この家には灰皿がなかった。彼女は喫煙しないらしい。
そして喫煙するような可能性のある者を家に入れるということもしていないようだった。
ここは日本だ。
アルディ邸でのヒカルの衣装部屋よりもっと狭い面積しかないマンションに彼は居た。
身辺調査はかなりの頻度で行っていたので、ヒカルが日本で誰もこの部屋に上げていないことは知っていた。
けれども、掃除の行き届いた部屋を見たとき。
彼女はここで自分の空間を作っているのだと思うと、日本式の玄関で、土足で上がることにした。
そうして汚すことで忘れたようにパリでの暮らしを切り捨てて生活しているヒカルに思い知らせてやろうという気持ちが働いたからだ。
そんな作用はまったく意味のないことであるのに。

ルイは金の髪を持ち上げた。
物憂げな青灰色の瞳はそのままの色だったが、あの頃より眼光が鋭くなった。
それは彼が成長して、少年から青年になったからだった。
ヒカルの居住しているマンションの鍵はセキュリティが厳重であると言われていたが、ルイの前では玩具のようであるということを証明してみせた。
彼は冷笑した。
アルディ邸のセキュリティ保守や、IDチップシールでの管理や、彼女の知らないその他の様々なことを秘匿するに使われた装置などとは縁のない生活を、彼女は送っているらしかった。
彼は顔を上げて、上を見た。
低い天井に、狭い部屋。
簡素ではあるが、ヒカルだけが使用する什器。

・・・そして、ルイは小さな居間の壁際に設置されたローチェストの前に立つと、綺麗に飾られた、縁のないクリスタルのフォットフレームを見つめていた。
飾り気のないフレームであった。
僅かに、四隅には薔薇のエッチングは施されていたが、それも注視しないと気がつかない程度の大きさしか入っていない。
中には、ルイとヒカルの写真が入っていた。
経年と日射によって褪色してセピア色になった写真があった。
セピアの世界の中に・・・そこに、少し怒ったようにこちらを睨むルイと、笑顔のヒカルがそこに居た。
ふたりとも幼かった。
眼が大きく、手指の比率が大人のそれと違う。

・・・オレはこどもじゃない

ヒカルに傲然としてそう言い放った。
そして、ルイはシャルルのこどもだよ、だからこどもなんだよとヒカルに言われた時のことを思い出した。

・・・あの時の写真だった。

彼はそれを撮った日の事を思い出した。
こどもだな、完全に。
彼は自分の遠い日の姿に再会し、苦い笑いを浮かべる。

家族になろう
何度となく彼女が繰り返す言葉について、ルイは沈黙という思考の波を泳ぐ。
結論はまだ出ていない。

そしてそのフレームに映り込む、ひとりの男の姿を見つめる。
成人したルイ・ドゥ・アルディの姿だった。

彼が誕生した頃のシャルル・ドゥ・アルディの姿をしていた。
フランスの華と違うのは、彼が見事な金の髪をしていることであることだけだった。
それから彼に殴打された高い鼻梁は髪の毛一筋ほど少しばかり歪んでいる。
完璧主義のルイには堪え難い屈辱であったが、形成するつもりはなかった。
シャルルも同じように・・・身体に受けた傷をそのままに遺している。
これはアルディ家の者だからこその傾向なのだろうか。
過去を身体に刻む。
「忘れても良いから、刻め」
そんなことをヒカルに言ったが、彼女はそれがシャルルと似ていると言った。
それなら、彼女はそれを覚えているだろうか。魂に刻んでいるのだろうか。

彼は瞼を閉じた。
長かった。
長い時間を待った。
そして今日に至る。
彼女の姿は写真で確認していた。
遠距離で撮影したものであったので、彼女はこちらを向いている視線ではなかったが、それでも・・・あの人に良く似ていた。
シャルルが運命の人と呼んだ、あの人に。
それでも少し違っていた。
これも、写真が残っているから比較することができたのだ。
彼女はあの人が彼女を生み出した年齢にもうすぐ到達する。
そしてすぐに越えるだろう。
その時。
ルイの傍らで微笑むヒカルを見て、シャルルは一体どう思うのだろうか。
いや、当主の苦しみを想像することは幾度となく行ってきたことであったので、彼はそれについてはその先を考えることをやめていた。
何度考えても、同じ結論にしか至らないからだ。

ヒカル。
彼はもう一度呟いた。
彼の婚約者の名前を口に出した。

これは単に「ＧＲＡＰＨＯ」でしかない。図や絵柄を表す語だ。
単なる風景と同じだ。
だが、それらに・・・・ギリシャ語の「ＰＨＯＳ」から生じた「ＰＨＯＴＯＳ」が語源となってそれは写真（photographie）となる。
「ＰＨＯＳ」は光という意味だ。
永遠の晄が、これに注がれることで、刻まれた記憶になるのだ。

間もなく、彼女が戻ってくる時間だった。
成年令に到達した彼女は、戸惑うだろう。
彼の姿を見て・・・成人したルイ・ドゥ・アルディの姿を見て、シャルルのことを思い出すだろう。
次に金の髪を見て、シャルルが迎えに来たのではなく、ルイがやって来たことを知り、落胆するのかもしれない。それでも良かった。
彼女が誰を想っていても関係ない。
ヒカルの婚約者は、ルイ・ドゥ・アルディだけであり、それを容認したのはシャルルなのだから。

今度、ともに並んで撮影するときには・・・婚約式の写真だけだと決めていた。
家族としての写真ではない。彼と彼女は婚姻するのだ。
ああ、それも家族というカテゴリなのかな。ルイ・ドゥ・アルディは苦笑した。

「元気が出るように。そして寂しいときに眺めるように。だから、写真にして残そう」
彼女はそう言っていた。
もう、二度と、写真を飾らせはしない。

遠くで足音が聞こえた。彼はそれを聞き分けて・・・そして微笑んだ。
扉の前で立ち止まり、そして戸惑ったようにしばし沈黙が訪れた。
開錠されていることに対して酷く驚愕しているようだった。

息を詰めて、彼は待った。
写真でしか逢えなかったから。
けれども、彼はどこにも行かない。だから、ヒカルが遺したがる写真は持たせない。
かちり、とドアノブから音が漏れて、ふと、風が吹いた。

ルイは、あの日の・・・・あの時と同じ風の香りを感じた。
待ち侘びた永遠の晄のもたらす風が、星辰の子に注がれた。
天体を統べるという名前の星辰の子という称号が気に入らなかった。
しかし、それも悪くないと思っていた。
彼に光も・・・・そう、永遠の晄も寄せられるのであれば、それは悪くないと思った。■07

【Hikaru】
ヒカル・クロスは、手を止めて、見覚えのあるそれをしばらくの間、眺めていた。
ここはルイ・ドゥ・アルディのセーフハウスのひとつだった。
しばらくの間、彼女はここに滞在することになり、そして部屋の清掃くらいはしておこうと思い立って、広すぎる室内のどこから手をつけようか途方に暮れていた時に、それが目にとまったので近寄ってみた。
ここは彼の部屋だった。
まさしく、彼の空間だった。
アルディ邸の別棟で感じる虚無に近い殺風景なほどに何もない空間と違い、本は整然と壁に並び、床にも本が積まれていた。

様々な分野のそれらを見て、彼が博識なのは、自然と身についたものではなく、弛まぬ努力のためなのだと知る。

それは、ルイ・ドゥ・アルディの目線の場所にあった。
数多並ぶ本棚の一画だけ、空間があったので、ヒカルはそこに近寄った。
それで初めて気が付いた。

・・・・そこには、ヒカルとルイが居た。

幼い時に撮影した、唯一の写真。
ふたりだけの写真。
それと同じものを、彼女は持っていた。しかし、彼女の持ち物ではない。
経年によって褪色し、セピア色になったヒカルの写真と違う。
それは完璧な、変化防止の加工が施されており、ラミネートまで付してあった。
ただ、フォトクリップに挟んであるだけの・・・素っ気ない飾り方だった。
それなのに、彼は、それを完全な形で留めていた。
あの時の色鮮やかな布の質感までが鮮明に残っている。

茶色の瞳が大きく見開かれた。

「刻め。記憶に刻め」
彼がそう言った言葉を思い出した。

あの時は、まだこどもだった。
だからその意味がわからなかった。
彼女はその写真に手を伸ばそうとして・・・そして幾度も躊躇って後に、腕を下ろした。
それに触れてはいけないような気になったからだ。
彼はあまり物事に執着しない。
彼はそうやって育ったからであるが、自分にそう言い聞かせている様子であった。
けれども。
こうして・・・・ここに・・・彼にも、ルイ・ドゥ・アルディだけの空間があった。
膨大な量の書籍や、最新型のパソコンやオーディオセット、車が好きだがエンジンが好きだということや・・・時折ティーではなくコーヒーを飲むことや・・・・嫌いだと言っていた写真を置いていること・・・彼は虚無の中で生きているわけではなかったのだ。

彼女は溜息を漏らした。
彼がよくそうしていたように。

大人になって、知った。

・・・人は、苦しいときに溜息を漏らすのだ。

どうして、長い間、逢わずにいられたのだろう。
懐かしい人に会いたいと思う時は写真を見れば良いと思っていた。
だから、シャルルとルイの写真は片付けることができなかった。

パリに居れば、日本に住まう、恋しいと思った人達の写真を飾った。
日本に居れば、パリの薔薇の屋敷に住む彼らは元気だろうかと写真を眺めて涙した。

けれども。
それは色褪せるから。だから、記憶しろ、とルイ・ドゥ・アルディは言った。
その意味を・・・理解した。
彼はすべてを映像として記録することができるが、それでもこうして写真を遺していたことについて、ヒカルは息が苦しくなるほど胸が痛くなった。

彼女が見つめた過去の想い出より、鮮明な映像を彼は保持し続けて・・・自分の目線に置いていた。
ヒカルは唇を噛んだ。自分が何も知らなかったことを知って、苦しくなる。でも、ここで溜息は呑み込んだ。自分のために吐息は出さない。
自分を憐れんではいけない。
考えろ・・・・ルイ・ドゥ・アルディの声が聞こえてくるようだった。

彼は、今、ここには居ない。

この家に居ないということではなく、この世には居ない。
ルイ・ドゥ・アルディという人格は深く深く・・・ルイ・ドゥ・アルディという器の中に沈んでしまっていた。
彼であって彼でなくなってしまった。

あの不幸な爆発事故によって、彼は生死を彷徨った後、魂だけを遺して戻って来た。

記憶に刻め、と言ったのに。
それなのに、彼は彼女の事を忘れてしまった。
消去してしまった。
ヒカルを認識しているが、それはルイとしてではなかった。
ルイは・・・ふたりだけの密やかな記憶も、何もかもを捨てた。

星辰の子と呼ばれているのに。類い希なる才能を持った人物であるのに。
・・・・ヒカルがなりたくてなれなかったアルディ家のこどもであり、そして、中央に位置するこどもなのに。

「・・・また、こどもの日には、いろいろ準備しないといけないわね」
彼女はそう言って小さく笑った。
涙が出そうになるから、だから、微笑んだ。
いつもそうやって笑うんだな、と彼は彼女に言ったが、それしか知らなかったからそうするしかなかったのだ。

今度は大きく息を吸う。
ヒカルのことを、彼は助けた。
幾度も。幾度も。
何も知らない暗闇の世界から、彼女の本当の姿を照らし出してくれた。
・・・彼は彼女の家族だ。
ルイがそう思っていなくても、かけがえなのない大事な人であることにはかわりがない。

彼女は彼の悲鳴も吐息もすべて聞き流してしまっていた。
だから自分は贖罪の娘だと言われるのだ。

眼を瞑る。こうして眼を瞑れば、あの時の声や自分の昂揚感が蘇る。
いつも冷たかったルイが、あの時は優しかった。
そうだろうか。
彼はいつも優しかった。
素っ気ないけれども、いつもヒカルの傍にいて、彼女を見ていた。

ルイ・・・・ルイ・ドゥ・アルディ。

ヒカルは唇を引いた。
今度は、彼女が彼を助ける番だ。
順番などではない。
そんなことは関係なく・・・彼女は彼に戻って来て欲しいと心から願っていた。

ルイ・ドゥ・アルディ。
貴方の・・・・刻んだ記憶と一緒に、ルイを呼び戻すから。必ず。

ヒカル・クロスはそう言い聞かせた。それから、写真の中で微笑む父と母を思い起こした。
写真はね・・・・・光がないと撮影できないよの・・・・
母は絵を描く職業にあった。そして・・・光の中で微笑むルイの幼い姿を描いた。
あの絵の意味するところも、この写真をルイが保存してあった理由も、きっと同じだろうと思った。

光がなければ、単なる絵や図でしかない。

ルイならそう言って皮肉っぽく笑うのだろう。彼の冷たくて素っ気ない横顔や、青灰色の瞳や・・・・溜息さえ、懐かしかった。

逢いたいと思う人に会いたいときには、写真を見れば良い。
自分はそう言ったけれども。
彼女の瞳から、ひとしずく、涙が落ちた。光を反射して、輝き、そして頬を伝わってそれは静かに落ちる。

「ルイ」
彼女はその写真を見て微笑んだ。ラミネート加工されたそれに、照明の光が反射して、彼女の姿が薄く淡く映っていた。
・・・大人になったヒカル・クロスがそこに居た。
彼女は母親に似ている。
自分を出産した頃の顔立ちと自分の顔は良く似ていると思った。
けれども写真を比べると僅かに違うことがわかった。
ヒカルはヒカル・クロスであり、マリナではない。
・・・ルイもそうだ。
シャルルと非常に良く似ているが、彼はルイであり、シャルルではない。

媒体を通して見るものは、所詮がその程度の確認情報でしかない。
彼ならきっとこう言うだろう。

その声が、聞きたかった。

彼女は結局、その写真に指を伸ばすことはできなかった。
それで良いと思う。
これから彼に逢いに行くのだから。

彼女はその場から離れて、薄手の上着を持った。
逢いたいに人に会えるときには・・・・直接逢いに行く。
写真に写るルイを見て、それだけで満足せず、ルイに逢いに行く。
それが、母の・・・マリナがヒカルに教えたことだったから。
彼女も若い頃はよくそうして友を尋ねて歩いたようだ。
今でも、日本ではその話を聞かされる。だから倣うわけではないが。
ヒカルはヒカルのできることをしようと思った。
いや、違う。
彼女が・・・ヒカルが逢いたいのだ。

星辰の子と呼ばれた、孤独で、繊細で、酷く臆病な、彼女の家族に逢いに行く。

忘れも良いから刻め

本来の画像の意味とは、そんな目的から始まったことなのだから。
だから、ヒカルは魂に。記憶に刻む。
彼と彼女の想い出は、消すことができないから。

ルイ。

もう一度、彼女は彼の名前を呼んだ。

そして、自分はこれからどうするべきなのかを考えながら、上着の袖に腕をとおし、そして・・・外にでる準備を始めた。

ルイに逢いに行くために。

またいつか写真を撮るときは・・・今度こそ本当に家族写真にしたいと強く願いながら。

（FIN)

むつのはな　前編

■むつのはな01

その年の冬は記録的な大寒波の影響でとても寒かった。
そしてパリの１６区では珍しく雪が積もった年だった。

乾燥した寒さではなく、湿りを含んだ纏わり付くような冷風が始終吹き荒れており、それはアルディ家の当主がこよなく愛するあの東の国の気候に良く似ていた。

ルイ・ドゥ・アルディは久しぶりに訪れたアルディ家の別棟に続く渡り廊下を抜けると、立ち止まって、表情を変えることもなくアルディ家の本邸を見上げた。

・・・最後にこうして見回した時より、少し見え方が違っていた。

彼は背が伸びた。
季節が変わった。

・・・だからだろうか。

冬なのに、この邸では薔薇が咲き乱れている。絶やすことが罪悪であると声高に主張しているかのように。
それが面倒で、彼はこの家にはほとんど戻らなかった。
とうに学業に身を委ねる時期は過ぎていた。
彼の父と同じように、10代の最初の頃にこの国で受けられるべき最高の教育課程を既に済ませてしまっていた。

・・・彼は星辰の子と呼ばれている。
それなのに、吐息は白かった。
・・・人の子なのに。彼は、星辰の子と呼ばれる。

上質の羽毛が詰まったダウンジャケットの下で

この家の薔薇の香りが彼を苛立たせる。
静かに幾年も持ち続けた決意に新たに炎を燻入れる。

彼は腕を少し持ち上げて、コートの袖下の手首に光るウブロのAERO BANG TUNGSTENにちらりと目を遣った。
ラバーブレスレットであるので、それは冷たさをあまり感じさせない。
・・・そもそも彼に体温があるのだろうかと疑問を抱かれることが多かったが。
それほどまでに、彼は怜悧で冷徹で・・・かつてのシャルル・ドゥ・アルディを彷彿とさせると誰からも言われ続けた。

ルイは物憂げな青灰色の瞳で、それを見つめたが単に時間を確認しただけであり、この時間であれば家人は誰もいないだろうという予測を確認する道具でしかなかった。

ルイは半期の短期留学を終えて、幾月かぶりにアルディ邸に戻って来たばかりだった。
相変わらず誰の出迎えもなかったし・・・シャルル・ドゥ・アルディは不在であると告げられながら家に入った。
家という表現さえ使うのが厭わしいこの建物が、彼の現住所であることを認めざるを得ないことが口惜しい。

誰も彼の凍て付いた心を溶かす者はいない。
ルイはそうして欲しいとさえ願わない。

・・・国外での生活は刺激にはなるが憩いにはならない。
だからと言って低きに流れていくつもりはない。
ルイ・ドゥ・アルディの生きる目的はただひとつだった。

この家の頂点に君臨すること。
今、この家に居座っている当主を追い落とすこと。
生きていたくないと思わせるほどの苦悶を味わわせること。
付随する些事はいくつもあったが、それでも根本的要求はひとつだけだった。

薔薇の一族の頂に立つ。

彼はそのためだけに生まれて来た。そのためだけに生きている。

いつまでも追いかけているつもりはなかった。
近いうちに、それは予定から現実になる。

フランスの華という尊称を長らく独り占めしているこの家の主に誰も逆らえない。
だがそれは、この一族で彼に打ち勝つことの出来る人間がいないだけなのだ。

ルイはそびえ立つアルディ邸を見上げると、そこで軽く首を振った。
見事な金の髪がこぼれ落ちて、彼の秀でた額に降りかかったが、湿った風によってそれはいつものように軽い摩擦のあとに元通りになるということはなかった。
・・・帰国した早々にこの天候で、彼は教育係の叔父に簡単に報告のメールを送っただけで挨拶を済ませてしまった。本来はどこにいるともわからない気まぐれなミシェル・ドゥ・アルディの居所を訪ねるべきなのだろう。

・・そして、おそらく、ルイが不在の間はミシェルは頻繁に訪れているであろう、金の髪の女性の元にも行くべきなのかもしれない。
しかし、いつも夏しか経験していない彼女に逢っても・・・彼女は彼をルイという名前では呼ばなかった。
■むつのはな02

彼が短期留学を繰り返しているのは、この国では煩わしいことが多すぎるからだ。
しかし多国に出ても煩わしさは出現する頻度が下がるだけで、少しも解消されるということはない。
いつどこにいても「アルディ氏が長らく事実を秘匿していた息子」という長い冠を捨て去ることは出来なかった。
もっとも、ルイ・ドゥ・アルディはそういったことに対して激憤することもなかったが。
それが星辰の子という言葉に変わっただけで、彼はそう呼ばれる度に、唯一の存在ではないと宣告されているのだと考えていた。
フランスを絶対とする一族から、唯一になれと望まれて生まれて来たというのに。
それなのに。
この薔薇の一族の孤独な王は、ルイを望まない。
彼が長じて、父に酷似していく都度、白金の髪の父は美しい眉を曇らせて、ますますルイではない別の者を愛翫する。
なぜ、彼は彼であることを受け入れたはずなのに、そうではない者に逃げ込むように愛翫することで自分を慰めているのだろうか。
憐れみはルイの誇りを激しく傷つけるだけで、決して癒しにはならない。それはシャルルも同じであると考えていたのに。
決定的に違う何かが、ルイとシャルルの間には、大きな河となって横たわっていた。

アルディ氏は息子の教育係であるミシェルに、ルイに関するもののうち、すべてと言って良いほどの権限を与えていた。
当主は滅多なことではルイの養育に口を差し挟まない。
普段は、まるでルイがそこに存在していないかのように振る舞うのに、ルイが国外に出ようとするときだけは彼は意見することがあった。

アルディ邸に過ごしている時だけは、当主命令で、邸内での日本語の使用を強制されるからだ。そして様々な物事や催事があの国のやり方で施行される。
その他、各種日本様式について、当主からたった一言だけあった。
「守れ」と。
命令されればそれは絶対だった。
滅多に強権を発動しない彼であったが、この件に関してだけは意固地だった。
アルディ家には興味がなくなってしまったのかと思うような素振りを見せるのに、決してそうではない。
この家が絶えてしまっても特に気にしない。
しかし、シャルルだけは滅さなければ彼の生命は意味を成さない。

彼は久しぶりに訪れる別棟に向かって行った。
ワークブーツの底で雪が軋む。
雪の風情を残せと言われているので、特段除雪作業はしていないということだった。
それまであたたかい地域にいたので、寒暖の差が激しく感じるが、やがてそれも慣れるだろう。
それよりももっと・・・・この敷地は漫ろ寒いから。
この家は凍えるという感覚を通り越して痺れるような寒さがあった。

ゆっくりと傾斜した丘に、青女（雪の異称）が静かに衣を広げていた。
この地区でもかなりの積雪があったらしい。
アルディ邸は温室を持っているので、温室の周辺だけは雪が積もっていなかった。
凍結防止の処理が施された石畳や砂利道から少し外れると、そこはもう白く光る氷（ひ）が音さえ奪って空に戻ることを諦めたかのように・・・根を下ろし、厚みを増して積もっていった。

これほど静かなアルディ邸は滅多にないことだった。

普段は姦しい生き物が徘徊し、あちらこちらに存在を残していく。
まるで縄張りを主張しているかのように。
そうしなければ自分という存在が忘れ去られてしまうのだと考えているらしい。

彼は淡く吐息を漏らす。
白い雪のような綿のような気息が彼の見事な金髪を越えて空に散って行く。
自分が当主になったあかつきには、静寂という薔薇の苑でこの邸を包み込んでしまおうと思っていた。
彼の整った顔立ちを見て久しぶりに接見する者たちは感歎の声を漏らす。
シャルル・ドゥ・アルディに似ている、と。
顔立ちだけではなく才能や功績までもが彼を追いかけ追い抜く勢いのルイのすべてが奇蹟のようだと言う。
・・・確かに、ルイが「奇蹟」などという根拠のないものを信じないのは、若き日のシャルル・ドゥ・アルディと同じであったが。

ひっそりと静まりかえった蕭寥とした邸内を見渡すことが出来る別邸の入り口のポーチで・・・ルイは本邸の内庭を眺めていた。
また雪が降りそうな気配だった。

留学が楽しかったわけではない。単に静かな場所に行きたかっただけだ。
その間にも日進月歩で進む彼の扱っている分野での調査も研究も怠らなかった。
彼よりずっと年上の研究者たちに囲まれた生活が豊かであったかといえばこたえはノンだ。まだ・・・ミシェルと一緒に僅かな会話だけを交わす時間の方が心安かった。
彼の将来のために、人脈を広げるためだけに、すでに終えてしまった学程を今一度繰り返さなければならない苦痛を味わいながら・・自分はどこに行き着くべきなのかだけを考え続けて生きている。
■むつのはな03

人払いをしているはずだった。
荷物は既に別邸に運ばれており、彼はここには滞在しているだけのホテル暮らしと大して変わらない状況で存在するはずだった。
誰も居ない時を見計らって戻ることを習慣化して随分経過する。

それなのに。

「・・・ルイ」

人の気配を感じて、彼は脚の動きをとめた。
少年から青年に変わりゆく狭間に位置する彼は・・・華奢な太腿を動かすことをやめた。
厚手の上着を着ているのに、料峭が染みいるような・・・
そんな底冷えの冷涼が彼を包んでいた。
記録していた声より少し低くなった声が・・彼の背後から立ち上ったので、彼は後ろを向いた。
彼を乞う呼び声はすぐにわかった。その声はすべての冷寒を突き刺して彼に向かって温波を発したから。

その声は・・・

「ヒカル」

長らく、声に出すことを禁じていた言葉を出した。
先ほど吐き出した溜め息よりもっと深く。
もし、誰も見て聞いていなければ、彼はその言葉を何度となく繰り返しただろう。
彼は繰り返すことは決してしない。
それなのに・・・彼女の名前を顕す音だけは、繰り返す。
何度も。・・・何度も。

そして、短い期間でありながら、なぜこれほどまでに離れて過ごしていられたのだろうという思考を始めてしまいかねない。
だから離れているというのに。
・・・それなのに、離れているということは・・・
彼女に対する説明できない意識の強さを増長させるだけだということと、彼が満たされない要因のであるとういことを認めることから距離を置くことだとルイは考えていた。
いずれ・・・彼女を娶ることになるだろう。

愛がなくても。
彼は愛されなくても。
それなのに、彼女を幼い時から見つめ続けなければならないという強制力が彼を憂慮に追い込んだ。

彼は吐息を壊しかねない勢いで、声にならない声を出した。
玄関扉の少し広くなった場所に、彼女は座っていた。
いや、座り込んでいた。
小さな・・・小さな生き物はそこに座り込んでいた。
人の気配がしなかったのではない。

気配を感じさせないように、ヒカルが配慮していたからだ。
雪も氷も溶かす温度を持ち合わせながら、彼女はそこに座り込んでいた。

ルイの別棟は施錠されているから誰も入ることは出来ない。
彼の識文とIDチップがなければ入れないようになっているが、日々の清掃での出入りは許可していたから。
だからだろうか。ヒカルはエントランスのチェックレイ（IDチップシールと非接触でありながら有効IDであるかどうかを確認する光線のこと）を通り越して・・・彼女はルイの目の前に存在していた。

誰かの足跡があれば一目瞭然の雪空の日だった。
それなのに・・・彼女はその跡が残る前からそこにいて・・・入れない我が家の前で途方に暮れるこどものように、ルイを待っていた。

「ヒカル」
ルイは掠れた声でそう言った。久しぶりの日本語だった。
しかし忘れたことはなかった。彼女を呼ぶ音はいつもその東の国の発声だったから。
永遠の晄という意味を持つ、彼女は目の前にいた。
なぜ離れていられたのだろうか。
なぜ忘れていられたのだろうか。

いや、忘れてなどいない。

彼女が自分を忘れてしまえば、もっと冷たくできるのに、と思っていた。
それなのに。
彼女が自分を消去したり忘却したりすることは決してないだろうと思った。

誰かの心の移ろいについて、確信を持ったことはなかった。
人の心は、欲得や状況や時間によって変化する。
ルイのように変化しない者は少ない。
だから、誰も近付けない。同じ気質を持っている者であっても信頼しきれない一族に産まれて・・・誰もの思惑というものが、この家を動かしているのだと早々に理解したつもりだった。

それなのに。
ヒカル・クロスの考えていることだけは・・・理解できない。
■むつのはな04

最初、互いの声が記憶していたものより少し違っていたことに驚いて、同時に目を見開いたが、それが成長による変声であることを理解したのはルイの方が先だった。

そしてヒカル・クロスの顔を見つめた。
冷たい地に座り込んでいた彼女は、防寒具を身につけていた。
頬が赤くなっていたが、象牙色の肌理の細かい肌は、色が抜けて頬と対照的に白く見える。
おそらくルイの帰邸を待つ、と言って邸内の者たちをだいぶ困らせたのだろう。
せめて体調を崩さないようにということで大変に着込んだ出で立ちだった。
足元のボアつきのブーツが機能性を重視して底の厚いものであり、それが幼さを残している。淡い露草色の羽毛の詰まったロングコートを着ていた。
それでもとても寒そうにしていた。彼の落とす溜め息よりずっと白い息吹が・・・雪を更に呼び込みかのようにルイより短い間隔で生まれては消えて行く。
体格の違いによる呼吸数の差異と感じてなお・・それがルイを招く凛冽の烽火のようだった。触れれば消えてしまう淡雪よりもっと壊れやすく持続しない白い吐息を見て、彼はヒカルと視線を合わせたが何も言葉をかけなかった。

茶色の瞳が彼の姿を捉えて・・
一瞬、彼女の唇がルイ・ドゥ・アルディではない者の名前を呼んだ。
それほど長く会っていないわけではないのに。
彼女は・・・呆然として彼を見つめていた。
それほどまでに、彼は良く似ているのだろうか。理解しがたいあの男の容姿に。

彼は背が高くなり、声が低くなり、顔つきがさらに精悍になった。
まだ成長の途中であったので線の細さは抜けきらないが、嫋やかな美少女のような中性的な印象を持っていたルイは・・・彼はそこから抜け出していた。
彼の父はもっと年齢が進んでからそこから逸したというのに。
はやく大人になりたいと思った故のことなのか、彼の父が特殊だったのか・・・そこだけは彼は、彼の父と呼ばれる人物より先んじていた。

この雪空の下であってなお、輝く金の髪の持ち主は、

・・・ルイは黙ったままで彼女を見下ろし、そして観察した。

彼女は茶色の髪が伸びていた。この湿度で癖の強い髪が少し広がっていた。
しかしそれは彼女が細面になった顔の輪郭を隠すどころか、際立たせている。
華奢な肢体が伸びて、それでもまだ脆弱と言った方が良さそうなくらいに不均衡だった。ヒカルが、ルイと同じように少女から娘へ移り変わる過程にあると知る。
それでも顔の線が柔らかくなった。あどけなさが残るものの・・・シャルルが今でも忘れることの出来ない、あの人に良く似ている。
そして、彼が心を許した友を父に持つヒカルは、彼の面差しも濃く引き継いでいた。
加えて、気質も。
彼女は何を勘違いしているのか、ルイを兄のようにきょうだいのように慕っている。
互いに兄弟姉妹は存在しないのに。
そして理由は明かされていないが、シャルルとルイの不仲は周知の事実で、彼女がそれに心を痛めているものの、何も口出すことが出来ない状態でいることについて、誰も咎めないことにルイは苛立っていた。
シャルルと不仲であることは辛くはない。
けれども。
矮小な人間に憐れみを施されることほど、苦痛なことはなかった。
そうされればされるほど、彼の誇りは激しく傷つけられるということに、あの愚かな贖罪の娘はいつになったら・・・気がつくのだろうか。

ヒカルの桜色の唇が、ゆっくりと動いた。今度は声を伴っていた。
そして満面の笑みで彼に言った。
長い時間黙ったままでそこに座り込んでいたのだろう。少し声が掠れていた。
茶色の瞳を細めて、はにかむ。
彼の美貌に臆さない数少ない人と、彼は久しぶりに対面した。

凍て付いた身体の奥底から・・熱く滾るものが湧き起こる。
そしてそれは・・否応なくその声に惹き寄せられるのだ。
何度も何度も繰り返し思い出していた声と違う波が彼に向かって投げられた。
違うのに同じだった。
彼は繰り返さないのに。
紛れもない彼女の・・・ヒカルの声だった。
厭わしくて遠ざかったのに。

繰り返さない彼が繰り返し記憶を再生した。
それは自分に思い出したいような過去がないから。
彼はどこにいても「シャルル・ドゥ・アルディの息子」と言われ続ける。
そして彼に酷く似ている、ということも加えられる。
それは最近になって顕著になった。
讃辞なのか軽侮の言葉なのか・・・彼はどちらでもどうでも良くなった。

なぜ・・・彼女がそこにいるような気がしたのだろうか。

だから彼は驚いた。
彼女がそこに居ることに驚いたのではない。

・・・・聞こえてくるはずの声が少し違っていたから。
根拠のないものは信じない彼なのに。
それなのに。
彼は・・・知った。

ヒカルに再会して知った。

・・・姿が変わっても。声が変わっても。

彼は間違えない。
彼は惑わない。

彼が決して見間違えることのない相手は・・・彼を別の誰かと混同するのに。

これが何を意味しているのか。
わからない彼ではなかった。

それなのに、彼の運命の娘はルイだけに愛を注がない。
これは彼女の気質の問題なのだろうか。
たったひとりだけを愛し抜くことができない。
いつか・・・そうではなくなるときが来るのだろうか。
あの、シャルル・ドゥ・アルディのように。
誰かを狂うほど愛して・・愛し抜く覚悟が、彼女の内に芽生えるのだろうか。
永遠の晄と名付けられた娘は・・・皆に気を配り最大多数の最大幸福を気にする。
ルイという太陽の名前を持つ者は、星の晄にしかなり得ない。

「ルイ・・・おかえりなさい」

いとも容易く彼女は言った。
立ち上がりながら、何時間も待ったと言わずに。彼女は、ゆっくりと立ち上がって、目線の変化したルイ・ドゥ・アルディに向かって茶色の晄を注いだ。

胸が苦しい

なぜなのだろう。

駆け寄って、彼女の肩を掴み・・・そしてどこまでも遠くこの薔薇の館から退いて・・誓った星に行き着きたいという衝動について考える。
どんなに泣いても。どんなに叫んでも。彼は彼女をどこまでも連れて行くつもりだった。
・・・もし、ヒカルが彼をルイ・ドゥ・アルディと認めたのなら。
■むつのはな05

あと幾度この感覚を味わえば・・・終わりが来るのだろうか。
ルイ・ドゥ・アルディは溜め息を漏らした。
生命の塊のような彼女を、この家の当主がどれほど大切に扱っているのかが一目瞭然だった。こうしてだいぶ長い間ルイを待っていたと思われるヒカル・クロスを見つめながら、彼は考えた。ヒカルは何も疑わない。ルイの戻るところはここしかないと思っている。本当はそうではないのに。本当はそうしないと決めていたのに。それなのに、ルイはここにやって来た。
そして幾度も考えては結論を出さずにいたある予想について再び思考を始める。
その珠玉の晄の薔薇を・・・踏みにじったら、当主はどのように思うのだろうか、と。

この雪のように。

静寂の中で・・・
足跡ひとつない雪の衣を、土足で穢したら。
本当の苦悶を味わったことのない娘をシャルルから取り上げたら。

彼は癒されるのだろうか。
彼は平らかになるのだろうか。

「・・・南極まで行ってきたような出で立ちだな」
ルイは顔をしかめてそう言った。
別棟の前で座り込んでルイを待ち続けるヒカルに向け少し距離を置いて話しかける。
「・・・戻ってくる時間を聞くのを忘れてしまったから」
それは違っていた。ルイの帰邸時間は決まっていたから。
彼は予定を余程の事がない限り変更することはない。
今日のこの雪で、到着時間が遅れた。
しかしそれをルイはあえて連絡をしなかっただけだ。
偽りは伝える必要はないが、事実を積極的に伝える必要もなかった。

ルイ、と呼ばれたので彼は頬を僅かに動かした。
彼は耳を澄ませる。ひとつひとつの単語を彼は記憶に刻んでいく。
目を瞑ればまるで面識のない娘が話をしているようだった。
しかし間の取り方や言葉の選び方などはまさしくヒカル・クロスそのものであるということを確認する。
「邸で待っていれば済む話だろう」
少し怒ったような口調だった。
ヒカルがゆっくりと立ち上がって、ルイの目線を上げていく。
やはり彼女も背が伸びた。
こうして彼女は改良された薔薇のように、シャルルに大切に育てられて生きていくのだろう。健やかに成長して。美しく整えられて、最高の状態を保たれ続けていく。

ヒカルは首を少し傾げた。
「最初に出迎えたかった」
彼が本邸に足を踏み入れないことを彼女は知っていた。
そして、彼の帰邸を待ち侘びる迎えの者が誰も居ないことも。

ルイは何でも持っているはずなのに。
ヒカルが欲しいものを持っているのに。
ルイには・・・決して手に入らないものがある。

「それならもっと効果的な場所で有効に使える場面を選ぶべきだ」
彼はそう言って、ゆっくりと自分の居るべき別邸に向かって歩き出した。
ブーツの踵が白い石畳の上に乗り、音を僅かに立てた。その場所だけが雪がなかった。そして先に彼女は座って彼を待っていた。
周囲は汚れのない銀雪が光っているが、ヒカルはその雪が積もりゆく様をずっと・・・座ったままで・・・ひとりで眺めていたのだろうか。
こどもに良くあるような、雪華を踏み荒らす行為をせずに、彼女はただひたすらにルイの帰りを待った。何を考えながら、ヒカルは時間を過ごしていたのだろうか。
エントランスから眺めることの出来る瀟灑な別棟の庭も積雪していた。
ヒカルの姿が近づくにつれて、自分の脚幅が少しだけ広くなって足調がやや乱れていることに気がついた。
これをルイの気が急いているからだと、ミシェルは嗤うだろう。

茶色の髪の、茶色の瞳の娘が、立ち尽くしていた。
シャルルは・・・運命の人の娘と自分自身と良く似たルイがこうして距離を近付けていく様を見て、何を思うのだろうか。
日本であの人を手放さなければ良かったのに。
ルイならそうはしない。
手に入れたものは離さない。
どこまでも連れて行く。

たとえ、瞞してでも。
たとえ、攫って拘束しても。

一度は運命の人に背中を向けたのに。
そして彼の友に、彼女を託したのに。
シャルル・ドゥ・アルディは未だにあの人を忘れられない。
だからヒカルを慈しむ。どこまでも深く。どこまでも限りなく。
■むつのはな06

愛という糧を貪って育った永遠の晄という名前の彼女は、ルイに微笑んだ。
「ルイ・・・今日は一緒に食事をしよう」
「断る」
彼は歩きながら冷たくそう言った。
彼女が別棟に入らないのには理由があった。
ルイが出入りを禁じしているからだ。
彼の何かがそこにあるわけではないが、庭に広がる雪のように彼は土足で荒らし回る輩には寛容である必要はないと考えていた。

「ルイ・・・待って」
「ヒカル、早く本邸に戻れ。目的は達しただろう。オレを待っていたというのであればオレはこうして到着した」
ルイはヒカルの脇をすり抜けて、そう言った。
仄かに・・・彼女から立ち上る香りが彼の頬を撫でた。
雪の香りに乗って、彼女の髪が躍った。ルイが起こした風だった。

「そもそも、待ってくれとは頼んでいないし指示も出していない」
ルイは素っ気なくそう言った。すると、ヒカルの顔が曇った。
そこはいつもと変わらなかった。彼女は泣きそうな顔をするが、決して涙を見せない。
傷ついた顔をするがいつも次には微笑んでいる。誇りというものがない娘だった。
そうでなければ生きていけないからとかたく信じ込んでいる。

どうやっても、どうしても行き交うことのない人間というものが居る。
それがヒカルとルイだ。
これほど近い場所に居るのに、彼女とルイは同じ過程で生まれて来たのに。
・・・それなのに、決定的に違う。何もかもが。

彼のウインターコートが舞った。ヒカルの髪と同じように。
彼は裾を翻して、別棟の中に入ろうとした。彼女の脇を通り抜ける。
誰も居ないかのようにまったく視線を遣らずに前を向いていた。

「今日は本邸から見える庭は雪景色で・・・明日には溶けてしまうから」
「だから？」
「だから一緒に見たいと思ったの。今夜は月も綺麗だし・・・」
「ヒカル」
ルイは呆れたように言った。その時には彼は立ち止まり、そしてそこでヒカルを見下ろした。彼女の頬は赤かったが、それ以外はすべて白かった。・・・身体が冷えているだろう。唇は薄い桜色であったが、本来はそれはもっと赤いのだろうと思った。
健康で、倖せと信じ、甘やかされて育った娘は・・・今持っているものに加えて、ルイも欲しいとねだる。彼にはそういう愚鈍な娘にしか映らなかった。

「オレは数ヶ月ぶりに邸に戻り、そして明日からはいつも通りの生活だ。雪が溶けようが凍ろうがまったく影響しない。時差の影響でこれから体調管理にも気を配る必要があり、たまっているだろう書類に目を通すことも済ませる必要がある。・・・ヒカルの雪見にはシャルルに付き添ってもらえ。・・・アルディ邸の庭をそぞろ歩くのであれば、ひとりでもできるだろう」

彼は尖った言い方をした。普段はこれほど長く喋らない。
しかし、ヒカルにはこう言わなければ伝わらない。一度で済まされない会話の往来を繰り返すつもりはない。彼女との会話はこれで終わるはずだった。
自分のことより他人のことを心配していると見せかけることに長けている彼女は、ルイが忙しいと知れば気を回してそれ以上近づいてこないからだ。
忙しそうだからといって本当に伝えなければならないことを言わずに居る。
・・そんな娘だった。それではアルディ家では生きていけない、とルイは教えられて育ったのに。ヒカルは相手を思い遣って生きろと教えられて育った。
それがどれほど見当違いの配慮であるのかということを考えたこともないのだろう。

まだひとり歩きを赦されていない彼女は、困った顔をして言葉にならない言葉を吐き出した。
白い吐息が再び現れて消えて行く。
門扉の前でいつまでも到着を待つヒカルをいじらしいと思うのは、シャルル・ドゥ・アルディだけだ。少なくともルイはそう思わない。

「どけ」
ルイは冷たくそう言った。話し相手にさえならないヒカルに何もしてやるつもりはなかった。それなのに・・・彼女をそのまま、冷たい雪華の中に置き去りにしておいてもまったく動じないはずなのに。
彼は・・・立ち止まって、ヒカルを見てしまった。

茶色の髪に茶色の大きな瞳を持った少女はルイを懸命に見つめていた。
彼の変化した姿を受け入れるのが難しいというように、戸惑っていた。
あと幾度こうして雪の季節を過ごせば、フランスの華と同じ容姿になるのだろう。
まだ、時間が必要だった。
それなのに、彼女はルイをシャルルと間違えそうになった。シャルルと長い時間を過ごしていれば、決してそんなことはないだろうに。それがルイを余計に苛立たせる。
しかし憤りを顔に出すことはしなかった。まったく無表情に・・・目の前の大人の香りのしない少女を見つめ返す。

■むつのはな07

雪は醜悪だ。
溶けると見苦しい。

居間に入ったルイは、すでに整えられた空調の中でそう思った。
玄関で上着を脱ぎ、冷気と僅かな雪を含んだそれから解放される。

上質の上着を脱いで、彼は彼の身体の線の美しさを損なわない程度に薄いが品の良いセーターを脱いだ。乗馬とフェンシングで鍛えた身体に、少年の頃にはなかなか発達しなかった筋肉が見え始めていた。・・・大人の身体に変化しているからだ。

なぜだろう。寒冷な外気から解放されたはずなのに・・・彼はその時にあまり感じていなかった寒さを感じた。
空調は完璧であったし、居間のクリスタルのテーブルに乗っているポットには飲み頃になっているティーが茶葉を開いてルイを待っていることだろう。
彼は脱いだセーターにもう一度手を通すことはしなかった。
シャツ1枚であった。細い腰に裾が触れている。・・・身長が伸びたのであちらで買いそろえたものだったが、それでも次の季節までには着られなくなっていることだろう。

・・・全裸でいるより極めて官能的な肉体だった。
ルイの整えられた身体が少し弛緩するのを感じる。長時間の移動の後だった。彼は酷く疲れていた。神経が休まらない。

この家では特に。
早々に、自分だけのセーフハウスを見つけようと思った。
誰も来ない、音のしない、静かな空間でなければ彼は深く睡臥することができない。

雪が音を吸って静かなアルディ邸がますます静寂という色に染まっているというのに。
彼はそれでも障ると眉を顰める。

このざわめきはなんだろうか。
ヒカルと話をしたからだろうか。
・・・彼女を置いて、そのまま別棟に入ってしまったからだろうか。
・・・ああ言っておけば、彼女は本邸に戻っていくことだろう。そしてしばらくはここに寄りつかないはずだった。

・・・熱い湯を浴びようと思った。

時差によって身体がだるかった。
しばらくは・・・この気怠さを相手にしなければならない。

彼がバスルームに足を運ぼうとした時。
ことり、と何か音がして、彼は居間の中央に目を遣った。
居間にはほとんど何も置いていない。
背の低いクリスタルのテーブルと、大理石でできた小さな丸テーブルがあるだけだった。
彼はいつもそこに小物を置く。時計も先ほどそこに置いた。そしてもう一つ・・・
この居間に居間までなかった小さな木製のテーブルが置いてあった。
そのテーブルには見覚えがあった。

幼い頃、ヒカルが持っていた、こども遊び用のテーブルだった。
彼女はそこで彼女の教育係とよくいろんなものを飾って遊んでいた。
オーナメントは特注で、大変に繊細で精巧なものだった。
単なる人形遊びではなかった。手触りや風合いまでがすべて本物と同じだった。
突然やって来たフランスでの暮らしや言葉に慣れるために、あらゆる方法で彼女は教育されていった。食事の作法やフォークやナイフの種類さえそれで覚えた。
そして彼女はそれらを与えられながら、ひとつひとつの・・・ものの名前を覚えていった。シャルルはそうして彼女を育てた。

それがここに運び込まれていた。なぜなのか。
あれはもうヒカルの身長に合わないので、片付けられたと聞いていたのに。

・・・そしてルイはそこにあったものに目を向けた。

小さな持ち運びに片腕があれば十分なテーブルの上には・・・アイスツリーが光っていた。
雪で出来たそれは、空調の暖風によってすでにだいぶ融解してしまっていた。
その水が受け皿から溢れそうになっている。
先ほどの物音は、頂点が崩れて、落ちる音だったのだ。そこには・・・彼女がかつて使った飾り玩具が吊ってあったに違いない。それらはすべて落ちて皿の上に浮かんでいた。

すぐに溶けてしまうのに。空調が効いていると知っているはずなのに。
戻ってくる時間が変更になったことを知らせなかったので、ヒカルがあれほど戸惑った顔をしていたのだ。そして本邸に行け、とあれほど言っていた理由を察した。
・・・ルイを呼びだしている間、こっそりこれを始末するつもりだったのかもしれない。

彼女がこっそりここに忍び込んだことを咎めるのは容易かった。しかし、彼女が・・・雪の積もりゆく様を見ながら、別棟の門前で本邸と庭の降雪を・・・何を考えて見つめていたのかと推測するだけで、なぜか・・胸が痛んだ。理由はわからない。わかったらお終いだと彼の中で何かが囁いていた。

そうだった。
彼がなぜ戻って来たのか。
短期留学を終えてそしてそのまま・・・クリスマス休暇に入ったからだ。
誰もが家族や恋人と過ごす時間に彼はひとり戻って来た。
ヒカルが何度もいつ戻ってくるのかと連絡を寄越していたのは、このためだったのか。

どんなに金額を積んだ品を贈ってもルイの心は解けないから。
雪の日に戻ってくると知って、彼女は彼女しかできない贈り物を捧げることにしたのだ。
・・・シャルルではなく、他でもないルイに。

そして彼の帰りを待った。いつ戻ってくるのかと思いながら。

そしてそれが意味を成さない形になる前に交換するか下げておけば良いのに。
苦笑いが浮かぶ。彼なら・・・あらかじめ２つ作っておく。こうなることを想定して。
それなのに、努力したことを見せびらかしたいとしか思えない彼女の行為に呆れながら・・・彼は微笑んだ。

寒いと思った室内が、急に暖かく感じた。
そして、絶対に入ってはいけないときつく言い渡してあったのに、彼の居住空間を・・・雪を踏み荒らし穢すような行為に等しいことをヒカルが実行したことが滑稽だった。
彼女は案外に豪胆な気質があるようだった。
・・・後先考えずに行動するようだ。
あの人の娘だからか。
それはアルディ家にはない性質だった。

ルイにはクリスマスも休暇も必要ない。シャルルもそうだろう。
神を信じる一族に生まれながら、それを心の底から信じているわけではない。

奇蹟は降ってくるのを待つのではなく、起こすものなのだ。

定刻通りに戻って来たルイがこれを見て感激し、ヒカルに祝福のキスをするという奇蹟は、彼女には起こらなかったけれども。
■むつのはな08

ルイはしばらく形を失ったツリーを見つめていた。
贈り物という程のものではない。彼女の思いつきなのだろう。

今日のディナーを一緒に過ごそうと言った彼女は、おそらくルイの帰邸のために・・・あれこれと、こども特有の思いつきとひらめきによって浮かびがちな発想という名前にすり替えられた特別な事をその他にもたくさん考えているに違いない。

やがて本邸と居間に灯りが点った。
完全に制御されているので、制御棟で今日は早めに夜間モードに切り替えたらしい。
曇天によって空が暗くなるのが通常より早かったからだ。

ルイはクリスタルのテーブルに乗ったコントロールのメインスイッチをオフにした。
そうしなければこのツリーの融解は速度をすすめて、あっという間にただの液体に戻ってしまい、やがて蒸発してしまうだろうから。
・・・・湯気のように、出て行く様を見つめることができたのなら。外気に晒された吐息のように、淡い輪郭を掴むことができたら。
ヒカルが手を冷やしてなお雪を押し固めてつくったそこから・・・彼女の温もりが見えるだろうか。
まだ少しだけ・・・形が残っていた。しかしルイはそこに近づかなかった。近付けなかった。寄れば彼の温度で溶けて消えてしまいそうだったから。闇の中で・・・外から漏れる照明と雪明かりで輝くそれを見つめていた。
濡れたツリーは最初の姿の時より、水を受けてより一層輝いていた。

奇蹟は起こらない。ヒカルはそれを知っているのに。
あの墜落事故を経験してなお、彼女はああして奇蹟を作ろうとしているのだろうか。
だとしたらそれは愚かしいと嗤ってやるところだろうか。それとも・・・

遮音に優れた硝子の窓であったので、しばらく気配に気がつかなかったが庭に街灯が灯ったので、少し考えに沈んでいたルイは、庭に動く影があることに気がついて、目を見開いた。庭師が除雪をすることはないだろう。邸に入るときに、明日以降でないと除雪は行わないから足元に気をつけるようにと言われていたから。

「・・・ヒカル」
ルイは呟いた。誰も聞いていないのに。
低くなった声で、彼は彼女の名前を呼んだ。

別棟の居間に面している庭で、彼女は腰を屈めて・・・雪をかき集めていた。
この寒空の下で。汗をかきながら、彼女はありったけの雪花を寄せていた。
「・・・グローブくらいつけたら？」
空はだいぶ暗くなり、夕焼けの茜色を見せることなく夜に入っていった。
居間の電灯が灯されたので、ルイが戻ってきたのだということを実感して安堵したヒカルは、また居間の照明が落とされたので、しばし不安に思っていた。
ルイの別棟の窓硝子は特殊加工で、中から外はよく見えるが、外から内側は透過性を調節することができ、完全に見えなくすることができる。
だから再び灯りが点されて、ルイが居間で寛いでいるのであれば、と思い、慌てて作業を進めることにした。

「・・・・怒らないの？」
彼女は玄関ポーチの壁に凭れながらこちらの様子を窺っているルイに、おずおずと尋ねた。
彼の邸に入ってはいけないと言われたことを破った。そして詰られるとわかっていながら彼の庭を汚した。・・・この銀面を見せたかったのだが。
「ここの雪が一番溶けてないからだろう。・・・この棟は人が居ないで電力供給をしてなかったから」
ルイがヒカルの考えていることを言い当てたので、変わらない彼の頭脳に驚嘆したヒカルは素直に頷いた。
ずっと無人だった別棟の周囲は冷えていた。アルディ邸の本邸では、薔薇の温室があるために、周囲は雪が溶けている。また、凍結防止の処置が施されているアルディ邸の庭の雪では、ヒカルの思ったとおりのオブジェは創ることが出来ないのだ。すぐに溶けてしまう。そして固まらない。

彼は上着を身につけずに、そのまま居間から出てきた、といった出で立ちだった。
シャツ1枚だけを身につけて、ワークブーツにコーデュロイの厚手で細身のボトムスだった。非常に若い・・・年相応の格好であったが、伸びた腕や広い肩が露わになっていてヒカルは少し目を細めた。ルイは星辰の子だ。誰もが彼を眩しいと言う。けれども・・・彼が本当に美しいのは、彼の魂が清らかだからだ。この雪のように。

「ルイこそ、はやく中に入らないと・・・身体を冷やしてしまう」
彼が間もなく開催されるフェンシングの大会に出場することを彼女は知っていた。だからそれを調整するために、クリスマス休暇前に留学を終えて戻って来たことも。

「ヒカルが何を作っているのか興味があってね。君の美的感覚は素晴らしいから・・・完成しても説明がなければわからないだろうけれども。・・・そう。居間に飾られた崩れかけたツリーも飾りがなければわからなかった」
ヒカルが顔を赤くして口ごもった。絵を描いていたという彼女の母親の血を濃く引いているのに、彼女は彫像や塑造といったものには才能を開花させなかった。
「シャルルに教えを乞えば良いのに。・・・彼に頼めばツリーのひとつやふたつ作るだろうし、アルディ邸の業務用冷凍庫を解放させてでも、それを保存してくれただろうに」
シャルルは彫刻家コンクールで若い頃に入賞したことがあった。・・・それも彼女の母親をモデルにして。
しかし、ヒカルは首を振った。
「それじゃ、駄目なの。・・・私は自分一人で作ったものをルイに贈りたかった」
「すぐに消えてしまうのに？」
「見えて残るだけが贈り物ではないでしょう」
彼女はそう言って微笑んだ。
その微笑みは、幼い童女のそれではなく、大人の女性の微笑みだった。
ルイは黙り込んだ。

なぜ・・・彼女の微笑みを見ると、寒さを感じなくなるのだろう。

見えているものだけが有益なのではない。
いつかすべて消えてなくなるから。
それならこの想いも・・・いつか消えてなくなるだろうか。

「・・ところで、またツリーを作るつもり？」

「そうなると一晩かかってもできそうもないくらいの大傑作にしないといけないから、bonhomme de neigeに変更しようとしたところ」
「スノーマンなら、ヒカルが雪にくるまれば良いだけだ。・・・身体の隆起がないのだからちょうど良いだろう」
ヒカルがますます顔を赤くして目を見開いた。ルイはくすり、と笑う。
少年の微笑みだった。
彼は青年に変わりつつあったのに、金の髪の下の青灰色の瞳はどこか・・・柔らかかった。それはあたりが夜になって、灯りがそう見せている幻なのだろうか。

「夜中までそれを続けるのであれば勝手にどうぞ。積雪について所有権や占有権を主張するつもりもない。オレがここにいるのは・・・ティーを煎れる使用人が来るまでにティーが冷えてしまうから、給仕の者を探しているだけだ」
■むつのはな09

それがルイ・ドゥ・アルディの独特の申し出であることに気がつくには少し時間を要した。彼はあからさまに嫌な顔をして、頭の神経も寒さで麻痺したのか、と言った。
そこでヒカルが自分の結論を確認するために、彼に尋ねた。
手を止めて・・庭の雪で全身を白く染めた晄の娘は、ルイに向かって言った。

「・・・入っても良いの？」
「オレは繰り返さないからもう言わない」
ルイはそう言って彼女に背中を向けたので、ヒカルは慌てて彼を追った。
彼がノブに手を遣り、彼女を別棟に入れた。
「そこで雪を払えよ。・・・水浸しにされるのはごめんだ」
彼はそう言ってヒカルの雪水を含んだ上着を脱ぐように指示した。
「かけておけば、吹き出す乾燥風で乾く」
ルイは玄関に備えられたウォークインクローゼットの中に上着を収納しろ、と言った。
直近で使用したものはそこに置くことにしている。
彼はシステムサーバを室内に置いているので、埃や水分を持ち込むことを極度にきらっていた。
ヒカルがルイに指示されたとおりにクローゼットに上着を吊った時に目を遣ると、彼の上着はそこにあった。それほど濡れていなかった。

・・・それなのに、ヒカルが置いた品については彼は文句を言わなかった。
「早くしろ、と急かされるのが好きなのか？」
ルイがあからさまに言ったので、ヒカルはごめんなさい、とまた謝った。
「・・・だからグローブをつけろと言っただろう」
ルイが溜め息を漏らした。彼女は上着を脱ぎたくなかったわけではない。
長時間冷気に触れていたので・・・麻痺しているのだ。
細かい飾りが施されている内釦を外すことが出来ないでいる。
しかも厚手の上着は・・・彼女の躯を防寒する役割は果たしていたが着脱を補助する役割はなかった。
「とんだ雪だるまだな」
日本語でルイはそう言って、大袈裟に溜め息をついて、彼女の前に立った。
「じっとしていろ」
「・・・ルイ！」
ヒカルが腕を振って、ルイの動きを阻んだが、腕を上げるのも辛いはずの彼女の妨害はまったく効果がなかった。
彼は眉を顰めてそのまま実行した。
ヒカルの前身頃を掴んで、そのまま器用にはずしていく。雪が彼の指先に乗りそして儚く水に還って行く。彼の体温をそんなところで感じる。ヒカルは恥辱で顔を赤くしたまま押し黙ったままだった。言葉にならない。
目の前に、ルイがいる。金の髪を少し前に落とし、青灰色の瞳を伏し目にして・・・彼が驚くくらい近くにいる。そしてヒカルの雪の鎧を剥がしていく。彼には何も隠せない。ルイには何もかもが見えているようだった。
「男に脱がされる練習でもしておけ。・・・色気がないな」
彼はそう言いながら最後の釦を外してやると、彼女の肩をとん、と押した。

ふわり、とルイの香りがする。
ヒカルは全身を朱に染めて、そのまま・・・ありがとうと礼を言うことも忘れて無言で上着を脱いだ。防寒を優先したので、雪の水分を含んで重みを増した上着を脱ぐと、身体が少し軽くなった。そして自分がだいぶ汗ばんでいることに気がついた。
・・・別棟内は完全に調節された空調であるはずなのに、ひやり、と冷えた感じがした。

上着をかけるのもやっとだった。
寒い外気で彼を待ち続けたことは苦痛ではなかった。約束はしていない。
彼が今日はミシェル・ドゥ・アルディの家で過ごすという選択もあったはずだった。
だからこれは奇蹟なのだと思った。
奇蹟は・・・それを目の前にしなければ奇蹟だとわからない。
奇蹟のような人を目の前にして、ルイそのものがアルディ家の贈り物であり、彼こそがシャルルの本当の孤独を分かち合う数少ない人物なのだと思った。そして、ルイの孤独も分かつ人物が必要で・・・それはヒカルには理解できないほどに冷たく深い孤独なのだろうと思った。
だから、彼女では駄目なのだ。
彼はますます影の色を濃くしていくばかりだから。
それでも、ルイのために何かしたかった。彼のために、帰邸を祝いたかった。
生まれて来たことを雪のように儚い命だから、と思って欲しくなかった。
雪は消えてしまう。
けれども、雪を見たという記憶は残る。特に、ルイは忘れることが出来ないから。
この年の、この雪の景色は二度と再現できない。だから、一緒に見たかった。

シャルルはいつかヒカルが日本に戻ることを考えている。だから、各々の季節が巡ってくる度に、この季節はもうやってこないと感じながら過ごしている。そう思うことが出来るのは、シャルルが鮮やかな季節を見せ続けたからだ。
だから・・・ルイにも同じように共有して欲しかった。この記憶も感情も。
いつかヒカルがここを去って・・・何もかもが儚い淡雪のように消えてしまったとしても。

「・・・・ルイ」
居間に入る前に・・・ルイは彼女にタオルを差し出した。
「使うことを許可してやる」
彼女の伸びた髪が雪を含んで濡れていることを指摘したルイは、彼女にそれを使えとタオルを差し出した。
ヒカルはありがとう、とそこで始めて微笑んで、タオルを受け取る。
上質の柔らかい質感のそれは・・・丁寧に畳まれていたが、それを広げようとして彼女は端を持つ手に力が入らずに取り落としそうになったので、ルイがヒカルの悴みに気がついた。

「おい。・・・凍傷になりたいのか」
ルイが呆れたように言って溜め息をついた。
「雪は明日には解ける。その前に何とかしたかったの」
ヒカルはタオルを持ったまま・・・下を向いて呟いた。自分の体調管理ができない人間をルイは軽蔑している。自分はまさしく何ひとつ完遂することができない愚鈍な人間としてルイの瞳に映っているのだろうと思うと、どうにも切なくなって胸が苦しくなる。

自分の茶色の髪が水分を含み、少し色を濃くして、胸の上に乗っていた。
このままだと彼の言うとおり、水を滴らせながら居間に入ることになる。

自分はなにひとつ彼にしてやることができない。
何も彼に贈ることが出来ない。
失敗ばかりだった。
ツリーも彼に見せてやることが出来なかった。
心を込めて作った。朝からそのことばかりを考えていた。
誰にも迎えられないと思っているルイにそうではないと伝えたかった。
そして・・・最後の雪になるかもしれないから。
いつも、いつもそう思いながらここで過ごす季節はあまりにも美しすぎた。

できることなら、この家のこどもとして生まれたかった。
しかし、そんな奇蹟は起きない。
朝起きたら彼女は金の髪の青灰色の瞳のこどもになるかと言ったらそれは決して実現しない夢にさえならない願いだった。

「・・・貸せ」
ルイが溜め息をついた。
そして彼女からタオルを取り上げると、まったく面倒な女だな、と文句を言いながら彼女の髪を拭いてやる。
「・・・手がかかる」
彼の手は大きかった。そしてヒカルの頭の上から大判のタオルをかけて、その上から彼は彼女の髪から水気を抜いていく。
彼女の髪に指を埋めるという行為がこれほどまでに彼を落ち着かなくさせるのはなぜなのだろうか。
身体が成長し・・・誰かの肌を求めるという焔がそうさせるのか。
そうではないと内なる声が彼に囁く。
それ以上考えてはいけない、と思った。
久しぶりに再会した娘が思いの外・・・成長していたので興味が沸いただけだ。
そう思うことにした。
上着を脱いだ彼女の肢体は、先ほど彼がからかったような童女のそれではなかった。
薄いカットソーを着て、身体の線が汗を含んで露わになっている。あと10年もすれば彼女は大変に素晴らしい肢体を持った淑女として社交界でもてはやされるだろう。
華奢ではあるが決して貧相ではなかった。
彼女の髪の香りと髪の質感に溺れそうになるが、細く長い指を動かすことに集中する。

その時、ルイの手が止まった。
ルイ、と声をかけられたからだ。
ヒカルがルイの手の平の上に自分の手を重ねたのだ。両手をそっと・・・彼の手のひらに一つずつ置いて広げる。彼のそれよりずっと小さい手の平だった。そして冷たかった。
「・・・そう。手がかかるの。とても・・・とても」
「面倒くさい女だ」
「・・・おかえりを言いたかっただけなの」
彼は溜め息をついた。

彼女は、視線を合わせたら言いたいことは言わない。
それなのに、こうしてタオル越しでしか自分の本心を言わない。
これほど冷え切るまで彼を待つのに。

しばし沈黙が訪れる。静かな別棟の玄関先での会話だけがホールに響いては消えて行く。
「・・・どうして中で待っていなかった？居間に上がり込んだのだからそこで待てば良いのに」
「・・・寒くても待てた。・・・・ルイに・・・たったひとりでただいまと言ってここに入るようなことはさせたくなかった」
「傲慢だな。もっと違う方法もあっただろう」
「あったかもしれないけれど思いつかなかった」
賢いやり方ではないな、と彼は呟いた。
彼なら・・・幾通りも考えることが出来るのに、ヒカルはそうできないと言った。

「寒いのなら」
やがて彼は静かに言った。
「・・・オレが温めてやっても良いよ」
彼は囁いた。
■むつのはな10

「・・・催事にはまったく興味がないが」
彼はそう言って彼女に告げる。
ヒカルの肩がぴくり、と動いた。彼が何を言っているのか、理解はできているらしかった。
「オレに贈り物を考えているのであれば・・・温もりが欲しい」
そうして彼は・・・タオル越しに彼女の額に唇を寄せた。
彼女の頬や顔の輪郭や・・戸惑った声が漏れる唇や・・・その他すべてのものをはっきりと感じる。
彼女が凍えで身動きが取れないことも計算の内だった。
どうしても・・・どうしてもそうしなければならないということではない。

しかし、彼の身体がヒカルに引き寄せられる。
身体が冷えても。
どんなに悴んでも。
彼女はあたたかい晄を持った太陽の娘なのだから。
溶けると分かっているのに飛んだ神話の愚者のように。
太陽に近すぎて身を灼いてしまってなお晄に焦がれる性はどこからやって来るのだろうか。
このまま彼女を寝室に引き込んでディナーのことなど考えられなくなるようなことをすることも可能だった。
間もなくシャルルが帰邸する。
それに合わせて効果的な打撃を与えてやることもできた。

彼は整った顔を少し歪めて・・苦しそうに唇を近付けた。
そして・・彼女の唇に自分の頬をあてる。
唇を重ねることがどうしてもできなかった。
見えない力に妨げられているかのように。
まだ、時期が早いと何かが告げているかのように。

「ルイ・・・ルイ」

戸惑った声が聞こえてくるが彼はそれを無視した。
ヒカルの何が欲しいのだろう。彼女の涙だろうか。彼女の困惑だろうか。
それとも・・・・ルイは彼女の肩を掴み、彼はその先に進もうとして・・・動きを止めた。
彼女の茶色の瞳を視線が合ったからだ。
目尻が赤く染まり、そして潤んだ瞳でルイを見つめるヒカルの瞳が、そこにあった。

・・・目が合うと何もできなくなるのはヒカルだけではなかった。

彼は腕の力を抜いて、彼女の肩から手を離した。そして肩を竦めて、何でもないよと言う風に言った。

息を深く吸う。
先ほどの溜め息とは違った。
なぜ心臓の鼓動が速くなるのだろう。
なぜ・・・彼女に唇を寄せる行為を止められないのだろう。

「余興は終わりだ。・・・これで暖まっただろう？」

彼は少年から青年になりつつあった。
そして・・・
彼女は少女から乙女になりつつあった。

ルイが少し力を入れただけで彼女は身動きすることが出来なくなる。
それなのに・・・彼女の瞳を見ただけで、彼の行動は停止する。

「・・・セントラルヒーティングでもここは冷える。・・・中に入れ」

ルイはそう言って、素っ気なく彼女を前を歩いてひとりで居間に入ってしまう。
ヒカルはお邪魔します、と日本式の挨拶をして、そして慌てて彼に付き従った。

・・・今のは何だったのだろう。

キスのようで・・・シャルルと交わす挨拶のキスと違う口付けだった。

彼はあえて・・・わざとそうしたのだろうと思った。
彼は・・・ヒカルの知らない時間を過ごして、大人になってしまった。

まだ幼い彼女にはわからないことがありすぎた。
今の所作について知識がなかった。

・・・・・温もりが欲しいとルイは言った。
彼は寒いのだろうか。
彼は・・・この家の暖かさを感じることが出来ないのだろうか。

黙って入り込むルイの別棟には長い時間滞在することができなかった。
彼女の中で芽生えて大きくなっていく罪悪感というものが、彼女の行為を助長することを許さなかったからだ。
彼の別棟に入り込んだ時。
ヒカルは胸が潰れそうになった。

・・・そこには寒々しいほどに、何もなかったから。

彼女がシャルルから贈られたものすべてを気に入りの保存物としている習慣とは正反対だった。

何も、何もなかった。

いつでも戻れるように片付けてあるのではない。

・・・いつ戻らなくなっても良いようにしてあるのだと思った。

だから願いを込めた。
大事にしているものを飾った。
金銭を積んで手に入れることのできない何かを伝えられれば良いなと思った。

・・・でもルイは知っているのだ。
何と交換することのできないものが、確かに・・この世には存在するのだと。
だから何も置かないし何にも執着しない。
彼が手に入れたいのは、そんなものではないから。
執着したり願ったりするだけでは手に入らないものを彼は渇望しているから。

・・・そのことを考えるとヒカルは涙が出そうになる。

■むつのはな11

ヒカルは初めて・・招かれてそこに入った。
いつもは、彼の不在を狙って、外庭から眺めたり・・今回のようにこっそり忍び込んだりする程度しかここに訪れることはしない。
それでもそういったときは、息を止めて・・本当に短い時間しか滞在できなかった。
呼吸を止める必要はない。
それはわかっている。
でも苦しいのだ。

・・・・理由はひとつだった。

・・・ルイが禁じているから。
彼が哀しむから。
誰にも見せたくない空間を垣間見ることがどれほど罪深いことか、彼女は知っていたから。

人には他者が見てはならない秘中の秘というものがある。

それはシャルルにもあった。それが何であるかはわからないが。

そして・・・いつも微笑んで穏やかな表情を作るヒカルの中にもそれは存在する。

同じようにルイにもそういったものがあるとしたら。
それを暴いたり毛羽立てたりする権利は、ヒカルは持ち合わせていなかった。

それでも。
それでも・・・・

彼がひっそりと過ごす別棟で・・・・
世の家族が祝うようなクリスマスではないかもしれないが、ヒカルは暖かい冬もあるのだと伝えたかった。

彼のいない間、庭の様子を窺った。
雪が積もって・・・彼の視界を潤せば良いのにと思った。
それなのに、その庭の雪を使わなければ自分の目的を達成できないことに少し憔悴しながら彼女は雪をかき集めた。
・・・今日の帰邸に、彼が寒かったら大変だろうと思い、暖房をきつめに入れるように依頼した。それが仇なして彼女の届け物を崩してしまった。

彼女はまだ幼かった。その先を何手も考えるルイよりはるかに幼かった。
・・・しかし、それゆえに彼女しかできないことを、ヒカルは遂行した。

きっとそうなるだろうから行動しないという選択は彼女の中には存在しない。

・・・やらなかった後悔よりやった後悔を選ぶ。

それは誰に教えられたものでもなかったけれど。

何もしなかったと悔いるより、しでかしてしまったと猛省する方がどれだけ楽なのだろうかということを知っていた。彼女の中で何かがささめくのだ。行け、と。
彼女の声ではない・・・もっと大人の女性の声が彼女の耳奥で囁く。

だから、ルイに躊躇わなかった。
彼に躊躇なく向かっていけるのは・・・ヒカル・クロスだけであると証明するかのように。

・・・・ルイ、とヒカルは声を詰まらせた。

逢いたかった、と伝えるより。

手を冷やして彼のために何かを創り出したかった。

だから、そうした。

ヒカルの持っている語彙では決して満たすことはできない。
けれども。
彼女が言葉も態度も越えて・・・何かを伝えることが出来るとしたら、こうして自分の身を切るしか術はないのだと思った。
いつか、大人になったときに。
自分はきっと・・・こうして、自らを傷つけないと何かを伝えられないと思った時。
迷わずそうするだろうと思った。
それは怖くなかった。
怖いのは・・・伝わりそうで届かなかった時に味わう喪失感だった。

両親を失った。

その時には幼すぎて感じなかった。
しかしヒカルのかわりに・・・喪失の沈淪をシャルルは味わっている。

親子の関係を伸長することはなかった。
そのかわりに与えられた愛を頼りにヒカルは生きている。

・・・しかしルイは違った。
ひとり闇の中で生きろと言われて・・彼は本当に少年らしい微笑みを知らないままに、青年になろうとしていることが苦しかった。潰れそうなほど胸が痛い。

むつのはな　後編

■むつのはな12

ヒカルは彼の背中に向かって小走りになって近づいた。
・・・ルイがそのまま消えてしまいそうになったから。居間に消えて行くだけなのに。
それなのに、彼が儚くなってしまいそうな不安感が彼女を襲う。
見えなくなることが怖い。
・・・さっき、幾月がぶりにようやく逢えたばかりなのに。
また離ればなれになる事への不安感が彼女の足元を掬って払って・・夕闇の中に放り込まれるような不安感を誘う。

彼は星辰の子と呼ばれている。
そして薔薇の一族の末裔だ。
それなのに・・・時折、儚い雪の精霊のようだと感じる。
そのまま輪郭を淡くして消え入りそうになる。
彼のような奇蹟の人はいないだろう。
そして、ルイのように完璧な人間が多いアルディ家の人間の中でも・・彼は特別だった。
生まれてからずっと・・・この家の当主になるために彼は沈黙しながら運命を受け入れてきた。
与えられる試練が運命を言うのであれば。
彼はそれに耐えた。耐え続けている。
けれども・・・もっと安らいで欲しいと願うのはヒカルだからなのだろうか。
持たざる者への憐れみという名前に変換した優越感だ、とルイはせせら笑う。
けれども、そう思い切ることが出来なかった。

エントランスから、彼の常駐する居間まで少し距離があった。
それなのに・・・彼は冷え切った廊下を渡って、そしてもっと凍える外気の中。彼女を迎えに来た。
ここに通すために。
彼はそうはっきりとは言わなかったが、きっとそうなのだろうと思った。
都合のよい想像でしかなかったが。
ヒカルがルイと違うのは・・・想像するところだった。
根拠がなくても想像の羽を広げる。そしてそれに浸る。

両親と仲良く暮らす自分を想像した。
シャルルとルイが睦まじく未来を語る場面を想像した。
・・・ルイと一緒にどこまでも手を取って・・・本当のきょうだいのように一緒に丸くなって眠る姿を想像した。
互いの温度と鼓動を感じて・・そして安らぐ様はどれほど素晴らしいことなのだろうか、と思った。それは決して実現しないことばかりなのに。

・・・ヒカルは夢を見続ける。

「ルイ」
彼女の湿った靴は乾いた音を立てなかった。
しかし彼はそれを無視して・・・居間に入り込む。
金の髪が彼の陰風のように・・・わずかに後ろに棚引いて彼女に彼の行く先を知らしめる。

ここは生活のにおいがしない。
独特の家というものがもつ香りがしない。

・・・それは彼があえてそうしているからだ。

だから息をすることができないのだと思った。
だから息苦しいのだと思った。

ルイはこれほどまでに冷たくて凍えそうな家の中で・・・何年も過ごしているのだろうかと想像すると、ヒカルは身体中が軋んだ。
どうして・・・そっと・・・彼を抱き締めてやることが出来ないのだろう。
自分の身長や腕の長さがまだ足りないから。
まだ、自分は幼いから。

それだけだろうか。

彼は・・・もっと違う何かを求めているような気がする。

「・・・ルイ」
廊下を通り抜けて、彼女は居間に入った。
長らくの不在のために、両扉のうち、片方は固定されていたが、ルイやヒカルが通るには十分なほどの間隔があった。
細かい彫刻が扉と硝子窓に施された一枚板の扉が半開きになっていた。
・・・アンティークのように見えるがそれは防音と防湿と・・・すべての危険性から耐久されることを確認された唯一の防扉だった。
もちろん寒さにも強い。長い間の無人状態によって・・湿気をほとんど吸わないでアキと冬を過ごしたそれは、乾燥した音をたてて、半開きの状態からすべてを解放するかのように大きく扉を開いた。
それはヒカルが彼を追って居間に入り込んだ時に・・・勢い余って扉に手をついたからだった。

この別棟の住人が決して好まないような大きな音を立ててt・・・ヒカルという名前の晄を纏った風が、そこに入り込んだ。

そして感歎の声を漏らす。
彼の記憶している童女の声よりもっと静かな低い落ち着いた声音で。

「・・・ルイ・・・・」
彼女はもう一度・・・星辰の子の名前を呼んだ。
■むつのはな13

ヒカル・クロスはあっと目を見張った。
居間に入ったのは、つい先ほどのことで・・それほど時間は経過していないはずだった。
それなのに。
ヒカルが居間に入った時と、すでに入室していたルイがパチンと主電源のスイッチを入れたのは同時だった。

・・・・・奇蹟が起こっていた。

外から内側の様子は窺いすることができない設定になっていた。
彼が居る時はいつも、透過性のないように・・・要するに見えないように設定されており、室内灯の切入だけしかわからない。そして彼はいつ睡眠を取っているのかわからないほどに夜遅くまで灯りを漏らしていた。
だから先ほども、内部がそのようになっていることには気がつかなかった。

目の前に広げられた星辰に目を見張った。

ルイ、と掠れた声を出した。あまりにも驚愕して。

そこには・・・星辰があった。

様々なクリスタルのツリーが並び、発光ダイオードの晄が淡く無作為に点滅したり点灯したりしている。一番大きいもので、ヒカルの腰程度しかない。
それがいくつも・・・それほど多くはないが、広い居間の中を点在して美しい晄を放っていた。時には蒼く。時には翡翠の色に。白く点滅しそしてまた淡く象牙色に戻っていく。華美が過ぎるという程度の前の段階で踏みとどまっている装飾光だった。
いくつもの・・・星のような煌めきがクリスタルのツリーに落ちては消えてまた灯る。

しかしそれらはどこから運び込まれたのだろうか。
ヒカルはこの別棟の庭先で雪を抱えていたのに。

彼女はしばし呆然としてその景色を眺めていた。
あまりの美しさに息を呑んだ。
発色したり発光したりするツリーは最近では珍しくない。
小型のオーナメントにでさえそのような仕掛けが施されていることも普通に目にするようになった。

しかし・・・この艶やかさと清らかさの混在した光の杜は・・・・なんと素晴らしいのだろう。
彼女は初めて見たものだった。
ただただ・・・空から降り注ぐ流星ではなく、地から立ち上る光源に目を細めて・・しばし絶句した。

「・・・昔、作った。・・・発光ダイオードを不均一に点滅させる省電力タイプの玩具を作った。それだけだ」
ルイが静かにそう言った。

彼は部屋の中央で、じっと・・整った横顔で、それらを見つめていた。
薄い青灰色の瞳で彼は何を考えているのかわからない。

なぜこれほどの試作品を作りながら、彼が商品化しなかったのか、わかったからだ。
だからどうして、と聞かなかった。聞けなかった。
それらは・・・ルイの願望を表しているかのように見えた。

ヒカルは胸から込み上げるものをどう扱えば良いのか戸惑っていた。
・・・ルイの考えていることが少しばかりわかったからだ。

彼は溶けてしまう雪の杜の代わりに、
彼は消えてしまう夢の代わりに。
それを作ったのだ。

クリスタルの雪の樹は決して消えない。
木の枝に僅かに乗った雪の膨らみも、真白に覆われながらも生き生きとした枝葉を伸ばす様も。
そのひとつひとつがとても繊細に精巧にできていた。

「・・・これらに名前をつけているのなら教えて欲しい」
ヒカルは詰まりそうになる声を隠しながら、そう低く言った。

ルイがなぜ薄着で外に出てきたのか。
彼は作業していたのだ。これをヒカルに見せるために。
消えて儚くなってしまう六花の塊ではなく、決して消えない星の晄を携えた雪の樹を彼女に与えた。

それらは・・・深く閉ざしたままのものだったのだろう。
ヒカルが初めて見るそれらは・・・一体いつ、ルイが作ったのかさえわからない。

整った顔は大変に・・・あのフランスの華に良く似ていた。
しかしシャルル・ドゥ・アルディより更に深い憂いをその年齢で知っていた彼の瞳はすでに若者から壮年の瞳だった。肉体だけが若く魂は遠く離れてしまっているかのように。
・・・それを作った時に。誰にも見せないと決めた時に。誰も来訪しない客間にそれらをしまい込んでしまった時に。

・・・彼は何もかもを捨ててしまったのだ。

ルイは静かに言った。
ぽつり、と一言だけ。

「むつのはな」

雪のように消えることのない願いの樹を創ってなお・・・彼は儚い願いであることを知っていたから。

だからそんな名前を付けたのだと思った。

ヒカルは唇を噛んだ。
声を押し殺した。熱い吐息を漏らすことを制限する。
そうでなければ・・・涙が出そうだったから。
しかしそれはルイは望んでいない。
彼は憐れみを最も嫌う。

・・・誇り高い彼を傷つけたくなかった。

そうなるかもしれないと思っているのに、ヒカルの目の前にむつのはなの杜を広げた彼の心は・・・やはり深く冷たい雪の底にあるとは思いたくなかった。
■むつのはな14

ヒカルが置いた雪のツリーはすでに跡形もなく在るべき姿に戻っていた。
そして彼女が昔使ったオーナメントは・・・クリスタルの杜に飾られていた。
ひとつひとつ願いを込めてそれらを選んだ。

豊穣を表す麦、来訪を知らせる聖鈴、智慧を表す林檎、聖なる光を表すキャンドル・・・ひとつひとつがヒカルにとってシャルルからの大事な贈り物だった。しかしそれ以上にそれらに込められた意味と願いと・・・誰かに伝えたいと思う気持ちがヒカルを動かしていた。

「むつのはな・・・」
彼女が復唱すると、ルイは視線の方向を変えることなく、抑揚なく言った。
「・・・雪のこと」
六花とか六華とかいう言葉があることは知っていた。それはシャルルが教えてくれた。
しかし、これは同義でありながらもっと違った意味があるように思った。

「それなら、これは決して消えない『むつのはな』なのね」
ヒカルがそう言って、近くに備えられたうちのひとつに腰を屈めた。
彼女の白い頬に、発光ダイオードの強烈な光を和らげた人口の柔光が反射した。
茶色の髪が青や緑や橙などの色に染まった。
それなのに彼女は染まらない。何ものにも染まる真白であるのに何にも染まらない。

彼女が創ったむつのはなとルイの創ったむつのはなは違った。
それでもそれらは根源は同じだった。

「素晴らしいわ、ルイ」
ヒカルは素直に驚嘆した。そして讃辞の言葉を述べた。
しかしそう言った言葉にルイは動かされない。ただ冷たく彼は答えた。
「そう」

しかしヒカルはこの想いを伝えたくなり、彼の傍に寄った。ゆっくりと立ち上がりそしてルイ・ドゥ・アルディとの距離を縮めるが、そこには・・いつもヒカルと一定距離を保っていたルイはいなかった。
背が高くなり、筋肉質の鋼のような身体に寄り添うが、薄暗い光の中で彼の横顔は、ヒカルの知っている・・・天使のような美少女と見紛うばかりの中性的な顔立ちのルイ・ドゥ・アルディではなかった。
すでに少年から青年に変化しつつある彼の顔を見つめながら、ヒカルは懸命に言葉を紡ぐ。気の利いた言葉は言えない。けれども、何かを言わなければ・・・ヒカルの創った雪の樹と同じように、そのまま消えてなくなってしまいそうだった。
存在しなかったわけではない。形を変えただけだ。雪が水になるのは自然の摂理だ。

その摂理に反した永遠に溶解することのないむつのはなを創りだしたルイに・・・そうしたら何が伝わるのだろうか。

「・・・むつのはなという名前が気に入った」
「ヒカルに気に入られるための名前ではない」
「うん。でも良いと思った」
彼女は笑った。

「消えてなくなる者だけが支給品と言わないとヒカルは言うが。何を贈ったのかわからないものを用意するのは浅はかだな」
ルイ・ドゥ・アルディが辛辣にそう言ったので、ヒカルは苦笑いを浮かべた。そして笑う。
「そうだね」
「どうしてそうやって先のことが見えないのか・・」
「そうだね」
「ヒカルは何か結果をもたらす生産的な行動について考えて実行するように」
「そうだね」

そこで同じ言葉を繰り返すヒカルに向かって、ルイ・ドゥ・アルディが少し苛立ったように顔をヒカルに向けた。

「・・・・・おい」
そこで初めて彼女が微笑みながら涙を流していることに気がついた。
彼は繰り返さない。
同じように、同じ言葉しか復唱しない者は会話を継続することを断絶させるようにしていた。・・・まったくの無駄な会話だったからだ。
彼には復唱も繰り返される返事も必要なかった。
それを知っているはずなのに、ヒカルが同じ言葉を繰り返したので、彼を侮辱しているか・・・考えが遠く及ばない域に彼と彼女が遠く離れていることが決定的になったのだと思った。
だから少し険しい顔つきになり、ヒカルを物憂げな青灰色の瞳で見つめ返した。

そして・・・また薄い唇を閉じる。ぎゅっと横に引いた。

彼は、今日、帰国したばかりなのに。
久しぶりに、彼女に逢ったのに。

それなのに・・・こうして彼女を・・・彼女の表情をいくつも何度も変化させる。

その姿が・・・仄かに薄暗い室内で、ただただ・・・聖女の預言のように厳かで少し悲しみを帯びていて・・・何とも言えない雰囲気を持っていたので、彼は口を噤んで黙った。
■むつのはな15

泣かない娘を泣かせることに優越感を感じているわけではない。
・・・そうしようと意図して何かを言っても、彼女は涙を見せない。
ヒカルが何に心を動かされるのか・・・彼はまったく理解できなかった。

それなのに。
理解できないのに、こうして一緒に居る。
必要でないのに、彼女に「むつのはな」を見せた。
疲れている身体であるのに、昔に創ったままにしてあったそれを・・また持ち出すことにした。
必要最小限しか保存しないことにしているのに、それを・・・いつまでも手元に置いてあった。

商品化してないから。
未発表だから。

理由はいくらでも創り出すことが出来た。

しかし、ルイが自ら動いて、ヒカルの目の前に出した、ということには説明がつかなかった。まったく利益がなかった。

消えない雪というものがあることを知らしめたかった。
彼女の才はルイと違って・・・ヒカル・クロスという人物が、実現することのできないものを夢見て有限の材料しか使うことの出来ないごく普通の人間であることを証明しただけだった。
ルイとの違いを見せつけたかったのだろうか。
それは単に・・・見せたかったのではなかろうか。

彼女に。
消えない願いを。
消えない・・・想いを。

幾月も離れていても。
容姿が変わっても。
彼は彼女を間違えずに認識した。

それなのに。
彼女は最初、シャルルとルイを混同しそうになり、名前を呼ぶことを躊躇した。

それなのに。
彼は彼女をすぐにヒカルだと認めたのに。
「ルイ・・・ありがとう」
「ヒカルのためじゃない。・・・気まぐれだ」
彼は素っ気なくそう言った。
「さ、行け。そろそろシャルルが戻るのだろう。・・・オレは少し休む。今日のディナーは出席しない」
そして横を向く。
次に・・・彼はヒカルが決してそう望んではないと知りながら次々と言葉を出していった。
「ここの品が欲しいなら、くれてやる。・・・しかし二度と・・ここに無断で入るな」
「ルイ・・・私は・・・」
「ヒカル」
ルイがヒカルの言葉を遮った。
その時、彼と彼女は向かいあって・・・張り詰めた空気が間を流れた。

イルミネーションが変化して・・一定の時間が経過すると、省電力モードに切り替わるようだった。
徐々に光量が落ちて・・・やがて消え入りそうになる程の小さな光に変化していく。
淡く・・ヒカルの肌の色のような淡い練色の光になった。
先ほどの様々な色合いの変化変転は、生じなかった。

「行事には興味がない、と言っただろう。特別だなんて思い上がるな。・・・オレはヒカルが早くいなくなれば良いのに、と思っている。それが今のところの願いだな。・・・・ヒカルが本邸に戻った後に静かな時間を過ごしたいだけだ」
ルイは肩を竦めた。

彼女の涙顔を見ないように、背中を向ける。
・・・このまま、薄暗がりの中で一緒に会話していれば、彼は予定を早めることも厭わなかった。ヒカルを娶ることを予定している。
シャルルが苦しむ絶妙の機会に実行するつもりであったが、それは今ではなかった。
まだ幼い彼女の魂を奪うのは効率的ではないと考えた。
シャルルがそれを聞いて哀しむどころか当主の権利を行使して、ルイを滅する準備を整えるだろうと思った。そしてそれは確実な未来になるだろう。

彼女が両手で頬の涙を拭う気配がした。
・・・その仕草は本当にまだ・・幼い。

彼は幾度もこうして・・・彼女の変わっていく姿を見つめながらどの場面で「その時」だと思うのだろうか。
■むつのはな16

記憶が白い吐息に変わる。
白い吐息が・・・むつのはなに変わる。

彼は目の前に広がる雪の杜の光に目を細めた。
自ら創りだしたものであるのに・・・それにはもう興味はない。

ただただ・・・それらに感歎するヒカルの溜め息を耳に残す。

ルイと呼ばれて、彼は震える。
凍えて震えるのではないのに・・・震え動く。

彼女に唇を重ねようとしたとき。彼女は大変に驚愕した。
タオル越しのキスでやめるつもりなかった。

・・・もう戻れなくなっても良いと思ったのに。

それなのに彼女の動作があまりにも稚拙で・・彼は溜め息とともにその焔を鎮めてしまった。
男女の睦みを知らないわけではなさそうだったが、ヒカルの抗いの動作があまりにも幼くて・・・彼は気が殺がれた。

毎日顔を合わせているわけではなかった。
だから今回の留学もいつもと同じだと思った。
ヒカルはこの家に囚われているということに気がつかない愚かな住人だ。
ここが自分の終の棲家だと信じて疑わない。

雪はとける。
雪消の水は手の平で掬うことは出来ても留めることは出来ない。
同じように自分が今見ているむつのはなの花瓣のような儚い願いを誰かが継続させてくれるであろうと思っている。

・・・奇蹟は降ってこない。待っていても都合良く目の前に現れない。

それなのに。
そんな彼女を消し去れない。
自分の中から滅することが出来ない。

記憶から消し去ることが出来ない。
それは彼が忘れられない性質の持ち主だからだろうか。

・・・・いや違う。

逢わなければ逢わない時間だけ・・・ヒカルの顔を見ると記憶が増すのだ。

逢わなかった時の間のヒカルの様子を想像し、彼は記憶を増やす。
逢った時のヒカルの表情を見て、彼は白い溜め息を増やす。

「願い事をしようと思うなよ。・・・これは単なるオブジェだ」
彼は素っ気なくそう言った。
早く出て行け、と言わんばかりに。
そして当初の目的だった熱いティーの給仕は必要がなくなってしまった。
・・・・とっくに冷めてしまっていた。

しかしヒカルは言った。
出て行け、と言われたのに。
気まぐれで入ってこい、と言われたのに。
彼女はそれでも目の前の荘厳な光の森にうっとりと茶色の瞳を輝かせて見入っていた。

「・・・・これほど素晴らしいツリーを見て、何も思わずにいることは難しい」
ヒカルはそう言った。
「考えるのは勝手だが」
ルイは短くそう答えた。
・・・なぜ、この少女は自分自身に対する悪意とか敵意を無視することが出来るのだろうか。
決して喜んで招いた相手ではないとルイが考えていることは、わかっているはずなのに。

「・・・ルイが私を好きじゃないのは知ってるよ」
ルイは整った眉を少しだけ動かした。
薄い唇がぴくりと動く。・・・彼は無表情でいたのに、彼女はルイの考えを読み取ったかのような発言をした。

「でも良いの。ルイが帰ってきてくれて嬉しいから」
彼女はさり気なく言った。
そして彼に幼い横顔を見せながら・・・彼女は言った。溜め息を漏らしながら。
嘆きの吐息か、陶酔の呼吸か・・・それははっきりとしていなかった。どちらも含んでいたのかもしれない。

「・・・この景色をあと何回見ることが出来るだろうかと数えていたこともあったけれど。・・・もう、数えないことにする。残りの季節を歎くより、次も見られるかも知れないと思うことにする」
「前向きな発言だと褒めてやりたいところだが、それは根拠のない夢想だな」
「そう。・・・・むつのはなは夢を見せてくれたから」
彼女は笑った。
茶色の髪が少し揺れた。・・・彼が雫を払って遣った癖の強い髪は、彼女の背中で躍る。

今。
・・・手を伸ばして彼女を抱き締めたら。
ヒカルはそんなことは二度と言わないだろうと思った。
帰ってきてくれて嬉しいとは・・・もう言わないだろうと思った。

「ルイと一緒の冬は好きだ。ルイに感謝しないとね。
・・・・こうして雪を愛でて・・・ルイの帰りを待った楽しい時間を私にくれた」

ルイは無言だった。
誰かに待たれることについて何かを考えたことがなかったから。

誰も彼もが彼を独り占めしたがる。
しかし彼は決して誰にも心を許さない。あの教育係の・・・彼の叔父にでさえ。

それなのにヒカルは彼の心に滑り込んでくる。
入ってきてはいけない領域に入ってくる。

・・・・あの人の娘らしい。

ルイは苦笑した。

なぜ・・・永遠の晄という名前の彼女は・・・彼のむつのはななのだろう。

雪消えとならない。
彼女は・・・消えない。

心を冷たくさせたり凍えさせたりするのに。
一瞬にして熱くさせる。

彼の創りだしたむつのはなの杜と同じように。

世の理とはずれた・・・人口光とヒカルは同じだった。
決して消えない。消し去ることが出来ない。
■むつのはな17

この想いも・・・雪と一緒にとけてしまったら良いのに。

ルイは大きく溜め息をひとつだけ、吐き出した。
戻って来た、という感傷はなかった。
けれども・・・ここにやって来る度に。
こうして白い吐息に混じった何かを彼は考え続けるのだろう、という確信めいた予感を持った。

ヒカルはそれを聞いて、戸惑った顔をした。
彼を酷く落胆させてしまったと思ったからだ。
「ルイ。・・・長居はしない。けれども・・・・」
「ヒカル。ここにはもう入るな」
彼はそう言って彼女の退室を促すように顎を僅かに持ち上げた。
身体が冷えてきた。おそらくヒカルもそうだろう。
淡い光に照らされて顔色が定かではなかったが、このままこうして互いに温度差のある内外を行き来していれば、体調管理に余念がないルイはともなく、ヒカルは間違いなく失調するだろう。

「時間に間に合わなくなる。・・・ここで時間を過ごしていたことを知られて叱責されるのはオレだ。それくらい判断できる年齢になったと思うが」

彼がそう言ったので・・・ヒカルは何かを言いかけてすぐに唇を閉じ、はい、と小さく頷いた。
萎れた薔薇のように彼女は見る間に萎縮していく。

彼女は居間で輝くむつのはなの木々を見て、しばらく名残惜しそうにしていたが、やがて諦めたようにそっと目を伏せて、本邸に戻ると言った。

「また・・来ても良い？」
ヒカルはぽつりとそう言った。同じ敷地に住んでいるのに。こういう約束の言葉を交わさなければ、彼とは滅多なことでは顔を合わせることが出来なかった。
シャルルに頼んでルイを食事に招いても、彼は決して嬉しそうな顔をしない。
彼の怜悧な顔つきも・・・冷たい視線も・・・ヒカルの仲立ちはすべて煩わしいと全身で訴えていた。

「諦めろ」
ルイは冷たく言った。

ヒカルは小さく呻いたが、やがて諦めたように項垂れて言った。
「・・・戻ります」
ルイが発言を覆すことは決してしないと知っていたからだ。
ここで粘っても彼は変更しないと一番よくわかっていたのはヒカルだったから。

「結構」
ルイはそう言って、別れの挨拶もしなかった。
社交界での決まり事のように彼女を見送ることもしなかった。
ただ黙って・・・居間に残り、腕を組んでじっと淡い光の点滅を眺めているだけだった。
オートロックだから、一度外に出れば彼女は中に戻ることが出来ない。

「ルイ・・・今日のディナー、ルイにケーキを焼いたの。だからできれば来て欲しい」
「返事はしたはずだ」
彼はまったく無関心であるという声音で返答した。ヒカルはそれでも、わかった、と言わなかった。
「ルイにこのむつのはなを見せてもらったから、是非お礼がしたいの」
「ヒカルの甘すぎるケーキを食べて胃がもたれるくらいなら、絶食したほうがましだ」
ルイはそう言った。そして出て行くように、と言う。
「次はない。・・・あと3分待つが、それ以上経過してもここにいるようなら、ヒカルをたたき出す」

ヒカルはそこまで言われてようやくルイに背中を向けた。僅かな溜め息を漏らしていたが、それは失望の吐息だった。
せっかく逢えたのに、と言いたそうだった。
しかしルイはそれを無視した。
・・・どうしても彼女をここに留め置くことは出来なかった。

それ以上ヒカルがいれば・・・本当に彼女の肌と体温を捧げろと言いそうになった。

もう・・・戻れないのに。

彼は少年から青年になった。力は勝る。しかしそれではシャルルは苦しまない。
彼女が自分から・・・ルイに寄ってこなければシャルルは何よりも大事にしている掌中の薔薇を人目につかない場所に隠してしまうだろうと思った。

幾度かヒカルは振り返ったが、それでもルイが振り返らず、予定を変更するつもりもないと知ると・・・もう一度だけ、待っているね、と言って別棟を後にした。
かたん、と音がして、彼女は扉を開けてひとり外に出た音がした。

・・・息を吐き出す。
もし、これが外気温と同じ程度に温度の低い室温であったのなら。
・・・彼の吐息はこれまでになく白く濃く・・・・むつのはなより鮮やかでそれでいて淡いことがはっきりと見えたことだろう。

しかし温度が低ければ低いほど。
白い吐息はすぐに外気に混じって消えていく。

彼は金の髪をかきあげて・・・天井を向いた。
ヒカルが完全に別棟を離れたという・・・気配がないことを確認した上でのことだった。

上を向かなければまた吐息が出る。
胸の重みに耐えられなくなりそうだった。

・・・・おかしくなりそうなほど。ヒカルをどうにかしてしまいそうなほど。

雪の静寂に音だけではなく、もっと別の何かも吸い込まれていきそうだった。

大きな手のらで顔を押さえる。
それは彼の父であるフランスの華が・・・・かつてそうした仕草ととても良く似ていた。

愛する人の目の前で。
愛する人の愛する者を演じてしまいそうになり、彼は歎いて天を仰いだ。

同じように。
彼も・・・・気まぐれと言ったあの行為を。
あの男ならやるだろうと思った。
ヒカルの心にこたえてやるために、彼なら・・・この家中に雪を降らせることも厭わないだろう。

それでは彼女が砂の城を作らせることと同じだった。
胡蝶の夢を見ろと言っていることと同じだった。

だから、彼はシャルルと同じでないことを示すために行動した。

‥‥結果は同じだとわかっていたのに。
シャルルがかつて歎いたように。
彼も・・・彼のやり方を示すために、彼らしくない振る舞いをした。

ヒカルに無償の優しさを与えてやる必要などなかったのに。
それが彼を激しき傷つけることも、十分分かっていたのに。

それでも・・・・彼女の微笑みはこのむつのはなの杜の光より・・・眩しく煌めく。
■むつのはな18

ヒカル・クロスは自室に入ると、扉を背中にして、吐息をひとつ漏らした。
紅潮した頬の火照りが引いていくのを感じる。

薄いカーテンの向こう側は、冷え切った闇夜が広がっている。
・・・シャルルと時間を過ごした。

一般的に家族と過ごすとされている行事には、彼は毎年趣向を凝らしてヒカルを楽しませる。
寄り集まる家族が少ないアルディ家で寂しくないように。
血族が数多存在するというのに、シャルルは誰とも親しく交流しようとしない。

けれどもヒカルは多忙を極めるシャルルが一緒にいてくれればそれで良かった。
時間を調整していることをまったく表情に出さずに、ヒカルのために穏やかな時間を与えてくれるシャルルの大きな心が嬉しかった。

・・・今夜、ルイは自室で休むからという伝言だけを寄越して現れなかった。
シャルルは少し眉を顰めて「そう」とだけ言った。
シャルルが何も感じていないかというとそうではないと思った。
小さい時から家族の情愛について、シャルルは考え続けていたはずだった。
大人になって・・・自分に家族が存在するとわかった以降も考えているのだろうと思う。
彼の心を照らす、融けることのないむつのはなは・・・現れるのだろうか。

だから自分も同じように、誰かのために何かをしたかった。
烏滸がましい考えであるとわかっていたけれども。

ルイにも同じように・・シャルルが愛を知っているように、ルイが愛を注ぐ人物が現れれば良いのに、と思っていた。

ルイは・・・自ら雪の杜を作りだした。そのような人物は必要ないと言うかのように。

・・・・毎年、ヒカルはこの夜に祈りを捧げる。

自分のことを祈るのではなく、シャルルとルイのことを祈る。
自分の身の回りの人が幸せになりますように、と祈る。
この冬の記憶が、ヒカルにとって哀しい思い出になることはないだろう、と強く念じながら。

同じ景色を見てきた。ルイと同じ雪を見た。そして彼の心の底に潜む、あのむつのはなを見た。
でもそれをシャルルに言うことは出来なかった。
ルイとシャルルの間に介入することは許されていない。

それでも・・・それでも。
逢うたびに、彼はシャルルに似てくる。シャルルが駆け抜けていった時代を彼は繰り返している一方で、シャルルと同じではない路を進もうとしている。
医学界に身を置いたシャルルと違い、彼はシステム関係や知的財産権に進もうとしていた。いずれ・・・教育係のミシェルとともに、ルイが先頭に立って、これまでアルディ家が手薄だった事業を拡充させていくことになるだろう。もうすでにそうなりつつあった。
ルイが滅多に家にいないのはそのせいもある。
彼は・・世の中の同年齢の者が経験するものを体験することは放棄してしまっていた。彼の精神はすでに大人になってしまっている。

そこでヒカルは溜め息をついた。

・・・少し遅くまで話し込んでしまった。
シャルルは幼いヒカルをこども扱いせず、話を聞き、自分の話を解釈しやすいように説明し、そして様々な贈り物をヒカルに捧げる。
余りにも多いので、彼女は明日また改めて受け取ると言って、それらを部屋に運ばせることは延期した。この部屋に溢れるほどの贈り物をシャルルは用意していた。

シャルルはルイにも彼は用意していたはずだったが、それはヒカルの前では触れなかった。

茶色の瞳を伏せて、ヒカルは首を振った。
長い時間不在にしていた部屋は、少し寒かった。
目を上げると・・・窓の外では、雪が・・・雪が降り始めていた。

ヒカルは窓辺に寄り、硝子ドアを開けてバルコニーに出た。
彼女の部屋の窓から出られるスペースから、アルディ家の庭が一望できる。
部屋の中は寒いと思ったが、それよりもっと冷たい、刺すような風が彼女の顔を吹き抜けた。
小さな声を漏らして、ヒカルは目を閉じる。
しかし、すぐに目を開くとその風はとうに彼女の通り抜けて、室内の暖風と混じり合ってしまっていた。

あたたかい風はシャルルで、この冷気はルイのようだと思った。
でも本質は一緒だ。
それらはこうして混じり合うことができる。
融合することが出来る。

・・・もとは同じ、この薔薇の家の者なのだから。

この家の者ではないから。
だから、ヒカルにはそれがわかる。
でもそれをどれほど言っても、彼らには伝わらない。

静かな空間が広がっていた。
あたりは白く色がついて・・雪が積もっていた。
それほど多くは積もらないだろう。
それでも静かに、音もなく、雪の衣はアルディ家の敷地も庭も覆い尽くして・・・広がっている。

彼女は真白の息を漏らしながら感歎していた。

寒さを忘れて・・・しばらくその厳然たる景色を眺めていた。
もう二度と同じ雪は降らない。この冬も同じ冬にならない。
わかっている。

なぜだろう。

・・・胸が苦しかった。

この静かな世界を見て、自分はそこに居て良いのだろうかと思った。

侵してはならない聖域が広がる。この家の薔薇を覆う白雪が・・・彼女を咎めているような。そんな気になってくる。それでも眺めずには居られない。

贖罪の娘、とルイはヒカルのことを言う時がある。
罪を償えという意味なのか、もっと違う意味なのか、ヒカルにはまだ理解できなかった。
それでも・・・贖罪という名を刻まれて、ヒカルは雪を素直な清らかな気持ちで見ることが出来ない。
自分の後ろ暗い・・・生きていくために身につけた狡猾さを、純白の雪の果て（雪の果て：※その年最後の雪のこと）に咎められているようだった。

ルイの青灰色の瞳はとても澄んでいるけれども、果てのない静けさに吸い込まれていきそうだった。この雪のように。冷たいとは思わない。
ただ、音がない。
■むつのはな19

「・・・・あ」
ヒカルはそこで言葉を出した。

手摺りに薄く積もった雪の上に、彼女は手の平を置いた。じわり、と凍える痛みが彼女の手の平に広がり、それはすぐに雪消えして冷たい雫になった。
それも気にならないほど・・彼女は薄着のまま、ルイの別棟を凝視した。

・・・ここから彼の別棟がよく見えた。
冬で、木々が落葉し、降雪を避けるために今月かなり短く剪定されたので、彼女の部屋のこの位置と、ルイの別棟の居間とは互いによく見える。
・・・でもこれまで気がつかなかった。

これほど近く、彼の今が見えるなんて。

いや、違う。

ヒカルは手摺りの上の手の平をぐっと握った。
こぶしの間から、雪雫が漏れて彼女の手首を伝っていく。
それすら気にならない。

・・・身を乗り出した。もっと近くで見ようとして。

ルイの居間は決して外側から見ることが出来ない。
いつも透過性調節を完全にオフにしてしまっているから。
だから淡く光が灯っているかどうかしかわからない。
・・・いつもは。

しかし今日は違っていた。
ヒカルは濡れた手で、顔を擦った。自分の手の平ではないと思えるほどに冷えた指先が雪で濡れており、そして彼女の意識をより鋭敏にさせていく。

今夜の居間は・・雪の視界の中で、中がよく見えた。
・・・窓際にルイが座って居た。
床に腰掛けて・・・彼はじっと・・・外を眺めていた。

見事な金の髪の若者が・・窓辺で雪の沈んでいく庭を眺めている。

間違えようもない。あれはルイ・ドゥ・アルディだった。
長い脚を伸ばし、片膝を少し立てて、その上に同じように長い締まった腕を片方乗せていた。

そして・・・彼の部屋の灯りは、天井の照明の光ではなかった。
・・・彼が気まぐれだ、と言ったあのむつのはなの晄だった。
発光ダイオード特有の色味が・・・ルイ・ドゥ・アルディの別棟を、ゆっくりと不規則に色を変えていく。
蒼に、翡翠に、黄櫨染に・・・それらは淡く晄り、別棟のその一角をこの世のものとは思えない聖域にしていた。

それらに照らされて・・・眩い金の髪を光らせているルイの様子を見て、最近見た絵画を思い出していた。
彼は美しかった。
少年から青年になる渡河に居るルイは、神の子のようだった。

・・・その絵画の降臨の場面をヒカルは思い出していた。
実際は、絵画の中の人物とは、彼の髪の色も肌の色も、瞳の色もすべて違っているのに。
どういうわけか、その時の粛然とした空気を思い出したのだ。

昔。
てんしさん、と彼女は彼のことを言った。
金の髪に、青灰色の瞳に、そして整った美しい中性的な顔立ちが印象的だった。
しかし、彼女の目の前に座って晄を浴びている人物は・・・
生と死の間から生還したあの希なる人物を彷彿とさせる神々しさを持っていた。

ルイが怖いとは思ったことがない。
でも時々近寄れない、と思うのは、彼があまりにも美しすぎて、神々しいからなのだ、と思った。
彼女が穢れているから。
この家で生きていくために、様々なものを押し込めて生きている殻。

・・・だからこの雪のように、触れてはならない。

ヒカルはあわてて室内を消灯した。
・・・彼のことがこちらから見えるということは、彼の側からもこちらが見えるということだ。
彼の静かな時間を乱してはいけない、と思った。
本当だったら、今すぐ、この部屋を飛び出して彼の別棟に行き、祝いのキスを降らしたいところだった。
でも彼はひとりにしておいてくれと言った。だから彼には・・触れられない。

彼女の作ったケーキを届けてもらおうと思ったが、誰も棟内には入るなと言われたので、明日出直すと伝言を入れたばかりだった。

ルイはアルディ家の唯一の後継者候補であるから、彼にも贈り物や届け物はたくさん届いていた。それなのに、彼はそういったものにはまったく興味がなく、内容物を確認したり包みを開いたりすることもしないし、別棟に運び込ませることすらしない。

ただ何もない空間で・・・ルイは何を考えているのだろうか。

その時。

ルイがふと、顔を上げた。
表情は見えなかったが、こちらを見ている。ヒカルの部屋の灯りがついたのに、すぐに消えたので、その点滅に気がついたのだ。
ヒカルは声を漏らした。ここから相当距離があるはずなのに、ルイがこちらに気がつく。
庭に面した数多ある部屋の一画でしかないこの部屋の灯りに・・・彼は視線を向けたので、ヒカルは声を漏らした。
「ルイ」

ヒカルが囁いた。白い息が漏れて宙に浮き、そして昊に昇っていく。
この距離を超えていけたら良いのに。

・・・しばらく、ふたりは無言で見つめ合っていた。
表情はわからない。
でも視線を感じた。
遠い距離なのに、彼の白い吐息がヒカルの近くにあるような気がした。
ゆっくりと深呼吸する。冷たい空気が肺に入り、火照った頬から熱を奪う。

ひとりは青灰色の瞳で、もっと淡く光輝を背にしながら。
もうひとりは茶色の瞳で、降りしきる無音のむつのはなを浴びながら。

傍に居るだけで・・・繋がっているように思う。傍に居なければもっと近く感じる。

やがて彼は流れるような動作で優雅に立ち上がり、そして窓辺に立った。
背が高くなった。髪も・・・少し伸びた。ヒカルの知っているルイからヒカルの知らないルイになっていく。その様子を少しでも・・・少しでも目に焼き付けておこうと思った。
ヒカルの祈りも溜め息もすべて彼は知っている。

■むつのはな20

彼はしばらくヒカルを眺めていたが、やがてふいと横を向いて、背を向けてしまった。
片腕を上げて・・ヒカルに挨拶をしたように思える。
あっと思った瞬間には、彼は居間の奥深くに消えて・・そして次には、遮光スイッチを入れて、室内は全く見えなくなってしまった。
・・・淡い色も消えて、別棟は暗闇になった。
その代わりに、雪明かりによって周囲がぼんやりと明るくなっていることに気がつく。

・・・・ルイはヒカルを待っていた。

彼女はまた見に来ても良いか、と言った時。彼はもうあの場所には足を踏み入れてはいけないと言った。
それでも名残惜しそうにしていたヒカルを覚えていて・・・
そして彼女が何時に戻ってくるのか知らないはずなのに。
ヒカルが気がつかないで、そのまま休んでしまうこともあるかもしれないのに。

彼はむつのはなをそのままにして・・・待っていたというのだろうか。
永遠の楽土のような場所でひとりきりで・・・彼は何を考えながら夜を過ごしたのだろうか。

ヒカルの目に涙が浮かぶ。
憐れむな、と彼は憤る。だから彼のための涙は彼の前で流さない。
それでも、粛とした晄をヒカルに贈るルイが・・・冷たい人間だとはどうしても思えなかった。

彼女はもう点ることはないと知っていたが、しばし雪明かりの中に深く沈降していく別棟の仄闇を見つめているばかりだった。

どんなに哀しくても、眠ったら次の日は微笑むことが出来た。
でも。
今夜は眠りにつくことが難しそうだった。
外がとても静かだから。
外がとても明るいから。
そして・・・あの晄は贖罪の娘と呼ばれるヒカルには眩しすぎたから。
淡い晄なのに。それでも・・・彼女は手が届かない。
永遠の晄という名前なのに。晄になることができない。
ルイの晄は・・・いつになったら現れるのだろうか。

彼女はしばらくの間、そこに佇んだままだった。
ヒカルの白い吐息は・・・・幼い少女としてのヒカルの最後の溜息だった。
彼女は眠れない夜を知った。

＊＊＊

ヒカルはベッドで寝返りを打ったが、関節痛に顔を顰めて、大きな枕に顔を埋めた。
さきほど薬を飲んだので、意識が朦朧としていた。うつらうつらとして眠り、短い時間だけ覚醒して水分を補給する。

雪空の下で一日の大半を過ごし、夜半過ぎまで薄着で過ごしたために、発熱したのだ。
しかもかなりの高熱で、原因を尋ねたシャルルが呆れながらも数え切れないくらいのたくさんの薬を処方した。
そして今日は早く帰邸する、と言って出掛けていった。
彼女の失調のために、シャルルは予定を変更して、出発時間を遅らせたのだ。そのぶんのしわよせが来てるはずなのに彼は何も言わなかった。
ただ、これ以上無理をするなら注射だ、と言ったので、彼女はそれはイヤだと言った。
まだこどもなのだから、とシャルルは困ったように言った。
彼女をこども扱いしないシャルルは時々・・・彼女のことをそうやってこども扱いする。

わざとそうしているとヒカルは知っていた。
だからわざと注射を怖がる幼いこどものふりをした。

彼が・・・ヒカルが年齢を重ねる毎に、あの人に似てきていることに対して何も思っていないはずはなかった。
いつか、彼とあの人が知り合った年齢に追いつき、そして追い越してしまうだろう。

「ヒカルはオレの・・・希望の塊だから」
彼はそう言って寂しそうに微笑む。
でも少し嬉しそうでもある。
またあの人に会えると心の奥底で思っているのかもしれない。
それでも良いのに、と思うこともあるが、ヒカルはあの人をほとんど知らなかった。

時間の経過が把握できていなかった。
学校が休みであったので、彼女は広い邸内でひとり体調を整えることを最優先することにした。シャルルはひとりで外出やヒカルが庭に出ることすら禁じてしまった。
もっとも、あまりに熱が高くて身動きすら取れなかったが。

・・・しかし夜更けに降った雪があまりにも美しくて、窓辺に寄っては白銀に光る雪景を眺める。
かなりの積雪だった。もう・・こんな降雪はないだろう、と言われるくらいの久々の大雪だったらしい。

また眠くなってくる。
鈍い眠気が彼女に気怠さを注いでいく。
瞼が重くなり・・・あと何回この目覚めと眠りを繰り返せば良いのだろうかと思う。

ゆっくりと枕から顔を持ち上げた。ひどく頭が重かった。
せめて窓から見える景色の一端だけは隠さないで欲しいと懇願したので、日中カーテンを開けておくことを許可された。
室内に居る時には、カーテンを引くようにと教育されていたけれども、今日ばかりは特別だった。

・・・夕焼けが見えた。そこでヒカルは頭を落として羽根枕に沈む。
高い天井に、夕焼けの光が映っていた。
・・・・雪に反射した夕焼けの光だった。
・・・・淡い金色の光がヒカルの居室いっぱいに満ちている。
今まで慣れた空間だとだけしか認識していなかった空間が・・・黄金に染まる。

雪がとけてしまう

そう思った。

今日は晴れだったのね、とこの壮麗な様子を喜ぶより、彼女は雪が気になっていた。
この家では温室があり、凍結防止のための様々な設備が整っているので、あっという間に雪は違う形になってしまう。
融雪の音が部屋に流れてきて、それを眠りの音楽にしていたヒカルは、怠そうに目を閉じたが、この瞬間がそう長く続かないと思い、瞼をゆっくりと瞬きさせて眠りに落ちないようにしながらも、そのまま動かずに・・・ただただ滅多に遭遇しない現象を眺めていた。
感歎の声を漏らしたり、出てはいけないと言われていた外に出ようとしたりする体力はなかった。
だから静かに・・・この色の移り変わりを眺めているだけだった。

いつだったか・・・そう、あれはここに来たばかりのことだった。
同じように熱を出して・・・シャルルと・・・ヒカルの教育係の女性が看病してくれた。だから寂しくなかった。
もう、両親を失った時からパリに来るまでそうしていたように・・・父母を恋しがって寂しくて、熱に浮かされて泣かなくても良いのだ、と思ったことを思い出した。
■むつのはな21

夢と現の境の中で・・・ヒカルはぼんやりと天井を眺めていた。
雪消の水音が遠く聞こえる。
・・間もなく夜が訪れて、冷え込めば、それは雪ではなく氷になるのだろう。

この金色の部屋で・・・ヒカルは眠ってそして目を開いたら、金の髪のこどもになることができるのだろうか。
陽光に髪を染めることが出来るのだろうか。

・・・そんなことを思いながら・・・目の縁から、涙を落とした。

涙で枕を濡らす。
いくつも、いくつもヒカルの大きな瞳から雫が落ちて・・それは消えて行く。
むつのはなにはならない。

・・決して変化することのない熱い滴だった。

消えゆく景色を眺めることができなかった。ヒカルは目を閉じた。
消えてしまう瞬間を見つめていることができそうもなかったから。

遠く聞こえる木立がさざめく音だけを聞いて・・・また眠りに落ちれば、シャルルが戻ってくる。だから、少し、眠ろう。

そう思った瞬間には、もう、深く果てのない音のない世界に落ち込んでしまっていた。

しばらくして、誰かが入ってきたことすらヒカルは気がつかないほどに深く眠り込んでいた。

ルイ・ドゥ・アルディが軽いノックをした後に、返事がないので部屋に入ってきたことに気がつかなかった。
彼は滅多なことがないかぎり、ヒカルの居室のある階層にはやって来ない。
彼女はアルディ家では家族同然として遇されていたが、ルイはいつまでもヒカルを客人扱いしていた。
最初に係の者が先触れを知らせるノックをし、室内に入って来る。
寝室でヒカルが眠っていることを確認すると、廊下で待っているルイにその旨を伝えた。
すぐに用事は済む、とだけルイは言うと、礼儀を守って居室の扉は開いたまま、寝室と彼女の居間を結ぶ次の間を通って、そこでも軽くノックをして寝室の扉を開いた。
未婚の男女がこうして片方の寝室に入るということはどういうことなのか知らないルイではなかった。しかし今回は止む方なかった。
この雪で、シャルルの到着が遅れると連絡があったのだ。

そして、まだヒカルの熱が下がらないようであれば、医師を呼べと指示された。
そんなことは誰か別の者に託せば良いのに、と反論したがそれは無視された。
シャルルは今日はこの大雪で通いの使用人が出勤できず、人が手薄であることと、医療従事者の資格を持つ者が今日に限って邸内にルイだけしかいないことを把握していた。

・・・そして射し込んでいる夕焼けに目を細める。室内の帷が垂れ込めていないので、ひとことふたこと独り言を言っていたが、ヒカルはそれすら気がつかなかった。
まったく起きる気配がなかった。
すでに日は没していて、淡い陽光になり、ヒカルが眺めていた鮮やかな黄金色は色褪せてしまっていた。

ルイは静かにヒカルに近寄った。
深く眠っているようで、まったく動く気配がない。人の気配にも気がつかない。
これほど眩しい室内で、何にも気付かず眠ることの出来るヒカルにルイは呆れていた。
彼は脳を酷使するので、一度深く眠るとなかなか目覚めない。しかしそれまでは不眠気味なので、静かで暗い空間でないと落ち着いて睡眠を取ることが出来なかった。

茶色の髪が放射状に広がり、ヒカルは目を閉じて眠っている。
額に汗が浮かんでおり、まだ発熱していることが伺えた。
・・・・彼女の白い顔は窓に向かっていた。
日没を見て・・・何を思ったのか、彼女は眼の端から涙を流していた。
ルイは溜息を漏らした。首を捻れば簡単に息を止めるような脆弱な人間を、シャルルはこよなく愛している。何も出来ない無力な人間を、シャルルは庇護している。

どうして、貴方はこういうものばかり愛でるのですか。

いつかそう言って、シャルルに激しく殴打されたことを思い出していた。

小さくて柔らかくて弱い。

アルディ家に必要としないものばかりでできあがっている小さな娘を、シャルルは・・一族の宝物よりも大事にしている。

ルイは黙って・・・彼女の額に手を遣り、そして指を滑らせて・・・細く長い指で彼女の涙を拭った。
他人のためにしか涙を流さない娘だ。その彼女がひとり、涙を流していた。
濡れた指先が熱くなっていく。
少し息苦しそうに呼吸しているが医師であるシャルルの処方は効果的だったらしい。
特段の心配はない。よくある発熱だ。それなのに・・・大事があってはいけないと憂慮するルイの父は、ルイのことには気をかける様子はなかった。

羨ましいとは思わない。
情愛は必要としないものだから。

けれども・・・けれども。
ヒカルの涙を拭いながら、そんなことをしてやる必要はないと思いながらも、彼は彼女の涙を指先に乗せる。
冷たく凍て付いた身体がそこから暖まっていくような感覚を覚える。

やがて彼は静かに・・・手の平をヒカルの頬にあてた。熱い頬だった。
薔薇色の唇と同じくらいに赤い頬だった。

くるくると表情を変えて、大きな瞳を輝かせて・・そしてルイの名前を呼んで、細かい創り込みができないからという理由だけで素手で雪を固める少女を・・・ルイはしばらく見つめていた。

・・・多くの言葉を学んだのに。
言葉が見つからない。

この胸苦しい想いが何であるのか・・・説明しきれない。

なぜ、彼は必要でもないのにあの作品を見せたのだろう。
なぜ、彼は必要でもないのに居室の透過調光を調節したのだろう。
なぜ・・・・なぜ、彼はこうしてヒカルの涙を拭っているのだろう。
■むつのはな22

冷たくて心地好い温度が彼女を目覚めに導いた。
熱くて喉が渇いていたはずなのに、穏やかな冷気が彼女の余剰温度を下げていく。

身体の細胞が悲鳴をあげていたのに、彼女はいつのまにかそれらが落ち着き始めていたことに気がついて・・そして覚醒するために意識を浮上させる。ゆっくりと。

瞼が痙攣し、薄く目を開けると、そこはいつもの白い天井だった。
記憶が戻って来ないが、しばらく深呼吸を繰り返していくうちに、自分がそれほど長い時間眠っていないことに気がついた。

・・・窓のカーテンが下りていた。

またひとつ、深呼吸をする。意識がはっきりしてくる。

しかし、彼女が先ほどまで感じていた心地好い冷たさは、どこにもなかった。
誰かが氷枕を差し入れたのかと思ったが、そうではなかった。
首下にあてがわれていた冷却ジェルパッドは彼女の体温でぬるんでしまっていた。

シャルルが戻って来たのだろうか。
確かに、誰かが寝室に入ってきた気配だけは覚えていた。

うっすらと記憶が蘇ってくる。
金の光の射し込んだ部屋で・・・同じように金の髪の人を見かけたような気がした。
遠い昔に白金の髪のシャルルに良く似た、金の髪の女性のような髪色に近かった。
それが陽光のせいなのか地毛の色なのかは判断する状況ではなかった。
すぐに意識を失ってしまったから。
けれども・・・
その人は、とても優しく、彼女の頬を撫でてくれた。涙を拭ってくれた。

ヒカルは身体を起こして、そこで自分の部屋にないものがあることに気がついた。

・・・ヒカルがルイの別棟に持ち運んだ、あの木製の丸テーブルだった。
それが部屋の隅に置いてあった。目立たないように、ひっそりと。
そしてその上には・・・・
「むつのはな」
ヒカルは掠れた声で呟いた。

そこには小さな・・・クリスタルの樅木をあしらったオブジェがあり、電源を入れれば変色しながら輝く仕掛けが施された祈りの樹が置いてあった。
しかも・・・ヒカルが雪の樅木にかけておいたオーナメントもそのまますべてその枝に掲げられている。
・・・・ルイが届けてくれたのだ。
ヒカルは彼がこの部屋にはやって来ないだろうと思っていた。
彼女の居るこのフロアには彼は決して足を踏み入れない。
用事があるときには、本邸の応接室に呼び出されるか、内線電話で会話する。

本来なら。
こうしてアルディ邸の庭を見渡せる、日当たりの良い場所に住んでいるのはルイ・ドゥ・アルディなのに。
彼は別に大きな棟を構えて・・そしてそこからこちらに渡って来ることは滅多なことがない限りやって来ない。

自分の涙を流した痕跡はあった。しかし誰かが拭ってくれた記憶がある。
手の平の感触も残っていた。
・・・そして彼女は自分の腕を起こして、そっと・・・唇に触れた。
頬も額も眦もすべて温度を下げていたというのに。

・・・そこだけは熱かった。

喉が渇いていたはずだったのに、潤っていた。
誰かが水を飲ませてくれたらしい。
彼女が眠る時には、満水だった枕元の水差しの水は減っていて、グラスに水が残っていた。

朦朧としながら、自分で飲水したのだろうか。

・・・あの雪晄と陽光がヒカルに見せた幻なのだろうか。
ヒカルは首を振った。
まだ少し目眩がする。

彼には結局何も届けることが出来なかった。
また少し落ち着いたら・・・話をしに行こう。そう思った。
あの夜。距離は離れていたけれど、ルイはヒカルが言った「雪見をしよう」という言葉を果たしてくれた。確かに・・・ヒカルとルイは離れていたがそれぞれの近くに居た。

・・・その夜のことは、ヒカルの秘めたる秘密になった。
シャルルには結局そのことは言えなかった。
雪が美しくて眺めていたら熱を出した、と言っただけだった。

ルイはヒカルより先に大人になった。
けれども中身は変わっていない。
変わらず・・・愛に不器用でそれでいて完璧で・・・
そしてヒカルの知らない何かにいつも憂えている。
彼女がそれを知るときはやって来るのだろうか。
そして・・ルイの心に積もる、決して消えないむつのはなを溶かしてくれる人は現れるのだろうか。

ぼんやりとそんなことを考えていると、ノックの音がして、シャルルが入ってきた。
着替えることもなく、彼は外出着のままヒカルの寝室に入るぞ、と断りを述べてから入ってきた。
白金の髪の、青灰色の瞳の持ち主であり、この邸の主でもある彼は、すべての手順を省略してヒカルの居室に入ってきた。
時計を見れば、彼が朝、戻ると言った時間よりかなり遅かった。

彼が上着に乗せて持ち運んだ冷気が彼女に流れ込んできた。
シャルルは心配そうな顔をして、彼女の横たわるベッドに大股で近づいて来る。
「具合はどうだ」
「だいじょうぶ」
彼女が失調するのは久しぶりのことだった。
健康体なのは母親に譲られた特質かなと言ってシャルルが微笑むから。
だからできるだけ具合が悪いとは言わないようにしていた。

低い魅惑的な良く通る声で、シャルルは彼女に問診を始める。いくつか質問をされて、ヒカルはすべての問いに問題ないと答えた。
空腹を感じて、彼女は笑った。シャルルに食事はまだか、と今度は尋ね返した。
「その調子なら問題ないだろう」
とシャルルは笑って、彼女の頬や顎に手をあてる。
リンパ腺の浮腫が鎮まったことを確認したのだ。
彼の手は、冷たくて・・そしてほっとする。

ヒカルが目を閉じて、その手の平の上から手を添えたので、シャルルがぴくりと手を動かした。
「・・・どうした」
「冷たくて心地好い」

「まだ熱があるからそう感じるだけだ」
「そうかしら。・・・・シャルルの手の平は・・・どこか懐かしい」
先ほど感じた冷たさを今一度皮膚が感じて安堵しているのだと思った。

シャルルはヒカルの小さな頬に手の平をあてたまま、親指の腹で彼女の頬を撫でた。
彼は息を詰めて、静かに言った。
彼女は決して人前では泣かない。けれども、失調したから心細くなって涙を流したのか
もっと別の理由なのか、情報が足りなかった。だから事実だけを確認する。
青灰色の双眸を細めて、彼は静かに言った。
彼女を泣かせる原因を探ろうとした。
■むつのはな23

「・・・泣いたな」
「覚えていない」
ヒカルはそう言って少し笑って誤魔化した。
なんでもない、とやんわりとシャルルの質問を回避した。

彼女の目を伏せた表情が、シャルルのよく知るあの人にとても似ていたので、彼はゆっくりと手を離した。

そして話題を切り替えることにする。
静寂をこのまま受け入れたのなら・・・シャルルは夏でないのに、彼の狂気を呼び覚ましてしまいそうになるから。

「今日はこの隣の部屋で食事をしよう。準備させる。しかしヒカルが起き上がれるようなら、ね」
「もちろんよ。シャルルを待っていたのだから」
ヒカルはそう言うと、シャルルに笑顔を向ける。

彼の手の平がとても心地好かった。

・・・先ほどの手の平は・・・シャルルの手の平ととても良く似ていた。

彼女はその感触を知っていた。
そう・・・それは・・・あの時。
ヒカルが別棟で彼女の髪の滴を払ってもらったあの手の感触にも似ている・・・

「私、シャルルの手の平が好きだわ」
「オレはヒカルのあかぎれだらけの手の平は好きじゃない」
シャルルがそう言って、彼女が素手で雪に触れて失調したことを軽く窘めた。

「シャルルは甘やかしすぎだ」
ヒカルが苦笑すると、シャルルが応酬した。
「君を甘やかす、と言った言葉を忘れて欲しくないな、ヒカル」
そして彼女が薄着であったので、備え付けのウォーク・イン・クローゼットからガウンを取り出そうとシャルルが歩み寄ったとき。
ふと、彼は足を止める。
そこには・・・ヒカルが決して持っていない品が置いてあったから。

それを持ち込んだ人物が誰であるか、シャルルは知った。
彼がこの部屋に入ることを許可し指示したのはシャルル自身であるのに。

そしてヒカルが彼の手の平を懐かしい、と言った理由も推測できた。
シャルルはヒカルに背を向けながら、美しい眉を歪めた。
ルイはヒカルに対して執着している。
執心してはいけないとミシェルに教えられているはずなのに。
それが何を意味しているのか、ルイはまだ分析しきれていないのだろうか。

「シャルル？」
ヒカルに声をかけられたので、シャルルは艶やかな微笑みを浮かべる。
そして、彼女のために厚手の羽織ものを用意してやった。

そこでシャルルはルイのことを持ち出さなかった。何も。
ヒカルが何かを言わない限り・・・何かがあったのだと思った。

シャルルは深い洞察力で周囲の様子から状況を把握していく。
起き上がることもままならいほどの娘が、枕元のグラスをこぼさずに飲み干すことが出来ないことも。
枕が少し濡れて、彼女が涙を流した痕跡があったが、彼女はそれを口に出さないことの理由も。
・・・ルイの帰邸を心待ちにしており、昨日までルイはなぜ本邸に来ないのだろうかとしきりに気にしていたヒカルが、今はルイのことについてまったくシャルルと話をしようとしないことも。

しかしヒカルが萎れた様子でなかったので、シャルルはそのまま黙認することにした。
傷つけられたわけではないのだろうと判断した。それ以上は確認しないことにする。

・・・ルイからは、ヒカルは特段に異常はなかったと短いメッセージが送られてきただけだった。

娘のような年齢の少女に・・・何があったのだろうかとシャルルが思考を飛ばす。
彼は苦笑した。彼はフランスの華と呼ばれて何にも屈しない人物と言われているのに。
これほどまでに小さな娘の体調や考え事に一喜一憂している。

あの人に似てくる。
彼女は時折あの人そのものではないのだろかと思う時があった。
すでに身長はあの人を越えていた。
間もなく年齢も越えていく。
一緒に何かを祝いって過ごすという年月を重ねることが出来なかった。
だからこれは彼の贖罪なのだ。

ヒカルの成長を見続けるという業とも罪とも言える十字架を背負うことにした。

時折あの人の名前を胸の内で呼ぶ。ヒカルの笑顔を見ながら。
それが許されないから・・・こうして昊は雪を降らし、ヒカルを失調させたのだと思うほどに。彼は罪深いことをし続けている。もっと自由にさせてやるべきだと思う。しかし、手放せないのだ。・・・どうしても。何があっても。永遠の晄と名付けられたあの人の忘れ形見を、まだ、誰にも委ねることが出来ない。

「雪を見ながら食事をしたい」
彼女は提案した。向き合って食事をするのではなく、並んで食事をしたいと言った。
「この雪は、二度と同じ雪にならないから」
ヒカルがそう言って微笑む。
「それなら今日は胃にやさしいものを、と思っていたが、和食にしよう」
「ありがとう」
「その代わりに、予定していなかったから、用意までに少し時間がかかる」
彼がそう言うと、それでも待つ、とヒカルが言ったのでシャルルは笑った。
「貴女の母上は、待ちきれないで、厨房に駆け込む神経の人だったよ」
「そうして良いのなら、そうするけれど」
ヒカルがそう言ったので、彼は淡く微笑んだ。

彼の近くを通り過ぎては去っていく者たちはみな、彼が運命の人の話をすることを厭った。自分だけを見て欲しいと言った。
しかし、彼の中で消えない雪のようにいつまでも咲き続ける想いを・・・彼は消し去ることが出来なかった。
そういう状態でも居られるのは、ヒカルがあの人の娘だからだ。
ヒカルと思い出を共有する。そして思い出が蓄積されていないうちに別れてしまった両親の記憶を・・彼女に与える。彼らがどれだけ素晴らしい人物で、シャルルがこよなく愛していたかということを。隠さなくて良かった。だからヒカルを失いたくない。

「・・・ルイも招いたらどうだ」
シャルルはベッドからヒカルが起き上がるのを介助しながら、そう言った。
ヒカルが驚いて顔を上げる。
茶色の大きな瞳がさらに一層大きくなってシャルルを見つめた。
「・・・いいの？」
「ヒカルがシャワーを浴びて着替えてこられるほどの元気があるのなら。・・・・それにこれから用意するのであれば、そのくらいの時間が必要になるだろう。時差で眠れないルイはそろそろ仮眠から起き出してくる時間だろうしね」

シャルルが言い終わらないうちに、ヒカルは内線電話に手を伸ばしていた。
ルイは眠っているところを起こされて、相当に機嫌を悪くしていることだろう。
ヒカルの唇が水に濡れていたことを考えると、ルイが意識のない彼女に何をしたのか、察しがついていた。しかし今はその時期ではない。
それでも・・・怒りに似た激しい何かが湧き上がるのを感じる。

ルイが自分の考えていることを実行するのはまだ先の話だ。
それまで・・・様子を見る。
選ぶのはヒカルだ。
しかし選択肢がない選択をヒカルにさせるわけにはいかない。

シャルルは受話器の向こうで不機嫌そうにしているであろうルイに誘いの言葉を選びながら語りかけているヒカルの背中を見ながら、そっと、壁際のむつのはなを見つめた。

ルイ・ドゥ・アルディがいくつか開発をしていることを知っていた。それは実用化には至らなかったが、彼はシャルルのように、いくつも何かを生み出しては、それで満足して廃棄しているものがあった。
だからそれも同じように彼の開発欲を充足させただけで役目を終えて、廃棄されていのだと思っていたが。
・・・捨てきれずに残しておいたのか。

いつか、ヒカルに見せるために。それとも、もっと別の誰かに見せるためだろうか。
何を思い、何を抱えているのか、ルイは表面に出さなかった。
彼とルイは酷似している。
姿形だけではない。
彼らは魂も似ていると思った。

・・・愛する者を奪う勇気がないところが。

ヒカルが幼い時に使っていた丸テーブルはもはや彼女の体格には小さすぎる玩具となった。そしてルイが作成したむつのはなは、その上にひっそりと佇んでいる。

「ルイが来てくれるって。シャルル、一日遅いけれど・・お祝いだね」
ヒカルが受話器を置きながら昂奮した大きな声でそう言ったので、シャルルはそうだね、と言って嗤った。
彼女の笑顔が何もかもをすべて清めていく。
永遠の晄と名付けられた娘は・・・寒い冷え込む夜の室内でさえ、陽光をもたらす。

皆で雪を眺める。むつのはなを眺める。
そしてその先は・・・わからない
彼はフランスの華でわからないことはないとされていたが、星辰の子と永遠の晄と彼が並び、そしてその先に何が見えるのかはわからないな、と思った。

ルイは嫌がるだろうが、今宵のテーブルにはそれを飾ってやろうと思った。

（FIIN）

2012 St. Valentine's day　L-side　前編

●ルイ・ドゥ・アルディの場合　01

世の中が不必要に浮かれる行事について、ルイ・ドゥ・アルディが興味を持つことはなかった。
その日が到来しなければ何もすることができない者たちの心理については興味があったが、それ以外には退屈な一日でしかなかった。
いや、彼に取っては煩わしいとさえ思える一日であった。

彼の美貌に魅せられて、様々な者が彼にショコラを届ける。
彼がチェスの名手であり、競技中に脳の疲弊を補うためにショコラを口にすることを知っているからだ。
しかし、相手をよく知らないのに口にするものを喜んで受け取る程、彼は不用心ではなかった。
アルディ家の子息ともなれば、様々なことに配慮しなければならない。これからも付き合いを続けた方が良さそうな者には返礼のカードを送り、名もない包みには充分注意して使用人達でわけるように言った。
・・・自分の名前も明かさずに、思いが通じると思っているのだろうか。
まったく、浅はかな思いを期待に変えて押し付けてくる傲慢な品々を処分するだけで一苦労であった。

アルディ邸の本邸を通り抜けた先に、ルイの別棟があった。
そこには何も置かないことにしている。
何かに拘る必要はないからだ。
アルディ邸の行事には、ショコラを贈り合うという項目は含まれていない。
しかし、外を出歩けば彼の外出を待ち構えている者たちに囲まれて、専用車すら出せなくなってしまうと承知していたので、今日は静かに別棟のサーバールームで新しいOSの試験運用を始めようと思っていた。

彼は金の髪を掻き上げる。物憂げで上品な・・頽廃的な青灰色の瞳がそこにはあった。彼の父と言われているシャルル・ドゥ・アルディの幼い頃によく似ていると言われたが、好んで中性的な状態を保っていたシャルルと違い、ルイは既に少年であった。
フェンシングや乗馬により、成長を妨げない程度に筋肉が付き、彼を完全に管理している教育係の叔父の支持で怪我をしない充分な体力作りを心がけていた。

彼は薔薇園を一瞥する。今は冬なのに、薔薇の香りが漂っていた。これはこの家の主が薔薇の品種改良を趣味としており、冬でも枯れない薔薇を何種類か地植えにしているからであった。まるで、ルイに対する挑戦のようであった。

彼は遺伝子を操作されて優性の遺伝子を多く持って生まれた者であった。
創られた命は、そうではない命と比べて優れているのか劣っているのか・・・試されているようでルイは不機嫌になるが、その都度、彼は憤りを彼の中に沈降させる。

きっと、今日のディナーの最後にはショコラが出てくることだろう。毎年のことだ。この家の住人であるヒカル・クロスが作る、甘すぎるそれらをほんの一口でも唇に乗せなければならないと考えるだけで、憂鬱な気分になった。

彼女は学校から戻るとそのまま厨房に入り、前日から用意してある材料を加工してショコラを作る。最近では、日持ちのする飾り細工のものは事前に時間をかけて作っているようであったが、ルイはまったく興味がなかったので、彼女が何をどうしているのかは詮索しないことにしていた。
材料費の方が高く付くようなものを、なぜ自分で作成することに喜びを感じるのか・・・ルイにはまったく理解出来なかった。

●ルイ・ドゥ・アルディの場合　02

想い合う恋人同士の特別な一日である、という行事になったのはいつの頃からなのだろうか。もっと遡れば・・・違う理由によるところのものであるということはわかるはずなのに、人々は享楽的に手軽で安易な伝達手段の一日として、今日のこの日を受け入れている。
まったく、くだらない愚盲であるとしか思えなかった。
所詮、揺るがない愛というものは存在しないのだ。

この家の当主も・・・決して手に入れる事の出来ない愛に悶え苦しみ、今に至っている。そして、愛した人の娘を育てることで自分の煩悶を紛らわそうとしている。
愚かなことこの上なかった。
だから、ルイ・ドゥ・アルディは信じなかった。愛の日が存在するということを楽しみに待つ人々に歩み寄る必要はないと考えていた。

形式上、受け取らなければ立場が悪くなるもの以外は、彼はまったく受け付けなかった。拒絶するという行為すら、無駄に思える。だから、無視することにした。存在しないものとして認識しないことにしたのだ。
排除された者たちの気持ちを考える余裕があるのであるならば、少しでも、ひとつでも多くの知識と経験を身につけたかった。彼は、急いで・・・アルディ家のすべてを掌握するために生まれて来たのだから、落ち着いて人々との牧歌的な日々を満喫するための時間は存在しなかったのだ。

彼は、アルディ邸の別棟に足を運ぶ途中で、伸びた長い足を止めた。・・・きっと、彼女は彼のために無遠慮に大量のショコラを用意しているのだろうと想像できたからだ。
今日、いつ帰邸するのか、その後の予定はどうなのかという照会が、ヒカル・クロスからルイ宛てに幾度もあったことを思い出して、彼は端麗な顔を顰めた。
シャルルによく似た、彼の髪はこの家の当主と違い、見事な金髪だった。
その下から覗く青灰色の瞳は、シャルルの視線より鋭かったがひどく孤独であった。それを彼が哀しんでいないということも彼の視線をより冷たいものにしていた。

途中の白い石畳を渡ると、彼は足を止めて・・・自分の別棟がまだそれほど近くになっていないのに、空を見上げて溜息を漏らした。
彼の薄い唇から漏れた孤独という名前の吐息は、高い鼻梁を過ぎ去り白い哀塊が空に消えていく。
寂しくて堪らないのではない。彼は・・・このまま誰も彼に構わないでいてくれれば良いのにと願っていたのだ。
彼はアルディ家当主の継子として育てられた。けれども、それは当主が望んだものではなかったし、親族会が彼を援助していたとしても、彼は決して当主から認められ愛される存在ではなかった。もし、彼がいなければ・・・・当主は結婚しなかっただろうし、アルディ家が滅んでも構わないという姿勢を崩さなかっただろう。

別棟に入る足が重くなってしまったのは、彼がそこに入り込んでしまえば、もう次の日になるまで、誰とも会わなくて良くなるからだ。籠もっている時間は彼ひとりで過ごすことにしていた。
新しいプログラム構築のための研究時間だと言って、誰も入棟できなくなる。
時には寝食を忘れて没頭する。・・・昔、彼の教育係のミシェルが同様であった。
ネットワークは彼の人種や人格や環境に左右されずに、ただ、情報だけを伝達する。
だから、誰であるかを選ばない機械通信の世界は、彼が時間を潰すに傾ける最大の時間の配分を受けることになったのだ。
また、バイオ・ライフサイエンスについては、すでにルイはその若さで論文をいくつか書いていた。この分野は親族に求められているものであった。面倒だとは思っていたが、自分の遺伝子構成を開示してもらえる条件のひとつであったので、やむを得ないと思っている部分もあった。
彼にはできないことはない。
そして決して間違えない。

あのフランスの華と同じ様に、彼には星辰の子という名前がある。
星々や天体を遵える者という意味であった。けれども、本当に足元に平伏すべき人物達は、彼の思い通りの星回りにならない。それが彼を苛立たせていた。

・・・他人と関わるのはまったく無駄であると思っていたのに。
彼は、足を止めて、薔薇園の方を向いた。

冷たい風が彼の滑らかな頬を横切り、吹き抜けていく。
それでも、この薔薇園にはいつも薔薇の香りが漂っている。
温室から流れる香気も含まれているが、この家の当主が薔薇の品種改良を趣味としており、冬でも香る薔薇を創り出したからだ。
その花々にはすべて・・・どんな種類でも「ファム・ファタル」と名付けられていたことに、ルイは冷蔑の眼差しを向けていた。
創られた種であるルイを冷遇するのに、自分は様々な品種の薔薇を作り続ける。その愚かな行為を嬉しそうに受け止める娘が居る限り・・・彼はこの愚行を続けるのだろうな、と思った。

彼の別棟に行けば、ディナーを一緒にどうかというメッセージが入っていることは明白であった。今日、帰邸した折にもその旨を口頭で聞いたルイは、返答しないという返答をしたのだ。
なぜ、彼のことを都合良く思いついた時にだけ、こんな風にして構うのだろうか。それなら、最初からまったく存在しない者として無視すれば良いのに、都合の良いときにだけ声をかけるヒカルという存在が気に入らなかった。彼女はアルディ家の部外者でありながら、シャルルより手強かった。彼にいつも語り駆ける彼女は本当に・・・彼を苛立たせる。

●ルイ・ドゥ・アルディの場合　03

ルイの足は無機質な、外部との単なる仕切りでしかない空間に向くことをやめて、冷え冷えとしている薔薇園に変更された。
考え事をしたい時や、それを中断されたくない時には、彼は決まって薔薇園に行く。
そうしようと決めたわけではなかった。
ただ・・・噎せ返るような薔薇の香りが、自分の神経を少しずつ狂わせていく様を観察することが、彼のこの家での唯一の退屈凌ぎであったからだ。
彼は何もかもに恵まれていると言われる。しかし、何もかもを手に入れることができない。
アルディ家に君臨することも阻まれているし、彼が望んでいるわけではないのに愛を教えようとする者たちは、単に自分の欲望や願望をルイに押し付けているだけであるとしか思えなかった。

暖気より冷気の方が好ましかった。脳神経が活性化されるような感覚がある。生きていると感じるからだ。寒さで身を震わせている自分の肉体が、生きていると彼に感じさせるような反射を行うから。だから、彼は薄着で薔薇の苑を彷徨うのだ。体が冷えても彼の脳細胞は活発に活動し、常に思考し続ける。

この時期には、菓子のような甘い芳香の持続する種が満開であった。
アルディ家当主が開発したものだ。
すべて、ヒカル・クロスのためであった。
彼女の部屋に飾られる花はいつもシャルルの寝室と同じもので、彼女はいつもシャルルのために、毎朝、最高の状態の薔薇を摘み取り届けるという習慣を続けている。
その花匂で目眩がするほど強い刺激を受けているというのに、彼女は更に彼に菓子を捧げようとしている。
わかっている。賛成はしないが彼女の心理は理解はしていた。
彼女の通っている日本人学校では、こういった習慣を楽しみにしている者が多く、彼女もその熱気に感染しているだけなのだということも承知している。
そんなヒカルに苦笑しながらも付き合い続けるシャルルの感覚については、賛成も理解もできなかった。
こういうぎりぎりの日々をあと幾日過ごしたら、彼は星辰の子という称号から解放されるのだろうか、と思う。
アルディ家の当主となるべくして生まれた唯一の後継者であるというのに、そのルイではなくヒカルという小さな愛翫人形のような者を愛でることに夢中になっているシャルルは当主に不向きであると糾弾されないことのほうが、彼は理解出来なかった。

しかし、この家の中で過ごした方が良さそうだった。外に出れば、彼に自分ひとりだけの熱情を押し付けようとする輩達の自分勝手な想いを見聞きしなければならない。誰も愛さず、誰からも愛されたいとは思わないルイにとってそういった好意は好奇と同義であった。彼は見世物ではないし、希少価値の動物で保護を必要としているわけではない。
この邸の薔薇のように、誰かに守られていなければ自己主張できないようなそんな生を送るつもりはなかった。
彼は、目的を持って生まれてきたのだから。

だから、僅かながら傾斜のある庭の小径を抜けて噴水の冷音を聴きながら、薔薇の咲き乱れる苑に足を踏み入れると、角を曲がったすぐ先で蠢く茶色の小さな動物に眉を顰めた。
彼の最も辟易する、生きている意味の無い生物が、そこに居た。
薔薇の方がまだましであった。厭わしい強い芳香であっても、その香気によって自分を主張する。
けれども、この癖の強い茶色の髪をもった小さな生き物は、彼の顔を見ると顔を輝かせて近寄ってきた。
愛でられることでしか、生きている実感を持たない、蔑むべき相手は満面の笑みでルイの名前を呼んだ。
「ルイ。・・・今日は、はやいのね」
彼女はそう言って微笑んだが、ルイは完全に彼女を無視して、帰邸の挨拶もせずに背中を向けよ

うとしたので、ヒカルは慌てて彼の背中に声をかけた。
ヒカル・クロスという人物は没個性的であり、誰とも仲良くしようと振る舞う。誰からも愛されるということは誰からも愛されないことであると承知しているのに、それでも波風立つ人間関係を厭って、何も主張しない。そうすることそのものが、相手を侮辱していることになるとは気付かずに、ただ、自分を抑制することに懸命になっている。

彼が帰邸する時間も、彼女が知らないはずはない。学校が終わると彼女はほとんど外出することはなく、アルディ邸で過ごしてばかりいる。ルイは滅多に帰邸しないので、同年代の話し相手がいないヒカルは、ルイに何かと話しかけようとするがまったく会話にならないのでルイはいつも無視することにしていた。
これほど長い年月をかけて完全に存在を否定しているというのに、それでも彼女は何をどう妄信しているのか、ルイに纏わり付いてばかりいた。

隠れて待っていたのだろうとは指摘しなかった。時間の無駄だと思ったからだ。
はやくどこかに行ってくれれば良いのに。そう思うだけでルイの思考が遮断される。ヒカル・クロスは厄介な人物で、彼女を冷淡に扱えば、シャルルがルイを詰問するのだ。彼が悪かったのかどうなのか、ということは当主には関係が無い。
ただ、愛している人の娘が涙ぐんでルイの名前を口にするのが我慢ならないのだろうと思うと、ただただ苦い笑いしか浮かんでこなかった。
「ルイには隠せない。ルイを待っていたの」
「そういうのは面倒だし、必要がないことで労力を使う者に協力する気もない」
彼は素っ気なくそう言った。彼を待っていたと言うヒカルの頬は薔薇色で、冬のどの薔薇よりも色鮮やかであった。
彼は見事な金の髪の下から、青灰色の瞳をちかりと光らせた。憤りの光だった。
●ルイ・ドゥ・アルディの場合　04

「オレの予定にヒカルは関係しない」
彼はいつもの通りそう言った。ヒカルと最後に会話したのは、ニューイヤーの前のことであったが、彼女はルイ・ドゥ・アルディと会話しなかった間に髪を切ったようだ。前髪が切り揃えられ、軽く束ねている髪の毛先が短くなっていた。彼女の髪は癖の強い茶で、日本人にしては色素が薄かった。これは彼女の父が日仏の混血であることが影響しているが、彼女もまた、出生に彼女に知らされていない大きな秘密を持っていた。

ルイの前で、彼女はいつも何かに遠慮している様子で話しかけるので、それが彼の苛立ちを増幅させてしまうのだ。
彼女は幼い時からアルディ家の養女同然の扱いを受けており、父方の実家はクロス・グループという世界的規模にまで発展した医療関係会社で、祖父はその会長である。また、アルディ家で養

育されていることもあり、当主が決定すれば社交界への顔出しもいつでも自由に開始することのできる立場にあった。
しかし、実子とされるルイとシャルルの不仲は決定的で、ルイは教育係でシャルルの双子の弟であるミシェルのところに入り浸りの状態であった。ミシェルに傾倒しているわけではなかったが、この家にいると窒息しそうであったから、ここではないどこかであればどこでも良かった。何より、口煩く彼の日常に踏み込んでこようとするヒカル・クロスの存在が、ルイには煩わしかった。
「あの・・・今日は、ショコラを用意したの」
「いつものことだろう」
この家で用意されていないものなどない。だから、彼女の言っているショコラというのは、特別なものであることは承知していた。けれども、それを受け取るつもりはなかった。
彼女がそういった特別なつながりを求めていることは明白であったが、それについてルイが同調しなければならない理由はなにひとつない。
彼女が居なければ、彼の予定は繰り上がることはあっても、決して遅くはならなかったはずなのに。
「ルイの口に合わないかも知れないけれど、受け取って欲しくて、ショコラを作ってみたの」
「いらない」
彼はヒカルの言葉に、嘲ら笑った。
彼の口に合わないものをわざわざ作るのだとしたら、ヒカルは相当な痴れ者であった。彼女の卑屈な態度や言葉は、この家の当主にはいじらしいと映るのかもしれないが、ルイには通用しない。
ルイの言葉を聞いた瞬間、ヒカルの顔が一気に落胆に凋んだ。受け取ってもらえるものだと確信しているところが更にルイの腹立ちを呼び込むことに、彼女は気がついていない。
ルイがことさら彼女に冷たくするのは、彼女が生国独特の行事に興じているわけではないと知っていたからだ。
義務感でそうしなければならないと思っているのであれば、それはルイにはまったく必要の無いことである。
彼女が生まれた国では、意中の男性に女性から胸中を打ち明ける日として、この日が設けられているらしい。
けれども、その発祥については、もっと意味の違うものであったし、フランスをはじめ欧米では男性も女性も性別の関係なく、贈りあう日となっていた。
もちろん、ヒカルにはシャルルから相当な量の彼女の年齢では到底受け取ることのできないような豪華な品が次々に贈られたことだろう。
彼女は高みからルイを見下ろしているように感じる時がある。
ルイは星辰の子と呼ばれ、彼の才能に国が興味を示している。アルディ家の悲願を達成するのは、まさしく彼なのだという確信にも似た傲慢さを誇示している親族会にも辟易していたが、何より彼を閉口させるのはヒカル・クロスの「ごく普通を装っている普通でないこと」であった。

ルイは彼女の背に回されてあった、ヒカルの手に乗るほどの小箱を見つめた。彼女はそれを渡そうと思ってずっと待っていたらしかった。
去年、彼女の用意したショコラの量が尋常でなかったので、量か質か考えろと言ったことをヒカルは覚えていたらしい。彼の口に入るためには、量ではなく質なのだと彼女は学んだ結果のことであったけれども、それでもこんな風にして押し付けることを前提とした待ち伏せは気に入らない、の一言でしか片付けることが出来なかった。

ルイが時折、別棟に籠もる他に薔薇園で時間を過ごしていることを知っているのは、ヒカルだけであった。シャルルに言わないことで優越感を感じているのだろうか。
この家の何もかもが気に入らなかったが、この薔薇たちだけは・・・蔑ろにしなかった。
創られた命であったからだ。憐れみの愛をかけるつもりはなかったが、遺伝子操作されたルイが、同じ様に品種改良を重ねた結果生み出された薔薇を見つめる姿をシャルルが見ることで、苦しみが倍増すれば良いのに、と思っていた。

「確かに、チェスの競技中は糖分を口にするが、それは必要だからで、必要な要素を取り入れること以外の目的はない」
ルイは良く通る声を響かせながら、ヒカルにそう言った。彼はだいぶ背が伸びて、ヒカルよりかなり背が高くなった。アルディ家当主とよく似ていると言われているが、彼が少女とも少年とも判別しがたい年齢であった頃と違い、彼の姿はまさしく青年前の少年の姿であった。誰も彼のことを少女と間違えることはない。それなのに、あのフランスの華の再来だと言われる。・・・ルイはシャルルの複製ではないのに、なぜそのような言葉でしか彼を形容してもらえないのか理解しようとは思わなかった。
けれども、ヒカルはいつも彼のことをシャルルに似ているとは言わなかった。彼女が親に似ると言われることについて何か思うところがあるようであったから。
ヒカルは、顔立ちは彼女の母に似ていると言われている。けれども、彼女の持っている母の記憶は非常に曖昧で薄いものであった。彼女の父母は不幸な事故により、彼女の前から消えて久しい年月が経過しているからだ。
●ルイ・ドゥ・アルディの場合　05

ヒカル・クロスはそれでも引き下がらなかった。
彼の冷淡な扱いに傷ついたはずなのに、彼女は微笑みを絶やさない。
その様子を見て、ルイには彼女の微笑みは卑屈な笑みにしか見えなかった。
この家に、それほど固執する理由が理解できなかった。
彼女には血縁者がおり、そこで虐げられているわけではなかったはずなのに、より居心地の悪い場所にしがみつくヒカルが滑稽であった。
ルイ・ドゥ・アルディは少し苛立ちながら、言った。

「シャルルなら喜んで受け取るだろうな。そちらはもう、計算済みだから・・・今度はこちら、というわけか」
「ルイ・・・」
困惑した声で、彼女がルイ・ドゥ・アルディの名前を呼んだ。彼は冷笑する。ヒカルは滅多に憤らない。それは、シャルルの責任だった。彼女に怒りを教えないで、穏やかに過ごす時間ばかりを与えたからだ。温室の華より始末が悪かった。彼女は、怒りを投げることができないかわりに、受け止めることばかりが長けてしまったのだ。
「ああ、オレはそういう計算は嫌いではないが、せめて相手に悟られないように努力することも忘れないでくれ。ヒカルの願いなどは考えなくても良い程に明白で、少しも面白くない」
彼の冷たい言葉に、ただ、ヒカルは黙るだけであった。彼女が憤慨して何かを言い返したり主張したりするのであれば、ルイは最初からこんな話はしないで、無視を徹底しただろう。攻撃してくれば、受けて立つ。それが家訓であった。

彼女には恒例の行事が多すぎた。けれども、その何れにもヒカルの両親は同席することはなかった。
・・・彼女には両親がいない。
きっと戻ってくると信じているらしいが、どれほどの年月が経過しているのか、それすら考えることを放棄しているように見えた。
曖昧なことは思考の対象としないルイが、ヒカルのことに関してだけは断言しない時があった。それは彼女の思考があからさまであることもあったが、それ以上深入りしても、ルイが新しい情報を取得する機会にならないということを、彼はよく承知していたからである。

「感謝の気持ちを贈りたいなと思っているだけなの」
「贈るのは自由だが、受け取るのも自由だと思わないのか、ヒカル」
彼は少し苛立たしそうに言った。帰邸してきたばかりで、彼はまだ別棟にさえ入っていない。冷える庭先で話す内容でもなかった。
毎年のことであったが、これまでは彼は直接受け取らないことにしていた。ところが、今年に限っては、ヒカルが彼の帰邸を確認して、直接話をしようと行動したのだ。いつも受け身の彼女であり、何かをするときには、他者の思惑など考慮しない彼女にしては珍しいことであった。
彼女の一方的な押しつけがましい好意は、ルイにとっては煩わしい桎（あしかせ）でしかなかった。

そこで、ルイは彼女が去らないので、ヒカルを眺めることをやめて、薔薇園を眺めた。この家の象徴である薔薇の種類は夥しい数になり、今では混種を含めて様々であった。純種だけを好むのではなく、この家の当主は生き抜くことそのものを受け入れるべきだ、と常々語っていた。しかし、薔薇園の奥にある温室の薔薇たちは常に新しい種を生み続け、そしてそれらは決して交わることのないように完全に各々隔離されてしまっていた。

矛盾する薔薇を内外に持つ、この家の当主の狂気に育てられた贖罪の娘は、その牢獄の中しかしらないので、それが枷であることにすら気がつかない。ただ安穏として生きているだけの娘に対し、彼はいつも苛立ちを隠すことができなかった。

ヒカルが涙ぐんでいる様子が見えた。
しかし、彼は薔薇が広がる景色を眺めている様子を装った。
茶色の瞳に涙を浮かべているが、彼女は決して涙を溢さない。彼女は泣いても解決しないことを知っており、そして涙を見せないことが彼女の唯一の誇りであるからだ。
そんな彼女の性質をルイはよく知っていた。呆れるほど、長い時間を一緒に過ごしているからだ。

「・・・意味が無いことはするな」
伝わらないとわかっていても、ルイは溜息混じりにそう言った。凍えるほどに冷たい空気がヒカルとルイの頬や髪に入り込んでいく。肺にまで冷気が忍び込み、このまま・・永遠に凍て付く彫像となってしまえば良いのにとさえ思う瞬間であった。けれども、ヒカルは寒さで耳を赤らませてルイに言った。

「意味はある。私には意味がある」彼女の悲痛な呻きに、ルイは嘲笑を浮かべた。
金の髪が見事に輝き、彼は青灰色の瞳を細める。少年と言うには老獪な視線であった。何かを取引するかのように、ルイはヒカルに囁く。
彼の唇が動く。他の者とは、彼はあまり話をしない。彼の知能指数による思考速度の速さに、誰もついていけないからだ。彼は遺伝子操作されて生まれたこどもであり、何もかもに恵まれて生まれて来たものの、他者より大きく重いものを背負っている。その重荷の名前は孤独という。

黙ったままのルイの風上に、彼女は立ち竦んだままで暫く俯いていたが、思い切ったように口を開いた。地植えの薔薇の苑が続く土が湿っていたので、石畳の上に立っていたものの、彼らの温度は休息に冷えていった。
「暫く日本に戻ることになった。・・・学校が休みに入る前に発つ」
彼女の言葉を、ルイはただ無表情に黙って聞いていただけであった。

●ルイ・ドゥ・アルディの場合　06

「だから？」
彼は冷たくそう言ったが、その間が少しだけあったことに、ヒカルは気がついて居なかったが、当の本人であるルイは自分の一瞬の空気に閉口していた。
そこで、かなり不機嫌になる。もともと上機嫌という状態がない冷ややかな態度に終始するルイが、ヒカルの帰国に感想を持つことを期待してはいけなかった。

「オレに何か期待するなら、無償であることは期待するなよ」
彼の辛辣な表現に、ヒカルはただ項垂れるばかりであった。

彼女の祖父であるクロス・グループの会長が失調しているという話は聞いていた。彼女の夏の帰国を待たずに呼び寄せるということは重篤な状態であるらしい。
時折、そういったこともあった。彼女の血縁は日本に居る。本来なら両親が不在の彼女の養育はその者たちが行うべきであるのに、シャルルがそれを阻んだのだ。
最愛の人と親友の娘を手元に置くことで、彼は満たされている。愚かしい贖いでしかない、と思った。

ヒカルは、茶色の瞳を瞬かせた。ルイは青灰色の瞳で、彼女をじっと観察し続ける。
「今度は少し長い。その間・・・シャルルを御願い」
「ヒカルに言われるまでもないと思うが。君は、いつからこの家の者になったんだ？」
ルイの辛辣な言葉に、ヒカルはぐっと言葉に詰まった。彼女はこんな風にして誰かに何かを頼むことはない。しかし今回は違っていた。彼女は何か思うところがあるようであった。しかし、頼み事がシャルルのことなのか、と知るとルイは無表情になった。
・・・全身でヒカルの言葉を拒絶した。
「・・・それでも言っておきたかった」
「それはヒカルの都合だろう。まったく勝手な人だな」
彼は肩を少し持ち上げて、ヒカルを非難した。この家の者たちの中で、常在しているのはヒカルだけだ。シャルルは極力戻るようにしているが、それでも不在にすることもあり、ルイに至ってはほとんど寄りつかない場所である。もう少しすれば、完全に独立して、この家から出て行くつもりであった。

「ショコラは毎年、上手に作れないけれども・・それでも、ルイに受け取って欲しいの」
「なぜオレが受け取らなければならないのか理由を言ってくれよ」
彼は嘲笑した。
「そういう傲慢な願いはシャルルにだけ言え。彼なら、喜んで受け取るだろう」

薔薇の香りが、ルイを狂気に誘い込む。彼女を酷く傷つけたくなる。
ここから離れると言うヒカルが苛立たしかった。なぜ、わざわざそれを告げるためにルイを待つのか・・・まったく理解に苦しむ思考を持っていると評さざるを得なかった。

ルイは首を傾けて、金の前髪の下から冷たい眼差しを再びヒカルに向けた。
シャルルによく似た、滑らかな頬の上で髪が散った。

ヒカルは対照的に俯いていた。ルイは長い話は好まない。必要が無いから。

こうしてヒカルに付き合っている時間を彼が無駄だと思っていることも、シャルルに咎められるので、面倒を避けるためだけなのだとヒカルはわかっているのに、それでも繰り返す。
寒空の下で、彼女はぽつりと言った。

「・・・ルイの試合を見に行けないから」
「いつも来てないだろ」
「・・・・」
彼女の無言の反応に、ルイは一瞬で悟った。
勝手なことを、と小さい声を出した。

・・・・彼女は密かに来ていたのだ。

ルイに黙って、彼の様子を見に行っていたのだ。
おそらく、シャルルにも言っていないのだろう。だから、言葉を濁しているのだ。
それなら、そのまま黙ったままでいれば良いのに。
彼女は、帰国することでルイの試合が見られないと言って、歎いている。

ヒカルの用意するショコラは、いつも硬質のコーティングを施してある、小さなサイズのものばかりであった。試合で糖分を摂取する彼のために考案したものであったが、いつになってもそれは成功せず、ルイが口にすることはなかった。
「今年はね、うまく行ったの。上手にできたね、とシャルルに褒められるくらいに。だから、きっとルイは食べてくれると思って」
「オレがヒカルのショコラを口にするかどうか確認するために、試合を観察か？随分と時間を持て余しているんだな」
彼はそこまで言うと、彼女の目の前で、苛立たしそうに、溜息を漏らした。

「それで、添える薔薇を探しに来たの」
彼女はそう言って淡く笑った。彼が彼女を疎ましいと思っていることは、ヒカルは知っている。けれども、それでも彼に纏わり付く彼女を無視し続けて居るのに、彼女はそれでもルイに微笑む。
「私、ひとつで良いからルイの役に立ちたいの」
「それなら、オレの前から消えてくれ」
ルイの言葉に、彼女は唇を横に引いた。それでも、彼女は涙を見せない。なぜなのだろうか。これほど・・・彼は憤っているというのに。

■ルイ・ドゥ・アルディの場合　07

彼女にはすべてがある。
家族もあり、シャルルに愛され、彼女は人に求められれば遠い国にでも駆けつける。
それは、彼女が何も知らないからだ。
屈託無く微笑む彼女を、ルイはいつも鬱陶しいと思っている。それは確かだ。
本来なら、ルイが持っているべきものをすべて持っている。永遠の晄という名前の彼女は、永遠に・・・・誰かの光を取り込み続けて、自らを輝かせるのだ。
強烈な光は時に静寂を奪う。ルイは星々を遵える子という尊称があるが、それは太陽の光を例外としている。ヒカルは、太陽のような少女であった。いつもいつも、灼熱の焔でルイを焼き尽くそうとする。

「・・・わかった。もう、行くね」

彼女は、それだけ言うとルイの脇をすり抜けて、薔薇の垣根の向こうに消えてしまった。足音が遠退くのを確認した後、ルイは薔薇の香りを胸一杯に吸い込んだ。

俯いていたので、ヒカルの表情は見えなかった。けれども、決して朗らかな顔をではなかったはずだ。
これほどまでにルイに拒絶されてなお、彼女はしばらく経過すると忘れてしまったようにルイに笑顔を向けるから。
それがいっそう、彼を苛立たせるのだ。

きっと、ひとりで泣いているのだろう。彼女は人前では涙を見せることはしない。
涙を見せることで、訴えを有効にしようとする者にはルイは容赦がなかった。
泣くという行為で、結論が覆ることはないのだ。だからヒカルがこの場から立ち去ることは必要だった。
泣いても・・・彼女が泣いても、帰国するという予定は変更されないし、ルイがヒカルのことを近しく感じるように接してやることはないのだ。
彼女が家族の愛に飢えている。
どんなにシャルルが愛を注いでも、決して補填されることはない、洞のような部分がある。

だから、ルイがこれまでと違った接し方をして、彼女を妹のように遇したとしても、それで満足するのはシャルルだけだ。
もう、彼女の父母は戻ってこないという事実を彼女は受け入れなければならないのに。
そこから眼を瞑り、ルイに家族の役割を押し付けることで彼女は心の平穏を保っている。

・・・そこで、彼は思考を停止した。

考え事に耽るために薔薇園を訪れることがあるが、今考えているのは、彼の今後の方策ではなくヒカルのことであることに気がついたからだ。

この冷風で体を冷やし、失調したら帰国できないかもしれないという予測もつかないほど幼い彼女のこれまでやこれからを考えてやる必要はなかった。

・・・はやく、どこかに行ってしまえば良いのに。

しかし、彼女には戻る場所はなかった。それでも・・・ルイは、ここに居ることに固執するヒカルは、やがて自分の居るべき場所はここではないと言い出すのだろうと想定していた。

彼は薄い唇を歪める。これで、このまま彼女が戻らなかったらシャルルは嘆き悲しみ、またあちらの世界に引き籠もり・・・発症が早まるだろうか。
嫌なことがあれば逃げ出すという当主は、当主という職には相応しくないと考えていた。
逃げたり眼を逸らしたり、気がつかないふりをするのは簡単だ。でもそれでは解決しない。この家の問題を解き明かすことはできない。
だから、ヒカルはアルディ家の者にはなれない。
彼女は、知らないから。この家の秘密を、知らないから。
どんなに辛くて嫌なことがあっても、そこから逃げ出すことすらできない者は、どうしたら良いのだろうか。

ルイは、そこまで考えると、また思考が流れて行くのを感じ、やがて薔薇の苑をゆっくりと歩き始めた。
そして、薔薇の植垣をゆっくりと時間をかけて周回した彼は、風向きが変わり更に冷たい風が吹きつけて来るのを頬に感じてようやく別棟に戻る気になった。

・・・今夜は強風になりそうだ。

万が一、荒天によってヒカルのフライトが遅延しないために、シャルルがプライベートジェットを用意させるのだろう。それなら多少の強風でも影響しないはずであった。
この家のすべてが、彼女のために回っていた。ルイという、この家の後継者が居るというのに。
それがルイの気に触った。彼は望まれて生まれて来たはずであるが、彼の誕生を望んでいなかった当主によって、ルイは否定され続けており、加えて当主はその座にルイが手を伸ばすことを阻み続けている。

・・・そこでルイは足を止めた。

植垣を巡り、角を曲がればルイの別棟に繋がる小径にさしかかるというところで、彼は行った。そこに、ヒカルが背中を向けていたからだ。そこは温室にほど近い場所で、放熱の影響を受けて他の場所より若干はやく花が咲く。そして今は、寒空の続くこの時期でさえ咲くように改良された薔薇の莟が溢れる場所であった。

●ルイ・ドゥ・アルディの場合　08

ヒカル・クロスが立ち去らずに、ルイに背を向けて佇んでいたので、彼は不機嫌そうな顔を改めて浮かべた。
彼女は、早咲きの薔薇の前で何かを観察しているようであったが、彼の気配に気がつかないわけはなかった。それほど聴力に異常があるとは考えられない。しかし、茶色のくせの強い髪が翻ってルイの方に向き直ることはなかった。

・・・彼女は、薔薇の葉と蕾に近接し、顔を近付けて丹念に・・・贈り物に添付する花を探しているらしかった。
通常は、温室の薔薇を使うのに。
彼女は、寒空の下で薔薇を探すと言ってやってきた。
しかしそれは口実で・・・彼女の目的は達成されないことは、ルイによって宣告されたばかりである。

薔薇の芳香が冷気と相まって独特の香りが風になってそよいでいた。

この邸では彼が必要とするものはほとんど無かった。退屈な日々を過ごす為に生きているわけではない。彼には、目的がある。そのために生きている。誇り高い星辰の子と言われながら、決して彼に遵おうとしないヒカル・クロスが、ここからいなくなれば・・・もっと彼は計画を実行しやすくなるだろうと考えていた。
けれども、彼女はアルディ家の当主を継ぐために必要であった。彼女の秘密を、彼女はまだ知らない。そして、誰もが自分のことを不必要だと感じている故に誰にも距離を置いておきながら、必要とされることを強烈に欲している愚かな娘のことを考えている自分に気がつき、彼は黄金の髪を振った。
物憂げですべてを見とおすような理知的な青灰色の瞳で、薔薇の苑を見回した。一度は枯れてしまった薔薇たちは、シャルルによって再生された。そして今は、当時よりも更に種類が増えたファム・ファタルの芳香が一年中漂っている。薔薇はこの家の象徴であった。未来永劫・・・この薔薇は増え続けるのだろう。
シャルル・ドゥ・アルディが当主である限り。過去に生き、未来に行くことのできない男の妄念によって生み出された、本来なら存在しない者たちがルイを取り囲んでいた。

待ち伏せは効果がないと、今知らしめたばかりであるのに。
それなのに、彼女は再び同じ事を繰り返そうとする。
ルイは彼女の背を通り越して、無視したまま・・・過ぎ去ろうとした。
が、彼女の背中の前で足を止める。
そして、彼女を見た。
・・・花を探しているのではない。蕾の観察をしているのではない。
彼女はまったく動く気配がなかったからだ。集中しているのではなく、息を潜めて彼が通り過ぎるのを待っているようであった。
だから、彼は足を止めた。
彼女の思惑通りにはいかないことを証明したかったのかも知れないが、彼の足が止まり・・そして彼女より高い目線が冷ややかに彼女に注がれる。

ヒカルの肩が動いた。彼が過ぎ去るのを、待っていたのに。それなのに、彼がそのまま・・・彼女の背後に立ったので、彼女は瞬きを繰り返しながら俯いた。

・・・・その瞬間に、彼女の茶の睫から、雫が落ちた。

泣いていたのだ。彼女は、声を押し殺して・・・誰にも気がつかれないようにひとり、ここで泣いていた。
ルイ・ドゥ・アルディが反対側の道を戻り、別棟に入ると思っていたから。
彼がここを周回してくるとは思っていなかったから。

彼女の浅はかな予測に・・・ルイは黙って無表情に彼女の髪が揺れている様子を観察していた。
下を向いたままの彼女の頬から、幾滴も涙が落ちて、薔薇の葉に吸い込まれて行く。地面に還らないその水は、彼女を枯らすこともなく、けれども止まる気配もなかった。

人前で泣かないことを自分の唯一の誇りにしている贖罪の娘は、堪えきれなくなって自分を憐れんで涙することを許可してしまったのだ。
それほど弱い意志なら、最初から・・・そうだと決めなければ良かったのに。

そのまま無視すれば良かった。
しかし、彼はただ・・黙ったまま、ヒカルの傍に立ったままだった。
これがシャルルなら、彼女の涙を止めさせるために様々な方策を講じることだろう。
けれども、ルイはそうしなかった。流れあふれ出る涙を抑制できないヒカルという少女の思考は、彼と違うからだ。
肯定はしない。けれども、彼はただ、彼女が何と言って言い訳を滑らせるのかを知りたかっただけだ。ただ、少しだけ興味が湧いた。

人前で泣かない彼女が、ルイの前で涙を見せるのか・・何か取り繕うのか。
それを打ち壊してから、別棟に戻っても良さそうだと判断したからだ。ただ・・・それだけだ。

彼女が涙を啜りながら、去る様子のないルイに溜息混じりに言った。
「・・・嫌だと思ってしまったの」
彼女の声は震えていた。自分の声に怯えていた。先般・・・彼女の声も、彼女の母に似ているとシャルルに指摘されたばかりであった。あと幾年もしないうちに彼女は、シャルルがファム・ファタルと出会った時の年齢に到達する。

●ルイ・ドゥ・アルディの場合　09

その間にも、彼女は涙をいくつもいくつも落としていた。しかし・・・彼女は決して振り返らない。頑なに、ルイを拒んでいた。

「おじい様の・・・お加減が良くないと聞いて、そういう時にはすぐにでも会いに行かないといけないのに。急を要する失調ではないと聞いて、安堵してしまったの。・・・私、おじい様の健康を案じることより、ここを離れる事の方が辛い、と思ってしまった」
ヒカルはそれだけ言うと、また、涙を落とした。今度は肩を大きく震わせて、咽び泣いた。
途切れ途切れに、彼女は喋り始めた。
「・・・いつも短い滞在なのに、私の部屋を用意してくれている。私にとても親切にしてくれる。でも、可哀想だと言う。親がいないから、ヒカルは可哀想だと私の代わりに泣く」
それなのに、彼女はその場所に行きたくないと言って顔を曇らせていた。
日持ちのする菓子を用意し、忘れて欲しくないと無言で訴える。

これはシャルルの罪であった。だから、ヒカルはそれを誰にも言う事が出来ない。
こうなることは最初からわかっていたことであったのに。本来なら、彼女の正当な後見の立場にある者たちは複数人いるわけだから、彼女はここにいるのではなく・・日本で養育された方が当然であったのに。
それなのに・・・ここにいたい、と彼女は願った。傍に居て欲しい、とシャルルも願った。シャルルが彼女を連れてきた時に、あれほど、ルイが否定したのに。
疑似家族は決して・・・本物にはならないのに。

「それでシャルルに引き止めて欲しいのか。・・・つまらない画策だな」
行きたくないのなら、行かなければそれで解決できる感情だろう。
それなのに、何をそれほど歎いているのか理解できないルイは、ヒカルの背に声をかけた。
そうだね、と言ってヒカルは頷いた。・・・手の甲で涙を拭っている。ルイに見えないように、彼女は俯き、茶色の髪で彼女の顔を隠した。

彼女が躊躇っている理由は、予想できた。どれほど親しく連絡を取り合っていたとしても、どれほど近い血縁であったとしても、情が湧かないのだ。加えて、彼女には両親がいない。保護者の不在により、彼女の感情に欠落しているものがあると、ヒカル自身が認識し始めたのだ。どれほど、シャルルが愛を注いでいても。どれほど、ヒカルが寂しくないと思っていても。・・・この世の多くの者たちが持っている「何か」について、ヒカルははっきりと見分けることもできないのだ。

「しばらく、戻れない。できるだけ傍についていてあげたい」
「そうか」
ルイは素っ気なく言った。ルイは引き留めはしない。

そうしなければならないと自分で承知しているのであるならば、どんなに辛くてもどんなに退屈でも・・・やり遂げ無ければならないからだ。義務と感じて「しなければならない」と感じているヒカルが、本来はそんな風に肉親を思ってはいけないのだと、自分を咎めているのだろう。

「でも・・・どうしても、シャルルとルイと一緒に居たい」
それでわかった。彼女はこれを機会に日本に戻れと言われているのだ。
ルイは僅かに頬を引き締めて、これまでの情報による仮説を組み立てていった。
確かに、今、彼女が帰国するのは得策ではなかった。監護権がまだ切れていないことと、密かにすすめているヒカル・クロスに関する研究がようやく実証される段階に入ったからだ。本人は、健康診断であると信じて疑わないが、定期的な血液や髄液検査はただの健康診断などではなかった。
「シャルルと、だろう？」
彼は言った。ここでルイの機嫌を損ねないように配慮するヒカルの狡さが気に入らなかった。何もかもを持っているのはルイではなく、ヒカルの方なのだ。彼女の存在があれば何もいらないと言う者が日本に居るのであれば、彼女はこの家に居続けることは難しくなる。

ヒカルがそこで激しく首を横に振った。また、雫が落ちて、彼女は溜息をついた。両手で頬を隠すと、眦に指先を強く押し当てる。
「違う。シャルルと、ルイ」
ヒカルが強く何かを否定することはあまりないことであった。人との諍いを怖れて、すぐに自分の意見を閉ざしてしまうので、ルイにはいつも手酷く遣り込められているばかりであった彼女は、今回ばかりは譲らなかった。
「毎年、ふたりのためにショコラを作りたい。同じであることはできないかもしれないけれど、私はここで毎日のように薔薇を眺めて暮らしたい。どんな新しい華ができるのか、楽しみに待っていたい」

「理解できないな。ヒカルが何を求めているのか、オレには知る必要がない」
「ルイとシャルルは可哀想だと言わないから」
ルイはそこで彼女を強く睨み見た。青灰色の瞳が一瞬だけ鋭くなった。
「憐れんで欲しいのなら、そう言え。本当に愛翫動物に成り下がったのなら、それ相応の待遇を用意しよう」
口調は厳しかったが、彼は決して憤りを露わにすることはなかった。

誰かに憐れまれるくらいなら、ルイなら死を選ぶ。
ヒカル・クロスはいつも自分を消し去る努力をしているのに、憐れまれることを厭っていることを露呈した。それは彼の持っている誇り高さとは違っている。
・・・・彼女は、一体何をしたいのだろう。
「対等であるというのは、とても希有なことで、とても大切で・・・そしてとても維持するのが難しいということをいつも心に強く持っていなければいけないのね」
彼女の望んでいることはひとつであった。だから、日本に行かないのだ。
彼女は、家族が欲しいと言う。
憐れんだり蔑んだりすることのない、本当の意味での等しさを持ちたいと願っているのだ。

●ルイ・ドゥ・アルディの場合　10

そのまま彼女の存在を無視して、通り過ぎてしまえば良かった。
彼はそんなことを考えていた。ヒカル・クロスがこれほど厄介な人間だったとは。それほど会話しないように努めていたからかもしれないが、彼女の吐露している煩悶は彼には肯定できかねるものであった。
ルイは後悔するような選択は一切しないはずであるのに、それなのに、立ち止まってしまった。しかし、それも自分の選択であり・・それを選んだからには、最大の結果をもたらすような過程を導き出すことも必要であると考えていた。
つまり、失策だと思ったのなら、得策になるように変化させれば良いのだ。

ヒカルはそれを怠っている。季節の行事に拘るのも、自分の家族がどこにもいないことを認めずに求め続けながらも、決して誰も代わりになり得ないことを承知しているのに。
・・・なぜ、彼女はそれほどまでにして消沈することに耽るのだろうか。

「ルイ。・・・行って。私の顔を見ないで。・・・私はとても今・・・・情けない顔をしている」
彼女はまた涙をこぼしながらそう言った。今すぐにでも日本に戻らなければならないと思う気持ちと、このままここに居続ける日はそれほど長くは続かないという予感と・・・彼女は様々な思いに乱れて、そして涙を流す。彼女の涙の香りが風に乗ってくるようであった。頬を赤らめ、こ

ちらを向かないヒカルの瞳は、明らかに涙で潤んでおり・・・そして声は詰まっている。
彼女は、涕涙に身を濡らしている。
彼は溜息を漏らした。
決して泣かないようにしている彼女は、涙さえ否定しようとしている。
抑制できない自分の感情に、彼女は戸惑っていた。

シャルル・ドゥ・アルディは、何を彼女に教えてきたのだろうか。
感情を抑え、自分の心の動きを他者に察知されないようにする術を教える時間は、いくらでもあったはずなのに。
彼は、ここまで考えて、ふと唇を引き締めた。
これまでの思考がすべて既定の逆接条件を指摘していることに気がついた。
これは、不服であることを示している。誰が不服なのか。・・・それは明白であった。

「ヒカル。オレに命令できる者はいない」
ルイはそう言おうとして・・次に自分の行為に、青灰色の瞳を開いた。
彼女の髪を掴み、憐れで惨めな顔をしたヒカルの顔を覗き込んで嘲笑ってやろうと思った。
そのために、腕を伸ばした。
しかし、彼は・・・しなやかな腕を伸ばし、そして・・・彼女の顔を己の手の平で覆ったのだ。
反対側の手が強く握られた。
そうしなければ、彼女の肩に腕を回して自分の胸に寄せてしまいそうになったから。
ヒカルが驚愕のために、彼の腕に両手をかけて小さな悲鳴をあげた。彼はそこで彼女が逃れないように更に強く・・・彼女の瞳や頬、鼻梁を覆う。
彼女の茶色の睫や瞳から零れる涙の湿気が彼の掌の中で悶えた。
「ルイ・・・」
彼女の背に流れる茶の毛先が、彼の胸にあたった。
ルイは黙ったままだった。
自分の行動を分析しようとしたが、そうしなかった。

彼は涙を流す者を信用しない。特に、人前で涙する者は情動的で目先の未来しか見えていない傾向が強いからだ。堪えることができてこそアルディ家の者であると言える。
しかし、彼女はそうではなかった。感情の向くままに、こうして涙を流す。それでも、誰かの前で泣くことはしないと決めているのは、彼女のささやかな美点であると認めていたルイは、彼女がルイの前でだけ・・・特に頻繁に涙とまではいかないが、乱り顔を見せるヒカルの真意について考察することにした、という課題を自分に与えた。
彼の目の前で泣くヒカルに、思わず手を伸ばし、涙を拭って遣ったとは思いたくなかった。
彼はルイ・ドゥ・アルディであり、星辰の子と呼ばれている。
誰もが彼に平伏すのに、彼が腕を伸ばす相手が、この贖罪の娘であるとは認容しがたい。

彼の掌が・・温かい雫で濡れていく。細く長い指先が湿った。
「決めたことは最後まで守り抜け。・・・それが誇りだ」
彼はそう言って、囁いた。彼女の髪に唇を寄せて、少し怒ったように言う。
彼の指先の冷たさを感じ、それまで紅潮していたヒカルはますます赤くなった。これほどまでに誰かの肌を近くに感じることはないからだ。
しかも、彼がこんな行動に出るとは思わなかったのだろう。彼女は驚きで涙を止めていた。
唇が半分開き、そこから、彼の名前だけが漏れる。

ルイ・ドゥ・アルディは知っている。彼女が、決して誰かの前では泣かないことを。
そして・・・それなのに涙している姿を見られて、せめて顔は隠しておきたいと思うヒカルを尊重し、彼は・・・彼なりの方法で、ヒカルの誇りを守ったのだ。
それを悟った瞬間に、ヒカルの瞳から涙が一気にあふれ出た。
誰の前でも泣かないと密かに決めていたのに、それがとても脆い誓いだと絶望していた彼女の涙を感じながらも・・・ルイは囁くのだ。
彼女の嗚咽が聞こえた。・・・彼の腕にしがみつくように両手を添えて、彼女は涙を流し続けた。
「きっと帰ってくる。きっと・・戻ってくる。だから、泣いたら、いけない。泣いたら・・・戻って来られなくなる。私は最後に、笑って見送れなかったから・・・・」
彼女が海に消えた両親のことを歎いている。それを聞いたルイ・ドゥ・アルディは、ただ黙っているばかりであった。
最初から居ない者を待つことと、戻らないとわかっている者を待つのでは・・・どちらが苦しいのだろうか。

●ルイ・ドゥ・アルディの場合　11

「・・・誰かに齎されるものは、決して己を満足させない」
彼の言葉に、ヒカル・クロスが僅かに身震いした。ルイ・ドゥ・アルディの言葉は、神託にも似ている。
彼は自分の信念を誰かに語ったりしない。

誰かのために言葉を投げるルイは存在しない。
それなのに、彼は彼女のために・・・言葉を落とす。
いつも、泣かないと決めている少女が、彼の前では涙をこぼす。そして歎く。
この場を立ち去ることもできず、ただ、薔薇にのみ悲観を見せる彼女の頬に、彼の親指や中指が触れる。細く長い、神経質そうな指で・・・ヒカルのよく知っているシャルルの指に似ていた。

彼女は肩で息をしながら、乱れた感情を落ち着けようとして、眉をきつく寄せ、赤らんだ顔から火照りを押しだそうとしていた。

やがて、彼女から温かい雫を感じなくなった。

どのくらい、ふたりはそうしていたのだろうか。

彼女を無視して、放置して、別棟に戻ることは簡単であった。嘲り詰り、そして彼女の意志の弱さと感情を抑制出来ない部分を突いて、非難することも簡単であった。
「ルイ・・・ありがとう」
ヒカルが静かにそう言った。もう声調も乱れていなかった。
彼女は時々・・・こうして自分の歎きを洗い流さなければ、彼女の中の靄を吹き飛ばすことができないのであろうか。人は皆・・・そういうものなのだろうか。
彼がそう考えていると、力が抜けた瞬間を見はからって、ヒカルが彼の手の平から抜け出して、顔を自分の服の袖で拭った。
まだ声は涙を含んでいたが、それでも彼女は・・・もう、だいじょうぶだ、と自分に言い聞かせるように呟いていた。
「ルイ・・・見苦しいところを見せてしまった。ごめんなさい」
「謝るくらいなら、最初から・・・泣くな」
謝罪と謝辞を同時に述べる少女に、ルイは冷たく言い放った。どういう訳か・・・彼女の涙に触れた皮膚から彼女の温度がルイに染み渡っていき・・・彼に痺れをもたらす。彼の言葉をより頑なにさせる。
「そうだね・・・そうだね・・・」
ヒカルが静かに、羽根のように軽くそう言った。軽んじた軽さではなかった。
その言葉の重さを知っているから。
重力を感じさせない儚さでもって、彼の言葉に応じたからだ。

「ルイには甘えてしまってばかりだね・・・」
ヒカルの溜息混じりの声に、ルイは何も言い返さなかった。
甘える、という行為が理解できない。
人に凭れなければいけない理由や動機が、ルイには存在しないからだ。
「ごめんなさい。・・・私はあなたの・・・ルイの妹になれない」
彼女がルイから離れようとした時・・・その時、彼女に回されたルイのしなやかな腕に緊張が走った。まるで、触れていることが必要不可欠であるかのように。

妹として遇するように、とシャルルに言われたことを、ルイは思い返していた。
だからなのか。彼女が、妹の役割を演じようとして、それをルイにも押し付けようとしている

のは、これが理由なのだろうか。
妹などではない。
彼には、妹はいない。もし・・・本当に自分の妹であれば、こんな風に立ち止まらない。無視しても互いの存在を認識することができるのだろうから、こんな風に・・・彼女の涙を受けることはしない。

本当なら、すぐにでも出発しなければいけないのに躊躇していると吐露するヒカルの、茶色の髪を見つめながらルイはただ・・・言葉を呑んだ。彼にはそのようなことはあり得ない。あり得ないのに・・・ヒカルの前では彼は・・・あり得ないことをする。
彼女が、誰の前でも決して涙を見せないと言っているのに、ルイの前ではひたすらに涙を流し続けるように。

「・・・誰かの前で泣くのであれば、誰の前でも泣け」
彼は彼女の細い首に手を回し、軽く引いた。
そしてヒカル・クロスの茶色の髪に・・・近付く。

彼には、いつも誰かが近寄る。
しかし、彼から近寄る人間は存在しない。そう思っていた。これからも、これまでも、そして今この瞬間でさえ、そうであると信じているし、それは事実であった。皆を従えさせるけれども、誰にも従わない。だからこそ、彼は星辰の子と呼ばれているのに。

彼の言葉に・・・ヒカルはただ、黙って頷いた。一度だけ首を引き、髪を地に向けて涙を大地に捧げた。大粒の涙が最後の一滴を落とした。
ルイ・ドゥ・アルディは遠回しに言った。
しかし、彼の最大限の近接した言葉であった。
誰かに近寄ることはしないルイ・ドゥ・アルディが、彼女に・・・・泣くな、と言った。

不器用な慰めの言葉を、ヒカルは感じてまた涙を落としたのだ。彼に触れないように・・・今度は、土に還した。彼女の歎きを、ルイに向かって吐き出さない。それでも、ヒカルは誰の前でも泣かないのに、彼の前ではこんな風に誰にも見せない姿を見せる。涙顔は確かに、見ていない。けれども・・・彼女は涙を知らない人形ではないのだと、ルイに訴えているようであった。
ただ微笑むだけの、ただ愛でられるだけの存在ではなく、哀しみも憂いも知りそして自分の中の醜さに苦悶しているひとりの人間であるのだ、と彼女は涙を流す。

孤独というものは、人それぞれでこれほど違うものなのかと、互いに知った瞬間であった。
ヒカルの孤独を、ルイは辿ることはできない。同じ様にルイがなぜ冷淡であるのかヒカルが彼の

軌跡を巡ることができない。

だからこそ・・・だからこそ、こんな風に温度を感じていたいと思うのだと・・・誰も教えていないのに、彼と彼女の中の、遺伝子よりもっと細やかで細やかな何かが、彼らに働きかける作用について、彼らはじっと深く考え込むばかりであった。

ルイは、ヒカルを強く抱くこともしなかった。
ヒカルは、ルイの腕に強くしがみつかなかった。

なぜなら・・・なぜなのだろうか・・・
なぜ、と理由を考えているのに、それを考えられない何かが、思考を阻むからだ。

●ルイ・ドゥ・アルディの場合　12

温かい雨のような、ヒカルの涙を受けて・・・彼はそっと腕を離した。
落ち着きを取り戻し始めたヒカル・クロスと、それ以上近付くつもりはなかった。
きっと、ヒカルはこのことはシャルルには話をしないのだろう。
確信できた。
彼女は涙を流してしまったことについて、シャルルに報告はしない。
ひとりだけの秘密にしているからだ。
ルイは「誰か」にならない。ヒカルの中では、彼は空気と同じなのだ。だから、彼の前で
涙を見せても平気なのだ。
だから、彼は彼女の前では人でなくなる。彼の前では、彼女は涙を流すということは、ルイはヒカルにとって、「誰か」ではないのだ。「誰かにさえならない誰か」なのだから。
だから、彼の前で彼女は涙を見せる。泣き顔は見せないが、涙の雨を見せるのだ。これほど、自分を蔑ろにされてなお・・・ルイは、それでも、その場を立ち去らなかったことについてヒカルは考えようとしない。生きていくだけで精一杯で、自分の望みも希望も何もかもを・・・捨てている。そうしなければならないのだと信じている。

「・・・ショコラ、置いて行くので、受け取ってね」
ヒカルはそっとルイに願い事を述べた。それが実現するかどうかは、彼女は気にしない。・・・ただ、自分の希望が叶えられたかどうかではなく、自分の希望が言えたかどうかだけが彼女を左右するのだ。・・・彼女の願いは叶わないことが多い。
両親が戻ってきますように、という願いは、今でも実現していない。
彼は彼女の腰を引き・・・そして彼女の華奢な肩に腕を回した。まるで、恋人同士の逢瀬のように、彼は彼女を自分の胸に抱いた。
ヒカルが体を強ばらせて緊張する様子が伝わってくる。それでも良かった。・・・それでも、彼

はそのまま彼女を抱き寄せた。

「・・・オレのことを無視するヒカルに、報復する。
ヒカル・・・贖罪の娘と蔑まれて、生涯を惨めに生きるが良い」
彼女の体が電流を流されたように、激しく動いた。彼の中で悶える彼女の躰を・・ルイはただ、無言で抱きしめる。
この行為に、意味があるとは思えない。でも、それでも腕や体が・・・彼女の体温を確認するために計測を始めるのだ。
次に会うヒカルと、どれだけ違うのか。
・・・そう。彼は、これきりの別れとは思っていないから。次に、またヒカルと出会った時に、彼女の違いを見つけるために・・・彼女を抱きしめる。
ヒカル・クロスは、ルイの言葉にただ俯くばかりであった。また、涙が落ちた。彼の腕に落ちて・・・そして肌に染み入り、彼の中に入っていく。彼女の泣き顔は、とうとう見ないままに終わった。けれども、彼女の涙は・・・彼の中に真実として残るのだ。
甘く、どんな菓子よりも甘く、そして塩辛い海の味のする粒を、彼は受け取った。
それが、ヒカルから贈られた、彼女だけしか生み出せない甘い・・甘い吐息という名前の魅惑の蕾であったから。
彼は、腕を差し伸べて、それを受け取った。
受け取ってしまった。
彼は、意図せずして何か行動することはないのに。それなのに・・・受けたのだ。
彼女の涙を。涙という名前の甘い歎きを。

ヒカルは、ルイ・ドゥ・アルディの温もりを抱きしめながら、また涙をこぼした。
「また・・・戻って来ても良いのね・・・」
贖罪の娘と呼ぶ者は日本には存在しない。彼女に罪を購えと述べる者は・・・このフランスに居るアルディに縁の深い者しか存在しない。
彼女は、ルイの言葉に応じた。惨めに生きたいわけではない。でも、彼の云うように、自分の生まれて来た意味を考えるのであれば、ここに戻ってくることしか選べない。
報復する、と云ったルイの言葉は、本当の報復ではない。わかっていた。わかっている。
彼はとても・・・冷たくて優しい。優しいのに、冷たい言い方しかしない。
蔑まれても辛くても、生きることを選んだのであれば・・・・帰ってこい、と彼は言っているのだ。

「・・・仕返しは倍にして返すことにしている。それがアルディ家の家訓だ」
ルイ・ドゥ・アルディはそれだけを言うと、おもむろにヒカルに籠めていた力を解放し、そして体を離した。
「そうだったわね」

ヒカルはそれを受けると、静かにそう言って、自分の涙を拭った。ルイは彼女の涙を上蹴ることはしない。そうしてしまえば、泣いてしまった事実を、彼が認めることになるからだ。ヒカルは誰の前でも泣かない。それを知っているから、突き放したのだ。
ヒカルは彼の意図を感じ、涙を拭う。

「私、ルイに借りを作ってしまった」
「そう思うのなら・・オレを退屈させないでくれよ。報復とは、一往復で終わるものではないから」
ああ、どうしてこんな風にして、難しい言葉でしか言えない人が、居るのだろうか。
ヒカルは呟いた。けれども、これは・・・この家の常なのだ。ルイだけではなく、この家の者は皆、こんな風にして、難しい謎かけをヒカルに与える。
けれども、それは決して難しいのではないのだ、と解いた後になって思うのだ。
それから、彼は小さな声で囁いた。
「・・・・妹にも家族にもしない」
ヒカルが、彼の言葉の先を待って、暫く俯いていたが、それでも彼がその先を続けなかったので・・・顔を上げる。ようやく、涙は彼女の頬から去っていこうとしていた。
そして、顔を上げたヒカルの目に映ったのは、背中を向けて、薔薇園を去ろうとしているルイの広い背中が遠のく姿であった。

2012 St. Valentine's day　L-side　後編

●ルイ・ドゥ・アルディの場合　13

彼女が、彼の背中を追わないのは承知していた。もし、そこで・・・ヒカル・クロスがルイ・ドゥ・アルディの背中に触れたのであれば、もっと違う未来も用意できたのかもしれない。けれども、そうしなかったので、彼は彼が予め計画していた予定をそのまま遂行することにした。どんなに彼女が厭っても、彼を拒否できないようにするため・・・彼は年月をかけて計画を実行することにしたのだ。

たったひとつを、証明するために。

・・・彼女の泪を見るのは、他の誰でもない。ルイ・ドゥ・アルディひとりだけである。

彼女は、そのまま出立してしまった。そして、彼に・・・一箱のショコラを残していった。
メッセージカードは、直前に差し替えられたようで、走り書きのような慌てた筆跡が残っているだけであった。そこには、「ありがとう、行ってきます」と書かれていた。

・・・感謝されるために彼が居るのではないのに。

彼女は、彼女が背を向けた時に、その向こう側で彼がどんな表情をしているのか、知らないし、知ろうともしない。
しかし、今はそれで良かった。いつか・・・彼女が振り向いた時が・・・そこで彼の勝利は確定するのだ。

勝利。
何に勝つのだろうか。

彼は、今日もまた・・・ひとり、薔薇園を彷徨う。まるで、あのフランスの華がそうしているかのように。けれども、彼が決して漫ろ歩かない時間を見はからって、ルイは薔薇の苑を彷徨うのだ。なぜなら、その時にヒカル・クロスが居る事が多かったから。

ファム・ファタルとの想い出に浸るために、ひとり薔薇園を歩くシャルルのために、ヒカルはいつも時間をずらして薔薇を探しに彷徨う。それがますます・・・フランスの華を刺激するのだということにも気がつかずに。求めても、探しても、決して行き会うことのできない薔薇の迷路を、追いかけて追われて・・・そして何度も繰り返すのだ。
けれども、ヒカルはそれに気がつかない。彼女を追いかける環には、シャルルだけではない者が

関与していることに、気がつかない。

・・・ショコラは、競技用にコーティングされて、指で溶けずに腔内で溶解するように仕上がっていた。けれども、それでは咀嚼に気を取られて、集中力が途切れてしまう。口に運ぶ事を意識しないものが必要であるのに・・・ヒカルはそこまで考えに及ばなかった。
ルイは、金の髪を風に靡かせて、青灰色の瞳をまっすぐに本邸にあるヒカルの部屋に固定した。この苑からは、ヒカルの部屋がよく見える。極力窓を開けるようにしているヒカルが不在なので、幾日も、窓はきっちりと閉められて厚いカーテンが垂れているので、まったく使用されていない他の部屋となんら代わりのない様相であった。

・・・決して行き会わない薔薇の苑で、ルイを待っていたヒカルが用意したショコラを、ルイが手にしたかどうかを確認する前に、ヒカルは旅立った。
シャルルはヒカルの不在を認めたくないかのように、外泊を伴う長距離の出張を繰り返している。
煩い輩がいないので、ルイはここに滞在する。ただ、それだけのことなのに。
・・・彼は、ひとりきりで居られることを喜んでいた。
誰の気兼ねもなく、この苑に出入りできるからだ。それは彼に埋め込まれた必須事項なのかもしれない。考えを深くするには、この薔薇の匂いが必要であったが、それは彼のこれまでに起因するものではなく、生まれながらにして持ち合わせている性質なのだと気がついた時。・・・彼は自分の命が、創られたものなのだと、実感した。
この家の何もかもを覆すために、生まれて来た。そして・・・何もかもを踏み越える強さと強かさを持つことを求められてきた。けれども、彼にはそれを身につけようとする努力は不要であった。なぜなら・・・元から、備わっていたからだ。
どうしてそういう創りになっているのかということは問いかける必要は無い。けれども・・・
なぜ、誰も居ない薔薇の苑をこうして巡るのか、なぜ、居ないとわかっている部屋の方を何度も見るのか・・・それは彼に作り込まれたプログラムでないことはわかっていたが、それを深く探ることはしなかった。
理由が必要なのではなく、そのことによって未来が変わることが懸念されたからだ。
彼の予定は絶対であり、予定は未定で終わることはない。確実に、実現する近未来なのだから。

ヒカルが彼のためだけにショコラを創り、そしてそれを捧げる日は必ず訪れる。愛する者へ捧げるという行為がどれほど重いものなのか、ヒカルはまだ知らない。軽々しく行動する彼女にいつか後悔の泪を流させると決めたルイは、今はただ、待つことにした。
ここで行動しては、ヒカルはアルディ邸に戻って来ない。アルディ家の介入がクロス家の不興を呼び起こすことは承知している。
今頃は、彼女が日本に戻ることを説得しているのだろう。本来ならそうするべきであるのに、ヒカルは渋っているからこそ、まだ戻って来ないのだ。

それで良い・・・ルイは思った。彼女が自ら、フランスに居たいと意思表明をしなければクロス家は諦めない。前当主との付き合いや、現当主とヒカルの父母との関係から、両家はヒカルの処遇を本人の希望を尊重し、黙認し続けた。
・・・けれども、強引な手配で彼女をここに留めて置くことにしたアルディ家当主のことを快く思っていないし、彼女に冷遇や批判を加えようとしている、ヒカルの伯母とヒカルの関係が表面化してしまえば、その後が厄介であった。
そこまで、考えて行動しないシャルルにも苛立ったし、自分の立場を弁えていないヒカルの言動も理解したいと思わなかった。

彼女は、自分の秘密に気がついていない。気がつかないように、周囲が配慮しているからだ。もう少しして体格が安定し、成長が止まり、細胞の活動が安定した時。ヒカル・クロスはこの世を覆す聖女として表舞台に降臨する瞬間を迎える。
その時には・・・誰が後見しているかが重要になる。だから、シャルルは彼女を成人するまで手放さないと決めていた。それは建前であったが。

・・・ルイはまだ冷たい風が吹き付ける薔薇の苑をゆっくりと歩いた。
あれから、外気温はだいぶ上がり、ヒカルが去った同じ時間であるのに日の射し込む角度も、風の向きも、何もかもが変化していた。
咲いている薔薇の種類も違っている。・・・そして、シャルルはヒカルが残していったショコラに手をつけずに今でも彼女が戻ってきてから一緒に食すと言っている。
その一方で、ルイは先日の競技会でそれらを消耗してしまった。
ヒカルは承知していたはずだ。試合の最中は集中しているから、味わう時間は残されておらず、ただの吸収用のためだけのものを彼女がわざわざ残して置いたのは、普段はルイが決して口にしないとわかっていたからなのだ。

・・・それでも、彼の集中力は一瞬、途切れた。口にした瞬間、薔薇にも似た芳香が飛び、彼の鼻腔を刺激して目頭から揮発した空気が抜けていくような感触を得て、彼は小さく舌打ちしたのだ。・・・彼女が、どうして、薔薇を添えると言って薔薇園を彷徨ったのか、その時に知ったから。

■ルイ・ドゥ・アルディの場合　14

それは・・・薔薇の香りが強いので、咀嚼するまで気がつかないように施された仕掛けが埋まっていた。
・・・彼が沈黙し、思考に深く沈むことのないように、彼女が舌に刺激のある材料で、彼の感覚を呼び覚ますようにこしらえたショコラであった。
試合の時に口にするように、とヒカルは言い置いて行ったのに、彼が大事な試合でヒカルの用意

したものを手にすることはないのだとわかっているかのような所業であった。

それを口にしたとき。
ルイは、青灰色の瞳を見開き、そして薄い唇を歪めて、声を漏らして不敵に笑った。
目の前の対戦相手が驚愕し恐怖するほど、凄艶な微笑みであった。

愚かな贖罪の娘が彼を窮地に陥れるかもしれない、と思った瞬間であった。
彼女は、ルイの人生の計画の手駒のひとつでしかない。
他の者たちと同じであると思っていた。
どんなに手強い攻撃をしてくる相手でも、彼には遠く及ばない。そして、誰もが彼に平伏す様を眺める度に、ルイは虚無を感じ、ますます自己の中に埋もれていく。
彼の思考を中断させることができる、ただひとつの瞬間を、あの贖罪の娘は知っている。
意識しないで唇に含むショコラが、彼の脳を活性化させるが、同時に彼を無防備にさせるのだ。
ルイの教育係であるミシェルに幾度か忠告されたことがあった。何かに集中しているとき、微動すらしないシャルル・ドゥ・アルディは、その瞬間に何を盛られることもないように、何も口にしない。だから、ルイも配慮が必要だ、と言われた。忠告されなくても、承知していることであるので、その都度ルイは冷笑して聞き流すことにしていた。何度も繰り返すことをしないアルディ家の男の理をミシェルは容易く覆す。それが余興であるというかのように。
ミシェルにとっては、全てが退屈凌ぎなのだ。・・・何もかもが、彼の生の中では退屈なのだ。
それなのに。
それでいて、死ぬことと同じくらいに生きることにも熱心である。
・・・生き抜けと、誰かの遺言を自身の心に刻んでいるらしいが、それも長い年月の中でルイがいくつもの情報を集めた結果の予測でしなかった。ミシェルはまったく自分のことを語ろうとしなかった。だからこそ、ルイの教育係なのだろうが。自身への執着を持たないからこそ、彼はアルディ家に留まっているのだから。邪気がないのか無慾であるのか・・・それは誰にもわからなかった。ミシェルのこれまでの経緯から見ると、彼はいつでもその命を奪われてもおかしくない立場であったのだから。
そういう儚い立場を愉しんでいるようにも思えた。

ヒカル・クロスがルイに何か訴える時には、いつも・・・静かに事が鎮まることはない。彼女は自分の非力を承知しているが、彼女が影響を与える人物のことを把握できていないわけではない。
こうして、物事が動いているのだと証明し続けているようなものであった。彼女は何もできないが、彼女は何かに影響を与えることができる。
ヒカル・クロスが泪を見せれば、アルディ家の頂点に立つフランスの華はすべてを動かすことを厭わない。
彼女は、哀しみの源を絶つことが出来ると思っている。

そうではないかもしれないのに・・・。

・・・ルイは春の空気が深まるのをひとり、感じながら定期的に薔薇の苑を歩く。

シャルルが常駐する温室には、四季は存在しない。いつでも、望んだ時に最良の時期を迎えるように調整することができる。・・・しかし、ヒカルが漫ろ歩くのは温室だけではなくアルディ邸の地植えの苑も含まれていた。それら全ての中で、最上とされる状態の薔薇をシャルルに捧げる為に彼女はこの邸を周回する。

■ルイ・ドゥ・アルディの場合　15

ヒカルの居ないアルディ邸は、静かであった。彼女が騒がしい人間であったからということではない。どちらかというと彼女は無口な方であるが、更に上回る寡黙な人間がこの邸には多かった。しかし、彼女が居ると、どうにも皆が浮れ立つのだ。率先して彼女に再考の状態の薔薇の報告をしたがり、彼女に季節の料理の作法や味わいを教えたがる。この屋敷にも、四季があるのだと煩く囀る者たちの口を閉じさせることはできなかったし、主はヒカルがそれらに顔を綻ばせて享受する様子を眺めて楽しんでいるようにさえ思えた。
だから、ルイは本邸にはあまり足を運ばない。騒がしく彼の思考を阻む者たちへの罪深さを説いて廻るほど、彼はお人好しではなかったし、人間が好きではなかった。
彼女は、澱んだこの家に風をもたらすのではなく根柢を深く揺るがす存在なのだから。
もう少し成長し、彼女の遺伝情報を解析するための提供意思確認が認められるようになれば、この世の理が大きく覆される。
医療業界だけではない。あらゆる方面から彼女はこの世界の聖母として注目されるのだ。
束の間の静穏であった。けれども、ヒカルを気遣ったものではない。
表面上は静かで穏やかな時間が流れているように見えるだけで、その底面では・・・彼女の知らないところでは、今も激しく情報が錯綜し、ある研究機関などでは密かにタイプHのゲノム解析結果についての追記レポートの提出がアルディ家の出資する研究所に何度も要請されている。この人物が誰なのかということは、誰も興味がなく、遺伝情報を開示しろと騒がしくなってきたので、シャルルはその対応に自ら乗り出すことにしたらしい。だから、いつもアルディ邸にいない。
ヒカルという存在や個に興味がないが、ヒカルだけ持っている、秘めたる大きな変異を皆が欲している。彼女の血族も密かに検査したが、ヒカルだけしか条件に合致しなかった。

間もなく、この世の中は明らむのだ。

永遠の晄という名前の贖罪の娘が放つ電光に誰もが平伏し、疼き、泪を流して奇蹟を望む。
彼女が甘味の強いショコラを創ることを季節の行事にする回数は、あと数回だと限られている。

だからこそ、この家の主は彼女の好きなように振る舞わせているのだから。
永遠の晄という名前の娘は永遠にこの家で生き続けることはない。

意味も無いのに、彼は昊を見上げた。
今は、騒がしさはない。あるのは本来の静謐だけであった。

もう、戻らないかもしれない。
ヒカルが予定していた滞在を幾度も延ばしているので、アルディ家の当主はとうとう・・・彼女を呼び戻すように命じた。
周囲は驚いた。
フランスの華が誰かのことについて思うとおりに事が運ばないことについて苛立ち、次の命を投じるのは本当に久しいことであった。しかも、相手はアルディ家の者ではなく単なる滞在人の未成年者であるのだから。

そろそろだな、と思った時には、彼の計測どおりの時間配分で背後から・・・音がした。
走り寄る軽い足取りは、この苑の配置を知り尽くしている者のものであった。

静けさが破られる瞬間というものは、徐々にではなく突然にして訪れる。
彼は整った顔を昊に向けて、最後に一度だけ・・・静けさを含む空気を肺に入れた。
誰も彼に詮索しない、薔薇の香りだけしかしない大気は、あるとき突然に・・終わりを迎える。
それが、この瞬間であるだけだ。
だから、彼はそれに驚愕したり惜しんだりすることはしない。
額に風がかかり、彼の金の髪が絡まり零れて顳顬に戻っていく。

それでも、彼は、振り返らずにいたが、やがて彼の背中に誰かがしがみついて勢いを止めた。彼はまったく動じることもなく、その重みを黙って背で受け止めた。

静寂の時間が終わりを迎えた。
甘い薫りが、ルイの溜息を誘う。それは薔薇の匂いだけではなかった。甘く・・・苦しくなるほどの・・・ルイに苦い笑みを持たせたショコラと同じほどに甘すぎる風だった。
ルイの味蕾にあの時の記憶が甦ってくる。勝負で勝つことは最初から予定であったが、もっと短い時間で勝利することができたのに、彼の用意していた時間より少し延長してしまったあの争覇を今でも屈辱的であったと感じているルイの表情が無になった。

それなのに。彼はその次に、変化を見せる。
「・・・ルイ！」
彼を呼ぶ声に、青灰色の瞳を細めた。

本当に僅かだけ。彼本人ですら、気がつかないほどに。微かに、唇と頬が震えた。
彼の記憶が彼を無にさせるのに、彼女の声が彼を無から引き摺り出すのだ。
見事な金の髪の下で、彼は薄い唇を横に引いた。しかし無言であった。

「今、着いたばかりなの。急にフライトの日時が変更になって・・・」
ルイは冷笑した。「急に」ではない。誰かが、そうするように命じたのだ。その誰かというのはもちろん、忌々しいあの男であることは違えようもない事実なのだろうと確信している。
ルイは振り返り、茶色の髪を見る。走って来たのかそれともそれ以前の問題なのか、彼女の髪は乱れていた。額も汗ばんでいたし、まだ両肩を上下させて乱れた呼吸を整えているところであった。

「連絡できずにいた。ごめんなさい」
「ヒカルが謝る必要がどこにも存在しない」ルイは静かにそう言った。彼の唇が震えていることは、ヒカルには気がつかれないように俯いたままであった。
「特に要用がなければ、連絡は必要ない」
傲慢な娘の言葉をルイはあっさりと切り落とした。彼女に用事が無くても声だけでも、せめて聞きたいと願う人間ばかりで此の世は構成されていると思っているのだろうか。

■ルイ・ドゥ・アルディの場合　16

彼女の帰邸は知っていたことであった。ただ、その予定が繰り上がっただけのことである。今回のヒカルの不在は、長かった。当初の滞在期間を幾度か変更している。それも彼女本人が希望していることなのだと代理人を立てて連絡があるものだから、ヒカル・クロスを軟禁していると思ったのだろう。シャルル・ドゥ・アルディがとうとう、動いたから彼女は告知していた日時より前にパリに入った。それが事実であり、それ以上の情報は必要ではなかった。

・・・これから彼女が日本に戻る都度、滞在期間は延長されていくことだろう。
シャルル・ドゥ・アルディがヒカル・クロスを懐柔していると批判めいた発言が横行し、今進めている交渉事が頓挫するとなるといろいろと不都合が生じる。

「わかってる」
「いいや、正確に理解してくれ。・・・オレは君と疑似家族を楽しむ余興を披露するつもりもない」
戻って来たばかりの彼女に辛辣に言葉を戻していく。けれども、ヒカルは徐々に呼吸が落ち着くにつれて、彼の背に手をあて、軽く一度だけ撫でた。軽々しく誰かに触れるような娘は、ルイの清艶な顔の翳りにさえ気がつかないのに、それでも彼に向かって無邪気に微笑む。彼女が居るだけで、大気がざわつくのだ。そう感じるだけかもしれないが、彼は「かもしれない」という曖昧

な感覚を事実にはしない。

「君は、いつも突然で計画性がない。そういうものを、ここに持ち込まないでくれ」
彼は冷たくそう言った。頼んだのではない。命令したのだ。そして彼の忠告というものはただの一度しかない。ルイは決して繰り返さないから。次に彼女が同じことをすれば、今度は彼女との関わりを断つ。それが、ルイであった。
ヒカルは暫く、そんな彼の様子を見つめていた。じっと・・・静かに。
それでも、彼女の全身から騒がしい気配が立ち上っている。それは、彼女が心から帰邸を喜んでいるからだ。黙って居ても隠しようのないほど、彼女が昂揚しているからだ。
茶色の双眸の茶色の髪の娘は、戻って来て早々にこの薔薇園にやって来た。シャルルが居ないことを知っているのに。・・・だから、この場所に誰かが居るとしたら、それは星辰の子しかあり得ないと承知しているのに、彼女はそれでも・・・彼のためにやってきた。
「あのね、おいしいショコラの作り方を教わってきたの。だから・・・今度はルイに気に入ってもらえると思う」
怖ず怖ずと、ヒカル・クロスがそう言ったので、ルイはまだむっつりと黙り込んだ。
彼がヒカルの差し出した菓子を、ルイが律儀に口にしたという前提で彼女は話を進めていた。感想も必要としていなかった。ただ、彼女はルイにルイの知らないヒカルの日本での出来事を幾つか報告した。
「いろんなお店を回って・・・いろんな作り方があって、ルイのように糖分摂取のための競技用のショコラの作り方とか・・・教えてもらえる機会があったの」
そこで彼女はふと、真剣な顔をして、ルイを見上げた。
彼はヒカルよりも背が高く、そして彼女と視線を合わせるために自ら体を屈めるようなことはしない。あれから寒さは去り、彼女は最後に見た時より鮮やかな色を纏わせた春の装いであった。
それでもここ数日は寒の戻りにより冷え込んでいるので、苑の影に入り込んでしまうと肌寒く、日が暮れると吐息が白くなるほどである。
それでも、確実に、彼女には春が訪れていた。

彼女はルイにそっと囁いた。
「ルイ・・・ごめんね・・・私、不勉強でした」
彼女は、強い芳香の残るショコラをルイに競技用にと捧げたことを謝罪した。ルイは無言だったが、ヒカルは続けた。
「味とか匂いとか・・・集中力を欠くような、そういうものはいけないのだと知って・・・私が一番最初にすることはルイに謝ることと、ショコラを次は失敗しないように創ることだと思った」
そして両手を体の前で組み、恥ずかしそうに俯いた。
「知らないというのは言い訳にならない、とルイが言う本当の意味・・・全部はわからないかもしれないけれども、少しだけわかったような気がするの」

「だから、許して欲しいと？オレに赦しを求めるわけ？」
ルイがぶっきらぼうにそう言ったので、ヒカルはううん、と幼い返事をして首を横に振った。
久しぶりの再会に耽るほどの感慨はなかった。
こうして幾月も顔を合わせないことはよくあったが、彼女はいつもその日のうちに彼に連絡を取るように努めていた。
シャルルとヒカルは本邸で顔を合わせるが、ルイはヒカルが希望して行動しなければ、別棟に籠もったままで居るからだ。そしてルイからヒカルには会いに行くことは、ない。
当主が命じれば渋々従うが、それでも彼はヒカルを家族とは思っていなかったし、同居人とすら認識していなかった。

出発の直前には、日本に行きたくない、と泪を溢して苦悶していた彼女が、晴れやかな顔で戻って来たので・・・彼はそれが気に入らなかったのだ。
帰る場所が幾つも存在する、傲慢な少女に向かって、彼は何かを言っても無駄なのだろうと判断した。・・・彼女が理解できなくても、それでも何かを述べるルイは愚かしい自分自身の行動について分析しようとした。でも、すぐにそれはやめた。彼女が積み重ねた事と、ルイの累積記憶が不一致だったとしても、同じであるよりかはマシであった。自分と同じ人間は存在しない。彼は創られた種であるからだ。ヒカルも同じ過程で生まれたが、その後の成育過程はまるで違っていた。

彼には生きる目的があり、ヒカルは生きる目的を解放することに懸命であった。
「だからね、私にもう一度・・・ルイのためにショコラを創らせて欲しい」
彼女が薔薇園に真っ先にやって来た理由がわかった。ルイに会いに来たのではなく、ショコラに添える薔薇を摘み取りにやってきたのだ。ルイが、周回する時間を知っていたわけではなかった。
・・・彼は一度見た風景を忘れることはないのに、何度も苑を歩くのは、彼が思考に耽っているからではなく・・・もっと、違うものを待っているからなのだと、少しもヒカルは考えないのだ。静けさを求めているのに、静けさが壊れる瞬間を待って・・・彼は幾度も苑を巡り歩くことを、ヒカルは知らない。

■ルイ・ドゥ・アルディの場合　17

「二度とあんな品物は作らないように」
ルイはしばらくの間、ヒカルを見つめていた。青灰色の、冷たい色の眼で。
彼がこんなに近くに居るというだけで畏縮してしまう者が多いのに。
ヒカルは彼の顔を見上げる。懐かしそうに、嬉しそうに、恥ずかしそうに。それでいて少しの間の不在によって、彼がどこか変わってしまったのではないのだろうかと確認しているようであ

った。

彼は変化しない。生まれた時から、変わらない。
容姿は変わるが、魂はそのままであった。
誇り高く、冷淡で、口数が少ないが、生真面目で、曖昧を許さない潔癖さを持っている。

彼は彼女を詰らなかった。そうすれば、あの時の競技中に思考を中断してしまった自分の不満足を露呈してしまうからだ。何事にも用心深い彼が、まったく無防備に口に含んでしまったと認めてしまうから。多くは言わなかった。

そして彼は言葉が少なく会話を楽しむ方では無かった。だから人から誤解されることもあるし、理由はきちんと存在していて、彼の知能指数が高すぎるからだと理解があっても彼そのものの苦悩は誰にも理解することができなかったから、ルイは当主以上に人間が嫌いであった。誰かに凭れたり縋ったりすることがなければ生きていけない者ではない。少なくとも、自分自身は己のことをそう思っていた。
それなのに、目の前の娘は、どうなのだろう。
誰かに何かを捧げることで、感謝されることを求め、そして勝手に自分の都合で押し付けていく品に対して、今度は改良するからまた口にしてくれと言い出す。

何もできないのに、何かをしようとする。

この違いはどこから来るのか。彼女も、ある程度は操作されて生まれて来たはずなのに、どこもかしこも凡庸で、人より秀でたものと言えばこの邸で学んだ教養と言語という名前の習慣だけであった。集中力が散漫で、何か意見を言うこともない。微笑んで居るだけの愛翫されることに慣れきってしまった考えることを放棄した動物をどうして・・・家族と認める事が出来るのだろうか。そもそも、彼には家族は存在しない。戸籍上及び遺伝学上の父と母は存在するが。家族という曖昧な定義を彼の中で固定化することはなかった。

遺伝子配列が共通している者を、家族と呼ぶのか。
長い時間を共有している者を、家族と呼ぶのか。
居所を同じくしている者を、家族と呼ぶのか。

誰も・・・誰も、彼の問いには答えない。

彼の返答に、ヒカル・クロスはぱっと顔を輝かせた。僅かな時間であったのに、彼女はあれほど萎れた蕾であったのに・・・・今は、勢いよく咲く種の華のように、満面の笑みを浮かべていた。

「次は・・・もう少し、上手になりたい」
「よしてくれ。君のショコラは年に一度口にするきりで、回数を増やすつもりはない」
その言葉を聞いて、ヒカルが驚いたように眼を見開いた。彼女はいつも、驚いてばかりいる。そして、泣いてばかりいる。誰かの目の前では泣かないのに、ルイの前ではその痕跡を残していく。彼女はいつも・・・歎いてばかりいる。

ヒカルが驚いたのは、ルイが来年もヒカルからのショコラを受け取ると約束したからだ。
とても理解しにくいが、長年一緒に過ごしてきたヒカルには、それが譲歩の言葉だとわかった。
年に一度しか口にしない、とは・・・年に一度は口にする、と言ったのだ。
それまで、ルイのことを考え、彼の行動を研究し、常に円熟への努力を怠るな、とルイがコメントしたので、ヒカルはそれに驚いたのだ。
「ルイ・・・」
「オレには競技用のトレーナーも栄養士も専属の者が居る。・・・彼らを黙らせることが出来るくらいのものでなければ受け取らない」

彼は素っ気なくそう言った。甘みの強すぎるものではなく、即効性のあるものでありながら体調に影響しないで、指先が汚れることのない品というものは相当に手の込んだものでなければならない。それに、美的感覚の敏感なルイには丸薬のような飾り気のないものは受け付けないと常々、彼は言っている。
だから、ヒカルが彼の基準に合致したものを揃えるとは、考えられなかった。

しかし、ヒカルは何度も深く頷いた。
「来年かもしれないし、再来年かもしれないけれども・・・でも、途中であきらめたりしないから、待っていてくれる？」
「それはオレの把握するべき部分ではない」
「そうだった。それなら、急ぐ」
ヒカルの言葉に、ルイは嘲ら笑う。
「急いだために未完成品になるくらいなら・・・最初から諦めろ」
彼女はルイの言葉に淡く笑った。彼の言葉の隅々までを彼女の中で咀嚼しても、なお、彼は冷たかった。でも、彼女に忠告する唯一の人であった。まだ・・幼すぎて、彼女はその先にある彼の激しさや渇望に気がつかなかったけれど。

「はい。・・・いつか、きっと・・・ルイの気に入るショコラを作ってみたいと思う」
それでも、彼女はルイが受け取ったのだと知り、そして批評を加えたので嬉しさのあまり破顔した。そして、彼女の周囲の空気はまた・・・間もなく訪れる春の息吹のように跳躍するのだ。

ルイは無表情にその様子を眺めていた。

彼女が無駄に昂揚しているからだ。

・・・おそらく、戻ることそのものにも、何か言われてきたのだろう。
彼女の本来の国籍は日本国であり、ここにいる理由は何一つないのだ。
高名な心理学者でもあり医師でもあるシャルル・ドゥ・アルディが、両親から隔絶された幼子の研究をするために引き取った、とでも思っていたのだろうか。
どちらにしても、クロス・グループにはその瞬間には不必要であった存在のヒカルを、今になって引き取りたいと言ってきている。

クロス・グループからの申し入れがそれだけではなく、更に渋いものであったというのは、ルイも把握している事実であった。取り扱う分野によっては、ルイの意見が求められることがあったが、彼はまだ成人前であったので教育係であり彼の代理人でもあるミシェルが間に立っていると言う。普段は、ミシェルはまったく表舞台に出てこない。シャルルと似た容姿と、一時世間を騒がせたことによる謹慎が解けていないからだ。謹慎の期間は永久であると彼も承知しているのに、それでもアルディ姓を捨てることはなかった。彼の能力を搾取しているだけであると、叔父である教育係は知っているのに、それでもここにとどまることにしている。
まるで、何かを待っているかのように・・・・

しかし、互いに互いの家の事情についての情報を交換することはなかった。彼には必要としていないからだ。
ヒカルが何を感じ、何を見聞きしてきたのかはルイには必要ではないと考えていた。
逆に、彼女の知らないところで繰り広げられている覇権争いについての動向を知る必要があるとは考えていたが。

■ルイ・ドゥ・アルディの場合　18

それでも・・こんな風にして、互いの愁いについて語りあうのではなく、彼女はごく普通の凡庸な少女の会話をルイに投げかける。
それが、彼女にできることであったから。そう信じているようであった。
ヒカルは、何もかもを詳しく話すことが、信頼の証ではないのだと考えている。
逆に言えば、聞きたくないことには耳を塞ぐ傾向にあるのだが、そんな彼女の気質をヒカルの父にとてもよく似ていると言ってシャルルはまたヒカルを更にいっそう深く愛するのだ。
ヒカルが何をしても、ヒカルの両親に行き着くことしかしない愚かな当主を打ち砕くために、彼は生まれて来たというのに。結局は自分の定めたファム・ファタルではないことを確認するのが怖くて・・・ヒカルを通り越して、彼女本来の姿を見ようとしない当主はヒカルととてもよく似ていると思った。
そうなると、遺伝子が人を弱くさせるのではなく、どんなに優性であっても劣化するということ

なのか。
ルイはそういう考え方しかしない。単なる観察対象でしかないヒカル・クロスの帰りを待ち望んだりしないのだ。

しかし、時折彼女はこうして誰も理解しない彼の冷淡な言葉について共感することがあった。言葉で聞くのではなく、もっと別の感覚でもって彼女は彼の傍に近寄っていく。

彼女は。
簡単に。
いつか、という言葉を口にする。
過去を断ち切れないから、未来に逃げようとする。現実を見ようとしない。

「ルイ、今日は・・・ルイの試合の様子を、聞かせて欲しいの。だから、ディナーを一緒に・・」
「断る」
ヒカルの言葉が終わらないうちに、彼は即答した。こうして時間を共有することで、馴れ合うつもりはない。それに、彼女が日本で何をどうして過ごしていたのか、アルディ家には定期的に報告が入ることになっている。だから、必要ないのだ。
ヒカルの表情に翳りが走った。
「君には、シャルルが居れば十分だろう。欲深になるということの代償をよく考えろよ」
ルイは彼女には必要ではない。ルイは彼女を必要としているのに。
・・・これから彼がこの家に君臨するためには、彼女は必要であった。同時に、精神面で脆い当主を追いつめる最上の道具でしかないヒカルは、彼をいらないと言って、こうして・・・置いて行く。
彼女の事を愛翫動物だと言ったが、本当はルイこそがこの家の観賞用動物ではないのかと思う時がある。しかし、それは誰にも感じさせないほど僅かな瞬間の物思いであった。

すると、彼女はまた、彼のパルス変調を受け取ったように、顔を上げて・・不思議そうに、茶色の瞳を丸くした。彼は何も言っていないのに、言葉の狭間を読み取ったように、そっと呟いた。

「・・・ルイは必要だよ・・・ルイは、私にはたったひとりだよ・・・」

その言葉に、彼は押し黙った。こうして近くで見つめ合っていても、ふたりの距離は遠かった。
彼の容姿は、シャルルにとてもよく似ている。若い頃の彼にとても似ている。けれどもその魂はまったく別の者であり、彼が渇望しているものはシャルルとは違っている・・・・・
ヒカルの瞳がゆっくりと瞬いて、そしてルイを見上げている。
幼い言葉しか発することのできない少女は、まだ大人になっていなかった。彼はもう、年老いて

しまったというのに。彼の肉体は若かったが、魂は何十年も生きているのと同じだけの疲れや苦悶を纏っていた。
しかし、ルイが通り過ぎてしまった時代を生きているからヒカルが輝いているのではなかった。ルイはその時代を、知らないのだ。
生きているということを殃禍と捉えているから。ヒカルは、生きていることによって、再び両親に逢えると固く信じている。生きているからこそ、来年があり次があり・・・いつか、ルイと彼女が理解し合って世間一般のきょうだいのような関係になることを祈っている。

「ルイ。私が必要だと思うルイ・ドゥ・アルディは・・・ひとりだけよ」
彼女が至極当然のことのように、そう言った。
「戻る。ヒカルは好きなだけここに居れば良い」
彼はそれ以上、彼女と話をしないことに決めた。
端整な貌を背けると、今度は・・・彼が彼女に背を向ける。最初に背を向けたのは、彼女であった。自分の表情を見てはいけない、と彼を拒絶したのは、ヒカルが最初なのだから。彼も同じ様に、彼女を拒んだとしてもヒカルにはそれを非難する権利はなかった。

周回する理由はなかったのに、彼は薔薇の苑を巡り歩いた。ヒカルが戻る日にちを知っていたのに、それでも彼女が日々気にしていた薔薇を眺め、枯れていく様を観察するだけであった。そうだ。自分は見ているだけである。何かを施してやるつもりはなかった。ヒカルがシャルルのために蕾を丹念に確認していることを知っていたから。
それらが全て朽ちていくのを見て、その都度ヒカルの溜息を想像しては心の中で嘲笑っていた。

それなのに。彼女は、薔薇を確認しにきただけであるのに、ルイ・ドゥ・アルディに向かって傲慢に言うのだ。
薔薇にも眼を向けずに、必要なのは・・・たったひとりはルイだけだ、と。
それがシャルルの定めたファム・ファタルとは違う意味であることも、ルイは理解していた。ヒカル・クロスの中では誰もがかけがえのないたったひとりなのだ。
命は、ひとつしかなくて、命は誰のものも尊いものだと信じているから。
それなら。
彼の命は、どうなのだろうか。
作られて・・・この薔薇の苑に咲き乱れる、薔薇とルイとは同じなのか。
この季節には華を咲かせないような種が改良されてこの時期に命を咲かせるよう強制されている。彼の生は彼が決めることができないのか。最初は、そうして生まれて来たかもしれないが、ルイは薔薇ではなかった。薔薇の主になることを望まれて生まれて来たが、彼はこんな風に、誰にも見てもらえないで枯れて朽ちていく数多の花々と自分を同一にするつもりはなかった。

「・・・それはオレに対する挑戦か？」

彼が嘲ら笑ったので、ヒカルは首を横に振った。
足元を見る。顔を俯ける。
そうではない、と言おうとしたが、顔を上げた時には・・・もう、その時にはルイは彼女から離れて、歩き始めようとしていた。
「ルイ」
彼女が、彼を呼ぶ声と、彼の腕にヒカルがしがみつくのは同時であった。彼の肘に彼女の腕が回り・・・あからさまに不愉快な顔をしたルイは、軽く腕を振ってヒカルを払おうとしたが、彼女はそれでもルイにしがみついたままであった。
「・・・何だよ。余興なら、余所でやれ」
彼女の真意が掴めずに、彼は金の髪の下から、冷たい視線を向けた。彼の美貌は冴え冴えとしているが、怒気を含むと目元が少しだけ赤らむ。
だから、滅多なことでは彼は感情を起伏させないようにしている。
・・・今、彼の目元は僅かに赤かった。
「今、ルイが消えてしまいそうに思えたの」
「随分な理由だな」
彼は軽く嘲笑した。つかまえていないと消えてしまうのは、ヒカルの方なのに。
彼女は自分の胸に、彼の腕を包んだ。真新しい春の服を通して、彼女の温度がルイに伝わる。羞恥というものを知らない少女は自分の身体を押し当てて、ヒカルという存在を誇張する。
しかし、ヒカルの顔は真剣であった。先ほどよりももっと近くにあるルイが、ルイ・ドゥ・アルディであることを確認するかのように・・・ぎゅっと強く腕に力をこめた。
苦しそうに、ヒカルは・・・ルイにしがみついた。
「ショコラをまた作る。今度は、試合を見に行っても良い？研究しないといけないから・・・」
「・・・添える薔薇とショコラが混ざらない香味を研究しろよ」
「はい」
彼の忠告は的確であった。ヒカルが選ぼうとして彷徨っていた薔薇は、香気が強くかつすぐに萎れてしまうので、シャルルの寝起きを促す薔薇としては適しているが、食する贈答品に添えるには相応しくない、とルイが教えたのだ。ヒカルはそれに頷いた。

彼女は少し震えながら、彼の腕から伝わる温度に眼を細めた。ルイだ、と何度も呟いていた。強引に振り払うこともできたが、ルイはヒカルを黙って添わせたままであった。

あの時。
・・・彼が思考を止めたのは、味付けの問題ではなく・・・ヒカルを一瞬思い出したからだ、とは教えてやるつもりはなかった。彼女が涙を流しながら、薔薇を探す素振りでルイに背中を向けたあの日の薔薇の芳香と相まって、彼女の香りがしたからだ。
彼の進行する思考より、記憶が彼を支配したからだ。たとえそれが刹那の瞬であったとしても。

星々を遵える彼が・・・永遠の晄の気配に気を向けたと認めるつもりはない。

「邪魔はするなよ」
彼がそう言ったので、ヒカルは顔を上げて、はい、と言った。
彼女の瞳は少し潤んでいた。

彼は、ヒカルによく戻って来たとは言わない。
ルイはヒカルの帰邸を歓迎しているわけではない。でも・・・彼女の捧げるショコラを口にし、来年はもっと上達するようにと言う。来年は、ないかもしれないのに。これから徐々に、アルディ邸に戻れない時間が長くなることはヒカルも承知していた。でも、彼は季節の行事でしかないこの出来事を忘れないでいてくれる、と言ったに等しいのだ。誰かと約束することはしない人物であるのに。
それが、彼の利害に影響するから述べている言葉だとしても、それでも良かった。彼女には、ルイの言葉が必要であった。この場所で生きていく理由が必要だった。来年のショコラを作るまで、彼女はもう少し・・・ここに居られるのだ。

「ヒカル。次のフェンシングの試合に障る」
彼女は彼の肘にかなり寄りかかっていることに気がつき、慌てて身体を起こした。・・・彼は成長はまだ止まっておらず、試合に向けて肘や手首などの関節の調整を気にしているのだということを思い出した。僅かな怠惰も許さない。ルイの配慮は完璧であった。
しかし、離れがたい気持ちがあった。なぜなのだろう。これほど嬉しいことはないはずなのに。
ルイから、思いもかけない言葉を貰った。彼女の一方的な贈答品の返礼の品であるかのように、彼はかなり・・・ヒカルに譲歩しているようだ。
「もう少し・・・本邸に行くまで、このままでは駄目？」
彼がいつものように、貶みの溜息をついた。
けれども、歩き始めたルイの歩調が、ヒカルに合せたものであることを知り、彼女はぎゅっと眼を瞑った。

ルイはヒカルのそんな様子を見て・・・彼女が俯いたままでいるので好都合だ、と思った。
彼は怒りを孕むと目元を僅かに朱に染めるが、何かに集中し・・・たとえば勝利を確信し喜ばしい事を迎える瞬間にも、同じように体の変化を感じる時があった。

そう。彼は確かに・・・この状況に平静でいられない自分を感じていた。

彼女がいつまでも彼から離れようとしないので、ルイはゆっくりと歩きながら、離れようとしない彼女の茶色の髪に向かって囁いた。
離れろ、と言っても彼女は従わないだろう。

ルイはいつも贈られたものには手をつけない。それなのに・・・彼女が届けたショコラだけは、彼は口にした。これがどういうことなのか・・・彼女は思い知る必要があると思った。
仕掛けてきたのは、ヒカルの方からだ。
ゆっくりと、最も効果的になるように、彼女の耳元に唇を近付ける。

「・・・それとも、挑発？」

その視線は彼がこれまでヒカルに見せたことがないほどに艶やかなものであったが、彼女は俯いていたので、彼の表情を知らないままに、小さな悲鳴をあげて彼の体から自分の腕を離した。
彼は苦笑しながら、歩く速度を上げた。すぐ斜め後ろから、小走りに彼に遵う足音を聞きながら・・・気が向いたので、少し遠回りをして歩くことにした。

春の訪れは、すぐそこであった。薔薇の匂いがまた変化していた。
そして・・・アルディ邸には、束の間の静けさが去り、入れ違うようにして華やぎがやって来た。

・・・・生命の溢れる永遠の晄がやって来た。

ルイ、待って、というヒカルの困惑した声だけが、薔薇の苑に響き渡っていた。

（FIN）

Trick　OR･･･ L-side　前編

何もかもに恵まれているのに、彼には無機質で色のない世界が拡がっているようにしか感じられていないようだった。
見事な金髪の下から覗く青灰色の瞳が、強い眼光を放ってヒカル・クロスを睨み付けたので、ヒカルは自分から声をかけたのではなく、ルイからヒカルに向かって声をかけてきたことすら忘れて、「ごめんなさい」と意味もなく謝ってしまったのが、またルイの怒りを昂じさせてしまった。
彼は冷たく笑うと、辛辣に彼女に攻撃した。
シャルル・ドゥ・アルディの愛した人の一人娘であり、アルディ家で養われているヒカルにはこよなく愛を注ぐフランスの華は、実子のルイには無関心でいた。

冴えた星彩のような瞳を茶色の瞳の少女に向けて、ルイは傲慢に言い放った。
「ヒカル。謝罪するということは、自分自身の非を認めたことになるぞ。
・・・さて、貴女は一体、何の罪について謝罪しているのだろうか」
またヒカルがそこで黙っているので、彼は苛立ちを露わにした。
「まったく苛立つ人だよ、君は」
「ルイ・・・・」
ヒカルは彼の苛立ちの原因を知っていたので、項垂れたままだった。
誰にでも愛される大人しい気質の少女は、時折こうやって自我を抛棄する。
ルイや他のアルディ家の者たちとは長い付き合いであるから、そういう面は最近ほとんど見せないが・・・

ルイは続けた。
「それで、どうしてここに貴女がいるのか、理由を説明してくれ」
ルイはすっかり萎れてしまっているヒカル・クロスを容赦なく見下ろした。
そして、目の前の茶色の髪の少女を眺め回す。
凍て付きそうな鋭いルイの視線に、ヒカルは下を向いて足元を見つめていた。
「ヒカル。上を向け」
彼が厳しくそう言ったので、ヒカルはますます萎縮して、肩を震わせる。
呆れたね、と言ってルイは軽く腕を組んだ。
そして組んだ腕の上から、左の指先を軽くとんとん、と叩いた。
「そんな臆した振る舞いはしない。アルディ家の者なら誰でも」
彼はそう言って、周囲には聞こえないように彼女にだけ聞こえるように、低く彼女に囁いた。
しかし周りの音が障ると言いたげに、小さく舌打ちをした。
アルディ家の者ではない、という言葉が、いつもヒカルを傷つけることを知っていた。
彼女は、長い時間アルディ家に滞在しているが、当主であるシャルルの移行によって彼女は日本人学校に通い、邸内は日本語が第一使用言語として指定されていた。
これほどの厚遇を受けているのに、ルイと同じような教育を受けているはずなのに、彼女はそれでもアルディ家の人間のような思考にならない。

その場所は、派手やかな樺色と檳榔子黒が混じった装飾だった。
舞踏室を改装した大きな広間の片隅で、彼は彼女を目の前にして、しばしにらみ据えていた。
大きな色とりどりの目鼻を描き加えた風船や、立食パーティーのために人々が行き交う。
強い照明でもなく、それほど大勢の者がひしめき合っているわけでもないのに、室内は熱気でむせかえるようだった。
室内楽の生演奏がかき消されるくらいの賑わしさの中で、ルイ・ドゥ・アルディの周辺の空気だけが熱気や噪音と切り離されて彼を包んでいた。
今日はハロウィンのチャリティパーティだった。

主催はとある企業であったが、伏せられた後援者が誰であるか、この場に居た誰もが知っているところだった。
・・・・若い世代の実業家を中心に、この国の将来の要人になるであろうという人物達や、その子息が集まってきている。
年齢で招待範囲を限定する趣味のなさに、ルイは苦笑していたが、ここで交わされる人脈というのはどうにも捨て難いものがあった。
先ごろ、この国では、ルイの取り扱っている類の方面について､国家予算を投じて着手する、と発表をしたばかりだったからだ。
これによって、半官半民だとか公社だとかと呼ばれて揶揄されていた機関は一気に注目を浴びることになったのだ。
同伴を要するカジュアルパーティーであることも幸いした。
チャリティーでもあるので、できるだけ人を呼んでこいということらしい。
慣れている環境で育った者ばかりとはいえ、エスコートをするのに精一杯の若者ばかりが集う会合だった。
そして古の家柄ではない、先頃脚光を浴びてはじめた業界の若き才能在る者たちもこの中に混じっている。
だから、雰囲気が統制されずに賑わしいのだ。
その中で、ルイはふらりとやって来た。
彼は会場に入るなり、眉を潜めてこの喧騒を嫌悪する表情を一瞬だけ表したが、すぐに無表情になった。
煩わしい、と思うことが最近増えてくる。
ルイが睡眠時間を削り、寸暇を惜しんで自分の業務の終了後にこうした会合に足を運んでいる一方で、アルディ邸の奥深くで静かに過ごすヒカル・クロスとの違いを考えると、それだけで腹立たしい。
青灰色の物憂げな瞳で、周囲を見回した。
この会場は､日本大使の「好意」によって貸し出された日本家屋を改装した平屋であった。
庭園の奥にある屋敷は、西洋式に改められており、日本家屋とはいえ折衷された屋敷の中は、舞踏室があったり喫煙室があったりと・・・一種異質な雰囲気を出している。
その中でチャリティとはいえ、ハロウィンという馬鹿馬鹿しい企画を開催していることに辟易する。
よほどこの国の民は危機的状況についての想像を放棄したいのだと思わざるを得ない。
おそらく、入り口で配られたIDチップの入退場を含めた行動記録から、誰が誰に接触して、宴の終了後にどういう人脈になって拡がっていくのかを観察しているのだろうと思った。
我が母国と呼べるほどには情を湧かせることのできないこの国の者たちより・・・・ヒカルの属するあの国の者たちの方が、よほど・・・状況を把握しているのだろう、と思う。

秋と言うよりは孟冬（冬の初め・10月の異称）という言葉を使った方が相応しい夜だった。

その中で・・・・ルイは足元に気を取られていて、周囲の者にぶつかりそうになり慌てて方向を変えてまた他者の進路を阻んで居る、変わった経路を取る人物に遭遇したのだ。
・・・・それが、ヒカル・クロスだったのだ。

「ヒカル。なぜ、おまえがここに居るのか説明しろよ」
繰り返さない彼は、繰り返して彼女にそう言った。

ここで癇癖を募らせれば、周囲の注視の的になってしまう。
静かに、しかし怒気を含ませて彼は言った。

ルイ・ドゥ・アルディは指定された楽礼装で、佇んでいた。
一方、ヒカルは茶色の髪の茶色の瞳に良く似合う・・・若々しいドレスを見に纏っていた。
朱華（はねず：古代に皇族の衣服の色とされたやわらかいオレンジ色）に染色したボリュームがあるが決して華美ではないフェイクファーのAラインのドレスで、同系色の腰元のサッシュや胸元の飾り紐の丁寧な織りは日本の着物の帯を意識したものらしく、きっちり編み込まれた目が照明を受けて、鈍い光沢を放っている。足元は蔦をあしらった華奢な・・・低踵の沓を履いていた。
若い彼女はアクセサリーはいっさい身につけていない。
僅かに耳元に光っているイヤークリップはティファニーのファイブ リーフで、スペサタイトにダイヤモンドとプラチナを花形にあしらったものだった。

ヒカルが何か口ごもったが、下を向いており、小さな声であったので、喧騒にかき消されて、まったく聞こえなかった。
ルイは大袈裟に溜息をついて､組んだ腕を解いた。
「ここでは聞こえない。・・・こちらに来い」
薄いショールくらいは羽織るのが礼儀だ。
ここは露出を好む場所ではない。
彼は苛立っていた。
ヒカルの白い胸元が見えて、彼女のむき出しの二の腕の肌に直接触れたからだ。
ぎりっと唇を噛んだ。
どうして彼女はこんな場所に居るのだろうか。

ヒカル・クロスが戸惑っている様子が手に取るようにわかる。
彼女も驚いているようだった。
しかも、このことはシャルルも承知の上のことらしい。
耳元の飾りは、アルディ家の保有する宝飾品リストの中にあったもので、最近ティファニーからアンティークという名目で購入したものだった。
シャルルの許可がないと持ち出すことはできない。
が、彼はここにやって来ない。
十分に「若い世代」に入る年齢であったが、シャルルはそういった会合には滅多なことがない限りは姿を現さない。
だから代わりにルイがこうしてアルディ家との繋がりを構築するためにいろいろと出歩いているというのに。
ヒカル・クロスはそれがわからずに、どうしてアルディ邸になかなか戻らないのか、といつも寂しそうに言う。

「痛い・・・・ルイ、痛いよ」
彼女がそう言ったので、ルイは忌々しげに言った。

彼女の肌に触れると、躰が熱くなる。
華奢な腕に触れると、ルイの手の平が触れている面から徐々に・・・僅かに痺れる。

彼は広間の外廊下に彼女を連れ出した。日本家屋を改築しているので、緩やかなスロープを降りれば、そこは庭園に繋がる設計になっていた。
照明は僅かで、足元にハロウィンを意識した、模様の入った風よけに入ったキャンドルによる照明が点在している。
中の喧騒と注目を避けるために、ルイは彼女を連れ出した。
間もなく、催し物が中で始まるために、人々は皆会場の中に集っていく。
逆に建物から外に出て行って、せっかくの要人の顔合わせを台無しにするのは、ルイとヒカルのひと組だけだった。
よく磨かれた木目の光沢が、彼女のドレスに反射して・・・足元が僅かに光った。
ヒカルは腕も胸元もきめが細かい象牙色より少し白い色をした肌を持っているが・・・足の先までも白い。
茶色の癖の強い髪を緩く巻いて、背中に流している。

ヒカルをこの国の要人と娶せるのか・・・それとも、日本とこの国との架け橋にするつもりなのか・・・それともっと別の目的があるのか。

「君の耳は飾りか？それならその耳飾りの方がよほど価値がある」
ルイは冷たくそう言い放った。
自分はなぜ憤っているのだろう。

ヒカル・クロスがこの場に居るからだろうか。
シャルルが・・・あの男が、ヒカルに素晴らしい未来を用意するために、さり気なく・・・無理のない範囲で、こうして人との繋がりを構築させようとしているからだろうか。

「シャルルが行っておいで、と。・・・日本の方々もいらっしゃるので、通訳とまではいかないけれど
お手伝いをしておいで・・・と」
「君はシャルルの言うことなら、何でも聞くのだね」
ルイの言葉に、ヒカルが顔を曇らせた。
「そうではないよ、ルイ」
「だったら、何だと言うのかな、ヒカル」
彼は冷たく言った。
冷たい風が彼らを吹き込んでいるというのに、躰が熱い。
タイを緩めたいところだったが、誰に会うかわからないので彼は彼女の腕を乱暴に払った。
・・・彼女の肌から熱が伝わってきそうだったから。

「それで・・・？」
「え？」
邪気のない瞳で、ルイを見上げたヒカルは、彼の美しい瞳と、見事な色の金の髪を見て、また下を向いてしまった。
「ヒカル、こちらを向け」
ルイは自分の言葉に従わない愚かな娘に対して、今一度命令した。
そして、ふっと動くと、フェンシングと乗馬で鍛えたしなやかな腕を伸ばし・・・あっと言う間にヒカルの首に片手をかけた。
「ルイ！」
顎に指を乗せてこちらを向かせる、などという優雅な行為をヒカルに与えてやるつもりはなかった。
ヒカルの細い首の後ろを掴み、彼は自分の元に引き寄せた。
こういう力任せの言い付けにはヒカルは対応できない。慣れていないからだ。
「それで・・・誰と来た？」
「誰と・・・？」
ヒカルが目を見開いて、ルイを見つめる。済んだ澱みのない瞳が、ルイの怜悧な青灰色の瞳と交差した。彼は低く言った。

「・・・・君と同伴しようという奇特な男は誰だ、と聞いている」
このパーティーは同伴だ。誰かと一緒でないと入り込むことが出来ない。
自分の知らないところで、ヒカルが誰かと交友関係を広げることは許さない。
それはシャルルがヒカルのために用意したものだからだ。
本来なら・・・それを享受するべきなのは、ヒカル・クロスではないのに。
「それで、なぜ、怒るの？」
「怒っていないよ。呆れているだけだ」

彼は血液が逆に流れていくような感覚を味わった。
憤るときには、人は目の前の色が違う色に変化するという。
確かに・・・確かにそれは言い得ている。
いっそのこと・・・いっそのこと、このまま彼女を頸ってしまおうかと思うくらいに。
彼は激怒している。

・・・ヒカルが誰か別の男の腕を取って、その笑顔を向けているなどと、想定していなかったからだ。
「あの女の娘らしいよ」

彼は嘲笑した。
周りの男どもを籠絡して・・・そして自分ひとりだけ安穏とした日々を送っていた。
皆が、厳しい情勢の国にシャルルを巡って旅立ったというのに、あの女だけはひとり、日本で安全に暮らしていた。
彼女は父親の気質が強く出ていると思われがちだが、そうではない。
・・・・ヒカルはまさしく、あのシャルルが運命の人と定めた女性の、娘なのだ。

ルイは憮然とした面持ちで居た。
彼女が、誰か知らない者に微笑む。シャルルは致し方がない。
彼はヒカルを愛翫しているだけだから、腕を組んで、シャルルと同等に扱うことはしない。

ルイは・・・自分の精神を分析しようとして、やめた。
本当は、わかっていた。
ヒカルのドレスは当日に用意できるものではない。ということは、前から決まっていたことなのだ。
ルイがほとんど本邸に戻らず、シャルルの行動予定は把握していたもののヒカルの行動予定に変更や追加が生じていたことを知らされていなかったことに憤っていた。
いや・・意図的に、シャルルがそういう操作をしているようにも感じる。
ヒカルに関わるな、と彼が排除活動を始めていることは薄々気がついていた。

しかし、それが彼の憤怒に繋がるのかというと、そうではない。それは想定範囲だ。
原因はわかっている。
彼女が・・・ルイを伴ってここに来なかったことや、ルイがその事実を知らなかったことや・・彼女が今日の宴のために、着飾って装っていることに、憤っているのだ。
■Trick OR･･･ L-side 02
ヒカルから立ち上り、ふわりと芳る匂いに、ルイは横を向いた。
「ここはヒカルが居る場所ではない。帰れ」
館の方からは、準備を済ませた楽団が余興のための音楽を奏で始めていた。
いつものようなおきまりの静かな抑揚のあまりないものではなく、賑わしい。
先ほどの喧騒をより更に大きくしていく。
その後は、寄付を募るために主催者がめぼしい者に挨拶をして回り、自由に歓談後に散会となるが､気の合う者たちはそのまま休憩室や娯楽室といっためいめいの好みの場所に行き、小グループを作って会話を楽しむ。
・・・・どの場所に行ってもヒカルが入れる環などはないのだ。
彼女はアルディ家の庇護にある者であることは一部分の者は知っているが、まだ未成年であることを理由に、シャルルは彼女を社交界の表舞台に出すことを禁じている。
それなのに、こうして彼女の存在を知らしめるかのように、パーティーに送り込む。
・・・・今日は、シャルルがかつて訪れたあの国への寄付を募る宴だった。
シャルルはどうしても、運命の人と定めたあの人や､あの人と一緒に居たときに関わった事柄を切り捨てることが出来ないのだ。
たとえ名目上のことであったとしても。

「どうして・・・今日に限ってそんな風に怒るの？」
ヒカルが呟いた。
「私、何か・・・気に障ることをしたのかしら」
「ああ、障るね」
彼はそう言って、彼女を一瞬だけ強く引き、そして手をおもむろに離したので､ヒカルは反動で少し蹌踉けた。
敷き詰められた花崗岩の上で踏みとどまったので、かつん、という足を踏みならす音が聞こえる。
彼女の履いている沓は踵が低く、それほど音を立てることのないように、コルク素材に薄い箔を当てている華奢な作りのものなのに。

彼女の持っているIDチップの履歴を見れば、誰と一緒に来ているのかはわかるのだろう。
そして、ヒカルが誰と接触しているのか・・・誰に近寄り、誰が近寄ったのかさえわかるようにできている仕様のものだった。
しかし、冷たくなった夜の微風の中で、ヒカルを見て・・・・理由を明かしてやろうなどとは考えなかった。
淡い橙の衣に身を包んだヒカルの髪が巻き上げられて、彼女の肩や背中が露わになった。
夜会服であるから、温度調節には適していない。
彼女は躰を震わせた。
青灰色の瞳で、彼は・・・ヒカルに素っ気なく言った。
「アルディ家からの出席者はルイ・ドゥ・アルディだと伝えてある。・・・それなのに、ヒカルはシャルルの・・・当主の使いだと言って、オレに恥をかかせようとしている」
「そんなつもりはない」
「それなら、なぜ、ここに来た。・・・この場所の意味が、わかっているのか」
彼はそう言いながら、記憶している彼女の交友の記録を検索し始めていた。
・・・・この主催者の中に、ヒカルと同じ日本人学校に通っている者が居た。
年齢もヒカルとそれほど変わらない。
彼女が「手伝いだ」と言っていたのは、そのためなのだろうか。
「ルイ、私、そろそろ行かないと・・・余興で、ケーキを配る係なのよ」
彼女の見事な衣装は、手伝いの者の衣装ではなかった。
「シャルルは知っているのか」
ルイ・ドゥ・アルディが低く言う。

彼が何を言っているのか・・・ヒカルはよくわかっていないようだった。

この会合には、これから・・・・この国を担うと位置されている者たちが集って居る。
もちろん・・・ヒカルのことをよく知っている製薬会社や、日本のクロス・グループと提携している医療機器メーカーの子息も来場している。
黒須昶と名乗らなくても、長らく留学をしてパリに滞在しているヒカル・クロスと聞けば・・事情を知らない者でも、察するに容易だった。
後に、各々持ち帰った招待者名簿のコードを読み込んでアクセスすれば、帰り際に提出したIDの記録から、自分が誰と接触したのか閲覧することだってできる。
彼女の耳飾りは目立ちすぎた。
本人はその価値についてあまり気にしていないようだが・・・
彼女の年齢に相応しくない高価な宝飾品を身につけ、そして豪華なクチュールドレスに身を包んでいる彼女を、壁際の花だとか、単なる手伝いだと思う者はいないだろう。
その時に・・・・ヒカルのデータを削除するか改竄するほどの自信が、シャルルにはあるのだろうか。

そうではないだろう。
おそらく、彼女が宴にどこまで参加するのか・・・彼女は詳しく話していないに違いないと思った。

くすり、とそこでルイ・ドゥ・アルディは笑った。
ヒカルでも、シャルルに報告や相談や密な連絡をしないことがあるらしい。

・・・そういえば、この宴の招待状は、夏に届いていた。
その時期は、シャルルはオフを取っているし、ヒカルは日本に戻って夏を過ごしている。
その間に生じたすれ違いを・・・この時期になっても修復できないのは、ヒカルとシャルルの間に、何か変化が生じているからだった。

「面白い」
ルイは挑戦的に言った。あの男から、ヒカルを奪ってやろうと考え始めたのは、昨日今日のことではない。しかし、今、ふと、彼は思いついた。彼の教育係がそんな風に、本当は前もって考えていたことを口にするときのように。
■Trick OR… L-side 03

「帰れ。・・・・ここは君が居る場所ではない」
ルイが金の髪を掻き上げた。そして物憂げな青灰色の瞳をヒカルに向ける。
彼女はしばらくルイを見つめていた。
茶色の髪に、耳飾りの鮮やかな橙がよく映えていた。
誰が見ても、大事に育て上げられた深窓の令嬢だ。
日焼けしない肌理の細かい象牙色の肌は光沢を放ち、線の細い肩が露出していた。
胸元を飾る宝玉はないのに、その白さが彼女のドレスの朱華の色を淡く反射させている。
「それは命令？」
「忠告だ」
ルイが即答した。そして美しい眉を少し持ち上げる。
彼女がこうやって抗うことを試みるのは珍しいことだった。
やがて、しばらくの間ルイを見上げながら黙ったままでいたヒカルがぽつりと言った。
「・・・ルイと一緒にだったら帰る」
「ヒカル。交換条件を出すほど、ヒカルは優勢ではないはずだよ」
ルイが無表情に素っ気なくそう言った。
それから、吐息をひとつついて、続けた。
「シャルルが君の今日の行動を知ったら、どう思うかな。・・・・何だよ、その格好は。まるで誰かに声をかけられるのを待っているかのような、物欲しげな顔をして。・・・こういう場所のこういう機会が自分を変えられると思っているのか？自分の特権を振りかざさないと、君は気が済まないらしい」

シャルルはきっと・・・ヒカルに誰も注目することはないと思ったのだろうか。
いや、それはないだろう。
彼女がアルディ家に引き取られていることが露出するのを極端に避けているのだから。
それなら、彼女は手伝いという役割ではなく・・・・彼の推測が正しければ、同伴者の方が今日のこの宴に呼ばれている客なのだろう。
ああ、まったく意味がわからない。
ルイはそう言おうとしてヒカルを見下ろした。
「・・・私だって、シャルルの役に立ちたいよ」
ヒカルは唇を噛んで、低く言った。
下を向いていたので、ルイがぐっと拳を握ったことに気がついていないようだった。
「最近シャルルが忙しくて・・・戻って来ないのは、日本の・・・その・・クロス・グループと提携している製薬会社とバイオパイラシー（生物資源の海賊行為）の件でうまく行っていないからって・・・」
「だから、ヒカルがここに来たのか？それで解決する問題ではないだろう」
「私がここに出席するように、と・・・日本から要請があった」
ヒカルは思い切ったように、それでいて困ったように言った。
「日本から？」
「夏に戻ったときに。そういう話が出て・・・」
なるほど。
ヒカルはクロス・グループの会長の孫娘だ。
そして、本来なら、彼女の父親が引き継ぐはずであった組織を、孫娘に継承させたいと思っている節があった。
伯母夫婦がすでに確固たる地位を築いており、安泰であるはずなのに、ヒカルのことを気にかけている祖父は、彼女が夏だけしか帰国しないことに対して不満を漏らしたという話を聞いた。
・・・・シャルルに監護権があることを理由に、彼らは沈黙を守っていたが、そうもいかなくなってきたらしい。
自分の必要性や価値についていつも考えているヒカルが・・・その申し出を断れなかったのであろうということは容易に想像がついた。

「どうしてオレがここに来ていると思う？それらの問題を解決するためだよ」
「え・・・？」
「だから、オレの邪魔をしないでくれ」
「どうして、それで私が帰らないといけないの？」
・・・・ルイは肩をすくめた。夜風がますます冷たくなってきて、邸内の喧騒が緩和されてきたので、ルイは行くぞ、と言って、彼女の腕を掴んだ。
「ヒカル。君は知らないのだろうが・・・オレにはいろいろと制約があってね。ヒカルと同席するときには、ヒカルを優先させなければならないことになっている。君はオレの同伴者ではないし、目立つ行為は控えなければならない。・・・・そうなると、オレは仕事を放棄して、ヒカルをアルディ邸に送り届けるためにエスコートしなければならない」

「だったら、知らないふりをしていれば良い。私はあまり・・・知り合いがいないから」
「そうも行かないだろう」

彼は苛立たしげに言った。
ヒカルのその格好を見て・・・誰も寄らないという確約はあるのだろうか。豪奢な耳飾りをして・・・そろらく、日本のクロス・グループが指定してきた同伴者とは、有力者の子息だろう。

・・・館のでは入り口から・・・ルイの名前を呼ぶ声がした。
今夜限りの相手だった。
いつまでも現れない自分の同伴者に・・・・星辰の子を呼び寄せようとしている声が聞こえた。
「ルイ、行って」
ヒカルは笑った。
「チャリティのお手伝いは・・・本当に、たいした事はないの。すぐ済むから。・・・そうしたら戻ります。だから、ルイを待っていたいの。車で待っていても・・・良い？それなら、ルイの問題は解決するよね」
ルイは頸を振った。
そうではなく・・・彼女の姿を誰かが見つめるのが気に入らない。
彼女は自己はないから、すぐに誰かの言われるがままに相づちを打つ。
この場に集う者たちの意志のどれかに賛同するような・・・それこそ、シャルルを逆に窮地に陥れてしまうような結果になりかねないということは想定できないのだろうか。
クロス・グループとアルディ家の絆は強いが、それでも・・・どうにもならない課題がいくつも残っている。
個人的に親しくするのと、業務提携で近しくするのとでは、とても・・・隔たりがあるのだ。
誰とでも仲良く、というヒカルの幻想は、ここでは叶わない。
■Trick　OR･･･L-side　04

「君に提案する権利はないよ、ヒカル」
ルイを呼ぶ声にヒカルは聞き覚えがあった。
・・・彼と最近、噂されているとある高貴な家柄の令嬢だった。
アルディ家の繋がりも深く、彼の短い期間の恋人ではなく､今度こそ、ルイ・ドゥ・アルディの「ファム・ファタル」たる人物なのではないのかと噂されている人物だった。
ルイがヒカルに帰れ、と言った理由がわかった。
彼は当主の・・・シャルルの命令には逆らわない。
けれども今日、一緒に居る相手は蔑ろにできない人物なのだ。
・・・彼が唯一の恋人と定めて、こよなく愛するのであればヒカルは喜んでこの場を退場しようと思ったが、彼は少しも・・・相手の方を見なかった。
ただ、じっと、ヒカルを、夜風よりも冷たく感じる眼差しで見つめているだけである。

「私に構わずに・・・あの人のところに行って」
ヒカルがそう言うと、ルイは低く唸った。
「ヒカルが介入する話ではない」
「でも・・・・ルイの恋人でしょう？」
「いや」
彼は短く否定した。

「渋々、招かれた宴に同伴した人物は、すべからく皆が恋人同士でなければならない理由はない。・・・利害関係が一致するという理由も成立する」
「利害関係・・・・」
「オレはここに来て、目的を達成する。
そのためには同伴者を伴って来場し、チャリティパーティーであることを肯定しなければならない。相手は、オレを連れて歩きたい。
ただそれだけだ。
適当に・・寄付行為をして、これがどんなにくだらないハロウィンの祭りであったとしても、オレはそれに微笑んで、グラスを傾けなければならない相手がこの会場には幾人かいる」

「ルイ、ルイ」
ヒカルが慌てて言った。

「今日はハロウィンだよ。
・・・・皆が陽気になって、いつもはできないようなことをして戯れるこども達にお菓子をあげたり・・・こうやって寄付を呼び掛けて援助を必要とする国を助けるということができる日なのに・・・・」
「ハロウィンでなくても、できるだろ」
彼は素っ気なく言った。

そして、ヒカルの腕を掴んで・・・彼女の茶色の長い髪を引っ張った。
会場内では、招かれた者のうち、仮装した幼年のこどもたちが、催し物として周囲の者たちに「Trick　or　Treat」と言って、菓子の代わりに寄付を募っている声が聞こえている。

「そもそも、何かの記念日でないと、いつもできないことができるようになるというのは、おかしな話だと思わないか？それなら、オレは・・・・」
「・・・・それなら？」
ヒカルとルイはそこで目が合った。
ルイの青灰色の瞳が、ほんの少しだけ細くなった。
彼は、何を望んでいるのだろうか。
ルイにできないことはないというのに。
それなのに、彼は「それなら」と言った。

「それなら・・・・」
彼はそこで唇を噤んだ。
彼女の朱華のドレス姿と、夜空の下に靡く茶色の髪と・・・鮮やかな耳飾りが、彼の言葉を引き出そうとするような妖しい魔力を持って彼を惹きつけるかのようだった。
彼女はこの狂濤の宴の中にあって、ひとりだけ・・・静寂という従者を連れてやってきた童話の中の姫のようだった。
硝子の沓は履いていないが、彼女はまさしく・・・この宴で目立たないでやり過ごすことはとうていできない出で立ちだった。

もうひとり、邸内からヒカルを探している様子の者が出てきた。
・・・誰だかそのシルエットですぐにわかった。
ヒカルがどうして断れなかったのかもわかった。

「愚かなヒカル」
ルイは言いかけた言葉を続けることもなく、冷たく言い放った。
まだ、激昂が収まらない。
ヒカルの名前を慕わしげに呼ぶ声に、苛立ちを募らせる。
あんなに大きな声でヒカルを呼びつける神経がわからない。彼女は確かにアルディ家当主の愛翫物ではあるが・・・それ以外の者には決して従属しないと思っていたのに。
なぜ、彼女が誇り高く居られないのか。
唇の端を、少し噛んで、ルイは言った。
ヒカルを傷つける言葉はたくさん用意していた。
どれが効果的なのか選択を始める。
・・・彼女に責はないのに。
事情を話して邸に返せばそれで良かったのに。

・・・・ヒカルを呼ぶ下卑た声と・・・こどもたちの嬌声と、ルイを呼ぶ極めて収攬とはほど遠い声が彼を苛々させる。

なぜ、あんな男に自らの名を呼ばせるのか。
なぜ、あのような者に呼ばれて飼い犬のように身を移すのか。
なぜ・・・・・その白い肌や茶色の髪や、その出で立ちが周囲の者の羨望と春情を刺激するのだということがわからないのだろうか。

できないことをできるようになるかもしれない日がハロウィンだ、とヒカルは言った。
けれども・・・・いつもできるようになることができない日も、この日なのだとルイは悟った。

彼女を傷つける言葉が出てこない。

あまりにも・・・・彼女が美しすぎて、誰にも渡したくないのだという気持ちが込み上げたのに。
それは亡霊達が見せる幻なのだとルイはちらりと考えた。
■Trick OR… L-side 05

「惨めな思いをしたいのであれば、残っても構わないよ」
ルイは冷たく静かにそう言った。
ヒカルは少し泣きそうな顔をしていた。
シャルルの助けにさえならない、とルイに宣言されて、深く傷付いたようだ。
そうだ・・・彼女は自分のことを蔑まれても、決して泣かない。
しかしシャルルとの関係を否定されたり・・・アルディ家に留まっていることから生じる一族の憂いについて触れたりすると、とたんに彼女は萎れてしまう。

「私は・・シャルルの・・・ルイの手伝いがしたいのだけれども・・何かできるかしら」
「大人しく邸に戻ることが一番効果的だと思うが。君の存在自体がヒカル自身の思惑を阻害しているのだということに、早く気がついた方が良いね」
彼はそう言って、優雅にヒカルに向かって手を差し伸べた。
「こどもは早く帰って寝ろ。・・・舞踏会の時間は終わりだ。愚かな娘にかけられるような魔法は12時まではとうてい保たない。それとも、あの小人達のように、菓子をねだって、歩き回るか？」

「・・・私、そんなに似合っていない？」
人に自分がどう映るのかは気にするのに、それを尋ねる勇気を持たない少女は、ぽつりとルイに言った。
「これから仮装行列にでも加わるのか？」
とうてい淑女の装いではない、とあからさまに言ったルイに、ヒカルは息を呑んだ。

・・・また、遠くでルイを呼ぶ声が聞こえてくる。
それから、ヒカルを探していると思われる者が数名・・・庭と館を繋ぐ出入り口をうろついていた。

これ以上ここに長居することは得策ではない。
ルイはそう判断して、ヒカルに差し出した腕を戻し、館の方に向き直った。
金の髪を掻き上げる。・・・・風も冷たくなってきて、ヒカルの躰は相当冷えているはずだった。
ここで彼女が失調でもすれば、そこに同席していたルイがシャルルに叱責されるだけだった。
彼は・・・ルイにはまったくと言って良いほど愛を注がない。
そして、彼はルイと思い出を作ることを極端に避けている。

ヒカルは大きな溜息を漏らした。
「シャルルがせっかく耳飾りを貸してくれたのに・・・・」
そうして、化粧気のない顔に両の手の平をあてて、また息を吐き出した。
白い細い肩が大きく上下した。
顔を隠すと・・・彼女の白い肌がますます際だって見えた。
「わかった。・・・・ルイの邪魔をしたくない」
ヒカルは両手を顔から話すと、静かにそう言った。
「ルイが見て、侘しいと思うのならきっとそうなのでしょう。相手の方にも申し訳ないし。・・・戻ります」
「オレが言ったことを信用するの？随分と・・・・愚人なのだな。他者から言われれば、そうしてしまうのか。・・・誰かに乞われれば、君は誰にでもついて行くのだね」
「そうではない」
ヒカルがそこで反論した。
彼女には誇りがないはずなのに、その瞬間に下を向いていた顔を上げて、伏し目がちにしていた茶色の瞳を上に向ける。
両手でドレスの裾をぎゅっと握っていた。
唇を噛み、何か反論をしたいのだと言うような、大きな瞳でルイを見たので、彼はせせら笑った。

「言いたいことがあるのなら、手短に。君が憤るほどの何かを言ったつもりはないよ」
「ルイは・・・自分を信用してはいけないと言った」
ヒカルは小さく言った。
普段口答えなどはほとんどしない彼女が、珍しく・・・ルイに反論している。
ルイは青灰色の物憂げな瞳を開いた。
寒さで震えながら、頬を紅潮させて、両手をこどもが直訴するときによくそうするように、ドレスの裾を強く掴み上げている。
寒風に揺られて、持ち上げられたドレスの裾から、足元が見えていた。
・・・熱せられた会場を想定して、彼女は素足だった。
白い臑が僅かに見えて、真珠色の光沢を放っていた。

彼女は言った。
「ルイは本当のことしか言わない。嘘はつかない。・・・・だから、私はそれを信じただけ。ルイの言葉をルイ・ドゥ・アルディ自身が否定してはいけない」

その言葉に、ルイは薄い唇を横に引いた。

ヒカルは、自分自身の見窄らしさを指摘されて憤慨しているのではなく・・・ルイがそう言うのだからそれは本当のことであり、彼自身が自分の言葉を信用して良いのか、とヒカルが疑念を持つような言葉を使ってはいけないのだ、とヒカルが言ったので、ルイは絶句した。

この人は、どうして・・・どうしてこれほどまでに、自分を信頼しきっているのだろう。
人を疑わず・・・いつも良い面だけを見ようとする善良な娘に育てたシャルルの真意が見えてこなかった。
アルディ家にそういう者は不要であるのに。なぜ、シャルルは、公開しない薔薇の品種改良を続けることも含めて・・・不必要なことばかりするのだろう。

ヒカルに高価な耳飾りを貸し与え、衣装を用意し、そして宴に向かわせる。
その一方で、ヒカルが絶対に・・・同伴者や彼女を眺め回す者たちに翻弄されることはないと信じている。それこそ、疑わしいのに。
彼女は・・・・誰にでもついていく人恋しがってばかりいる、憐れな愛翫物でしかないはずなのに。
それなのに。
どうして、次の言葉が出てこないのだろう。

ルイを絶対的に信頼している、とヒカルが言ったその言葉が・・・・先ほど、ばったりヒカルを出くわした時と同じほどに、彼の何かを動かしていた。

ルイは・・・・着飾った彼女と向き合うように対峙してしまった時・・・・ヒカルと目があった瞬間、同伴のしなだれかかる彼の一夜の相手と距離を取った。
ヒカルにその姿を見せたくないと躰が反応したのに、彼はそれを反射だと思い込もうとした。
知った顔が・・・シャルルの名によって、第一優先しなければならない人物が、居るはずのない場所に出現した。

これが理由だ。ただ、それだけだ。

彼はそういう結論を導き出したばかりなのに。

・・・・・・ヒカルの姿を見て・・・少しばかり動揺したのだ。

「オレの言葉を盲目的に信頼すると、火傷をするよ」
彼はそれだけを言った。
声が僅かばかり、掠れていた。

もっとあれこれ言ってやることもできたし、そういった言葉は常に幾つも用意しているのに。
ルイは、言葉が出なかった。
目の前の・・・茶色の髪の茶色の瞳の・・・・魔法の馬車から降り立ったような眩い輝きに溢れている人は、冷たい夜風の暗闇の下でも、輝いていた。
それは、朱華の衣のためなのか、それとも・・・ヒカル自身が眩しいのか・・・
ルイは青灰色の瞳を少し細めた。

「オレは君と出くわさなかったことにして、戻ることにする。・・・・後は勝手にしてくれ」
「それなら、ルイの車で待っている」
「オレがそれに乗るとは限らない。・・・・同伴の相手が用意した車に乗って、そのまま戻らない可能性は考えないのか？」
「それでも待っている」
最後のヒカルの言葉には、ルイは返事をしなかった。
待っている、と言われるといつも気鬱になる。いや、その言葉そのものを切り捨てるようにしていた。
ルイに執着する者は皆、同じだ。待っていれば、彼が憐れんでやって来ると思っている。しかし彼は一度としてそのような情け深い行動を取ったことはないのに。・・・それでも皆、彼を手に入れたい者は待っている、と言う。そして待ちくたびれると、彼の周囲を旋回しはじめる。
自分の方角にいつか・・・星辰の子が向いて手を伸ばしてくれるのではないのかと思って、離れることを放棄して、皆、彼の周りを巡り始める。
軌道に乗った星々に手を伸ばしても、興醒ましになるだけでしかないのに。

・・・・それなのに、ヒカルの「待っている」という言葉には、無視することも、返答することもできなかった。
抗えない吸力を持つ星辰の子が、唯一抗えない引力を持っている者が居る。
それは彼の周りを回る天体ではなく、永遠の晄という名前を持った者なのだと認めるわけにはいかなかった。

■Trick OR… L-side 06

何かに固執すれば、その倍のものを失う覚悟で手に入れろ。

彼の教育係であり、冷酷無比なルイ・ドゥ・アルディの叔父は、彼と良く似た顔立ちでそう言った。
もっとも、ルイ・ドゥ・アルディの父親であるシャルルとミシェルは一卵性双生児であるので、ルイとミシェルが似ているのも当然と言えば当然だった。

ルイは何も失わない。
何も持ち得ていないから。
そしてすべてを手に入れる。
何も持ち得ていないから。

ルイ・ドゥ・アルディは今日、この宴で、目的を果たした。
彼の持つ人脈を更に広げたし、アルディ家の者が権利を持っている様々な分野のものについて、更に発展するための足がかりを取り付けた。
特に・・・ヒカルが言っていた、クロス・グループとの確執問題は、後日、日を改めて契約問題について中立な立場を取れる有資格者と有識者を交えて再度会合を持つ約束を取り付けた。
・・・・それがヒカルの口添えであることを知り、ルイは余計な手配を彼女がしたことに少しばかり苛立ったが。

それでも、彼女はルイより先に会場に戻り、それっきり彼が邸内に入っていったが、宴の席ではヒカルは姿を見せなかった。
ルイはヒカルの白い背中とドレスの裾が翻って彼女の足取りを阻んでいる様をじっと・・・冷たい青灰色の瞳を反らすことなく注いでいたが、やがて姿が見えなくなると、大きな溜息をついた。
彼女を探している人物は、ヒカルの姿を見つけると、なにやら彼女を叱責していたようだった。
酷く恐縮したように、ヒカルが何度も頭を下げているのが目に入った。
・・・・彼はそこで頬を僅かに動かした。
彼女を辱めて良いのは、その権利を持った者だけであり、それはルイ・ドゥ・アルディだけである。
同じ境遇で生まれたのに、どうしてもこうも違うのだろうか。
同じ薔薇の中で成長したのに、どうしもこうも・・・・彼だけが満たされていないのだろうか。

時間を置いて・・・
ルイ・ドゥ・アルディはゆっくりと会場に足を向けて、来た道を戻った。
密談するには相応しい場所、というわけではなかった。
この場所には死角がない。隠れたと思えば次の景色が開ける。日本庭園の計算された広がりに・・・ルイ・ドゥ・アルディはアルディ邸の薔薇園を思い出していた。
何処にいても、何をしていても、誰かが居ればすぐわかるような構図のあの場所に。
・・・・アルディ邸の当主は、どうしてあれほど日本に傾倒するのだろうか。
確かに優れた技術がある。
しかし、彼が日本を好んでいるというだけではない思い入れを誇示しているような薔薇園をルイは厭わしいと思っていた。
ひとり静かに物思いに耽る場所であるのに、彼は同時にその場所は酷く居心地が悪かった。
シャルルがヒカルの為だけに、夏の朝に眠りを放棄して、朝早く咲く薔薇の莟を見つめる場所だから。
ヒカル・クロスが、シャルルのために、毎朝最高の状態の薔薇を探し続ける場所だから。
・・・ルイに赦された空間は僅かしかない。

ヒカルの後ろ姿が消えたのを見たのを最後に、それっきり、彼女の朱華の衣装を見ることはなかった。
彼女がアルディ家に入ったときから常に言い含められていた「アルディ家の事業に関して意見しないこと」という暗黙の決まり事について、ヒカルは遵守したらしい。
しかし・・・ヒカルの発言が、アルディ家の当主に多分に影響することが、クロス・グループに知れてしまった。
あの国では・・・ヒカルの祖父が退き、新しい総帥が君臨している。
あの時とは状況が変わってしまっていた。
そしてヒカルは帰る場所がない。
だから、日本には、夏の短い滞在しかしないのだ。
滞在していても、親族の元には身を寄せない。ホテル住まいをして過ごしている。
・・・ヒカルの両親が生きていたら、そうはならなかったのかもしれない。
しかし、それは「もしも」の話で、実現されることはないのだ。決して。
信頼関係だけではどうにも解決できないほどに、お互いの立場や状況は変化し硬化してしまっている。

ルイは溜息をついた。
目的を達成すれば、最後までここに残る必要はない。
本当の主催元が充足するであろう十分な成果は得られた。
ハロウィンのチャリティパーティーであるという表向きの行事も終わった。
シャルルが満足するだけの援助をあの国にもたらすことができる。
失うものはなく、得たものだけが残った「業務」だった。
ルイの腕にしなだれかかった理解の出来ない生き物は、同じ貌に見える。
終始ルイに熱っぽい眼差しを送っていた人物であるが・・・ヒカルの幼さを比べものにならないくらい妖艶に微笑んだ。だが、彼は微笑みを返しはしなかった。
決して彼に寄り添わない人物の温度は痺れるほどに感じたのに。
・・・・そうでない人物の温もりが、これほど自分の温度を奪っていくのかと思うと、彼は別の意味を持つ微笑みを浮かべて自分自身を嘲り笑う。

■Trick OR･･･ L-side 07

ルイ・ドゥ・アルディが何かに執着したり没頭したりしている姿を見た者はほとんど居ない。
ただ、何かを考えて居る時だけは、彼はいつもの表情に増して更に無表情になり、瞬きは鈍速となり、そして口元は引き締められて、全神経を再思三考のために費やした。その姿は、アルディ家の当主の若い頃に酷似していると、若かりし頃の彼を知っている人の口からのぼる都度、ルイ・ドゥ・アルディは淡い儚げな微笑みを浮かべる。
その微笑みが嗤笑であることを知らない者は、更にその表情も似ていると言って褒めそやす。
彼は思考の波に沈む時には、場所を選ぶ。

このような遊戯としか判定できないような会合に、彼の時間を費やしていることの価値を知らない者の前では決して、彼はそんな冷たい表情を見せなかった。
シャルルの再来、と言う者は滅びれば良いのに、と思った。
当主はこんな風に・・・気の進まない集まりに自分の考えや予定を曲げて出席することもしなかったし、何より、ヒカルに全幅の信頼を置くようなことは、ルイにはあり得なかった。

ヒカルが誰を伴っているのか、当主は知っている。
そしてヒカルが長じるにつれて・・・アルディ家の奥深くでひっそりと匿うことは難しくなってきていることすら気がついているのに・・・矛盾した行動を取る。
こうして、ヒカルをごくたまにではあるが、公式および非公式の別なく連れて行く。
シャルルが同伴していない席はとても珍しいことではあったが、ヒカルは当主の遣いであることに喜びを感じているようだった。
単に、着飾って、誰かの話に微笑んでいれば良いだけの存在だとしても。
滅多に姿を現さないヒカル・クロスの存在を気にしているものの、接触する手立てを持たない者たちから見れば、今日は好機会の何ものでもなかった。

そしてヒカルは・・・髪を束ねずに、現れた。
もし。
彼女の毛髪が誰かの手に渡ったら。
そして、毛根などの生細胞などから、事実を知ったら。
・・・・今、世界のあちこちで血眼になって探している「タイプH」の存在を世に知らしめてしまうことになる。

ルイが返事をしなかったのはこれが初回ではなかった。
宴の最中、彼は隣に居るのに、少しも自分を見ようとしない、と言うと、ルイは微笑んだ。
「貴女を見ることが出来ないのですよ。あまりに・・・眩しすぎて」
星辰の子と言われて眩い存在とされているルイにそう言われて、相手は気をよくしたが、無返答がいくつか続くと、さすがに彼が

不調なのではないのだろうかと言い出した。
その者自身も、ルイに釣り合うだけの容姿と家柄と理由を持っていた。
彼女は、ルイをずっと独り占めしたいと囁いたが、彼はそれを聞くと頸を横に振った。
「いつでも・・・・・貴女が僕を利用したいと思って、僕が貴女を利用したいなと思ったら、いつでも貴女に声をかけますよ。でもそれは貴女自身の持っているものではなくて、貴女に付随する様々な権益のことを指していることを、お忘れなく。・・・単に星の巡りで一瞬重なっただけでしょう」
人との接触を極端に嫌うルイが、普段は滅多にこのようなことを言わない。
相手とは寸陰を共有しただけで、自分は・・・決してともに星となって巡らさないと言ったのだ。
面倒なことになるとわかっていながら・・・彼はそれでも相手に囁いた。

車に人を待たせていると言って、帰りのエスコートを辞退したことから、始まった会話だった。
誰を待たせているのだ、とか。
自分と今日は朝まで居てくれないのか、とか。
どうして人は皆、ルイがどう思っているのかではなくて自分がどう思っているかを最初に伝えようとするのだろうか。
そしてそれが自分の思い描いた答えではないことを知ると、それが不可抗力による結果であって、ルイの意図している回答ではないと信じ込もうとする。
だから、ルイが失調しているのではないのか、と疑う。
そして彼を案じるような言葉を出すが、それは単に、自分のことを見てくれない正当な理由なのか、と確認しているだけに過ぎない。

どうしてこの世はこれほどまでに・・・煩わしいのだろう。
シャルルのことを理解したくはなかったが、彼が厭世的である理由に少しは賛同できた。

ルイは車に向かった。
アルディ家の紋が入った自家用車は、ルイがエントランスに到着すると、すでに出発するばかりになっていた。
散会には少し早い時間であったが、退出する者がちらほら視界に入ってきた。
・・・最近はこういった夜会の事情も変化してきている。
時間を有効に使いたい者たちが分刻みで行動している世で、刻限まで在場し、そして別れを惜しんでそれから数刻経過しないと車に乗り込めないような時代は終焉を迎えていた。

・・・ルイは入場するときには、ひとりではなかったのに。退場する時には、ひとりで会場を出た。
それが後ほど遠回しな非難になって抗議されることも承知していた。
だが、煩わしかったのだ。
自分が寄って欲しいと思っていないのに、勝手に距離を縮めようとする者は、ルイには必要ではなかった。

そして、車に近寄ると、運転手が近寄ってきて、ルイのために扉を開けた。
車で待っていると言ったのに、彼女はそこには居なかった。
誰か来たか、とルイは普段声をかけないのに、運転手に声をかけたので・・運転手は困惑した顔をした。
ヒカルは、あのまま退室したのだろうか。■Trick OR･･･ L-side 08

彼は周囲を一度だけ見回した。皆、会場の熱気に酔ったように頬を赤く染め、興奮気味の話し声を漏らしながら車に乗り込んでいる。
・・・紳士淑女であるならば、それは決して美しい所作ではないと知っているはずなのに。
それを心得て、静かに流れるように移動を始める者が余りにも少ないので、ルイは溜息を漏らした。
彼らは若いのだ。
そしてそんな世代を集めた群に、ルイを投じる周囲の者の気が知れなかった。
ルイの肉体は確かに若いが・・・彼の精神はすでに老いてしまっている。

先ほどエントランスに出る前に、彼の同伴者の行方をIDによって調査依頼していた。
ルイと別れてすぐ後に、別の者と行動を共にしているらしい。
・・・彼に執着する者はふた通りだ。
いつまでも執拗に彼を追い回すか、最初は妄念を抱いていてもすぐに諦めて、次の標的に向かって神経を注ぐか、だ。
どうやら今日の同伴者は後者のようだ。
この世界は、そういうものだ。
特定の者同士が集まり、同じような環境の者が集う。
今日の宴でも、若い世代の集いということであったが、本人達も何となく自分と違う空気の者というのはわかるようだった。しかしルイはどこにも識別されなかった。
自然に分極していく様をルイはひとり遠目でじっと静かに見つめ、誰がどの分類に入るのかを記憶というツールを使って記録していった。

彼の美しさに惚けて立ち止まったまま同伴者への関心や憧憬を捨て去ってしまった者もいた。
少しでも自分に自信のある者は彼の視界に入ろうとしていろいろと話しかけようとする者もいた。
しかし、ルイはそれら一切を無視して、ただ会場の中を見渡していただけだった。無謀かつ礼儀知らずにも、彼の腕に触れて、自分と話をしようと言った者に関しては、彼は冷たい、凍結するような視線でもって「僕の邪魔をするな」と低く言っただけだ。

そんなルイ・ドゥ・アルディが、周囲を旋回して、自分ではない他者の存在を確認しようとしている。
・・・・彼が来るまで待つ、と言った者が指定した場所に居なかった。
彼は怜悧な美貌を少しだけ歪ませた。
・・・・・シャルルの言い付けを護らない人ではないから、きっともう、アルディ家に戻ったのであろう。これほど遅くなるとは思わなかった、と後で詫びに彼の別棟に訪れるのかもしれない。
その弁明を決して聞き入れてやるつもりはなかったけれども。

「戻る。・・・・今日はセーフハウスへ」
彼はそう言って車に乗り込もうとしたとき。
「・・・・ルイ！」
背後から声をかけられて、ルイは本当は・・・その声の持ち主を待ち侘びていたことを知った。
IDチップで追跡調査をすれば簡単に居所がわかるのにそうしなかった。
彼女が・・・ルイより長い時間誰かの傍らに居るという記録を見たいと思わなかったから。
彼女が・・・ルイではない誰かの傍で微笑んでいる記録を確認したいと思わなかったから。

その声がどこからか聞こえて来ないかと耳をそばだてていた。
その声の持ち主の、今宵の宴のために用意された朱華の衣色が視界に入らないかと一望できる場所でずっと見つめていた。
何時間も。・・・いや、もっと長い時間を彼は全神経を尖らせて、気配を感じることに集中していた。
それなのに、少しも存在を見せようとしなかった晄の娘は、彼の前に予告なく現れたのだ。

踵が低いが、それでも最速で近づこうとしているために蹴り走るヒカル・クロスの足音がする。
彼女が走ってくる音が地面から・・・伝わってくる音だった。
ルイには様子が手に取るようにわかる。
彼女の荒い乱れた息遣いや、裾を擦りながら走行に邪魔だと裾を持ち上げて臑を露わにしている様や・・・・ルイにまっすぐに向けられた視線が彼の背中に注がれている気配が。
「ルイ・・・ルイ！」
聞き覚えのある声域が彼を動けなくする。
声が喉を堕ちて・・・そして沈んでいく。

待っていたと言えばよいのか。
どうして戻っていないと言えばよいのか。

ひたすらに・・・その声に・・・・彼女の音に耳を傾けていたなどとは、彼は誇りと誓いにかけて言うことが出来なかった。

・・・・・ヒカル

彼はまた、甘い痛みを胸に落とし込んだ。
あと幾つ・・・彼の胎にそれを潜めたら彼は彼女を追うことを止められるのだろう。
この場に居る数多の若者が持っている感情とは違う。
彼はそう思っていた。
相手だけしか見えていないと思いきや、彼らは常に同伴者の傍らで目移りしている。
誰か更により良く自分に相応しい相手が居ないかどうか探している。
しかしルイ・ドゥ・アルディが捜している者はもっと違っていた。
そこに居ないとわかっているのに、その人を捜す。
そこに居るかもしれないと、その人を捜す。

ルイとヒカルの距離が限りなく縮まった時。
彼は僅かに腕を開き、脇を開けた。
そこに彼女の白い腕が入り込んで・・・・そして背中越しにヒカルがルイに向かって腕を伸ばしたのだ。
「ルイ・・・・」
次に、衝撃が走った。
彼が乗馬とフェンシングで鍛えていなければ、そのまま二人とも転倒してしまうくらいの勢いだった。
勢い余って、彼女の躰がルイに当たった時に、震動ではない震えが彼を一瞬刺激した。
薄い整った唇をきゅっと引き締める。

彼はいつも表情を崩さないのに。
無表情か、心のない微笑みしか浮かべないのに。
それなのに・・・・彼の表情は苦悶に満ちていた。

どうして、彼女だけは彼を乱すのだろうか。
どうして、彼女は彼の言いつけを護らないのだろうか。

ルイは彼の躰の前に伸ばされた両手首を掴んで、彼女の有効線分をその場で停止させた。
彼女の手の平からこぼれ落ちた朱華の衣の裾が、ルイの足元で揺らめいている。

・・・・幻聴ではなく現実なのだと知った。
整えられた爪は華美に飾り立てられることもないが滑らかに磨かれて光っていた。
そして飾り気のない腕は・・・・その場に居た夜会の者たちがどんなに装っても決して彼の視線に入ることはできなかったのに、ルイの視界に入り込んでいく。

待っていたよ、という言葉のかわりに、彼は平坦な抑揚のない声で言った。
青灰色の瞳を遠くに見遣って。
そうでなければ・・・・彼は背中越しの少女への言葉を選択することを誤りそうだったからだ。
彼は間違えないのに。決して間違えないのに。

路を誤りそうになるから。

「ヒカル。・・・・人が見ている」
そんな言葉は最も不適切だと思っていた。
誰がどう見るかは関係しない。
ルイが・・・ルイがどう思うかを述べたくなかったのだ。

待っていたのだよ、と言葉にしたくなかった。
それは彼が認めることになる服従の誓言だとわかっていたから。
彼は星々を遵えて煌めく星辰の子であるのに。
唯一、永遠の晄と名付けられたヒカルには、星の巡りを引き合いに出すことが出来ない。
・・・・彼は・・・永遠の晄と重なることができない星の子ではない。
重ならないなら、その軌道に重ねれば良いのだ。すべてを曲げて。すべてを捧げて。

・・・何かに固執すれば、その倍のものを失う。
彼の教育係の、低いバリトンが耳に響く。
しかしその声はヒカルの声によってかき消された。

「・・・ルイ、待っていた」
その瞬間、彼は掴んでいた彼女の白い手首を強く握った。
そして振り払った。
・・・・・それ以上、肌を絡めたら・・・・本当に彼は彼女に魂を捧げてしまいそうになるからだ。

ヒカルを得るために、何を失ったら良いのだろう。
何かを手放したら永遠の晄を・・・・彼女のもたらす福音と共に得ることが出来るのだろうか。

彼には失うものはないというのに。

■Trick OR… L-side 09

彼は溜息をひとつ漏らすと、開かれたドアに向かった。
外の空気は冷たかった。
そして同じように、ヒカルの腕も冷たかった。
「オレは行く」
「私も一緒に・・・車を帰してしまったから」
ヒカルはそう言って、彼女を無視して車に乗り込んだルイに続いて乗り込んだので、中央に座って居たルイは嫌な顔をした。
冷たい風が流れ込み、ヒカルの衣装が冷気を含んで車内に持ち込まれたので、自動調節の風が、温度の下がった車内の室温を設定の温度に戻すために、一気に勢いよく稼働して強い乾燥した空気を流し始める。
「図々しい女だな」
彼はそう言うと、彼女を軽く睨んだ。
頬を染めて、すっかり冷たくなってしまった身体の上に、彼女は男物の上着を羽織っていただけだった。
・・・誰かから借り受けたのだろうか。
ルイが、ヒカルの羽織った上着に目をやったことを気にしてか、彼女は説明を加えた。
「・・・貸してくれたの。もう帰るから、と言って。・・・外でルイを待っていたら、それでは寒いでしょう、と言って」
誰が、とは言わなかった。
それだけで、彼女の今夜の同伴者のことを言っているのだと思った。
ルイの知らない関係が、そこにある。
それだけで・・・ただただ息苦しくなる。
成長するにつれて、ヒカルのことについて知りえない事が増えていく。
関心を持っているわけではないはずなのに。
それなのに・・・ヒカルが上着を痛めないように気遣いながら、そっと自分の白い方にかけて暖を取る様を見て・・・ルイはいつものように、冷たい言葉で彼女の関心をこちらに向けることができなくなってしまった。
彼にできないことはないと言うのに。

「・・・車はなぜ、返したんだ」
彼は、車が走り出すのを待ってから、そう言った。
彼女と距離を保つように、彼は腰を浮かせて反対側に移動した。
ルイは滅多にそんなことをしない。いや、皆無だった。
誰かのために場所を空ける。
誰かに彼との距離を空けた場所を指定するのではなく・・・ルイはヒカルと自然な距離を保った。

ヒカルは彼が話しかけてきてくれたことが嬉しいと言わんばかりに頬を緩めて答えた。
「ルイが必ず来てくれると思ったから」
「車で待っていれば良かったのに」
「そうなったら、運転手さんに迷惑をかける」
ヒカルの言葉に、ルイはまた眉根を寄せた。
彼女は使用人に近すぎる。
それがアルディ家の使用人達に絶大なる人気と信頼を寄せているヒカルの特質なのかもしれないのだが、それはアルディ家には必要のない気配りだった。
一体、あの家には何人が業務として従事しているのか、彼女は知っているのだろうか。
彼らは労働力の対価を得ているわけだし、決してボランティアで彼らの生活を捧げているわけではないと言うのに。
彼女はそうして・・・自分には代わりがいないことについて、まったく考えようとしない。

「・・・それで、上着一枚のままで、この寒空の下で、ひとりで待っていたのか？・・・アルディ家の厄介者が、危険性を考えなかったのか」
「・・・私を拐かそうとする人なんて、居ないわよ。・・・それより、ルイが無事であったことを確認できて良かった」
ヒカルはそこで、少しだけ悲しそうな顔をした。

ルイはシャルル・ドゥ・アルディの息子としてすでに名をとどろかせており、知らない者は居ないだろう。しかし、この警備の厳しい会場内で、何かを目論む者の方が、それこそ気が知れないのに。
それでも、ルイの安否を気遣う。
・・・先般、ちょっとした諍い事に巻き込まれて、ルイが襲撃されそうになったことがあったからだ。
それよりもっと前には、ルイの教育係であり、シャルルの実弟であるミシェルが車に乗り込むところを襲撃されそうになったことがあった。
ヒカルはそれを思い出して、彼が戻ってくるまで待っていようという気になったらしい。
だから、一緒に帰ろうと言ったのか。
ルイが心配なのではなく、シャルルが憂えるから。そしてアルディ家の唯一の継承者を失うわけにはいかない、と教え込まれているから。
だから・・・それなら、継承権を持っている者であれば、ルイでなくても良いというわけだ。
ヒカルが案じているのは、「当主の継承者」であるルイであって、彼そのものではない。
そう思うと・・・彼はこの広い空間の中で、ヒカルが外気に体温を奪われて、身を震わせて上着を胸元に引き寄せた様に、
一瞬・・・そう、ほんの一瞬、かっとなった。

車はまだ出発したばかりだと言うのに。
彼は、腕を伸ばして、彼女を包んでいる上着に手をかけた。
「・・・ルイ！」
ヒカルが小さな悲鳴を上げるが、ルイはそれを無視した。
黄金の前髪がふらりと揺れたかと思うと、何も映し出そうとはしないと決めた青灰色の瞳を遠くに向けたまま、彼はヒカルの衣をはぎ取った。
「・・・ヒカルの衣装に合わせた衣装を用意しない輩の上着を、後生大事にして・・・・ヒカルは随分と理想が低いんだな」
彼は意地悪く言った。
彼女の朱華の衣に合わない濃い色に濃い香りの残る男物の上着は・・・若い傲慢さに溢れていた。
彼女が彼の衣装に合わせてやってくるのだろうという倨傲さを感じる衣だった。
ヒカルは言ったのに。今日は手伝いだ・と言ったから、淡い色合いのドレスを身につけ、チャリティに相応しいように、豪奢な装飾を極力避けて、耳飾りだけをシャルルに借り受けてやってきたと言うのに。
判っている。
判っている。
・・・これは言いがかりであり、ヒカルは何ら手落ちがないのに、ルイは彼女を責めたくて仕方がない。
彼女がルイではない別の者を傍らに置いて腕を絡ませたかと思うと・・・・
ルイは理解の出来ない渦に身を灼かれそうになった。

だから、彼女から彼の抜け殻を取り上げた。
温を求めるだけのものなら・・・・それはいらないだろう。

もう、温度調節の整った車内にいるのに。
ヒカル・クロスの、困惑した顔を見たかったのか。それとも、見たくなかったのか。
どちらも不正解で、どちらも正解だ゛った。
■Trick　OR･･･ L-side　１０

普段のルイ・ドゥ・アルディであれば、きっと、自らが身体を動かして、彼女から上着を取り上げることはしない。
しかし、彼女から取り上げたその上着の内ポケットに小さく縫い付けられている文字を読み取ると、それだけで興味がなくなってしまったとでも言うかのように、彼は上着を放りだした。
やはり、あの男か。
自分は、ヒカル・クロスが今回の夜会に断れない事情で出席した理由を確認しただけだ。
ルイ・ドゥ・アルディは薄い唇を歪めて笑った。
こういう時は・・・きっと、ルイの教育係は煙草を燻らせるのだろう。
そして無表情に彼女にその衣を投げ渡した。
これほど近い距離に居るのに、まるではるか遠くにいるかのように、勢いを付けて。
自分の手元に置けばその上着そのものの存在を滅してしまいそうになる。
それくらい障る存在だった。

「返す」
「ルイ・・・」
「勘違いするな。・・・確認しただけだ」
縫い取りには、ルイもよく知っている家の紋が入っていた。
・・・あの国の者たちがやりそうな意匠だった。
家柄を誇示するような文字ではなく紋にするところがかえって、あの家の傲慢さと卑屈さを伺わせる。
ルイが投げた上着は、車内の空間を渡って、ヒカルの膝上に落ちた。僅かな衣擦れの音がして、彼女の中に戻った衣にヒカルが再び触れるのを見て・・ルイは眉を潜める。
「それほど恋うなら、なぜ、別れてきた」
移り香が消えゆく様を惜しんでいるように見える。そんなヒカル・クロスの心を独占しているのは、アルディ家のあの男ではなく、ただ一夜の席の・・・苟且の夢の方が大事であると彼女は主張するのか。
しかしヒカルはルイの非難がましい言葉に頸を振った。
「ルイと約束したから。一緒に帰ろうと約束したから」
「錯乱しているのか？約束というのは当事者間の間で取り決めることで、承諾なしには成立しない。オレは承諾していない。つまり、一方的な通知の類は約束とは言わない」
「・・・ルイの言葉に従うと、自分で決めたから自分への約束なの」
「ヒカル。最初の言葉の回答ではない。オレはあの男が恋しいのか、と聞いた」
「ルイはどうして別れてきたんだ、と言った」
ヒカルの言葉に今度はルイが押し黙った。

何かを期待していたのだろうか。
言葉の遣り取りを楽しむ状況ではなかった。
ルイの周囲には彼と同程度の会話ができる者がほとんど居ない。
ヒカルにはそれを期待していない。
それなのに・・・たった一言、短い言の葉が返ってくることしか、ルイは未来を想定していなかったのだ。
いや、たった一つのことをルイに伝えるために、ヒカルが四苦八苦して言葉を羅列することを予想していたから。

あの男が恋しいわけではない、と。
そんなことは決してない、と。
ルイを選んだからここに居るのだ、と。

だから、そうではなかった展開に、ルイは少しばかり驚愕していた。
思惑の深淵を彷徨っても、答えが導き出せていない。
・・・・どうして彼女だけはいつも・・自分の思い通りにいかないのか。

ルイは数手先が読めるのに。相手によっては、そのもっと先まで把握できるのに。
ヒカル・クロスだけは、いつもルイを苛立たせるほどに、思惑通りに行動しない。

ヒカルが断り切れなかったことに憤慨していた。
彼女は決して否定しない。同調もしない。理解は示すが、決して同意しない。
すべてを否定しないこと。
それはすべてを否定していることと同義なのに。
その上着の主を思った。
ヒカルをよく知らないが故に傲慢なのか、彼女をよく知っていると誇示したいからの無自覚なのか。
どちらにしても・・・アルディ家の当主は、ヒカルを引き渡すつもりはないらしい。
彼女が「アルディ邸に戻ろう」と発言したことからそれは明らかだった。

「また逢えるし。すぐに帰国すると言っていた」
上着をヒカルに預けたまま帰国すると言うのは、彼女が借り物はそのままにしておけない性分であることを承知してのことなのだろう。
次に繋げるために・・・ヒカルを解放したのだと思った。
そういうやり方でなければ、ヒカルは自分からはあの国の者たちと連絡を取らない。
今夜のルイのように、相手を送り届けることを放棄して、その人物はヒカルの関心を手に入れたとしたら、相手はなかなかに狡猾な人物であると認識を改める必要があった。
いや、元々、彼らは食えない面を持っているから・・・情報を改めるのではなく、付加することにした。

そこで彼はふと笑みを漏らした。話題を変更する。
「ヒカル・・・この車は、アルディ邸に寄らずに、セーフハウスに行くように指示を変更したのだが。ヒカルはそれでも乗っていくと言うのだね」
ヒカルがえっと小さく声を漏らした。そして窓の外を見るために彼から視線を反らして・・・そして「そんな」と低く呻いた。
ルイは失笑した。
そこで長い足を組み直して、僅かに、凭れている背の角度を調節する。

「ここで降りるならどうぞ。・・・オレはアルディ邸には行かない。・・・ヒカルの門限はとうに過ぎているではないのかな」
刻限を過ぎてなお、ルイを待っていたヒカルの顔色はあまり良くなかった。
寒空の下で、上着一枚を便りに、館の入り口を出入りしていたのだろうと思うと、アルディ邸の住人が一般庶民のような振る舞いをして人目を引いてしまったことに、また悵然として歎息を漏らす。

Trick　OR･･･ L-side　後編

■Trick　OR･･･ L-side　11

彼女は誰にも渡さない。

彼女の持つ利権は、今後の世界を覆していくに必要不可欠な要素だ。
ルイが当主の座に納まるための手土産になる材料を、彼は見逃さない。

取り逃がしはしない。

だから・・・・
そう。
今夜は彼女をいっそのこと・・・名実ともに、自分の傍らにしか居られないようにしてしまうことだって容易なのだと思った。

「ヒカルが今夜は帰らないと知ったら・・・シャルルのあの冷淡な顔が歪むだろうね」
ルイはそう言って、嗤った。シャルルに良く似た顔で。
「ルイの家は、そこではない」
ヒカルが下を向いて、唇を噛んで言った。

顔を下に向けたので、茶色の癖の強い髪が、彼女の胸に落ちた。
癖の強い彼女の髪は、結い上げればその弾力に負けて、たちどころに乱れてこぼれ落ちてしまう。

「オレに遵うということは、そういうことだよ、ヒカル。
・・・・定住することは意味がない。
家、というまったく無駄なものに縛られている眷属や血続きはオレには必要ではない」
「シャルルはルイのお父さんだよ」
哀しそうに、少し声を潜めてヒカルは言った。
それを言えば、ルイは機嫌良く会話を弾ませるかと言ったら、まったくの逆効果であることは、彼女は熟知しているのに。
「遺伝学上はね」
ルイは淡々と無表情に言った。

見事な金の髪が、淡い車内灯の下で煌めいていた。
ヒカルがシャルルを引き合いに出すことが癇に障った。

彼女は自分がどう思っているのか語らない。
いつもシャルルが哀しむ、と言うだけだった。

この世の者たちは皆・・・なぜ、あの白金の髪のルイ・ドゥ・アルディの祖である人物にだけ心血を注ぐのか。
彼の不完全さを埋めるために、ルイは生を受けてこの世に渡ってきた。
それなのに、どうして・・・ルイが完璧であればあるほど、シャルルが敬仰されるのか。
その意味が理解できなかった。

ヒカル・クロスもその他大勢と同じだと思った。
シャルルが厭うから。
ただそれだけを唯一の理由にして、彼女は身を挺してルイを引き留め・・・そしてアルディ邸に戻そうとする。

やがてヒカルは軽く吐息をついて、いつものようにうつむき加減に言った。
彼女はその時だけは大変に大人びて見える。
いつもいつも、誰かのために憂えて、誰かのために自分を滅している少女が、何か意見を述べるときだけは・・・遠い記憶のあの茶色の髪の茶色の瞳の女性を思わせる容貌で発言する。

「ルイはきっと・・・一番良い方法をとると思っているから」
「誰にとって最良なのかという支点について考えていないね、ヒカル」
「ルイはそれさえ見越していると思うけれど」

彼は冷たく微笑んだ。
そして嘲笑に切り替える。

確かに何手も先を考える習慣が身についている。
しかし、それを簡単に破壊する彼女の行為を考慮に入れてなお・・・最良の方法を選択するであろうと予言する、薔薇の精霊を陵辱する崩壊の女神の言葉に呆れていた。

「それは・・・オレがこのまま、ヒカルを伴って、アルディ邸に引き返すことを言っているのか？」
「そう」
ヒカルは頷いた。そして微笑んだ。彼が口にしたことは決して覆らないことを知っているから。
そういう選択肢を考慮していたことを、ルイはヒカルに表明したから。
だから・・・彼女は微笑んだ。
狡猾な少女だな、と言いかけてルイは口を噤んだ。

彼女はシャルル・ドゥ・アルディの最愛の薔薇だ。
品種改良を趣味として・・・数多の「ファム・ファタル」を創り続けるシャルル・ドゥ・アルディの薔薇の中で最も・・・予測不可能な存在であるのが、ヒカル・クロスであった。

ヒカルの目に映るものは、ルイと違った景色なのだろう。
愛に包まれた色の溢れる世で育った永遠の晄という名前の娘に対して・・・決して交差することはないのだろうと思う。
彼女は、どんなに泣いてもルイが彼女を返さないという路を否定する。

この虚しい現実に、ヒカルは満足したように微笑む度に。
彼の誇りは少しずつ切り裂かれている。
勝負にならない恋の

いたずらな真実を・・・
狡猾な優しさを・・・・・
彼女は知らしめるだけなのに。

唇や肌の温度だけが・・・熱く濡れて・・・溶けるように滴り落ちる。
指を伸ばしたら触れる距離にいるのに。
この腕で抱き締めて消してしまうこともできそうなほどに近接しているのに。

どんな言葉を言っても、彼女は傷つかない。
どんな言葉を言っても、彼女は哀しまない。

一瞬だけ、傷ついて哀しんだ顔をするだけだ。

ルイの言葉は彼女に響かない。

彼ではない誰かによって傷つくことはあっても、彼によっては、傷つかない。

それが、苛立たしい。

残り火のように疼く。
清火のように燻る。

「良いよ・・・このままアルディ邸に戻っても良い。ただし、条件と引き替えだ」
ルイは良く通る声で、車内に響き渡るように、言った。
引き替え、と言ったのに。
それは命令だった。
彼女にウイと言わせる自信があった。
・・・・ルイ・ドゥ・アルディの声は、有無を言わさない声音だった。
■Trick OR… L-side 12

「そのイヤリングをオレに譲ってくれ」
え・・・という声がヒカルの口から漏れた。ルイは冷たく微笑む。
耳飾りにヒカルの指が伸びて、彼女の指先によってそれは僅かに揺れた。
「それはヒカルが使用許諾を得たものだろう？だからオレにそれを譲渡してくれないか」
「これはシャルルが用意してくれたものだよ」
困ったように彼女はそう言った。

・・・・ルイは一度言ったことは絶対に遂行する。
完遂するまで諦めない。
彼のそんな性質を知っていたヒカルはしばらく黙っていた。
「黙っていてもオレの気は変わらない」
彼は素っ気なくそう言った。
ヒカルは彼の申し出を受け入れなければ、きっと・・・きっと彼はアルディ邸には戻らないだろう。
それは確実だった。

ルイは美術品収集に関しても造詣が深く、しばしばアルディ家の美術品を鑑定し、蒐集事業にも携わっていた。
確かにこの美術的価値は高いだろう。
だからなくさないように気をつけて身につけた。
・・・それ故に、ルイと一緒にまっすぐアルディ邸に戻れそうだと思った時にヒカルはほっと安堵の吐息を漏らしたのに。

「それほどまでに興味があるの？」
「それは宝飾品の価値だけではないものが備わっている」
彼はゆっくりと彼女に向かって手の平を差し出した。
彼女が身を固くしたので、知りたくなければ良いよ、と彼が手を引いた時に。

「待って」

ヒカルは彼に・・・・その見事な細工の耳飾りをひとつ、差し出した。
彼は一度言った言葉は必ず遂行する。
だからヒカルの知らない何かを教えてやろうという姿勢のルイの言葉は信用に足りると思った。

ぱちんと小さな音がして、彼女の耳から外されたそれは宙を渡って彼の元に落ちてきた。
・・・桜色の指爪から鮮やかな果実のような宝玉がひとつ、ルイの手の平にこぼれ落ちた。
細く長い指でルイはそれをつまみ上げると・・・青灰色の瞳で黙ったまま、その飾り全体を見渡し、次に器用にいくつかの留め具を弄り始めた。

ヒカルはその様子をルイと同じように無言で眺めていた。
壊してしまえばシャルルが落胆する。
それを貸してやろうと彼が言ったときに。
・・・どこかとても切なさそうにそれを見つめていたから、シャルルの思い入れ深い品なのだろうと思っていた。

やがてしばらくして・・・僅かであるが電子音が鳴った。
「ヒカル。着けてみろ」
彼はそう言って、ヒカルに今一度その飾りを投げて寄越した。
ルイ・ドゥ・アルディがあまりにも無造作に差し出したので、ヒカルは慌ててそれを受け取り、どこも壊れていないことを確認する。

大変な価値があると言った。
それなのに、彼は、もう、興味がなさそうにしている。
これは一体どういうことなのだろうか。

そしてルイに言われるままに、彼女は再び空いた片耳にそれを装着した。
その間、彼は足を組み、気怠げに見事な金の髪を掻き上げた。

・・・耳から、何か異音がした。

「骨伝導を改良したタイプだからよく聞こえるだろう」
彼はそう言ったが、その言葉が2重に聞こえたので・・・ヒカルは声を漏らした。
車内のどこにスピーカーがあるのだろうか。
彼は同じ台詞を繰り返した。彼は決して繰り返さないのに。
驚いたのは彼が繰り返し同じ言葉を述べたからではない。

まったく同じように聞こえてくる言語は、僅かなずれを生じただけで、ルイの発声と同じ抑揚とタイミングでそれは聞こえて、やがて聞こえなくなった。
・・・ルイの口からは美しいフランス語とイタリア語とドイツ語と・・・ヒカルの知らない言語が漏れていたはずなのに。
彼女の耳からは、滑らかな日本語が漏れていた。そして彼女に囁くように聞こえてくる音声は、みなすべて同じ言葉だった。

しばらくすると、待機を示す電子音がまた聞こえて来た。
骨伝導だ、と彼が言ったとおりで、本当に大きく鮮明に聞こえるが、他者には漏れない程度にも小さな動作音であった。
そこで察知した。

ルイが言語を変えて、同じ言葉を繰り返した理由がわかった。
そして大変な価値がある、と言った理由も。
この小ぶりのイヤリングは自動翻訳が内蔵されている。
しかも非常に性能が良いもので・・・世に出回ったら大変な価値になるであろう。
小型化されていてしかも完璧な性能を持っている。
まったく見た目にはわからない。
身につけていたヒカルでさえ、気がつかなかった。
呆気のあまりに目を見開いたままのヒカルに、彼は冷笑した。
「知性が足りない顔をするな。どこで誰が見ているか判らないから」
「ルイ・・・・これはどういうことなの？」
彼女は酷く驚いていた。
くすり、とルイが声を漏らして笑う。まったく気がつかなかったと顔に書いてあるヒカル・クロスの表情がとても幼く、無防備だったからだ。

・・・迂闊なヒカル。少し考えればわかるものを。
しかし彼はそれは言わずにおいた。
気が進まないが、種明かしをしてやることを約束したので、彼はゆっくりと説明を始めた。

「・・・シャルルは薔薇の品種改良の他に、もうひとつ趣味があってね。
・・・小型化された通弁受信機を開発していた。アルディ家の文書保存サーバには、開発時のものから最近のものまで・・・随分と設計書が残っているよ。最近はまったく手を着けていないがね」
「翻訳機・・・・・・・」
ヒカルは少し眉を寄せた。
「思い当たるだろう？・・・忘れてしまったか？
ヒカルがフランスでの生活に早く馴染めるように・・・もっと改良されたものを身につけさせていたはずだから」
彼女はあっと声を上げた。
アルディ家では日本語使用が徹底されていたが、それでもフランス語の習得は必要だった。
彼女の教育係であった、シャルルの従妹は丁寧にヒカルの言語習得に尽力してくれたので、それほど苦労しなかったが・・・最初はどうだったのだろうか、と思い返すと、確かに思い当たる節があった。

耳にイヤリングをつけて・・・お姫様ごっこだと言われていたが、そこからは流麗な日本語とフランス語が同時に聞こえていた。
徐々にフランス語の割合を増やし、翻訳率を下げて、耳に慣れ親しむようにしていったことを思い出す。
・・・そして彼女は言語をついに自在に操ることが出来るようになった経緯を思い出していた。

彼は気怠げに車内の天井を見上げた。
「いつか・・・いつか、日本語しか話せない女性が自分と一緒にパリで暮らしてくれるだろうと愚かな願いを持ち続けて・・・彼はイヤリング型のそれを開発し続けた。何種類も。
・・・・世界を巡って最後は月まで行こう、と。
彼は彼女に約束したそうだ。
世界を巡った時に。
アルディ夫人となった時に。
言語取得が間に合わないだろうと予測していたんだろうね。
・・・・だから何カ国語も翻訳できる最高のICを開発した。それはそのうちの一つだ。
・・・・最近、日本語を忘れがちな娘のために、それを渡した、というわけだ」

どうしてシャルルが彼女に哀しそうな顔をしてこれを渡したのかを思い返していた。
シャルル、とヒカルは小さく呟いた。
彼は様々な思いを秘めて、彼女にこれを託したのだ。
いつかそれを身につけてくれるであろうという人物の娘に渡したとき。
彼は一体、何を思っていたのだろうか。

「愚かなヒカルが途中で退場するとは思わなかったのだろう。
これは訳する言語をいくつか選ぶことが出来るようだ。
・・・無音時間が長かったり、翻訳する対象言語を受信しないと待機状態が長く続くと勝手に電源がオフになる。
だから、フランス語と英語しか使用しなかった今日の会合では必要のない代物だ」

それなのに。シャルルは随伴しなかったのに。
彼女のために・・・長らく睡っていた耳飾りの使用許諾を出した。
あらゆることに予測ができるシャルルであったが、傍に居てやれない時には予測することができない。彼はいつもそうこぼしていた。

「わかっただろう？・・・ヒカルには無用の長物だ。
だから、それをオレに渡せ。それなら・・・共にアルディ邸に行ってやる」

彼はお喋りが過ぎたと言って眉根を寄せた。
一日に使用する言語量を決めてしまっているようだった。
黙って・・・シャルルのために今にも泣きそうな顔をしているヒカル・クロスを見ていると・・・彼はどうしても・・・平穏で居られなくなる。
「ヒカル。俯くな」
彼は苛立ちを含んだ声で目の前の茶色の瞳の少女に声を出した。

目の前で繰り広げられている彼女の葛藤はわかりやすかった。
シャルルの大事な品を渡すことが出来ない。
しかしそうでなければルイは戻らない。
どちらを優先させるのか・・・・彼女次第だった。
ヒカルの返答によって次の手を変更する。
彼は黙ってその時が来るのを待っていた。しかしそれほど長い時間は用意していない。
・・・・ヒカルの行動だけは、彼は待つことが出来ない。
小型化されているとは言えども、それは大変に重量のある品だった。だから両側に負担をかけないようにというシャルル・ドゥ・アルディの配慮であった、「軽い方」の飾りを、ヒカルは差し出したのだ。
彼が渡せ、と言った反対側の耳飾りを、手の平に乗せてヒカルはルイの目の前に広げた。
「左右の区別も忘れたか」
彼が呆れて言うと、ヒカルは茶色の髪を揺らして首を振った。
■Trick　OR･･･ L-side　13

彼はふいと横を向いた。
恐ろしく整った、シャルルと良く似た顔を運転席に向ける。
「予定通りに。アルディ邸には寄らない」
変更が加えられなかったので、あえて言う必要もなかった。
が、ヒカルの決断を促すために、ルイは意図的に運転手に指示を出した。

「ルイ・・・・ルイ」
困り果てたヒカルが彼の名前を呼ぶ。
「オレはヒカルに予定を合わせるつもりはないよ」
ルイが素っ気なく言う。
人混みの多い場所から戻るときには、彼はいつも少しばかり不機嫌だった。
彼の容姿や功績を称えて、皆が彼に取り巻いているのに、どういうわけか、これが心地好いと感じない。
賞賛される度に・・・気持ちが高揚するどころか虚脱を感じる。
特に・・・彼は本日の予定を大幅に修正してしまった。目の前にいる愚かしい娘のために。

変更ではない。修正だ。

彼の未来はすべて予定されたものであり、彼の人生はそれが尽きるまですべてが想定済みの軌条の上に在る。

「ルイ・・・」
「ヒカル。オレが・・・滅多なことがない限り、言葉や予定を覆さないことを知らないようだね」
彼女は口ごもった。彼女が知らないわけはない。アルディ家に長く住む者が、薔薇の一族の修正を知らないとは言わせるつもりはなかった。
・・・ヒカルは人前では泣かない。
ましてや、泣き顔でアルディ邸に戻れば、当主が激昂することを知っている。
それなのに・・・ルイのことは知らない。彼が何を考えているのか想像すらしない。
ルイは溜め息を漏らした。失望の溜め息ではない。嘲弄のそれだった。

必然も偶然もいらない。
彼に必要なのは、確然だけだった。

・・・・・やがてヒカルがゆっくりと白い腕を上げた。
そして、彼女は耳元に指作を伸ばす。

・・・しかし、彼女が外して彼に差し出したのは、先ほど渡した耳飾りと逆の耳に乗った飾りだった。
「ヒカル」
自分の為だけに何かをする、というのはシャルル・ドゥ・アルディをはじめとして、あの家の一族には、あり得ないことだった。
滅私の精神なのだろうか。それも少し違う。
ルイの祖父や曾祖父はそうでなかった面も多く現れていたようだったが、それはルイがこの家のものを「澱んだ病んだ血族」と定めるには十分な事実だった。
多情で、多くの不特定多数の者と関わりを持とうとする。
そういった因子をすべて排除されてルイはこの世に生まれて来た。
それでは、彼の中に残ったものは何だろうか。
・・・シャルルのように。彼らの祖先のように。
精神も肉体もすべて瞞してでも、たったひとりだけを激しく求める心なのだろうか。

「オレの話が耳に入らなかったのか？」
ルイは苛立つ口調をそのままにヒカルを青灰色の瞳で睨んだ。
玲瓏極まりない彼の美貌がきつい空気を孕む。
その視線を見れば、誰もが「凍り付くような視線」と言うのだろうが、彼女はそれに動じることも臆することも凍り付くこともなく・・・茶色のあたたかい瞳で、彼を見つめていた。
桜色の塗れたような唇が・・・ゆっくりと動く。
このまま・・・どこまでも。空までも。月までも。そして海底までも連れて行き、彼女の苦悶の表情さえ奪い去りたかった。
彼は誰かに何かを与えることが出来ない。奪うことしかできない。

そんなルイに、ヒカルは言った。顔を上げて・・・そしてルイにそれを差し出した。
彼はそれをつまんで、つまらなさそうに眺めた。先ほど観察したものとほとんど変化はないものであるが、その価値は、彼にとってはないものに等しかった。
これが唯一絶対であるという付加を備えているかというと、そうではなかった。
対になってこそ、それは効力を発揮する。もうひとつの・・・希なる高い価値をもった、まったく同じものと一緒にあって、それは始めて値打ちを増す。
それは・・・彼の教育係のようであり、ルイ・ドゥ・アルディのような飾りであった。
・・・もうひとつと一緒にいなければ、それは存在価値がないと言われ続ける存在だった。

それでもヒカルは、ルイ・ドゥ・アルディの無言を破って、彼に語りかけた。

「これを託す」
「それは内蔵装置がない側のものだ」
わかりきっていることなのに、ルイは言った。そしてヒカルがそれを承知しながら差し出したことも。

「わかっている。
・・・・でも、これは受信はできても、送信はできていない。
だから不完全だ。
・・・ルイがこのもう片方に、装置を付ければ。これは送受信が可能になる。
・・・聞くだけではなく、今度は翻訳するための音声を発することができる。それを聞いて復唱すれば聞いた同じ言語でもって会話することができる。
・・・一方的ではなく、誰かと何かを伝え聞くことができる。
それを実現するのは、ルイだのだと思う」

「ヒカルはシャルルが不完全だったと言っていることに気がついているのか？」

「彼は不完全であるから完璧であろうとする。それが彼を完璧にしている」

ヒカルは短くそれでもはっきりと返答した。
いつもは小さく・・か細い声でしか反論しない娘は、彼女自身ではない他者のことになると、とたんに気強さを見せる。特に、シャルル・ドゥ・アルディに関しては・・彼女は揺るぎない絶対の信頼を持っていた。

・・・愚かなヒカル。彼が、それほど多くはヒカルに見せていないことを知らない。・・･憐れんでやるよ

彼はそう思いながら苦笑した。ヒカルに今、それを伝えても彼女は信じない。
讐諤というものは、疑念という言葉を知っている者だけに対してでしか有効でないことをルイ・ドゥ・アルディは承知していたから。
ルイ・ドゥ・アルディが告げる言葉に虚偽はないと思っていても、彼女は最終的にはシャルルのことだけを念頭にいれて判断する。そういう愚かな少女だった。
自分の意志で動いているようで・・・結局の所は、ファム・ファタルの面影を求めて彷徨うアルディ家当主の意のままであることを、自覚していなかった。

彼は細く長い指先で、ヒカルが差し出した飾りを手に取った。
ずしりと重たかった。それは先ほどの耳飾りより少し軽かったが、それでも十分に重い。
・・・ヒカルのような年若い少女が身につける品ではなかった。そして彼女はそれを十分によく理解して承知していた。
だから・・・首飾りもグローブも身につけなかった。それではもう肌が粟立つ季節だというのに。
・・・彼女は耳飾りに注意がそれて、紛失してしまうことを畏れていた。
集中できないものはすべて身につけなかった。
それが・・華奢な瑞々しい美しさを引き出していたことは経産に入れていなかったようではあったが。

彼は薄く嗤った。だから、ヒカルの申し出が少しばかり意外で、想定外ではなかったが、決して彼女が思いつかないだろうと思っていた可能性が、今目の前で実現されていることに、苦い笑いを浮かべていた。
「良いだろう。・・・しかしヒカルの持っているそれと対にならなければ送受信できない装置になる。それを・・・ヒカルは代案として提案するということなのか」
「代案ではない。それしかないと思うから。
・・・シャルルを補い、ルイ・ドゥ・アルディはそこにあるものを更に発展させる能力があるから。
それなら・・・シャルルもルイにしか備わっていないものがあると思ってくれるでしょう」

「哀れみは必要でないよ。・・そしてオレのことをヒカルが考えることも必要ではないし、オレの未来やシャルルとの間柄をヒカルが決めることは出来ない」

ルイはそう言って、深い溜め息をついた。
彼女は秀抜している能力を備えていない。アルディ家に求められるのは・・・個々人が持つ希なる才か､肉体に備わる特質のどちらかしか必要としていなかった。
彼女はそのどちらが・・・自分がアルディ家の薔薇園で生きていくために必要であるかさえ、まだ、知らなかった。

間もなく、ヒカル・クロスの特異な性質について、明らかになるときが来るだろう。
それは近い必ず訪れる将来であり、遠い未来や実現しないことではないはずだった。

しかし・・・彼と彼女が対になる時期は、まだ、訪れない。
■Trick OR･･･ L-side 14

ヒカルの思いあがった感覚を戒めることはやめた。
彼はそこまで誰かと深く関わり合いになることを望んでいない。
・・・誰かを理解する必要もなかったし、誰かを理解する努力も必要ではなかった。
もちろん、誰かに理解されるということも同じだ。

「彼は受信装置しかできなかった。・・いつも自分が傍らに居ると思っていたから。
でもそうしていられない時もある、と彼は言っていた。
だから、それが本当は片方だけの機能では人と人の関わり合いには不足している要素があるということを知ったと思う」

ヒカルがここで言う「彼」という言い方に、ルイはきゅっと唇を噛んだ。
シャルルを否定するような言い方をしたヒカルには、シャルルの思い人に対する感情が込められていた。
・・・彼女の母にあたる人なのに。シャルルと一緒に生きていくことを、その人物が選択したのであれば、今、ここにヒカル・クロスという人物は存在しない。
それなのに、彼女はシャルルとその人との関係について・・・少なからず何か思うものを感じている。

「ヒカルにしては、随分と棘のある物言いだね」
ルイは静かに言った。彼女の温度の残る耳飾りを・・・彼は手の平で弄んだ。
ルイの命はこの耳飾りと同じだ。
元々あるアンティークに手を加えて・・・一見すると何も変化のないものであるが、内には大変な機密が睡っていることに誰も気がつかない。創られたものであることには変わりがない。それを覆っているものは古から存在する宝玉であるというのに。
どんなに美しいと誉めそやしても。どんなに素晴らしいと言っても。それは所詮外貌でしかない。

彼女がここで陶酔感に満ちているわけではないことはわかっている。
シャルルと彼のファム・ファタルの話を聞いて、それで穏やかでいられないほど・・・彼女の何かが変わり始めていることに、ヒカルがまだ気がつかないうちに。
ルイは次の行動に出ることにした。

「ヒカル。オレにこれを託して・・・後悔するなよ」
彼女は淡く微笑んだ。そんなことはない、と言った。
「シャルルとルイでそれを対にして完成させる。これほど・・・素晴らしいことはない」
「しかしヒカルはそれで転貸することになる結果を曲げることはできない」
「きっと話せば理解してくれると思う。紛失したり、壊したりしたわけではない。同じアルディ家に住まう人がそれをより良いものにしてくれるのであれば、それはシャルルは何も言わない」
「随分な自信だね」
「だって」
そこまで言うと、ヒカルは先ほどの淡い仄かな微笑みから、満面の笑顔になった。
寒さの中でルイを待っていた時に頬を赤くして待ち続けたときと、同じ頬の赤さだった。
「シャルルの事を信じているから」
それから、慌てて彼女は付け加えた。
「もちろん、ルイの事も。・・・・・ふたりは、父子だから」
ルイは冷笑した。耳飾りをポケットに入れて薄く嗤う。

「・・・・根拠が成立していないよ、ヒカル」
確かに、ルイのセーフハウスではそれを改良するための設備が整っていなかった。
どこかの施設を借りれば事が足りるかもしれないが、機密重視について厳しい姿勢を崩したことがないルイにとっては、この車内での話が漏洩することは不本意他ならなかった。

ルイは外を眺めた。
暗い車外の流れる景色のあちらこちらで、今宵の宴の名残である飾りがまだそのままにされていた。
ヒカルの申し出や言い分を聞き入れる必要はない。
けれども、それを譲れ、と言ったルイの言葉に遵った結果になった。
・・・気に入らないな。
ルイは心の中で呟いた。
彼女を動かすものは、いつもシャルル・ドゥ・アルディだからだ。

「Trick　or Treat　」

ヒカルが同じように外の景色を眺めながら、ぽつり呟いた。
無邪気に叫ぶことは出来なかった。
・・・・・そういえばパーティーの帰りだということに気がついた。

そして・・・彼女は空調の効いた車内でぶるっと体を震わせた。
ルイの目の前でまたその上着を身につけることはもうできなかった。

彼は・・・・ヒカルの先ほどの言葉に分析を加えることなく聞き流した。
ほんの少しばかり憤りを含んだヒカルの言葉の意味を知っていたはずなのに。
シャルルの愛を受け入れなかった人が居る。
それは選択のひとつであるけれども。
彼が哀しそうに・・・耳飾りを身につけたヒカルを送り出してくれたことを考えると胸が痛かった。
彼はわかっていたのだろう。
翻訳するだけでは・・・駄目なのだと。
そしてシャルルや日本語を解するものがいつも傍にいるとは限らないということも。
わかっていたのに。
そしてそれを作っても、もう身につける人は居ないのに。
薔薇の改良と同じように、誰に見てもらうでもなくシャルルはそれを開発改良し続けたのだ。

長い年月が経過した。
そして今夜は・・・・ヒカルはシャルルでもルイでもない人物とともに夜会に出掛けた。

ルイは一度胸に納めた耳飾りを取り出し、ドレスシャツの身頃の内側の隠し筒にそれを入れた。
そして上着を脱いで、ヒカルの膝に投げ落とす。
ふわりと・・・ルイの香りが漂った。それから誰か女性の香りもした。
・・・・今夜一緒だった人が彼に傍近く居たことを示していた。
しかしヒカルが顔を曇らせたのは、そのことではない。
彼が本当に愛する人と一緒に居るのであればそれは喜ぶべき事なのだと思う。しかし。
家族の残香というものは、普段はまったく意識しない。
シャルルは薔薇の芳香の成分を調べることもあったので、そう言った改良研究に携わるときには強い香りを身につけなかった。
それなのに・・・ルイの香気を感じる。これは、いつも一緒に居ないからだ。
いつも彼がアルディ邸の本邸に居ないからだ。

彼の衣装はヒカルのドレスに良く似合った色だった。
彼女が丁寧に畳んだ上着とは違った色味だった。
ヒカルは彼の上着を受け取ると、ありがとうと言った。

「今夜はハロウィンだ。着ろ。許可してやる。・・・・だから、これは施しでしかない」
彼女に与える菓子はない。しかし・・・・彼女は自分の大事なものを差し出した。
結局、何かが解決したわけではないのに、彼は彼女の願いを叶えてしまう。けれども。
ルイは当初の目的を果たした。これを改良して世に広めることはしないが、シャルルよりルイが優れているということを示す材料にはなるだろう。
・・・・シャルルは今でも親族会では日本語しか話さない姿勢を貫いたままだった。
大変な親日家として名の通ったアルディ家の者は大抵の言語を操ることが出来るが、日本語で話せ、と言われると難色を示した。
当主が日本語しか話さないことは解決できる。
この耳飾りに内蔵されている装置ががあれば、日本語習得について拒否する齢の者も納得させることができる。
しかし、日本語で話せと言われると、彼らは生国をこよなく愛しているが故に、それを拒否することもしばしば見受けられた。
アルディ邸の中では快適に過ごしているヒカル・クロスもそろそろ現実と向き合っても良い年頃なのに・・・・シャルルは彼女を秘匿することばかりに執心する。

「・・・・アルディ邸へ」
彼は口重く言った。

「ルイ・・・・・ありがとう」

「ヒカルの為ではない」
ルイは苦笑した。彼女はどうしてこうも自己中心的なのだろうか。
それでも・・・・彼女はルイの上着を羽織り、嬉しそうに彼に微笑む顔を見ると、彼の肌寒さは徐々に薄れていくように感じる。

「・・・・ずっと日本語で話していたから気がつかなかった」
彼女はそう言った。耳飾りのことを言っているのだ。

「ヒカルの従兄はそれほどよく、彼の叔父と似ているとは思えないけれど」
彼女は曖昧に笑った。
このほど要請があって、随伴したのはクロス家の跡取り息子だった。・・・・カズヤ・クロスと良く似た風貌だということで、彼の祖父にあたるクロス・グループの総帥に大変に気に入られているという。
「叔父と甥だしね。・・・・似ているところもあるでしょう」
ルイは失笑した。
彼の叔父は遺伝学的には父と同じ遺伝子を持っているので、親子に近い。
けれども・・・どんなに良く似ていても、魂は似通わない。

「それほどまでに酷似しているのであれば、アルディ家当主が会いに行かないということもないし・・・・今般の問題は解決に乗り出すまでに至らなかったはずなのに」

だからヒカル・クロスが呼び出され、ルイ・ドゥ・アルディが赴いた会合は、世の中の催事と片付けるには大変に重責のある宴となった。

「彼を見て、最期の父の顔を思い出したか？・・・・そうでなかったから、ヒカルはアルディ邸に戻ると言い張っているのだろう」
ルイがそう言うと、ヒカルは眉根を寄せて､深く溜め息をついた。喜怒哀楽に乏しいわけではないが、彼女は滅多なことでは哀の表情を見せることはしない。
ルイの前では良く見せる表情であったが、こうして苦悶する貌は滅多にないことだった。
・・・・彼女は本当の苦しみをまだ知らないから。

ルイの言っていることは正解だった。
彼の貌を見ても、父への記憶を蘇らせることはなかった。気立ても良く、普段疎遠であったヒカルとパリでこうして会えることを純粋に喜んでいた。しかし・・・・家族であるという強烈な引力を感じなかったのだ。だから、ヒカルは早々に退室して、彼の元を離れてきた。
それより気になったのはルイ・ドゥ・アルディが邸に戻らないことだったから。

「血が通っているだけでは、家族にならないということがわかっただけだった」
ヒカルはぽつりと言った。
「いろんなことを否定するつもりはない。けれども、彼は遠かった。父を思い出すこともなかった。シャルルの言うとおりだった。・・・・でも逢って良かったと思う。それを知ることが出来たから」

傷つくことがわかっているのに、行かせたのか。
・・・シャルル・ドゥ・アルディらしくないな。
ルイは金の髪の下から、青灰色の眺で、彼女を見つめていた。

つかまえたと思うとすり抜けていく。追い出すと戻ってくる。・・・行かないと言うと来いと言う。
彼女はまったく矛盾している人物だった。片意地を張るヒカルはとても稚拙に感じる。

しかし・・・・
■Trick　OR･･･ L-side　15

しばらくの間、二人は無言だった。
ルイの上着を抱き締めるように肩に合わせるヒカルの様子を、ルイはじっと見つめていた。
実父を彷彿とさせる温もりの衣より、ヒカルはルイの上着に温度を乗せる。
家族の温もり、というものにヒカル・クロスが蓄念を捨てられないのは、明らかすぎることであった。

今般の件は、シャルルが彼女に何かを伝えたいがために、随行しなかったのだと思うと、欣快であった。
そしてこれを機に彼女はパリに居続けるべきか、日本に帰るかという選択を未だ行っていないことについて問題意識を持つだろう。
シャルルはそこを狙ったわけではなかったが。
彼によって与えられた機会が、ルイによってすり替えられた。シャルルはクロス・グループとヒカルが昵懇であることを世に知らしめるために彼女を送りだしたと言うのに。
越えられない溝があって、それは、すぐにはそれを埋めることができないのだということがあからさまになっただけだった。

当初の目的から進路を変更して、車は静かにアルディ邸のエントランスに入っていくために門をくぐった。
白い砂利を踏む音がした。
ヒカルは淡く灯された眺の色に見覚えがあるものであることを確認すると・・・・それほど長い時間留守にしていたわけではないのに、とても長い旅路から戻ってきたような気がする。

「・・・・私はここに、居たい」
丁字路にさしかかったここから先は・・・ヒカルの赴く本邸と、ルイが進む別棟ででは入り口が違った。それを知っていた彼女は、慌てるように・・・時間を惜しむようにそう言った。
堰を切ったように、彼女は早口で黙ったままのルイに告げる。
しばらくぶりに会うルイ・ドゥ・アルディはヒカル・クロスの申し出によって・・・彼が同伴した相手より優先して彼女の申し出に応じた。

それが、ルイ・ドゥ・アルディの意中の人に対してヒカルが彼らの仲に水を差すような行為をしたのではないのかと、彼女は気が気ではなかった。

「私はここが良い。ここに居たい。ルイの香りを意識しないほどにいつも一緒にいたい。
・・・・・ハロウィンの宴に行くのではなく、ここで催しに頭を悩ませたい。
言語の違いに困る夜を過ごしたくない。どんなに・・・どんなに自分と血が繋がっていても、それが一緒に居たいという理由にならないことを知った・・・・・」

そして彼女は腕を伸ばした。ルイの手の平に向かって。
空調によって暖まりきらなかった冷たい指先が・・・彼の冷たい指に触れる。

許可もなく彼に触れることが出来るものは誰も居ない。
それなのに・・・・ヒカルはルイに触れる。
指先から・・・冷たいはずの指先から温度が伝わってくる。
震動がもたらす熱がルイの血温度を上げていく。

「・・・・ルイと同じエントランスから、出入りしたいよ」
ルイ・ドゥ・アルディはヒカルに気がつかれないほどの僅かな眺の点滅を見せた。
彼の瞬きは流星のようだと言われている。
星辰の子は・・・星の瞬きさえも支配すると言われた。
しかし、この永遠の眺という名前の少女の前では、彼の瞬きさえ・・・・星の煌めきのひとつにしか過ぎなくなる。

「Trick　OR･･･」
ヒカルが掠れた声で、ルイに低い声でそう言った。
「菓子はいらない。でも・・でも、何かをちょうだい。それなら誰も文句は言わない」

彼女はシャルルのことを言っているのだと思った。

・・・ヒカルが余興で得た約束なら、シャルルはノンとは言わない。
・・・それがルイを別邸を定宿とさせることを許諾する約束だとしても。

「今宵はハロウィンだから。
・・・・・いついつまでも色褪せない・・・・その耳飾りの宝玉のような何かをちょうだい」

彼女はものをねだることはなかった。
何かを希望することもいけないことだと信じていた。

それなのに。
それなのに・・・・ルイには囁く。

彼女に何かをもたらせ、と。

「ヒカルは空回りしていることに気がつかない」
ルイが静かに言った。
その時に、車は震動を伝えずにゆっくりと停車した。

「・・・オレにはファム・ファタルはひとりだけだ」

彼は静かに言った。

ヒカルが茶色の睫を上げた。
兄にもなれない。
家族にもほど遠い。
そんな彼女に向かって、述べる言葉でないことはわかっていた。

けれども。
けれども・・・・・

ルイは下を向いたまま、金の睫を伏せて、溜め息混じりに言った。

「それは今、与える必要がない」
彼は言った。
彼がもたらしたものについて、シャルルは断ることが出来ないのだろう。
・・・・ハロウィンの宴にヒカルが出ることを認めたから。
彼女が持ち帰ったものを彼は否定できない。

「しかし、近日開催される親族会から・・・送受信機能を充実させた、通訳という人的要素を必要としない会合を実現させよう。
・・・・そしてそれは、ルイ・ドゥ・アルディの功績だと。おまえが証言することになる。ヒカル・クロス」
彼は短いけれども低いけれども、はっきりとそう言った。

・・・・彼女との繋がりは、こういう利害関係でしか明らかにすることができない。
シャルルとヒカルの間とは違う関係でありながら・・・希薄にしてそのまま断ち切ることが出来ない。
なぜなのか。
彼はずっと、考え続けている。
・・・・最初に彼女に逢った時から。それについて考えている。

理由を作らないとヒカルに逢えない。
理由を作らないとヒカルに触れられない。

・・・それなのに、そういう関係になることはやめようと、彼女は言う。

それなら。
それなら・・・・ルイ・ドゥ・アルディはどう動いたら、ヒカルの唯一の眺になるのだろうか。

そこれで彼は冷笑した。

彼女は黎明の眺であり、ルイ・ドゥ・アルディは星辰の子だ。
星の眺は・・・永遠の眺とは異なる。
それなのに、一緒に寄り添えというヒカルの申し出が・・・この上なく愚かしいことだとわかっているのに。
それなのに、彼はそれに完全否定することができない。

「・・・・行け、ヒカル。まだ、オレはここから本邸に入ることはない。
IDチップがオレの入邸を拒むからだ。・・・それをシャルルが解除しない限り、オレは正面玄関から家人として入ることはない。
・・・・・それを実現するために、この耳飾りでもってオレはオレであることを知らしめよう」

行け、と彼は嗤った。

そして、エントランスに到着して、静かにヒカルの側の扉が開くと・・・彼は乗車したまま、顎を持ち上げた。
出て行け、という合図だった。
ヒカルに上着を渡したのに。
彼女が彼女の血族より薔薇の一族を選んだことを確認しただけだった。
・・・・・星辰の子は永遠の晄を遠ざけた。

「行け、ヒカル。そして沙汰を待て。
・・・・しかし忘れるな。
オレは誰にも心を動かされない。
誰も愛さない。
だから、ヒカルを愛してやらない。
けれども・・・おまえが誰かを愛することは許可しない」

春夏過ぎて、秋冬過ぎても・・・彼は彼女を許さない。
アルディ家の者ではない・・・自らの血族を、一度は選ぼうとした彼女のことを。
上着はあとで返却します、と小さく言ったヒカルを・・・ルイ・ドゥ・アルディはもう視界に入れていなかった。

しかし・・・彼女が車外に出たときに、香りがした。・・・ヒカルの匂いだった。

・・・ルイにヒカルが感じたように。ヒカルの気配を・・・ルイは感じた。
これほどまでに遠い存在だと認識しているのに、彼女は近しいと言った。
互いに互いの香気を感じないほどに近くに居るということではないのに。
それなのに・・・・ヒカルはこの家が良い、と言った。

明ける夜の気配を知らせる空気を運んで、車内に冷気を含んだ外気が入り込んだ。
ヒカルは・・・迎えの者に従って、背を向けていた。
茶色の髪が背中で揺れる、瀟灑なドレスの裾が目に入る。
・・・・彼の同伴した者の衣装すら記憶することをやめてしまったのに。
彼女の衣は・・・ルイの記憶にいつまでも残ることとなった。

無性に煙草が吸いたくなった。
彼は教育係に・・・そろそろ公的な喫煙の許可を得ないといけない、と思った。

ヒカルの華奢な背中を抱く男が居る。
ルイと同じ容貌を持った・・・白金の髪の年上の男性に、彼女は導かれて・・・そして、どこに行こうとしているのだろうか。
アルディ邸に住まう者たちと家族になることか。
シャルルの・・・もうひとりのファム・ファタルになることか。
それとも・・・・それとも。

金の髪の星辰の子の傍らで・・・通弁機器など必要としない、館の夫人として君臨するのだろうか。

それはまだ、幾通りもある可能性のうちのひとつに過ぎなかった。

・・・・扉が閉まり、彼は少し離れた別棟の専用駐車場に向かうための移動に身を任せる。

・・・・誰も彼を満たすことは出来ない。彼は数多の星を随えるから。
無数の星が・・彼に集ってもそれは彼を充足させない。
しかし、果てまであまねく照らす永遠に輝き続ける晄は・・・彼を含めて、闇夜を照らす。

強烈な晄でもって。

・・・・そして、アルディ家に降臨した晄は、いったい、どこに行き着くのか・・・・・・・・

彼はそこで青灰色の瞳を綴じた。

・・・どうしてもその先を予想しなければならないという必要性を感じなかったので、思考を停止した・

・・・・今宵の余韻を味わう要素はなかった。眠れない夜明けに対し、挑戦するかのように・・・彼は隠しポケットから取り出した耳飾りの開発に尽力することだろう。

しばし、退屈な時間はなくなりそうだった。

彼女がもたらした・・・彼への捧げ物は、彼を憂かせることはしないのだろう。
その意味で言えば、適切な献上物だった。

彼女も、シャルルへの説明で・・・片方しかない飾りを目の前にして、苦悶する夜を過ごすことだろう。

ヒカルが・・・・ルイを思って、眠れない夜から朝焼けを見つめるまでひとり孤独に過ごせば良いのに、と意地悪く思った。
■Trick　OR･･･ L-side　16

彼は精密機械を扱っているのに、煙草を無造作に口に銜えて、火をつけた。

かたん、とライターを硝子テーブルの上に置く。
じゅっと煙草に火が灯る音がして・・・やがて室内は白煙で満たされ始めた。

そして彼は物憂げな青灰色の瞳で、作業が終わったばかりの・・・鮮やかな果実を思わせる耳飾りの形をした送信機を眺めていた。

・・・塵埃防護のマイクロナノフィルタに囲まれた作業フィールドから遮断されているので、喫煙も構わないだろうという判断だった。

何が楽しいのかわからないが、こうして彼の叔父であり教育係であるミシェルは煙草を吸いながら思案に耽る。
・・・いつか、この答えがわかるのだろうか、と思いながら彼は紫煙の海でその香煙を弄ぶ。
これを習慣化するのはまだ先の話になりそうだった。

肺機能に甚大な影響を与えるとして、ひところ禁煙活動が活発であったが、その有毒成分を除去して・・・心肺機能を助勢するツールとして最近では医療分野での紹介論文が出回り始めた。

それも、医療機器の取り扱いで世界的なシェアを誇るクロス・グループが全面協力し、メディア部門では、ヒカル・クロスの伯母であるジャーナリストがあちこちの講演会で紹介しているからだった。
この開発も、アルディ家のメディカル部門で開発したものだった。

・・・・ルイはそれを口にし、目の前の完成したばかりの・・・翻訳送信機に電源を入れた。

晄と温度と振動で充電されるノン・チャージのそれは・・・・受信機なしに単体で使用できるが、受信機と対になることで「異国言語を受信し、それに対する変換を発声することができる」という画期的なシステムが登載されていた。

両耳に装着することで、送受信が可能だった。
ただし、自分が発した音声を翻訳することはできない。
それに相応しい発音が繰り返し、骨伝導音声として伝わるだけだ。
だから自分で何かを伝えたければ、その言語の発声を模声しなければならない。

しかし、それ以上の開発は進めなかった。
シャルルの残した最期の設計図を書き足して・・・それでサーバのファイル開示ウインドウにさらにパスを入れて閉じた。
これで・・・この機器についてアクセスする者が居ない限り情報は開示されない。

ルイの組んだファイル開示パスコードを破ることのできる人間は現在5本の指にも満たない。
彼の開発する研究内容に興味を示す人間ということで限定されるとなればもっと少なかった。
彼は目の前の・・・・宝飾品としての価値だけでも十分に備えた飾りを眺めたままだった。
何かを考えているわけではない。

ただ・・・見つめていれば、あの時の温度が蘇ってくるような気がした。
そんなことはあり得ない、と彼が一番よくわかっているのに。

・・・翻訳することが目的ではなくて、言語の取得が目的とされる機器であるから、これはこのままで良いという結論に至った。

・・・・あの後。

シャルルにヒカル・クロスがどういう説明をしたのかは不明だった。
しかし、その時のことは不問であり、翌日には、貸与先リストの名前がヒカル・クロスからルイ・ドゥ・アルディに変更されていた。

ただ、それだけだった。

彼女は相変わらず、クロス・グループとアルディ家の橋渡しを気取って、あちこちに・・・存在を知られないように気を配りながら外出している。
パリに滞在している邦人子女という名目で、時にはシャルルに随伴して夜な夜な出掛けている。
・・・そして日中は普通の学生生活を営んでいるので、相当に体調に影響しているはずだった。

それほど日にちは経過していないのに。
それなのに、ヒカルは・・・あの晩の事について、少しばかり思うところがあったようだった。

彼女が何かをしようとしても、結局は何ももたらさない。
しかし・・・ヒカル・クロスという人物が存在し、アルディ家に養われ、そして・・・いつか医療関係で大きな摩擦を生じさせるだろうクロス・グループとの間で良薬にも劇薬にもなるであろうという存在であることは、両者の間で意識統一ができたはずだった。

・・・今後、彼女の処遇を巡って、様々に、水面下で動き回る活発な動きについて、目を配らなければならなくなった。

ヒカルが、クロス家との繋がりを希薄だと思っていたとしても、それはヒカルの感想でしかない。
・・・あちらはそうは思わないだろう。
ヒカルの父と良く似た風貌の後継者と。ヒカルの母と良く似た風貌であり、アルディ家の後援を受けているヒカルの結びつきを望む者も出てくるはずだ。
・・・そして、彼女の秘密が、もっとはっきりとした形で世に明らかになれば。

覇権を巡って、バイオ・ライフサイエンスという分野で。
そしてもっと違う様々な分野で、彼女の存在を手中にしたいという影がちらつくはずだった。

・・・シャルル、時期尚早だと後悔するが良いよ

しかしこれ以上先延ばしでは遅く、これより早ければそれこそ尚早でしかなかった。
シャルル・ドゥ・アルディの判断は適切ではあったが、これにより、当の本人であるヒカルの心中は大きく・・・変化転換したはずだった。

ヒカルは。
シャルルに対し、彼が絶対と思わなくなった。
クロス家に対して彼女の位置がはっきりした。

・・・・次はルイ・ドゥ・アルディの番だ。

あの愚鈍で稚拙な少女を手に入れる為に、これから様々な準備手配を始めなければならない。

これもその一つでしかない。

・・・ルイ・ドゥ・アルディは目の前の・・・微妙な色に輝く宝玉を見た。

彼は動作確認を始めた。
尖った針穴ほどより小さい起動スイッチを入れると、小さな電子音を確認する。
起動ランプも取り付けなかった。
・・・まったく違和感のないようにというのが条件のひとつだったから。いくら特許の価値があるとはいえども、宝飾としての価

値は下げられなかった。

そして彼は最初にエスペラント語で言った。
煙草を口に銜えていても、発音に支障ないことを確認するために・・彼は煙草を吸いながら、防塵フィルムの向こうで輝く送信装置に向かって、言語を発した。

・・・骨伝導は、耳骨に近い部分に装着して効果を発揮する。

そのとおりに震動するように音声を発すれば、その言語を取得していなくても、望んだ言葉を発することができる。

・・・・シャルルの受信機をあわせて使用すれば、会話を自由に行うことができた。
かつ、受信した言語にあわせて、発信した言語は自動選択される。
・・・今は、受信機は手元にないので、このテストはもっと後のことになるのだが。

しかし、今はテストモードだった。
大容量を消費するとわかっているが、彼が耳骨に装着して使用しても意味がない代物だったので、発声モードに切り替えてあった。
スピーカーに接続してあるので、細かい昆虫の複眼のようなスピーカーから音声が漏れてくる。

・・・最初はエスペラント語だった。
次に、アラビア語、ラテン語・・・様々な言語でテストした。
感度は良好だった。

どれも・・同じ結果を発生する。
流麗な翻訳後の言語はスピーカーから流れてくる。
僅かに・・・ラバーマットの上に置いた耳飾りが、震動した。
これによって、装着した人物に、正しい発声に関する震音が伝わる。
それを模倣して、発声すれば、良いというわけだ。
・・・そのまま耳飾りから放音したのであれば、それは会話として成立しない。

・・・・どの国を巡っても良いように。どの国で過ごしても良いように。

その願いは、実現されないから。
その願いは、実現されなかったから。

だから、取得目的のために・・・シャルルがかつて開発したように、同じ言語を記録するたびに、複数回同じ単語を記録すると、送信機は発声の翻訳割合を一定率で落としていくように設計されていた。

・・・・いつか。

いつか、星まで行こうと言ったから。

彼女を伴ってどこに行っても・・・彼女はいつも俯いて誰かの影に居ることは赦さなかった。

シャルル・ドゥ・アルディの傍らではなく、ルイ・ドゥ・アルディの足元に平伏す事を予定された、永遠の晄が・・・少しでもルイだけを見つめているように仕向けるために。

そして、ルイがシャルルを越えて・・・すでに当主たる資格を持ち得ていることを証明するために、次回のWEBシステム会議ではこの装置を起動さえたカメラマイクに変更することにしていた。

これで日本語に拘る当主の方針を覆すことが出来る。

・・・・彼は唇に銜えていた煙草を灰皿に投げ入れた。
どうも、紫煙を楽しめそうもなかった。

・・・この静かなアルディ邸に、戻れと言ったのはヒカルだ。しかし当主は別棟に渡って来ることも本邸にルイを招くこともしなかった。
そうであっても、ルイは研究開発を優先しているからという理由を口実にして面会を断るつもりだったのだが。

・・・・・ヒカルからは相変わらず・・・朝一番の最高の状態の薔薇が到着する。しかし彼はそれを受け取らなかった。
それは彼だけに捧げられたものではないから。・・・彼だけに・・・そう。あの時の耳飾りのように、彼女が何かを差し出すのであれば、その時はまた状況によって受け取りを考えるかもしれない。
しかし、朝に届けられる薔薇は・・・ルイにだけ寄せられるものではなく、シャルルという白金の髪の、この家の古主に捧げられるものでしかなかったから。
だから、受け取らないことにした。

ルイは・・・・完全遮音の、作業棟の一室で・・・完成したばかりのそれを見つめた。

「Trick（仕掛け）か、それとも・・・・」
その言葉を受信してスピーカーから予測変換を伴った音声が漏れた。
「Trick　OR･･･ Treat」
それはヒカルが言った言葉だった。
ハロウィンの常句であるが、彼がヒカル・クロスを最初に見かけた時に感じた、耳飾りの仕掛けに対する興味は失われてしまっていた。
「Trick」彼はまた呟いた。仕掛け。
そうだ。いたずらという意味のTrickではなく・・・これは装置であり仕掛けなのだ。
彼がこれから先・・・・アルディ家に君臨するためのツールのひとつでしかない。

彼は言った。
「Trick　OR･･」
それはテストのための言葉ではなかったので、それ以上言うことはやめた。

ルイは繰り返さないが、繰り返し同じ言葉を述べて、それが変換されるかどうかを確認しなければならなかった。

だから、ひとりでここに籠もった。彼は繰り返さないから。
人の目にそんな姿をさらすくらいなら・・・彼の誇りは彼の呼吸を止めてしまうから。

・・・・・・最後のテストだった。

あらゆる言語を翻訳できたが。
それは積極的動作確認という。
そうなることを予定されて確認を行うものだ。
しかし、そうならないことを予定された動作確認も必要だった。
翻訳してはいけないと設定した言語について、動作しないという消極的動作確認を行う。

・・・・彼はシャルル・ドゥ・アルディが、唯一、変換する必要がないとした言語を使用した。

対になることで価値を増す。
しかし、片方でなければ・・・それは意味を成さなかった。

日本語で。
彼女の母国語で。
彼は、言った。

誰も見ていなかったから。その時の彼の表情は・・・誰も知らない。
金の髪の青灰色の瞳を持つ、美貌の薔薇の精霊は・・・・この上なく美しい微笑みを浮かべていた。
彼は意識していなかったかもしれないが。
その言葉を繰り返すことが・・・彼に微笑みをもたらしていたことを誰も教える者は居なかった。
誰も、いなかったから。

ルイは静かに・・・・最後のテストワードを述べた。
先ほど繰り返し確認した単語だったが、それが翻訳されなければ。
・・・彼の中だけの言語で終わるのであれば、これは成功だった。

ルイの良く響く声は・・・静かな室内に響き渡った。

「オレのファム・ファタル・・・・・・・・・あいしているよ」

しかし、それに反応する蠕動は生じなかった。

彼は大きく一度だけ溜め息を漏らして青灰色の瞳を細め・・・・検収は終わった、と・・・・ひとり、呟いて、また煙草に手を伸ばした。

（FIN）

水月　前編

■01

水音がしたので、ルイ・ドゥ・アルディは脱ぎ捨てようとしていたローブにかけていた細く長い指先の動きを止めた。
縛めを解いた胸元を今一度合わせる。
彼はアルディ邸の半地下にある温水プールで筋力トレーニングの仕上げを行うところであった。
パリ16区にありながら、広大な敷地を有するアルディ家に揃っていない施設はないと言われている。それは階下の施設にも及び、これはそのひとつであった。彼のためにというよりかはむしろ、外出もままならないアルディ家の者たちや滞在者への配慮から設置されたものであった。
半地下と言っても、湿気の多い室内が無粋に見えないよう窓硝子は二重に張り巡らされて曇り止めが施されていたし、そこから射し込む陽光や月光の絶妙さは訪れる者すべてが感嘆するところであった。

彼がここを使用するのは、フェンシングと乗馬では鍛えられない部位を整えるためだ。
彼の締まった躰は均整が取れていたがそれは長年の努力によるもので、無駄な肉はひとつとして存在しない。
生まれつき恵まれた体軀であることは間違いなかったが、それは意図されて組み込まれたプログラムのひとつでしかなかった。
彼は選ばれた種として、ジーン・リッチ（※注　リッチジーン、デザイナーズ・ベビー　等複数の呼称がある）として生まれて来た。
滑らかな肌に、小さい腰、長いが筋力の機能を最大限に活かす大腿や両腕、太くなりすぎない首の上には、恐ろしく整った顔が乗っていた。高い鼻梁に左右対称の耳、精悍な頬から顎にかけては、あのフランスの華の若い頃に酷似していた。
青灰色の双眸は高い知性を備えており、金の髪は入水前のシャワーによって湿っていたが、それでも輝くばかりの晄を放っている。
彼は星辰の子と呼ばれている。数多ある星々や天体を遵える者という意味であった。
まさしく・・・彼はそのとおりの人物だった。古の歴史が彼を生み出した。オリヴィエ・ドゥ・アルディの再来とも言われているルイ・ドゥ・アルディは、この家の為に生まれて来た。
彼の望みはただひとつだ。
・・・シャルル・ドゥ・アルディを失脚させて、頂点に上りつめること。
彼には戸籍上の母も父も居るが、それは彼に何ももたらさなかった。
彼は彼の叔父を教育係として、世間一般の者たちの過程を経ないで今日に至る。

だから、このアルディ邸は彼の生家であるが、彼には別棟があてがわれて、滅多に実父と顔を合わせることはない。

彼は・・・父は、ひとりの少女の養育に夢中であった。
彼の親友を父に、彼の運命の女を母に持つ永遠の晄という名前の少女を・・・慈しみ愛し溺れている。
それは慈愛という名前の傲慢な強制でしかなかった。強引に生国から彼女を呼び寄せて、そして現在も決して解放しようとしない。
何もかもが澱んだこの家で、彼女は表面ばかりの疑似家族愛に浸っていた。
その芝居じみた空気が彼を汚染するのを厭って、ルイは常に別棟に籠もり、そしてこの家の者たちと関わりあいにならないようにして暮らしている。できるだけ外泊し、先頃にはようやく個人の動産と不動産を取得することができるような年齢になったので、そこに入り浸ることがほとんどであった。
憐れな愛翫人形のヒカル・クロスには、シャルル・ドゥ・アルディはなんと言っているのか想像がついた。
彼は・・・・・彼は孤独は労苦と思わない。けれども、あの愚かな少女に憐れみを持たれることが最も大きな貶みだと思っていた。

茶色の髪の、茶色の瞳の少女は、いつもルイに接近しようと画策している。それは透けて見えるほどに容易にわかった。
だから、彼はできるだけ接触しないようにしていた。
彼はちらりと・・・青灰色の瞳で、周囲を注意深く見渡した。入水している時が一番無防備だからだ。
だから彼は身辺警護が万全であったとしても、人の居る場所では滅多なことがない限り、肌を晒さない。
先頃、教育係のミシェル・ドゥ・アルディが狙われた事件があった。
報道機関には開示を制限するように手配されたが、それでもアルディ家の当主の実弟でもあり、その業界では彼の功績を知らない者はいないほどに大きな影響を与えているミシェルへの襲撃事件は、一族を震撼とさせた。
ミシェルはフランスの華と同じ遺伝子を持つ。一卵性双生児だからだ。
そのミシェルは、シャルルの代理という役割だけではないと認識せざるを得ないからだ。
彼がなぜ、そのような屈辱的な立場に甘んじているのかは、本人しか知らないことであった。ルイには興味がないことだ。
彼を「実験だ」と言って様々な教育を施し、アルディ家が選んだ種が本当にシャルルを越えて、世の奔流に耐えうるほどに優れているかどうか・・・常に試験し続ける叔父の所行について、ルイは非難する立場にはない。

誰も入ってはいけないという場所に入り込むことのできる許可権限を持っているのは、この家の当主ともうひとりだけだった。
今は、アルディ家には滞在者はいない。かつてのように、自由に邸内を行き交わせることもなくなってしまった。

それは、ルイ・ドゥ・アルディという存在と、もうひとり・・・シャルルの掌中の宝玉だけであった。

■02

もう、深夜に近かった。月は高く昇り、下っていく機会を窺っている時間帯である。
彼は吐息をついて、歩き出した。
この施設に電源が行き渡っているということは使用者が存在することだ。
会いたくない人物に会う。
これは苦痛でしかない。
しかし、彼以外に誰も使用しないと判断したルイの責にあると思った。
彼は無言のまま・・・素足を前に出した。水音がする、水面を浮かべる池というのは大きな水槽に向かって。
彼はそこで魚になる。何も考えずただ、揺らめく。
この家では、水にまつわる会話はしてはいけないという暗黙の約束がある。
当主の愛した運命の人と、親友であった運命の人の伴侶は、フランスの海に沈んで戻って来ないからだ。
そして彼らを両親とした遺児がここに存在する。
・・・ヒカル・クロスだ。
彼女は様々な手続きを経た上で、今、この場所にいる。
誰よりも。
誰よりも・・・シャルルに愛される娘は、決して水に近寄ろうとしない。
そう思っていたルイの確認不足であった。彼は滅多に間違いや誤りや自分の怠惰について認めることはなかったが、決してそれらは存在しないと思っているわけではなかった。
ルイにも失敗はある。けれどもそれをどう迅速に取り繕うかによって失敗は失敗でなくなるのか、彼は学んできた。
彼のようになれないと誰もが言うが、彼のように努力しないからだという言葉について反論できる者が居れば、彼は喜んで挑戦に受けて立つつもりであったのに。
今でも彼と面と向かって勝負しようという強い信念の持ち主は居ない。

ただひとりをのぞいて。

その人物は・・・ヒカル・クロスは、満身創痍になってもルイに向き合う。いつも彼は彼女を完膚なきまでたたきのめすのに、彼女はそれでもルイの正面に立つことを畏れない。
まったく愚かしいという以上に、愚かな娘の存在について、ルイは抹消することにしたのに。
こうして、時折彼の前に予告なく現れる彼女の存在をどう滅してやろうかと考えを巡らせる。

また水音がした。
静かな水庭には、ただ気配だけが響く。彼女の気配だ。
照明は極限まで絞られていた。彼が薄暗闇の中で静かに潜ることを好むからだった。
それに今日は満月の夜で・・・半地下の硝子窓から射し込む月明かりで十分なほどの明るさを室内において確保することが出来た。

彼は少し考えたが、そのまま室内に歩み進むことにした。なぜならば、彼が遠慮することはないと思ったからである。ここは誰かをもてなすための場所ではない。自由に外を出歩くことの出来ない者として生まれたアルディ家の者たちのために創られた場所で・・・特に現当主は若い頃は頻繁に連絡が途絶えることが多かったので、こういう施設によって外に出る必要はないという後付けの理由のためにも必要な存在であった。
足の爪先までも整えられたしなやかな足先が速乾性タイルの上を渡っていく。冷えを防ぐために、タイルの下は常に温められていた。彼だけのために。今は、この家では、ここを使用する者は極限られた者だけであった。

あの不幸な墜落事故から随分経過したが、それらを連想させるものについて、当主はまったくと言って良いほど存在を否定することから始めてしまっていた。もちろん、ルイのように筋力維持のために水に入ることはあったが、それでも・・・・遊戯のために水に触れることはなかったし、海に入ることもしなかった。ただ、ぼんやりとそれらを眺めることは多くあったようだったが。
そんな彼に養われているヒカル・クロスも、幼少時代から好んで水に入ることはしなかった。日本人学校での授業の一環で行われる教育については従っていたようだったが、それ以上のことは積極的に関わろうとはしなかったようだった。
運動神経は悪くないと聞いている。ルイはあらゆる教育課程を悉く短縮して過ごしていたので、彼女と同じカリキュラムを体験したことはなかったので真実は定かではない。知ろうとも思わなかった。
現場を目撃したわけではないが、周囲の嘆きを感じ取り、彼女は海や水に近付くことを極端避けている。それはシャルルがそれを哀しむからだ。
まったく愚かしい情愛という名前のまやかしに酔いしれている彼らの茶番を見て、ルイは苦笑することも無駄だと思うことにしていた。なぜ、彼らはああして想い出や過去にしがみついているのだろうか。もうこれほどまでの年月が経過して、戻ってくる確率は皆無に等しいというのに、それでも・・・まだ彼らは生きていると信じて居るのだ。根拠がないのに。確信だけで、それらが真実であるかどうかの検証を放棄して真実であると信じ込んでいる。本当にそれは事実なのかどうかという疑問を持っているのに、それを封印して過ごしている。なぜ、そのような幻惑に自ら飛び込むのか。彼は理解できなかった。ありえない事柄にしがみつくことによってもたらされるものは、何一つ建設的でない。

彼女に、この場所を明け渡せと言う前に、彼は少しだけ息を潜めた。
彼女が・・・水に潜りに来たわけではないと知ったからだ。
ヒカル・クロスは月明かりの中にいた。
照明を落とした暗い室内では、暗転時の転倒防止のために等間隔に床に巡らされた蛍光塗料が派手派手しくない程度に仄明るく光っていた。飛行機の滑走路のようだった。

■03

湿気を逃がすための換気音は他の施設と比べものにならないほど静かであった。
静寂の中で揺蕩う栄耀栄華について享受することに罪悪感は感じていない。
彼がこの世の恵みと言われているものをその身に受けていことを、ルイ自身が感謝しているかと言えば、決してあり得ないことであった。
彼の生は彼によって完璧になる。
だから、誰かに環境や境遇や・・・他者が自分自身に成り代わることが出来ないことについて何かを思うことは驕慢極まりないことであり、まったく論理的でない思考として受け止めていた。
恵まれた体軀、恵まれた容姿、そして高い知性に、アルディ家という古の家柄・・・・
けれども。
何もかもが彼の飾りにしかならない。
彼は星辰の子と呼ばれているが、フランスの華と呼ばれる実父と違った呼称であることについて、感想を持つことはなかった。
ルイはシャルルではないから。だから比較される根拠も論拠もなかった。顔立ちは恐ろしくよく似ていたが、彼は金の髪を持ち合わせていたし、シャルルは白金の髪であった。それに・・・・
ルイにはシャルルのような生き別れになった双子の弟も存在しないし、ルイには・・・彼に情愛を寄せる親族はひとりも存在しない。

彼は素足で自分ではない気配を無視することにした。
相手は、ルイの帰邸を待ち侘びていたわけではない。
その人物の日々の習慣のひとつに、この水の音を聞くという行為があっただけに過ぎない。
そう・・・毎朝、最高の状態の薔薇を、この家の当主に届ける役割と同じ程度にしか考えていないのだろう。

仄明るい晄の射し込む夜半に、彼女は水に惹かれてやって来る。
恐ろしいという記憶しかないはずであるのに。彼女はなぜ、ここにやって来たのか。
「シャルルに知られたらという予測はなかったのか」
話しかけたのは、ルイからであった。
彼女はそこ居て・・・月を見上げることのできる場所にいて、月光を浴びていた。

プールサイドに腰掛けて、膝から下は水に浸されていた。
水音がしたのは、彼女が足を動かしていたからだ。
遊びに興じているのではなく、水と会話しているかのように静かに水紋を広がらせていった。
泳ぐことのできなくなった人魚の姫のように水を懐かしむような表情を浮かべていた。
彼は入り口の近くに備えられたスチール製の長椅子の上にタオルを放り投げた。
彼女がルイの問い掛けに応えないのは、何かに没頭しているからなのだろうかと思ったが、それは違った。水音が鎮まったからだ。
月明かりを受けて、プールの水は蒼く輝いていた。
この空間は、寛ぎや遊戯を目的としたものではなかった。彼はゴーグルを持ったまま、もう片方の手で金の髪を持ち上げた。水庭独特の匂いが充満している。
しかし彼女はルイの出現はまったく意に介さないといった風情で、ただひたすら昊を見上げていた。
デニムのショートパンツの下からは、白い象牙色の足が覗き、肌理の細かい肌が水をはじいているのが見えた。そして、この季節には少し早い色合いのフードのついた上着を着ており、その下は丸襟のシャツを身につけている彼女は、茶色の髪を背中に下ろして、ただぼんやりとそこに座って考え事をしているばかりであった。
月の晄は水面を照らし、そこに水月が浮かんでいた。
彼女は水上で揺れる月の姿に魅入ることもなく、ただひたすら・・・上を見上げている。
尖った顎が上がって唇は少し開いていた。瞳は大きく見開かれて、茶色の視線はひたすら・・・月を見つめていた。

「・・・・1分だけ待つ。だから、すぐに立ち去れ」
彼は不機嫌そうに言った。
なぜ、彼女はルイの行動を阻むようなことばかりするのだろうか。
構って欲しいというわけではない。
彼女はこの家の当主の愛を受けて・・・・本来ではあり得ないような境遇の中で生きている。
温室のあの薔薇たちのように大事に管理されて生きている。

「ルイを待っていたの」
「月見なら、余所でやれ」
彼はそういうと、心中で秒数を規則正しく数え始めた。
言ったことは取り消さないのがルイであったから、ヒカルはそこで初めて彼に向き直った。
「オレはヒカルに用はない」
「ルイに会いに来たの」
「オレは会いたくない」
素っ気なく彼は言ってそして横を向いた。
彼が努力している様を他者に見られて、喜ぶほど彼は粋狂ではない。維持管理するだけの淡々とした調整作業でしかない。

「ルイはお魚のように泳ぐから」
ヒカルの言葉に、彼は嫌悪感をあらわにして顔を顰めた。その顔は、フランスの華によく似ている容貌であったが、フランスの華は、ヒカルにそんな表情は向けない。この家の当主は、彼女を彼の永遠の晄と言い、ヒカル・クロスをこよなく愛しているというまやかしに溺れているからだ。
■04
水が恋しいのに、決して水と戯れない。
アルディ家当主の深い憂いを呼び起こすような行動は慎んできたはずなのに。
ヒカルは、それでもここにやって来た。夜も更けているのに。
「それを言うためにここに来たわけではないだろう？」
ルイはヒカルとは久しぶりに会話を交わす。シャルルとはもっと長い間言葉を交わしていない。少し髪が伸びていた。そして顔立ちもやや大人びてきている。
彼女の両親は東洋人で、祖母がフランス人であるから、幼く見えるのは骨格からして当然のことではあった。けれども、彼女の頼りなさそうな幼い表情が、シャルルの愛をますます深く沈めていくのだ。彼女が傍にいることで、彼は・・・フランスの華は、自我を保つことを放棄してますます狂っていく。私利に奔った瞬間に、もう、それはアルディ家の公利から逸脱してしまっているというのに。
それを知っていながら、彼はルイに座を明け渡すことをしない。ヒカルが居るからだ。

ルイは薄い唇を横に引いた。間もなく、彼のカウントは宣言したとおりの時間経過を迎えることになる。
彼女は体の向きはそのままに、顔だけをルイの方に向けた。水面の蒼晄が反射して、彼女の顔を照らしている。
・・・・こういう時の表情は、確かに彼女の母親によく似ていた。間もなく、彼女はシャルルと彼女の母が出会った年齢に近くなる。シャルルは、そこからやり直すつもりなのだろうか。
アルディ家の人間は決して繰り返さないというのに。アルディ家の頂点に立つフランスの華は、何度も繰り返そうとしている。いや、実際に、繰り返しているのだ。
そしてその度に失望し絶望し、また反復する。その螺旋の渦に巻き込まれるつもりはなかった。
愚かな贖罪の娘に何を言っても無駄だ。
けれども。
彼女は何も知らない。
彼女は知ろうとしない。
彼女の主の本当の姿も見ようとしない。
ルイの姿も見ようとしない。

「少し見ていてはいけない？」
「断わる」

ルイはヒカルの申し出をあっさりと却下した。意地の悪い問いをしていることに彼女は気がつかない。彼女に逆らう者はいないのだと思っているに違いない。ノンと言われないことを期待して、彼女はそのように言うのだ。愛されることに慣れたものが陥りやすいねだり方であった。
彼女は言葉に詰まった。彼はヒカルと機転の利いた穏やかな溌溂な話をするつもりはない。
彼にとっては、予定された時間を遂行する方がよほど大事なことのように思える。
ヒカル・クロスとの会話は予定されていない。この娘の持つ稀なる力と彼女の父方の実家の影響力を考えると、いずれ・・・ルイは彼女を娶ることになるだろうと思ったが、それでもどうにも苦痛で堪らなかった。他の者に対するように、無感情でいられない。
彼は溜息を漏らした。
「ルイ、溜息を漏らすと倖せが逃げてしまうわよ」
「あいにくとオレは倖せを逃したくないと思うほどに惨めではないからね」
彼はヒカルをやり込めた。彼女のまったく主観的で非生産的案発言のひとつひとつを否定する作業は途方もなく無駄であると言いたそうであった。
「・・・用事があるならメールで。それも目を通すかどうか保証しないが」
彼はそのように言ったのに、ヒカルは首を横に振った。
従わないというヒカルの意思表示に、少しばかりむっとした表情を創ったルイに、ヒカルは憶せずに言った。
「ルイは戻ってきてもいつも顔を合わせることがない。いつもどこかに行ってしまう。
・・・・でも、ルイが泳ぐ姿はとても綺麗だから、ここで泳ぐルイは本当に綺麗だから。
せめて姿を見ていたい」
「ヒカルを喜ばせるためにしているわけではないが」
彼はますますぶっきらぼうにそう言うだけだった。
彼女は何気ない口調でこのように、誰かの関心を引くことに長けていた。
しかしそれはルイ・ドゥ・アルディには通用しない。なぜなら、愛を乞う人間の愚かしさをよく知っているからだ。彼の実父とされるシャルル・ドゥ・アルディとヒカルはよく似ていた。
誰かの愛を乞うのに、自分の愛は捧げないのだ。
愛という言葉を使うこと自体、まったく意味の無いことだと考えているルイ・ドゥ・アルディにとっては、それを強要される苦痛について、彼らとはわかり合えるとは思っていなかったし、期待もしていなかった。あり得ないことについては、信じないことにしている。
彼は賭け事は嫌いだった。
統計と事実と証拠から導き出される論理的な結論だけが，彼を動かしている。
「それなら、ルイとはいつ、話をすることができるの？」
「オレの気が向いたとき」
彼は冷淡に言った。彼の気が変わるということは滅多にない。それを知っている者がこの言葉を聞けば、彼は決してそうしないのだと言っているのだとすぐに気がつくはずだった。
彼女は水から出る気配を見せなかった。何とも強情で勝手な娘なのだろうかと思いながら、ルイはそれでも淡々と話をした。
「ヒカルと話をする理由もないし、その必要もない。それは最大の理由で唯一のものだ」

ヒカルは少し俯いた。
「こんなに綺麗な月夜なのに。ルイはそれを見ないの？」
「それは今日の予定にはない」
彼は即答した。
「ヒカルの話に付き合う予定も入っていない。これからもそうだ」
彼女と幼い頃から長い時間を一緒に過ごしてきたのに、彼はそれでもあからさまに敵意を剝き出しにしてヒカルを切り捨てたので、ヒカルは大きく息を一度だけ吸った。
溜息を吐けば幸福が逃げてしまうという価値観を持っている少女の夢見がちな動作のひとつとして認識するが、理解や共感は感じない。
それほど年齢があるわけではないが、彼の青灰色の瞳はすでに老成した晄をたたえており、そしてヒカルはいつまでも大人になることを拒んでいるかのように幼い仕種を繰り返す。
・・・・まるで、シャルルと運命の人が出会った頃の年齢に達することを畏れているかのようであった。

ヒカルにもそのような誇りとまではいかないものの自我があったのかと思い、ルイは少しだけ目を見開いた。
この少女は愚かではあるが決して鈍感ではないのだと思った。
羊水を思い出して水を恋しがるのか・・・それとも、哀しむシャルルを見るのが辛いから水を畏れているヒカルを演じているのか・・・贖罪の娘は一体何をどうしたいのだろか。
知りたいという欲求ではなかったが、彼はそこで数を数えることをやめた。

既にもう、彼が制限した1分という時間は経過してしまっていた。
月の光が僅かに動いて・・・水面に月の姿が照らし出された。
彼女の伸ばした爪先の傍に、月があった。水面に揺れる輪郭の歪んだ月を見つめる。
彼女は星辰の子と呼ばれるルイ・ドゥ・アルディに従わない。それどころか・・・・月さえ足元に平伏させて、それでもまだルイ・ドゥ・アルディの関心が欲しいと言う。
傲慢で愚かで・・・・それでいて不思議なほどに、彼女の言葉の先を待ってしまう自分の行動の方こそまったく無駄であると彼は考えているのに。
それなのに、彼は予定を遂行することを少し先延ばしにした。
その理由を探すために、彼はヒカルの座って居る側に向かって・・・歩みを進めた。
水に入り、彼女の存在を無視して反対側のコースを泳げばまったく影響しないほどの距離を置くことができるのにもかかわらず、彼はそうしなかった。

ヒカルの茶色の髪にも、月の光が入り込んで・・・・彼女の髪の色は、僅かに薄く見えた。
常にそうありたいと思っていた、金や白金の髪のこどもに、彼女は擬態する。
月の光を盗んで。星辰の子に抗って。・・・彼女は永遠の晄であるために他の晄を滅するのだ。
そして自分の装飾にしてしまう。まったく愚かしい娘だ、と彼は思った。

■05

ルイ・ドゥ・アルディは彼女を無視することにした。
彼女の爪先で揺らぐ月を眺める。
静かにさざめく波の上に、月の輪郭は形を変えていた。
波が起こるのは、循環装置によって・・・本当に僅かだが、水底に対流が起こっているからだ。
ここの水質維持装置及び濾過装置は画期的で、人体に影響を与えることのないバイオテクノロジーが採用されている。
古めかしい様式の中に最新の技術が盛り込まれており、この方針はアルディ家の当主をそのまま反映しているかのようだった。

水の音は、風のそれと比べて妨げになる音量の許容に幅があるのかもしれない。
これは人体の水分がそう思わせるのか、母の胎内に居たという幻想が惑わせるのか・・・彼も人間であるという証拠であるのかもしれないと思うと、このような記憶を残すことを彼へ配合した者へ苦笑いを浮かべる。
彼は遺伝子操作されて生まれて来たのに。
何を操作されたのか、そうでないのか、理解してしまう瞬間がある。
こんな風にしてふとした折に、彼にすり込まれたプログラムを思い返す。
・・・それが一体誰によるものなのかは推測がついていた。
必要な障害は排除しろと言われて育てられた。
決して執着してはいけない、と。
それはアルディ家の全員に該当する事項かと認識していたが、アルディ家の当主は・・・いつになっても、彼のファム・ファタルに固執する。
彼だけの唯ひとりの人は、彼をただひとりの人と定めなかったのに。それでも、シャルルは・・・もう決して二度と触れることのできない人の温もりや面影を求めて、傍にヒカルを置く。
彼女はそれを知っているのに、傍に居る。
彼は・・・まったく愚かしい寸劇だとしか言いようのない日々を一緒に過ごすつもりはなかった。

「・・・・ルイは帰国していたのに。ルイを見たのは昨日のことだった」
彼女は呼吸を整えて、顔を上げた。
「・・・最初に会わなければならないのはヒカルでなければならないという規定はここにはない」
「そうだね」
彼女は哀しそうにそっと彼を肯定した。彼女はここでは滞在人でしかない。単なる客人で・・・

彼の父であるアルディ家当主の庇護を受けてようやく生きていける存在だった。
この家の本当のこどもに・・・ルイに話しかけてはいけないと。触れてはいけないと。近付いてはいけないと、教えられて育ったのに、彼女はそれでも彼にこうして接触する機会を窺っている。それがルイには腹立たしいと感じていることすら、彼女は無視する。

・・・彼と彼女の目があった。

ぱしゃりと音がした。

弾ける水音がした。
屋内の空気や水流やなどの循環動作が起動する時間になったからだ。
何も言わずに・・・遣りきれない日々について何も言わずに・・・互いは黙ったままになった。

「ルイには、大事な人が出来たのね」
彼女はぽつりとそう言った。
昨日見かけたというのには心当たりがあった。
おそらく、同伴者が空港まで迎えに来て、そのあとパリ市内のレストランで食事をしている間のどこかで、ヒカルが目撃していたのだろうと思った。
アルディ家が有することの出来るプライベート・ジェットから市内に入るまでの道程は限られている。安全性の面から致し方ないのであるが、それでも、安全性を主張するのであれば決まった通り道は避けた方が良いのではないかという彼の主張は、まだ採用されるに至らない。
・・ルイが親族会での発言権を得るのは、まだ少し先の話だからだ。
彼はしばらくの間、アルディ家の嫡子としての正式な籍に入っていなかった。これを理由として、アルディ家当主は、ルイの継承権をしばらくの間凍結してしまったのだ。
その容姿や資質や出生の証明から、彼は間違いなく、この家から望まれて輩出した薔薇であることには変わりがないのに。

■06

彼女が気にしていることが一体何なのか、彼にはわかっていた。
けれどもそれをルイから口にすることはない。彼女からの問いかけにしか応じない。
応じるかどうかは状況によって判断することになるのだが。しかしルイはそれほど待つことなく予想した結果を得ることになった。やがて彼女から話を切り出したからだ。
「ルイが誰かと居るところを初めて見た」
「大袈裟だな」
彼は腕組みをした。彼女はどうあってもここを立ち去るつもりはないらしい。

彼女のために、今日の予定を変更するのは彼にとっては非常に不本意なことであった。
変更するべきはヒカル・クロスの方であるのだから。

「・・・ヒカルには関係の無いことだ」
「そうだね」
ヒカルはそれだけ言うと、また脚を投げ出して、水に肌を浸した。

彼女が何を言いたいのかはわかっていた。
彼が誰かと・・・・苟且の近接を許諾していることに対して、ルイ・ドゥ・アルディがそれを内密にしていたことに対して傷ついているのだと訴えに来たのだ。
まったく勝手だな、と思った。
彼女は自分のことを例外だと常に考えている。
ルイがどこで何をしようとも、ヒカルにはまったく関連しないことであったし、逐一彼女に何かを伝えるというのは意味の無いことでしかなかった。

「何を思い違いをしているのか理解するつもりはないが」
彼はそこまで言うと、よく通る声で、冷たくはっきりと宣告した。
「ヒカルが把握していないことをオレが行動したから、咎められるという図式は成立しない」
単なる遊びだ。遊びにもならない。
相手が自分に陥落するまでの・・・チェスの試合よりもっと簡単な遊戯を暇つぶしに試しているだけだ。
それなのに、なぜ、ヒカルがそれほど平静さを乱しているのか理解しようがなかった。
「オレがパリの市内で何をどうしようとヒカルと何か関連するようなことがあったか？オレは自分の予定のとおりに動くだけで・・・こういう予定外の時間はまったく無駄で非効率だと考えている」
ヒカルは唇を噛んだ。ここまではっきりと言っても、彼女はそれでも動こうとしない。専用の着衣を身につけているわけではなかったので、本当に・・・ただルイに会いに来ただけなのだと知って彼は苛立った。
「オレの予定の邪魔をするのなら、先にそう言え。・・・アルディ家の家訓だ。売られた喧嘩は買う」
「私はルイと喧嘩をしに来たわけではない」
「オレはヒカルの質問に答えたと思うよ。十分にね」
言葉短く彼はそれだけ言うと、ローブの紐を解いて、傍にあったチェアに向かって遠投した。
ヒカルの顔が少し驚いたように一瞬ルイの方を向き・・・そして、慌てて彼女は顔を反らした。
逞しい上半身は引き締まってまったく無駄な肉は存在していない。
長いが均衡のとれた手足に、彼の美しい首から肩の曲線が露わになった。
彼は乗馬とフェンシングでかなり体を鍛え込んでいる。

ヒカルは無垢なまま育っているわけではなかった。ルイという異性に接近して羞恥の感情を持ち、そして自分がなぜルイに詰問するような真似をするのか自分自身でもわかっていないようで本当は理解しているようだった。
しかしその感情はシャルルが教えなかったら、だから彼女は判断がつきかねているのだった。
シャルルが持ち合わせていて、彼女に教えたくない感情であり、それについてヒカルは知ろうとしてここにやって来た。

ぱしゃり、と音がした。今度は、ヒカルからではなく、ルイからその音が湧き上がった。
彼が水に入ったからだ。飛び込むことはしない。彼は静かに水に入り、そして・・・体を浸した。彼女が視線を逸らした肉体を使役するために。そして彼女の視線から隠すために。
水の色は深い闇色に近く・・・月明かりがそれらを更に深く闇色に沈めていく。そしてぽっかりと水に浮かぶ月の周囲だけが、明るくて・・・輪郭を失っていく。彼が躍動するたびに、その月は波打って原型を留めないほどに歪んでいく。

・・・水月が揺れた。
・・・水に映る月の影が揺らめいた。

それをヒカル・クロスはただ静かにじっと見つめていた。
彼が泳ぐ姿をただひたすらに見つめていたのだ。
彼女の願いは叶ったはずなのに。
彼の泳ぐ姿が見たいと言っていたはずなのに。
ヒカルは満足という表情とはほど遠い複雑な面持ちを浮かべていた。

ルイの大事な人のことを聞こうと思った、と彼女は言うのだろう。
しかし彼にとってはただ傍らに居たという相手を大事という言葉で丁寧に扱ってやるつもりはなかった。ヒカルがどこで見ていたのか、その可能性について検証を始めていた。彼女は・・・きっと、ルイに声をかけられずにいたのだろう。
愚かなヒカル。
誰にも愛されていると思いながら、誰にも愛されていない依り代でしかない存在の気配がはやく消えてくれれば良いのに、と思いながら彼は水底に体を沈めていく。

・・・シャルルが教えなかった感情はひとつしかない。
あらゆる景色と色や温度さえ見せてきたのに。
フランスの華は彼女に何も教えなかった。
・・・・誰かを妬むとか、嫉むとか・・・・秘めたる想いについてシャルルはまだヒカルに教えていなかったのだと確認したルイは、更に深く・・・・今度はその見事な肢体ごと水底に沈めていく。

水面に月が反射していた。
彼はそれをちらりと見ながら・・・・
揺れ動く形の定まらない水月は、水の底から見るのか、水の上から見下ろすのか、どちらを見つめれば本当の月の姿が映るのだろうか、と考えていた。
論拠も根拠もない非生産的な思考は持たないと公言していたルイ・ドゥ・アルディは・・・・
ヒカル・クロスが見つめる傍らで、清めの水に自分を沈めていく。

■07

水底に沈んでいると、彼の思考は停止する。いや、呼吸を忘れて思考する。そこで生命の維持がこれ以上不可能だ、というぎりぎりを彼は漂うことによって・・・生きていることを実感する。
充足たる悦楽というものは、彼には存在しない。
ルイ・ドゥ・アルディから見て、彼女の方が・・・・まったく享楽的に生きていると思えた。
自我を隠し、人との争いを避け、傷つくことを極端に厭う。

・・・無垢な存在だとして嬖愛されるヒカルの方が、彼には水月に見える。
いつも水面を揺れており、常に輪郭を持たない存在であった。
彼女は庇護の下で生きていると自覚している。
それが一番楽な生き方だからだ。
そんな彼女のことを享楽的とか稚拙だとか彼が批判しても大して誤差はないし、非難される言われもないと考えていた。
彼女の気配を感じない水底で、彼はようやく何もかもから解放される。・・・彼の中にある執着を捨てれば、いつもこのような水底の静けさを手に入れることが出来る野かもしれない。
表面的ではあるが、彼の叔父であり教育係でもあるミシェルも似たような・・・水のような静寂を感じることがある。
しかし、ミシェルはその平穏さの下に激しい焔と闘志を燃やしていることもルイは気がついていた。
叔父の前では、ルイも同じように映っているのだろうか。

水月は水面だけにしか現れない。光が届く底に映るのは月光だけだった。
少なくとも、瑞浪が揺れる場所では・・・・月と同じ姿にはならない。
それは月そのものが照らす姿であるのに。
彼がどんな相手と寝ようと、束の間の恋愛騒動に苦笑しようと、ヒカルには関係の無いことだ。
それなのに、なぜ、ルイに恋人が居るのだという宣言を聞くことを避けるのに、そのことを聞きたがるのか。・・・・他の者たちと同じだった。皆、一度近付くことを許可すれば、その先を求

める。そして自分だけが唯一の・・・・そう、ﾙｲの運命の人であるかのように振る舞う。強要する。
彼にファム・ファタルは存在しない。シャルルのように定めることはしないと決めているからだ。
フランスの華は・・・・あれほど愚かしい結末を迎え、狂気の道を選びながらそれでも、切除することの出来ない感情をルイは必要としていなかったからだ。
なりふり構わぬ様子に追随する誇りや潔癖さというものはしょせんまやかしでしかない。
アルディ家の当主は幻惑の路を蹌踉めきながら歩いている危険な道化であるに過ぎなかった。
だから、ルイが生まれてきた。
彼はフランスの華を越えてその先を行く新しい種として生まれた。
どんなに見かけがシャルルと似通っていても。ルイはその先を行く。彼をいつか追い抜いて、追いつけないほどに引き離す。それまではどんな苦痛も苦難にも屈しない。たとえ・・・何がなくなっても。何を失っても。手に入れるものがひとつしかなくても。彼はそれでもやり遂げる。そのために生きているから。生まれた理由は彼には関係が無い。けれども、生きる意味は自分で創る。
だから・・・・どんな誘惑も快楽もルイを満たしはしないし、夢中にさせることもなかった。

彼は瞳を閉じた。一瞬・・・・彼女の気配を失ったことを感じたからだ。
見上げれば水上は仄暗い月光だけが淡く光を広げており、そこは水音と心音だけ感じる静寂の世界なのに。ヒカルの気配を感じた。
ゴーグルもつけずに飛び込んだので、視界がやや不鮮明であったが、周囲に気を配るという彼の神経は麻痺することはない。
それなのに。
それなのに・・・・彼は、次の出来事に対処できずに抗力を感じ、背中を丸めた。
彼の腹部に衝撃を感じたからだった。一瞬・・・・底まで沈む。背中に水の底が・・・水の果てが擦れたので、彼は青灰色の瞳を一度だけ瞬かせて、薄い唇から小さな気泡を浮かべて空に還していく。溜められていた肺の空気が一気に水に放出されていく様を彼は景色のように眺めていた。

「・・・・ルイ！」
次に、ヒカルの声が聞こえ、彼の背中に彼ではない者の腕が回された。
彼は反射的に・・・・彼に重ねられた躰を振り払おうとして、動きを止めた。
息苦しくなったからだ。彼の躰に酸素が行き渡らず、そちらの環境改善の方を優先させなければならないと計算が働いたから。苦しみは彼を生きていると思わせる。けれどもこの苦しみは早く中断しなければならないと判断した。なぜなら・・・・彼の躰の上に重ねられたのは、ヒカル・クロスの躰であったからだ。
彼女が飛び込んで・・・・着衣したまま水の中に飛び込み、何を考えたのか、ルイの身体にしがみついたからだ。

おそらく、彼がなかなか潜水状態から戻らない彼女は、ルイが溺れたと勘違いして、助けに入ったのだと推測された。そこまで脳は働いているのに。・・・躰が動かない。

振り払えば良いのに。

彼は、そうしなかった。
彼女は彼女の母親と違い、水泳は得意なはずだ。
水に配慮するのは、シャルルの前でだけだった。だからひとり水中に彼女を置いて立ち上がったとしても，何ら問題はなかった。
それなのに・・・・それなのに、ルイは彼女の背中に腕を当てて力を込めると、ヒカルの躰を引き寄せながら一気に水の上に顔を出した。それよりもっと強い力を用いて、彼女の躰を引き揚げる。
人ひとりを・・・・しかも浮力があるとはいえ、濡衣の者を引き揚げるのは相当の筋力がなければ実現不可能であった。

お互いに・・・激しい息遣いが響く。
先に鎮まったのはルイの方であった。肩で大きく呼吸をし、薄い整った唇は半分開いたまま・・・濡れたヒカルの顎に彼の指を伸ばして、思い切り彼の顔の前に向けた。
「おい」
しかしそれは恋人達の近接ではなかった。
濡れて雫が滴り落ちる金の睫の下の青灰色の瞳は・・・激しく強く彼女を睨み据えていた。
まだ呼吸が荒かった。このような姿を彼女の前に晒したことだけでも、彼には堪え難い屈辱であるのに。更に加えて、何を血迷ったのか、ヒカル・クロスは救助の慈愛を披露しようとして失敗し、そしてルイの不興を買った。

「・・・・これは何かのトレーニングの提案か、余興のつもりか？」
彼は少し喘ぎながらそう言った。
目の前で激しく呼吸を繰り返す茶色の髪の茶色の瞳の娘に、忿怒の視線を向けた。
彼は憤慨し、そして理由のわからない事態に・・・・激昂していた。
何にも満たされず、何にも動かされず、何にも屈しないはずのルイ・ドゥ・アルディは・・・・

静かな激昂に身を任せていた。
彼は直前まで、水月を見つめていた。水の下から。
そしてそこから・・・・水月が割れて、彼女が飛び込んできた。輪郭のない、自己のない水に映った月の影のような彼女は、月から出てきたのだ。彼を救うために。水の上から月を眺めていたのに、そこに飛び込んできた。

「ルイが溺れていると思ったから」
彼女は切れ切れの声でそう言った。そして顔が沈む。

・・・・身長がプールの水深に足りないからだ。

彼と彼女はすでに骨格が違っていた。
身長だけではない。
アルディ家の星辰の子と、贖罪の娘は、同じようにこの建物の下で時間を過ごしたのに・・・・・
彼女は無垢な魂を持ち続けることを願い、彼は自らの血を流しながらも困難を越えてすべてを従えるために犠牲を払うことを厭わない。
見事な金髪と青灰色の瞳の美貌の少年は、フランスの華によく似た青年になっていく。
あどけない幼女であった娘は茶色の髪の茶色の瞳の輝きはそのままに、フランスの華が愛でたファム・ファタルと同じ容姿の娘になっていく。

同一ではないからわかり合えなくて当然なのに、ヒカルはルイを理解しようとしてここにやって来た。
見つかれば、シャルルに窘められることはわかっているのに。
敷地の中とはいえども、もう、夜更けに出歩く年齢ではなかった。

・・・・ルイは、その姿を見て昂揚したのだ。

彼女が、誰かを愛でるルイを見て、嫉妬したのだとしたら。
それは、ルイにとってどんな恵みをもたらすのだろうか。

彼女が、シャルルよりもルイを選ぶとしたら。

あの男は嘆き悲しむのだろうか。
誰も自分を選ばないと言って、あの男は・・・ついに戻れない狂乱の世界に完全に潜没するのだろうか。
彼は乱れた呼吸を整えながら、目の前の娘の服の端を握り、腕を曲げて強い力で彼女の立位を補助するためにもう片方の手で・・・ヒカルの腰を引き寄せて腕を回し、そして抱き上げた。
成熟していない華奢な躰を感じる。ヒカルは彼女が触れたルイの裸身の胸の質感に、身を竦めた。男の肌に触れたことのない乙女が・・・・月の夜に堕ちてきた。水に、堕ちてきた。月を割って。

彼は濡れて張り付いた金の髪を払い落とすことをやめた。ヒカルが身悶えしたからだ。
「だいじょうぶ。私・・・・だいじょうぶよ」

彼女の顔は、月光に照らされて青白く光っていた。

東洋人の血を濃く受け継いだ彼女の肌は、先ほどまで象牙色であったのに。
今は真珠のように白かった。そして、濡れた肌や髪や唇は・・・・彼の知るどんな者よりも妖艶で、彼を誘った。
何かに執着してはいけないのに。彼の中で、情炎にも似た烈しさが湧き起こる。
誰も彼を満たすことも乱すこともしないと思っている。
けれども・・・・なぜ、ヒカルだけは、こうして・・・予定だけではなく、彼の何もかもを乱すのだろうか。
彼は溜息を漏らしたが、それは呼吸を整えるためなのか、忿怒を落ち着かせるためなのか・・・それとももっと違う嘆きのために漏らしたものなのか、水に混じって判別不能であった。

■08

「オレの邪魔をしたいのなら、最初にそう言え。喜んで・・・・水に浮かぶ月を水面下から永遠に眺めるのを手伝ってやろう」
彼はそう言うと、彼女の華奢な首を掴み、そして力を入れた。このまま力を加え続ければ、一体どの段階で彼女はその濡れた唇を閉ざすのだろうか。
ヒカルの顔に、揺らいだ波飛沫が散った。
彼女は茶色の瞳を何度も瞬かせながら、ルイの腕に捕まる。それは人の反射のようなものだ。頼りなく浮遊する時には人は・・・固定されることを求めて手足を伸ばす。
それだけの現象なのに、ルイはもう片方の腕で・・・彼女を包む。
相反する仕種が同時に存在した。壊れ物を扱うように、荒々しく拭き清めてしまう神嵐のように。
「ルイ」
「ヒカルの都合で振り回されるのはごめんだ」
ルイはそれだけ言うと、彼女の首から掌を離した。
濡れた髪の感触と・・・水の質感が彼から離れていく。同時に、ヒカルからはルイの温度が去って行く。
そこまで言って、ルイは次の言葉を探した。
彼女に振り回されていることを認めるような発言を自分が発したことに対する説明だ。ヒカルは少し驚愕していた。

・・・・・重ねた痛みをヒカルは知らない。
訴えるつもりもなかった。
それなのに。

ヒカルが驚いて、唇を動かした。
何を言うのかはわかっていた。
自分がルイを振り回しているのか、と復唱するつもりなのだ。
彼は目を見開いた。
そんなことはさせない。
彼を辱める言葉は他者から発してはいけない。
ルイは誇り高かった。
誰かから貶められることは決して認めない。

ぱしゃり。

ルイが、彼女の顔に水を向けたのだ。臭気のほとんどない水は、彼女の顔の上で躍り、そしてヒカルは唇を閉じた。彼がそうであれば良いのに、と力を込めても彼女は遵わなかったのに。
・・・・ルイの忿怒を感じて、彼女は黙ったのだ。
謝罪も弁解も必要ではない。ただ、静かに彼を漂わせておけば良かったのに、ヒカルがそうしないからいけないのだ。彼は憤りを含んだ棘のある言い方で、彼女に言った。
ヒカルの背に回した腕に力を込め、勢いよく彼女を引き寄せた。
彼に最も近く。・・・そしてヒカルの望む家族ではあり得ない距離に、彼女を引き付けた。
彼女は躰を浮かせながら僅かに身動いだ。着衣が水を吸い込んで、重みを増したことによって、躰を浮かせていることが難しくなってきたのだ。彼女の躰を支えているのは、ルイの身体であった。
「・・・海に消えたヒカルの両親も・・・こんな風に、水を吸った衣服を脱ぐ余裕もなく海そこに沈んだのだろうな」
「・・・ルイ、やめて！」
彼女が悲哀の声を漏らす。ヒカルは・・・まだ、彼らが戻ってくると信じて居る。だから、こんな風に自分が溺れることはないと強い意識で状態を保とうとしている。その浅はかさにルイはせせら笑った。

「訓練も受けていない者が・・・特にヒカルの母親はあまり泳げなかったと聞くが・・・あの状態で助かると思うのか？助かっていると思っているのか？それなら、どうして何年も沙汰がないことには何か感想は？」

彼の顔が近くなり、ヒカルは顔を背けたが、彼の空いた掌は彼女の顎を掴んだ。

「こちらを向けよ、ヒカル」

ヒカルが喘いだ。それがどれほど彼を滾らせるのか、彼女は知らない。
茶色の瞳が潤んでいた。
ヒカルにとって、両親の生存について否定的な話をするのは禁忌の領域だ。それを前提に話を進めることは、彼女の中で定義されていない。
「いつまでもここにいれば・・・彼らが戻ってくると思っているのか？アルディ家にいれば、最新の情報は伝わるだろう。しかし、それと引き替えに愛翫人形になることを交換にするほどのことか？」
「そういう言い方はしないで。・・・私は・・・」
「それなら、どういう表現なら満足するのか？」
彼は噛み付くように言った。彼女の躰を彼の胸に押し当てる。このまま・・・本当に沈めてしまおうかとさえ思う。彼女の命は彼の腕の中にある。それが堪らなく・・・・彼を激昂させる。

ヒカル・クロスはなぜいつもこうして彼の思いの通りにならないのだろうか。

■09

ヒカル・クロスの頬は濡れていて、涙のようであった。幾筋も、幾筋も流れ落ちるそれが月光を浴びて煌然としていた。
大きな茶色の瞳が、ルイをじっと覗き込んでいる。彼女は瞳を逸らしてはいけないと言う時に限って彼から逸れる。それなのに、彼の深淵に潜ろうと・・・こうして時々彼の顔を覗き込む。
ルイ・ドゥ・アルディはフランスの華の若い頃の顔立ちに良く似ていると言われている。まさしく再来だ、とも。しかし、少女のような嫋やかさの時期は短く、彼はあっという間に少年から青年になった。それはこうして・・・・完全に整えられた肉体を持つために、日々、立案した計画を実行しているからだ。それはほとんどの場合、変更されることなかった。ルイ・ドゥ・アルディはこれから幾年も先のことについて予定を立てている。それは未定の希望などではなく、必ず実現される将来であった。
ヒカル・クロスが彼の顔を覗き込んでいた。どうしてそのような言葉をルイが言うのか・・・理解できないといった様子であった。
ヒカルにとって、両親の死を認めることは自分を否定することと同じだと考えている。なぜ、先に進まないのだろう。彼女はヒカルであって、彼女の母親ではない。ヒカルがいつまでも・・・そうやって水に浮かぶ月のように、揺れたままでいることによって鮮明にならない行く先というものについて、彼女は考えが及ばない。

「ルイ・・・」
「ヒカル。オレは気が長い方だがヒカルの話を聞いてやるほど暇ではない。だから、選択しろ」
ルイはそう言って、彼女の腰を寄せた。青灰色の瞳がヒカルの茶色の瞳を覗き込む。吸い込まれそうなほど透明で薄い色のそれに、ヒカルは唇を噤んだ。
しばらくぶりに会うルイ・ドゥ・アルディは、また・・・少し違う感じを持って帰ってきた。大きな胸に僅かに伸びた髪が黄金色であるのは変わらないが、彼女の知る少年から青年に変貌していく。そして少年の面影がどんどん消えていく。見る度に、彼は美しくなっていき、あのフランスの華の若い頃に酷似していると言われる。けれども、少しも彼は鎮まらない。皆の前では静かにただ淡々としているように見せているが、彼は冷たい炎を絶やさず、胸の中で燃やし続けている。

だから。彼が、艶やかな女性と一緒に歩いている姿を見たとき。彼にも安らぎができたと思った。
だからそれがとても嬉しかったのに。それなのに、ルイは何かに酷く憤っていた。
ヒカルは眉を寄せて、困惑しながら囁いた。声が自然に小さくなる。ふたりの距離が近いからだ

。そして周囲は驚くほど静かであったから。

「このままここに居るのなら、濡れた体を晒してオレを誘ったと言え。
オレはシャルルにそう言う。ヒカルは身持ちを崩した・・・誰にでも心惹かれるままに鬻ぐ者であるから、と証言してやる。
けれども、このまま出て行くのであれば、そこのローブを貸してやる。成人してもう少しましな体型になってから改めて出直して来い」
彼はそれだけ言うと、彼女の抱えたままプールの縁にまで移動を始める。彼女を抱きかかえていても全く彼は問題にしていなかった。
力強い筋肉が動き、彼女は抗えない腕の中で、ただ絶句しているだけだった。
「私、そんなつもりでは・・・」
この場に居るのなら、その他大勢の者と同じ様に扱う。
この場を去るなら、その他大勢の者と同じ様に無視する。
彼女にとっては、どちらも望んでいないことであった。ただ、彼におかえりと言いたかっただけなのに。
どちらにしても、彼女はルイの機嫌を損ねてしまったことには変わりが無かった。
「ヒカルが選べよ。・・・オレに抱かれたいのならそう言え。いつでも・・・気が進まないが望みのとおりにしてやるから」
「そうじゃないよ・・」
ヒカルが悲鳴のような声を上げたがそれは掠れていた。水を吸ったからだ。
ルイは彼女の身動ぎを無視して、あっという間にプールサイドに彼女を抱え上げて座らせた。そして彼は金の髪を掻き上げて・・・彼女の座って居る脇に寄り、彼自身は着水したままでプールサイドに背中をあてて顔に落ちる雫をゆっくりと優雅に両の掌で落としていった。
ヒカルの髪からも水が滴り落ち、プールの浪に消えていく。彼女は全身濡れていたが、それはルイを誘う姿とはほど遠かった。
「惨めな躰を晒すくらいなら、さっさと邸に戻れよ。・・・・オレはヒカルと家族ごっこをして喜ぶ悪趣味は持っていない」
「久しぶりに会ったから」
彼女がぽつんとそう言った。
まだ座ったままで・・・全身が濡れて着衣が肌に張り付き、彼が指摘するように年頃の娘の格好とはほど遠い状況にありながらも、彼女はそう言ってぼんやりと・・・また水面に浮かび始めた月を見つめていた。
ルイとヒカルが立てた浪によってそれは一瞬消えていたが、今はまた・・静かにぼんやりと淡い輪郭を光らせようとしていた。

「久しぶりに会ったから。ルイを見かけて・・・声をかけようと思ったけれども、ルイが知らない人と一緒に居るのを見て、声をかけられなかった」
ヒカル・クロスは抑揚のない声でそう話し始める。ここを去ることも残ることもできないから。

彼女は伝えたい事を伝えて去ろうと思っていた。
ひとつ、溜息をついた。

ルイがちらりと彼女に視線を送った。
鋭い視線であったが、僅かな驚愕が含まれていた。
ヒカル・クロスは溜息を漏らして歎くことを知らない者であると思っていたからだ。
「久しぶりに・・ルイに会ったのに、声がかけられなかった。私はルイの会話についていけないのに、その人とルイはずっと話をしていて、ルイは紳士で・・・その人を車に優しく乗せていた。戻って来たばかりで疲れているはずなのに、それでも会いたいと思う人がルイに居るって知らなかったから。だから・・・・」
「ヒカル」
ルイが彼女の言葉を遮った。「言っていることが理解できない。順番に理論的に話してくれ」
「ああ、だから、私はルイを失望させてばかりだから・・・」
「オレの全てをヒカルが知っていると勝手に妄想するのは構わないが。事実と反することをオレに強請しないでくれないか」
彼は辛辣に彼女にそう言った。そうだね、とヒカルは言って小さく嗤った。しかしヒカルの返答は、ルイの言葉へのそれではない。
彼は、彼と一緒に居た人物は単なる泡沫の恋の相手であり、彼にとっては恋にさえならない相手であると訴えているのに。
ヒカル・クロスにはそれは通じていなかった。
「今日は、私はこの水月を見に来ただけ。・・・シャルルにとても美しいと教わっていたのだけれど、私はなかなかここに立ち寄ることができなかった。何となく・・・ひとりで水に近寄るのは気後れていた。・・・でも、ルイが居たから。ルイが来ると知ったから、少しだけいつもと違うことをしてみたいと思ったのかもしれない」
うまく説明できない、と彼女はそう言った。

彼女が訪ねたのは、ルイが誰を愛しているのか確認するためではなく、水月を見にやって来たと言った。
残酷なのはどちらだよ、と彼は心の中でそう呟いたが、それは決して口にしなかった。
彼の全てを知りもしないで、彼の全てを知ったような口を利く。それでいて、彼女はこうして彼を乱して去って行こうとする。
今・・・このまま彼の腕の中に今ひとたび堕ちて来るのであれば。
またあの水月を壊すほどの勢いで彼は彼女を・・・その先はあり得ないことであるので、ルイは思考を停止した。

■10

「簡単な話だ。・・・行くか、行かないか。ヒカルに選択権をやる。だから早く決めろ」
「ルイ」
ヒカルが少し哀しそうに言った。
彼が完全にヒカルを拒否していると知ったからだ。
どうしても彼とわかり合うことが出来ない寂しさを感じ、ヒカルは泣きそうな顔をした。
けれども彼女は人前では泣かない。
それが彼女の誇りだからだ。
彼女の唇が細かく震えていた。
躰が濡れてそのままでいるので、体温が奪われていくのだ。
涙を堪えているのか、寒気を堪えているのか・・・それすらわからないほどに彼女は萎れていた。
永遠の光という名前を持つ贖罪の娘は、誇りというものを持ち合わせていない。
唯一、人前で泣かないという事以外には彼女は自分を主張することはない。
なぜ、この家で育ちながらそういった魂を育てることが出来ないのだろうか。
声を殺して自分を殺す。それで生きているという実感を味わっているとしたらなんと愚かな愛翫人形をシャルルは育てたのだろうかと思わざるを得ない。

「オレを軽視するならそれなりの返礼をしよう。・・・けれども、聖女気取りであれこれオレを愚弄するならおまえを滅してやることもできると言っている」
彼は溜息をついた。
どうしても彼女がここを退くつもりがないのであれば・・・彼が去るしかなかった。
予定を変更するのは不本意であったが、これ以上彼女とここに居るのは彼にとっても良い状況ではなかった。ヒカル・クロスが夜に出歩いてルイと話をした後、ずぶ濡れで部屋に戻ったという状況報告は明日の朝には当主の耳に入るだろう。
当主とルイの不仲についてヒカルはよく承知しているはずであるのに、彼女はそれでも・・・溝を埋めるどころか深める行為ばかりを繰り返す。
もっとも、ヒカルが関与していなくてもそうであっても、彼らの関係は変わりが無かったが。

・・・水月は実体のない幻を指し示す。
実体がないのは、どちらなのだろうか。
それを見たいとヒカルは言ったが、幻なのはどちらなのだろうか。
シャルルか、自分か・・・

その時だった。
「ルイ。水月は、月があるから映る」
ヒカルが彼の思考を読み取ったかのような発言をしたので、彼は青灰色の物憂げな瞳を持ち上げた。

彼女は濡れた上着を脱ぎながら、立ち上がった。
滴り落ちる衣が重すぎるからだ。
加えて、邸内を汚してはいけないと思ったらしい。雨のように落ちる水を含む衣を脱いだ彼女の躰の線が・・・月光によって僅かに浮かび上がる。
ルイは横を向いた。
彼女の肌理の細かい象牙色の肌が月光を反射して淡く輝いている。
「だから？」
彼は顔を背けたままそう言った。縁に伸ばした両腕に力が込められて、細く長い指先が拳の中に収められた。
ヒカルの声がルイの見事な金髪に降ってくる。
「だからね、水に浮かぶ月は・・・とても綺麗だと思うの。儚いからじゃない。幻などではないから。空を見上げられない時に水月を見ることがある。余りに綺麗な月で、まっすぐ見られない時に、水月を見ると・・・穏やかな気持ちになる。なぜだろう」
「さあね」
彼は素っ気なく答える。しかし、ヒカルがルイの内なる問いかけに正しく回答したことについて、反論せずにその言葉をただ黙って聞いているだけであった。
月も水月も虚実の区別なく、どちらも本物であるということか・・・

彼は嗤った。
彼女は理解していないだろう。

単に・・・本当に水月を観に来ただけであろうし、夜にひとり出歩くことを禁じられているからルイの在室時にここに来れば良いと単純に思っただけだろう。そして、彼が彼女の知らない者を連れ歩いてきたことを「ついでに」尋ねるつもりでいたのかもしれない。
そこには「ルイに会いたかったから」という願望は含まれていない。

周囲の者達は皆、彼に再び会うことを願う。特に、恋に恋する者は、ルイと面識があるなしに関わらず、彼と恋に堕ちることを夢見ており、彼本来の自我を無視する。
フランスの華の再来と言われている星辰の子が・・・自分だけをファム・ファタルと言ってくれやしないかという浅ましい欲念に囚われてしまっている者をどうして愛することが出来るのだろうか。
彼は、何かに執着してはいけないと言われて育てられた。だから、誰か特定の者に執念を注ぐ行為はしない。
単なる興味半分でしかないし、人の性や業が理解できた段階で、観察対象から外れてしまう。
彼に愛されていると誤認する者も居るが、皆、その段階で切り捨ててきた。
そもそも、愛など知らないし、率先して知るつもりもなかった。

「・・・ローブを借りるわね」
ヒカルはそう言って立ち上がり、彼から少し離れて衣類の水気を軽く取り除く作業を始めた。滴り落ちる水音が幾度か聞こえて・・・ルイはただ、黙って水面に晄輝く月を見つめていた。
結局は、彼女はシャルル・ドゥ・アルディの言葉に左右される。
いつも、そうだった。彼は溜息を漏らす。
彼女と居ると、苦しくなる。居心地が悪くなり、集中して自分の作業に没頭できない。・・・はやくどこかに行けば良いのに。

彼の中に堕ちて来る勇気も情動も持ち合わせていないのに、彼女はそれでもルイに関わろうとする。
そして彼から遠ざかり、距離を保って接することもしない。
一体、何を考えているのか少しも理解できない。いや、理解できたら終わりだと思った。彼女を理解したいと願うことは彼に禁じられている執着そのものであるのだから。
ヒカルの裸足が水を打ってプールサイドから離れて行く音が聞こえた。
振り返りそうになり・・・ルイはまた横を向いた。
彼女の露わな格好を眺め回すような無粋な真似はしたくない。
また、それほどヒカルの存在を意識しているわけでもない。

・・・久しぶりに会ったヒカルはまた少し身長が伸び、髪が伸びていた。
水中での再会でなければわからなかったこともあるし、こんな薄暗い水面に浮かぶだけでは判別つかなかったこともあった。
しかし彼女は確実に・・・フランスの華のファム・ファタルに似てきている。
確実にシャルルを狂気の路に追い込んでいる位にとても良く似ている。
大きな瞳に茶色の髪、形の良い額に櫻色の唇。象牙色の肌に良く映えていた。
・・水気を得て大きくうねる髪は父親からの遺伝だろう。
彼女はどんどん少女から娘に変化していく。
彼が少年から青年に変化していくように。
それなのに。
なぜ、これほど無防備なのだろう。
彼女は、なぜ、ルイにこれほど大きな苛立ちをもたらすのだろう。
呼吸も出来ないくらいに。
長い時間会わないでいたのに、彼らには再会を喜ぶ抱擁も接吻も存在しない。

ヒカルとルイは・・・。
・・・家族ではないからだ。
恋人たちと定義もしない。ましてや、兄妹でもない。

・・・ヒカルとルイの関係を定義しろという方が誤りなのだ。

彼が彼女を万が一、愛することになったら。
それはアルディ家の遺伝子が持つ、無いものへの渇望という因子のためであるとシャルルは説明するだろう。だから、彼が・・・いつまでも、ファム・ファタルを忘れられないのは当然のことなのだと傲然と言うだろう。
そして同じ様に・・・・ヒカルはルイを愛さない。遺伝子による引力が存在するとしたら、彼女はルイを愛さない。
彼女の母が、シャルルではなく、シャルルの親友であるあの男を選んだように。

■11

「早く行け。ヒカルの目的は達成されたはずだ」
ルイはそれだけを言った。
これ以上ここに居れば彼が次に何をするのか、彼女は想像できないらしい。

抗えない昂揚について、ルイは知っている。
彼に制御できないものはない。
だからそれは肉体の欲求でしかない。
彼は律することができることを証明し続けている。

・・・俗情は彼には煩わしい些事でしかない。
・・・劣情は彼の誇りを傷つける因子でしかない。

だから彼女と離れているというのに。
ヒカル・クロスは、傷つけられたいのか、そうでないのかよくわからない行動をルイに披露する。
それが彼を憤慨に導く。
彼にわからないことはないはずなのに。
理由もなく苛つく。

水に濡れた足が床を歩く音がする。
しかしルイは振り向かなかった。
彼女が去る姿を眺めるだけでも時間の無駄だ。
彼女の遠退く衣擦れの音を聴くだけでも気に障る。
彼の胸元で僅かに漣が蠢く。彼の内なる浪のように。
物憂く水月を眺める。彼には為し遂げなければならない目的があり・・・それはあの月を・・・この家の主を墜とすことである。
しかし。
月が消えたら、水月も消える。
しかし、彼の憂いは鎮まらない。

「ルイ」
彼女が彼に声をかけた。
ルイはその声を無視することにしたが、それでも彼女は彼の名前を呼んだ。
「ルイ」
星辰の子は眉を顰めて、嫌悪感を露わにした。
彼は誰かに指図されることは好まない。
いったい、いつになったら、彼女はそれを学ぶのだろうか。誇り高き薔薇の後裔がここには幾人も集うのに。彼女はその者達を観ているというのに、未だその一員になりきれずに居る。
フランスの華はそれが愛おしいと言うが。ヒカルはこの家の者として生きることが出来ない。

「・・・何だよ」
彼が面倒そうにそう言って、気怠げな瞳を声のする方に向けた時。
・・・・彼は薄い唇を閉じて、押し黙った。
ヒカル・クロスは、まだこの場から去ろうとしない。咎められることはわかっていたはずなのに。彼女はルイの名前を呼んで、彼を振り向かせる。

彼女が、ルイのローブを濡れた体の上に羽織り、そして腕を上げて自分の身体には大きすぎることを確かめるように、袖口から僅かに見える自分の指先を眺めていた。首を竦めて、彼の温もりを探すように彼女はローブに躰を埋めるように身を縮ませていた。
ヒカルは、ルイが呆れて言葉を発さずにいることにすら無頓着であった。ヒカルに月光が差し込み、彼女の茶の髪が僅かに金色のように輝いた。髪が濡れて濃く見えるはずなのに。彼女は、一瞬、確かに輝いていた。
彼女は眼を細めて嬉しそうに言った。
「ルイは、こんなに背が伸びたのね。・・・プールではわからなかった。遠目で見た時にもわからなかった」
その時ルイ・ドゥ・アルディは、ヒカル・クロスが何を確認しにやって来たのか、本当の目的

を知った。
「少しの間に、ルイがとても身長が伸びて・・・後ろ姿がシャルルにとてもよく似てきたから・・・驚いた」
ヒカルはそう言って、濡れた髪をローブに散らせたまま、柔らかい感触に陶然としていた。
水槽の中で・・・彼女の足が着かない場所に彼は立つことが出来る。
そして彼女の躰を包んでしまうほどに広い背中と長い腕を持っている。
それほど長い時間を隔てていないのに、少年から青年になっていくルイの変化に、ヒカルが心を動かされているのだと知り、星辰の子はただ黙って彼女の喜悦の様子を眺めた。

「ルイがあまりにも・・・そう、あまりにも素敵になっていくので、私は少し驚いてしまった。・・・それだけ」
「それをわざわざ伝えに来たのだとしたら、粋狂極まりないと言う以外に表現がないな」
彼はヒカルの様子を眺めながら、素っ気なくそう言った。
彼女は髪が少し伸びた。
背も伸びた。
けれどもまだ少女特有の特徴のままだった。
不均衡な華奢な手足に、顔や躰の線は固い。
「知っている？月の光は、人を狂わせるのですって」
「シャルルの受け売りだな」
彼は鼻で笑った。
彼が父のことを尊称で呼ばなくなって久しい。
「狂っていると認識しているのか？それなら、つまらない戯言めいたことを言うのも、ヒカルが狂っているからなのだろうな」
「月の光は人を狂わせるかもしれないけれども、同時に、いつもならできないことができそうな気がするの」
彼女はそう言って笑った。
「だからね、ルイ。私はこうしてルイがどんどん・・・もっともっと素敵になっていくのを観て、その度に驚くのが私の役割だと思っているの」
このまま居れば彼女を抱くと言った。このまま去れば距離を置いたまま無視すると宣言した。それなのに、ヒカルはそうではないとルイに言う。
・・・彼の思惑のとおりに進まない贖罪の娘の言葉を彼は聞く。
彼がちょうど、彼の生命の意味について、水月を眺めながら幽愁たる波底に沈もうとしたのを引き留めるかのように。
「勝手に決めるなよ。オレはヒカルと関わりになりたいと願ったことはない」
彼女が顔を曇らせる。ルイは額にかかった見事な金の髪を掻き上げた。
大きな掌で・・・ヒカルを軽々と抱き上げた彼の腕が見えた。
ルイは青灰色の瞳で、彼女を見上げた。白い脚を覗かせて・・・彼女はルイの前に立っていた。

「ひとつ、訂正しておく」
彼は静かに言った。
「ヒカルが見た相手は、オレの恋人ではない」「え？」
ヒカルが息を呑んでルイの言葉を聞き返した。彼女の動きが止まり、腕を下ろす。首を傾げて声を詰まらせていた。
彼は溜息をついた。
「随分と遠目で見たんだな」
「・・・どういうこと？」
彼は青灰色の瞳を持ち上げて、彼女を見上げる。そして、両腕に力を入れてプールの縁に力を込めると、そのまま彼は跳躍を必要とすることなく自分の身体を持ち上げた。ざっと音がして、彼が水から離れる音がしてすぐ次の瞬間にはぱしゃん、という水を打つ足音がした。ルイが立ち上がったのだ。
・・・そして、ヒカルの目の前に立った。
最後に会った時より、身長差が開いていた。ヒカルは唇を横に引いて、顎を動かし視線を上げた。・・・ルイを見上げる。
濡れた体が光り、神々しいまでに完璧な躰がそこにあった。
ルイが無表情で彼女を見た。金の髪から雫が落ちて、細く長い指先からも水が滴り落ちていく。
ルイの声が近くなる。先ほど囁かれた時と同じくらいの声の近さだった。
「・・・あれはオレの名義上の母にあたる」
「ルイのお母さん？」
彼は唇を歪めた。
「年齢差は考慮する事項にはならないが。それなりに遇さなければならない時にそうしただけにしか過ぎない」
「ルイのお母さんなの？」
彼女が絶句した。これほど長い時間をこの邸で過ごしていながら、彼女はその存在について少しも情報を持っていなかった。アルディ家と関わりを持たない、ルイの親権を主張しない、という以上に様々な約束事や取り決めがあるとは聞いていたが。
彼は自分のことではないかのように、淡々と言った。
「・・・両家の取り決めで、オレとの面会はしないことになっているが。やむを得ない事情があったからオレからコンタクトした」
「やむを得ない事情・・・」
彼はそれ以上のことは言わなかった。ただ、肩を竦めて大きく溜息をつくだけであった。
「オレを観察する役割を持っている割には、何も知らない」
「そう・・・そうだったの・・・」
ルイのお母さん、と彼女は呟いた。彼女は驚愕していた。あまりにも若々しかったからだ。彼の少し年上の恋人だろうと思っていた。それに・・・ルイの遺伝上の母親であるはずなのに・・・

「並ぶと少しも似ているところがないからな」
彼が素っ気なくそう言った。
彼はデザイナーズ・ベビーであるので、遺伝情報を操作されて生まれて来た。彼女の因子はまったく引き継がないように操作されたかのように、少しも・・・類似を感じなかった。それは遠目であったからなのだろうか。しかし、それ以上彼女が考えることをルイは赦さなかった。
「オレは最適の時期に最適な相手を選ぶ。だからヒカルがそれを気にかけたりオレに意見する必要もないし、義務もない。権利すらない」
そこで彼は彼女から一歩離れた。
そして、ちらりとまた水面を見遣る。
彼が離水した際に湧き上がった波によって水月は消えていたが、また再び浮かび上がっていた。
■12

「ルイ・・・」
彼の名前をもう一度ヒカルが口にした時。
ぱしゃり、とヒカルの顔に水が飛んできた。
声を上げる余裕もなく、彼女は首を竦ませて、声を途切らせる。
ルイが彼女に向かって、滴る飛沫を飛ばしたからだった。
「オレの予定を狂わせた罰だ」
彼は金の髪を掻き上げて、そう言った。青灰色の瞳は冴え冴えとしており、彼女を見る目付きは冷ややかであった。
彼は予定を変更したり直前で再調整させることを厭う。
彼の手順は完璧だからだ。
だから、そうせざるを得ないというのは、他者が彼に大きく鑑賞してきているから故のことであるから。ルイは不機嫌な声で静かに言った。
「貧相な体を晒すのが趣味なら、そう言え。でもオレはそういったものを愛でる好みは持ち合わせていないので、ヒカルに付き合って自分の予定を変更するつもりもないし・・・そうなった時には、次の策を実行することにしている」
そこで彼は横を向いた。ヒカルの濡れた肌が光り、たとえ使用人であったとしても彼女の裸体に近いその姿を見せてなお平然としていられるほど、アルディ家の人間としての振る舞いについて失念するような動揺は彼には訪れない。
これほど近くに居るのに、彼女の魂はとても遠くにあった。
・・・・目の前にいる、娘というにもほど遠い少女は、あどけない顔でルイを見上げる。どんどん・・・彼と彼女は近付く。フランスの華と、彼がこよなく愛した・・・今でも愛し続ける彼のファム・ファタルの姿に近付いて行く。
そしてルイはそこに追いつき、彼女が追いつくのを待ち受けている。
かつての自分たちに酷似するルイとヒカルがシャルルを追いつめる。
これほど滑稽な笑劇はないだろう。

しかしその茶番に付き合うことにした。彼はそうすると決めたからだ。
彼が・・・ルイが生きている意味は、そこにしかないから。
退屈で無機質で、何も残らない色のない世界であったが、ここが彼の生きる空間であり・・・・
彼は生涯、水月のまま、月にならないで終わったとしても、月そのものを滅することに邁進する
。

「水月はね・・・月があるから、水月なのよ」
「だからなんだ」
ルイはきつい口調で彼女の言葉を否定した。
なぜ、時折、彼女はルイ・ドゥ・アルディの考えていることを読み取るような発言をするのだろうか。
彼の表情には何も浮かんでいないはずなのに。
まるで・・月は動かないが揺らめく水月によって心の内を見透かされているかのような・・・そんな根拠のない推測が彼の脳裏をよぎるがすぐにそれは否定される。
「オレがあの苟且の揺らいでばかりいる水月だと？本物になれない・・・天上の月を焦がれて揺らぐ形の定まらない疑似映像だと言いたいのか」
「違うよ」
ヒカルは哀しそうに言った。うまく言えない、と言って、それから短い言葉を繋げながら、彼に訴えた。
「最初から違うものだよ。水に浮かぶ月の影は月じゃない。でも、月があるから月の形になれる
。水月は・・・何にでも形を変えて、どんな大きさにもなれる。月よりもっと水面で輝くことも出来る」
ヒカルは切れ切れにそう言って・・彼の香りの残るバスローブの中で縮こまった。怯えた顔をしているか、彼女はそれでも・・・ルイに懸命に言った。
「私はルイがそんな風にして輝くのが、とても素晴らしいことだと思う。だから、月に代わるのではなくて・・・」
そこまででヒカルの言葉が途切れた。
ルイ・ドゥ・アルディが再び・・・彼女に、肩先から指先に滴る水を浴びせたからだ。すでにほとんど全てが床に落ちてしまって、僅かな雨滴でしかなかったが、彼は勢いよく彼女に差し向けたので、ヒカルはぎゅっと眼を瞑り、それ以上言葉を続けることができなかった。
次に、彼がヒカルの注意力が逸れるのを待って・・・・彼女を掩っていたバスローブの胸元を力強く握り、彼女の踵が浮く程、思い切り持ち上げたからだった。
彼は少年ではなかった。線が細く、美少女のような風貌であった彼の時代は、次に移行していた
。筋肉質の逞しいが決して不均衡ではない計算された肉体で、彼は彼女に何もかもが違うことを見せつけたのだ。
言葉で理解できないヒカルに対して・・・無言で今度は違う方法で憤りを向けたのだ。

ヒカルの唇が半開きになり、驚愕のあまり小さな唇を、声を出すこともなくただ震わせている様

が近くになって、彼はそこで絞り出すように言った。
「オレを見縊るな」
ルイ・ドゥ・アルディは感情を露わにしないのに、この時ばかりは激情を垣間見せた。彼女にだけ。この瞬間だけ。
彼の素顔がちらりと覗いたので、ヒカルは目を見開いて近い距離にある彼の切れそうなほど鋭い視線に絶句した。

■13

彼は冷罵されたと感じたらしい。唇を噛むと、そのまま、ふいと体を離し、青灰色の瞳を横にして、彼女の存在を消し去ろうとした。
「・・・忘れるなよ。アルディ家の家訓通りに、いつか返礼することになるだろうから」
彼はそれだけ言うと、濡れた髪をそのままにしてヒカルに背を向けた。整った左右対称の背筋が月光の下で燐光を発する。
「ルイ、待って」
ヒカルが慌てて、彼の背中に声をかけた。
「何だよ、ヒカルの用事は終わったはずだろう？」
彼が歩きながらそう言うと、ヒカルはそうだけれども、と言って口ごもったので、ルイは溜め息を漏らす。
彼女には失望の吐息しか出てこない彼に対して、遠慮を知らなさすぎる。
疎まれていることに対して無頓着すぎる。
なぜこれほどまでにルイに傷つけられてもヒカルはそれほどまで彼に近付こうとするのだろうか。
何度も拒絶されてなお、彼女はまだ、ルイと理解し合えると錯覚している。
それがシャルルとルイの架け橋になるきっかけだとでも固く信じているのだろうか。
月と水月は違う。
どちらが偽物で、どちらが本物かということではない。本質が違うのだ。
水月は月がなければ発生しないが、月は・・・水月がなくても月であることができる。
この違いがあるだけだ。
ヒカル・クロスはルイに更に声をかける。
彼女の体格では大きすぎるバスローブが擦れる音がする。ぱしゃり、と床に広がる水が彼女の足の下で大きな音をたてた。
何もかもに無粋な喧々囂々たる動作音しか持つことの出来ない彼女に、ルイは顔を曇らせた。
ヒカルが少し早口に喋りだす。彼の許可を待たずに。

「私、私ね。・・・ルイが誰かと一緒に居て良かったな、と思ったの。でも、次に、寂しいと思った。どうしてなのだろう。その次に、ルイに確かめたくなって、尋ねれば簡単なことなのに、それはいけないと思ったの。なぜなのかはわからない。
そしてルイが微笑んで居る顔があんまりにも綺麗で・・・良かったねと思わなくてはいけないのに、少し・・・・少し苦しかった。ルイのお母さまだと聞いてどこか重かった胸のつかえのようなものが・・・軽くなって、でも、またすぐ次には、ルイがこの家で見せたことのない笑顔を向けることが・・・苦しい」
「自分のやりたいことばかり実現できなかったからと言って、オレにそれを共有することを求めるなよ。・・・厚かましいというのは、ヒカルのようなことを言うのだろうな」
辛辣な彼の言葉に、ヒカルは震える声で更に言う。
「ルイ、私、どうしてこんなに苦しいのか・・・わからない」
その声は湿っていて、語尾は消え入りそうなほどに小さかった。
ルイは足を止める。彼女に静かに向き直り・・・そして彼女の温度を含んだ彼の衣類を纏っているヒカルを見る。
青灰色の切れ長の瞳が・・・濡れて焦げ茶色になった髪を乱れるままにしているヒカルの姿を捉える。

彼はしばし無言であった。
不均衡な体に、大きな瞳。まだ、少女というにさえ、足りていないほどにあどけなく稚拙な言葉でしか自分の状態を表すことが出来ない。

静かな・・・湖のような水面の上に、水月が輝いていたが、それは先ほどの場所から僅かに移動し、ただ清閑にだけを伴ってそこに在るだけであった。

彼は彼女を見た。何を言っているのかさえわからず、戸惑う彼女を眺める。
ヒカルは幼すぎたから。
彼女は、それを説明できないくらい、幼いから。
まだ・・・時期が訪れていないのだと思わざるを得なかった。
誰にも等しく愛を注ぐことに配慮している彼女が、何かに・・・ルイに対して彼女の何かを動かされていることを、彼女は的確に表現することができないのだ。

「オレがそれを教えてやるとでも？」
彼は小さな声でそう言った。
ルイはそのまま彼女から離れて・・・ヒカルから少しだけ遠ざかった。

今日、向き合うのはこれで最後だと決める。

そうしなければ、ヒカルをそのまま・・・・本邸に戻さずに情動に任せて朝まで拘束することに

なるからだ。
いずれ、彼女は彼の婚約者の候補に昇るだろう。
列挙された候補に挙がる名前たちの中で、高い順位でその名を見ることになるだろう。
その時。彼女は同じ事を言うだろうか。
苦しい、と。
ルイが誰かと共に居る姿を見て、苦しくなり、それが彼女の言うところの対象外と知って安堵し、そしてまた、彼が微笑む相手に苦しむ。
それが何なのか・・・何で在るのか、ヒカルは言い表すことが出来ないのだ。
彼女の父のような存在であるシャルル・ドゥ・アルディに対して彼がいつも感じていることと同質のものであるのに、それは水月のように・・・・同じ形をしながら、それでも違うのだ。
「教えてくれる？」
「断る」
彼が即座にそう言ったので、ヒカルは哀しそうな顔をした。
「自分でこたえを出せ。・・・それが正解かどうかは教えてやる」
ルイが溜息混じりにそう言った。彼女は譲らないだろう。
そしてそのことについて、考え続け、ルイに尋ねたが教えてもらえなかったと言ってシャルルに零すのだろう。彼女は同時にいくつものことを考えることができない。そして一度湧き上がった疑問をそのまま忘れ去ることもできない。
・・・シャルルが教えることはなさそうだ。それが、どういうことなのか。そしてシャルルも同じ様に感じるのだ。苦しい、と。ヒカルが誰かのことを考えることに苦悶を感じ、それを罪深く思うのだろう。贖罪についていつも考え続けているように。贖罪の娘の持つ罪にもにた後ろめたい気持ちについて同調し、そしてそれを感じないルイは欠落者であると言い募るのかもしれない。
『おまえは人でなくなっていく』と言うが、獣王のように自分の願いだけを叶えるために当主に居続けるシャルルの方が余程・・・有らざる行為と我欲で濡れていると思わざるを得ない。

大きく息を吸って、彼女に背を向ける。
「これで終わりだ。オレは戻る。・・・そのまま遊泳していたければ、勝手にするがいい」
ルイはそれだけ言い捨てて、足早に立ち去ろうとした。
「ルイ！・・・・私、一生懸命考えるから・・・」
「ヒカル。・・・オレを水月と呼んだこと、忘れるなよ」
彼はそれだけ言うとヒカルの言葉に返答せずにそのままその場を出て行ってしまった。

考えてわかることではない。きっと、今宵の出来事は・・・彼女の中で、「答えを出せなかった想い出」として残るだけであった。しかしルイ・ドゥ・アルディは忘却を知らない。だから、忘れることが出来ない。
彼女が、ルイ・ドゥ・アルディに対して恪気を持ったことを。彼は溜息を漏らした。あのまま、

あの場に残して置いたが、そうしなければ・・・ルイはこれからの予定をすべて変更しなければならない事態に陥る。
それはまだ早い。
彼は・・・この家に君臨するために生まれて来た。
まだやらなければならないことがあり、他者のために何かを犠牲にするつもりはなかった。その予定もなかった。
ヒカル・クロスは切り札だ。
だから切り捨てられないが、彼女の価値を最大限に利用する時期は間もなく訪れる。
シャルルを陥れるために必要な駒であり・・・彼女をアルディ家の外に出すことはしない。
彼女の持つ大きな秘密の解明が完全ではないから。

彼は足早にそこから抜け出した。
水月とは、双方が接近して見つめ合う状態のことを言う。
鏡に相対するように。相手が動けば自分も動く。
相手が静観していれば自分も静かに見詰め続ける。

・・・・今回、会ってはいけないとされている人物と接触したことには理由があった。
彼の遺伝情報を分析するためだ。
どう見ても、彼女が遺伝学上の母であるとは思えなかった。
彼の推測する人物からの交配であったとすると、ルイの持つ権利義務関係は大きく覆ることになる。それが彼の利害得失に影響するのであれば、早急に手を打たなければならない。
彼がまだその年齢に達していないことを理由にして自分の遺伝情報を開示してもらえない以上は、まずは母方からの情報を得なければならない。
その開示を求める代わりに、代償として微笑みのひとつやふたつ浮かべたところで彼はまったく平然としていられた。
それをヒカル・クロスが目撃したとしても・・・それで何かが変化するわけではない。

だがしかし、ヒカルの中で何かが変わった。
彼に対して、もどかしい独占欲を感じ、それを言い表すことが出来ないで苦しんでいる。
もっと、苦しめば良いのに、と思った。
ルイ・ドゥ・アルディは渡り廊下を歩きながら、シャワー室に向かう途中で、濡れた髪の下で吐息を漏らす。

彼のために水に飛び込むヒカル。
彼の背が伸びたことを喜ぶヒカル。
彼に水月は月と違うと言い切るヒカル。

何もかもが腹立たしいが、それでも・・・彼女はシャルルの言い付けを破ってここに来た。
それが何故なのか、理由は教えてやらない。それが淡い儚い水月のような感情でやがて消えてしまったとしても。
ルイ・ドゥ・アルディにこたえを持ってきた時。
それが、その時だ。
ずっと待っていたその時が訪れる。

金の髪の下で・・・彼は薄く笑った。
目を細めて、彼は微笑む。
演技の笑みではなく、誰もが見ていないことを確認した上で・・・・彼はそっと綻んだ。
今は・・・今は待つ。気が遠くなるほど長い年月だ。これからもまだ待つことになるだろう。
けれどもそれは決して・・・・徒労に終わらない。終わらせない。
彼はすぐに表情を消して移動を始める。
肩や体を冷やしてはいけないからだ。バスローブをヒカルにやってしまったので、彼は濡れて温度を急速に失っていく肌をそのままに歩きだした。

完全に調整された体が・・・ヒカル・クロスに対してだけは、彼の命を無視する。

彼女の躯を引き寄せる。
彼女に彼のバスローブを貸与する。
彼女に・・・顔を近付け体を寄せようとする。
水に沈む彼女を抱き上げて胸に抱く。

これが何なのか、どういうことなのか、ルイ・ドゥ・アルディは知っていた。
でも、彼女には教えてやらない。

「・・・教えてやらないよ」
彼はそれだけ言うと、その場を立ち去った。
もう、その時には彼の表情はいつものルイ・ドゥ・アルディであった。

静かなアルディ邸の上空には、月が輝いていた。

（FIN）

炎熱　L-side　前編

■01

ルイ・ドゥ・アルディが外出先から戻ってきたとき、ヒカル・クロスが居室から出てこないという報告を受けた。

彼は上着を無造作に脱ぎ捨てると、大広間に備えられた長椅子の上に放り投げた。
すぐに彼女の居室に向かうことにするか、それを誰かに伝えることはしない。
彼が、誰かのために即座に行動することはあり得ないことだとされていたし、これからもこれまでも同じ評価を保つことに配慮していたからだ。

誰かに、何かに執着してはいけない。

そう言われて育った彼は、今でもその教えが浸透している。
しかし、すべてのものにそうであってはいけない、という教えではなかったと、最近になってようやく悟ったルイ・ドゥ・アルディは、彼の唯一の執着の相手にだけは・・・彼の意識を注ぐことを赦していた。

上着を脱いだときに俯いたので、その時に、彼の見事な金髪の下の、青灰色の瞳が何度か瞬いた。
しかし彼は表情を変えることなく、ただ苛立たしそうに唇を噛んだ。

確かに、彼女は今朝は起き出さなかった。
彼の居室にはヒカル・クロスの用意した薔薇がなかった。
ヒカルの用意する最高の状態の薔薇に、そこで、彼はいつもの様子と違うことに気が付いていたのに、そのまま彼女を置いて邸を出発していた。

ヒカルは、彼のために、毎朝、最高の状態の薔薇を捧げるようになっていた。
茶色の瞳の茶色の髪の娘は、彼と長い時間を一緒に過ごしてきた。

何もかもを知っている。
彼女の苦悩も。
彼女の涙も。
そしてヒカルは、彼の囁く言葉を歌にして、いつも眠りに落ちることを無上の喜びと感じているのだと知っている。
それは彼も同じだったから。
ひとりで居る時しか眠れなかったのに。
今は、彼女が傍にいない夜は眠れない。

しかし、彼はそれを伝えない。これからも同じだろう。
ルイはそういう生き方しか知らない。

瀕死の重傷を負ったけれども、そこで彼は生まれ変わったように人格を入れ替えることは・・・遂に、できなかった。
いや、そうしなかった。
彼ではない人物になって、彼女の愛を得ようとしたが、それはルイ・ドゥ・アルディではない、と、ヒカルによって否定され、そして彼は彼女の導きによって、彼女と一緒に、戻れない路から戻ってきたから。
それが貴方なのだ、と彼女は言ったから。

だから、今、ここで彼は生きている。
彼女とともに。

しかし、彼が待ち望んだ、彼だけのファム・ファタルは、いつもルイ・ドゥ・アルディの思い通りにならない。
今朝もそうだった。
朝の弱いルイ・ドゥ・アルディを起こす役割の彼女が起きてこなかった。
そして、ひとりでは眠れないと囁く彼と同じ屋根の下で過ごしていながら、彼女は自分の居室で休むと言った。
彼は美しい眉を顰めた。
その時のことを思い出したからだ。
ヒカルは彼の思い通りにならない。
彼が幾手も先を考えて行動するというのに、彼女は結果の通りの路の上では走らない。
ルイ・ドゥ・アルディの胸の中で眠ることを拒絶した。

気まぐれを満たすだけであれば、ここで彼女を解放することも考慮しようとすることもできた。
しかし、誇り高い彼が、自分自身を律せなくなるのは、ヒカル・クロスだけだった。
この理由を彼は生涯かけて解明しようとしていたが、糸口さえ掴めていない。長い年月が経過していると言うのに。

彼が軽くノックをして扉を開けても、ヒカルはそれに応じて更に奥にある寝室の扉を開く気配を伝えてこなかったので、ルイ・ドゥ・アルディは入るぞ、と短く低く言って彼女の居室に入室した。
■02
彼女の寝室には鍵はかけられていなかった。
しかし、そんなものがあっても、ルイには通用しない。
彼が望めば、彼女が入ってきてはいけないという場所にさえ・・・行き着くことができた。

だが、そうしないのは、彼がルイ・ドゥ・アルディだからである。
誇り高いアルディ家から望まれた種である彼は、幼い時からすべてを教えられて育ってきた。
アルディ家の家訓、これまでのしきたり、理想とされる所作、そして気高い魂が何より勝るということ。

だから、ルイはヒカルを尊重して彼女との距離を保つ。

決して彼からは近寄らない。
彼はそこに入り込むことを無粋だとして、滅多なことがなければ足を踏み入れることはなかった。

それ以上に、ルイの誇り彼女の元に通うのではなく、彼女が彼に通わなければ・・・彼はヒカルを赦さなかった。

彼女は贖罪の娘だ。
彼に購うために生まれて来た。

贖罪されるために。
贖罪するために。

ヒカルの生は意味は、多岐にわたる。
彼女は、その意味を探し続けて今日に至る。

同じように、創られた命であるのに。

同じように、誰かの意図でやって来た命であるのに。

それなのに、なぜ、ルイとヒカルの生の意味はこれほどかけ離れてしまったのだろう。
これ以上、彼女の傍で生活していれば、おそらく、やがて・・・それほど遠くない未来に、彼女を壊してしまうかもしれないという予想は立てていた。

部屋に入ると、僅かに空気が流れる気配がした。
彼女の香りが残っている。
と、いうことは、寝室で臥せったままでいるわけではなかった。
彼女が確実に、そこに居たという痕跡を感じ、ルイは厳しい表情を僅かに緩めた。

ルイにとって、ヒカルはまったく理解できない生命体だった。
彼女の心情が手に取るようにわかるときもあれば、まったく理解出来ない時もあった。
完全に理解し難いのであれば、そちらの方が、まだ御しやすかった。
わかり合えないと最初から承知していれば、それ以上先の未来は存在しないからだ。
だがしかし、ルイは・・・唯一。ヒカルだけに許可してしまった。
彼の傍に居ることを、ヒカルに誓わせた。
彼は傍に居ることを、ヒカルに誓った。
彼の名前にかけて。

決して彼は約束を違えたり忘れたりしない。

■03

「ヒカル」
声を上げるつもりはなかった。ルイは低い声で、彼女の名前を呼ぶ。
永遠の晄という名前の贖罪の娘のことを、もう、幾度、呼んだことだろう。
室内はとても静かであるが、人の気配を感じたから。

この部屋に、誰の先触れもなく入ることのできる人間は数限られている。
この部屋の住人は、誰が入ってきたのかを知っているから。
だから自分の名を名乗るつもりはなかった。

しかし返事がないので、彼は少し苛立たしそうに、見事な金の髪を掻き上げた。
彼の青灰色の瞳も、顔立ちも、フランスの華と呼ばれている彼の養父にとても良く似ていた。
険を含んだ視線で周囲を見回すが、彼女の足音がしない。
つまり、彼女は部屋の奥に居て、ルイの入室の気配に気が付いているのに、やって来ようとしないのだ。
ルイは溜め息をついた。なぜ、ルイを迎えないのか。
彼女が、まだ、あの人に心を残しているとしたら。
それなら、それでも良かった。
ヒカルを手放すつもりはない。彼のものだ。彼だけのヒカルだ。
彼女のもたらす様々な福音を理由にしなくても良かった。
それらがなくても、きっと、ルイは彼女を捜し出しただろう。
永遠の晄の名前を持つ人を探し出すために、この家を捨てることさえ厭わないと思ったのかもしれない。
しかし、あり得ないことを考えることはしなかった。彼はルイ・ドゥ・アルディであることを変更することはできないからだ。
少なくとも、もう、二度と惑うことはしない。
彼女が光となって導くのではない。
彼は星辰の子だから。
光さえ引き寄せる。
彼女を引き寄せ続けることで、ヒカルをルイの永遠の人と定めたからだ。

彼女を傍に置くことで、彼はどんどん・・・・自分でなくなっていく。
かつて、人でなくなってく、と養父に言わしめたルイは、星辰の子と呼ばれて、今ではアルディ家で絶大な発言権を保持している。
フランスの華の再来と言われており、彼ができなかったことを、ルイなら為し遂げるかもしれないという大きな期待が彼を包んでいた。
そして、彼は、それが目的で生まれて来たのだから。

人でなくなっても良い。
それでヒカルが彼の傍に居るのであれば、獣にでも星辰そのものになることさえ受け入れようと考えていた。
ルイは、ルイ・ドゥ・アルディであり、誰でもないし誰にもなれないと承知していながら。
彼女の望む不可能を、彼はすべて叶える用意があった。
しかしヒカルは何も望まない。
今の暮らしがそのまま続けば良いと言うだけだった。

ルイ・ドゥ・アルディは吐息をついた。
今日の帰邸が遅くなったのは、ヒカル・クロスとの結婚を、まだ少し先に延ばすと宣言してきたからだ。
親族会は難色を示してきた。
先方のクロス・グループが、ヒカルの処遇を巡って異議申し立てをしていることが発端であったが、彼女はただ静かに暮らしたいという曖昧な希望しか言わなかった。

部屋は薄暗かった。
バルコニーの向こう側は、暗墨色が広がっている。
もう、夜も更けている時間ではあるが、ルイは帰邸が遅くなることを予め告げてあった。

それなのに、ヒカルはルイを出迎えない。
満面の喜色を浮かべて、彼に微笑む姿を見せない。
誰もが彼を欲する。誰もが彼の眠る姿に寄り添いたいと言う。けれども。ルイ・ドゥ・アルディは冷笑するだけで、そう言って近付く者たちを排除する。
彼には必要ではないからだ。
それなのに・・・・ヒカルはルイが欲しいと言わない。希って縋ってみせることもしない強情な娘だけが、ルイを凍て付いた精神を安らがせる。
彼女は凍ったルイの心に直接触れる。その光でもって包む。

何もかもが思い通りに行かないのに、それでも、彼女の微笑みを見ると、彼は苦笑いを浮かべてしまう。

「ヒカル」
ルイはもう一度、彼女の名前を呼んだ。寝室に許可なく足を踏み入れるのは、アルディ家の者としてはまったく無粋とされていることであったが、今回はやむを得ないと思った。
・・・・咎められても反論できるように、十分な時間を見はからって、ルイはゆっくりと彼女の寝室に足を運ぶ。■04

何もかもが、望まれた縁組みではなかった。
ルイの家は古くからの柵があり、東洋人の血筋を入れることに難色を示す者は皆無であったと言うとそれは虚偽になる。
ヒカル・クロスは幼年齢から過ごした間柄であり、彼の扱う分野の後援となるべき家柄の娘であった。
古の血脈を守る以上に、彼女がもたらすものは大きかった。

しかも、ルイの養父とヒカルの実父は幼少期からの知り合いであった。
・・・彼らは同じ女性を愛し、フランスの華と呼ばれるアルディ家の当主は、その人物・・・つまり、ヒカルの母親を焦がれて、長い間、愛の彷徨に漂っていたという実情があった。

彼女を引き取るということに大きな意味があるからこそ、アルディ家はシャルルの無謀な申し出を引き受けた。

いつか、あの、星辰の子が世界を支配するときが来るだろう、という願いがあった。この国の頂点に立つことを願った彼の親族達は、いつの間にか、ルイなら世界を支配できると渇望するようになった。
それが煩わしいわけではない。
彼はそのために生まれて来たから。
だから、この状況を最大限に活用することが、禁忌に踏み入ることだとは考えていない。

簡単に手に入れられる状況であった。けれども、実際はそうではなかった。
ヒカルを娶るには、様々な困難があり、フランスの華は、ヒカルの母を自分の妻として娶った時にはどういう課題が残されているのか想定していたのだろうと知る度に。
彼女の持つ遺伝子を、この家に入れることは、これまでのすべてを覆すことになる程に大きな波と熱をもたらすのだと実感する。

しがみつくつもりはない。
彼女のこたえは求めていない。
・・・ルイの炎熱だけを受け止めることしか赦さない。
他の誰かを愛し、他の誰かの熱を受け止め、他の誰かのものなるヒカルであるならば、彼は最初から欲しなかった。

「・・・・ルイ」
嫋々たる声は、寝室の奥から聞こえて来た。

・・・ルイは足を速める。

彼はそうすると意図していないのに。

彼女の声は独特だ。
非常に・・・彼女の母に似ている。
顔立ちも良く似ていたが、父親の体格を受け継いだ彼女は、あの人そのものではなかった。
彼女の母の面影を色濃く残している程度の体軀であった。
しかし、彼女の顔立ちや声の調子はとても・・・あの人に良く似ていた。
ファム・ファタルと言わしめた、あの・・・小柄な東洋から来た眩しい人と良く似ていた。

苛立たしい。彼の予定も標準も無視して、彼女は彼を呼ぶ。
そして従わざるを得ないような強い引力で、彼を寄せる。

・・・・彼は星辰の子であるのに。

だから、優しくできない。
だから、優しくしない。

もっと、と焦がれるから。
できることなら、彼女を離さずに一日のうちのほとんどすべてを、彼女を侍らせて自分の理解できない自分について、分析したいと思う程に。

・・・はじめて逢った時から。
あの時の衝撃を忘れることはできない。

そうだ。
彼は・・・・認めることはしない。
彼女に夢中だと。心身のすべてで、彼女を愛していると認めることはしない。
認識しているかどうかは問題ではない。

すでに、ルイはその声を求めていると。彼女の声を聞くと思い知らされるから。
■05

どれほどささやかな声であったとしても、彼は彼女の声を聞き漏らさない。
それを知っているから密やかな声音しか出さないのか、それとも、彼を試しているのか、それすら責め立てる気にはならない。

少なくとも、今は。

しかし、彼はルイ・ドゥ・アルディであり、薔薇の一族の頂点に立つべくして望まれた命だった。
その彼が、たったひとりの・・・茶色の髪の茶色の瞳の娘に、これほどまでに翻弄されることを、ルイ自身が赦さなかった。
なぜ、彼女は彼を揺さぶるのだろう。

そして。

なぜ、彼女は、いつも・・・
なぜ、人と一緒には眠れないルイの隣で安らかに眠ることができるのだろう。
なぜ、彼の気が付かないうちに起き出して、最高の状態の薔薇を彼のために捧げる行為を繰り返すのだろう。

果てることのない尽きることない疑義を破砕することができない。
おそらく、ヒカルと共に居る限り、生涯考え続けるのだろう。

「ヒカル。返事をしろ」
彼女は、彼の名前を一度だけか細い声で呼んだだけで姿を見せようとしない。
決して動じていないと宣言するかのように、ルイは高慢に彼女に命じた。
彼女に支配されるつもりはない。彼はルイ・ドゥ・アルディだ。
それなのに・・・なぜ、すぐに温もりが欲しくなるのだろう。

それらのどれにも、ヒカルはルイに答えていない。

彼は薄い唇を噛んだ。
整った顔立ちは、誰もが魅入る程に美しく、それでいて孤独に満ちてなお冷然としていた。
彼は少しばかり疲れていた。
彼女との未来設計に、修正を加えなければならなかったことに起因するものだった。
加えて、ヒカルとルイの繋がりは愛ではなく、利益によるものであるから、その先の手を考えておけと言われて、彼は冷笑したのだ。
彼はいつも人の数手先を行く。何十歩先の次を考えている。
それなのに・・・・ヒカル・クロスとの将来には、先々を想定しているのかと詰問されて、激昂する感情を露わにしない努力に注力したことが、彼の機嫌を激しく損ねていた。

彼と彼女の関係が終わるとは考えていない。
死してなお、これは消えない刻印となって残り続ける。

誰が認めなくても。
誰が否定しても。

ルイ・ドゥ・アルディの生涯をかけて遂行しようと決めたことは・・・・彼が決めたことは覆されることはない。

人の気配は察知している。
彼の闇目が慣れるまでの間に、すでにその気配はヒカルのものであることは認識していた。
しかし、明るいところから入り込んだルイが、手探りで彼女を求めることは、決してしないと決めていた。
手繰り寄せられるべきはヒカルの方である。
今すぐ、彼に駆け寄って、彼の名前を何度も繰り返し呼び、彼の愛を乞わなければ・・・この激憤は鎮まりそうもなかった。

「ルイ」
次に、はっきりと声が聞こえて・・・・
寝室の中央から衣擦れの音が彼に耳に渡る。
独り眠るには広すぎる寝台の上で、彼女は横たわっていた。
身を起こして・・・薄くて軽い毛布を身に纏い、暗闇の中でルイの方をじっと見つめていた。

茶色の髪に茶色の瞳は、闇に解けるほどの色濃さがあったが、彼女の肌の白さは、闇の中でぼんやりと仄明るく燐光を放っていた。
それはいつも間近で見る白さより妖艶な光をもって、彼を誘引していた。
「起きているなら面倒をかけるな」
彼は抑揚なく冷たく言った。
彼女は意識があり、彼の声を認識できる程度であることは確認できたから。
■06

そこで考えるよりもまず先に、彼女の声源に向かえば。

・・・・その瞬間に、彼は彼でなくなると思った。

彼はルイ・ドゥ・アルディであり、それ以外に決してなり得ない。

だから彼女の姿を求めない。
彼女の姿を探さない。

深い闇に溶けていく。
光から遠ざかる。
それでいてなお、遠い光を求める。
遠ざかる光を求める。

彼は、近付く光を求めることはしない。
光から寄ってくるのを待つ。それは慣れていた。
それは、星辰の子と呼ばれるルイに傍寄る性質を持つから。
遠ざかっていく光ほど、彼は手に入らないと知る。

もし彼女がそれを計算しているのだとしたら。
そうだとしたら、ヒカルという人物は、ルイの脅威となる存在でしかない。

・・・しばらく黙っていたが、このまま立ち尽くして時間を浪費することによって失うものを考えると、ルイから動く方が損失は少なかった。

何を損失するのかは、ルイにはすでにわかっていた。
彼女の愛は決して減ることはない。
けれども、彼女の哀しみは減ることがある。

彼女の香りのする居室で、彼は横を向いた。
彼女の部屋に滅多に足を踏み入れることのないルイは、慣れない空気に眉を顰める。
ヒカルの髪の香りも、肌の湿りも、すべて知っているというのに。
それでも、彼女の居室に、ルイの居場所はない。
彼は寝室に足を運ぶ。そして同時に息苦しくなる。
・・・彼女が失調していることは明らかだった。湿った空気に、静かな掠れたヒカルの声、ルイの帰邸にも応じない理由・・・どれをとっても、彼女が発熱していることは明らかだった。
それなのに、彼女はひとり部屋に引きこもった。
ルイの部屋ではなく、ヒカルの自室に。

それが、気に入らない。
ルイの平常を妨げる。ルイの静寂を妨げる。

「ヒカル」
闇目に慣れてきたルイは、僅かに頬を引き締めた。
どうして彼女はいつも彼の思い通りにならないのだろうか。
彼は最後の言葉をかけた。
彼女が応じないのであれば・・・彼はそのまま部屋を出て行くつもりだった。

ヒカルの存在は他に代替がない。
けれども、それを理由に彼女がルイの何かを・・試すのであれば、その時は終焉という名前の新しい事態が訪れるだけだった。
しかし、ルイは、その未来は予想していない。
ヒカル・クロスがここからいなくなることについて、ルイは想定していなかった。
誰が誰を必要であるか、彼はよく承知していたからである。

衣擦れの音がして、掠れた声が聞こえた。長らく水分を摂取していない声の嗄れであった。
「こちらに来てはいけない」
「理由を言わなければ命令でしかない。・・・オレが誰かの命令に従うと思っているのか？」
「私・・・・」
ヒカルの言葉は唐突に始まったのに、ルイはそれに驚愕することもなく、会話を続ける。

声が聞こえるだけで安堵する。
ルイ・ドゥ・アルディが。
・・・彼女の声を求めている。それは何故なのか。
理由を知っているが、それを彼女に教えてやるつもりはない。
■07

彼は部屋の半ばまで進んだ。
彼女の居室には、禁域が設定されているかのようだった。
彼が進んではいけない場所がある。

それが、ヒカルの居室だった。
幾度かここには入ったことはあった。
けれども、彼女の許可を得て入ったことは数度しかない。

・・・ヒカルはしばしば、彼の別棟に入ったが、彼女は自分の部屋には滅多なことがない限り、招いたことはなかった。
もちろん、夜の逢瀬の閨としてその場を使うことはなかった。

彼は冷笑した。
「オレに禁じる命令をすることができると思い上がる人の顔を眺めてから・・・この室を出ることにしよう」
そして彼は端整な顔を背けた。
彼は腕を伸ばした。
その先に、白い肌を湿らせた、永遠の晄という名前の人が居ることを確信して。

もう、ずっと、長い間待った。

彼女が、彼に占有されることを待った。
身も、心も。
何もかもを支配することによって、勝利できると思った。

しかし、何に勝つのだろう。

何に、勝利するのだろう。

何を・・・支配できるのだろうか。

「ヒカル」
声を落として、最後の呼び掛けと決めて、彼女の名前を呼んだ。
暗闇で、腕を伸ばす。
それは彼の最後の賭だった。
いや、違う。

・・・いつも、ルイ・ドゥ・アルディは最後の駆け引きを行ってばかりいた。いつも、いつも。
この声が届かなかったら、彼は生きている意味を変えよう、と。
この指の先に、ヒカルの温度が感じられなかったら、彼女を永遠の光と呼ぶのはやめよう、と。
いつもそんな、些末な駆け引きに興じているルイ・ドゥ・アルディについて、誰も知らない。

いや、知られてはいけない。

なぜなら、彼は、ルイ・ドゥ・アルディであり、星辰の子であり・・・そしてまぎれもなく、誰かに依存して生きていくことを赦されていない一族の末裔であることに、間違いはなかったから。

だからヒカルは従わねばならない。ルイ・ドゥ・アルディに指図できる者は皆無であるはずだった。

・・・はずだ、というまったく主観的な物言いそのものが、彼のすべてを否定していると感じながらも、ヒカルに関してだけは、彼は、そう言わなければ説明がつかなかった。

「ルイ・ドゥ・アルディ。私は・・・具合が悪いから。ルイに傍に寄って欲しくないの」
闇の中で、彼女はそう言った。彼が伸ばした腕の温度を知らないままに。
どうして、ヒカルはこうして、ルイの行動や意図に反する行為ばかりを繰り返すのだろう。
■08

「拗ねたこどものような発言はするな」
ルイは短い言葉で低く、そう言った。威圧しても従わないだろう。
賺しても思い通りにはならないだろう。
なぜ、そんな風に・・・心は渡さないと意固地になって彼を拒絶するのか。
まったく理解できない存在であるのに。
彼の傍で眠るのは、ヒカル・クロスだけであると定めてしまったから。

彼は、一度決めたことは覆さない。

決して。

だから、彼女をファム・ファタルと呼ぶのは、彼だけであると決めたからには、彼女は誰の運命の人になっても赦しはしない。
誰が許しても、彼だけは認めないと誓ったから。

「来るなと言っているのに、オレが訪ねることを予想して人払いをしているくらいなら・・・最初から、誰かを呼べ。この邸には、常勤の医療資格取得者がいることは知っているはずだ。たとえあてにできなくても、医務室に待機している者であれば、ひととおりのメディカル・チェックはできたはずだが」
辛辣な表現であったが、それは的確だった。彼は憤っていた。
明らかに、ヒカルは失調している。
けれども、それを誰にも明かさずにひとり部屋に引き籠もっている状態は、明らかに思慮を欠いた行動としか判断できなかった。
この家に従事する者は多い。
その誰にも何も告げずに、ただひとり居室に居続けて、普段通りの行動をすべて拒否すれば、誰もが不審に思うだろう。
それくらい、考えられないのだろうか。

幼い頃からアルディ家で過ごして来た彼女が、これほどまでに周囲を配慮しない行動を取るほどに取り乱している理由を彼女は明かそうとしない。
彼には想像がついていたが。

腕を戻す。彼の最後の通告に、彼女は従わなかったから。虚空を舞った彼の鍛え上げられた鋼のような締まった腕は、静かに闇間に沈んでいく。

数歩先で、彼女は居るのに。
それなのに、彼女はルイを拒む。
彼なしでは居られないはずなのに。それなのに・・彼を拒絶するヒカルを征服したいと思う気持ちが、彼を動かす。何かを希望することなど、ほとんどないルイが、彼女だけは手に入れたいと思う。
このことを理解していないヒカル・クロスの健やかなる魂が彼をまた・・・ひとつ下の暗闇を伴う階段に誘う。登り詰めたいと思う彼の階段に。彼女は小石を置くのだ。

彼女を支配するために必要な手続きがあるのであれば、それはすぐさま遂行しようと考えていた。

征服したいのか。
支配したいのか。

それとも・・・心を通わせたいのか。
それとも。
心を狂わせたいのだろうか。
彼の心なのか。ヒカルの心なのか。
それすら、彼女は曖昧にして、彼に抗拒の扉を閉ざしたままで・・・・それでいてなお、彼に言葉をかける。
これほどまでに残酷な仕打ちを、彼女があえて考えて居るようであれば、彼は彼の人生を再考しなければいけなかった。

ルイ・ドゥ・アルディには予定の変更はあり得ない。

けれども。

彼女に関することだけは、自分の決定で進まない。

それが苛立つし、時にそれが甘美な痺れに変わることがある。
■09

ヒカル・クロスとは、まったくの他人でありながら、一緒に生きてきた時間が長い。誰よりも。
同じ空間で、同じ敷地で、同じ空の下で彼と彼女は成長した。
単に居所を定めた筐でしかないと彼は冷笑するが、それでも、ここには永遠の晄という名前の少女が居る。
大人になって・・・彼らは指を絡めることを覚えた。
しかしこういう駆け引きは好まない。
少なくとも、彼女との間では必要がないからだ。
愛を確認して愛を試してそれでその先は愛が残るということはないと、彼は知っているから。
もう、誰とも恋や愛を囁くことはないと決めていた。

ヒカル・クロス以外とは。

それは彼女が良く知っていることであると、理解していたというのに。

「言いたいことがあるなら、さっさと言え。
言いたくないのなら、貴女の希望のとおり、オレは消えることにする。
そして、この部屋には二度と入らない」
彼は低い声でそう言った。彼の決定は絶対だ。そして、それを遂行するために、ルイは犠牲も努力も厭わないことを、彼女は良く知っている。
最後通牒だと言ったのに。それでも、彼女からはこたえがない。ルイは、溜息をついた。

すぐ近くで、衣擦れの音がする。
彼女がルイの言葉で身体を起こした音だった。
寝台の上で困った顔をしながらもルイの金髪の焔を求めて、ヒカルが視線を彷徨わせる音さえ、聞こえてくるようだった。

彼女は言いたくないのではない。言えないのだ。
うまく言葉にすることができずに、戸惑っている。

ルイは星辰の子と呼ばれており、その才は幼い内から顕著であった。
日本語にも精通しており、この邸内では日本語とフランス語が混在している。

それは、シャルル・ドゥ・アルディが望んだ空間であった。
いつか、彼のファム・ファタルがこの屋敷で過ごすことがあるのかもしれないと、儚い夢を見続けて、それは夢のままに終わってしまっていた。
彼は決して夢を見ないのに。
ルイも同じであった。夢を見ないのに、この部屋を訪れると、彼は夢を見ているかのような錯覚を感じる。
甘い薫りに誘われて、ヒカルという存在が、夢なのかどうなのか判別しがたくなる。彼はルイ・ドゥ・アルディであるのに。
星辰の子であるのに。
自分は、光そのものになれずに、光に誘われて、吸い寄せられる羽虫のようだと思った。

「ヒカル」
彼はこれが最後だと言ったのに。また、最後の言葉をかけた。

「ルイ」
彼女の声が聞こえた。それから次に、小さな声がした。
彼女は幼い時から、何かをねだったりしない。
だから他者に依頼する術を知らない。
それなのに、ルイは躊躇いがちであるけれども、彼女は願いを口にした。

「今日、少し熱があって・・・・だからルイと離れていた方が良いと思ったの」

彼女は知らない。たったこれだけの状況報告をさせるのに、彼がどれだけ忍耐強く待ったのかということを。
焦りも呆れも怒りも感じない。
ただ、その先にある、彼が推測している仮説を、彼女に言わせたかっただけだった。
「それなら医師を呼べ。解熱剤を打てば良いだけの話だ」
彼らの体調は完全に管理されている。
それは、彼女の稀なる体質の変化を見届ける意味もあったが、彼と彼女は同じ場所から生まれて来た。
つまり、多くの命を搾取して生まれた、科学の粋が類聚した結実だから。
だから微熱でもその状態が細かく分析される。
普段の生活ではそれほど意識していないのだろうが、彼女をアルディ家に長く留めて置いた理由のひとつがそこにあった。
彼女は幼いときからそういった生活に馴染んでいたので、それを苦痛と思わないはずだった。
それなのに。
初めての拒否であった。何事にも従順である傾向が強い彼女の拒む理由はひとつしかない。
「オレは貴女の体調管理の状況には興味がないが」
彼はそう言って。暗闇であることが幸いした。そうでなければ、彼の表情が、はっきりとわかってしまうから。苦しそうな顔を見られるくらいなら命を絶つ。
■10

彼は落胆の吐息をついた。元来、彼女が強情な気質であることは承知していたことだったが、それを肯定しているつもりはなかった。
ルイ・ドゥ・アルディに従順であることを望んではいなかったが、このように単なる拗りに近い行動を取られると、彼は途端に凋落する葉のように、何かが失われていくのを感じる。
自分とヒカルは違うのだと思い知らされる。
それを理解したふりをしようとしても、ルイ・ドゥ・アルディにはできない。なぜなら、彼は星辰の子だからだ。
やがて彼はゆっくりと身体を移動させると、部屋の中央に置かれた、彼女の寝台に近付いた。
膝があたるほどに近くなった直前で、彼は歩みを止めた。

踵が鳴る。
そして、彼女に近付く。
見えてなくてもわかる。
彼女の熱が、彼女の香りが。彼女の声が・・・彼女のすべてが、彼を呼ぶからだ。
辿り着いたことを察知すると、彼はやがてゆっくりと、その場に腰を落とした。

計算は狂っていない。
ぎしりとスプリングが軋む音がして、彼の腰際の寝具が少し沈む。
ルイ・ドゥ・アルディは締まった腰を浅くしたままで、彼女から距離を置いて座った。

・・・・ヒカルが寝台の上で、考えに耽りながら、葛藤を続けているうちに時間を経過してしまったのだということは既にわかっていたことだった。

彼は細く長い指をシーツの上に置いた。軽い湿り気が伝わってくる。
「熱があるのなら、そう言え。それから、適切な処置を受けろ」
そして溜息をつく。金の髪を掻き上げたが、下を向いているので、すぐにそれはこぼれ落ちて彼の額や頬に降り注がれた。
「ルイ」
ルイではない腕が、彼の肩に触れた。

この香りが彼を狂わせていく。
この温もりが彼を貶めていく。

ヒカルの居室は、すべて彼女で構成されている。
まるでヒカルの胎に居るようだ。彼女の好みで構成されたそれらすべてが、彼が与えてやったものであるというわけではない。
すべて、ヒカルの思考趣味が繁栄されている場所にやって来ると、彼女が決して没個性的であるわけではなく、単に・・・ルイの前では本当のことを言わないように画策しているだけなのだと知る。
それが腹立たしい。
装っただけの、人形のようなヒカルを傍に置いておいて、満たされる彼ではないということは、彼女はとうの昔に悟っていたことではなかったのだろうか。
だから、滅多にここに足を踏み入れることはないのに、それでも、招くかのようにヒカルはこの場所に籠もることに消沈しているのだと、彼女は確認したいのだろうか。

しかし、彼女の温度を感じて、ルイが溜息を漏らす。彼女は起き上がれないほどに失調しているわけではない。それを見定める。
それだけで良かった。

「心配かけてごめんなさい」
暗闇の中で、彼女が声をかけた。少しくぐもった声だった。重篤な状態ではない。会話ができ、身体を動かすことが出来るのだから。
「・・・オレは言ったことは覆さない。こういう道理のない方法で、オレを縛るな」
彼は闇に眼を見据えたまま、そう言った。彼女の方には振り向いたり、手を伸ばしたりすることはしなかった。彼女の方から、彼に傍寄らなければならない。
暗闇でなかったのなら。
薄い唇を横に引いて、苦しそうに眉を顰めているルイ・ドゥ・アルディの姿が見えたかもしれない。
彼は彼女に顔を背けており、ルイの表情は分からない。
けれども、彼女の視線は彼に注がれているのがわかった。

それだけで。
ただ、それだけで、彼の受けた、彼女の不遜な態度は不問にしてやろうと思うくらいに。
溜息に混じって呼吸しないと息継ぎができないくらいに。
ヒカルが少し躊躇いながら、もう一度、ごめんなさい、と謝った。

「謝罪するくらいなら、最初から処置を受けておけば良い。次からはそうしてくれ。時間の無駄だ」

彼は短くそう言った。
彼女に縛られている。

自分でそう認めてしまったからだ。
だから抑揚なく呟きに近い声量で言った。

それでも、彼女にはわかっていただろう。
彼女は愚かではあるが、頭は悪くない。
何手も先を読んだ彼の言葉に対していつも戸惑いながらも言葉を返す。

炎熱　L-side　後編

■11

彼は溜息をついた。
もう、彼女に振り回されるのは免除されたい。
あと、どれだけ耐えれば、彼女は・・・ヒカルはルイを満たすのだろうか。
変調をきたしている彼女の気遣う言葉すら出てこない。
儀礼的な言葉をかけて、誰もが使用する呼びかけを使えば、会話は成立する。
しかし、彼女は彼を拒んだ。
それが彼を苛ませることを知っていながら、彼女はそれでも・・・何かに深く憂えている。

ルイを最優先としないことに失望しているわけではない。
そうまでしてなお、彼に何も言わない彼女に失望しているのだ。

ああ、結果は同じだったな。

彼は嗤った。

「・・・ヒカル、水分を摂れ。それから、着替えろ。侍医は呼んでやる」
彼も医師資格を持っていたが、それでもヒカルに対して医療行為は絶対に行わなかった。こんな簡単なこともできないのか、と彼女に言ったが、彼女は今ひとたび押し黙ったままだった。

ルイは、彼女の稀なる体質を知っていたから。
だから彼女を客観的に診断することができはしないと知っていたから。
通り一遍の処方箋にもならない処置方法を命じるだけしかしなかった。

健やかな生体を持つ彼女は、彼に幾度か細胞を提供し、彼はそれで再生医療治療を施されていた。
彼が蘇ったのは、彼女が居たからだ。
母床になった彼女の躰を抱く度に、彼は深い底に堕ちていくような気がしてならなかった。ひとつになり溶け合い混じり合うことに沈湎する。
それでも、満たされない。
彼女は彼を救うために、憐れみを愛だと錯覚しているのではなかろうかと感じることがあったからだ。
感じる。
彼はルイ・ドゥ・アルディなのに。
そんな根拠のない曖昧な確信は捨てろと言われて、その通りに生きてきた。

・・・彼女に確認することも、その仮説を確信に変えることもしなかった。

「貴女は我が家系の救いの種なのだから。
・・・まだこれからも研究に尽力してもらわなければならない」
彼がヒカル・クロスとの結婚を延期したことによって生じる様々な結論の変更について、彼がどれだけ憤っているのか、彼女には伝わらない。
だからこんな風に、ヒカルを補足するように付け足す言葉は言わない。

彼女が心配だからとか。
失いたくないからだとか。

そういった、彼の内情を示す言葉はかけてやらない。

「・・・薬を飲めば楽になると思ったけれども、懸念されていたことがあったから」
ヒカルがそう言ったので、ルイはくすりと声を漏らして嗤った。
少しだけ、体重を移動させる。彼女と彼の乗ったスプリングが軋んで、僅かな音を立てるが、静かな寝室ではそれは噪音のようにも聞こえた。
彼の挙動は大変静かで、あまり音がしない。
それでも、彼は敢えてそのようにして彼の存在や気配をヒカルに伝えているような意図さえ感じた。

彼は軽く言った。歌うように、囀るように、囁くように。それでいて快なる哉、とでも言うかのような満足が含まれていた。彼は満たされていないはずであったのに。・・・・彼女の言葉に満たされる。
暗闇であったし、彼女に背中を向けていたから、誰もその微笑みを知らない。
美術品のような整った顔に浮かぶ・・・・金甌無欠の微笑だった。
ゆっくりと、言う。彼女の考えていることは、手に取るようにわかる。
分からないときもあり、苛立たしい時もあるのに。

「・・・・妊娠しているとでも思った？」

ヒカルの指先から震動が伝わった。
彼にはとうに予想されていたことだった。
ルイは彼女と閨を共にしており、ふたりが同じ闇に寝るということがもたらす未来の種類はそれほど多くはない。
結婚を延期した。以前に彼が立てたスケジュールの変更を余儀なくされた。
いつのもルイなら、予定を繰り上げると提案するべきであったのに。
先を伸ばすことによって、何も・・・利点はなかった。ただ、ルイ・ドゥ・アルディの恋人であるヒカル・クロスが、ランスの教会で永遠の愛を誓う日が先になっただけ、というだけでは済まされなかった。彼女の持っている地位や、立場は、アルディ家に大きな影響力を与える。
それらすべてに配慮してもなお、ルイ・ドゥ・アルディはまだ先にする、とだけ言って親族会の者たちを閉口させた。

アルディ家の者は早婚で、彼の年齢ではすでに幾人もの子供を残しているのが常だった。しかし、ルイはそれでもウイと言わなかった。彼らの意図に従うことはない、と、遠回しに挑戦的に言っただけだった。
彼の決定に従わない者は、徹底的にたたきつぶす。それは今でも変わらない。

「思い当たることがあるのかないのか・・・総合評価をした結果、その予想は不適切だと分かるまでの時間は、それほど長くはなかったはずが」
すぐにそうではないと思い至ったはずであるのに。
それなのに、なぜ、彼女はこうまで落胆と動揺を繰り返しているのだろうか。

灯りをつけないままにしているのにも理由があった。

これまで、失調した時には大人しく指示に従っていた彼女であったが、今回ばかりはそれを拒否した。
まずは、ルイに相談してから行動しようと思い決めていたらしい。
ここまで高熱に陥ることはない、と知識で知ったとしても。
食欲が落ち、関節が痛み、虚脱感が彼女を襲った時。彼女が真っ先に誰を思い浮かべたのか確信したことによって、ルイは一瞬だけ・・・満たされたのだ。
ルイの帰邸を待つまで、誰にも何も話さず、ひとり自室に籠もる彼女は、周囲への配慮に欠けていた。
ルイの立場からすれば、そのような普段と異なる行動はすべて記録されるので、改めるべきだと忠言するべきであったが。
彼はその前に・・・・彼女の炎熱によって、微笑みを浮かべたのだ。

単なる発熱であるのに。
ヒカル・クロスという永遠の晄は、彼女の胎に焔が宿ったのだと錯覚した。
そして次には違うと確信した。

このまま、ルイのことだけを考えて、ヒカルの一日を過ごせば良いのに。
彼の帰邸を待ち侘びて、今日のように、一日中・・・誰の視線に晒されることなく、彼だけにしか姿を現さない永遠の晄であれば良いのに。
肌を重ねる時間以外のすべてを、彼のためだけに時間を費やせば良いのに。

そんな仄暗い彼の願いを彼女が叶えたと知り、彼は微笑む。しかし、その表情を彼女に見せることはしない。
なぜなら、彼女は、そうして過ごした時間について戸惑い躊躇い、そして・・彼の心中を推し量ることが出来ず、こうして自分の不調について配慮することを放棄してしまっているから。
ルイのことを考えて、ヒカル自身の失調回復について気を配れない状況を、ルイは肯定するつもりはなかった。歓迎はしていたが。

どうしたら、彼女を独り占めできるのだろう。
■12

「汗の匂いが障る」
彼は素っ気なく言った。

できるだけ、無感情を装った。

装う。

彼にはあり得ないことなのに。

それでも・・彼は彼の心中を隠す。

ヒカルが高熱を持っていたとしても関係なく、このままで居れば彼女を組み敷くことになりそうだったからだ。
彼はここでは彼女を包まない。
理由を知っているのに、ヒカルはそれでも彼を誘うように、闇間で揺蕩う。
酷い人だ、と言えばそれで済むのかも知れない。
けれどもルイはそう言わない。
彼の誇りにかけて。
彼は彼だけで完結する。
誰かを求めているとは認めない。
彼は、ヒカルを欲しているとは言わない。
それが、彼の誇りであると彼自身が認識している限り。

「それほど・・・オレの子を宿すことが厭だったのかな」

彼は思っても居ないことを口にした。
ヒカルが願っていることの本当の意味について、彼女は明かさない。
「ルイ」
彼の名前を呼ぶのが精一杯だったヒカルの声を確認する。残酷なのは、彼女ではなく、彼の方なのに。
これほど失調してなお、彼は彼女に求めるのだ。

ヒカルが・・・。

彼なしに居られないことを。
彼の子を宿すことの本当の意味を。

ルイが自堕落に彼女に悦楽を零しているわけではないと、ヒカルは・・・それを知っているからこその嘆きに・・・彼は打ち震える。

「そうではない」
ヒカルが断言した。思ったより強い口調だった。しかしルイはそれに反撃した。
「何が？平静でいられないくらい動揺しているのに、なぜ、そうではないと言い切れるのか、根拠がない」
いつも彼の問いの先を見つけようとして、僅かだけれども間を置く彼女が、今回は違っていた。
「そうではない」
もう一度言ったので、彼は首を横に振った。
「ルイ」
スプリングが軋む音がして、ヒカルが彼に近付いた。腰掛けている面が揺れた。
彼は視線をそちらに遣ることはせず、ただ、闇宙を見つめているだけだった。

注意を払っていないということではないが、彼女だけが、彼の背後に近寄ることができる。
彼は以前に受けた灼瑕の治療が完治していない。
まだ感覚が鈍い箇所があった。それでも、彼女はそこに口吻をする。
贖罪の接吻だ。
それを彼は静かに受け止める。
彼女はいつも彼に頬を寄せて、傷まないかと聞く。
儀式のように。
愛を囁く代わりに、彼女はいつも、ルイに様子を尋ねる。

彼の背中に、湿った重みが降って来た。
ヒカルが彼に顔を寄せてきたからだった。
彼女は膝立ちになり、彼の首に腕を回してそっと包んだ。
彼と彼女で、こうして同じ方角を向いて抱き合うことには特別な意味がある。
それを知りながら、ヒカルは時々・・・残酷なまでに優しく彼を包むことで、何かを押し流してしまおうと考えているようだった。
彼の中に澱む憂いなのか、彼女の贖罪なのか。
ヒカルという娘の感覚というものは、時折、まったく論拠のない行為をヒカルに遂行させることがあった。
優しくしてやれない。ルイは眼を瞑った。晄の香気とでも言うような、彼女の柔らかい香りと温度を感じて、溜息を漏らす。このまま、彼女を壊してしまえば簡単なのだろう。

しかしルイはそうしなかった。彼がどうして、彼女との結婚を延期したのか、ヒカルは理由を知っているからこそ、戸惑ったに違いない。
彼と彼女はまだ若かったが、それでも、もう、ふたりだけを見つめるだけで良いという年齢ではなかった。
誇りがそうさせない。
ルイ・ドゥ・アルディは星辰の子であり、この家に君臨するために生まれて来た。

ルイは黙ったままだった。彼女が言おうとしていることを聞いてやるつもりはなかったが、それでも・・・身体が動かさなかった。
くぐもった声が聞こえた。
「ルイを拒否しているわけではない。ただ・・・・感情の順序に困っただけ」
「・・・・」

彼は黙ったままだった。
彼女は感情の起伏が激しい方ではなかったが、ルイ・ドゥ・アルディのように完全に制御できるということではなかった。
そして、過ぎてしまった感情の変遷について、彼に語ることで、心の整理をつけようとしている彼女の姿は珍しいことであった。
長い時間を一緒に過ごしてきたのに、彼女は、自分の内面のことを話す機会は少なかった。
それは、彼女の両親の気質が色濃かった。
自分のことを表現することが不得手なのか、敢えてそうしないのか。
どちらにしても彼女は誰かに自分の心の内をさらけ出すことはしない。
それがルイであっても。

大きな溜息が聞こえた。彼女はこうして勢いをつけなければ話せないというのだろうか。まったく、面倒な神経回路だな、とルイが呟くと、ヒカルは笑った。
いつもの辛辣なルイの口調が、彼女を安堵させる。
それで勢いがついたようだった。
「・・・最初は疑問が湧いて、ひょっとしたら、と思った。けれども、すぐにそれは違うということに思い至った。確信していたのに、また、もしかすると・・・と何度も予想と否定を繰り返して、考えを巡らせた。・・・次に、ルイは困った顔をするだろうと思った。今、私とルイの状況を考えると、ルイがどんな顔をするのか、想像するだけで、胸が苦しくなった」
「それは熱のせいだ」
「それだけで頭がいっぱいになり、何も手につかなくなった。ルイに相談しなければならないけれど、他の誰かに最初に知られるのは厭だった。だから誰にも不調を訴えなかった。違っていると確認したときに、私は・・・・ほっとしたの。それですぐに自分を嫌悪した」
口数の少ない彼女がいつになく饒舌だった。これは高熱による情緒不安定からくるものであったが、それでもルイは黙って辛抱強く耳を傾けていた。
彼の胸の前に投げ出された白い腕が光り、ここに居るのは間違いなく、彼のファム・ファタルであるということを確認する。
声も状況も何もかもがヒカル・クロスがここに居るということを知らしめているのに、それでも彼女の肌に触れないと実感がない。あの不幸な事故によって、彼の間隔は遮断されてしまったままかのように。決してそんなことはなかったのに。
彼女に関することだけは、彼の思い通りに進まない。

彼女の躰は熱かった。少しだけ・・・ルイはそこで眉を顰めた。彼が彼女の肌をこれほど熱くさせることはなかったからだ。失調による炎熱さえ、彼は激しい物思いを感じるというのに。彼女に熱を加えるのは、彼だけで良いのに。

「何も問題ないだろう。それとも・・・身体に負担だからというのであれば、代理母出産でもするか？手続きはそれほど難しくはない」
彼と同じ過程を経るか、と尋ねられたヒカルは、激しく首を振った。
額が・・・彼のシャツから僅かにのぞく脊椎にあたった。
■13
彼女の腕に力が入り、柔らかい身体が彼に触れる。汗ばんだヒカルの熱が伝わって・・・今一度、火傷しそうな程に炎熱をルイに渡していく。
「ここのところ煩雑なことが多すぎた。・・・少し休め」

言葉を紡がないヒカルに向かって、彼は静かにそう言った。
長居はしない。
この場所にこれ以上居れば、彼女をまた鎮まり始めた余炎から、ルイという灼熱の波に連れ去り炙り焦がすことになりそうだった。
ヒカルは徐に言った。
「ルイ。私ね・・・・嬉しかったの」
ぽつり、と彼女は言った。

「ルイが困るとわかっていたのに、嬉しかったの。
違うとわかっているのに、何度もその時が来たと考え直した。
その度ごとに・・・嬉しかった。
ルイを困らせたくないのに、嬉しいなと思った自分がとても・・・厭だった」
ヒカル・クロスは、懸念で在ることに対して「良かった」と思わずに、そうであれば良いのに、と思ったと吐露した。
そして、彼女が感じたことについて、動揺していると言った。
これは男女の理の違いから来るのだろうか。それとも・・・・。

ルイの肩に額を押しつけたヒカルは、湿った夜着に身を包んだまま、小さく震えていた。高熱からくる悪寒に身体が堪えきれないのだ。

「それで、オレにどうしろと？」
彼は短く言った。低い声音だった。
運命の人が、己の胎にルイの未来を宿しているかもしれないという時。彼がどうして困ったなと思うと考えるのか、理解に苦しんだ。
彼女は永遠の晄という名前を持っている。そのために、いつも・・・ルイの考えた導き出したこたえや予想や予定を覆してばかり居る。
けれども、それらに対して、正当な理由を付すことができるのも、ルイ・ドゥ・アルディだけだということを知りながら・・・どうして、彼女は動揺しているのか、ルイは共感することができなかった。

彼は大きく肩で息をした。
彼女の腕も揺れて、その拍子に、ヒカルの茶色の髪が、彼の肩にこぼれ落ちた。
随分と伸びた。うねりのある髪が、彼の胸にまで散って躍っていた。
熱い吐息を感じる。
彼女の炎熱は彼を灼く。
かつて、地獄の業火に灼かれてくれ、と彼女に言ったのに。
今、焼かれているのはどちらなのだろうか。
「ヒカル」
彼は彼女の名前を呼んだ。
そして淡々と彼は言った。低い声が彼女の躰に響き渡る。
そっと・・・静かに、細く長い指を彼女の髪に絡めた。
「先に延ばしたのは、結婚式であって、結婚そのものではない。・・手順やしきたりを経て済ませなければならない儀式であるが、ヒカルが出産したいのであれば、それは必須ではない」
ルイ・ドゥ・アルディを困難な状況に陥れることは明らかであったが、彼は軽く、何でもないという風に言った。

難しい時期にさしかかっていた。
彼女の家と、アルディ家との間に生じている課題を解決するために、彼らの結婚は先送りにされた。その中で、ヒカル・クロスが婚姻しない事実婚で子を出生すれば、その子の親権を巡ってまた争いが起きる。
もし男子であるならば、アルディ家にとっての後継者であり、クロス家にとっても、　得がたい親族となるであろう。もし、ヒカルが早世するようなことがあれば、その子がすべてを引き継ぐのだから。

ルイ・ドゥ・アルディは彼女の髪に沈む自分の指先を伸ばし、彼の身体にしがみつくように体重を預けてくる彼女の手の甲に当てた。

婚外子を作るつもりはなかった。
その子は、アルディ家の籍に入らなければ、後継者として認められない。
それはルイが身をもって経験していたことであった。
遺伝子で一致しようとも、明らかにアルディ家の血筋のものであったとしても、彼は長らく籍に入れられなかった。
そのために、後継者としての権利を取得するまでに相当年月無駄に過ごしてしまったことを考えると、私生児として誕生させるわけにはいかなかった。
もちろん、この国の制度では、事実婚による子の出生と権利は認められているが、アルディ家ではそれは通用しない。
いつか、あの家の規程をすべて改正するつもりであったが、それには時期尚早であった。

「貴女は、どうしたい？自分の感情ばかり説明していても、具体的に何か方策を講じる必要があるのであれば、提案しろ」
彼はそう言った。淡々と語る。それが彼女を落ち着かせていることを承知していたからだ。彼女はまた、首を振った。
「話し合ったとおりに進むことが最良だと思っている」
彼女の言葉は変わらなかった。ルイは、ヒカルがそのこたえを覆すかと考えていたのに、予測を修正しなければならなかった。彼女はいつも、予測不能で・・・まったく理解しがたい存在だった。
密やかに静かに、彼は言う。彼女に代わって、ルイは提案した。
彼女が望めば、すぐにでも・・・彼女から提供を受ける細胞での再生治療も研究も休止し、彼女の体調を管理した上でルイの子を産ませることも可能だった。
そして、彼女が彼女の両親と同じ手順を踏んでからでなければ倖せになれないと固く信じているのであれば。
古い制度を踏襲して、彼は彼女と一ヶ月を過ごした後に、そのまま結婚式を挙げることも可能だった。
今からの準備では、すべての業務を放棄しなければならないが。
しかし、それでは意味がないことも、彼女はわかっている。

それなのに、嬉しいとだけ、彼女は言った。困惑するより前に、嬉しい・・・と。

「それなら、今すぐランスの教会に行って誓約してきても良い。・・・今から行くか？」
彼女が永遠の愛を神の前で誓うのであれば、彼女の不調などは無視するつもりだった。それで彼女が手に入るのであれば。
ルイがただ、ひとりだけを見つめていることを・・・彼の唯一の願いが、彼女の心を手に入れることであるなどとは、ヒカルは全く考えていない。

ルイはそんなことを微塵も思っていないと・・・そう思っているヒカルに苛立った。

彼はそこで嗤った。どうして彼女が先ほどから謝ってばかりいたのか、理解できたからだ。
そうすることが最善の策ではないのに、彼女がそれを望んでいるから。
彼と結婚し、家族になり、彼の血族を生み出すことを夢見ている彼女は、熱に浮かされながら、将来ではなくいますぐ実現して欲しいと願ってしまったから。
だから、すまないと思っているらしい。
そして、ルイが今すぐ実現できると言い出すことも、彼女はわかっていたのだ。

彼女はゆっくりと首を横に振って、ノン、と言った。
「自分だけの都合というものは、すべてを壊す時もあると知っているから」
彼女は少し哀しそうに言った。
「一部を除いてその他の多くを手に入れることもあるが」
ルイは言った。けれどもヒカルは、それは欲しくない、と言った。
「私が欲しいのは、家族。ルイと家族になること。ルイの傍に居たい」
「オレはここに居る」
彼女の手の甲に指を乗せたままで、彼は言った。そしてゆっくりと彼女の手を取り、頬を近付けると彼は薄い唇を、ヒカルの白い手の甲に押し当てた。
■14

「制度はどうでも良い。何を困惑しているのかまったく理解できない。
結論が異なった時には、それが最良の結論になるようにするだけだ。
・・・貴女を妻だと発表することを労苦に思うのであれば、最初からこうならないようにした」

何をそれほど戸惑っているのか、わからないよ、と彼は言った。
彼に理解できないことはなく、ヒカルの髪のように漣を作る感情の渦について、彼は実現できるがどうするか、とあっさりと言ってのけた。
そしていつもの彼らしく、薄く嗤って酷評した。

「傲慢な人だ。自分の都合と希望でこのアルディ家のこれからを決めてしまいかねない」
「だからルイにいつも調整してもらわないといけないの」
「・・言うね」
「今日は熱があるからね」
くすり、と彼は声を漏らして笑った。彼の会話について来られる人物は多くはない。しかし、彼が歩み寄って、会話を継続させようとする人間は、この世でたったひとりだけだった。生涯かけて。彼女が今すぐ、彼の妻になりたいと言うのであれば、何をも優先してそれを叶えることに全力を注ぐ。なぜ、彼女はそれがわからないのだろうか。

彼は彼女の手の甲に、今ひとたび唇を押しつけた。
柔らかい白い肌に、朱い花瓣が乗った。
闇で見えなくても、はっきりとわかった。
彼女の指先が震えた。しかし、ルイはその手を離さなかった。
「いつまでもそうして自分を哀れんでいるのであれば、それでも良いが。オレは見舞いに時間を費やすほど暇ではない。婚姻を延期することで大騒ぎになった親族からの猛攻をかわして、自分の予定を立て直さなければならないし、クロス家との会合を調整するためにミシェルと相談しなければならない。ヒカルが孕んだかもしれないと言って悩んでいる時間を共有するつもりはないよ」
彼はそう言って彼女の手首を掴んだまま、ゆっくりと立ち上がった。
彼女がどうして灯りもつけないで独りでいたのか、知っていた。
彼女は・・・彼が来ることを待ち侘びていたのだ。歪んだ泣き顔を見せたくなかったから。・・・汗に障る、と彼は言ったが、その中に、彼女の涙の香りが混じっていることを察知していた。

なぜ、泣くのだろう。
どちらでも良い話なのに。
嬉しいから泣くのか、困っているから泣くのか。
それとも・・・・もっと別の意味で、涙をこぼしていたのだろうか。
それが、彼を恋しがって落とす涙であれば、彼は少しだけ、満たされる気がした。

「ヒカル。行くぞ」
彼はそう言って立ち上がった。その時に彼女の手首を掴んで引き揚げたので、彼女は小さな悲鳴を上げた。
「今日は一緒に居られない。ルイに熱を移したくない」
彼女が慌ててそう言ったが、ルイはせせら笑った。
「決めるのはヒカルじゃない。・・・オレだ」
熱を帯びた彼女はいつになく饒舌だった。それなら、彼へ囁く愛の言葉を多く生み出すのであれば・・・彼は彼女をひとりにしておくことはしないと決めた。
ヒカルがルイを想ってひとり歎くささめきを、彼は耳にしなければ眠れないと思った。
彼は憤っていたから。

なぜ、ルイを呼ばなかったのか。
彼の外出に気を遣ってひとり自室に籠もるヒカルを許しがたいと思った。
彼女がひとりで過ごす為の空間は、もはやここではなく、ルイの居室でなければならない。
彼女はまったく理解できていないようだ。
それが何を意味するのか。
わかっていない。
彼は誰も自分の寝室に入ることを許さなかった。
誰も入れない空間へ入ることを赦した人の居る空間に・・・この部屋に、彼は長居できない。
彼女の心を得ていないと思い知るからだ。
それなのに、わざわざ不愉快になるためにこの居室に足を踏み入れる。

「病人を抱くほど粋狂ではないが、オレはここで休むつもりはない。ヒカルをひとりで休ませるつもりはない」
彼が自分の部屋で休め、と言ったので、ヒカルはそれはできないと言った。
彼は大袈裟に溜息をついた。そろそろ、誰かが様子を見に来る頃だろう。
帰邸早々に失調した恋人の自室に籠もって出てこない彼の安否を確認するための内線電話が無粋にもかかってくるのは、遅くても

あと数分以内のことであろう。

彼は物憂げな青灰色の瞳を光らせた。
■15

ようやく闇に慣れてきた頃で、手首を掴み上げられたヒカルが薄い夜着を胸元で押さえて困惑した表情を浮かべている姿が見えた。
そして彼女の腰を掴むと、強引に彼に寄せる。
ベッドの上で吊られた状態になった彼女の髪が散って、普段の彼女からはほとんど感じない扇情を駆り立てられる。熱に浮かされた彼女は艶めかしくそして今にも儚くなりそうだった。
だから腕を放すことが出来ないのだと言ってやるつもりはなかった。
彼女は贖罪の娘だ。
彼の苛立ちを鎮めるために必要な贄なのだ。
優しく扱ってやることはしない。

・・・そう思っているのに、自ら、厭わしい部屋に足を運びそして彼女を迎えに来る。

彼は身体を屈めると、彼女の背中と膝の下に腕を伸ばして、一気にヒカルを抱え上げた。
スプリングが大きな音を立てた。
乱暴な衣擦れの音がして、次の瞬間には、室内の空気が動く。
僅かなヒカルの悲鳴が聞こえる。
そして、彼女の茶色の髪と瞳が近付いたかと思うと・・・彼女の香りが彼に降り注いだ。
熱い身体が彼の腕と胸に捉えられて、そうしてようやくルイは彼女の存在を確認することができた。
彼女はいつも、彼の思い通りにならない。
従わせることもできるのに。
なぜなのだろうか。そうしなかった。

・・・生涯、彼は彼女に対して「なぜ」と尋ねるのだろう。
彼女は、彼のファム・ファタルなのだから。

ルイ、と彼女が彼を呼んだが、広い胸の中に収まる彼女はもう、抵抗しなかった。

ヒカルはルイを困らせたくないと言ったが、彼はヒカルに困った人だ、と言った。結局困らせているではないか、と言った。

「・・・一体、いつになったら、オレの部屋で偶吟する（※閨の呼び交わしの声のこと）ようになるのかな」
彼女が赤面して身を竦ませた。

「オレはヒカルが今すぐにでも、結婚したいというのであればそうできる準備がある。しかしそうしたくないというのであれば、その準備もある。けれども」
彼はそこで言葉を切った。

彼女を抱き上げながら、彼は強い視線で彼女を見下ろした。
彼はまったく困った人だ、最悪だな、と文句を言いながら寝室から居室に向かって歩く。
ノブに肘をかけて、乱暴に開けた。
勢い良く扉が開いて、彼女はもっと小さく身を竦ませた。
しかし彼女を抱いたまま彼は大股で居室を横切った。
風を切るように。
ヒカルの憂いを切り裂くように。

彼は星辰の子だ。
天体の光だけではなく・・・炎熱さえ吸い込んでしまう。
そして、それほど強くはない光であるのに、僅かな脚灯にルイは眼を細めた。
薄い夜着が透けて、ヒカルの肌の線を露わにしていた。
ルイ・ドゥ・アルディは小さな声で呟いた。

「貴女が思うような、困った事態に一緒に困憊するつもりはない。
・・・産みたいなら産め。アルディ夫人を名乗りたいのなら今からすぐ名乗れ。
しかし、オレの望まないことはするな」
「ルイの望まないこと・・・」
彼女はそこまで言って黙り込んだ。
彼は最後まで言わなかった。

それを尋ねる代わりに、ヒカルはそっと彼の胸に頬を寄せた。
ぎゅっと彼の胸元を握りしめてしがみついた。
細かく震えているのは、悪寒のためだけではなかった。
そこでようやく、ヒカル・クロスの顔を眺めることができるようになったルイ・ドゥ・アルディは、彼女に言って遣った。

「酷い顔だ。・・・泣いて眼は浮腫んでいるし、熱で顔は朱い。汗まみれで肌に張り付いて、君の肌は実に不快だね」
彼がそう言って横を向いたので、ヒカルは彼のシャツから手を離した。
「ひとりで歩ける」
「オレがヒカルの部屋からいつまで経っても出られない状況であったことを周囲に説明するつもりも弁解するつもりもない。しかも、ヒカルのくだらない独白に付き合って遣っていたなどと、口が裂けても言えないくらい恥辱の事態を、貴女は身をもって収拾しなければならないよ。
ヒカル。命令だ。
貴女はこれからオレの居室で寝泊まりするように。
ここまでやって来る往復の時間の無駄を考えろ」

彼は素っ気なく言って、彼女の申し出を却下した。
そして強く彼女を抱くと・・・そのまま歩きながら、廊下を渡る。
先ほどはひとりであったが、今は、ヒカルとふたりだった。
だからこの廊下も長いと思わなかった。

ルイ・ドゥ・アルディは囁いた。
周囲に聞こえないほどに、小さく、弱く。
ヒカル・クロスにだけ聞こえるように。

「・・・もう心配させないでくれ」

その声を聞くと、彼女は腕を伸ばして彼に今一度強くしがみついた。
「ルイ・・・ルイ！」
ごめんなさい、ともう一度だけ言った。
そして次にはありがとう、と言った。

「礼も詫びもいらない。すまないと思うのであれば、さっさと復調することに専念しろ」
彼の言い方はいつも冷たい。けれども・・・暖かかった。
ヒカル・クロスは微笑んだ。
熱で浮かされているのに。もっと違うもので込み上げる熱さを感じた。

この炎熱を、彼も感じていると良いのに、と思った。

抱き上げるルイの力強い腕の中で、彼女はようやく安堵の溜息を漏らした。
失調しているのに。それなのに、嬉しかった。
薄い夜着しか身につけていない彼女の躰を他者から覆い隠すように、彼は彼女を胸に深く抱き、誰も近付かないように視線で合図しながら、いつもの彼の歩調より少し速度をあげて移動していく。

ヒカルは眼を閉じた。今日のことは、生涯忘れない。
彼の言葉と願いを耳にしたから。ルイは決して自分の想いを口にしない。
けれども、彼はヒカルの不安を取り除くために、誇り高い彼の意志を曲げて・・・彼の想いを口にした。
だから、それを交睫の唄にして、彼女は彼と同じ闇に沈む。

見上げれば、彼の精悍な整った顔が近くにあった。見事な金の髪の下で、物憂げで上品で少し怒ったような感じの青灰色の瞳がまっすぐ正面を見据えていた。

これからは、ふたりで・・・どんなに悩んでも、ルイと一緒に解決していける。
彼女はひとりではない。
そう思うだけで、身体が浮かぶように心地好い波に包まれる。
これが熱のせいであることも十分承知していたが。
それでも、彼女は微笑んだ。
■16

孤独の居室に閉じこもるなと言って、彼が彼女の部屋から、憂えるヒカルを運び出した。
誰にも決して・・・涙を見せることはなかったし、憂いを吐露することもなかったのに。
ルイにはいつも・・見透かされてばかりいる。
しかしそれは決して不快ではなかった。
むしろ、彼が何もかも承知していることについて、覚悟があることについて知ることができて嬉しかった。

彼の叱責を受けなければならないな、と思った。
彼を試したいと思ったわけではないが、結果的に、彼に激しい憤りをもたらしてしまった。
自分の矯正できない感情の乱れが彼を深く傷つけてしまったから。
でも、ルイはきっと少し唇を歪めて嗤うだけなのだろう。
オレを傷つけられるとでも思っているのか、と言うのであろうな、と思った。
裏面では、彼は深く傷ついているというのに。
今のままでも十分、倖せなのに。それを伝えられなかったヒカルの責だ。

「・・・愛しているわ」
彼女は呟いた。
しかし小さな声であったが彼にはきちんと届いていた。
ルイの腕に力がこもり、彼は唇を横に引いたからだ。

「相当体調が悪いようだな。放置していたのだから自業自得だ」
彼は怒ったようにそう言ったが、部屋に運び彼女を横たえた後は、なんだかんだと不平を漏らしながらも彼女に点滴や投薬治療の処方を細かく指示するのだろう。
彼女は普段、あまりこういったことを口に出さない。
だから、彼は呆れているのかもしれない。
でもそれでも良かった。

今一度、ルイの胸の中に顔を埋める。
激しい頭痛も寒気も痛みもすべて薄れていくようであった。

彼女は大きく息を吸った。
そして眼を瞑る。
彼に身体を預ける。

少しばかり乱暴であったが、この揺れは、母の体内にいるかのような揺れにも似ていると感じた。記憶はほとんど残っていない

のに。なぜか、懐かしかった。
そして・・・そんな揺れを自分の胎に宿す日も近いのだろうと思った。

ルイの望まないことはしないでくれと言われた。
同じように、彼の望んでいるものがあるのだという肯定の言葉だった。
彼は何かに執着することはない。
それなのに、望みがあると言った。
だから、彼の望まないことは決してしない。彼を心配させるのはこれが・・・最後にしたいと思うがそうできないのだろうなと思った。
その度に彼に叱られて、彼女はそれでも繰り返すのだろう。
しかしルイは決してそれを咎めて突き放すことはしないのだろうということも想像できた。

彼は冷たいが、ひどく優しい。

「オレは貴女の子守でも教育係でもないのだから、こういう注意は心外だね」
彼がそう言ったが、ヒカルは眼を瞑ったままこどものように身体を竦めるだけだった。
仕方のない人だ、と言ったが決して怒気は含まれていない声を浴びながら、彼女は身体を丸めた。
「ルイは私の恋人であり、未来の夫よ」
彼女がそう言うと、彼は押し黙った。
そして「やはり熱が高いようだ」と言ったが、どこかいつもの抑揚のない口調と違っていた。
それで良いと思った。これが彼の愛し方であり、彼の望んでいることであったから。

家族になろう、と彼女が言ったことを、彼は遂行しようとしている。
だから・・・彼に寄り添って一緒に歩いて行こうと思った。
それは間違っていない。
彼も同じように思っていてくれれば良いのに、と感じながら彼女は彼の胸に頬を押しつけた。
彼の指先に力が籠もり、圧がかかった場所から彼女に熱が加えられていく。
まるで、炎のようにそこから広がるあたたかい波に揺られて、彼女はようやく眠りにつくことができそうだと思った。

その様子を眺めながら、ルイ・ドゥ・アルディは溜息を漏らした。
まったく手に負えないほど・・・彼の思い通りにならない人を抱いているのに、それを許容している自分自身が理解できなかった。
しかし、それで良いと思っていた。理解できないからヒカル・クロスなのだ。
ああ、熱いな・・・と思った。
彼女の体温から受ける熱だけではない。
自分の内なる情動が振幅の幅を広げて、彼に熱をもたらしている。

彼は彼が定めた将来の妻をそっと抱き締めた。
熱が放射されて、彼女の中に宿る彼への愛の炎が消えてなくならないように。

病気の者を抱く趣味はない、と言ったが。
彼女の肌の火照りを鎮めるために彼の肌を寄せることになりそうだと思った。
どれほど具合が悪くなったとしても。
それでも、結局は、ただ、彼女の安らかな寝顔を見つめるだけで満たされて眠りに落ちることを選ぶのだろうなという予想はついていた。
自分のことなのに。
ヒカル・クロスと過ごしている時の自分の行動については、幾通りも考えていなかった。

彼女はいつもこのように彼に愛を告げたりしない。
そして自分の気持ちを吐露しない。
だからこの焔がずっと続けば良いのにとさえ思う。
しかしそれでは彼女が壊れてしまう。

・・・だからルイは待つことにした。

彼女が平常時に・・・こんな風に失調している時以外でも、彼を愛していると囁くようになるまで、待てば良い、と思った。
それでも、消えはしないと知っていた。もうずっと待っていた。
彼が欲しかったものが、今、彼の胸の中にある。

この炎熱は、決して消えない焔であったから。
ふたりの間で消えることなく煌めき続けていくのだから。
だから、今日は許してあげよう、と言った。
彼は眼を瞑ったままのヒカルに微笑んだ。

彼女はいつも・・・眠っている時だけしか触れられない。
同じように。
彼はいつも・・・いつでも・・眠っている彼女にしか本当の表情を見せなかった。

ルイ・ドゥ・アルディは安らぎと愛に満ちた穏やかな微笑みを浮かべた。

（FIN）

炎熱　**Hikaru**　前編

◆残焔01

健康管理という言葉は、このアルディ邸での使用方法は他と異なっていた。
自分が、いかに、他の常識と言われているものと違う環境で生きているのかということについて、黒須昶はよく理解していた。

彼女はパリの日本人学校に通っている。

パリでも屈指の名門である家系のアルディ邸の住人であることは伏せられているが、それでも、彼女が他の誰とも違うというのは、自他共に認める明らかな事実として受け入れなければならなかった。
それでも駐仏の者の家族は、在籍期間が短い。
だからこそ、昶はここで過ごしていられるのだと思った。
短い期間でしか接しない。
昶を良く知る前に、彼らは去ってしまう。
彼女の母と逆だった。
親の職業の事情により、彼女の母は、若い頃、とても転居が多かったと言う。
しかし、それを聞くのは、母親本人からではない。
彼女の両親が乗った航空機が不幸な自己により、海に沈んだのは、もう幾年も前のことであった。
それでも、彼女は、パリに定住することで、彼らの帰りを待っている。

昶の両親は日本人だ。
しかし父親の母、つまり昶の祖母はフランス人だ。

書類上は、彼女は黒須昶として登録されている。
永遠の晄と書いて、ヒカルと言う。
幼い時から、彼女はパリで生活している。
アルディ家当主のたっての願いで、彼女はここに来た。
本当は、昶がそう望んだからだ。
誰に引き取られるか自分で選択した。

天使のような美しい人が、昶の両親を悼んで涙に濡れる姿を見て、彼女は決めた。まだ本当に幼い時であったのに。
それなのに、今でもそれを後悔することはない。

その願いに、彼がこたえた。
白金の髪の、青灰色の瞳の人は、彼女を慈しんだ。こよなく。
彼の天使と呼び、昶は彼を天使と呼んだ。
そして最高の状態の薔薇を選んでシャルルの元に届ける役割を与えた。
これまで、誰にも授けられなかった役目であった。

不自由のない環境が、彼女に用意されていた。
完璧な日本語を維持できる環境に、フランス語や他の語学の習得・・・アルディ家という、古から続く家柄の教育が、昶を黒須昶からヒカル・クロスに変化させた。
親日家として有名なアルディ家当主の庇護の元に。
彼は、彼女の両親と昵懇であった。
そして、彼の結婚式に向かう途中で、彼らは海に消えた。
だから、当主は残された娘である昶を引き取り、そして慈しんだ。
彼らの両親がそうしているかのように。

彼女は日本のことを知識でしか知らない。
一年のうちのごく僅かな時期だけを日本で過ごしているが、それ以外の彼女の世界というものは、このアルディ邸がすべてだった。
一年中、薔薇の香りに包まれた広い敷地の中で、彼女は育った。

彼女のすべてだ。

夢のような時間であった。
何もかもが、すべてが素晴らしかった。
それを当然とする環境に居ることがどれほど希有なことなのか、後に知った。
後の彼女は、この時期を「青春の輝きの時代」と言った。
シャルル・ドゥ・アルディがそう言ったように。
彼女にも輝いていた時代があり、それはこの時代・・・・日本に移り住む前の時代のことを指し示していた。

どれほど、愛されて育ったのか。
どれほど、愛されて育ったのか知った。

それを知るたびに、怖くなった。
自分の居場所がわからなくなったからだ。

この家の、正当なる後継者であるルイ・ドゥ・アルディは、シャルルとの不仲によって、まったくと言って良いほど、寄りつかなかった。
シャルル・ドゥ・アルディの息子でありながら、彼は長らく存在を秘匿されていた。そして、彼の母との結婚生活も一ヶ月で破綻したシャルルは、それ以降、婚姻という制度について無視を決め込んだ。
今は、この家に息衝く若い薔薇たちを育てることで、彼の安息をもたらしているようであった。
少なくとも表面上は。

しかし、彼はフランスの華であり、この邸に滞在している時間は短かった。
それ以上に、ルイ・ドゥ・アルディがここに居る時間はもっと短い。

彼女はこの薔薇の家に取り残された。しかしそう思ってはいけないのだと、彼女の内なる声が、告げ続ける。彼女が決めたことなのだから。

だから、ルイ・ドゥ・アルディが失調して、別棟に入ったと聞かされた時。
彼女は、別棟への来棟申請に最初にサインをした。
申請しなければ入ることのできない空間だった。
ルイ・ドゥ・アルディは決して誰も招き入れない。

その彼が、失調したと聞いた。
高熱で倒れた、と言うのだ。
健康管理については、専属の医師がいる。
どちらかというと、医師というよりかは医療チームのような集団だった。
昶が名前を覚えようとしても、覚えきれないほどに細分化された者たちが、細々、彼らの微細な事項について、頻繁に尋ねる。それが厭わしいとは思わない。が、ルイ・ドゥ・アルディはそれが大変に苦痛であったようだ。
彼はこの邸に寄りつかない。
それは、そういった束縛に辟易しているだけではなかったが、理由のひとつとして十分に明確であった。
季節は流れて・・・そしてそれでも、ルイはいつも変わらずに冷淡であった。

特に、黒須昶に関しては。

◆残焔02

彼が移動の最中に失調して、そのまま別邸に入ったと知らせを受けたヒカルは、慌てて彼の居住

している別棟に入るための手続きを取った。

同じ敷地であるのに、どうして・・・彼に近付くために、煩雑な手順が必要なのだろうか。
シャルルに会いに行くときには彼女にはすべての制約が解除される。
けれどもルイに関しては全くの逆の手順であった。

が、それを歎いている時間はなかった。
この家の主は留守にしている。
そして、未だかつてなかった事態に陥っている。
ルイは、教育係のミシェル・ドゥ・アルディを呼びながらも、誰の診察も受け入れていない状況だった。
タイミングが悪かった。
ミシェル・ドゥ・アルディは親族会の令により、遠方に視察に行っている時で、シャルルは当主として責務を遂行するために、世界の裏側に今はいるはずだった。
「小さなアルディ家の女主人、後をよろしく」
そう言ってヒカルのこめかみにキスをして去ったシャルルの囁きを思い出すのは容易なほど比較的最近のことであった。
だからしばらくは戻って来ない。
ヒカルは困惑した。
彼女は判断できないし、指示もできない身分にある。
ミシェルやシャルルに連絡を取ろうにも、彼女の権限ではとうてい・・優先順位をあげて、彼らと連絡を取り合える権利はなかった。

彼女は狼狽していた。
とても・・・とても。

どうしてなのだろうか。

こんな時に、なぜ、シャルルやミシェルはルイの元に駆けつけないのだろうか。
けれども、責めても仕方が無いことだった。
何度かこのことについては話をしたが、彼らにヒカルの申し出は伝わらないし、その件については触れてはいけないのだという自分自身への警告が内なる自分へと発せられたのだから。
ヒカルは、アルディ家の確認やそれに付随して決定される親族会議の審議事項について、口を差し挟むことはできない。それが、彼女のこの家の立場であり、ここで生きていく上の条件であった。

◆残焔　03

ルイ・ドゥ・アルディはこの家のたったひとりのこどもだ。
ヒカル・クロスは単に、滞在者でしかない。
明らかに、何もかも、全てに対する待遇が彼とは違っていた。それを羨むことは無い。彼女は自ら望んでここに居るから。
毎年、必ず夏に入る前に尋ねられる。
そして、夏になって彼女が日本に滞在する時期になると、もう一度同じことを聞かれる。
それがなぜなのか、理由はわからなかったが、アルディ家にいてはいけないという非難めいた確認なのではなく、本当に黒須昶がヒカル・クロスとしてパリに滞在したいのか、真意を確認しているように思えた。

変化を厭うから、と言われてしまえばそれまでであったが。
だがしかし、彼女は不変であることを望んでいるのか、変化を冀っているのかということを考えなかった。
答えは出ない。
ただ、ここに居たい。
苦難を拒否したいのではなく・・・血縁者以上に情を注いでくれるシャルル・ドゥ・アルディの傍に居たかった。
それから、ルイのことも・・・自分の肉親と同じだと思った。

彼のことは、兄だと思うように

ヒカルのことを妹と思って遇するようにと言ったシャルルは、その後に、ヒカルに向かってそう言った。
ヒカルはわかった、と言ってシャルルに約束した。
だから、損得を考えるより・・・どれほど冷淡に扱われても、彼のことを気に懸けてしまう。
それが、ルイには余り愉快なことでないことも、承知していた。
自分の居場所を確保するために、ルイを追い出したと思われても仕方が無いと思う。でも、どうしても、ここに居たかった。
幼かった自分の決断が、この家に大きな溝を作ってしまったこともわかっている。

だから、ミシェルも彼女と顔を合わせようとしない。
幼い時に教育係として、彼女にこの国での習慣を教えてくれたジルも、もう、居ない。でも、帰る場所がなかったから、鈍感なふりをするしかなかった。微笑んでいるだけで、シャルルはヒカルの母のことを思い出すようだ。とてもよく似ている、と言う。だから、その微笑みを維持するように努めた。

それが、ルイには「まやかしだ」と辛辣な評価にしかならないことを、わかっていても。彼女は、そうするしかなかった。
◆残焔　04

タイミングの神が、ヒカルに味方してくれた。
彼の居る別棟に薬を届ける者が渡り廊下を歩いて来るのが見えた。
別棟の入り口近くでどうしようかと考えを巡らせていた時のことであったので、ヒカルの顔が明るくなった。
早速近付いて行き、声をかけて足を止めてもらう。

普段は、仕事中の者に声をかけてはいけないことになっている。
特に、ヒカルは自分でできるだけのことはするようにという本人の希望もあって、シャルルやルイのように身の回りを大勢のものが世話をするような習慣は持たされていなかった。
いつか、日本に戻れるように、というシャルルの配慮からであったが、ヒカルはこの家のこどもではないのだという暗黙の了解のようなものがそこにあるのだと思う時がある。それを忘れてはいけないのだ、と自分に言い聞かせる。

自分に届けさせて欲しい、と言うが、使用人が困惑する顔が見えた。
よく磨かれたシルバーのトレーの中には滅菌された薬が入っているだろうと思われるタブレットと解熱パッチ（直接皮膚にあてて解熱を促すタイプのもの）、それから、いざという時のための点滴などの救急キットの交換用のものが目に入った。
ルイ・ドゥ・アルディが用意させたものだということはすぐにわかった。彼はかなり几帳面な性格で、何度も使用人を呼びつけるようなことはしない。
それだけあれば十分だろうということであるのなら、大事には至らないようであった。病院に搬送されるほどに酷いものでもなく、医師を傍につけなければならないほどのものではないこともわかった。
また、既に専属医師に診て貰ったということもその時に聞いたので、ヒカルは胸を撫で下ろす。

そこで、自分のできることは何もないのだと思ったが、それでも・・・彼のために何かしたかった。だから、自分にそれを運ばせて欲しいと言う。
普段、そうやって我が侭を言い付けることのない少女であったので、相手は困惑したものの、すぐにヒカルにその役割を譲ってくれた。感謝を示すために、彼女は膝を折り、挨拶をした。その様子が余りにも愛らしくて、相手は苦笑いをすると、内緒ですよ、と念を押して彼女にそのトレーを渡す。入り口まで持っていくと言われたが、ヒカルは丁寧に断った。ただ、入り口を開錠して欲しいとだけ言うと、それはあっさりと叶えられてしまったので、ヒカルの頬が上気した。
普段、彼女がそこに立ち入ることは許可されていないからだ。
銀製のそれは、ヒカルにはかなり重かったが、それでも彼女の両手に乗り、ゆっくりと歩けば持

ちこたえられるものであった。
ルイの別棟には、両手がふさがっていても入り口の床面に張られているセンサーで軽い力でも出入りできるように蝶番に圧力がかかる仕組みになっている。普段は、権限を持たないヒカルがそこに入り込むことは出来ないが、今回は使用人の権限で入ることが出来たので彼女は、何もかもがうまくいきすぎて、ただ、ルイの様子を見に行くだけなのだと何度も自分に言い聞かせたのに、それでも胸の動悸が速くなるのを感じながら、使用人の背中を見送った。

・・・悪いことはしていないのに、ルイの別棟に入るということについて、これだけ昂揚してしまうのは、なぜなのだろうか。

◆残焔　05

ルイの居る別棟は、アルディ邸の本邸から渡り廊下で行くことが出来るが、本邸を背にして歩くと右手に薔薇園がよく見えた。
そして、別棟の一階の居間にあたる部分は総硝子張りとなっていて、ここから薔薇園や温室が一望できる。

・・・まるで、シャルルがどこに居てもわかるかのように。

ルイがシャルルのことを完全に無視しきれていないのだろうとヒカルは考えている。
シャルルが、完全にルイに無関心でいられないのと同じ様に。
だから、彼が失調している時に、自分が彼のことを無視することは出来なかった。
重いトレーであったとしても、それは苦にならなかった。
縁取りが細かく、密閉型の盆ひとつとっても、アルディ家の拘りは深い。
それなのに、自分という異邦人がこの館に存在していることそのものが、ルイには苦痛なのかもしれないな、と思う。
わかっているのに・・・去れない。
彼が、ヒカルがいなくなっても平然としていられるのは承知しているのだが、こうしてルイが失調していると聞くと、彼女は平然でいられない。
同じ敷地にいるのに、ただ、事実として受け止めるだけで居るわけにはいかないと思ってしまう。
誰に教わったわけでもないが、このような落ち着かない気持ちが湧き起こる。
それをルイは「お節介」と言って冷笑するが。

でも。
ルイのために何か役に立ちたかった。
いいや、違うかもしれない。

自分は、この家で役に立ちたかった。
それだけなのかもしれない。
ヒカル・クロスの頬が赤らんだ。
腕に持っていたトレーの重さが予想以上であったからだ。
肘が震え、支点が定まらないので手首が震える。
それでも、彼女は深く呼吸をして、その品々を落とさないように注意深く運ぼうとする。
高い天井のエントランスには、何も置かれていなかった。アルディ家が誇る古き良き時代の装飾品はひとつもなかった。
ルイが・・・この家のすべてを否定していることは、ここですぐに見て取れる。
寒々しいが、決して無骨ではない空間が広がる。
数える程度しか、ここに入ることはなかったが、それでも、ヒカルにはとても懐かしく、入れば嬉しい場所であった。
何より、ルイが居住している場所なのだ。
彼がどう思うとも、ヒカルにとっては年齢の近い者同士であることには変わりが無い。

自分が失調した時には、シャルルはすべてのスケジュールを変更し、常に傍にいてくれた。
熱に魘されて、夢と現を彷徨ったヒカルが本当の母と父の名前を呼んでいるヒカルの手を握り、彼はずっと、平気だよ、大丈夫だよ、と言い続けた。

だから、ルイの傍に居たい。
シャルルがいないこんな時には、尚更。
アルディ家の当主が不在の今では、ヒカルに命令する者は居ない。
でも、何かが、ヒカルにルイの傍に行けと言っているような気がしてならない。
放っておけない気質なのかもしれないが、ルイ・ドゥ・アルディに関しては、どうにもならない引力を感じるのだ。

彼は、幼い頃から「星辰の子」と呼ばれている。
天体全てを遵える者、という意味だ。
星だけではなく月も・・・彼の動きに合わせるのだと言われている。
けれども、彼はその尊称をまったく大事に思わない。
彼は、シャルルが持っている様々な功績を覆していくことに熱心になっているように思えた。
ヒカルには、何もなかった。
ただ、黒須昶とヒカル・クロスを行き来しているだけであった。

◆残焔　06

ルイ・ドゥ・アルディを探すには、この場所はとても不慣れであった。
幼いこどもの戯れの、hide-and-seekを楽しむような状況ではなかった。
ルイの居場所がわからない。
彼の寝室の場所の見当はついていたが、そこに先触れもなしに入ることができるという教育を受けていなかった。
ヒカル・クロスは額に皺を寄せて、考えこむ。

断りもなく入って良いのは、シャルルの主寝室だけだ。しかも、そこには朝一番に最高の状態の薔薇を持ち込むためだけであり、彼の目覚めを促すことが目的であるから、今回のようにルイの静養を妨げるような探索ではなかった。だからこそ、躊躇われる。

・・・逢いたいのに、逢えないというのは、もう、味わいたくなかった。

彼女の両親は不幸な事故により消息が不明となっている。誰もがもう、帰ってこないと思っている中で、シャルルだけは今でも探索することを怠ったりしない。彼の親友とファム・ファタルと呼んだ人のことを、今でも・・・彼は、過去にしていない。だから、ヒカルの中でも両親は生きている。
それと同じ様にして、ヒカルは諦めてしまいたくなかった。

ルイとわかり合えないということはないと信じている。
根拠はない。
ルイが聞いたら嘲笑するのだろうと思う。
が、それでも、ヒカルには、可能性という希望があって、彼が弱っている時には傍に居たいと思う。
シャルルもミシェルも居ない、この瞬間にはなおさらであった。

距離が・・・またひとつ遠ざかることが怖かったのかもしれない。
彼も自分と同じ様に失調するのであれば、彼も心細いのだろうという想像を否定したくなかった。

たとえ、自分がルイにとって必要でないかもしれないけれども。
でも、何か・・僅かで良いので、彼の環の中に入っていたかった。

「ルイ」

居間に入りながら、彼女は囁く。しかし、彼の返事はなかった。
彼は元々、誰かの呼び掛けに答える身分の者ではない。
自分の存在を問われて、どこに居ると告げる必要がないからだ。

ヒカルの動悸が、喉元を通って唇から飛び出してしまいそうであった。
秘密の探索に近い。
彼の許可があってのことではない。でも、彼を捜し当てたかった。
そして、同時に・・・・
この別棟のことを何も知らないことを、知る。
ルイが普段、ここでどう過ごしているのか・・・ヒカルはほとんど知らない。彼がここで何を見聞きして、何を思っているのか、まったく推測できなかった。

置いてある調度品は必要最小限の機能的なものばかりで、美を知らないということはあり得ない星辰の子の住まいと言うにはあまりにも侘しかった。
何も置かないという方針なのだろうが、自分の生家であるのにも関わらず・・・彼の所持品はここには何もなかった。
だから、空調の効いた完璧な湿度と温度である空間なのに、どこか寒々しい。
寒々しい、単なる空間。
敢えて、ルイはこの場所に何も残していない。彼が一番長い時間を費やしている場所なのに。
ヒカルは声に出せなかった。可哀想だと言ったのなら、彼はその場で命を絶つだろう。
生まれて来た意味と、生まれて存在する意味を同時に考え続ける星辰の子は、彼の中で満足できる回答を得られていない。
それが、今般の彼の失調を引き起こしたのだ。

・・・鬱屈した気持ちや、これまで制御されてきた疲弊が一気に噴出したのだ。彼の精神は制御できても、彼の肉体は時折こうして悲鳴をあげなければ存在を末梢されてしまうと懼れている。

ルイの見える世界は・・・
ルイの感じる世界の温度は、これほど寒いのだろうか、と思った。

「ルイ・・・どこ・・・」
ヒカルは呟いた。

この部屋のどこが、彼が主に過ごす部屋なのかわからない。
ルイとこれほど近くにいるのに、彼が遠かった。

「ルイ」

その時に、僅かに衣擦れる音に、反応する。
彼女の声に呼応するかのような、僅かな・・・本当に、小さな音に、ヒカルは顔を上げた。

◆残焔　07

ヒカル・クロスには、見知らぬ場所に来たのと同じであった。ルイは自分の居所には他人を入れない。
それが使用人であっても、彼の父でありこの家の当主であるシャルルであっても、だ。
ましてや、ヒカルには入り口付近に立ち寄ることさえ禁じていた。それをヒカルが守っていないことを知ると、今度は別棟に寄りつかなくなってしまった。
ミシェルの私邸を転々とするか、長じて最近では自分で所有するセーフハウスを持つようになってしまった。その若さで・・・彼は、まだ、少年と言える容姿と年齢であったのに。
家族と四季折々の行事や季節の巡りを共有する時間を、彼は放棄したのだ。

だから、ヒカルはこの場所にあまり馴染みが無い。
あまり、というのは大袈裟であった。
まったく、と言った方が正しい。

この別棟には、生活に必要なすべての設備が備えられていたが、彼は人の出入りを嫌って、それを拒否していた。
食事は運ばせて、温めに必要なものだけをここで調理させている。
部屋の清掃やメンテナンス及び彼の注文した品の受け取りなどに至っては彼の不在時に行われ、荷物は置き場所を事前にきっちりと指示してから外出するという徹底ぶりであった。

彼が非常に几帳面で神経質であることについては、この邸の誰もが承知していることであったし、シャルル・ドゥ・アルディという当主は生まれた時からもっと気難しいと言われていた。

そのルイが、疲れた身体を休めるために別棟にやって来た。それが、ヒカルの中では新鮮な風になって強く吹き込んでいた。
鬱屈した自分の愁いを吹き飛ばすような出来事であった。
ルイは体調管理に余念がなく、教育係のミシェルの綿密な管理のもとに、失調した時の隠匿方法も熟知していた。

不調であることを人に悟られてはいけない。

治癒に専念するときには、別の理由を立てること。
自分の失調は失敗だと思え。

そう言われて育ってきたルイには、今回の不調についてはまったくの失態だと思っているらしい。だから、ミシェルやシャルルの耳に詳しく入らないようにしているのだろうかとさえ思う。

「・・・ルイ」
ヒカルは、幾度目かの、彼の名前を声に出して、そして急に口を噤んだ。
歩き回る勇気は持っていた。
けれども、実際にルイに出会したときに、どのようにするべきなのか、ということは考えに及ばなかった。
ただ、一人でじっと炎熱に耐える彼の姿を想像するだけ苦しくなり、自分の不調の時を考えると・・・そのまま本邸にあてがわれた自室でじっとしていることができなくなってしまった。
それが、理由であったが、ルイにはその理由は通用しないこともわかっていた。

彼とヒカルの間には、溝がある。
シャルルとルイの間には、溝と言えないほどに深い隔たりがある。
それは、ヒカルにもわかっていることであった。
でも、だからと言って、ルイを蔑ろにできないし、彼はこの家の正統なる次の主なのだ。
そして、失調した時には、この場所に戻ってくるのだ。他のどこかに身を潜めるのではなく、この薔薇の館で身を横たえている。
それを思うと、ヒカルはルイの姿を探してしまう衝動に抗うことができないのだ。

だから、見つけた時には、自分は得意な顔にならないようにしようと心がけていた。でも。
彼の姿を見て・・・ただ、呆然とした。
それほど探さなくても、わかっていた。
ヒカルの部屋から見える限り、彼は全ての部屋を使ったりしていない。
明かりが灯る場所は、いつも限られていた。
しかし、彼は当主としての習慣を教えられていたので、彼が使わない部屋にも明かりを入れる。
それでも。
彼の寝室の場所は、わかっていた。

そこから、気配がしたのだ。
人の気配ではなく、ルイの気配だ。

必要最小限の、十分過ぎる広さをもった別棟の中で、彼はたったひとりで・・・自分の身体を癒すために、静かに呼吸しているのだ。

「ルイ」
ヒカルは彼の名前を呼んだ。

・・・・彼は居た。

「何度も呼ばなくても、ヒカルの声を聞くと頭痛がする」
彼の憎まれ口が聞こえて来るが、そこは彼の寝室であったのに・・・光はまったくなかった。
そこから、ルイ・ドゥ・アルディの声が聞こえてきたのだ。
開け放した扉は本邸には殆ど見られない、横に開閉する扉であった。

その中で、ベッドだけがぽつん、と置いてあった。
設置してあるのではない。ただ、そこに置いてみただけだ、というような風情の物寂しい、寒々しい風景に・・・ヒカルは、ただ、息を呑んで、ベッドの上の彼を見つめる。

◆残焔　08

彼は獣そのものであった。

手負いの、けもの。

傷つき、苦しみ、それでも誰かに甘えたり頼ったりすることはない。
じっと、ただ、待つばかりの・・・訴えることはない気配を押し殺した空気に、ヒカルは声を失う。
ルイ・ドゥ・アルディは、こんな風にして生きているのだと思うと、それまでの自分の想像のどんなルイよりも痛々しく、何かに餓えている彼の姿を目の前に、何も声をかけることができなくなってしまった。
彼は誰かに助けて欲しいと思っているわけではない。
ただ、姿を見られたくないのだ。

彼はそこに居た。
ベッドの上で横たわっているのではなく、彼は、寐台の背凭れに身体を預けて・・毛布を被り、

蹲っていた。金の髪が額の上で濡れているのは彼の発汗が尋常ならざる状態であるからだ。
青灰色の、物憂げな眸がこちらを見ていた。
足を曲げ、身体を縮めて彼はそこに蹲るようにして座っている。
「どうして、横にならないの」
自分がなぜここに居るのかという説明の前に、ヒカルは掠れた声で言った。

ルイの失調している姿を見るのは、初めてであった。
どれほど具合が悪くても、アルディ邸で静養することはない。
彼は遺伝子操作されて生まれて来たので、失調すら管理されて計測される事態なのだ。
誇り高い彼は、自分の状態を管理するのは他者ではなく自分自身だと言い切り、教育係のミシェルにしか詳細を明かさないという徹底ぶりを見せていた。
だから、ヒカルは彼が病気で寝込むという場面を知らなかった。

アルディ家の正当な後継者であると認められるには、このような失調にも平然としていられるほどの精神力を要するということなのだろうか。
しかし、誰にでもこういう時はある。例外は認められないということではないと思った。
ヒカルは、ルイに近寄ろうとして・・・彼の鋭い声を聞く。
「近寄るな」
不愉快そうな視線が、ヒカルを射貫く。彼女は、戸惑って、止めた足元を見た。
彼が昶を呼び出したわけではない。しかし聡明な彼のことである。ヒカルがどうやってここに入り込んだのか、把握しているようであった。だから、それも相まって、彼の不機嫌の度合いが増しているのだ。
「君は、他人のことに不必要に干渉するのが趣味なのか。だったら、最初から申告しておけ。これから君が居ない時しかここには来ないから」

ルイは、彼女に向かって不機嫌な声で言った。冷たく、何もかもを拒絶するような声であった。
しかし、どことなく、くぐもり声であった。
彼は少々の発熱では予定を変えたりしない。それなのに、今回はアルディ家で静養するという選択をしたことから、相当に・・・失調期間が長いのだと思った。
快癒しないので、研究所に行ったものの安静を要請されたのだろう。
ヒカルも健康診断や失調した時には、アルディ家の専属の医療スタッフに診て貰う。必要があれば、シャルルが投薬について処方を指示することもあった。
だから、相当に具合が悪いのであれば・・そのまま、そこで入院することも可能であったのに、ルイの気に入らない環境で始終監視されているような状況であるならば、帰ると言い張ったのだろうと思った。
ルイなら、言いかねない。
しかし、それでも身体を休める場所としてアルディ邸を選んだことがヒカルには嬉しかった。

彼の家はここにある。そう思った。
だから、口をついて出る言葉はひとつだけだった。
「他人じゃない」
「他人だろ」
ルイは素っ気なくそう言った。
ヒカルの言葉に肯定をするつもりはないようだ。
「私は・・・」
「なんだよ、君の領域はあちら・・・本邸のはずだ。
ここでは、オレはゆっくり静養することすらできないのか」
彼の声に、嫌悪が混じっている。ヒカルは何も言えなかった。
彼はこの家のこどもであるのに、別棟に住んでいる。それなのに、ヒカルは本邸に部屋がある。
後継者として必要な教育を受ける為なのだという理由は成立しなかった。

気懈そうな眸であったが、彼の貌は厳しかった。ヒカルがここにやって来ることに対して、憤っている。そう、思った。
「何か、欲しいものはある？」
大丈夫かと聞くまでもなかった。彼は確かに炎熱に灼かれている。

◆残焔　09

「決まっているだろう」
彼は嘲ら笑った。
「オレが今、欲しいのは・・・ひとりきりになることだ」

高慢であるのはアルディ家のものだからなのか、それとも・・・彼が弱った精神を見せないように気丈に振る舞うが故のことなのか・・・ヒカルには、わからなかった。でも、彼には誰か傍にいる人間が必要だと思った。世話をし、彼の指示を待つだけの者という意味ではない。彼の声を聞き、彼の体調を心配し、彼に励ましの言葉をかける人物が、今、どこにもこの部屋には存在していないことが、ヒカルに哀しかった。
寒くも暑くもないように調整された空調であるのに、寒いと感じる。
ここには、何もない。
本当に、何もなかった。
彼が、何にも執着するなと言われて育てられていることは知っていた。
しかし、これほどとは思わなかったのだ。
思い出というものが、ここには存在しない。
写真も思い入れのある旧い品も、彼が幾年も大事にするようなものが、ひとつも見当たらないのだ。

ヒカルが失調すると、シャルルが看病してくれた。
少しの変化も見逃さなかった。苦しい思いを分かち合ってくれた。
自分の身に起こった痛苦のように、ヒカルの痛みを感じてくれた。
だから、同じようにルイの教育係のミシェルも、彼を看病すると思っていたのだ。
ところが、目の前に居るルイは・・・ひとり孤独に耐えている。

そして本人はそれを特別で特殊なことであるとは考えて居ないようであった。
・・・だから、これはいつものことなのだろう、と思った。
彼は、いつも・・・こんな風にして、ひとりで過ごしているのだと、今頃になって気がついた。

愚かなヒカル。
ルイは、いつも彼女のことをそう呼ぶ。

でも、その本当の意味を、わかっていなかった。
償いの娘と呼ばれても、彼女の傍にはシャルルがいた。当然とは思っていない。けれども、ルイにはミシェルが居ると思ったのだ。同じ様に、はやく良くなりますようにと祈りを込めて彼の額にキスをするミシェルの声を聞きながら、彼が治癒のための眠りに入るのだと・・・そう思っていた。

「・・・処方薬を持ってきたの」
ヒカルは、そう言ってルイの方をちらりと見た。
正面から見れば、彼は激昂するだろう。
誇り高いアルディ家のこどもは、こうして自分の弱みにあたると認識する自分の姿を見せないのだろう。
乱れた金の髪に、少し窶れた貌が何とも痛々しかった。
そして、炎熱を受け入れながらも、考える事を決して中止しない星辰の子は、ヒカルを排除する言葉を言い続ける。

「それ以外に、役割がない。君は必要ない」
その言葉が、どれほどヒカルを傷つけるのかという効果をルイは知っていて使っている。だから、ヒカルはそれを聞いて、目頭がかっと熱くなったが、それでもできるだけ静かに、感情の波を見せないように努力した。
自分の哀しみに溺れたいから、ここに居るわけではないのだ、と自分に証明したかったのだろうと思った。
賢しいとは言えない行為だと思っていた。取り入ろうとも思っていないし、彼は受け入れないだろう。

手を延ばせば、爪と牙を彼女に向けて容赦なく突き立てるであろうと思われた。

そっとしておくのが一番なのだろうとヒカルは暗黙の悟りを持ったが、それに従うことはなかった。

「ひとりはいやだ」
ヒカルはそう、呟いた。
そこで、ルイはふと、綺麗な眉を持ち上げた。眸は笑っていないのに、口元は綻んでいる。彼が、何かに対して蔑情を抱くときに必ず訪れる微笑みであった。
「ヒカル。言葉が足りない。自分がひとりになりたくないから、オレを踏み板にするのであれば、お断りだ。そして、オレには誰かは必要ない。・・・誰も必要ではないから」
ルイの言葉がすべてを表していた。
ヒカルはそれを聞いて、ベッドに近寄った。更に緊張した空気を感じる。ルイが警戒している。
ヒカルが無防備に、近寄ったから。
彼は全ての天体を遵えると言われている。
けれども、ヒカルという永遠の光だけは、思うように操れない。それが、彼を苛立たせている。

◆残焔　10

「ルイと、一緒に居たいの。ルイをひとりにしたくないの」
「オレはひとりになりたい」
ルイの言葉に、ヒカルはただ、哀しそうな顔をする。思ったより気丈な贖罪の娘は、そこでルイの言う通りの退室を選ばなかった。
ゆっくりと、彼に近付く。
ゆっくり・・・そう・・・決して警戒心を与えない速度で。
彼は、誰かに触れられることを嫌う。
自分の肌に、誰かの温度が混じることを嫌う。
だから、これは、彼の中に自分が存在しないのだと知らしめるために必要な間合いであった。

彼のベッドは豪奢なものではなく、非常に機能的であった。
しかし、その枕もシーツも、スプリングさえも彼の主張を満たすものばかりであった。
最高級の、その時に最高のものを使用しているが、何をもって最高としているのかは、彼の基準に沿わせている。
他者の基準は必要ではない。
彼は、自分でそれを選ぶことに意味があると思っているようだった。

天蓋つきかと思っていたが、そうではなく、彼の膝丈に合わせて高さを調節できるものであった。
これから、身長が伸びるたびに、この位置は少しずつ変わっていくのであろう。
頻繁に新しいものを取りそろえるという印象が強かったが、彼は眠りに関しては違う拘りを持っているようだ。

僅かな足音でさえ、彼には障るのであろう。
金の髪が濡れていたし、青灰色の瞳を縁取っている綺麗な睫（まなじり）が持ち上がって彼女を責め立てていた。
「・・・空調を調節する？」
ヒカルにとっては、暑くも寒くもない気温であった。
湿度や風量さえ調節されている部屋の中では、薔薇の香りしかしない。

花さえ存在しない、虚無としか表現のしようのない部屋の中で・・・ルイは、ただ、自分の身体をヒカルに見せないように、薄毛布を頭から被り、彼女がここを去ることを待っている。
それが彼の望みなのだろう。
誰かに、自分の意図していない姿を見せたくない。
星辰の子と言われ、彼はアルディ家の後継者として日々・・・誰に主張することもなく重ねているものがあった。
努力と言ってしまえばそれで済むかもしれない。
けれども、それ以上のものがそこにあるとわかっている。
こういう失調時の忍耐も、彼は自分に必要な当主としての資質として課しているような気がするのだ。

「ヒカル。オレの言葉が理解できない者は、必要ない。出て行け、と言っている」
「感染しない。だから、だいじょうぶ」
的違いであったのかもしれないが、ヒカルはそう言った。
たとえ、彼の炎熱がヒカルに転移するようなことがあっても、誰も責めはしない。
彼がもし・・・ヒカルの体調に影響するようなことがあったのなら、と思っているのであれば、それは杞憂であった。
彼女はたとえ失調しても、叱責するような者は存在しない。
彼女の存在を肯定する者は居ても、否定する者は居ない。
・・・それは時折、寂しいことであった。
ヒカルには、期待されていないことを思い知るからだ。

この家のこどものように、何かを求められることは、決して、ないのだから。

「ヒカルは何もかもを免除されるが、オレは君を失調させると面倒な手続きを取ることになる」
ルイが気怠げな声で言った。
自分の失調について訴えることはしない。彼は先ほどから・・・自分の状況をヒカルに言う事はしていなかった。
「シャルルもミシェルもいないのであれば、私がここに来ていることは誰も知らない。・・・ルイが言わない限り」
「本当にそう考えて居るとしたら、まったく愚かなことだな」
彼は浅く笑う。深い溜め息も嘲笑も・・・今の彼には、ただ体力を奪うだけであるようだ。
彼を覆っていた毛布が、はらりと彼の項に落ちる。
・・・まだ少年である年齢なのに、彼のなまめかしく艶やかな様が剝き出しになったので、ヒカルは言葉を失う。
彼女はそういった色の美について詳しくはない。ただ、毎朝、シャルルに捧げる薔薇の中には、どこか・・内なる感情の更に奥底にあるものを刺激する香りを持つものがあり、それを艶美と言うのだ、とシャルルに教わったばかりであった。
見てはいけないと思うのに、視線がそちらに向いてしまう。
そんな美しさのことなのだと朧気ながら理解した。
それが、今、彼女の目の前で・・・ルイが浮かべているので、ヒカルは、それで立ち去ることが出来ないのだ、と彼に正直に告白することのできない後ろめたさを感じていた。本当に大事なことは、簡単には口にできないのだと、知った。

◆残焔　11

芸術品のような美しさというものは、失調すると際立つものなのかもしれない、と思った。
不埒である、と責められても仕方が無いと思った。
しかし、ヒカルの中にある・・・母親から受け継いだ特質なのだろうか。美しいものに対して集中してしまうという自分のどうにもならない部分について、ルイは嫌悪しているように感じる。
遺伝子操作されて生まれてきたルイには「誰かに似ている」という表現が最も彼を貶める言葉なのだと思っている。
誰の摸倣でもない彼は、誰かの面影が自分にあることを厭っている。
これほどまでに、あのフランスの華によく似た顔立ちなのに。
もし、ふたりが歩み寄ったのなら、ヒカルでは到底理解することのできないような話を交わすことができるだろう。
寂しいが、それが本来あるべき姿なのだろうと思う。

けれども。
そんな気持ちがヒカルを包み始めても、ルイはただ冷淡に彼女を拒み続ける。

「・・・薬を持ってきたの」
ヒカルは、意味もなく立ち入ったのだと主張することはしないで、ルイへの役割を述べてみた。
ありがとう、という感謝の言葉は必要ではなかった。
しかし、ルイに・・・ヒカルにも役に立つことがあるのだと、ヒカルもルイの失調を心配しているのだと知って欲しかった。
独りよがりな考えであることは承知している。
でも、こういう時でなければ、彼はヒカルの話に耳を傾けない。
利用したと言って、彼が顔を顰めるのは予想できた。

でも。
誰も大人ないないアルディ邸の中で・・・彼の具合を心配しながら離れた場所で思いを馳せるより、こうして叱責されながらも近い場所に居たかった。

幼い時。
ヒカルが、ここにやって来たばかりのときに発熱してしまった折には、シャルルはとても優しかった。
どこにも連れて行かないで、と泣きすがるヒカルの声を、聞いてくれた。
いい子にしているから、だからここに居させて、と言ったヒカルの哀しみをわかってくれた。

もう、どこにも行きたくなかった。
不必要な子であると感じていた。
誰かに必要とされる自分ではないのだと幼い心ながらも感じ取っていた。
短期間預かってくれた父方の家でも、ヒカルを持て余した。
母方の親族は親切にしてくれたが、ヒカルを通してヒカルの母を見つめていた切なさを、ヒカルは受け止めることができなかった。
逃れるようにして、シャルルのところにやって来た。
彼は、父も、母も、忘れないで良いのだと言ってくれたからだ。

ルイは、そんなヒカルの心中を見透かしているかのように、辛辣な言葉を向ける。
どれほど器が不調であったとしても、彼の頭脳は決して霞むことはないのだ。
しかし、目の縁が僅かに赤くなった彼の眼差しはいつになくきついものであった。
ルイは、ヒカルのことをいつも無視する。
・・・好きの反対は無関心だ。
だから、彼はいつも、ヒカルに無関心だった。

彼はそこで溜め息をついた。

「ヒカル。それは、オレが別の者に指示した事だ」
「そう。・・・でも、どうしても、ルイに会いたくて、交代して貰ったの」
正直にそう言った。

彼には偽りも誤魔化しも通用しない。その場限りの言葉であるかどうかというのは、聡明な彼にはすぐに判断できてしまう。
自分の狡さも。自分の矮小さも。

彼には、隠すことが出来ない。
彼には、繕うことは出来ない。

彼がベッドの上で、膝を崩した。
フェンシングと乗馬で鍛えた彼の姿勢は、失調してなお美しい。
数十時間の筋肉の弛緩だけでは、彼そのものを変化させることはなかった。

けれども。
「ルイには必要でないかもしれない。でも、私は・・・ルイに会いたかったの」
彼女の声が、濁った。
互いに、きょうだいは居ない。
摂理であったのではなく、事情により・・・
そうなったのだ。
彼はそれに冷たく応じた。
「そのことによって、誰かが罰せられる。ヒカルが主張したことに応じるために、誰かが自分の職務を放棄する。・・・衛生管理の最終サインをしないでオレに渡す医療品が、信用できない品になるとわかっていながら、ヒカルに渡す医療従事者の無念が・・・君にわかるのなら、ここにヒカルは居ない」

◆残焔　12

ヒカルは唇を噛んで、俯いた。
彼女が決められた手順を無視したことにより、叱責される者がいるのだ。
おそらく、ヒカルは軽く窘められるだけだ。
彼女の中でそういう安心が今回のような行動を引き起こしたのだ、とルイが指摘していることに対して、何も言い返せなかった。

忘れていたわけではない。 彼女も承知している。
 この家の約束事は、他の家のそれと違うことが多いということも、ルイは生まれながらにしてそ

れが当然であるという教育を受けているが、ヒカルはいつか・・・そうではない世界に行く可能性があるのだということも。
ヒカルとルイの生きる世界は同じ様でいて、まるで違うのだと言い聞かせられているようだった。
彼の口からはっきりと「お前などは必要ではないのだ」と言い切られるより、辛いと感じる発言であった。
それに、彼は失調している。

何も、言い返せなかった。
言い訳は彼は聞き入れない。
彼女の理由は、ルイには必要ではない。

「気が済んだのなら、出て行ってくれないか。オレは気が長い方だが、自分の領域に入ってくる招かれざる者を厚遇するつもりはない」
彼がそう言ったので、ヒカルはますます言葉に詰まる。彼の言っていることは正しい。
自分の不調時に突然誰かが訪れれば、ルイのような態度を取っても文句は言えなかった。
けれども、どうしても・・・彼の様子を知りたかった。
「邪魔はしないから・・・部屋の隅で良いので、ここに居させてもらえる？」
「断る」
ぴしゃり、と彼は言った。
金の髪の星辰の子は、誰もを遵えるのに、ヒカルを支配することができない。

彼は手の平を自分の額にあてて、それから湿った髪を後ろに流した。
秀でた額や通った鼻梁や頬の滑らかさ・・・どれをとっても溜め息が出るほど麗々であった。
彼の物憂い青灰色の瞳が、ヒカルを睨んでいる。
「オレの今の話を聞いていなかったとは言わせない。これ以上長話をするつもりはない。・・・オレに何かを期待するのなら、それは叶えてやれないのではない。ヒカルの願いは叶えてやらないことにしているから」
彼の容赦のない言葉が、ひとつひとつ礫となってヒカルにあたり、棘となって突き刺さる。

それでも、ヒカルは・・・彼の言葉が終わるのを待って、言った。
予め用意していた言葉ではない。
この家に居るときには、何かを準備することはやめよう、と思っていた。
両親が戻って来ないことに対する構えも、シャルルがヒカルにだけ優しすぎて彼を失ってしまった時に対する備えも。
ヒカルは持たないことにした。この薔薇の邸の中にある、ルイの住まう建物であっても同じだった。

「でも、この家には大人がいない。ルイを看病できる人はいるけれども、ルイの様子をずっと見ている人がいない」
「・・・必要ない。なぜ、必要なの？必要があれば、都度、人を呼ぶ。それで足りる」
そこまで言ってから。
図々しい贖罪の娘だ、と彼はヒカルに聞こえるように呟いた。
彼女が常々、この家の者たちから贖罪の娘と呼ばれていることは、ヒカル自身も知っていることであった。唯一そう呼ばないのはシャルルだけであった。
ルイが星辰の子と呼ばれているのに、ヒカルは蔑称のようにして呼び捨てられる。烙印のように、どこにいてもそれを忘れることはできない。それが徴として存在する限り。

◆残焔　13

ヒカル・クロスは、大きく呼吸した。
そうしなければ、涙が・・・頬を伝ってきそうだったからだ。
彼に拒絶されたから哀しいのではなかった。
彼の傍には誰もいないことが哀しいのだ。

用事があれば、人を呼ぶ。
彼はそう言う。
けれども。
用事がなくても誰かに傍に居て欲しいという気持ちを彼が持てない理由があるからだ。
ヒカルはそのことを言えない。
言えば・・・ルイの誇りやこれまでを否定することになるから。
そして、自分はそれを解決できないからだ。今は、まだ。

しかし、誰も寄せ付けない冷然な彼の態度は、失調してなお変わらない。
目の前に、横たわることもできないほどの苦痛をヒカルの前で表出しないように制御しているルイのことを考えればすぐに退室した方が良いのだろう。
けれども、できなかった。
何もできないこともわかっているし、思いつく限り考えたが彼女がこの状態のルイに何かを捧げることができるのは、ただ、彼の言うとおりにすることだけであった。
でも。
身体が、動かない。

身を屈めて寐台の上でじっと時間を過ごしているルイを置いて行けなかった。

「・・・ルイを置いて行けない」
ヒカルは言った。
「そういう台詞を聞いて喜ぶのは、シャルルだけだ」
彼はそれだけ言うと、疲憊した溜め息を漏らす。
・・・ヒカルはそこでまた俯く。
彼が本当に欲しいのは、シャルルからの言葉なのだ。
ヒカルではなく、ミシェルでもなく・・・父からの労りの言葉であった。
それを、ヒカルは捧げることができない。
朝摘みの薔薇を捧げても、彼は満たされない。
「寝ていて構わない。ルイが眠るまでは、ここに居たい」
ルイが失笑した。
「オレは誰かがいると眠らない。眠っても僅かな時間だけだ」
その抑揚のない声を聞いて・・ヒカルはただ、絶句するばかりだ。

誰かの傍では眠れない。
ひとりでないと眠らないとルイが簡単に言ってしまったから。
その若さで、ルイは眠れない、と言うのではなくて・・・眠らないと言った。

彼は、誰にも心を開かないのだと言い切られてしまった。
彼はまだとても若いのに。まだ、青年になるどころか少年になったばかりの顔でもって、厳しく自分を定めてしまっていた。

「誰かのため、と言う時は・・・大抵、自分のためであることが多い」
少し沈黙した後に、ルイはそう言った。
金の髪を掻き上げながら、彼を覆っている毛布の端を持ち上げて、更に深く被り直した。
・・・彼の表情は見えない。
頬から下の恐ろしく整った顔が、僅かに動いて、声を発した。
こうして部分部分を見ると、彼はシャルルとミシェルによく似ていた。
アルディ家の者は、こういう顔立ちの者が多い。
けれども、ルイの祖父にあたる人物と曾祖父は似ていなかったし、祖父とシャルルはこれほどまでに酷似しているということではなかった。
ヒカルが知る限りの情報では。
これほど頻出するということは・・・何か、この家に秘密とも理由とも言えないような状況が存在するのだということだけしか、わからない。
ヒカルはアルディ家のことに関わりを持ってはいけないことになっている。はっきりとそう言わ

れたこともあるし、暗黙の中でそうなのだろうと思っていた。シャルルから言われたことはないが、ヒカルから遠ざけられている話題が幾つかあることは明白であった。
そのうちのひとつが、ルイとシャルルの不仲について、であったけれども。

「・・・・ひとりは、怖い」
やがて、ヒカルがぽつりと言う。
やっと言った、とルイは笑いを喉元に含ませていた。彼の見通しのとおりである。
「君は単なる愛翫物であることについて、納得しているのかと思った」

ヒカルは寂しそうに微笑んだ。彼女はまだ少女であり、そのような諦観を含めた笑いを浮かべる様を、シャルルに見せることはなかった。
でも、なぜだろう。ルイの前では正直に・・・自分の心の内をさらけ出せるのだ。
シャルルや他の者の前では気配すら感じさせないようにしていることすら、ルイにはわかってしまう。

#next_pages_container { width: 5px; hight: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }

◆残焔　14

そこで彼女は泣き出しそうな顔をしてそのまま部屋を出て行くのだとルイは予定していた。
けれども、彼女はそうしなかった。
ヒカルは、ルイのベッドの傍に近寄ると、そこで彼のベッドの足元に腰を下ろしてしまった。
彼のベッドは特注の品で、最高のスプリングが使われている。寝汗を吸収しやすいような素材のシーツに、彼が羽織っている毛布の色が重なって、星河に居るようであった。青灰色の瞳と金の髪の少年は、波とも星とも言える中でただひとり・・・小さく屈み込んで気配を殺しながら、自分の炎熱と闘っている。鎮静剤の副作用があるのか、彼はひどく気懈そうであった。
ひとりにしてくれ、と言ったルイの足元に座った。
膝を屈めて、ルイと同じように・・・身体を丸めてベッドに背をあてる。
スカートの裾が広がって、彼女の髪が膝の上に乗った。
硬い木材には、細かい彫りが入っている。
そして、彼にはヒカルの茶色の髪しか見えない。
まるで動物のように、誰かに愛でられることを待っているかのように、誰かを案じているかのように、彼女は小さくなって囁いた。
背中越しに居るルイに向かって、そっと言う。
腕を掴まれて、背中を押されて部屋を出されるかもしれないと思った。
しかし、ルイは彼女の行動をただ、黙って見ているだけである。

「こうしていれば、見えない。ルイが眠るまでで良い。・・・だから、少しの間だけ・・・私と居て欲しい」
彼女はそう言った。
「オレの話が聞こえなかったのか」
「確かに、私は何もできない。何もできないから、ルイの傍に居たい」
「断る」
彼の溜め息が聞こえる。本当に失調の程度が尋常ではなかった。
ヒカルは顔を上げて身体を捻り、彼の足下から茶色の瞳を覗かせた。
「・・・誰か、おとなを呼んでくる？」
「必要ないと言っている。君が出て行ってくれれば、それが一番の薬だ」
彼の冷たい視線が突き刺さるようであった。
彼はアルディ家の居候に対して容赦がなかったが、決して手を上げるような暴力は働かなかった。いつも、彼女を冷たく拒絶するだけであるが、激しく声を荒立てて叱責するようなことはしなかった。
「それなら、黙っている。だから、少しだけ、ここに居ても・・・良い？」

彼はとうとう、大きな溜め息を漏らした。
「許可がなくても・・・君は自分の遣りたいことだけをオレに押し付けてばかりいる」
これほど拒絶しているというのに、ヒカルという人物は、ルイに対して警戒しない。シャルルと不仲である相手に対して嫌悪感を抱かない。
「愛翫物なら、それらしく、静かにしておけ」
「・・・・私のことは、誰も愛でないよ」
ヒカルがぽつり、とそう言ったので、ルイは綺麗な眉を僅かに動かした。
誰からも愛されるということに執着している少女は、自分は、誰からも愛されていないのだと告白したからだ。
彼女は、身体を再び小さくしながら、言った。
「みんなが私に良くしてくれる。とても恵まれた環境にいると思う。・・・あのまま日本に居てもみんなが私のことを大事に思ってくれるけれども・・・私は自分が可哀想だと思ってしまっているのかな、と思うの」
そこでルイは返答しようとして口を噤んだ。彼女は、突然両親が消息を絶ってしまったあの時から、シャルルに会って手続きを経て・・・アルディ家にやって来るまでの期間を、日本で過ごしていた。その間に・・・彼女の記憶に刷り込まれてしまったものがあるのだ。
確か、父方にも母方の家にも居たはずであった。その間、彼女が誰にも心を開かずに、しかし愛されなければ自分の居場所はないのだと思って生きてきたとしたら。
彼は無言であった。
自分がどれほど哀れであるのかを語るヒカルには興味はない。彼はそう言うのかと思ったが、ヒカルの話を遮ることもなかったので、彼女はそのままで話を続ける。
「・・・ここにやって来て、初めて熱を出した時。シャルルは優しかった。とても、優しかった。具合が悪かったことを黙って居たから、だいぶ悪化させてしまった風邪で、高熱が出て何も言えないほど苦しかった。
でも、苦しくないと言い続けた。
・・・私はいい子にしていなければ、ここでも居場所を失うと思っていた。
だから、シャルルをお父さんと呼ぶようにと言われればそうなのだ、と思うことにしたし・・・シャルルから父と呼ぶなと言われれば、そのとおりにした」
ヒカルは自分の膝に、自分の頬を押し当てた。

・・・切ない溜め息を漏らす。
過去のことを語るのは苦手だった。
自分が何を思っているのかは、ルイには必要ではない。
でも、こうして・・・長い年月を一緒に過ごしたのに、これほど近い場所で、これほどの時間を過ごすことはなかった。

ルイはヒカルを避けていつも姿を見せない。

・・・彼のことを傷つけているのは自分だとわかっているけれども、それでも大人しく顔色を窺っているだけではルイに近付けない。

◆残焔　15

「・・・どこに行き着けば・・・ルイは安らぐのかな」
彼女はそう漏らした。
こたえはわかっている。
ヒカルがルイの目の前から消えることを、彼は望んでいる。

でも。
彼女には行くところがない。
そして、ヒカルがここから居なくなってしまったとしても、ルイの憤りやシャルルの哀しみは消えて無くなることはない。
日々、シャルルの愛したファム・ファタルの面影を濃くしながら成長するヒカル・クロスの姿がシャルルの精神の均衡を保っている。
だから、誰も何も言わない。
彼女にも、何も言わない。まるでそこに最初からあった不自然な彫像のように扱われると感じることがある。
でも、それでも良いのだと思っている。
・・・シャルル・ドゥ・アルディには、ヒカルが必要であったから。
・・・彼女と出会う前の、2年と少しの荒れた時期を耳にする度にヒカルは思うのだ。
シャルルに必要なのは、マリナという人物であって自分ではない。
けれども、自分が幸せそうにしている様子を見ることでマリナへの思慕や後悔や狂気を彼は抑制しているのだ、と。
自分はマリナではないが、マリナの娘であるから、シャルルはヒカルを大事にしているのだと思うと・・・どういうわけか、涙が出てくる。
なぜなのか、わからない。
でも、涙が溢れる。
それを、誰にも見せてはいけないのだということだけは感覚的にわかる。
だから、誰にも涙を見せないことにしている。

・・・そう決めている。

それだけが、自分の自由になる事柄であったから。

「・・・それは必要条件ではない」

そんなヒカルに、彼は言った。
聞き分けの良い子であることが、求められているのではないのだと主張するルイはいつも正しかった。
「オレを理由にするな」
「そうだね」
ヒカルは、また、自分の膝に顔を埋めた。
これほど近い場所にいるのに、途方に暮れてしまうほど遠い距離を感じる。
「ありがとう、ルイ」
彼が彼女に労りの言葉をかけることはなかった。
けれども、それが今は彼女を惨めにさせるどころか、心を落ち着かせている。

彼女は背を凭せて自分の茶色の髪に頬を寄せた。
どこか遠くを見るような目付きの彼女の中には、ここではないどこかに行きたいと思っている気持ちと、ここでしか生きられないという諦観が同時に存在している。しかし、ルイにはそれは見えない。彼女はルイに背を向けているから。
「オレは君に期待された言葉を言わない。絶対に」
「うん・・・・」
それから、彼女はゆっくりと言う。
「ルイには、シャルルがいて・・・ミシェルがいて・・・そして帰ることころがある」
「羨ましいなら奪ってみろよ。欲してばかりのヒカル」
ルイの越えに、ヒカルは桜色の唇をぎゅっと引き結ぶ。
ルイはヒカルより恵まれているという恨み言などはヒカルには浮かばない。
ただ、失ってしまってからでは、二度と再現できないからだ。

ヒカルは、自分の選択ではない事情によって、もう逢うことが出来ない家族のことを思い続ける。
「それほど、家族の・・・父と母の役割を持つものが欲しければ、帰れば良い」「どこに？日本に？」
ヒカルは少し笑った。

帰るとは・・日本に帰ることなのだろうか。
彼女が、帰る場所はどこなのだろうか。

◆残焔　16

「帰ってこない人を待つのは・・・苦しい」
彼女は上を向いて、自分の膝に身体を傾ける。

どこまでも・・・どこまでも、自分の我が侭は底を深めていく。

この家に居て、これ以上の望めない教育を受けている。
でも、それでも寂しいのだ。
満たされないのだ。

いつも、何かに餓えている。
それがルイには透けて見えるのだ。
父も母も居ない。
ヒカルは囁く。
誰かに聞こえることを畏れているのに、それをルイに聞かれていることも承知の上で。
「でも、ルイは帰ってくる。ここに帰ってくる。私は、それを待っていたいの。いつになるかわからないけれども、ルイが帰ってくるまで」
そして、そのまま自分の膝に額を押し当てた。
そうしなければ、抱え込んだ想いが噴き出しそうになるからだ。
贅沢な悩みだとわかっている。
でも、この家にヒカルの場所はない。日本に戻ったらもっと・・・居場所がない。どれほど愛してくれても、ヒカルはもう黒須昶からヒカル・クロスになったのだから。
それを選んだのは自分だ。
ここに居たいと懇願したから、シャルルがそれを聞き入れてくれた。
それはヒカルがあの人達の娘だから・・・シャルルの親友と運命の人との娘だから、シャルルは優しいのだ。

・・・ルイは黙ったままであった。

彼の心の内は、誰にもわからない。
こうして失調しても、彼は弱音を吐かない。アルディ家の子として誇り高くあれと教えられているからだ。苦痛に耐え、日々の鬱屈した空気に酔うこともなく彼は淡々と日々を過ごしている。
その中で、ルイは家族やヒカルを切り捨ててしまっていた。必要がないから、と彼は言うが・・・本当にそうなのだろうかとヒカルは思う。

期待すれば、失望はそれだけ大きくなるから、期待しないようにしているだけなのではないのだろうか。
そう思えるのだ。

「ルイ・・・」
ヒカルは静かに彼の名前を呼ぶ。けれども、返事はない。

そこで、ヒカルは顔を上げて、彼の座っている後方に振り返ろうとしてやめた。眠っている姿を見られたくないと思うからこそ、彼はこうして誰も近付けないのだ。
しかし、自分がひとりで話をしている間、彼が最悪の状態になってしまったのかもしれないと思うと、慌ててしまう。
自分の持ち込んだ医療品が彼の手にされる前に、ここに座り込んでそして話し込んでしまった。

ここに務める者たちへの配慮が欠けているとルイに指摘されたとおりであった。
自分は、この薔薇の館のしきたりのすべてを知っているわけではない。
いつか・・・いつか、ここを出て行くことを予定されている者のひとりなのだと思うと、切なくなる。

どこに行っても、自分の居場所はない。
転居が多かった母の考えていることに近いように思えた。
どこにもないから、自分で居場所を作った。
それがルイの場所であったこともわかっていたのに。
もうどこにも・・・どこにも行けないと思ったのだ。

「・・・ルイの場所を・・・いつか、必ず返すから・・・」
ヒカルの睫から涙が零れた。
ごめんね、という謝罪の言葉はルイを傷つけるだけであった。
彼の誇り高さについてはヒカルもよく知っている。

妹と思って遇するように

彼はそう言われた。
けれども、それは同時にヒカルに対しては「兄と思え」という言葉であったのだ。ルイを兄として慕うことは難しい。彼はルイ・ドゥ・アルディであり、ルイにはきょうだいが存在しない。その理由について、ヒカルが影響していないかといえばそうではなかった。
ヒカルの両親が消えてしまって・・・シャルルはルイの母にあたる人物と離婚してしまった。ルイに弟妹を与えることもせずに。
ヒカルがここに居るから、シャルルは再婚しないでいるのだと言う者もいる。それは正しいと思った。
だから・・・自分が誰かを幸せにできる存在であるとは思えない。けれども、誰かを待つことはできるのかもしれないと思ったのだ。
両親を待つ。

シャルルを待つ。

ルイを、待つ。

◆残焔　17

どこまで話しても、ルイからの返事はなかった。
返しを待った話ではなかったが、それでも・・・胸が痛む。
ぎりぎりと強烈な堪え難い重さではなく、ほんの少しずつその傷に気がつきつつもそれが絶え間ない疼痛をもたらすのだと気がついた時には、その痛みに・・・少しばかり鈍感になってしまっているというような性質のものであった。
彼女は幸せに慣れてしまって、哀しみや痛みや苦しみに鈍くなっているのではないのか、とルイが問いかけているような気がした。

「私は・・・薔薇になれない」
彼女はようやく、そっと・・・これまで堪えてきた言葉をそっと吐き出した。
彼女は薔薇の化身といわれている一族の中で育ったが、薔薇そのものではないのだ。
棘も持たないし、豊かな芳香も、魅了する鮮やかな色の花瓣も纏っていない。
根を張る球根も苗も残せないし、彼女がここに居たという記録すら・・・時が来たら抹消されるのだ。
彼女にはルイのような系図原簿は存在しない。
ただの預かり人である。
だから。
本来なら、ここに居てはいけない存在だから。
入るなと言われた場所に居座り、蹲って自分の話したいことだけを話しているルイから見れば我が侭な娘であるとしか映らないだろう。
失調しているルイのことを考えれば、ひとり寝かせてやるのが最適であることはまだ少女のヒカルでもわかることだ。
それでも、彼をひとりにしておけなかった。看病したいという自己満足なのかもしれない。医療行為はヒカルにはできないことであるが、自分にできることと言えば彼の傍に居ることだけであった。
「・・・ルイ？」
彼女はそこでようやくルイの方に振り返った。
けれども勢いよく向き直ることはしない。
彼に叱られることがわかっているから。
彼に叱責されることではなく、彼に不愉快を加えてしまうことが懸念された。同義であるかもしれないが、彼女の感情よりルイの感情の方が気になった。
そしてこの静寂にも。
彼女はまだ幼すぎて、様々な事態について想像しきれなかった。

彼が辛辣な返答をしない時は、何かを考えこんでいるときか、完全に無視しているときだ。彼女は、それしか経験していない。
病んだ獣のような状態のルイを知らない。
だから、対処できなかった。
茶色の瞳を俯かせたままで、ゆっくりと瞼を持ち上げる。彼女が凭れているベッドの縁と同じ目の高さであった。
ヒカルの視線がぴんと張られたシーツとベッドスローを越えると、ルイが大きな羽根枕に身体を預けて横を向いていた。
「ルイ」
彼女は慌てて立ち上がった。
ルイの金の髪が濡れている。
高熱のために発汗しているのだ。喉元高くまで留め合わせることのできるフードつきの部屋着の中に顎を埋めて眉を僅かに寄せている。青灰色の瞳はぼんやりと空を見据えていたがそれは半分意識がないので、瞼を閉じることもできない極度の脱力状態に陥っているからだと思われた。
「来るな」
こんな時でも、誰かに弱った顔を見せないというルイの誇り高さがあった。
儚さを併せ持った、近寄りがたい美しさであったが、ヒカルはそれに臆せずベッドに膝を飛び乗せてルイに近付いた。
彼女が乗った時に、ベッドが音を立てた。
彼女のスカートの裾が翻って持ち上がったが、ヒカルは気にすることもなかった。

シーツが乱れても気にしなかった。
スプリングが軋んでルイの身体が僅かに横に揺れてもヒカルはそれでも彼に向かって腕を伸ばす。
叱られるのが怖いとか・・・傍に居ることだけしか出来ないと歎いている時間はなかったのだ。
必要ない、と言ったルイの言葉にそのまま従ってしまっていた。
ヒカルはルイの傍に身体を寄せて、手の平で彼の頬に触れる。
ぴくりとルイが頬を動かして、虚空を見つめていた青灰色の瞳が一瞬ヒカルを認識した。
彼は奥歯を噛みしめながら、切れ切れに言った。
「近寄るな」
彼女の手の平を拒むことができないほどに痺れた身体の中に残っている僅かな力で、彼は横を向こうとしたが、ヒカルの両手に圧さえられたので不愉快そうに顔を顰める。

彼は誰にも何にも服従しない。
たとえ、炎熱に灼かれていたとしても。

「ルイ・・人を呼んでくる」

「必要ない」
彼は繰り返さないのに、繰り返した。
「ヒカル。誰も呼ぶな」
彼はそこでヒカルの手首を掴む。
・・・・熱かった。灼けてしまいそうなほどに。
◆残焔　18

躊躇いがちに、ヒカルは言った。
彼女の声そのものも、今のルイには障りになる。
それだけはわかる。

だから、声を落とし、必要最小限の素っ気ない言葉とも捉えられてしまうような言葉でもってルイを説得する。
ルイはいつも淡々と話をするのは、こういう風に聞こえているからのかもしれない。
そう思った。
この世のすべての音が、温度が・・・彼を蝕んでいると考えているのだとしたら。

なんて、無機質で無色な世界に彼は居るのだろうかと思った。
色や音に加えて温度も彼の傍にいないのだとしたら。
彼は何を幸せに何を生きがいにして生きているのだろう。
何を温かいと思い何を眩しいと感じて過ごしているのだろう。

「何か飲む？」
ルイは返事をしなかった。
息苦しそうに顔を顰めてただ耐え続けている。
ヒカルは更に焦りながらも彼の背にあてられた羽根枕を手前に引いて傾いた彼の背中に腕を回す。
非力な彼女に身体を預けたルイの身体はヒカルには重い。
着やせして見えるが非常に筋肉質で均整のとれた体軀であったので、ヒカルは均衡を失いそうになりながらも膝立てて脚に力を入れる。
その間もヒカルは彼に話しかけ続けた。
身体を屈めて、彼の頬に唇を近付けて意識を確認する。
触れていなくても、わかった。
彼の身体は相当に熱かった。
本当に、驚く程熱かった。
彼女の手首を握ったままのルイの手の平からは焔が見えそうなほどだ。大丈夫だと彼は言ったが、やはり薬の到着を待っていたのかと思うと、自分の愚行をただ後悔する。

けれども、今、そのことについての思考の時間は必要ではない。
自分が愚かであることに酔っている余裕はなかった。

「・・・何が必要？」
この言葉にもルイは返事をしない。
ぎゅっと引き結んだ薄い唇が僅かに震えている。
ルイ、と彼の名前を幾度呼んでも彼は彼女に背中を向けることもできずに顔を横に向けるばかりであった。

「何が欲しいの、ルイ」
ヒカルが囁くが、早口で聞き取れないかもしれないと思った。

誰か本当に医療部の誰かを呼ばねばならない、と考えて彼女が身体を起こし、ルイを横たえて手を離そうとした瞬間。
返事の代わりに・・・
ヒカルの手を握ったルイの指が緩くなり、ヒカルの手が離れた瞬間。

・・・ヒカルが僅かに緊張し、それからすぐに泣きそうな顔になった。

掠れた声で、ルイ、と声をかける。
彼の指先に、力にならない力が入ったような気がしたからだ。
彼女を振り払うかと思っていたのに。・・・炎熱に浮かされながら彼が求めていたのは、彼ではない誰かの温度であったのかと思うと・・・ヒカルの中で大きく揺さぶられる思いがあった。

自分の失調した時を思い出す。
強烈に。
鮮烈に。
だから、聞き逃してはいけない。
僅かな合図を見逃してはいけない。

何かが、彼女にそう告げる。

たとえ自分がそう思い込んでいるだけの杞憂事であるかもしれないが。
誰かのぎりぎりの声は聞こえないものだ。
ルイから声が聞こえないのはヒカルが聞こえていないだけだ。

とにかく横にさせなくてはいけない、という気持ちが先行する。

気持ちが先走り次の行動を順に思いつくことが出来ない。

ヒカルはそこで、急にこの部屋に涼気を感じた。
空調は一定で、暑くも寒くもないはずであるのに。

ここはヒカルの知る何もかもと違っていた。

ヒカルの部屋とは違う。
シャルルの私室とは違う。

まったく生活感のない空間で、ここでルイがただ横たわるだけの休息を求めているとしたら、それはなんて哀しくて虚しくて切ないことなのだろうと思う。

部屋の中には、必要最小限のものしか置いていない。
調度品というものも本邸にあるように高雅であるけれども、すべてにおいて、機能するかしないかで選んでいるような気がした。

◆残焔　19

彼をひとりにできない。
ルイを哀れだと思うのではなく、自分がそうしたくないのだ。
彼が目を醒ました時にひとりでいる様を想像するだけでヒカルは胸苦しさを感じる。彼は完璧で特別であるけれども、このような時には誰かが傍にいて、彼の回復を見守ることが必要であるように感じる。

彼に、何が必要かと尋ねた時。
彼は熱に浮かされて何も答えなかった。
けれどもその問いに明確な答を持っていたと思われる。

ルイ・ドゥ・アルディは・・・
孤独が好きなのではない。
孤独に打ち克つ強さを持っているだけなのだ。

星辰の子と呼ばれて、彼は・・・誇らしく思ったことはないのだろう。
フランスの華と呼ばれるシャルルへの称号と明らかに違うそれにルイはいつも哀しんでいるよう

に思えた。

しかしヒカルはルイに何も言えない。
どこにも、誰にも、そしてルイにも・・・何も言えない。

彼には届かない。
言葉は届かない。

それなら。
ヒカルができることはもう、これしかないと思った。
苦悶に満ちた顔を見せるルイのために、ヒカルができること。

・・・ヒカルしかできないこと。

誰も呼んではいけないと彼が言う。
けれども、誰かを呼ばないと彼は助けられない。

ヒカルは・・・そこで決心した。
これまで、彼女は主張することもなく過ごしてきた。そうしなければならないと自分で決めていた。自分は、この薔薇の家の仮住まいであるしかない。
だから。
何かをしたいと言ってアルディ家の権力を使うことはなかった。
彼女は、どこに行き着いてもこの家のこどもにはならなかったから。どれほどシャルルがヒカルを愛でても。この家の人々が認めなくても。ルイが赦さなくても。・・・今、これを使う時なのだと思った。

彼女は、自分のIDチップを噛んだ。

・・・この間の歯科検診で新たに埋められた生体チップである。
IDチップシールは常に身につけていないといけないことから、彼女の沓の踵に埋め込まれることが多かった。
が、先般、特例だとしてシャルルが開発したものがある。

・・・成長著しい彼女のために生体チップが開発された。

大変に薄く小さいもので、唾液や胃液に左右されないコーティングを施されて本人はまったく気がつかない。

本人への負担はない。
けれども、永久歯が生えそろった者しか使用できないというデメリットもあるが、利点の方が大きかった。
シャルルはヒカルにそれを説明した上で、扱い方を教えた。

アルディ家の者は、常に誘拐や拉致監禁に備えていなければならないこと。
装飾具は常に身につけていられないということから、奥歯か上腕皮下への埋め込みを採用したこと・・・。
けれども、ヒカルは生体に埋め込むことを必須としない立場であるから、いつでも取り外しができる場所に・・・個体識別のためのチップを貼付することを説明されたばかりであった。

・・・・それをシャルルから聞いた時。
ヒカルはノンと言えなかった。この家で発生した様々な事件を耳にする度に、シャルルがどれほどセキュリティに心を砕いているのかということが理解できたから。どの場所に誰が出入りできるのか許可範囲を確認しなければ、彼の生家でありながら・・・ルイの生家でありながら落ち着けないのだと言い切る理由を聞いていたから。

これまで、アルディ家の者が身元不明の者として扱われたことが少なからずあったのだと思うと、苦しかった。
華やかな晄しかない場所ではない。
彼女の知らない程に遠い昔から続く昏い晄というものも存在する。

・・・これを破損したり取り外したりすれば、どのような事態が待っているのか、ヒカルは知っていたのに・・・それを実行することにした。

彼女は、彼女の安全を示すセキュリティ・チップの在処を舌で確認すると・・・一気に、噛みしめた。顎の軟骨に、そのチップが割れる音が鳴り響いた。

◆残焔　20

チップを割ったときに、通電による痺れと苦みを感じた。
体温で逐電できる劃期的なそれを砕いた。
それがどういうことであるのか、ヒカルにはわからないという言い訳は通用しない。
説明は受けていたし、緊急時にしか使用してはいけないと言い含められていた。でも、今は緊急時だ。
ヒカル本人の危機ではないかもしれないが、ヒカルが困窮していることには変わりがない。

・・・これで、誰かが来てくれる。

その後の自分の肉体への影響などは考えていなかった。
ただ、ルイの苦しむ姿を見ていたくなかったのだ。
見つめ続けると・・・見届けて彼が眠りに入るまで伴に居ると言ったのに、彼女はそれを放棄して誰かに助力を求めた。

室内に設置されている内線電話が鳴り響いた。
信号が途絶えたので、安否確認連絡なのだろうと思われたが、受話器を取ることはしなかった。
ヒカルが応対すれば・・・・誰も来なくなってしまう。
ヒカルの安否確認のためにこの家の特殊な任命を受けた者は動くがルイの場合には適用されない。

自分の運命や窮地に対処できない者は、アルディ家には必要ない。

現在のアルディ家当主はそういう信念の持ち主であった。
誰かに助けを求め、誰かに縋り、誰かに懇願しなければ生き残れない命であれば、それは必要ではないと拒絶している。

・・・彼の若い時がそうであったのだろう。

唯一の後継者として育てられたのに、同じ遺伝子を持つ弟がいて、その者の方がより適任ではないのかと当主の資質を疑われた。
そんな時に、シャルルに求められたのは孤独に打ち克ち、孤独を越えるほどの何かを彼が形成できるのか否かという「試練」という名前の課題であった。
そしてシャルルはそれに応えて今を迎えている。

だから。

ルイにもそれを求めているから、彼は実息に冷淡であるのだと思った。
冷淡と見えるのはヒカルの主観で、アルディ家に必要なものをルイに与えているのだと・・・ヒカルはそう思うから。
孤独に耐える強さをシャルルはルイに伝えようとしている。
そうなのだと信じたかった。誰かに念押ししてもらうようなことではないから、ヒカルは自分で確信したかった。

・・・ひとりで解決しようとするのがルイで、ひとりで解決できないと思うのがヒカルだな・・

・

以前にミシェルにそう言われたことを思い返す。

その通りであった。

ヒカルは、自分ひとりで解決できない。
誰かの助力を受け入れることや期待することを恥じて生きることはない。
たとえ、裏切られたとしても。
それが彼女の母を彷彿とさせる行為であるのだろうと承知していても。
ヒカルはそれで自分が貶められることはないと感じている。
でも。
ルイはひとりで居ることを選んでしまった。
その路を通る事無しに為し遂げられないと考えている。
誇り高く孤独で、誰にも理解されなくても構わないと思っている。

だから、ヒカルはこの家から離れることはしない。
アルディ家には、両親の気配が残っているような気がした。
母が滞在した場所。
父が足繁く訪れた場所。

だからここから離れられない。
ヒカルには思い出が少ししか存在しない。
だから。
ヒカルが生まれるより前の父と母の足跡が残っている気がしたからここに居るのだという理由は矮小であるとルイに嘲笑されても、ヒカルはそれでもここに居る。

命に別状はないかもしれない。
けれども、彼の心は身体が癒えても凍て付いたままなのだ。
彼の熱は、彼の孤独を熔かすことはしない。

◆残焔　21

ルイから離れることができなかったのでやむを得ず使用した、と事情を説明した時の大人達の顔はあきれ顔であった。
が、彼女なら遣りかねないと思っていたらしく、それほど大事の処理はしないと言った。自分の存在と彼らへの影響にかかる予測に対して、大きな開きがあることに驚きはしない。

ルイは自分の申告の通りの症状であったから、ヒカルがひとり騒いでいただけであったという結果にするのであれば、それに従うつもりであった。
担当者達が駆けつけた時には、ルイは意識を取り戻しており、点滴を受けるのでしばし横になると言った。
彼は驚異的な精神力でもって彼らの前では決して乱れた姿を見せることはしなかった。
その時には、もうヒカルの方を向いていなかった。
彼は、ヒカルの存在は完全に無視していた。
ちらりとも見なかった。

大人達に囲まれていたので、ルイの姿は見えなくなり、ヒカルは部屋を出るように言われる。
彼は大勢が部屋に入ることを好まない。
だから、入室できる者を制限している。
そう聞いていたので、ヒカルは制限の対象になったのだと思った。
しかし、彼女は諦めなかった。
・・・退去しろと命令されたわけではなかった。

ヒカルはルイの傍に居たいと懇願した。一度別棟を出てしまえば、二度と入れなくなる。
大人達は、当主の許可がないと言ったがヒカルはシャルルに叱責されることも厭わないから、誰にも責任を取らせることはしないからと強く言った。
ここにはルイ以外の誰かが滞在するに相応しい設備はあったが、実際に誰かが滞在したことはない。
物理的にも長時間の滞在は難しいだろう、と諫めても、彼女はウイと言わなかった。
「何もいらない。何も必要ではない。だから、ここに・・・いさせて」
とうとう、困った彼らは緊急報告としてシャルル・ドゥ・アルディに連絡を取った。
それでようやく許可が下りたというのだ。
しかも、今回限りで、という条件付きであった。
当主がそのように言った時で、その後同じことを許可した試しはない。
彼はフランスを越えて世界に誇る知能指数の持ち主であり、驚異的な暗記能力の天才であった。
一度見たものは忘れないし、過去の記憶について鮮明に詳細を語ることができる。
色や匂い、音、そして温度まで彼は覚えているのだ。
そんな当主が、ヒカルに早々に対して指示をしなかった。
ルイに対する医療措置の正誤を検証しただけであった。
ルイの判断が間違っておらず、彼はあとは適切な温度湿度の中で静かに眠り、適度な水分を補給すれば大事に至らないと判断された。
・・・シャルルの判断だけで完了することのない、ルイに対する体制について、普段感じなかったことでも彼女はこの上なく・・・苦しく感じる。

ルイの体調管理に関しては、秘密漏洩防止のために、誰にも立ち入らせていない。それはヒカルであっても特別扱いはされなかった。

それは良く承知していることであった。

◆残焔　22

彼女は蹲って眠ったことがあった。

彼女の両親が帰ってこなかった時。
日本を離れてパリに移り住むようになった時。

あまりにも遠い記憶であったので、忘れてしまっていることも多い。
けれども、ぼんやりとした記憶が甦るのは・・・今、こうして部屋の隅で身体を屈めて気配を押し殺して呼吸数と心拍数を数えて時間を過ごしているからであった。

ひとりで抱えるものが何で在るのか、わからなかった。
小さく身を縮めて、孤独と一緒に淅瀝とした時間を過ごす。

どうして自分はここに居るのだろう、と思った。
両親の不在を受け入れることができずに、天国という場所に行ってしまったと言われてそれを納得させるまでの間、彼女はこうして身を屈めて眠った。
けれども、いつしか・・・自分はベッドに横たわって眠るようになった。
周囲の者が心配するからだ。
枕に身体を預けない姿を心配し、夜中に何度も誰かが彼女を見届けにやって来る。

そんなヒカルの姿のことをシャルルは何も言わない。
だから気がつかなかった。
夏に日本に戻って母方の叔母の家に泊まる時に指摘されるまでは。
彼女は眠り込むと身体を丸めてしまう、と言われた。
赤子に戻りたい、と自分が願っていることが眠っている間に現れているのだと思うと、ただ、恥ずかしく申し訳なかった。
自分の行動ひとつが誰かに影響するのだと思い知る。
何をしても、誰かを幸せにすることはできないのだろうか、と最近は考えこむようになった。
彼女の存在そのものが、シャルルの生きる理由になるのだ、とシャルルがヒカルに言い聞かせた

としても、ヒカルはそれに慢心するような状態にはならなかった。

心の中にある洞がいつまで経っても埋まらない。
叶わない願いを咎のように感じる。

だから、ルイにはそんな風に眠って欲しくなかった。彼は星辰の子と呼ばれてすべてのものが彼に惹き寄せられ、何もかもを手に入れることのできる立場にある。
弱い姿を見せて欲しいとは思わない。ただ・・・ヒカルの持っている物思いと同じ様に、彼には彼だけの洞や燻る焔が存在するのだ。

一緒に居たかった。
ヒカルで理解できることはなかったが、ヒカルはそうすることで自分を癒したかったのかもしれない。
そう言えばルイはまた冷笑するだろう。
他者を自分のために使うときには、効果的であることが優先される、と。
ルイには何も残らないのに、彼女だけ癒されるのだろう。
しかし、こうしてルイの寝室と壁一つ隔てているだけであるのに、心が痛く寒く・・・ただただ、切なかった。
彼には見舞ってくれる者がいなかった。
彼は、親族の者からの見舞いの品は受け取らないことにしている。
そして親族会の最中に失調するということは・・・彼はそれまで耐えていたのだろうと思った。
自分の不調で左右されない親族会とシャルルを確認しているように思える。
そして・・・・そして彼は見極めているのだ。
自分に有利に駒を進めるためにはどうしたら良いのかと考え続けている。
彼の側に寄ろうとしているかどうか。
同じ血を分け・・・愛することに対してなんら躊躇することもないはずの関係であるのに。

少し、涙が出た。
憐れんでいるのはルイに対してなのか、自分自身に対してなのかよくわからなくなってしまった。
頬を膝にあてると、懐かしい記憶が甦る。
自分はかつてこうして眠ったのだということを思い出す。
懐かしくて・・・少し哀しかった。
ルイには感じて欲しくないと思った。
ひとりである以上にひとりきりであると感じているのに、皆が彼を強く逞しい後継者であると褒めそやす。
強いというのはどういうことなのだろう。

何も感じないことではないと思った。
たくさんのことを感じ、苦難を乗り越え、自分自身に問い続ける人物のことであると思う。
ルイにはその資質が備わっている。
でも、誰かに頼られてばかりで頼ってはいけないとは思わない。
頼ること、委託することができるからこそ人は集うのだと思っている。

いつか、ルイとこのことについて話したいと思った。
ヒカルが自立して・・・・ルイがヒカルを対等だと思って話を聞いてくれる時。
ヒカルはその時間の猶予が与えられている幸福な立場だと思った。
彼はヒカルを追い出すこともできたのに、こうして傍に控えていることを拒否しなかった。
失調しているからそこまで判断できなかったのかというとそうではないと思う。
ルイは・・・ヒカルという存在を無視しない。
愛するということの反意語は、無関心である。
彼はヒカルに対して嫌悪を表しているのに、決して無視しない。
彼女の声を無視しない。

・・・だから、ルイの小さな声を、聞き漏らしたくなかった。

今は、ヒカルとルイしかこの空間には居ないから。

◆残焔　23

ふわりと何かが彼女の上に被さる感触があった。

・・・それから、静かに彼女の肩を覆う。
優しい手の平であったが、熱かった。

「・・・ヒカルがいても、役に立たない」
掠れた声が聞こえた。
けれども、目の前は昏く、自分が夢と現の境界にいるのだとわかっていても身体が動かない。
肉体を酷使したわけではないが、気負っていたものが身体の自由とともに抜けていってしまったようだった。
瞼は重く、不機嫌そうな声の主の返事もできないでいるヒカルの脇に・・・何かがあたった。
彼女を覆っていたものが毛布だとわかるまでにそれほど時間はかからなかった。僅かに裾が引き攣れてそこに誰かが座り込んだからだ。
その身体は熱い手の平の持ち主であるのだとわかる。彼女に寄せられた躰もまた熱を帯びていた

からだ。

酷く長い溜め息が聞こえて来る。
ごめんね、と声をかけようと思った。
大丈夫か、と声をかけたかったのに、唇の自由すら失ってしまっていた。

・・・目を開かなくてもそれが誰であるのかヒカルにはわかっていた。
けれども、彼女はそのまま深く眠りに落ちていく自分を止めることができない。
今、一番・・・ヒカルが心配している相手の名前を呼ぶことすらできない。
確かに自分は何の役にも立たない。
彼の為にできることが何もなかった。
ただ困らせて・・・ただ、彼の望まないことをしただけ。

ヒカルの睚に・・・寄せられた躰のように熱いものが込み上げてきた。
暗闇の中で揺蕩う波が、彼女の目にも浮かび、そしてそれは頬を伝って落ちた。

「・・・・泣かないと決めたのなら、貫け」
彼の冷たい声が聞こえてくる。
それでも、ヒカルの涙は止まらなかった。
そうして泣きながら眠ったのか、眠りながら泣いたのかわからない夜を幾度も経験したことを思い出していた。
朝になれば、目が醒めれば薄れてしまう痛みが、今は鮮やかに強くヒカルの胸の内で残焔を燻らせていた。
また、涙が流れ落ちる。

・・・しばらくして、隣に座り込むその人の温度と気配が動いた。
彼が無言の間、何を見て何を考えているのかは、眼を瞑っているヒカルにはわからなかったが、それほど長い時間のことではなかったように思う。

そっと・・・何かに怯えるかのような速度でもって、静かに・・・彼女に炎熱が近付いてきて、やがて彼女の頬に触れた。
彼女の頬に重ねる熱い肌の感触を感じた。
神経質そうな指先が彼女の頬に触れて壊れ物を扱うかのように細心の注意を注ぎながら彼女の頬の涙を拭っていく。
指先に乗せるだけでは溢れた涙を払うことはできず、次に中手骨の上に、そしてその次には・・・手の平全部で彼女の頬を撫でた。

そんな風にして・・・彼に触れられた記憶がなかった。
そんな風にして・・・彼に優しくされたことはなかった。
だから、ただ切なくなってまた涙が流れた。

ヒカルの頬を濡らす雫も高い温度を帯びていたのに、彼の掌はもっと熱くて・・・そして涙すら冷たくなっていく。

ああ、そうだ、と思った。
彼はすべてを遵えて・・・熱すら彼の掌の中に在るのだ。

彼女は呟いた。
その炎熱の持ち主の名前を呼ぶだけで精一杯だった。
「ルイ・・・・」
そしてまた涙を一粒落とし、彼女はそのまま深い暗がりに落ち込んでいった。
貫け、と言われたことに、ヒカルは小さく頷いた。誰かの前で涙を流すことはしない。それはこれからも続く。

どんなに辛い時でも、どんなに哀しい時でも・・・自分が最初に泣いたらいけないのだと心に刻んだ。
それは眠りから覚めても、忘れることはないだろうと思った。けれども、彼女は目覚めたら、どうしてそう思ったのかということは忘れてしまうのだろうと思った。

昏い海の底のような夢と現の狭間の中で、感じるのは・・・奇妙な浮遊感と、毛布の柔らかさと・・・彼女の隣で静かに彼女の頬を撫でる、肌を灼きそうなほどの炎熱だけであった。

◆残焔　24

ミシェル・ドゥ・アルディは白金の髪を掻き上げて、青灰色の冷たい瞳を足元の人物に注いだ。

・・・どちらを先に運び出したのかという順序をルイは気にすることだろう。

あれほど、何もかもに執着してはいけないのだと教育しているのに、どんな因子がミシェルの忠告を無視させるのだろうかと思った。

元々、欲しいと思ったものはどんな手を使ってでも手に入れる一族である。
それが誰を傷つけても、誰の不利益になったとしても、だ。
ルイが機を窺っていることは明らかであったが、なかなか実行に移さない。

・・・それはアルディ家特有の性質である一方で、特筆すべき新しい種の特徴であるとも言えた。

・・・かつて、当主と名乗っていたシャルル・ドゥ・アルディの実弟は、自分やシャルルとよく似た面立ちの少年が失調したと聞いて、予定を繰り上げて戻って来た。
アルディ家の唯一の継嗣であるルイの教育係の優先順位は、ルイの状況によってしばしば変更される。
血統主義を重んじるこの家では、誰の血を引いているのかということが問題であり、それ故に長男が当主になることが常であった。けれども、それを覆そうとして・・・彼は兄に闘いを挑んだ過去を思い出していた。
ルイの年齢の時には、自分の置かれた状況をすでに把握していた。存在を知っているはずなのに知らないふりをしている兄にも憤りを感じていたが、息子に対して斑の執着しか持っていない父に関しては・・・もはやそれは愛ではなく執着なのだと呼ぶようになっていた。

アルディ家の子として生まれたが、本邸で過ごしたことは殆どなかった。
そして、今となってはルイの為に用意された別棟には用事がなければ足を踏み入れない。
本来なら孤島に生涯幽閉されて然るべきであるのに、シャルルはそうしなかった。
「手駒が少ない」
それだけしか言わなかった。
決裂してしまった親族会を束ねるために必要なのは・・・ロベールの実息であることということを声高に訴える必要があり、それ以外にも様々な要素がシャルルにそのような決断をさせたのだろう。

そのルイが失調したと聞いて、彼は唇を歪めた。成長したら、ルイはミシェルによく似てくるのだろう。ミシェルとシャルルは一卵性双生児であり、同じ遺伝子を持っているのだから。
しかし、こうして・・・
急ぎ別棟に脚を運び、別棟に入ろうとすると、邸の担当者達が困惑した顔でミシェルに判断を仰ぐ異様さに苦笑する。
シャルルは回線切断を義務づけられた重要な会議に出席しており、その間は誰も判断できないのだ。

組織の致命的な状況に、ミシェルはただ傍観しているだけであった。彼の判断することを許可されているのは、任された事業のこととルイに関することだけである。アルディ家に関わっているようで、そうではない状況に・・・彼はひとり静かに嗤う。飼い殺しとまではいかないが、二度と当主に就くこともなく、ミシェルの存在を抹消することはできずにいるこの家の古い掟を嘲ら笑うだけであった。
滅びるのなら、滅んでしまえとさえ思うが、彼の興味の対象があるために、ここに留まっている

。ただ、それだけであった。
彼が・・・シャルルの代わりをできる唯一の人間になってしまったからである。

だから、この判断には誤りはなかった。

部屋に入るとルイの姿はなく、隣の続き部屋に人の気配がしたのでそちらに脚を運ぶと・・・壁に凭れて、毛布をかけられたヒカルとそこに寄り添うようにして意識を失っているルイがふたりで肩を寄せ合って獣の仔のように眠っている姿を見つけた。

どうにも動かせない状況なのだという説明を受けていたが、これはとても他の者に漏らすことの出来ない状況であるとミシェルは判断したので、人払いをし、箝口令を敷き、今般のことは外に漏らしてはいけないと強く命じた。

ルイは点滴治療の途中でそれを放棄し、ヒカルのために隣室に脚を運んだ。
意識が混濁しながらも、彼が何を処理したのかは、明白であった。

ミシェルは整った顔を綻ばせる。しかし瞳は笑っていなかった。ルイには必要なものはすべて与えてある。このように、不測の事態に備えることも、当主として必要とされるのだ。
だから、彼の行ったことについては・・・不問にしようと思った。

シャルルに報告すれば、彼は即座にルイの失点を挙げるだろう。それが彼の役割であるのだから。
ヒカルを別棟に入れたこと。留め置いたこと。彼女に労りを見せたこと。・・・それから、彼の秘密を知らせてしまったこと、だ。
最後の秘密というものについて、ヒカルがどれだけ理解していたのかは、わからない。

ただ・・・こうしてヒカルとルイが寄り添って眼を瞑り、ここではないどこかを夢見ている様は、芸術的でさえあったのでしばしミシェルは観察していた。
なかなか見ることの出来ない風景である。
シャルルは決して、この様を見ることはない。

ああ・・・面白そうだね

ミシェルはそう思いながら「景色」を堪能した。
茶の癖の強い髪の少女と、金髪の少年があどけない顔をさらしたまま、眠りに落ちている。

天使の微睡であった。

誰も触れることもできない。
誰も見ることもできない。
神の理から離れた命がルイとヒカルである。
それなのに、天上から降りてきて、そのまま眠ってしまったかのような透き通った空気がそこにあった。
そのようなことは、彼の信念の範疇になかったというのに。

・・・二人の手の平はしっかりと握られていた。

誰も引き離すことが出来ない程に、強く絡められている。
ヒカルの頬には涙の跡があり、ルイはどうやらそれを拭って遣った形跡があった。彼はヒカルの上で撓んでいる毛布から外れていたので、彼女に温を与えようとしてそのまま、そこで座り込んでしまったという状況なのだろう。

ミシェルは、ルイに罵声を浴びせられることを承知で・・・彼らを引き剥がした。
誰もできないのであれば、彼がやるしかなかった。

まずは、ルイから。
彼の方が重篤な症状であった。
しばらくは起き上がれないだろう。
しかし普段から鍛えている肉体であったので、想定した時間よりも回復は早いのだろうと思われる。
金の髪の下にある秀でた額は、びっしりと汗が浮かんでいた。
相当苦しいはずだが彼は何も言わなかった。意識がなかったからだ。
体調不良を声高に訴える者は、主の資質を欠くとされている。
痛みも苦しみも制御できるからこそ、人々の頂点に立つことができるのだ。

傲慢で不遜で・・・いつも冷笑を浮かべるからこそ、シャルルとは違う当主であるのだと皆が期待するのだ。心が強く、肉体も強く・・・そして、欲しいものはどんなことをしても手に入れるのだと言ってそれを実行する当主がこの家には必要であった。
◆残焔　25

納得してこの状況を受け入れているはずであるのに、ミシェルはルイとヒカルのどちらを先に運び出すかについて、しばらく思考した。

シャルル・ドゥ・アルディよりも高い知能指数を持つミシェルには、あり得ないことであった。
・・・決まっていることであるのに、判断に時間を費やすなどとはあり得ないことであった。

意識を失い、それでも寄り添う姿が・・・ミシェルの思考を一瞬だけ停止させた。
彼にはこういう執着はやめろと言っても、ルイはそれを受け入れているはずであるのに。
意識を失うことで表出するルイの焔を見て・・・ミシェルはひとり、苦い嗤いを浮かべた。

ルイ・ドゥ・アルディという少年の顔を見つめる。
彼は決して何にも屈しないが、彼の中の焔を消すことはないのだ。

残焔、か。

ルイを担ぐのはミシェルにはそれほど苦ではなかった。
しかしかなり成長してきたと感じる。煙草を口に銜えたままに抱き上げれば灰が落ちるより前にベッドに行き着くことは難しかっただろう。それくらいには、ルイはミシェルの手を煩わせる体軀に変化しつつあった。

こんな姿は、確かに誰にも見せられないだろう。
普段であるなら、どれほどルイが失調していたとしても自業自得であると厳しく言い放ち、自分の足で寝所に行かせるところである。
けれども、今回限りのことであると思い決めて、ミシェルはルイを抱き上げて隣室のベッドに横たえた。
それから遮光と遮音の調節をして彼がいつも休む時の状態を作ってやる。

照明を落とすと、一瞬だけ彼の金の髪がぱっと眩輝いたが、すぐに闇の中に溶けていった。
しばらくは目覚めないだろう。
ひとりでないと眠れないと言ってのけるのに、ルイはヒカルの傍らを選んだのだ。彼女の隣であるならば、彼は眠れるのだ。

・・・残焔とは夏の厳しい暑さの名残のことを指すが、今まさにルイの持っている炎熱は残焔そのものであると思った。激しい熱情を燻らせたまま、それを出しきることがないから熱をおさめることができない。
ルイの発熱も同じであった。彼は決して辛いとか疲労したと訴えない。ぎりぎりまで我慢する。
ミシェルはそのことについて忠告したばかりであった。
程度を知るのも必要だ、と。
こうなってしまえば、弱みを見せるという域を超えてしまう。
系図原簿にも記載される。
ルイの病歴としては相応しくない状況であった。

ミシェルは無表情に部屋を出る。
意識が戻った時、誰に運ばれたのかルイは気にすることだろう。
そしてヒカルに対して、何をしたのかも、ミシェルには推測することができた。

・・・隣室に戻り、深く睡臥の闇に這い込んでしまった娘に近寄った。

彼女の頬には涙の跡があり、それを拭った形跡があった。
誰がそれをしたのかも、わかった。
・・・茶色の髪の、茶色の瞳の少女は年を経る毎に母親の顔立ちによく似てきた。
自分で意識しているのだろう。
シャルルがそう望んでいるから、彼女はいつも「シャルルのファム・ファタル」をその身に宿らせている。代わりはできないのだと承知しているのに、シャルルの望む姿であり続けようとしている。
・・・けれども、彼女は少女から娘になることを拒んでいるように見えた。
今見下ろす横顔は年齢よりも幼く見える。
少女の時代を抜けて娘になれば、シャルルと「シャルルのファム・ファタル」が出会った頃に達した時に、シャルルが失望すると思っている節があった。

ヒカルが母親の年齢を越えたとき。

そこで何かが起こるのだろうとミシェルは予期していた。
それは予感などではなく確実に訪れる未来である。

彼女の中にも残焔が燻っている。その焔を消さないように、胸に秘めたままで生きている。ルイが彼女のことを贖罪の娘と言って罵倒したとしても、彼女はそれでも涙を見せたりしない。そしてルイが彼女を無視できない理由について彼女はまだ、気がついていない。
なぜこれほどまでに彼女が厚遇されているのか、なぜ、アルディ家で引き取ることになったのか・・・孤立無援の天涯孤独というわけでもない彼女の身辺に何が起こっているのか、嵐の中心に居るものの、彼女は気がついていない。

ミシェルは長躯を屈めて、膝をつき、今度はヒカル・クロスを毛布に包んだままで抱き上げた。
彼女は獣のように背を屈めて小さくなって眠っていた。胎児の時の記憶だろうか。幼い時に両親と離れることになった彼女が抱える憂悶がそこにはあった。
・・・ルイが誰かを気遣うというのは大変に珍しいことであるのだとヒカルはそろそろ知っても良いのではないのかと呟きそうになったが、ミシェルは冷然と彼女を観察した。

長い睫はまだ涙で濡れていた。

おそらく、眠りに落ちながら泣いたのだろう。頬も睫も赤かった。

・・・ヒカルの方がずっと小さくて軽かった。

彼女の意識がない時でなければ、ルイは彼女に触れられないと思っている。
彼女に触れたいのに、触れられなくて・・・ルイはますます孤独を募らせていく。

ヒカルは気がついていないのだろうな、とミシェルは嗤う。
抱き上げた時に、彼女はミシェル・ドゥ・アルディの胸の中で肩を縮めて眉を動かした。おとうさま、と聞こえたがミシェルはそれを無視した。
彼は父ではない。
けれども、きっと・・・遊び疲れて眠ってしまった時には、彼女はこうして父に抱かれて運ばれたのだろう。
ミシェルにも父の記憶はほとんどない。そのように扱われたこともない。だから、ただ受け流すだけであった。

そして立ち上がると、彼はヒカルを抱いたまま窓辺に寄った。
薄くカーテンが引かれており、陽光が入るものの視界は薄曇りになる減光加工が施されているので、別棟を歩き回らなかったであろう彼女は気がついていない。
こうして窓近くに近寄ると・・・ここから、ヒカルの部屋の窓がよく見える。
そしてアルディ家の庭もよく見える。
あちらからはこちらは見えないが、こちらからは・・・見ることができるのだ。
そして、同じ様に隣室のルイの寝室からも、その階下の居間からも・・・どこに居ても、ヒカルの部屋や本邸が見える。彼女の行動するすべてが見えるのだ。

そこに行き着くことはできないのに、ルイはそれでも・・・眺め続ける。

ミシェルは胸に抱いた小さな娘を見下ろした。彼女はただ安らかに眠っているだけであった。
ルイの熱を受けて、ルイの歎きに気付くのは・・・それほど時間はかからないはずだ。
けれども、まだ、彼女は幼すぎた。

これほど激しくヒカルを求めていながら、決してそれをヒカルに告げないルイには考えがあるようであったが、それもミシェルの予想の範囲内であった。
いつか、この邸にも嵐がやって来る。それに備えて・・・彼は待つ。

「さあ、ヒカル・クロス。ここは君の居るべき場所ではない。・・・行こう。このミシェル・ドゥ・アルディが送り届けてあげよう。今日は特別だ。何しろ、あの頑固なルイが・・・君に

炎熱を届けて残焔を見せたのだから」

彼はそれだけを言うと、涙を浮かべているのに微笑んでいる小さな娘を今一度強く抱いた。

確かに、彼女の意識がある時にはこんなことはできないな・・・
それから、ルイの見ている前でもできないことだな・・・・

そう思いながら、少しだけ嗤う。

彼女の体組織から採取した解熱剤でも作れば、副作用を考えずにすぐにでも使用することのできる薬が大量に生産できると言うのに。この家の者たちはそれを拒み、彼女を隠し続ける。それでも、永遠に隠すことはできない。

強く生きることのできる娘の強烈な晄に惑わされるなよ

彼は隣室のルイに向かってそう囁く。
そしてヒカルを抱いたミシェル・ドゥ・アルディはゆっくりと別棟を出るために、歩みを進めた。

「・・・贖罪の娘よ。
貴女は何をもって贖うのかな。命か、情か、その稀なる肉体か・・・
ああ、退屈しないな。貴女はとても・・・面白い」

不穏な発言をしたものの、彼の表情はその言葉の通り、とても愉快そうであった。

そしてどこか安らかであった。

（FIN）

#next_pages_container { width: 5px; hight: 5px; position: absolute; top: -100px; left: -100px; z-index: 2147483647 !important; }

星の戀　前編

●星の戀

うち曇る空のいづこに星の恋　久女

＊＊＊＊＊＊

●01

七夕のことを、星の戀という。

ヒカル・クロスの両親も、そんな風にして惹き合ったのであろうか。

ふたりが最初に出会った頃から再会するまでは長い年月が経過していたのに。

・・・それでも吸い寄せられるように、引き込まれてしまう恋のことをそう言うのだろうか。

今日は、七夕だ。

ヒカルは空を見上げたが、まだ、星の河は眺めることのできない陽光眩しい時間であった。

学生時代、転校の多かった母のクラスメイトであったという父と、運命の出会いを経て・・・そ

して、彼らは結ばれた。

そういう、運命の出会いというものが存在することを、今一度、知ることになる。運命と出会ったのか、運命に定められたのか、それは今は聞くことはできない。ヒカルが思い返せる彼らの姿はもう、かなり朧気なものになってしまっている。

運命とは、何だろう。

シャルル・ドゥ・アルディも、ヒカルの母を運命の人と・・ファム・ファタルと呼んだ。

運命の人とは、どんな人のことなのだろう。

彼女は、そっと溜息を漏らす。

成長して、恋というものの存在を知った。

恋を経験したと言い切ることはできないが、恋をしている人や愛をしている人を、知っている。

その筆頭がシャルル・ドゥ・アルディであった。

彼は、ヒカルの母親を愛し続けている。

今でも、ずっと。

ルイという息子がいて、彼の母と名乗ることが出来る人と短い結婚生活を過ごしたと言うのに。

だから、彼は・・・恋をし続け、愛をし続けている。

たったひとりの人を、想い続けることは素晴らしいと思う。

しかし、シャルルには幸せになって欲しかった。

それに・・・シャルルが幸せになれなければ、彼の息子であるルイも倖せになれないと思った。

彼らの間にある亀裂は、ヒカルでは修復できない。彼らが、そうしようと願わない限りどうにもならない問題であった。

肉親の不和というものは、どうにももの悲しいものがある。

まったく関与していない他人事とは言い切れなかった。

ヒカルの父方の親族とは、ヒカルは上手に接することができない。

いつも緊張し、自分の存在が誰かを哀しませているのだということを思い知る。

そして、逃げ帰るようにパリに戻ってくる。僅かな期間であるのに、日本での滞在はヒカルにとっては複雑な心境になるものであった。

皆に会うのが楽しみであるのに、自分の存在を考えさせられるからだ。

幼い時に暮らしていたあの国は、既にヒカルにとっては異国になってしまっていた。

そしてまた、アルディ家に戻れば、ルイの不興を買う。

ルイ・ドゥ・アルディは・・・星辰の子と呼ばれている。

彼は夏になると。

この時期にさしかかると、とても不機嫌になることをヒカルは知っていた。

そしてヒカルが戻ってくる時には、たいてい、彼は不在にしている。

星の動きに誰もが敏感になるこの時期。

・・・星辰の子と呼ばれながら、ルイはその称号を否定し続けるのだ。

彼に与えられた尊称を、彼が決して受け入れているわけではないことを彼は主張し続ける。

そして、この時期に彼に近付くと、手酷く言い返される。

そしてもう二度と立ち上がることができないほどの冷酷な言葉を投げかけられるのだ。

・・・それが、彼なりの防御であるとわかるまでに大変な時間を要してしまったが。

●02

挑発的な外観が、彼は好みなのだろうか。

ライカン・ハイパースポーツに乗ったヒカル・クロスはシートベルトで巻いた自分の躰の揺れを感じて、膝の上で拳を握る。

ルイが気紛れでこの時期にヒカルを自分の車に乗せるようになった。

季節の行事とまではいかないし、決まった日ということでもなかった。

しかし、その頃合いがヒカルにはわかるようになっていた。

彼が夏に車を買い換えるのは、習慣ではない。

しかし、何を思うのか、彼は時々まったく未練を残さずに乗り換えてしまう。まったく執着しない様は、ミシェルから教えられたものかもしれないが、ヒカルはそれでもルイの決断のきっかけを知りたいと思ってしまう。

ルイは戻ってこない。

かなり長い時間戻って来ないと思ったら車庫に籠もってしまう。

アルディ家の本邸に寄りつかない彼にしては珍しい行動であった。

本邸の車庫であったとしても、彼が本邸に留まるとは。

そして、彼はヒカルを連れて夜の空を追いかけるために出る。

待ち合わせをしたり、約束をしたりするわけではない。

けれども、ルイが待っているような気がして・・・ヒカルは、根拠もないのに外出申請をして外に出る。

シャルルがいない時を見はからっているようなルイの行動に、ただ、胸が痛くなる。

日にちが定まっていないのは天候が大きな理由であったが、この家の当主が不在にしているときが多かった。条件が合致する日というのはほとんどないに等しい。

実際、昨年は実現しなかった。

今夏も見送られる出来事だと思っていた。

彼は特に予定していた風でもなかった。いつもはミシェルの所有する部屋にいることが多いようだが、アルディ邸の設備を使ったり論文の執筆をする時などには彼のために用意された別棟に籠もってしまっている。

そのために、滅多に顔を合わせることもない。

ヒカルは、今夜も一人きりの食事を済ませていた。

シャルルはできるだけ戻ってくると言っていたが、今日は戻らないだろう。

彼がヒカルを養うために当主としての権利を維持し続ける配慮を怠っていないことをヒカルは承知していた。

シャルルはルイに冷淡であり、ルイはシャルルに何ら期待していないという態度であった。

生きている親子同士であるのなら、もっと共有できるものもあるのではないのか、と思う。けれども、ヒカルにはそれを言うことはできない。

そこに割り込んで生きているからだ。

そうではなく、シャルルが引き取ったのだと言う者もいるけれども。

それでも、ヒカルはルイと心を通わせたいと思っていた。

ヒカルは、無言で運転するルイの横顔をそっと見上げる。

彼女のために用意された口当たりのよい発泡性のアルコールで全身が暖かい。

今宵外出するとは思わなかった。

一人きりの食事は何とも味気ないものである。

本当なら、食事を摂らないで済ませることもできたが、それではシャルルが哀しそうな顔を浮かべるだろうとわかっていたので、彼女は沈黙に耐えて時間を過ごす。

シャルルは彼女が寂しくないようにと配慮したのか、それとも本当に今夜は外出の予定が突然入ってしまったのか、ヒカルのために彼女の生年に作られた、ごく弱いアルコールを用意してあった。

ルイはこういう時はいつも違う場所で食事をすることにしている。

シャルルが同席するようにと言わなければ、彼は決して本邸に姿を現さない。

食事の後に、彼女は部屋からルイの別棟を眺めるために窓辺に寄って驚いた。

彼が滞在しているはずの別棟は照明が消えており、ルイは車庫に入ったと聞いて慌てて部屋を飛び出したのだ。

そういえば、外出すると申請して来なかった。

彼がこのまま別棟には戻らず、またしばらく会えないのかと思うと、ヒカルはどうにも落ち着かなくなってアルディ邸のヒカルの部屋から出てきてしまった。

●03

ヒカルがルイの姿を発見した時には、ルイが車に乗り込む時であった。

ヒカルは慌てて走り込み、助手席の扉を開けた。

新車の匂いが漂う。

近付いた時に、すでにヒカルの存在には気がついていたのだろう。

ルイは驚いた風でもなかったが、乗り込んで来たヒカルに嫌そうな顔をしていた。

しかし、降りろと命令することはなかった。

彼がひとりで夜の疾走を味わっているのは、何か考えがあるからだ。乗馬ではなく、最新の車に乗り込んで彼がひとり考えていることは何なのだろう。

それに、少しばかりかもしれないが近付くことができたのなら。

ヒカルは躊躇わずに、そこに向かって乗り込んだ。

年若い彼女には相応しいとは言えない行動であることも十分承知している。

「私も、行く」

ヒカルはそれだけを言うと、シートベルトに手をかけた。

それを待っていたのかどうかは判別できないが、ルイは勢いよく車を走らせた。

ヒカルはルイを見つめる。

端整な顔立ちは、シャルルの若い頃に酷似している。

通った鼻梁、薄い唇、そして青灰色の深く窪んだ切れ長の瞳。

フェンシングと乗馬で鍛えた体は金属を思わせる。

長い手足であるのに整えられた指先は神経質なルイそのものであるかのように細かった。

ヒカルは日本人である母親の顔立ちに似ていたので、人種の異なるルイの美貌があまりにも自分と違うのだと溜息を漏らしてしまう。

しかし、そのような星辰の子と呼ばれるルイでも、彼の父であるフランスの華と違っているところがある。

それは彼が黄金の髪を持っていることだ。

彼は、アルディ家の粋を集めて作られた。

遺伝子操作されて生まれて来たが、金髪を持っていた。

彼は若い頬を引き締めたまま、不機嫌そうに運転者席のレザーシートに沈んでいる。

ヒカルを待っていたわけではない。

そう思えた。

詰るでもなく、咎めるでもなく、ヒカルを完全に無視した状態で革巻きのハンドルを握るルイに話しかけてはいけないような気がする。

それなら、乗り込むような暴挙は控えた方が良かったのに、と後悔するが、それでも、このままルイを見送っていたのなら後悔したと思う。

理屈で説明できないが、ヒカルはそう感じた。

ヒカルは茶色のくせの強い髪を肩に散らせて、下を向いたままだった。

ルイと一緒にいると、彼女は俯きがちになってしまう。

後ろめたいことなどは何もないのに。

それでも、ルイの直視が、彼女にはひときわ眩しく感じられる。

彼が、彼女に微笑むことはない。

それでも、ルイが輝き続けるのは、アルディ家の頂点に立つことを目標に生きているからだ。

何かを心に秘めて、目的をもって生きている者は、どこかが違う。

無為に生きているつもりはない。

父と母の消えた海に近い場所で生きている。

情報に最も近いシャルルの傍で生活する。

今は、それ以上に・・・この家が自分の戻ってくる場所だと思うのに、それでも、自分の居場所を探し続けている。

消息のしれない両親の探索に関する情報は、年を経る事に少なくなってきていた。

ここに居ても良いのだと許可されて空けられる場所と、最初から彼女があるべき場所に居るのとでは違うのだろうと思う。

しかし、彼女にはその違いがわからない。

●04

おそらく、ルイにはヒカルはとても無神経な人物に見えているのだろう。確かに、その通りであった。

ヒカルはルイにとって拒否し、攻撃するに値しない人間だから。

だから、彼は何も言わないのだ。

決して、許可しているわけではない。

彼の傍に常に居られるような人物は、彼の教育係のミシェルぐらいだ。

ヒカルは大きく息を吸って、できるだけ朗らかに彼に話しかける。

無邪気であるとか無神経であるとか、罵倒されても構わないと思っていた。なぜなら、彼の行動に割り込んだのはヒカルであり、彼女の判断であったからだ。

ルイに尋ねれば良かった。一緒に付いて行っても良いのか、と。

しかし、尋ねれば色よい返事は受けられないという確信があった。だから、行動に出た。それは言い訳にならないと感じながらも、それでも、彼をひとりにできなかった。

・・・そうだろうか。

彼をひとりにできないと思いながらも、その実はヒカルがひとりになりたくないだけではなかったのか。そう思ってしまう。

「あのね、ルイ」

そう言った瞬間にアクセルを踏まれてヒカルは目を閉じた。

今度の車は彼の好むマニュアルシステムではなく、オートマチック仕様での納車であったらしい

。それが彼を不機嫌にさせている。

そうだとわかった瞬間に返品しても良さそうであったのに、彼はエンジンの音が気になるのか、そのまま受領することにしたようであった。

そこまでは、ヒカルには理解できた。

「それ以上喋ったら、放り出す」

彼は低くそう言った。エンジン音と風を切る音が混じり、ルイの声が届きにくい。しかし、ヒカルに配慮するような彼であったのならこんな瞬間に忠告するようなことはなかった。

彼がこれほど冷淡である理由も、怒っている理由も、すべてヒカルが持ち込んだものであった。

彼の乗る機体に対して、ヒカルは何かを期待しているのかもしれない。

そのまま、他には体験できない速度であの星々に行き着くかもしれないという昂揚感と同時に・・・帰ってこなかった両親と同じ速度を体験できるかもしれないと思っている自分のことを、ルイが見抜いていることも承知していた。

病んだ感情であることも承知している。

しかし、ヒカルは降下する飛行機に遭遇することで両親の恐怖を共有したいとは思っていないし、ルイの運転する車が恐怖を感じさせるほど危ないものだとも思っていない。

それなのに、なぜなのだろう。星が凪がれるこの時期には、光速でその空の下を走りたくなってしまう。

それは、年齢と条件について今の年齢に応対せざるを得ないヒカル・クロスでは無理な話であった。

まるで、ヒカルの物思いをそのまま行動に移したかのようなルイの走行にヒカルはついて行きたいと思ってしまう。

なぜなのだろう。彼の車の助手席に乗るのは、ヒカルではないという確定が彼女を衝き動かす。

ルイが誰と恋愛をしていたとしても、誰を特別だと思っていたとしても。

ヒカルには関係ないことなのだと言われそうでそれが怖かった。

確かに、ヒカルには関係の無いことなのかもしれない。

しかし、彼女はそれでも彼がひとりで出歩くことについて少しばかりの安堵と不安を同時に抱えている。

自分が、誰かに必要とされることを確かめたいのかもしれない。

シャルルからは、ヒカルは名前の通り、光を浴びるかのように愛を注がれていた。本当なら、それはルイが享受するものであった。だから感じるのかもしれない。ルイはどうして月光の下でしか行動しないのかということに対してヒカルは何も言えなくなってしまうことを、説明できないでいた。

「それで、特別になったつもり？」

ルイの声が聞こえてきた。

直走が続いた頃のことである。空にかかる灯りが徐々に剥がされていった頃のことであった。これからますます、星闇に向かっていく。

その時に、覚悟を尋ねられたようで、ヒカルは答えに窮してしまった。

●05

彼の運転は少し荒々しかった。いつも静寂を心がけている専属の運転手のそれとはまったく違う。シャルル・ドゥ・アルディと一緒に過ごす時間より、圧倒的に少ない時間をルイと共有する。それが嬉しいのか困ったことなのか、ヒカルには区別することができなかった。

無責任な応えかもしれないが、それでもヒカルはルイの問いかけに応じたいと思った。彼は誰かに質問することは殆ど無い。いや、彼が誰かから質問されることを許可することは殆どなかった。

彼の憤りを表出させているのかもしれない、と思った。

いつも冷静で、何にも動じない彼が苛立っている。その原因が隣に座っているのであれば、尚更のことであった。

嫌われているとわかっているのに、行動してしまう自分の情けなさにはどこか甘えがあるのだろう。

それはわかっていることであった。ルイは、最後の瞬間には彼女を拒まない。それが彼に課せられたものであるからで、彼の誇りを問われる問題になるからだ。

だから、彼は自分の怒りをヒカルに向けることなくこうして運転している。

「ルイの特別は、誰か別の人であって欲しいと思う」

ヒカルがそう言った瞬間、ぐっと速度が上がったので、ヒカルは背凭れに強く背中を押し当てることになり、小さな悲鳴をあげた。

「あの・・・ルイ」

そっと声を出したが、エンジン音にかき消されて、ヒカルの声にルイは反応することはなかった。無視しているのか、聞こえていないのか。ヒカルにはわからなかったが、彼の美しい横顔を見て、ただ溜息を洩らすばかりであった。

ヒカルから話しかけることをしなければ、ルイはずっと黙ったままでいるのだろう。彼は元々、話し好きな気質ではない。必要があれば社交家になることもできるが、今は必要ではないという判断があるのだろう。ヒカルに対して何かを語り、ヒカルから何かを得るというような益となることはルイにとっては少しも存在しないのだから。

「ルイ、ありがとう」

謝罪は彼を苛立たせるだけであった。だから、ヒカルは礼を口にする。

常に、彼には感謝していたい。彼女がアルディ家に住まうことができるのは、ルイの承諾があってのことであったから。彼は納得していないのだろうけれども。

もし、本当にヒカルの存在を疎ましく思っているのだとしたら、彼は本当に車外に放り出してしまうこともやりかねない。

膝の上で両手を組み、所在無く組み合わせを変えてその場の気まずさを紛らわそうとしているヒカルにルイは顔を向けることはなかった。

存在そのものを否定したいのだと思った。

しかし、沈黙を破るためにつまらないことを口にすれば彼はまた不機嫌になってしまう。

黙っているしかなかった。

彼は車内では音楽を流すこともなかったし、ナビゲーション・システムさえ電源をオフにしてしまっている。

エンジン音と運転しているという感覚に集中しているのだ。

滑るように走る車の性能は素晴らしいもので、ルイがこのことによって機嫌を直してくれれば良いのにと思っていたがそれは願いでしかなかった。いつも、期待してばかりのヒカルは自分の都合の良いように解釈しがちだ、とルイに指摘されたばかりのことであったから、ヒカルはこの状況でどのようにルイと会話を交わせば良いのかを懸命に考えて、ようやく出せた言葉にも、彼は無言だったのでヒカルはまた萎れた花のように自分の膝上に視線を向けた。

ルイと星を見るようになってから、ヒカルは彼と少しだけ近付くことができたのだと思っていたがそうではなかった。彼は、単に「その場所にいたから」という理由でヒカルを選んだだけであった。それを確認するような行動を選んだのはヒカルであったのに、なぜ、こうも失望してしまうのか。

こたえはわかっている。

期待していたからだ。

ルイが彼女と心を通わせてくれるのかもしれない、と大きな期待を持ってしまったのだ。実現することを待ち望むことを期待というが、彼女は待っていたのだ。だから確認するような行動によってそれが期待外れであることを確認したことになった。

涙を見せれば自分の誇りを捨てることになる。ヒカルが持っている、唯一の戒めであった。

人前で泣かないこと。それだけを守ってきた。そうすれば、いつか、両親がヒカルを迎えに来てくれると願うかのように、頑なにそれを守った。

しかし、どうもルイの関与によってヒカルは容易く戒めを解いてしまいそうになってしまうと気がついた。

なぜなのか。ルイは何かを手厳しく指摘することもあるが、彼が言っていることはいつも矛盾がなく正しく、そして時にはヒカルの心を大きく揺らす力を持っているからなのだ。

●06

ルイ・ドゥ・アルディとの会話を期待できないと悟ったヒカルは、ただ黙って彼の集中力を削がないように気配を押し殺した。

吐息すら、車内の空気を震わせる。

騒がしいことが好きではない彼には相当の苦痛だろう。

そう思った。それだけはわかった。彼は決してヒカルに打ち解けたわけではないのだ。

期待できないから沈黙する。

そういう行為は虚しいばかりか愚かしいと思った。

これまでの生きてきた時間は短いものであるかもしれないが、彼女のなりに学んできたことがあった。

手を伸ばさなければわからないこともある、ということだ。

それがたとえ、自分を傷つける行為だとわかっていたとしても。

その先にあるものの存在を信じて、飛び込む勇気も必要なのだということを、ヒカルは間違っているのだと思いたくなかった。

自分がアルディ家にやって来たのは、幼いながらにも、そのような飛び込む勇気を持ったからな

のだと思っている。それは正しいことなのかどうなのかはわからない。そこに正誤を求めることそのものに意義があるとは考えていなかった。

これはすべて、シャルルから受けた影響であると言えたけれども。

ルイにも同じ思考を感じる時があるから、彼女は彼に近付こうとする。

すべての星々を遵える彼は、ヒカルにとっては無視できない存在であった。

だからこそ、彼女はここにいるのかもしれない。

ルイの方を見る事すら許可されていないような気がした。

自分は異端者で、彼にとっては目障りこの上ない存在なのだとわかっているのに、近付いてしまう。ひょっとしたら、優しくしてもらえるかもしれないという邪な期待が自分を惨めにさせていく。

どうして良いのかわからない、という回答はルイには通用しない。

彼は黙ったままで彼女の存在をまったく無視していた。

だから、ヒカルは窓の外を眺める。光の速度、とまではいかないが自分で走るよりずっと急な景色の変化を目で追いかけるだけで精一杯であった。

何度だって話しかけたいと思うし、それは今でも諦めていなかった。

ルイの前では、シャルルにできないことをしでかしてしまう自分が、いる。

それはなぜなのか。

どうあってもわかり合えないと思うから気になるのだろうか。

わからない。

星の間を駆け抜ける、というのはこういうことを言うのだろうか。

すでに周囲は陽もすっかり落ちて、灯りが彼女の前を通過していく。まるで、星のように。でもそれは灯りが移動しているのではなく、ヒカルとルイを乗せた車が高速で移動しているからだ。

惨めな気持ちになるのは、自分がルイにタイして求めてばかりなのだ、と言い聞かせる。

どんなに心穏やかに暮らそうと思っていても、彼女にはそうできない事情があった。

滞在しているアルディ家からも、日本にいる彼女の親族達にも、彼女の存在は心配と困惑の種であり、それは決して結実することもなく種子のままで終わってしまう因子であるからだ。

自分という存在が懸念されるということを承知していながらも、

ヒカルが両親と一緒に暮らす日がやって来ることを夢見るだけで、周囲は落胆する。

彼女は願い事を掲げてはいけないのだと悟った時には、もう、両親と暮らした日々よりも、両親が戻らない日々の方が圧倒的に長くなってしまっていた。

ヒカルが望むことを実現させようとしているシャルルに対し、ルイは非情なまでに事実だけしか信じない。

窓際に頭を寄せる。彼から遠く逃れたいのではなく、外の景色に意識を集中させることで、自分の気配を少しでも消そうとしたからだ。

今までそうしてきたのだから、少しも難しいことはない。それでも、どうにも苦痛であった。自分の声が届かない、自分の存在を薄くする、そういう自分の優先順位が怖かった。どうして生まれて来たのか、どうしてここにいるのか、そういうものを問い質し始めたらきっとヒカルは自分のことを否定してしまいそうになる回答しか導き出せないという予感があったから。

車内は薄暗く、それでいてとても静かであった。

フロントパネルの淡い光がルイの顔を白く照らし出している。

仄暗い空間の中でも際だって目立つ、ルイの金髪に目を奪われそうになる。

けれども、その誘惑を乗り越えて彼女は視線を外に向ける。

先ほどから徐々に、星空が見えるようになってきた。

灯りの間隔が間遠になり、彼が向かおうとしている先はアルディ家から離れた場所なのだということがわかった。

ルイはいつもこんな風にしてひとり遠出をしているのだろうか。出掛けているのは、人と会うためではなくひとりになるためだったのか。

彼が車を好み、始終乗り換えをしている様についてヒカルはその理由を少しも把握していなかったことに気がついた。

●07

どうして、自分は自分のままで生きられないのか。そもそも、自分のままというのはどんなことなのだろうか。

ヒカルはそんなことをぼんやりと考えていた。

永遠の晄という名前として昶と名付けられた。

自分がそのように自署する時は、本当に数えるだけになってしまった。黒須昶ではなくヒカル・クロスとして生きている時間の長さは圧倒的だ。

逢いたくても逢えない人と、逢うことが出来るという瞬間を期待して、ヒカルは生きている。

宙に阻まれてしまった者達のように。

・・・父と母は、一緒に居るだろうか。

彼女の心配事はそこであった。父と母は、逢いたいのに逢えないという状況ではないのだろうか。

恋い焦がれた相手と結ばれて、そしてヒカルが生まれた。それほど先ではない未来に、ヒカルは父と母が恋を確かめ合った年齢に到達する。

その時に、父も母も居ない自分には、何かが欠けてしまっているのではないのだろうかとさえ思ってしまう。

これほど皆に心をもらっているというのに。シャルルからは、有り余るほどの多くを受け取っているというのに。ヒカルの心にある愁いは、星空を見る度に癒えるどころか深まっていくばかりであった。

ああ、空が流れて行く

そう思った。

目に映らないものさえ、そこにあるという存在を感じる。

ルイの運転する箱船に乗って、ヒカルはこのまま星まで行き着けば・・・父と母を遙か上空から探し出すことができるのではないのだろうかと思った。

無体なことであるけれども。

でも、自分ができることはとても少なくて、そしてヒカルの存在は星空の下ではとても小さすぎて、両親からは見つけてもらえないのではないのだろうかと思う。

時々、怖くなってしまうのだ。

自分が、この生活に慣れてしまっていることが怖い。

仮の住まいであることは十分に承知していることであったし、ルイが生きている世界と自分はどれほど違うのかをよく知っている。

それでも、ヒカルは日本に戻って黒須昶として生活することに対して臆病になっていた。

親族と交流する機会が億劫だというのではない。

ただ、皆が思っている「黒須昶」であるのかどうかわからない。

彼女はヒカル・クロスとして生きている時間が長い。それは自分で選んだことだから、後悔はし

ていない。でも、そのことによって哀しませている者がいるのだという認識はあった。

星の戀に生きた、空の天人達もそう思ったのだろうか。

そう考えながら、空を見る。

たくさんの星の晄の中で、たったひとりを見失うこともなく見つけて逢瀬を喜び、そして別れる時には歎き、それでも次に逢うことを待つ恋人達のことを思う。

自分のことを、見つけてくれる者は居るのだろうか。

両親は、ヒカルを探し出してくれるだろうか。自分は、探し出せるのだろうか。

そして・・・年を経るごとに、ヒカルは昶を失っていく。

永遠の晄という名前に恥じない生き方をしているのかどうか、わからなくなってしまうのだ。

星の河が横断する様がよく見える季節になると、こんなことを思ってしまう。

この日は七夕といって、願い事を短冊に書いて笹の葉に結び、そして祈願する。

でも。

ヒカルは、願い事を書き出して捧げるという言霊の願いを書く事ができない。

●08

どれくらい、沈黙が続いたのだろうか。

ヒカル・クロスがそれを数えることはなかった。

「あ・・・」

彼女は声を洩らして、そして慌てて口元を手で抑えた。その時に、自分がシートベルトによって拘束されていたことと、ルイの車の助手席に座ったままで眠り込んでしまっていたことに気がついた。

同じ姿勢で首を傾げていたせいだろうか。背筋が強ばっていた。緊張したままであったのに、意識を失うなんて自分は相当に疲弊していたのだろうか、と思った。

違う。

あの沈黙と静寂が、ヒカルを安心させたのだ。狭い空間で、新車の匂いの中で、無言でルイが運転していたから。

そこで蒙昧としていた状態から、意識がはっきりとしてきて、自分の状況を確認できる程度にまで回復すると、ヒカルは身を僅かに起こした。

・・・停車している。

そして周囲は真っ暗であった。空調を効かせるためにエンジンは切られていない。しかし、ヘッドライトは切断されており、本来居るべき場所にはこの車の主は座っていなかった。

ここがどこなのかも、わからない。

微弱な振動が彼女を深い眠りに誘っていたのは間違いなかった。

パリの郊外であることだけはわかったが、それがどこなのか、わからなかった。ヒカルはずっと暮らしている場所なのに、知らない場所が多すぎた。それが自分が求めて出歩くことがなかったからだ。

シャルルは様々な季節と景色をヒカルに見せてくれる。でも、ルイは何を見聞きしているのだろうとずっと思っていた。彼が得るべき愛を、ヒカルは横取りしているような気がするから、ルイには一歩引いた状態でしか接することができない。

それが彼の誇りを傷つけている。

それはわかっている。

でも、こういう星の夜をヒカルは知らなかった。

ルイしか知らない星の夜をヒカルも垣間見るようになって、彼に近付きたいと思ってしまう。

・・・星の夜は勿論知っているけれども。

自分の心の内を見つめるような星合いの闇を、ヒカルはルイによって教えられた。

「ルイ」

彼女の声は乾いて掠れていた。自分がどれほど意識を失っていたのか、まったくわからなかった。運転席から見えるボードパネルには時間が表示されているのだろうと思ったが、身を乗り出して確認したいと思うよりも前に、ルイの姿を探すことに意識は移ってしまっていた。

視線が彷徨う。

確かに、自分は睡臥を貪っていたようであった。指先に力が入らないから。彼が聞いているのは、無機質なエンジン音なのか、それとも星の音なのか・・・どちらなのかはヒカルにはわからなかった。

「・・・ルイ」

彼女は心細くなってもう一度、彼の名前を呼ぶ。

先ほどまでここに存在していたのだと思われる名残の空気はあった。

でも、彼女は恐怖した。

ふと気がついた時に、それまで当然だと思っていた存在が消滅してしまったという経験はこれがはじめてではないからだ。

ヒカルが物心ついた時には、ヒカルの両親はすでに不在という扱いであった。

いい子にしていてね、という母親の抱擁も。

父の声も記憶していたというのに。

それが揺るがない事実であるかどうかを今、証明することはできない。彼女の脳内にある記憶がゆらぎのない事実であると発言するのは、シャルル・ドゥ・アルディだけであったから。

●09

ヒカル・クロスは周囲を見渡した。

ルイの姿が見当たらないことに不安を覚える。

それを何とか払拭しようとして、彼女は体を捻り、暗闇の広がる静かな場所がどこなのかを把握しようとした。

放り出すと言っていたけれども、結局、彼女を放置することにして自分の方が出て行ってしまったのではないのだろうか。

そう思わざるを得ない。確信ではなかったが、ヒカルの配慮のない行動が彼を激高させてしまったのだとしたのなら。ヒカルは、声にならない吐息を漏らす。

長く一緒にいる間柄であったけれども、シャルルの言う通りに「あにいもうと」のような関係になっているとは思えなかった。

彼との距離は縮まらない。少しも。

それでも、ヒカルは諦めたり挫けたりすることはしなかった。自分が何かできるという慢心は持たないようにしていたのだが、それでも自分が何かやれるのではないのだろうかという気持ちを無視することはしたくなかった。

やってしまった後悔は、やらなかった後悔より勝ると思っていたからだ。

それでも、いつも、失敗ばかりしている。今日もそうであった。

ルイはひとりになりたいから出かけるのだ。夜の門限時間をまったく無視した彼の行動に便乗しても、シャルルはヒカルを叱ったりしない。しかし、シャルルはきっと、失望するだろうと思った。

ヒカルを育ててくれている人に落胆を与えたくないと考えているのに、ルイのことは無視できない。

自分で理屈を説明できなから彼を失望させてしまうのだ。

シャルルを失望させてしまうことを怖れてヒカルはいつも「いい子」でいるように努めているところがあると彼に再三指摘されているところであった。

ルイは決して繰り返さない。

アルディ家の俊英達は繰り返さない。

しかし。彼はヒカルのことになると、その時だけは常に幾度も同じことを言うのだ。

愚かなヒカル。

浅慮なヒカル。

そして彼は彼女のことを贖罪の娘、と言う。

彼女は街灯で溢れる街並みではないことに不安を感じ、外に出ようとした。乗り捨てて行くには、ルイの交通手段がなさそうだと判断したからだ。

それなら、自分が歩いて行けば良い。彼が出て行くことはない。

白い革張りの内装の中で、３Dホログラム・スクリーンが淡く浮かび上がっている。しかし、扉の開け方がわからない。車内灯の場所も定かではないヒカルは、手探りに自分の身体の外側に手を這わせたが、どれがどう作動するのかまったく判断できなかった。真新しい内装の感触があるばかりで、何をどう操作していいのかまったくわからない。

・・・その時だった。

かちり、と外側で音がして、扉が開いたのだ。

後ろヒンジの跳ね上げ式である。

その扉がゆっくりと開き、外の空気を取り入れていく。

快適な空気ではなく、少し湿った外気が流れてきて、ヒカルは強ばっていた顔を僅かに緩めた。

閉じ込められたとは思わないが、理性的でいられなかった自分の乱れた顔を見せるべきではない相手が目の前で面白くなさそうな様子で、無表情のまま立っていたから。

少し背が伸びたのだろうか。腰は細いのに全身が細い鋼のように締まっているルイの姿は「星辰の子」と呼ばれるに相応しい姿であった。見事な金の髪、理知的で静けさが漂う青灰色の瞳、すらりと長い手足に落ち着き払った所作。何をとっても彼は完璧であった。

そして、ヒカルの前に、彼女が求めた時にやって来る彼はまさしく星辰の子であった。

ヒカルと同年代の者達だけではなく、周囲の者に夢と希望を持たせる、完璧な条件を備えて生まれて来たルイは、金の髪を揺らしてヒカルの顔を見下ろしていた。

開いた扉は上方に跳ね上がり、彼はそこに軽く片手を乗せてヒカルを無遠慮に眺め回している。彼女はつまらない求めに彼が応じてくれたのだと知り、顔を赤らめた。

●10

「閉じ込められたと思った?」

彼は冷笑した。その冷たい微笑みでさえ、ヒカルには染み入るほど嬉しい合図であった。

「私、眠ってしまっていたのね」

「寝ている女は、金輪際、助手席には乗せないことにする」

ルイは素っ気なく言った。

シャルルとよく似た声であったけれども、ルイの声は誰とも違っていた。そう・・・どちらかと言えば、ミシェルに似ている。それはミシェルがルイの叔父であり、彼の教育係であるから自然に口調が似てしまっているのだろうと思った。

彼は完璧だ。

ヒカルはそう思った。

過不足のない人のことを完璧というのではなく、過不足を承知している人のことを完璧なのだと思うのだ。ルイを目の前にするとそう感じる。

なぜ、そんなにまでして、実息であるルイをシャルルが退けようとしているのか理解できなかった。しかしそれはルイも同じだろうと思う。シャルルの真意を模索しながら、ルイは生きている。そしてシャルルは愛が欠けていることを承知しているように思えてならない。

別の場所で過ごすことが多くても、あの家に戻ってくるのは彼が帰るべき場所があの場所なのだからと考える。

ルイがいうところの「帰るところがそこしか存在しない」のではなく、ルイが帰る処と決めている場所であり続けて欲しいとヒカルは切に願っていることをルイは知っていた。

・・・ヒカルは、何とかして彼とヒカルの共通点を見つけようと思うのだが、それはいつも失敗に終わる。

唇の端を少しだけ歪めて、彼は綺麗な顔をこちらに向ける。

「ヒカルを閉じ込めて、オレに何か利益があるとでも？」

「ルイはそんなことはしない」

ヒカルは答えた。先ほどまで、彼が自分を置き去りにしてしまったのではないのだろうかと思っていたのに、咄嗟に口にした言葉は逆のものであった。

そして、疑っていた自分を恥ずかしく思った。

彼は無意味に行動することはない。

だから、彼の利害得失という問題だけではなく、ヒカルをそれほどまでに重要だと認識していないのだということを認めるのが怖かったのだ。彼に見捨てられたということではなく、そもそも、彼の世界の中にヒカルは存在しないのだという確認をするようなことに怯えていた。

「『そんなこと』？」

彼は冷笑した。

闇の中に彼の金の髪が淡く光っているように見えて、ヒカルは自分がその少し前まで大変に慌てていたことを忘れてしまう。

ルイが前屈みになり、彼女の顔を覗き込む。ヒカルははっとして体を引いたが、それは虚しい動作になった。

シートベルトで体を固定されていたヒカルは、それ以上の自由を許されなかったからだ。

「ルイは、怒っているの？」

「なぜ？」

「私が、ついてきてしまったから」

ルイはその答えに、面白そうに目を見開いた。切れ長の瞳は青灰色で、ヒカルのそれとは異なっている。通った鼻筋も、綺麗な顎の曲線も、俯くと年齢よりずっと若く見える輪郭も、すっと筆を払ったような首筋も、彼の仕草には無駄なものはひとつもない。

彼の容姿に心を奪われる者は、すぐに、彼の頭脳はもっと素晴らしいと気がつく。

彼の中では無駄は存在しない。だから、こうしてヒカルを連れてくるということは気紛れではないということはヒカルにはわかっていた。でも、それ以上のことはわからない。

彼の心の内を知りたいと思うのに、彼は追いかけても、追いかけても、決して追いつかない星のような存在だから。

「永遠の晄が星を追いかける」

彼は詩を暗唱するような口調で言った。耳に残る声である。ヒカルは困ったように俯いた。気の利いた切り返しを思い付かなかった。

晄を放つ星が、永遠の晄を追い求めることはないのだ、と暗に言われているような気がしてしまう。

●11

「ヒカルはヒカルの想像の中だけで生きている」

ルイは薄い唇を動かす。その様子だけでも魅入ってしまい、自分が次に何をしようとしていたのかさえ忘れてしまう。

しかし、ただ陶酔するだけではない。ヒカルは同時に思ってしまう。

どうして、これほどまでに完璧な人が苦しむのだろう。

何もかもに恵まれているから幸せなのだという定義は成立しないのだと改めて思った。

「ヒカルの問いかけは、オレを満足させることはない」

そう聞いて、ヒカルは哀しくなって顔を曇らせた。彼に対して満足な情報を伴った質問をすることができないのだ、と言われているからであった。

つまり、ルイが質問をし直さなければ彼女の問いかけにはこたえはやって来ないのだと言われていることに、ヒカルは猛省する。自分が至らないだけではなく、ルイに対していらぬ労苦をかけてしまっているのに、それを当然のような顔をしている自分の厚かましさについてルイは非難しているのだ。

ヒカルは羞恥で頬を染めた。ルイに見つめられ、彼がヒカルのためだけに言葉を発することを喜びながら、それでいて問い詰められていることに心を落ち着かせることができない。

シャルルから得られる視線と、ルイのそれはまったく違っていた。なぜ、彼はこんなに自分を真っ直ぐに見つめるのだろう。シャルルの愛に満ちた視線とは違い、ヒカルを落ち着かなくさせる。

青灰色の瞳に見え隠れする、彼の激しさを感じるからだろうか。彼は、彼の特別な人にはそんな熱情を隠すこともなくぶつけているのか。

自分が、ルイの最も近い異性であるのだということがヒカルの中で少しばかりの誇りになっていたことを恥じた。だからどうなのだ。

シャルルからは「妹として遇するように」と言われたから、ルイは最大限の尊重をヒカルに向けているだけなのだ。彼はもっとヒカルに冷たくしても、それは誰も咎めるような理由にならないというのに。

ルイは、ヒカルが乗り込んだ車ごと、連れてきた。星の空に。

ああ、星の海が見える。

彼女は顔を上げた。ルイの肩越しに見える暗闇とちかりちかりと瞬く星の河が見え、それがヒカルを落ち着かせた。

河や海はヒカルの根源であった。恐ろしいと思う一方で、彼女はどうにも懐かしいと思う気持ちを抑えることができなかった。

星の行き交う夜を見ていると、涙が込み上げてくる。決して泣かないと決めていた彼女の眦に、星の水が浮かぶ。

父と母は、どうして帰ってこないのか。責めるのではなく、どうして自分が父と母の傍にいけないのかと思ってしまう。

本当は、戻って来られないのではなく、ヒカルが行き着けないのかもしれないと思ったのだ。

そして、アルディ家で自分は育っていくのに、少しも両親のことについて理解を深めることができない。ルイは、彼の母の記憶についてどう思っているのかということを聞いたことはなかった。過去を失ってしまった者は、未来に生きてはいけないのか。そうではないと思いながらも、ヒカルは明確な答を出すことができない。

「ルイ」

彼女は車から出ようとして、体を屈めたがシートベルトのロックに手を遣り、そして一瞬、ルイから視線をそらす。彼がどこかに行ってしまいそうな不安がヒカルの手を震わせた。早くしなければならないという焦燥が彼女の手元を狂わせる。

彼が満たされるために、ヒカルが消えれば良いのか。それとも・・・もっと何かできることがあるのではないのだろうか。ヒカルはそれを確かめようとして忙しなく手元を動かしたが、この車はいつもよく知っている車の造りと異なっていて、どこに触れれば解除となるのか、その位置すらわからないことがヒカルを余計に慌てさせた。乗り込む時にはそれほど難しくはなく、何も意識せずにいたものが急に彼女を縛める。

先ほど垣間見えた星の河は、ヒカルに静寧をもたらしたのに。

ヒカルを乗せた筐が、ヒカルが俯いたためにそれを咎めるために彼女から彼女がそれまで持っていたものすら躊躇なく掠って行ってしまっていくと思った。

「上手くいかなくて・・・」

ヒカルは口籠もった。

すると、彼は深く溜息を洩らした。それすら、ルイの仕草は美しく失望させてしまった原因が自分にあることすら束の間忘れてしまいそうになる。

夜の空の下で、ルイは星々を遵える者らしく、遠い眼差しでヒカルを見つめていた。

しかしヒカルが身を竦ませていると、彼はふっと体を屈めて腕を伸ばし、ヒカルのシートベルトを外した。まったく探す風でもなく、迷いもなかった。すでに内部の構造すらルイの頭の中に記憶されているかのように、彼は何事もないという様子で彼女の腰元から彼女には大きすぎる装置を取り外していく。

「位置くらい自分で調整しろ」

ありがとう、と言おうとするとルイが手厳しく彼女を遣り込めた。

慌てて乗り込んだために、ヒカルは自分の体格に合うように調整することを失念していたことを咎められていると悟った。普段は彼女のために準備された車を使用しているから、まったく気に留めることもなかった。ヒカルは己を恥じる。誰かに準備されているということを忘れてしまい、軽んじている行動を取ってしまったと反省した。

「気を付けます」

ヒカルはくぐもった声で言う。ルイが彼女の近くに体を寄せているので、彼女はつい、小さな声で答えてしまう。

ルイの神経質そうな細くて長い指先がベルトの収縮を乗せて、ヒカルから離れた。

金の髪がヒカルの目の前で、輝いていた。

・・・彼は、優雅にヒカルを解き放つ。決して、困らせようとしているわけではない。

それを知ってヒカルは微笑んだ。良かったと思った。何がどう良かったのか、うまく説明できないが、とにかく良かったと、そればかりを心の中で繰り返す。

●12

ルイ・ドゥ・アルディが非の打ち所のない仕草でもって彼女の降車を補助すると、ヒカルはようやく大きく呼吸した。

箱船に乗って星の河に近付いた、と思うほどに空が近かった。

「ここは？」

「隣で無遠慮に眠っていた者に教えてやる必要はない」

素っ気なくルイが言ったので、ヒカルは辺りを見回した。木立が幾つかあるだけで、見晴らしが良く、夜気に混じって強い緑の香りと河の匂いがする。それで気がついた。ここはパリから少し離れた場所で、人口の少ない街でありながらシャトーが点在する。近代化を好まないゆっくりとした時間が流れるところとしてヒカルも知っていた。

この車の走行には不向きな石畳の多い場所であったが、高層の建物がないので、星を観察する場所にはうってつけであった。

それに。

ヒカルは思う。

排気音とエンジン音が漏れ聞こえてしまう故に、ルイは夜の人気の無い場所を選んだのだろうと思った。彼は皆に囲まれることによって輝くのではない。彼そのものが輝いている。

星々を遵えるのに。

だから、ルイは皆に囲まれて姦しく過ごすより、ひとり、気の向くままに空を見つめる時間を好むことはヒカルも知っている。

その時だけは、ルイの手の平の温度を知る。

降車するときにヒカルの手を取り、優雅に彼女を外へ連れ出すルイの顔を見ながら、ヒカルは地面に降り立った。

これに懲りたら追いかけ回さないことだ、と厳しく注意されると思っていた。

彼はヒカルから手を離すと、すぐに彼女に興味を失ったように空を見上げ始めた。

ヒカルは彼に、ここはどこなのかと尋ねる機会を失ってしまう。でも、どこにやって来たのかは問題にならなかった。

あまりにも、星空が美しすぎて、眩しすぎて、彼女も空に広がる河を眺める。星の海であり、星の河であり、そして決して届かないところ。

ヒカルは星空を眺める。時間が経過するごとに、はっきりと見えてくる星空の瞬きに、彼女は目を細めた。空の中に何かがあるのかもしれないと思った幼い時のことを思い出す。

流れ星に願いをかけていたことも、星の空に哀しみをぶつけたこともあった。

しかし、その時にはいつもルイが傍らにいた。

彼はボンネットに寄りかかり、空を見ていた。

ルイは、何を願っているのだろう。

ヒカルは思った。彼の心の内を知ることはできない。常に、アルディ家の頂点に立つことを目標として努力してきた人はとても寡黙でヒカルと距離を置こうとしている。

あたりは静かで、まるで人気がなかった。一体、彼はこんな場所を何箇所知っているのだろう。彼が出掛けている時には、いつもこのようなひとりきりになりたいと思う場所を求めているのだろうか。

それを考えると、やはり自分はついて来るべきではなかったのかもしれないと思った。

それを読み取ったかのように、ルイは呟く。

「後悔するくらいなら、最初からそうするな」

「いいえ、後悔はしていない」

ヒカルは慌ててそう言ったが、ルイが彼女に視線を向けて、どきりとした。

その口元に微笑みが浮かんでいたからだ。

「ヒカルは、嘘つきだ」

彼女は息を止める。呼吸することすら難しくなってしまうほどの指摘に、彼女は何も答える事が出来ない。

「・・・嘘つきだ」

「そうだね」

目頭が熱くなり、そしてヒカルは頷いた。涙を堪える。彼女は確かに、偽りの日々を送っているのかもしれない。こんなに素晴らしい星空も目が醒めればすべて夢の中のことなのかもしれない。

それでも、この風景を記憶している限り、これはヒカルの想い出になる。そうしてひとつずつ、重ねて行く。彼女はそうやって生きてきた。両親との記憶の蓄積は別れてしまった時から増えて行くことはなかったけれども、それを哀しむのではなく、それを抱えて生きていくことを知った。

自分の心を誤魔化しているという点では。泣かないと頑なに決めている点では。確かに、彼女は嘘つきだと思った。

彼がひとりで見ようと思っていた星の下で、誤魔化すことに夢中になっているヒカルのことをルイが責めても、何も言い返せない。

彼女はそれでも彼の隣に向かった。

彼が何を眺めているのか、知りたかったから。

身長差があったものの、少しでも知りたいと思った。

大きく息を吸って、空を見つめる。夜気がヒカルの髪や服に纏わり付いて、彼女を少しだけ慎重にさせる。

互いの腕が触れるほどに近いのに、彼は少しも動かなかった。

見えるくらいの距離にいるのではなく、互いの気配しかわからないほどに近い方が落ち着いた。

●13

過ごした時間の累積はそれほど多くはない。

ルイの教育係であるミシェルの方がルイのことを熟知しているし、彼の気に入らないことも事も無げに回避するのだろうと思われた。

しかし、ヒカルはヒカル・クロスであり、ミシェルではない。

ヒカルはルイの隣に並んで、一緒に空を見上げるしかできないことを恥じたら、それは自分ではなくなってしまうと思った。

彼の隣にいることそのものが、ヒカルを落ち着かせる。

彼は星の奔りを眺めながら・・・何を思っているのだろうか。

乳白色に広がる星の河を見て、ヒカルはまたひとつ、大きく息を吸った。

車体に僅かに寄りかかり、ルイに今にも触れそうな距離にいるというのに。

彼には、届かない。

ヒカルは落ち着かない気持ちを誤魔化すかのように深呼吸を繰り返す。気配を抑えて、彼が空を仰ぐ時間を邪魔しないように、身を縮める。

そして、彼が無言で見上げている空を、そっと見てみることにする。

彼がひとりで眺めたかったのだとしたら、ヒカルはそれを横取りするような真似をしているのだと思って己を恥じた。けれども、あまりにも儚く美しく広がる星々の漂いを見ていると、そんな気持ちさえとても小さなもののように思えてしまう。

多くの星々を遵える者、という意味が込められている星辰の子からは、周囲の者はこんな風に見えているのかもしれない。

多く者達に囲まれているルイからは、ルイだけを見つめる者達はこんな風に・・・星の渦のよう

に見えるのだろう。煌めいているかどうかという差はあるが、ルイにとっては同じなのだろうと思うと、ヒカルは胸の奥が突き刺されたように痛んだ。

彼は目的をもって生きている。だから、ヒカルが求めるようなものは決して求めない。家族とか愛とか安らぎとか、そういうものはまったく不明瞭極まりないもの、という括りで処理されてしまう。

でも、ヒカルは皆がいたからここに居られる存在なのだ。いきなりひとりにされてしまったあの時から、常に誰かの支えがあって生きていられるヒカルをルイが厭わしいと思うのも無理のないことだと改めて思う。それなのに、近付かない、という方法は選択したくなかった。そもそも、選択するかどうかという問題ではなかった。ヒカルは見つけて欲しいと輝くだけで済まされなかったのだ、と感じた。永遠の晄という名前を持っているのに、少しも光り輝けない。それどころか、皆の晄を眺めて欲しがってばかりいる。だからルイは彼女のことを嘘つきだ、と言う。

それを認めるだけの根拠と、それを確認するだけの年月によって彼はそう言ったのだろう。どうにもならないほど、ヒカルは孤独を感じていた。

遣り切れない思いが、星を瞬かせているのだろうか。それとも、ヒカルの瞬きが彼が随える星々と共鳴し、連結された運動となっているのだろうか。

「ああ・・・」

彼女は声を抑える事が出来なかった。

目が慣れてくると、無数の流星が頭上を横切って行く様が見えるようになったからだ。右から左へ白い閃光が孤を描いたかと思うと、その逆の流れが現れる。まったく予測できない場所からふっと晄が浮かび上がって、すべての星々が空に登るのではなく空から下って消える。

すべての星が、空からやって来て、そして消えて行く様を見て、ヒカルはただ呼吸も瞬きも忘れて見入ってしまった。

母の血、と言われればそれまでであったが、こうして美しいと思うものを見ていると、どうにもならないほど懐かしい気持ちになってしまう。

それは幼い時に見た景色を思い出すのか、シャルルがヒカルに惜しげも無く見せてくれた景色を重ねているのか、それすら判別することができなくなり、彼女は混乱してしまう。

「星が・・・」

彼女は声を失った。声を出せば、晄が消えてしまうと思ったからだ。

ここにあるのは、静かな星の夜だけである。人気はまったくない。杜の生命達も、空のざわめきに息を潜めて眠りを優先させているかのようにひっそりとしている。

「星は、いつかは墜ちるものだ」

ルイの声は心なしか、切ない声音であった。

「それでも、輝くのは生きているからなのね」

彼女は思わず口にしてしまう。生きている者のような表現をするのはまったくつまらないとルイは酷評するのかもしれない。でも、そう思ってしまう。

祈るように、願うように見守る。

消えて行く星達が、命そのものに見えてしまう。それを回避するために、祈りに変換する。

●14

彼は溜息混じりに言った。

「星は生きる為に堕ちるのではなく、生きていられなくなったから堕ちる」

彼にしてはとても感傷的な表現であった。ヒカルはさらに空を覗き込むように顎を上げて、いつもの自分の声よりもくぐもった囁きを漏らす。

「それでも・・・星の恋は綺麗だと思う」

「星の恋？」

ルイが呆れた声で言った。それが流星を意味しているのだとすぐに気がついたらしい。

ヒカルに夜空を見せ続ける相手は、空から堕ちるという表現を好まなかった。

なぜシャルルはそういうことを避けているのかという理由は明白だ。

ヒカルの両親の行方がまだわからないということによるところが大きかった。

「恋は美しいものばかりとは限らない」

ルイの言葉に、ヒカルははっとして彼を仰ぎ見た。

星の中で金の髪をそよがせているルイの横顔は、彼女が声がかけられないほどに透明でそして何もかもを拒絶しているような風情が漂っている。

「流星を星の恋と呼んで、それが燃え尽きる瞬間を美しいというのであれば・・・ヒカルは恋を知らない」

「ルイは知っているの？」

ヒカルは驚いた声を出した。自分の声があまりにも大きくて、慌てて手の平で口元を抑える。

父と母が少年と少女だった頃の恋を実らせてヒカルが生まれた。シャルルが今でもヒカルの母のことを特別な人と位置づけていることも知っているし、父のことを親友だと定めている気持ちも理解できた。星に願いをかけるという祈りの代わりに、ずっと探し続けてくれている。

星の恋は、夜の間だけしか見えない。でも、見えていなくても星というものはずっと晄を放っていて、恋しい相手の元に身を焼かせて近付いて行く。そんな激しい恋はヒカルは知らなかったけれども、ルイは知っているのか。

それが、彼の「特別」な存在であるのだとしたら、ヒカルはそれを祝って応援したいと思った。

「何を?」

「その・・・星の恋を・・」

「星の恋、ね・・・」

彼は薄く笑った。その綻びは絶望が混じっているような笑いであったので、ヒカルは慌ててルイに視線を戻す。この素晴らしい星空をひとり眺める程に、苦しい思いに身を焼いているのだろうか。

それとも、彼が本当に認めて欲しいと思っている相手に、声にならない願いを星に乗せているのだろうか。

どちらにしても、ルイが心の奥深くで何かに憂えていることだけは間違いなさそうだ、と思ったヒカルは、並んでいた彼に身体を向けて、心を込めて言った。

「ルイがそう望めば、きっと叶う」

「オレには実現できないことはないよ、ヒカル」

ルイ・ドゥ・アルディは嘲ら笑った。アルディ家の後継者となるべくして生まれた彼には、確かに不可能はなかった。いずれは、彼はすべてを掌握するのだろう。この国の未来さえも、彼にとっては本当に些末なことのひとつのように見受けられた。

「確かに、求めるものが存在する状態であることには違いないが、それはヒカルに言われることではない。オレだけのものであり、ヒカルはそこに踏み込むことは許可していない」

「そう・・・浅はかだった」

ヒカルは声を細らせて謝罪した。ルイにはいつも叱られてばかりである。年齢はそれほど変わらないはずなのに、彼からはいつも指摘されるばかりで、ヒカルが彼の助けになることは何一つ無かった。

「いらぬお節介であったね」

「お節介どころか、不愉快だよ。ヒカル」

はっきりと不快感を露わにされて、ヒカルは身を縮ませた。ルイは辛辣なことを言いはするけれど、このようにヒカルに対して自分が思っていることを口に出すことは珍しいことであったからだ。ただ事実を突きつけて、ヒカルにそれを認めさせるという程度の会話しかしていなかったヒカルには、ルイがなぜ怒っているのかが理解できていなかった。彼は言った。

「君は本当に、愚かだよ、ヒカル」

●15

彼が彼女の自覚を確認するかのように断言したので、ヒカルは強く目を閉じた。そうしなければ、自分が保てないと思ったからだ。星の恋、と言ったのは彼を不愉快にさせるためではなかったのだと弁明することすらできないほどであった。

ルイを安らがせるような言動をすることは自分には到底無理な話なのだと思うと、彼の大切な時間と空間に勝手に立ち入ったことへの罪悪感で全身が痛くなった。

「ルイの時間を邪魔してしまった・・・もう何も話さないから」

彼女はそう言って、ルイを見ないで視線を地面に落とす。乾いた土が見えて、ヒカルは爪先を内側に向けた。

これは自分を恥じて、そして自分を否定している者の行動だと聞いてはいた。

しかし、自分が実際にそのように行動すると、言われたことは真実であったのだ、とどこか遠い場所で眺めている別の視線のように自分を見てしまう。わかっている。それを認めるのが、辛いからだ。

だから。

知らない風景のように、それらを眺めてしまう。

両親が知ったのなら、歎くのだろう。でも、両親が傍に居たのならヒカルはヒカル・クロスではなかった。ずっと、黒須昶のままであっただろうから。

どうして、ルイの前ではこんなに脆くなってしまうのだろう。泣かないと決めたのに、その誓いを破ってしまいそうになってしまう。

どうにもならない気持ちを持て余してしまっていた。

ヒカルは自分の心を覗き込むことを拒んでいた。ルイに言われて、それで気がつく愚かさに彼女

は困惑してばかりであった。

ルイに拒絶されることは慣れていたけれども、彼が内心はそう思っていないと慢心していた。だから、自分はこれほど彼の言葉に深く耳を傾けて、そして傷ついている。

真新しい車に身体を預けたルイは、ヒカルのすぐ隣にあった。けれども、心は遠く別の場所に存在する。彼の特別な存在が、彼に祝福の眺を注ぐのは一体、いつのことなのだろう。彼女はそう思った。少なくとも、自分ではない。彼が、自分の幸せを願うことができるほど誰かのことに執着するとしたのなら。それをヒカルは祝ってやらなければならないと思うのに、素直に声が出てこなかった。

ルイが何を望んでいるのか、それが明らかになっていないから。

●16

「星の戀は、結実しない」

ルイが静かに言ったので、ヒカルは悲しさのあまり胸を自分の手で押さえた。結実することばかりが全てではないとシャルルは教えるけれども、ルイは実らない思いのことを「星の戀」と言うのだと思った。

「片方だけ堕ちる」

彼はひとり呟いた。ヒカルに意見を求めているわけではなかった。彼の中にある物思いを、たまたま傍に居たヒカルが聴いてしまった。本当なら、彼はひとりで考えたかったことなのかもしれない。

彼に断りもなく踏み込んでしまった、と改めて自らの愚行を思い返し、ヒカルは俯いた。

「ヒカル。俯くな」

ルイが、「不愉快だ」と言った相手に厳しく声を投げたので、当の本人であるヒカルは慌てて顔を上げる。アルディ家の者は俯いてはならない。彼はいつもそう教えられている。だからヒカルの行動が自由気ままというよりはむしろ、彼の家の教えに反抗しているように見えるのかもしれない。確かに、ヒカルはアルディ家の中で育ちながらも規定されたものごとに従えと強制されることはなかった。

星の終わりを見ているというのに、それを戀を言うヒカルのことをルイは嘲笑う。しかし、今日はいつもより更に加えて言葉が少なかった。

「墜ちるのではなく、向かっているのだと思いたい」

ヒカルは呟いた。

どうしようもなく惹き合って、そしてついに自分を焼き尽しても構わないから晄輝いて己を見て欲しいと思う願いそのものなのだと思った。

流れる星に願いをかけると成就すると言われているけれども。

本当は、星そのものが成就を願って晄を放つのかもしれないとさえ思ってしまうほどのたくさんの星の戀が空から降って来ていた。

星々を遵えると言われているルイは、どんな風に感じているのだろう。

彼の整った美貌からは窺い知ることは出来ない。それでも、ヒカルは彼の気配を隣に感じながらも、空を見つめていた。

ひとつ見えた、と思うとまたもうひとつ現れる。絶え間なく出現する星の溜息にも似た晄の線は幾筋も見える。

流星群が観測できることを知っていたが、この時期に再び見られるとは考えていなかったヒカルは、動くことも忘れて空を見上げていた。

それは、隣にルイが居るからだ。

星の様子を眺めると、ルイのことが気になってしまう。ルイの気配に耳を傾けようとすると彼は俯くなと言う。

相反する事象にヒカルは戸惑いながら、それでもルイにそっと囁いた。彼にはもう語りかけないと言ったばかりなのに。自分は、なぜこんなにもルイの静けさを壊してばかりいるのだろう。そう思いながら。

「星は、行きたいところに向かっていくから、ああやって急いでいるのかもしれない」

「行きたいところ、ね」

ルイは浅く笑う。ヒカルの発言は彼には稚拙極まりないのだろう。ヒカルは頬を赤くして、熱を感じながらそうだ、と軽く顎を引いた。

「そう。行きたいところに行けるようになって、星は嬉しいのかもしれないと思う」

行きたい場所を目指して、星は自らを輝かせる。その命が儚いものであることも承知の上で。感情を持っているわけではないとルイは流星の心情というものを否定するかもしれないが、ヒカル

はそう思っていたいという気持ちを伝えておきたかった。彼女の願いのひとつには、ルイが幸せに微笑むことがあるのだと言いたかった。どれほど距離があったとしても、いつか、ルイに向かって来るものだけではなく・・・星辰の子その人が向かっていく様を期待したかった。

「ヒカルはきっと走って行くのだろうな」

「待つより動いてしまうかもしれないわね」

「浮躁者の持論というわけか」

ルイの辛辣な切り返しに、彼女は苦笑いを浮かべる。自分のことを卑下した言い方をしないかわりに、ルイがそれを指摘する。そういうことを繰り返すが、ルイに対してヒカルが罵倒したことはない。なぜなら、彼には何一つ欠点らしきものが見当たらないからだ。それは生まれながらに備わったものも多くあるためであったが、ルイが隙を見せないからだということは傍にいるヒカルはよく承知しているところであった。

●17

「車内で眠っていた女が言う台詞にはそぐわないな」

そう言われて、ヒカルは目を見開いた。そうであった。自分はルイの運転する車の中で深く眠り、どうやってここに辿り着いたのかさえ記憶にない。彼女は恐る恐る、彼に尋ねる。茶色の癖の強い髪が揺れて彼女の背中で暴れ出した。髪をまとめることにも気を使わず、彼女はシートに凭れたままで乱れた後ろ髪のままで彼と話をしていたことに気がついた。

「あ、あれは・・・」

そこでルイがくすりと笑ったので、ヒカルは驚いて言葉を詰まらせた。彼の微笑みがそこにあったから。

あまりにも近い場所にあったので、彼がヒカルのことを揶揄っているのだと気がつき、更に首筋や耳まで赤くしてヒカルは肩を上げた。

「オレに星の戀を語るのであれば、居眠りしないことだ」

彼にそう言われて、ヒカルは目を瞬かせた。彼はこんな風にヒカルに冗談を言うような人物ではなかったのだが、と訝しんだ。しかし、すぐにそれは嬉しいからなのだと気がついた。どうやって切り返すのか考えるより、身体の奥から、嬉しいという気持ちが勢いをつけて溢れて出てくる。

彼は見事な金髪の下にある青と灰の混じった双眸をヒカルに向けて、唇の端を持ち上げた。

「今度は、起きているから」

「どうかな」

ヒカルはルイが年齢相応の者に対して語るような口調でヒカルに応じてくれたことが、彼女の願い事なのだということに気がついていた。

それでも、良かった。それでも、嬉しかった。

彼の気紛れかもしれないけれども、それはヒカルにとっては星の戀がこちらに向かってやって来たと感じるほどに嬉しいことであったのだから。

「行くぞ。・・・このまま残りたいのであればそのままで構わないが」

ヒカルは慌てて身体を起こした。この車は静音設計であるのは車内だけの話である。外側は空にまで届くようなエンジン音が鳴り響くことであろう。

そしてここはヒカルの知っているようで知らない場所であったし、周囲は星がよく見えるほど暗くて、足元が覚束無い。

この車体の色であるから薄光って見えた足元を見て、ヒカルは慌てて助手席に戻ろうとした。

舗装されていない場所を長く通ってきたのだろう。タイヤが泥で汚れていた。

ルイはこういう汚損を避ける傾向にあるのに、星を見る時だけは考慮に入れない。そのために、彼の足元も汚れていた。

・・・そうではない。

ヒカルは大きく息を吸った。

自分がいるからだ。ヒカルは、思った。ヒカルが眠ってしまっていたから、起き出すまで静かに時間を過ごせる場所を選んだのだと思った。そしてここは幾度めかの、ルイと眺める新しい場所で、そして切なくなって涙が出てしまいそうになるほど美しい星の空であった。

彼が先に車の外に出ていたのはヒカルの存在を無視していたからではなく、彼は周囲を確認していたのだろうと思われた。それを確信した。

なぜなら、ルイの靴も同じ様に歩き回ったことを示すように汚れていたからだ。彼は決してそんなことはしない。見知った場所であるのなら、彼は自分の着衣を汚してまで移動することもないし、歩き回ることはしない。ここはルイが知っている場所よりも先に進んだ場所であり、ヒカルはルイと眺める星空はいつも違う場所であることをルイも承知していたからなのだ、と思った。

「予定を変更させてしまった？」

ヒカルは慌てて声をかけた。ルイは助手席の前に立ち、そしてヒカルの声に応える。彼は誰も見ていないのに、彼女のために立っている。

「車内を汚すなよ」

ヒカルは足元を見つめる。確かに、自分の足元も泥で汚れていた。これでは室内を汚してしまう。

それから、彼は付け加えた。ヒカルの問いに、ルイは無表情に答える。

「オレの予定を変えることができるのは、オレだけだ」

●18　どれほど憤っていたとしても、どれほど相手にしたくないと思っている相手であったとしても、ルイはそれでも儀礼を欠かさない。 それが、ヒカルだけを目の前にしていたとしても。 彼に迎えられることに喜びを感じる者はどれほど多いことだろう。それなのに、今はヒカルがルイを専有していると思うとどこか落ち着かなくなってくる。 そして彼は早くしろ、とは急かさない。ヒカルのことをただ、じっと待っているばかりだ。 たくさんの星が降る夜の中で、彼の金の髪だけは鮮やかに輝いていた。 やはり、彼は星辰の子なのだ、と思った。 星が彼に向かって降り注ぐように感じる。空の星がルイにだけ見て欲しいと焦がれるように。　 こぼれ落ちる星が、ルイを祝福しているように思えた。 ヒカルは目を細める。時々、シャルルはヒカルをそのようにして見る。その気持ちがわかった。 祈りを捧げている時には、そういう視線を向けてしまうのだ。 自分も他も者達と同じ様に彼に願っている。祈りを捧げている。それが、ルイの望んでいることなのかどうか確認することなしに、自分のひとりよがりな思いを彼に降らせている。 そう思うと、彼女はまたひとつ大きく息を吸った。 溜息はいけない。周囲の星の空気を吸い込んで、彼女は勇気をもって、言った。 「私、ルイとまたこうして・・・たくさんの場所で、たくさん星を見たい」 いつも見ていた。彼はいつも孤独で、ひとりで星を抱えている。 彼女はぐっと力をこめて、言った。自分の声が震えているのがわかった。 彼が星を眺める時というのは、彼が孤独を募らせている時だ。それがわかったから。　 彼は。 何も祈らず、何も求めない。　 ・・・そんなルイのひとりの時間をヒカルは少しでもいいから分かち合いたいと思っていた。 「星を？」 彼は嗤った。そうだ、とヒカルは頷く。 「星の戀は哀しいけれども・・・きっと嬉しいと思っている」 命を燃やしながら光を放つものは、戀であるかもしれないけれども、同時に希望であるから。それを見た者は自分の願いをかける。何かの命の終わりを見て、何かの始まりを祈る。 それが繰り返される星の戀は、ヒカルにとってだけではなくルイにとってもきっと・・・そこまで考えていると、ルイは静かに、それでもヒカルの思考を中断させるように言った。 「なぜ？終わるのに」 「終わる際になっても、終わらないから」 ヒカルは泣きそうな顔を笑顔にかえて、震える声で言う。 僅かに首を傾げて、それでもルイの注視から逃れるようなことはしなかった。 こういう話を、ルイと交わすことはなかったので緊張しているということもあった。 それなのに、彼の運転に安堵して眠ってしまう自分の幼さも認めている。それでも・・・それでも。ルイはひとりで大急ぎで行ってしまうような気がしてならなかった。 やり場のない切なさを感じる。ヒカルは、ルイの心の洞のようなものを垣間見た。だから、彼は星辰の子なのだ。晄を吸い込み、星々を自由に動かすことができる。 「・・・乗れ」 彼は溜息混じりに言った。ヒカルの言葉は伝わったのかそうではないのか、それすら答えなかったので彼女はまた唇を噛んで彼の指示に従った。 それでも、彼女は教えられた仕草が彼女に無意識の行動に移らせる。彼女はアルディ家で育てられた。それ故に、些細な仕草はすべてルイの求めるものに応じられる程度には素養として身についていた。 しかし、それでも自分はルイに遠く及ばないと感じる。彼の流麗な仕草や溜息がでる程の完璧な視線の運び、絶妙なタイミングを逃さない補助の力加減については、彼女はルイしか知らない。

彼ほどの人物に匹敵するほどの人物をシャルルとミシェルの他には知らない。　●19

「あの、少し待って」

彼女は慌てて自分の足を持ち上げた。シートに座り、革の質感に包まれたと思うと同時に、ルイが彼女のシートベルトを手に取ったからだ。

こういう風に、誰かと近く寄り添うことに慣れていないヒカルは慌てて声を出した。僅かに、ルイの香りがヒカルの鼻腔を刺激する。どうして良いのかわからない空気に、声をくぐもらせて彼女は言った。

「靴を、脱ぐから」

彼女はそう言って自分の踵に手を伸ばし、踵の低い靴を脱ごうとした。

「何かの余興？」

彼は身体を屈めながら手を止めた。ルイの苛立つ声を聞きたくなくて、ヒカルは慌てて説明を加える。

「そうではなくて」

彼女はそう言いながら、彼の腕に触れる。いらぬ作業を強いる結果になってしまったことを申し訳なく思いながら。

ルイの神経質そうな指先が目の前をよぎる。

彼女は目を瞑った。彼が彼女に危害を加えることはなかったが、それでも彼の憤りが空気を伝わってくる。

「汚れてしまっているから」

彼女はそう言った。彼の新しい車の中は自分という異分子で汚されてしまうようで後悔した。乗り込まなければ良かった、と思った。それは、星の戀達を後にしてこの場を去らなければならないという逡巡と相反するものであり、同質のものであるような気がした。

自分の中にある、どうにもならない物事をルイは一蹴してしまう。最初は彼の言葉に酷く哀しんだりするけれども、それがヒカルの心を軽くする。ルイは顔を上げた。

その時に彼と目が合った。

余りにも近い場所で余りにも綺麗な青灰色の瞳があって、ヒカルは思わず身体を引いた。彼の顔が近くにあって、それがヒカルの動作を止めてしまう。

「そういう意味で言ったのではない」

「え？」

ヒカルは声を出した。ルイはそっと彼女の腕を取った。摘まむように、撫でるように。そんな風に優しく彼に触れられたことのないヒカルは驚いて言った。

「ルイ・・・」

星の夜がそうさせたのだろうか。

それとも、ヒカルがルイに優しくされたいと願ったから実現したのだろうか。

ひょっとしたら・・・これは幻なのか。

「ヒカルに靴を脱がせるために言ったわけではない」

それでも自分はそうするべきだ、と言おうとしたヒカルの言葉をルイは押しとどめた。何もできない彼女はただルイの誘導に従う。

シートベルトひとつ着脱できない自分の情けない格好を曝け出すことになり、ヒカルはただ顔を赤くするばかりで何も言い返す事が出来ない。

誰よりも美しい人はヒカルの目の前で眉を潜めて冷たく言い放つ。

それから、そっと彼は言った。

「星は恋をしない。ただ、墜ちるだけだ」

そして、彼はそれを眺めるだけなのだと思うと、ヒカルはルイがなぜ星を見るためにこんなに遠く離れた場所にやって来るのかを知ったような気持ちになり、また言葉がでないもどかしさを味わう。

彼を慰めたり安らがせたりする言葉を、ヒカルは知らない。

ヒカルは彼の何になれるのだろう。永遠の晄という名前をつけられた自分は、ルイと星を眺めるだけしかできないのだろうか。彼の望む将来を祈ることもできず、左袒することもできず、ただひたすら見守るだけしかできない。それが苦しかったし、それ以上のことは踏み込んではいけないことなのだと思っていた。

「それでも、星は墜ちるだけではなくて、輝きながら墜ちるから」

ヒカルはそれを言うだけがやっとであった。

星辰の子に気がついて欲しいと思う者は多い。彼女は、自分の立ち位置がとても恵まれたものであることも承知していたものの、ルイから見た景色が流星の空のようであるのかもしれないと思うと、居たたまれなくなってしまう。

ルイに向かってくる晄達は、みな、途中で消えてしまうのだとしたら。

彼に寄り添いながら輝き続ける存在は、やはり彼のことを理解している人でなければいけないのだ、と思った。

ヒカルよりもずっと彼のことを熟知している人物達によって彼が心安らかになれる時間が少しでも多くなれば良いのにと思う。そして願わずには居られない。

自分が彼から奪ってしまったものが、確かに存在する。

●20

ヒカルはルイの顔を見つめる。彼はとても近くに居るのに、遠く感じるのはヒカルがそう思っているからなのだ、とわかっていても。彼はとても遠かった。誰よりも近い場所にいるのに、苦しいほど近いところにいるのに。

彼女はそっと手を伸ばす。ルイに触れようとした。

「触るな」

彼はぴしりと言って彼女を拒絶した。

ヒカルは身体を強張らせて、声を忍ばせる。

「ごめんなさい・・・」

彼女の声が更にルイを苛立たせた。彼は目付きが険しくなった。

そこでヒカルは自分を恥じた。彼に哀れみは不要であったことを忘れてしまっていた。

憐愍と愛憐・・・それについて彼は問うているような気がしていた。

何故、ヒカルはひとりでいられないのか

ルイは、そう問いかけているのだと思った。

星の夜に輝く金の髪が眩しかった。

消えて無くなる星の戀とは違い、彼の輝きは失われることはない。

閉ざされた彼の心が垣間見える気がした。彼は、孤独であることを怖れていない。

それがヒカルと違うところであった。

彼と、ヒカルの視線が合った。

彼は孤独に苦痛を感じているとは言わない。

人から拒絶されることを気にしすぎるヒカルとはまったく違う思考の持ち主に、ヒカルは戸惑いながらも声を震わせて言う。

「私は、確かに配慮が足りない」

「自己分析の申告は必要ない」

ルイに言われて、ヒカルははい、と言って頷いた。

しかし、そこで思い当たることがあり、彼女は顔を上げる。

彼は誰かを励ますような言葉は使わない。他者に興味がないからだ。そういう言葉を使う時は誰かを動かしたい時だけである。

それなのに。彼がヒカルに告げた言葉達が、星々のようにヒカルの心に次々と墜ちてきて、そして消えゆく前に彼女に事実を知らせていく。

目の前がちかちかと点滅する晄で平衡感覚を失いそうになる。それは先ほどまで見ていた星の戀たちよりずっと明るいものであった。

ひょっとしたら、彼は彼女を励ましているのだろうか。

少なくとも、ヒカルはルイの言葉によって深く考えさせられることばかりであったし、自分ひとりだけであったのならきっと涙を零してしまったと思うようなことも、ルイの前であったから泣かないと己に言い聞かせることができていた。

ヒカルは、ルイを見つめた。

彼はそんな彼女を無視して、シートベルトの着脱留具が完全に固定されている状態であることを確認するとふっと身体を浮かせた。

彼が黙っているのは、ひとりになりたいからではなく、ヒカルに合わせているからなのかもしれない。

そんな疑問が湧き上がる。

「あの・・・ルイ」

彼女は言った。彼は彼女から離れて、車体に手をかけると勢いよく扉を閉める。それでも、設計上配慮されていることなのか、僅かな音しか響かなかった。会話を遮断されて彼女は黙り込んだ。

ルイと会話が続かないと思うことはあっても、彼にいきなり会話を拒否されるということは殆ど経験していないことであった。

甘やかされて育ったと思う瞬間だ。こういう場面に他者の好意を期待してしまう自分に嫌悪する。

彼が反対側の運転席に乗り込んで来たので、車体が僅かに傾いだ。それでもヒカルはじっと前を向いて、自分の気配を消してみるように努力するが、ルイの様子が気になって仕方が無かった。

星の香り、というものがあったのなら。ルイが今、外から持ち込んできた杜の香りと相俟っているのかもしれない、と思った。

星が彼に向かって星を降らせる。戀を、降らせる。それはヒカルが欲しかったものと少し違うかもしれない。彼は孤独である以上に孤独であると思った。どれほど皆が彼に注目したとしても、彼そのものに到達する頃には消えてしまうのだから。でも、そうなったとしても近付いてしまう

のはやはり、彼がルイ・ドゥ・アルディであるからなのだ、と思う。

●21

しかし、彼はしばらくの間、ハンドルに手を添えたままで出発することはなかった。

「ヒカルが指示することではない」

それで、彼が怒っているのだと知った。いいや、憤慨しているのではなくて哀しいのだ、と思う。ヒカルがヒカルの価値観で、星の戀の話をしたから。

彼にも手に入っていない、実現できていないことがあった。

それは、ヒカルではなくルイが手を伸ばして掴み取らないと得られないものであることは、ヒカルも承知しているところである。

そんな彼に、堕ちて来るばかりの星々の話をしてしまったことがとても迂闊であったのだと感じる。自分は、彼を励まし勇気づけることもできない。非力どころか、無力そのものであった。

何も言い返すこともできないが、黙っていれば無視と同じになってしまう。かける言葉がなかったとしても・・・永らくシャルルの息子として認知されていなかった彼の日々のことを考えると、沈黙はいけないことなのだ、と思った。

「ルイ。私は、消えたりしない」

それは彼女の願望そのものであった。

けれども、ヒカルはそれを口にした。

本当は・・・消えて欲しくない人々に対して捧げる言葉であったが、彼女はそれを声にして、自分の誓いに変えた。

彼は溜息を洩らす。

「ヒカル。それはオレの願いではない」

「私の願い事だから」

ヒカルは微笑んだ。

そして星の空を見上げる。フロント越しに見える星の瞬きの中には、落ち行く星が幾つも筋を作って消えて行く。

「ルイ、私はどこにも行かない」

それが良いことなのかどうなのかはわからない。

けれども、不意に消えることはしない。

彼に願いをかけながらも消えてしまうような星にはならない。なぜなら、彼女は永遠の晄という名前を持っているから。異質の存在だから。たったひとり、ルイにとっては、彼に向かって願いをかける恋にも似た想いと思惑を持ち得ない存在だから。

彼にとって、ヒカルというものは星の燦めきにすらならない。

ルイが目を止めることもない存在なのだから。

「私は、きっと消えない。だから、ルイの特別な誰かと一緒に星を見るようになる時が来るまで、一緒にいても・・・良い？」

その瞬間。

彼が大きくハンドルに手の平を叩きつけたので、勢いよくクラクションが鳴り響いて、彼女は小さく悲鳴を上げた。

「ヒカル、オレを哀れむな」

普段、荒々しい態度を見せることのないルイ・ドゥ・アルディの驚くべき態度に、ヒカルは唖然として目を見開いた。

「ルイ」

ああ、傷つけてしまった、と思った。

彼の青灰色の瞳は険しく光り、彼は全身で彼女を拒絶していた。既に、こちらさえ見ていない。真っ直ぐ見据えた眼差しが強く吹き出す感情を押し殺しているものの、それを抑制できないルイはただ深く呼吸をしている。僅かに赤らんだ頬が彼の憤りの度合いを表していた。

秘められたものを見てしまった、と彼女は思った。

彼は細く長い指先を強く握り、それからふっと全身の力を抜いた。

その様があまりにも悲壮で切なく、激しい感情を消し去るようにと自分に言い聞かせているルイの横顔にヒカルは慌てて声をかけた。

何か言わなければ、彼はこのまま消えてしまうのではないのだろうかと思ったからだ。

どんなに罵られても良い。だからせめて、彼の中にある流星のような・・・燃え尽くすような思いは彼の責任によるものではないことだと伝えたかった。

「だから、ルイもどこかに行かないで」

彼女は懇願した。

「それがヒカルの願い？・・・一度に多くを願うのは、やはりヒカルだな」

彼は冷笑した。

●22

彼は背凭れに深く沈んだ。しかしそれはほんの一瞬のことで、次の瞬間には背筋を伸ばして起き上がり、彼は発車の準備を手順どおりに進めた。

大きなエンジンを積んでいることもあり車体は一瞬だけ静寂の中で震動音を溢す。

その中で、彼は絞り出すように言った。エンジン音でかき消されそうになるほど小さな声で、静かに。そして絶望的に。

「オレがどこかに行くのではない。・・・どこかに行くのはヒカルの方だ」

それを聞いて、ヒカルは身体の向きを変えた。シートベルトで縛められているものの、それに逆らって彼の方に向き直る。肩や胸にベルトが食い込んだが気にしていられるはずはなかった。

ルイの声が、あまりにも・・あまりにも悲壮であったから。

「そんな」

そんなことはないのだ、と言おうとしてヒカルは声を詰まらせた。なぜなら、彼の言っていることは誤りではなかったから。

「ルイ」

彼女はまた、彼の名前を呼んだ。孤独を募らせてもなお、彼は自分の信じた道を行こうとしている。皆が寄って来て消えて行くのではなく、皆が行ってしまうからなのだというルイの声に、ヒカルはただ身を切られるような痛みを感じていた。

「私は・・・」

「ヒカル。オレを侮辱したな」

彼は冷たくそう言った。見ると、いつものルイ・ドゥ・アルディの表情であった。星の夜は、人の心を透けさせるのかもしれない。月の夜は人を狂わせるものだと言われるけれども。星の夜は、ルイ・ドゥ・アルディの孤独でさえ透かしてしまうのかもしれない。

「そうではない」

ヒカルの弁明は弱々しかった。自分が意図していなくても、結果的には彼を酷く傷つけてしまったことには代わりが無いからだ。言い訳のために自分の言葉を尽くすより、彼の心を酷く穢してしまったことを謝罪しなければならないと思った。

「そうではないけれども・・・ごめんなさい・・・」

彼女は呟いた。金の髪の青年は、横顔を厳しくして、それから少し俯いて言った。

「流星の夜に誓ったことだ。ヒカル、忘れるな。アルディ家の者は倍以上の返報返しをすることになっているのだから」

ヒカルは思い出した。

彼らの家訓というものは、その解釈によるところが大きいが、受けた仕打ちについては忘れたり赦したりすることはなく、必ず報復するということを教え込まれていた。それが決して幸福を生まない結果になったとしても、誇りを捨てて苦しみから逃れることを選ぶことを赦されていない家系であった。

「苛立つ女だな」

彼は吐き捨てるように言った。ヒカルはそれでも、彼に答える。

「私はいつでも罰を受ける」

「『贖罪の娘』だから？」

彼の質問に、彼女は黙った。それを肯定することはなかったが、それでも彼は彼女のことを贖罪の娘、と呼ぶ。彼から取り上げることになってしまったものがどれほど多いのか、その言葉を聞く度にヒカルは思い知ることになる。

わかっている。本当はもっと距離を置いた方が良いのだということも。それはシャルルからもミシェルからも忠告されていることであった。誰からも、決して推奨されることはない。それは承知していることであったが、目の前ではっきりと言われてしまうと、どうにも切なくなってしまう。自分が飛び込まなければ、ヒカルもルイも傷つくことはなかったのに。それでも、静穏を望まなかった。星々がそうしているように。たとえ、消えてしまったとしても願いを残したかった。

「叱られても仕方が無いことを私はしてしまった。だから、ルイは私に怒る理由がある」

彼女はもう、自分で何を言っているのかさえ判らなくなってきてしまう。彼を怒らせたいわけではない。煽っているわけでもない。ただ、ルイのひとり孤独な星見の時間が孤独ではなくなれば良いのに、と思うばかりである。

「私は・・・いつでも、ルイの目の前から消えたりしない。ルイが迷惑だと言っても、
私は・・・」

●23

その時のことだった。

ルイ・ドゥ・アルディがふっと身体を浮かせた。

彼はヒカルのように、まだシートベルトを締めていなかった。

最初は、彼が帰りの支度を始めるのかと思ったヒカルは、この気まずい雰囲気をどうしたら好転させることができるのかということで頭がいっぱいであったので、彼の行動にまったく別の選択があることに気がついていなかった。

「ヒカル」

ルイは彼の名前を呼んで、彼女の腕を掴んだ。えっと思って顔を上げると、彼が彼女の顔に近付いていた。

ヒカルは何が起ころうとしているのかまったく理解できずに、ただ瞳を見開いて彼の美貌が近付いて来るのを見守っているだけであった。まるで、齣送りしている動画のように、彼が目を伏せて近付いて来る様を見ているばかりであった。

何が起ころうとしているのかわからないから、身構える術も思い付かない。ただ、動転してしまい、驚愕している瞬間と同じ速度で彼は近付いて来た。

星の戀、という言葉を思い出していた。

あっという間の出来事のようで、それは永遠に光っているような感覚があった。

「あの・・・ルイ」

彼女が困惑して彼の名前を呼んだ時。

彼はすでに、彼女の腕を引いて、今にも頬に彼の唇が触れそうなほどの距離にいた。あっと思っ

た時にはすでに遅く、彼が彼女のこめかみの上にいる。

触れるか、触れないか。それほどのぎりぎりの場所で、彼の薄い整った唇が動く。

彼の喉がヒカルの頬に寄って、僅かな声でも彼女に響き渡っていた。

ヒカルは、家族のキスしか知らなかった。シャルルが、「オレの天使」と言って彼女のこめかみにキスをする度に、幸せな気持ちになった。家族の思い出が希薄であるのはヒカルもシャルルも同じであったけれども、それでも寄り添って生きてきた。

互いに尊重し、そして決して哀れむばかりではないのだという決意のような、願いのようなキスがヒカルにとっては何よりの宝物であった。

いつか、ルイとも・・・同じ様に、家族のキスを交わすようになったのならどれほど素晴らしいことだろうと思っていた。勿論、それ以上にシャルルとルイが抱擁して互いを父と息子と呼び合う瞬間に立ち会うという願いの方がずっと大きかったが。

何が起こっているのか、まったく理解できなかった。彼は、そっと彼女の髪の上で囁く。

「オレは絶対に許さない。・・・間を置かずに返してやる」

そして、彼は彼女の腕に力を入れた。ヒカルが痛みで顔を歪める。ああ、自分はこのままルイに壊されるのだろか。そんなことはあり得ないと思っていたのに。彼は、ぐっとさらに力を入れて、ヒカルの硬直した肩を自分の方に寄せた。

彼が、自分に危害を加えるとは決して思っていなかったものだから。

ヒカルは、無防備に彼の側に身体を傾けてしまう。抗う術を知らないから。

・・・・何が起こったのか、わからなかった。

始終、そういう言葉でしか説明できなかった。

ルイの内にあるものを、ヒカルは共有することはできない。

それでも。だからこそ、彼の心を知りたいと思うのだ。

軽く空気が躍った、と思った。

ヒカルのこめかみに、空気が・・・星の風が降った。

星々を遵える者の溜息にも似た、微風。

それが、ヒカルのこめかみを撫でて、頬を滑って髪を揺らした。

声を上げるまでもなかった。

これが、ルイ・ドゥ・アルディの・・・星辰の子の返答なのだと思うと、何も言えなくなってしまった。

ただ、風のように。星のように。彼は、彼女の肌を滑る吐息だけを残して、彼の思いを彼女に刻む。

夢なのか、幻なのか。

それすら、わからないほどの束の間の出来事であった。

●24

しばらくの間、彼女は何も言えないで、ただ、全身を朱に染めて俯いていた。逃げるところも隠れるところもない空間で、ルイは静かに星を見上げていた。ハンドルに身体を凭せ掛けて、彼は空を見上げている。

その姿がいつものルイよりもずっと幼い様子に見えて、ヒカルはちらちらと隣を見るがじっと見つめる勇気も持てず、すぐに俯いてしまっていた。

彼はまだ出発するつもりはないらしい。・・・まるで、何かを待っているかのように身動きすらしない彼は、瞬きすらすることも控えているような様子であった。

ヒカルはそっと空を見上げた。先ほどは眠ってしまっていたために、この角度から見ることはなかった景色が広がっている。座って見上げる空は強化ガラス越しに見ても、なお美しい。

そんな中で、ヒカルは身を縮ませてか細い声で言う。

「ルイ、今日はありがとう」

謝罪するのではなく、感謝した。惑うのではなく、振り切った。

きっと、今この瞬間と同じ時間は二度と巡ってこないだろう。だからどの瞬間にでも後悔しない生き方をしたいと考えているが、それはルイも同じであると思ったから。

彼は、このまま振り返ることもなく、思い出すこともなく今日のことを記憶の引き出しにしまい込んでしまうのかもしれない。

でも、それは悪いことではない。

ヒカルが思う重さと同じであることをルイに求めてはいけない。

「私は、今日はとても嬉しかった・・・」

ヒカルはそれだけを言った。

まだ、彼の息吹が残るこめかみが熱い。家族のキスを交わすような間柄ではなかった。シャルルから受けるキスよりずっと淡く軽く、そもそも触れてさえいないのに。なぜ、これほど胸が大きく鼓動するのか。

また、「ヒカルはわかっていない」と叱られるのかな、と思った。

ルイは理不尽に感情をぶつけたりしない。彼が「星辰の子」と呼ばれるのはこういった気質からによるところも大きいし、ヒカルもその通りだと思う。

静かに・・・海の底の激しい流れを悟らせることのない水面のような感情を見せる時があった。

罵られることに慣れてしまっているわけではない。しかし、ヒカルが何か言うほど、彼はひとつずつ絶望していく。

彼がヒカルにもたらしてくれる希望とは反比例している。それがわかるからこそ、ヒカルは傍に居てはいけないのだと思う。でも、それでも、ルイがひとりで星見をすることが良いことなのだとは思えなかった。何が良くて、何が悪いのか。それすら判断する基準のないヒカルの蹠きの上を、星々が通り過ぎていく。

思いを伏せた声が震える。

濃い墨色の空に散らばっている瞬き達が、ヒカルに向かって堕ちて来るようであった。あれらの瞬きたちは過去のものだとわかっていても。未来を願うのは、なぜなのだろう。

しかし、ルイの流れ星のような返答を受けて、ヒカルは考えなければいけないのだ、と思った。何をどうすれば良いのか、まったくわからない。

しかし、自分は・・・両親が戻って来なくなってしまった日から時間が経過していないのだと思った。それを押し出すように、ルイは彼女を星の海に連れて行く。

断ることもできたはずだ。シャルルの感情を気にするような人ではない。

きっと、ルイは世界中を敵に回しても自分の成すべきことを為し遂げる。

「あの・・・ルイ」

彼の返答を待たずして、ヒカルは顔を赤くしながら、やっとのことで言った。

こんな時に、どう振る舞えば良いのか、彼女は教わっていなかった。

無言の空間の中で、ただ星を見上げる。急いで到着することを最優先として、星々が僅かな時間で現れては消えて行く。音も無く、ただ、光だけを燃やし尽くす。

「星の恋、という言い方はとても気に入っているの」

普段、自分のことを述べることの少ない少女は、そっと言った。

「ヒカルは自分の話しかしないのだな。それから、シャルルの話。それだけだ」

ルイの返答は素っ気なかった。彼女は込み上げる悲哀を呑み込んだ。自分の哀しみに酔っていては、星の戀の素晴らしさを伝えることができなかった。

確かに、そうであった。それ以外に、彼に告げることはなかったから。そして、ルイの知らないシャルルを話すことをルイが楽しんでいるわけでもなかったし、ましてやヒカルの話は彼にはどうでも良いことなのだと改めて思う。

●25

「ルイは、星は好きではないの？」

「ヒカルには関係ない」

素っ気なく言ったルイは、また短い返事で話を終えてしまった。

しかし、ヒカルはそれを聞いて、ぱっと顔を明るくした。

「ルイ。私は、とても・・・星の夜をルイと一緒に見るのが、好きなのよ」

「ヒカル」

溜息混じりに彼が一瞬、ヒカルに顔を向けた。彼はすぐに横を向いてシートベルトを装着する。

「そういう言い方は物欲しそうに聞こえる」

すると、ヒカルは自分の口元を自分の手の平で押さえた。しまった、という顔になり、またすぐに眉根を寄せて後悔を全身で受け止めてしまった。

確かに、ルイの譲歩によってこの場は成立している。それに昂揚したあまり、ヒカルは不用意に口にしてしまった自分の発言を恥じた。

彼の言う通り、彼女はとても野卑な心持ちでいたと思った。

そこで、エンジンがヒカルの身体を底から揺らした。

ルイが出発の準備を本格的に始めたからだ。

こういう沈黙には慣れているはずであった。特に、ヒカルは往路では彼の運転であるのに眠って

しまったという失態を見せてしまった。それに加えて彼にこめかみを擦る吐息を吹きかけられるという反撃を受けている。

ヒカルの知らない動作や仕草は、彼女にとっては戸惑いそのものであった。なぜなら、彼女はすべてシャルルから教わっていたから。いいや、彼に庇護のもとに育ってきたから。

令嬢としての最低限の躾は身についていたが、このように一対一で向き合う瞬間のことまでは知識で補えるものではないと思い知った。

それが、ヒカルを不安にさせる。ひょっとしたら・・・シャルルが教えていることは全部ではないのかもしれないと思ってしまうからだ。彼は彼女を慈しんでくれている。それを疑うことはしたくなかった。

でも。

ルイは、どうなのだろう。ヒカルが思うような胸の痛みを、彼も感じているのだろうか。

教育係として、近しい存在の者がいつも追随する生活だ。

息苦しいと思うような認識さえ存在しない。それはヒカルもルイも同じだ。それなのに、ルイはいつもヒカルを見ると苛立たしそうにしていると感じる。

しかし、ヒカルは思うのだ。愛していると告げることのできる幸せや、愛しているよと告げられる幸せの他に・・・ヒカルは、星の戀を語る相手としてルイと時間を過ごしている。

今はもう、違う空を見ているのかもしれないけれども。

この瞬間は、同じ空を見つめている。流れ行く空の恋を見て、意見を交わす。

それがとてもかけがえのない時間なのだと感じて、ヒカル・クロスは皆が享受できるというわけではない時間を過ごしている。

●26

少しは反論したらどうだ？

彼はそう言いたそうであった。言わなくてもヒカルには伝わっていると思っているのだろう。

そしてそれは間違っていない。

誰に対しても、拒絶されたくないと思う気持ちがある。

そして、自分のことを受け入れられたと思うと燥いでしまい踏み込み過ぎる。それを身に染みて感じた。ルイのような誇り高い人間には、数多の星々が同じ様に見えるのだろう。星辰の子、と言われるのはそういう彼の冷淡なところも指し示している。

どれほど近付いても、決して触れることのできない相手。

まるで、星の河の対岸に佇む恋人達のように。

実を焼き尽しても、手を伸ばしたいと思う相手がルイには存在するのだろうか。

彼はまたひとつ、溜息をついた。

彼を落胆させてしまうことが、何より辛かった。

「でも、私は・・」

彼女は言い淀んだ。言って良いことなのかどうか迷う。先ほどのように、不用意に発してしまうことは、今度こそ本当に、ルイと歩み寄れない距離を作ってしまうと思われた。

「私は、ルイが欲しい」

ヒカルがそう言ったので、彼は途端に笑い出した。

「オレは、そういうヒカルはいらない」

なぜ彼が「そういうヒカル」と限定したのか彼女は気がつかなかった。しかし、彼はふと前を向きながら怖い程険しい顔になって、言った。

「ヒカル。オレは、星が欲しいわけではない」

自分の言葉が足りず、ルイとの時間が欲しいのだと言い直そうとしたヒカルは、ルイの発言に胸を打たれて、また俯いてしまった。

彼は、星が欲しいわけではないのだ。数多ある星々達を従えながら、それは決して彼が望んで居るわけではないことなのだと気がつかされて、ヒカルはいたたまれなくなってしまった。

皆が、彼が自分の方に向かってきてくれないだろうかと願う。そして自分達は彼に向かいながらも光になって燃えてしまう。消えてしまう。

それを彼は当然のことだとは思っていないのだと感じて、言葉が詰まってしまった。

彼の、歎きにも似た囁きが耳に入ってくるが、それをどうしたら和らげることができるのかわからない。

「欲しいものは、星じゃないんだ」

普段は大人びた物言いをする彼が、その時は年相応の話し方だった。

僅かに、声が震えている気がするのは、ヒカルの気の所為なのだろうか。

「それは何・・・？」

すると、彼はふっと微笑んだ。ヒカルの前で見せる笑みというのは実に珍しいことであったので

、そのもの悲しくも透明な微笑みに見入ってしまう。

思ったことや疑問をすぐに口にしてしまうわけではない。普段は、ヒカルは周囲のことがきになってかなり慎重に発言をする方だ。そんなところは彼女の父に似ている、と言われるけれども。ルイの前に出ると、それらの「普段」は馴染んだ習慣とならない。

「ヒカルには言わない」

ルイは素っ気なく言った。そして、青灰色の瞳を少しだけ細めて、すっと笑みを消していく。ヒカルはそれを見つめながら、ああ、星のようだと思った。一瞬だけ見せる本当の燦めきが、闇の中に消えていく。

彼の欲しいもの。彼が、ヒカルには言いたくないもの。

それは、何なのだろう。

最初に思ったように、彼の大事な人のことに関するものなのだろうか。

ヒカルは首を傾げながら、あれこれ考えを廻らせる。けれども、それすら過干渉かと思い直して、彼女は神妙に頷いた。

「わかった。ルイが言いたくなったら、聞かせて」

「いやな女だ」

ルイがまた不機嫌な顔になった。言いたくないと言いながらも、それで良いと言うと立腹する。ヒカルにはその理由が本当に、理解できていなかった。

けれども。ルイと話をたくさん交わすことができた。そして、星の戀のような彼の笑顔を見ることができた。その後、すぐに彼は無表情に戻ってしまったけれども。

「帰る。・・・煩い人が待ち構えているだろうから」

彼は憂鬱そうに言った。ヒカルは少し笑った。確かに、シャルルは心配性である。ヒカルのことをいつも過保護すぎるほどに甘やかしている。今日は、ルイが一緒なら。夜の外出もきっと何も言わないでいてくれるだろう。

ルイが気鬱そうにしているのは、彼が己の行動を管理できずヒカルを連れ出したと言われるからだ。でも、今夜は違う。彼女が彼に随行したのだ。それをどう説明するかによるところでシャルルの心証は変わるのだろうが、ヒカルは心を尽くして説明するつもりであった。

「今日は、ありがとう。・・・私の願い事は叶った」

「オレは違う」

彼は言った。ヒカルはそれでも礼を口にした。

「ルイと星の戀が見たかった。ルイはそれを叶えてくれた」

「願いは自分で叶えるもので、誰かに叶えてもらうことを期待するなよ」

いつもの冷たい返事であったが、今日は少し違って聞こえる。彼はきっと自分の願いを達成するのだろう。

そこで、突然、先ほどルイに返された報復を思い出して彼女は顔を赤くした。彼が、家訓にのっとって彼女に反撃してきた内容を、シャルルには言えないと思った。家族のキスでありながらも、決してそうではない、星の恋人達の見ている中での・・・ヒカルとルイの秘密だった。ルイには秘密にならないかもしれないが。それでも、ヒカルは誰にも明かさない密やかな宝物になった、と思った。ルイが、ヒカルに近付いたから。星辰の子であるのに、彼はヒカルに向かってきた。それが仕返しであったとしても。無視されるよりずっと進歩のあることだと思う。

また、次も星を見上げる時間が作れるのだろうか。そこで、思った。これは偶然でもなく、ヒカルが自分で作ったきっかけであった。ルイはだから、優しいのだろう。いつもと違っていると思うのは、彼は能動的である限り、対等に向き合ってくれるのだということをヒカルが学んだから

なのだろう、と思った。

「また次は違う星空が見たい」

彼女は嬉しくなって、そう言った。ルイは車をゆっくりと走らせながら、彼女に返事をした。

「今度はオレ以外の誰かを行けよ」

「いいえ、ルイと一緒が良いの。・・・星の戀の話をしたいから」

ヒカルがそう言うと、彼はまた大袈裟に溜息を漏らした。

静かな星の河の流れに乃理ながら、ふたりを乗せた車はゆっくりと帰路を進み出す。

彼の金の髪が近くにあって、青灰色の瞳が近くに見えて・・・でも昏い夜の中であったから、近すぎて表情がよくわからなかった。しかし、彼は決して怒っているわけではない。それが、ヒカルを笑顔にさせる。ルイは、ヒカルを泣かせるだけではなくて笑顔にさせてくれるのだ。大事な、大事な家族である。彼もいつか、そう思ってくれるのだろうか。

「あ」

ヒカルは声を上げた。前方の空で、またひとつ、星の戀が煌めいたからだ。

彼女が今、願い事を考えていた瞬間の燦めきに、ヒカルは今一度願いをかけた。

次はないかもしれない。今度から、彼は彼の特別な人とだけ一緒に星夜を過ごすのかもしれない。少し寂しいけれども、きっと祝福できる。ヒカルはそう思った。強く、心に刻んだ。少なくとも、今夜の出来事だけはヒカルとルイだけの思い出であったから。

「帰りは、寝るなよ」

彼がそう言ったので、ヒカルは慌てて、はい、と元気よく答えた。

そして空を見つめる。彼と気まずい時間であった往路とはまったく違った心持ちで座っていた。ルイは相変わらず黙ったままであったが、それはヒカルが黙っているからなのか・・・それとも、今度は車内から観測できる流星も素晴らしいので見ておくように、という提案なのか・・・彼女にはわからなかった。

それでも帰り道は違った景色が見えそうだと思った。

星への願いを乗せた車は、星の瞬く夜道を、ふたりが同じ場所に帰るために静かに走り出した。

（FIN）

apophenia

■01

彼はいつも音もなくヒカルに近寄る。

「・・・ルイ」

彼の名前を呼ぶのに。
それは静止を求める呼び掛けではなかった。
彼はその声を頼りにするかのように、彼女の抗議をまったく聞き入れないかのように、更に加速してヒカルの茶色の瞳に近づく。

・・・見事な金髪を持つ星辰の子は、ヒカルに言葉をかけずに、流れるように距離を詰める。

「なにか抗議でも？」

ルイは静かに・・・囁いた。
彼女の頬と彼の額は・・触れるか否かの近接した場所にあった。

ヒカルが顔を赤らめている。
茶色の瞳が潤んで充血していた。

・・・なぜ、平静でいられないのか、と問えば彼女はきっと、答えられないだろう。

ルイ・ドゥ・アルディでさえ導き出せない問いなのだから。

彼女がいつものヒカルで居られないように・・・
ルイも同じように、静逸を保つことが出来なかった。

それではいけないと言われて育った。

・・・それでも、彼は、こうしなければ、その先に存在することができなかった。

そうだ。

自分が・・・存在するために、彼女の息吹を取り入れようとしている。

希なる・・・希なる人の気配と関心と・・・愛を手に入れようとして、ルイは足掻いた。

「ヒカル・・・」

彼は彼女の名前を呼んだ。
永遠の晄という名前の人の名前を呼んだ。
それが・・・彼の狂気を沈める巫女姫の浄名であるかのように。

・・・彼は彼女の頬に溜息を落とした。

どんなに凍った空気であっても。
彼の溜息はすべてを溶かす。
彼女の体温は彼のすべてを溶かす。

・・ルイは彼女の両頬の輪郭を奪った。

噛みつくような攻撃的なキスなのに・・・
彼はとても悲しそうな顔をした。

ヒカルが眉根を寄せて・・その口吻を甘美な、恋人からの贈り物と定めていないことがわかったから。

・・彼女は自分で決めた婚約者だからという理由でルイのキスを受け止めている。

鳩尾のあたりが、ぐっと痛んだ。
彼は乗馬とフェンシングで鍛えた見事な体軀を持っていたのに。
軋むような痛みが胸の内側から湧き起こる。

・・・それでも、ヒカルの憂貌が・・・・・
彼のその後の予定や、すべてを変更させることを、ヒカルは知らない。

「キスを・・・ヒカルはオレに常に服従するように」

ルイはそう言って、彼女に覆い被さった。

ここは・・・薔薇の香りの溢れる、アルディ家の当主が唯一趣味としている薔薇園の一角だった。

そこで・・ヒカルとルイは口吻を交わす。

一方的であっても。
攻撃的であっても。

・・・ルイは様々な出来事を通してなお、この薔薇園でヒカルの屈伏を求める。

彼女は言ったから。
家族になろう、と。

ルイと婚約する、と。

彼女の口から聞いた。

彼女は嘘をつかない。
彼女は誤魔化さない。

■02

かつて彼女が身を捩って彼を拒否した薔薇の苑で、彼らは淡く発光していた。
ルイの金の髪が、薄明かりの下で煌めいている。
彼女の膝の上には、剪定したばかりの薔薇が数本乗っていた。
シャルルのために、食卓に飾るつもりで摘み取っていたところを、ルイに遭遇したのだ。
誰の為の薔薇なのかは、すぐにわかった。
ルイは最初、今宵は戻らない、と言っていたからだ。
どんなに遅くなっても良いので、戻って来て欲しい、とヒカルがメッセージを入れた。

だから戻って来た。
シャルルが居ると悟ったからだ。
・・・・ヒカルは、ルイとシャルルがヒカルを仲立ちにして、温和な関係を築くようになると信

じて疑わない。

彼の別棟からは、薔薇園の様子はよく見える。
ヒカルが時間をかけて、月明かりの下で、食事の時間に合わせてその日の食卓に最も相応しい薔薇を選んでいる様子を見て、彼は身体を動かしたのだ。
シャルルのために。
彼のためだけに。
ヒカルは薔薇を摘み続ける。
当主は、ヒカルの母をこよなく愛した。そして、例の事故によって戻らなくなってしまった運命の人のために、ファム・ファタルという品種を創り続ける。
すべて違う種なのに、名前はいつも「ファム・ファタル」だった。

・・・そしてその人の娘であるヒカルが、まるで何か・・・購うためだと主張するかのように、毎日薔薇を摘み取る。

ヒカルは戻って来いと言った。
彼女が契約を履行する限り、ルイは彼女の申し出を交換条件として受け入れる。
シャルルに歩み寄るのではない。
・・・・この家の主となるために、戻って来ただけだ。

そのヒカル本人が、ルイの早い帰邸に狼狽していた。
そしてその狼狽した貌を見て、ルイは苛立った。

おかえり、と微笑む貌を穢して乱してやりたくなった。

彼女は薔薇を摘み取る瞬間の恍惚とした表情を、誰にも見せることなく薔薇だけに注いでいる。
ルイではない男のためだけに用意される最高の状態の薔薇。
静かな微笑みで、唇の端を少し持ち上げ、どれが今日のシャルルの食卓に相応しいのかを考える。そして、朝に咲きそうな薔薇の様子を確認し、その薔薇に目印の紐をくくりつける。
それが彼女の日々の習慣だった。

いずれは・・・それすら禁じるつもりだった。
彼女がシャルルのことを考える権利も自由も剥奪するつもりだ。
・・・いや、シャルルのことを考えながら、ルイのために日々を過ごす方が効果的なのだろうか。
・・・効果的。
一体、何に対して効果的なのか。
帰結だけを優先してしまっている思考に、ルイは泳ぎ始めようとしていた。

彼はそれを押しとどめ、自分の意識を目の前の茶色の瞳の茶色の髪の娘に注ぐことにした。

彼女を顎で呼んだ。
こちらに来るように、と。

そして、次に近くのベンチに座らせて・・・彼女の隣に座り・・・そしてルイは帰邸の挨拶の交換を省略して、いきなり彼女の接吻を求めたのだ。

ルイは細く長い指先で、彼女の顎を捕らえて、彼女が貌を背けることを許可しなかった。
「ルイ・・・・ルイ」
性急とも言えるようなそんな愛の烈風に、ヒカルは戸惑ったように言った。
彼女は膝上の薔薇を傷ませないようにすることで頭がいっぱいで、ルイの口吻を避けることができない。
・・・元々、彼はそんなことは承認するつもりはなかったが。
貌を引くが、ルイは更に身体を伸ばし、彼女の唇に深く自分の重みを落としていく。
・・・長く深い激しい口付けだった。

いつもの・・・一度きりの、契印のようなキスではなかった。
彼は本当はとても激しやすい性質なのかもしれないとさえ思うほどに。
激しくそして荒々しいキスを何度も繰り返す。
唇が離れたかと思うと彼はまたヒカルに近づく。

なぜこうも・・・ヒカルは愚かなのだろうか。
呼吸を乱し体温を上げて彼女がルイのことだけしか考えられなくなるほどに溺れるような娘であったのなら。
・・・・それなら、彼女に憤慨することもなかっただろうか。
物慣れていないヒカルの戸惑った小さな呻きや吐息さえ、彼は奪っていく。

■03

端整な頬が傾けられて、ヒカルの滑らかな頬に押しつけられる。
・・・ルイは邪欲に迷うことは決してないのに。
我を忘れることなどは決してないというのに。
ヒカルの躊躇いがちな口吻が・・・彼の奥底にある何かを呼び覚ます。
拙くて幼いヒカルの身動ぎが、ルイを更に深みに誘う。

「・・・ルイ・・・私、もう、行かないと」
「どこに？」
彼は彼女の顎を片手で掴んだ。
彼が強く掴んだので、ヒカルの面輪は少し赤らんだ。
青灰色の冷たい瞳が、ヒカルの戸惑った茶色の瞳を覗き込んだ。
凍て付くような瞳なのに・・・彼の接吻はとても激しくヒカルを炙る。
「ヒカルが行くところは何処もない」
「・・・・ルイ」
「ヒカル」
低い艶のある声で、ルイはヒカルに言った。
金色の前髪が、彼女の頬に降りかかるほどに近い距離に居た。
しかしヒカルは目を反らすことなく、ルイの青灰色の冴えた双眸を見つめ返していた。

本当に苛つく女だ。

ルイはそう思った。
「ヒカルは・・・オレが居ろと言ったらどこにも行けない。
君が望むものを提供してやるかわりに・・オレはオレの権利を主張する。
ヒカル。随え。ヒカルは・・・オレの所有物だ。愛翫してやるよ」
その言葉に、ヒカルが眉を曇らせた。
ルイはその様子を見て、どこまでも従順であろうとしない強気なヒカルの魂を、いっそのこと抜いてしまおうかとさえ考える。
今の世で、ルイがやろうと思えばできないことはほとんどない。
ヒカルの意志を奪う外科的治療だって同意のない投薬だって、必要があればやってのけるつもりだった。

キスひとつ、満足にできない娘を前に、ルイは小さく舌打ちした。
そして乱暴に指先を離して、ヒカルの貌から離れた。
蹂躙してなお穢されない乙女は、どうしたら最も傷付くのだろうか。

彼はそのまま指を伸ばして・・・ヒカルの膝上の薔薇を振り払った。
この瞬間に最高の状態であった花瓣が、ぱっと香気を撒き散らして地面に散って、土に混じった。
あっと声を漏らして、ヒカルが腰を浮かせたが、ルイは彼女の腕を掴んで、自分の胸の中に引き摺り込む。
薔薇が・・・とヒカルがルイから視線を外して薔薇を見つめて手を伸ばすので、ルイは伸ばされた腕の手首を、もう片方の手でねじり上げた。

・・・彼女が考えなければならないのは、ルイ・ドゥ・アルディのことだけだ。
彼の帰邸を希う言づてを寄越したのに、彼女はまったく連動していない行動をとり続ける。

「そんなにシャルルのために摘んだ薔薇が気になる？・・・婚約者のオレが目の前に居るのに。他の男のために何かをする人を、妻にするつもりはない。慎みを持て。」
彼は意地悪く言った。
ヒカルがその言葉に、伸ばした腕を硬直させた。
「ルイ・・・・・そんなつもりではない。薔薇には罪はない」
彼女は肩を震わせた。しかしルイ・ドゥ・アルディは容赦しなかった。

「いいや、あるね。ヒカルは自分の言葉を遵守しろ。・・・・そんなところから教育しないといけないのか。それとも・・・・器だけでも、先にオレの妻になったら、そうは考えなくなるのか」
普段は言葉少ないルイがこうして彼女に何かを述べることは珍しかった。
いつも・・・会話が成立しないと冷笑しているというのに。
彼の知能指数にはヒカルはとうてい及ばない。それなのに、ルイがこのように言葉を差し向けることについて、ヒカルは耳を傾けようとした。
けれども、彼の胸の中に引き込まれて、そして両の腕の自由を阻まれて・・・そして彼はヒカルの心がここにはないと言って責め立てることが辛かった。
しかし、彼に話を持ち込んだのは、ヒカルの方だった。
ルイの主張は正当なものだ。
彼は矛盾することは言わない。彼は・・・そう。意味のないことはしない。

「ルイ。・・・・誰もいないから・・・必要ないよ」

彼女の言葉に、ルイが唇を噛んだ。そして、彼女の手首に繋ぎ合わせていた彼の手を両方とも一気に離した。
反動で、ヒカルは後ろに斃れそうになったが、慌てて体勢を立て直した。
ルイ、と小さく言った。
目の前の、星辰の子と讃辞されている金の髪の青灰色の瞳の青年は・・・・彼はヒカルを侮蔑した表情で見つめる。
彼女が何を言わんとしたのか、瞬時に理解したからだ。

・・・・・・彼はやがて金の髪を掻き上げた。

■04

ルイ・ドゥ・アルディは意味のないことはしない。
・・・・・・決して。
だから、彼女に落とすキスひとつでさえ、計算されている。
彼にはそれがもたらす結果と効果についてまで考えた上で行動する。
だから。
だから、ヒカルは言ったのだ。
誰も見ていない、と。

誰かに見て欲しいという願望ではない。

彼は理由がない行動は起こさない。

それなのにヒカルは。
それなのに、誰にも目撃されていない空間で、こんなことをしても無駄だ、と言っているのだ。
それはルイ・ドゥ・アルディ誇りを激しく傷つけた。

薔薇を振り落としても、ディナーに別の生花が用意されるだけだ。
いつも薔薇が最高の状態で咲くとは限らないから、アルディ家には季節折々の花を時に用意することを想定して、温室で別の種を育てている。
それを知らないルイではないのに。
彼は・・・・シャルルのために薔薇を剪定するヒカルの所業を詰った。

その行為は、誰も見ていないのに。なんら効果はないのに。
・・・・何を言っても、何をしても、ヒカルの魂は誰にも変化させることができないと言うことか。

ヒカル・クロスの傲慢な宣言に、彼は嘲笑した。

「ヒカルも随分な勘違いをしているようだが・・・君はアルディ家の者ではない。
それなのにそんな尊大な態度で施しをしているつもりなのか。それはシャルルの教育なのかな」
「そうではない」
ヒカルは困り果てて、顔を曇らせた。

そして彼女はゆっくりと立ち上がって、躰を屈ませ、地面にしゃがみ込んだ。
そして目の前に散らされた薔薇を一本ずつ静かに拾い上げていく。
痛んだ花瓣すら愛おしいと言うように、シャルルの愛でた薔薇をすくい上げる。

ヒカルは彼に背中を向けながら、ぽつりと言った。
「ルイは・・・意味のない行動はしない」
ルイ・ドゥ・アルディはその言葉に、黙ったままだった。
彼女の声は少しくぐもっていた。
茶色の髪が背中に散って・・・そして肩が僅かに震えていた。

「ルイは・・・・これが意味があることだと思っているのね？
でも、私にはわからない。
誰も居ないのに、ルイはそんなことをしない」
「オレを定義するな」

ルイは言った。
そうじゃないよ、とヒカルは背中を向けたまま首を振った。

「ルイは怒ってる。それはわかる。でも、どうして怒っているのかが・・・わからない」
「オレは憤らない。ヒカルは・・・ヒカル自身が、オレを制御できなくさせるほどに自分が価値があると思っているのか」

彼女は最後の1本に手を伸ばした。
薔薇の棘かまだ鋭くて、彼女はそっと手の平に握ったが、それでもいくつか棘が手に食い込んだ。
今日の品種は、薔薇の棘が針のように鋭いものだったことを知っていたが・・・それでも素手で茎を握りしめた。
涙が出そうになるが、それを押さえ込む術がそれしかないと言うかのように。
彼女は、鋭い棘を手の平で受け止めた。
それはまさしく、ルイの棘と同じだと思ったから。

彼は・・・攻撃することで何かを訴えている。
でもヒカルにはそれがわからない。
わからないことを尋ねても、彼は何も言わない。
気がついてない愚かな娘だね、と言うだけだ。
そして・・青灰色の物憂げな瞳を、いつもとは違った激しい焔を宿らせて、その時に・・・ヒカルを傷つけようとする。

「・・・・これが意味のないことだと、ヒカルは思うのか」
ルイが今度は尋ねた。
彼はほとんど質問をしない。いつも彼が回答するだけだから。

もしくは、一方通行か数往復の会話で終了するように計算しているからだ。

「わからない。何か法則があるのかもしれない」
「法則・・・ね」ルイが冷笑した。
彼女に意味もなく触れてはいけない、と宣言されたからだ。

これは契約関係だから。

だからか。

だから、何ももたらさない、効果のないと思われるキスや抱擁は意味がない、と。
ヒカルが定めるのか。
ヒカルは決してルイに溺れない。
誰もが彼とそうなることを夢見るというのに、ヒカルはただ、悲しそうに受け止めるだけだった。

ルイを激しく求めることもしない。
ルイを拒否することもしない。

しかし結果としてそれがルイを拒絶し、そして否定していることに他ならないとさえ考えない。

ヒカル・クロスは自分の中に誰も入れない。
・・・・・・あの人の娘だからだろうか。
だから、シャルルはこよなく愛でるのか。

そして、ヒカルが自分に溺れることは、ないのだ。

ルイは大きく脈打つ自らの痛憤を鎮めるために・・・上を向いて、大きく息を吸った。

■05

「ヒカル。・・・こちらを向け」
彼女は薔薇の花瓣についた泥を丁寧に払い落としているところだった。
・・・それを食卓に飾ることはしないだろうが、命あるものを摘み取る行為は畏れをもって敬うように、とシャルルに教えられた彼女は、汚れたから捨てるという選択肢を用意していない。
ましてや、ルイにすべてを注ぐことを背中で拒絶しているような仕草に、ルイが冷たく言い放

った。

「ヒカル。オレは繰り返さない。これが最後だ。・・・・オレを見ろ」
ルイが低くそう呟いた。

意固地に自分に随うことを拒絶している贖罪の娘を、ルイはどこまで貶めてやろうかと考え始めていた。
死ぬより苦しいことがある。
生きていることが苦しいと思うような生がある。

彼女は・・・なぜこうもルイを苛立たせるのだろうか。
そして彼に逆らう唯一の娘は、ルイに向かって、そっと言った。
何かの神託を告げるかのように、静かに哀しみと憂いに満ちた声で。

「ルイ・・・・・私に怒っているのはわかった。でも、薔薇にあたってはいけない」
「オレに説教？」
彼はせせら笑った。そして敢えて傲慢に彼は言った。
「こちらへ来い。・・・・・オレを鎮めろ。その肌と唇で。貴女は・・・オレが所有することになっている」
「なぜ、そう物言いをするの。何か・・・私に伝えたいの？でも私にはわからない」
「わからないふりをしているから、わからないだけだ」
彼はそう言って横を向いた。
いつも通りに別邸に籠もり、食事も生活もまったく別にして過ごせば良いだけの話だった。
そもそも、彼女の言葉のとおりに、この館に戻ってくることも護らなくても良い一方的なメッセージだったのだから、耳に入っていないふりをすれば良かったのに。
・・・・ルイはそうしなかった。
そのことについて、理由を明示しなければいけないのか。

彼はそこでまた薔薇に視線を移すヒカルに、向かって言った。
彼女がルイから視線を外すその一瞬に、彼がどんな表情をしているのか、ヒカルは知らない。
いつも淡々と無表情で・・・冷酷な微笑みしか浮かべないルイ・ドゥ・アルディの・・・・眉を潜めて青灰色の瞳を切なげに曇らせ・・・そして薄い唇を僅かに歪ませる、苦悶したルイの貌を、ヒカルは知らない。

「ヒカルはオレに遵うと言った。己の権利ばかり主張し、義務を果たさない」
「義務・・・・・」
ヒカルはそこでルイを見上げた。

目の前に立っている、星辰の子と呼ばれている・・・・この家の当主に良く似た面立ちのルイは、彼女を冷たく見下ろしていた。

「そう。義務だ。・・・・オレは義務を守っている。ヒカルとともに過ごすために、ここにやってきた。いいか、戻るのではない。帰邸でもない。ただ、虚無という名の館に足を運んでいるだけだ。・・・それに意味を持たせようとしているヒカルは、己の義務を守らずに、自分の我だけを押し通そうとする」
「私の義務・・・・・権利・・・・・」
彼女は首を振った。
この婚約という名の契約関係が、ルイのその言葉で更に違った無機質なものになると感じているらしかった。
彼は単に、契約内容について、今一度確認しただけだ。復唱しただけだ。
・・・・彼は決して繰り返さないのに。

ヒカルに言い聞かせるように、言った。

「傲慢な姫君。・・・・オレを悦ばせろとは言わないが、せめて・・・求めたら応じろ」
求めたら。
彼は何かに執着することはないのに。
・・・・・ルイはそう言って横を向いた。
彼の言葉の意味について、ヒカルは考え及ばないようだった。
ただただ・・・目の前の薔薇に憂いの吐息を吹きかける。

「・・・・オレは忠告したぞ、ヒカル」
彼はそう言うと、腕を伸ばして・・・ヒカルの胸の中に納められた薔薇を再び・・・・取り上げた。
「ルイ・・・・・！」
悲鳴が上がる。
ヒカルの悲痛な呼び声が・・・彼を更に激昂させる。
鋭い棘がいくつか、彼の手の平を刺したが、ルイは痛覚すら無視した。

生きるとは何だろう。
ヒカルが愛でる命とはシャルルに関係するものだけなのか。
・・・・ルイの命は・・・彼の声は、ヒカルにとっては、薔薇より低き場所にあるのか。

彼は薔薇を投げ捨てた。
「オレの話を聞け。・・・・ヒカル。オレを見ろ。オレのことだけを考えろ。オレの声しか聞くな。オレの・・・・・オレの温度だけ感じて足掻け」

彼はそう言って、再び屈んで薔薇に手を伸ばすヒカルの肩を強く掴んだ。
その表紙に、彼の手の皮膚が裂けて、薔薇の棘が深く彼に突き刺さり、あっという間にいくつかの赤い斑点が・・・・手の平に広がっていった。
しかし彼は痛みすら捨てた。
ルイ・ドゥ・アルディは痛みや疼きは抑制出来る。

・・・・けれども。

この慍色を伴った憤激は、平らかにすることができなかった。

■06

ルイ・ドゥ・アルディが再び払い落とした薔薇を見て、ヒカルは涙を瞳一杯にためた。
しかし彼女は涙を落とさなかった。
自分の手の平から花片を散らしながらこぼれ落ちていく薔薇の茎が、重力に随って土に還って行く。
・・・この家の者達のように。

アルディ家の者は、死んだら薔薇に還ると言われている。
しかし。
肉体が還るのだろうか。
魂が還るのだろうか。
・・・そのどちらも、この薔薇の家の者たちによって創られたルイは、やがて命を終えたときに、やはり薔薇に還るのだろうか。・・・還ることが出来るのだろうか。

「ルイ。生あるものを粗末にしてはいけない」
ヒカルが小さく言った。その言葉が、シャルルの言葉そのものであることを承知していた彼は、ヒカルに咎めるように言った。
「ヒカルにオレを糾す権利はない」
素っ気なくルイはそう言って彼女に背を向けた。
何をしても、彼女は泣きそうで泣かない。
それが彼女の中の唯一の誇りだから。
涙を流すだけが泣くとは言わないと信じているから。
しかし、背中を向けていても・・・彼女の乱れた呼吸や緊迫した空気から、彼女が今にも泣き出しそうな顔をして、こちらをじっと見つめていることはわかっていた。
茶色の瞳で。
彼女は・・・ルイを見つめる。

ヒカルはいつも決してルイを見つめないのに、彼女を傷つけた時だけ・・・ヒカルは自分自身を疵付けた相手を見つめる。
・・・・シャルルは彼女を泣かせたりしない。
だから、この時だけは・・・・ルイは星辰の子、とか、当主の実息である、という役割を持った言葉で呼ばれる人間ではなく・・・ルイ・ドゥ・アルディになる。
唯のひとりの男になる。
ヒカル・クロスを泣かせる、唯一の男に。
誰からも愛される晄の娘。
しかし・・その煌めきが強いほど、それを眩しく思う者も居るということに気がつかないヒカル。
その彼女が・・・小さく声を漏らして、ルイのことを気遣う。

「・・・怪我をしている」
ヒカルが彼の手に視線を移しているのがわかった。
そして、涙声を抑えて、彼女はささめくように言った。
ルイに向かって、痛まないのか、すぐ手当しないといけない、と言った。
しかしルイは首を横に振った。

些事だ。
些末なことには耐えられるように訓練されている。
律することが出来る。

痛まない。
疼かない。
けれども・・・どうにも憤りを鎮めることが出来ない。
その唇でもって彼を鎮めろ、とヒカルに命じたのに。
辱めても彼女は屈しない。遵わせても彼女は撓めない。
思い通りに蹂躙してなお、彼女は思い通りにならない。

「薔薇はいくらでもある。・・・今宵は諦めろ」
「そうじゃない」
ヒカルは言った。薔薇を払い落としたことを咎めていると思ったのに、彼女はそうではない、と言った。
「・・・ルイは自分の身体や命を・・・もっと・・もっと愛おしんでも良いと思う。
ルイは生あるものなのだから・・」
彼の命が創られたものであり、ルイはシャルルが望んで生まれた者ではないことということを知りながら、ヒカルはそう言ったので、ルイは一瞬だけ怒りを露わにした。

「ヒカル。オレを憐れむな。・・・おまえは・・・・オレを哀れむことはできない・・・！」

■07

ルイ・ドゥ・アルディが静かに溜息をついた。
創られた命を、どうして自分自身が愛でる必要があるのだろうか。
彼女の言っている意味を理解したら彼は堕ちていくと思った。
理解できない懸河に呑まれると思った。

また・・・ヒカルが怖々とした声音で、ルイに声をかけた。
「ルイ」
しかし彼は振り向かなかった。
ルイはヒカルの呼び掛けに返答しなかった。

彼女から彼に言ったのに。
彼女から・・・彼に寄り添うと誓ったのに。
それなのに、屈辱を感じる。彼の誇りを侮辱されたと感じる。
誰もが彼が自分に振り向くことを願うのに、ヒカルだけは彼の脇を走り抜いていく。

「ルイ、行こう。手当をした方が良い」
「貴女に指図される必要はないよ」
「でも・・・」
ヒカルはルイの手を取った。あたたかい手だったが、彼はそれを振り払おうとした。
しかし、彼女はそれを押さえて、ルイの血が滲んだ手の平を、両手で包んだ。
彼がぴくり、と肩を震わせた。
華奢な彼女の腕を振り払うことは簡単だった。
それなのに、ルイは彼女の腕を・・・あの薔薇のように簡単に躊躇いもなく振り払うことができなかった。

「放っておけ」
「放っておけない」
「ヒカルに干渉されるのは遠慮するよ」
彼は溜息をついた。
彼女は自分の言葉の効力について、まったく考慮していなかった。
ヒカルは懸命に彼に語りかけた。

彼女によって包まれた手の平から・・・彼は痺れるような感覚は昇るのを味わった。
ヒカルの呼吸を感じる。ヒカルの髪が彼の腕に触れる。・・・ヒカルの手の平が彼を包む。
それをなぜ、拒否できないのだろうか。

ルイに否定されることを承知で、ヒカルはまた言った。
「・・・干渉するよ。ルイ。・・・・容喙（人の行動に口出しすること）させてよ」
家族になろうと言った。
相手を案じ、相手を憂え、そして帰りを待つ間柄になろうと、ヒカルが言ったのだ。
だから・・・それを義務だと言ってのけるルイの言葉に酷く傷ついていた。
しかし、彼は自ら傷つけて・・・何かに憤っている。

違う。

ヒカルはそう言った。

「ルイは憤っているのではない。・・・・哀しんでいるだけだ」

彼は素っ気なく言葉を出した。
「それでオレが何かを思うとでも？憐れむなと言っただろう。
オレに近づいたつもりなのか？
オレを理解したつもりか？
・・・・それで得られる効果もないし・・・意味がないことはするな、ヒカル」
彼は冷笑した。
金の髪が・・・僅かな風に揺れる。
あたりは夜風が舞う時間になりつつあった。
青灰色の瞳を細めた。
彼の戻る場所はどこにもない。

たとえこの肉体が朽ちても。
彼はきっと自分は薔薇に還らないと思った。
アルディ家の者は、死んだら薔薇に還ると言われている。
しかし、ルイはこの散った薔薇のように・・・・・やがて朽ち果てて、朽ちてなお・・・土にも薔薇にもなれないのだろうと思った。
自分は創られた者だから。
還るべき母床がない。

「ヒカル。・・・・誰も見ていないぞ」

彼はヒカルに忠告した。
彼女と同じ言葉を使って、彼女に棘を刺した。

ヒカルが、ルイは意味がないことをしない、と言ったから。
ルイは、ヒカルに意味がないことはするな、と言ったのだ。

「違う・・・そうじゃない」
「オレは間違わない。違うこたえは存在しない」
「ルイ・・・・ルイ・・・・・」
ヒカルが涙声になった。
どうしてこの少女は、ルイの前では良く泣くのだろう。
決して泣かないと自分に言い聞かせているはずなのに。
なぜ・・・ルイの前ではこうして感情を表現するのか。

何かに執着したり、感情を激しく変化させたりすることは決してしてはいけないと教えられた。
だからヒカルがどうしてこれほどまでに激しく心を揺さぶられているのか、それが理解できない。

「・・・義務じゃない。権利じゃない。私は・・・・私は意味がなくても、誰も見ていなくても、ルイのことを考えている」
ヒカルは懸命に涙を堪えながら言った。
彼に涙を見せても彼は聞き入れない。ルイは言葉しか聞かない。涙を見せても嘲笑するだけだ。
言葉にならないもので訴えても、それは意味のないことだ、と。彼は言う。

「へぇ・・・」
彼は意地悪く嗤った。
彼女の遣る瀬無い顔を見ると、どうにも苛つく。

言葉にならない表情で彼を圧迫する傲慢な娘の態度がどうにも気に入らない。
彼は薄い唇を歪めて・・・・契約をしようと持ちかけた張本人であるヒカルに・・・契約履行を命じた。

「オレのことを考えている？自分自身しか愛せない可哀想な姫君が、誰かのために涙を流すのは、本当は自分自身を憐れんで涙していることにいい加減気がついたらどうだ」
「私は・・・・私はルイのことだけを考えている」
彼女は悲鳴のように・・切れ切れに言った。
「ルイが戻るのを待っていた。ルイが帰邸するのを待った。ルイの事だけを考えて・・・」

「ヒカル」
残酷なほどに美しい星辰の子は、彼女の言葉を遮った。
彼女がルイのことを考えるというのは、彼を通して別の者を見ているからだ。
その者が心安らぐように・・・ルイを選んだだけだ。
彼は胸苦しくなって、彼女を突き放すような言い方をした。
それでも繋がれた手はそのままにしていたのに。
彼は・・・ヒカルに向き直って、彼女に無表情に命じた。

「・・・・それなら、オレの前で涙を見せてみろ。・・・無駄に、意味もなく、涙を流せ。
薔薇を墜とされても泣きはしない。
心のないキスをオレに捧げる。
・・・・権利ばかり主張する愚かな娘のヒカル。
魂も躰も貰い受けると言っただろう。
地獄の業火に灼かれる覚悟はできたのか？
それなら。
・・・命令なら何でも随えるはずだろう。
オレのことを考えて、泣けよ、ヒカル」

彼女が小さく息を呑んだ。

■08

ヒカルが困った顔をして、少し斜め下を向いたので、ルイは予想した展開に憫笑を浮かべた。
彼女の偽善者意識を辱めようとするが、彼女自身がそうであると認めていないから、それは徒労であるということも彼は知っていた。
ヒカルは彼の辱めに屈しない。
そして因循怯懦であることも受け入れない。
彼女の生き抜くための力強さは、アルディ家の者の誰とも違っていた。
彼女の母のように。
それが欲しくて、現在のアルディ家の当主は・・・彼が決めたファム・ファタルに手を伸ばそうとして為損じた。
その当時の親族会の長は、強い当主であれば良いと言った。
強い当主とは一体どんな当主のことなのだろう。
強靭な精神で一族を率いるだけでは駄目なのだ、とルイは理解していた。

それなのに。
・・・それなのに。

彼は、ヒカル・クロスの前を通り過ぎる数多あるひとりになるつもりはなかった。
そして、ルイ・ドゥ・アルディは、ヒカル・クロスに地獄の業火に灼かれろと言った。
彼女はもっともっと苦しめばよいのに、と思う一方で・・・・彼女の苦しそうな顔を見ていると、彼は次の予測を止めてしまう。

この家には、彼の思い通りにならない者が多く居る。
アルディ家の当主も然り、彼の教育係も然り。
そして。ヒカル・クロスはもっとも・・・彼の思惑から逸脱する人間だった。

やがてヒカルは静かに言った。
これほど長い時間を一緒に過ごしてなお、彼のことがすべて把握できるというには遠く及ばなかった。
それでも・・・誰よりもともに呼吸した時間が長い彼女だからこそ言うことが出来るのだと思った。
思い上がっているわけではない。彼は誇り高く・・・彼女と違う目的を持って生きている。
年若いルイが彼の生命をかけて、なにを目的としているのか知っているからこそ・・・言うことが出来ることもあり、言うことが出来ないこともある。
それを良く知っていたから。

だから、ヒカルは彼の身を切るような切ない行為を避けることが出来なかった。

「・・・ルイを待っていた。この花は、ルイのために摘んで飾ろうと思っている」
彼女は乱れて汚れた薔薇に手を伸ばした。
「やめろ。オレを辱めるな。・・・地に落ちた薔薇などオレに捧げるな」
彼は素っ気なくそう言うと、金の髪を散らせて、勢いよく横を向いた。
彼女が地面に跪く。
そして彼の足元に平伏す。
その姿を見たくて・・・彼に服従する姿を確認したくて、ルイはヒカルに冷たい言葉を投げるというのに。

彼女はそれでも、屈しない。

これは彼女の持つ遺伝子がそうさせるのだろうか。
それとも・・・ヒカルを育てたアルディ家当主の願いがそうさせているのだろうか。

どちらにしても・・・ルイには決して従順に従わないと身体中で訴えているヒカルの行為に、彼はいつも不満足であると認識せざるを得ない。

誰もが彼に屈伏するのに。特に、ヒカルと同世代の乙女たちは、ルイとの淡い恋から永遠の恋まで様々に彼に叶わない願いをかける。
己から何をするわけでもないのに、ルイとある日突然恋に堕ち、アルディ家の当主夫人に労をかけずに登っていくことを夢想する。
まったく愚かしい幻想でもってルイという個人ではなく、彼が掴み取ったものに恋をしている者ばかりに囲まれて・・・それでもヒカルは決してそういったものは欲しない。
無欲であるというよりかはむしろ、彼女はそういったものに囲まれた生活をしていたから。

シャルルもルイもたくさんの功績をアルディ家にもたらしている。
その中で暮らすと・・そういったものへの感覚が鈍くなるのだ。
自分が手に入れたものではないのに。
そして、彼女はそういったものにまったく価値がないとさえ思っている。
僅かな時間しか最高の状態を保てない薔薇を愛でている。
彼女の命は永遠ではない。
両親を失ってなお、彼女は有限について考えを改めるつもりはないようだった。

やがて彼女が押し殺した声で、小さく言った。
「ルイのための薔薇だから」
ルイ・ドゥ・アルディは深い溜息を漏らした。
金の髪が揺れる。
彼の整った顔からはなんら感情は読み取れなかった。
「残念だね。オレは折損した薔薇には興味ない」

少しも名残惜しいとは思わない。幾つも同じ種の薔薇は咲いていた。
明日になればもっと違う種の薔薇が咲くだろう。
そして彼女は相変わらず、それらを懸命に摘み取る日々に戻るだろう。

涙を流せ、と言ったのに。
彼女はそれでも、足元に散る薔薇に心を残す。
ルイ・ドゥ・アルディは決して受け取らないと言ったばかりなのに、それが耳に入っていないのだろうか。

■09

その時。
ヒカル・クロスがそっと・・・彼に寄った。
それは彼女だけが赦された、許可のない近接だった。

ルイ・ドゥ・アルディは誰が近寄ることも赦さない。
それなのに、ヒカルはルイに近寄り・・・そして、彼の背後から、傷ついたルイの手の平をそっと包んだ。
ぴくりと彼が僅かに手の甲の神経を動かす気配がしたが、ヒカルはそれに臆さずに彼の冷たい手を握った。それでも彼女はその行為を停止しなかった。
・・・・ルイが黙っていたから。
自分自身も棘が手に深く入り込み、刺すような痛みを感じているはずなのに。
ヒカルは、まるで壊れ物を扱うかのように、ルイに触れる。
彼が自分を厭うのは、彼自身が壊されてしまうからだと感じているのかも知れないと思った。
彼女が幼い時に『小さなもうひとりの天使』と呼んだ人物は、今はこれほど成長して・・・星辰の子と呼ばれているのに、誰も寄せ付けない。彼は星々を遵えるという称号を持っているのに。
誰もが惹きつけられるのに誰も近づくことを許さない。
その姿が、かつてのフランスの華と良く似ていると言われることさえ彼は認めなかった。
彼の軌跡を越えるためにルイは生まれて来たのに。
シャルル・ドゥ・アルディと同一になることは受け入れなかった。
孤独を司る彼は・・・いったいどこに行くのだろう。
ヒカルを連れて行くと言いながら、ヒカルが地獄の業火に灼かれれば良いのにと言いながら。
彼は・・・ヒカルと唇を重ねてなお、ますます孤独を募らせているように感じる。
天使は、神の使いであるはずなのに。
それなのに。
彼は神の使徒のように厳としているが、それでいて、いつも孤であった。

・・・やがて彼女は彼の手の甲の上に自分の指先をそっと走らせた。
静かに、僅かに。
彼が振り払ってしまうという選択もあったのに、それでもルイは彼女の仕草をそのまま黙って観察しているように思えた。
ルイはなぜ、いつもヒカルに憤っているのだろう。
ヒカルはそう思った。
感じてはいる。
そこまで鈍感になりきれない。
彼女は知ってしまっていたから。
彼のいつも何かを・・・何かを訴えていることを。

しかし、言葉にすることができない。
それでも・・・ヒカルの存在そのものが厭わしいと思っているのかもしれないルイに対して、彼女ができることはとても少ないのだと思った。
まだ理由はわからない。

奪う、と彼は言う。
しかし彼はヒカルから何かを奪うことはしない。
彼女の環境も、彼女の未来も、そして何もかも、強引に持ち去ってしまう事が出来る権利があるのに。
それなのに・・・・ルイはいつも彼女からは何も奪わずに乱していくだけだった。
彼はそれを知っているのだろうか。
何もないから、何も生み出すことが出来ないから、だから奪うしかないと考えて居るルイ・ドゥ・アルディは・・・何も持ち去ることもしない。

ヒカルは眉根を寄せた。
手を離す。
触れた時より、彼の手の甲が大きく揺れるのを感じた。
離れて行くことを待っていたかのように・・・・離れて行くことが耐えられないと言うかのように。

茶色の髪の茶色の瞳の娘は、金の髪の青灰色の瞳の青年の正面に回り込んで・・・そして・・・・・彼の胸の中に深く自分の額を埋めた。
「ルイ・・・・・・ルイ」
彼女は彼の名前を二度、呼んだ。
小動物が愛撫を求めてするような仕草に近かった。彼女は・・・顔を彼の胸に埋める。ゆっくりと顔を左右に振り、そしてふと、顔を上げた。

東洋人にしては白い顔があった。茶色の瞳の・・・茶色の髪が乱れて、そして彼の胸で絡まった。
彼は僅かに唇を横に引いて、ヒカルの顔が近くにあることに対して、何も感じていないかのように装った。
このまま・・・彼の別棟に引いて行き、彼女の肌を・・・・今し方、彼の足元に墜ちた薔薇のように泥で穢すこともできるのに。
それでも、彼は身体を動かすことはしなかった。
・・・違う。
動かさないのではない。動けないのだ。
ヒカルから寄ったから。
彼が引き寄せたのではないから。
先ほどまでの彼女の泣きそうな顔を愉しみながら、唇を貪ったばかりであるというのに。

ルイ・ドゥ・アルディは黙ったままだった。彼の手に入れたいものを彼女は持っている。
同じ屋敷に住み、長い時間を過ごしたのに。
・・・彼女はルイをすべて理解することはない。決して。

このまま・・・ヒカルの申し出を利用して、彼女と婚姻関係を結ぶことが最も近い路だった。
ヒカルを溺愛するシャルルを打ちのめし、彼が長い間君臨している獣王の座を簒奪するには、ヒカルという要素は必要不可欠だった。

彼女は彼にとって、慰み者である以上の存在になるはずはなかったのに。
なぜなのか・・・・。
どういうわけか・・・・・。
ヒカルからルイに触れるという行為に、彼は陶酔して身動きが取れない。
甘い痺れが彼を包み、そして次には激しい動悸をもたらし・・・ヒカルの温度を奪いたいという劣情に駆られる。
呼吸が苦しくなり、それを悟られないように表情を動かさないように自分の肉体に命じることに労力を傾ける。
やがてヒカルは静かに言った。押し黙っているままのルイに、囁くように。
「・・・私ができるのはここまで」
そう言って、彼女は・・・・踵を持ち上げた。
彼の胸に傾けていた体重を移動させヒカルは顔を持ち上げた。
近くで見るにはあまりにも美しすぎる星辰の子の顔を怯まずに見つめた。

「・・・よせ」
彼がそう囁いたが、それは単なる驚愕の言葉でしかなかった。
ヒカルの・・・・ヒカルの手の平が、ルイの頬を挟んだその温度を感じた瞬間に、それは始まった。
声が掠れて拒否にならなかった。
ルイは黙ってそれを受け入れるしか術がない。
ヒカルが・・・・彼女が首を持ち上げ、踵を上げて、彼に近づき、そして・・・・接吻した。
彼女の香りが近づいて、そして癖の強い茶色の髪がルイに近寄ったと認識した瞬間にはもう、ヒカルの唇は彼から離れていた。
ルイの冷酷そうな薄い唇ではなく、唇の端に。
彼女は温点を刺激し、そしてすぐに身を起こした。

恋人同士の甘い口付けは与えないとルイが言ったから。
体温を奪うような行為でしかないとルイが言ったから。

・・・だからヒカルは彼にそっと・・・・唇でも頬でもこめかみでもない場所にヒカルの唇を落とした。

彼女ができる精一杯のキスというものはいつも稚拙だった。
けれども、彼女から捧げるキスというものは・・・意味があるものでしか捧げなかった。

触れそうで触れない。

そんな場所に彼女は祝福の印を付した。
・・・・それまでにルイが激しく彼が乱したヒカルの唇は、すでに静寂の波で満たされていた。

彼女は眼の縁が赤らんでいた。
哀しんでいるようで憤っているようで・・・それでいて、自分の行動に説明がつかない、といったような様子だった。

「私はルイが良いと思った。家族になるなら・・・ルイが良いと思った。だから・・・だからこうする」
ヒカルはそれだけ言うと、ルイの胸の中に顔を埋めた。慙死に値するでも言うかのように。彼女は呼吸を顰めて彼の胸の中に収まる。

もう、茶色の髪しか、見えなかった。
ルイは溜息を漏らす。
彼女の表情は見えない。
彼の胸の中に、ヒカルが彼女の笑顔を埋めてしまったから。

ヒカルからはキスすることができない。彼女からはいつもキスをしない。
屈伏の証として捧げる以外には・・・彼女はルイに唇を寄せない。
彼女の愛する家族であるとルイを定めているから。彼女の運命の人はまだ、定まっていないから。ルイにしないと宣言しているかのようで・・・彼は苛立つ。漣立つ。

・・・・彼のように、激しい嵐をもたらす感情を、ルイに対して持つことができないと彼女が戸惑っているから。

・・・・年齢も近く、望んだ組み合わせであることには代わりがないのに。

彼女の細胞がもたらす希なる奇蹟と、彼女の実家が落とす福音について、医療業界で注目せず捨て置くような者はいないだろう。

それでも、ヒカルはルイに抗う。
それが・・・・激しく彼を憤らせるのに・・・意味もなくヒカルに唇を落とす衝動に変わる。

■11

それは他愛のない稚拙な口付けであったのに、ルイの身体に何か・・・・表現しがたい何かが駆けていくのを感じ、彼は青灰色の瞳を瞬かせた。
これが初めてということではないのに。
彼女の屈伏の口付けは誰よりも・・・甘い痺れを彼に注ぐ。

「意味のないキスはやめろ。不快だ」
今度は彼が言った。意味があるかどうかは問わない、と言ったのに。
しかしヒカルは彼の青灰色の瞳を見上げることはせずに、ルイの胸の中で首を横に振った。
彼女の肩は震えていた。

・・・・彼女の心音が伝わってくる。それに共鳴して彼の心音が少し加速していることを・・・
ヒカルにわからないはずはなかった。だから彼は言葉を発してその音を消し去ろうとした。
彼女にわからないように。

彼は溜息を漏らした。このままで居れば、自分が次にどう出るのかは予測がついた。
・・・・己のことであるのに、彼は自分の行動を予測するしかできない。
・・・・自在に操ることが出来ない。ヒカル・クロスに関する行為だけは。
だから・・・・唇を奪い、彼女を傷つけることをやめたりしない。

「ヒカル。せいぜい、後悔するがいい。
そして苦悶にまみれて、生きていることが辛いと思うくらいに・・・己を歎くがいい」

彼のこの言葉で、彼女は涙を落とすだろうと思った。
彼女に、はやくこの場所から立ち去って欲しかった。
煩わしい思いを浮かべる彼を、ヒカルが憐れむことが何より彼を苛立たせるから。

「ルイ。私は後悔しない」
彼女はそう言った。茶色のくせの強い髪から漏れる小さな耳は、深紅に染まっていた。
彼女が自ら唇を寄せるという行為をする相手はただ一人しか居ない。
まだ、彼女はルイの唇しか知らない。

今のところは。

「後悔しろよ」
ルイがそう囁く。
ふたりは遠目で見れば、愛を誓い合って寄り添う、互いに愛し合う者たちのように思えるのに。
彼女はまた、首を横に振った。
ルイは金の髪を屈めて・・・ヒカルの耳元で囁く。甘い囁きではなく、残酷な宣言だった。
「オレはお前を愛さない」
「それでも・・・良い」
ヒカルがそう言ったのでルイはぐっと唇を噛んだ。
どうしても屈伏しない永遠の晄は・・・どうしたらその晄の勢いを弱めるのだろうか。
誰からも愛されたくて、愛が欲しいと叫ぶのに。彼女はルイの愛は必要ではないと言う。
「私がルイのことを愛しているから。ルイの分まで」
そこで彼が身体を離した。

彼女は残酷だ。

・・・ヒカルに告げずに、音にしないで彼は彼女に言った。
心の中で。
唇を動かすことすらしなかった。

ヒカルが言うところの「愛している」という言葉は、彼が捧げることを彼女に求める種類の愛ではなかった。家族のように。兄のように。妹のように。・・・彼女はルイを愛すると言うのだ。
本当の愛を知らない彼女の唇から漏れるささめきは、ルイにとっては彼の機嫌を損ねないようにするためだけにヒカルが考え出した単なる・・・まじない文句でしかない。

彼女はアルディ邸で待つ。彼のように彼女を迎えに出向いたりしない。
ルイが来てくれれば良いのに、という消極的な行動しか彼女は考えつかない。
いや・・・・ルイに愛を求める他の者たちのように、彼女はルイに向かって寄り添わない。
身体はこうして体温を感じるほどに重ねているというのに。それなのに、彼女の心は遠くにある。

「後悔しないよ。・・ルイ」
彼が繰り返すことを嫌うことを知っているのに。彼女は繰り返した。
・・・足元に散った薔薇の花瓣が乱れて・・・彼と彼女の足に乗ったが、彼らはそれを意識していなかった。
ただ・・・互いの声様に注意を傾けていたから。

ヒカルがルイの胸の中で、軽く拳を握って顔を埋める。その温かさも柔らかさも彼のものにするとルイは言い、そしてヒカルは自分の願いを手に入れるためにそれを承諾したというのに。
彼女は、彼の腕の中からすり抜けて行く。
いつも、いつも、いつも・・・・

「・・・・ルイ！」

ヒカルの顎を掴んだ。
強引に上を向かせ、彼は・・・彼女に唇を落とす。
胸の中で彼女の拳がぎゅっと強く握られたが、その手首を彼は強く掴んだ。

「・・・・・・っ！」

彼女が驚愕したのは、それが・・・・いつもの奪うような強引なキスではなく、それが・・・とても静かで彼の唇の震えがわかるほどに軽く、それでいて脆いという以外に言葉で表現できないほどに短い口吻であったから。
薄い唇が彼女に触れる。
そして溜息が出るほどに艶めかしくそれでいて切ない・・・吐息の混じったキスを彼女に落とした。

一度だけ。
決してそれは巡らなかった。
繰り返されなかった。

彼女の額に、ルイの金の髪がかかった。彼は強く瞳を閉じていたので、表情がわからなかったが、眉根を寄せて・・・そして精悍な頬を傾けて彼女の頬に強く押しつけていた。それなのに、その口吻だけは、泡のように雪のように・・・・星の瞬く瞬間ほどに短く優しく、それでいて・・・・もの悲しかった。

金の波が彼女の額から引いて・・・絡められていた腕の力が抜け、ヒカルは一瞬、何が行われていたのかさえ理解できないように、呆然としていた。
ただ、唇に残された感触だけが・・・彼女を硬直させて、身体を引いたルイ・ドゥ・アルディの姿を凝視するだけしかヒカルに許可しなかった。

■12

ヒカル・クロスは須臾の口付けというものを知らなかった。

彼女は数多あるこの世の接吻をすべて知っているわけではない。
信愛の情を表現することはできたが、愛を・・・表現することができなかった。
彼女は本当の愛を知らない。愛をしていない。
皆に愛されることばかり願って・・ただ独り過ごす嘆きの夜や悶えに嫌悪する瞬間を知らない。
たったひとりの人だけに愛されたいという強い願望を持っていないから。

だから、その口付けの意味が理解できなかった。
酷く驚いた顔をして、ただ立ち尽くしているだけの彼女に向かって、ルイは冷笑した。
艶やかな、溜め息が出るほど美しい表情であったが、誰も近寄らせないと決めていた表情だった。彼の青灰色の瞳の奥をのぞき込めることができる人物はいない。
目の前のたったひとりを除いては。
しかしその唯一の人は、それに気がつかない。
意味がわかっていないからだ。

「ルイ？」
「余興は終わりだ、ヒカル」
ルイは短くそう言って、彼女と距離を置いた。

そして・・・腕を持ち上げて、大きな手の平に滲む血を、その酷薄そうな唇にあてた。
同じ薔薇の棘で疵を共有した。
同じ痛みを共有した。
これには、意味がないと彼女は言う。
彼の口付けには意味がないと彼女は言う。

そして斜めに彼女を見つめると、彼女は少し口ごもって顔を朱くした。
しかし、なぜ自分が赤面したのか理解できていないようだった。
彼女は・・・・ルイの仕草に戸惑ったというのに。
彼の妖艶と言うには足りないほどの、彼女を捉えるほどに甘い誘惑の視線をヒカルは受け止めたというのに、それを意識していなかった。

彼女は愛を知らないから。
誰かを独り占めしたいという気持ちを持たないから。
だから、彼の視線の意味が理解できない。

しかし・・・・

彼は、ゆっくりと、目の前の茶色の髪の茶色の瞳の娘を眺める。
意味のない行為を咎めるのに。

意味のある行為の意味がわからない。
そんな愚かな娘に・・・彼は言葉を用いずに、囁いたのに。
どうしたら、届くのだろうか。
何をしたら、何を言ったら、彼女はそれに意味を持たせるのだろうか。

長い時間を待った。
長い時間を眺めた。

そしてまだそれは続くのかと思うと・・・彼は胸が苦しくなり、眩暈がした。

「ヒカル、apopheniaだ」

彼はそう言うと、彼女を見下ろした。
少し声が掠れていたが、なぜそうなのか、彼女は察知できなかった。
すでに、その時のルイは無表情で、冷たい翳りだけが、彼の頬に存在していた。

「apophenia」
ヒカルが復唱して発音した。しかし意味がわからないらしかった。
僅かに首を傾げて・・・彼の発した言葉が命令なのか、彼女を侮蔑する言葉のかさえわかっていなかった。
「ルイ、意味がわからない」
ヒカルが素直にそう言うと、彼はあからさまに嫌悪の溜め息を漏らしたので、ヒカルの顔が曇った。ルイの能力には誰も及ぶことができない。彼は普段それを誇ることはなかったが、このように会話が継続できないとき、その理由が知能の差であることを知ると、とたんに不機嫌になった。

同じ空を見ても、同じ薔薇を見ても・・・・彼はきっと、ヒカルの感じるものや見ている色と違うものを感じているのだろうということだけはわかった。

「無作為或いは無意味な情報の中より規則性や関連性を見出す知覚作用」
ルイがそう言ったが、彼女の感想は求めなかった。
彼は踵を返して、ヒカルに背中を向けた。
「ルイ」
話がまだ終わっていなかった。ヒカルは慌てて彼の名前を呼ぶ。
どうして、彼はいつも彼女に謎かけばかりするのだろう。
ヒカルになぜ、apopheniaと言うのだろう。
彼女は困惑した面持ちで、もう一度、眩しいほどに輝く金の髪の人に声をかけた。

「私に、その意味を探せということなの？」
「どうかな」
ルイが曖昧な回答をしたので、滅多にないことにヒカルが驚愕して目を見開いた。
彼は変化を嫌う。特に自分の周りのことには。
発言であったり、生活様式であったりそれは様々な場面で表出していたが、特に、彼は曖昧な会話を好まなかった。
会話や意思伝達に関しては、曖昧な揺らぎというものは無駄であると思っているところがあった。

甘い香りで彼を誘う彼女の唇が、濡れていた。
茶色の瞳はまっすぐにルイに注がれている。
それほど懸命に見つめられて・・・何も感じない者ばかりだと彼女は信じて疑わない。
そんな視線を、他の見知らぬ者に向けようものなら、即座に彼女の視力を奪ってしまおうと思うくらいに、彼女は少女から大人に休息せずに変化していこうとしている最中だった。

・・・惑わせる目交ぜを配っているのは、彼女の方であるのに。
まったく・・・何もわかっていない。
彼は溜め息を漏らした。

「意味をよく考えると良いよ、ヒカル」
彼はそれだけを言うと、別棟に戻る、と言った。

■13

「待って」
彼女は言った。
背中を向けたルイ・ドゥ・アルディに向かって、ヒカルは言葉をかける。
彼女はいつも・・・去ってしまう者を追うことはしなかった。
しかし、なぜだか、どういうわけか・・・・ルイの背中を見たときに、その感覚をどこかで味わったような気がした。
自分ではない誰かが・・・かつて、ルイに良く似た人の背中を見送ったような・・・
そんな既視感と言い表すには曖昧であるがはっきりとした感覚が、彼女を襲った。

思わず腕を伸ばし・・・虚空しか掴まない彼女の指の先に、ルイはいた。
すでに二人の距離は開いていた。
「ルイ・・・！」
彼の金の髪に叫ぶ。
悲鳴にも似た声で。

しかしその声は押し殺した最低限の音量だった。
彼の背中をいつも見てきた。
そして・・・いつも彼は振り向かない。
振り向かないのに、彼は立ち止まった。
・・・彼はゆっくりと空を仰いでいた。
大きく溜め息をついていたのがわかる。
両方の肩が大きく隆起したからだ。

彼女は彼の背に向かって再び彼の名前を呼んだ。何度呼んでも、彼は決してヒカルにこたえを教えない。
apopheniaという言葉に対するヒカルの回答を待っているのだとわかった。
そしてそれを間違えれば・・・彼は彼女を許さないのだろうと思った。
ヒカルのことをルイは贖罪の娘だと言う。
何に対して贖罪するのか、彼女はまだわからなかった。
ルイの実父が彼を顧みないことについて指しているのだろうと思ったが、彼女はルイがもっと違うことを指し示しているような気がしていた。
だが、それを尋ねても、彼は決して応えない。

声をかけても、彼は振り向かない。
それなら・・・それなら。
ヒカルの躰が動いた。
先ほどの、引き寄せられた時には戸惑ったのに。今度は・・・自分から、彼の背中に向かって行った。
彼は完璧だ。
彼女がその先にどうするのかも気配で察知することも困難ではないはずだった。

日本のパーティーで、彼女が躓いて躰を傾斜させたとき。
彼は黙って立ち止まり、彼女を支えた。
だから、まったく無視しているわけではない。
しかし計算高くなれなかった。ただ、躰が動く。彼の背中を見送ってはいけないのだと誰かがヒカルに告げるのだ。そして、彼女の背中を誰かが・・・押すような感覚を味わって、ヒカルは一歩を踏み出した。

彼の背中にヒカルは寄り添った。
薔薇の棘が彼女の手の平を傷つけたままだったが、それでも彼女はルイがそこから逃れて行かないように、両手を回してぎゅっと彼の衣を握った。
棘により痛みは感じない。

それより・・・胸が痛かった。
彼が訴えようとしていることが何であるのか、ヒカルはわからないのだ。
それは何？と彼に尋ねることが、彼の誇りを傷つけることだということだけはわかっていた。

「まだ話は終わっていない」
「・・・ヒカル、オレはもう何も話すことはない」
彼は立ち止まったまま、静かに冷たくそう言った。
素っ気ない口調で、まったく興味がないという口ぶりだった。
それなのに・・・・ルイは大きく深呼吸をしている。
その波に、彼女は乗った。彼の背中の動きに合わせて、ヒカルの躰も隆起する。
温度を感じ、溜め息が聞こえ、そして何より・・・ルイは彼女を振り払わない。
それなのに・・・
なぜ、なぜ、通じ合うことが出来ないのだろう。

これほど、一緒に居るのに。
これほど、長い時間を一緒に居るのに。

ヒカルは茶色の瞳を閉じた。
「待って・・・意味を考えているのだから」
「それは自分の部屋で考えろ」
彼がまたそう言い放ったので、ヒカルはルイの広い背中の上で、首を横に振った。
顔を擦りつけると、ルイの香りがした。・・・ここにはない薔薇の香りがした。
「私はルイと考えたいよ。・・・・意味がないと言うルイの問いに、私は意味があるのだと答えたいから」
彼女がルイに、誰も見ていないのにキスをすることは意味がない、と言った言葉を指していた。
それに意味がないとヒカルは言ったが、彼は意味のある・・・意味を含んだキスをヒカルに落とした。
なぜなのだろう。
なぜ・・・彼はあんなに優しい壊れそうなほどに儚いキスを、自分に振らせたのだろう。
奪ったり攫ったりすることしかしない、と彼はいつも言うのに。

「意味のないことに意味を付す・・・か。くだらないな」
ルイが冷笑した。

■14

「私には意味があることだよ、ルイ」

彼女の声が彼の背に伝わってきた。
ルイ・ドゥ・アルディは溜め息を漏らした。
このままこうしていれば・・・ルイは彼女を自分の別棟に連れて行き、そしてそのまま彼女を部屋から出さないための手順を踏むつもりであった。
彼女を出られなくすることは簡単だった。
しかし、それでは意味がない。
あの男はそれでは苦しまない。
たとえヒカルを傷つけても、自分なら癒すことができると傲慢に言い放つだけだろう。

「私は・・・ルイと一緒に居ると言ったから。
私が選んだことだから。
・・・だから私には私の理由がある」
ヒカルはルイに囁く。
「オレにもオレの・・・理由がある」
ルイは彼女から離れようとしたが、彼女は腕の力を抜かなかった。
ふりほどいてしまえば簡単だったのに。
ルイは・・・彼女の白い腕から逃れることはしなかった。
どういうわけか・・・足が動かなかった。
動いてはいけない、と彼の筋肉への緊張を命じる何かが彼の中で蠢いていた。

「ルイ。ひとりで理由を探さないで」

彼女は囁いた。低く、小さく。そして祈るように静かに。
ルイの背中が動いた。
彼女の声量が乏しいので、言葉の意味がわからかったわけではなかった。

届いていた。
その言葉は、ルイに届いており、彼の背中越しに、ルイの中に浸透していく。

なぜ、互いの孤独を受け入れることが出来ないのだろう。
なぜ、彼女は自分に寄り添うことを躊躇わないのだろう。

これほど傷つけているのに。
これほど寄ってはいけないと言っているのに。

・・・この人は、なぜ、自分の思い通りにいかないのだろうか。

己には自分だけの理由があると言った。
そしてヒカルにも理由があった。
だから、利害関係が一致した婚約であるし、それはヒカルが持ち出したことであるというのに。
ルイはこうしていつも確認しないと満たされない。
いや、今この瞬間でさえ、彼は渇望し、冀求し、そしてそれらが決して結願しない。
どこまで堕ちれば・・・彼女の言葉に吸い込まれそうになる自分を排除することができるのだろうか。

手に入ったと思ったのに、彼女は手に入らない。
思い通りに動かせると思ったのに、彼女は彼の思い通りに行動しない。
彼一人だけを見つめることはしない。その先に、誰を見ているのかは明白だった。
自分と良く似た顔立ちの、あの男を見ているのだと思うと、彼は彼女を無性に傷つけたくなる。
茶色の羽をもいで、そしてそこから流れる血を大地に捧げれば、彼女は新しく自分だけを見つめるようになるのだろうか。
贖罪の娘の流す涙や血は・・・決して彼を満たすことはなく、何かを滾らせる。

彼はルイ・ドゥ・アルディなのに。
それが何であるのか、はっきりと定めることができなかった。
彼の中では、定めることができないものは意味がないものと同義だ。
それなのに・・・その定まらない何かが自分の中で失われていくことを止めようとしている自分が居た。
これは彼の中の不要な遺伝子なのかもしれなかった。何もかも精査されて生まれて来たはずなのに。
彼の中では・・・ルイ・ドゥ・アルディとして認めることができない炎のように熱い何かが確実に存在していた。

見極めには、もう少し時間が必要だった。

「自惚れるな」
ルイは短く吐き捨てた。
大きな溜め息をつく。それはルイが彼女に失望した溜め息だとヒカルは受け取ったらしい。
彼の期待通りのこたえは出せなかった。
彼女はそう思ったようだった。
回された腕からゆっくりと力が抜けて・・・やがて、彼から彼女は離れて少し距離を置いた。
ルイの背中に、温度の低い風が流れる。いや、違う。
彼女の体温が離れたからそう感じるだけなのだ。

それが一瞬・・・彼の背中を刺すように、刺激した。

そこにあったものが急に消えてなくなってしまうことに、ルイはいつも関心がなかった。

しかし今は、温もりが去ったことに身体が反応した。
なぜなのか。
理由を考えても無駄だと思った。
・・・そこには理由がないという理由しかなかったから。

「ごめんなさい。踏み込み過ぎた」
彼女がルイの背中で小さくそう言った。そして謝罪した。
彼は振り返らなかった。
「ルイにはルイの理由がある。それを無視した」
ヒカルの声は少し湿った声だった。彼女は他者のことでは容易に涙を流す。
自分の事でもないのに。ヒカルは自己のためには涙を流さない。それが彼女の誇りなのだ。
だからどんなに傷つけても決して涙を流さない。
それなのに、彼女はルイに踏み込み過ぎたと言って、哀しい声を漏らす。
それが彼をどれほど狂わせるのか、知っているかのように。

もっと、ずっと、深いところまで堕ちて行けば良いのに。

それは彼女のことなのだろうか。
それは自分のことなのだろうか。

彼は深く思考の淵を自ら望んで、深く入り込み、耽っていた。
背中に彼女の溜め涙（※涙を浮かべること）を感じながら。

■15

「・・・ヒカルが決めることではない」
ルイはヒカルに背中を向けながらそう言った。
素っ気なくとても無愛想に言った。
振り返って、ヒカルの涙を浮かべた顔を見てしまえば、彼はまた彼女を傷つけるだろう。
それでは繰り返すだけだ。
彼は反復を好まなかった。

「オレの何にヒカルが踏み込んだのか？踏み込めるほど、同等だと思っているのか？
それ自体が愚かしい妄想だと、いつになったら気がつくのか・・・」
ルイは首を振った。

ヒカルが、息を呑んで、声を引き入れるようにした嘆きの呼気の音を彼は聞いた。
けれども、それでも振り返らない。

「いい加減に、自分と対等だと思うことはやめろ。オレとヒカルは違う。違うからこそ求める理由が違う。意味も違う。そして婚約することは、利害が一致しているからだ」
彼はそう言って、唇を噛んだ。
自分の言葉にそのように反応した。
どんな理由であれ、意味であれ、ヒカルはルイと共にしかこの先・・生きられない。
もう一つの選択もあった。
彼女がシャルルかミシェルか・・アルディ家の誰かの元に嫁ぐことも可能性としてあった。
しかしそれは赦さない。
彼自身が。ルイ・ドゥ・アルディが全力をもって阻止するべき事項だと思っていた。
彼女が希なる宝を持ち合わせていることは、少数の者しか知らない。
そこからもたらされる巨万の富についてのみ、得ようとすれば彼女はその恩恵を与える行為を拒否するだろう。
だから提供せざるを得ない状況にするしかない。しかしそれを遂行するのはルイ・ドゥ・アルディであり、その他の誰にも譲るつもりはなかった。
この世の理を覆すような軌跡を持って生まれて来た乙女は、彼と同じ作られた生命で、そしてそれでいて、自分の生命について意味を持たせようと足掻いている。

愚かな娘だ、と思った。
それなのに。

ルイは、物憂げな青灰色の瞳を彼女に向けることなく、自分の手の平に落とした。

同じ疵ができて、ルイはどこか安堵していた。
同じ痛みを味わって、彼は安らいだ。

しかし彼と彼女は同じではない。
同じ過程で生まれたのに、同じではない。

それを何度も繰り返し、彼は繰り返さないのに、重複して教え諭しても彼女はその半分も耳に入れていない。
愚かしい贖罪の娘を自分の妻としなければならない。

そう。
そうしなければならない。

ルイはそこでふと、唇を歪めて嗤った。
彼女を配偶者として迎えることは、一体、誰が決めたことなのだろうか。
彼の教育係のミシェルか・・・？それとも、実父とされているシャルルか・・・それとも親族会か。

どれも違っていた。
彼は忘れない。
自分の記憶の鎖を途切れさせたことはなかった。
ヒカル・クロスを自分の妻にし、シャルルの後継となりて彼を地獄の業火で焼き尽くすと言い出したのは、他でもないルイ・ドゥ・アルディ自身であったのに。

ヒカルも業火で焼かれれば良いのに、と想いながら彼女と口付けを交わす。

・・・一体、自分の導き出したこたえは、ヒカルを苦しめるためにあるのか、それとも・・・自分を貶めるためにあるのか・・・どちらなのだろうか、と思った。
彼はわからないことはないし、調べれば大抵のことは身についた。
それなのに、ヒカル・クロスのことになると、反復し、そして彼女を酷く蔑みたくなる。
まったく意味のない感情であり、それはルイ・ドゥ・アルディが長らく厭ってきた不要な感情であるというのに。
ヒカルは、ルイに不要なものばかりを与える。
彼は何も生み出すことができないから、何かを奪うことしかできないと宣言したのに。
なぜ・・・彼女はルイに与えるのだろうか。
彼には意味のないそれらを惜しみなく。

■16

「話は終わりだ」
彼は宣言した。

これ以上話しても結論は出ない。
他に・・・もっと考えるべき事が彼には山積している。
それを無視して彼女と、つまらない問答を繰り返すつもりはなかった。
戯れの恋なら、それに興じれば良いのに。
愚かではあるが、不真面目ではない娘は、ルイの言葉について深く考えようとしているが、ルイと同じ速度と解釈でその意味を考えることができない。
それはヒカルだけではなく、たいていの人間がそうであった。
彼の思考を読み取り、そして先回りすることができる人間は限られている。

彼の実父と教育係である叔父だけだった。

だからヒカルがルイを理解できないのは、苛立つ理由にならない。

もう、何度も経験したことだった。

それなのに・・・ルイは、ヒカルが彼を理解しないことについて、苛立つ。
そして、彼女が『踏み込み過ぎた』と言って一歩引こうとすると、それを嘲る。
まるで彼が彼女を引き留めようとするかのように。

何を想い、何を伝えようとしているのか、ヒカルにはわからない。
それなのに、彼女は根拠も論拠も越えて、ルイの中核に迫ってくる。
予告もなく、突然に。

彼と同じように薔薇で傷ついた手の平を、彼の身体に巻き付ける。
そして、彼と共に在りたいと言う。
何を意味しているのか、理解していないのに。

「ルイ・・・」
掠れた声で、ヒカルの声が響いた。
彼女はまだ若いので、その声は少女特有の高い音程をもって、ルイの耳に届く。
彼が聞いていることを前提で。
いや、聞いていなくてもヒカルは彼に囁いた。

彼女の意味について。
彼女の持つ意味について。

「もう何も言わない。もう踏み込まない。でも・・・・。でも、これだけ伝わって欲しいと思う」
ヒカルはそう言って、ルイの背中に向かって言った。
また触れれば、拒絶されるのかもしれないと思いながら。

他者から拒否され否定されることほど、ヒカル・クロスにとって辛いことはないはずだった。
それなのに、それを前提で彼女はルイに囁く。
ヒカルは言った。
躊躇いながら、間を置いて。

「・・・・・私は家族が欲しい。ルイ。だから家族になって欲しい」

彼は大きな溜め息をついた。
そこでゆっくりと、ヒカルに向き直る。
彼女が少し驚いた顔をしていた。

茶色の瞳の、茶色の髪の娘は、金の髪の青灰色のルイを見つめていた。
どこにも目線を逸らすことはなかった。
背に感じていたヒカルの声も視線も、ルイだけに注がれていた。

どうして・・・それを確認することによって、ルイはまた吐息を漏らすのだろうか。

これは安堵からくるものなのか。
それとも・・・

彼は振り返ったが、決して彼女に近寄らなかった。
この距離を、ヒカルが惜しいと思い、彼女から寄り添わなければ意味がない。

・・・初めて、彼女が何かを欲しいと言った。

彼女は、アルディ家に滞在するようになってから、ねだり事はほとんどしなかった。
この家の財力や環境から言っても、それは特段特別な事でもないし、何かに影響するわけでもなかった。
こどもの願いなどは微々たるものだ。
それに、ルイの実父は、ヒカルをこよなく愛していたので、そのくらいの失費に関して何か口を差し挟むことはないとわかっていたはずなのに。
この家のこどもではない、という気兼ねが彼女の願いを絶やしていた。
ルイがその若さで、様々に・・己への投資を重ねているのに、ヒカルはつましく生きるということを邁進することで、自分の存在を主張しているかのようだった。

■17

ヒカルの顔は、ルイ・ドゥ・アルディが今まで観たことのない顔つきだった。
その時の彼女の容貌を一言で表現するには適切な言葉がなかった。
少女のようでそうでなかった。
老成しているようでまったく無防備だった。

唇を軽く噛み、ルイをまっすぐに見据えていた。

それでいて、彼女は自分が今何を言っているのか理解しているようであり、そうではないと言っても良いようだった。
ヒカルは、自分の言葉が、自分の内から発せられたものであるということについて少しばかり驚愕していた。

彼はそんなヒカルの戸惑う姿を見て、冷ら笑いを浮かべた。

「ヒカル。本当のことを言うときの君は・・・悪くないよ」
そしてルイは話は終わりだ、と切り上げたのに、興味深そうに彼女に言った。
しかし身体を僅かに向けただけで、やや斜め上から青灰色の物憂げな瞳でヒカルを見下ろすルイはあくまでも冷たかった。
しかし、それまでの無関心や苛立ちを交えた視線とは少し様子が違っていた。

そしてしばらくの間、ヒカルを黙って見つめたままであった。
ヒカルもルイを見つめていた。

・・・・同じ薔薇で傷を負った者同士が見つめ合っていた。
同じ薔薇の苑で育ち、そして一緒に生きていこうと約束したのに幸せになろうという希望や喜びを語り逢うことは決してなかった彼と彼女は、そのまましばらく沈黙していたが、ヒカルの掠れた声によって、その静寂は破られた。

「私は・・・私は・・・」

ヒカルが言葉を続けることができなかった。
ルイはその言葉の先を待っているというのに。
彼が誰かの言葉を待つことはほとんどないことだった。
次の言葉を考えるような時間を相手に求めたことはない。
短い会話の往来で用事が済んでしまうルイ・ドゥ・アルディには、誰かの言葉を待ってやるという時間を持つ必要がなかった。
相手がその言葉を発するために要する時間の間に、彼は何往復も先の会話を想定することができ、そして相手が相応しいと自分で思う言葉を発する時には、すでに彼は相手との対話は終了したと見なしている。
「言えよ、ヒカル。何度も言えよ。欲しいものがある・・・・と」
彼は言った。
躊躇っているヒカルの言葉を続けた。

「家族が欲しいからオレを利用したい、と。
自分の存在を確立したいから、アルディ家の者と婚姻したいと。

・・・飾った言葉で隠しても、無駄だ」
彼は辛辣に続けた。
ルイがこれほど長く言葉を続けることはとても珍しいことだった。

しかしその声の奥に秘められた彼の願いは、彼自身にも気付かれることはなかった。

・・・・彼女が欲しいのは家族ではなく、ヒカルのためだけの安らぎではなく、ルイが欲しい・・・と。

彼女に、ルイ・ドゥ・アルディが欲しいと言わせたいがために、彼は普段待つことはしないのに、彼女の言葉を待っているのだ、とルイ・ドゥ・アルディは決して告げることはなかった。
それを発してしまえば、彼はヒカルと同じように、何かが欲しいとねだる卑しい者に堕ちてしまうからだ。
少なくとも、今のルイ・ドゥ・アルディはそのように認識していた。

■18

ルイ・ドゥ・アルディが彼女を見たとき。
ヒカル・クロスは戸惑った顔を隠そうとしていなかった。

隠す方法を知らないらしい。

いつも自分の本心を隠すことばかりに執着していた彼女は、自分の思わぬ内からの声についてどう対処して良いのかわからないといった様子であった。
ルイ・ドゥ・アルディはすでにこの場を離れることを発言していたので、そのままま た彼女に背中を向けた。彼女の言葉を吐き出させてやろうとはしなかった。
言えとルイが間を持った瞬間に行動に移すことができない人間は、いつまで待ったとしても、彼が用意してやった路に乗ることはできないと知っていたからだ。

愛はやらないが、ヒカルの望むものをやろう、と彼は契約したのに。
だからヒカルは望むものを口にすることができる。
ルイはそれを叶えてやることができる。
そう契約したからだ。
それなのに。
なぜ、その契約に対してヒカルが疑いや躊躇いを持つのか、ルイには理解できなかった。
理解する努力はしなかった。
理解したら終わりだ、と思っていたからだ。

まったく、くだらない問答に時間を費やしてしまった。
そう思った。
彼は少し不機嫌になった。
意味はなかったが。

「ルイ・・・ルイ」
彼女はただ、困惑気味に彼の名前を呼んだが、彼はそのままゆっくりと歩き出した。
これをあと何回繰り返せば、彼女は彼の胸の中から飛び立とうとすることを諦めるのだろうか。
困ったように彼のキスを受けとめる仕草から、自ら進んで彼の激しい嵐を得たいとルイに希うようになるのだろうか。
彼は星辰の子と呼ばれて、皆が彼に引き寄せられるというのに。
ヒカルだけは彼に屈しない。
こうして辱められても、彼女はそれでも生き抜くことを選ぶ。
あのフランスの華は、彼女を彼の運命の人と同じような気質を伸ばし育てて、その先に何があると考えて居るのだろうか。

「ヒカル。考えがまとまったら、いつでも聞いてやる。ヒカルのさもしい願いを、ね。
しかし、それはひとりで導き出さなければならない」
彼は素っ気ない口調でそう言うと、軽く首を振った。
これ以上この薔薇園にいれば、苑全部の薔薇を滅してしまいそうになる。
ヒカルという名前の薔薇も含めて、すべてを。

彼には創造したいという欲求はほとんど芽生えない。
必要に迫られて、何かを発案したり提案したりすることもあるし、場合によっては創り出すこともあるが、シャルルのように、意味もなく薔薇の品種改良をし続けることはしない。
どちらかと言えば、破壊したい、決して覆すことのない何かを大きく変更したいという衝動だけは強く表出することがあった。
それは決まって、ヒカルと意味のない問答をした後に訪れた。

ヒカルのように・・・・誰かと何かを為し遂げたいと思うことのない彼に、ヒカルが無駄にいつもいつも依存するような言葉を発することに苛立つからであった。
それなのに、その言葉を聞いてやらなければならない。
これもまた大変な苦痛であったが、彼はそれを顔に出すことはしなかった。
彼女はルイがそれを改めろ、と言っても。
それでも、態度を改めることはしないからだ。
成果の出ない接触はしない主義だ。

彼にはやるべきことが山積していた。
別棟に戻って彼のサーバにアクセスすれば、また、彼の判断を求めるたくさんの案件について転送されてきたメールが届いていることだろう。
最近では要件のみを書き記せと指示しているのにも関わらず、前置きや結句の言葉が、彼の決めた文字数を超えるものについては最初から読まないことにしていた。
それほどまでに、そぎ落とした彼の生活や時間の中で、唯一、ヒカル・クロスだけが変化しなかった。

「ルイに何かをして欲しいわけじゃない」
ヒカルはぽつりと言った。
彼は返事をしなかった。
この空の下で、地面に落ちた薔薇の香りが風に乗って立ち上ってきた。
たいていの薔薇は香りが強くなった時が最高の時で、それ移行はただ萎れるだけだった。
だからこの花瓣たちもそろそろ役目を終えて、土に還ろうとする。
それなのに、ヒカルはそれを無視して、拾い上げ、そしてまたルイのためだと言って、生命の理を無視して生き存えさせようとする。
まるで、彼女の母親のように残酷な少女は、自分の行動の意味を考えず、ただただ徒に命を弄ぶ。
最高の状態の薔薇を摘み取るとは、そう言うことなのだ。

■19

次に彼の背後から、地面を蹴る音がした。ヒカルが彼の前に回り込んだのだ。
茶色の瞳と茶色の髪の少女が、ルイの目の前に立ち、そして彼の典麗な顔を見上げた。
臆さずに、恋人同士よりも少し離れているがきょうだいよりももっと近い距離で、彼と彼女は対峙した。
なぜ、踏み込み過ぎたと言いながら、彼女はこうしてまた傍近く寄るのだろうか。
そして腕を伸ばし、彼の両腕の上に、そっと手の平を添えた。
無表情のルイからは何ら感情が読み取れなかった。
けれども、ヒカルはそんな彼の顔を覗き込みながら、言葉を選ぶこともせず、懸命に言った。
「ルイと一緒に考えたいの。どうしたら、一緒に薔薇を摘めるようになるのか・・・」
それは彼とヒカルとのことを言っているのではなく、あのフランスの華を交えた、集団生活を行えということなのだとルイは知っていた。
彼の望むものと、彼女の望むものは違う。

「だから、意味がないことでも意味があることでも、ルイと一緒に考えたいの。そのために、私はルイが必要なの。ルイが・・・ルイが・・・・」

彼女はそこで言葉を切った。
滑らかな頬が緊張のために赤くなっていた。
彼女の母親の面影が色濃く出てきた。
こんな思い詰めた表情をフランスの華にヒカルが向ければ・・・彼は夏であるかどうかは関係なく、また狂うのだろうな、とルイは思った。

そこで彼女は一度だけ下を向き、それから大きく息を吸って何かを決心したように、また顔を上げた。
見事な金の前髪の下で、青灰色の瞳が瞬きもせずに彼女を見つめて音声を聞き入れる時間はほんのわずかな瞬間であることは、ヒカルも承知していた。
ヒカルの瞳は濡れていた。
それは情欲の誘いの浸潤ではなく、悲壮な決断をした後の静寂さがあった。

彼女は囁くように言った。しかしはっきりと言った。

「私はルイが欲しい」

だが、彼女の声は次の瞬間に悲鳴に変わった。
もの凄い勢いで、ルイが、彼に触れていたヒカルの手をふりほどき、逆に彼女の腕を強く掴んで、広い胸の中に引き寄せたからだ。
足元の均衡を失って、ヒカルは踵を上げてルイ・ドゥ・アルディの胸の中に倒れ込んだ。
壊れそうだと思うくらい強く、激しい抱合にヒカルが声を漏らして抗おうとしたが、ルイ・ドゥ・アルディはそれを赦さなかった。
身動ぎすればするほど、彼は益々彼女を逃すまいとして力を入れる。
締め上げられたまま窒息するかと思い、眉根を寄せて唇を軽く開いた。呼吸が乱れて彼女はルイに助けを求めるが、ルイは彼女の首筋に顔を埋めて・・・まったく声を無視していた。

彼の怒りを誘ってしまったらしい、とヒカルは顔を歪めながらそう考えた。
「ルイ。ごめんなさい。もう・・・もう言わないから」
彼は彼自身をもの扱いされると大変に不機嫌になった。彼の生まれて来た経緯を知っているにも関わらず、ヒカルが思慮浅くそのような禁句を唱えてしまったことで、ルイ・ドゥ・アルディが激昂したのだと思った。

「ゆるして・・・・」
彼はそれでも、彼女をきつく抱き締め続けた。
それまでまったく冷静沈着であった彼が、これほど激しく憤りを表すのであれば、相当に激昂しているのだと思ったヒカルは何度も呻きを漏らしながら、ごめんなさいと謝罪した。

「ルイ・・・」
「黙れ」
しかしヒカルの謝罪は繰り返されることはなかった。
彼が怒気を含んだ声で黙止を命じると、いきなり・・・そう、いきなり彼は彼女の唇を塞いだのだ。
ルイとは幾度も口付けを交わした。
しかしそれはいつも奪うように強引で、滅ぼすように危険な口吻だった。
反対に、彼女からは触れるような擦るようなキスしかできなかった。
それなのに。
一体、このキスにはどんな意味があるのだろうか。先ほどの軽い柔らかいキスとも違っていた。
・・・彼の内なる激しさが迸るようで、それでいて・・・何かを伝えようとするように、ヒカルの胸が痛むほど深いくちづけだった。
呼吸が苦しくなっていることすら忘れてしまうような、忘我の極致に陥る程に甘く激しく切ないそれに、彼と彼女は包まれていた。
それでも彼女は気がつかなかった。
彼が怒って彼女の唇を貪っているのではなく・・・・彼女のごめんなさいという言葉によって・・・ヒカルが言った、ルイが欲しいという言葉が否定されることを遮ったことに気がついていなかった。

これは罰だと思ったヒカルは黙ってそのまま彼の咎を受け止めていた。
それがまたルイの激しさを増すことになっていくことにも、気がつかずに、ただ黙って、抗うことをやめ、少し哀しそうに彼の愛撫を受けていた。
このまま、呼気が停止してもルイがそれで怒りが収まるのであればそれも仕方のないことだ、とちらりと考えたが、それすら考えられなくなるほどに熱くて激しい彼からの懲を受け止めていた。

■20

謝罪は彼に惨烈を極める。
哀憐は彼を激昂させる。
よく知っているはずなのに、ヒカル・クロスは彼に対していつも・・いつもそういった情しか向けなかった。
だからこそ。
彼女の心の内の、仄暗い想いを吐露することは、彼が勝利したことを示す。
彼女を屈伏させることこそが、あのフランスの華を貶める唯一の手段であり過程であると知っていたルイは、彼女が清らかな聖女の仮面を剥がす時をじっと待っていた。

今。
その時が来た。

それなのに、彼は少しも歓喜で打ち震えることができない。
ますます・・・怒気が彼の端正な顔を曇らせた。
その瞬間のルイの表情は、彼の実父の若い頃の顔立ちに良く似ていた。

奪われる。奪うことしか知らないルイから、ヒカルは奪う。

冷静さも。
狡猾さも。
酷薄さも。
秩序さえも。
彼が持っているものを何もかもを奪う。

なぜなのか。

それは、彼女の中に眠る、フランスの華の定めたファム・ファタルの持つ因子が、ヒカル・クロスという依り代を使い、アルディ家の胤を惑わせるからなのか。

彼はいつも何かに対して問い続けている。
ヒカルに対して問うている。
それなのに、彼女はそれに気がつかない。

やがて、ルイが唇を話すと、彼女はそこで大きく息を吸った。
気管支から音が漏れる。
彼女の生命をここで奪うわけにはいかない。
彼女の躰は誰もが欲しがる希なる可能性を秘めている。
それはルイは持っていないものだ。

これは、アルディ家の悲願だった。
再生したい。
医師でありながら、今でも救えなかった命のことばかりを考え続け、そして誰も救おうとしなくなってしまったアルディ家当主は、その昔、そうではなかった。
医師を志したのも、病に陥った彼自身の母を救いたいがためだった。
しかし救えなかった。
もし、ヒカルがその時に誕生していれば、世界はもっと違っていただろう。
彼が執心するあの国への援助の方式も違っていただろうし、何より・・・これほどまでに寂莫と

したアルディ家にはならなかったはずだった。
しかし、それではルイ・ドゥ・アルディは誕生していなかった。

それはアルディ家の願いでもあり、だからこそ、ヒカル・クロスはこの家に留まることを許可されていた。
彼女は、この世に奇蹟をもたらす希なる体質を持っている。

だから、当主は彼女を手放すことができない。

ルイは、それだけが理由ではないということもわかっていた。
ヒカルを通して、決して手に入れることができなかった幻の運命の人のその後を見守ろうとしている。
いつか・・・シャルルはヒカルを彼だけの永遠の晄にしてしまうだろう。
娘のような年齢の少女を彼はもう一度、運命の人と定めて、やり直そうとするのだろう。

それがシャルルの再生だからだ。

どうしてルイではなく、ヒカルを、シャルルはこよなく愛するのか。
その理由をヒカルはわかっているのに。
自分自身の魂は・・・この家の誰にも愛されることはないとわかっているのに、彼女はシャルルの傍らで微笑む。
ヒカルは自己を滅してシャルルの愛したあの人の代わりに傍に居る。
それを理由にしている。

それがルイを苛立たせる。
ヒカルとあの男との目に見えない絆がルイを阻害するからだ。

■21

眉根を寄せて、苦しそうに交わすこの契約の証が、どれほど彼を傷つけているのか彼女は理解できていなかった。

・・・・やがてゆっくりと唇を離すと、彼はヒカルから身体を離した。
ヒカルが彼の腕の中で、乱れた息を整えていた。
そして腕の力を抜くと、彼女の肩を押した。
ヒカルはその反動で、後ろに下がり、そしてまた困ったような泣きそうな顔をして、胸の前に腕

を組んで、欠乏していた酸素を取り入れることに必死だった。

このままでは本当に理性を失いそうになると判断したからだ。
しかし、どうにかなりそうだ、と思ったとしても、彼はそれに耽るつもりはなかった。
彼はルイ・ドゥ・アルディだから。

彼は願ったものを手に入れる。
それが手に入るまで、時期を狙って待機することを知っている。
だからヒカルを手に入れる。
必ず。
何があっても。
ヒカルが誰を愛していても関係ない。
ヒカルがルイとの婚姻を望んでいなくても、彼には影響しない。
ただ、彼女をシャルルから取り上げて、深い絶望をもう一度味わわせ、そしてしがみついている当主の座から落とすことだけを思い描いて行動しているに過ぎない。
これもその計画の一環だ。

彼は首を振った。
数秒前まで考えていたことと、これまで彼がひとり抱えてきた考えが相反するのにルイの中で混在するからだ。
誰も見ていなければ意味がないと傲然と言い放ちながら、何度もヒカルに顔を傾ける。
決して愛してやらないと彼女に言いながら、彼女を腕に抱く。
他の男のために摘んだ薔薇はいらないと彼女の腕からそれをたたき落とす。
本当はルイのために摘んだのだ、と聞けば、彼は意味のないことはするなと言って彼女の行動を否定するのに、墜ちた薔薇を拾い上げようとしたヒカルが彼と同じ傷を持つことを悦ぶ。

息ができないほど苦しいのはヒカルだけではない。
ルイも・・・・苦しい。

彼女は乱れた呼吸のまま、ルイに言った。
「ルイ・・・行かないで」
しかし彼は首を振った。
「断る」
そう言って、手の甲で整った唇を拭うと、冷たい青灰色の瞳でヒカルを見た。
「ヒカル。ヒカルが消えないのなら、オレが行くしかないだろう」
彼女は哀しそうに言った。
「ルイ。私、今日はルイと食事ができると楽しみにしているの。本当よ」
「本当にそう思う時にはそういう言い方はしないものだよ、ヒカル」

彼は傲然と言うと、彼女の脇をすり抜けて、今度こそ本当に別棟に入っていってしまった。

それ以上は声をかけられなかった。

ヒカルは黙って、ルイの背中を見詰め続けていた。
このまま、触れたらいけない、と思った。
踏み込み過ぎた時には、どうやって修復したら良いのか、彼女はわらかなかった。
そこまで近い場所に触れる相手が、彼女にはほとんど居ないからだ。
触れれば、皆、彼女のことを哀れむばかりであることを知るからだ。
無償の愛でもって包んでくれる人々は遠い国にいて、この館の中では唯一、シャルルだけがヒカルのことを慈しむ。
それ以上何も望まない。それ以上、何かを望んではいけない。
それなのに、ルイが欲しい、家族が欲しい・・・と彼女はルイを傷つけた。
一番それを言ってはいけない相手に、言ってしまった。

家族とは何だろう。
寝食を共にすれば家族になれるのだろうか。
それは違う、とルイが否定した。
どれほど長い時間一緒に居ても、食事を一緒に共有しても、彼は決してヒカルを家族と認めない。

ヒカルは溜め息をついた。
唇を噛んだ。
彼が残した意味のないことの中から、何かを拾い上げることが出来る野だろうか。
ぎゅっと握った拳の中で、薔薇の棘でついた擦過傷が僅かに痛み始めた。
今、彼も同じ痛みを味わっているのだろうか。
違う。ヒカルの痛みより・・・もっと、もっと痛むはずだった。

彼女は溜め息をついた。そして空を見上げる。そうしなければ涙がこぼれ落ちそうだったからだ。
自分を憐れんでいるわけではない。
彼を可哀想だと思っているわけではない。
泣いても、解決しない。これは彼が良く言う言葉だった。

この家の人達は優しい。
誰もが彼女に近付かないから。
シャルルでさえ、距離を持ってヒカルに接する。

それなのに、唯一、ルイだけが彼女に残酷であるが真実を言い続けているような気がする。その言葉に隠れた意味がヒカルにはまだ、わからないけれども。
『忘れてもいい。でも、魂に刻め』
まだとても小さい時に、シャルル・ドゥ・アルディにいわれた言葉を思い出していた。
辛いことは覚えていたくないと思う。
でも辛いから覚えていられるのだ。
魂に刻め、といわれた。
それがいつか、きっと・・・何かの指標になるからだ、とヒカルは想った。

ルイの温度をまだ感じていた。
彼の白い頬が強く押し当てられた感覚や、大きな手の平で掴まれた腕の痛みもまだ残っている。
ヒカルができることはなんだろう。

婚姻することだけでは家族になれない。

それでも、これまで数多あった打診程度から正式な申し込みにいたるまでの婚約話をすべて断り、ルイは彼女と婚姻すると宣言した。

彼には彼の理由があり、ヒカルにはヒカルの理由があった。
ルイと婚姻することで、シャルルと一緒に居られると思った。
この家の本当のこどもになれると思った。
ルイとシャルルが和睦することを夢見た。
何もかもが、うまくいくはずだったのに。
それなのに、ルイは不機嫌そうにヒカルにまだ何かが足りないという。

彼女は吐息をまたひとつ、漏らした。
次に、大きく息を吸った。

悩んでいても始まらない。
悩んでいても終わらない。

始まらないものは、終わらない。

これは、自分で解決しなければならないことだ。

「ごめんなさい」

彼女は謝罪した。
足元の散った薔薇たちに謝った。
アルディ家の者に捧げるために生まれて来た薔薇たちなのに、彼らの疲れた孤独な魂を癒すこともなく、その役割を終えようとしていた。
だから、申し訳ないと思った。
しかしヒカルは踵を返して、本邸に戻るために足を踏み出していた。

ルイはapopheniaだと言った。

意味のないことに意味を見い出すことだ。
ヒカルにしか価値のないものがあるように、ルイにも内包している価値あるものがあるはずだった。それをヒカルが意味のないことだと言ったので、彼は激昂したのだ。
同じではないから。
ヒカルとルイは同じではないから。
だからこそ同じがわかるのではないのだろうか。
彼女の足はどんどん歩みを早めていった。

仲直りはその日のうちに。

これはヒカルがこれまでに学んできた処世術だった。
他者に嫌われたくないと思っていたから、誰かの機嫌を損ねることを畏れていたから。

でも今は違った。
ルイがヒカルという存在を快く思わなかったとしても。
ルイは彼女の願いを叶えてやろうと言った。
それなのに、ルイはヒカルに何も求めない。ただ婚約しろとだけ言った。
このことについて・・・ヒカルはルイに答えなければならないと思った。

彼のapopheniaとヒカルのapopheniaはどこかで交わるはずだ。きっと。

彼女は最後には、走って、本邸に入っていった。

後には、堕ちた薔薇の花瓣の中心から立ち上る甘い芳香だけが残った。

■22

ルイがシャワールームから出てきた時には、ヒカルが指定していた夕食の時間をとうに過ぎてしまっていた。
しかし本邸に赴いて飯事遊びに付き合うつもりはなかったので、たとえヒカルがシャルルを使って本邸に彼を引っ張り出そうとしても、応じるつもりはなかった。
内線電話も、アルディ家から支給される緊急端末もすべて電源を切ってしまってあった。
彼は広く逞しい肩に大判のタオルを無造作にかけて、まだ水気の残る金の髪から滴を落としながら居間に向かった。
彼には自室というものはない。この別棟全部が彼の自室のようなものである。
完全な睡眠を得るために、断光された部屋は備えてあるが、それも寝室と呼ぶには何もない場所だった。
この家の中で、何かを揃えたり、何かを愛でたりすることはしない。
あるのは、仕事に使うマシンと、開発用のサーバと・・・用途別に置かれた機器だけである。
それすら時折一度に廃棄してしまう。思いついたように。
新しい機種を手に入れた時には、彼はしばらくここに籠もって作業に耽る。
アルディ家の電圧管理がパリの中では最も優れているので、しばらくアルディ邸に滞在するが、ここは所詮、その程度の場所でしかなかった。
彼には執着するような記憶もない。
それなのに、ここに戻ってくることにした。
それがヒカル・クロスとの交換条件だからだ。

家族になろう、と彼女は言った。
家族がありながら機能していない空間に居るルイに向かって、彼女は高慢に言った。

・・・ヒカルのことを考えるだけで気鬱になった。

彼女をこれからどう活用していこうかと考えるのに、次には彼女の泣き出しそうな顔が浮かんでは消える。
心地好い勝利を味わおうとしているときに、彼女の声がルイの内から聞こえてくる。

彼は物憂げな上品な青灰色の瞳を瞑った。
肩にかけたタオルをぎゅっと握ると、手の平から血が滲み、それが生地に渡って赤い華を散らしていた。
先ほど棘を流し落とした際に、切開しないと取れない部位があったためだ。
・・・・加えてシャワーを浴びたので、彼の手の平の傷はまだ血を滲ませていた。

彼女も、本邸で手当を受けていることだろう。
それほど深い傷ではないはずだ。
・・・・ルイは血の滲んだ手の平をゆっくりと眺めた。

彼の血は赤かった。
自分が人間であることを確認する瞬間だ。
痛みがあるから、まだ、あちらの世界には行っていないことがわかった。
シャルルのように、行きつ戻りつして戻れない路に入り込むくらいなら、すぐさまこの命を絶つ覚悟も用意もできている。しかし、目的を果たさなければ、彼の生命の意味はなくなってしまう。

創られた命だった。
選ばれた命だった。

けれども、どう生きるのかは誰にも指図されない。決して。
奪うことはするが、与えられる施しは受けない。
ルイの誇りを激しく傷つけるヒカル・クロスを赦しはしない。

彼は居間に入った。
次に、足を止めて、厳しい声を出した。

「・・・・何をしている」

そこには、ヒカル・クロスが居た。
以前、ここにはもう入ってはいけない、と厳しく言い渡したのに、彼女はまたそこに居た。
居間の中央の、クリスタルのテーブルの前に備えられたソファに座っていた。
そもそも、ここのセキュリティはそれほど甘くはない。
ヒカル・クロスはどうやって入り込んだというのだろうか。
ルイは人の気配も、ドアの開閉による邸内の圧の変化も感じなかった。
彼はその理由を悟った。・・・まだ癒えていないということなのだ。

黙ったままのルイに、ヒカルは少し首を傾げてはにかんだ。
「ルイが本邸で食事をしないだろうな、と思ったので、こちらに来ました」
ヒカルは微笑んだ。
ルイは彼女のそんな様子に冷笑した。
見れば、テーブルの上には、日本式に重箱に詰めた日本食が並んでいた。
漆の漆器に、蔓をあしらった最高級の箸置きが乗っている。
ここは食事をする場所ではないのに、彼女は持ち運んだ薔薇の紋の美しい絹布を広げてその上に宝石箱のような曇り一つない箱を開いているところだった。
そのような文化で育ったわけではないのに、彼女はこうしてあの国の習慣を持ち込もうとして

いた。
シャルルが親日家であるということもあったが、それ以上に日本にいつ戻っても良いようにという配慮から、シャルルはヒカルに異国の文化について忘れることのないようにという教育を惜しみなく与えてきた。
・・・それもあって、ヒカルは時折こうして外で食事することを好んだ。
彼は、テラスでティータイムを楽しむヒカルの姿を見かけたことがあった。

「ここにはどうやって入った」
ルイは不機嫌そうにそう言った。
ヒカルは臆さずに、座ったままで、彼を見上げた。
茶色の瞳は先ほどの迷った瞳ではなかった。
輝くような眩しい晄のような笑顔をルイに向ける。
あれほど傷つけたのに。あれほど貶めたのに。
彼女は、それでも微笑んでいた。

「・・・この別棟のセキュリティを解除してもらっただけ」
「ヒカルにそんな権限はない」
彼女はこの家の滞在者でしかない。だから、そういった指示をすることができないことは彼女もよく承知しているはずであった。
ヒカルは少し目を細めた。
・・・ルイはそれで察した。
「特例解除か」
「そう」
彼は小さく舌打ちをした。

■23

アルディ家の者は、結婚が決まると、一ヶ月花嫁の家で暮らす習慣があった。
これを無視したのは、シャルル・ドゥ・アルディだけだったが、彼も若い頃には婚約中に破談になった相手の家にしばらく滞在していたことがあった。それは先方の継承問題で破談になったのだが。

ヒカルには家がない。
だからこの家がヒカルの家と見なされ、彼女はルイを花婿として遇さなければならないという責を負うかわりに、この家の正当なる住人と同じ権利を持つことになる。

花婿は花嫁の家で過ごす。その項には「猶・・・」と追記がある。

猶、花嫁は花婿を遇するためにすべての労を注がなければならず、当該行為を遂行するための権利を妨げない。

ルイと婚約したことによって、ヒカルはアルディ家の者と同等の差配をすることができるようになったのだ。
つまり、婚約したことによって、彼女はセキュリティレベルが変更されて、ルイの別棟にルイの許可なく入ることができるようになった。

ルイがいつ居間に入ってくるかわからなかったので、ヒカルは冷めても食すことができる品を揃えてやってきたのだろう。
これほどの量をひとりで用意し、運び込んだとしたら、彼女は大変に手際よく人を動かしたことになる。

おそらく、彼女はこれっきりその権利を行使しないだろう。

一ヶ月経過すればその翌日が結婚式になる。
その準備も周知も整っていないし、実際に万端の準備を整えるまでは、ルイはヒカルと寝室を共にすることもない。
それに、彼女を日本に戻そうとシャルルが動いている気配があったので、時期尚早だった。
それなのに、先ほどは、彼は彼女をこの部屋に引きずり込んで、彼女が想定していないことをして、シャルルの狂気を再び呼び覚まそうと考えていた。

まったく、それは意味のないことなのに。

用意された料理を変更し、人数分の器を揃え、そして自らの手で運び込んだのだ。
見れば、彼女の手の平は赤く腫れ上がっていた。
先ほどの疵に構わず水仕事をしてきたからだろう。
酷く痛むだろうと容易に予想できるほどに、痛々しく変色していた。

「・・・・食事はいらない、と言ったはずだが」
彼はしばらく押し黙った後、そう言った。
「ひとりより、ふたりの方が美味しいよ」
「そこに置いておけ。・・・はやく出て行け」
「いやだ」
「ヒカル」

彼は溜め息をついた。

そしてまだ濡れている金の髪をかき上げて、決してソファから立ち上がろうとしないヒカルを見下ろした。

「鬱陶しいと表現する以外の言葉がない。この邸からたたき出されたくなかったら自分から出て行け」
「いやだ」

ヒカルは強くそう言って、ルイを見つめ返した。
まっすぐな、強い意志を感じた。
どうしてあの人の娘は、同じように、臆せずルイを見つめるのだろうか。
先ほどまではあれほど弱々しく儚げであったのに、今は剛気さを表出させている。

「私、ルイの婚約者だよ・・・」
「それならオレの邪魔をするな」
「迷惑にならないようにする」

押し問答だった。
まったく理解できなかった。

ルイは呆れ果ててヒカルの顔をじっと眺めた。
シャルルの定めた運命の人の血を濃く受け継いだヒカルは、容易に人の禁域に踏み込む。
しかし踏み込みすぎた時の対処を知らない。
だから、ルイにはじき出された時にどうして良いのかわからずに途方に暮れる。
シャルルは自分の領域に彼女が踏み込みそうになると自分が引いて距離を保った。
ヒカルはその間の取り方を知らない。
ルイは、シャルルがヒカルにそうすることで彼女は・・・痛みを知らない者になっていると感じていた。

彼女はルイに言った。祈るような口調だった。
茶色の瞳が濡れたように光って、彼を射貫いた。何かを決断した者の視線は鋭くなる。
「私は・・・後悔しない」
彼女は言った。
「誰とも結婚しないと・・・いつまでもここに居たいと思っていた。
いつまでもいつまでもここで・・・あの海を見ていたいと思っていた。
私は私と同じ気持ちを味わわせたくないから、そう思っている限り、誰とも家族になれないと思った。でも」
そこで彼女は言葉を句切った。
声が詰まっていた。

感極まったヒカルは、少しだけ瞳を潤ませて、星辰の子に言った。
永遠の晄という名前を持つ人は、星辰の子に言った。
眼を反らさなかった。
ルイは視線を反らすことはしない。
彼女の話が終わるまで、彼は話を遮らない。そんな安堵感が彼女を自由にさせる。

これが、家族なのだ。

作るものではない。
できあがるものでもない。

けれども、臆せず、どんなに傷ついても彼の前でなら話をすることができた。
彼女の中の仄暗い欲望も、薄汚い願いも、何もかも。
ルイになら、言うことができた。

家族になろう、と彼女は言った。

でも、すでに・・・そんな言葉の定義に当てはまらない存在がここに居た。

■24

彼女は泣き笑いを浮かべた。
ヒカルは泣きそうな顔をしていたが、それでも微笑みを絶やさなかった。

彼女は自分のためには涙を流さない。

彼女は他者のために憐れみの涙を落とすことで自分を癒している。
ここには何もないから、誰が入っても何かに影響することはなかった。
けれども、ヒカルが入り込む事は赦さなかった。

彼がこの居間から何を見ているのか知ることができる唯一の人間だから。
彼がこの居間から薔薇園や本邸の灯りを見ていることを知ることができる人間だから。

だから、赦さない。
彼の内面に容易く入り込むヒカル・クロスにこれ以上近くに寄ることを許可することはできなかった。

「でも。・・・でも、ルイなら良いなと思った」
彼女がそう言ったので、ルイは黙ってそれを聞いた。
「ルイなら、良いなと思った」
彼女は繰り返した。

彼は言った。
「・・・シャルルは？」
ルイは誰かと比べることは決してしなかった。
ヒカルをあの人と重ねて見ることはしなかった。
ヒカルはどうだろうか。
ルイとシャルルのどちらでも良かったのではないのか。
彼女の存在を認める環境が整えば、彼女はどちらでも良いのではないのだろうか。

ヒカルは困ったように唇を歪めた。
「シャルルは、私を選ばない。私では駄目なの。・・・私だから駄目なの」

・・・そういうことか

彼は苦笑した。
シャルルからは得られないから。
だからルイにした、と。
彼女はそう言っているのだ。

どこまでも残酷な人だ。

彼は思った。
このまま、彼女を名実ともに、彼の妻にしてしまえば、彼女は救われるのだろうか。
ルイは安らぐのだろうか。
まだ少女と言っても足りる、あどけない表情を捨てきれないヒカルを、このまま・・・どこかに連れ去って・・・そしてヒカルがシャルルの名前を呼ばなくなるように、彼女を抱き続けたまま滅してしまえば、彼の痛みと疼きは消えるのだろうか。

「ルイ」
ヒカルが彼の名前を呼んだ。
「これが私のこたえで意味になるものよ。・・・・私は家族が欲しい。だから、ルイが欲しい」
「素直だね、ヒカル」
彼がそう言いながら、彼女の正面にゆっくりと腰を落とした。

「今日の君に免じて、同席を赦してやろう」
「ありがとう」
困ったように戸惑ったように、ヒカルがそう言ったので、彼は声を漏らして嗤った。

そして・・・目の前に座ったルイに、ヒカルは悲鳴を上げた。
「ルイ、血が出ている・・・」
「大したことはない」
彼はそう言って次に、血が滲んだ手の平を上に向けて、ヒカルに差し出した。
そして溜め息混じりに忠告する。

「ヒカル。・・・アルディ夫人となる者は、手に疵をつけるな。
人が最初に見るところは、身体の末端だ。
指先と、爪先と、髪の先を見る。
それで人の品性を推し量るという世界をヒカルは知っているのに、なぜそれに配慮しないのか理解できない」
「私には関係ないよ」
差し出した手に、彼女は腫れた方の手の平を乗せた。
テーブル越しに繋がれた手と手は・・・同じ疵を持っていた。
ごく自然に。ルイがそう言ったわけでも、命じられたわけでもないのに、ヒカルはルイの手の平に、自分の手の平を重ねた。

まだ瘡蓋さえできていない。
それなのに。重ねた手の平から、どんどん疵が癒されていくような感覚を覚えた。
これは彼女がもたらす奇蹟なのか。
いや、違う。
単にヒカルの体温が冷たいルイの手の平から伝わっているだけだった。
それだけなのに彼の痛みは引いていく。

「・・・ルイ」
彼女は彼の名前をそっと呼んだ。
何度も呼んだ名前であったが、それでもヒカルは彼の名前を大事にひとつひとつを発音した。
「ルイと私の理由は違う。でも、ルイなら良いなと思っていたから。だから私はルイとなら家族になれると思った。・・・家族になるならルイが良いと思っていた」
彼女はルイに残酷な言葉を囁き続けた。
それなのに、彼は彼女の手の平を振り解くことはしなかった。
ヒカル自身が彼の手に自らの掌を重ねたからだ。
奪うことしか彼は知らない。

けれども、彼女は彼にすべてを捧げるようなふりをして、彼から何もかも奪っていく。

ヒカルの言葉も体温も彼女のすべてがルイを限局する。

言葉を奪い彼女を遠ざけることを赦さない。
彼女の寄り添いを拒否することすら赦さない。

ヒカルはそっと腰を浮かべて、もう片方の手で彼の掌を包んだ。
大きなルイの掌を包みきれないヒカルの手は、ルイの白い滑らかな手の平の温度を吸い上げていく。代わりに、彼女は自分の温度を彼に与える。
重ねた掌に流れる、できたばかりの疵から互いの血が混じり合い、そして互いの掌から伝わって身体の中を巡れば良いのに。
彼は僅かに顔を曇らせた。
表情を厳しくし、唇を横に引いた。
端整な顔立ちに緊張が走った。

■25

彼が表情を厳しくしたのは・・・ヒカルが彼の隣に移動してきたからだ。
それは一瞬のことだった。
彼女はルイの掌を離そうとしなかった。

やがて彼の隣に座った彼女は、ルイの掌を包んだ。

「意味のないことはやめろ」
彼の口調は冷たかった。
けれども、ヒカルの手を振り払うことはしなかった。

ヒカルは彼の顔を再び見ると、静かに、けれども躊躇いや戸惑いのない口調で言った。
茶色の瞳を青灰色の瞳が絡み合った。

「私のapopheniaとルイのapopheniaは違う。
それはわかった。
でも、私とルイのapopheniaには意味があることにすることができると思うの」
「オレとヒカルの？」
彼は尋ねた。
ルイにわからないことはない。

それなのに、ヒカルに尋ね返した。
彼女は小さく頷いた。

「そう。私だけの理由。ルイだけの意味。
それは相手には意味のないことかもしれない。
自分だけに意味があることなのかもしれない。
でも。
・・・各々理由があるから、一緒に居る。婚約しようと承諾した。
・・・でも、私とルイがこうして自分の意志で一緒に居ることに対して意味がないとは思わない」
「だからそれに理由と動機付けするというのか？」
「そうだね」
ヒカルは肩を竦めた。
「私がわかるのはそこまで。そこから先はまだ、わからない。だから探すの。意味のないことから、意味ある規則を見つけるの」

「根拠のない楽観的すぎる希望はそれで終わりか？」
「そう。・・・次にルイの疵の手当をしないといけないから」
彼女はそう言って、微笑んだ。
「ほら、この行動にも、意味があることになった」
彼女はそう言ってそこでようやく片腕を彼から離すと、テーブルの傍に置いてあった籐でできたバスケットから応急処置のための清潔なガーゼを取り出した。
彼女が持ち込んだものだった。
そして彼の肩に乗るタオルが血で汚れている様を見るとヒカルは眉を顰めて、押し黙ったままのルイを窘めた。
「ルイ。・・・ルイはひとりしかいない。ルイの代わりは誰にもできない。だからもっと労って欲しい。少なくともルイは自分に優しくして」
「・・・いらぬ世話というものだよ。オレに構うな」
「構うよ」
彼女は笑った。

彼は溜め息をまたひとつ落とすと、自分の肩に乗るタオルを空いた方の掌で掴み、それをルイの掌にガーゼを押し当てならが拙い止血処置を施そうとしているヒカルの掌に無造作に置いた。
「シャルルもオレも医師資格を持っているというのに、ヒカルは少しも知識を習得しようとしない」
そして彼はヒカルの手から自分の掌を持ち上げると、今度は彼がガーゼを取り出して、細く長い指先で器用にヒカルの掌の傷を包んだ。

そしてそのタオルでヒカルの腫れた掌をそっと包んだ。
ほどよく湿り気があり、冷やされた感覚がする。
本来ならもっと清潔な生地で行うべきだが、彼女の腫れを取り除く方が先立った。
「ありがとう」
「ヒカルが怪我をしたら、責められるのはオレだ」
この家の当主は、ヒカルを溺愛するあまり、少しの怪我でも大変に神経質になった。
血を流すような怪我をすれば、当主はその疵が癒えるまで決してヒカルを外に出そうとしない。
それには別の意味も理由もあったが、それはまだ、ヒカルは知らない。
「治療室に行けば処置を受けられるだろう」
彼はそう言うと、ちらりと、目の前の晩餉に眼を遣った。

「呆れるね。手を怪我しているというのに、日本食に、加えて箸か」
「これならルイも手を伸ばしてくれると思ったから」
彼は普段から、気に入らない食事には手をつけなかった。
味覚が発達している彼は、少しでも自分の好まない味に気がつく。
それを理由として、その日に食事を摂らなくても彼は平然としていた。
それを知っているヒカルは、彼がどれに口をつけても口をつけなくても良いように様々な種類の品を詰めて、大急ぎでここに渡って来たようだ。
「ピクニックみたい」
彼女は嬉しそうに微笑んだ。
時折、シャルルはヒカルと一緒に私有地に出掛けて野外で食事を楽しんだりしているようだったが、ルイにはそういった愚趣に興じる趣味は持ち合わせていなかった。

「それじゃ駄目かな」
彼女はぽつりとそう言った。

「・・・食事をして、一緒に同じ景色を見て・・・同じ時間を過ごす。・・・家族の一番素敵なところは、すぐに仲直りができるところよ」
彼は嘲りの入った笑いを見せた。
青灰色の瞳を少し細めて、濡れた金の髪の下から、ヒカルを見つめた。

■26

「ルイ、ありがとう」
「礼を言われるようなことはしていないよ、ヒカル」
彼は素っ気なくそう言った。
無駄な時間だと思っていた。

しかしヒカルの手を包む彼の掌は、彼女から離れることはなかった。

理由がないのに。
意味がないのに。

それなのに、彼は彼女から離れることはしない。

自らに優しくなれと言うのに。
ヒカルはそれを実践しない。
自分でそうできない者に何を言われても、同じ事はできなかった。
彼女の父の気質が色濃く出ていた。

自己を滅して他者を優先する。
誰かのために涙を流し、心を痛ませる。

シャルルがこよなくヒカルを愛する意味が、そこにあった。
もし、ヒカルの父がカズヤ・クロスでなかったとしたら彼はヒカルを引き取っただろうか。
彼の親友であった男と、彼が運命の人と定めた女の娘であったから。
彼女は贖罪の娘と呼ばれることはなかったのかもしれない。
しかし成立しない憶測はしないことにしていた。
過去に遡って「もし」と考えることほど徒爾に終わる行為はない。
シャルルはヒカルを呼び寄せた。
これは事実だ。
そして覆すことはない。
始まりは、そこからではなかったはずなのだから。
そしてルイはシャルルの永遠の晄をこれから奪おうとしている。

同じ過程で生まれたのに、なぜこうも違うのだろうか。

彼の中では幾つもの疑問が湧き上がるが、同時に考えても意味のない事柄は排除されていく。

「ルイ、怒っているのなら、許して欲しい」
「ヒカルにオレが憤りを感じるほど価値があると思っているの？」
彼がそう言うと、ヒカルは少し哀しそうな顔をした。
「黙ってここにまた入ってしまったから」
「ヒカルにとって意味のあるものも、価値のあるものも何もないよ。ここには」
彼は溜め息をついた。禁じられた行為ほど魅惑的に移るものだ。

誰がここを訪れても、ルイ・ドゥ・アルディの痕跡はほとんどない。
彼がアルディ家に存在しないかのような気配というものが非常に希薄な空間は、彼が生きているという証を刻むものは、何もなかった。

しかし彼女はその言葉を否定した。
「ある」
「それならそれをくれてやるから、ヒカルはもうここに来るな」
その言葉を聞いて、彼女は少し恥ずかしそうに笑った。
欲しいものがあってもなかなか口にすることはしない娘だった。
それが他人の所有物であるなら、なおさらだった。
口にしないのに、彼女は欲しいと言わずして何もかも手に入れている。
シャルルの寵愛も、アルディ家の欲しいと望む体質も。

最初からそれを持っている者と、自己の力でそれをもぎ取った者と、どちらが優れているのか問われているかのようだった。
誰にだろうか。
誰に、問われているのだろうか。

彼女は少しの間、ルイを見つめていた。
美麗な顔立ちをしているものの冷たい視線しか返さない彼から視線を反らさない者は数少ない。
「・・・ここにはルイがいる」
彼は息を止めた。彼女に気付かれない程に僅かな呼吸の乱れだった。

「ここには、私の疵の手当をしてくれる人がいる。私が手当をしたいと思う人がいる。・・・だから何度も禁を破ってでも、ここに来る」

ルイの前髪から、ひとしずく、まだ彼の髪に宿ったままの余瀝が堕ちた。

ヒカルとルイの重なった掌に堕ちて、それはやがて消えた。
ヒカルはそれを見て、ルイの涙のようだと思った。
これほど美しい余滴を見たことがない。
彼は俯いていた。
濡れた前髪が彼の顔を隠していたので、視線の温度を推し量ることができない。
彼が怒っているのか歎いているのか、ヒカルにはわからなかった。
ただ、重ねた掌が僅かに細かく震えていた。細く長い指先が動いていた。
「ルイ・・・痛む？」
「少し黙って居てくれないか」
彼は短くそう言って溜め息をついた。

何かに深く思考を泳がせているようだった。
しかしそれはヒカルには理解できない。

彼女がまた近く、ルイに寄ったが彼は距離を開けようとはしなかった。
ルイの温度を近くに感じ、ヒカルは少し躊躇ったあとに、腰を少し上げて、彼の髪の上から、そっと・・・・そっと軽く、ルイのこめかみにキスをした。
どうしようもない衝動がヒカルを動かしていた。

彼の肩がぴくり、と動いたが彼は何も言わなかった。

そして次に、ヒカルは怪我をしていない方の手で、彼の引き締まった腕を軽く擦った。
こどもをあやす母のように。
年の近い者同士が交わす慰めの仕草のように。
ルイはそうされることを厭うことを知っていながら、ヒカルはそうして彼の温度を感じ、安堵する。

ルイは血も流れるし体温もある。
決して人形ではない。
だから、彼は何かを感じ何かに憤り、何かに哀しんでいる。
それを分かち合おうとすることは愚かしいが、その傍に居ることこそ・・・

何も意味がないけれど、そうして一緒に過ごすことこそ、大事なのだとヒカルは思った。
これはルイを慰撫しているのではなく、自分が・・・ヒカルが安心したための行為でしかないけれども。
ルイには意味がないけれど、ヒカルにはそれは意味があった。
人に触れられることを嫌うルイが、こうしてヒカルが傍に居ることを拒絶しない。
これに対して彼女はこたえを出した。

自分の選択によってルイを哀しませてはいけない。ルイを傷つけてはいけない。

彼女もまた、俯いて無言の時間を過ごした。
互いに重ねた両の手の平を見つめていた。

「・・・オレにも欲しいものがある」
やがて、ルイが掠れた声でそう言ったので、ヒカルは顔を上げた。

顔を上げればそこにはルイの冴えた冷ややかな瞳があった。
ヒカルを通してもっと遠くを見ているようだった。
彼ははっきりとした強い口調で言った。低く、けれども厳かに。

「誇りをかけてオレはそれを手に入れる。
どんなことがあってもだ。
・・・すべてを犠牲にしても、すべてを失ってもそれを必ず達成させる。
そのために・・・誰も残らなくても」
「ルイ・・・！」
ヒカルが叫び声を上げた。そして、彼の胸に飛び込んだ。

何を言っても彼には届かない。
彼はもう、決めてしまっていたから。
ルイの言葉がいつも少ないのは、一度口にすれば、それを必ず実行するからだ。
何年かかっても、生涯をかけても、彼は必ずそれを遂行する。
だからヒカルはその言葉を否定することもできなかったし、それを称賛することもできなかった。

そうして彼をつかまえておかないと、彼はどこかに消えてしまいそうな予感がしたからだ。
彼は、決してヒカルに優しくしない。誰にもだ。
ルイには、シャルルのような温かさはない。
けれども、ルイは優しい。
彼女を徹底的に拒絶するが、無視はしない。
彼がヒカルと婚約することによって、シャルルが苦しめば良いとルイは言ったが、彼の本当の目的はそれではないのかもしれない、と思っていた。
けれども彼はそれを明かさない。

「そうやってオレを束縛するの？」
彼が冷ややかにそう言ったので、ヒカルは彼の背中に手を回して、首を振った。
「違う。・・・・なんだか、こうしていないとルイが消えてしまいそうだった」
「抽象的過ぎる」
ルイが嘲笑した。彼女の言わんとすることは理解できたが、それに賛同するつもりはない。
彼はゆっくりと彼女から離れると、彼女と少し距離を置いた。
掌の出血はすでに止まっていた。
彼はガーゼをゆっくりと剥がすと、今度は腕を伸ばして彼女の手の平のガーゼを取り除き、そして手早く応急処置をした。
彼女の掌はルイによって白い包帯が巻かれた。彼自身は、止血された傷口の上から、無色透明の

ナノテープを貼っただけだった。
血で汚れたタオルとガーゼをひとまとめにすると、彼は狙いを定めて、部屋の隅の小さなテーブルの上に放り投げた。
湿気を吸って重くなったことも計算に入れた遠投は、見事に計算通りに弧を描いてその場所に辿り着いた。

彼女の持ち込んだ医療道具だけではその程度しかできなかった。
彼女の手に跡が残るような瑕をつければ、シャルルが激昂するのは目に見えて想定できた。
「ヒカル。オレはヒカルの余興に付き合うつもりはない。さっさと医療室に行き、手当を受けて来い」
「でも・・・・」
彼は首を横に振った。
「食事はそれからだ」
その言葉を聞いて、彼女は破顔した。
ルイが戻ってきて良い、と言ったのだ。
すぐ戻るから、と彼女はそれだけ言うと、あっという間に部屋を出て行ってしまった。
居間を出る時、彼女は足を止めて、立ったままのルイに振り返った。
「ルイ。ありがとう」
「行けよ」
彼女は嬉しそうに笑って、はい、と頷き、そして彼の別棟を後にした。
静かな別棟は防音処置が随所に施されている。それでも、ヒカルの遠退く足音が聞こえて来そうだった。

彼は眉を寄せて、大きく吐息をついた。
腕を組み、そして窓際に移動すると、渡り廊下を走るヒカルの影が見えなくなるまで見つめていた。

彼女は贖罪の娘だ。
何について購うのか、彼女はまだ知らない。

そして、ヒカルが強く望んだことではないが、この婚約が双方にとって無意味ではないということを、これで知ったはずだった。

当分・・・婚約を解消したいとは言わないはずだ。少なくとも、今だけは。

彼は背中や腕に残るヒカルの温度を感じていた。

彼女の意味のないことに、彼が意味を添える。
彼女には意味があることを、彼が奪い去る。
apophenia、とはそういうことなのだ。
ヒカルの言うような、ふたりで意味のあることを探すという意味ではない。
意味がない不規則な情報から規則性を見いだすことであるが、本当の意味を彼女は知らない。
心理的な錯覚なのか、それとも無知による考えが及ばないだけなのか・・・
どちらでも良かった。
ルイはヒカルを手放すつもりはない。
決して。
彼の誇りにかけて。

まだ、始まったばかりだ。

彼は顔を引き締めて厳しい表情になった。
極めて険しい顔になり、別棟から見える本邸の灯りを強く睨み据えた。

長い時間を待った。
長い時間を過ごした。
しかしそれらは無駄ではない。

・・・これからそれを証明する。

彼は部屋着のポケットから薄い携帯電話を取り出した。
電源を入れて、暗証番号を入力する。
銀の薄い端末には何も情報は入っていないが、これからする会話は盗聴されると面倒な件だった。
パスコードを更に加えると、暗号通信用の電波に切り替わる旨のメッセージが出て、それから彼は記憶している番号を入力した。

8度目のコールでようやく相手は出た。受話器の向こうで、低いバリトンが響く。
互いに名乗らなくても誰と通話しているのか判っているので、彼はいきなり要件のみを切り出した。そして投げ出されたタオルと使用済みのガーゼにちらりと眼を遣った。
彼の血液も細胞サンプルも登録済みなので、それを除外したものがヒカルのものだった。

「・・・・ヒカル・クロスの細胞と血液が手に入った。急ぎ処理してくれ」
通話相手は思わぬ収穫だとルイに言ったが彼は冷笑した。
「オレに偶然というものは存在しない」
それなら必然か？と相手は嗤った。

「それも不適切。・・・apopheniaだよ、ミシェル」
彼は嗤った。
受話器の向こう側で、ルイと良く似た人物も同じように冷たい微笑みを浮かべていることだろう。
意味がないことを意味があることにする。
これが、オレのapopheniaだよ、ヒカル。

彼は受話器の電源を落とし、そしてクリスタルのテーブルの上に投げた。
硬質の音がして、滑らかなテーブルの上を滑っていくと、それは途中でその動きを止めた。
かちんと固い音がして、ヒカルの持ち込んだ食器に当たった。

アルディ家から至急される端末とほぼ同じ形状で、電源を切る度にパスワードを変更するので、誰が使ってもわからない設計になっていた。

彼は美しく飾られた食器を眺めながら、冷笑した。
食事を共にし、長い時間を過ごしてなお・・・家族になれない者は、どうしたら家族を創ることが出来るのだろうね。
彼には教育係が居ることをヒカルは失念している。
どれほど長い時間接していたとしても、今し方の通話相手のように家族と呼ぶには遠い存在の者と過ごしてきたルイには、ヒカルの望む家族の役割を果たすことはないだろう。

地獄の業火に灼かれれば良いのに、と思うのに。
彼女を手に入れるために何を犠牲にしても良いと誓う。
それらは矛盾しない。
少なくとも彼の中では。

彼は深く思考の波にまた沈もうとしていた。

遠くで、また姦しい足音が響いて来た。それはどんどんこちらに近づいて来る。
彼は星辰の子と呼ばれている。
それなのに、永遠の晄は離れたり近付いたりして彼の法則に従わない。

かつて、ヒカルの母のことをシャルルは「ファム・ファタル」と呼んだ。
ルイ・ドゥ・アルディは、ヒカルこそが彼のapopheniaだと考えている。
矛盾したり意味のないことを重ねていく。しかしそれは予定されていたことなのだ。
この出会いも、こうなることすら、彼の中では完成された事象であり、決して偶然などではない。

彼と彼女は違っていた。

生まれた意味が違う。
生きていく意味が違う。

同じ過程で生まれたのに。
同じ過程で生まれたから。

だから、一度別れた星と晄は・・・・また、交わる。それだけだ。

彼女が別棟を出て行った時に、今一度ここに入れないように施錠することもできたのに。
ルイ・ドゥ・アルディは敢えて、そうしなかった。
ここでヒカルを締め出せば彼女は不審に思う。
彼女の遺した大きな研究材料を引き渡すために誰かがやって来るまで、ルイ・ドゥ・アルディはヒカルの飯事遊びに付き合わなければならない。

しかしこうして窓辺で彼女の姿が見えるまで待つ必要はないのに。
彼は彼女の姿を探し、視線を彷徨わせる。
なぜなのだろうか。
なぜ、彼女の姿を探すのだろうか。

手ひどく彼女を痛めつけたのに、それでもヒカルはルイにいつも通りに接する。
あの無神経さは母親譲りなのだろうな、と思い、ひとり微笑んだ。
ひとりで微笑むことには意味がないのに。

それでも・・・彼は彼女の姿を待っていた。

しかし同時に、彼はアルディ家当主を滅さなければ、自分を滅ぼすことはしないと思った。

ヒカル・クロスが渡り廊下をこちらに向かって走って戻ってくる足音が近くなるにつれて、ルイはまたひとり、顔を綻ばせた。

彼女が寄り添う場所はフランスの華の傍らではない。
オレに・・・ルイ・ドゥ・アルディに寄れ、ヒカル。

彼女の落としたこめかみへのキスが思い起こされた。
彼女が自ら落とす口吻は非常に稚拙だった。

しかし彼が欲しいのはそんなキスではない。

彼女はまた両手一杯に何かを抱えてやって来ていた。
彼は玄関の間まで足を運ぶことにする。
あれでは認証コードを入れることも、IDチップシールをセンサーにかざすこともできないだろう。
どこまでも手がかかる人だ。
彼はまた、溜め息を漏らし、渇きかけた見事な金の髪をかき上げた。

シャワーを浴びた男の居棟に足を運ぶという意味を彼女は理解していない。
しかしルイ・ドゥ・アルディはすでに彼の中で幾手も先を考え始めていた。

彼は居間から出ながら、次の手はどうやって始めようかと考えたが、その思考はヒカル・クロスの開扉を求めるノック音で中断させられたので、途端に不機嫌になった。

それはいつもヒカル・クロスに見せる、ルイ・ドゥ・アルディの表情だった。

（FIN）

mimosa　前編

Champagne à l'orange
#mimosa　前編

太陽の光を受けて、円い光は無数の環を地面に散らせている。そして風に乗った僅かに甘いミモザの香りが木漏れ日を揺らせていた。

朝方の風は日中に比べて少し冷えていたが、日差しは心地好く、遠くで鳥が誇らしげに唄っていた。綺麗に掃き清められた真白の石畳ではあったが、微風に誘われたかのように小さくて可憐な花が散っている。

空は、一面の黄金色であった。

重みを受けて枝が微風で揺れるほど咲き誇っている色彩に、ヒカルは目を細めた。
謂はぬ色、という言葉はこんな色に使うのかもしれない、と思った。黄が強いが確かに声が出ない程に美しい。
故郷である日本には、多くの色の名前があるのだということはヒカルの細やかな心の拠り所であった。彼女の母は絵を描く人で、彼女は幼い頃のことすら忘れてしまっているが美しいものに対して大変に敏感な人であったのだと教えられていた。そのことに納得するのは覚えていなくても実際に自分も教えられた、母からの贈り物数少ないのひとつだと肯定できるからだ。

彼女は額に少し汗を浮かべながら、光の中を歩くルイ・ドゥ・アルディの背中を見つけた時、ほっと息を漏らした。そして次に内に湧き上がる羞恥に気付き、首筋に熱を感じた。彼を見失って、探して随分と時間が経過する。その時には気が付かなかった周囲の様子に、彼の背中を見た途端に素晴らしいと感嘆する安易さとさもしさを認識したからだ。

緑と金の景色の中を、ルイ・ドゥ・アルディが歩いている。見間違うはずはなかった。彼の背筋は伸びていて腰は小さく全身は引き締まっている。これからまだ伸びるであろう勢いが彼を華奢に見せているが、ルイは乗馬とフェンシングだけではなく多くの武芸に秀でていた。それが気品だけではなく静寂が彼を包んでいる理由だ。ルイはアルディ家の嫡男で、あらゆる教育を吸収し星辰の子と呼ばれている人はたったひとりで歩いていた。
人が通らない時間であった。朝が到着したばかりの時間帯で、祭りのために設けられた路は先ほど清掃を終えて人が引き揚げており、通行可能となる直前のことだった。そうでもしなければ彼の容姿は酷く目立ってひとりで歩くのは困難であったに違いない。

ミモザの祭りはもう少し先であったが、暖冬のためにひと足はやく盛りを迎えていた。ふたりは

アルディ家の当主であるルイの父に連れられてミモザの杜の近くに宿泊していた。この地方にあるアルディ家が所有する動産・不動産の確認だとか医学業界の知人への挨拶だとか理由を告げられたが、ヒカルはルイとともに出かけることができるという嬉しさですべてを聞き流してしまっていた。ルイが同行することは数えるくらいしか経験していない。浮かれているな、と自分でも思うがルイはまったくといって良いほどに無表情で無反応だった。

ヒカルはルイへの呼び掛けを躊躇う。彼女の茶色の瞳はミモザの葉と同じ様に揺れていた。だが、地面に注がれている光の輪や石畳の白さ、撓わに揺れる黄金の花に垣間見える葉を通り越して受ける陽が、眩しかった。たったひとりで歩いて行くルイはとても静かで、そして星々だけではなく太陽さえも彼を祝福していると思った。

だが、彼女はその機会を逃してしまう。
彼は立ち止まったかと思うと、木々を見上げるように金髪を揺らした。
美しい彼を正面から見たのなら、きっと全神経を注いでしまうだろう。ルイはすべてが完璧だった。彼と長い時間を過ごしたり、親しく会話することがあまりないから故に感じる想いかもしれない。

「いい加減、下手な尾行は放棄しろ」
彼の声が響いて、ヒカルは我に返る。足元にあった視線で引き戻された。少し離れた場所でも、ルイの視線はすぐにわかる。青と灰の混じった瞳がヒカルを見ていた。
「探していたの」
ヒカルは歩きながら、平静を装う。胸が高鳴り、どうしてこれほど緊張するのかわからなかった。
毎朝、最高の状態の薔薇をシャルルとルイに届けるための早起きが習慣となっていた。それは出先でも変わらずに存在して、遅くに戻って休んでいるシャルルやルイに花を届けようとミモザの杜へ行こうとした時に遠くを歩くルイを見かけたのだ。追いつこうとしてルイを見失い、そして再び彼を見つけたヒカルの気配について彼はどの時点で気が付いていたのだろう。
「邪魔をして、ごめんなさい」
彼女は謝罪する。
「日本人は好きだな、そういうの」
ルイは彼女に背中を向けたまま、そう言う。だが、彼女は嬉しさで唇を噛みしめる。彼は彼女を、フランス人と認めていない。父はフランス人と日本人のハーフであるから、ヒカルはクォーターだ。長くフランスで過ごしてきて、それでも、彼女が忘れていない父母の国の心をルイが認めてくれているような気持ちに満たされる。日本人にもなれない。フランス人にもなりきれない。そんな鬱屈とした思いは、誰にも離すことができなかった。彼女は余りにも恵まれている。そう思うからだ。
思うままに本を読むことができて、どんな習い事も希望すれば拒否されない。こうして旅行に連

れて行ってもらえるし、日本に住む縁者と面会することも容易に実現する。だから、ルイに媚びていると思われても。彼女は、距離の保ち方がわからないままにルイを追いかけている。迷惑と思われても、彼はもうひとりの自分だと思うのだ。

なぜなら。
彼にも、彼女にも、母親は存在しないから。
ルイの母親とされている人は確かに存命だ。けれども、
彼が親しく行き来しているかと言えば、そうではなかった。

母に包まれた温かさを知らないままに、ふたりは年月を重ねていた。
それはそれぞれに違っているのかもしれない。確認したことがないから、ヒカルにはわからない。けれども、分かち合いたいのだ。彼の孤独を。

「ルイを、見かけたから」
ヒカルはそれだけ言うと、小走りに彼に向かって歩みを進める。偶然を装うには彼は聡すぎたし、ヒカルは正直すぎた。彼女はすぐさま言い直す。
「本当は、ルイを探していた」
彼はその時に、ようやく横顔を見せた。高い鼻梁、彫刻の天使のような完璧な曲線を持つ顎から頬の線に、影を引き入れる長い睫。美しい黄金の髪の下にある造作はすべてにおいて藝術の域にある存在だった。彼は、何もかもを遵える。そう、この孤独さえも。

だが、彼は言った。
「薔薇はここにはない」
それでヒカルの心は大きく揺さぶられた。だが、逃げ出すことはしない。彼は、自分を起きかける理由はないのではないのか、とヒカルを解放しようとしていると知ったから。最高の状態の薔薇は、アルディ家ではないから存在しない。ルイを気遣う理由もない。ヒカルはそうではない、と言いたかった。だが、言葉にすれば消えてしまいそうだと思ったのだ。
何もかもに浮き立つ時期であったが、それでもルイの憂いは消散することはない。彼はだから朝に向かって外に出たのだ。彼に捧げられる薔薇はここに存在しない。それでも、彼は漫ろ歩く。朝に誰も花を持ってやって来ない瞬間という可能性を知っているから。
ヒカルが随行しても、ルイはいつものままだった。星が消える時間に、星辰の子は太陽に向かい歩く。

「ここでは薔薇ではなく、ミモザの花が、騒いでいるから」
ヒカルはそれだけ言うと、踵に力を入れてルイの元に近付く。彼は彼女を横目で見ると、何もなかったかのように歩き出した。
陽の光が強くなっていくと感じる。朝は終わり、やがて人の往来を許可する場面に切り替わる。

その隙間をルイは味わっているのだと思うと、彼女がその瞬間に立ち会って良いのかと思ってしまうが、だが、それでも彼を追いかけた。
彼女はルイの少し後ろに立つ。彼が迷惑がっているのは明白だ。全身で拒絶している。パリでは彼は常に人に囲まれているから、この場所で息抜きしたいと思っていたのならヒカルは大変に迷惑な存在であった。だが、ミモザ達が金の光で彼を包んでいる様を見て、胸が苦しくなってしまった。
立ち並ぶとさらにはっきりと自覚する。彼はヒカルと何もかもが違っていた。さらさらと風に流れる金の髪がとても眩しい。白皙の横顔は天使のように静謐と荘厳を遵え、長い睫が彼の美しい頬に影を落としている。何より人目を引くのは彼の青灰色の知性溢れる瞳だった。シャルルや教育係のミシェルと同じ色で、アルディ家の者であるための証になった。朝焼けの果てにやってくる、晴天の兆しの空色だ。

彼は嗤った。
「確かに殷賑だな」

それは、ヒカルそのものだと言っているのだとルイに断言されているようで、彼女は俯く。誰も見ていないと思って雑に整えた鬢が頬に降りかかっていた。ルイは朝早くでも隙のない様子であったというのに。久方ぶりのルイとシャルルとの遠出であったけれども、彼女はそれが怖かった。自分は、家族として寄生しているだけではないのか、という懸念が消えて無くなることはない。

アルディ家は薔薇の精霊の末裔と言われているが、すべての花を遵えているように思える。ルイはその中で生まれた奇跡のような存在だ。遺伝子操作されていたとしても、彼は望まれて生まれた命なのだ。だが、それを彼は認めていない。
「ルイのような、綺麗な金色ね」
ヒカルは努めて明るくそう告げた。虚言ではない。本当にそう思う。
だが、美しいのに、悲哀を秘めていて孤独な色であった。ルイは光の中を歩いているのに、彼に纏うものは彼そのものであった。

mimosa　中編

Champagne à l'orange
#mimosa　中編
彼女が何を言っても彼には世辞にしか聞こえないのか、賛美は聞き飽きているのか。彼は何も言わなかった。それでも、ヒカルは心底思うのだ。アルディ家の者は皆、薔薇の精霊なのだと否定する理由などは存在しなかった。造作が美しいだけではない。誇り高く、美に対して理解があり、駆け引きが上手く人の上に立つには充分すぎる資質を備えている。教育や環境によるものも大きいが、ルイが人知れず努力しているからこそなのではないのか、とヒカルは思うのだ。そのような姿を彼女に見せたことはなかった彼ではあるが。
何もかもが自分の思い通りにならから嫉んでいるとルイに思われるのが哀しかった。ただ、彼女は強くなりたいと思っていたいのだ。傲慢で浅ましい願いを持っている自分は、ルイ・ドゥ・アルディとは何と違う生き物なのだろう、と考える。だが、ヒカルはアルディ家に仮住まいする者であっても、家族そのものではないのだ。最近、特に感じている瞬間が積もってきている。
「言いたいことが終わったのなら、帰れ」
彼はふと横を向いた。ヒカルの気配が消えるのを待っているかのようだ。だが、彼女はルイに近付いて彼を見失わないように存在を確認する。
相手の存在を消してしまいたいと思っているルイと、相手の存在を失いたくないと思っているヒカルは、まったく逆の存在だ。
それでも、彼女はミモザ色の日差しを迷いもなく歩くルイを置いていくことはできなかった。
「路に迷ったの。だから独りでは帰れない」
ヒカルが言う。すると、ルイは一瞬歩みを止めて、ヒカルを振り返った。
彼の背中に光が射し込み、逆光となって表情はわからなかった。輝く金の髪が煌めいていて、それはヒカルが決して持ち得ない憬れの彩であった。どれほどアルディ家のしきたりや歴史を学んでも、彼女はアルディ家のこどもにはなれない。
「ここの通りはひとつしかない」
一本道で、彼女は遙か向こうに見える路の向こう側からやって来た。どこにも迷うような分岐はない。ルイはヒカルの咄嗟の話に呆れていた。彼は最初からわかっていた。星辰の子は、彼に寄せられる美しい虚声を知っている。だが、それらを彼はまったく信じていない。

ここに咲く花をルイが朝早くから眺めるために出歩くのはなぜなのか。彼女はそれが知りたくて、声をかける前にしばし躊躇ってしまったのは事実だった。
「ひとりでは、帰れない」
ヒカルは再び呟く。
それほど年齢が離れているわけではないのに、なぜ、彼はこれほどまでに老成して達観してしまったのだろう。それが悪いことではない。ヒカルは自分がとても幼くて言葉が足りなくて、何もかもが遠く及ばないと思うばかりだ。だが、同じにはなれない。ルイとヒカルは違う生命だから

。それを承知しているのに、彼について行きたくなる。

彼は、星辰の子だ。

皆に傅かれて、すべてを引き寄せる。青と灰の混じった瞳でヒカルを見据える彼は、やがて彼女から目を逸らした。
「勝手にしろ」
ルイはヒカルは強情だと知っている。だから無駄な諍いはしない。何とも生真面目な彼の考え方だった。しかし、彼の内には激しい感情が備わっている。
同時に、ヒカルはそれを聞いて苦しくなる。
彼が決めるのではなく、彼女が決めろと言われたから。
彼は彼女の判断に介在しないと宣言されたから。
ただ、ひたすらに苦しくなる。
「綺麗ね。本当に、綺麗」
彼女は無邪気を装う。彼の発言は、ヒカルの行動はヒカルが決めることなのだと告げられたから。
言葉が足りないとわかっていた。最初から、彼を満たす言葉などは存在しないと理解していた。だが彼女はそれでも彼に語りかける。
いつもの彼なら、彼女の話にはまったく無視するところであるが、今は違った。ルイは彼女の顔をじっと見つめていることに気が付いたヒカルは、目が合って驚く。柔らかな金の光の中で彼の気配が近くに在って、ヒカルは声を失う。彼は、特別だ。そう思ってしまう。誰もがまだ活動を始めたばかりの時間にあって、彼はすでに覚醒していた。寝ていないのだろうか。退廃的な雰囲気があり、ルイは孤独という光に向かって歩いているのかと思うとヒカルは自分の至らなさを痛切に感じる。何もできない。何も伝わらない。何もかもが、彼に寄り添うことができない。だが、彼女は諦めなかった。彼が本当に考えていることが知りたい。
夜明けと夜更けの瞳と、昼中の髪を持ったルイはヒカルの感嘆を無視した。
「黙って歩くこともできないのか」
彼女は僅かに俯く。彼の言葉は反論できない強さがあった。ヒカルは茶色の瞳を瞬かせる。彼女の見ている景色と、ルイのそれは違っているのだろう。だが、それを比べることはできない。
そして、彼女はルイがこれほど早い時間に陽光の中を歩く理由を考える。ここは外出先であるから、ヒカルは朝一番で採れた薔薇を届けることができなかった。だから、ミモザを花束にできないかと思って起き出してきた路でルイに出会ったのだ。目が醒めて、視界に入る最初の色がルイと同じ金の彩りが似付かわしいと思ったのだ。それよりも前に彼が目覚めているとは予想していなかった。
だから、疑問に思った。
「ルイはいつもこれほど早起きなの？」
朝の風は爽やかであるが、僅かに冷気を持っている。まるでルイのようだ。捉えどころがなく、

それでも存在を隠すことはない。
永く一緒に暮らしているのに、彼の活動時間を知らないとヒカルは自分で認めることになり、顔を赤らめた。彼の生活を乱すつもりはなかった。だから、ヒカルは静かに後ろを歩いて行こうと思ったのだ。でも、ルイは気が付いた。気付いていてくれた。
すると、彼は彼女を一瞥して、短く呼吸する。ヒカルが薔薇を届ける時間よりも早い時間に彼が目覚めていたのだとしたら。そんな疑問が湧き上がる。ミモザの晄がヒカル・クロスに大胆な仮説を思い起こさせている。
彼は、待っているのではないのだろうか。朝一番に、花を届ける人のことを。それはヒカルではなく、アルディ家の奥深くに住まうあの人を待っているのではないのだろうか。
「待っているの？」
「誰も」
無視しているはずの彼が、彼女に答えた。
「ルイが待っている人は誰？」
彼はただ冷笑する。柔らかく白い朝の空気がルイを囲んで美しく輝いていた。
「オレは誰も待たない」
「それなら、私が待ちたい」
ヒカルの懇願に、ルイは呆れたように一瞬沈黙する。わかっているのだ。
彼が待っているのはヒカルではない。父と母による溺れるほどに深い愛、というものを知らないルイは誰も待たないと言う。
それでも、彼がこの時間に起きて漫ろ歩く理由を理解したいとヒカルは思うのだ。空に勢いよく伸びて泣きたくなるほど鮮やかな、迫り来る黄金色の息吹が目の前にあった。その景色の中にルイが溶け込んで、消え入ってしまいそうでヒカルはとても不安になるのだ。
「傲慢なヒカル」
ルイは酷薄さを剝き出しにして嗤う。彼女に関して、彼は感心したり願いを聞き入れたりすることはない。アルディ家の継嗣として必要な時だけ、皆が見ている時に限り彼女に声をかける。
「待ち人などは必要ない」
心なしか、その声は掠れていた。ヒカルのことを疎ましいと思っているのはわかっていたが、やはり面と向かって拒絶されることにはいつまでも慣れない。だが、落ち込んでいたり畏縮してしまっては声をかけられないと思っていた。吸い込むだけは駄目だ。駄目なのだ。彼女は己を

mimosa　後編

Champagne à l'orange
#mimosa　後編

柔らかく甘い香りが風に乗ってふたりの間をすり抜けて行く。
ヒカルは、彼の姿を目に焼きつける。あと何度、ヒカルしか知らない彼の姿を目に焼きつけて記憶できるのだろう。彼女もいつかは忘れてしまうのだろうか。ルイ・ドゥ・アルディという、奇蹟のような人のことを。それは否、と言うしかなかった。彼女は忘れたくない。先ほど見た、無垢な陽光と混ざり合った彼の姿がどうにも愛おしい。そして今一度思う。ルイ・ドゥ・アルディの姿を黄金の朝に染み込ませているのは自分自身なのだ、と。
彼女は晄の杜の中でルイに手を伸ばす。
「触るな」
厳しい声が伝わってきて、ヒカルはひりつくような緊張を頬に浮かべた。朝の光は徐々に強いものになってきていた。間もなく、ふたりだけしか存在しない路の存在は消えていく。予感ではなく、すぐに訪れる未来であった。
「こんなに朝早く、ルイに会えた」
ヒカルは微笑む。彼女は本当は、最高の状態の花を探しに来たのに、捧げる相手に出会った。シャルルとルイはまだ部屋から出てこないと思っていた矢先の僥倖であった。それを、ヒカルは表したかった。
「自分の感情だけが最優先か」
ルイは冷たく言い、肩を回して先に進もうとする。だが、本当は彼は優しい。突き放す素振りを見せても、彼はヒカルをひとりにしておくような教育は受けていない。彼の心に響く話はヒカルは紡ぎ出すことにはできないのだろうか。

アルディ家の庭のように、年中採取できる花があるわけではない。彼と出かけることが嬉しくて、考えていなかった朝の習慣を今、思い付いた。
「滞在中、ルイに届ける花はミモザにする」
そう言った瞬間、彼は切れ長の瞳を僅かに大きくした。
「断る」
「ここには薔薇がない」
「必要ない」
朝にその時期に咲く最高の状態の薔薇を届けるのは、ルイの求めに応じて捧げているものではなかった。ヒカルが望んでそうしているだけである。
「綺麗な花だわ。ルイの髪の色に似ている。私はあの花が好きになってしまった」
ヒカルは言う。薔薇とは少しも似ていないまったく違う花であるが、清かで甘い香りを伴い、小振りの花は黄金に染まっていて、ヒカルはひと目で愛おしくなってしまった。小さい花々が集ま

って大きな杜を作る。それは、アルディ家を背負うルイにも似ていないものの、何かを感じる。こういう時には、誰に相談すれば良いのだろうか。彼女は、それすらわからなかった。ヒカルは込み上げてくる感情を処理できずにいた。湧き上がる感覚を、誰かにつたえる術を知らなかった。
「薔薇ではないけれども、ここの花はとても綺麗だから」
「ヒカル」
彼は、立ち止まって彼女の名前を呼んだ。長く一緒に居るというのに、彼は少しも変わっていなかった。
「オレは必要ない、と言った。二度も言わせるな」
彼の閉ざされた心はヒカルに向かって開くことはないのだと再度告知されたような気がした。しかし、彼女はそれでも諦めなかった。諦めたくなかったからだ。理由は簡単ではあるが伝えるのは難しい。とても難しいが、できないと歎かず、ルイに向かっていたい。
「受け取ってもらえなくても良いの。私は、ルイにミモザの花を捧げる」
その瞬間のことだった。ルイがさっと彼女に振り返ったのだ。彼女は言葉を走らせた。彼に届くように。届くうちに。

「私が、そうしたい。私の好きな花をルイに届けたい」

彼の瞳の中に、風が、吹いた。
そして彼女はその風を追いかけた。それほどまでに、彼をずっと見つめていたから。星辰の子と呼ばれる人の心を知りたい、と思う。ただそれだけのことなのに、ヒカルは必死になって追い求めている。
これ以上、ルイはヒカルを傷つけない。だが、ヒカルはその先に行き着きたい。ルイは黄金の花々の下で何を感じたのか知りたかった。

その時。夜明けから朝になり昼に変化する風が吹いた。ミモザの花々が向きを変える瞬間だ。朝が終わった瞬間のことだった。ルイは、その風の中に髪を揺らしていた。青と灰の瞳をヒカルに向けて、彼女の左腕を掴んだ。解けない謎を見つけたかのように。彼は、ヒカルを絡め取る。
瑞々しい肌に若さを表すしなやかな金色の髪。そして、シャルルにもミシェルにもジルにも似ている懐かしい青灰色の瞳。彼は、過去と未来の色を持っている。そして、今、呼吸する瞬間のミモザが広がる朝の開花の合間にヒカルはルイと時間を共有している。
「意味がわかっているのか」
真摯な眼差しだった。これまでは、彼女を冷たく突き放すような視線でしかなかったのに。
何が、彼を動かしたのか。
それすらヒカルは理解していない。
だが、言葉を創る。彼に聞いてもらえるうちに。たどたどしい話はルイには届かない。だが、言葉の一片だけでも。彼に、少しだけでも、ヒカルが伝えられれば。そう思うのだ。彼の世界は彼

女には見えない。でも、今、見えている素晴らしい景色をルイと共有できている。泣き出しそうなほどに美しい金の世界が広がっている。空には、飛び込んでしまいたいほどに澄んだ薄い蒼色がどこまでも伸びている。
生きているという歓びと感謝をルイに捧げたい。そう思ったのだ。
「ただ、私は」
そこまで言うと、彼は彼女にふっと細く長い指先を伸ばしたので、彼女は立ち止まって体を震わせる。自分の何が、彼を動かしているのかまったくわかっていなかった。そして彼女が彼を動かしているかさえ、定かではない。彼の顔が近くにあって、今度はヒカルが戸惑いの表情を浮かべる。
「ルイと一緒にいるのが、好きだから」
小さいながらも溢れるように命の息吹を空に放つ花がどうにも愛おしかった。懐かしい、という気持ちにも似ている。この瞬間はきっと忘れられないのだろうと確信する。
いつものルイ・ドゥ・アルディであったのなら、情感的な発言は聞き流す。でも、今回は違っていた。彼女の声は、彼に届いていたのだろうか。
これほど、傍にいるのに全く届かない声であると思っていた。
自分の声は、毎日射し込む陽光のように彼を通り過ぎて行くのだと思っていた。
留まることを知らない、可視光線。それが彼女を照らして言葉を奪っていく。
「私は、この生活がずっと続いて欲しいと思っている。だから、捧げられる花の中でも今朝はミモザをルイに」
彼女の中にある思いは決して明るいものばかりではない。陽気で豁達で何もかもが好転する材料だとは思えない。彼女の母親とは違う。ふと思ってしまった昏い影を吹き払うように、明るい色彩が彼らの周囲を包んでいる。

すると、彼はふっと僅かに俯いて美しい視線を下げながら言った。
「嫌だ」
ヒカルは萎れた花弁のように哀しさを溢れさせるように目を瞬かせた。わかっているのに口にしてしまう。それはヒカルが反省するべき反応であるがルイがこれほど迄に拒絶するとは思わなかったのも事実だった。彼女は驚いて、彼の顔を覗き込んだ。ふたりの目線の差は開く一方で少しも近付くことはない。これからルイはもっと身長が伸びて更に近寄りがたい存在になっていく。
「薔薇は、ここにはない。市場に行けばあるかもしれないから、今から行ってくる」
彼女は、ルイが発した言葉に揺れながらも次の行動を決める。単独の遠出は禁じられているが、口に出てしまった考えは止められなかった。そうだ。朝の市には、新鮮な花も売っている。道順はわからないけれども、どうにか辿り着くまで諦めずに進んでみよう。そう思う前に、咄嗟に、そう言ってしまったのだ。自分でも戸惑いを覚えながら、彼女は目元に熱を感じながら言い募る。
「少し時間がかかるかもしれないけれども、待っていて」
「ヒカル、言葉を選ぶように」

彼の声は、絞り出すような切なさを孕んでいた。しかし、彼女には理由がわからない。ルイは誰かに忠告することなどは決してなかったが、今はヒカルを諫めていた。ルイを待たせるなどは他の者には考えられない。
「オレは待たないからな」
いつになく幼い口調のルイは、それでもまだ少年なのだ。少女のヒカルが気がついていないだけで。そうして彼はミモザの空を見上げた。色素の薄い瞳の彼は、やや目を細める。彼の姿はあまりにも美しくて、あまりにも切なくて、ヒカル・クロスは何度も瞬きを繰り返す。空からやってくる点滅なのか、ルイの美事な金髪が煌めいているのか見極められない。
眩しい命達がここに集っている。
ルイに集まっている。
それだけは確かに感じる。
「待っていて」
「イヤだ」
彼ははっきりとノンと言った。シャルルから叱責されるような面倒事はすべて会費しようとするのに、彼は拒絶を見せた。
「お願い」
甘えていたのかもしれない。ヒカルの未熟さ故の拙い願いは、ルイに届いていたと思うと頬が上気して声が震えてくる。そして、彼が反応してくれたこともヒカルにとっては、ただ、嬉しいばかりであった。
だからもう一度、ルイに告げる。数え切れないほどの晄に囁かれたのかもしれない。それでも、ヒカルはルイに向かって言った。挑むというのは違っている。彼女は、眩しい金色の光源に近付きたかった。自分がそうではないから。理由はそれだけだ。

ヒカルは首を竦める。願い事は、いつも、彼女の頭上を通り越していく。けれどもルイという名前の命は、星辰の子という次名をもって彼女の声を聞いてくれた。そして自らの声を聞かせてくれた。彼はイヤだと言っても、受け取らないとは言わなかった。なぜなのか。ヒカルは考え続ける。それをルイは問いかけているから。
「ミモザの花が嫌いなの？」
彼女の言葉に、傍らを歩くシャルル・ドゥ・アルディは、体を強ばらせていた。
まだ、朝の早い時間であったのに、あっという間に刻が過ぎていく。それを彼は理解し、変わりゆく温度や光の角度や気配を把握していた。

朝が過ぎて、光が強くなっていく。

そして、降り注ぐ明るい日差しは彼を包み込んでいる。
「そういう問題では、ない」
彼の返答はどこか拙かった。彼はどんな花が好きなのだろう。これほど長くアルディ家に滞在し

ながら、彼の嗜好を新しく知る瞬間だった。

ルイは、薔薇だけではなくすべての花を受け入れている。

その瞬間。
何かが、ヒカルのくせの強い髪に集った。風かもしれない。光かもしれない。だが、彼女は茶色の眼を見開いて自分にはない色彩を取り込む。しかし、不思議だとしか言いようのない現象が彼女を覆った。心を強く持つように、という力強い誰かの声が聞こえてくるのだ。それはシャルルでもなく、ジルでもなく、ルイの教育係のミシェルでもない。ヒカルが記憶している遠い昔に囁いた彼女の大事な人の声だ。

愛は、ふえていくものなのよ。
大きくなっていくものなのよ。
あたたかくなっていって、優しい気持ちになっていくものだから。
眩しくて、手が届かないように見える時も、真っ直ぐに見られない時もあるけれども、確実にそこにあるのだから。

それは、ヒカルにしか聞こえない声であったのかもしれない。
だが、確実に、聞こえた。黄金の光の中で、彼女は聞こえて来た声を捧げる。
「あの花を贈りたい」
言葉が浮かばない。けれども、その気持ちだけははっきりとしていた。
「ヒカルはわかっていない」
彼の言葉が何を意味するのか、確かにわからなかった。彼が、これまでもこれからも何度も告げるヒカルへの忠告だ。それを大事に抱きしめる。受け取った、と言った方が正しいのかもしれない。
「だが、今は、譲る」
困惑と海容が混じっていた。ヒカルはそれを聞いて込み上げてくる感情に困惑した。なぜこうもルイに近付こうとするのか、彼女はわからなかった。しかし考えに没頭する時間よりも、今は、彼が見せつける太陽のような黄金の彩の中で、彼女は瞳を細めて自分の言葉に強い祈りを込めた。
「ミモザは魔法のようね」
彼女が望んでいた穏やかな時間が突然、降り注いだ。どうしようもなく心が溢れる。密集する小さい花がヒカルに奇蹟を運んでくれたのだと信じるに足りるほど、彼女はルイの受容に酷く愕いていた。これは魔法で、理由があるものではない。突然にやって来た僥倖がヒカルを戸惑わせる。自分で努力しない間にあった彼の心の機微を知らないままに、ヒカルはここにやって来たのだ、と実感する。
説明できない気持ちがヒカルに風と陽となって吹きぬけていき、表すことのできない極彩の光が

ヒカルに降り注いでいる。彼女は永遠の晄と名前を授けられた。それでも、今、彼女が生きている世界の光はヒカルを凌駕して心を奪う。

「便利な言葉だな」
「素敵な言葉だわ」

彼女は深呼吸する。
清麗な空気が躰に入っていき、ルイの声は鼓膜を揺るがす。

彼は彼女に横顔を向けると、表情を隠すようにして彼女に肩を見せた。また背が伸びた、とヒカルが気付くよりも前に彼は歩き出していた。
「待って」
話を途中で切り上げたのではなく、彼は話が終わったのだと判断したのだ。
ヒカルの言葉を否定せずに彼は話を完結させた。

それがヒカルを不安にさせる。
どうしようもなく、落ち着きを失わせる。

何故なのか、ヒカルには理解できていなかった。
まだ、幼すぎて。

そして。

彼は、一瞬立ち止まった。

ヒカルは目を瞠って彼の挙手を見つめる。
どこまでも優雅な仕草で、そこには音は存在しなかった。彼が、おもむろにヒカルに手を伸ばしたのだ。細く長い神経質そうな指先が伸びてきて、まったく想像できなかった映像が目の前に広がっていて、うまく処理できていなかった。

うまく、という言葉はとても難しい。

今のヒカルにとっては、まだ、とても自在に操ることは到底できない術であった。それでもミモザの黄金の光は、ルイの仕草をヒカルに見せつける。
彼は、ヒカルの鬢に彼の指を混ぜた。彼女が戸惑うすべてを払拭するかのような、そんな色だ。
どうあっても惹かれてしまう。

薔薇が唯一絶対の花ではない。生きている花々は皆、美しい。ヒカルはそう感じた心を誰に告げれば良いのだろうかと迷いに狼狽えながらもルイから視線を外すことができなかった。

彼は、ヒカルの言葉に応えてくれた、と思うと彼女は昂揚する己の感覚を抑制できないままに彼との距離を詰めた。意識的ではない。光の中で誰かが背中を押したような感覚を受けた。いつまでも近付けない彼女を優しく導くように。

彼女は、一歩前に進んだ。

彼の指が彼女の頬に近付いた。
そして優しく触れる。朝の温度と違うものが彼女に重なった。
ヒカルは激しく瞬きを繰り返す。何があったのかわからないままに息を呑んで目の前に立つ星辰の子に魅入ってしまっていた。
皆が彼に遵ってしまう抗い難い惹力を理解した。ルイは更に指を動かし彼女の鬢に絡まったものを取り出した時に、それは散り落ちたミモザの花片であると気が付いたのは、彼の指の先に乗った黄金の雫のような花弁を見たときであった。
どんな時でも、アルディ家の者は見苦しくあってはならない。そう教えられた彼が、ヒカルに散ったミモザの花びらを取り除いた。それだけのことだ。だが、彼女は呼吸すらできないで立ち止まったままであった。
ほら、と彼が声を出したような気がしたが、ルイは無言だった。
蒼灰色の瞳をその花片に乗せて彼女に差し出した。

すべてを引き寄せる彼が、ヒカルに。
ヒカルに、引き寄せられている。

彼女は何も言えずに、黙ったまま彼の指先に乗るミモザの花のかけらを受け取った。自分の指先は震えていて、緊張して彼の目を見返すことができない。
彼が差し出すミモザは、たったひとつの、唯一の光源であると思ったから。
長く一緒に過ごしてきたのに、彼女は彼の何もかもをわかっていなかった。
沈黙のまま差し出されたミモザのひとひらを、彼女もやはり静かに自分の手の平に収めた。

ルイはそれを見届けると、不意に視線を外して彼女に背中を向け、歩き出してしまった。もう、蒼灰色の瞳は見えない。
「ルイ」
ヒカルは声をかける。汗ばんだ自分に付着した花片は美しいままで彼女の手の中にあった。
「私が持っているから」
彼女の声に、彼は振り向かなかった。ヒカルに背を向けたまま、彼女が追いつく隙もなく彼は去

って行ってしまう。

ルイ、と声をかけて聞こえないはずはなかった。
だが、彼は彼女から離れていく。それでも、離れていくのに近付いていくような感覚があった。
錯覚かもしれない。ありはしない、と思ってしまう儚い幻かもしれないが、ヒカルは確かに感じた。

彼の、心を。

自分が思っているよりも、彼の心はもっと違っているのかもしれない。

わからないと思って諦めるのではなく、心を揺さぶられる思い出を刻んでいるのだという確証を確認する。ヒカルに注がれる、囁きに似た輝かしさが彼女の温度の中で変化しようとしていた。
煌めく光の粒を手にして、彼女はまた彼に告げる。
「ルイ、私は受け取った」
見苦しい姿をしたまま人前に出るのではない、というルイの無言の忠告というだけであったのかもしれない。けれども、ミモザの花びらを託されたように感じたのだ。
そうして大きく息を吸う。朝が移りゆき、華やかさを伴って晄は強くなっていった。いけない。
戻らなければ、シャルルが心配する。彼女は、ルイが消えた路を走り出した。
長らく実現していなかった、三人での朝食を摂ろうと切望していた。ルイを見失ってはいけない。その気持ちが彼女を走らせた。

だが、この時のヒカル・クロスは彼に向かって行った。

彼女は、わからないままに走る。
彼女の手の平の中にあるミモザの花びらとともに。

永遠の晄という名前を持った少女は、晄輝くルイ・ドゥ・アルディを追いかけて走り始めた。
これから、何度となく彼の背中を追いかけていくことになるとは知らないままに。

ミモザの杜からこぼれ落ちる黄金の花が、ヒカルとルイに向かって花を撓らせた。

ミモザの花の路は、ふたりを出口へと導いていた。

彼女の手の平に残る、今年の花は彼らを祝福しているかのようにヒカルの手の中で踊った。

彼女は知らなかった。

無言で、ミモザを受け取る意味を。
晄のような花の持つ意味に「秘密の恋」というものがあることを。
男性から贈られたその花を無言で受け取った時にはその愛を受け入れるのだ、ということを彼女は知らない。

（FIN)